國文注釋全書

文學博士 本居豐穎
文學博士 木村正辭 校訂
文學博士 井上頼囶

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

緒言

一祝詞講義ハ鈴木重胤ノ著ニシテ寫本三十冊ニ分テリ、祝詞ノ解釋書トシテハ賀茂眞淵ノ祝詞考、本居宣長ノ大祓詞後釋等アレドモ、ナホ其ノ足ラザルヲ補ヒ誤レルヲ正シタレバ、蓋シコノ類ノ書中本書ノ右ニ出ヅルモノアラザルベシ、寫本ノマヽニ傳ハレルヲ以テ、世間其ノ名ヲ聞キテ其ノ眞價ヲ知ラザルモノ尠シトセズ、甚ダ遺憾ナリキ、本書ハ良書ト稱フル內閣文庫本ヲ底本トシ、宮內省圖書寮本、井上賴囶博士所藏本、本大學本等ヲ以テ校合セリ、本書上梓スルニ當リ、三十冊ヲ二分ニ配當シ、上十五冊ヲ上卷トシ、下十五冊ヲ下卷トシタリ、

明治四拾貳年八月

編者識ス

鈴木重胤翁肖像

鈴木重胤先生小傳

鈴木先生、名は重胤、幼名は雄三郎、通稱を勝左衛門といひ、家を巖橿本と號せり、淡路國津名郡仁井村の人にして、代々邑の里正たりき、父重威漢學を善くし、又國書に通ぜり、常に曰へらく、學者須らく先づ其の本を務めずばあるべからず、其の本を務めんとせば國典を講究するより善きはあらじと、先生幼より之を聽きて感ずる所あり、長じて博聞强記、人と爲り廉正寡欲にして、皇學の大家たり、先生初め定まれる師なし、常に京攝の間に往來して、苟も學業を修むる者あれば、即ち就きて疑義を論究せり、本居宣長翁の學を祖述して、終に一家をなせり、平田篤胤翁最も當世に名あり、就きて學ばんと欲すれども果さゞること數年、其の著古史成文を讀むに及びて、疑義續いて出で、之を質さんと欲する心愈切なり、乃ち意を決して秋田に至りぬ、偶々翁歿せられたり、先生歎じて曰はく、噫天下の大家、獨り此の翁有るのみ、今旣に良先覺者を喪

ふと、其の墓前に詣で弟子の禮を行ひ、歿後の門人と爲る、歸途出羽の莊内を過ぐ、大瀧光憲、及び其の甥光賢、照井足根、其の子長柄、廣瀬嚴雄、僧魯道秋保親愛、今田氏篤等迎へて贄を執る、留る事數月にして弟子益々進む、尋いで越後の新津に至る、桂譽重束脩を行ふ、それより江戸に至りて村松町に住し、後小梅に移りぬ、光憲の次子光胤を養ひて子とし、專ら著書の事に從へり、時々京攝の間に遊び、鄕里に歸りて老母の起居を訪ひ、又數々莊内に至り、山陽山陰及び九州に遊ぶこと數回なりき、至る所皇學を說き、地理を探り、諸侯の招聘する者あれども敢て應ぜず曰はく、著書の成る日之を天朝に奉獻せんこと是れ我が願なりと、詠歌作文、稿を用ゐずして立どころに成る、其の著書の初稿といへども、字畫正整にして行列亂れず殆ど淨書のごとし、嘗て曰へらく、草稿は思想の發する所即ち筆に任せて之を記す、今し學業を研磨するに急にして、未だ淨書に暇あらず他日將に其の粹を拔かんとすと、平田鐵胤其の著書を

繙かんことを請ふ、先生、辭して曰はく、皆初稿なり就中日本書紀傳の如きは僅かに數十卷を稿するに過ぎざるのみと、强ひて請ふ、乃ち祝詞講義と日本書紀傳とを示す、鐵胤詰るに、其の書紀傳中、古史傳と説を同じうするものありて、而も其の書名を掲げざるを以てす、先生曰はく、他日淨書するに當りて、幸に古史傳を一讀することを得ば、其説の同じきものは、悉く之を師翁に歸せんこと、固より予の願ふ所なり、請ふ姑く其の稿の成らん日を待てと、鐵胤其の徒をして謂はしめて曰はく、二書皆裝釘をなす、淨書なること必せり、何ぞ初稿と謂ふべけんや、其の説の如きは多く古史傳を剽竊せるに過ぎず、速に其の著述を止めよ、否らずば、家門弟子の名籍を除かんと、先生答へて曰はく、予國家の爲に國典を解す、何すれぞ人の説を剽竊せん、著書の成らば、天下に其の是非を辨ずるものあるべし、敢て君が言に從ふこと能はずと、安政以來、幕府政を失ひ、國事多難にして尊皇、攘夷を唱ふる者大に起れり、偶〻流言あり、

先生幕吏と謀を通ずと、時に世間尊攘の徒を難ずる書あり、匿名にして小梅里住人記すとあり、行文拙にして固より先生の作に類するものに非ず、或人之を告ぐれども先生意とせず、慨然として皇室を興復せんと欲す、乃ち京師に至りて公卿の門に出入す、幕吏耳目を屬す、先生江戸の邸に歸り、一日客を饗す、黄昏賊あり、松平山城守の藩士と稱して二人謁を請へり、先生出でて面する時に、尙戸外に二人あり入りて先生の肩及び足を斫る、長子重兼騷擾を聞きて走り出づ、賊又其の左上膊を斫りて逃げ去ぬ、重兼屈せず、刀を拔きて之を追擊せんと欲すれども、流血淋漓、眩暈して步むべからず、妻二宮氏先生を擁す、氣息既に絕えて顏色生けるが如し、時に文久三年八月十五日なりき、年五十二、墓はもと牛込市ヶ谷長延寺町なる萬昌山長延寺に在りしが、今茲明治四十二年春寺院と與に豐多摩郡中野村に移れり、又淡路の仁井に社を建て、鄉里相會し每年祭祀を行ふ莊内の弟子、其の子孫及び有志者も相會して每年九月十日靈祭

を行ふ、嘗て薩摩の人是枝生胤、先生に贈るに、高千穗別言速結比命と云ふ稱號を以てせり、莊内の弟子等、亦別に道足別嚴橿根大人と云ふ靈號を贈れり、先生滿腔の熱誠、唯勤王の一有りしのみ、毎朝夙に起きて羽織袴を着け、先づ神前を拜し、次いで、机に對ひ端坐して筆を執る、深更に達れども未だ曾て倦怠の色あるを見ざりき、常に人に謂つて曰はく、文士の國典を解するは將に國家の爲に忠を盡さんと欲するなり、宜しく武人の弓箭を執つて宮闕を護るが如くなるべしと、此の意、亦以て其の一端を窺ふに足るべし　先生、大橋訥庵と相善し、訥庵嘗て先生に謂ひて曰はく、先生は大著述家なり、而して慷慨餘りあり、天下後世の爲に危言を愼み、危難を避けんことを希ふと先生其の厚意を謝す、先生書を著はすや、稿成れば即ち此を莊内の大瀧光憲に贈りて、其の賢木舍社中をして藏せしめぬ、その甥光賢謄寫して之を先生に致せり、其の本今新津の桂氏に在り、嗣子光胤祝詞正訓を著す、二子次郎藏と、皆先だちて歿せ

り、重兼創癒えたれども、これが爲に衰弱して明年二月に歿せり、年十九なりき、先生の生家は今洲本に住し、鈴木謙吉と稱す、即ち先生の猶孫なり、先生の著書の板木となりたるもの、詞の捷徑、和歌初學等數種に過ぎずされば、先生の專ら精神を用られたる、日本書紀傳、祝詞講義の如きは、世に未だ之を知るもの多からず、明治六年教部省、照井長柄に命じて日本書紀傳を致さしむ、明年長柄東京に至り、省謄寫する所の本を校訂してこれを納めたり、同二十七年諸陵寮、庸彥に囑して日本書紀傳及び祝詞講義中臣壽詞講義を謄寫校訂せしめたり、是れ先生歿後の光榮にして又此の書の世に知られたる端緒ともいふべく、飯田武鄕翁の日本書紀通釋に、先生の說を引用せらるゝに及びて、大いに學界の注意を惹くに至れり、今や祝詞講義を出版するの機を得たるは、斯學の爲に大いに慶賀する所なり、先生在天の靈も亦慰藉せらるべし、

明治四十二年八月

門人　秋野庸彥識

祝詞講義

上

延喜式祝詞講義壹之卷

嘉永元年十月二十日了稿

淡路國 鈴木重胤 著
出羽國 大瀧光憲 校
越後國 桂 譽重 校

天照坐皇大御神の大御命以て皇御孫命を此顯國の大君主として天降し奉給ひける時に天津日繼の隆坐む事天壤と共に窮無かる可しと詔給ひて天下を治食む大御政を行ひ給はむ制度(スベ)を天津宮事以て事依し授奉給へり 此は紀記及此祝詞に徴して云るなるが猶古語拾遺に大御神の其時の大御命に復勅ニ太玉命ニ曰宜下率ニ諸部神ニ而供ニ奉其職ニ如ニ天上之儀上而令上諸神亦與陪從上矣と有にて顯明けし 然れば御世々々の天皇命等の現人神と御在して食國天下を治給ひ撫給ふ大御政はしも即天津宮事にて其天津宮事は天社國社の皇神等を齋祀り奉給ひ其御守護を賚(エ)て大御寶を顯給ひ調給ふ御業にて此祝詞に悉く傳はれる此なり 如是る止事無き天津宮事なるを或大人等は然は心附れざりけむ予か說ふ如く委しく思得られたるは一人も有る事無し唯祭祀にのみ預る事さ思ふは否(アラ)じ此即天下の大御政なる事次に辨說せる如し 故古事記日本紀は天地の未生りし時より皇神等の高天原に在して天地を鎔造り給ひ萬有を造化し給へるより始て天皇命の大御世系を記傳られたる寶典にて天下に二なく尊き大御正史(タダフミ)なれば天地の間に在ゆる物も事も悉くに具はり備ひてなむ有けるされば此二部の書をだに明め得てば何れの事か思ひ測られざらむ何なる事か考得られ不らむ實に天地を胸臆の內に認め萬有を議神の中に藏へき寶典なれど食國天下の大御政に主と係て記せる書ならず君臣の大綱と天下の大道を觀つ可き也齊明天皇御紀の古語に治講ニ天地萬民無事一と有るは此を謂ふなり 君臣の大綱神代に一度立て萬世に動かす天下の大道斯に存る故に天下は天下にて自治り國家は國家にて自亂さる也皇國固有の美を知り天統無彊の德を明らむ可き物實に此二典に在り 道上古に立て萬國に彌綸(ミチノヘ)たり夷狄さ雖も君臣父子倒反の法なきを以て知へし此皇神等より賦命(タマハリ)給ふ物にて人性となる物此なり豈教を待ちて能する物さ云むや譬へは皇國蕃國の差別無く天下一人も父無きの子無し其父子の道書典を待て行ふに非す彼孝經と云ふ書を讀て後に孝子出可からず古今に孝子と稱ふ者悉く其孝經などを知ざる者に在て經義を講し孝悌の教を爲す者に絕て孝子非さるを以て道は不學る所に存在して講釋に行るゝ事を知可し書を讀て後に知る可きは道さ稱ふに足す皆無物たり 偖此祝詞はしも天下の大御政の御制度書なりと云ふ由は世界の物も事も小と無く大と無く悉くに皇神等の御靈に頼るとなれば專其御恩賴に報奉り尚其御靈を仰ぎ憑奉りて天下國家の穩當在らむ事を祈奉給ひて無事

を計給ふなむ大御政の常にして糺彈戮殺はしも時政の變なり故に祭祀は本なり毀譽は末なり天下に君主と御在しては云も更なり苟くも國政に預る者此心得無くば有可らず職員令に神祇官是人主之所レ望臣下之所レ會祈ニ福祥一求ニ永貞一無レ所レ不レ歸ニ神祇之德神祇官ニ爲ニ官首ニ必矣と記されたる御旨を思可くこそ

所以に令式の御書などを稽るに神祇に關ることを耳最前(イヤサキ)に物爲られたり當時漢様のことをも粗交へ用らるゝ時すら如此し況て上古の大御政の御上は如何に愛き御風儀(テブリ)なりけむ想像奉るべし孝德天皇の大御代に始て八省百官を置せさせ給ひて彼を移されたること少きに非れども猶神代の故實を重みし給ひて神祇官をして太政官の上に置せ給へり是以て令條の御定よりして當今に替ること無し故職原抄にも此義を釋て神祇官の下に以ニ當官一置ニ諸官之上一是神國之風儀而重ニ天神地祇一故也昔人皇最初神武天皇定ニ都於大和國橿原一時以ニ天照大神御靈八咫鏡及草薙劍一安ニ置大殿一同レ床而坐給蓋如ニ往古神勅一由レ此皇居神宮無ニ差別一宮中立ニ庫藏一此云ニ齋藏一官物神物不レ分云々此時天兒屋命孫天種子命專主ニ祭祀事一是乃執ニ朝政一之儀也然乃祭官之職者上古之重任也又神國之故以ニ當官一置ニ大政官之上一乎と記させ給へり

是以て上古の政を知り神幽の事を窺ふの捷徑此に過たるは有可らず蘊奥此に超たる物も亦有可からず此に通る則(トキ)は條達して礙無らむ者ぞ然れど此祝詞を說くこと宇宙の大道を研窮め造化の神理を推索り神皇授受の因起を明かにし帝道唯一の實事を悟りて後に此擧有るに非れば恐らくは洋溟(オホウミ)を測るに一滴瀝を以てし崑崙(タカヤマ)を察るに一撮土(ツチクレ)を以て爲るの患有むか如此く深遠にして凡庸の徒の能く爲る所に非ずと雖凡庸を導くの捷徑此を除て何か有む眞に天下に比なき古語にして朝家の政令民用の綱紀此祝詞に悉く備はれり實に萬國に類なき寶文なりかし然る

を世の古學者たち紀記及祝詞の條理を知らずして一途なる解說なるは何ちふ僻說ぞや其徒を看るに唯文を耳爲て義を取らざるも固陋なり文の愛たきは天津神の大御口自にして傳給へる天津祝詞にし有れは必然有可き事論を竢ず文に泥みて義を解不(サトラザ)るは無識と云むも非ならず予始て此祝詞の深致を得てより雲霧を披きて日月の明を見ることを得たるが如し此斯の書は著さでは得あらぬ所以なり

今朝家の大御政には漢様(カラ)の事も取べきは奴僕(ヤツコ)として取用させ給ふ故に書典の上を以て云ふ時は彼を擬(マネ)へるに似たること多くして皇國の古道は殆廢れたりと皆人の慷慨み思ふことなれど予を以て此を觀るに少かも衰坐りとは見えず皇天の神化自然にして行はれ朝廷の靈威無爲にして存せり唯知と不知とのみなり實に古語に所謂る皇神の愛くしき國神隨言擧爲(セ)ぬ國なること辯を待ずして鮮明(アキラカ)なる者なり何ぞ磧細の外敎に伉(タクラ)べて神國の美德を貶さむや

今世の識者頁(ヤヽ)とも爲れば儒佛の道の害となることを云めり其は實に然る言にして謂れたる論ながら其僻める痴者に對しては云ふべし豈如是る小事を以てこれを天下に言擧べしや儒術を學び釋敎に佞る鼠輩天下に多しさ云へども其等は儒釋を學ばずば外に何か一種の惡事を犯して國敵となり犯人となるべき曲者なれば惡むべく禁しむべしと雖も良民に通計へ競ふるに巨萬の一とも云べからず信に其心に染附たる者豈多ならむや然れば世に學士さ云ふ者は悉く乞盜に類へる聾文盲不才と云るゝ者には悉く良民多かるを以て我が大道の自然にして行れ無爲にして存つ所以を竊み仰ぐに足れり

故その知と不知とに就て今此を辨はゞ古昔は熟

く知て成せりと云可く當今は不知して能く成れりと云可し其知ざるは識者を得ざるが故なり（易繋辭に百姓日用而不知故君子之道鮮矣とも有るは此事なり）　然るに近世賀茂大人始て此祝詞考を著述給ひてより天津宮事の古義始て天下に明らかに成れりしを鈴屋大人將古事記傳を物爲給ふ因みに此祝詞に深く心を用ひ給へる故に彌々明らかに成以て來ぬるを伊吹屋大人又其志を繼して古史傳と云ふ書に益々其事を委曲に記し給へる故に今註ふべき條々はしも全に無に似たりと雖も此祝詞を拔萃て別に說言爲るには非ず事の因々に說辨られたるなれば此も彼も盡せりとは云可からぬを唯賀茂大人こそは此著述とては物爲られしが今を以て此を閲れば其說厖漏くして率強少からず是以て負氣無くも此書を著さむとは思立けるなり（然れども右の三大人等の說に悉く趣意の違ふ事にし有れば如何にぞや思ふも有べけれども學術は道を明らかに爲む爲にし有れば然のみ泥むべきに非ず天思兼神の我心を開きてか如此く奇異にも靈しくも思得しめ給へる此時を過さば何時を待てか此事の世に明亮ならむと爲るや世に古學の名を竊める輩多かりと雖も道を思ふ志の切ならざる人のみなるこそ心憂き事なりけれ豈悲まざるべけむや）

祝詞

祝詞とは皇御孫命を天降し奉給ふ時に親神漏岐神漏美命の詔命以て天下の大御政を知食し敷行ひ給はむ規則を授傳へ給へるを因據と爲て今其事を物爲給ふに就て皇神等に白させ給ふ詞と云ふ義なる事は祈年祭詞に高天原爾神留坐皇親神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉と有て其結文に故皇吾親神漏伎命神漏美命登云々稱辭竟奉久登宣と有にて所知たり（此は例して其一を出せるなるが其余の諸祝詞皆如此く有る事次々の解說にてしるべし凡て祝詞に二種有り白神に直に申すと人に宣て神を祭らしむるものとあり然れば此祈年月次新嘗等の詞の如きは人に宣て神を祭らしむるにて天皇の詔詞なるを神主祝部は其承りて其詞を神に申す詞に取直して傳申す也）　鈴屋大人の說に（大祓詞後釋）すべて祝詞のゐは神に申すことばなれば勉て其言を美麗く爲可き業也故古き祝詞共孰も皆言に甚しく文を爲して愛たく麗はしく綴りたり（今云此は式なる祝詞を取較て云れたり然れども大牛は天津祝詞多くして人世に綴れるは平野祭春日祭廣瀨大忌祭龍田風神祭伊勢大神宮の諸祝詞遣唐使詞などなり其すら神代の故實に據て物爲させ給へるなれば愛たく麗はしき事今云ふ限に非ず然るを祝詞考自序に出雲國造が神壽詞は飛鳥岡本宮の御代の言なるべし詞正しくして雅び心巧にして寬なり巧の細やけきは少後に寄れりさ誦の寬なるぞ上代の遺れるなる次に六月十二月大祓の詞は大津清御原の御世の詞なり言柄拾く雄々しく心巧にして調へる物の寬ならず閑らに聞ゆるは勉て古を移せればなり其か次に崇神を抑大殿祭詞は藤原宮の末に作れるならむ今一階劣りたり祈年廣瀨龍田等の祭詞は奈良宮の始つ頃に云るにて同じ古言以て爲れど文ちふ物を心に得ずて云ひ崇せしなれば又一階劣にたり其か次々の詞は彌降ちに降ち眞弱らに弱らひつゝ更に論ふべくも非ずなも有ると云れたるを後降に論ひて云宣長此考の論に就て稍熟々致るに祝詞式に云出たる諸祝詞等の文各勝劣見えて實に古きと後なるさの差異有り此大人に非ずば誰かは斯る古文の然る差異をば能く見別む其尊くぞ所思ゆる然ども此は彼より劣れり其は此より後なりなど一每に品を評（サダ）めて云れたるは信られず凡て古の事然計り微細に差異の見え別るゝ物に非ず又祈年廣瀨龍田までを擧て餘のは取に足ざる如云れたるも心得ず彼祝詞等を除て外にも猶古く愛たく見ゆるは

り有るなり又其は其御代に作れりと定められたるも皆信られぬ非なり此将(ハタ)然明證に見え分るゝ物には非ずと云れたるは實然る言にて考り論悉く強證なり抑(ソモ〳〵)諸の古き祝詞等はしも天津神の大御命を受賜り傳たるを本にして其御代々々に行ひ給ひ御祭の趣に依て祭官の名異り幣帛の物改りなども爲けむ故に少(イサヽカ)は文の次第を替も爲つべけれども天津祝詞の如きは容易く易ふべくも非れば天津神語なる事何か疑はむ其心して此を何はざれば終に悟る世勿らむ物ぞかし 其は如何なる故ぞと云ふに大凡人も神も同く申す事も其詞の美麗さに感ては受給ふ御心比(コヨ)無ければなり 〽今云其心正しく誠實なる時は其言語滯らずして其聲音清朗と清く鮮明き故に其詞調ひて美麗き事人の知れるが如し此に反て其心邪にして奸曲なる時は其言語遮滯(ツマ)りて其聲音朦朧と濁る故に其詞調はずして何と無く聞苦しき物なり事は言に顯れ言は事に顯るゝ物なれば慎まずば有べからず鈴屋大人も此事を意に含めて云れたる物にて譬へば人より云々の類事有むに受る方にては其言語の首尾を考へ其修理の正僞を察めて後に其事に應(マカ)するが如し人尚如此し神明の聞見豈恥ざるべけんや 善歌に神の感給ふも詞の美麗さに依てぞかし然れば情は如何に深きも惡き歌には愛給ふ事無し 今云此の善歌は世俗の歌作りの歌を云ふには非ず其誠中に實(ミチ)て感哀の情外に發るゝ物を云なり然れば詞の連聯き自然にして愛たく美麗かるべき事云も更なり又情の深きとは歌作りらの巧言令色なる愚歌を云にて所謂る謎の如き物なり此等を豈善歌と云むや是以て惡き歌にも感給ふ事無しと云れたるなり僻心得すべからず斯る善歌は花に浮れ月に狂(タハ)るゝ歌作どもの涯世の力を窮盡しても咏得らるゝ物に非ず神世の大道自然腹中に具備はれる忠人こそは咏得べけれ 然るを後世人は漢心盛にして唯理を耳思ふ故神に申す事も詞をば撰はむ物とも思有ず等閑に耳ぞ爲める 今云漢心と云物は所謂る理屈にて凡人の上を以て神明を度る狹意也天地神明豈に人の推量を以て強可けむや彼は神代の古傳無き末國なれば然も有ばれ皇國の人たる者彼を取り此を捨べけむや然るを其學世に弘ごり行く隨に漸其心移ろひて物毎に理を先に立て事を後に爲る類を云れたり 神代紀に天照大御神の天石屋に刺隱り坐し時諸神等云々

爲て中臣連の遠祖天兒屋命廣厚稱辭祈啓焉于時日神聞レ之曰頃者人雖ニ多請一未レ有ニ若レ此言之麗美者一乃細ニ開磐戸一而窺レ之ニ」と有を思ふべし是申す詞の美麗きに感賞給へるに非ずや 今云此時に他の神等も共々に祈啓されけむを其は信給はずて獨此天兒屋命の稱辭に感賞給へるは如何と云ふに此神は津速産靈神より市千魂命興台産靈神と追々重坐て八意思兼の御靈の備はり足ひ給へれば究めて太く厚き御靈なりけむ故に其事の熟く通徹れる由猶此書新年祭詞の條下にくはしく解明むるを見るべし 然れば今時自身新に綴りて白す詞耳ならず古の祝詞を讀申すとても古の言を過たず勉て其讀を正しく爲て假にも後の音便に頽れたる言などを交へず清濁などをも嚴に守りて必々(ユメ〳〵)等閑に讀可にあらず」と云れたる如し 今云古の言を過たずとは神留坐(カムツマリマス)を俗に神止利座須(カミトヾマリマス)と云ひ神集々賜(カムツトヘ〳〵)を神集米備給布(カミアツメニアツメタマフ)と樣に解訓爲るを禁られたり後の音便に頽れたる言とは祝詞を能部讀と云ひ神業を加牟業と云ふ類なり復古の學を物爲る徒此を亂べからず 偖祝詞とは天皇祖神等の詔賜し御詔命を受賜り即其を規則と爲て祭にまれ政に有れ物爲る由にて其詞を差ては祝詞言(ノリトゴト)とは稱へり ㊂考に乃里刀其登(ノリトゴト)と云ふ言の意は神皇祖高木神の詔賜し御言を承て兒屋命の天岩門の前にて宣申せしなれば古事記に詔戸言と書たり然れば乃里は天皇祖神の美古刀乃里なり」と云れたるを大祓詞後釋に天兒屋命の天石屋戸前にて宣給ひし祝詞も皇祖神の詔命を承たると云ふ事古事記にも書紀の傳ともにも見えたる事無し總て彼時の事共は皇祖神の詔命に因れる事無し皆八百萬神の會集て謀議りて爲たる事なり」と云れたるは却りて非説なり紀記共に思金神令レ思また會ニ八十萬神於天高市一而問レ之また召ニ天兒屋命布刀玉命一而令ニ占合麻迦那波一と有るなど其時に會給ふ八百萬神等にして事も無き樣なれど猶令する神上に在る如く通えたり必高木神などこそ其命は令せ給ひけむ○祝詞言

を考に詔賜言(ノリタベゴト)と云れたるは後釋に騎られたる如く僻說なり然れど記傳及後釋に宣說言と云れたる方大御辭(フトノリゴ)の諄ノ字告曉之熟也と註せる字義には叶へれども然あるまじく所思ゆるなり　天皇祖神の詔命を規則と爲て天下の大御政に敷行ひ給ふ事今云までも無く天下の大道の至極(イタリ)と云べし孝德天皇御紀に先以祭ニ鎭神祇一然後應レ議ニ政事ニ」と記させ給へるに心を窮めて考べし且光仁天皇御紀に寶龜七年夏四月乙勅(ノリゴチ)祭ニ祀天神地祇一國之大典若不ニ誠敬一何以致レ福と令給へる御旨を恐み窺ふ可き者なり　考頭書に云く漢國には巫祝を王道の枝片端さ爲て賤めり皇朝の古は天皇即神な祭祀り坐て天下は治鳴ひ給ふ時の神事に預るも皆貴(ヨロシ)き臣等なりこさ云れたるは此事を思はれし物なるべし垂仁天皇御紀に二十五年詔曰我先皇禮ニ祭神祇一剋レ己勤レ躬日愼一日是以人民富足天下太平也今當ニ朕世ニ祭ニ祀神祇一豈得レ有レ怠乎」また欽明天皇御紀に我國家之王ニ天下一者恒以ニ天地社稷百八十神ニ春夏秋冬祭拜爲レ事」なと何れも神祇を祭祀給ふを以て政事の最首さ爲給ふ由なり順德天皇の禁秘御抄に凡禁中之作法先ニ神事ニ後ニ他事一さ記させ給へる如く朝廷の御政上古より斯の如し今現に其事の遺はせ給はぬを以ても我か大道の衰(オトロ)ざる事を知へし林道春の神社考に我國天照大神以降神以傳レ神皇以傳レ皇皇道神道豈二哉」と云れたるを始め祭政の美を稱へたる言とも儒士に於ても少からず其は別に委曲(クハ)しく記せる物有り

○凡祭祀ノ祝詞(ノリト)者御殿御門等祭齋部氏祝詞以外ノ諸祭

中臣氏祝詞

中臣の遠祖天兒屋命は神事の宗源を主る神に坐て天照大御神の天石屋に隱坐ける時に廣く厚く稱辭して祈白されけるに感賞給ひて出坐しに依て即其御裔なる中臣氏の職掌と爲りて諸祭の祝詞は中臣氏より申す定なるを　中臣氏の委しき事は大祓詞また齋内親王奉入時詞の下に註べし　其中に御殿御門祭等の祝詞は齋部氏申となり此は同時に天太玉命諸部神を率て天照大御神の新大宮を排營り遷奉給ひし由緒を延其裔の氏人等其祖業を傳へて其職に仕奉り御殿御門等の祭に主と仕奉けむ故是以て古語拾遺に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀齋部氏之所職也」とは記せり同書神武天皇段に天富命率ニ諸齋部一捧ニ持天璽鏡劔一奉ニ安正殿一并懸ニ瓊玉一陳ニ其幣物一殿祭祝詞次祭宮門と有にて疑なし倚忌部の委しき事は第十一段辭別の下に云ふ可し　舊事紀にも此同文有るは此書より抄出たる物なり倚大殿御門祭詞の下に註すべし

○凡四時諸祭不レ云ニ祝詞一者神部皆依ニ常例一宣レ之

考云此巻に載せず四時祭式にて祝詞有れども記さぬ祭有るは例の祝詞の有なれば其を神部の唱申せとなり是等は小祭にて異なる事無く文も聊なれば擧るに及ばぬが故なり　今云次條に臨時祭祝詞は所司事に隨ひて前祭に修撰するを四時祭なるは舊例の隨(マヽ)に唱來れるが有を申となり　○神部は神祇職員令に伯大副小副大祐小祐大史神部三十八卜部二十人使部三十人」と有り　考云神部の中の中臣氏を取て是に預しむめり　兼良公御說に神部掌神事之黨也と見ゆ　神代紀に吉備神部さ有り祝部さ云ふに同じさ見ゆ持統天皇御紀五年に饗ニ神祇官長上以下至ニ神部等ニさ見えたるを八年の下に神祇官頭至ニ祝部等さ有るを以て別人ならざる事を察るべし然れども職員令に神部さ有るからは神祇官なるを神部さ云ひ諸社なるを祝部と云ふ事と

聞ゆ然りながら其職る所同じきが故に神祇官にても祝部と云ひ諸社にても神部と云し物なる可し推古天皇十年御紀には諸神部とも見えたり

其臨時祭祝詞所司隨レ事修撰前レ祭進レ官經ニ處分一然後行レ之

考云此は臨時祭式に載たる霹靂神祭より下三十計りの祭の類其餘にも時に就て祭らるゝは祝詞も異る事有る故に大政官の定めを得るなり此所司は神祇官の伯より史までを云ふ官とは大政官を云ふ例なり（今云四時祭は定まれる事なれば其祝詞も有來るを臨時祭は事に臨みて物爲らるゝ事にし有れば其前祭に脩撰れるを官に進りて其處分を經ざれば行へからずとなり）○處分は考頭書云選叙令集解に與レ挍定同義也此に佐陀と訓す挍定の意なり（貞觀政要に左右處分先レ已と有る註に區處曰レ處分別曰レ分と有り）

○新年祭（トシゴヒノマツリ）

神祇令に仲春祈年祭と有る義解に謂祈猶禱也欲レ令ニ歳災不レ作時令順レ度即於神祇官祭之故云祈年と見え又同令に其祈年月次祭者百官集など有が如し此祭は天皇の宅田より始て天下の百姓の作る年穀を豐に登らしめ給はむ事を神に祈給ふ御祭也所以に此祭等の事を國家之大事也と云事寛平の格に見えたり四時祭式に祈年月次神嘗新嘗加茂等祭爲中祀と見えて其重き事大嘗祭に次げり祈年祭は又此を大幣と云ことは大寶二年御紀に二所見たり右の如く令に百官集と見えたり式に諸司齋レ之と有るが故に大政官式に凡二月四日奉レ班ニ祈年幣帛一大臣及參議以上詣ニ神祇官一辨外記史各一人及諸司五位以上六位以下各一人共集よ有る如く諸司百官悉く齋して神祇官の集りて被行る甚だ重く止事無き大御祭なるもの也（寛平五年の格に二月新年六月十二月月次十一月新嘗祭者國家之大事也欲令ニ歳災不レ起時令順レ度と有るは義解の文に依て書れたるなれば國家之大事也と有を以て神事の有が中にも甚々重き御祭なる事を思ふべし公事根源に大かた新年の祭月次南度新嘗祭をば四ヶの祭とて國の大事と爲るなり」と云り但此は右の格文に依て云る物なり）偖此祭は二月四日に執行るゝ神事なるが此祭に預給ふ神等京畿諸國を併て三千百三十二座なる中に國司の祭神二千百九十九座を除て七百三十七座を官にて祭らせ給ふなり樵談治要に年中の祭は二月四日の祈年祭より始まり秋津洲の中に跡を垂給ふ三千一百卅二座の神に幣帛の御使を被立る物なり其中に七百卅七座には神祇官より此を献せらる殘二千三百九十五座には六十餘國の國司各受賜りて幣帛は奉るなり年中の災難を除き國土の豐饒を祈るに依て祈年祭と名付るなり」と有る如し（但前に引る寛平五年の格に預此祭神京畿外國大小通計五百五十八座と有り此式文の撰定有りし延長五年まで凡三十五年の間に百七十九座が增給へり然れども天下の官社の總數は替る事無き

なり三代實錄に元慶元年九月廿五日分ニ遣中臣齋部兩氏人於五畿七道諸國ニ班ニ幣境内三千一百三十二神ニ縁レ供ニ奉大嘗會ニ也と有るにて知べし然れば此は其中より此祭に預給ふ神社の增給へる耳なり　〇此祭の起元は高千穗宮の大御世よりぞ物爲給ひけむ何を以て云ふぞならば天社國社と稱辭奉給ふ事は天皇祖神の詔命に依らせ給へる由詞に見えたる如くなればなり　如此く天神の詔命以て懇到に授傳給ふ事を當時行ひ物爲給はで後世に始め給ふべくも非れば決く然なり考に此祭を崇神天皇の御代に始れりと爲べし」と云れたるも風神祭など此御代に始れるに合せて然も云はゝ云はるべけれども此詞に合ざるを何にせむ　然るを年中行事秘抄に官史記に云天武天皇四年二月甲申「十日」に始と記せれど其は儀式などの改革れるを云るならむ　御記に此事見えず御紀には正月丙午朔戊辰祭幣諸社と見えたれど祈年祭とは定難し斯て二月には十市皇女を伊勢神宮に參赴しめ給ふ事を記されたる耳なり偖官史記と云ふ書今世に傳はらず神祇官の史の日記と聞えて床しき物なり公事根原に天武天皇四年二月に始て此祭有りと云るは此官史記に依れるにや然れど右に辨たる如く天つ神代よりの事なり　斯て古は二月四日と究れる事にては非りけむ文武天皇大寶三年御紀に二月戊戌朔庚戌是日爲レ班ニ大幣ニ云々と有る庚戌は十三日に當れり仁明天皇御紀に承和九年二月丙寅朔己巳遣使奉レ幣ニ伊勢大神宮及諸社ニ祈年也と見えて己巳は四日なるを淸和天皇實錄に貞觀九年二月四日甲戌祈年祭如常と有れば此頃よりぞ四日とは定りつらむ　詩大雅に祈年孔夙方社不莫昊天上帝則不ニ我虞ニ敬ニ恭明神ニ宜无ニ悔怒ニと有る注に祈年孟春祈ニ穀于上帝ニ孟冬祈ニ來年于天宗ニ是也と見え周禮に祈レ年承ニ豐年ニと有れば赤縣にも往古は皇國の御定を傳行ひたりけらし昊天上帝とは平田翁の辨られたる如く天地萬物を生成し化育給へる伊邪那伎大神に坐せば然有ぬべき道理なりかし

〇貞觀儀式に二月四日祈年祭儀　六月十二月十一日月次祭儀亦同　前祭十五日　月次五日　充ニ忌部八人鍛工共作木工各二人ニ供ニ神調度ニ　但靭者敦編氏造之　神祇官忌部官一人監造若官内無ニ忌部官人ニ及下神部之中忌部不上足ニ八人ニ者兼ニ取諸司人ニ充レ之其潔衣料布人別二丈七尺　官人細布一端　一人日米二升酒六合　五位一升　腊三兩　五位五兩又加東鮑烏賊煮堅魚各二兩　鹽二勺　五位五勺　海藻二兩　但鍛工共作木工者下ニ賜潔衣及食ニ　其日卯四尅　月次祭六月卯一刻十二月辰一刻　所司辨ニ備庶事ニ神祇官陳ニ幣物於齋院ニ京職貢白鷄一隻近江國豚一頭　月次不レ貢鷄豚　次神祇官人率ニ御巫等ニ入レ自ニ中門ニ就ニ西舍座ニ　東面北上　大臣以下入レ自ニ北門ニ就ニ門内座ニ　大臣在レ西東面參議以上在ニ東披ニ西面着紫五位以上在ニ門外東披ニ西面外記率史生召使等在ニ西披ニ東面重行　外記申ニ庶事辨畢之狀ニ共起就ニ北舍座ニ　大臣南面參議以上西面諸王東面並北上其大臣用北戶參議以上東砌諸王西砌　大臣喚ニ召使ニ二聲召使稱唯命云式部乎刀稱奉入宜輔稱唯率ニ群有ニ入レ自ニ南門ニ就ニ南舍座ニ　北面東上　御巫降就ニ西舍前庭座ニ左右馬寮各率ニ御馬廿疋ニ　寮別十疋　立ニ南舍東頭ニ　月次祭左右各二疋　神祇官掌二人率ニ祝部等ニ入レ自ニ南門ニ立ニ西舍南頭ニ神祇官人降就ニ舍前座ニ大臣以下及諸司共降就ニ舍前座ニ中臣進就ニ庭座ニ讀ニ祝詞ニ每ニ一段了祝部稱唯讀訖中臣退出神祇官拍手兩段次大臣以下五位以上次諸司主典以上次祝部　並不稱唯　然後皆復ニ本座ニ

伯命史奉就幣帛史二人共稱唯各取札分立案兩頭東西忌部二人率神部二人進夾案立監頒幣事史以次唱御巫及諸社祝各稱唯神部執幣頒之（大神宮幣帛者差使進之）史復本座中頒幣畢伯命云縱史共稱唯訖大臣以下以次退出と有り江次第二月四日祈年祭條にも神祇官率御巫著西廳上卿參神祇官先著北門內掖座（東掖西面但大臣著西掖）王大夫著同門外座外記同著西掖座上卿以召使召外記外記參軾上卿仰云諸司具（多利哉）又仰云幣物具（多利哉）申（初著神事之人或不令申）上卿答如恒又申供神物辨備之申上卿目之外記退下上卿著北廳（入自東妻著西面座東第二間豫敷式王大臣著入自北面自餘入自東妻）王大夫著（入自西妻著西第一間座或用代官先是辨著南門外幄南面式部彈正等同著神祇東幄）上卿召召使召使二人立艮壁外壇下同音稱唯一人經東屋并倉後立庭中上卿宣式乃省衛刀禰奉入止宣召使稱唯出南門召之辨并式部省諸司等入自南門著南廳座御巫著西廳前庭左右馬寮各引馬十一立於刀禰殿東庭（白猪入檻白鷄納籠之）神部祝部等入立西廳庭神祇官人降坐廳前座（本官人皆可著木綿）上卿以下降引著廳前座（兩儀或上）設座南廳座人人皆著砌下座（兩儀著砌內）次祝師申祝（如式十段）度別稱唯上卿以下復本座御巫同見幣物（三人出自西壁始自伊勢料見之）

次神史二人持簡召諸社祝忌部二人（立案下）史申頒幣訖（遠社幣帛官掌付神部）次自上退（藤氏之公卿頒幣日留之或早退出次只召使傳幣付神社宿祢能可被頒行云々遠江若江氏頒中野幣之後可出歟）と見えたり世々を經て少しの異は有れ其大略違ふ事無し（予が藏たる儀式次第共に古寫本なるが其異少からず今は異本に校て引り然れども一々其事を云むに繁はしければ省きつ）前祭とは其正祀有るより前に其事を執行ひ初る日を云ふなり所謂散齋此なり年中行事秘抄に祈年祭以前僧尼重服人不可參內事と有り小野宮年中行事に二月四日祈年祭事廢務前散齋一日少納言付內侍令奏齋事如常月次九月十一月奉幣新嘗祭等同之と見えて中祀の作法大凡如此し（世に云ふ神事人の日は此前祭より續きて物忌する事さ見えて日米二升云々と有）其日とは神事の當日にて即二月四日なり江次第二月上申日春日祭の頭書に遠社祭以立使日禁中神事と有るは此事なり故大神宮式に凡二月祈年幣帛者朝使到日太神宮司引使者先參度會宮次大神宮奉献幣帛並如常儀云々とは記せり就て考ふべし（此日官にて神事ありて其頒たせ給ふ幣帛を神主祝部等各其社に持下り納むる事なれば途の遠近に依りてたがひ有るべきなり）白雞白豚は御年神を祭る料なり古語拾遺に見ゆ尚その詞の注見るべし集侍神主祝部等諸聞食登宣（ウコナハレルカムヌシハフリトモロ〳〵キコシメセトノル）（神主祝部等稱唯餘宣准之）集侍は神祇官參集するを云ふ當日著座の人を指すなり孝德天皇二年御紀に二月甲午朔戊申云々詔集侍

卿等臣連國造伴造及諸百姓一云々故今顯二示集在衆民一と見え又詔集在國民所訴とも入京朝集者とも有て集侍とも集在とも有て其訓同じ三月癸亥朔甲子詔二東國々司等一曰集侍群卿太夫云々辛巳詔二東國朝集使等一曰集侍群卿大夫云々と有て此に朝集を麻宇宇古奈波留と訓るは未爲を未字と誤れるにて次に云る儀式に同じ然れば此は鈴屋翁の宇古奈波禮留と訓れたるに隨ふ可し（幣帛を頒ち奉らせ給ふ爲に諸社より神主祝部を官に喚上給ふなり唯大神宮のみは此例とは異なり儀式に大神宮幣帛者差レ使進レ之と見ゆ）儀式に大祓處爾參集（讀曰未爲宇古那波禮留）と有る如く其場に參り其事を行ふ由なり宇古那布と云ふ時は其使令する方に係り宇古那波禮留と云ふ時は被レ行にて其使令るゝ方を云ふ語なり江次第傍注に祝部諸社祝也爲レ令レ受二官幣引一率之一也と有るは此集侍云々の事を云ふなり（後釋に宇古那波留は此集侍字の意の古言と聞えたり」と云れたれど委からず其場に參集ふは其行事有るに依れゝば所行は正字にて集侍は參集の義を以塡たる字なり倭波禮留は所字の義にて其事を所治と云ふなり尚第四卷出靈波利の下を考合すべし）○神主祝部等諸は古は國造縣主を被召たりしなり續紀に大寶二年二月戊亥朔庚戌是日爲レ班二大幣一馳レ驛追諸國々造等入レ京と有て神主祝部の入京せるなり上世より國造縣主共に其部內の神の祭祀を司れるを孝德天皇の大御世に始て國司を被置しより國造は其下風に立て神事を掌れゝども公事は國司の掌る事故に終に神主の如くは成れりしなり桓武天皇御紀に國造兼帶神主と見え類史神祇部に叙例國造禰宜祝神宮司等と有にても國造は神主なる事明らけし然れば國々より被召にも神事に依ては神主祝部と召れ公事に就ては國造縣主と召るなるべきなり此等の事は十三卷十五卷に云れば其に見合すべし古事記水垣宮段には出雲の國造の事を祝と宣るは考合すべし又推古天皇十年御紀に春二月己酉朔來目皇子爲下擊二新羅一將軍上授二諸神部及國造伴造等并軍衆二萬五千人一と有て此には神部と國造とは別物の如く見ゆれども神部は祭祀の事に耳仕奉り國造は軍衆と成りて奉仕ら令給へるにて其元同じき者から其任異なるに依て各別なるが如く見ゆる者也神主とは考に其神に親く仕奉る人也と有り神功皇后御紀に皇后選二吉日一親爲二神主一と御自其御祭を行はせ給ふ事を爲神主と有り同御紀に即得神教拜禮之以二依羅吾彥男垂見一爲二祭神主一と有るは人に任して神事を掌令め給ふなり天武天皇六年御紀なるは今云ふ神主なり日本後紀大同二年の條下に或有レ任二神長一事乖二通

例ニ其有ニ官符一任ニ神長ニ者宜ニ改爲ニ神主一ト有る此也に神（仕奉る人の中の長者を云ふ神代紀に齋主神號齋之大人と有る意ばへを察むべし〇天野信景が鹽尻に此後紀の頃ほひは神長と呼しを勅して神主と稱させ給ふに見えたり伊勢の一禰宜を長官と呼も昔の神長の遺習にや但長官次官をカミスケと云へば一禰宜をカミの意にて長官と稱するかと云り東鑑にも諸社神人神官と見ゆ）、祝部は神主に次で其社の事を執人なり侍在の義なるべくや桑家漢語抄に祝部を決布理と注して侍の義と爲るは寔に然る事なり天野信景の鹽尻に祝（ホフリ）と云は神饌の神供人なり保布理とは牲を屠るより呼初し稱也と云れども穩かならず偖神主は社事を摠裁りて其任重ければ常には祝部をして其本社に令侍丁供御以下の物を調進へ親しく侍る謂なる事著明し神祇令義解に祝部謂ト爲ニ祭主ニ賛辭者上と見え職員令義解に其祝者國司於ニ神戸中一簡定即申ニ太政官ニ若無ニ戸人ニ者通取ニ諸人ニ也とも見えたり臨時祭式下及民部省式には禰宜祝とあり偖右に云る如く神主は諸社にして神に仕奉る長者たる人を云て此職は古より重在し故に諸國の國造たる人此に任じたるを孝徳天皇の大御代より國造を停止られて郡司に任給ひければ郡司にして神主を兼たりき然れば祝部の類其に亞で重く有つらむを孝徳天皇大御世よりぞ右の如く神戸中より簡定て御制度とは成つらむかし但其より以下も皇極天皇御紀元年の下に村々祝部と有るは村々の小祀の祭祀を主る人を云るなれば重きも輕きも種々なるを總云るなりけり持統天皇御紀八年の下に奉ニ幣於諸社ニ賜ニ神祇官頭至ニ祝部等一百六十四人ニ絁布各有差と有るは神部と同じ字或は祝者とも書せり（儀式に祝部のみ有て神主を擧られざるを思ふに神主は其社の奉仕する人の長と有て其仕奉る社を放る事難ければ祝部を任す例なりけむも知べからず鹽尻に祝部の類巫部宮部物部などの如し部とは其尸也と云れど部は其群を云ふなり思混ふべからず）諸は神主祝部を指て云ふ諸なり上にも下にも屬て云ふ語なり言義諸（モロく）は圍にて其所に在合ふ限の人を統て取分たざるなり（上に屬ては諸神等また諸人なさ云ひ下に屬ては天神諸また八百萬神諸など云へり然るに後世さなりては上に屬くのみ言なれて下に屬く方は大かた絶たる様に成にたり是以て賀茂大人すら思誤れて考の本文に諸聞食登宣と訓れて諸の事の意に取僻められたり）〇聞食とは今俗に承れ抔云むが如し考に聞給へと云に等しく食も給も共に物を心に能く得る事を云へり（今云食は物を心に能く得る事なれど給へば然らず崇むると請ふとの二義あるのみ）宣は人に云聞すを云り儀式に中臣進就ニ庭座ニ讀ニ祝詞ニト有る此なり今祈年祭を被行る爲に神主祝部を諸國より京に召上せ給ひ神祇官にて齋部の仕奉れる幣帛を諸社に班ち奉らしめ給ふとして先神主祝部を呼立て天皇の詔詞を承はれと中臣の云ひ聞しむる也（宣さは朝廷の御規定の隨に受賜り行ひて其事を仰すと云ふ義なり考に能多麻布と訓れたるな後釋に非訓さして此は中臣の自云ふ言にて俗言に申聞ますと云ふ意）

なり此祝詞の中に有る宣みな中臣の此祝詞を諸に云聞す由なりと云り　神注に主祝部等稱レ唯餘宣准レ之と有は儀式に中臣讀二祝詞一每二一段一に祝部稱レ唯と有を云なり此一段の讀切にて聞人の應をする事を註されたるなり古へ事を聞て畏りたるには袁々と答ふる定にてありし也江家次第には祝師申レ祝と有りて傍注に祝師申レ祝祝師者中臣氏神祇官人也祝詞見延喜式八巻宣稱段々神主祝部等共稱レ唯云々と記せり　此下に宣と有る所は何れも稱唯有る事と知るべし餘宣數レ之とは此より次にある諸の祝詞共に云々と宣と有る所何れも稱レ唯する何ぞと云ふ事を教給へる者なり考に云く祝詞の文の一段訖る毎に唯々と申す事なるが唯々とは答申す聲にて是をば口を閉たる隨にて聲をだし口を漸々に開きて去聲に云へり警蹕には口を開きし隨にて聲を發して平聲に於々と云ふ神樂の始に於々と有るも警蹕なれば平聲に於々於々と云ふと有り　此に宣命と祝詞の差別有り若て此結は第十詞の下に云々稱辭竟奉久乎諸聞食登宣と有り　第七詞の下に云へり卷三の二丁見るべし

高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏美命以

高天原とは上天を云ふ地に對ひて云ふ天は天日なるが此高天原の本城にし有れば打任せて天と云ふは此天日の事なり　和漢の古傳に天地開闢と云るは天日と大地と分判せる始を云り然れば天と指し高天原と稱ふ神域天日ならずして何處か在む　又天極紫微宮をも云ひ空氣無質の蒼天をも云ふ稱にて此は地に對ひて云ふ天ならず汎く統云ふ天にて全世界を悉く指云ふ稱なり古事記に天地初發之時於高天原成神之名天之御中主神と有る此なり　記傳に此時高天原は非れども後に此神の御在す所となりたれば後名を始に及ぼして語傳たる物なりと云れど然らず本より高天原と云ふ域有て其域に主たる由を以て天之御中主神の御名に負せるなるを其儘に神語傳たるなり又平田翁の古史成文に此高天原を天御虛空と易られたるも強說なり虛空とは天地定りて後に空氣無質の所をこそ云へ對云ふ物無くして何ぞ虛空と云ふ名有むやも萬葉十八に阿米都知乃會許比乃宇良爾(アメツチノソコヒノウラニ)と云ふ如く　然れば天地を內(ウラ)と云ひて其外(ソト)と云ふ古語なるをや　此は上天の神域を云ふ稱と心得べし　尙委しくは古始太元考に說盡すを見明むべし

〇神留座の神は神集また神議などの神にて崇め云ふ詞なり　漢文に虛字實字の用法有るが如く我が言語の上も然り神集神議などの神は崇め詞に冠へたるなれば虛字なり故に迦牟と音轉るなり神之宮また神之社と樣に云ふ神は神の言に用有る故に本語の隨は迦微と云ふ此即實字なり識者能くこの差別を思ふ可くこそ　留は續紀の宣命に神積と記き萬葉集五卷三十一丁に神豆麻利と見えたれば豆麻利と訓べしと故大人等の云れたるが如し　留字と積字と同訓なる由は大祓詞後釋に神祇官に坐八座の中の玉留魂(タマツメムスヒ)と申す神名を神名帳には玉積產日神(タマツメムスビノカミ)と書れたる例證を擧られたるにて知べし　偖その豆麻利は物の器に充滿るを積有と云ふ如く神の御靈の充滿り御在りとなり神祇官に坐八座の中の玉留魂神と申すも靈性を聚めて人の身體に充滿給ふ神と申す義なり　後釋に浮れ行く魂を留め給ふ御靈に坐す神なりと云れたるは神留坐の釋に皇御孫命の高天原を離れて此國に降坐るに對て降坐ぬ神を留坐とは申せるなりと云れたる如く豆麻利を滯留の義に說誤られたる僻事より出たる物也　斯て高天原爾神留坐とは全世界に神靈の充滿り御在りと顯明より幽

冥を取分て申せるなり實事本記と云ふ物に希夷視聽之外氤氳氣象之中虛而有レ靈一而無レ體と有るは此の意に叶へり但此は老子に視レ之不レ見名曰レ夷聽レ之不レ聞名曰レ希搏レ之不レ得名曰レ微此三者不可致詰故混而爲レ一其上不レ皦其下不レ昧繩々不レ可レ名復歸於無物一是謂二無狀之狀無象之象一迎レ之不レ見二其首一隨レ之不レ見二其後一と云々と有るを取れるなり然れど高天原に神の充塞坐ます事に熟く當れり若此く神明の靈威宇宙に彌綸し坐る故に天地造化の妙用終古に變無く生成化育の全能萬古に易る事無し豈上天に殘り留坐の由ならむやも神典の古傳に獨神成坐而隱身也と有を思ふ可き物なりかし因レ此て思ふに豆麻利は積(シヅマリ)に近き語なり志豆麻利の志は其一所を其と標的(サシ)て狹きを豆麻利は甚大にして汎廣(ヒロ)く集り盈るの義なりけり高天原に神留坐す神靈寰も無く鬼も無しと雖も衆妙を該羅して遺す事無し是故に萬物生々して止らず天地此に依て常在に立ち日月此に依て無窮に明らかに萬物此に依て化育す皇祖大御神の御德亦大なる哉○皇睦神漏伎命神漏美命以は神漏伎命と神漏美命とに因てと也命は詔命の義なるが重復れるも誤ならず結句此より別事ながら大御巫の祭神までを併せて に故皇吾睦神漏伎命神漏美命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と有るを合せて知べし後釋に上なる命字は後人のなれば二つは情進(サカシラ)に加へたるなるべし此の命は詔命を云るなれば二つと云べきに非ず下文に故皇吾睦神漏伎命神漏美命登云々と有る命とは異なるをや若此も二つながら命と云ふ言を添て云は以字の上に今一つ之命と云ふ事無ては足はず然れど然云る例無しと有れど然らず斯く同事を二つ復て云ふは古語の格にて古事記に進御名方神の白給ふ言に不レ違二我父大國主神之命一不レ違二八重事代主神之言一と有る命と言と異こそ有れ其云樣の同じきを以て思へば決く古文の一格なりと佗の例みな神漏岐神漏美乃命以氐と有如く上に命字無くて宜しとは云難く有とて誤とは爲難きをや且下文に故皇吾睦神漏伎命神漏彌命と有る命とは異なりと云れたるも心得ず此將詔命の義なる事少も上に異なし上なるは發言にて下なるは結語なる事を思漏されたるなるをや皇睦は皇御孫命の皇祖と申す義なり須米は統御の由にて牟都は御親睦の意にて凡世間の人等はしも皇國番國の差別無く天皇祖神等の造化に資らざるは無く亦其御後ならぬは悉に有る事無しと雖も皇御孫命御一己に係て申て佗を知しむる古語の定格なるが故に世界萬國の大祖と在す神漏伎神漏美命を殊に皇睦と親しく申す例にて天照大御神の大御命に勅曰吾高天原所レ御齋庭之穗亦當レ御二吾兒一と神代紀に見えたる如く稻穀は天下蒼生の食物として性命を續ぐ資なるを當レ御二吾兒一と詔給ひて皇御孫命御一己の事に申せるに倣へ知べき物なり皇統の根基如此く天地の主宰と在す皇祖天神の附與し給ふ所にして其本自然兆民と別なり兆民また皇御孫命の大御寶なる故に君臣の間甚善はしく萬國に其比有る事無し實に天下は天皇御一人の天下にて天下の人民は其御一人の有を賜り保つ義にて天皇の尊く貴(タカ)く御在る事萬國に比類御在し坐ざる事能く人の知れるが如し君臣の大道神代に立て無窮に毫髮(イサヽカ)も違ふ無き所是如此し仰ぎても餘有る御事なりかし天下の兆民は皇御孫命の大御寶なれば天下は一人の天下にまして天下の天下に非ず故に無道の君坐ますとも人民離れ叛く事能はずして恐み仕奉り當逆な謀て叛く者有れば朝敵として人民從はず天下擧て此を誅す漢土及び諸蕃の酋長共に掛ても思ひ准へ奉るまじき物なり第二卷の末に云を見るべし神漏伎神漏美も上有君上有女にて古語拾遺に謂ゆる神漏伎は高皇產靈神神漏美は神皇產靈神にて全世界に在ゆる八百萬千萬神の最上貴

首(トキ)の神たる由なるが汎く男女の皇祖神にも係て申す稱なり亦轉りては皇祖ならぬ神をも稱みて然申せり出雲國造神賀詞に加夫呂伎熊野大神と有るは須佐之男命を申し仁明天皇御紀にも少彥名命をも賀美呂伎と崇申せり出雲國風土記に伊非奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命と申せるなど御名を白す事を諱て然は申せるなり常陸國風土記に諸祖天神と書て注に俗曰二賀味留岐賀味留美一と有り然れば汎く男女の皇祖神を指すの稱なり出羽國田川郡人大瀧光憲云く同國と越後國の山中に大鳥と云ふ地有り平家の貴族の亂を遁けて此山中に潜居せる子孫なる由なるを絕て世に交らふ事も無くして甚素朴なる人等なるが其地の言に父を加夫呂と云ふなるは此古言の傳れるにやと云り命字二つ有るは尊稱(アガメコトバ)に非ず詔命(ミコトノリ)の義なり其說上に云へり皇御孫命の天社國社と齋奉給ふ事は諸祖天神の詔命に依給ふ事は云も更なり年中恒例臨時之祭祀の全は悉く皇祖天神之詔命にて皇御孫命の天降坐る時に天下を所知食む大御政之最第一に授給ひ傳給ふ物なる事炳然し尙此より下に時々辯ふるを見べし風雅集に後宇多天皇「天津神國津社を齋祀てぞ我が葦原の國は治まる」と歌はせ給へるは熟くも道の大義に心を得させ給へる大御哥なる由先師等の既く論はれたるが如し山崎垂加が神道皇道二ならぬ理は祭政二字の唱にても知べし荻生茂卿が不佞茂卿生也晩未レ聞二我東方之道一焉雖レ然竊觀二諸前爲レ邦也天レ祖レ天政レ祭祭レ政神物之與二官物一也無レ別神乎人乎民至二於今一疑レ之而民至二於今信レ之云々後世有二聖人一興二于中國一則必攻二諸斯一已孔氏之徒獨傳二周禮一而儒者邇謂二先生之道是而已一矣亦不二深思一也と云る彼徒にしては甚愛しき言なり

祭を嚴(イツ)にし政を正くし天下を整給ふ事はしも皇祖天神より皇御孫命に附與し奉給ふ天統高御座(アマツヒツギタカミクラ)の御職にして此餘に道なく此餘に敎無く實に隨在天神の大道此なり此餘に何ノ道何ノ敎とて數知らず多かるは皆己が私ノ道私ノ敎と云ふ物にして治國平天下の公道ならず儒と云ひ佛と云へど其道を知り其敎を甘(ヨミ)する輩を天下に敎へ見よ幾許か有むと爲る其徒と雖も風土の異有り時勢の變有り如何に其を學ふとも口に其を唱へ文に其を記すのみこそ有れ眞に其本意の如く爲す事能はず然すがに天下公正の大道に我知らず御せらるゝは此は天然(カムナガラ)の大道なるに依て行易く彼は人爲(ワタクシ)の工風に過ざる小術(サカシラ)故に行れ難き害なり實に彼等と雖も身を天地の內に安置(オキ)造化の神功に資て成れる人民なれば如何に爲さも遁るゝ限無るべき物なり

偖その隨在天神とは皇祖天神の御規則に因て須臾も離るまじき道なるが君君たり臣臣(ヤツコ)たり父々たり子々たる當然の道を云ふなり孝德天皇御紀に惟神者謂下隨二神道一亦自有中神道上也と有る如く皇祖天神の御規則即天下公正の大道にして隨神道とは此に因准するを云ふなり諸祝詞に神漏岐神漏美乃命以と有るは此大本を語る神語なり天下公正の至理は萬國に同じ是以て易繫辭に天尊地卑乾坤定矣卑高以陳貴賤位矣と見え禮樂記に天尊地卑君臣定とも郊特牲に天先二乎地一君先二乎臣一其義一也とも記せり如是く天尊く地卑く卑高位置定まる任に終古易る事無し此即天地の大經にして宇宙の實事の大本たり頭の上に位し足の下に居る此上下定り有て天地自然の大道宇宙固有の規則たり頭は上に位す惡疾有るも下に移す可からず足は下居る肥白なるも此を上に移す可からず頭の上に位するを見て君臣分定りて移易爲べからざるを知る爰に於て臣庶たる者は君位を窺ふ可からざるを知りて上下其分に安居す祖父相受け伯叔序有れば生の彊にて道其中に存す前生を兄と云後生を弟と云ふ仁義孝悌忠信の敎を待ずして大道確乎として行るゝ事斯の如し此蹤を踐を正とし常とし誠とす此に反するを邪とし變とし僞とす此を以て君々たるべし臣々たるべく父々たるべく子々たるべきなり中庸に誠者天之道也誠レ之人之道也と有るに思合せて知べし抑斯る事には神典の古傳のみを以てこそ記傳ふべけれ由なき外國籍を以て然するは如何ぞや思ふも有べけれど普天の下悉く皇御孫命の皇土に非ぬは無く萬國の聖哲悉く皇御孫命の王臣に非ぬは無ければ萬國に行るゝ道即我が大道なれば惡しきを背捐(ステ)て其善を採用(トラ)むに何てふ事か有む熟く思ふべき物にこそ

然ばれ天皇と在しては皇祖天神の授給ふ御事の依隨に天社國社の皇神等を齋祀らせ給ひて天下公民

其を取分て申せるなり寶基本記と云ふ物に希夷視聽之外氣象之中虛而有ㇾ靈一而無ㇾ體と有るは此の意に叶へり但此は老子に視ㇾ之不ㇾ見名曰ㇾ夷聽ㇾ之不ㇾ聞名曰ㇾ希搏ㇾ之不ㇾ得名曰ㇾ微此三者不ㇾ可ㇾ致詰故混而爲ㇾ一其上不ㇾ皦其下不ㇾ昧繩々不ㇾ可ㇾ名復歸ニ於無物ニ是謂ニ無狀之狀無象之象ニ迎ㇾ之不ㇾ見ニ其首ニ隨ㇾ之不ㇾ見ニ其後ニ云々と有るを取れるなり然れど高天原に神の充塞坐ます事に熟く當れり若此く神明の靈威(ミタマノフユ)宇宙に彌綸(ミチタラハ)し坐る故に天地造化の妙用終古に變無く生成化育の全能萬古に易る事無し豈上天に殘り留坐の由ならむやも神典の古傳に獨神成坐而隱身也と有を思ふ可き物なりかし因ㇾ此て思ふに豆麻利は鎭(シヅマリ)に近き語なり志豆麻利の志は其一所を其と標的(サシ)て狹きを豆麻利は甚大にして汎廣(ヒロ)く集り盈るの義なりけり高天原に神留坐す神靈寥も無く虛も無しと雖も衆妙を該羅して遺す事無し是故に萬物生々して止らず天地此に依て常在に立ち日月此に依て無窮に明らかに萬物此に依て化育す皇祖大命の神德亦大なる哉○皇睦神漏伎命神漏美命以は神漏伎命と神漏美命とに因てと也命は詔命の義なるが重(カサナ)復れるも誤ならず結句此より別事ながら大御巫の祭神までを併せてに故皇吾睦神漏伎命神漏美命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と有るを合せて知べし後釋に上なる命字は後入の情進(サカシラ)に加へたるなるべし此の命は詔命を云るなれば二つ云べきに非ず下文に故皇吾睦神漏伎命神漏美命登云々と有る命とは異なるや若此も二つながら命と云ふ言を添て云はゞ以字の上に今一つ之命と云ふ事無ては足はず然れど然云る例無しと有れど然らず斯く同事を二つ復て云ふは古語の格にて古事記に進御名方神の白給ふ言に不ㇾ違ニ我父大國主神之命ニ不ㇾ違ニ八重事代主神之言ニと有る命と言と異こそ有れ其云樣の同じきを以て思へば決く古文の一格なり作の例みな神漏岐神漏美乃命以氐と有如く上に命字無くて宜しさは云難く有とて誤とは爲難きをや且下文に故皇吾睦神漏伎命神漏彌命と有る命とは異なりと云れたるも心得ず此將詔命の義なる事少も上に異なし上なるは發言にて下なるは結語なる事を思漏されたるなるをや皇睦は皇御孫命の皇祖(ミオヤ)と申す義なり須米に統御の由にて牟都は御親睦の意なり凡世間の人等はしも皇國番國の差別無く天皇祖神等の造化に資らざるは無く亦其御後ならぬは悉に有る事無しと雖も皇御孫命御一己に係て申て佗を知しむる古語の定格なるが故に世界萬國の大祖と在す神漏伎神漏美命を殊に皇睦と親しく申す例にて天照大御神の大御命に勅ㇾ曰吾高天原所ㇾ御齋庭之穗亦當ㇾ御ニ吾兒ニと神代紀に見えたる如く稻穀は天下蒼生の食物として性命を續(ツナ)ぐ資なるを當ㇾ御ニ吾兒ニと詔給ひて皇御孫命御一己の事に申せるに倣(ナラ)へ知べき物なり皇統の根基如此く天地の主宰と在す皇祖天神の附與し給ふ所にして其本自然兆民と別なり兆民また皇御孫命の大御寶なる故に君臣の間甚善はしく萬國に其比有る事無し實に天下は天皇御一人の天下にて天下の人民は其御一人の有を賜り保つ義にて天皇の貴(タカ)く御在る事萬國に比類御在し坐ざる事能く人の知れるが如し君臣の大道神代に立て無窮に毫髮(イササカ)も違ふ無き所謂如此し仰ぎても猶餘る御事なりけし天下の兆民は皇御孫命の大御寶なれば天下は一人の天下まして天下の天下に非ず故に無道の君坐ますとも人民離れ叛く事能ずして恐み仕奉り逆を謀て叛く者有れば朝敵として人民從はず天下擧て此を誅す漢土及び諸蕃の酋長共に掛ても思ひ奉るまじき物なり第二卷の末に云を見るべし神漏伎神漏美(カムロキカムロミ)も上有君上有女にて古語拾遺に謂ゆる神漏伎は高皇產靈神神漏美は神皇產靈神にて全世界に在ゆる八百萬千萬神の最上貴

首の神たる由なるが汎く男女の皇祖神にも係て申す稱なり

亦轉りては皇祖ならぬ神をも尊みて然申せり出雲國造神賀詞に加夫呂伎熊野大神と有るは須佐之男命を申し仁明天皇御紀にも少彦名命をも賀美呂伎と崇申せり出雲國風土記に伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命と申せるなど御名を白す事を諱て然は申せるなり常陸國風土記に諸祖天神と書て注に俗曰二賀味留岐賀味留美一と有り然れば汎く男女の皇祖神を指すの稱なり出羽國田川郡人大龍光憲云く同國と越後國の山中に大鳥と云ふ地有り平家の貴族の亂を避けて此山中に潜居せる子孫なる由なるを絶て世に交らふ事も無くして甚素朴なる人等なるが其地の言に父を加夫呂と云ふなるは此古言の傳れるにやと云り

命字二つ有るは尊稱に非ず詔命の義なり

其説上に云へり

皇御孫命の天社國社と齋奉給ふ事は諸祖天神の詔命に依給ふ事は云も更なり年中恒例臨時之祭祀の全は悉く皇祖天神之詔命にて皇御孫命の天降坐る時に天下を所知食む大御政之最第一に授給ひ傳給ふ物なる事炳然し

尚此より下に時々辯ふるを見べし風雅集に後宇多天皇天津神國津社を齋祀てぞ我が葦原の國は治まる」と歌はせ給へるは熟くも道の大義に心を得させ給へる大御哥なる由先師等の既く論はれたるが如し山崎垂加が神道皇道二ならぬ理は祭政二字の唱にても知べし荻生茂卿が不佞茂卿生也晩矣不レ聞二我東方之道一焉雖レ然竊觀二諸前一爲レ邦也祖レ天天レ祖政レ祭祭レ政神物之與二官物一也無別神乎人乎民至二於今一疑レ之而民至二於今一信レ之云々後世有二聖人一興二于中國一則必取二諸所一已孔氏之徒獨傳二周禮一而儒者廼謂二先生之道是而已一矣亦不二深思一也と云る彼徒にしては甚愛しき言なり

祭を嚴にし政を正くし天下を整給ふ事はしも皇祖天神より皇御孫命に附與し奉給ふ天統高御座の御職にして此餘に道なく此餘に教無く實に隨在天神の大道此なり

此餘に何ノ道何ノ教とて數知らず多かるは皆己が私ノ道私ノ教と云ふ物にして治國平天下の公道ならず儒と云ひ佛と云へど其道を知り其教を甘する輩を天下に教へ見よ幾許か有むと爲る其徒と雖も風土の異有り時勢の變有り如何に其を學ぶとも口に其を唱へ文に其を記すのみこそ有れ眞に其本意の如く爲す事能はず然すがに天下公正の大道に我知らず御せらるゝは此は天然（カムナガラ）の大道なるに依て行易く彼は人爲（ワタクシ）の工風に過ざる小術（サカシラ）故に行れ難き害なり實に彼等と雖も身を天地の内に安置（オキ）造化の神功に資て成れる人民なれば如何に爲とも遁るゝ謂無るべき物なり

偖その隨在天神とは皇祖天神の御規則に因て須臾も離るまじき道なるが君君たり臣臣たり父々たり子々たる當然の道を云ふなり孝德天皇御紀に惟神者謂下隨二神道一亦自有中神道上也と有る如く皇祖天神の御規則即天下公正の大道にして隨神道とは此に因准するを云ふなり諸祝詞に神漏岐神漏美乃命以と有るは此大本を語る神語なり

天下公正の至理は萬國に同じ是以て易繋辭に天尊地卑乾坤定矣卑高以陳貴賤位矣と見え禮樂記に天尊地卑君臣定とも郊特牲に天先二乎地一君先二乎臣一其義一也とも記せり如是く天尊く地卑く卑高位置定まる任に終古易る事無し此即天地の大經にして宇宙の實事の大本たり頭の上に位し足の下に居る此上下定り有て天地自然の大道宇宙固有の規則たり頭は上に位す惡疾有るも下に移す可からず足は下居る肥白なるも此を上に移す可らず頭の上に位するを見て君臣分定りて移易べからざるを知る爰に於て臣庶たる者は君位を窺ふ可からざるを知りて上下其分に安居す祖父相受け伯叔序有れば生の道にて道其中に存す前生を兄と云後生を弟と云ふ仁義孝悌忠信の教を待ずして大道確乎として行るゝ事斯の如し此蹤を踐を正とし常とし誠とす此に反するを邪とし變とし僞とす此を以て君々たるべし臣々たるべく父々たるべく子々たるべきなり中庸に誠者天之道也誠レ之人之道也と有るに思合せて知べし抑斯る事には神典の古傳のみを以てこそ記傳ふべけれ由なき外國籍を以て然するは如何でや思ふも有べけれど普天の下悉く皇御孫命の皇土に非ぬは無く萬國の聖哲悉く皇御孫命の王臣に非ぬは無ければ萬國に行るゝ道即我大道なれば惡しきを宥捐（ステ）て其善を採用（トラ）むに何てふ事か有む熟く思ふべき物にこそ

然ばれ天皇と在しては皇祖天神の授給ふ御事の依隨に天社國社の皇神等を齋祀らせ給ひて天下公民

を撫給ひ惠給ひて萬國を經綸給ふを以て隨在天神の御行業と申奉るべく孝德天皇御紀に先以祭二鎭神祇一然後應レ議二政事一とも朕復思下欲蒙二神護力一共二卿等一治上ともも當下遵二上古聖王之跡一而治中天下上復當(ヨク)有レ信可レ治二天下一など斯る古語ども數知らず多かり今日朝廷の御有趣を竊に伺奉るに少かも變改(カハ)らせ給ふ御行業の座まさぬは然すがに天神之御子と御在し坐せはなり天壤と窮無き寶祚の御尊き云に堪たる御事なり臣下と有ては天皇の行はせ給ふ御行業に違奉らず淨く明き心を以て仕奉り大御政を輔相ひ輔佐け仕奉て天下を安泰からしむべく又大御世を無窮に傳させ給ふ中には邂逅に神代の御規則に背はせ給ふ事も絕て無しとは申可からず然も有らば臣の臣たる道を以て諫奏奉りて君をして君たらしむるぞ臣下なる人の隨在天神なる美德と云可くも欽明天皇御紀に百濟王より佛像經論を獻上りける時に物部尾輿大連中臣鎌子連など我國家之王二天下一者恒以二天地社稷百八十神一春夏秋冬祭拜爲レ事方今改拜二蕃神一恐致二國神之怒一と淨き明き心を以て諫奏されたるは實に天下の忠臣と甚憑もしき美德ならずや又用明天皇御紀に佛魔の妖氣亘盛なりしかば物部守屋大連中臣勝海連など何背二國神一敬二他神一也由來不レ識二若レ斯事一と懇到に諫奏られたるを今重胤が心に思合せられて殆涙も落るかし然れども上に聖德太子在し下に蘇我の狂痴有て相共に左道を非ひたりし故に忠臣の金言は蕩け碎けて行はれず益々その弊滋蔓なりしを推古天皇の女帝に在し乍も其忠臣等の諫奏を實にもさや思ぼしたりけむ御紀に十五年春二月庚辰朔戊子詔曰朕聞レ之曩者我皇祖天皇等宰レ世也跼レ天蹐レ地敦禮二神祇一周祠二山川一幽通二乾坤一是以陰陽開和造化共調今當二朕世一祭二禮神祇一豈有レ怠乎故群臣爲竭レ心宜レ拜二神祇一と有るを思ふべし十二年四月に皇太子憲法十七條を作られたれど天皇の神祇を祭祇り崇させ給ふ尊き大御志しは一條も記載られざりしかば彌々佛法を上無き物と人皆欺れけらし其憲法十七條を斷に廢べしとは仰下され難かりし故に其を幽に破り給ふ此より四年の後に斯く改めて詔命し給ふは深く所思す御旨有りて其御心しらひ也甲午皇太子及大臣率二百寮一以祭二拜神祇一と天皇の大御命に驚き物爲られたる樣なるを思ふべし然は云へ物部中臣二大人の忠臣此時に顯れたりと云べしあな畏こ公民としては左にも右にも上の御趣けに因准ひ奉り各も各も神賦の家業を守りて衣食住の資と爲し身を修め德を行ひ世の爲人の爲に功德を建て相助け相救ひ己を藥佗を起し隨在天神の大御政の少しも安からむとを須臾も忘るべからず如此く爲る時は父子親愛有り夫婦愛敬有りて人道の極み因此て行はるべし此ぞ神漏岐神漏美の詔命以て皇御孫命に事依し奉給ひし隨に古今萬國の差別無く天下公正に自然にして行るゝ所の大道にして貴賤尊卑の等差無く天下萬世に當然にして行可き所の大道なり眞に皇祖天神の御恩賴の天下に彌綸はす事斯の若し惟神者謂下隨二神道一亦自有中神道上也の神道にして帝道唯一の眞旨此外に何か在む眞に天に二日無く地に二王無く天地の道は隨在天神にして二無き義を悟り神祇の德を繼ぎ修理固成の賦命を有つ所以奇異にも靈妙なりけり此外に道と云ひ教と云ふ物世に多かりと雖も一人も御し得まじき小康の術にこそ有れ豈斯せずして自然に行るゝ大道と云むやも荻生茂卿が辨名に更二數千載聖人一盡二其心力智巧以成然之道一也と云ひ同し人の辨道に先王之道先王所レ造也非二天地自然之と云るは然る言なり日本東夷と稱ける痴者なから然すかに皇國人なる故に斯る卓見の說は有るなり但皇國風土の自然なる義有て斯云はしめたるか

天社國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久

天社國社は天神社國神社と云ふ意なり如是く天神國神社を稱辭竟へ齋祀り奉給ふ事は皇祖天神に依れりとなり神代紀に高皇産靈尊因勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當爲吾孫奉齋矣汝天兒屋屋命太玉命宜持天津神籬降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉と有る此事と通えたり高天原爾事始而の事云（此事古語拾遺には天照大神高皇産靈尊乃相語曰さ有り此に就て思ふに御天降の大較は天照大御神の御心より出て専其事を定給ふは高皇産靈神皇産靈神の御所置に成れるか何所にても高皇産靈神一柱を耳擧られたるは傳漏たるかさ思ふに然らず此二柱神はしも夫婦の御中らひに坐せば夫神には必婦神の從ひ御在すべき理なれば其作々に數多所に記されむは顯はしければ其婦神なるに就て神皇産靈神を省かれたる物なり出雲國造神賀詞に高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎事避奉之時云々さ有るを以て辨ふべし因に云同詞に其文を受て是爾親神魯伎神魯美乃命宜久さ云れば上に說るか如く神漏岐神漏美命は獨々高皇産靈神皇産靈神の崇稱なる事更に疑無き物なり）偖天社國社と云は省たる語の如く思はるれども然に非ず龍田風神祭詞に神等乎婆天社國社止稱辭竟奉と有るを始め佗例皆然り（六月月次祭詞大嘗祭詞にも此語有り）如此く皇神等を天社國社と稱辭竟奉給へと皇祖天神の詔命令せ給へるからは高千穗宮にぞ天下の諸社の大凡は定給へりけむ「既に（イ本以下ナシ）神代紀に伊邪諾尊搆幽宮於淡路之洲と見えたるは御自神宮を搆て止住給へるなり又高皇産靈尊勅大名持神曰汝應住天日隅宮者今當供造云々又當主汝祭祀者天穗日命是也と有て其仕奉るべき神主さへに定置せ給へれば邇々岐命の天降座て高千穗宮に初國所知食し始より天社國社と稱辭奉らせ給ふ事灼し神武天皇御紀の東征の下に已く取天香山社中土と有を以て思ふに甚も久しき古より社を定めて神の御靈を鎭め祀ひ給ふ始は何の時か有む彼天降の當初よりなる事申すも更なり神代紀に高皇産靈尊勅大物主神云々宜領八十萬神永爲皇孫奉護之乃使還降之と有は大物主神を祀らしめ給ふ條なるが其文の次に即以紀伊國忌部遠祖手置帆負神定爲作笠者天目一箇神爲作金者天日鷲神爲作木綿者櫛明玉神爲作玉者太玉命以弱肩被太手襷而代御手以祭此神者始起遊此矣且天兒屋命主神事之宗源者也故俾以太占之卜事而奉仕焉と有て次に天津神籬天津磐境云々の事を載られたり此始起於此と有は高天原にて事始給ひし事を云ひ代御手以祭此神とは高千穗宮より其諸伴神等年中恒例の神事を行はれし事を云なり然れば高千穗宮にて行始て天社國社を定め給ひし事云も更なり」しかるを拾遺に此を神武天皇の大御世の事に委ねて爰仰從皇天二祖之詔建樹神籬と記せるは

由來ありし大御政なるを萬事の具り整れるは此御世なれば此時に始れる如なれど此を正しく始ぞとは云難し考に天津神國津神てふ語は神代に有しかど天社國社と定座しは崇神天神の御世にこそ有れといはれしは賀茂大人と思えぬ麁説なりかし

○稱辭竟奉稱は幣物を盡し究る意辭は祝詞を善はしく宣る事なり但此なるは天社國社と其社を定て崇敬ひ給ふ事を云ひ此終に稱辭竟奉久登宣は祈年の幣物の事を云て同じ事なり辭竟奉と稱辭竟奉とは別なり其由下に云り思混ふべからず鈴屋翁の後釋に多々閇は水を湛ると同言にて満足はす意なり今世の言に海潮満極れるを潮の湛と云も同じ凡て神を祭るには事をも物をも滿足はし盡し究めて其由を申す事にて即祝詞の語是なり此祝詞にて云はゞ千穎八百穎爾云々悪閒高知云々など様に盡し究めて申す是稱辭竟奉也竟も究め盡す意なり○考云万葉に正月立春の來らば斯くしこそ梅を折つゝ樂しき乎倍米此を家持卿の追和し歌に春の裏(ウラ)の樂しき終者と詠る乎倍の言も共に樂しみを盡す事なり倩神を祭るには必然爲る事なる故に稱辭竟奉と云へば即祭祀る事を爲て此も天社國社登伊都伎祭皇神等と云ふ意なり餘も此に准へて心得べしと云れたる如し故思ふに稱辭竟奉は右の如く其祭祀に典る物に就て云ひ辭竟奉は祀典よりは神德を稱す時に當て云ふ詞なり此事第三詞に辭竟奉と有る下に云り又物を奉進る事を立奉と云ふ立も此稱に同じかるべし然れば多々閇は立々聚の義にぞ有る可き神漏伎命神漏美命以て天社國社と皇神等を稱辭竟へ奉き祭祀らしめ給ふ由來な此に先云ふ事深旨有るべし神に物事に祈奉る事に入の上に取て當然の事なるが人皆其當然なる由來を知ざるが故に不當なる願を物爲て神の御守り護奉らぬ且ならず其御咎をさへ蒙る事有る物なり其當然を祈るとは新年祭には豐稔を祈り鎮火祭には火災を除かむ事を請奉るなど必然爲よと皇祖大神の定置給ふ所なれば極めて神の請受給ふべき等なり然るに世人の神に侫り媚る所を見聞くに濫子を以て瓜を實しめ給へと云ふ如き不當なる願を掛て公正の祭ならず斯る事等は皇祖天神の御定に非るが故に式の諸祝詞に一つさして道を曲たる願事非ず慎しむべく畏るべきこそ　○皇神等乃前爾白久有る皇神等は何れの神をも含みて如此申なり此は天社國社に鎮坐す許多の神等を取總て稱るにて四時祭式に祈年祭神三千一百三十二座大四百九十二座三百四座案上官幣一百八十八座國司所祭小二千六百四十座四百三十三座案下官幣二千二百七座國司所祭神祇官祭神七百三十七座奠幣案上神三百四座宮中三十座京中三座畿内山城國五十三座大和國一百二十八座河内國二十三座和泉國一座攝津國二十六座東海道伊勢國十四座伊豆國一座武藏國一座安房國一座下總國一座常陸國一座東山道近江國五座北陸道若狹國一座山陰道丹波國一座山陽道播磨國三座安藝國一座南海道紀伊國八座阿波國二座社一百九十八所前一百六座○今云此は案上官幣の社なり不奠幣案下新年神四百三十三座並小宮中六座畿内山城國六十九座大和國一百五十八座河内國九十座和泉國六十一座攝津國三十九座三百七十五所前五十八座○今云案下官幣の社なりと有るは朝廷より幣帛を頒ち奠らせ給ふ神等なり其餘にも國司祭新年神二千三百九十五座大一百八十八座東海道三十二座東山道三十八座北陸道十三座山陰道三十六座山陽道十二座南海道十九座西海道三十八座○今云上に大四百九十二座の内にて三百四座案上官幣と有る外を計たるなり小二千

二百七座東海道六百八十座東山道三百四十座北陸道三百三十八座山陰道五百二十二座山陽道百二十四座南海道百三十四座西海道六十九座○今云上に小二千六百四十座と有る内に四百三十三座は畿外なるに依て案下官幣にて奠られたる其外を計たるなり第十一詞の次に此預祈年國幣給ふ社々の事を詳記せり併せ見るべし 此等を摠合て三千百三十二座の神等を天社國社と稱辭竟奉らせ給ふなり然れば皇神とは必しも天皇の御祖と申す意にあらず尊稱と知べし其證は皇祖ならぬ御年神を御年皇神等と申し神祇官の八座の神をも皇神と申せるにて知べし許多の神等を皇神等と云ふ例は出雲國造神賀詞に百八十六社坐皇神等と有を始て數知らず多かり

今年二月爾御年初將給登爲而

今年二月とは二月は田の業を初る月なれば先此御祭を行ひ給ひ其業を起す由なり年は迅速の義を含て稻を云ふ然るは春夏秋冬十二月にて一回爲る事なるが生長收藏此中に成て有餘も不足も無くして稻の一世なれば田の稻の一年にして一度登る間なる其義をも兼たり御年神の下に委しく云べし 春夏秋冬の名及び十二月の名悉く稻を以て負たり稻は人の性命を保ち食ふ資なる故にぞ有らむ 春は生にて稻種の芽む義なり正月(ムツキ)は萠月(モユツキ)二月(キサラギ)は穎更生(キサラキ)三月(ヤヨヒ)は彌生(ヤヨヒ)の意なるに考合べし 夏は長にて稻の苗の成育つを云ふ四月(ウヅキ)は殖月(ウヱツキ)五月(サツキ)は早苗月(サツキ)六月(ミナツキ)は實成月(ミナリツキ)の義にて長(タ)け蕃(ノブ)る由なり 秋は收にて穗の赤らむ由なり七月(フミヅキ)は穗見月(フミツキ)八月(ハツキ)は蕃息月(ハリヅキ)九月(ナカヅキ)は稻苅月(ナガツキ)なるを思べし 冬は藏にて稻穀の恩頼を得る義なり十月(カミナツキ)は枯無月(カレナシツキ)十一月(シモツキ)は霜降月(シモフリツキ)十二月(シハス)は年竟(トシハツ)の義なり

如此く一歳四季十二月の名稱の稻に負れる耳ならず此大八洲國を瑞穗國と稱させ給ふ事皇國の萬國に眞秀たる所以著明くまた天地正帶の美國なる由緒を察るべし此如く天下に比類なく尊き皇國に生れて美(メデタ)き稻穀を飽まで喰ひ泰平の御世に住馴し故に然しも思はされど外國に至りては畜肉獸肉を糧とし或は魚食するも有て大地萬國廣しと雖も皇國の如く食物の美好きは無く亦清らけきは無きを然りとは知らず顏して皇國を賤しめ貶しむるを見識めかす腐儒者こそ罪反賊に超越たる曲者なりけれ惡まざるべけむや ○御年初將給登爲而は田に入立て耕す業を爲を云り二月に至て種子を水に漬し田を耕し初る物なれば御年初させ給ふとなり此は百姓の所業なるを天皇の初給ふ由に宣へるは此大地は天皇の御國と皇祖天神の附與し給ふ中にも殊に此瑞穗國は天皇の御食國と定給へれば山川田野悉皆く天皇の御有なるを天下の百姓に預ち預しめ給ひ天皇御一人の天下なるを天下の天下に相保ち相輔け相憐れみ相救しめ給ひ各々其産業を勉しめ給ふなり因に云如此く天下百姓の産業として田地を耕す事を天皇の物爲給ふ樣に宣へるを以ても各々傳へ承る所の家業は我か私の家業に非す朝廷より預奉る家業なり然れば天下の公民と有む者は家業を守り國禁を愼むを以て朝廷に仕奉の美さ思ひ功しむ可き物ぞかし 稻穀また皇祖天神より天皇に授け進らせたる物なるを天下に預ち作らしめ給ふなり已に此事十七にも論ひ置りき 此を以て御年初給ふと天下百姓の作業を大御自の任として祈白させ給ふなり恐しくも辱しとも思へば思ふ隨に云へ

ば云ふ隨に涙さへ殆に垂下りて遍き御惠の尊さには言も意も及ばずなむ 祝詞考に此の乃ノ字を或人初は祈の誤にて御年祈ならむと云り然も有ぬべし」と云れたる此或人は何なる無識の人なりけむ見遁し難き曲說なり出雲本にも然有は此說を信ひて改たりと見ゆ 六月月次詞には此所の文今年乃六月月次幣帛明妙照妙和妙荒妙備奉氐と有り 十二月月次此に同じ

皇御孫命能宇豆能幣帛乎朝日能豊逆登爾稱辭竟奉久登宣

皇御孫命と申奉るは天より降坐て高千穗宮は初國所知し天皇を始奉りて當今の天皇までも稱申す大御名なり 借此詞に少辨まふ可き事有り神漏伎ノ命神漏美命以て有る詔命は天降坐し天皇に宣ひて後世に及ぼせるなり此に皇御孫命と有るは當今の天皇の御事なるが事は前代より受來る由を證せり 皇は統御の義なる事上十六丁に云る如く御孫は御眞にて天下を圍め有たせ給ふ義にて眞は物の精粹純正の象形を云ふ言なれば宇宙に比類坐ざるの尊號なり 眞中また眞心また眞情また眞玉など云る例を考互して知(サト)る可くなむ 此を以て續紀卷十五の歌には阿摩都加美々摩乃彌己止と有り前には貞觀儀式に御體 詞云於保美摩 と有に依て皇御身命ならむかと思ひしかども其義ならむには單に美摩乃彌已止とは云難し皇字を離ちても通ゆるは御孫は御眞なる事は著明し 古語拾遺に天照大神高皇産靈神二神之孫故曰二皇孫一と云るは古人の說と雖も取に足らず古くは子孫の孫を比古とこそ云へれ摩孫と云ふ訓無し因に云ふ神代紀下卷に吾孫と有るは和我美摩と訓べからず和我美摩にては何の事とも通えぬが如し和我美古と訓べし

○宇豆能幣帛乎の宇豆は貴き意と嚴しき意と大なる意と有り其は第七段伊勢大神宮の祠に宇豆乃幣と有るを第三十二段同宮祈年祭詞には太御幣と有にて炳焉き物なり此に就て思へば宇豆は全なり物の足整る狀を云ふと聞ゆ若て此を崇詞とするは賤より貴所に向ひては物の足整る由の稱辭を从へ云ふ例にて此なる全また御手御足などの御もえは充實の義より从るなり又太御幣の布刀も全にて宇豆と同じ意なり全を宇豆と訓る事古事記に内二剝鵝皮一と有る内は借字にて全剝の義なるを思ふ可し考に云く神代紀に珍子 珍此云二于圖一○今云此事を古事記には貴御子と有り 神武天皇御紀に珍彥 此云二于圖毗故一 大殿祭詞に皇吾宇都御子皇御孫之命 万葉に皇朕宇頭乃御手以 是等を合せて知るべし」と有り 今幣帛は皇御孫命の奉らせ給ふ幣帛なる故に貴とは云ふなり記傳七に言に人の容貌を宇豆高きと云ふも高く嚴くしき事なりと見ゆ 幣帛は充座なり考いふ幣帛は萬物を置座に充て奉るを云ふ記傳八四十三丁に古神に獻物及人に贈など爲る物を久良と云りと見ゆ 後世の語に人に物を與るを久流と云も是より出たる可し 其は千位置戸と有る位又貞觀儀式に倉代十輿 代は實にて即其物を云ふ 續後紀一に國造出雲豊持等云々倉代物五十荷など有る倉此なり 位倉の字共に假字なり と云れたるが如し但美氐を御手なりと云

れしは依難し美氐は充る意久良は物實を載る座と云ふ事なり然るを記傳に此充座の説を非ずとして偖は賢木の枝に着たるに叶はずと云れたれど物を着る賢木其即座なれば難無し○今云置座は神に奉る物を居置く臺なり其制は木工寮式の八座置四座置條に以レ木爲レ之長者二尺四寸短者一尺二寸各以二八枚一爲レ束名稱二八座置一長短各以二四枚一爲レ束名稱二四座置一と有が如し大祓詞千座置座の下に註べし 偖此幣帛はしも四時祭式に奠二幣案上一神三百四座社一百九十八所座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩庸布一丈四尺倭文纒刀形倭文三寸絁纒刀形絁三寸布纒刀形布三寸各一口四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一竿弓一張靫一口鹿角一隻鍬一口酒四升鰒堅魚各五兩腊二升海藻滑海藻雜海藻各六兩鹽一升酒杯一口裏葉薦五尺今云麻字座に誤作れり今改めて引きつ 前一百六座座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩倭文纒刀形絁纒刀形布纒刀形各一口四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一竿裏葉薦五尺今云社一百九十八所の下に對攷ふるに幣帛の數など替る事なきを庸布一丈四尺弓一張靫一口鹿角一隻鍬一口酒四升鰒堅魚各五兩腊二升海藻滑海藻雜海藻各六兩鹽一升酒杯一口を省かれたり此は座數に拘はらずして其社に奉らるゝ事と聞えたり不奠二幣案上一祈年神四百三十三座社三百七十五所座別絁三尺木綿二兩麻五兩四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一口庸布一丈四尺裏葉薦三尺就中六十五座各加二鍫一口一靫一口二十座各鍫一口三座各靫一口並見二神名帳一 前五十八座々別絁三尺木綿二兩麻五兩四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一口裏葉薦三尺今云社三百七十五所の下に對攷ふるに庸布一丈四尺を省たり此は社に奉らるゝにこそ 右神祇官所祭幣帛一依前件具數申官今云官は大政官をいふ 三后皇太子御巫祭神各八座並奠二幣案上一但臨時加減仍不レ入二恒數一今云三后は皇大后宮大后宮皇后宮と申せり御巫祭神八座は神祇官西院坐御巫祭神八座を云ふ鎭御魂齋戸祭神の下に註ふを見るべし但し臨時加減仍不レ入二恒數一は三后宮の御在す時も御在ぬ時も有るが故に恒數には聡と入れざるとなり 大神宮度會宮各加二馬一疋一籠頭料庸布一段○伊勢大神宮式に凡二月新年幣帛者幣色目在二四時祭式一朝使到日大神宮司引二使者一先參二度會宮一次大神宮奉二献幣帛一並如二常儀一高葉祭官使自進奉二幣宮合下禰宜等奉上其二宮所攝諸社幣者座別絁三尺木綿麻各二兩二分大神宮司分充禰宜檢領就レ社奉レ班と有り 御歳社加二白馬白猪白鷄各一一下に註ふを見べし高御魂神大宮女神神祇官西院坐御巫祭神八座の中なり及甘樫飛石村本に石俣と記り大和國十市郡石寸(イハレ)山口神社なる事著明ければ改めて引つ 忍坂長谷吉野巨勢賀茂當麻大坂膽駒都祁養布等山口幷吉野宇陀葛木竹谿等水分十九社各加二馬一疋一今云高御魂神より竹谿までを計たる總數なり と有る此即宇豆乃幣帛なり○朝日乃豊逆登(サカエノボル)とは考云豊は稱(ホメ)云ふ辭逆登は榮登なりと有り但豊は動むにて大地の天行の左旋を迎へて右動する事に起れり此旋動の機關有て萬物發育する事を得る故に限りも無き美稱なり古始太元考豊雲野神の下に委しく云るを見る可し古事記に阿左比能惠美佐迦延伎と有るが如し 又日の出る時は

其日の佳時なる故に此時を用るなり」と見ゆ 古事記神武天皇段に阿佐米余玖と有なも思合べし ○稱辭竟奉久止宣は皇祖天神の詔命以て天社國社と稱辭竟奉給ふ皇神等の前に今年二月に御年初め給はむと爲て其御祈の爲に皇御孫命の珍貴(ウヅ)の充座を斑ち捧進られて稱辭竟奉給ふとなり 考云是を二度云て文を諸訖(ムスベ)り 偖高天原爾神留坐より此の稱辭竟奉久止までは天皇より其祈年祭に預給ふ神に申させ給ふ辭なり 此を一括(クル)みに爲て見る時は神主祝部に令給ふ詔詞の如くなりて何の別ちも無きが如し然れば上に集侍神主祝部等諸聞食登宣と此の宣とは神主祝部等に受賜はら令め給ふ宣命にて神に申させ給ふ祝詞ば稱辭竟奉久までなりと知べし但稱辭竟奉留とこそ神には申させ給けめ宣字へ續くる故に稱辭竟奉久登とは云るなり 宣と唱訖る毎に參集せる神主祝部等共に稱唯する事上十四丁に云るが如し 下此に倣ふべし

若て神主祝部等此時に忌部の頒つ幣帛を受賜りて其奉仕る社々に持去て上件の祝詞を申して奉るなり 西宮記に遠社幣納官幣庫近社幣祝來請遠社幣納官庫附ニ朝集使ニと有り此にて其の頒せ給ふ狀著明し 又江次第二月四日祈年祭條に神祇史二人持簡召諸社祝史申ニ頒幣訖ニと有る次に遠社幣納官庫と有るは此事なり 又藤氏公卿頒ニ春日幣ニ之後早退出云々と有れば然る可き由縁の社へは其氏人より納め申さるゝなりけり 忌部の幣帛を主る由は上に引る貞觀儀式また四時祭式に詳也 中臣祝詞を宣る事は令集解に中臣宣ニ祝詞ニ者時行事宣ニ參集之社々之祝部等ニ也と有が如し然るに考に以告神祝詞宣ニ聞百官ニと云るは誤なり」と云れたれど然らず儀式また式に大臣以下諸司主典以上も參集して此を檢見する由なり然れども大臣以下百官に宣詞ならねば稱唯せざるにこそ有れ神主祝部等と共に聞く事なれば傍看には非ず

此より下十條は此祈年祭の詞なるが殊異なる由緒に依て申給事の上に少異有れば別條に立られたる者なり 其は次々解行く說の差異を見て察むべし

御年皇神等能前爾白久(ミトシノスメカミタチノマヘニマヲサク)

御年皇神等は神名帳に大和國葛上郡葛木御歲神社 神名帳に大月次新嘗 と有て一柱なるを皇神等と有る上は必ず其相殿神の御在る事著し 記傳十二卷御年神の下に祝詞に御年皇神等乃前爾白久と有るは祈年祭に預り給ふ諸社を都て云ふ」と云れたれど諸社に坐神の事を及ぼして御年皇神等とは云べからざるなり此御社の神位は文德天皇實錄に仁壽二年四月丁酉朔庚申加ニ大和國御歲神正二位ニとも有り又清和天皇實錄に貞觀元年正月二十七日に從一位を授奉り給ひ同八年二月十二日己未神祇官奏言ス大和國三歲神由レ無ニ神主ニ而瀆レ之致ニ祟咎ニ實ニ由レ此仍テ更停爲と有るは神の御心を取損へるなるべけれども凡て甚も重き御社なり此社今持田村の東に在とも又森脇村に在とも云りまた高市郡にも大歲神社二座また御歲神社鍬靫と見えたり 故熟思ふに御父神と座す大年神また若年神も同御德の神に在せば御力を合せ給ひて鎭座する事疑無し是を以て御年皇神等とは申せるなり 神名帳に載られたる所は一座の如くなるも其祀る所は幾柱も並坐す例と聞えて大和國城上郡大神大物主神社は一座の如くなるに大物主神大己貴神少彦名神並御在る山大三輪三社注進次第記に見え尾張國愛智郡熱田神社の祭神天照大神素盞嗚尊日本武命宮酢媛命建稻種命併て五座なる由社記に見えたるなど其餘にも多かり凡て人も神も同事にて父子は更にも云ず夫婦兄弟親族の間は殊に親しき物にて共に同居爲まく欲かる常情なり然れば宮に由緒有て朝廷より祭祀せ給ふ所は一柱にも有れ御父母神また后神御子等も共に鎭り御在て其主たる神の寛ら

れ給ふ幣帛供物を頒ち受坐て又其御守護をも輔佐け御在べき理を思ふべし然る斷見無くして神典の秘蘊明むべきならず心を平にして思察(アキラム)べし」此を古書に稽るに古事記に須佐之男命娶二大山津見神之女名神大市比賣一生子大年神故其大年神娶二香用比賣一生子御年神と有る此也凡て此邊の文錯亂有て紛ふ事多かり古始太元考に註ふを見べし此大年神に宇迦之御魂神とも宇賀御魂大年神とも申す亦名有り御年神に向日神聖神と申す亦名有り神名式に山城國乙訓郡向日神社大歲神社並載れるが向日明神とて立せ給ふを其社記に神須佐男命子大歲神娶二活須日神之女神須治曜姫命一生子也と有を古事記に合考るに香用比賣は伊怒比賣の亦名なる事著く向日神は御年神の亦名なる事疑有まじき物也偖向日神は向飯神聖神は飯知神(ヒジリ)の意にて彌々御年神なる事明なる物をや 記傳九五十一丁に年は田寄也 多余を切めて登となる偖余世を余佐志とも余志とも云る例古に多し 然云故は先登志とは穀の事なり其は神の御靈以て田に成して天皇に寄奉給ふ故に云り 田より寄(ヨサ)すと云義にて穀を登志とは云なり 祈年祭祝詞に皇神等能依左志奉牟奥津御年乎云々八束穗能伊加志穗爾皇神等能依左志奉者云々と有を以テ知べし 天下に成とし成る穀は悉く天皇に神の依し奉給ふなるを云り奥津御歲は師說に稻を云稻は穀の中にも晩く成る故に奥と云なり同じ稻の中にても晩を晩稻(オクテ)と云にて知べし 偖穀を一度に取收るを一年とは云なり 然れば登志と云名は穀を本にて年月の登志は末なり○今云實に然り上二十九ノ丁に云るを合せ考べし其所にも云る如く年(トシ)に迅速(トシ)の義有りと雖も稻を云ふが本なるが年月日時の年は疾(ト)き事也月は繼(ツギ)也日は經(ヘ)也時は速(トキ)也此も亦心留置べし 此神は此穀の事に大なる功坐し故に此御名を負給へるなり」と見え又傳十二三十七丁に御年神此神も父神と同じく穀の事に大なる功坐しなるべし」と云れ又同卷五十三丁に若年神此も御祖父に大年神御伯父に御年神坐故に若と云ふ名義彼神等に同じ」と記されたる如く年の言の何も同じきに依て深く考ふるに御年神は若年神の爲に御伯父ならずして決く御父神に坐り其は大年神の御子に大香山戸臣神香山戸臣神羽山戸神と有る三神共に山ノ神ならむ事似著はしからず決めて田地穀物を主る神ならでは理に違ひて通ゆるに就て熟思へば何れも御年神の御功に依て負坐る御名也 記傳に大香山戸臣神は山里を開きて民の居べき處を成給へる功德有けるにや有む」香山戸臣神は大香山戸臣神と同功德有し神なるべし」羽山戸神の羽は速にて香山戸と同功德の神なるべし」と云れたるを合せて此を思ふに香(カ)山は小山羽山は麓山にて戸は處にて臣は大身なるが高山遠山は除て田地に近き小丘麓山に御在して田穀を守護給ふ山なるべし偖大忌祭詞の下に云り又第九詞の下なるも見合すべし○今年五月出羽國に物爲て此說を人々に聞かせける時に大瀧光憲云く實に然り彼國の習俗にて田神祭と云ふ事有り偖田ノ神は御年神と聞ゆるが二月十五日に山より來給ひて田穀を守護給ひ十月十五日事竟て山に還給ふ由にて其送迎に就て其祭を物爲るは斯在る事にやと云りき其は其國のみ然るにかと思しを越後國に來て桂譽重が許にて此講說を物爲けるに其父譽正主また此事を云出られたり然れど其限日(ヒドリ)は少違へり此に因て思ふに日の遲速は其國其處に依て替りも爲つべけれども山を常宮とし給ひて里面に出給ふ事の傳は同じき也此に就て又思出たる事有予が生國の淡路國津名郡育波鄉仁井村と云ふ邊は西濱へ一里東海に一里計りなる山中なるが人至て素朴にて誠に開けぬ村里なるが民皆古風を改めず實に淡路國内の僻境なり予幼年の頃見覺たる樣は正月九日より十日に至るまで庭中に櫁葉を束ね其を櫁の辟木を以て纏ひ高サ五尺計り廻り五尺計なるを飾り立て山年樣と唱へ藥餅及び神酒供物などを簀(ソナ)へ祭る事なるが山年神と云稱の審(イブ)かしかりつるを今此に考へて見れば更に所謂無き事に非ず但し此は嘉永元年更秋のことなりき 然れば大年神其御子御年神其御子若年神三柱ともに同功同德の神

に御在して共に鎮坐て相輔佐け御在る事疑無き物なり此を以て思ふに各國に在る大歳神社には御年神若年神比(ナラ)び御在して顯幽に立ち守護給ひ御年神社には大年神若年神其に比(ナラビ)御在し式に若年神社は見えざれども式外にまれ其社御在むには三柱並ひ御在べき事勿論なり偖稲穀の成立つ本縁より神幽の御所業をいはむに高皇產靈神神皇產靈神の產靈に資て天地世界より始て宇宙の萬有悉く此二柱神等の御靈に資(ヨラ)ざる事無き由先師の說の如し伊邪那岐伊邪那美二柱神の生成給ふ御靈を得物を生すは伊邪那岐命の御所業成るは伊邪那美命の地心(ヨモツクニ)に在して保給ふに依る事也此事古始大元考別處の段に委しき說有火產靈神埴山姬神の夫婦共ひ成し給ふ遘合に依り神代紀に火神娶二埴山姬一生二稚產靈一とも有る此なり稚產靈神の生發神出令め給ふを以て土と種子と相生じ和久とは凡て物の生發する事にて虫の蠶(ワク)水の涌(ワク)など云ふ此なり土中に種子を蒔と雖も土に生發の機無き時は其物を伸出(ナス)事能はず此方隅不產の物有る所以ならずや豐受大神の其形象を大成爲ふ故に保食神とも稱申て稲穀は更にも云ず諸の木草に至るまで悉く此神の全能也平田翁の此神を衣食住の神也と云れたるは千古に動くまじき確說也偖保食神とは宇氣を保ち坐す由なるが宇は得氣は字の如し氣と云ふは衣食住の資の古名也衣を着物と云ひ所着(ケル)と云ひ食を饌(ケ)と云ひ住(イヘ)を宅(ヤケ)と云ふなど宇氣の氣を轉用ふる也偖木を氣と云ひ稲を立毛(イチケ)と云ふよりして草を久佐と云ふも毛毯(クサ)の義也偖氣とは來(ケ)と同じく彼より此に來りて其用を爲す由也木草に氣の名稱有るも土中より來り生る意也如此くして火神と土神との御間より生發て豐受大神の全能に成れるを風神は此を靡かし水神は此を濕ほし金神は此を固成す御功を寄て其物成れるを世界に有とし在ゆる物悉く風火金水土神ノ產靈に資て生成化育する造化の神理は第三段にいへり其

成れる稲穀に豐受大神と御年神と共に守護り給ふと云ては一物を兩神して功德しみ給ふが如く聞えて髣髴しきを尙熟く思慮れば豐受大神は稲穀の體なり是以て生立をも成る後に係けて稱申せる例なる故に御饌津神とも申せるを思ふべし大年神御年神若年神は稲穀の用にて先農の神たり故此詞に皇神等能依佐志奉牟奧津御年乎手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取作牟奧津御年乎八束穗能伊加志穗爾皇神等能依左志奉者と申させ給ふを思ふべし能く味ひて其體用有る由を明らむべし又年は田寄なるの義を思ふべし因に云豐受大神の稲穀の本體と坐て殊に皇國に其御恩賴を蒙令め給ふを以て瑞穗國の名出來り大年神の稲穀を作る事を一年に分配りて其事を成し給ふ故を以て年に號(ナツカ)りたる物にこそ偖豐受大神の亦御名を豐宇迦能賣神とも申して稲穀の神と在すに對へて其稲穀を作る此大年神の亦御名を宇迦之御魂神とも宇賀之御魂大年神とも申して稲穀に御靈を賴ひ給ふ御名なり記傳九(五十二丁)に豐宇氣毘賣神は食の元始の靈此は其食の事に功坐し神なり御魂とは恩賴神靈又靈(ミタマノフユ)などゝ有り又萬葉五(二十六丁)に阿我農斯能美多摩多摩比弖など有る意にて其功德を稱へたる名なり」と云れたるは實に確說也尙此事の委しき義は第六詞の下に云り但古事記の錯亂を訂正爲られざりし故に大年神宇迦之御魂神同神なる事を思漏されたり又平田翁の古史徵に此古事記の傳を紛たる傳なれば取らずと云れたるは然る事なれども豐宇氣毘賣神と混同せられたるは非事なり天照御魂神と申すが天照大御神に非ぬを以て本體と作用との違有

る事を思ひ辨ふべしなほ廣瀬祭詞大殿祭詞の下に云を竢つべし又古事記に羽山戸神娶二大氣都比賣神一生子若年神と有るが少緣ならねを思ふべし山城國稻荷神社は宇迦之御魂神なるに羽倉神と申せり羽倉は麓谷なれば羽山戸神同神と云ふ事大に山有り（羽山戸神は上に註（イヘ）る如く大年神の御子御年神に御在し大氣都比賣神は豊宇氣毘賣神の分身（ワケミタマ）なりと思ゆ記傳の注信ひ難し又古史徴にも此事を疑ひ省きて單に羽山戸神之子云々と記されたるなど殊に信難し）然れば廣瀬大忌祭詞に倭國能六御縣乃山口爾坐皇神等乃前爾毛云々と有るも此所緣に依る事と通えたり四時祭式大忌祭條にも「御縣六座別加二絁三尺一」とは記されたり尚其詞の下に委しく云ふを見る可し

皇神等能依佐志奉牟奥津御年乎（スメカミタチノヨサシマツラムオキツミトシヲ）

皇神等能依佐志奉牟は上（第一段）に今年二月爾御年初將給登爲而と有るに等しく天下公民の農業（タツクリ）の所爲（ワザ）はしも天皇に神の附與（コトヨサ）し坐るに依て天皇の耕し初給ふ由也此を以て思ふに天下の百姓を稱へて大御寶と宣へるも寶は田族（タカラ）と云ふ事にて天皇の御手に代らしめ給ひて農作を物爲させ給ふが故に大（イミ）じき大御寶ぞと云ふ意を以て號させ給ふ物也第十段水分神詞にも此と同じく皇神等能寄志奉牟奥津御年乎八束穗能伊加志穗爾寄志奉者と有り彼は水分神の水理を主宰して御年を養ひ育給ふ由なるに依て粗く其御守の大較を云るに此は然らず此御年神は稻穀を作る事を皇御孫命に依奉りて御力を副給ふ故に次詞に手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐云々と續けたり心を着て考ふべし（上にも引て云るが如く天照大御神の齋庭の穗を吾兒に當御ると有て天下の人民に賜ふさは詔給はざるなり然れども神代紀に天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可二食而活一之也と宣へるを思へば本より天下人民の食て可活き爲の資なれど皇御孫命に附與し給ふ由見えて天下人民に賜ふ事の樣ならぬに天下人民は朝廷より給はりて山林田野を保つ物なるが故に上より此を受賜はらしめ給ふなり君上の御惠を嬉み國に忠を盡すべき元因此に在り今しこそ直に受賜はるさは思えね各々其先祖たる人の功に依て其大小に准し山林田野の疆を保つ事なれば先祖の功勞を思ひ孝を盡すべき元因此に在り凡て世に有る人此事を麁略に思べきに非ず）考に御年皇神等の掌坐す其御年をぞ皇御孫命に依奉て成幸給ふを云ふ」と有るは謂れたる說なり依（ヨサシ）は我が任を人に附與て能く爲令るを云ふなり其依は今云ふ事の如く我が爲す可き事を人をして代ら令る業なるが故に授とは別なり授は我が任を總て人に附るにて人に附託る上は我に預らぬを依は然らず何處迄も主客の相違こそ有れ依する方も依ざるゝ方も相離れぬなり然れば農作の事は御年神の業ながら公民をして代ら令め作も其意は神の爲給ふ由なり（上に記傳を引て註る事共に考互して悟るべし依さは我が爲る事を人に寄て成さ令るを云れば此皇神の成し給ひし農事を天皇に寄奉りて天下の百姓をして作ら令め給ふ義なり又依は我が任を人に寄て其事を能く爲令るなりとは與佐須の與に善の義を包（カ）ねたるを以て云ふなり尚第十詞の寄志奉牟の下に云ふべし）是を以て

皇御孫命の天下知食す事を天津日繼とは申奉れり其は日繼は日給にて皇神等の給依し給ふ稻穀を天皇の大御身自耕作らせ給ふ意を以て天下の百姓に農業爲しめ給ひ其貢稅を受納給ひて各々に賜はるが天下を知食す天皇の高御座の御職にて天津日繼所知めす御事なり　尙段大殿祭詞の下に記傳を引て云ふを待べし倚上古には民地を賜ふの御制度有り中古には位田職田等の御制度有りしを今世の分限は誰は何万石を領する彼は何千石を知ると云ふも皆つゞまる意は稻穀の義に歸めり天皇の天下を分ち給りて知る義にて自然行はるゝ大道は能く如此くも有けりさ甚奇し　○奥津御年乎　奥津は萬葉十五丁十六に於伎都同十八丁に於枳都と有に依て訓へし考云五穀の中に稻は最末に熟故に奥と云へり　今云奥津御年は大年と云ふに近し大小の大の意に云る例は瀛津鏡瀉津鏡など云る例なり又遠近の意に云る例に萬葉六に海などに沖と云ひ邊と云ふ此なり又遲速の意に云る例に奥眞經而（オキツヘテ）十一に奥間經而など有る此なり右三義有る中に此は遲速の意なるを以奥と云り漢籍老子にも大器晩成と有る如く遲きは徐々にして事調ふ故に譬へば同じ稻にても晩く成大の義を兼たること勿論なり　を晩稻と云ふも同じ　今云古訓に晩稻苅（オシキカル）と云ふ語有り食稻（ヲシネ）の義に非ず晩稻（オクテ）と云に近かり古今六帖に山田「苅て干す山田の稻を計へつゝ多くのとしをつみてけるかな」

手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取作牟奥津御年乎

手肱爾水沫畫垂は田に苗を殖るに水沫を畫垂すを云也　苗を殖る狀を見るに一度水に漬り殖ては手を上け其所持る苗を分ち配りて殖る狀眞に手の肱に水の沫を畫垂るなり　○向股爾泥畫寄氐は苗を殖たる後に草を採り捨る狀なり　苗を殖て後に草を採捨されば其苗痿（カジ）けて生立宜しからず大體六月の土用と云ふまでに三四度も有へし眞に向股に泥畫寄るなり畫は手して搔寄るなり　鈴屋大人說　大祓詞後釋　に此に此二事を擧たるを多くの中にて僅摘出て云ふ古文の例にて田を佃る始終の種々の業共を皆此に含たる也」と云れたる如く云知らず甚も美好き古文也かし　熟く味ひて其妙所を悟り明らむべし然るを考に民の御年作るとて田の泥水に漬居りて勞く貌を斯く云成したる物なりと云れたるは委しきに似て麁說なり　○取作牟奥津御年乎の取は手にし採るに非ず身以て其事を執るなり　古今の古語に取撫また取持などたゝ虚字に用ひたる例甚多し　上に皇神等能依志左奉牟奥津御年乎と有るは天下の稻穀は天皇の御爲に皇神等の事依し奉給ふ義にて其大綱を云て此句を起し此に取作牟奥津御年乎と有るは天皇に事依し奉給ふ天下の稻穀を百姓の取作る義にて其小目を云て上句を受たり　此また微言にして深理を盡す物にて其文義巧妙（タクミ）にして其道理灼然き物になむ有る其大綱小目に能く心を着て察（シ）るべし　斯て又此末に皇神等能依志左奉者と元に復りて結べり　鈴屋大人の玉矛百首に「天皇に神の附與（ヨサ）せる御年なし飽まで食て有るか樂しさ」と詠れたるは能く此意を盡されたり

八束穗能伊加志穗爾皇神等乃依志左奉者

八束穗は穎の長きを云ふ　太き謂には非ず八握劍十握劍の例に思准へて知るべき物で束とは四指を以て掬むほどの長さを云ふなり右のごとく片手して掬む其を一束として物の長さを量るいにしへの常なり　神代紀に其秋垂穎八握莫々然甚快也と有る若く穎の長きは能く莫々然物なれは八束穗と云可きなり　また此を垂穎（タリホ）と云ふ物長くして實る時に必其末大に撓み傾く物なり　○伊加志穗は穎の茂く嚴めしく重き

を云ふ此は右の八束穗の莫々然たる狀を云也古書共に茂槍(イカシホコ)茂茉とも嚴矛(イカシホコ)重日(イカシヒ)など義を得て記されたるを思ふべし偖稻穗の瑞々しく長く茂り熟る事を祈白給ふ此祈年の御祭なる故に如此く委曲に聞え給ふなるが物の能く成と不成とは神の御心に在て人力の能く及ぶ所に非れば人は力を其所業に盡し究めて其信を致して其可(ナル)と不可とは神の御守護の有と不有とを知て懇到に勞き功績しむ時は幽より神の贊給ひて大に此に福祥を賜る事なるが故に皇神等能依志左奉者とは謂(イヘ)り然るを世に痴者二つ有り其一は神を祈(マツ)らざる人なり其の一は事を行はざる人なり此二つ共に其徒に此を云しむる時は一理屈者る様なれども拙劣にして事理に疎き狂人共也一に神を祈(マツ)らざる人とは今の儒者共なり孔子の書を讀僻びて鬼神を無に歸し此を祭敬する事を知ずして天地世界を固有さし治亂興發を時攻の得失に依れりとし禍福殃祥をば空理を以て強解し聖哲を尊み神皇を卑しめ外蕃を尚び皇華を賤す曲者なるが小智を奮ひて神理を知ざる豈此を賢なりと云むや一に事を行はざる人とは今俗に云ふ神道者さ云ふ物にて朝夕僧法師共の佛に向ひて看經する如く人の人たる行ふを物せず一向神に媚て祈さへ爲れば其徳を脩めずして神の幸福を賜ふ物と僻心得する惡人どもなり此二つの者は其行ふ處を以て見る時は黒白氷炭の乖ひ有こ雖も何れも天下に容(イレ)ざる痴者共なり

初穗(ハツホ)乎千穎(チバチ)八百穎(カヒヤ)爾奉置氐瓱閇高知瓱腹滿雙氐汁(ホカヒニタテマツリオキテミカノヘノタカシリミカノハラミチナベテシル)爾母穎爾母稱辭竟奉牟(ニモカヒニモタヽヘコトヲヘマツラム)

此より下二つの稱辭竟奉牟は龍田風神祭詞に天下能公民能作作物乎惡風荒水爾不相賜皇神乃成幸閇賜者初穗者云々氐秋祭爾奉牟と有る如く神等の御守護に資て成熟る新穀に種々の幣帛を共(ソヘ)て奉むと申させ給ふなり下に御年皇神能前爾白馬白猪白鷄種々色物乎備奉氐と有るも當時奉らせ給ふ幣帛なり偖如此く人の佃る稻穀ながら神の御恩賴に依らでは成立まじきを其物は人の有にて神の有ならず此を以て其初穗は奉らむと豫て申給ふなり顯幽の差別如此く嚴重にして神は人の奠る所を以て神界に其物を藏め給ふ人より奠る所は僅なりと雖も其を種子として幾許にか蓄息て其用に充給ふに不足なく又有餘有る事無し然れども人の奠る所は形質にこそ有れ神の受納給ふ所は其靈容と精氣となり此故に絹綿布帛及び酒食魚菜を奠ると雖も其物は依然として其所に在り然らば受納坐さじかと思ふに神の乞給ふ事有り乞給ふ所を以て此を想へば其靈容と精氣とを受納給ひて其質實(モノシロ)は其儘にして人に給ふ事と思測り奉らるゝなり世人の能く知れる如く神に奉る酒(ミキ)は酒氣大に少く爲て其氣味少くなり食は美味無く淡しく成なり此を以て神の受納給ふ所は人の饗ふ所に異なるを思ふべし若火の穢なと有るか其物に淨からぬ所なと有る時は其風味本の儘にして變り無し此等は神の受納給はぬにぞ有ける豈愼まざるべけむや此は能く人の知る所なれど事の因に驚かし置也或神傳に神に奉る供物に在れ何に在れ其受納給ふ證を見もさならば其物の色を見其味を嘗其光澤を見べし其色變り其光澤も滯く成れるものなり　初穗は考に其秋の新稻を先神に奉るを初穗と云ふ一と有り偖此初穗をば朝廷より奉らせ給ふか其社の圭田(ミトシロ)より奉るかと思ふに此は決く新嘗祭に奠らせ給ふ幣帛を差て申給ふなり四時祭式新嘗祭條に

貢幣案上神三百四座並大社一百九十八所前一百六座と有て幣物の員數また其儀式など下に引るが如し委しくは第十段大嘗祭の下とに云ふを照應して辨ふべし三代實錄十八に所ニ錄作一之初穗二十文と有れば何れの物にても始て奉るを初穗と云事也　其詞に集侍神主祝部等諸聞食登ニ宣高天原爾神留坐皇睦神漏伎神漏美命以○此まで第一段新年祭詞に同じ但其詞には神漏伎命と有るを此には無し　天社國社登敷坐留皇神等能前爾白久○新年祭詞には稱辭竟奉と有るを此には敷坐留と換たり能字脱せるを其詞に例(ヨリ)て補ひつ　今年十一月中卯日爾天都御食乃長御食能遠御食登皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾○祈年祭詞に今年二月爾御年初將賜登爲而の結ひと爲れり　皇神等相宇豆乃比奉氏堅石爾常石爾齋比奉利茂御世爾幸閇奉牟止依志○考に幸閇奉牟爾依氏氏と改られたるさは甚しき僻說なり其下に云べし　千秋五百秋爾平久安久聞食氏豐明爾明坐牟皇御孫命能宇豆乃幣帛乎明妙照妙和妙荒妙爾備奉氏朝日豐榮登爾稱辭竟奉云々と有が此新年祭の賽(カヘリ)謝(マヲシ)なるに併せて伺思ふに踐祚大嘗會式拔穗條に悠紀主基の國の齋郡に齋院を作りて祭神八座と有る其最首に御歲神を擧られたる事の少緣ならず聞ゆるを以て彌々新嘗祭なる事決き物なり若て六月月次十二月月次祭共に此新年祭詞を大同小異にて擧れたるに此御年神詞なさはこの神は稻穀を作る事に依て新年新嘗にこそ祭られ給へれ月次には由無を以てなり　○千穎八百穎爾奉置氏は廣瀨大忌祭詞に千稻八千稻爾引居氏如横山打積置氏秋祭爾奉牟と有る同じ文法にて

穎とは稻穗を云事なれども此は唯稻を云り第十詞に加牟加比と云るは神穎にて此の稻穗を云るなるか穎に神の語を冠らせたるなり　考に引れたる江次第に本穎苅本謂ニ之稻一切穗謂ニ之穎一と有る此なり踐祚大嘗會式に凡拔穗者卜部率ニ國郡司以下及雜色人等一臨ㇾ田拔之と有る如く神に獻るは拔穗にぞ爲りけむ但切穗謂ニ之穎一と有れば穗先のみを鎌にて切採けむ後人熟く定むべき物なり考に神に奉るには穗なのみ切藁をば去て其穗を束ねて竹に掛めり下に掛稅千稅餘と有る此なり」と云れたれど此は奉置氏と有れば掛稅ならず同物ながら此は此彼は彼にて其獻り狀の異なる物なり混べからず

○瓱閇高知瓱腹滿雙氏の瓱は酒を釀む甕なり四時祭式新嘗祭の幣物の外に供新嘗料と有る中の陶(スエノサラカ)瓱五口平居瓱六口なとと有る此と聞えたり此は其祭の支度の雜物ならむさおもひしを其下に云々祭料並雜ニ神今食一と有るを又神今食條に考ふれば供神今食料陶瓱各五口云々と有て終に右供御雜物祭訖卽給ニ中臣忌部宮主等一さ有れば供御料なる事云も更なり　瓱閇は春日祭詞に甕上と書る其正字にて高知は高く著(シル)く見るゝ由なり考に知は敷なり敷とは繁きを云ふと云れたるは似たる事ながら然る由に非ず高天原爾千木高知さ云ふも千木の高く著き程に宮殿を嚴めしく作る事を云ふなり第四段座摩神詞の下に云り　瓱腹は瓱の太きなり滿雙は其瓱に盛充たる酒を數多く取並べて奉る由なり幣帛を充座と云ふ充また古事記高津宮段に積ニ盈御船一など有る皆此の滿の例なり諸祝詞に下津岩根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氏さ有る如く高きに對て太きを思はせたる物なり高きに對て太き由ならぬには腹と云ふ事不用(イラザル)なり　○汁爾穎爾稱辭竟奉は鈴屋大人說大祓詞後

釋に汁とは酒を云て上の甁閇高知甁腹滿雙氏と有る此なり考頭書云汁を酒なりと爲るは漢籍にも酒を米汁と云し事有り和名抄に醨之流酒薄也と有るは酒の一種にて此意に非ず穎は上の千穎八百穎爾奉置氏と有る此なり然れは汁にも穎にもとは上の二種を指て云るなり考頭書云米を飯に爲ても奉る事式の鎭魂祭條に飯司の事有るにても知らる然れども他には飯を擧云はず其料の穎を云て飯を含たるなり〇今云鎭魂祭條に飯司の名目なし供御飯笥一合調食料稻二束さ有を見併められたるなり然れさ其料の穎を云て飯を含たるなりさは謂れたる言なり官より奉らせ給ふ所は穎なるを其神主祝部等此を受賜はり持去て飯に炊き奉る事云までも更なり稱辭竟奉牟は此祈年の時に新嘗に奉給はむ料物を豫て申させ給ふなり稱辭竟奉は心の及ぶ限りを盡す義なり此事第一詞の稱辭竟奉第三詞なる辭竟奉の下に云り考云此稱辭竟奉ちふ上へ右の初穗乎婆千穎八百穎爾奉置氏と云ふ言を引係て意得へし何でさ云はゞ上は大綱(オホヨソ)を云ひ次の甁閇高知甁腹滿雙氏は小目(コソキ)の言れば此穎爾毛の下斷(キ)れて落着(ヲサマ)らぬか如し上の云々奉置氏を迎取て見る時は道理聞ゆるなり此も一の文体なり」と云れたれど猶穩當ならず次なる滿雙氏よりも引係て意尚べきなり稱辭竟奉は物を盡し究むる辭なれ本の儘に見るや却て勝りたらむ

大野原爾生物者甘菜辛菜青海原爾住物者鰭能廣物鰭能狹物奧津藻菜邊津藻菜爾至氏御服者明妙照妙和妙荒妙爾稱辭竟奉牟

大野原云々より邊津藻菜爾至氏は四時祭式新嘗祭條に内膳司供二雜味物一と有る此なり同式に新嘗祭奠二幣案上一神三百四座並大社一百九十八所座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩四座置一束八座置一束楯一枚槍鉾一竿社別庸布一丈四尺裹葉薦五尺前一百六座 座別 幣物准二社法一但除庸布右中卯日於二此官齋院一官人行事 諸司不供奉 但頒幣及造供神物料度中臣祝詞料准月次祭と有り尚其詞の下に云ふを待べし内膳式に新嘗祭供御料鰒東鰒堅魚鮨鰒煮鹽年魚醬酢甘鹽鯛海松海藻干棗子干栗子搗栗生栗子椎子菱子橘子蕪醬油など員數を記せる是を指なり然れば四時祭式なるは諸社へ頒つ料此は公廷にて祭らるゝ料にて別事ならぬと知るべし大野原爾生物者甘菜辛菜は考に甘は菁菜薺の類辛は蘿蔔野韮の類など種々なり」と有る如く惣ての菜蔬を含て云ふ稱なり本草和名に女菜和名惠美久佐一名阿米奈一名末惠美麻黃和名加都稱久佐一名阿米奈白薇和名美奈之古久佐一名久呂久佐一名阿米奈など物名に成れるも多かり又青葙和名宇未久佐とも有れば安麻と宇麻と同じく甘草和名阿麻岐千歲黃糸汁和名阿末都良と見え和名抄に茈胡を阿米安加奈と有る其稱に冠らせて阿米菜と云も常なり又和名抄に辛薰好通二口鼻之氣一和名賀良之と有り又辛芥和名多加奈と有も字に依に辛菜の屬なり又草麻和名加良可之波一云加良衣と有は物名の上に添たるにて上の月草などの例に同じ第八段御歲神の下に委く云べし菜蔬は野を本として生るを以てかく云り〇青海原爾住物者鰭能廣物鰭能狹物は大野原と陸地を云る對に滄海を云るなり然れど唯文の飾に非ずして

實物を云るなり鰭は記傳十四六十七丁に和名抄に鰭魚背上鬣也和名波太俗云比禮と有れども比禮は背上鬣のみならず左右に有をも云波太は左右に有るをのみ云て背上なるをば云べからず然るを波太にも鰭字を用るは背上なるを比禮と云て其比禮は左右の波太にも亘る名なるがゆゑに其に引れて波太にも此字を用るなるべし又傳十六十五丁に鰭廣物鰭狹物は魚の大きなる小きを云る古の雅言也」と有り今云如此云ふ故は如何こ云ふに鰭の廣きは自然に其体大きく鰭の狹きは自然に其身小(チヒサキ)なり此を以て古此名を用たる物なり○奥津藻菜邊津藻菜は藻をば毛波と云り毛と云ふは略なり」と考に云はれたるが如し此は諸祭式に海藻滑海藻雜海藻と云る此なり或は疑海藻などをも用たり奥邊は考に海にては彼方を於幾と云ふ即於久と云に同じ陸の方を方と云ふ即方字の意なり」と云れたるは然る言ながら奥と邊に大小の義有るべし鰭能廣物鰭能狹物に對たればなり記傳六に邊は端方也と云れたるは其意の言なれど波志を切めて比となり比倍を功めて閇となれるには非ず尙上なる奥津御年の註見るべし實に奥邊は遠近の義なるが理を以て思ふに洋中(オキナカ)の廣き所に生る物は自然にして太く大きかるべく波際(ヘツカタ)に生る物は隨ひて細く小かるべき事洋中の魚の大きく波際の魚の小きを以て思察むべき也○御服者云々は四時祭式新嘗祭幣物條に座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩云々と有る此なり此詞には御服者云々稱辭竟奉乎と云ひて天社國社神等と諸共に雜幣帛を奉給つゝも其賽謝の事を豫て宜ひ但新年祭の幣帛の數は此御年神も鎭幣案上神三百四座の中なれば他社神と同等なるを四時祭式に御歳社加二白馬白猪白鶏各一と見えたれば御年神に申させ給ふ詞も第一段天社國社に申させ給ふ詞は本の祝詞にて此詞は別に白馬白猪白鶏を奉給ふに就て事別て申させ給ふなり○或問云此詞に初穂乎波云々稱辭竟奉乎の詞に新嘗祭にて行はせ給ふ由他に所見無ければ悉く其に依べく思ゆるを其に就ても新嘗祭の幣物にも取分ちて此神の事を記さざるは此に御年皇神能前爾白久と殊に懇到なる狀に申させ給ふに疵違せり如何答云一度り尤なる論也然れども其新年祭の幣帛も上に云如く他社と同並なり故其本の祝詞は天社國社に申させ給ふも同じきを唯殊なる由緒に依て其奉らせ給ふ幣物の外に白馬白猪白鶏を捧進らるゝに就て此詞は有るなり然るに六月十二月の月次祭こ此新嘗祭とには此三物を奉らせ給はざるに依て式にも取分ちて記されざるも上に其月次祭にも御年神詞とては無きなり此を以て此も天社國社に申す詞の御年神にも抱はる事を知るべし然れども御年神は稻穀に就て殊に此事無き神にも在すが故に大甞會式にも此神を齋部にて最初に祭る事見えたり然らば取分ちて記させ給はれ新嘗にも此神の主々しく御在べき事本よりなるが故に異更に此詞に其事を宣なり新嘗祭詞に皇御孫命能宇豆乃幣帛乎明妙照妙和妙荒妙爾備奉氐稱辭竟奉と有を照應(テラシアハ)せて知るべき物ぞ尙立返りて上に註(シル)せる事共を考合すべし明妙照妙は考に五色の絹を奉れば色を以て明る照ると云ひ今云新年祭また新嘗祭の幣物に五色薄絁各五尺など云る類此なり倭思ふに明衣は色に染たる絁る共の映(ツヤ)はしきを云ひ照妙は色に何にまれ光澤有て美きを云ふなり荒妙和妙は織の麁きと細さを以て云り」とも云れたり。今思ふに倭文また木綿また麻などを荒妙と云ひ色に染ず光澤なき常の絹を和妙と云ふなるべし稱辭竟奉乎は其新嘗に祭らせ給ふべき幣物の數を盡し究めて云ふ辭なり考云此所文の小段なり

御年皇神能前爾白馬白猪白鶏種々色物乎備奉氐(ミトシスメカミノマヘニシロキウマシロキヰシロキカケクサ〴〵ノイロ〳〵ノモノヲソナヘマツリテ)皇御孫命能宇豆能幣帛乎稱辭竟奉久登宣(スメミマノミコトノウヅノミテグラヲタヽヘコトヲヘマツラクトノル)祝部等稱唯

上には皇神等と申して其社に鎭座す都てを云ひ此は

御年神一柱を指て云り然るは祈年幣物の餘に白馬白猪白鷄などを奉らせ給ふ事其神一神に係りて佗神の預給はぬ所なればなり（其山下に古語拾遺を引て委しく辨へつ）偖此神社の大和國葛上郡に鎭坐す本緣は古書の稽ふる所無しと雖も山城國乙訓郡向日神社記（此は六人部是香が本を小泉に康敬が傳へて見せたるなり）に向日神國作堅之後可鎭座國覔之時登二此峰一謂八尋矛長尾岬哉朝日直刺地夕日之日照地天離向津日山吾覔地之地也永鎭座於是國神名加豆野戸邊進御田即於此山之下津岩根宮柱太敷於高天原比木高知殿奉仕而朝夕奉仕焉と有る向日神は上（三十丁）に云る如く決く御年神なるが其鎭座の年紀は詳ならざれども神代の事と通えたり又神代ならむには大國主神の國避より前に在べきなり然らば此を此神の本宮とも云べきに朝廷より祭らせ給ふ社は其葛上郡なるを以て熟考ふるに山城國なるは向飯神と申す意の御名に御在せば此神の分身なり凡て神に亦名有るは各々殊異なる御功德に依て稱奉けむかと思ふに然らず其御靈を分て一柱の事業を爲給へるなれば本體は本體にして分身は分身と各別なり（然れば山城國向日神社は御年神の分身にて若くは荒魂和魂の內何れかならむも知るべからず又聖神も飯知神の意なるが和泉國和泉郡に聖神社式に見えたれば此も又御年神社の別社と云むも强說ならず）然れば神代に此神の生出坐しより常在に鎭り在す本宮は大和國なる也（世の古學者等の式內の古社を見る事麁漏にて後世人の白其信ずる所を以て更に由緣なき神をも思ひ附に勸請せると同格に心得るからに甚痴々しき僻說多かり然る愚眼を以て神典を說むと爲るは甚頁氣無き心ち爲られて思束なき物なり神代の傳說有ても其實を何處迄も探索むと爲る深切なる心無きげにや神代の傳說と事實の證徵と各々別々に成て彼は彼此は此さ取留たる說無き故に煩しきまで類語を證し詞辭の註（サダ）など恰も小兒の爲業に異ならず哀むべし）古語拾遺なる事蹟も此所にての事と思はる大國主神の玉牆內國と宣ひて此國に住坐りと思しければなり（大國主神の幸魂奇魂神を倭の青垣東山上に齋給ひ又須世理毘賣命の嫉妬を畏み坐て出雲國より倭に上坐むさ宣ひ天高市に八百萬神を集て高天原に上給ひしなど其餘にも有り萬葉に大汝少彦名の作らして妹妖の山を見らくしよしも」さ有をも思互して考べし）同書に昔在神代大地主神營レ田之日以二牛完一食二田人一于時御歲神之子至二於其田一唾レ饗而還以レ狀告レ父御歲神發怒以レ蝗放二其田一苗葉忽枯損似二篠竹一於是大地主神令片巫（志止止鳥）肱巫（今俗竈輪及米占也）占二求其由一御歲神爲崇宜下獻二白猪白馬白鷄一以解中其怒上依レ敎奉レ謝御歲神答曰實吾意也宜下以二麻柄一作レ桛桛レ之乃以二其葉一掃レ之以二天神草一押レ之以二烏扇一扇上之若如此不二出去一者宜下以二牛完一置二溝口一作二男莖形一以加レ之（是所三以厭二其怒一也）以二薏子蜀椒呉桃葉及鹽一班二置其畔一（古語以レ薏曰二都須一）仍隨二其敎一苗葉復茂年穀豊稔是今神祇官以二白猪白馬白鷄一祭二御歲神一之緣也と有る大地主神は大國主神なり（古史徵に淤保登許怒志と詠れたるは然らず）御歲

神之子は決めて若年神に御在すべし何を以て云ふぞならば唾ㇾ饗と有るは父神と同功同德の神に在すが故に代りて其田の守護として行坐しが其穢を厭(ニクミ)給ひて御父に白させ給ふなり（他の神に坐さば御父の遺し給ふまじき謂なるを思ふべし）今神祇官云々祭ニ御歳神ニ之縁也と有を先には其事に就て其神を祭らるゝにかと思ひしを倘深く考ふるに其跡に因て其社を奠給ふ物也然らば彼葛上郡葛木御歳神社（名神大月次新嘗）と有る御社ぞ神代より立せ給ふ事著明かりける其は大地主神は當時天下を主領き在て顯世の君主と在し御年神は幽冥と在して其御靈を此社に鎭め御在しけむ故に直に御言語爲させ給ふ事は爲給ひ難かりし故に片巫肱巫を以て其御心を問奉しめ給ひけむ（實には大國主神も大年神の御爲にも御子上と坐せば御歳神の御伯父なり然れども顯幽境を殊にして神と人との差の如くなれば如此く有るなり此を以て此社の古き事大國主神の未幽冥に入給はざりし其間(ホト)より立せ給へりとは云なり）倘此社は清和天皇實錄に貞觀元年正月二十七日奉ニ授大和國正二位葛木御歳神從一位ニと有て御年神に胡亂無きを舊事紀に大巳貴神の御女なる高照光姬大神命坐ニ倭國葛上郡御歳神社ニと忌記せる惑はし說の有に就てト部兼倶が神名帳頭註など其を主張(オシハリ)て飛驒國大野郡水無神社をも古く御歳神と傳ふる社說有るに就て其高照光姬なりと爲れども信ひ難し（其は何に爲てか胡亂けむと思ふに高照光姬命の下照比賣命は同神なるを別神と心得て二所に記し分て先なる下照姬の下に坐倭國葛上郡雲櫛社と記したる次に高照光姬命の名を擧たる物の何處とか其社を云はでは飽ぬ心ちの爲めれば取得めたる事をば斯く記けむ）○白馬白猪白鷄は上に引る拾遺に宜ト獻ニ白猪白馬白鷄ニ以解中其怒上と有る如く此神の甚く好ませ給ふ物なり白馬は神の乘給ふ料白鷄は時を告る料と通えたれど白猪は何の爲なる事を知らず又白きを何の爲に愛給ふ事を知らず能く明らめま欲き事なり（然るを考に白を用らるゝは止雨料に白馬を奉らるゝより思ふに日白くして荒き風雨勿らむ爲の備に神の乞はし給へるにて此方より日白くして荒き風雨勿らむと云れたれど俗意なり白きを用てよさは非らず能く拾遺の文意を悟るべし倘臨時祭止雨料に馬用ニ白毛ニと有るは後世の事故に考の說の如くにも有べきを凡て神は白馬を好給ふにや出雲國造神賀詞に白御馬能前足爪後足爪踏立事波云々と見えたり此は神に奉るに非れども神事を擬て物爲る事故に斷るにや○考に猪は豚にて御贄の料なる由に云れたれど然らず其は御贄ならむには求て白きを用らるべきならず倘佗義有るべし）儀式に京職貢白鷄一雙近江國猪一頭と見えたるを台記に仁平元年祈年祭猪近江國未進者郡司申云祭前十餘日狩猪不得之連日狩獵于ㇾ今無ㇾ得云々承年四年六月月次祭馬代進調布八端任ニ彼例ニ所下以ニ調布八端ニ爲中猪代上仰そと有れば此頃より絕たるらむ此も亦神の御心にて然るべき御事こそ有らめ（凡て世中は神の御心の任なる物にて神の欲し給ふ時は其物を餘多世中に出して奉しめ給ひ欲せざる時は悉(フツ)に其物を勿らしむ然りと雖も上に云る如く神の造化にて爲給へども世中に彩質を彰はす限りの物は悉く人の有なり此故に人より奉らされば其物を受納給ふ事を得ず顯幽の境如此くなり如何に奇異なる物ならずや因に云狐

狸の如くなる妖物の能く人の所有る食物などを取る事有り然れども正しく此を持ちて其心實せる人の物は得難し如何に爲てか人を欺き惑はせて其物に念勿らしむるか或は其手を放たしむるか後には心の著く事なれども其縁を彼に斷れたる故に復り難し幽より顯を自在（コ、ロノマ、）に爲しめず顯より幽を窺はしめず事別坐るは實に然有らでは有まじき物なり　斯て此三物は必別に奉らせ給ふべき故有に依て捧させ給ふ者にて式に御歳社加二白馬白猪白鷄一と有る此なり辭別は此詞を申させ給ふ本縁此に在り輕く見過すべからず此に就て思得たる事多かりしと云へども古始太元考に彼拾遺の文を註する因に云へり○種々色物乎備奉氏とは祈年幣物を云り然れば初穗云々以下の文に抱はらず式の文第一段三十三丁の下に引れば此には漏しつ備考に右に擧云る御服御酒潁海山の物等を約めて種々と云り色とは品を云りと云れたるは理無し其は右に擧云る御服御酒潁は將來の新嘗祭に行ふ所の幣帛にして當前の幣物ならず此に種々色物乎備奉氏皇御孫命能字豆能幣帛乎稱辭竟奉久登宣とは新年祭の幣物に非ずして何をか云む能く文義を碎きて知べき物なり　○皇御孫命能宇豆能幣帛乎稱辭竟奉久登宣は第一段なると同じ辭にて同じ事なるが彼は佗社の其祈年祭に預給ふ神々と共に宣り此は御年神の稻穀の神なるが上に大國主神の始給ひし神事を傳させ給ひて其事を行はせ給ふに就て此詞を重復の如く宣はせ給ふなり然れば此は宇豆乃幣帛は右に種々色物乎備奉氏と有るを受たる事云まくも更なり思ひ紛ふ可からず

大御巫能辭竟奉皇神等前爾白久（オホミカムノコノコトヲヘマツルスメカミダチノマヘニマヲサク）

大御巫は神名式に神祇官西院坐御巫等祭神二十三座と有る此中なるが令集解に取處女堪事充之臨時祭式にも凡御巫御門巫生島巫各一人其中宮東宮唯有二御巫各一人一取二庶女堪二事充レ之但考選准二散事官一入二を見ゆ　と有れば處女を以て其事に任給へる物なり　同書に巫者知二鬼神之道一者也在レ男曰レ巫在レ女曰レ覡一說在レ男曰レ覡在レ女曰レ巫此令取此說員數考選者待式處分別記御巫五人倭國巫二口左京生島巫一口右京居摩一口御門一口と見えたり考頭書云集解に知二鬼神之道一と云るは漢國の事を云り皇朝の巫は其神に仕奉る業を爲のみ況て少女を用らるれば鬼神の道を和ると云べきかは」とあり其如し　神祇官の八神を齋奉りて佗社と異なれば取分大御巫とは云也又大官主御巫と云ふ事聖武天皇御紀神龜九年八月の下に見えたり巫を加牟能許と云ふ事は天野信景が鹽尻に世俗稱二巫女一爲二神子一（訓美古）或曰二美加武乃古一按楚辭雲中君朱註云雲神所降也楚人名レ巫爲二靈子一若レ曰二神之子一也以レ此見レ之則神子之稱倭漢同二其意一と有るは然る言なり又同書に楚辭禮魂に成レ禮兮會レ鼓傳芭（ムチ）兮代レ舞注會鼓急疾擊鼓也芭與葩同巫所レ持二香草一也と有は神代天鈿女命の神事の彼に傳れる也と云り○辭竟奉るは天皇后宮東宮の御爲に辭竟奉なり其神名式に御巫祭神八座と見えたる下に並大月次新嘗中宮東宮御巫亦同と有以知べし稱の字脫たるらむと思へ共次にも辭竟奉者と有れば脫せるならじ生島神詞を始め次々にも然有れば斯く云ふも即一の格にて子細有る事なり但次なる座摩御門共に稱辭と有り此は祭りを兼て云るなり此は大御巫の持齋く由なるにて座摩御門など其社を云ふならざれば必辭竟奉と云ふべきなり考に此の二つ共に稱字を佗例に

依て補はれたれども諸本皆無きに依て本の任に措きつ稱辭竟奉は其祭祀に典る物に就て云ひ辭竟奉は唯に其齋く神の御德を申出る時に用ふ詞なり然れば廣瀬能川合爾稱辭竟奉また龍田爾稱辭竟奉など有るは其祭れる所以と其神の事實を云ふに就て稱辭竟奉と云るにて此外皆然り然も無くて唯に神の事を申す時には云々登御名者白而辭竟奉者と云ふ例と通えて此詞座摩御門生島御縣山口水分等詞皆然なり上古には如此る差別も甚委しかりつるを後世人は此辨なき故に說僻める事多し心得べし但稱辭竟奉は祭にも神の事にも亘りて廣く辭竟奉は神の御上に耳云ふ事にて狹き詞也と知るべし然れども如此き古文の妙處に至ては人の心着ざるも尤也社に就ては天社國社登稱辭竟奉と云ひ祭に就ても云々汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟また和妙荒妙爾稱辭竟奉牟と樣に云て斯る所に一處も辭竟奉と云る事無し大御巫生島の如く祀る御巫に就ては辭竟奉と云ひ座摩御門の如く祭る處に就ては稱辭竟奉と云り（鈴屋大人の大祓詞後釋に引れたるも稱辭竟奉と有れば其に依られたるかと思ふに然らず其祝詞考に就て不意く記されたる物なれば依難し）○皇神等能前爾白久は神名式に神（イ以下ナシ）祇官坐御巫祭神八座（並大月次新嘗）と有る此御社なり「此齋院は下に鎮御魂齋戸祭著る齋戸是也神祇官年中行事十二月條に十一日月次祭如六月齋部殿內及諸宮御巫定生祭之と有る齋部殿の御事也」此は上第一段註に引る如く天津神籬又天津磐境を天神の授奉給へるを高千穗宮に初て齋奉らせ給ひしかども御社を造營給ふまでには及ばせ給はざりしを神武天皇の大御世に始て齋祠らせ給ふ物なり古語拾遺神武天皇段に爰仰從二皇天二祖之詔一建二樹神籬一所謂高皇產靈神皇產靈魂留產靈生產靈足產靈大宮賣神事代主神御膳神（已上今御巫所奉齋也）と有を記傳十五（四十一丁）に從皇天二祖之詔とは正しく彼神代紀なる詔を云り」と云れたるは然る言なり（但彼詔は天社國社にも係て宣へるなる事第一段の下に說が如し借此八柱神は彼神籬な以て御神體と爲し祭祀給ふ事と通えて伯家部類に八神殿御正體事さ有る條に一御殿五色糸帷葉は物內箱外大和錦包平緒まで十文字に結內に水晶御玉御鏡御劔さ有て二御殿より八御殿までは內箱同斷榊葉八枚五色糸御玉と見えたり此榊葉八枚と有るや上古は神籬なりつる遺制ならむかし但御神體御箱之事二重箱さ有り心得おくべし百練抄に兼俊宿禰云八神殿自元無御正體と有り其は神籬を御神體さする故なり玉英に云く曆應三年三月十九日大藏卿雅仲朝臣爲二勅使一來可レ有二神祇官修造一於二神體一者凡無御座由伯業清王所申也此事如何云々神祇官神體爲二神木一之條勿論歟云々と有る神木は賢木にて所謂神籬と通ゆ大內裏圖考證に古文書曰祝部殿者御巫等宿所云々又曰神祇官祝部殿事一名齋部殿只如神殿懸二御簾一引二壁代一立二濱床一安二青榊一云々又曰兼俊案之御廚子祝部殿共以無神座云々案上安二榊木一可レ存如在禮歟と見えたり諸神本懷にも八神殿不安御體只用賢木也さ有り但玉海に安元三年四月廿八日の火災に神祇官八神殿御正體燒失と有るは其榊を云るなるべし鈴屋翁玉勝間十二にも此事など記されたり）借此八神は天皇命の大御身を守護奉給ふ由緣有る神等な

り」と鈴屋大人の說れたる實に卓見にて其由記傳十一卷十四卷十五卷に事の因みに所々註されたる說等を披見て知るべし但此は伯家部類に八神殿之御事者朝廷守護之神衞邑從往昔神祇官御鎭座之御事也と有るを含みて云れたる說なるべし天下に有と有ゆる人等の身を守護坐む爲に天上より御靈を降し給へるなり皇國は云も更なり夷狄の末と云ども此守護無ては一日も世に在る事能はず又身死て後ト雖も此御守護に賓ずしては神位を得る事能はず顯幽を罔羅(スベ)て甚も尊き神等なり舊事紀天孫本紀に天神御祖詔授天璽瑞寶十種謂嬴都鏡一邊都鏡一八握劒一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一天神御祖敎詔曰若有ニ痛處ー者令茲十寶謂ニ一二三四五六七八九十ー而布瑠部由良由良止布瑠部如此爲之者死人反生矣職員令集解に引る文は大凡此に同じ元書は此紀なるべし第六詞また鎭魂祭詞の下に引て云る事共を見合す可し神皇實錄に立ニ靈時於鳥見山中ー用祭ニ皇祖天神ー焉任ニ皇天嚴命ー齋八拄靈神式爲ニ鎭御魂神ー爲ニ天皇玉體ー春秋二季齋祭也と見えたるは此祈年と神嘗とを云るかと有る十種神寶も此八神の御靈實ならむと所思たり但此は右の八柱神の神靈代に配當給へるに有れど遙に後に天降し給へるなれば此大御巫の所崇る八柱神の御神體に非ず大和國山邊郡石上坐布留御魂神社名神大月次相嘗新嘗さ有る此御社の御靈體と爲り給へり。其は鎭魂祭詞の注に云る如く其祭神は此八神に大直日神一座を从たるを以て知らる但大直日神は亦名を神直日神ト申して二御靈に在せば強て十神と爲むも僻事ならず偖此十種神寶の其御靈實に當る由は嬴都鏡邊都鏡は高御魂神魂神に當べく生玉足玉死反玉は生魂足魂玉留魂神に當べく所思ゆるに就て尙思へば八握劒道反玉蛇比禮蜂比禮品々物比禮も其餘の神の靈實ならむを何神に相當べくも所思ざれば唯其端を云なり天武天皇御紀に曰鳳十一年十一月癸卯朔丙寅是日爲ニ天皇ー招ニ魂之ーと

有も此神等に爲させ給ふ御祈にて鎭魂祭此なり但御紀の文に丙寅法藏法師金鍾白朮煎の文より聯きたる故に佛家にて謂ゆる招魂の事さ爲めれど然らず同日に二つ有る事を記されたる文なる故に是日さ句を昇せるを人は得知ずぞ有る偖此御社は神武天皇の御世に草創給ひしより以降御世々々に都を遷させ給ひし時しも大宮近く齋奉らせ給ひて殊に崇奉給ひしなり大內裏圖考證に云く伯家部類貞應元年十月九日神祇伯拜記所載神祇官古圖又文保元年二月十一日廳始及拜賀記所載神祇官圖八神殿西院西築垣內面八社相ニ並東西ー北爲ニ第一殿ーと有り淸和天皇實錄に貞觀元年正月二十七日奉授神祇官無位神產日神高御產日神玉積產日神生產日神足產日神並從一位と見え同年二月丁亥朔班幣諸神告以卽位之由神祇官從一位神產日神從一位高御產日神從一位玉積產日神從一位生產日神從一位足產日神並奉授正一位諸本ともに從一位生產日神を脫せり此神一柱を省くべき由無ければ究めて脫たる事決し今は補ひて引つ善本を得て按すべしと有れば崇重奉給ふ御事決し然るに大宮賣神御饌津神辭代主神に神位を奉らせ給はざるを以て皇天二祖の詔命に依て祭らせ給ふ所は上件の五柱に御坐が故に殊に御位を授奉給ひ自餘の三神は後に合せ祭るかの說有れど委からず元より八柱御在し坐つるなれども佗に祭給ふは格別此社に取ては主客の別有るが故也是以十種神寶も此三神には殆と當べき事の無きが如し尙鎭魂祭詞の下に委しく云を待べし此を八神殿とも齋部神

殿とも申し此に就て西屋と云も有り（八神殿の號は薩戒記應永卅三年六月十一日の下に見ゆ大内裏考證に古文書曰神祇官内東西兩院事八足門内有額八神殿と見ゆ諸社根元記此に同じ齋部神殿の號は三代實錄に貞觀二年八月廿七日甲辰夜偷兒開神祇官西院齋部神殿盜三所齋戸衣幷主上結御魂絲等と見えたり又大内裏圖考證に延喜式に神祇官の西屋と有る所は宮の八神殿の巽角東西二間南北一間卯西建之然此西屋を齋部殿とも祝部殿とも云ふまた刀禰殿とも宿所とも云ふ由諸を取て記されたり就て見る可し但齋部神殿とは八神殿を云ひ齋部殿とは其に屬たる西屋を云ふなり）

神魂高御魂生魂足魂玉留魂大宮乃賣大御膳都神辭代主登御名者白氐辭竟奉者

神魂高御魂は古語拾遺に高皇產靈神皇產靈と次序たる如く凡ての神典の正實は如此くなれば必然有る可き物なり（此神祇官に祭らせ給ふをのみ然次序の錯へるは其元一書に記誤れるが廣ごりたる物なり然れど此祝詞及六月月次祭詞は云も更なり神名式四時祭式鎭魂祭條また上に引る三代實錄も然なれば古くより錯來つる儘を改給はざりける物ならし）偖此二柱神は天之御中主神の混成純一なる大御德を陰陽二義に持分け坐て世中の物をも事をも化生し給ふ故に神典の古傳に宇宙の事物の元始を云ふ時には何回も高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美之命以とは云へり然れば天之御中主神は萬善の源萬化の主宰と坐し神漏岐神漏美命は萬物を化生するの妙用を爲給ふ事著明なり（此二柱神を神漏岐神漏美と申す事の由來は第一段の註に云るが如し心を着て考ふべし實基本記に天地之間氣形質未相離是名混淪所顯尊形是名神生化本性萬物總體也と有は然る言なり但名レ神を名金剛神と有れど佛者の私なれば今改めて引り）所以に顯宗天皇御紀なる日神月神の御託言に我祖高皇產靈尊有レ預ニ鎔造天地一之功ト と仰諭し給へる御詔の少緣ならず通ゆるに依て深く思慮奉るに此天地を始めて世中に在と有ゆる物も事も各々其掌る神は御在れども其を幽より預鎔造り賛け御在座す事違ひ有まじき物なり（此御託言を唯に阿比都久流と訓ては其眞意を得難し預ごと云ふ語に心を着て見るべきなり預字を綏靖天皇御紀に阿曾布と訓り相加なり尚古始太元考に委しく云れば此には省きつ伯家部類に高皇產靈神は人身を生給ふ神德也神皇產靈神は人の心魂を生給ふ神德也一と有れど神皇產靈神は心魂を生給ふ神德には坐さず心魂は玉留魂神なる事云ふも更なり然れば此二柱神共に人の身をも心をも悉く結び爲し給ふ御德なる[illegible]ぜり）其證は神代紀なる國土經營の所に大己貴神乃興言曰夫葦原中國本自荒芒至ニ磐石草木一咸能強暴然吾已摧伏莫レ不ニ和順一遂因言今理此國唯吾一身而已其可ニ與レ吾共理ニ天下一者蓋有之乎于時神光照レ海忽然有ニ浮來者一曰如吾不レ在者汝何能平ニ此國一乎由ニ吾在一故汝得建其大造之績矣是時大己貴神問曰然則汝是誰耶對曰吾是汝之幸魂奇魂也大己貴神曰唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂今欲何處住耶對曰吾欲レ住ニ於日本國之三諸山一故即營宮彼處使就而居此大三輪之神也と有幸魂奇魂は此二柱神の預鎔造給ふ御靈なるが神は更にも云はず世中の人にも其幸魂奇魂を預て其功業を建しめ給ふ事なるが大きく給はれば其功大きく小く給はれば其功少き也（此幸魂奇魂を大三輪之

神也と記されたるより謬解して大己貴神の和魂大物主神なる由先師等の説なれど信られず此事は古事記には伊都岐奉于倭之青垣東山上一此者坐御諸山上神也と見えて神名式に大和國城上郡大神大物主神社名神大月次相甞新甞と有る引續に神坐日向神社大月次新甞と有る此なり甚委しき説有れど例の太元考に讓り此には漏しつ 偖其功業の大小は其人の魂の大小に在るが其極る所は此二柱神の預鎔造給ふ幸魂奇魂の大きく預ると小さく預るとの差なる故に皇天より鎮魂祭の術を世に傳給へり令義解に鎮魂言招離遊之運魂鎮身體之中府故曰鎮魂と記せる此なるが千有餘年此を解く者無く此を知る者無りしを予始て此を説き此を得たりき然れど予は其を得て懇さ行ひて其験を得るにこそ有れ天下を治むる御邊りは云も更なり文武の道を執する徒など其行ふ所深切にして其精氣神に入る時は窮さずして此所に至て有なり吾が本居平田二大人など能く其人なり大道の廢ざる事實事の上に斯の如し豈奇異ならずやも 是以て我を生す事此二柱神の全能なる事を知り我を任する事此二柱神の靈威なる事を知るを得たり大己貴神の其幸魂奇魂を治奉給へる御事も眼前に昭々たり此令義解の文を解得られざりし故に古史傳に遊散する魂を招き鎮むるなりと云れき尚玉留魂神の下に云ふを考合すべし 偖如此く萬の物にも事にも相預坐て相鎔造給ふ御功の宇宙に彌綸て少かの隈をも遺す事なく御靈を幸へ御在す事にて氣の空虚に薫り滿ち水の凹處に漲り溜るが如し故高天原爾神留坐とは申せり第一段の注に引合せ見るべし 古昔天地の未生りし時天之御中主神と申す大御神元より始無く大座々けるが無爲にして自然に行はるゝ大御德坐り其は陰陽の元氣の相氤氳ふにて其晉り出る氣は高御魂神の御德と爲り感する氣は神魂神の御德と爲り分たるが元天之御中主神の一氣也ける故に陰陽剛柔の二ツに成分りて有れども其元の一つに混圖まらむと爲る其即男女陰陽交接の大象なるが其中より狀貌難言き一物を爲し給へるが其御祖の二柱に成分坐し元円を資て清輕なる物は進みて天と爲り重濁なる質は退きて地と爲り天地初て位し世界初て立定まれり此を天地開闢と云ふ神代卷口訣に有神故成天地成天地而有神故生人倫生萬物とは謂れたる言なりけり備天に就て宇[illegible]此古道[illegible]天之常立神と坐し天日文に[illegible]成定まり地に就て國之常立神と坐し國常立神と成て國常[illegible]定まれり此は全く高御魂神魂神の預鎔造化に依れり 若て大地に伊邪那岐伊邪那美二柱神を生出令め給ひて漂在る國を修り理め固め成さしめ給ふ此即法二神に賜ふ所の賦命にして神にも人にも事業有る本緣也是を以て倭姫命世記にも教人曰左物不右遷右物不左遷左左右右還右回萬事無違の古語有り凡て天地間の事能く成なりと云べく能く成れりと云べからず其は人を貴けて天地造化に功を盡し人は神に受けて天下事に德を致すべき物と定り給へり是以て宇宙の事善惡正邪吉凶禍福有るも修理固成の用無くば神も人も無用の長物と云べし造化の功須臾も止む事を得ず經世の德片時も廢べからず此なための此を離るる時には天下一日も保つべからず

此故に生國足國とは云へり尚生島足島神詞に解く所を考見るべし　然して伊邪那岐伊邪那美二柱神其國土を經營給ひ國土の萬有を生成爲に風神火神金神水神土神を生坐て其修り理め固め成すの全能を世に立しめ給へり　凡天地間の萬有此五元神の御靈を合せて事成し給ふに非れば出來まじき事此末に說くべし　日神月神を生坐て晝夜を持分け掌しめ給ふなど事の末は多端に分れたる如くなれど其元は悉く高御魂神魂神の預鎔造給ふ所にして其功の盡る所其德の究まる所は全此二柱神の幸魂奇魂の成さしめ給ふに依て能く成ざると云ふ事無し　幸魂とは其御靈を割て其人に預(ソ)へて事を成さしめ給ひ奇魂とは事を成すに就て彌々靈妙なり幸は前にて前(スヽ)む意奇は來(クシ)にて聚まる意有りなほ靈之御統に委しく云べし此書先に著したるを此意を熟くも得ずて物爲し故に甚く物損ひせり近き程此を訂正して世に行ふべくなむ下ふる玉留魂神の條に委しく云へり

○生魂神足魂神玉留魂神三柱は高御魂神魂二柱神等の陰陽太元の産靈に資て其靈威に成る所の天之益人を成し給ふ神等なり　高御魂神魂神の預鎔造給ふ事云まくも更なり下に云ふ事共を考合すべし　凡宇宙萬物元來形象有る事無し謂ゆる無狀の狀無象の象にて萬物未有の先に名有る事無く萬物已有の後に名無き物無きが宇宙の間の全は此無名有名の二つより外有る事無し所以に古事記序に　夫混元既凝氣象未レ效無レ名無レ爲誰知二其形一然乾坤初分參神爲二造化之首一とは記されたり　漢籍老子に道可レ道非二常道一名可レ名非二常名一無名天地之始有名萬物之母故常無欲以觀二其妙一常有欲以觀二其徼一此兩物同出而異レ名同謂二之玄一玄之又玄衆妙之門と見えたる意を得此の古傳に合せて記されたるなり本末を取誤つ事無れ　其此を視て見えず此を聽て聞えず此を搏て得ざる所の妙處即此二柱神の全能の止る所にして　淮南子原道訓に夫無形者物之大祖也無音者聲之大宗也と有て高誘が注に無形生二有形一故爲二物大祖一也無音生二有音一故爲二聲大宗一祖宗皆本也と云るを思ふべし　陰陽の名有る事無く五行の名有る事無しと雖も能く陰陽を懷藏し五行を統括す動靜に陰陽始て芽し消長に五行始て形る古事記序に陰陽斯開二靈爲二群品之祖一とは此を云なり伊邪那岐伊邪那美命の其元を高御魂神魂神に資て夫婦と爲給ひ萬物を宇宙に生成給ふ根源斯に在り　素問陰陽應象大論に黃帝曰陰陽者天地之道也萬物之綱紀變化之父母生殺之本始神明之府也と有るは然る意なり　斯に五元神を生給ひて萬物を生成し坐り此即伊邪那岐伊邪那美命の靈威の究まる所高御魂神魂神の全能の盡る所にして天之御中主神の眞一に歸する所に爲て無狀の狀々有て天地位し無象の象象有て萬物有る所以也此無狀の狀無象の象の天神の靈府至誠の安宅なり　老子に道生レ一一生レ二二生レ三三生二萬物一と見え呂氏春秋大樂篇に萬物所レ出造二於大一一化二於陰陽一萌芽始震凝寒以形と有など此を謂なり　偖天地位を定て天地既成れりし以來天日は宇宙の正中に在て恒に自旋回し猛火の光焰を放して六合を普照す此に因て大地又其勢に牽聯爲られて天日の外圍を運動して常に自旋轉し晝夜

の分此に成り其動に火成り靜に水成る古始太元考宇麻志阿斯訶備比古遲神天之常立神の下に委しく云へり動靜の水火に母たる所以は氣の性は水に近し寂然として寒なり天日に蒸れて溫暖なりト雖も夜に成れば溫冷なり此溫冷は常にして溫暖は變なるを知るに足れり　然るに大地の本質は水土各相半したる質なるが天日の光輝地中に透入す此を以て自然に火氣を含藏して漸々に煦溫釀沸して遂に蘊圜を蒸發す此に於て氣大に迫りて風を生じ質大に締シマりて金を生ず古始大元考國之常立神豐雲野神の注に云り氣動きて火氣を起し靜りて水氣を強くし大に凝て土と爲り大に結て金と爲す事なるか其然らしむる所以は風氣の妙用機關たり　是に於て風神火神金神水神土神の五運を主宰して能く萬物を生成化育し給ふ所の靈妙宇宙に彌綸せり此風火金水土の五元は天地萬物の本原にして此外に別に天地萬物の實有るに非ず此五元の神物宇宙に彌綸して別れては又混り混れては復別れ互に凝り互に結びて萬物を生成化育す是を以て萬物繁庶なりと雖も其類を統て大別すれば土石と生植と動物との三にして悉く此五元の奇結妙凝に非ずと云事無し然して其本づく所は陰陽二神の全能に歸つ孔子家語に昔丘也聞ニ諸老聃ニ曰天有ニ五行ニ木火土金水分レ時化育以成ニ萬物ニ其神謂ニ之五帝ニと有るを梁蕭吉が五行大義に行青レ五者明ニ万物雖レ多不ニ過レ五と烈れ云り子華子に天地之大數莫レ過ニ乎五ニ莫レ中ニ乎五ニ五居ニ中宮ニ以ニ萬品ニ沖氣之主也中之所ニ以輿ニ也中之所ニ以比ニ也龜巫之所ニ以靈ニ也神響之所ニ以豐隆ニ也通ニ乎此ニ則條達而無礙者矣と有る古説など皆此五元の妙用を云るなり考合べし　此五元の互に凝結して萬物を生成爲る所を觀察するに風氣の土水に凝たるは鹵と爲り鹻と爲り焔硝と爲り芒硝と爲り風氣の火氣と激りて雷電を爲す理を思ふべし　火氣の水土に凝たるは脂と爲り硫と爲り硯石と爲り礬石と爲る水土の能く其質を調和する所には風火の氣も亦能く含蓄し鹵鹽硝鹼消石黄の礬石等自然に多く湊りて土質を凝結す其脆弱に凝て乃其土質を凝結するをば礦璞と號け結定の堅固なる物をば硬石と爲る此を人體に喩るに礦石は骨幹と爲り土水は皮肉血液と爲り草木は毛髮と爲る理に相同じ又其石中に含む所の諸種の鹽氣數多の年序を經るの間に地中の靈氣を釀成し其精華を發する所に至ては珠玉と爲り寶石と爲り又其凝固の强堅なるは金銀と爲り銅鐵と爲り或は其精流澀爲るは鐘乳と爲り石髓と爲り又其汚毒の結定せるは砒石と爲り礬石と爲りて變化百出記載爲べからず或人云り然る言なり　土石此に依て始て形象有り土は大地の皮肉石は大地の骨幹水は大地の血液火は大地の溫熱風は大地の喘氣なる事此を以見つべし金は氣の凝み質を爲す時は土石に相因る此を以て別に說さず　偖天日の火大地に徹りて水氣を得る時は草木を生ず第二段に說る如く豐受太神の產靈給ふ所なり草木は地の毛髮なる事神代紀なる素盞嗚神の御所爲にて照々たり古始太元考に注すべし漢籍三五曆紀に盤古氏死也兩眼化爲ニ日月ニ頭髮爲ニ草木ニ屎尿爲ニ河海ニなど萬國の古說然なりと見えて小乘提婆論に云ふ物に所レ有一切之命非命物從ニ自在天ニ生從ニ自在天ニ滅自在天身者虛空是頭日月是眼地是身河海則尿山丘是糞火是熱風是命一切象生是ニ身內蟲自在天常生ニ一切物ニと有る自在天即漢に謂ゆる盤古氏にて我が產靈神と通えたり又天日の照溫に依て資生する草木の腐壞する間より昆蟲を發生し水濕の溫釀する間より魚貝を化育し山嶽原野に飛禽走獸を生じて動物此に於て蕃息す一切動物各々地氣を得て生ずる故に風土に依て異有るが如く土石及び生植悉く然り心を着べし　如く五元の奇結妙凝に依て土石生植動物の三種は各々人を育養する所の資にして其用ふる所食物衣服と爲り居屋機械と爲り或は藥物玩好と爲りて悉く人の用に非る事無し此は予が自思取れるに或人の說も大凡斯く有る故に取合せて文を成せり委しくは古始太元考に云ふべし凡萬物

は人の爲に生じて人の爲に徭を爲すべき者と皇祖天神の鎔造化育し給ひて人類を生成し坐り人また萬物の上に位て能く萬物を御すと雖も其生ずる所萬物に異無くして風火金水土五元神の產靈成し給ふに依て成れり風以て呼吸とし火以て心神とし金以て骨幹とし土以て皮肉とし水以て血液とす各相資て人を生ず此故に五臟有り五氣有と雖も其統る所陰陽の二にして其聚る所一身なり 列子黃帝篇に舜問ニ乎烝ニ曰道可ニ得而有一乎曰汝身非ニ汝有ニ也汝何得レ有ニ夫道ニ舜曰吾身非吾身孰有レ之哉曰是天地之委形也生非ニ汝有ニ是天地之委和也性命非ニ汝有ニ是天地之委順也孫子非ニ汝有ニ是天地之委蛻也諶注に委ハ積也四大假合而有ニ此身ニ故曰ニ委形ニ云々と有るは能く予が說の證を得たるなり四大假合とは地大水大火大風大にて上に云ふ所の五元の義說なり 偖其一身の全は風火金水土の五元の資に因て成れりと雖も其成れる所を以て此を云ふ時は氣と形と神の三に過ず生魂神足魂神玉留魂神の預り知着す所此なり 淮南子原道訓に云く夫形者生之舍也氣者生之充也神者生之制也と見え莊子外篇に孔子曰執レ道者德全德全者形全形全者神全神全者聖人之道也と有る德は此の氣に當れり德を爲す所則氣より生ればなり 氣は此形の主にして我が精神の母と云べし天地は更にも云はず人も萬物も皆高皇產靈神皇產靈二柱神の太元の一氣より稟受し生魂神の元氣に成る 身中に氣充る時は內外調和して邪害する事能はず耳目聰明にして壽域を保つ故に人の動くや此を生と云ひ人の斃るや死(シヌ)といふ氣の形の主なる事を知べし伯家部類に玉留魂神は人の精氣を留て元氣を贊給ふ神德なりと有るは此神の神德を混らしたる也 形は質を爲して精神を盛る器なり形以て形を御す故に萬物の宰たり伊邪那岐伊邪那美二柱神の靈威を資て足魂神の元形に成る伯家部類に此神は人の身を長養して長壽を得しめ給ふ神德なりと云るは然る言なり 氣神此に含る時は耳目用を成し手足心に應ず形竭れば氣神此に主たらず此を死と云ふ死精病也と淮南子俶眞訓の注に見ゆ 神は形の宰にして氣と共に行はる此故に善形を養ふ者は須く先神を養ふ神を養ふ事氣を養ふに在り天之御中主神の宇宙に充塞する所の御靈を賦與して玉留魂神此が元靈なり伯家部類に神皇產靈神は人の心魂を生給ふ神德なりと有るは此神の御靈威の事なり改むべくこそ 神靈の宇宙に充塞するを高天原に常住と云ふ宇宙は高皇產靈神魂神の大氣を充塞す神靈その中に充滿せり令義解に招ニ離遊之運魂ニと有るは此招魂を云ふ伯家部類に足魂神は大己貴命なり國家を經營し萬寶を滿足令しめ給ふ神德なりと有れど臆推の說なり大己貴神は生島神足島神に座と有る此なるをや 偖氣と形と神との三を以て此一身を爲せりと雖も此を養はざる時は眞氣此に位ず精神形を離る此故に非命に死し少壯に終る此を以て氣以て氣を養ひ形以て形を養ひ神以て神を養ひ天壽を保ち其眞宅に歸らしめ給ふ 其眞宅に歸るとは我生じ幽よりして出づ幽は本所なり學は人の德を脩め天命を保つの假宅なり此故に遂運當遷して天上に復命し世と共に天上に出る眞を以て眞宅とは云也但し宅は列子至瑞篇に出たるを眞理に協へるを以て此に用也小乘の涅槃に是天は衆生祖大地は是其戒場一切衆生於ニ此場ニ生殺生死と天と云平田翁の印度藏志(二十六丁)國常曲に入道の本世は天界なるを此世界へは大梵天王の發え降りし果まもか爲に生れ來つれは此世界は八種の本世ならず戒場の實理そと云ふ傳なりと云れたり彼印度と雖も婆羅門徒には斯る古

説も有なり　氣以て氣を養ふとは生魂神より受賜はる所の氣は元氣のみなり呼氣を呼吸して古き氣の渣滓を去り清氣を充ざれば耳目聰明ならず筋骨堅硬ならず血液涸れ百邪害を爲す是を以て大宮乃賣神食物の精氣を以て此を養ひ加ふるに宇宙の風氣を以てす氣の食物の精氣を以て木と爲る事は孔子家語食レ土者無レ心而不レ息食レ木者多レ力而不レ治食レ草者善走而愚食レ桑者有レ緒而蛾食レ肉者勇毅而捍食レ氣者神明而壽云々有を以知れたり素問に惟賢人上配レ天以養レ頭下象レ地以養レ足中傍ニ人事一以養ニ五藏一天氣通ニ於肺一地氣通ニ於嗌一風氣通ニ於肝一雷氣通ニ於心一谷氣通ニ於脾一雨氣通ニ於腎一と有も自然の理を云り　形以て形を養ふとは足魂神より受賜る所の形は元形のみなり食物以て此を養ふに非れば能く長る事能はず又衣服居室を以て此に加へざれば風寒暑濕を凌ぐ事能はず雨露霜雪を避る事能はず此を以て大御膳都神此を輔佐く是に於て人皆各々事業有る所以も亦此に起る衣食住の三は人を養ふ所以の物なり能く養へば此を保ち能く養はざれば此を保つ事能はず此故に人皆事業有り事業は衣食住を求むるの便令なり　神以て神を養ふとは玉留魂神より受賜る所の靈は元靈のみなり言語以て此を養ふに非れば神よく神ならず是に於て子弟の道成て先導後從の義有り此は辭代主神の治め給ふ所なり又人の正しき行ひを見て志を改むるなど言を以て神を正すなり事また辭の本なり　皇祖天神若此く氣形神の三に區別し此を體用の二に爲し體は養の用を以て能く體爲らしめ用は養ふ體を以て能く用爲らしめ給ひて能く人の全身を保しめ給へり此まで人の全身の成る所以人の全身の保つ所以なり能く返さひ讀まば思半に過む物ぞかし　如此く爲て人の全身の事整へるが常にて能く成り能く養ひ能く保ちて能く天壽を終るを一世と云ふを病患有り禍害有て其能く成を破り能く養ふを損し能く保を失ひ能く天壽を終るを天竊令しむる惡神有りて共に氣形神の間隙を覗ひて入むと爲る事有り此は禍津日神に屬る諸の禍神の所爲なり　但此また一定ならざるなり此禍津日神の所爲に十等有り其一は功成り名遂べき人の陰徳を積しめ給はむ爲に病患禍害を與へて其能く成ると知ざるとにて其志操の立か立ざるを試給ふ禍事有り其二は神の御心に叶はせ給はぬ所有て咎め給ふ禍事有り其三は穢火に依て神の忌給ふ禍事有り其四に善人の上に禍事有るなり此は其一義なるに同じ其五は惡人の上に禍事有りて浮雲の富に暫く快樂しむ此大禍事の大に下に崩し有るなり其六に陰惡を爲たるが故に陽惡を得るなり其七は父子親族の殃災の其身に延て及ぶなり其八は自情弱にして禍事を得るなり其九は自招きて禍事を容るゝなり其十を自も思はず人にも然る心無くて成す跡の禍事に成れるなり　先病患の事を云むに人能く清虛を守りて無爲なる時は氣内に充て百邪の犯すべき隙無し此に反する時は風寒暑濕此が爲に相還す此時置師神の所爲たり萬葉十四丁に不盡能禰乃伊夜等保奈加伎夜麻治乎毛伊母我理登倍婆氣儕餘婆受吉奴と有を以て氣の人を害ふと云事を古くも云りし事を知べし○時置師神とは時を犯し破る義の神名なり素問の陰陽應象大論に冬傷ニ於寒一春必病レ溫春傷ニ於風一夏生ニ殘泄一夏傷ニ於暑一秋必痎瘧秋傷ニ於濕一冬生ニ欬嗽一また天之邪氣感則害ニ人五藏一水穀之寒熱感則害ニ於六府一地之濕氣感則害ニ皮肉筋脈一また素問に邪氣所レ湊其氣必虛と有るを始め醫書共に詳なり今は少く其較略を云の

み孔子集語に太平御覽に載れる尸子を引て子夏曰魚失レ水則死さ有る如く人氣を失へば則死す此故に生は氣を保ち死は氣を失ふに在り人飲食節有り起居常有て妄りに勞を作ざる時は能く形と神と倶にして盡く天壽を終ふ此に反すれば飽食疾を發し意隨病を生ず此飽咋之大人神の所爲たり此は素問を孕て記せるが實に老子の甚愛必大費さ云れたる如く人其身を愛するに過て大に此を破るなり素問上古天眞論に今時之人以レ酒爲レ漿以レ妄爲レ常醉以入レ房以欲レ竭二其精一以レ耗二散其眞一不レ知レ持レ滿不レ時レ御レ神務快二其心一逆二於生樂一起居無節故半百而衰也また陰陽應象大論に味歸レ形形歸レ氣氣歸レ精精歸レ化精食レ氣形食レ味化生精氣生レ形味傷レ形氣傷レ精精化爲レ氣氣傷二於味一など有るを考合して悟べし說苑雜言に孔子曰中人之情有レ餘則移不足則儉无レ禁則淫無レ度則失縱レ欲則敗飮食有レ量衣服有レ節宮室有レ度畜聚有レ數車器有レ限以防二亂之源一也故夫度量不レ可レ不レ明也善欲不レ可レ不レ聽也さ有るは此に用有る事なり人精神能く靜に居て思慮定り物來て感じ事來て應ずる時は神明彌々照らかなり此に反すれば嗜欲其目を勞し淫邪其心を惑はし神惱み氣勞る此煩之大人神の所爲たり素問宣明五氣論に五精所レ幷精氣幷二於心一則喜幷二於肺一則悲幷二於肝則怒幷二於脾一則思幷二於腎一則恐さ有る此なり但怒を憂に誤り思を畏に誤れゝば今は改て引つ又同篇に五邪所レ亂邪入二於陽一則狂邪入二於陰一則痺搏レ陽則爲二巓疾一搏二於陰一則爲レ瘖陽入之レ陰則靜陰出之レ陽則怒是謂二五亂一と有るなど云 知らず多かり然れば氣より氣を尅して病む者は時置師神形より形を犯して病む者は飽咋之大人神神より神を勞（ツカラ）して病む者は煩之大人神にて各其虛を窺ひ其損を竊めて全身の官能を斷ち此を死地に赴けむとは爲るなり此故に上古の天皇謂ゆる鎭魂の祭奠を行し招魂の神術を修して天地を提挈し陰陽を把握し精氣を呼吸し靜然として神を守り肌肉一なるが如し此即神典に謂ゆる隨在天神（カムナカラ）なり立復りて第一段の注と第十段鎭魂齋戶祭の注を能く讀味ひて知へし次に禍害の事を云其殃ずる所病患の理に同じと雖も其犯して入る所大に趣を異にす人能く隨在天神の道を行ひて人道を得る時は神氣內に充實して恐懼する所無し此に反する時は上は神に耻ぢ下は人に恐懼す此奥疎神邊疎神に相交こる所なり正しき神の御守護常に宇宙に彌綸せる故に容易く交こるべきに非ずと雖も物に觸て氣必先動す此を以て氣の氣を犯せるなり色を見聲を聞き香を嗅き味を嘗て氣其物に執着す色聲香味元より氣なり其を欲する事即氣の氣を欲するなり 人君の賜を得て祿とし交の兒を得て婚す人の贈るを以て稟け勉るを以て人に得る如此き時は君臣父子夫婦昆弟の大倫立ち仁義禮節斯ノ內に在り此を以て形の影に耻る所無し此に反すれば橫嗜脅肩驕傲の客と爲り朝廷に跋扈し兆民に苛政す婬娃殺伐此に依て行はれ淫樂瀆禮世を亂すに至る此即奥津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘古神の相交こりて然有しむるなり此を以て賄賂の俗朝野に公行し貪者の萬善當人の一非に勝つ事能はず人其誣罔に苦しむ且士の靑雲に志すも戈不戈を論ふ事無くして善く賄する者は此を得善く賄せざる者は此を失ふ此皆人の困若悲泣する所なり那藝佐毘古は爲泣（ナキサ）なる事古始太元考に云るが如し人の世に有る事人の爲なり事を勉め業を行ふも皆人の爲なり人また我が爲に世に在り事を勉め業を行ひて我が爲にす然れば皇祖天神の世を見行す事

親無く疎無し是を以て顯見蒼生と詔給へり然らば四海皆兄弟たり相助け相扶ふべし此を以て人の任とす然るに妬忌偏執の念有て不善を幽冥の中に爲す者有り此即奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神に相交これるなり（人の德を竊み我が功に任し人の善を掠て我が惡を掩ひ人の能を犯し我が拙を飾るの徒多かり此等は人の功を滅すの曲者共なり）然れば氣を以て氣に受け形を以て形に惱まされ神を以て神を衰耗(ツカラ)して禍害の能く其身を滅すに至る豈恐れざるべけむや此故に上古の風儀必大祓の奠儀を行ひ妖邪を百川に解除す此を以て天下大同ひ上下安寧なり（立復りて卷首に註る事を見下第十段大祓詞の下を見は疑無るべき物なり）病患は方術を以て治し禍害は解除を以て攘ふと雖も尙其未然を防禦くを以て重事と爲り此故に家には屋船神門には御門神堺には八衢神御在して此を守給ふ然りと雖も一人德を失へば家神所治を失ひ一家德を失へば門神所治を失ひ一門德を失へば衢神所治を失ふ神の守る處を失ふに非ず人の守らるゝくらゐを失ふ也豈愼さるべけむや識者能く此を思ひ此を思はゞ今來古往治亂興廢に就て思半に過む者ぞ（第十段大殿祭詞第十段御門祭詞第十段道饗祭詞の下に委しく云を以て考合すべし）（尙其精說は古始太元考に說盡さむとす）如此く生と尅との二を以て體用の義分ると雖も元其生魂神足魂神玉留魂神の全能より出ずと云ふ事なし鈴屋大人の天皇命の大御身を守護奉給ふ由緣有る神等也と云れたる說の少緣ならぬを悟るべし（予が此考の成れる上を以て云ふ時は鈴屋大人の言痛しと云れたる陰陽五行氣形神の理屈なりと雖も此考の成る所は翁の金言に依て起れる物なり然れば蛋蟲が功に任すべからず翁の成功の餘續なる物なり借如此く陰陽五行氣形神の理を云ふ事漢人めきて言痛に過たりと雖も彼は浮雲を迎るが如き空論なり我が說く所は神典に有る事實なれば事に徵して動くべからざるなり動かずば定れる理なり定まれる理を說かむに翁の何かば咎め給はむ此に就ても翁の字宙に又比無き大人なる事彌々著明なり）○生魂神は氣の神なり姓氏錄に高御魂命之子伊久魂命と有る此なり（此は思智神主の出自を記されたるなるが故大人等の舊事紀なる天活玉命と同神と爲(セ)られたるは訓を誤まられたるなり下に註ふを待べし記傳十一に天武天皇御紀に牟狹社所居名生雷神者也と有る雷字を古本又釋紀に靈と有て善きとて生靈神(イクムスヒノカミ)と訓れたれど妥からず縱生靈神と有は生國魂神なるべし何にしても此なるには非ず）借高御魂命之子と有るを事實に合せて思ふに此は決く宇麻志阿斯訶備比古遲神と伊邪那岐命に殺され給へる火產靈神の御靈と一柱に靈合坐て成坐る津速產靈神なる事決し（平田翁は火產靈神の天上に坐す御靈の御名なりと云れたれど宇麻志阿斯訶備比古遲神と靈合坐て一柱神と爲り給へるなり）乞其由を云むに高御魂神魂神の垂氣り氣聚(ウムス)けの邉合に依て狀貌難レ言さ一物を孕みて天地を產生ひ坐す時に清輕なる物は上りて天と爲り重濁なる物は止まりて地と成れるの始に淸輕なる物を晉み上らせる元基は大虛蒼茫たる中に引脉(ヒコヅ)有て然有しめ給へるに因て上天先成て光輝六合を照しけるが伊邪那岐命の火產靈

神を斬給ふべき由有て殺給ひけるに火産靈神の血またその引脉（ヒコヅ）を傳ひて上天に激上りけるより光輝彌々倍して今の天日とは爲れり然れば宇麻志阿斯訶備比古遲神の引脉（ヒコヅ）は火産靈神の光を導かむ爲に成て其期を待ち火産靈神の炎上は宇麻志阿斯訶備比古遲神の因有て成れるにて二神の御靈を合せ御力を同共に爲給ける事に違ひ有まじき證は舊事紀に高皇産靈尊神皇産靈尊津速産靈尊と次序たると其御孫天之辭代主神を高御魂命三世孫など有るにて所知たり（古語拾遺の異本に天地剖之時天中所生之神曰天御中主神一其子有三男一長高皇産靈神次津速産靈神次神皇産靈神と有るは次序を誤れる物なり又此三柱神を兄弟の如く爲るも誤なり必思ひ混ふる事勿れ）倍生魂神の同神なる由は姓氏録の恩智神主の出自なるが其は神名式に河内國高安郡恩智神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）と有るを文德天皇實錄また三代實錄に恩智大御食津比古神恩智大御食津比咩神と有り此は天兒屋命の玄孫大御食津臣命夫妻を祀れる事著ければ恩智神主は其裔にして其祖を祀れる也如此く見る時は伊久魂命は津速産靈神を除て配當べき神無く又高御魂神兒と有るに合すべき事無し（倍恩智は大智「オホチ」と云ふ事にて智また津速産靈神の津に當れる考有り此は次に云ふべし日吉神社秘密記に云書に其祖の祝部は常陸國鹿島郡より出て其祖は神魂命の子生魂命なる由記せり古く中臣鹿島連など有て鹿島の禰宜皆中臣の支流なり彌々津速産靈神なり）生魂神の生（イク）は宇麻志阿斯訶備比古遲神の引脉の稱にて伊は氣久は旋（ク）にて綱の若く延（ハ）へ綱の如く回ほれるが火産靈神の此を御し給ふに依て引伸して止ず此を以て天の誥と爲べく大に常有り津速産靈神と申す津とは同物にて古傳に謂ゆる天路（アマヂ）天八衢（アメノヤチマタ）天浮橋（アメノウキハシ）天柱（アメノハシラ）と稱ふ物此なり津は聯る意にて道と云に同じ速は榮（ハヤ）にて引伸して止ざる由なる事勿論なり草木の生立つを萌（ハエ）ると云ふも穀を離れて芽出るを云ふ事なり（万葉に久方の天行く月を綱に刺し我王は蓋に爲り」とも天にはも五百つ綱延ふ万世に國所知さ五百つ綱延ふ」とも續紀に千尋高知天知座と有る綱にて宇麻志阿斯訶備比古遲神の亦御名を天角凝魂神天角己利命とも角魂命とも申す此なり平田翁説と大に異なり太元考に云り）此を人に取るに氣の神を資（エ）て身體を循還せる物有り此を蘭家に靈液と稱へるが津速産靈神の津（ツ）此なり生活の本原たるを以て生（イク）とは云り如此く此神の製造り充滿し給ふ靈液高御魂神魂神の神氣を含みて神經に流通し全身に彌綸て衆務を統理し庶事を惣判し萬物に感應て神明不測の妙用を施し給ふ（素問の六節藏象篇に氣和生津液相成神乃自生と有る註に五氣和化而津液方生津液與氣相副化成生神氣神氣乃能生而宣化也は然る言也津液枯燥ては神氣を保つ事能はず津液を榮生（ハヤ）す事津速産靈神の御所爲たる事心を平にして考ふべし上に云る恩智神主大智と云も由有る事なりけり倍蘭家に靈液と云ふ者漢に云ゆる津液にて我津と稱ふ物なるを知べし血もまた津と同じく一身を經緯するの義なり然るに津の麁なる物即血にて血の粗なる物即血にて有也）上にも云る如く風火金水土の五運に依て人體を爲すに風火共

に氣なるが風は氣の質を包たる物火は神の氣を包たる物なるが故に氣形神の三つ相離れずと雖も尤神に近し津液と精神と共に循環爲るを思ふべし（尚玉留魂神の下に悉しく云べし闇に神経を二つに分て言議さ運化との兩用に云るは麁かりけり）足魂神は形の神なり天之常立神の天の極際を作爲給ふに因て天國爲り國之常立神の其に因准て國土を建立給ひ伊邪那岐伊邪那美命に至て大成せり此天地の足り調べるにて形の滿足へるなり（万葉に天地さ月日と共に滿行むと云る神の御面と見えて又御壽は永く天足し有り」など云る皆はへる思ふべき物なり生目能足日また生國足國など對へ云るなど思互すべし）此を人に取に人身の始め脂の如く膏の如く十月にして體成て生す其常を以て云ふ時は内に藏六府の官有り外頭面手足の分有りて君主の官成り臣庶の任全し是以て眼能く見耳能く聞き鼻よく臭を口能く言ひ手能く動き足能く行く全身の用缺る事無し此足魂神の御德に因る事云も更なり（古始太元考に面足神の下に云事共な考合すべし大かたも面足神は足魂神に非ず□傳三卷の說に依錯し考の說また尤當たらざる也）足と日足との語有り初生の時は尚片成なる物なれど食を以て此は形の具足整れる由なるを以て小兒を育つるに日足を養へば日々に其形體の能く滿足ふ義なり（此義を以て古書に帶仲日子天皇また息長帶比賣命など足の言を以て人名に負るが多かり皆形體の具足の義に取れり）偖此足魂神乃出自は何神ならむと深く考ふるに舊事紀に津速魂尊兒市千魂尊と有る此神なり姓氏錄に添縣主出レ自二津速魂命男武乳速命一也と有る武乳速命全く同神と聞えたり然るは御父神の御德を輔相ひ給ふ神なる故に武津速命と申す義の御名なるを以て知られたり市千魂尊と申す御名義市は物を營み造る事にて氣の形を爲すを云ふなり千は津速の津に同じ然れば津速は靈液の神氣を滋へて循環るの意市千は其靈液を釀する此全身を成就給ふ義なり（此義を說得又上下に相應へて足魂神即市千魂命也とは思定たるなり武乳速命を市千魂神の御兄弟の由云る古史徵の說は已信はずなほ下に云ふ事な考合べし）亦御名を天相命と申す由姓氏錄に依て定られたる古史徵の說の信に然る事なるに就て御名義を考るに天相は形を爲すの義なり仰て大虛を觀るに茫洋として一物の眼に遮ふ事無しと雖も其充塞する所の氣中に微細の質有るが聚りて能く形を爲すなり是以て能く形を爲し物を生ずるを產靈と云ふ微細の質の聚りたるが窄み集り相混成て形を爲す義にて天相命と申す御名の足魂神と同義に歸るを思ふべし氣を充て神を鎭て此身なるを思ふべくこそ（偖氣形神の三にて此全身に成れる上を以て思ふに氣は蒼天無際の塲に通じ神また宇宙に與なく往來す然るに形のみ僅に十里にもし百歲に竟るは甚怯き樣なれど然にす其形を爲すの本大虛の氣に在て初生より生長に至る此な食の爲のみと思ふは思の及ばざるなり微細の質天中より集り並て形を爲すなれば我の生るゝや此を天に受け地に形し我が死するや精神は天に復命し形體は地に返納

す何れか勝劣有むやも借其微細の實の凝結びて形を為す物金木土の外無き也○玉留魂神は神の神なり天之御中主神の天地未生ざりける時より高天原に神留坐々て高御魂神魂神より次々諸神等の神功を經て天地世界悉く成就整れる後に天照大御神成給ひ高天原を所知食す大御神と天上に上らせ給ひて常在に此世を御照し座坐す大御德を保給ふ事と成れるは天之御中主神と光を鑿せ德を合せ給へるにて此より天之御中主神は幽に坐て天照大御神の御光を顯したまひ天照大御神は顯に坐て天之御中主神の幽れたる御德を相扶御在す事と成れり是以て二柱の如く一柱の如ば勞働しき迄に御靈を合せ給ひて天地世界を主宰給ふ此故に古語拾遺に天照大神者惟祖惟宗尊無二自餘諸神者乃子乃臣誰敢抗と記せり然らば天之御中主神の御德に天照大御神に悉く歸して其神は無きかと思ふに然らず天之御中主神は天之御中主神にて別に其御德坐ます事云も更也然れども天照大御神と御力を合せ給て高天原を所知す事に至ては別ならず是天な照大御神は天地世界の大君主と坐て八百萬千萬神の本つ神と御在せるが故に天地世界の事共悉く此大御神の御心に出ずと云ふ事無し所以に神典の古傳に祖と坐す高御魂神魂神二柱も其御前の事執給ふ狀なるは如此る由緣に依る事なるが其高御魂神より禍津日神神魂神より大直日神成坐て其大御神の荒魂和魂の趣なるを以て思へば天照大御神天之御中主神御靈を合給て天地世界の本つ御靈の大御神たる事著明し高御魂神の禍津日神の本體と在して天之御中主神の荒魂なる由神魂神の大直日神の本體と在して天之御中主神の和魂なる由委しき考有て古始太元考また玉之御統に云るか如し斯てこそ彌々大御神は天之御中主神の分靈なる事疑無き物なり偖玉留魂神は古語拾遺に玉積産靈神と作り玉は借字にて正字靈なり偖多麻とは天之御中主神の天地世界に彌綸たる靈を賜の義に敢て事も無けれど尙熟思ふに多は物の連聯る意麻は天之御中主神の御にて眞字の意也令義解に招離遊之運魂鎭身體之中府と有る如く高天原に離遊ます運魂の一屯に固泥りて某が心と爲れる由なり然らば玉留魂神の名義靈聚魂神なる事疑無し老子に道之爲物惟恍惟惚惚兮恍兮其中有レ象恍兮惚兮其中有レ物窈兮冥兮其中有レ精其精甚眞其中有レ信自レ古及レ今其名不レ去以閲ニ衆甫ニ吾以レ何知ニ衆甫之然ニ哉以レ此と有る此眞諸大に我か古傳に契合て妙なりとも妙なり此に精と云ひ眞と云ひ中と云る物即高天原に神留坐す天之御中主神の御靈なり但此は予が得たる考に非ず平田翁天之御中主神は赤縣に謂ゆる上皇太一なる事を知て赤縣太古傳に記されたるに依れり然れど其說ざま少異なり素問の上古天眞論に黄帝曰余聞上古有ニ眞人者ニ提ニ挈天地ニ把ニ握陰陽ニと有る注に眞人謂ニ成道之人ニ也夫眞人之身隱見莫則其爲レ小也入ニ於無間ニ其爲レ大也徧ニ於空境ニ其變化也出ニ入天地內外ニ莫レ見ニ迹須ニ眞ニと有て眞の義を盡せりと云へし眞は實と熟する字也眞神に通て神の有なる知るに足れり偖多麻とは右の義にて一身に彌綸し體中に充實する意の語なり靈液に相預て神經に流通して衆務を統理し庶事を總判し萬物に感應て神明不測の妙用を爲す事生魂神の下に云るが如し心藏及び頭腦に耳在と云ふ事には

非ず然れども其多麻の天神より賜りて我有なるは心に都して寂然と靜り坐て頭蓋の下なる魂を用ひて其事を成令め給ふ此魂能く色聲香味觸と容れて外物を受又能思惟を爲すに其魄は元未心藏より生せり然れば視聽爲むと爲るも魂なり記臆せむと爲るも魂なり魄の視聽記臆も感せざれば知らず又言動も魄氣動きて神經を傳て筋を動し骨を動すと云り此魄を動す者は魂なり又思惟も魂の魄に交るなり譬へば天之御中主神の天照大御神と御靈を合せ給ひて地天の最中なる天日に常在に鎭座すは心藏の如く天極なる紫微宮（ヒノワカミヤ）に靜坐すは頭腦の如し心藏より頭腦に應じて顯幽の如く頭腦より天の大綱の如く無數の神經を蔓延して眼耳鼻咽喉口舌陰具身體諸部の諸器に循環りて諸の官能を爲しむる事天之御中主神の天極に坐つゝも無數の大綱を蔓延して天地世界に神留坐と其樣少しも異る事無し豈奇からずや身體の諸器悉く神氣を盛て有る故に視聽臭味感觸知覺動搖屈伸等の妙用を爲すなり是以て玉留魂神とは申せり留は積字をも通はし書る如し如此く充滿給ふ由なり若て其充滿に聚る義をも兼たる事云も更なり然るを鈴屋大人の說に留は留（トドメ）なり浮れ行く魂を留給ふ靈に坐す神なり」と云れたる多麻都米牟須毘の訓は實に然る事なれど浮れ行く靈を留給ふ由の說は上に引る義解の文を解得られざる誤より出たる也第一段高天原爾神留坐の下に注る事共を合せ讀て知るべし　此は何神ならむと考ふるに舊事紀に市千魂尊中臣本系帳に居々登魂命と兒興台魂命と有るぞ決く同神と通えたる有を平田翁の許々登多麻と訓れたるは惡し神代紀に興台產靈と作き姓氏錄に巳々登牟須比命と有るを照して牟須比と訓へし興台は平田大人說に心利の義なりと云れたるは然る事なれど其は未義にて其正意は許々登の許は天の御中に神充滿り坐す御靈の結ばり凝りて一人の心と爲る義なり津速產靈神を姓氏錄未定雜姓に葦田臣都早古乃命後と有を以て產靈の同義に古の言の有を思ふべし俗語に結ばる意に同じきを思べし平田翁說に心は凝なり神代紀に田心姬命姓氏錄に彥尾主田心命と云ふ御名見え萬葉二十卷に去々里古今集東歌に氣々禮と詠み凝海藻（コルモハ）を心太とも云れば許理とも許流とも許々呂とも云ふ事にて其理禮以は形容に從りたる言にて許とも許々とも云ふが本語なり古事記高津宮段に許々袁陀邇迦と詠るを以知べし但古訓本に許々呂と呂ノ字を補はれたるは中々に誤なりと云はれたり　然れば許々は凝々る意登は取の義なり高天原に神留坐は神の御靈なり我が形體に充滿ては其の心と云ふ事にて招離遊之運魂鎭身體之中府と有る招字鎭字の凝々取の語に同じきを思へば此に充る神は玉留魂神を置て何神か有む心を平にして考ふべし然れば神より充滿給ふを以て多麻と云ひ神に受て我身となれるを許々呂とは云也けり紀傳三十六三十五丁に許々呂は凝々なり海菜の心太も凝る意の名神代紀なる田心姬命の御名などを以て悟る可しと云れし如く靈は一身に彌綸して廣く心を作用に就て狹さなり能く思ふ可し多麻と許々呂との差異如此し世人此差別を知ざるが故に此際理を分て委しく云ひ得たりと思ゆる解說を我未だ見當らず」は心走いに心差試は心見なる事云も更なり　事の因みに此を云む靈

を神に得て我有なるを心と云ふが其神隨にして少も虛僞無き物を性と云ふ各々其稟賦の眞心にて我と人と同じからず人亦我に同じからず元は神より賜はりて稟得るにこそ有れ我と字して我たる本生の眞心なり　中庸に天命謂ㇾ性率ㇾ性之謂ㇾ道脩ㇾ道之謂ㇾ教と有て其道は同書に誠者天之道也誠ㇾ之人之道也と有る此なり說文に性人之陽氣也性善者也從ㇾ心生聲と有る人之陰氣とは陰氣に對る陽に非ず乾天陽爻に資たる由なるを陰に對る陽と思紛へたるにて實には中庸の說の如し段玉裁注に論語曰性相近也孟子曰人性之善也猶ㇾ水之就ㇾ下董仲舒曰性者生之質也質樸之謂と有るが如し○神代紀に惡また不祥不善之字を佐賀奈志と訓り其は本生の性に悖る由なり催馬樂管根の須賀奈伎事と有を梁塵愚按抄に須介(スケ)奈伎なりと注り今世に常に云ふ事なり○佐加志良と云ふ語有り萬葉集中に情進(サカシラ)とも□□とも書るは實には性痴の字の意にて愚なるより漫に事を破る由なり○佐加志伎は性類にて凡人よりは事の累(シキ)るなり賢ノ字を然訓み頑夫を然云も善惡の異こそ有れ性の類累(シキカサナ)りて利(サト)く有るなり　心の內に感くるを情と云ひ外に動くを思と云ふ共に心の作用にて表裏の義なり　如此く表裏反對の意を以て見ざれば能く其義を分ち難し　情は幽に在て顯に佗より能く知る所に非ず是以て神の御心の測難きを迎へ知る術をトと云ふ此與台產靈神の御子天兒屋命の此事を主り坐す謂の少緣ならぬを思ふべし　但伊邪那岐伊邪那美命の太占にト相て天神の御心を問奉給ひしに始れりと雖も此は占始太元考二卷に注る如く其術を云には非ず御情合せ爲給ふにて其事は同じきながら其法は殊也然れば天石屋戸隱の時を始と爲べし○情は心の內に感くるを云るが本にて顯に爲まじき物事を情と云ふ其證は男根女陰共に䏶良と云由古書に見えたるが䏶良は裏情(マツラ)也と平田翁の說有り古事記に見ゆ我情(ツラ)と有も顯に爲まじき物を見ねへるを耻恨給ふなり說文情人之陰氣有欲者從心靑聲と有る陰氣は內に心の感ろを云て性字に人之陽氣云々と有るに對へるならず禮記に何謂ニ七情一喜怒哀懼愛惡欲七者不學而ご有る如く恨めし羨やむト問ふト相(ツラナ)ふ情表し情進(サカサ)ふる情關(ツラツ)ふ言はしむ煩(ウル)さし痕(ウル)む離(ウル)け入禁(ウル)ふ嬉(ウレ)し何(ナ)ごむぞ狠狽(ウロタヘ)ろなど其外尙有るべし皆情(ウラ)の言を受けて云ふ語どもなり相照して其義を知べし　然れば情の言は得有にて外物來りて內感くる意の語なりけり　目物を見耳聲を聞き鼻香を臭き口食を味ふる時し善さ惡さか嬉さか悲しさか此を念はざる事を得ず此即情の思る事の本也　思とは心の外に動き發覺れて既に其事を遂さむとするに至る此なり色外に表るゝ由なり與台產靈神の御子天兒屋命の亦名を八意思兼神と申す神御在り上件の蓮を以て此を思ひ此を思ふに甚も奇異に靈じきまでなり言意は眞髓なるべし　眞は上に云る天之御中主神の眞にて精神この本體なり僞思は毛布と云が本義なるべくや凡て阿伊字延於の語は上に有は皆形容に添りたるさ思しくて其を省きても其語通ゆるなり思字說文に容也從ㇾ心從ㇾ囟さ有て囟は同書に頭會䐉蓋也象形と有り此に就て又思ふに情は心藏の感思は頭腦(ヒツ)の助なるべくや人思ひ有る時は頭より傳逓せる所の神經に靈波大に溢れて色必外に表る是以て人其像を見て其情を察する事を得るなり思影(オモカゲ)また面帶(オモシロ)また譯(オモム)きまた徐(オモム)ろなどの言語どもは皆此より出たり　思は事已に萠せるに成り事未だ無きに事を心に儲るに成れり自然聲に發はさゞる事を得ず此に依て言有り心を移し取て其指事を爲し象形を爲し宇宙の事物此を以て網羅せり然らば言は心取なる事云も更なり　此事辭代主神の注に委しく云れば此には略つ　言を爲すを言語と云ひ聲文を爲すを詞辭と云ふ其言語詞辭を迎へ取て神會するを智と云ふ其取の義なり　此に遲速有り速きを慧(サト)しと云ひ遲きを愚かと云ふ神會して心に決す此を以て此を知覺とは云り　備其言語を迎へて

心の缺を補ふ時は其心の作用自在なる耳ならず其靈を太く高く廣く大きく爲る事なるが其は神の御靈の依來坐て然るなり立返りて始に云る事共を考べし尙此事は辭代主神の下にも云る事有り照し合すべし如此して其の靈なるが此は善と字すべからず又惡と名くべからず隨在天神の靈なり物來て感じ事來て應ず是に於て荒魂和魂の用有り水の體は寂然なるに風來て浪を起し風靜りて又寂然なるが如し此荒魂和魂の用なり然るに水に潤下の性有り此水の稟賦にて上に云る人の性と云ふ物此と同じ意ばへなり此を近く諭さば荒魂は物を成すの意和魂は事を務むるの意なり天之御中主神の大御靈より高皇產靈神神皇產靈神成坐て天地と爲べき一物を天(アメノ)中(ミナカ)に生坐(アレマシ)けるに上六十三丁にも云る如く高皇產靈神の晋(タク)る御功は物を成すにて神皇產靈神の感くる御德は事を務むるに在て一物は能く成れるなり古事記に大穴牟遲與少名毘古那二柱神相並作堅此國然後者其少名毘古那神者度于常世國也於是大國主神愁而告吾獨何能得作此國孰神與吾能相作此國耶さ有るを神代紀に大巳貴神乃興言曰夫葦原中國本自荒芒至及磐石草木咸能强暴然吾已摧伏莫不和順遂因言今理此國唯吾一身而巳其可與吾共理天下者蓋有之乎と然(ホコ)り給ふも同じく唯荒魂のみ進みて和魂の乏しく在しなりと記傳十二卷に說れたるは然る言にて荒魂は晋みて物を成す德有と云へども晋み極りて度を失へば和魂の事を務る德隱れて物事麁漏に成行く物なれば佗を顧り見るに至らざるなり是以て幸魂奇魂神の依來坐て成令るも務令るも皆ながらに預鑄造給ふ事を示し驚かし給ひて其荒魂を押へ和魂を滿はしめ給へる物也けり天照大御神に禍津日神大直日神屬坐て其荒魂和魂と共ひ御在して世中の善事惡事を知食す由本居平田二大人の說有て動くまじく所思るに就て尙熟思ふに天之御中主神に高皇產靈神神皇產靈神屬坐て天地造化を主宰り給ふ御德の相混圓り坐る事決し然れば荒魂和魂は善事惡事の謂には非ず成すと務むるとの由なるが務むるには其守る所有て過度無きを成す方には其制する所無ければ度を超越て惡事に歸めり然れど善と云ひ惡と云る物支流(エダハ)有て本より二つに非ず其幹(モト)有て其幹(モト)より出たる支流なり善惡本一つなり事を爲すに能く事物相和(アヒカナヒ)たるを善とし相乖(アヒタガ)へるを惡とす譬へば夏日の炎熱なるに微涼を得て身を其中に置けば善なり堪難しと雖も氷雪を得て身暢此に苦まむ此度を過せるが惡事なるなり又冬夜の嚴寒なるに溫火を得て善なり快しと爲るに足れり嚴寒堪しと雖も猛火に身を投せば身體此に焦爛れむ此其程を失ひて惡事と爲れる也此二つの譬の意を能くし此を明めば思半に過なむ物ぞ然れば荒魂(アラ)の荒は彼有と云ふ意にて高皇產靈神の高に同じく散(アラ)け進むを云ふなり靜居して物成らず拱手して事整はず人各々天稟の事業有る所以此なり大倭神社注進狀に家牒曰云々大國魂神者大巳貴命荒魂與和魂戮力一心經營天下之地また八千矛神者大巳貴命以吾不爲枝豐葦原中國之邪氣さ有るを併せて此意を知るべし尙第六詞下に此文を引て云ふ事有るを見合べし此を以て是を見れば世中に幸ひ給ふ荒魂は高皇產靈神に生り禍津日神に成れる事著明し神代紀に高木神告之或天若日子不誤命爲射惡神之矢之至者不中天若日子或有邪心者天若日子於此矢麻賀禮云而取其矢自其矢穴衝返と有を以て天神の御詔め即高皇產靈神なるを思ふべし○倭姬命世記に荒祭宮一座皇大神荒魂也伊弉那伎大神所生神名八十枉津日神一名瀨織津比咩神是也さ有て禍津日神に天照大御神の荒魂なる事確に知れたり神宮雜事記に大御神の御誨し

有る毎に我者皇大神宮第一攝神荒祭宮也と宣ひて御事共有るを思ふべし因に云ふ神功皇后御紀に神風伊勢國百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命と名告せ給へるは決く荒祭宮の御事なり其證は同御記に天照大神誨之曰我之荒魂不レ可レ近ニ皇居一當レ居ニ御心廣田國一と有る詰文を以て思定むべき物なり故大人等の説に當らず　和魂の和は荒の反對にて去來ニギなるが彼なる物此に依就來りて治る由にて自然に饒はふ意を成せり神皇產靈神の感（感〈カム〉ハ神〈カム〉ニ非ズヤ荒魂ノ處ノ文ト互レ交セルナレバ決ク神ナル可シ）に其意同じ荒魂を以て事を成すに和魂內に在て務め守らざれば其事相整ひ其成功を遂難し（上に引る大倭神社注進狀に大己貴命荒魂與和魂戮レ力一レ心云々さ有るを考へしまた同書に大己貴命曰我和魂自ニ神代鎭ニ三諸山一而助ニ神奇之皆運一也と見え下に引る神功皇后御紀に和魂服ニ王身一守ニ壽命一とさ神の誨し給へるを思ふべし尙第六詞の下に云り）然れば世に幸給ふ和魂は神皇產靈神に成り大直日神に調れる事著明き物なり（大宣津比賣神の殺され給へる種つ物を神產巢日御祖命令取茲成種とも大穴牟遲神の八十神に殺され給へる時神產巢日之命乃遣ニ𧏛貝比賣與ニ蛤貝比賣一令ニ作活一とも古事記に見えたるが高皇產靈神の御所爲とは表裏なるを思ふべし○倭姬命世記に多賀宮一座豐受荒魂也伊弉那岐神所生神名伊吹戶主亦名曰ニ神直日大直日神一是也と有れど同記に皇大神第二攝神和魂多賀宮乎波豐受大神仁奉副從給者也さ見え御鎭座傳記にも多賀宮波伊吹戶主神天照大神第一攝神也依ニ神誨一奉レ傍ニ止由氣宮一也と見え御鎭座本記に依ニ天照大神御託宣一第一攝神多賀宮奉レ傍ニ止由氣宮也と有も同じければ平田翁說の如く皇大神和魂也と有けむを僻心得して改けむ事柄然き物なりかし然るに伊勢大神宮式に多賀宮一座豐受大神荒魂と有に就て今一つの考有り多賀宮を俗に高宮と云へば和魂宮の名に似著はしからず元より豐受大神の荒魂宮なりしを天照大神の迎取奉給へりしは其豐受大神の衣食住の御守の世に遍からむ爲なるが故に其荒魂の御荒びなど勿らむ爲なる所思して皇太神の和魂神直日大直日神を副隨へ奉給びしにや有む和魂の御本體と共に御在す事と通えて古事記なる須佐之男命の御荒びの件に大御神の詔命に如レ屎者醉而吐散登許曾我那勢命爲ニ如此一雖ニ言直一とさ見えたる如くなるに神功皇后御紀に撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命と御名告坐るは皇大神の荒魂なるに和魂の坐ざるを不審しく思て有つる次に稚日女尊と御名告坐るぞ皇大神の御本體にて即和魂の副御在るにぞ有ける同御紀に神有レ誨曰和魂服ニ王身一守ニ壽命一荒魂爲ニ先鋒一而導ニ師船一とさ有るを併て著明き物なり然れば和魂は皇大神の御許を須臾も放御在まじき理なれば其分魂を多賀宮には副從給へるなりけり此を以て見れば多賀宮は豐受大神荒魂と祓られたる式文に隨べくぞ所思る然れど世記傳記本記共に神直日神大直日神の皇大神の和魂なる由なれば隨ふべきなり但多賀宮を傍奉る由は依難し多賀宮に坐豐受大神の荒魂に皇大神の和魂を併給ふ物さこそ考得らるれ其は神代紀なる保食神の條に天照大神勅之曰是物者則顯見蒼生可ニ食而活一之也さ有る御心を測奉るに保食神の穀物に甚しく御魂を藏め給ふ樣なるを以て知れたり）然れば荒魂和魂とは素より凶惡吉善の義ならず本體の靈の作用にして情思の淵源たる物なり此活機妙用を知らば功を積み德を修め神習カムナラフの極に至ると云べし（立返て上に説る玉留魂神の下に云る事共を考合すべし神習とは古事記中巻に我御世之事能許曾神習さ有る此を云なり尚下に說く事有をも思合べし）偖荒魂和魂は本體の靈の作用なるが其は上に云る如く高皇產靈神皇產靈神の預鎔造給ふ御靈にて人に功を績み德を脩しめ給ふ事にて其因る所は幸魂奇魂に在り（此段の始に云る事共に熟く讀み熟く味はゞ柄然けむぞ）幸魂は記傳十二（二十三丁）に私記に是左支久阿良之死留魂也と云て字の如く其身を守て幸有する故の名なりしと云れたるは實に然る言にて顯宗天皇御紀に預鎔造と有る意なり荷前を萬葉に荷向と書る如く向へ晉み至る義なり又記傳十七（三丁）に凡て物を得るは身の爲に吉事なる故に幸とは云りと云れし如く預鎔造給ふは皇神の御靈の向に及ぶなるが其受賜る方にては幸の義と爲れり

但記傳に幸魂奇魂共に大國主神の和魂大物主神の御形を現はして如此示し教給ふなりさ有るは心得ぬ說なり大物主神の大神に鎭坐す事は皇御孫命に此國を避奉給ふ時の事にこそ有けれ已に云る如く神坐日向神社に已命を守護給ふ幸魂奇魂神の鎭坐すに依て後に又其所に鎭給ひ其幸魂奇魂の預鎔造給ふ御德を合せて皇御孫命を守奉給むさなり奇魂は高皇產靈神皇產靈神の御靈を幸はへ預給へるに依て奇異なる事を成就由なり凡世間の人の事業の上を觀るに此を人に受難く亦人に授難き妙處有る物にて其人に非ずば能得難く其人に非されば能く成し難き奇異なる處有る物なり此即幸魂の幸有て出來る事にして奇魂の奇く靈しく妙なる御輔佐に依る物なり幸の語は眞來にて又割と同義也皇祖天神の御靈より割れて此身を守給ふ由也奇の言は來爲（クシ）にて皇祖天神の御靈の來りて其事を爲しめ給ふ義にて又奇字の意をも包たり二卷なる第五詞の下に云を考合すべし　如此く考定めて今一層上を思ふに幸魂は荒魂に通ひ奇魂は和魂に通ひて其本來の魂に屬て彌々其作用を就しめ又成すの謂なり神代卷口訣に幸魂奇魂者一魂兩化之名幸魂者先念而先臨而就奇魂者不念而成是即天命一身之主也と有るは此意を得たる說なり口訣の說は全く荒魂和魂に引着たるなり奇魂者不念而成さ云るも我が解說に大に近し　斯く永々しく說弘めては見つれ共其歸る處は悉く天之御中主神の全體の本靈天照大御神此を知し看す　其本靈に就て高皇產靈神皇產靈神の幸魂奇魂に依て荒魂和魂有り禍津日神直日神此を主宰る　本體の靈に荒魂和魂を具へて性（サガ）となる玉留魂神の御所爲

なり性即心也興台產靈神此を保給ふ心は性の本體性は心の稟賦なり　心性有て後に情思有り思兼神此を知る此又二物ならず表裏內外の差なり　思を言に述ぶ人に語ては人の神を益し我此を聞ては我靈を太くす如此く環の端無きが如く結ひ圓がりて何某の心たる事奇異とも靈しとも云知ずなむ有る上件に注る心共に能く心を着て味ひ又我が心に驗し見て其妙處を悟り究むべし　○大宮乃賣神は大殿祭詞の下に委しく說るが若く豐受大神の亦御名なり神名式に造酒司坐神六座と有る中に大宮賣神四座並大月次新嘗　と有るを以見れば此神の造酒を司し食す御魂を稱申す御名なりけり同式丹後國丹波郡大宮賣神社二座名神大　と有を社傳に豐宇氣持命豐宇賀能賣命と傳たる同神の御名を二つに分て其なりといふは審しき樣なれど尙能く思ふに二柱に分て齋祠れるにぞ有ける谷川士淸の說に姓氏錄曰山城國神別神宮部造葛城猪石岡天下神天破命之後也六世孫吉足日命磯城瑞籬宮御宇天下有災因遣吉足日命令齋祭大物主神災異即止天皇詔曰消天下災百姓得福自今以後可爲宮能賣神仍賜姓宮能賣公然後庚午年籍註三神宮部造也因是考之所謂大宮賣神即大己貴命而非舊事紀所謂太玉命久志備所生之大宮賣神也何則八柱神中當有大己貴命云々と有れども其は辭代主命を大己貴命の御子と在す事代主命に取紛へたれば取難き說なり　右の如くにて大宮賣命は豐宇賀能賣命なるが丹後國風土記に爰天女善釀酒飮一盃吉萬病除復至竹野郡船木里奈具村即謂村民等云此處我心奈具志久乃留居此村斯所謂竹野郡

奈具社坐豐宇賀能賣命也と有を以て此神の酒を知食す事を明らむべし然れども元來御食神と御在るに依て其元由を以て大殿祭詞には觧別白久大宮賣登御名乎申事波云々皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒襁懸伴緒乎云々と有るを假初に見ては其伴緒の方重き狀なれど尙御膳物に手躓足躓を爲令め給はざら令め給へと乞申す事云も更なり又親王云々は衣食足て後人心正を得可き爲に朝乃御膳夕乃御膳の事を人の上にも及したるなり此は神名式に丹後國竹野郡奈具神社と見えたる社の故事なり神宮の書どもに酒殿神一座豐宇氣比賣神神靈器坐也伊弉諾伊弉冊尊所生之和久產巢日神之兒止由受比女是也と有る和久產巢日神ば伊弉諾伊弉冊神の所生る神に非れども酒殿に祭神の傳は明也偖大殿祭詞に依るに豐受大神の分魂の木神草神と成坐て住處の事を整へ成幸給ふ御名を屋船神とも大宮賣命とも申して實に其義なれども此に一つ混はしき事有り天宇受賣命の亦御名を大宮賣命とも申せるが同名異神なり此豐受大神を稱せるは大宮造に就て申す御稱なり天宇受賣命を稱せるは天照大御神の大宮に侍坐て大宮仕へ爲給ふ由の御名なり此神の酒殿に齋れ給ふ故を以て今一つ臆說有り宮は借字にて眞榮ミハヤにても有むか其は上八十四丁に說る眞にて其を榮し坐の由ならむと思ゆればなり眞は靈液に盛る所の神氣にして一身を經絡する物此なり上に生魂神の下に云る事共を思合すべし酒また諸穀のサケ精眞なる物にして穀氣の尤粹なる物也此を以て眞氣の義なる事云も更なり中臣壽詞に所聞食由庭乃瑞穗遠云々悠紀仁近江國野洲主基仁丹後國氷上遠齋定弖云々大嘗會乃齋庭仁持齋波利參來弖獻留悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁所聞食弖豐明仁明御坐云々と有るを始め諸の祝詞共に酒と食とを二つ並て云ふ事なるが赤丹乃穗爾所聞食弖豐明仁明御坐は鈴屋大人の說に大御酒を食て大御顏の照り明らひ坐を云ふと云れたる如く酒氣の神經を能導くを以て色に出赤らむにぞ有ける時珍か本草綱目に酒行二藥勢一殺二百邪惡毒氣一通二血脈一厚二腸胃一潤二皮膚一散二濕氣一消レ憂發レ怒宣レ言暢レ意養二脾氣一扶レ肝除レ風下レ氣と有るも正氣を強くして邪氣を払ふの能なり酒の眞氣なる事此を以ても見つべし此を以て見れば生魂神の呼吸を以て充實給ふ所の氣尙補ひ養ざれば日々に減ず此を以て穀氣を以て此を補ひ此を養ふ此大宮賣神の天皇の大御身を守護給ふ狀なり因みに云ふ凡人として食せざる者無し食に氣無き者なし釀るを耳云には非ず酒を飮さる人と雖も萬物の眞氣を用ひざれば身を保つまじき理本よりなり木草の種々の酒名有て其物も種々なり此を以て酒氣の無き物絶に有らざる事を思合すべきなり諸穀物に悉く酒氣有る證は五元神の御在ざる前に五元氣有て萬物の成れるが如し然れば釀して後酒なるは釀ぬ前に有る穀物の眞氣を湊めたる物と知べし此に就て今思へば上に引る御鎭座傳記に多賀宮伊吹

戶主神 天照大神 第一攝神也依ニ神誨ニ奉レ傍ニ止由氣宮ニ也と有る本緣を探索るに多賀宮は豐受大神の荒魂の本來鎭坐す宮なるを天照大御神の和魂に坐す伊吹戶主神を傍奉給ふは食に氣を傍て益々其眞氣を盛給ふなり伊吹は氣吹なるを思想奉るべし 諸しこそ皇國の食物の萬國に卓れて美きは更にも云はず眞氣中に凝るゝが故に其味の美き事萬國に並び無し此故に人皆神氣盛にして萬國の人の且ても及ぶまじき勇猛多力なり皆食物の眞氣の能く然有令る物なり ○大御膳都神は古事記に大宜都比賣神と見えたる御名に等しくして神名式には御食津神と有り 同式に大膳職坐神三座と有る中に御食津神社と有も同神を祭れるなり四時祭式鎭魂祭條には御膳魂(ミケムスビ)と申せり此神に産靈の御名御在す事然も有べき御事なり 鈴屋大人云御食津神の津の下に之を添て唱るは僻事なり凡て某津と云語に然る例無し一と云れたり 津は之と同じき辭なればなり 此は豐受大神に坐り明文抄に載る大倭本紀に天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面子鈴一合也と有る本註に一鏡者天照大神之御靈名天懸大神今伊勢國礒宮崇敬拜大神也一鏡者天照大神之前御靈名國懸大神今紀伊國名草宮崇敬拜大神也一鏡及子鈴者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神今卷向穴師宮所坐拜祭大神也と有る一鏡及子鈴を平田大人說 古史徵に釋紀の文を引る下 に、一鏡は古事記御天降の段に登由宇氣神此者坐ニ外宮之度相ニ神者也と有を合せ思ふに登由宇氣神の御靈實に坐し子鈴は神名式に大和國城上郡卷向坐若御魂神社 名神大月次相嘗新嘗 也と有る神の御靈實になむ坐しけると云れたる如く伊勢國の度會宮に鎭坐す豐受大神を御食津神とは申せり 但此大倭本紀の文は釋紀にも引るを甚く誤れる事の有に依て明文抄の正しき方を引り故大人等も此明文抄に載る事は未見知られずぞ有ける 外宮の延曆儀式帳に天照坐皇大神大長谷天皇御夢爾誨覺賜久吾高天原坐氐見志眞岐賜志處爾志都麻利坐奴然吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食坐故爾丹波國比治乃眞奈井爾坐我御饌都神等由氣大神乎吾許欲止誨覺奉支爾時天皇驚悟賜氐卽從丹波國令行幸氐度會乃山田原乃下石根爾宮柱太知立高天原爾比疑高知氐宮定齋仕奉始支是以御饌殿造奉氐天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と見えたる如くなれば大御膳都神は豐受大神に坐事疑有まじき物なり倭姬命世記に調御倉神宇賀能美多麻神坐亦號大宜都比賣神亦保食神神祇官社內坐御膳神是也と有り 神宮雜例集に引る大同本記の文に此初の文を吾高天原爾在時素戔嗚尊乃十握劍乎索乞三段打折互所生三女神乎宇佐島降居道中奉レ助ニ天孫ニ而奉ニ天孫ニ所レ祭止詔之須勢理姬乃齋奉禮留神今丹波國與佐乃比沼乃眞名井坐且道主王子八乎止女乃齋奉御饌都神止由居乃神乎吾坐國欲止誨覺給支と有り倭大御神の御言に我御饌都神と詔給へるは我御饌を司る神と申す事也故大人等の我齋祭る由に云れたるには非ず但此世記の文に宇賀能美多麻神坐とは稻穀の御靈神と申す意にて須佐之男神の大市比賣神に娶坐て生坐るとは異なり思混ふべからず此事第二詞下に云へり御鎭座傳記に和久產巢日神子豐宇氣姬命稻靈神也と有る例なり 倭大御膳都神は記傳五五十三丁に大食

と說れたる如く御食を知看す神に坐て足魂神より受賜はる所の形體を養し育給ふ大神に坐り然るに平田翁の說に此神は衣食住共に知る御功坐りと云れたるに起されて偖熟思へば大食の氣は衣食住の資を云る稱なりけり氣は來にて外より來りて其形體を輔相るの名なり豐宇氣毘賣神また保食神など云ふ宇氣を得來なる事云も更なり又衣食住の物の資大凡皆草木を用ひて成る令義解に土地之所生爲毛也と有など彼是思合す可し 其衣食住の中に食物のみ尤今日の急なるに依て受ばりて專食物に云ふ稱と成れゝども實は其に限るべき非す 食物に喰と云ふは來歷の義なり衣服に着と云ふは來有なるが古事記中卷の歌には着有とも着令有とも詠せ給へり舍屋を住宅と云ひ大宅と云ひ屯倉と云ふなど外より來て形體を輔相る事必せり 或云食物衣服などの資は本より土は如何にも他より來て形體を補くと云べきを住處に至ては本より着せる物なり他より來て其身を補るに非ず我往て其に住なり此は如何答云此に住處と云物は其地盤を云に非ず其地盤に建る舍屋を云ふなり其舍屋の成れる樣は木を山に採り草を野に求む木を柱とし桁とし梁とし戸とし扉とし草を筵とし葺草とし繩さしなど其外にも他より聚て舍屋を爲に非ずや然らば予が說又強たるに非るをや 偖此神を祭らるゝに此詞なるは大御身の御守護の爲に齋奉らせ給ふに依て衣食住の事を兼て祀らせ給ふ事云も更なり廣瀨祭詞は新穀の豐登を祈らせ給ひ大殿祭詞は家居の事に就ての御祈どもなるが悉く此豐受大神の御恩頼を仰ぐ御事なりかし 偖其詞の下に云ふを見合せて悟るべきなりまた第七詞の下に悉く明せり見合べし○辭代主神は姓氏錄左京天神に畝尾連天辭代命子國辭代命之後也と有る天辭代命なるが同書和泉國天神に畝尾連大中臣朝臣同祖天兒屋根命之後也と有るに合せて天辭代命を興台産靈神に國辭代命を天兒屋命に當て古史に亦御名と爲られたるは然る言なり同書右京天神に伊與部高媚牟須比命三世孫天辭代主命之後也と有る世數を以て此を計ふれば愈詳なり 高媚牟須比命を津速産靈神の親に係て數ふれば其三世は興台産靈神なる事必せり 此を以考ふるに天辭代主神國辭代主神を一柱と爲て此八座の中に祭られたるにぞ有ける 古語拾遺に此を事代主神に作れたるは誤なり神名式にも然作れたれども此詞また六月月次祭詞また四時祭式にも辭代主と書るは正字なり辭と事と同詞なる故に互に書誤る事は古くより有る事なり 偖此神を如此く祭せ給ふ事は玉留魂神の御德を加給はむ料にて殊に止事無き由緒有る事なりけり其は上八十八丁に粗說る如く言語の用は我思ふ事を人に傳へ人の情己に迎へ容て尤々しきは此を心に取て我靈を太く廣く物爲る事にて食物を以て形體を養育て成長しむるに別ならず此を以て師弟の道有り敎ざれば愚なり靈は神より賜ふ所なりと雖も神失る事譬へば神の結び成し給ふ身と雖も食せざれば飢痿るゝが如し 靈も本生たる儘にては其幼き物なり初生よりは二歲に

増し二歳より三歳に増て聰明に成る然るに性質魯鈍に生たるは其限りに非る事譬へば鼬鼠の弱き兒童と雖も年月に其身太く肥て生長するが倘堅實なる人に及ざる如し　如此なる道理にて小兒の間は父母の敎訓を聞保ち漸長ては各其好む所の道に入其敎を受る事なるが其敎と云物は書典に記せるも言語を以て傳らるゝも手術を以て受るも皆各々事を知り己が智を廣く物爲るにて事の極みは言語より外無し然れば言語は人の靈を導くの使令なる事云も更なり又言語を以て傳ざるも其容貌を見其行事を見ても其意を識る事有り其も何事何意と言語を以て解かされば悟る事能はず何にしても道れ竟ましき事也けり　鈴屋大人說に神の御靈は一つの火の如くにして其を幾千萬に別ても其火は其火にて燃えながら倘本火は本火にて明なるが如く神も御靈を幾つにも別坐る事なるが其分靈の方は如何に太く大きなる御稜威の坐むにも猶本の神は本の儘にて尊く坐り以上取意と云はれたるが如く人に師弟の道有て授受の敎有る事なるが授る師父の靈は一つの火なり受る弟子は其幾千萬にも分たる火を得るにて其即師たる人の靈の支派を得るなるが弟子其を得て愈我が記聞を博くし識神を太く爲と雖も授る師父の靈に損無く却て其德を大きく爲るに非ずや此亦言語の用に在ずして何ぞ然れば敎るは我か靈を人に賦るなり學ぶは人の靈を我に得るなり師弟授受の事に限らず平生に人と應對する事は趣を考見よ人の得意せる事は穿ても聞まく欲く我に得意の事有れば強ても語らまく欲しき人情ならずや然れば言語は靈を導き靈を養ふの器たる事明なり　倍言は上八十八丁に注る如く心取なるが取は象字の義なり心に思ふ事を取象て人に傳るを語と云も象有にて人の其ことゝ想像すべく言傳るに依て然る名有り又聲に遷し送るを以て聲取の意をも含めり此故に赤縣文字の法の如く指事有り象形有り轉注假借有り言語に右の義を含蓄する故に自然と人語を聞ては其趣意を想像るゝ事妙なりさも妙なる物なりけり　倍人に言を傳るは身體の中府に鎭る靈有り物に觸れ事に感けて心に一つの思を生ず此に御爲られて身體の中府なる靈根の元氣身外に出て風氣を引き下りて聲を起し出る時に元氣風氣相交りたるに靈此に御して人の耳より入て人の身體中府なる靈根に收る元氣本無心なりと雖も是に有情の聲を添れば有心の音と爲りて思ふ事總て言語に見る然れば心は聲に依て見れ聲は氣息に於て象はるゝにぞ有ける風また天地の氣息なる事神典の古傳に昭なり此即無心の風物に觸て其響を爲すが如く又石を水中に投れば浪の遠くに動るも如し金石絲竹匏土革木の類ひに聲有るも皆風氣の其物に觸て音を鳴すなり聲は氣の物に激(キシ)り迫れるに因る事榫を以て空を打ば撓みて聲音を發すを以て知べし上に記せる生魂神の注を引合せ讀み味ふべき物なり　古事記に下照比賣之哭聲與レ風響到レ天と有る如く一言半語を爲すと雖も天地の風氣を扇動令しむる事なれば其響天に通ゆべき事勿論なり然れば言語は愼まずば有べからず皇祖天神高天原

より此を墜給へり老子の語に人生ニ天地氣中一動作喘息皆應ニ于天地ニ爲レ善爲レ惡天皆鑒レ之勿レ謂ニ闇昧一鬼神報レ之勿レ謂ニ小語一鬼聞ニ我聲一人爲ニ陽善一人自報レ之人爲ニ陰善一鬼神報レ之故天不レ欺レ人示レ之以レ影天不レ欺レ人示レ之以レ響此皆自然之府也と云れ葛稚川の天高聞レ卑其後必受ニ斯碑一也と云るなど我が古傳に能契合せり易繫辭に子曰君子居ニ其室一出ニ其言一善則千里之外應レ之況其邇者乎居ニ其室一出ニ其言一不善則千里之外違レ之況其邇者乎言出ニ乎身一加ニ乎身一行發ニ乎邇一見ニ乎遠一言行君子之樞機樞機之發榮辱之主也言行君子之所ニ以動ニ天地一也可レ不レ愼乎　古語に言靈能佐吉播布と有るは我輩にも要と有る言なり國とも事靈之所佐國とも稱へて皇國の言語はしも言毎に具れる御靈神御在て幸給ひ佐給ふに依て其靈威灼然として言に就て事清く事に依て言美はしき事萬國に又比類無きは天照大御神の御生坐る御國皇御孫命の無窮に知食す御國なるが故に瑞穗國と此を稱へて擧國稻穀の美好き食物とす是以て血液涸濁ならず清澄なるが故に聲音極めて清み言語悉く鮮明なり此を以て禀賦の美質有て德行また萬國に比類なし孔子家語また淮南子などに食穀者知慧而巧と有るは然る言なり皇國を除ては赤縣印度より始て諸蕃の國どもは稻穀の性甚脆く淡しく惡きさへ有る其また甚希少にして綜ての人の糧と爲るに足ざるが故に禽獸を食とし魚貝を糧に充つ是以て人性殘忍にして憐愍の情無く汚穢を忌憚らず清潔を悅慕ばず其は其平生食として性命を繫ぐ所悉く穢物なるが故に其穢物の爲に血液清澄ならず溷濁せればなり是故に

玄を學び仙を希ふ者食を斷ちて後其身清潔なる時を得て登仙するを皇國は穀を食て神位に至る人多かり外國人は赤縣印度などの人ども若(トモ)すれば食を斷ちて道を求るげなるは甚淺ましく聞ゆるを尙熟く思へば其穢物を食ひては其穢氣の爲に道を得る事難きに依て成す事と見えたり風土の惡しきに生れたる人の道を得難き事斯の如し又憐むべき事ならずや其に引替て皇國人も犬戎を慕ふ徒など畜を食ひ獸を食ひて國典に背ける人多かり斯計り善はしき瑞穗國に生れて何の不足有てか然る穢物は食するや延喜式の御定は天下の公法なり豈此に背くを是と云めやも　如此く氣と形と神との條理を分別て云ふ時は此有る差異有るに似たりと雖も元始(モトツ)は高皇產靈神皇產靈神の太元の一氣に本就て成ずと云事無きを萬國と多在る中にも殊に此皇國は氣は天地正帶の正氣なり形は穀氣精英の正形なり神は剛直清明の正神なり此三つの正を得て皇國の神民たり豈此を悅ばざらむや萬國の人と雖も神の造化に資らでは生出まじきを皇國の人のみ獨萬國に勝れて此上(コヨ)無きは殊に所由有る事なるを餘りに煩はしきに依て別に云べきなり　此まで云る事共に合せても此なる辭代主神はしも天之辭代主神國之辭代主神に御在して大國主神の御子と坐す事代主神には非る事を知るべし大國主神の御子なるは大國主神の亦御名を大物代主神と申す對にて事代主神とは申せる也物代は崇神天皇御紀に物實此云ニ望(モ)能志呂一と有る其にて俗にも代物(シロモノ)など云ふと同じ然れば物と事と相對たる御名にて此なるとは異也唱の同じきを以て思誤る事勿れ又平田翁の事代主とは古の信(シロ)を立給る由なりと云れたるも信難かり何の事も無く事代主神は物に屬たる事を知食すと云ふ義の御名なる事古始太元考に云ふを待べし○鈴屋大人說に祝詞考の誤を辨て云れたるは然る事なれども古事記なる大國主神の言に僕子等百八十神者即八重事代主神爲ニ神之御尾前一而仕奉者違神者非也と申させ給ふ所以由にて殊に天皇の

御守神なればなるべしと云れたるは心得ず大國主神本より皇御孫命の御守と仕奉給はむ御契約有れば尚更にこそ祭らせ給ふべきに豈事代主神をのみ取出て祭らせ給はむや此八神を一貫して考べき事を思ひ漏されし物なり但此は伯家部類に事代主は國土を献て忠誠勳功の神なりと有るに依て思ひ混られたるにこそ

皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋奉茂御世爾幸閇奉故爾

皇御孫命御世乎手長御世登云々は第七詞に此と同文有て其下に云るが若し又大神宮六月月次祭詞また神嘗祭詞に御壽乎手長乃御壽止と有に同じく御世は御壽と云むが如し所知食す御世の事には非ず但下なる茂御世は此と別なり如此く申させ給ふ事は萬葉十一に千早振神持在命誰爲長欲爲と有が如く神の有たせ給ふ命なるを以なり所以に其反なるを二に虛蟬師神爾不勝者と詠み九に朝露乃銷易杵壽神之共荒競不勝而などと云り 世と云る語は此全世界を彈く取綜て云ふ言也其は竹に節と云ふ物有るが節と節との相間を然云ふ如く世全界は無邊無際にして極限有る事無しと雖も其全世界と指云ふ所即其極限なるが故に世とは云ふなりけり萬葉二卷に天地之寄相極所知看神之命等六卷に天地乃依會限萬世爾榮將往迹と有る如く天と地と寄相ふ極みを世と云ふなり師說に世は寄なり老莱子に人生ニ於天地之間ニ寄なりと有りと云れたり此に就て思ふに素問五運行大論に黃帝請ニ天師ニ而問之曰地之爲ㇾ下否乎岐伯曰地爲ニ人之下ニ大虛之中者也帝曰馮乎岐伯曰大氣擧ㇾ之也と有る馮字を余流と訓り師說の鈌を補ふべくなむ 宇宙の事全我が事なり我一人を以て見る時は天地間の事一人の有なり是を假借て人の一生をも世と云ふ又年月は天地の經歷する次序なり是を以て年をも世とは云なり年を世と云ふは歌に君が代は千代に八千代にと云ふ此なり此は世數を以て云ふには非ず 天皇御一人此世を保たせ給ふ事なるが故に御世と云ひ君が代とは云なり平田翁の五十音義訣に云れたる事をも考合すべし 手長は神名に天手長男神天手長比賣神とも有て手は足の意也萬葉二卷に天原振放見者大王乃御壽者長久天足有と有る此なり古事記高津宮に余能那賀比登と有る如く世に壽長く御在す事を如此く云る也但此は鈴屋大人の出雲國造神壽後釋に說れたる說なるを實にもと思ゆるに就て今は引直して引り多退(ジロ)く多遠し多同(タモト)ほりなど云る多(タ)は皆足の義也足より多太(タダ)の義をも包たる事にて物を嚴めしく大く云ふ言と成れり ○堅磐爾常磐爾は如堅磐如常磐と同じ爾は辭なりと雖も比喩の物より受たるは皆如字の義なり中臣壽詞に八桑枝乃立榮仕奉と有る乃と同辭なり春日祭詞に伊加志夜久波叡能如久仕奉利佐加叡志米賜と有るに引合せて八桑枝乃の乃字如の意なるを知るべし如字を古く那須とも能須とも訓り本居翁の似すなりと云れたる如し ○齋奉は下に幸閇奉と有る對にて古文の例必然なり出雲國造神壽詞に天皇命能手長大御世乎堅石爾常石爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閇奉と有ると事の狀同じ不祥ぬ事を忌避て善ら令るを云て此は神の方より天皇の御爲に忌ひ奉りて萬に惡き事無く善ら令るを云ふ伊波比は大殿祭詞に汝屋船命爾天津奇護言乎古語云久須志伊波比許登以氐言壽鎮白久云々言壽鎮奉と有る鎮字を本居翁の伊波比と訓べし此も祝申なりと云れたるが如く堅磐の如く常磐の如くに鎮奉給ふ神の御守護を申せり此は神代紀に高皇產靈尊勅曰吾則起ニ樹天

津神籬及天津磐境ニ當爲皇孫奉齋矣と有る神勅に本着て齋奉とは云なり（護字鎭字祝字齋字などを書たるを見互して此言意を悟るべし本朝事始に齋部私記云天磐笛事代主命製之奉ニ天孫瓊々杵尊ニ以磐爲也以祝ニ天孫ニ也と有るも此に言状似たり）伊波布は其根基の堅固不動なるを祝ぎ云語なるが佐伎波閇は其枝葉の茂盛繁榮する由の祝ぎ言なり然れば伊波布は齋延（イハフ）佐伎波布は幸延（サキハフ）なる事云も更なり（伊波布は物の體に就て云ひ佐伎波布は其用に就て云りとこそ思ひたれ萬葉十一に身被爲齋命と咏るを思ふべし）○茂御世（爾）は大殿祭詞に五十橿御世と記きて其字の義なり中臣壽詞に八桑枝と有る如く橿を以て譬に取れるなり（五十橿は正字にて茂は借字にて義を以て當たるなり五十橿は齋橿にて御紀に嚴橿と有ると同じ意なり）又八束穗能伊加志穗など云る伊加志も此と同じきが今一義を含めり其は上（第一段）に云る如く嚴たま重字の意をも兼たるなり（八桑枝に茂木榮の意を兼たるは此に全く同じ）茂御世とは御世の茂く榮させ給ふを云り如此く天皇御一己の御祈の如くなれども意は天下萬民に亘る御事也其は譬へば道饗祭は宮城四隅にて祭らせ給へば唯朝廷耳の御事なるにかと思ふに詞に天下公民（爾至留萬氏）と有を以て此も彼も天皇より奉始てなり○幸閇奉（流）故は此八柱神等の天皇の大御身の守護神と御在し坐て御壽を御心足ひに長く在しめ奉り知し食す御世をも茂く榮しめ奉給ふ故にてなり（天皇の大御身のみならず天下に在と有ゆる人此神等の御恩頼に依ずては生出る事無く又世に得有まじき所謂なり然るを第一段にも云る如く天下の事を悉く天皇御一人に係て申せる事古の常なり實に天皇の御蔭に依て立る世中なれば然有べき理なりかし）幸閇は上（百一丁）幸魂奇魂の下に云る如く佐伎とは先に神氣の伸出て全けから合め給ふ由なり（然れば佐伎波閇の波閇は延（ハヘ）なる事顯々著明かり萬葉に東人の荷向の篋の云々と有る向字此意也）然れば伊波布は其物の坐ながらに成就るを云ひ佐伎波閇は動きて能事の成就を云ふなり（萬葉五巻に意無久幸久往且と咏るな思ふべし）

皇吾睦神漏伎命神漏美命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎（スメラガムツカムロキノミコトカムロミノミコトトスメミマノミコトノウヅノミテグラヲ）稱辭竟奉久登宣（タヽヘゴトヲヘマツラクトノル）

皇吾睦神漏伎命神漏美命（登）は第一詞に高天原（爾）神留坐皇睦神漏伎命神漏美命以天社國社登稱辭竟奉と有るを受て結たる文なり尙第七詞に此と同文有る下に委しく云り考合す可し古語拾遺神武天皇段に奉仰從ニ皇天二祖之詔ニ建ニ樹神籬ニと有る此なり此なる登の辭は皇天二祖の詔を指すなり（但予が說の如くは第一詞の下に云べき文なるを此詞に云るは由無しと思ふも有べけれど互に省ける古文の法なり且第一詞は祈年に預給ふ總ての神に申せるなれは此八神にも其詞を申させ給ふ事云も更なり然るを此詞は殊に申させ給ふ由有て別に稱申給なり）然れば登の辭は（爾氏）と云むが如し其例明御神登御宇天皇など申す登なり（鈴屋大人說に此は皇祖ならぬ神等も有れども厚く矜み給ひて皆皇祖神として登給ふ由なり登と云ふ辭是なり萬葉十四に信濃なる千曲の川の細礫も君し踏てば玉登拾はむ此玉登の登に同じ玉ならぬ石を玉として拾はむなり是にて心得べしと云れたれど此詞どもの首尾を考得られぬ

辭事なり 斯在む皇祖天神の詔命に依て天社國社と稱辭竟奉給ひ恒例の祈年以下の御祭典も皇祖天神の詔命に依て行はせ給ふとなり立返りて第一段詞の下を考合すべきなり ○宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と有る宇豆乃幣帛は祈年の幣帛の外に奉らるゝ物をも合せて云り四時祭式に高御魂神大宮女神各加馬一疋と有り 此八柱の中に高御魂神大宮女神に別に馬を奉らるゝ所由詳ならず何の因れ有て斯在り初けむ今知難し若くは高御魂神は諸神の上首と在すに依て奉られ大宮女神は御殿の守神と在すか故にても有るべし 稱辭竟奉は鈴屋大人說に奉は獻る意又祭る意有る言なればば稱辭を竟て獻ると云ふ意に爲る也偖如此く神漏伎神漏美命の稱辭竟令め奉給ふ事は神代紀及古語拾遺に高皇産靈尊勅曰吾則起二樹天津神籬及天津磐境一當下爲二吾孫一奉上齋矣汝天兒屋命太玉命宜下持二天津神籬一降二於葦原中國一亦爲二吾孫一奉上齋焉と有る此にて此は殊に皇御孫命の大御守護に關係る所由なり容易く意得べからず尙第七詞の下なる此と同文の所に云る事有り其差異を知り分つべし序に云ふ神代紀拾遺共に高皇産靈尊一柱の趣なれども此詞に神漏伎命神漏美命二柱有るからは神代紀の傳も決て高皇産靈尊神皇産靈尊と有つらむを一柱は漏せりしなるべし又此祭神八柱の其二にも叶へれば必然有し事疑無し

考に此語を省に過たりと云れたれど然らず と云れたり 第一段稱辭竟奉の下に委く云り

延喜式祝詞講義貳之巻

嘉永元年十一月十五日

淡路國　鈴木重胤　著
丹後國　稻葉英好
出羽國　田村足根　挍

座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久

此は神名式に神祇官西院坐座摩巫祭神五座並大月次新嘗生井神福井神綱長井神波比祇神阿須波神と有る神の祈年祭詞なり三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授ニ神祇官無位生井神福井神綱長井神波比祇神阿須波神並從四位上一と見えたり古語拾遺神武天皇段に爰仰ニ從皇天二祖之詔ニ建ニ樹神籬ニ云々座摩是大宮地之靈今坐摩巫所奉齋也と記されたる此にて御溝水の神に御在り四時祭式に御川水祭座摩巫各行レ事と有にて知れたり此に依て思ふに座摩は考の一說の如く井之塘にても有らむか井之塘即ち溝にて御溝水なる事云も更なり拾遺に大宮地之靈と有るは大宮地は御溝水を以て堺と爲るなれば然も云べき事なり記傳十二に神名式に和泉國和泉郡積川神社五座此も此五神を祀る由或書に見ゆと云れたり此或書は和泉志なるべし積川と云ふも御川水の事に由有るか神武天皇の橿原宮に初國知食し時より御溝水の守を兼て堰の神と齋奉給ひし物なり堰は田に引する水なる故に殊なる由を以て此祈年祭には賛給ふ物なりけり考に座摩は本攝津國西成郡の所の名にて神名式にも座摩神社大月次新嘗と有り此下に皇神能敷坐下津磐根爾云々と有る文に依るに古昔より此大神の敷坐し所に仁德天皇宮造爲給ひて宮中に齋坐し故に其後大和山城と京を遷されても同じく遷し齋はれて其を座摩と云しなるべし」と云はれたれど拾遺の說に合はず且仁德天皇の大宮處の神と在らば其後の都には更に大宮地の靈として齋奉給ふべくも有ぬ物なや下に云るを考合べし○記傳十二に越前國足羽神社の有に就て往時(サキ)に思けるは彼座摩御巫祭神五座は本繼體天皇の越前に大坐々し時其國に殊に尊崇給ひし神等を御位に即給ひて後京城にも齋祀給ひしより傳はりて後の奈良京にも同し如祭(ツ)られしにや彼福井神は越前坂井郡坂名井神社又今福井と云處も有り又綱長井も彼同郡部那高志神社と名似たれば也若然らば攝津國の座摩も孝德天皇の難波宮に坐し時彼五神を祀られし跡なるべし備右の考に依る時は阿須波は本越前の地名より出たる神名なり然れば波比岐も又同じく本は地名にて彼國に有し神社なるべしと思しかども猶然には非で彼足羽社も此の阿須波神を祀れる物と思ふ也備後に或書を見れば越前足羽社記曰古昔男太迹天皇居ニ於坂井郡三國之地ニ焉於是鎭ニ祭大宮地之靈ニ故呼ニ足羽ニ以爲ニ地名ニ也と云る此說古き傳と聞ゆ大宮地之靈を鎭祭とは此の阿須波神を祭給ふを云なりと云れたり今按ふに神武天皇の御世より始て此五座神を大宮地の靈として必齋祀給ふ常典なりし故に繼體天皇は未天位に即せ給はむとは思ひ懸給はざりし程なりしかども京城を遠く放(サカ)り住せ給ふ事なる故に大宮地の靈を崇祀給ひしものなるべし斯て其祭は御溝水に就て物爲させ給へども其を取較て云ふ時は井神と竈神に御在り此に就て思ふに此詞に皇神能敷座下津磐根爾云々また拾遺に大宮地之靈と有るは井神竈神は皇御孫命の敷座す大宮の内に祭祀らせ給ふ神なるに反様なる云狀なるは如何にと云ふに人の住處に就て安居するに其身を養ひ保つ可き料に寳重み爲し尊かる物は井と竈との用也此を以て此神等を大宮地の靈神と先齋祭給

ひてぞ有める 凡て神典を見る物此自佗倒反の見解有るに非れば皇典の上に於て盡し難き事多かり此世間は人より云ふ時は人の世とこそ見ゆれ寔には神の世に人の住居る事云も更なれば必如是く云むこそ實理には能く叶て有けれ既に第一ノ詞には天下百姓の農作（タツクル）る事を天皇の御上に係て今年二月爾御年初將賜登爲而と有る故實をも思べき事なりかし

生井榮井津長井阿須波波比支登御名者白氐辭竟奉者

生井神榮井神津長井神は本居大人說に古事記に大國主神婚ニ稻羽之八上比賣ニ云々故其八上比賣者如ニ先期ニ美刀阿多波志都故其八上比賣者雖ニ率來ニ畏ニ其嫡妻須世理毘賣ニ而其所生子者刺ニ狹木俣ニ而返故名ニ其子ニ云ニ木俣神ニ亦名謂ニ御井神ニ也と有る此御井神なるべしと云れたる說の動くまじく所思るに就て御母と座す八上比賣の事を索隱ぬるに竈神の御女と通えたり八上は因幡國の郡名なれば其に因るかと思ふに然らず八上比賣の神名有て後に郡名とは爲れるなり 先師等の地名に依れる由云れたるは本末の違有て依難し景行天皇の大御命に大倭國者以ニ行事ニ負レ名國也と詔給へるを思べし 神名式に同國同郡久多美神社と有る久多美は降水にて竈神と決く聞えたるが少緣ならぬを思ふべし 出雲國風土記に暴雨久多美之山と宣ひし言有て神名式に楯縫郡玖潭神社有り又萬葉二に我岡の竈に云て零せたる雪の摧し其所に落けむと有るなどを思ふべし此には其委しき考有りて古始太元考に云りき 大和社注進狀に丹生川上社者當社之別社也と有るは殊に由有る傳なりけり然るは大和社は神名式に大和國山邊郡大和座大國魂神社 並名神大月次相嘗新嘗 と有るを八千矛神御歲神相殿に並坐て大國魂神は大國主神の荒魂に坐て靈形は平國之廣矛に坐し 此等の委しき事今茲に用無れば其大略を云のみ 丹生社は神名式に大和國吉野郡丹生川上神社 名神大月次新嘗 と有て祭神闇龗命と諸書に見えたる事實に徵し見て御井神の源流を思ふ可き物也然らずば突然に御井神を生坐すべき所謂無き物をや 神等の御子を生坐る樣は凡人の如く不意（ユクリナ）く男女を生成とは異にて必其生坐む御子神に用有るに因て其事に由緣有る神に御合坐て御意と成し坐る也凡人すら子を得む爲に母を撰ぶに非ずや大國主神の龗神に因み給ひて御井神を生坐る本緣妙也とも妙在けり 若く此御井神を三柱に稱別たる由は生井神は行井神にて流水の神なり即御溝水を大宮に引せて大に用を爲し給ひ江河にしては堰以て塞分て民用に足らしめ給ふ御功坐り 但神代紀に生レ海生レ川と有るは海神川神を生坐すなるが其川神は罔象女神に御在すを此神は惣ての水を掌給ふ神なるを此なる生井神は其用有る方に用（ツカ）ふ流水を知食すにて凡ては實からず有るなり上にも云る如く座摩は溝なり神功皇后御紀に發定ニ神田ニ而佃之時引ニ儺河水ニ欲レ潤ニ神田ニ掘レ溝と有るを以て知べし漢籍釋名に田間之水曰レ溝溝搆也縱橫相交搆也と有る字義は井之手の言意に大に近し 榮井神は神名式に福井神に作り榮井神は醴泉神なるべし和名抄に醴泉 古左介伊豆美 と有る此なり 本草綱目に時珍曰醴泉酒也泉味如之故名出無ニ常處ニ王者德至ニ淵泉ニ時代昇平則醴泉出可ニ以養ニ老瑞應圖醴泉井之精也味甘如レ醴流之所レ及草木皆茂飲之令ニ人多壽ニと有り然れと其までは非ず只泉の事なり禮記の禮運に天降ニ膏露ニ地出ニ醴泉ニまた泉有ニ光華ニ曰ニ榮泉ニと見えたるも此に似たり前漢書郊祀志に食ニ甘露ニ飲ニ榮泉ニと有るは禮運より出たる也 津長井神は神名式に綱長井神と作きて古說其字の如くなりと雖も津の字を正字と見

て今一説有り地下に伏道有て遠く其脉より來りて溜る由なり然れば井泉神なる事云も更なり（本草に井泉水時珍曰井字象井形泉字象水流穴中之形と見ゆ又凡井水有遠從地脉來者為上と有るを思ふべし）如此く生井神は流水榮井神は醴泉津長井神は井泉と各学分守座す御功德を以て稱別たる御名共なるか（但如此く御井神に三の別御名坐すに似りさ雖も大凡に號たる別御名の如く思は麁漏なり第三ノ詞の下に已にも云る如く御靈を分け御功德を別て一柱神さ成坐るなり世の人此由縁を知ざる故に説得たる説無し）水は物を潤し生育るを以て用と為るが其第一義は火食の物に和へ糞以て人の食餌と為し人を養ひて能其性命を保しむるを其功の極みと為るが各其能を別にする所有て知食す事と通えたり然ればこそ生とも榮とも津長とも御名に負坐て顯には其井に就ての御名坐し幽には其功に依ての名義坐り（此の生榮などを稱名さのみ見るは書典の上の事知にて事實を踈く為る僻學の見解にこそ有けれ老子に執古之道御今之有能知古始是謂道紀と有るにも耻ざらめやも實に神典の學は深く遠くしあれて道紀有るの人ならでは窺難き事耳多かり）斯在れば生井神は水氣の能く邪穢を蕩滌し清むる功を以て清氣を増し神經を通暢して筋骨を强壯ならしむるの謂なり（本草に主下五勞七傷腎虛脾弱陽盛陰虛目不能瞑及霍亂吐利傷寒後欲作奔豚さ有るを考合べし）榮井神は水精の萬物を潤澤し能く茂盛令しむる功有を以て人體を保合し延年益壽の良能有る所以なり（本草に心腹痛疰忤鬼氣邪穢之属並就泉空腹飲之と有れと此耳ならず上に引る瑞應圖なるは正功なり）津長井神は水の能く五味を調和して各其本然の味を有しむる事尤靈なる所なり人體に入て津液を滋潤し精神をして枯燭せしめず常に安在しむ此即此神の御守に在なり（本草に井水新汲療病利入平日第一汲為井華水其功極廣また時珍曰井泉地脉也人之經血象之云々人乃地產資與山川之氣相為流通而美惡壽夭亦相關渉金石草木尚隨水土之性而況萬物之靈者乎と有るを考合べし）如此く氣と形と神とを各々学分在して各人身を化育為給ふ所に為て天地神祇の蒼生を保護し給ふ事尊しとも辱しとも云知らずなむ（如在る説を見ては漢學者めきて強りに言痛しと云ふ人も有らむかなれども宇宙の間に布行るゝ所の神の御恩頼に就ては汗牛充棟の書を記したらむにも盡し竟べくもあらぬを倘幾許の言痛く有むとか為る知すは詮なし拱て止とも可けむも如斯く正しく見得たる事は人には縱言痛かりとも憚む物かは）

○阿須波神波比岐神は竈神に坐り其は儀式また大嘗祭式に於齋院祭神八座と有て御歳神高御魂神庭高日神大御食神大宮女神事代主神阿須波神波比伎神と小記せる高御魂神大御食神大宮女神事代主神は御巫祭八座の中より殊に擢出て祭られ給ひ御歳神は第二詞に云る如く稻穀を作る事に就て最初に祭られ給ひ庭高日神は古書に庭火皇神とも宮比神とも記して竈神の本體なり此阿須波神は大柴神波比岐神は灰燒神にて即其竈神の屬なり所以に同式に酒米事云々祭井神次祭竈神始醸酒日亦祭酒神云々祭山神と有り此竈神山神は阿須波波比岐神に係れるを

思ふべし此の井神は上に云る御井神なる事云も更也酒神は大宮女神なる事第三詞の下に注り山神は大山祇神を祭る事本よりなるが其は山に就て凡て物を知食す神なるを薪さ爲す時は阿須波波比岐神の事さ爲れり其は右の續に凡造酒司酒部一人率ニ燒灰一人薪使五人ニ入ニ卜食山ニ先祭ニ山神燒得藥灰一斛所ニ小斧釿鎌各一柄明櫃二合苫二枚と有るを以て定むべし儀式にも此事見ゆ下に引可し阿須波神は大柴の神ならむと云由は阿に大の義有る例は儀式に鋪レ地以ニ束草ニと有る本注に所謂阿部草と有にて知べし式には地敷ニ束草ニさ有て所謂阿都加と注せるは草字を脫せる物ならし萬葉廿二十丁上總國防人歌に爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波伊波々牟加倍理久麻低爾と有を鈴屋大人說に此歌に庭中之と詠るを以て常昔民家の庭に竈神など〻共に此阿須波神をも祭りし事知べし今云今世にも竈神を祭るには竈上に花瓶を置き其に松また諸の木枝を刺す事有り此事なり右、歌の末二句を味ふに彼阿須波神は己が家在には非で行方の宿々の家に祀れるを齋つゝ行むと詠るなれば何國にても家毎に祭る事知れたり袖中抄に上總國に阿須波神御在すと云るは非なり又爾波奈加を彼國の地名と爲る說も惡し〇今云谷川士淸が日本書紀通證六に鹿島本緣曰阿須波大明神社在ニ下總國香取郡ニ是祭ニ大己貴命兒阿須波命ニ也蒙行發駕之日就ニ此神ニ而禱レ之今俗稱ニ首途ニ曰ニ鹿島立ニ此緣也と見ゆ但此神を大己貴命兒と有るは非なり古事記に阿須波神波比岐神共に大年神娶ニ天知迦流美豆比賣ニ生子さ詳に見えたるを大己貴神の御子健御名方神の信濃國の諏方社に坐を以て取誤たる僻說なり國國に阿須波祠と諏方神と混れたるが多かりとぞ此說の如く竈神と共に祀られ給へるが炊爨の事に就たる御功は此二柱神に御在せば同じく竈神と稱して祭りけむ事著明し然ればこそ式には祭ニ竈神ニとは記させ給へる物なりけれ並河某が攝津志に河邊郡阿須波神祠在ニ米谷村ニ今稱ニ荒神ニと有るは凶家に竈神を荒神と云より唱併たる物なるべし然れど阿須波神を竈神さ云ふ一證に備ふべくや阿須波神を齋部に祭らるゝは何用に依ると云ふに儀式又式共に燒灰一人薪採四人と見え中臣壽詞に物部乃人等云々灰燒薪採云々等大嘗會乃齋庭爾持齋波利參來弖と有れば決く御薪の神に御在り紀傳十二巻に足冩の意にやと云れたり然れど阿須波神名義未考得ずと本文に注されたれば翁の本意には非るなり取べからず年中行事歌合に御薪百敷の百官の御薪に民の竈處ば賑ひにけり」と有り然れば此は正月に文武の官人の進る御薪を詠るなれば此に預らずさ雖も御薪の竈に山有る事を少かいふのみ波比岐神は燒灰神と云ふ證どもは上に引る如くなるが竈に火を焚く事の就る狀を云ふ名なり儀式に十一月上旬始釀ニ内院御酒ニ云々次各燒ニ藥灰ニ使酒司酒部一人率ニ燒灰並夫五人ニ向ニ卜食山ニ祭山神云々其住山一宿燒得藥灰一斛訖和御酒五斗和ニ内院白黑二酒ニ五斗和ニ大多米院白黑二酒ニと有る此は酒に和する藥灰にて別なれども灰燒の職掌を知るに足れり式にも此事有り上に細注に引り然れば阿須波神は竈に焚くべき薪を掌給ひ波比岐神は其薪を燒きて物を煮る事を掌給ふ御功坐すが大年神の御子と在す事も少縁の由緒には非りけりなほ第二詞なる御年神の注を熟く讀み熟く味はゞ云知らず奇しく妙なる旨趣有る事思ひ得むかし儀式又式に祭山神と有るも唯に山神耳を祭らるゝに非ず此神等をも含たる也儀式に十月上旬云々祭ニ八神ニさ有て竈門井山積意加美水神と小記ぜるを據として此の本末を照し應ぜて知る可なり此五柱神を大宮地之靈と齋祀給へるは火食の事に就て必然物し給はでは叶ふまじき道理な

り如何にと云に人の世に長存る事稻穀の資生に依る事云も更なるが其稻穀は水を以て浸し火を以て炊かざれば食餌と爲る事難きを稻穀は水田に作りて外より來るを井と竈との二つは其居所に就て必有に非れば其事を調べ難かり此を以て大宮地に齋祀給へる神には有れど其固有する故を以て皇神能敷坐下津磐根爾云々とは申給ふなり（尚上に云る事共また下なる其詞の下に云る說なども合せ讀て其義を味ふべし然れば考の記傳の說二つ共に依り難し）

皇神能敷坐下都磐根爾宮柱大知立高天原爾千木高知氏皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氏天御蔭日御蔭隱坐氏四方國乎安國登平久知食故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣

皇神能敷坐は地に水火の資有る其處にと云ふ義なり水の井に汲るゝは地中に水脈有て流通するが故なり火の薪木に然るは地上に火氣有て依託くが故なり然れば此二物は固有して土着せる資なり此を以て其用を爲す所を以て其體を爲給ふ皇神の敷坐す地とは云なり居所有と雖も水火の用乏しければ此に住べからず食餌有と雖ども水火を以て烹煮なさざれば人を養ふべからざればなり古文の神妙此一句に在りて其の味ひ窮無し（地に依り乾地さ云ふ水脉なき處有り又水脉有りさ雖も鹹水などにて人の用に宜しき處有り此は人の住處と爲べからず此水火の用足の地を得て人此に住べし此詞妙ならずや但火は物と含まざる物無し神代紀に火神を斬給へる血の磐群樹草に灑ける故に草木砂石も自然に火を含む由傳たるを思へし如此く火は萬物に含有りと雖も薪木を得されば火の德を成し難し水を煮るに非れば火の功を遂難し能思ふ可くこそ）此水火の用足りて人此處に生息爲可し

大宮地之靈といふ所以は如此く成るを此神等の主領き坐る地有て其處に大宮造り爲給ひしより後々都を遷されたる時々も常例として如此く申させ給ふと爲ば其新京の地に元より鎮坐す神の必御在むに對ひて甚無禮しき事ならずや己が心には神名式に攝津國西成郡座摩神社（名神大月次新嘗）と有るや仁德天皇の大宮地に齋祀らせ給ふが都を他處に遷されたる後も却て其處に遺給ふ物とこそ所思たれ熟く事實を思ふ可くなむ（考說記傳の說とは反せり心を就けて考合すべし此座摩神社の舊地昔の渡邊岸さ云ふ邊に在て形ばかり遺れり京なる座摩祭神五座も御川水の神と齋かせ給ふに合せて思ふに難波高津宮の御溝水の神とも申べき邊なり上條良材說に當波高津宮の舊地は今の御城の地此なり松永貞德か戴恩記に云々と見えたるにて知可しと云り此說に依て神名式なる東生郡生國魂神社二座並名神大相嘗新嘗さ有るは決く弟詞下に云ふ如く生島足島神なる其も此城地に固より坐けるに豐臣關白の此城を築れし時此社も座摩社も共に他處に移替られたる事人の知如くなるが戴恩記に證して高津宮の舊址なる事彌必せり倍城內と座摩社地と僅の隔なれど西成郡東生郡さ郡の別れたるは御城の邊より東南を係ては東生郡西北を係ては西成郡なりし事云も更なり仁德天皇の大宮の舊址さて內安堂寺町さ云邊にあるは實物に非るを攝津志の說に依て記傳にも然定られたるなれど共に誤なり）然れば此は大宮地の地主の神には非ずして大宮地の靈物の神に御在り靈とは御恩賴

の義なり 考に右の神等彼座摩の地を本より主領き坐し事此文にて知らる今京を建給し時園神韓神の社を宮内省に祭らるゝ類なりしと云れたれど其とは異なり其は古事談五に園韓神社者本自坐二大内跡一而遷都之時造宮之使等可レ移二他所一云々于時託宣云猶坐二此處一奉レ護二帝室一仍坐二宮内省内一と有て今京にての事なれば別なり譬座摩神は仁徳天皇の大宮の地主にも有れ其は難波宮にての事にこそ似着はしからめ佗所より地主神と請して祭ると云ふ所謂は勿ろ可き筈なり又仁徳天皇の舊都の地主ならむからに其後の京に祭給はむには大宮地之靈として祭給ふまじく唯其御守の事に就てこそ稱給はめ皇神能敷坐云々の詞は何ぞや 敷坐は其任を及ぼすの謂なり萬葉に天皇之敷坐國また百敷乃大宮處と詠み常にも屋敷と云ひ物に及ぼす事に布レ徳など云志久此なり此を知に通はして宮柱太敷を宮柱太知など云ふに似たれど敷は此よりさきに布し及すの意知は彼より此に歸り順く意にて等からず 人の家をトる處を屋敷と云ふも一己の構を物するなり大宮に百敷と云ふは諸官の舍宅を多く構て大きく敷坐す由なり冠辭考の說信ひ難し天皇之敷坐國と云ふも天下を我有と爲給ひて悉く統御し給ふ由なり知は歸順(ヨル)べき物を掌る由にて當然の義を云なれば此の敷とは大に同じゝ小異なる所有り能く味へ見るべし萬葉六卷に山代乃鹿背山際爾宮柱太敷奉高知爲布當乃宮者と有るは敷と知との差異を能く別ちたり 然ればれ井神竈神の水火二ッの御恩頼を布及し給ひて皇御孫命の大宮敷給はむ料の儲を物爲給ふ義にて文意甚明けし 此にて地主ならぬ由を思定むべし地主なるまじき由を知て見ざれば恐らくは此神等の御功徳を悟得る事有ざらむかし

○下津磐根爾宮柱太知立は皇御孫命の敷坐る大宮處なれど上に云る如き子細有るが故に皇神の敷坐す下津磐根にと言を易て申させ給ふなり 第二詞に皇神等能依左志奉牟奥津御年乎云々八束穗能伊加志穗爾皇神等能依左志奉者と有る如く百姓の耕し種る事を如此く云て其事を神に係たると同し 記傳十五十九丁に大殿祭詞に此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美下津綱根波府虫能禍無久高天原波靑雲乃靄久極美天乃血垂飛鳥乃禍無久堀堅多留柱云々と有る如く凡て上代には神宮も人の舍宅も伊勢神宮などの製の如く地を堀て立る故に 今世にも賤が家には是有り堀立と云ふなり地上に石居を爲て柱を立るは後世の事なり 此稱辭有るなり石根は殊更に礎を爲るには非ず地底に本より有る磐根まで深く堀て立ると云義なり 於高天原云々は高きを云と對て見べし 其は柱の立るが堅くして動無き由ぞ」と云れたるが如し○太知立は太敷立とも廣知立とも廣敷立とも諸祝詞に見え古事記には布刀斯理と有て共に同じ 但此には知と敷と通はし云れど少か意味に異なる事上に云るが如くなり第二の詞壓問高知の下見合べし 神代紀に其造宮之制者柱則高太板則廣厚と有る如く柱は家の鎭なる故に下津磐根に至る迄に太く堅く築立るをはめ云なり顯宗天皇御紀なる室壽の御詞にも築立柱者此家長御心之鎭也と詔給へるを思ふべし 上代に舍屋を造には先主と柱の事を云し事記紀共に伊邪那岐伊邪那美二柱神の天之御柱を見立て八尋殿を作し給し事の有を以て知べし萬葉二に眞木柱太心者と大にして不動心を譬へ同二十に眞木柱善(ホメ)て造れる殿の如と稱たり尙大殿祭詞の注に委しく云ふを待べし 鈴屋大人說記傳十卷に此稱辭を唯柱の上と耳心得れと然に非ず其主の其宮を知坐を云ふなり 今云此詞にては皇御孫命の大宮敷坐す事を云り 萬葉二三十五丁に水穗之國乎神隨太敷座而又一二十一丁に太敷爲京乎

置而又（二十七丁）に飛鳥之淨之宮爾神隨太布坐而など柱ならで國を知坐に云れば唯廣く大きにと云稱辭也（宮柱太敷坐と續きたる坐にても主に係れる事なるを知べし）太知も廣知と云るが如く柱に係て云には非ず其宮の主に係れる語なるを布刀と云が柱に縁有るから宮柱太とは云係て兼て其宮をも祝たる物也（布刀御幣布刀詔戸太占なども云へり）萬葉一（十八丁）に宮柱太敷坐者又二（二十八丁）宮柱太布座御在香乎高知座而又六（十四丁）に眞木柱太高敷而又（四十三丁）宮柱太敷奉高知爲布當乃宮者又廿（五十丁）に美也婆之良布刀之利多豆々など有り」と云れたり（今は甚く文を省きて引けり考說は記傳に辨られたる如く凡て依難し）○高天原爾は記傳十（五十九丁）に深く」と云むとて下津磐根爾と云に對て唯高き事を云古語也」と說れたる如く此は唯大虛空の方に千木の高く聳たる事を云む料也如此く對云例は古事記に是我所燧火者於高天原者神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟之八拳垂摩弖燒擧地下者於底津石根燒凝而などの如し（大殿祭詞にも此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美云々高天原波青雲乃靄久極美云々など其餘にも有り然れば下津磐根は地下の深きを云ひ高天原は大虛に高く顯るを云ふ響のみに取るにて外に意なし）○千木は聯木の義なり古事記に氷椽とも氷木とも作きたるが合木の由にて千木氷木ともに異なる事無し（新古今集に夜や寒き衣や薄き片挨の行逢の間より霜や置らむ」と有る此を住吉神の御歌と爲るは云ふにも足れど行逢の間と詠るこそ予が此意を得たる說なり故試に引つ下に引る和名抄に波延岐と有るは決く此なるを和名抄の頃には上古の屋造の製變けむ故に椽檐と搏風と別物の如く別て傳はれりしなり）記傳十（六十二丁）に和名抄古本に搏風辨色立成云搏風板比宜楊氏漢語抄說同と有り（流布の板本には比宜と云事無くて和名知ン字と有り）大神宮延曆儀式帳にも正殿一區云々上搏風肆枚（長二丈八尺弘八寸厚四寸）號ニ稱比木一と見え外宮儀式帳にも比疑高知と見えたりと云れたるが如し（神武天皇御紀に故古語稱之曰於畝火之橿原也太立宮柱於底磐之根峻峙搏風於高天原而始馭天下之天皇と見ゆ）借令千木は聯木比木は合木にて同義の語ぞ」と云由は右の儀式帳に上搏風四枚と有る長材を二ッに組合せて草の噪無き爲に屋棟より下し垂て其背たる屋上を堅め持せたるなり（記傳に上代の屋造に屋の左右の端に有て其本は前後の軒よりして上りて棟にて行合ふを組違へて其末を長く上へ出したる物にして其棟より上へ高く出たる處を氷木とも千木とも云なり」と云れたるは此事なり）屋より外に其半を出せるは其權衡に物爲るなり此を以て千木の高きは其度に屋の廣きを譬なり（今俗に輕重を稱る器を千木とは云へり屋上の千木より假借せる名目なり）考に千木は垂木なりと有る說に心留りて此を味るに顯宗天皇御紀なる室賀の御詞に取置椽橑此家長之御心之齊也と有る椽橑正しく此なる事取置ると云を以て知れたり（豐受大神宮貞和御餝記に組目上謂ニ千木一組目下謂ニ搏風と有るを右に引る和名抄に合せて思ふに然も有可く思えたり）和名抄に衆名苑云橑一名椽和名太流岐漢語鈔云波閇岐と有る波閇岐は延木にて比木と云に同じきを思ふ可くこそ（考に垂木の多理を約て知さ

云ミ云れたるを始め凡ての說依難し且記傳に比木千木共に脇木にて其比知の下を省けると上を省けるさの差耳なれば本一つの名なる故に通じ云るなり云々と云れたる精說も有れど予は從はず ○高知は記傳に此も唯千木の事耳に非ず主の其宮を知坐を云ふ高も上の太と同じく稱言なり聖武天皇御紀即位時の詔に天下乃政乎彌高彌廣彌云々萬葉六十七丁に吾大王乃神隨高所知流云々又三十二丁に自神代芳野宮爾蟻通高所知者云々此歌以て意得可し宮爾さ云れば宮の高きを云に非ず天皇の此宮を高知坐なる事明けし○今云高は記傳三高天原の下に云れたる如く虛空を高と云るなるか千木の虛空に高く著く偉たるを云なり此に高知坐の意を兼たるにて高に健く嚴なる意有て天皇の大御稜威の高く長く御在す事を自然含めり 借千木は棟上へ高く上る物なる故に其を云係て兼て其宮をも祝たる事萬葉一十九丁に芳野川多藝津河內爾高殿乎高知坐而又二十二丁に荒妙乃藤原我宇倍爾食國乎賣之賜牟登都宮者高所知武等云々又六十三丁に和期大王乃高知爲芳野離宮者又四十四丁に吾皇神乃命乃高所知布當乃宮者云々是らも皆天皇に係奉て云るを思へ此宮柱云々比木云々さ云は甚々上代より定れる宮造の稱辭にして甚も雅たる詞なりと有○瑞能御舍乎仕奉氏は天皇の大宮を作り仕奉る也大祓詞後釋云仕奉とは造奉るを云ふ凡て下なる者の上の爲にする事をば何業にても仕奉さ云ふなり今俗言に仕(ツカマツル)るさ云ふは即仕奉るを訛れるにて其仕るも物を造る事にも云ふ此の仕奉も其に同じ大祓詞には美頭乃御舍仕奉氏さ有る其御舍の下に爾と訓附るは僻事なり祈年祭詞には此舍乎と有る其意なり大祓詞には乎ノ字無ければ乎とは訓べからず乎を省て云も常なり 瑞は鈴屋大人說に物の美好(ウルハシ)きを稱め云ふ語なりと云れたるに依て今思ふに物の形象の美好きは不足所無く滿具(タリトヽノヒ)たるに依れゝば釋紀廿三十三丁に瀰都瀰都志は滿々也言充滿也と有る如くならむか美頭さ美都と本同言なり然るに後世に此を分てるは非なり然れど唱へば淸濁を時習に隨べしと雖も言は古義を求むべし 然れば瑞宮瑞御殿瑞籬瑞穗國など云ふ瑞は全此滿字の義なり瑞字は祥瑞嘉瑞など熟する字なる故に物の美好きを稱云ふ事に當れる字なり記傳に瑞字の意に非ずさ云れたれど說文に瑞以玉爲信也など有る義を一途に見られたるなんめり 是以て記傳十三三丁に水穗國の水は借字にて滿々然(ミシキ)なりとは云れたり但本には假字書なるを今は其意を得て滿々然と改め引り借冠辭考に美部志久米能古良賀と云ふ發語をなきて若く健なる人を稱て美部々志とは云なりと有ど大祓詞後釋に擧られたる如く美部に健なる義無し然ば此發語の續け樣を思ふに久米部は道臣命統(クル)めて率る人等なるが大に屯聚(イハミ)たるを稱て滿々し久米の子等さ歌はせ給へる物なり又冠辭考水垣條に瑞てふ語は先は草木の若く美麗しく榮ゆるを云より萬物を讃稱て瑞云々さは云けらし萬葉十三に五十槻枝丹水枝指さ咏み世にも若木を水木若枝を瑞枝など云ふ」と云れたれば草木の若く美麗しく榮ゆるを云より萬物に及して瑞茱と云ふには非らず瑞は滿にて本より萬物に亘る形狀の言なるを木草の上にも假借て云るなり但後歌に水莖の岡の云々續けたれば瑞に稚き意有る事云れたり岡を稚の意に見て如此は云ふなり 御舍は記傳十四五十一丁に美阿良訶と訓む記玉垣宮段又朝倉宮段などにも天皇之御舍と見え遷却崇神詞にも皇御孫之尊乃天御舍と見え大殿祭詞に皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿古語云阿良可 古語拾遺に瑞殿古語美豆能美阿良可 萬葉二二十八丁に御在香乎高知坐而など有地の枕詞に阿良訶泥能さ云も舍根なり地の舍を建る根なればなり底津石根爾宮柱布刀斯理と云を思べし○今云此は久方之天に對ひて散根之地なる可くは其は神典の古傳に天地の始判る時に混成る物也しが其中より淸輕なるは昇て天と爲り濁重の物は降て地さ爲れる有樣を以てぞ

云初つらむ漢籍三五曆紀に古昔天地未レ分云々清輕者上爲レ天濁重者下爲レ地盤古在二其中一神二於天一聖二於地一萬八千歳天極高地極深云々とさ有る如く天地遠く散けて立たる趣なれば天は地より遠きに立るを以つて久方之天と云ひ地は天より遠きに散け立たる故に散樹之地とには云習はしたりけむと思はる又古語拾遺橿原大宮造の處に仍令下天富命太玉命之孫率二手置帆負彦狹知二神之孫一以二齋斧齋鉏一始採山材構中立正殿上故其裔今在二紀伊國名草郡御木麁香二鄕一古語正殿謂二之麁香一採レ材齋部所レ居謂二之御木一造殿齋部所レ居謂二之麁香一是其證也と有り和名抄に名草郡荒賀鄕有り御木鄕と云は見えずと見えたる如し名義は在所なりと云はれたる宜し佳家正家などの例なり但今一說に在波詞にても有べし何處を波詞など云ふ波詞にて其(ソコ)と定まりたる處を云ふと有るは迂遠なり借此迄は御殿を造仕奉る方より申す詞なり次に天御蔭日御蔭隱坐氏は其御舎に住せ給ふ御上を申なり能く文意を分別すべし○天御蔭日蔭御蔭止隱坐氏は萬葉一二十三丁藤原宮御井歌に高知也天之御蔭天知也日御影乃水許曾波云々と有ると同じく舎の用は雨を凌ぐ蔭日を覆を蔭と云ふ事なり考に天を覆ひ日を覆ふが爲の屋なるを文に斯く云成せるなりと云れたるは天は雨の假字なる事を思ひ得られざりし說なり又出雲國造神壽詞に伊都幣能緒結天乃美賀氣冠利天と有るを後釋に此は木綿を頭に着る事なり其は御殿の事を天御蔭日御蔭登隱坐と云る如く空に覆ふ由にて頭に冠る物をも文に斯は云るなり日影之鬘と云ふも日光を覆ひ隔る山の名なりと云れたりき推古天皇御紀の歌に夜須彌志斯和餓於朋者彌能阿句理摩須阿摩能椰蘇訶礎と有るは安見爲し吾大君の隱坐す天の八十蔭にて天に雨を雍たるが此は皇大宮の諸の殿舎の多き事を云る也此を釋紀に我君在二玉殿一治二天下一と云るは宜し但椰蘇詞礎八十垣也謂二多重一也私記云謂二上々天一也或云八十垣也と有るは思束なき解樣也若八十垣ならむには隱と云ふ事何の用ぞや隱坐氏大祓詞後釋に云く隱は加久理と訓可し古書には多く然云り○今云右に引る和餓於朋耆彌能阿理摩須と有るなど甚多かり借隱とは御殿の蔭に覆はれて其内に靈坐すを云り人に見えじと隱るゝには非ず中昔までも雨に依り田簑島を今日行けど君にや隱れぬ物にぞ有ける」我門に千尋有る蔭を植つれば是冬誰か隱ざる可き」など云る皆其蔭に覆はるゝなり○四方國乎安國登平久知食故は四方國と云ふ事漢めきて聞ゆる詞なれども然に非ず神武天皇御紀に青山四周と見え崇神天皇御紀に都風道二于四方一令レ知二朕意一と又活目尊以二夢辭一奏二于天子一曰自登二御諸山之嶺一繩絙二四方一云々弟是悉臨二四方一宜レ繼二朕位一と有り成務天皇御紀に五年秋九月令二諸國一以國郡立二造長一縣邑置二稻置一並賜二楯矛一以爲レ表則隔山河而分國縣隨二阡陌一以定二邑里一因以東西爲二日縱一南北爲二日横一山陽曰二影面一山陰曰二背面一云々と有るを見れば當昔既く四方國の號有けむ事云も更なり然らば影面背面の例にて四面國なる事決し同御紀前年の下に其國郡之首長是爲二中區(ツナツクニ)之蕃屏一也と有る中區の號に對て必有可き管なり古事記に生二伊豫之二名島一此島身一而有二面四一生二筑紫島一此島亦身一而有二面五一など有る面にて萬葉二に天地日月與共滿將行神之御面跡と詠る此なり同一藤原宮御井歌に日經乃大御門日緯乃大御門背友之大御門影友乃大御門と詠たる背友影友の友は假字にて面字の義なり御門祭詞には四方能御門と有るを神名式には四面門と有り此らを以て方は面の義なるを思べし然して此は泛く天下を統御す事を云なり第七詞に皇大御神能見霽志坐四方國者天能壁立極國

能退立限云々と有るを思べし 此詞に依て見れば四方國の四方は東西南北さ際々しく配たるには非て唯泛く公に云るなり 安國登平久知食故は大祓詞後釋に安國は神武天皇御紀に浦安國と有ると等しく唯安き國と心得ても有可けれど ○今云一條兼良公の纂疏の御説に浦安國を取四海安寧之義也さ有り安國さ云ふ例は天之石門別安國玉主神さ云ふも有り此安國も國を平安(ムケシツ)め坐し由成べし 何聊か異なるべし安見爲給ふ國と云ふ事なり安見爲給ふとは安見爲し吾天皇と云る此なり 歷朝詔詞解二の四十丁に見た美斯さ云ふは知(シリ)を知爲聞(シロシキク)を聞爲(キコシ)と云ふ類の格なり下の志は爲なり萬葉十九に國看之勢志弖さも豐宴見爲(トヨノアカリミシセス)も有り と云れど偖安とは彌爲にて物事の取締り無く朧なるを圖め定るを云ふ語なり又蕃息の意を兼たる事云も更なり然れば取統て圖まり定るは其を安寧の義に取て安とは云なりけり斯在は安國とは天皇の天下を鎭定御在す事を云にぞ有ける 釋文に安靜也從レ女在ニ下一さ見た字書ともに徐也止也寧也定也危之對也佚樂也など有る字義能く此に協へり次に云ふ言と字さ能く其意を得たるは字義をも尋むべし大に益有る事多かり 平久は多靡然にて大に舒々として物事に障り泥む事無を云なり 多は字音さ此の言さ同義の言にて太(フト)さ意大なる意を兼たり此言の上に从たる語とも多退(タジロ)く多回(タモトホ)る大遠(タトホ)み多太(タフト)しなど皆上なる多を例へても聞ゆる語なるは多は多太の義を爲む爲に會意爲るなり 知食故は知食給ふが故にとなり故ノ字に其御恩顧に賽謝し爲給ふ心見えたり 今少し手近く云はば云々の所謂なるを以と云が如し立返りて上に云る水火の用足りて人其地に住べく又蕃息すべく又事業を安く營むべきことの由を思ふべし 知とは我任ト有る事を著明に知ト明め正し行の由なり心に知る耳ならず目にも耳にも口にも鼻にも較て外より來て身に感觸する事を云也記傳七八丁に他物を身に稟受れ有つ意なりと有るは然る言なり 上に知りは彼より此に歸(ヨ)り順(ツ)く意なりさ云る如く彼を此に歸り順しむるは即安國登平久知食と云ふ物なり能く思ふべし 又十七丁に大殿祭詞に所知食古語云ニ志呂志女須一と有り 萬葉歌には處々に之良志賣之とも有り志良志を志呂志と云は所聞看(キカシメス)を伎許志米須と云に同じ 見ゆ崇神天皇御紀に倭國之物實 此云ニ能志呂一 と有る實又出雲國造神壽詞 時本幣詞 また遣唐使 に禮代とも禮自利とも有る代自利などの言も其受入るゝ方より云ふ語なりけり 古事記に是後所生五柱男子者物實因ニ我物一所レ成また先所生之三柱女子者物實因ニ汝物一所成さ有るも互に受入るゝ方に係て云へれば毛能志呂さ訓べし實基本記に富物代さ云ふ事も見ゆ今商人の代物と云も價に交て人に取らする由なれば上の意に同じかるべし城さ云ひ苗代さ云ふも受入る義を離れず 食は記傳に見すなり但常に使ニ人見一を見すと云とは異てたゞ見を美須と云見賜を美志賜と云ふ一の古言なり 立(タツ)を多々須立(タヽシ)を多多志と云ふ格なり 例は萬葉一二十三丁に道安乃堤上爾在立之見之賜者 見給へばなり 六三十二丁に我大王之見給芳野宮者 十九三十九丁に見賜明米多麻比又見之明良牟流など有り 此外にも多し今本は古言を知らで訓を誤れる事多し 偖此見之を賣之と通はし云るは萬葉二二十五丁に召賜良之神岳乃山之黄葉乎云々明日毛鴨召賜萬旨 此ら見之給ふにて召は皆假字也 十八二十三丁に余思努乃夜乎安里我欲比賣須 見すなり右に引る六卷の歌に合せて知べし 十一二十五丁に

賣之多麻比安伎良米多麻比又六十一丁に於保吉美能賣之思野邊爾波此も又右の六卷十九卷の歌を合せて曉るべし賣之思は見しにて下の志は過去ノ辭なり斯在ればば知食の食も本は物を見る事なるを國を治め有坐事に用るなり〇今云見之も賣之も物を召聚むる意なり目に物を見ると云も向なる物の影を移し聚めて心に容るなり此故に目にのみ見るとは云はず心に試(タメ)し見るを恋見(コヽロム)などと云り神代紀なる下照姫の歌に妹慮磯嗣爾豫嗣豫リコセネと詠るも見る緣に緣り緣り來令れとなり此にて見之賣之の同じきを曉るべし且招き召す義勿論なり萬葉一二十二丁に藤原我宇倍爾食國乎賣之賜牟登二三十四丁に吾大王乃所聞見爲背友乃國之など有にて彌明けし君の御國を治め有ち坐なるを知(シラス)とも食(ヲス)とも聞看とも申すなり此君の御國を治め有坐には物を見が如く聞が如く知む如く御身に受入有坐を云なり今世に飯を賣志と云も食(メス)物なる故なり人を招を賣須と云も見すより出たるべし

御門能ミカドノ御巫能ミカムコノ稱辭竟奉タヽヘコトヲヘマツル皇神等能スメカミタチノ前爾マヘニ白久マヲサク

此は神名式に神祇官西院坐御門巫祭神八座並大月次新嘗 櫛石窻神四面門各一座 豐石窻神四面門各一座と有る社の祈年祭詞なり此御社の神位の事は清和天皇實錄に貞觀元年正月從四位上を授奉られたり倩四面門各一座と有るは二神を四面の御門に一座づゝ祭らるゝ故に凡て八座なり 下に大殿祭御門祭と有るは四時祭式に五記傳所引六月十二月四面御門祭云々右四面祭御門巫行ㇾ事と見えたれば各其御門にて行るゝを其由其詞の下に云り考云令集解に巫御門一口と云れば一口して四方の御門に仕奉るなりと云れたり今思ふに各一口と有る各字を脫せるか 此は神祇官にて行るゝなるべし同式に御巫以下諸祭並於ニ神祇官齋院一祭ㇾ之と有るにて知べし西院と齋院とは意は別なれど同音なる故に通はして書り

此神を祭らるゝ事古語拾遺神武天皇段に爰仰ニ從皇天二祖之詔ニ建ニ樹神籬ニ云々櫛磐間戸神豐磐間戸神已上今御門巫所奉齋と有れば其御代に權輿つる事の如く思ゆれども同書に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀齋部氏之所ㇾ職也と有れば平田翁の說れたる如く天照大御神の新宮供奉られし時を置て何か有む同書石屋戸段に令ニ天手力雄神引ニ啓其扉ニ遷ニ坐新殿ニ則天兒屋命太玉命以ニ日御綱ニ廻ニ懸其殿ニ令ニ大宮賣神侍ニ於御前ニ令ニ豐磐間戸命櫛磐間戸命二神守ニ衞殿門ニと有る此なり天手力雄神此時の御功に依て天石門別神と御名に負坐り但此を拾遺に太玉命子也と有るは誤なり古始太元考に云を待べし 然るを太玉命皇御孫命の供奉にて天降り給ひ高千穗宮にて殿祭門祭に仕奉らししが其頃定まれる御社は無くして皇天二祖の詔命の隨に唯に神籬を建樹て四方御門に對て祭給ふ耳なりしを社を建て巫を定て祭給ふ事は神武天皇御世に成就りけむ然らば此御時に定給へるなむ御門巫祭神の發起なりける神名式に丹羽國多紀郡櫛石窻神社並名神大と有るは此神等なり記傳に神代に天降し賜へる御璽は正しく此社などにや齋祭りけむと云れたり倩此神は古事記に天石戸別神亦名謂櫛石窻神亦名謂豐石窻神此神者御門之神也と有て櫛石窻豐石窻と申す御名は皇御孫命の大御門を守衞奉り給ひ又庶人の門をも守衞給ふ故を以て稱申す御名なり若て其元を云ふ時は天石戸別神二柱と坐すを古事記の趣にては亦名なり式の如きは一柱づゝ別神なり已にも云る如く神の亦名と云ふ物より其元は一柱神なるが其御功德に依て亦名は負坐るを亦名に依る可き御功德

な持別坐て又一柱の別神と坐り凡人の別名の如く心得らむは鬼神の情狀を得知ぬ人也けり如此く御門之神也として皇大宮の御門神なる如く記されたれど此は何事も皇御孫命の知食す此天地間に在ゆる事業は悉く皇御孫命に係て申す古例に依れる物なり第一詞第四詞などに云る事共に能く讀み味ふべし名義櫛も豊も唯に稱名と見て事も無きに似たりと雖も斯ては一柱の天石戸別神を二柱に稱別て齋祀給ふ所詮無し其二柱に稱別たる本緣を何處までも探索ぬ可きなり景行天皇の皇諱に大倭國者以行事貢レ名國也と有を思奉べし　故思ふに櫛と豊とは出入の謂ならむか故云ふ故は下なる御門祭詞に櫛磐牖豊磐牖命登御名乎申事波云々自上往波上乎護利自下往波下乎護利待防掃却言排坐氐朝波開門夕波閇門氐參入罷出人名乎問所知志云々と有る文意を碎て知られたり若然らば櫛豊に如何にしてか出入の意有かと云ふに櫛は奇異などの語に同じく不念して來る物を功にも徳にも較て云ふ事なり然らば來爲にては有らむか然れば櫛は入來る義なる事云も更なり　奇異と云も思儲ぬ靈妙なる事の从ふを云ひ藥と云も他より身に受入るが其功を奏る事奇異なるに依て醫を久須志と云ひ藥を久須利とは云なり京都の方言に人の來る事を久志とも久須さも云るは此義なり一卷第三詞の下に幸魂奇魂の辨有り見合べし　豊は動にて出行く義なり櫛に入來る義有る對なり　偖此豊の言起は元來地動に出たる語なりしを其地動に依て宇宙の萬有生發化育する事にて此より上に美好き事無く此より外に偉慶き事無ければ物の稱名に豊とは云へと字書に豊は大也と有る如く片端の語に非ず生發化育の義を取れり此に深く按得たる事有て古始太元考豊雲野神の下に委しく云りき　若て櫛豊は出入の義なるが石間門は石戸別の別を減ら眞を加たるなり記傳に間は眞の意石は其眞門の堅固き由なりと云れたり天之石位などの石此に同じく堅固き由也但日神の隱坐し石屋戸の石は堅固きを稱云ふならず眞の磐石なるなり天石戸別神と申すは手力强壯き神に在して其石屋戸を開き給ひし故に御名に然負坐るを御門之神と坐しては其戸を堅固き由を以て櫛磐間門神豊磐間門神と別に御名は負坐るにぞ有ける其を嗟に亦名を見むは上にも云る如く甚拙し　鈴屋大人說に記傳十五に右の御天降の時に天降し賜へりし御靈實は他所に遷し祭給て後に神祇官なるは其圖象なるべしと云れたるに本著て思ふに崇神天皇の御代などは然は物爲給ひけむ天照大御神倭大國魂神を他に出し奉給ひ此御代に天社國社の數を蕃息して齋祀らせ給へば記傳の說の如くまじく信るゝなり尙第六生島神詞の下に云べし　然らば丹波國多紀郡なるや御紀に丹波道主命遣二丹波國一と有れば託て遷し祀給へりけむ此は上に引る記傳の說に據れるなり　又思ふに古語拾遺に爰仰二從皇天二祖之詔一建二樹神籬一所謂高皇産靈神皇産靈魂留産靈生産靈足産靈大宮賣神事代主神御膳神已上今御巫所レ奉レ齋也　櫛磐間戸神豊磐間戸神已上今御門巫所奉齋　生島是大八洲之靈今生島巫所レ奉レ齋　坐摩是大宮地之靈今坐摩巫所奉齋也　と有るは已にも云る如く神祇官西院坐御巫

等祭神二十三座の權輿なるが天降坐し時の御靈實に拘らず神代紀に見えたる皇祖天神の詔命に又勅曰吾則起二-樹天津神籬及天津磐境一當ニ爲我孫奉レ齋矣汝天兒屋命天太玉命二神宜持ニ天津神籬一降ニ於葦原中國一亦爲ニ吾孫一奉齋焉と命給へる御詔命有るに因准て神籬磐境の事を物爲給へりけむ事仰ニ-從皇天二祖之詔一と有るにて知るべし此事に依れりと通えて伯家部類に御巫祭神八座の御靈實の事を各一座に榊葉八枚を充るなど神籬の古義は良廢たるに似たれども尚其餘風は形計り遺れるなり（此事一卷なる第三詞の下に云り考合べし）然れば此に例して御門生島座摩共に神籬を以て御靈實と爲る事を知べし（万葉に庭中の阿須波神に小柴刺し我は齋はむ歸り來迄にと有に照して知べし是以て見れば御巫等祭神二十三座は神籬を以て祭る故實と見ゆ今世にも正月には門松と云ふ物を立つ此御門神を祭られし當昔の遺制なり）偖御門神を祭らるゝに此齋院に於て物爲らるゝ祈年祭六月十二月の月次祭新嘗祭は彼神籬を御靈實なるにて神武天皇の御世に始り（但神名式四面門各一座と有るに依て思へば四方の御門に祭られたる如くなれど同神に御座す故に本二つなるが一つに合る物なるべし）六月十二月四面御門祭と有るや往古に天より降し賜へる御靈實なりけむ故に古事記に此者御門之神也とは記されたり（御門之神也と有ると御門巫祭神と有ると常にしては同事なれども此は上件の故有れば界を分て見るや精しからむ其は此詞には御門御巫能稱辭竟奉皇神等能前爾白久櫛磐間戸命豐磐間戸命登御名者白氏稱辭竟奉者と有るを下なる御門祭詞には豐磐間戸命登御名乎申事波云々と差別を際やかに物せり心を附くべし）斯在るを崇神天皇の御代に其圖象を擬作て眞の物は丹波國に移し齋はれけむ故に其神籬を圖象と一つに成ける故に共に御門巫の祭る事と成にしかは打混れたるが如く成れど然に非ず彼祈年月次新嘗等の祭は御門巫此に預り六月十二月四面御門祭は御門巫此を行ふと雖も祝詞式の首に記されたる如く凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞と有て齋部氏此が長たるを思ふべし（新年月次新嘗の祝詞は同神を祭ながら齋部氏此に預る事なく以外の諸祭と共に中臣氏祝詞するを以て此差異を知べし上にも引る如く古語拾遺に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀と有るを天降坐しゝより三御代を經て後神武天皇の御世に當りて其事を始て物爲給ひしと爲ば御供に仕奉て天降給へる天太玉命の職業亡せて神武天皇の更に起させ給ふ物と爲む然れども然は云れぬ事有り同書の文に齋部氏之所職也と有るを何にとか爲む且同書に天富命率ニ齋部一云々殿祭祝詞次祭ニ宮門一と有るは其職を傳へ給へるに非ずや心を平にして思ふべくこそ）

櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白氏稱辭竟奉者

此神の事上に云り古事記に天石門別命亦名謂櫛石窻神亦名謂豐石窻神此神者御門之神也と有て其天石戸別神は手力男神と同神に御在るが此神は石戸破る手力坐て天石戸を開給ひ御門之神と成坐る本緣を說く可し（凡て神等の御功德を成就し給ふ樣を推量り奉るに突然と其事を成し坐るには非ず各其祖神より次々受坐る御功德坐すな事出來て其事に功しみ勞き給ひて其を即其神に天皇祖神の賞賜給へる大成の御功德とし其事の有形に隨ひて其を即神の御名には負坐る

なり

高皇産靈神皇産靈神ノ御子角凝魂命 神名式に出雲國神門郡神魂ノ子角凝神社姓氏錄に税部神魂命子角凝魂命之後也」と有り平田大人は天底立命の亦名と定られたれど此は決て宇麻志阿斯訶備比古遲と見定たる由有て古始太元考に委く云るか如し同錄に埴儀連角凝命十五世孫乎儀連之後也また鳥取部連角凝魂命十三世孫天湯河桁命之後也また委文連角凝魂命男伊佐布魂命之後也また竹原同上また額田部宿禰同神男五十狹魂命之後也また委文宿禰角凝魂命之後也また美努連同神三世孫天湯川田奈命之後也また鳥取同神三世孫天湯河桁命之後也また鳥取角凝命三世孫天湯河桁命の後也と有り但此は唯神魂命ノ子と云ふ事を心に留置べし **次に天底立命** 上なる角凝魂命の神魂命の御子成上は宇麻志阿斯訶備比古遲命なる事勿論なれば天底立神は天之常立神に御在せば其次に立ゝ事豈徒事ならむやも姓氏錄に伊勢朝臣天底立命六世孫天日別命之後也と見え豐受大神宮禰宜補任次第に天牟羅雲命云々天曾己多智命ノ天嗣枠命子天鈴枠命子天御雲命子也と見ゆ但天嗣枠命の下の天鈴枠命は度會氏系圖に依て平田翁の補はれたるに依れり但此書の事少論有て隨疑したゞ天村雲命の出自の天底立神に依れる由緒を心留むべし **次に伊佐布魂命** 此は決く伊邪那岐命か委文連竹原額田部宿禰の家に傳たる御名なり角凝魂命ノ男と有れど男に子の意に記されたるにて子孫と云むか如し但天底立命も其次にこそ立給へれ角凝魂命の御子と申にも非れば伊邪那岐命も其次に立給へる由以て男と云むも僻事ならず下に引る姓氏錄に額田部宿禰明日名門命三世孫天村雲命之後也と有を思ふべし **次に安牟須比命** 亦云移受牟須比命 **亦名は振魂命** 此は平田翁の考の如く火産靈神の御魂の天上に上らして津速産靈神と申す此なり安も移受も津速の津と相近き詞なるを思べし姓氏錄に門部連牟須比命兒安牟須比命之後也また浮穴直移受牟受比命之後也と有り續後紀承和元年五月の下に伊豫國人浮穴直千繼等賜二春江宿禰一千繼之先者大久米命之後也と見ゆ大伴氏の出自の此に用有る事を心得置べし神名式に伊豫國伊豫郡伊豫神社名神大と有る此神社の事に就て得たる說有れども此には略きし古始太元考に云ふべし振魂命は姓氏錄に掃守連振魂命四世孫天忍人命之後也また掃守同上また掃守連掃守宿禰共に同上掃守宿禰守部連振魂命之後也これも天神部なるを思べし然るを同錄地祇部に八木造ハ多罪豐玉彦命ノ布留多摩乃命之後也と有る布留魂命を混同せられたる平田翁說は信し若し振魂命其說の如く豐玉彦命の子ならむにも其四世孫に天忍人命有るは如何なり其上天神部と地祇部と其際(キハ)やかに分られたるを何とか爲(セ)む **次に天雷神** 此は火之靈神の御裔に成坐る雷神の事と聞えたり然らば火産靈神の御靈に成れる津速産靈神に云べし姓氏錄に佐伯造天雷神孫天押人命之後也と有るを上に引る振魂命四世孫天忍人命と有るを思ふべし且其御末なる天村雲命に鳴雷神と申す亦名有るを思ふべし **次に天手力男神** 古事記に天照大御神開二天石屋戶一而刺許母理坐也云々天手力男神隱二立戶掖一而云々天照大御神稍自レ戶出而臨坐之時其所ニ隱二立之天手力男神取二其御手一引出と見え神代記古語拾遺さもに天手力雄神侍二磐戶側一引レ之開者云々と見ゆ此にて此神の名義顯れたり 神名式に伊豆國田方部に引手力命神社有るは此神なるべし萬葉三に石戶破手力毛欲得(ガナ)など有る手力の手には多字太字の義にて手力の優坐す由也神社考に天手力男神以二其所レ取石戶一抛レ空矣此即落而成レ山焉信濃國戶隱山是也と有るは社傳を取られたるなるべし備雷神の御子に此神を配て相叶ふ由は神功皇后御紀に爰定二神田一而佃レ之時引二儺河水一欲レ潤二神田一掘レ溝及二迹驚岡一大磐塞レ之不レ得レ穿レ溝皇后云々令レ禱二祈神祇一而求レ通レ溝則當時雷電霹靂蹴二裂其磐一令レ通レ水時人號二其溝一曰二裂田溝一也と見え神代紀に裂雷有り文德天皇實錄に山城國雅雷氷部久雷湯豆波和氣神と有る氷部久は堅氷を衛穿つの義湯豆波和氣は湯津磐別にて天石戶別と申す御名に同じ神名式に大和國高市郡に氣吹雷響(トヨ)雷吉野大國栖御魂神社二座並名神大月次新嘗とあるも此神にや信濃國なる戶隱山神を九頭龍權現と云て龍の住る由は云に足ねど南紀名勝圖繪に九頭明神と云ふを三四所出して祭神手力雄命也と云ふ社傳を記せるも大國御魂神と云に合せて由無きに非ず姓氏錄に爪工連神魂命男多久豆玉命之後也と有るは手力男神同神なるべし神名式に對馬國上縣郡天神多久頭魂神社下縣郡多久頭神社と有るは此なり尙委く云ま欲き事多かれど古始太元考に云むとす

亦名を天石戶別神と申す此は石戶破る手力坐て其功を成し給へればなり 亦天石門別安國玉主天神とも申す新在には天苔日子か又なる天津國玉神決く此なり古始太元考に詳說有り猪姓氏錄に多米連神魂命兒天石都倭居命之後也と見え古語拾遺には豐磐間戶命櫛磐間戶命並太玉命之子也と有れど共に誤なりよく此上下の次序を考合すべき物也 **亦名を明日名門命と申す天石戶を開給ひし御功に依れる御名なり** 姓氏錄に額田部宿禰明日名門命三世孫天村雲

命之後也と見え額田部湯玉額田部など二氏の祖を此神に係たるにて灼し上に引る同錄に額田部宿禰[illegible]凝魂命男五十狹經魂命之後也と有るをも思合すべし亦名は阿居太都命と申す此は古語拾遺に令㆔豐磐間戶命櫛磐間戶命守㆓衛殿門㆒と見え此詞に朝者御門開奉夕者御門閉奉云々と有る如きの御名に依れる御名なり御門祭詞には朝波開レ門夕波閉レ門云々と有り此と同事なり姓氏錄に[illegible]犬養宿禰[illegible]神魂命八世孫阿居太都命之後也また大椋置始連縣犬養同祖阿居太都命之後也と有り倘下なる天押日命の下に云を併べし若て此神の御子數多に御在るが其宗々しき支族二統に分れたり一は天押日命亦云天忍人命大伴宿禰等の出自と爲りて宮門の門閫を掌り來目部を率て仕奉れる也上に引る姓氏錄に大雷神孫と有も擬魂靈命四世孫と有るも世數奇異なる迄に甚能く合へり一は天村雲命亦名天二登命亦名後小橋命亦名鳴雷神亦名天御雲命此は伊勢朝臣度會神主等の出自と成りて度相宮に奉仕する事と成れり此神の子天波與命天波與命の子天日別命と連綿せり上に引る姓氏錄に伊勢[illegible]臣天底立命六世孫天日別命之後也と有を思合すべし倭姫命世記に天手力男命を御戶開之神と記せる幽契を考てよ如此く二統に分れたる伊勢朝臣の一流を除て此に用有る其開闔の事に用有る天押人命亦名天忍日命の御統の事を云べし其は古語拾遺神武天皇御即位の事を記せる所に日臣命帥㆓來目部㆒衛㆓護宮門㆒掌㆓其開闔㆒と有る日臣命は舊事紀なる此同文に道臣命と有て此は天忍日命の子天津久米命亦云天櫲津大來目命の子なり神代紀また古語拾遺に大伴連遠祖天忍日命帥㆓來目部遠祖天櫲津大來目㆒と有るは天津久米命は天上にて已に生坐し御子なるを帥て天降り給へるなり此を以て古事記に天忍日命天津久米命二人取㆓負天之石靫㆒取㆓佩頭椎之大刀㆒取㆓持天之波士弓㆒手㆓挾天之眞鹿兒矢㆒立㆓御前㆒而仕奉とは記されたり然れども天忍日命此者大伴連等之祖天津久米命此者久米直等之祖也と見えたるは混れたる傳なり正しくは天忍日命之子天津久米命此者大伴連久米直等之祖也と記さる可きなり此事記傳また古史徵共に考論されたり又古史徵に古事記神武天皇段に大伴連等之祖道臣命久米直等之祖大久米命二人と云て二人と爲たれども此も道臣命に天忍日命の孫として大久米部を帥たる故に負る亦名なるを別人と爲たる誤の傳なりと云れたるは然る言なり但同書に天櫲津大來目命を天忍日命の事と混同せられたるは精しからず古史徵四六十一丁に姓氏錄に浮穴直移受牟須比命之後也と有るを續後紀に浮穴直云々大久米命之後也と有れば此氏も大久米命の末なる事灼し大久米命と云は道臣命の亦名にて道臣命は天忍日命の孫なる事書等に見えたる如くなれば大伴久目浮穴は同祖にて共に天忍日命の末なるなりて同錄に久米直高御魂命八世孫味日命之後也また久米直神魂命八世孫味日命之後也と有る如く久米氏と浮穴氏とは並稱へられたるにぞ有ける伊豫國に久米部と浮穴部と並たるも此所由に依れる事也と申は同錄大和國天神に門部連牟須比命兒安牟須比命之後也とも有を門部とは御門を衛る部にて連は其を掌る職なれば必大伴氏の同族なる可き謂なるをも思ふ可し姓氏錄大伴宿禰條に彦火瓊々杵尊神駕之降（アモリマシヽトキニ）也天押日命大來目部立御前○今云上に引る古事記に天忍日命天津久米命と二柱に記し神代紀また古語拾遺に天忍日命帥㆓來目部遠祖天櫲津大來目㆒と有るを合せて此を思ふに此御父子共に其掌る職を同じく爲給ふには非る可し天忍日命に師說に天歷神など申す際にて御稜威の嚴めしき狀以て負る御名なりと云れたる如く皇御孫命の御前に立して神駕（ミモト）近く守衛奉給ひ其御子天津久米命は所謂來目部を帥て御前に立て供奉れりしにて有むか然るを其孫道臣命に至りては其内外を兼て仕奉られしにこそ降㆓于日向高千穗峯㆒然後以㆓大來目部㆒爲㆓天靫負部㆒

天靫負部之號起ニ於此ー也○今云以上高千穗宮にて有つること共なり　雄畧天皇御世以ニ天靫負ー賜ニ大連公ー大連公とは大伴室屋大連の事なり○記傳に云く後に近衞府衞門府兵衞府を共に由介比乃部加佐・と云も此天靫負より出たるなり　奏曰衞レ門開闔之務於レ職已重若一身難レ堪望與ニ愚兒語○今云語とは大伴室屋大連の子大伴談の連を云なり天降の時天忍日命天津久米命二柱して仕奉られし例に依られたるなるべし道臣命より室屋大連までの間は一人して仕奉れりしなり　相伴奉レ衞ニ左右ー勅依レ奏○記傳に云く後世の左右近衞大將左右衞門督左右兵衞督などの類の如し○今云聖武天皇御紀に天平十七年春正月己未朔遷ニ新京ー伐レ山開レ地以造ニ宮室ー垣橋未レ成續以ニ帷帳ー令兵部卿從四位上大伴宿禰牛養衞門督從四位下佐伯宿禰常人樹ニ大楯鎗ーと有り佐伯氏を衞門に爲されたる令の御定有て後も尙祖業を務しめ給へるなり是大伴佐伯二氏掌ニ左右開闔ー之緣也と有り此文旦と見ては大伴氏の開闔を務る事は雄畧天皇の御世より始る如くなれど然らず靫負は元來此家に屬たる職にて開闔も此職に屬る本よりの務なるを古語拾遺に日臣命帥ニ來目部ー衞ニ護宮門ー掌ニ其開闔ーと有り此御時に天靫負の職を賜ふ迄は左右を兼て一人して務め來つれども一人しては堪難き重職なれば其兒語連と二人して左右を務むと奏せる故に其奏の隨に勅許有てより大伴佐伯二氏にて左右の開闔を掌る事と成れる由なり○記傳に云姓氏錄に佐伯宿禰大伴宿禰同祖道臣命七世孫室屋大連公之後也と有り佐伯は室屋大連の時に分れたる故に其後也と云る也　同錄に佐伯日奉造天押日命十一世孫談連之後也と有り談連は雄略天皇御紀に大伴談連と有て談此云ニ箇陀利ーと有人なり　偖大伴佐伯の門部を掌る狀は江次第御即位儀に伴佐伯云々率ニ門部三人ー入レ自ニ兩門ー云々令ニ門部開レ門と見えたるにて知可し○今云貞觀儀式また踐祚大嘗會式に左衞門府中レ官令ニ諸國量レ程進ニ物部門部語部等ー物部者左右京各廿人門部左右京各二人山城國三人大和國八人伊勢國二人紀伊國一人語部者美乃國八人丹波國一人丹後國二人但馬國七人因幡國三人出雲國四人淡路國二人と有り此は物部及伴佐伯の職衞門府に移れる後に如此くなり又伴佐伯宿禰各一人各率門部八人於ニ南門外ー通夜設ニ庭燎ーまた伴佐伯各一人開大嘗宮南門ニ云々また伴佐伯各二人分就南門左右外被胡床待レ時開レ門云々門部糺ニ察諸門出入ーなど此外にも伴佐伯の門部を率て仕奉る事多かり　然れば門部連は大伴氏と同祖なる事疑無き物なりと云れたるが如し但文を甚くゝめて引り亦己か心と引直せるも有り本書と比挍せて予か取る所を察べし　然れば天石戸別神の御戸開之神と坐すも少緣の由緖には非りけり今此を說かむは餘りに言痛きに似たりと雖も知らずは詮無し知て云ざらむは我心を開きて知覺ら令給へる神の御心を失ふとや云はまし故其本緣を說てむ熟く心を留て考ふべし天地の始めの時に皇祖天神の詔命を以て伊邪那岐伊邪那美二柱神に國を生み神を生しめ給へり然るを眞弟子に火産靈神を生給ひけるに御母伊邪那美命の御陰を被燒給ひしかば其火徹を避給はむ爲に石隱り坐て但此は後に天照大御神の岩戸隱れの因緣となれり　終に黄泉國に到給しかども尙其火神の御荒び有む事を御情苦しく所思し坐て水神土神を生給ひて其鎭火の事を定置給ひて終に根國底國に入坐り但大神の斯く生る所由は彼葦牙の如く萌騰りし氣勢の餘有るが故なり且天沼矛を以て滄海を探坐し動みと共に風神の生坐しとに依て益々火氣の聚り成れるなり姓氏錄に角凝魂命天底立命伊佐布魂命を天石戸別神の群の祖に係たる事を佐思ふ可し　此時

に御父伊邪那岐命苦しき哉子の一木に易つる哉と詔給ひて即火神を斬給ひけり 如此く斬給へるは猛烈なる炎上の氣を鎮め給へる也顯幽相分るまで死と云ふ事有る事なければ也人は體を主とし靈を客とする神は靈を主とし體を客とす此理を思ふべし 然るに其血一速く激上りて天之安河原なる五百箇石村と成れりき此に依て天日彌々照明れり蓋津速產靈神の御靈は此と倶に生坐りけむ 宇摩志阿斯訶備比古遲神の御名の阿斯訶備は淺火(アシカビ)にて火となる可き種子なりけむを火產靈神を得て彌々照明りけむ此二神の御靈を合せて一柱の津速產靈神と成坐り後に日神の石戸隱らせるの因此に有り石村は石屋の起因にて津速產靈神の曾孫なる思兼神の此事を深く思ひ遠く慮給ひし元由此なり若て上にも云る如く安卒須比命亦名は振魂命ノ天石戸別神の統に祖たる事を思可くまた此詞又御門祭詞に湯津磐村能如塞坐而と有を暫く心留べし 次に磐裂根裂神此は神代紀に是時之血激灑而染ニ石礫樹草ニ此草木沙石自然含レ火之緣也と有て火の萬物に透入するの謂なり次に熯速日神此は火の萬に透入する力を賛る神なり此神等の末に經津主神武御雷神成坐して神武猛烈なる靈威なるを思ふべし 天石戸別神の此神に因坐る由緣上に云るか如し又石戸破る手力坐る所由を知べし 若て其御骸に大雷神成坐して此天石戸別命の御祖たり次に大山祇神次に高龗神生坐て何れも天上に昇らせり 大地は神の生坐所にして其靈は天上に成し給ひて世に幸ひ給ふ事總ての神典の趣なり大雷神の天石戸別神に祖と坐す因緣は上に已に辨たるが若し 然して其石隱り坐し伊邪那美命は終に黃泉國に到り御在しゝかば伊邪那岐命其戀しさに得堪させ給はで追到り坐けるに伊邪那美命は速

く黃泉戸喫爲給ひし故に此には歸坐し難く成竟給へり 其は平田翁の靈能眞柱に伊邪那美命は其黃泉國の戸喫し給ひて御身の汚給へば還坐難く所思しなるべし然るは彼國の火に汚れて還給はゝ火神の荒び坐て此國に過事有む事を憚り思して御事なるべし備黃泉國なる火も此國なる火と元は一ツ火なるに火神の其を殊更に忌憚み給ふ事は如何にと申に唯に彼國の汚穢に幸はれる火なるに依て惡み給ふのみならず御母神には已命を離給へるに因て下津國に神退去坐し其神避坐るに依て已命は殺さえ給ひつれば彼國をば甚く惡み給ふべき謂也と云れたるが如し 若て云々の事有ければ其を見驚き畏坐て逃還坐むと爲給ふに伊邪那美命怒坐て追奉らしめ最後には御身自逐出坐て黃泉平坂に挑み給へり此時伊邪那岐命千引石を引塞給ひ其石を中に置て各相對立して別處を建給へり別處とは伊邪那岐命は風神火神を率て上津國を所知食さむ伊邪那美命は金神水神土神を率て下津國を知せと詔別て絕妻之誓を建給へる也此に依て宇宙の萬有其氣を伊邪那岐命に稟け其形を伊邪那美命に屬て大地に蓄息する事を得たり 第三詞の下に云る事共に合せて此を悟るべし伊邪那美命は黃泉國に在て凶惡の神と成給へるに因て絕妻之誓を建給へりと云古說は悉く臆にして妄なり如此く成行く事も全く高御產巢日神神產巢日神の造給ふ物なり豈偶然ならむや 斯在るに黃泉國は穢惡の湊る所醜物の會る所なる故に妖鬼また此を本所とす此を以て千引磐を其阪路に引塞給ひ八衢比古八衢比賣久那斗神をして此を守しめ給ひしか共如何に爲む伊邪那美神の彼國にて觸給へる穢ばかりは除る事能はず此に依て筑紫

日向の橘の小門にして水潔祓ひ給はむとして先投棄給ふ物に託て疾病神時置師神飽咋神三柱成り禍害神奥疎神邊疎神奥津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘古神奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神六柱成坐り此皆黄泉國に屬く神なる故に八衢比古八衢比賣久那斗神の此を追逐坐す御功德坐り亦此天石戸別神の此を待防掃却言排坐す御功德立つ本縁なり其は如何と云ふに黄泉國に屬る神は火產靈神の御稜威には殊に恐れ懼ひ畏む可き事上に云る若くなればなり　但此時に天石戸別神の功を成坐りとには非ず須佐之男神は伊邪那美命に屬る神たちに天上にて種々の御荒びども有しかば天照大御神の天石屋に隱坐し時に其御戸を開奉給ひ其時新害を仕奉り遷坐せ奉りて其御門に湯津石村の若く守衛奉り仕奉給ひしに依て如此る御功德を成坐り八衢比古八衢比賣久那斗神の黄泉戸を守衛給ふ狀に同じ偖天上にて須佐之男神の荒び坐しは上に云る禍害神共の副隨る故なり　於是伊邪那岐命大御身滌を物爲させ給ひし時に禍津日神成坐り此は黄泉國の汚垢に依て上に云る疾病神三柱に禍害神六柱を統領爲給はしめて皇祖天神の人身造搆の奇巧を窮め給ひ神妙不測の靈智を以て授與給ふ至貴の身命を屑と爲ずして疾病を需む疾病は需ざれ共其爲す處乃ち本然の形質を變へ自然の常機を失ふ輩の不義を冥々の中に糺彈し給ひ授るに疾病を以てす又皇祖天神の御恩賴を得て皇神の御爲に愛しき青人草たり

天皇の御爲に愛しき公民たり是を以て人の稟賦に隨在天神なる靈性有て人の人たる道は誰も誰も一心の中に在り此を德と云ふ其德を覆ひ隱して言其常と爲る所を易へ行其德と爲る處に悖れば神罰を顯明の地に降給ひ授るに禍害を以てす八十禍津日神大禍津日神の行給ふ所乃皇祖天神の詔命に依れりと雖も其荒魂の晋みには度に過ぎ量に餘る事多かり是以て神直日神大直日神等は治療方術を以て爲る時は此を救ひ禍害は修身治國の德を以て防禦げは此を補け給ふ此また皇祖天神の詔命に依て和魂の饒ひ足て成れる事なるが物極て至る時は亂り事盡く成る時は始に復る此を以て荒魂和魂共に環の端無きが如くして寒暑晝夜の道有る如く際限有る事無し　第三詞の下に云る事共を能く思合すべし先師等の說とは大に異なりと雖も必如此くならざれば正實に違ひて貫通の理無し學義者にして措置くを可しと云む徒に古人の糟粕を嘗め其說の異同を論じて犬馬と共に斃るゝに至る所詮無き大凡の學者たらんこそ可(ヨ)しと見らめ我は拙劣(ヲヂナ)き人となむ思ゆる　偖第三詞　荒魂和魂の辨　に粗云る如く善惡二有るに似たりと雖も其途を別に爲ずして動靜進退の過不及に有る事なるが故に惡は變なり善は常なり此を以て疾病の本復するを直ると云ひ禍害の除こるを直ると云ふ惡を棄て別に來る善有るに非ず皇祖天神より賦與る所の自然に

復るが故に皇祖天神の全能に妙合靈會して汚濁の其氣を犯す事無く物類の其形を損ふ事無く毀譽の其神を勞らしむる事無し此常を知りて其變に通じ其變を避けて其常を執る御紀に惟神謂下隨二神道一亦自有中神道上也とは此を謂なり善の常にて惡の變なる所由は今云ふ如くなるか奇しく靈しき皇祖天神の靈威は妙なるかも人に賦命(サツケ)給へる本性は混沌にして無爲なる物なるが故來て動き事至て感ずる內には善事耳にも非ず惡事に交こる事も有るなれども其惡事を爲す者すらに今日は改めむ明日や改めむと其下情には耻る心有る物ながら愚にして遲る〻內に終には其失德の極にも及ぶなり惡を惡として爲す者無けれども其是非を知ざる惑より起るにて實には憐むべき痴者どもなり然れども善事と惡事と二つ並て何れを爲よと云はば惡を嫌ひて善を好すべし惡を爲者と雖も其善を好する自然の性有るは神直日神の守る所有ればなり此を以て其常と變とを思分べし鈴屋大人の歌に善事に惡事伊繼き惡事に善事伊繼く世中の道とも 世中は吉事凶事行交る中にぞ種々(チヾ)の事業(コト)は成出(ナリヅ)る」と詠れたるを思べし 若て伊邪那岐命其黃泉國にて塗れ給ひし其穢惡を悉くに潔淸給へりしかば彼皇祖天神の此漂在る國を修り理め固め成せと詔給ひし詔命を負持坐る自然の本分に回渡り給ひし故に神功彌々立ち靈威益々成り德化大に盛に成坐して天照大御神を生奉給ひつるに奇異に光華り明彩く坐々て天地の無極の中に照徹らして自然高天原を統御す甚も尊き大御神と坐て天日を終古に本所と定給へり偖其天日はしも彼葦牙の如く萠騰れりし物なる故に其質玲瓏として照明りし物なりしかとも火產靈神の靈威の彼葦牙の若くなりし氣脈を傳ひ昇りてより又其光を得て彌々照明りけむを天照大御神の知看す事と定りしより今も仰て瞻望奉る如く光華り明彩しく成れりしかば此時に至りて宇麻志阿斯訶備比古遲神また火產靈神の御德も唯大御神一柱に歸く此故に大御神の石戸隱らせば世中は常夜行き出坐れば御光を資て世中明かなり 但此二神の御德は大御神に歸(ツ)きたりし故に此二神の靈威の無くなりしには非ず天日の光華明彩は悉く大御神に係れりと雖も其二神は二神にて其掌(シロ)し看す所各々異なり今も天上の氣脈(オホツナ)は宇麻志阿斯訶備比古遲神の所治また世中の火は悉く火產靈神の全能なり因に云天照大御神に經津主神建御雷神天兒屋命などの殊に親しく仕奉給ふ事は斯在る幽契に依れり又此天石戸別神の御戸開之神と仕奉給ふ事も皆此火產靈神の緣に依る者なり 偖世に並無く尊く奇異に靈德き大御神を生奉給ひし故に御妹神の座坐さばと先の黃泉國の艱難は忘させ給ひ御心戀しく所思せりけむ其御情の進みに背て須佐之男神は生坐りけむを 大御神は女神に坐て御父神に屬給ひ須佐之男神は男神に坐て御母神に屬給ひて各相別れ坐す微妙なる理は師說より出たり但云々の事共は予が說なり 靑海原潮之八百重を所知せと事依し給へりしかども我は妣國に罷らむと申させ給ひて信ひ奉らさりし故に終に神逐ひに逐はせ給へり 御父神の靑海原潮之八百重を所知と仰給へるは御父神の上に取ては當然の理ながら御子神の信ひ給はざる所が自然に非るが故なり如此く離析ひ有て表裏反對せる所より其自然に赴く其赴く所が取も直さず皇祖天神の顯相鎔造給ふ所なり奇しとも靈しとも云知ずなむ 然るに天照大御神に請して罷なむと申させ給ひて天上に參上らしける

に此は伊邪那岐神の伊邪那美命を相見まく思ぼして黄泉國に慕ひ入給へる反對なり御母神を戀給ふ性なりし故に彼黄泉國に屬る禍神ども所得たりと从奉(ソヒ)れりけむ此以て山河悉動み國土皆震けむを天上に至り坐ては大御神の御稜威を畏み懼ひけむ故に元より淸き御禊に成坐りしかば極めて淸く明き御心なりけらし始より凶惡の神の如く說くは非なり凡て禍事の人に託て其身を惱さむと爲るに人の本性は皇祖天神の稟賦たり容易く犯し惱せらるゝ物に非ず此を以て物に觸れ事に當りて有るまじき事も出來爲まじき心をも起らしめて其物事より左道に引入むと爲る物なり須佐之男神本より惡き心は坐ざりつると雖も保食神の事などより其御心常に變らせ給へるに所を得て禍神は从(ソ)ひ奉れるなり然る故に天照大御神と御誓ひ爲給ひければ淸く明き御心の自然に顯れさせ御在まして三柱の男御子を生坐し大御神は三柱の女御子を生坐し給ひしかど其物實より云ふ時は男御子は大御神の御子と坐し女御子は須佐之男神の御子と坐べき因緣なり是故に男御子の御爲には大御神は女神に御在ながら御父の如く須佐之男神は男神に御在ながら御母の如く御在し女御子の御爲には須佐之男神は御父の如く大御神は御母の如く御在し坐す妙なる所謂なり斯在るに大御神の詔命以て葦原中國に保食神有り汝往て見よと詔給しかば出坐けるに鼻口又尻などより種々の食物を取出て奉れり是以て汚物を獻ると所思して打殺し給ひき保食神は火產靈神埴山毘賣神に娶坐して生坐る稚產靈神の御子と坐せば伊邪那美命に屬坐て根國に心引かれ給ふ須佐之男命の御心には快からざる可き理も又奇異ならずや天照大御神甚く怒坐て汝は惡事なり相見まく欲せずと詔ひて須佐之男神の汚物と爲る所を以て是物共は顯見蒼生の食て活可き物ぞと重みし尊み給ひて陸田種子水田種子と定めて殖令め給ひ豐受太神の御靈をも天上に迎させ給ひけむを天照大御神天日神と御在坐て六合を御照し坐ます事は火產靈神の幽營奉る理なり是故に火產靈神の御末と坐す豐受大神をば殊に尊み親み給てぞ有める但顯見蒼生の命繼ぐ保食神に坐せば其顯見蒼生の爲なる事云も更也倭豐受大神を天上に迎させ給ひしと云ふ事は予始て說く事なるが其說長ければ此には盡難しと雖も皇御孫命の御天降の時に御靈實を副て降給へるなど高天原を本所と爲給ふ事云も更なり紀記の文を以て見る時は此神已に身死坐るが如しと雖も須佐之男神に饗應し給ふ時の御身は事有て後に丹波國に移ろひ坐る由丹後風土記に記せるが如し幽顯界を別ざるの前に死と云ふ事無く仙家に謂ゆる換骨の類なり阿那畏こ須佐之男命の所思さく吾は大御神の兄弟なり我を避て保食神を愛給ふ事は何ぞと妬み給ふ御心出來れり此須佐之男命の禍神に牽り給ふ始にして是より後は永るに惡き業(ヤクサ)止ずで轉有けり疾病神の所爲に依て大御神の不平み給ひ禍害神の所業に依ては勝進(カチサビ)の御荒びども有り是須佐之男神に一の怒を發さしめ奉りて其御情進る(ミツラサブ)閑隙を伺て此を犯し奉るなり此よりこそ有まじき事も出來爲まじき業も出來にけれ神習ふ輩能く此理を知らば惡かる事業は出來まじき物ぞ能く思ふべし是以て天照大御神は岩戶隱れ爲させ給へり此は伊邪那美命の石隱れ給ふ反にて御父神に屬坐る大御神に坐せば斯在けるにこそ伊邪那美命の火神の御荒びを鎭坐む爲に御屎に水神御屎に土神を生坐る反には天照大御神の新嘗所聞食しける殿に須佐之男神御屎まり散し給へり此は日神の御稜威を挫坐む罪阻にて御屎には必御屎も共に爲る物なれば火神と水神土神の鎭め坐るさ

同じ事なり此に因てこそ甚く大御神の不平給ひけらし是故に世間は常夜の闇となれりしかば狹蠅如す水沸く神火瓮の若く光く神道早振る荒ぶるに依て萬物の妖氣悉くに發れりき火産靈神の御德には黄泉國に屬る禍神の甚く恐怖るゝ由縁有るを大御神の石戶隱らせるに就ては火産靈神も共に光を隱し給ふ事云も更なり如此く大御神の石戶隱らせるに所を得て惡神の妖事漸盛に行はれしなり今も天日の受奉る晝間は誰か逆ふさも無く邪神姦鬼入に禍ひ爲る事無く盗賊亂賊入も害を爲さず日神の御稜威畏き事此の如し天石屋に隱り坐けむ間は何に如々しき事なりけむ想像るだに身も彌立てなむ 是以て八百萬神等天安河原に神集々給ひ其禱奉る方を計給ひけるに高皇産靈神の御命以て天思兼に思はしめ給へり此神云々の謀を物爲給ひけるに禍神を追逐ふ御德神ならずはと所思て黄泉神共の甚く諱恐るゝ由縁を探索て火産靈神の統脈の神を以て事を任給ふ思兼神は已に云る如く天石戶別神にも祖と坐す津速産靈神の御子市千魂命の御子與台産靈神の御子たり 天安河の河上の天堅石を取り天香山の眞鐵を取て鏡を作しめき其時天香山の眞名鹿の皮を全剝て天羽鞴を作りて造奉り雜刀斧鐵鐸をも此時に作れりき此鏡作神鍛冶神共に大御神の御末なり天堅石は火産靈神の斬られ給へる血の激上れるなり天香山は火産靈神の身體に成り天眞名鹿は火産靈神の御骸に成れる大山祇神の屬なり鏡は大御神の表物刀斧は經津主神建御雷神の御稜威を加ふる物鋨鐸は後に稚産靈神の御璽となりて悉皆火産靈神に係らざるところ無し 若て種々の事ども悉く具り足へる時に其種々の物等は天太玉命太御幣と取持して天兒屋命太祝詞言禱白して神祝き祝き給へり天太玉命の出自また天石戶別神に同じく火産靈神の統脈に坐し天兒屋命に甚近き縁なり春日社記また小社記に若宮に天太玉命も御在す由なり別に委しき考有れども此に用無ければ太元考に云可し 此に御戶開神天手力男神は其御女天宇受賣神共に石戶の側に隱立して宇受賣命は鐸た給へり天宇受賣命は天石門別八倉比賣命とも天石門別稚姬命とも𣜿幡千々姬命とも申て手力男神の御女なる事予別に悉く考置り其說甚長ければ此には畧きし天手力男命天𣜿幡千々姬命を合せて御戶開之神と申す事神宮の古記に有り 若て天手力男神其石戶を引開其戶を拋棄給ひしに依て天石戶別神の御名坐し萬幡姬命其御手を取て引出し奉給つる故を以て天石門別の號を負坐り此神等は上に云る如く火産靈神の御末の神等なりし故に斯在る御稜威を顯はし坐て即其御德を負ひ坐る神と成給へりし者なり 然爲て大御神を新宮に命坐奉りて天宇受賣命其御前に侍仕奉給ひし故に大宮賣命と申し但豊宇氣毘賣神をら大宮能賣神と申せり同名にて異神也第三詞又第 大殿祭詞の下に云を見合す可し倦此の大宮能賣命は古語拾遺に今世内侍以善言美詞和君臣之間如レ令レ悅ニ懌宸襟ー也と有を思ふべし天石戶別神は其殿門を守衛奉給ひし故に櫛磐間戶命豐磐間戶命と御名に負坐り立返りて前に委しく說る事共を考合さば自然に鮮明ならむかし故に阿居太都命とも申す御名御在りき此斯在る時に八百萬神等共に議りて須佐之男神に千座置處の祓を負せ給へるは伊邪那岐命の御禊の對にて幽に伊邪那美神の御禊也此に因て伊邪那美命の此顯國に止り坐す御靈も清々しく成坐し其に屬坐る須佐之男神の御心の明く成

給ひて終に天下經營の大業を立給へり但此神逐に依て根國より率りたる禍神等は悉く本國に逐ひ還されけむ是を以て淸く明く成坐りし事云も更なり此等の理を思ふに事の起りは火產靈神に發り其極る處また火產靈神に係る豈奇からざらめやも世中の萬事を統て實に影の形に隨ひ響の聲に應るか如し且其石戸段に就ては深き由縁有る事なり其は大御神と須佐之男神との御誓ひに男御子女御子の成坐るに依て衣食住の事を所思給ひし故に保食神を見せに遣し給へるなり然るを其を打殺して復命し給へるに依て大御神の御怒坐て此又天熊人を降し給ひて保食神の御身より成れる種々の物を取給ひ此物共は愛しき靑人草の食て活可き物なりと詔給ひて食物を第一に定給て陸田水田の種子と爲給ひ衣服を第二に定給て天香山に桑を殖て養蠶の儲有り家宅を第三に定給て新嘗聞食す新宮を物爲給へり此皆保食神の食衣宅に幸給ふ御靈物に資る所なり然るを須佐之男神には黃泉國に屬る禍神とも副居りし故に其食住宅の靈物を蔽壞むと爲給て一には大御神の新嘗聞食す時に當りて其御席の下に屎まり散せるなど此食物を妨るなり二には齋服屋に坐て神御衣を織しめ給ふ天之衣織女に傷づく此衣服を妨るなり三には服屋の棟を穿て天之斑馬を墮入るゝなど家宅を妨るなり是を以て寛大仁慈の大御神に坐せども其禍事は見直し聞直し給ひ難く所思しゝを八百萬神等其大御心を得て八咫鏡など種々奉り給ひ其大御心を取奉れる御業の中に一には鐵鐸を以稚產靈神の璽と爲し眞經津鏡を以て豐受大神の御璽と爲なして其御祈どもも有つるなるべし此食物に就てなり二には荒衣和衣との幣物此は衣服に就てなり三には新宮を供奉り殿門まで遺無く仕奉れる此家宅に就てなり須佐之男神の妨け損させ給ふ事を補綴し給ひしにも依て其感應は有けるなり然るに須佐之男神其千座置處の祓の功驗に依淸々しく成給ひて大御神の御心の如く一に大年神などには農耕の事を賦與給ひて食物を以て人を養育給ふ神功を爲しめ給ひ二に佐草比古命などに衣服の事を物爲さしめ給ひ三に五十猛神大屋毘賣神抓津比賣神に家宅の事を物爲さしめ給へり皆其神々の御上に取ても其時に取ては禍災と所思しき樣なる事なから皆因を需めて大造の續を立る縁となる事奇しき事なり皆皇祖大神の天地を預鎔造り給ふ御恩を賴に成れる物ぞかし櫛磐間門命豐磐間門命の湯津石村の如く塞り御在して御門を守衛給ふ由來如此し實に火產靈神の御稜威を負持坐て其德を爲し功を立給ふ無窮に其神と齋れ御在し坐す事豈少縁の由ならむや其來る所有りと雖も世人此實理を知らず餘りに俺瀨なるが故に言擧は言痛かれども得默し堪ずなむ萬神の御上を說むと其說く所の一神の御事實を以て說を爲す時は打見には實にもと思はるゝ樣なれど予を以て此を謂ふ時は神眞の靈機妙用一つとして得たりと云へからず能く其出自を探索め其末裔の系記成て此を說く可し斯在ざれば眞に神典の古傳は終に曉る世勿らむ物ぞとよ

四方能御門爾湯津磐村能如塞坐氐

四方能御門は式に四面門各一座と有るを合せて八柱の守衛坐す御門を云ふ但後に大内も上古の制とは洪大に成りて何くれの名有る御門ども多かりと雖も古義を守らせ給ひて其一面の御門に櫛磐間門命豐磐間門命各一座併て二座つゝを祭祀給ふ故實なり偖門を加杼と云ふ名義は水門浦門小門川門など云ふ登にて所門と云ふ義なり古昔は御門の名も日縱大御門日橫大御門影面ノ大御門背面大御門と究て美たく麗しく唱ふ事なりけむ萬葉集一卷藤原宮御井歌に依て然有けむと所知たり當昔已く唐戎の風を擬させ給へりしかども尚主々しき事には大らかに古語を用たり因に世人の思誤り居る事の妄を說べし其は古くより天皇の御許を御門と申し伊勢大宮を古事記には神之朝廷と記させ給ふが若くなる舊說に天皇の御上を直に申す事は其恐れ有るに依て其御門を云て天皇の御上の事と爲りと爲る說は尤なるに似たりと雖も其は公式令に東宮皇太子言二殿下一と有

るに依て中頃より云る妄說にて其は中々なる漢意なり西陽雜俎と云ふ漢籍に秦漢以來於二天子一言二陛下一皇太子言二殿下一と有る後翻を擧ばれたる物にて貴人を指て登能と云ふ言は古言ながら用る意はへは漢なり　豈我が古昔に然る言痛き忌諱の稱號有むやも故思ふに朝廷を美加杼と云ふは嚴處の義なり天下の大御政を知食す天皇の大宮處に在れば畏み奉りて然は稱せるなり大宮を嚴處と申す例は萬葉一藤原宮御井歌に八隅知之和期大王高照日之皇子麁妙乃藤井我原爾大御門始賜而と有を始て多かり其は古人の純一天皇上に御在す仰奉りて佗に顧なき中事なるを其を御門を指など云て古人の思ひ叶ふべしやは萬葉に大君は神にし坐せば赤駒の腹這ふ田居を都と爲しつ又大君は神にし坐せば天雲の雷の上に廬(イホリ)爲す鴨と訓れたる口氣を考見べし　○湯津磐村の湯津は神代紀に五百箇と書れたれば其義に見て事も無けれど尙思ふに物を甚しく云ふ古今の言に甚じとも忌々しとも云ふ語等有り其如く湯は極めて洪大なるの謂なる可くや古事記黃泉段に千引石引二塞其黃泉比良坂一云々所レ塞二其黃泉坂一之石者號二道反大神一亦謂二塞坐黃泉戸大神一と有を神代紀には千人所引盤と書れたるなどを參考して思定むべし古事記に五百引石取二塞其室戸一と有るなど五百箇の意に非ずして唯磐石の大なる事なり然れど湯津爪櫛また湯津杜樹また湯津磐村など大にして數多なる義を自然に包(タモ)てり中臣壽詞には山部五百葉と有り鈴屋大人の玉勝間に湯津と五百と同言の重復せる由云れたれど然らず湯津は洪大なる事五百は數多なる事にて自然條理甚分明(ワキ〳〵)しき物なり　盤村は盤群にて重疊せる形像なり洪大なる盤石の幾層も重疊り圍めるが如く此二柱神の御門の內外に在して守衛坐となり天手力男神と申す神名に比棱て思ふべき物なり此神の御父と坐す天雷神の惡ふる妖鬼を罸辟き給ふ御稜威を坐れば必如此有可き理なり因に云天雷神の其德の一端を申さば此神の恐しき人を打辟き給ふ事などは和漢に多ければ今云はず玉能眞柱にも云れたる如く天雲を膽に踏して行坐る時は人は更にも云はず飛禽走獸に至るまで畏怖ざるは無き如く夏の頃など大に鳴る動みに稻を食ふ毘虫なども水に落て死ぬ由老農に此を訂すに其說の如しとぞ又疫病を病む者も鳴を聞けば大に難症なるも癒る事有り　此等は妖鬼の所爲なれば此神の御稜威には恐れて得も其所に在らざるが故なり　○塞坐氏は上に引る塞坐黃泉戸大神の例に佐夜理坐と訓可し下に云ふ疎る妖鬼を此處に支へ御在す由なり此に就て思ふに此神の御裔に佐伯氏有るは塞君の義にて大伴佐伯二氏の開闔を掌る事上に云るが如し防禦の二字を佐延伎と訓るは能く當る可きにや神代紀に素戔嗚尊被逐而降之時云々同距之(トモサハキ)と見え古事記に五百引石取二塞其室戸一とも有り古事記日檜原宮段に志藝波佐夜良受は鴫者不レ障なり久治良佐夜流は鯨障るなり萬葉五にも奈爾可佐夜禮當又其爾佐夜利奴などども見えたり佐波利佐夜利同言なる由は記傳六に記されたり　然れば佐夜理は障有にて其湯津磐村の如く立塞り障へ留め給ふ形象の語なり神等の御守衛の堅く穿き山は先づ道俣には障神三神湯津磐村の如く塞坐て其處を守衛給ひ門には御門神二柱湯津磐村の如く塞坐て其居處を守衛給ひ家には屋船命御在し坐て其宅內を守衛らせ御在し坐る事皇國は更にも云はず萬國悉く然りと雖も外國は何事も皇國を君上と崇め尊み奉りて其御教化を受賜りて此を行ふ可き皇祖大神の御定め成けらし斯在る此事無き旨趣を且ても知らざるが故に御恩賴の尊く尊き事をも思はざるなり見よ見よ重服も諸神萬國に貫きて今此說く所は皇國の皇國に臣附して仰き奉る可き大御制令なり千萬年の後なりとも神の嚴處より吾最前に立て此を行ひ皇御孫命の萬國に敎行はせ給はむ御教化を嚮より貢仕奉りて今まで食獸を食ひて其恩澤を知ざる如き萬國の愚民らを我大御民(ミタカラ)の數に計むと爲る者も志の世に

行るゝ時も有らば然こそ神の恩頼の忝く辱き由縁も知られ天皇の大御稜威の畏み仰ぐ可き理も明ならめとなむ所思る

朝者御門開奉夕者御門閉奉氏

御門の開闔は古より大伴佐伯二氏の掌る所に爲て人事なり然るを如此く神業に係たる所以は如何と云ふに第三詞の下に預相鎔造の義を說るが如く人の所業と云ふ物はしも人の性情の限りを盡し窮むと雖も神の幽賛に預る事無く爲ては其物相成まじく其事相遂まじき理なる事彼幸魂奇魂の事に思ひ按べて知る可し鈴屋大人の玉櫛笥に人は木偶人の若く神は傀儡師の若しと云れたる譬言は實に然る事にて必然有可き理なり然るを神を蔑如なし奉りて我猛く傲る輩は僅に聖賢の書と云ふ死物を標的と爲て今日を疎く爲る不遜放逸の腐儒などは人目に見て尚惡くき物なり況て神明の照鑒如何に在らむ想像奉りて佗を顧る事無く其身を謙遜て此を愼む可し禍神に一度率こりては容易く本に復難き物なりよ然れば神等の物事に就て守り御在る樣はしも各々其事に御靈を凝し給ひて功を立德を脩め給ふ所即其神の本業と爲りて天地の其其を掌る神たり其御身自成し給ふ其功德を學び行ふ者に其事を成就せしめ其功德を遂令め給ふ事御年神は先農神に御在けるが田佃る事を守給ひ大名持少彦名神は醫藥神に御在けるが療病の事を守護給ふが如し然れば田佃る業を物爲には御年神此を幽賛給ひ療病の事には大名持少彦名命此を幽賛御在して其事を成さしめ給へ其人は此を見奉る事能はざる故に己を賴むめり豈速なからんやは神典を學ぶ者苟くも聞二於無一聲視二於無一形の識見在るに非ざれば神祇の秘縕得て能く窺ふべからず爲す事の上に於ては易る事なしと雖も此心定に主客の心得有る事なるが此に倒反する時は物に本末の齟齬出來て事に終始の等差有て終に疎ぶる妖鬼に相率ごり相口會て此櫛磐間戸神豐磐間戸神の神逐ひ逐れ奉て身は間戸の內に依然に爲て有りと雖も心の行方は既く黃泉國に位置れる事を思ふ可し世人の偶然に歸爲る所は我が神祇の所置(シワザ)と說く所なり豈恐れざる可けむや豈愼まざる可けむや朝は曙方夕は暮方にて對なり此は朝暮の開闔を云なり尙阿佐由布とも阿佐與比とも阿部久禮とも對ふ言なり第十詞の下に云り

疎夫留物能自下往者下乎守自上往者上乎守夜乃守日乃守爾守奉故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣

疎夫留物は下なる御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武云々又道饗祭詞に根國底國與里荒備疎備來物など有る妖鬼を云ふ何を以て此名を負ると云ふに皇祖天神の事始給ひ定給ひて八百萬千萬神をして守り幸へしめ給ふ人世なれば如何なる妖魔邪鬼と雖も此を犯し此を惱めむの閒隙勿る可し然る故に何處にか潜み逃居て若其人に罪咎を犯せる事有とか汚穢に觸た

る事有とか其度毎に皇神等の御守薄く成る物なり其閑隙を得て妖鬼此に靈を託して其凶惡を厚く爲しめて此に天罰を給はしめむと爲る物なり此を以て疎夫留物とは云へり但此は上に云る疾病と禍害との神等なるが其部類眷屬と云て甚惡かる死靈などを使令と爲て世に溢蔓らむと爲る神なり恐るべし又能く此を避く可し又古事記に奥疎神邊疎神とあるも同意の名也上に逐へば下に疎り下に追へば上に疎り人を惱め苦しめむと爲る神と通えたり譬へば賊の人の守り隙有るを得て財寶を竊むが若く犬猫などの人の目を放すを待て食を奪ひ去るが如し斯在る妖鬼を何にして措き給ふと云ふに凡て禍は福を起し殃は祥を發す因有り如此く惡き神有るが故に人また德を踐み命を俟つの行有り今一つ此を譬へて云はゞ夏夜に蚊計り喧しく惡かる物は無し此に就て蚊帳の儲有り蚊帳有る故に躶體にて臥すと雖も外邪を受る事少し此に反して蚊の一つとして無き處有り如何にも快き物なりと雖も其爲に夜陰に簷外に臥しなど身の取行ひ懶惰にして病を得る者多し此に謂ゆる疎夫留物は蚊なり此を逐ふ扇は神の御守なり却て此蚊の有る故にこそ邪氣を受ざるのみならず其身を能く保ち養ふの事も出來る業なりけれ○自下往者下乎守自上往者上乎守云々は邪神姦鬼は能く天に上り地に沖るが故に人の如く其門戶より出入ると云ふにも定る事無ければ門戶をこそ此二神は守衛給ふなれ上より下より疎び荒び來むを何方よりも入しめじと守給ふとなり此にて御門神は唯御門の開闔を掌り往來の出入を知食す事のみの如所思るれど然に非ず御門は御門神の陣營なり其御門の內に疎夫留物を往來はしめ給はじと上にも下にも遺る隈無く守衛給ふ趣に

て甚尊し神は人の如く不自由なる物に非ず上昇下降心の儘なる物なり然れば諸の惡しき事を爲す賤しき神と雖も其如くなれば守衛坐す御門神の御功しみの深く大なる事を思ひ測奉る可し實に言にしも述べむ由なき神事になむ　然は有れども上に云る如く其門戶の內に住む人と雖も禍神に屬可き分定る時は御門神此を許可して此を犯さしめ給ひ又功を立德を脩めむ人の功德を試坐む爲に然る事も有て其差別は神ならぬ身の能く知る所ならざれば隨在天神の道を守りて愼む事已に有可くなむなほ大殿祭詞御門祭詞道饗祭詞の注を通覽して其深義を探索見る可し　夜乃守日乃守は晝夜を去ず守護らせ給ふ由なり與と比と對へる言なり又は與流比流とも對り其は夜在晝在(ヨルヒル)の義にて少し意異れり

生島能御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久

此は神名式に神祇官西院坐生島巫祭神二座並大月次新嘗　生島神足島神と有る社の祈年祭詞なり三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉授神祇官无位生島神足島神並從四位上と見え同二月十一日授二從四位上生島神足島神並正四位下一とも見えたり　此社の草創は古語拾遺神武天皇の段に爰仰二從皇天二祖之詔一建二樹神籬一云々生島是大八洲之靈今生島巫所レ奉レ齋と有れば其御世に權輿れるが若くなりと雖も然らず皇天二祖の詔命に仰從給ふ趣なるを以て考ふ可し已にも云る如く此は天上にて賦與し給へる天津神籬云々の事なる事云も更なり第五詞の下に云る事共を見合可し　其神代紀御天降段正書に經津主神武甕槌神問二大己貴神一曰高皇産靈尊欲下降二皇孫一君中臨此地上故先遣二我二神一駈除平定汝意何如當レ須レ避不時大己貴神對曰云々吾亦當

避如吾防禦者國中諸神必當同禦今我奉避誰復敢有不順者乃以平國時所杖之廣矛授二神曰吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者必當平安今我當於百不足之八十隈將隱去矣と申させ給ひて（古語拾遺に此と同じき文有り下に引るを比按す可し）天神之御子に授奉給ひし國平の廣矛はしも國土經營の事を授奉給ひし表物にて天神諸の詔命以て伊邪那岐命伊邪那美命二柱神に此漂在る國を修理固成と詔給て天瓊戈を賜ひて表物と爲給ひし例に因准給へる物なりけり（其深き致は次なる生國足國登御名者白氏云々の下に委しく說べし然しながら先此事を腹内に留置可し）此に吾以此矛卒有治功と云る事は大倭神社注進狀に傳聞倭大國魂神者大汝貴命荒魂與和魂戮力一心經營天下之地（和魂とは大物主神なり同書に家牒曰腋上池心宮御宇天皇元年秋七月云々天皇夢自稱大己貴命曰我和魂自神代鎭三諸山而助神器之昌運也と有るを以て知べし出雲國造神壽詞に大穴持命申給久皇御孫命乃靜坐牟大倭國申天己命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐と申給へる此なり但荒魂命魂とは異なり思混ふべからず第三詞に注を見合可し）又八千矛神者大己貴命以廣矛爲杖撥平豐葦原中國之邪氣是時大己貴命號八千矛神と有る此にて大國主神の天下を經營給ひ邪鬼を摧伏給ひし珍寶なるを皇祖天神の詔命を以て顯明事は皇御孫命所知看せと事依奉給へるに依て此迄大國主神の物爲給ひし御事業は皇御孫命の御職と爲りて大國主神は幽冥事を知食すに事已に定めけるに因て此廣矛に天神之御子御矛を以て國を治給はゞ必當に平安（サキアラ）在むの御言を添て奉給ひしなり（大國主神の此廣矛を奉給ひし御旨趣を熟く考察奉れば天神之御子の天皇と坐して天津日繼を無窮に傳給はむ樣を表（アラハ）し奉給へるにて天皇の天下を統御す御大業と申は經世と武備との二つなる由を懇到に申させ給ふ物なり此は皇祖天神より伊邪那岐伊邪那美二神に傳させ給ふ重き御旨なるを須佐之男命は青海原潮之八百重を所知と詔給へる時にも御命依し給ひけむを大國主神また須佐之男命より受賜り坐る御言なり其は古事記に須佐之男大神云々謂大穴牟遲神曰其汝所持之生太刀生弓矢以而汝庶兄弟者追伏坂之御尾亦追撥河之瀬而意禮爲大國主神亦爲宇津志國玉神而其我之女須世理毘賣爲嫡妻云々而居是奴也と宣へる御命をも思亘して考ふ可し）此を經津主神武甕槌神の復命の時に大國主神の御心緒を表して奉給へるを皇祖天神の御許に齋置せさせ給ひしを皇御孫命の此國土に天降り給ふ時に天璽三種神寶に副給ひ其天津神籬天津磐境などの事をも宣ひ託せて天降し奉給へる物なり（古史徵に古語拾遺に天照大御神高産靈神云々即以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫永爲天璽所謂神璽劍鏡是也矛玉自從と見えて此自從と有る矛は即此上文に大己貴神の國避の事を記して以平國矛授二神曰吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者必當平安と有る此にて彼神は授給へる御言を思ふに此國土に降り給はむには必天璽と共に持降給はでは得有ましき御寶なり矛玉自從と有る文の上に此大己貴神の託給へる事の有にて其と云れど此矛と通えたりと有るが如し○二種神寶の說古語拾遺また大殿祭詞も然なれど記紀共に三種なるに隨ふ可し此は予今日まで古史徵の說を是なりと思しかども證に其說に改るの證徵を得たるに依て其說は信ぜざるなり事長ければ此には言はず猶矛玉自從と有るは共に大國主神の奉給ひし物なり大倭神社注進狀に大國魂神の神體は八尺瓊と記し八千矛神の神體を廣矛と記せるにて知べし自從と記る由は三種神寶は天神の授給へる物なれば御心を事依奉給ひ矛玉は大國主神の皇御孫命に奉給る表物なれば言ふ迄も無く持副降給ふ由なり）然るを

筑紫の大朝廷にて齋始給ひける隨に三御代を經て皇大宮に令坐奉給ひしを神武天皇の橿原宮に御世所知食す元年に當て殊に神籬を起樹給ひて其御祭祀は物爲させ給へるにぞ有ける然るは皇祖天神の事依し奉給へる天業を恢弘め給ひ天下に光宅はせるの大業此時に大成り區宇始て安寧くして初國所知看す皇都を六合の中心に定給へれば其賽謝の御事なるにて知可し（御紀に昔我天神高皇產靈尊大日孁尊擧二此豐葦原瑞穗國一而授二我天祖彥火瓊々杵尊一於是火瓊々杵尊闢二天關一披二雲路一驅二山蹕一以戾止是時運屬二鴻荒一時鍾二草昧一故蒙以養レ正治二此西偏一云々と有を辛酉年春正月庚辰朔天皇即二帝位於橿原宮一是歲爲二天皇元年一故古語稱レ之曰於二畝傍之橿原一也太二立宮一柱於底磐之根一峻二峙搏一風於高天之原一而始馭二天下一之天皇號二神日本磐余彥火火出見天皇一焉と記されたるに事の次序を照し合せて知る可し然れば御巫座摩御門生島神等二十三座を宮中に祭らせ給ふ事なども此時に始りて恒例とは爲れり）若て其矛玉は崇神天皇の御世まで自然に天璽の三種神寶に從ひ御在しを朝庭には其御圖象を摸し留られて始て別處に遷奉給へり其御圖なむ此神祇官西院坐生島足島神の御靈實に坐りと思ゆ其は御紀に六年百姓流離或有二背叛一其勢難二以德治一之是以晨興夕惕請二罪神祇一先是天照大神倭大國魂二神並二祭於天皇大殿之內一然畏二其神勢一共住不レ安故以二天照大神一云々亦以二日本大國魂神一託二渟名城入姬命一祭然渟名城入姬命髮落體瘦而不レ能レ祭と有るを（此事下に云る事有り考合す可し）古語拾遺に至二于磯城瑞垣朝一漸畏二神威一同レ殿不レ安故更令下齋部氏率二石凝姥神裔天目一神裔二氏一更鑄レ鏡造レ劍上と有るに傚て倭大國魂神の矛玉をも更に造り坐可き理を思ふ可し（現に宮中に生島足島神社の傳り有りつる事を考へ知らば此疑勿る可き物なり若然らずと爲は何の事に依て大國魂神は天皇の大殿の內に在りとも何の子細に依て別處に遷されたりとも知られざる可し）同御紀翌七年八月癸卯朔己酉倭迹速神淺茅原目妙姬穗積臣遠祖大水口宿禰伊勢麻績君三人共同レ夢奏言昨夜夢有二一貴人一誨曰以二大田田根子命一爲レ祭二大物主大神一之主上亦以二市磯長尾市一爲レ祭二倭大國魂神一之主上必天下大平矣と有るを同年十一月の下に即以二大田田根子一爲レ祭二大物主神一之主上又以二長尾市一爲レ祭二倭大國魂神一之主上と記されたるは始て大國魂神の御社の定るを云なるべし（但大物主神も此時に始めて祭給ふが如くなれども然らず其は上に引る祟進狀に云る如く神代より三諸山に鎭座るを太田田根子命を以祭しめ給はむ事を乞給ふにて別なり）然るに垂仁天皇御紀二十五年の下に一云天皇以二倭姬命一爲二御杖一貢二奉於天照大神一是以倭姬命以二天照大神一鎭二坐於磯城嚴橿之本一而祠之然後隨二神誨一取二丁巳年冬十月甲子一遷二于伊勢國渡遇宮一（正書に二十五年春三月丁亥朔丙申離二天照大神於豐耜入姬命一託二于倭姬命一云々二大神教一其祠立二於伊勢國一因興二齋宮于五十鈴川上一是謂二磯宮一と有に合せて考るに丁巳年は翌二十六年なれば其まで倭姬命國々を巡り坐しなり崇神天皇七年より垂仁天皇二十六年丁巳まで凡八十八年なり）是時倭大神著二穗積臣遠祖大水口宿

爾ニ而誨之曰大初之時期曰天照大神悉治ニ天原ニ皇御孫尊専治ニ葦原中國之八十魂神ニ我親治ニ大地官ニ者言已訖焉皇御孫尊専治ニ葦原中國之八十魂神ニとは國土に在ゆる萬物の魂にて即八百萬神と云に同じ治とは古事記國作の段に是時有レ光レ海依來之神ニ其神言能治ニ我前ニ者吾能共與相作成云々備大國主神曰然者治奉之狀奈何また僕住所者云々而於ニ高天原ニ氷木多迦斯理而治賜者などの治にて齋祀る事を云ふなり下文に先皇御間城天皇雖レ祭ニ祀神祇ニ微細未レ探ニ其源根ニ以レ粗留ニ於枝葉ニ故其天皇短命也是以今汝御孫尊悔ニ先皇之不ニ及而愼祭則汝尊壽命延長復天下太平矣と有にて知へし我親治ニ大地官ニと有るは大地萬國の國造に功有る國魂神にて其は古事記に伊豫國謂ニ愛比賣ニ讃岐國謂ニ飯依比古ニなど有る如きは其國に屬る地官にて國魂神なり此を悉く統知食す故に大國魂神とは申せり 時天皇聞ニ是言ニ則仰ニ中臣連祖探湯主ニ而卜レ之誰人以令レ祭ニ大倭大神ニ即淳名城稚姫命食レ卜焉因以命ニ淳名城稚姫命ニ定ニ神地於穴磯邑ニ祠ニ於大市長岡岬ニ然是淳名城稚姫命既身體悉痩弱以不レ能レ祭是以命ニ大倭直祖長尾市宿禰ニ令祭矣と前に引る崇神天皇六年御紀とを合せ考ふるに一事の二途に支れ傳はるにぞ有める其は此に淳名城稚姫命と有るは前紀の淳名城入姫命と同人に御在して崇神天皇の皇女に坐るが同天皇六年に大國魂神に附屬(ツケ)て齋か令め給ひて伊勢の齋王の如く御在し同七年に市磯長尾市を以て祭ら令め給へるは神主に任し賜ふなるを垂仁天皇二十六年に當て淳名城入姫命年老い身體悉痩弱給ひて能祭り給はざるを以て市磯長尾市一人して其齋王の事を兼て其祭を主(シ)れりとなり 如此く對考すれば前帝御紀六年の下なる然淳名城入姫命髮落體痩而不レ能レ祭也と有るは衍なり何を以て云ふぞならば是時始て託給ろ姫命の急に髮落體痩るほどの事には及ぶまじく且天皇の御女にして豐鍬入姫命より弟に坐せば老と云ふ御齡にも非れば垂仁天皇御紀に記ざる可き事を畢竟事の因に記させ給へるのみなればなり又今帝御紀なる此に引る文に時天皇聞ニ此言ニ云々の文は前帝御紀七年の下に在る可き文にて此時の較略は我親治ニ大地官ニ云々にて天皇に神祇を祭祀給はむ故實を正し示奉給ひし託言までの事なりしなり時天皇までにて事足れり然れば時天皇聞ニ此言ニ云々の文は崇神天皇七年紀より錯乱せり 此は神名式に大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座並名神大月次相嘗新嘗と有る御社にて御紀に嘉祥三年十月從二位 貞觀元年正月從一位を授奉給ひし事見えたり記傳十二に云く和名抄には 大和於保夜末止此郷城下郡に入れり孝謙天皇御紀にも城下郡大和神山と有り二郡の界近き處なれば如此も有なり萬葉五に天地能大御神等倭大國靈久堅能阿麻能見虛喩阿麻賀氣利見渡多麻比云々と詠り倭此御社今新泉村と云に有て大和大明神と申すと云れたり垂仁天皇二十五年御紀に定ニ神地於穴磯邑ニ祠ニ於大市長岡岬ニと有る神地は後に謂ゆる圭田(ミトシロ)なり穴磯邑は城上郡に穴師村有り式に穴師坐兵主神社名神大月次相嘗新嘗と有るは此廣矛に由有る御名なり白井宗因か神社啓蒙に近江國夜洲郡兵主神社名神大此所祭大國玉命也と神祇正宗を引て云るは然る言なり大市長岡岬は今の新泉村邊の古名にぞ有つらむ 大倭神社注進狀に中大國魂神以ニ八尺瓊ニ爲ニ神體ニ左八千矛神以ニ廣矛ニ爲ニ神體ニ右御歳神以ニ嘉禾ニ爲ニ神體ニと見えたる御歳神は古語拾遺に謂ゆる大地主神の故事に依て共に祭られ給ひし物なれば其は除て天皇の大殿の內に神代より鎭り御在るは此大國魂神八千矛神二柱にて彼矛玉自從と有る神實にて坐けるを其御圖象を物爲給へるを以て生島御巫に齋祀ら令め給へり神名

式に淡路國三原郡大和大國魂神社二座（名神大）と有るは決めて大和社より移されけむを其は上の二柱神に御在す事云も更なり傳記に云く此は河の山にて或國に坐にか知らず本に下の大字無し今は臨時祭式文德實錄などに依て補つ○今云養宜鄕八太村に有り二宮と稱ふ但此は伯家部類に引る永萬元年の古文書に淡路國一宮二宮と有れば甚古き事なり八太村は八太氏の本居なるべし姓氏錄青海首の次に八太造和多羅豐玉彥命兒布留多摩乃命之後也と有ればなり倩其青海首は大和直同祖なるを以思ふに此も其由緣有る氏なり　倩此神を生島神足島神とも生國神足國神とも申す事なるが古今の書に其徵を索るに神名式信濃國小縣郡生島足島神社二座（名神大）と有る此社傳に大己貴神なる由を傳へたり上野國の事を記せる或書の說も然なり　同式攝津國東生郡難波坐生國國魂神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）と有るも此詞に生國足國登御名者白氏と有れば諦しく生島足島神同神なり神祇本記と云ふ書に生國魂社祭神大國玉命と有て大和神社と同體なり朝野群載に生島高神之地と云るは此處を云ふなり孝德天皇御紀には生國魂社と作りまた三代實錄には難波生國魂神に作り祈雨祭式に難波大社と稱る此なり祝詞考に云く三代實錄にも難波生國魂神坐摩神と並出たり然れば本此御名に依て所を生島と云しを二部に分て東生西生と云けむを生をも後には奈利と唱誤れるより東生西成と字を分つ事に成れりしなり今も此社の難波に坐るにて知可し斯在れば是は高津宮にて齋給しを都每に遷され宜む仍て何處は有れと難波生島に依可く思ゆる也と云れたるは大較しけれど已に第四坐摩祠の下にも辨たる如く難波なるは仁德天皇の都城にて祭給ひしが遷都の後も難波に遺り給へるにて事の本末相違へり又社家注進狀に天活玉命也と有る誤は外にも例有る事にて神名式に越中國射水郡氣多神社は決く大己貴命なるを神名帳頭注にて天活玉命也と注せると同じく大己貴命を生國國魂神と稱申すを粗知て誤れるなれば此誤反て正を得るの階梯たり倩谷川氏の通證に攝津志を引て云く生國魂社舊在府城地明應中釋蓮如欲毀舊祠建寺神異蓮如恐怖而止天正中豐太閤築府城時遷于同府南爾其舊田と見ゆ甚も畏き御稜威にこそ又攝津志に生島在河邊郡東山村但傳此地昔爲生島神祭田故有此祠と云るは此生國國魂神の祭田（イトシロ）なりし地なる可し　又和泉國大島郡生國神社（鍬靫）を大國玉命を祀れる由或書に見えたり同郡に開口神社有るを住吉諸記に云く、事勝國勝長狹也又合祭生玉明神牛頭天皇」と有る事勝國勝長狹は事代主神に御坐す事古語太元考に說るが如し如在るに生玉明神は大國玉神なり牛頭天王は須佐之男神なり旁山有て此も一つの前證と爲れり倩此は今堺津に三村大明神と云る社の事なり　又能登國鳳至郡生國玉比古神社も諦しく此大國魂神なる可く所思ゆ能登國名勝志と云ふ物に羽咋郡氣多神社本殿は大己貴命奧社は素盞嗚命稻田姬命なり頂社は大己貴命の石像にて何れも神代より鎭坐り大祭二月初午日能登生國玉比古神社へ神幸有云々と記せり氣多神社は大己貴命の本體に在せれば其荒魂大國魂神の許に神幸なる可き所以尤也　此等の證據を得て見れば生島足島神とも生國足國神とも申は決く大國魂神八千矛神を齋はせ給ふ物にぞ有ける然ば此神祇官西院坐生島足島二神は大和神社の御摸造を齋祀給へるにぞ有ける天照大御神の伊勢に坐て其御圖象を內侍所に留めさせ給ふと同事也　倩此大國魂神八千矛神共に大國主大神の荒魂の御名にて國土經營り坐し大造の績（イサヲ）を得建給ふ御功に依て負坐る御名なるが御父須佐之男大神の大國主神と爲り宇都志國玉神と爲れと仰給る御命に依れる物也國魂と申す御名義は記傳十（五十八丁）に大國主は天下を主領（ウシハ）く意此國玉は國經營る功業を爲して天下に其恩賴を蒙ら令る意也又九（六十一丁）に玉は御靈也故國

御魂とも云り又（五十二丁）に御魂とは神代紀（又古語拾遺）に百姓至ニ于今ニ咸蒙ニ恩頼ニ皆所ニ効驗ニ也また萬葉（五二十六丁）に阿我農斯能美多麻多麻比弖など有る意にて其功德を稱たる名なりと云れたり（垂仁天皇御紀に頼ニ聖帝之神靈ニ景行天皇御紀に皇靈の威と有を美多麻能布由と訓り又神功皇后御紀に吾被ニ神祇之教ニ頼ニ皇祖之靈ニ云々蒙ニ神祇之靈ニなども有り日本紀竟宴歌集に得ニ大己貴大神ニ矢田部宿禰公望國平（ムケ）し矛の鋒より傳へ來る御恩頼は今日ぞ嬉（ウレ）しきと訓るは此大國魂神の事に熟く當れり國土經營の御恩頼の終古に辱き由を詠る）也 谷川士清說に恩頼は蓋御賜之殖（ミタマノフユ）義也と云るは然る言にて萬葉　に多麻之比波安之多由布敝爾多麻布禮杼と有るも靈性（タマシヒ）は朝暮に賜殖（タマフレ）どにて其靈性の神より賜れるが殖る意なり（布由と布留と同言なる由は古事記明宮段に波加勢流多知母登都流藝須惠布由と有る傳に委し此に就て思へば新古の布留も年序（トシツキ）を經歷（フル）の義は本よりなれど年布の積殖るなり）師說に天武天皇御紀に十一年十一月云々爲ニ天皇ニ招魂之と有るを美多麻布利須と訓み四時祭式に鎮魂祭を於保美多麻布利と訓るも共に古言にて天皇の御魂の威震（ミイツフリ）給ふ可く奉仕る事と通ゆ其は職員令集解に問ニ鎮魂祭ニ云々答云　々問ニ布利　之由ニ答古記云　饒速日命　降ㇾ自ㇾ天時天神授ニ瑞寶十種ニ云々敎道若有ニ痛所ニ者令茲十寶一二三四五六七八九十云而布瑠部由々良々止布瑠部と有る布留にて魂は此方より彼方へ轉り動く德用を備る物なる故に即ち震（フル）ふ由なりと云れたる如し

（此は古史傳に說れたるなるが其要を撮出たる也其外に云れたる事共多かれど古意を得られぬ說なれば全に信難きに依て省きつ第三詞の下にも事の因に依て粗云る事有れど委しくは鎮魂祭詞の下に云可し）偖布利は俗にも物を振（フル）と云ふ語有る其は物の末の振（フリ）動き廣こる意なれば自然に所ㇾ殖（フユル）義有り此に依て申さば大國魂神と申すは注進狀に大國魂神者大己貴命荒魂與ニ和魂ニ戮ㇾ力一ㇾ心經ニ營天下之地ニと有る如く天下を經營給ひし大造の績を得建給ひける其恩頼の天地と長く日月と久しく傳へて咸皆效驗有る御功德の殖給ふ義なり（荒魂與ニ和魂ニ戮ㇾ力一ㇾ心と有る傳は甚も美好き傳なり其は第三詞の下に云る如く荒魂を以て事物を爲すに和魂内に在て務め守らざれば其成功を遂る事成難ければなり彼神功皇后御紀に神有誨曰和魂服ニ王身ニ守ニ壽命ニ荒魂爲ニ先鋒ニ而導ニ師船ニと有る差異を思別ちて考可し）偖また八千矛神と申も共に荒魂の御名なりと云ふ由は上に引る注進狀に八千矛神者大己貴命以ニ廣矛ニ爲ㇾ杖撥ニ平豐葦原中國之邪氣ニ是時大己貴命號曰ニ八千矛神ニと有る如く武威を以て邪神姦鬼を撥平給ふ由に依て負坐る御名なり（萬葉六卷また十卷に八千桙之神之御世自云々と詠り平國の古昔に係て云るなり記傳に八千矛神は武威の八千と多くの矛を持る如きの意に稱し御名なりと註れたれど然らず實に平國之廣矛を以て邪鬼を平治坐る由なり）其は神代紀に大己貴神與言曰　夫葦原中國本自荒芒至ニ及磐石草木ニ咸能強暴然吾已摧伏莫ㇾ不ニ和順ニと有る磐石草木の咸能強暴は上なる豐葦原中國之邪氣に當り吾已摧伏莫ㇾ不ニ和順ニは上なる撥平と全く同意の

文なるを以て知られたり此に就て思ふに八千矛神と申す御名は國作始給し間の御稱なる可し其は古事記に大穴牟遲神須佐之男大神の御許に出坐て還給ふ所に故持二其大刀弓一追二避其八十神一之時毎二坂御尾一追伏毎二河瀬一追撥而始作レ國也と有て此引續きに此八千矛神將レ婚二高志國之沼河比賣一幸行之時到二其沼河比賣之家一歌曰夜知富許能迦微能美許登波云々爾其沼河比賣未レ開レ戸自レ內歌曰夜知富許能迦微能美許等云々夜知富許能迦微能美許登許登能迦多理基登母許遠婆また須勢理毘賣命の御歌に夜知富許能迦微能美許登夜阿賀淤富久邇奴斯許曾波云々と有て此まで文にも八千矛神とし歌にも八千矛神之命と詠るに須勢理毘賣命の御歌に至ては我大國主こそはと國土を主領き坐す御名を詠顯し給へるを此引續の文には故此大國主神云々と記されたるを以て古傳の混雜(ミダリ)ならざるを思察む可きなり（此より上に八千矛神と申す御事跡無く此より下にも同きを以知可し但此須勢理毘賣命の御歌は國中に邪氣を平治て國土經營に功しみ給ふ頃の御事と聞えたり其は八千矛の神の命や我が大國主こそばと詠せ給へるなるを以て悟られたり）若て大國魂神を生島神とも生國神とも稱へ八千矛神を足島神とも足國神とも稱たるかと思ふ由有り其は上に註る如く大國魂神はしも國々に屬て在(イマ)せる天下萬國の國魂神を悉く統領(スベ)治食す御職に渡らせ給ふが故に大國魂神と申す事にて此大神の我親治二大地官一と宣へる此なり偖其國々の國魂神は伊邪那岐伊邪那美二柱神遘合爲給ひて先づ大八島國及六の小島を生坐る其に就て俱生る國魂神は更にも云はず（已に云る伊豫國謂二愛比賣一讚岐國謂二飯依比古一などは云も更なり神名式に山城國久世郡水主坐山背大國魂命神二座大和國高市郡吉野大國栖御魂神社和泉國日根郡國玉神社攝津國兎原郡河內國魂神社伊勢國度會郡大國玉比賣神社度會乃大國玉比賣神社尾張國中島郡尾張大國靈神社遠江國磐田郡淡海國玉神社對馬島上縣郡島大國魂神社など此外にも國々に國玉神社と云多し鈴屋翁說に此等は各其國處に經營の功德有し神なりと云れたるは實に然る事なり然れど大國魂神は其國々の國魂神を統御給ふ神なりと云ふ事は考漏されてぞ有ける）蛭子島及粟島の國魂神をも悉く率領給ひてぞ有ける其は鎭火祭詞に神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹妋二柱嫁繼給氐國能八十國島能八十島乎生給比八百萬神等乎生給比氐云々と有る古傳の獨此大八島國のみを生給ひしには非ぬ所の目を就れば蛭子は今の蝦夷を云ひ粟島は粒々と數千萬の小島を生坐しなるが彼神代紀正書に大八洲國を生給て後の處に即對馬島壹岐島及處々小島皆是潮沫凝成者矣（亦曰二水沫凝而成一也）と有る對馬島壹岐島は既に大八洲國の員數に入たれば別なれど處々小島と云ふ者は彼粟島なるが二柱神の生坐るは甚ふく數有る島々なりしを追々に年序を經る其久遠(ハルカ)なる間

に潮沫及び水沫の凝着て大くも小くも國形と成定れる由を簡古に傳たる物なり（此詞に皇神能敷坐島能八十島者谷蟆能狹度極狹國者廣久峻國者平久云々と見えたるを以て知べし此次なる大御神宮祈年祭詞に狹國者廣久峻國者平久と有るは貢詞に就て云ひ此は國土の經營に就て云るなれば自然に別なり心を着べし）然れども紀記共に蛭子と粟島を不レ入ニ子之例ニと有るは皇祖天神の詔命の隨に遘合爲て美好國を生坐むと爲給へるに女神の言先立し不祥に依て蛭子は三年まで待試給しかども葦尙生立ざる荒土たり粟島は瑞穗などの生立可からざる瘦地なるが故に再唱和の大禮を行せ給ひて大八島國を更に生坐るに對て彼を臣とし此を君と爲し給ひて國の美惡を分ち尊卑を定させ給る物にぞ有ける然れば祝詞に國能八十國島能八十島乎生給とは其差別を立ずして語傳たる物にぞ有ける此に八百萬神等乎生給と有るは其八十國八十島の國魂神也此は各々其國處に就て成出坐して各々其國を經營給ふ神等なり少彦名神なども其一柱に坐て尤傑させ給へるなり（紀記共に少彦名神を神皇產靈神の御手俣より生坐ると云ふ謎なる傳の外にして所在る事を爲すを人は異しむらめども此に說有り高皇產靈神神皇產靈神は幽身の神に御在して其御子と申すは御靈を分給へるにて御身は伊邪那岐伊邪那美命の地質に因て體を爲すなり所以て其生坐る始を云へば高皇產靈神神皇產靈神の御子なり其御身を成す上を以て云へば伊邪那岐伊邪那美命の御子なり此故に其祖を此兩方に係て傳ふる神典の常なり古史徵に引れたる神名秘書に引る神祇譜に國作大己貴命與ニ高皇產靈神之長子少彦名命ニ共ニ經ニ營天下ニと有るも粟島に天降せる國魂神と見れば大に叶へり）

（姓氏錄など此意を以て見ざれば悉に解る世勿らむ物ぞ此は予が始て云出る秘說なり且少彦名命は紀伊國粟島に鎭坐し又外國に渡らせる時も伯耆國粟島に粟を播て其莠實る時に粟莖に彈て常世國に渡り坐と傳へ又少彦名命と主と經營したまひし赤縣州は粟を以て尤き物を爲る事皇國の瑞穗に於るが如し其は說文に禾嘉穀也以ニ二月ニ始生八月而熟得ニ之中和ニ故謂ニ之禾ニ禾木也木王而生金王而死從レ木象ニ其穗ニ凡禾之屬皆從レ禾と有を以て知可し尙蛭子及粟島の詳說は古始太元考に盡せり）此少彦名神すら兄弟と爲り給へる上は國々島々の國魂神は此大國魂神を曾長と爲し仕奉て其制令に因准て國土經營の功德を立給ひけむ事疑有まじき者なり臨時祭式に八十島神祭云々と有て右八十島祭　御巫一人生島巫一人赴ニ難波湖ニ祭レ之と記されたるを以て見れば生國國魂神を祭る因みに他神等は祀らるゝにぞ有ける此詞に皇神能敷坐島能八十島者云々島能八十島墜事無皇神等能依左志奉故と有るは其なり然れば天皇の天下知食す御世の始に八十島神祭を物爲給ふ上は萬國の國魂神を天皇の統御す萬國の爲に祭らせ給ふ物なる可し（但其祭神を擧られたるは住吉神四座大依羅神四座海神二座垂水神二座住道神二座と見えて何れも海と水に屬たるは大地の全體は環海にして島嶼は其中に在を以て自然萬國を隱たる意有り又此事に御巫生島巫などの預るを思ふに主と仕奉る神を除て他の神事に隨ふ可くも非ず然れば御巫祭神八座と生島巫祭神二座を宗と爲る御事なるを其は恒例にして定る事にし有れば上件の神社のみを載されたる物なり此詞に依て考可き物なり）然れば生島神とも生國神とも申すは萬國を各國の國魂神に經營しめ給ひて水沫潮沫を寄給ひて狹國は廣く峻國は平けく物爲給ふ由なりけり（なほ次に云ふ事を考合）

す可し倭生國國魂神と申すも大國魂神と申すも同事なり其は古事記に大年神娶二神活須毘神之女伊怒比賣一と有る活須比神は熊野久須毘命と同神なるに神代紀に熊野大隅命と見え出雲風土記に赤衾伊努意保須美比古佐委氣命と有れば活と大と甚近き言なり物の生榮ゆるや後長て大なる意なる可し　又八千矛神を足島神とも足國神とも稱申す由は上にも註る如く磐石草木の咸能強暴を摧伏せ(シツメ)邪鬼を撥平て國土を平定給ひ廣矛を杖して治功を爲給ふ是此詞に謂ゆる峻國を平けく作爲給ふなり神武天皇御紀に昔伊弉諾尊自二此國一曰二日本者浦安國細戈千足國磯輪上秀眞國一と有る故事を記させ給へる中の細戈千足國と云ふ事大に此に由有り其は細戈は麗戈(クハシホコ)にて國號考に云れたる如く戈に乳と云ふ物有る其乳へ續く發語なる物から倘麗戈鋭と受たる意も含めり然れば八千矛神は彌鋭矛神にも有可くや玉梓之道と續く發語も冠辭考の說の如く劔刀太子などの例にて身と受たりと云むも惡からねども道を知とのみも云へば玉梓之鋭の意を以て續たりと云むも强事ならず　千足國は滿足國と云ふ意にて細戈之滿足國なる可し此は武備の萬國に比類なき耳ならず地靈に自然神武の要害有て異賊の此を犯し敵なむまじきを祝給へる稱なり御紀の趣にては大和國一國の稱名の如くなれども日本者云々と記されたる意を取可し　此に因て大己貴大神は玉牆內國とも目させ給へる由御紀に見えたり倘此等の事共を准據と爲て足島足國は千足國の意なりと思はるゝを倘云はゞ八千矛神の稜威を以て國作の上古耳ならず現に今も此國は更にも云はず萬國の峻嶮の地も追次ひて開け行くを其を成すは人事にこそ有れ成るは神の預相鎔造給ふなれば其開くるに隨ひて邪神姦鬼其身を置に由なく良滅亡失る事勿論なり此故に國土の經營は萬國共に日々に滿足ひ行く故を以てぞ負せ奉つらむ　古人の思慮はしも何とて如此までは深かりけむと思へば思ふ隨に仰げば仰ぐ隨に彌々崇く彌々高き物なるを然る心しらひ爲ぬ人は神典を見る神眼無く玄理を伺ふ識神無きが故なり　倘生國足國の神號を負給へる由緣に就て奇しく妙なる幽理有る事下に說るが如し

生國足國登御名者白氏辭竟奉者(イククニタルクニトミナハマヲシテコトヲヘマツラクハ)

生國足國登御名者白氏云々は大國主大神の平國之廣矛を授奉て吾此矛を以て卒に治功有り天神の御子此矛を以て國を治給はゞ必當に平安く坐なむと申させ給へる神語の達る所にして經國の大本にして政敎の綱紀たり　神武を主として天下を經綸させ給む表物の由に說れたる先師等の說は右を見て左を忘れたる偏固の說にして信ひ難し　實に此國土はしも生活せる物にして神典の古傳に此漂蕩る國と云る如く或有所成或有所不成て經營(ツクリ)爲ざれば萬物滿足て生民の資用に供る事能はず伊邪那岐伊邪那美命の皇祖天神の詔命に依て此國土を建給ひし以來天壤とともに廢可からざるの大業にして生

民を神語に天之益人とも顯見蒼生とも宣へる如く年に増し日に加すと雖も一人此を剩物を爲て廢(ハフ)るべからず一民此を無用にして棄可からず各其賦與(サヅカ)る所有て其職有り其業有て互に相扶け相左右(スケ)て此國土を保(タモ)持つ所以にして皇祖天神の賦命(コトヨサシ)此に在り此乃往古來今天地間に充實する正當不易の神理にて我が大道の本體たり彼禮記に道也者不レ可ニ須臾離一也可レ離非レ道也といへるは此に尤當れりや 古今の神典學者等此古意を得て神明不測の妙處を伺はれざる故に古傳の今日に契合せるの大旨世に顯る丶事無て止しなり此故に道の外に教を説くなり道と教は體と用との若し此を二途に別て苟ぞ其眞正を得る事有むや儒釋の小教などの若く其打聽く所は尤に爲て其一層の上を索れば空理に歸るも其大本人智の測量の外無ればなり我が大道の萬國に行る丶所其とは異なり老子に功成事遂百姓皆曰ニ我自然一と云る如く誰が命(オホ)するとも無く人々の身に自然に行ふ有るが事の極(ツマリ)は經國利民の外無き物なり教を借て行ふ者は天下の公道に非ず公道に非るが故に人情に乖違ふ人情に戻るが故に皇祖天神此を許さず儒此の事に同じきは易繫辭に一陰一陽之謂レ道繼レ之者善也成レ之者性也また中庸に天命之謂レ性率レ性之謂レ道脩レ道之謂レ教などなり此等皆彼國を馭戎給ひし我が皇神の傳坐る古語なるが夷狄に此を存する也 此賦命を修る爲に夫婦有り賦命を傳る爲に父子の道有り此を領(スブ)る爲に君臣の義有り此國土を作固給ひし伊邪那岐伊邪那美命の神統を傳給ひて寶祚の無疆に定給ふ所以此に因起れり天下百姓の因て生る所資て營むの道豈二有むや父は子に授く可し子は父に受く可し春秋の經歷る如く日月の變代る如く一往一來盡窮る事無し生國足國の神功の根ざす所此に在て百姓の行業有る本緣也此行業はしも人の德を修めて神明に質す所以なるが故に是を佐智と云神典の古傳に山佐智毘古海佐智毘古の等差有り賦命の佐智を相易れは兄弟の中と雖も互に幸を失ひて其亡非を招くに至れるを思ふ可し我賦命の佐智を一にし固く守る處有て其佐智成就し及ぼして佗人の祐るに至る豈(アニ)少緣の賦命ならむや 高皇產靈神皇產靈二柱神の謂ゆる陰陽の元始の神と御在して造物生々の洪德を施給ひて天地を預相鎔造し御功を爲給ひ伊邪那岐伊邪那美二柱神の此漂在る國を脩理固成給ひ又八百萬神等を生給ひ天照大御神の高天原を統御して君臣の大綱定り皇御孫命の天降坐て尊卑等を差ち萬國の皇化を仰奉る由緣の少緣ならぬ事を思可し禮記の禮運篇に夫禮必本ニ於太一一分而爲ニ天地一轉而爲ニ陰陽一變而爲ニ四時一列而爲ニ鬼神一其降曰レ命と見え呂氏春秋大樂篇に太一出ニ兩儀一兩儀出ニ陰陽一云々萬物所レ出造ニ於太一一化ニ於陰陽一萌芽始震凝寒以形また淮南子天文訓に道始ニ於一一一而不レ生故分而爲陰陽合和而萬物生また中庸に君臣之道造ニ端於夫婦一及ニ其至一也察ニ于天地一など有を思ひ合すべし如此く天地萬物の起原を陰陽夫婦に係たる事儒流の言には甚愛く有り但此は老子の傳し古説なる可し其は孔子周に適て禮を老子に問學たれば此は其師說の弘れるにぞ有ける此に資て君々たり臣々たり父々たり子々たり須臾も離る可からぬ道存す學て能く得る所に非ず皇祖天神の賦命にして自然に行る丶所の大道なり父子は恩に依て住す家の大本なり君臣は義を以て交る國の綱紀なり君父臣子の仁慈德義固有にして存るを可と爲むや教訓して行る丶を可と爲むや皇國蕃國の美醜其何れに在む 借其賦命の百姓に關係る淵底を索隱ひ奉るに古事記に於是天神諸命以詔ニ伊邪那岐命伊邪那美命二柱神一修ニ理固一成是多陀用幣流之國一賜ニ天沼矛一而言依賜也と有る此なり天神諸は皇祖天神なり此文にては修理固成の任を

伊邪那岐伊邪那美二柱神に耳依し給へる如くなれども熟思へば此二柱神は八百萬神等の御祖にして顯見蒼生の太祖たり然らば則此二柱神の錫命は八百萬神等の錫命なり八百萬神等の錫命は顯見蒼生の錫命なり此までは伊邪那岐伊邪那美神と申せるを此に至て伊邪那岐命伊邪那美命と記されたるに心を就く可し此より某命と云ふ尊號起れり其は八百萬神等其賦命を負持坐ればなり又此二柱神夫婦相嫁坐るに稟て萬邦萬類男女會遇陰陽相感くる皆此より兆せるなり其例は神代紀御天降段に天照大神又勅曰以吾高天原所御齋庭之穂亦當御於吾兒と有れば皇御孫命御一己の如くなれども保食神段に天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可食而活之也云々即以其稲種始殖于天狹田及長田其秋垂穎八握莫々然甚快也と有れば皇御孫命は云ふも更なり天下に在と在ゆる顯見蒼生に係る御命なる事云ふも更なり　然れば此二柱神此漂在る國を修理固成給ひ置て八百萬神等を生給へるは八百萬神等に各其修理固成の錫命を領知しめ給へるなり八百萬神等の御裔に顯見蒼生の蕃息［フヱヒロコ］るは又其錫命を領行しめ給へるにて終に盡期有可からず其盡期無き處乃須臾も離る可からぬ道にて隨在天神能く人に存する賦命にて影響の如く終に逃遁可からぬ業なり下に引る神代紀なる或有所成或有所不成と有る神談は古事記に修理固成是多陀用幣流之國と有ると同事なり心を着て考合す可し　然るは二柱神の生坐し國を須佐之男命受賜りて修理固成給ひ此を又大己貴命少彦名命修理固成して天神御子に献給へれば天皇命高御座の大御業と天下を經綸すは此修理固成の御職なるが天地と共に無窮ならむ寶祚には渡らせ給へ其一日も修理固成の御業を弛め給ふ御暇御在し坐さず又天下の蒼生神代より修理固成の業を營むと雖も片時も此を忘る可き隙有る事無きを以て知可し生國足國と申す御事實も此に依て明なり然ればこそ經國の大本政教の綱紀とは云なりけれ朝廷此を弛め給はゞ國家昏亂し天下困窮せむ百姓此を怠らば六親不和して財用不足せむ此乃皇祖天神の賦命を棄捐するを震怒給ふが故に禍神所を得て荒ぶるなり垂仁天皇御紀なる彼倭大神の御諭言に先皇御間城天皇雖祭祀神祇微細不探其源根以粗留於枝葉故其天皇短命也是以汝御孫尊悔先皇之不及而愼祭則汝尊壽命延長復天下太平矣と宣へるを思可し其源根を探ぬとは神代紀に大己貴神報曰吾所知顯露事者皇孫可治吾將退治幽事と有る其にて皇御孫命の行はせ給ふ顯露事は専修理固成の御事なるを其に弗給はゞ幽事を以て糺給はむとの義なり實に神の御言の如く天下太平ならむ事は修理固成

の外無き物なるをや若て此賦命の全は大國主大神の能成し給ふ所なり其は古事記に大穴牟遲與ニ少名毘古那ニ二柱相並作堅此國云々是時有ニ光レ海依來之神一其神言能治我前者吾能共與相作成と有るは修理固成の事なるを思ふ可し（御間城天皇の如く神聖に御在るすら尚斯計の御訓どもは有けり況て其餘の人民の上には然こそ神の御心に叶ひ奉らぬ事のみ多在らめと甚畏く甚惡しくなむ慎可し力む可し）凡士農工商の四民各業有り其業を修る事はしも互に相扶助け相左右ふ事は其一分の利用に似たりと雖も此を聚れば天下實ち四海富て謀らずして國家平安なる物なれば修理固成の賦命は此漂在る國を經營る態なり弛可からず又怠る可らざるなり一年耕種せざれば其佃らざる地不毛に異ならず皇祖天神顯見蒼生を養成し給ふ資用を滅じ土地を狹むるなが一日營爲せざれば其惰る人土偶に異ならず皇祖天神顯見蒼生を化育し給ふ器用を缺き神物を蔑如するなり此故に宇宙の事は皆我事たり天下の物は皆我物なり有所成此は前に修理固成せるなり或有所不成此は後に修理固成爲可きなり皇祖天神の我を出し給ふ事は天下の爲に物爲給ふなり此を以て有德無功を論せずして顯見蒼生と詔給ひ皇御孫命此を統御して大御寶の尊號を用給ふ何を以て顯見蒼生と詔給るや賦命を辱みて修理固成の德を具たればなり何を以て大御寶と號給へるや賦命を仰て修理固成の用を懋むればなり（世人の說く所は天下を死物に爲るなり予が神典に得たる所は宇宙を活物にして其活機を說くなり生國足國の神業を知らず知らず幽に賦命（サヅカ）り奉るを知ずて有むは鳥獸にも如ずと云むか）偖世中の事業は皇祖天神の御命に宣ひ顯はし給るが若く實に修り理め堅め成すの四なり（有餘有る事なく又不足有事無く此四者を司らめて神習とは云可きなり）修は其物に就て其事を蓋すを云ひ治は其物に主として其事を治るを云ひ固は其物を象りて其を堅る義成は其物の爲る性に率ひ其を就す義なるが其を二合して修理と云ひ固成とも云るが又錯綜して作堅と云ひ治成とも云り（此は何も用の語にして人の進退所作に拘はる辭どもなり）修の例は顯宗天皇御紀月神の御言に我祖高皇産靈尊有下預ニ鎔一造天地一之功上と有るは古事記に修ニ理一固一成是多陀用幣流之國一と詔給し御事業を幽より副御在して鎔造給へるなれば此語の起本とも云可きなり又伊邪那岐命の御言に吾與レ汝所レ作之國未ニ作竟一云々と詔へるは此生坐し國土を修り給ふなり又神産巣日御祖命云々故與ニ汝葦原色許男命一爲ニ兄弟一而作ニ堅其國一故自レ爾大穴牟遲與ニ少名毘古那一二柱神相並作ニ堅此國一と有るは此大地を經營し給ふにて所謂河

海を分ち山林を定め田野を墾開て國形と爲給へるなり拾遺集に運なき人を何造りけむまた狹衣物語にも甚如此しも造置き聞えさせけむと云るは人を生りしを云なり又廣瀨大忌詞に天下公民能取作奧都御歳乎又龍田風神祭詞に公民乃作物乎云々公民乃作作物乎不成など有るは農作の事を云るなり大殿祭詞に皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕云々和名抄に修理職をば乎佐女豆久留豆加佐と有るなどは宮室を造作る事なり古事記に科伊斯許理度賣命令作鏡科玉祖命令作珠など有るは器財を製造るなり書を著る歌を作るなどは此に屬ふ可し如此くにして四民の業悉く造作修製に非るは無し此皇祖天神の賦命し給ふ所の其一なり前漢食貨志に士農工商四民有業學以居位曰士闢土殖穀曰農作巧成器曰工通財鬻貨曰商と見ゆ人に授と云ふも其物を人に就(ツ)けて其不足を補ふ意物に盡すと云も造作修製の功を極るを云ふ又物に繼と云ふ事有るも其物に受て我事を副就る由にて此等の類語ども甚多かり思合せて知る可きなり　理と云ふ例は古事記に大國主神云々是時有光海依來之神其神言能治我者我能共與相作成云々然者治奉之狀奈何答言吾者伊都岐奉于倭之靑垣東山上と宣へるは其神の主と爲りて齋祀れと仰給へるなり又大國主神の御言に唯僕住所者云々而治賜者僕者於百不足八十坰手隱而侍と申給へるも其祭祀を乞給へるなり垂仁天皇御紀なる倭大神の御言に皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神と有を以て知可し孝德天皇御紀に先以祭鎭神祇然後應議政事と見えたる如く天下を治給ふの大本祭を以て政と爲可き皇祖天神の御定なればなり此は祭祀を以て治と云ふなり神武天皇御紀に椎根津彥乃祈之曰我皇當能定此國者云々崇神天皇御紀に天皇年十九歲立爲皇太子云々恆有經綸天業之心焉また七年春二月云々於是天皇乃幸神淺茅原而云々是時神明憑倭迹迹日百襲姬命曰天皇何憂國之不治也若能敬祭我者必當自平矣など有るは天下を統御すを治とは云るなり脩身齊家と云ひ事の亂たるを靜むるをも然云り又納殿など云ふ時は物を藏るゝを治と云なり理治收藏などの字を書り滝補當子修身篇に少而理曰治と見え字書に治理也と有を思ふ可し物の上首を長(チサ)と云ひ幼を乎佐奈志と云るも長無(チサナシ)の義なり然れば乎佐牟と云ふは其物に長(チサ)と爲りて力(ツトム)る由なり　固の例は伊邪那岐命を國堅大神と申すは此固成給ふ由を以て稱申せるを尙古事記に大穴牟遲與少名毘古那二柱神相並作堅と有るは大三輪神鎭座次第記に初伊奘諾伊奘冉二神共生大八洲國及處々小島而地稚如水母浮漂之時大己貴命

與二少彦名命一戮レ力一レ心殖二生薦葦一固造云々と有に同じく此國土を作堅固るなり出雲國風土記に堅立之加志者云々は物の弛ふ事無く堅固なる由なり古事記玉垣宮段に汝所堅之美豆能小佩者誰解と有るは契約を固むる意なり（堅石爾常石爾など多く云ふ如く何れも堅固不動なる由にて其爲す所を能く爲る言にぞ有ける）成の例は古事記に天地初發之時於高天原成神名天之御中主神云々神代紀に天地初判始有二倶生之神一云々は產るゝを成と云ふなり古事記なる伊邪那岐命の御言に爲レ生二成國土一奈何と有る即此なり又同記に能二治我前一者吾能共與相作成 若不然者國難成は國土を經營成す事を云也 又同記須佐之男神の御言に爲二大國主神一爲二宇都志國玉神一と有る爲(ナリ)は事に任らるゝを云ふ又自二其矛末一垂落之鹽累積成レ島また汝身者如何成云々成々不二成合一處云々成々而成餘之處などの成は草木の實を結ぶを生と云などは物の形象を爲して顯るゝを云ふ又豐玉比賣命產生時化二八尋和邇一などは物の本體を變て佗物の貌に化れるを云ふ產業(ナリドコロ)と云ひ別業と云ひ聲音に鳴と云など物の用を成して事の生る(アラハ)ゝを云也（言を連るを言を成すと云ひ文を綴るを文を成すと云ふなどは更なり庶子を成さぬ中など其餘にも尙甚多かりけり） 如此く修理固成の事は悉く國土經營の事に係るなるが此事を能して百姓富み天下平安なる可く此事を廢て百姓貧しく天下大に亂る可し實に漂在る國にして人を以て修理固成す漢籍書經に天工代人と有る如く人の此を營爲する事は大國魂神八千矛神に代奉りて生國足國の成功を遂る事にて其乃伊邪那岐伊邪那美命の皇祖天神より錫りたる賦命を受繼で修理固成なり豈少緣の事ならめやも若此國土の定り竟たる物に有ませば修理固成の用は無て有ぬ可く然らば人も亦無用の長物たり神また幽に在して何にかはせむ又天之沼矛を皇祖天神より授り給へるも修理固成の事業を貫通するの表物にて大國主神の皇御孫命に平國之廣矛を献給へるも其意を表し給へる物なり（神は人を守るを以て業とし給ひ人は修理固成を以て職とす營爲する所非れば人の德を修る事能はず神も德を施し給ふ事能はず天地は何の爲に有る天地ぞ心を平にして思ふべし 或問國土未成るに天之沼矛と云る器物未製造る可きに非ず答云國土未成されば金石實を別す國土は浮脂の如し浮脂の若き物成熟して大地と成るに同じく今の戈の形にして未質ならず國土定まるを待て始て質有る可し此等の物具天自然に生て弓矢耒耨も此に則て成れる物と知る可し）眞に此漂在る國なるを以て生國と稱(トナ)ふ有所不成ばなり其を修理固成すの功用を以て有所成所以に足國と申す名義深く遠くして其致を今此に言擧は爲れども猶其片端をのみ顯白せるなり古始太元考に詳記すべくなむ（伊邪那岐伊邪那美神の此大地を生坐しより幾計か大きく成けむ）

大地の全體如此し又萬國の闢け行く事も幾計か廣まりぬらむ此に就ても昔山人の大地も國有る事を知らず中國よ中華よと傲り居るは笑ふに堪たる僻事なり彼の古昔も人皇氏の大九州を立給ひし古說有て萬國の所在を九域に建分して其義理甚詳なるを知らず妄なるかも妄なるかも 神代紀に嘗大己貴命謂二少彦名命一曰吾等所造之國豈謂二善成之一乎 少彦名命對曰或有レ所レ成或有レ所レ不レ成是談也蓋有二幽深之致一焉と見えたる幽深之致は此修理固成の致を能く爲るに在り修理固成の作用有て國土なり人民なり豈此を麁略に心得可けむや 天神諸の命以て伊邪那岐伊邪那美命の此國土を生給ふは有所成なり諸神未だ坐生ず有所不成なり此國土と神祇と前後を云可からず一異を云可からず於是て有所成なり國土神祇有て人民未生せず有所不成なり人民有て國土を經營す此有所成なり未だ國土の經營を主むる神なし此有レ所レ不レ成なり大己貴少彦名二神此全功を能く爲給ふ有所成なり未だ幽顯定まらず此有所不成なり天神の詔命に依て大國主神幽冥を所知食し皇御孫命顯明を政ごち給ふ此有所成なり上古無爲にして租稅貢調の議なし此有所不成なり天下租稅貢調の儀定りて君臣の分明なり百姓の業定れり此有所成なり君臣の紀綱一日も弛ふ可からず百姓の產片時も怠る可からず此有所不成なり此に於て我知らず此修理固成の賦命を能くして四民其位に處る此有所成なり成す所非ざれば天下亂れ人民飢う此故に有所成て天下平安なり國土豐饒なり存所不成が故に所成有むとす此生國足國神の全能の終古に貫く所以なり豈此幽深之致を褒て天下國土たらしむや思ふ可し勉む可し實に或有所成或有所不成の神談は生國足國の大本修理固成の根基にして誠に日の未だ中せざる如く月の未だ滿ざるが若く欹器の戒にして意味の廣大深長なる物なり仰ぐ可し尊ぶ可し

皇神乃敷坐島能八十島者谷蟆能狹度極鹽沫能留限（スメカミノシキマスシマノヤソシマハタニグヽノサワタルキハミシホアワノトヽマルカギリ）

皇神能敷坐は第四詞の下にも有て其下に云る如く此大地の全（ミナ）は皇祖天神の言依し奉給へる隨に天皇命の敷坐る國なる事云も更なるが其は顯明事の上に就てこそ皇御孫命は敷坐れ幽冥事の上より云へば皇神の敷坐す國なり神代紀に高皇產靈尊勅二大己貴神一曰夫汝所知顯露之事宜二是我孫治一レ之汝則可三以治二神事一云々大己貴神報曰吾所レ治顯露事者皇孫當レ治吾將二退治二幽事一と有を思可し顯明の事をこそ避給へれ幽冥の事は此神の治給ふ物をや彼倭大神の御言に吾親治二大地官一など宣へるは殊に敷坐と云ふ意に近き物なりけり 如此く表には皇御孫命の敷坐す國裏には大國主神の敷坐す國なるが故に天下蒼生の表（アラハ）事は皇御孫命統御し給ひて其御政有り裏（カクリ）事は大國主神之を掌し給ひて其御政有りて逃るる所無きなり如此く幽冥事はしも今日の上の事なるを身罷りて後に其御制令を受賜る事と思ふは愚昧なり一條兼良公の御說に人爲二惡於顯明之地一則帝皇誅レ之人爲二惡於幽冥之中一則鬼神罰レ之爲レ善護レ福（サイハイ）亦同レ之と宣るは顯幽を徹視し坐る御說なり千金翼方なる老子の語に人生二天地氣中一動作喘息皆應二于天一爲レ善爲レ惡天皆鑒之勿レ謂二闇昧一鬼神報レ之勿レ謂二小語一鬼聞二我聲一人爲二陽善一人自報レ之人爲二陰惡一鬼神治レ之故天不レ欺レ人示レ之以レ影地不レ欺レ人示レ之以レ響此皆自然之等也と有るは殊に委しき說なり莊子庚桑楚にも爲二不善乎顯明之中一者人得而誅レ之爲二不善乎幽間之中一者鬼得而誅レ之明二乎人一明二乎鬼一者然後獨行と有り如此くなる上は皇御孫命大國主神相共に表裏に分れて有ち給ひ相共に敷坐す所謂なる事彌々著明かり

○島能八十島は鎭火祭詞に神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹妹二柱嫁繼給氏國能八十國島能八十島乎生給ひと有る其にて此大八島國より始て大地萬國を較て云ふ語なり 八十の言に拘る可からず八百萬神を八十萬神など云如く大凡に云也 其は上にも云る如く古事記に伊邪那岐命告二其妹一曰二女人先言不一レ良雖レ然久美度邇興而生二子水蛭子一云々次生二淡島一是

亦不レ入ニ子之例ニまた神代紀に先生ニ蛭兒ニ云々次生ニ淡洲ニ此亦不ミ以充ニ兒數ニと有る此等をも合せて云る惣數なり（此事上に委しく云り猶下に云ふ事をも照し合せて考ふ可し）因に云む蛭子と淡島はしも共に二柱神の生坐る島どもなるが女神の言先立給し御過に成れるに依て其地形皇國の如く美好くは非ず其御過を性に稟て人皆の賢しくして教化を以て此を御(ヲサメ)ざれば能く人道を知ざるなり古事記なる右の續の文に於是二柱神議云今吾所生之子不良猶宜レ白ニ天神之御所ニ即共參上請ニ天神之命ニ爾天神之命以布斗麻邇爾卜相而詔レ之因ニ女先レ言而不レ良亦還降改言と見え神代紀にも此事を天神以ニ太占ニ占合之乃教曰と有るを見つ可し彼修理固成と似たる事ながら其は當然の道を詔給へるにて賦命なり此は當然の道に乖けるを改しめ給ふ教訓也此差別を思辨ふ可き事なりかし是以て皇國は大道の自然に存して行るゝ國外國は教訓に依て大道を行ふ國なる事と定れる物なり（但修理固成の道は万國の賦命なり教ずして人其所に位(イタ)る此に強弱剛柔の差有と雖も大較同し學ばずして得る所なりと雖も學で益々其道を能くす次なるは教訓にて皇國の如きは教を待ずして大人君子の行有り彼蛭子淡島は右の如き由來有るが故に教を得ざれば人と爲り難く鳥獸に粗相似たり外國は伊邪那美命の御言先立の過に依て教を以て此を治む可しと雖も其道終に行るゝ事能はずして革命の國なり天より此を幽に受て王者と爲るも有る可く天を口實にして王位を簒へるも多かり其教皇國に渡來して言事を記す爲には小補無しとも云べからねども多くは彼の不義に習て其天稟の性を易へ皇國を貶し彼國を中國と美み擬君子と爲て小人を欺き文事の風流に染着て乞食の客と爲り家を保ち身を修む事能はざるなり菅神の此事に深く心を用給ひて雖レ學ニ漢土三代周孔之聖經ニ革命之國風深可レ加ニ思慮ニ也と誡を遺し給へり）蛭子と云ふ名義は三年になるまで葦何生立ざりしかば子の例に數させ給はざるが故に生と云ふ言を諱て放子(ヒルコ)と詔給へるなり屁(ヘヒ)放る屎放るなどの如し此を流るゝ隨(マニ)に放棄給ひしかば皇國の東北に漂着て蝦夷の千島と成れり蛭子の字を世に延美須と訓るにて知可し此地の較略は景行天皇御紀に朕聞東夷也識性暴強凌犯爲レ宗村之無レ長邑之無レ首各貪ニ封堺ニ並相盜略又山有ニ邪神ニ郊有ニ姦鬼ニ遮レ衢塞レ徑多令レ苦レ人其東夷之中蝦夷尤強焉男女交居父子無レ別冬則宿レ穴夏則住レ樔衣レ毛飮レ血昆弟相疑登レ山如ニ飛禽ニ行レ草如ニ走獸ニ承レ恩則忘見レ怨必報是以箭藏レ髻刀佩ニ衣中ニ或聚ニ黨類ニ而犯ニ邊界ニ或伺ニ農桑ニ以略ニ人民ニ擊則隱レ草追則入レ山故往古以來未レ染ニ王化ニと詔へるにて明なり（此は今の蝦夷島の事なるを先輩多く越後陸奥出羽の地の事と爲るは笑ふに堪ざる曲言なり此三國ともに美しき此瑞穗國なるを如何に曲れるとて餘りなる事なり御紀に彼國などに蝦夷と記されたるは其國邊りに酋長たる者の彼を使たる故に人民と雜居りしなり又其酋長は長髓彦の子孫にて有ける事ども髓なる說も有れども其は古始太元考に註(イ)ふ可し倭松前の地彼に隣て彼と言語通はず其風土記なる趣なるは皇國の支島なりけむを彼蛭子に潮沫の凝々て漸大きく成れるが連聯れるなり然れども自然其風土等しき事を得ざるは又皇國戎島の差別を混じ給はぬ神議と思えたり）又淡島は紀伊國の粟島を

始として讃岐國志摩國伯耆國出雲國越後國などにも有るは其一にして淡々しく粒々と成けむが皇國内なるは大八島に就て異有る事無れど四方八面に蕃息り散ぼひたるが大八島國の成竟たる後に至りて潮沫また水沫の凝々て又連聯ける間に彼と此と此と彼と相共ひて終に赤縣に所謂る大九洲洋西に所謂五大洲とは爲れる也（是を以て赤縣印度など樣に自然地勢を異にし萬國を分てり）然れど其本縁を以て粟島と號け又女人を言先立し事を淡め惡み所思す由を以て淡島の義を爲せるなり此詞に皇神乃敷坐島能八十島者谷蟆能狭度極鹽沫能留限狭國者廣久峻國者平久と有を以て外國の全は悉く少彦名命に御力を戮せ給ひて生島足島神の經營し給ふ事を知可し（然らば此詞に少彦名命をも共に擧可きを此は彼國避の時に奉給ひし平國之廣矛（ホコ）を齎かせ給ふ縁に就て祭らるゝ故に生島足島神のみなり）彼外國の較略は先其萬國の中華と自稱せる赤縣州すら易緯乾鑿度に孔子曰方二上古之時一人民無レ別群物無レ殊未レ有二衣服器用之利一於レ是伏羲乃仰觀二象於天一俯觀二法於地一中觀二萬物之宜一始作二八卦一以通二神明之德一以類二萬物之情一故易者所下以繼二天地一理二人倫一而明中王道上是故八卦以建二五氣一以立二五常一以レ之行レ象法二乾坤一順二陰陽一以正二君臣父子夫婦之義一と有る如く前に記せる蛭子島に髣髴たり此故に聖人と云ふ者出て教訓の事擾がしき迄行ると雖ども空言の教のみ僅に學者の耳目に存して大に實事の行はれざるを以て其餘の諸蠻國の事想像る可し（此故に外國に出來る物の皇國に渡來るに悉く無用の物共多かり錦繡綾羅の彼に出る者能く巧なりと雖も世に華美の害を進る事少からず香藥藥物に餝り多くして生民を虚死せしめ奸商利を射るの媒となりて其害また甚大なり其外奇器淫巧の玩物及び異禽怪獸の類皆王良主の惡む所暗愚小人の喜ぶ所の物のみ多くして國家に害と爲る事少からず併ながら大汝少彦名命の此を皇國に寄せ給ふ物にて皇國の居ながらにして蕃國を馭する義なり）如此く外國は二柱神の御子の例に充給はざるの國なる故に言痛き教訓を布施さゞれば君臣父子夫婦の義立ざるに皇國はしも萬葉五（三十一丁）に皇神能伊都久志吉國と有る如く君臣の大綱神代に立定て終古に毫釐も乖違ふ事無きは所謂る無爲の化にして神隨に行るゝ者なり此故に萬葉十三（十丁）に神在隨事擧不爲國と云り豈外國と日を同じくして語る可けむや（若此く云へば言擧に似たりと雖も赤縣州の古語に大人國とも君子國とも此を稱たる事師の大扶桑國考に云れたるが若し實に大人君子國の御民と生出たるは皇祖天神の殊なる御幸ひ御惠に依る物なり何處迄も其由來を説明らめ奉る事我が本居平田二大人に受賜はる本業天神の賦命なり幸しとも尊しとも其御恩賴に報い奉らむ詞も知らずかし）如此く説別れば世界の較略は皇國蛭子淡島の三にして此を區別すれば伊邪那岐伊邪那美命（漢名天皇氏地皇氏）の生給へる國能八十國島能八十島にて潮沫水沫の凝着て大に成れるは須佐之男神（漢名人皇氏）の國引に

引坐るにて大九州と爲れるにて大較九域に支れたるを大國主神（漢名大昊伏羲氏一云扶桑太帝一云大眞東王父）少彥名神（漢名東華大神少童君一云淸眞少童君一云泰一小子）の此を經營給ひて萬國とは爲れるが尙其古名を存して此にも島能八十島とは云るなり（此は悉く予が始て云出る說なるが某神等を彼に稱する御名は平田翁の赤縣太古傳及三五本國考に依れり）臨時祭式又江家次第などに八十島祭事有るは此神を祭らるゝなる事已に云るが如し御巫と此生島巫と此祭に相預るを案ふに大御巫祭神八座は身體の神にて氣形神の主宰食衣宅の靈神にして萬國の人民の齋く可き所此生島御巫祭神二座は國土の神にて修理固成の賦命を守護坐せば萬國の人民の祭る可き所なるを以て八十島使を發遣られて其禮典を盡し給ふ事皆此天下公民の爲なり豈獨皇國のみの御政ならむや萬國を統領め給ふ御事なる事八十島祭の名を以て知可し崇神天皇御紀に大物主神の有二海外之國一自當二歸伏一と覺白給へるを以ても國能八十國島能八十島は皇御孫命の敷坐す國と大國主神の歸伏しめ給ふ者なり今こそ有れ千萬年の後必符信有可し（難波湖を萬國に象りて物せらるゝ事なる可し日本紀略に昌泰元年六月廿八日丙寅八十島祭使發二遣之一また天曆元年六月廿五日戊寅發二遣八十島祭使一云々以二來廿七日一可レ祭也と有れば六月の末なれど定れる日限の定無き故に臨時祭には收れるなる可し但天皇御代の始に一度有るのみなり續後拾遺集二十に保元二年十一月八十島に參待けるに云々と詞書有り此に依て見れば六月にも限らぬが如し尙能く尋べし備師の赤縣太古傳三皇紀に大地の神靈を生國魂神と稱して其御社も大社にて此彼有り其祭を八十島祭と云て其式も嚴重に行れたりと有れども甚麁き說とぞ思ゆる）○谷蟆能狹度極の谷蟆は古事記に大國主神坐二出雲之御大之前一時自二波穗一乘二天之羅摩船一而云々有二依來之神一爾雖レ問二其名一不レ答且雖レ問二所從之諸神一皆白レ不レ知爾多邇具久白言此者久延毘古必知レ之と有るを以て見れば多邇具久は久延毘古と共に大國主神に使れ奉りて斯在る事を顯白す物識（モノハカセ）なりけむ（久延毘古必知レ之と申せるにて已も其任に在る事を知可し抱朴子に蟾蜍千歲頭上有レ角腹下丹書名曰二肉芝一食二山精一人得レ食レ之可レ仙術家取用以起レ霧祈レ雨辟レ兵解レ縛云々と見ゆ又東方朔が十洲記に谷希子と云ふ仙人に誘れて皇國の地に渡り靑邱風山の靈所を拜したる趣なるが其谷希子決く此谷蟆ならむと思ゆ）記傳十二（又大祓詞後釋）に谷蟆能狹度極の狹は借字にて眞渡なり此物は何處までも靈しく行徹る物なる故に云りと云れたるは然る言なれど予が得る所は異なり其は大國主神の供御に仕奉れる久延毘古を此神者足雖レ不レ行盡知二天下之事一神一也と其爲す所を述たるに多邇具久の用は此に無かりし故に其仕奉れる樣は知られざれど谷蟆能狹度極と有る語の由有て通ゆるに意を得て此を考れば天下萬國の隈處を餘さず悉く狹度り周旋り導奉りて國土經營の幸行の御前仕奉りし其故事を今の事實にも用て然は云るなり但此は蛇國者平久に照應せたる文

なり谷蟆は山中溪間の物なるに思合す可し谷は溪澗に能く棲める者なればなり鈴屋大人は谷と云るは物の狹間に居物なる故なりと云れたり此を然る可し具久は彼何處迄も徧しく潜り至る由なる可し日本紀通證に倭名鈔蝦蟆和名賀閇流蒼蠅ニ避テ棄ニ之常暮而返故爲ㇾ名洪駒父詩人言懐ㇾ土虫棄去俄復在註蝦蟆也と云り鈴屋大人云久久は蛙の類の總名にて蟆蟆を谷具久と云ふか○鹽沫能留限は彼神代紀に處々小島皆是潮沫凝成者矣亦曰ニ水沫凝而成ニ也と有る此にて生島足島神の淡島を基本と爲て潮沫水沫を凝着け留め給ひ國形を漸大きく廣く物爲て萬國を經營爲給ふ事を云なり但此は同紀に伊奘諾尊伊奘冉尊立ニ於天浮橋之上ニ而云々以ニ天之瓊矛ニ指下而探ㇾ之是獲ニ滄溟ニと有る此にて此大地の形象はしも滄溟の環り繞ひて島嶼は其中に立る物なるが故に高天原に對へて青海原とは云へり古事記に伊邪那岐命大歡喜詔云々即其御頸珠云々賜ニ天照大御神ニ而詔之汝命者所ㇾ知ニ高天原ニ云々次詔ニ建速須佐之男命ニ汝命者所ㇾ知ニ海原ニ矣事依而賜也と有るを以て知可し但海原の上に青字脫たる可しと思ゆ古史徵に云く青海原と云は此國土を押統(オシナベ)て云ふ古言にて天照大御神は高天原須佐之男命は此青海原と相對へて天と地とを依し賜へるなり此を以て深く思ふに伊邪那岐伊邪那美二柱神天之瓊矛を以て探り賜へりしかば泥土(ツヒチ)沙土(スヒヂ)と海潮と二に分別て先淤能碁呂島を得坐して國中の天柱と見立給ひて大八島國を生給ひ此を大地の秀眞と爲て能く國作り爲給ふ事は云も更なり子の例には數させ給はざりけるなが(マ)ら蛭子と淡島なども成りしかば其能く作らせ給は將く所思しける間に伊邪那美命は黃泉國に出坐す可き由有て罷坐りしかば蛭子淡島は唯自然にして潮沫水沫の凝り成るに任(ユダ)ね置給ひしを其は古事記黃泉段に伊邪那岐命詔之愛我那邇妹命吾與ㇾ汝所ㇾ作之國未ニ作竟ニ故可ㇾ還と有る御言に心を着て見る可し伊邪那岐命黃泉國より還給ひて其穢を御禊祓給し時に二柱の貴御子を得給ひて天照大御神は高天原を所知と事依奉給ひて天上に送上奉給ひ此大地は須佐之男命に事依し給ひて修理固成の賦命を委ねさせ給へる事已に先師の說の如し此は此大八島國を始て彼黃泉段に未ニ作竟ニと詔給ひし蛭子淡島の國造りの事なら殘たる御言依しなり如此く大地萬國の經營を須佐之男命に事依し給ひし天神の御事依しの詔命を竟(ハタ)し給へるに依て神代紀御齊段に是後伊非諾尊神功既畢靈運當遷是以構ニ幽宮於淡路之洲ニ寂然長隱者矣亦曰伊非諾尊功既至矣德亦大矣於是登ㇾ天報命仍留ニ宅於日之少宮ニ矣とは記されたり其御事依しの大御命に可ニ以治ニ滄海原潮之八百重ニ也と詔給へるは師說の如く此國土全の事と意得て然なりと雖も潮之八百重に說有り其は蛭子淡島などは形許りの小島にして未此時國と云ふ可き狀には非りけるを潮沫水沫の八百重に留り凝て國形となり行く象を觀覽して伊邪那岐大神の如此は宣ひ依し給へるを須佐之男命其自然に成行くに耳委ねて措せ給ふ可くも有ざりしかば國引に引寄せ合せ給ひて九城(クニトコロ)と成し給へるなり但此は上にも云る如く蛭子粟島は女神の先言給ひし御過よ

り成れゝは女神に屬坐る須佐之男神の作成し給ふ可き理なり故國引坐神とは申せり出雲風土記に國引坐八束水臣津野命云々と有る八束水臣津野命は出雲國日御前社記に須佐之男命の亦名と爲る實に然る言にてこの神と同神なり其は紀記共に夜久毛多都の神詠有て出雲國の名と成けむを風土記に所ニ以號ニ出雲ー者八束水臣津野命詔ニ八雲立詔ー之故云ニ八雲立出雲國ーまた八束水臣津野命詔ニ八雲立出雲國ー者と有を合せ見るに再度出雲國號出來可くも非ざれば必く須佐之男命の事なり先師等の古事記に依られたるは誤れり又大國主神も其直に御子にて六世孫と有ろも師の曾孫と爲るも共に僻事なり紀の正書の正しきに從ふ可し又國引坐八束水臣津野命云々は須佐之男命足はぬを足し餘有るを鈌きて滄海原潮之八百重を國引き作成し坐し故に上古に國引坐神とも稱申せりしなる可し出雲風土記なる國引の故事は邇近に彼國の傳の存るにて實には萬の國を國引に引坐て作成し給へるなれと彼國に然る古傳無くば爭か此神を國引坐神と稱す古說を知む仰ぐ可し務む可し　然るを出雲風土記に伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命五百津鉏神鉏所取々而與下所レ造ニ天下ー大穴持命二所大神上と見えたる如く熊野加武呂乃命は須佐之男神に坐し二所大神は大穴持命少彥名命の二所に坐り古事記には神產巢日御祖命の御言に少名毘古那神の事を與ニ汝葦原色許男命ー爲ニ兄弟ー而作ニ堅其國ーと詔給へる趣なれば風土記と合せて同事の二つ有れば故有る事ならむと心附て思ふに彼爲ニ大國主神亦宇都志國玉神ニ云々の事有るは伊邪那岐大神より青海原潮之八百重を所知と事依し給へる修理固成の賦命を課せ給へるにて大國主神と成れと顯明事の御言依しなるを少彥名神の依來坐る時に神皇產靈神高皇產靈神もの兄弟と爲りて其國を作堅てよと再詔給へるは少彥名神は蛭子淡島の國魂神たり此神と力を戮せて須佐之男神より賦命の顯職を修理固成せよと命給へる幽冥事の御言依したり顯幽相合て公正の錫命なり凡人の世を掟ふに顯幽相合ふ所に非れば能く保ち雖し此故に人の富貴は更なり萬事皆然にて人より物を命(ヨサ)されて其任に就むと爲るに其人能く保つ事能はざるは顯には人より命するなれど幽より其任を授給はぬなり又人の富貴を得るに我も諾ひ人も許して世に公正なる事の如きも其を我有と爲す事能はざる有り此また幽より授給ふ所に非るが故なり我等凡人の上にこそ其神言を受給はる事はしも爲得ざれ神の御上には必此兩事を物爲させ給ふ定なり彼顯宗天皇御紀なる月神の御論言に我祖高皇產靈神有下預ニ鎔造天地ニ之功上と有るを思明らむ可し　然して後にまた須佐之男命の五百津鉏神鉏取々して大穴持少彥名二柱神に事依し給へるは幽にこそ少彥名命と共に此國を作堅てよとは事依し給へれ顯には伊邪那岐大神より須佐之男神に賜はせたる此國土經營の事なれば必其御依し無くて叶はぬ事なりけり人の富貴を得るに得可き道有て得るは幽に御定有る事にて皇祖大神の賦命なりと雖もその主たる人より許されて物爲ざれば盜襲の惡名を出る事能はざるが如し此差別を辨ふ可し倩古史成文に此風土記の事依しを國作の段に收られたるは然る言なれど須佐之男命の根國に入坐し後の事と爲るは誤なり御父大神より御事依しの國作の大業に坐せば此二柱神の力を戮せてなり相共に作堅給ふ有狀を隨に見居坐る上ならでは必入給ふまじければなり其は古事記に大國主神の須佐之男命の御許に參向坐し事を根堅洲國と云ひ逃返坐す所を黃泉比良坂と記せる混亂の文を訂正し敢られざりし僻事なり此は大神の未た何處にて此國に坐し間の事なりつるを伊邪那美命の黃泉段より混れ入りたる謬めき名等なり此事前に訂正し得たる事も有れど事長ければ此には論しつ　然るを此詞に少彥名命の事は無て生國足國登御名者白氐云々と有

るは大國主神は此國土全を御父大神より依され給へる大國主の御職に坐せば君主と御在し坐し少彥名命は其を輔相給ふ神に坐せばなり此故に國避の事なども少彥名命に詔命給はぬ所を以て見れば本より主領き坐す神に非るが故なり須佐之男神の御父大神より滄海原潮之八百重を事依され奉給へるは獨此大八島國耳ならむや外國を統たるを思ふ可し偖大國主神の此靑海原潮之八百重たゞ國の八十國島の八十島は谷蟆の狹度る極み潮沫の留る限り狹國は廣く峻國は平けく修理固成て皇御孫命に其顯露事を授奉給へれば皇御孫命天下の公民を統御して其修理固成の德を修しめ給はむ爲に天下を平安からしめ給ふ大御政坐せば人事を以て此國土の經營は成就る如くなれども大國主神大地官と御在して八十魂神を統領坐て此漂在る國を修理固成し御在し坐す眞語にて鹽沫能留限とは今も狹き國を彌廣く廣め給ふ由にて谷蟆能狹度極は今も峻き國を彌平に平け給ふ由なる對なり古文の巧妙其奇異ならずや其は上にも粗云る如く谷蟆能狹度極は峻國者平久に係て其用を云るに對へて鹽沫能留限は狹國者廣久と云ふ事乃ち沫潮水沫凝々て漸萬國の大きくなる事を簡古に叫せるは妙也とも妙なるに非ずや祝詞に鹽沫能留限は海潮の湧行く時流るゝ沫の至り留る果と云ふにて天下の竟き限を云ふ」と云れたるは實に尤なりと雖も其元由を知られざるなり

狹國者廣久峻國者平久島能八十島墮事無皇神等能依左志奉故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣

狹國者廣久此は鹽沫能留限より受たり狹國の例は出雲風土記國引段に八雲立出雲國者狹布之堆國在哉初國小所作故將ニ作縫ニ詔而云々又神武天皇御紀に妍哉乎國之獲矣雖ニ內木綿之眞迮國ニ猶ニ如蜻蛉之臀呫ニ焉と詔給へるなど皆迮迫なる義なるに同じ因に云堆字を平田翁の佐波と訓れたるは惡し例に據て佐佐と訓可し倭內木綿之は內は敷和な宇都波多と云ふ宇都にて全(ウツ)字の義なり如此く續け給ふ意は全木綿の如く眞狹(マサ)き國と云ふ事なり木綿は細などの如く廣くは織ぬ物なる故に全(ウツ)にても狹かる由なり廣久は上に云る鹽沫の彌凝りに凝留りて漸國土の大きく成れりし古說にて當今も彌廣りに廣り居る形象を云ふ今も洋西には新島を見出る事有る由なるが其若信ならずは尚此後幾計の國は成出らむ怪しむに足ぬ事なり但其中には古より有て見知ぬも有可く又今新に潮沫の凝成るも有可き事云も更なり已にも云ふ如く二柱神の大八島國生の前に成れりし蛭子淡島を併せて所謂る國能八十國島能八十島の始はしも須佐之男神の大九州を定給ふ頃に至りてぞ漸潮沫の凝留りて大きく成つらむ何を以て云ふぞならば二柱神彼滄溟を獲と詔給ひ靑海原潮之八百重を所知と詔給へるを以て知れたり然るは此より後大國主神に生大刀生弓矢を賜へる時も爲ニ大國主神ニ爲ニ宇都志國玉神ニと宣ひ大國主神より皇御孫命に國を避奉給ふ時も此葦原中國者隨命既獻

也と白給へる事有て青海原潮之八百重とは詔はずして唯に國と耳云るを思ふ可し（豐葦原水穗國とは皇國の號葦原中國は大地全を云るなり多く高天原に對て大地を云る稱なるを思ふ可し）然るは青海原潮之八百重とは外圍（ソトガコミ）の滄溟を云ひて國土の其中に在るを知らせ葦原中國など國と云ふ時は其國土を主と爲て外圍の海をも包て云るにて同事ながら其御言に異有るを思ふに須佐之男神の國土を作給ふ時に至て彼國引の文に在如く狹布の如く〃〃堆國にて伊邪那岐伊邪那美神の初國小さく作り置しけむを國引に引坐て此彼作り縫はして大小國とは成つらむ此に依て青海原潮之八百重の舊號は何時と無く更りて葦原中國と云ふ號は起れりけむ（大三輪三社鎭座次第に初伊弉諾伊弉冉二神共生二大八洲國及處々小島一而地稚如二水母一浮漂之時大己貴命與二少彦名命一戮レ力一レ心殖二生蔦葦一固二造國地一故號曰二國造大己貴命一因以稱二曰葦原國一と有るは處々小島を兼て云るなり其處々小島は蛭子と淡島とを云り）然れども未成竟たりとは云ふ可からず大國主神これと事依し坐る本縁此なり此神少彦名神と相共に作爲給ひて大較今の萬國とは爲れるを其も甚小在しが青海原より潮沫水沫の依着て今も然なり今より後幾計か廣くなるらむ國能八十國島能八十島の廣ごる耳ならず大地の全體も良太く成可き事云も更なり故此を以て古語に物の久遠なる事の表に天地之依相之極と云り大地の全體の漸々大きく成て上天に連接（ヨリア）ふ極みまでと云ふ壽詞なれど奈良朝などに云出る語に非ず必神世の遺言なり（是等を以ても狹國者廣久と云ふ事の少縁なるまじき要語なるを知辨ふ可し）狹國の廣くなる事は生國神と申す御名に由有る事上に云るが如し大地の德たる事は人類萬物を載る器にて生々蕃息の用を爲す爲なり生國ならずしては人類性命を保ち難く萬物生化し難かる可き理なるをや（世人の說く神祇は佛家に說く過去六佛に似國土は荒蕪不毛の死物たり予が說く神祇は今日の人事を幽贊坐（クヒアヒタスケ）て大同（ヨクトヽノ）へ成就給ふにて人事乃神事神事乃人事にて天地造化の御功恐けれど眼前に伺奉る心ちす國土も亦次々に彌こりに凝成つゝも廣かりて天之益人幾計り益加とも聊か足はぬ所なきを見定て云れば大に異有り）

○峻國者平久此は谷蟆能狹度極より受たり偖大地の凹き處江海たり凸き處は山嶽たり其凹き處はしも所謂る大海より潮沫水沫の凝成て狹國も廣く成れるが其凸き處は山嶽にして此を平かに爲ざれば國の面足はず此を以て大國主神多邇具久を御供にして斯在る隈處に至まで遺る所無く周流り座て作り平して顯見蒼生に御恩賴を蒙令め給へり神代紀に大己貴神乃興言曰夫葦原中國本自荒芒至二及磐石草木一咸能强暴然吾已摧伏莫レ不二和順一と有を以て其御功德の程想像奉可し（至二及磐石草木一と有るにて山岳を開き草木を伐拂ひ國土を作坐て此に所謂る峻國を平く物爲給ふなり此前文に其後少彦名命云々至二常世鄕一自後國中所レ未レ成者大己貴神獨能巡造と有るを以て知

る可し　大倭神社注進狀に八千矛神者大己貴命以二廣矛一爲レ杖援ニ平豐葦原中國之邪氣一是時大己貴命號曰ニ八千矛神一と有も其事なり（此は何れも上に委しく辨たれば立返讀む可し）此峻國を平け給ふ御功坐るに依て足國神と申事上に云るが如し八千矛神と申すは彼修理固成の道を貫通給ふ神に坐て神代より繼々彌々益々國形の平に闢け行て人類數口を増すと云へども地に不足なく生產また其程に應（マカ）せて滋蔓せり足國の御名諸なるかも（外國は措て皇國の事を云むに海近き所は然られ共山深き國には人民希少にして峻國なりしも代を經るに隨ひて然る國にも闢け行て人民蕃息し又其生產又乏しからず成れるを思べし）○島能八十島墮事無依奉故は萬國を悉く皇御孫命に依せて仕奉しめ給ふとなり其は崇神天皇御紀に大物主大神の有二海外之國一自當二歸伏一と教奉給へる如く外蕃の此に歸化し奉る事は自然の如くなりと雖も皆幽冥より彼酋長等が心に實に皇國に臣伏し歸順し奉可き事を思ひ浮はしめ給へるなり（但此事に就ては鈴屋大人の馭戎慨言に委しく辨られたる事共有り就て見る可し古學の徒必熟讀す可き底實々（本ノマヽ）の書なり）倭皇國は皇神能伊都久志吉國と定させ給ひて皇御孫命の所知看す千秋の長五百秋の瑞穗國と天下に所在る萬國に秀て勝れて元本大宗たるが故に蛭子粟島に潮沫の留凝て成れる諸外國どもは彼御言先立の御過に依て成れる惡き國なれば御子の例に充（イレ）給はざりつるを須佐之男命大國主少（スク）彦名二柱神の能く作堅させ給ふに依て此大八島の海外（ト）なる萬國は今の如く其大凡は成れりけむを其も又此皇國の羽翼（タスケ）に物せざせ給ふにて諸外國は皇國の輔弼に成り皇國は諸外國の摸範に成れる者に自然に君臣の義を爲し上下の分を成せり（神代紀に素戔嗚尊曰韓鄉之島是有二金銀一若使吾兒所御之國不レ有二浮寶一者不二是佳一也と詔給へるを思可し諸外國を作坐し事は皇御孫命の所御む皇國の爲に物爲させ給ふ證文なり又素戔嗚尊帥二其子五十猛神一降ニ到於新羅國一居二曾尸茂梨之處一乃興言曰此地吾不レ欲レ居遂東渡到二出雲國一と有るは外國の國體美しからず我皇國を本處と爲給ひて萬國を經營し給ひし古傳なり又初め五十猛神天降之時多將ニ樹種一而面（本ノマヽ）下然不レ殖二韓地一盡持歸遂始レ自二筑紫一凡大八洲國之內莫レ不ニ播殖一而成青山焉と有るは外國よりも皇國の經營を善く成し給ひし事を知る可き古說なり皇國に繼ては韓地漢地に繼ては赤縣と次々西へ闢き給へる事の定りと見ゆ其は文德天皇實錄に常陸國大洗礒前神の依來坐る時の託言に我是大奈持知少比古那命也昔造二此國一訖往二東海一今爲ニ濟民一亦來歸とあるを思ふにこの二神の外國に渡坐し傳は少彦名命の伯耆國粟島より常世國に出坐しは決く赤縣或は韓地なる可し彼に東海青童君と稱せるを印度にも甑その貴有りて師の考られたるが如し大國主神の彼に出坐しは始て赤縣に至坐へるなり三五本國考について見可し若て大國主神少彦名神相共に諸外國を經營坐けむと巡り竟て東海より還り坐るなり往二東海一とは今作竟給ひし地を指ていへり實には往二西海一也心を着て思可し）此故に大人君子之國として萬國其正朔を奉じ又其教化を受く此は凡人の能く知る所に非ずと雖も彼邦を建給ひし三皇の皇國に出て五帝の皇國に興りて彼に君師として馭戎し給ひ此を開闢し蕃化の民を含養し給へれば云ふ迄も無く萬國

に傳はる暦策度量は更なり各國の政形各國の文字醫藥の方法兵術軍機に至まで我皇神の萬國に賜へる物にて經世治國の綱紀有さる國無く皇國の自然に行るゝ如くこそは非ね彼民と雖も修理固成の德を行ひて各一分を固守するなど皆我が皇神の建給ひ定給ふ所にして幽に皇國の御制令を承賜はら令給ふ所にして自然臣子の道を立令め給ふ所なり此等の事は師の三五本國考及び大扶桑國考に委し然れば此詞に島能八十島墜事無皇神等能依左志奉とは海外之國を當に歸伏給ふ此等の事を借て我が制令を更させ給ふ可きならず其方物を寄給ひて其君師たる皇國を饒はし給ふなり此を以て彼に求させ給ふ事無しと雖も萬國の美悉く輻湊りて我が美を爲し萬國の富悉く集聚て我が富を爲す此我が皇神等の彼酋長をして臣下の表を奉しめ給ふなり知て爲すや知ずて爲すや知らねど自然にして能く如此くなる事皇神等の依せ給ふに非ずて何ぞも斯在むや但萬國の酋長ども自身皇國に參集して顯露事の御制令を受賜はる可き筈なりと雖も萬里の波路を遠く赴く內には一度參るにも數年を經るも有れば其間に國政の弛みも出來なむには縱や外蠻犬戎にも有れ彼も人なり同じ天下の顯見蒼生たり其惱み有む事を所思して其事は物爲させ給はずと雖も三韓より神國と稱し赤縣より君子國君子不死之國大人國中土など此を尊稱し印度よりは須米留山と云ふ皇國と申に同じ西洋にても此邊の大洲を亞細亞洲と云り其は葦原國などを訛れるならむを亞細亞は神國を云ふ神聖首出の鄕故に尊みて是稱有り猶神州と云むが如しと或書に云り此を以も君師の國たる神域の化幽に行れて有る事を仰ぐ可し然れば萬國の美を貢り萬國の富を運ふ爲に顯には皇國海外なる二三國を歸伏奉給ひて其事を勤令め給ふが其餘の國々の酋長らは各々恐けれとも我か現御神と天下經綸す天皇命の御手代と仕奉りて其國處を治め天皇命の公民を安在しむ可きなり此に反すれば幽冥より其罪を糺し罸め給ひて其主を更給ふ主從の義正しからぬに似たりと雖も天皇命の萬國に大君と御在して天下を御一人有たせ給ふ如くは非ず渠等が上に於ては天下の天下たり一旦も其政を能く爲る者此を保つ可し然るを世の學者良も爲れは彼に君臣の大綱立さるを以て非議する事なれども彼は聰明睿智にして君師の德を具へて賢しく智有るゝ衆人の中より擢出られて其酋長と成りたるが王者と云ふ者の始たれば本自君臣の大義立ざる可き筈の事なり此に反して我が天皇の天統は皇祖天神に受給ひて天下の兆民悉く天皇の大御寶たり是を以て天下は一人の天下にして天下の天下に非ず故に無道の君坐ますとも人民離叛く事能すして長久に仕奉り邇近逆を謀て叛く者有れば朝敵として人民從はず天下舉て是を誅す外國の如きは然らず豈皇國と同日

の論ならむや然れは諸蕃の國其の其國祚の長短は民心の向背に在て其根ざし民に有れば天下は天下の天下にして皇國の如く一人の天下に非ず此故に暴惡なるには兆民離れ叛きて獨夫と爲し佗に有德の君を求るは本より臣位の國なる故に定れる酋長有て無きが如く萬國悉く然なるを思ふ可し赤縣州の夏殷周より始めて世々の沿革多かるを見る可し何れの代も其始の酋長は創業の者なるが故に隨分に德を行ひて王者の任に堪たりと雖も次に其位を保つ事能はず君臣位を換て古今亂亡甚多し此故に又外の賢く智有る者立て王と成る事跡を考ふ可し此等は樣々其得失に就て論も有る事なれども其極(ツマ)る所は頗見著生を能く治る德無きに依て幽より我が皇神の其任に相應なる人に更らしめて皇御孫命の御手代と爲し給ふ者なり我が天皇の御上を彼酋長どもの等しなみに申す事は其恐有り必彼に對へて論ひ奉る事勿れ彼國に居ては其王を君とも主とも仰ぐ可し我が皇國人より見れば共に彼國に榮持しめ給ふ臣下なり國造別縣主に異ならず菅神遺誡に見神國一世無窮之玄妙者敢而不レ可ニ窺知一雖レ學ニ漢土三代周孔之聖經一革命之國風深可レ加ニ思慮一也と宣へる如く漢土の酋長らは唯天皇の公民共の總裁として天神より其任に當れる物を暫く許可して其位に置給ふ故に彼にして云はゞ實に天下非ニ一人之天下一天下之天下也然れば彼國を學ぶとも其說を此に取て勿用そとなり然れは外國の酋長らは如何に傲慢るとも高慢るとも其は其國にての事なれは必其心に任す可し國民を能く治めて神と君との御心を安からしめ奉る可きを皇御孫命の皇國に都爲給ひて終古に定坐を羨奉り負氣無き禍心を起して邂逅にも逆樣を以て射向ひ奉らむと爲ば彼蒙古の賊船の襲來せる時神風の伊吹き漂沒して十萬の兵帥を僅に三人計り放還さるゝの禍事有むぞ其酋長一人の僻事より及て惜生民を沒す幽に神等の顯見著生をとは思食すらめども然る僻事に隨ひて天皇命に射向ひ奉らむと爲し其罪は天にも地にも許諾す可きならねば斯在る神の罰めの御政は有けるなり穴畏こ

延喜式祝詞講義參之卷

嘉永元年十二月初七日

淡路國 鈴木重胤 著

出羽國 秋野重義
攝津國 後藤重基 挍

辭別伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久

伊勢大神宮祈年祭詞は此下（第三十二段）に有て天皇我御命以氏度會乃宇治乃五十鈴川上乃下津石根爾稱辭竟奉流皇大神能大前爾申久常毛進流二月祈年大幣帛乎某官位姓名乎爲使天令捧持氐進給布御命乎申給久止申と有る此に就て其餘を伺申させ給ふ事の御在して此詞は申させ給ふに依て辭別とは申させ給へり辭別は上を專要と有る事共を言ひ竟て其餘の事を述む料に殊更に改めて言起す辭なり江家次第九行二幸神祇官一被レ立二伊勢幣一儀に有二辭別一之時奏レ草と有るを以て辭別氏云々は別條なる事を知るべきなり（續紀神龜元年二月聖武天皇御即位の詔に上より云ひ下せる語共有て云々衆聞食宣辭別宣久云々と又更に事を起して下へ言續けたり又天平寶字二年八月淡路天皇御即位の詔に云々天皇勅衆聞食宣辭別宣久云々と有る例を思合すべし祝詞には祈年月次大嘗等の詞の終りに辭別忌部能弱肩爾云々神主祝部等受賜氏事不過捧持奉曾宣と見え大殿祭詞にも詞別白久と有り何れに有るも異る事無し）○伊勢爾坐は貞觀儀式に諸社の祈年の幣帛を神主祝等に頒る丶所に大神宮幣帛者差使進レ之と見えて佗社の例には異なれども儀式は共に行給ふ故に伊勢爾坐とは云へり然るは使を差して大前に申させ給ふ祈年祭詞に度會乃宇治乃五十鈴川上乃云々と有る如くならでは得有まじき事なるを斯の如く宣へるは京にての事なればなり（其合する方にて云ふと其國に至て述ると其趣に異り有る事なり此辨へ無くては終に解る事無し）然れば伊勢に到りて大前に申さむ時に伊勢爾坐とは云ふ可からず其用捨有る事と通えたり多く諸祝詞の例其事を行ふ人に令すると其人の神の御前に申詞とを一にして擧たる物にて宣命と祝詞を兼たり其は祈年祭詞（第一段）を以て其一例を示さむに集侍神主祝等諸聞食登宣は宣命なり次に高天原爾神留坐云々皇御孫命宇豆能幣帛乎稱辭竟奉は神に奉らせ給ふ御祈の詞にて祝詞なり然るを神に奉らせ給ふ詞を神主祝等に傳て申さ令め給ふが故に稱辭竟奉久登宣と云ひ續きて此は宣命なり如此兩事を兼て聊も紛らはしき事無く條理貫通りて鮮明なるは古文の妙なり然れば仰する方と受る方とにて其用捨有る事論無き物なり（大凡の學者此意得無くして古き祝詞を見る故）

に大に其說を誤り其事に暗き耳ならず自作る文にも僻事のみ多く物爲めるは何たる僻事ぞや皇大御神の伊勢に鎭り坐す元由を恐こけれども明し申さば神代記御天降段の一書に天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡復勅天兒屋命太玉命惟爾二神亦同侍殿內善爲防護また古事記に於是副賜其遠岐斯八尺勾總鏡及草那藝劍亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者專爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事爲政と見えて紀記共に此御鏡を御靈形と爲給ひて高天原に座坐す顯御前を拜み給ふ如く同じ大殿の內に天皇の御許近く齋き奉れと大御命仰せ給へるを大殿祭詞にも高天原爾神留坐皇親神魯企神魯美之命以氏皇御孫之命乎天津高御座爾坐氏天津璽乃劍鏡乎捧持賜天言壽宣志久云々と有り又古語拾遺にも即以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫永爲天璽所謂神璽之劍鏡是也矛玉自從と有り鈴屋翁云く此拾遺の文は世に玉を第一と思ふが古意に非る事を慨みて殊更に玉を貶して鏡劍には比び難き事を知せたる文なり豐受大神宮儀式帳に天照坐皇大神云々大長谷天皇御夢爾誨覺賜久吾高天原坐氏見志麻岐賜志處爾志都眞利坐奴と詔給へる事有て伊勢に鎭り坐し事は高天原より豫て所思し設給へる樣に聞えて同殿共床と詔給ひし事の有るには打合ざるに似たり故熟思ふに鈴屋大人說記傳十五に已に云れたる如く此儀式帳に如此有る上は此御靈鏡を後竟に此地には鎭り坐むと大御神御自高天原にして豫てより所念し設たる事なりけり其は神代紀御天降段の一書に已而且降之間先驅者還白有一神居天八達之衢其鼻長七咫背長七尺餘眼如八咫鏡也即遣從神往問時皆不得目勝相問此は古史徵に引れたるを取れり此事古事記には爾日子番能邇々藝命將天降之時居天之八衢而上光高天原下光葦原中國之神於是有と有り相合せて事の狀を知可きなり古事記に故爾天照大御神高木神之命以詔天宇受賣神汝者雖手弱女人與伊牟迦布神面勝神故專汝往將問者吾御子爲天降之道誰如此而居此事神代記には故特勅天鈿女曰汝是目勝於人者宜往問之と有り神代紀に天鈿女乃笑噱向立是時衢神問曰天鈿女汝爲之何故耶對曰天照大神之子所幸道路有如此居者誰也敢問之衢神對曰聞天照大神之子今當降行故奉迎相待吾名是猿田彥大神時天鈿女復問曰汝將先我行乎將抑我先汝行乎對曰吾先啓行古事記には此事を故問賜之時答曰僕者國神名猿田毘古神也所以出居者聞天神御子天降坐故仕奉御前而參向之侍と有り神代紀に天鈿女復問曰汝何處到耶皇孫何處到耶對曰天神之子則當到筑紫日向高千穗槵觸之峯吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上因曰發顯我者汝也故汝可以送我而致之矣天鈿女還詣報狀皇孫於是脫離天磐座排分天八重

雲ニ稜威道別道別而天降之也果如ニ先期ニ皇孫則到ニ筑紫日向高千穗槵觸之峯ニ其猿田彥神者則到ニ伊勢之狹長田五十鈴川上ニ即天鈿女命隨ニ猿田彥神所ニ乞遂以侍送焉と有る文意を說て悟る可き事有り紀記共に猿田彥神の待迎奉られしは皇御孫命耳には非ず皇大神と御二所を待迎奉給しなり然らば天宇受賣命の問には表立（オシタテ）たる方の皇御孫命云々と宣ふ可きを奉迎るゝ猿田彥神の方には皇大神皇御孫命云々と並べ申さるべき筈なり 其由下に云ふべし大同本記に皇大神皇御孫天降坐之時云々於ニ皇大神之御饌ニ八盛於皇御孫命之御饌八盛云々大斎者皇大神皇御孫命之畏ニ天降坐ニ而云々など皇大神の御靈形なる彼八咫鏡を顯御前に並べ申せるを思へし 然るは此猿田彥大神はしも僕者國神と速無げにこそ御名乘爲給へれ眞には此國の顯露事を皇御孫命に事避奉りて大地官を領率て幽冥事所知看す大國主大神の貴子事代主神の幽冥に入給ひて後の御名なるが御父大神の國避の時の御言に僕子等百八十神者即八重事代主神爲ニ神之御尾前ニ而仕奉者違神者非也と申させ給ふ事の符信に天之八衢に出迎奉り又其御二所の天降り坐む地を預て卜置（シメオカ）して其所に鎭り坐令めむと思ほして遙に待迎奉給へる詞なる故に皇大神皇御孫命云々と聞え給はでは下文に協はず 此神の事代主神に御在す事は大に論有て長し古始太元考に云ふべし今しも凡人の眼に見奉る事こそ無かれ必皇御孫命の幸行には幽より御尾前と爲て守給ふ事と聞えて雄略天皇御紀に天皇葛城山に射獵し給ふ時に一言主神も現形して共に遊獵し給ふ事有り此は[illegible]遁其御形體を態と現し給ふなり於是日晩田罷神侍ニ送天皇ニ至ニ來目水ニと有るは御尾前と爲り給へるなり又天武天皇御紀に高市社所居名事代主神云々さ御名乘坐て吾者立ニ皇御孫命之前後ニ以送ニ奉于不破ニ而還焉今且立ニ官軍中ニ守護之と御諭有つる事を記されたるを思察へし 又天鈿女命の汝は何處に到り皇御孫命は何處に到坐むの問答有るも文の儘にては如何なり吾先啓行（ミサキハラヒ）むと白給ふ神に對て云ふ語ならず然れば先に猿田彥神より皇大神と皇御孫命の御二所共に各々降り就て鎭り御在む處を異々に卜標たる事を申して我は此八衢より別れて直に皇大神の供（ミトモ）奉（ツカヘマツ）りて降り到てむと申給へる故に斯在しなり 此事下に云ふべし發ニ顯我ニ者汝也故汝可ニ以送ㇾ我而致ニ之さ申給へるは我は皇大神の供奉仕奉らむ我を送りて共々に天鈿女命も致る可しさは申されしなり舊說筑紫より伊勢に送られし由なるは古事記に故爾詔ニ天宇受賣命ニ此立ニ御前ニ所ニ仕奉ニ猿田毘古大神者專顯申之汝送奉と有るを次の文に筑紫朝廷にての事を云るに連け見る故に誤れり此皇御孫命の詔は天之八衢にての事なり先には天神の命以て云々の事有しかども天宇受賣命を已に御供に從給へるからは皇御孫命の我は筑紫に降りなむ此八衢より伊勢に降れとの御事なり猿田毘古神を送るに非ず皇大神を送奉れとなり 若て猿田彥神の御答に天神の御子は筑紫日向高千穗槵觸之峯に到坐可しと申給へるは八衢より別れて其所に到り坐へし吾其地に宮處は豫て定置侍りとなり 第二の一書に故天津彥火瓊々杵尊降ニ到於日向槵日高千穗之峯ニ而膂完胸副國自ニ頓丘ニ覓ㇾ國行去立ニ於浮渚在平地ニ乃召ニ國主事勝國勝長狹ニ而訪之

對曰是有レ國也取捨隨勅時皇孫因立ニ宮殿是ニ焉遊息また第六の一書にゝ到ニ於吾田長屋笠狹之御碕ニ時彼處有ニ一神ニ名曰ニ事勝國勝長狹ニ故天孫問ニ其神ニ曰國在也因曰隨勅奉矣故天孫留住彼處と有て其國主と有るは事代主神其處に地主と御在して高千穗宮處を奉給へるにて猿田彥神の度會の地主と在して皇大神の宮處を定奉給へると異無くして彼天鈿女命と御問答の事の結びなり但神代紀に其事勝國勝神者是伊弉諾尊之子也と有れど其頃已に猿田彥神と同神なる傳を失へりし物にて誤なり御鎭座本緣に狹長田之猿田彥大神號ニ事勝國勝長狹ニ也と有るぞ古傳なるべき亦名鹽土老翁と有るも僻傳にて三柱の筒男神を都て申す御名の混出たるなり斯くの如く邊境へ導奉給へる事も幽に由有る事なる可し其は神武天皇御紀なる大已貴大神の玉牆内國と宣給へる大和國に幸坐すべきを然らぬは未此時其邊りは草昧在（ナリ）し故なり次に吾則應ニ到伊勢之狹長田五十鈴川上ニ因曰發ニ顯我ニ者汝也故汝可ニ以送レ我而致ニ之と有る文面にては皇御孫命の御降臨の事を主と云を專と爲る故に其事は闕れたれど垂仁天皇御紀に天照大神始自天降之處也と有れば五十鈴川上に到應（イタルヘシ）しと申給へるは後世此所に常宮と鎭坐む幽契有るが故に猿田彥神の其地を大八島國の中にて見立置れし故に先皇大神を供奉爲し奉りて幽に其御定有む事を仰がれむとの事なるが掛卷ゝ甚と可畏き大御心に乖戾りては甚畏き事なる故に其とは顯に言ひ出られざりけめども天鈿女命に我を送りて致るべしと申されしは此八衢より直に降りて其々に皇大神の後に鎭り坐む宮處を點檢られよとの事と通えたり然らずは五伴男神は此事なき供奉の神なるに送らるべき由無ればなり此事を天降坐て後の事に爲る說は先師等と雖も誤なり天降の後に送られむとならば大朝廷にこそ請給ふ可けれ此問答はしも天神の問はせ給ふに依れり然るを事要たる啓行の供奉の事を差措て此國土にての用を此に云ふ可き由無ればぞ心を平にして考可し次に天鈿女還詣報レ狀と有れば都ての事共を具に奏上られけむ時に皇大神の許可（ツヘナ）ひて倭姬命世記に謂ゆる天之逆太刀逆鉾金鈴等の大御手物をも天鈿女命に賜りて猿田彥神に取傳させ給ひ一先伊勢に降り着して筑紫の大朝廷に度らせ給ひ初國知食す天業乃定り坐す迄は御世々々の天皇の大殿の内に鎭り守らせ給ひ僃て後に五十鈴川上に幸行坐むと御幽契有せさせ給へりけむ古語拾遺に始在ニ天上ニ預結ニ幽契ニ衢神先降深有レ以矣とは此事なる可し崇神天皇御世に皇大宮を離れさせ御在し坐す事は此御世に至りて四道將軍を任して國々を言向しめ給ひ男の弓弭の貢女の手末の調を奉る事と成りて朝廷の御事の美好く成整ひ備はれるを度（ホト）さして外に出坐し事奇異なる物ならずや若て垂仁天皇の御世に至りて倭姬命を伊勢に御供仕奉給し時に猿田彥神の裔宇治土公の祖と有る大田命其幽契を傳申しゝなど又符節を合せたりと云可

し此時倭姫命の御夢に高天之原坐而吾見之國仁吾乎坐奉禮止悟敎給比伎と世記に見えたり上に引る豊受大神宮儀式帳に合せて彌々幽契の旨著明なる物なり　又御紀に其猿田彥神者則到ニ伊勢之狹長田五十鈴川上ニ即天鈿女命隨ニ猿田彥神所レ乞遂以侍送焉と有るは天之八衢より其幽契の如く皇御孫命は西へ皇大神は東へ一旦別れて降らせ給ふ事に定りぬるに就て皇大神の御形實は彼石屋隱の時に天宇受賣神の主と招禱られたる事の由に緣て從ひ奉らでは叶まじき所謂を以て皇大神を送り降り參らせたる傳なり天鈿女命を天石門別八倉比賣命とも天石門別稚姬命とも申す由は第二巻なる第五詞又春日祭詞比賣神の下に云り倩如此く送られたる事は右の文の上に故汝可ニ送レ我而致ニ之と有る御言に依れる事云も更なり　若て猿田彥神は伊勢に留り給ひて皇大神の後に鎭り坐て期を待奉給ふ幽契の隨に度會之地主の神と其地を守給ひながら天鈿女命と共に皇大神の御靈形を筑紫の大朝廷に送奉給ひ高千穗宮の地をも皇御孫命に避奉りて又天鈿女命をも伴ひ伊勢に罷行れしなる可し古事記なる島之速贄の事は筑紫の大朝廷定りて後天下を弘給ふ時と通えたり然るを古事記に猿田比古大神を送奉れとの詔は天降以後の如く爲るは前の事は深密なる幽契故に表れざりしより紛はしく書る物なり寔には其神御名者汝負仕奉いみぞ皇御孫命天降以後の詔命にてなるべく前の詔命は天降坐す道にての事にて別なる由上六丁に云るが若くなり神代紀にも時皇孫勅ニ天鈿女命ニ汝宜ニ以所ニ顯神名ニ爲ニ姓氏ニ云々と有り倘委くは別に云可し　倩猿田彥神の事代主神同神異名と云ふ徵は倭姬命世紀に猿田彥神裔宇治土公祖大田命と見え皇大神宮儀式帳に大內人無位宇治土公磯部小繩と云ふ人名見えたる磯部は垂仁天皇御紀に故隨ニ大神敎ニ其祠立ニ於伊勢國ニ云々是謂ニ磯宮ニと有る如く五十鈴川の磯部に大宮供奉り其地の土公と爲て住るが故に起れる姓と通えたるが姓氏錄には石邊に作りて石邊公大物主命子久斯比賀多命之後也と記されたり此にて其統脉を明らむ可し但久斯比賀多命は大田命と同人にて大物主神の子に非ず事代主神の子と有れば孫と云べし然れども汎く子孫を子と云ふ古文の格なれば妨無し又大田命を猿田彥神裔さ爲るも子の意也舊事記に都味齒八重事代主神兒天日方奇日方命亦名阿田都久志尼命さ有る此正說にて阿田は大田と云に同し第四詞阿須波神の解に云るか如し然れば事代主神には必大田命も共坐例さ通えて神名式に山城國愛宕郡賀茂別雷神社太田神社攝津國島下郡三島鴨神社大田神神等其餘にも多太神社さて諸國に多かるは皆此天日方奇日方命さ通えたり多くは大國主神事代主神の由に就て鎭坐るぞ多かりける越後國古志郡桐原石部神社を天日方奇日方命さ傳るも由無にか非ず續紀に和銅四年三月辛亥伊勢國人磯部祖父高志二人賜ニ姓渡相神主ニと見ゆ但高志は桐原石部神社に由有り又下に引る世記及儀式帳に進日方命の神風伊勢の國と申せるは決く此命たるべし　此より其御靈形と坐す八咫鏡の成坐る元始を申さむと爲るなり其は高天原にて作らせ給ふ鏡は合せて三面なりき其一は伊勢大御神なり此を八咫鏡と申し一は日前大神なり一は豊受大

神の御靈形にて所謂眞經津鏡此なり但神代紀に八咫鏡一云眞經津鏡と有るは非者の說なり倭姫命世記上代本記御鎭座次第紀御鎭座本緣などに豐受大神の御靈形を眞經津鏡と云るは正說にて青天正丸の家の秘說に相違なき實徵有て下に述るか如し青天正丸と云は朝廷御鏡師にて石凝姥命の神孫なるが禁中に內侍所は置て三面の御摸造の齋かれ御在坐な年毎に磨奉る故に眞に實說なり其は明文抄に載る大倭本記に天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面子鈴一合也と有る本註に一鏡者天照大神之御靈名天懸大神伊勢國礒宮崇敬拜大神也一鏡者天照大神之前御靈名國懸大神今紀伊國名草宮崇敬拜大神也一鏡及子鈴者天皇御食都神朝夕之食向夜護日護齋奉大神今卷向穴師社所坐拜齋大神也と有る證文に依て思ふに神代紀に即以二石凝姥一爲二冶工一採二天香山之金一以作二日矛一又令レ剝二眞名鹿之皮一以作二天羽鞴一用レ此奉レ造之神即是紀伊國所レ居日前神也古語拾遺に令三石凝姥神鑄二日像之鏡一初度所レ鑄少不レ合レ意是紀伊國日前神也と有て初度の鑄造られし鏡は一面の如くなるは漏たる物なり實には豐受大神の御鏡も少不レ合レ意と云ふ其一つなりつらむを漏せるなり然るを師の古史成文に初度なるを二面と記されたるは宜けれど其を天懸大神國懸大神と爲られて日前宮國懸宮の御體なる由に物せられたるは釋記に引る大倭本記に一鏡者天照大神御靈名天懸神也と耳有て今伊勢礒宮崇敬拜大神也と云ふ字の脫たるに依られたる故に不意く誤られし物にて明文抄の本に依る時は天懸大神と稱申す御鏡は伊勢の大御神に坐し國懸大神と稱申す御鏡は日前大神に坐し一鏡は天皇の御食津神と坐す豐受大神に坐す事詳なる物をや又古語拾遺に少不レ合レ意と有るは舊訓伊佐々加なるを少而不レ合レ意と改られたるも違へり大小の意に合ざるに非ず何くにか意に合ざる所の有るを云ふなり然るは右の續の文に次度所レ鑄其狀美麗是伊勢大神也と有るを若師說の如く大小の異なるを以てならば次度所レ鑄大而合レ意か大而美麗とか書るべきな然らぬを以て見れば少不レ合レ意は美醜に就ての事なりけり又日矛は古語拾遺に令三天目一箇神作二雜刀斧及鐵鐸一と有る如く其鋒は天目一箇神の作られたるに令三手置帆負彦狹知二神云々采作二御笠及矛盾一と有れば柄は其神の作れるなるが天宇受賣命の持れたる神代紀に謂ゆる茅纏之矟拾遺に謂ゆる着鐸之矛にて此等は一種の名の如くなれど其形容を以て然云るにて正しくは日矛と云つる物なり記傳に引れたる或說に以二日像一鏡二日前大神一以二日矛一爲二國懸大神一有るは云れたる說にて日像は拾遺に令三石凝姥神鑄二日像之鏡一初度所レ鑄少不レ合レ意是紀伊國日前神也と有る此にて日矛は神代紀に即以二石凝姥一爲二冶工一採二天香山之金一以作二日矛一と有るを云ふなり但此は古事記に取二天安河之河上之天堅石一取二天金山之鐵一而求二鍛人天津麻羅一而科二伊斯許理度賣命一令レ作レ鏡と有る如く天津麻羅命とは共に漏されたる事の漏たるなり天津麻羅命は師說の如く天目一箇神の亦名なり倭日矛の國懸社に坐す事は其社傳にも確に傳たるが故に鈴屋大人も著はれて神代正語に日矛は國懸社に坐すとも云りと記されたり凡て此等の事どもは師說も猶信難き事多かり今悉く辨へむと爲れど餘りに事長ければ此には唯其大旨を云り日前社國懸社の事天武天皇御紀を始續紀にも兩社と爲ては有れど本は一社にて有ける考有の小泉康敬が說なり別に云ふ可し釋紀に引る天德四年九月二十三日夜の內裏燒亡の後に威所を奉納られし事を村上天皇御紀を引て瓦上在二鏡一面一其徑八寸許頭雖レ在二小瑕一專無レ損圓規並帶等云々外記云威所三所一所鏡

件御鏡雖レ有ニ猛火上ニ而不ニ偏損ニ即云伊勢御神〇御記に徑八寸許頭雖レ有ニ小疵ニ事無レ損圓規帶等甚分明而見之者無レ不ニ驚感ニと有る此にて神代紀に是時以レ鏡入ニ其石窟ニ者觸戸小瑕其瑕於レ今猶存此即伊勢崇秘之大神也と有る文を照す可き證文なり等閑に見過すべからず圓規とは所謂中櫜圓形なり帶とは八頭花咲なり此帶を例の事と云るに的は妄なり思ひ惑ふべからず扶桑略記に奉レ納ニ威所三所ニ一所鏡作鏡雖レ在ニ猛火上ニ而不ニ涌損ニ即云ニ伊勢御神ト有るは御記を取れるなり 一所圓形 所謂眞經津鏡也此は大倭本記に天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神と有る此にて伊勢に坐す豊受大神の御摸造なりけり扶桑略紀に二所眞形無ニ破損ニ長六寸許と有るは此御鏡の事なり眞形の眞は圓を誤れるか又眞は圓規なる由か尚考へし一所ともに眞形ト有る此六寸のは例の圓鏡なるか紀伊國日前神の御は外圍圓形にして內に八咫鏡の象有る鏡なり 無ニ破損ニ長六寸許〇 一所鏡已涌乾破損紀伊國御神云々〇扶桑略記に二所眞形云々一所鏡已涌乱破損記伊國御神云々と有り此事上に云り 如此く威所御鏡の三面に渡らせ給ふ事は小右記に此度の事を記されたるにも恐所云々鏡三面伊勢御神紀伊國日前國懸云々と有りて大倭本紀の餘には豊受大神の御を知可き便無きは上にも云る若く御紀に其事を云れざる故の事なるべし此に依て畏所の御鏡三所の說の明ならざるに就て伊勢日前の御を除ては今一所を天上にて作れる如き說も出來れり其は神宮雜事記に寛弘二年十一月十五日內裏燒亡即內侍所神鏡燒損畢因件神鏡可レ被ニ鑄替ニ云々件寶鏡是非ニ人間之行爲ニ天地開闢之時於ニ高天原鏡作遠祖天香古山命以レ銅八百萬神達共鑄造神鏡也 或云天香古山命共鑄作鏡也矣 件鏡元三面也皆以ニ方尺ニ也一面伊勢國坐一面紀伊國坐一面內侍所坐是此鏡也 子細具不レ記 と有る一面內侍所坐是此鏡也と有て何の事とも分明ならざるにて知れたり此より後此誤を祖述せる僻事共多く出來にたり 其頃の博士等の古を探索る事如此く妄にして麁忽なるは甚足(アカ)ぬ事なり帝王編年記に文治二年四月廿五日義經奉レ相ニ具內侍所神璽等ニ入洛於ニ寶劔ニ者云々自神代傳劔三柄云々一有ニ內裡ニ自ニ同神代ニ傳鏡三面ニ一在ニ大神宮ニ一在ニ日前宮ニ一在ニ內裡ニ一劔一鏡有ニ內裡ニ之由雖レ注不レ知ニ恒所ニ說と有るは內裡に三面の鏡は傳れれども何れを差す事とも知れぬな疑へるなり尤なる事なり又水鏡神武天皇の條に神代より傳はれる劔三有り云々又鏡ニ有り一は大神宮に御在し坐す一は日前に御在し坐す一は內裡に御在し坐す內侍所にこそ御在し坐すめれと有るは編年紀より取れる樣なり又伯家部類に御鏡御拜所被レ用之御鏡三面之圖有り就て見へし但何れも八寸と有るは圓形の六寸なるなも分ず大凡に云るなり 如此く書典には漏て記されねども職掌の方には口傳せる事と見えて伯家部類例幣之事と有る條に元々集云古語拾遺云天照大神者惟祖惟宗天照大神者二宮通稱也云々御即位奉幣御祝詞掛毛畏支伊勢兩宮天照皇大神乃廣前爾云々天照大神を天子被奉敬御心則豊受宮可籠歟以上口傳但伊勢を兩宮と申す內侍所を兩神と申奉る事傳受候事也と有り內侍所三所にて渡らせ給へども日前宮は皇大神の前御靈と坐すが故に一所に籠て申し豊受大神を一所と合せて二前にして拜奉る故實と通えたり然るは往古より豊受大神の御を齋奉りて有ればなり 同書に例幣齋籠中遙拜之事伊勢兩宮內侍所兩神云々と有り然らば日前神は伊勢に集たる事勿論なり伊勢兩宮と云るに對たればなり 偖伊勢の大宮に齋鎭奉る事の次序に就て種々の事共はしゝ記傳

十五（三十三丁）に天照大御神の御靈鏡は記紀共に記された
る詔旨の如く御代々々皇御孫命の同大殿內に拜祭給
ひ來にしを水垣宮御宇天皇御世よりぞ別處には祭給
へりける　○今云御鎭座本緣に天津彦火瓊々杵尊天津神乃御寳劔齋鏡乎棒持賜比治天下云々人代之初神日本磐余彦天皇云々自神武天皇迄ニ開化天皇一九帝歷年六百卅餘歲天皇與レ同レ殿坐也此時帝與レ神其際未レ遠同レ殿共レ床以レ此爲レ常故神物官物亦未ニ分別一と有るは此なり　其は御紀に六年云々先是天照大神倭大國魂二
神並ニ祭於天皇大殿之內一然畏ニ其神勢一共住不レ安故
以ニ天照大神一託ニ豐鍬入姫命一祭ニ於倭笠縫邑一仍立ニ磯
堅城神籬一云々と有る是なりと有り皇大神宮儀式帳
に磯城島瑞籬宮御宇御間城天皇以往天皇同殿御坐而
同天皇御世爾以ニ豐鍬入姫命一爲ニ御杖代一出奉支と見ゆ
○今云古語拾遺に至ニ于磯城瑞垣朝一漸畏ニ神威一同レ殿不レ安故更令下齋部氏率ニ石凝姥神裔天目一箇神裔二氏一更鑄レ鏡造レ劔以爲中護御璽上是今踐祚之日所レ獻神璽鏡劔也仍就ニ於倭笠縫邑一立ニ磯城神籬一奉レ遷ニ天照大神及草薙劔一令ニ皇女豐鍬入姫命奉一レ齋焉其遷レ祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌曰美夜比登能於保與須我良爾伊佐登保志由伎能與呂志茂於保與須我良爾今俗歌曰美夜比登能於保與曾許侶茂比佐登保志由伎能與呂志茂於保與曾許侶茂詞轉也また御鎭座本緣にも此と同文有るが取ニ天香山白銅黑金一更鑄ニ造於鏡劔一と見ゆ天香山より金を取れる事は高天原の故實に依れゝば然る事なれど白銅と有は誤なり師說の如く鏡劔共に鋳るを以て物爲る事疑無き物なり其說は古史傳又玉襷に詳也
若て倭姫命世記上代本記御鎭座本緣御鎭座傳記抔に
天皇卅九年壬戌三月三日遷ニ幸於丹波與佐宮一矣于時
雲聳天照大神現ニ瘦木一坐今歲止由氣皇大神結ニ幽契一
天降坐云々爾時天照皇大神與ニ止由氣皇大神一合レ明齊
レ德居焉如ニ天上之儀一一處双座焉と有る傳は例の僞事
ならむと先には思たりしに然ず御紀の趣にては垂仁
天皇の御世廿五年まで磯堅城神籬（一云磯橿之本）に齋祠られ
御在し坐し樣なれど本緣に令ニ皇女豐鍬入姫命奉一レ齋
焉云々然後隨ニ大神之敎一國々處々爾大宮處乎求米給
倍利と有る上は處々を求給ひけむを丹波與佐宮に
遷幸奉れとの御敎等有て豐受大神と暫間共に御在し
坐つらむ豐受大神は丹波國（今丹後國）本居に御在しけるが
須佐之男神の事に依て其御德顯れ御在して高天原に
參上り住せ給ふ事と成つるが故に其御靈實を天照大
御神より皇御孫命に賜はせたるが元々集の古傳に高
天原より淡路國三上山に降らせ給ひ（今先山と云ふは御山（ミヤマ）を字音に唱へ誤れるなり寄き山なり此等の山緒なりと見えて萬葉に此淡路國を指て御食津國と詠るは必此大神に依れるなるべし又古事記片鹽浮穴宮段に師木津日子命之子二王坐云々一子和知都美命者坐ニ淡路之御井宮一と見え反正天皇御紀に天皇初生ニ于淡路宮一云々於是有レ井曰ニ瑞井一と有る三井瑞井ともに天忍穗井なるべし尚五十三丁の下に云を待べし）氣比宮に渡らせ給ひ（今慶野村と云ふ長き松林二里許有り萬葉三に人麿の歌に飼飯乃海と見ゆ此に依て見れば氣比神と申すは豐受大神に坐り其は古事記中に於ニ高志國之角鹿ニ造ニ假宮一而坐爾坐ニ其地一伊奢沙和氣大神之命云々と有るは神功皇后の御歌に詠せ給へる此御神の御事にて其太子と御名易の幣を奉給ふと入鹿魚を寄給へるは豐受大神なり此所の文能く爲すば紛ひぬべし尚氣比社を保食神と云ふ事諸書に見えざれど神名式越後國磐船郡西奈彌神社は此の氣比大神を勸請る由なるに保食命と傳へ出羽國田川郡ニ瀨村有比神社も本國越前より遷せる由なるに保食神と傳たれば旁我說に合て歷々なり）布久良宮に遷り御在して（今福浦と云り延喜式に福良

驛有る此なり後に丹後國に遷り御在したる趣なるを以て思ふに豊受大神の御靈形は速く丹波國に鎭り御在し丶かば天照大御神の天上の儀の事を所思し坐て其處に到坐むとの御諭は有けるなりけり 然らば此宮より佗所に出坐す時も必然宣ひて共に幸行坐ずては得有るまじき業なるに然らぬは善き宮處定給ひて後に迎奉給はむとの御心なりけるなるべし因みに云ふ今元々集の說の如くにては內侍所三所の齋鏡の其一は何時に御摸造有けむ元より他處に坐むには其御摸造を殊に作給ふべくも非ずと思へど然らず日前宮の御靈形も彼社記に依れば神武天皇の御世に天道根命に託して祭祀らしめ給へるに內侍所三所の其一は日前宮の御摸造なり此は必天皇の大宮處に齋かせ給ふへき御靈形なる故に共に崇神天皇御世に鑄奉られし也 又此時に豊受大神の御靈天上より降り坐てぞ天照大御神に御饗など奉給ひけむ神宮の書共に和久產巢日神之子豊宇賀能賣命生二五穀一而善釀酒奉二御饗一御炊神氷沼道主 素盞嗚尊之孫也亦云二粟御子神今世號御炊物忌是其緣也○今云氷沼道主は神代紀に日神所レ生三女神者今在二海北道中一號曰二道主貴一此筑紫水沼君等祭神是也と有れば決く三女神なり大同本記に雄略天皇の御世に大御神の豐宇氣神を伊勢に迎まく欲す由を御諭坐る御言に吾高天原爾在時素盞嗚尊乃十握劍乎索取三段打折弖所生三女神等乎宇佐島爾降居道中奉レ助天孫而爲二天孫一所祭止詔之須勢理姬乃齋奉禮留神今丹波國與佐乃比沼乃眞名井坐弖道主王子八乎止女乃齋奉御饌都神止由居乃神乎吾坐國欲止誨覺賜支と有にて知られたり是を以て思ふに須世理姬は幽より豐受大神乃齋奉御在し顯には丹波道主王の御女等の齋き御在しける也猶六十一丁の下に云可し◎ 率二竈神一而朝大御氣夕ノ大御氣平炊備氐奉御饗留 ○今云以上幽にて有し神事なるが如何に爲てか漏傳りけるなるべし 丹波道主貴 人皇弟九代之帝開化天皇之子彦坐王之子也今世號二大物忌子一是其緣也○今云崇神天皇御紀に十年九月丙戌朔甲午丹波道主命遣二丹波國一と有れば其所其國に御在し著て齋祀らせ給へる物なり但此には道主王の自給へる趣なれど大同本記に道主王子八乎止女乃齋奉禮留と有れば道主貴命女など有けむが脫たるべし 爲二御杖代一品物備二貯之百机一而奉二神甞一焉諸神所レ作祭レ神之物五穀已成百姓饒矣其功已辞竟天照大神復二向於倭國一比止由氣大神復二昇於天上一氐日之少宮座矣于時以吾天津水影乃寶鏡留居於吉佐宮一給即起二樹天津神籬於眞井原一秘二藏黄金樋代一氐道主貴云々奉齋焉と有るは決く正記と通えたり然れども止由氣大神を天之御中主神に牽強たる附會の說は掃除(ハキヨ)むべし 此等の事を永ふるに僞說なりと爲て取も見ざるは實事の物學に心無き人なりけり正史は朝廷に係りたる事を詳記して其佗の事は多く省かれたる物なる故に却て神宮の事などは神廷に傳はる事多かり但儀式帳に此事無きは正史に合さむ爲に態と省けるか又此事は外宮に耳傳はれりしか 四十三年丙寅九月九日遷二倭國伊豆加志本宮一八年奉齋 丹波與佐宮に遷坐しは三十九年壬戌なれば五年御在しなり伊豆加志本宮は垂仁天皇御紀に一云天皇以二倭姬命一貢二奉於天照大神一是以倭姬命以二天照大神一鎭二坐於磯城嚴橿之本一而祠之と有る此にて崇神天皇御紀六年の下に立二磯堅城神籬一と有る祠へ還り着せ給ふなり此間に四十七年庚午に垂仁天皇皇太子と爲り給へり 五十一年甲寅四月八日遷二木乃國奈久佐濱宮一 日前神も共に同所に御在し由或書に云り然も有べくや 五十四年丁丑遷二吉備名方濱宮一 其所能く尋ぬべし古事記に生二吉備兒島一亦名謂二建日方別一 五十八年辛巳遷二倭彌和乃御室嶺上宮一是時豐耜入姬命吾日足止白支爾時姪倭姬命 垂仁天皇第二之皇女也母皇后狹穗姬也 事依志奉利御杖代止定給氐從此倭姬命奉レ戴二天照大神一而行幸矣于時美和御諸原爾造二齋宮一出奉氐齋始奉支 斯在れば豐耜入姬命の仕奉給ひしは崇神天皇六年より凡五十三年間なり但御紀に先レ是と有れば御位に即せ給ひて間も無く大宮を出し奉給ひしなり 脩垂仁天皇御紀に二十五年三月

丁亥朔丙申離ニ天照大神於豐耜入姫命ニ託ニ于倭姫命ニと有れとも神宮の傳には垂仁天皇二十五年丙辰春三月從ニ飯野高宮ニ遷ニ幸于伊蘇宮ニと有り此二を合せて何れか正しきと云ふに神宮の傳の方正かるへし同御紀に是丁巳年冬十月渡遇宮に鎭座せるに僅に十月許りにて伊賀近江美濃などを經て伊勢に到坐へきに非ねば也然れば御紀は伊賀宮に鎭座す事の五十鈴宮の事と一つに混へるなり又儀式帳に豐耜入姫命御形長成支次以纏向珠城宮御宇活目天皇御世に倭姫内親王選ニ御杖代ニ齋奉支美和乃御諸原爾造ニ齋宮ニ出奉支云々と有るに御紀に依ていへるなれど崇神天皇御世の方然る可くや已に御父天皇は四十八年に皇太子と爲り給ひ五十八年には御年三十一歲に御在せは御杖代に奉給ふ計りの御女の御在すべく思はるゝ也垂仁天皇御紀に十五年春二月乙卯朔甲子喚ニ丹波五女ニ納ニ於掖庭ニ第一曰ニ日葉酢媛ニ云々皇后日葉酢媛命生ニ三男二女ニ第一五十瓊敷入彦命第二曰ニ大足彦尊ニ第三曰ニ大中姫命ニ第四曰ニ倭姫命ニ第五稚城瓊入彦命とあれは御母日葉酢姫命を喚給へるは天皇五十六歲なり第一五十瓊敷入彦命の生給るは知られども第二大足彦尊の生坐るは二十年辛亥なり此に就て第一五十瓊敷入彦命を十五年と二十年との中間に置て十七八年頃の御生れなり此に例して第三大中姫命を二十二三年の生れとしても第四と坐す倭姫命の生坐るは廿四五年ならでは合難ければ日葉酢媛命の生給へるには非るべし然れば神宮の古傳古語拾遺に垂仁天皇第二之皇女母皇后狹穗姫也と有る方正きに似たり此に因て暫く其に從へり

氐顯給國求奉留時爾從ニ美和乃御諸宮ニ發氐令ニ出坐ニ支爾時御送驛使阿倍武淳河別命和珥彦國葺命中臣大鹿島命物部十市根命大伴武日命合五柱命等爲レ使氏令ニ入坐ニ支彼時宇太乃阿貴宮坐ニ垂仁天皇御紀に二十五年春二月丁巳朔甲子詔ニ阿倍臣遠祖武渟川別和邇臣遠祖彦國葺中臣連遠祖大鹿島物部連遠祖十市根大伴連遠祖武日五大夫ニ曰我先皇御間城入彦五十瓊殖天皇惟叡作レ聖欽明聰達深執謙損志懷沖退綢繆機衡禮ニ祭神祇ニ剋レ己勤レ躬日慎ニ一日ニ是以人民富足天下太平也今當ニ朕世ニ祭ニ祀神祇ニ豈得レ有レ怠乎と有る五人同しけれと事は別なり又儀式帳にも此世記と同文有るか倭姫内親王と記せり　六十年癸未二月十五日遷ニ大和國宇多秋志野宮ニ四年奉齋焉於是倭姫命乃御夢爾高天原爾坐而吾見之國爾吾乎令坐奉止悟教給支大神宮諸雜事記に垂仁天皇即位二十五年丙辰天照坐皇大神天降坐於大和國宇陀郡ニ云々是已皇大神始天降坐本所也と有るは心得ぬ事なり此に就て強て思ふに伊勢五十鈴川上に天降坐て後猿田彦神天鈿女命の筑紫の大朝廷に遣奉られし時に何か故有て此に留坐しにや然らば其事を誤傳たる也又此御傳の事は垂仁天皇二十五年御紀に一云天皇以ニ倭姫命ニ爲ニ御杖ニ貢ニ奉於天照大神ニ云々鎭ニ坐於磯城嚴橿之本ニ而祠レ之然後隨ニ神誨ニ云々と有れば實に有つる事なるべし雜事記にも採皇大神宮託宣偁我天孫御宇之時天下四方國擇錄可ニ天下宮所ニ故ニ光明ニ見定置先畢仍彼所可ニ行幸御ニ之由宣云々と有り從是東爾向而乞宇氣比氐宣給久我思刺氐住處吉有奈良波未レ嫁ニ夫童女爾相止祈禱幸行其時佐々波多我門爾童女參相即問給久汝誰答曰奴吾波天見通命之孫爾八佐加支刀部一名伊己之呂比命之兒宇太乃大宇禰奈止白支亦詔曰御共從仕奉哉答曰仕奉即御共爾從奉仕件童女乎大物忌止定給比氐天之磐戸乃鑰預賜利氐無ニ黑心ニ志氐以ニ丹心ニ氐淸潔久齋愼美左物乎不レ移レ右須右物乎不レ移レ左志氐左レ左右レ右返右廻事毛萬事違事無志氐大神爾奉仕留事元レ元本レ本之故也又弟大荒命同奉仕從宇多秋篠宮幸行而佐々波多宮坐焉丹波國與佐宮に坐し時丹波道主王の御女等を大物忌と爲給へるは後に度會宮の大物忌子にて此は大神宮の大物忌也混ふへからず此なる御教共は高天原より傳れる甚も可畏き大御命を傳給へる物也此は古始太元考に委しく説くべし皇大神の遷坐て彼御戸開神の齋と有る人を見出て仕奉令め給ふ事甚奇異なる事也御紀には垂仁天皇廿五年云々爰倭姫命求下鎭ニ坐大神ニ之處上而詣ニ菟田筱幡ニと見ゆ儀式帳には彼時宇太乃阿貴宮坐只次佐々波多宮坐云々と有り然れども何れも垂仁天皇の御世と爲るは誤れる物なり　六十四年丁亥冬十一月二十八日遷ニ幸于伊賀國隱市守宮ニ二年奉レ齋儀式帳雜事記共に此事見えす　六十六年己丑冬十二月一

日遷ニ于伊賀國穴穗宮ニ四年奉レ齋ニ云々 儀式帳に有り雑例集無し若て六十八年十二月天皇崩御坐き 第十一代纏向珠城宮活目入彦五十狹茅天皇即位元年癸巳夏四月四日遷ニ于伊賀國敢都美惠宮ニ二年奉レ齋 儀式帳阿閇柘殖宮と作(カケ)り此まで伊賀國なり 四年乙未夏六月晦日遷ニ于淡海甲賀日雲宮ニ四年奉齋焉 儀式帳無し 八年乙亥秋七月七日遷ニ于近江國坂田宮ニ二年奉齋焉 儀式帳同じ此まで近江國なり 十年辛丑秋八月一日遷ニ幸于美濃國伊久良阿宮ニ四年奉齋云々 儀式帳同じ 次遷ニ于尾張國中島宮ニ三十日奉齋焉 儀式帳に見えざるは暫時の事なる故に省けるにや三十日と有れは同七月末なるべし 十四年乙巳秋九月一日遷ニ幸于伊勢國桑名野代宮ニ四年奉齋 儀式帳同じ 于時國造大若子命 一名大幡主命云々 參相御共仕奉云々 儀式帳此事見えず 又國造建日方命參相支汝國名何問給 答曰神風伊勢國ニ止白進ニ舍人弟伊爾方命ニ云々 儀式帳建夷方命と有り伊爾方命の事を漏せり但此一條は後に五十鈴川上に行坐し時に大田命の申させ給へる事の此に錯亂せるなり如何にとなれば神風伊勢と云ふ號の起りは此にて非るか上に國造二人有む事も如何なればなり且建日方命と云ふも天日方奇日方命と同人と聞え已に云る如く太田命は奇日方命なればなり 又大若子命進ニ舍人弟乙若子命ニ 儀式帳無し 次河俣縣造祖大比古命參相支汝國名何問給答白味酒鈴鹿國奈具波志忍山止白支爾神宮平奉造氐六箇月奉齋 上に此事見えたるは錯亂なり儀式帳に河典鈴鹿小山宮爾坐支と有り 次阿野縣造祖眞枝命爾汝國名何問給白久眞蔭阿野國止白氐云々 儀式帳同じ 十八年己酉夏四月十六日遷ニ阿佐賀藤方片樋宮ニ四年奉齋ニ云々 儀式帳同じ雑事記に安濃郡藤方宮御坐三年云々と有り一年違へるに似たり又此より尾張國中島に行幸し坐なるも妄なり又三河國渥美郡遠江國濱名郡に出坐し由なるも打合ぬ心ちぞする 二十二年癸亥冬十二月二十八日遷ニ于飯野高宮ニ四年奉齋云々 儀式帳同じ 二十五年丙辰春三月從ニ飯野高宮ニ遷ニ幸于伊蘇宮ニ矣云々 雑事記に伊勢國飯高郡御坐と有るは此なるべし儀式帳には玉岐波流磯宮坐只と見ゆ御紀及大倭本記に磯宮と有るは五十鈴川の磯宮と云ふ意にて此とは異なり此伊蘇宮には田丸より西北相可の西と云り 次家田田上宮爾遷幸支 儀式帳には百船乎度會國佐古久志呂宇治家田田上宮坐支爾時宇治大内人仕奉宇治土公等遠祖大田命爾汝國名何問賜支白久百船乎度會國是川名波佐古久志留伊須々乃川止申須是川上好大宮地在申即所レ見好大宮地定賜支と有り世記などには奈志之根宮にての事と爲り 從ニ其處ニ幸ニ行奈志之根宮ニ云々 于時倭姫命五十鈴河上邊立磯宮坐御之時爾狹長田之猿田彦大神之子大田命參相氐 宇治土公氏人遠祖神也號ニ事勝國勝長狹ニ亦是也○今云此は儀式帳に依て太田命なる事を知れり 倭姫命神主部 天村雲命之孫大若子命弟若子命等也 物忌等 天見通命之孫宇多大于奈爾大阿禮命等也 訓悟白久是川上爾好大宮地在百船乎度會國佐古久志呂宇遲之五十鈴河上者是大八洲之內爾珍圖之靈地也天地之初時神魯岐神魯美命以氐伊勢風早之國波有ニ吉宮處ニ止見定給氐從ニ天上ニ投降給志天之逆太刀天之逆矛金鈴等是也止奉齋氐隱去矣 此は疑はしき文を除て出せり此大田命を猿田彦神の亦名と爲るは漫り言なり上に引る儀式帳の趣なる事必せり此は御天降の時大田命の御父猿田彦神の皇大神を伊勢に導奉れる時に天上より天之逆太刀逆矛などの天降れる故事を申されしなるべし豐受宮儀式帳に高天原坐氐見志眞岐賜志處爾志都麻利坐奴また垂仁天皇廿五年御紀に天照大神始自レ天降之處也と有るを證す文なり雑事記に大田命進參來稱申ニ云 此河上最勝地侍其妙不レ可レ比ニ他處ニ早

速可下垂ニ照臨ニ御上也　即奉迎而大田命神御共奉仕云々と有り前に桑名野代宮の次に國造建日方命云々答曰神風伊勢國云々と申せるは此にて在し事の上に混れたる物なり建日方命は決く大田命なる事上に云るが如し　此時倭姬命天之平手乎拍給氐朝日之來向國夕日來向國浪音不聞國風音不聞國弓矢鞆音不レ聞國　打摩志賣留國　敷浪七保之吉國大御意鎭坐國止歡給時爾天照大神誨ニ倭姬命一曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲レ居ニ是國一止詔支　天照大御神より下は垂仁天皇二十五年御紀の文なるが此御教は必此時なる可く思定て文を成せり別々に引出むは中々に煩はしければなり又儀式帳に校して引る事云ふもさらなり　二十六年丁巳秋九月甲子奉ニ遷天照大神於度會五十鈴河上一矣　御紀に一云天皇以ニ倭姬命一爲ニ御杖一貢ニ奉於天照大神一云々鎭ニ神誨一取丁巳年秋九月甲子遷ニ于伊勢國渡遇宮一と有るは神宮の古傳に依れるなるべし但冬十月に此も彼も作れるを秋九月に改引たるは記傳十五に垂仁天皇二十六年十月は丁丑朔なれば其月に甲子日無し十當レ作レ九九月戊申朔にして甲子十七日なりと有るに依て改めつ　爾時皇大神倭姬命乃御夢爾喩給久我高天原爾坐甌戸押張原　如レ見見志眞伎志國宮處波是也鎭理定理坐給止覺給支云々と見えたり豐受大神宮儀式帳に天照皇大神云々大長谷天皇御夢爾誨覺賜久吾高天原坐氐見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴と詔給へることを合せて思ふに神代紀に天照大神手持ニ寶鏡一云々吾兒視ニ此寶鏡一當レ猶レ視レ吾可ニ與同レ床共レ殿以爲ニ齋鏡一と詔給へるは豫め皇基の定り坐む迄は同大殿の内に在して天業を守護らせ御在し坐し皇基大に定り

天業大に弘り坐むを期として天宮より甌戸押張見行し丶處に鎭坐むとは本より所思食し乍も其事を顯はし詔給はせざりしが猿田彦神の皇御孫命を奉迎るに事託て天之八衢に出御在しける時に天鈿女命密旨を傳給ひけむを猿田彦神の思ぼし設られたる樣に親靈合坐て直に天之八衢より伊勢に天降り著せ御在し坐ける傳の有ける故に御紀には天照大神始自レ天降之處也とは記され古語拾遺には泊ニ于巻向玉城朝一令ニ皇女倭姬命奉ニ齋天照大神一仍隨ニ神教一立ニ其祠於伊勢國五十鈴川上一因興ニ齋宮一令ニ倭姬命居一焉始在ニ天上一預結ニ幽契一衢神先降深有レ以矣とは記されたるなり然れば此幽契はしも天降り坐し時供奉仕奉りし神等を除ては佗神等には漏し傳ざりしかば此天上の幽契の深き所以はしも人間に秘れたりしを倭姬命の伊勢に御在し着給へる時に猿田彦神の子太田命其父神の命を傳へ有ちて其五十鈴川上の地を守り御在して天之逆太刀逆鉾金鈴等を奉りて云々の事の聞え申せるに合せて大御神の御誨の有ける故に天降坐し當昔の事實慥に分明して顯れたる物なり　若し衢神の幽契の少しも傳はらましかば國々を求賜ふには及ばさらましを斯の如く其事を顯はし坐ぬ事は皇御孫命の皇基を能く定給ひ天業を能く有ち給ひて天下を平けく所知

看しめ給はむとの神量にて甚尊く欣感き事なり大方世中の人の上の事も然にて飽まで其人の功業を盡し究め令め給ひ偖後に神の賦與給ふ所に至る事多かり大神の深旨を如此く顯し奉も其(甚か)恐く畏縮はるゝ心ちぞ爲る神名帳に伊勢國度會郡大神宮三座(相殿坐神三座並大預月次新嘗等祭)と有る相殿坐二柱は儀式帳に同殿坐神二柱坐ニ左方ー稱ニ天手力男神ー靈御形弓坐坐ニ右方ー稱ニ萬幡豊秋津姫命ー也是皇孫之母靈御形劔坐と有り師說(古史徵四)に神代紀御天降段第二の一書に是時天照大神手持ニ寶鏡ー云々祝之曰吾兒視ニ其寶鏡ー當ㇾ猶ㇾ視ㇾ吾可下與同ㇾ床共ㇾ殿以爲中齋鏡上復勅ニ天兒屋命太玉命ー惟爾二神亦同侍ニ殿内ー善爲ニ防護ーと有ると古事記に天照大御神云々詔者此之鏡者專爲ニ我御魂ー而如ㇾ拜ニ吾前ー伊都岐奉次思金神者取ニ持前事ー爲ㇾ政此二柱神拜ニ祭佐久々斯呂伊須受能宮ーと有とを相照して熟思ふに古文と漢文との差別こそ有れ全同趣にて互に聊傳漏たる事の有る耳なり其は神代紀に視ニ此寶鏡ー當ㇾ猶ㇾ視ㇾ吾と有るは古事記に此之鏡者專爲ニ我御魂ー而如ㇾ拜ニ吾前ー伊都岐奉と有ると全同じくて古事記に可ニ與同ㇾ床共ㇾ殿と云ふ語を漏せり又天兒屋命太玉命に勅給へる御言に同侍ニ殿内ー善爲ニ防護ーと有るは古事記に思金神者取ニ持前事ー爲ㇾ政と有るは文に精麁の違こそ有れ全同じきを書紀にも古事記の如く此二柱神者拜ニ祭五十鈴宮ーと云ふ文の有へきに其を漏したり其は上に勅ニ天兒屋命太玉命ー惟爾二神亦と有を以て知可し如此照し合せ見て古事記に常世思金神の下と次に思金神者と有る神者との間に布刀玉神の名を脱し故此の間に故字を脱せり偖思金神天兒屋命一神なり(其は此の傳の記紀共に能く合ひて全一神と聞ゆるに就て倘深く考るに先石窟段第三の一書に思兼神の名は無く其正書又外の一書ども又古事記にては思兼神の爲つる謀事を總て兒屋命の爲たる趣なるは同神なる可く所思たるに和歌東家抄に思兼神を卜部氏の遠祖也と見え國造本紀に知々夫國造八意思金命十世孫知々夫彦命定ニ賜國造ー拜ニ祠大神ーと有も萬葉集に武藏野に卜合肩燒きと有て東國に古き卜法の傳はれるにも由有げなり神中抄に思ひかね龜の正卜(マスラ)に云々と詠つに就て思へば兒屋命の兒屋は八意思兼神の八意と同義なる御名なり〇今云古史徵五十二段六十段の下にも兒屋命思兼神同神の說有り尙下六十口丁に云るを見合す可し)偖右の神勅の如く甚上代には天兒屋命天太玉命を大御神宮の相殿に拜祭り給へりしなり其は倭姫命世記に天照大御神一座(御形八咫鏡坐也)相殿二座(左天兒屋根命右太玉命)と記して別に御戶開神二座天手力男神栲幡千々姫命と有を以て知へし然るを後に豊受宮の相殿に遷され給へり御鎭座本記に外宮鎭座の事を記る處に依ニ天照大神御託宣ー第一攝神多賀宮奉ㇾ傍ニ止由氣宮ー也亦天照大神相殿座神二前止由氣宮相殿神皇孫尊爾奉ニ陪從ー留故號ニ止由氣宮相殿ー而東西座給(東天皇孫命一座西天兒屋根命太玉命內相殿並坐給也)自尒以來以ニ天手力男神萬幡豊

秋津姫命ニ天照皇大神乃爲ニ相殿神ニ（元是號ニ御戸開神ニ）と有り然れば豐受大神の丹波國に坐し間は皇御孫命のみ相殿に坐しを雄畧天皇の御代に外宮に鎮坐しめ給へる時に大御神の御託宣に依て第一の攝神多賀宮神をば豐受大神に天兒屋根命太玉命をば皇御孫命に傍奉給しより豐受宮の相殿神とは成り給へるなりけり（斯在れば天兒屋命太玉命と云ふ說は雄略天皇の御世より以前の傳手力男神萬幡豐秋津姫命と云ふは其より後を云る傳なる事を悟り彼此思ひ集めて兒屋根命思兼神同神なる事を思ひ定むべし倩古事記に次手力男神者坐ニ佐那縣ニ也と有る神者の間にも萬幡豐秋津比賣神と云ふ八字を脱せり其は神名式に伊勢國多氣郡佐奈神社二座と有を大御神宮の御戸開神と稱す由度會延佳の神名式考證に見えたれば上に引る倭姫命世記に御戸開神二座と云るは元此地に坐しを大御神宮の相殿に遷し給て後尚本所にも拜祭たるか即佐奈神社二座と有る社なる事灼ければ其一座は萬幡豐秋津姫命なる事世記に御戸開神二座天手力男神栲幡千々姫命と云ひ御鎮座本記に以ニ天手力男神萬幡豐秋津姫命ニ天照皇大神の爲ニ相殿神ニ元是號ニ御戸開神ニと有るにて論無く又此姫神の御靈なも天降し給へる事更に疑ひ無き物なり下六十丁見合す可し）此は甚委しき說にて勤ましぐ所思るに依て此に用無きを省きて引出たるなり倩此相殿神の御靈形の佐奈神社に鎮り坐す事は倭姫命の國巡り給ひし時には有る可からず神武天皇御世に天日別命此國を平坐しに依て伊勢國を賜はれる事有れば其時に齋祀り給へりし物なるべし其は古事記に天石戸別神亦名謂ニ櫛石窻神ニ亦名謂ニ豐石窻神ニ此神者御門之神也次手力男神萬幡豐秋津師比賣神者坐ニ佐那縣ニ也と有るを師は天石門別神手力男神一神なる事を明らめられたるに依て天石門別神云々此神者御門之神也までを除きて下文に次手力男神者坐ニ佐那縣ニ也と有る神者の間にも萬幡豐秋津比賣神と云ふ八字を加ふ可しと云れたるは然る事なるに依て今此を補ひて引たれど（但古事記に此八字無きは大に正しく聞る事有り其は手力男神は御靈形にて降り坐し萬幡豐秋津師比賣神は下に云ふ若く天鈿女命と同神にて現身にて天降坐ればし後に御靈を佐那神社に祭られ給ふと雖も此に補ふべき文ならず只今は見易からむ爲に補へり）天石戸別神云々も除くまじき由有り何を以て云ふぞならば御門神の御靈形は已に第五段御門神祠の下に云る若く御門の開闔を掌る故を以て天忍日命は御統に傳りて丹波國多紀郡櫛石窻神社二座（並名神大）と有る此社に祀奉りて其御圖象は神祇官西院坐二十三座の中なる御門巫祭神八座（並大月次新嘗）櫛石窻神（四面門各一座）豐石窻神（四面門各一座）と有る此なれば佐那社なるとは別なり（此事已に其下に云り倩御門神は二座なる可きを神祇官西院坐な八座と爲るは四面門各二座づゝ坐を合せたるか故なり然れども其は二座なる事云も更なり）若て同神には坐せども御戸開神二柱の御靈形は天村雲命の統に傳はりて其子天波與命より其子天日別命に傳來しを彼神武天皇の御世に伊勢國を賜はりて其國に住りし間に佐那縣には齋祀られし物なる可し（國造本紀に伊勢國造橿原朝以ニ天降天牟羅久怒命孫天日別命勅定ニ賜國造ニと有り但天牟久怒命孫天日鷲命と有れども度會延佳が頭書に牟久怒牟羅久怒之誤脫日鷲日別之訛謬と

有に依て今改め引つ伊勢國風土記に伊勢國者云々天日別命之所ニ平治ニ天日別命神倭磐余彦天皇征ニ此東州ニ之時隨ニ天皇ニ云々伊勢國爲ニ天日別命之村地ニと有り 其裔と坐す大若子命亦名大幡主命國造と在し事上に引る桑名野代宮の條に見えたり其より供奉仕奉て大御神の鎮り坐る後に大神主と爲給ひ兼て國造たら令め給ふ事古書共に見えたるが如し然れば天日別命の久代（ソノカミ）より此佐那神社は氏神とぞ齋祀て有けむ然れども猿田彦神の天鈿女命と共に天之八衢より支流（ワカレ）て天照大御神を導き奉られし時より卜置れたる幽契に依られたる事云も更なり 鈴屋大人說に天照大御神の御靈鏡猿田彦神の導の隨に先伊勢國に降着給し時此神の御靈實も附副坐れば其時より即其御靈は此地に留坐るかと云れたるは云れたる說なり 佐那縣は記傳十五五十二丁に神代紀猿田彦神段に伊勢之狹長田と有る此地の事なり大神宮儀式帳に天照坐皇大神御幸行坐時云々飯野高宮坐支彼時佐奈乃縣造御代宿禰乎汝國名何問賜支白久許母理國志多備乃國眞久佐牟氣草向國止白支即神御田幷神戸進支 眞久佐牟氣草向國とは寛前迎へ（マクサキムカヘ）來前迎（クルサキムカノ）てふ意にて猿田彦神の皇御孫命の天降覓國來坐御前を迎奉給し山の稱なる可し〇今云古事記中卷伊邪河宮段に曙立王名伊勢之佐那造之祖と有れば御代宿禰は曙立王の子か孫かなるべし 此御社は今多氣郡佐那の仁田村と云に在て村の西方に在り 大森社と申す佐那は今佐那谷とて一谷の大名にて八村有る處になむ有ると云れたり〇因みに別宮の御事を言擧申可し神名式

に荒祭宮 大月次新嘗 と見え伊勢大神宮式にも荒祭宮一座 大神荒魂去ニ大神宮ニ北二十四丈 と見え大神宮儀式帳にも稱ニ大神荒魂宮ニ 御形鏡坐 と有り然れども其御名を何神と申と云ふ所見無し倭姫命世記に荒祭宮一座皇大神荒魂伊弉那伎大神所生神名八十枉津日神也一名瀬織津比咩神是也と有るぞ古き證據と有て甚正しき傳說なるに就て尚此を探索ぬるに神功皇后御紀に神風伊勢國之百傳度逢縣之折鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉と御名乘り坐るぞ荒祭宮に齋れ御在し坐す御名と通えたる然るは韓國の御政事竟て還坐し後に天照大神誨之曰我之荒魂不レ可レ近ニ皇居ニ當レ居ニ御心廣田國ニと詔給へるを以て知可し然れば撞賢木は衝矛など云ふ若く嚴めしき神の御裝束ながら此は鈴屋大人說の如く嚴（イツ）と云む發語なり嚴之御魂は同御紀に向匱男聞襲大歷五御魂速狹騰尊と申すも此神と聞ゆるに五御魂と有れば此嚴字は稜威之雄走神など云ふ伊都にて御勢力（ミイツ）の威（イカ）嚴めしく健く御在る由なり天疎とは天照大御神を輔相奉給ひて此世間に在と有ゆる疎び荒ぶる禍神を率領治め坐す由を兼て天疎利向ふと續く發語也向津媛命は禍津比賣命と云むが若し 鈴屋大人の玉勝間

に撞賢木は齋き賢木にて伊豆と云む𛀁結なり嚴之御魂とは淸淨に成竟給へるを以て申す御名にて天照大御神の大御名の如く訖けたるさへ有るに玉矛百首の卷首にも撞賢木嚴之御魂と天地に伊照徹らす日大御神と稱れたるぞ心憂き若其說の若くは姬字命字は如何爲むと須る御紀の文例君續には姬字尊字を書き臣庶には媛字命字を書て字を以て標當とせるを如何に爲む又平田翁の古史成文にも因レ洗ニ給左御目一而成坐神之御名者撞賢木嚴之御魂天疎向津比賣命亦御名天照大御神と記されて其證に「賢木云々と申す御」な最初に擧たるは御親御名乘坐る大御名なればなり神功皇后御紀見るべしと云れたるは身毛も彌立て甚も畏く畏縮るゝ非說なり偖天照坐皇大御神はしも天地の間に二無く甚も甚も尊く畏さ大御神に坐て凡天地の間に在ゆる物も事も悉く其極る所は大御神の大御心に歸る事なる故に此禍津日神直日神共に屬坐て大御神の大御政を輔相奉給ふ事なるが荒魂と申すも禍津日と申すも本より凶惡の義には非ず荒魂の荒は散去行進む意禍津日の禍は罷り向ふ義と通えたり神功皇后の征韓の事も古事記には天照大御神之御心也と有るを御紀には撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命と御名乘坐て專と助奉給し事を始め神宮雜例集後一條天皇長元四年六月條に十七日大神宮御祭也仍齋內親王依レ例參宮着ニ於齋王殿一又男女官等悉參詣祭主宮司參宮了而御玉串供奉以前忽大雨降雷電穿レ雲光騷テ天天地震動仍參詣衆人迷ニ心神一成恐之間齋王俄放レ音叫呼給祭主輔親朝臣召仍祭主禰宜等引率齋王殿參而爰齋王御託宣云我皇大神第一別宮

荒祭宮也而依ニ大神宮勅宣一天此內親王仁所ニ託宣一也故何者寮頭相通幷妻藤原古木古曾及數從者共年來間狂言詞巧天云々二宮惟異之由乎稱須此尤奉ニ爲神明一奉ニ爲帝王一極不忠之企也皇大神宮高天原與利天降御之後人間來ニ寄翔御一而件相通夫婦件無實之詞搆出以ニ狂言一驚ニ人間之耳目一甚無禮之企也須ニ一日與ニ神罰一也然而爲ニ後代一爲ニ天下一無上齋庭齋內親王令記宣也又後朱雀天皇長曆三年の下に四月朔日午時仁齋宮內侍從五位下源朝臣託宣伱我皇大神宮第一別宮荒祭宮也而依ニ大神宮乃勅宣一天所ニ託宣一也何者去年遷宮之間仁非例乃事甚巨多也其中昇殿亂入之事寔祭主宮司乃所爲不レ可ニ勝計一云々就レ中於ニ今度乃遷宮一者祭主佐國之不忠有於斯利公家被ニ糺正一天早停止所職仁波任ニ次第一天可レ補ニ祭主職一也又同年七月十六日齋宮內侍乃託宣伱我是皇大神宮乃第一別宮荒祭宮也而依ニ皇大神宮勅宣一今更所ニ託宣一也天下四方乃人民波皆皇大神宮乃御寶也其中仁大中臣幷荒木田氏皇大神宮大宮興利天降坐時興利繼レ氏繼レ門氏代々世々仁奉仕來輔佐乃神民也因レ之自ニ往古一公家毛未レ被レ處ニ重科一者也而去年遷宮之時件佐國加身有レ怠利仍

可レ處ニ重科ニ神宜揭然也仍所レ被ニ流罪ニ有レ怠天多人民等爲可レ有ニ其撲ニ也早遣ニ寮使ニ可ニ召返也ニ云々抔見えたる如く皇大神の御心進(ミウラサ)び爲て執行はせさせ給ふ御事は此神の攝て行ひ奉給ふ事揭然(イチシルカ)るに狂言を咎め給ひ不忠無禮に依て其糺正を物爲させ給ふ事は然すがに荒魂禍津日神の所爲なりけり然りと雖も不忠無禮を行ふ者其糺正を得て神罰を蒙り禍害に遇ふも不忠無禮の罪咎を自然被給ふ意に適へば瀨織津比咩神と申すも大に由有る事なりけり（尚第三詞の下に委しく云る事共を合せ見て其深意を伺べし）偖世間に諸の枉惡事を行ふ神とはしも悉く此神に屬て其御制令を仰ぐ事と適えたり㊂御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃云武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久自上往者上護利自下往波下護利云々と有る文面にては天能麻我都比神の疎び荒び坐樣なれど然らず其率領坐す禍神共の所爲なるが禍津日神の御心より出る事云も更なり何を以て云ふぞならば人の不善不正の行業有るは其己を愼み守らざるに依る所なる事勿論なれど其愼み守らざる所も亦神の御心にして過去の罪の報ゆるか後來(ユクサキ)の咎を前に受るか何にまれ平均の御政有る事と畏み恐みも思ひ探らる（前に風して後に伸び先に善事有て其善事の意表に惡と爲るなど皆神の御心にして測り難き物なり其測り得ぬ所が即神の御心なりけり） 尙下なる多賀宮條に云を竢可し〇神名式に云く伊佐奈岐宮二座（伊佐奈彌命一座並大月次新嘗） 此宮の事大神宮式には伊佐奈岐宮二座（去ニ大神宮北三里ニ） 伊奘諸尊一座伊弉冉尊一座と見えたるが儀式帳には月讀宮一院（在ニ大神宮以北ニ相去三里）正殿四區之中（三間長各一丈七尺弘一丈高八尺一間長八尺弘六尺高六尺） 此一稱伊弉諾尊次稱伊弉冉尊以上奈良朝廷御世定祝云々と有ば本は月讀宮の管せるなるべし三代實錄に貞觀九年八月二日戊辰勅伊勢國伊佐奈岐伊佐奈彌神改ニ社稱ニ宮預ニ月次祭ニ幷置ニ内人一員ニと見ゆ（然ればこそ世紀本緣を始め古書共に記さゞりけれ斯在れども奈良朝廷に至り定祝させ給ふ事は大御神の御心なる事云まくも更なり文德天皇實錄に天安元年九月乙未朔伊勢國荒祭月讀瀧原伊雜宮等神宮内人五人始預把笏と有りて伊佐奈岐宮の事無きを以ても此宮は月讀宮に管せる事明然し此より後貞觀九年に始て置ニ内人一人ニと有り）〇神名式に云く月讀宮二座（荒御魂命一座並大月次新嘗） 大神宮式には月讀宮二座（去大神宮北三里） 月夜見命一座荒魂命一座と見えたるが儀式帳には上に引る月讀宮一院正殿四區之中此一稱ニ伊弉諾尊ニ次稱ニ伊弉冉尊ニ已上奈良朝廷御世定祝次稱ニ月讀命ニ御形乘馬男形着ニ紫御衣ニ金作帶大刀佩之次稱荒魂云々と見えたり斯在れば伊佐奈岐宮は實に後世に定祝給へるにて月讀命と荒魂命とは皇大神の鎭坐る時より祀給ひけむ其は儀式帳に掛畏天

照坐大神月讀二柱所稱伊奘諾尊伊奘冉尊共ニ爲夫婦一所生神と有るは此御鎭坐の事を記せるならねど由有て所思るに就て考ふるに崇神天皇御代に皇大御神の御靈形八咫鏡と共に草薙劒をも御摸造成て此を朝廷に留奉給ひ眞の御は古語拾遺に仍就ニ於倭笠縫邑一殊立ニ磯城神籬一奉レ遷ニ天照大神及草薙劒一令ニ皇女豐鍬入姬命奉ニ齋焉一とも見えたるが如くなれば皇大御神は五十鈴宮に鎭坐し草薙劒は此月讀宮に鎭り御在しけむかと考奉らるゝなり然るは月讀命と申すは須佐之男命の御事なるが草薙劒は其御靈形と御在すればなり（月讀命須佐之男命同神なる由は先師等委く考定られたれば今云はす此草薙劒を其御靈形なりと云ふ由は彼簸川上にて八俣大蛇を斬て得給へりし因緣に依れる事人も知れるが如し）倭大御神と共に鎭坐るは垂仁天皇二十六年丁巳なるが景行天皇四十年庚戌まで百十四年計伊勢に齋れ御在しゝを倭建命東夷征伐の御時大御神宮に參拜給ひける時御姨倭姬命より其御守護の爲に此草薙劒をば參らせられけるが故に御形實を新に彫刻み奉り給へるなむ此月讀宮なる可かりける（若て其草薙劒は尾張國愛市郡熱田神社に鎭坐す事書共に委しければ今云はず）光仁天皇御紀に寶龜二年八月甲寅幸ニ難波內親王第一是日異常風雨拔レ樹發レ屋卜レ之伊勢月讀神爲レ崇於是每年九月准ニ荒祭神一奉馬又荒御玉命伊佐奈岐命伊佐奈彌命人ニ於官社一（此御祟は度會神宮寺を建られしに依る事なり其次の文に從ニ度會神宮寺於飯高郡度瀨山房一と有れば決て此穢を忌惡み坐るなる事と通えたり佛を忌惡み坐す事如此し苟くも道を知る輩其心得勿らめやも其心得なき者は國の罪人たり又寶龜十一年二月丙申朔神祇官言伊勢大神宮寺先爲レ有レ祟遷ニ建他處一而今近ニ神郡一其祟未レ止除ニ飯野郡一之外移ニ造便處一者許レ之と見えたり）〇神名式に云く瀧原宮（大月次新嘗）大神宮式には瀧原宮一座（大神遙宮在ニ伊勢與志摩兩國境山中一去ニ大神宮一西九十里）と見え儀式帳にも瀧原宮一院（伊勢志摩兩國堺大山中在大神宮以西相去九十二里）稱ニ天照大神遙宮一（御形鏡坐）と見えたり此宮の事は世記に倭姬命波皇大神乎奉戴氐云々大河瀨乎渡給云々從ニ其處一指ニ河上一氐幸行云々爾時眞名胡神參相比渡志奉支其瀨乎眞奈胡御瀨止號氐御瀨社定給支從ニ其處一幸行美地爾到給奴眞奈胡神爾國名何問給支大河之瀧原國止號其處乎宇太之大宇禰奈乎爲氐荒草令苅掃氐宮造令坐支云々と有る此處なるが此處より移幸行し後も御靈を留め御在す可き由緒有てぞ鎭坐つらむ（然るを世記に瀧原宮を速秋津日子神一座と有るは誤ぞ並宮を速秋津比賣神と云より此に彥神ならむと妄せるなるべし其は古事記に速秋津日子神速秋津比賣神と並べ記せるに依れるなる可けれど實には速秋津比賣神一柱に坐り其は鈴屋大人說の如く伊邪那岐大神の水潔に成坐し伊豆能賣神に御在すればなり然れば大神宮遙宮と有るに適て有むぞ甚正しかるべく所思ゆ）〇大神宮式に云く瀧原並宮一座（大神遙宮在ニ瀧原宮地內一）儀式帳には並宮一院と有りて御靈形の事をも記されず（此宮の事神名式に記されず齋宮寮式小社九十八座の中の多岐原社に是か）世記に瀧原並宮速秋津比賣神一座（御靈御形鏡坐）と

有るは決めて古傳なる可し然れども朝廷より祭らせ給ふ所は大神宮の遙宮なれども此速秋津比賣神も共に坐す事は下に註る伊雜宮も同じく遙宮ながら玉柱屋姫命の坐すと同じきなり（委しくは古始太元考に云り）○大神宮式に云く伊雜宮一座（大神遙宮在二志摩國答志郡一去二大神宮一南八十三里）儀式帳には伊雜宮一院（在二志摩國答志郡伊雜村一大神宮相去八十三里）稱二天照大神遙宮一と有て神名式に見えず（但神名式に志摩國答志郡粟島坐伊射波神社二座並大と有るは別なる可し大神宮式に伊雜宮一座と有りて同式の内に事實の異るべき事有まじければなり）此宮の事世記に垂仁天皇即位二十七年戊午秋九月鳥聲高聞氐晝夜不止囂此異止宣氐大幡主命舍人紀麻呂良止差使遣令見二彼鳥鳴處一罷行見禮波志摩國伊雜方上葦原中有二稻一基一生本波一基爾爲氐末千穗茂也彼稻乎白眞名鶴咋持廻乍鳴支此見顯其鳥鳴聲止支返事申爾時倭姫命宣久恐志事不問奴鳥須良御田作皇大神爾奉物乎止詔氐物忌始給比彼稻乎伊佐波止美命乎爲氐拔穗爾令拔皇大神之御前懸奉始支以二其稻一大幡主命之女子乙姫爾清酒令造氐御饌爾奉始支千税奉始事因茲也彼稻生留地乎千田止號支在二志摩國伊雜方上一其處爾伊佐波止美神奉二宮造一爲二皇大神攝宮一伊雜宮是也と有れば五十鈴宮に鎭り坐る翌年の秋此遙宮は造奉れるなりけり（伊佐波止美命と云ふ名は此時に負坐る名なる可し伊佐波は五十澤（イサハ）にて地名止美は鳥見なるべし今伊雜と訓て伊曾邊と唱ふるは訛れるか又然る地名も有つるが混つに成れるか若然らば大田命に由縁有り）世記に伊雜宮玉柱屋姫命一座と有て皇大神宮遙宮云々天牟羅雲命之孫天日別命兒玉柱屋姫命是也依二神託一倭姫命使二伊佐波止美神造一宮爲二皇大神之攝宮一而崇二祭之一靈御形鏡坐と有れば前に記せる事に伊雜宮を造るを神託と云はざるは漏たる可し又玉柱屋姫命は天日別命の子と有れば久代（ソノカミ）の人なりけむと幽に大御神に仕奉る由縁有て此遙宮には仕奉らるゝなる可し（世記に玉柱屋姫命一座と有れば表に立給ふ若くなれど大神宮遙宮と有るに依神の主と立給ふ理無ければなり）○此より度會宮の御事を顯申可し此豐受皇大御神はしも神代紀一書に軻遇突智娶二埴山姫一生二稚產靈一と見えて此大神の生坐し事を記されず古事記には次和久產巣日神此神之子謂二豐宇氣毘賣神一と有て和久產巣日神の出自を漏されたれば相對合せて其御統脈を伺奉る可き也（火神土神二柱の御合坐て稚產靈神を生給ひ稚產靈神の御子に豐宇氣毘賣神の生坐る順次奇異にも靈妙也若て豐宇氣毘賣神と亦名大宜都比賣と申す又古事記に[illegible]或謂二大宜都比賣一と見え年中行事秘抄に高橋氏文云上總國阿波大神乎爲二御食津大神一云々と見えたれば此神の生坐しは阿波國也けむ故に阿波大神とは申せる成可し倩丹後風土記に和奈佐老夫和奈佐老女と有るは和久產巣日神の豐宇氣毘賣神の御功德を成就令め給はむ爲に審めなど爲給ひし事の有けむを誤傳せる物なるを可し神名式に阿波國那賀郡和奈佐意富曾神社有るも由有げ也）天日の光輝大地を照徹る時は大に芽し萠む可き奇靈なる神氣出來て種物（タナツモノ）及諸

種の草木已に生出むと芽し萌む物なり此稚產靈神の御德を布施し給ふ所以なり和久とは火神土神の產靈の間より生出むと爲る義なり此を以て產靈とは申せり豐宇氣毘賣神を廣瀨大忌祭詞及廣瀨社緣記又丹後風土記には若宇加乃賣命と申せり若は物の生發する意なる事を思ふ可し又別れ出る義をも兼たり虫などに蠢(ソク)と云ひ水などの涌と云ふも同じ心にて凡て物の生出るを云ふなり此より轉注假借して幼稚を和加志と云ひ未熟なるを和加志と云ひ三日月を若月とも云る語有り心を就て考ふ可し若て火神土神の產靈に資て其地勢に隨ひ山川原野の形狀に依て土著して生出むと爲るの氣質成る此に依て草木始て形體を彰すに至る此豐宇氣毘賣神の御德を成就し給ふ本緣たり豐とは大地の天日の周圍を三百六十餘日に大運し晝夜一動の小運有て天日の光輝を禀受て大地の神氣を殖す義なると風氣の動搖して殖物を生長せしめ給ふ由の稱名なり火神土神の產靈の妙合奇會終古に違ふ事無く妙なる事なり和久と宇氣と語同じきも亦深き所以有る事なりけり凡神の御名に豐と負坐るは此地動の義に起れり大地の上の美事此より大なるは無く此より美たきは無き故に他神の御名にも負坐る事常なり此事古始太元考豐雲野神の下に委しく云へり故大人等の說は悉く未義也宇氣とは第三詞大御膳都神の下に云るが如く食物衣服住宅となる資を產靈成し給ふ御功德を稱申せる御名なり此食衣宅の資多くは草木を以て成れゝば此神の御恩賴なるが故生毛とは云へり令義解に土地之所レ生爲レ毛也と有るを思ふ可し又食衣宅の資は其大神より受賜りて性命を保つ所以なり此を以て得來の義を包たり古言の靈妙盡せりと云可し尙第二詞第三詞の下に云る事共を委しく考可し上に云る如く和久と宇氣と通ふ語なるが故に若宇加乃賣命と申し神樂歌には豐遠加比賣と詠り神名式に土佐國長岡郡豐岡上天神社殖田神社並たるも故有る事なる可し丹後國竹野郡大宇加神社式に見えて今大宮賣大明神若宮賣大明神と稱ふは此神の住宅を守護給ふ御名を大宮賣神と申より謂れるならむ又式に丹後國丹波郡大宮賣神社二坐名神大と有るを今土基村に在て社號に豐宇氣持命豐宇賀能賣命と云るは保食神と申す御靈と宇賀能賣神と申す御靈とを祀れるなる可し又古事記に宇迦之御魂神神代紀に倉稻魂神の名有れ共此は其豐受大神の食物(ウケ)に就て功用を施給ふ神にて別に一神たる事第二詞の下に云りき若て和久產巢日神豐宇氣毘賣神共に御祖火產靈神埴山姬神の御所緣に就て高天原に坐けるが本つ御體にて此神等の高天原に坐す事は大倭本紀に此二柱神の御靈實を降し坐る由見えて神樂歌に天爾在(アメニマス)と詠るにて對然し且御靈實を降すと云も天上に御本體の在せるが故なり此事今始めて心附たる事なるが然る可し此國土に本より衣食住の幸を賜はむ爲に分身を化め給へり其を保食神と申せり上代本紀酒殿神の下に和久產巢日神子豐宇賀能賣神坐也五穀種所化神保食神分身と有を考ふ可し廣瀨社緣起に倉稻魂命此大忌廣瀨社也又曰若宇加乃賣命ニ伊勢外宮分身也と有るは若宇加乃賣命此大忌廣瀨社坐也又曰保食神ニ伊勢外宮分身也と有けむを混へし物なる可し但此に就て思ふに豐宇氣毘賣命と申すは本體の御名にて若宇加乃賣命と申すは亦名を保食神とも申て分身の御名なるべし廣瀨大忌祭詞に御膳持須留若宇加能賣能命と有る御膳持須留と保食と同義同意の語なるも上に若宇加能賣能命と申す者に分身(ワケミマ)の意をも兼たりと思しければ也然れ

ば大宜都比賣命と申すも本より分身の方の御名なりけむを混同し物なりけり斯在は豐宇氣毘賣神とも登由宇氣神とも申すは本體の御名にて高天原に在す故に御天降の時まで其御事跡を記されず須佐之男神に殺され給へるは若宇加乃賣命とも大宜都比賣神とも保食神とも申て其分身にて此國土に坐るに事有しなりけり如此く眼を着れば甚紛はしき條理無くして能く了達(トホ)るなり酒殿神と別て祭られたるも故有ること なりけりかし　若て天上に坐す豐宇氣毘賣神の本體は隱身なるを此國土に坐す分身保食神は現身に御坐るが其御功德の成就整へりけむ時に天照大御神より須佐之男命を遣はして令看給へり但唯に其神の消息を令看給ふに非ず造化を成給ふ御有樣を令候給へるなり此等の事委しくは卷六廣瀨大忌祭祠の下に註り　但元より火產靈神に由有る天照大御神に坐せば御心戀しく所思けむは然る物にて此大御神の顯見蒼生を養し給は將(マ)ヽ欲(オモホ)大御心に出たる事云も更なるが高皇產靈神皇產靈神の天地を預鎔造坐る御功に依れる物なり然れば古事記には神產巣日御祖命令ニ取レ茲成ニ種と有れど其は幽にて顯には天照大御神の事執り計はせ給ふ事次に引る神代紀の如し

神代紀神達生坐段第十一の一書に天照大神在ニ於天上ニ曰聞ニ葦原中國有ニ保食神ー宜ニ爾月夜見尊就候レ之月夜見尊受レ勅而降已到ニ于保食神許ー保食神乃廻レ首嚮レ國則自レ口出レ飯又嚮レ海則鰭廣鰭狹亦自レ口出又嚮レ山則毛麤毛柔亦自レ口出夫品物悉備ニ貯之百机ー而饗レ之是時月夜見尊忿然作レ色曰穢矣鄙矣寧可下以ニ口吐之物ー敢養上レ我乎廼拔レ劒擊殺　此にて保食神の產靈し給ふ有狀を觀察べし御心進び爲給へずも思ほす隨に食物の成就る樣恐けれど今も現に見奉る心ちす然るは國に嚮ひ海山に嚮ひ坐せば口中に食物成りて出る事和久產巣日神の產靈の德をも幽に施し給ふ物にて天日の光輝大地に照徹する間より生民を養ふ可き神氣を釀成せるが其乃土水の實に生り合て一種の食物と成る也此事古事記には速須佐之男命食物を乞ニ大宜都比賣神ー爾大氣都比賣自ニ鼻口及尻ー種々味物取出而種々作具而進時速須佐之男命立ニ伺其態ニ爲ニ穢汚ー而奉進乃殺ニ其大宜都比賣神ーと見えたり此二の傳を合せて月夜見尊須佐之男命同神保食神大宜都比賣神同神たりと云れたる鈴屋大人服部中庸翁氣吹能舍翁の說の動まじき事を曉明むべき也但此時の事は攝津國風土記に保食神居ニ稻倉山ニ而爲ニ膳厨ニ之處而常盛飯給有事之後還ニ丹波國ニと有れば其國にての事ならむか倉山今詳ならず廣瀨社緣起に若宇加乃賣命伊勢外宮分身也是則水門神也以ニ一水之德ー資ニ萬品之生ー五穀靈神也云々と有る續きに佛者の妄說を書加たる中に役優婆塞十九歲而入ニ箕面瀧ー又入水足池到龍宮城と有れば島上郡なる箕面上の事ならむも知べからず妄說も皆古き跡に依りて作る中世人の業なれば也又河邊郡に米谷の地も有り又思に出羽國飽海郡大物忌神社の立せ給へる鳥海山の舊名稻倉岳と云しを近頃稻村岳と訛たる由也此大物忌神は保食神にて廣瀨物忌神と同神なるが飽海郡內に遊佐郷有り丹後國與佐郡に近く田川郡に由良の地有り丹後國の名を移せる也月山は月夜見命なるを思ふに予が心には鳥海山の心ちす大凡邊境なる故事も京近き所の事に混合て傳はる古の例なれば也　然後復命具言ニ其事ー時天照大神怒甚之曰汝是惡神不レ須ニ相見ー乃與ニ月夜見尊ー一日一夜隔離而住　天照大御神は火神の御族として崇重み給ふを須佐之男命の惡嫌給ふは此神は御母神伊邪那美命に崇坐る故なり其は火神を生坐しに依て御夫伊邪那岐命の御許を放坐て黃泉國に往行しければ其計りの御報は自然有けるなり然れども如此く轉囘して本に復り奉りては改り改りては事成り成りては世の資用と爲る二柱の皇產靈神の預鎔造給ふ御靈に依る事云も更なり　是後天照大神遣ニ天熊人ー往看之是時保食神實已死矣唯有其神之頂化ニ爲牛馬ー顱上生レ粟眉上生レ蠒眼中生レ稗腹中生レ稻陰生ニ麥及大豆小豆ー天熊人悉取持去而奉ニ進之ー　此御體より種々の物の化爲し事は火產靈神の御體に種々の物成れりしと同じ牛馬は農耕の爲に成り蠒は衣服の資と成れりし物なり此は其大較の尤けきを記せるにこそ有れ實には萬國に在と有ゆる衣食住の資料悉く此保食神の御賜物也かし古事記には故所殺神於レ身生物者於レ頭生レ蠶於ニ二目ー生ニ稻種ー於ニ二耳ー生レ粟於レ鼻生ニ小豆ー於レ陰生レ麥於レ尻生ニ大豆ー故是神產巣日御祖命令レ取レ茲成レ種と

有リ子時天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可ニ食而活一レ之也乃以ニ粟稗麥豆一爲ニ陸田種子一以レ稻爲ニ水田種子一又因定ニ天邑君一即以ニ其稻種一始殖ニ于天狹田及長田一其秋垂穎八握莫々然甚快也又口裏含レ璽便得レ抽レ絲自レ此始有ニ養蠶之道一焉と有て保食神の殺され給ひし故に其御功德全く成就整ひ竟て世に彰はれ給へり若て大御神の天上に召上給へるは顯見蒼生の食て活可き物をと所思し看から如此く高天原にて其事を始め坐り此時に殺され給へる保食神の御德を有ち給ひながら天上に昇坐て豐宇氣比賣神の御功德を彌々太く貴く物爲給へりけむ（火神土神の御孫と御在せば高天原に土着（マシ〳〵）て日神の御光に依て益々其功を弘め坐可き理を思ふべし此土にても世記に崇神天皇三十九年壬戌三月三日の下に今歲止由氣皇大神結ニ幽契ニ天降坐とも又外宮鎭座の事を云る下に皇大神第一攝神和魂ゑ賀宮乎波豐受大神仁奉ニ副從ニ者也など有るを考ふ可し）若て天照大御神天津宮にて大嘗の大御政を齋庭に行はせ給へり古事記には聞看大嘗と記し神代紀には新嘗と紀されたり此乃豐宇氣毘賣神の御功德の成整へりしかば顯見蒼生此を食て活けらむ事を所思して大御自先聞看し始給ふ事は云も更なり皇祖天神及此豐宇氣比賣神にも相嘗爲させ給へる物なり（大嘗會式に齋部にて祭神八座御歲神高御魂神庭高津日神大御食神大宮女神事代主神阿須波神波比伎神を祭らせ給ふ由記せり其内に御歲神庭高津日神大宮女神阿須波神波比岐神は後に成坐る神なれば皇御孫命の天降坐て筑紫の大朝廷にて祭らせ給へる例なるべし高御魂神大御食神は天上にて祭初けらし）若て須佐之男命は此保食神を殺給へるに依て荒振神に相変こり給ひて天照大御神に對奉りて顯見蒼生を慈愛み所思し看す大御心を挫き奉て食物は更にも云はず衣服住宅の事迄にも及びて妨奉られしなり然るは保食神の鼻口及尻より種々の味物を取出て奉られし其態を怪しく所思す御心進に依て其神を殺し給へる曲事に依て禍神の所を得たればなり（古事記に須佐之男命於ニ勝佐備一離ニ天照大御神之營田之阿一埋ニ其溝一と有るは食物を妨る也天照大御神坐ニ忌服屋一之時穿ニ其服屋之頂一逆ニ剝天斑馬一剝而所ニ墮入一と有るは衣服を害るなり於ニ聞ニ看大嘗一之殿ニ屎麻理散と有るは住宅を損るなり餘は此に准て知可し）是を以て天照大御神甚く怒生て天石屋戸を閉て刺隱り坐り此は保食神の御功德成整へりしかば顯見蒼生の食物衣服住宅の用に足はし給はむと試始給へる其御慈愛の御旨に違へれば如此く御怒坐るなり（大御身自の御怒ならぬ事は保食神の條に是物者則顯見蒼生可ニ食而活一之と詔給へる御命にて明亮なり須佐之男命は專此事を損害給へばなり）如此く在しかば世中は常夜往て禍事の極みなりしを高皇產靈神の御命以て思兼神に其招奉らむ御祈の事其を思得令め給ひて八咫鏡十握劒八尺句璁此三種の神寶を造作ら令め給ひ（此また皇御孫命の斷國に天降まして顯見蒼生を治め給はむ事の基本となれる甚奇異なる所以なり八咫鏡の大御神の御靈實と爲り十握劒は落下ニ須佐之男命の）御祈璽と爲て云々の謀を物爲さ令め給ひ

御許より天照大御神に奉らせ給ひ己命の御靈なも藏て熱田宮に鎭給ひ八尺勾玉は天地と日月と共に常在に天下所知看む御璽と爲て皇御孫命の同大殿の内に鎭坐て終古に君臣の大綱定り父子授受の人道此に依て立り三種神寶の事に就ては故大人等の說に大に異なり若て思兼神の御謀と大御神の深く遠く所思す大御心を取奉りて其御祈の事共は須佐之男命の損害給ふ食物衣服住宅の道を尙能く力を窮め心を盡して美好く調て献奉給へり此に依て諸部神各々御德を殊に有給ひて世に幸給ふ事起れりき譬へば石凝姥神は鏡を造給ふ方に御功を立給へるが鏡作神と爲給ひ手置帆負彥狹知神は新宮造りの事に御功を立給へるが木工神と成給へるなど凡て此禍事に依て然る御功德も立りきかし此食衣宅の資の内に食物を云はざるは前に大嘗の事有るに依て省き傳たりし物にて實には御膳は千頴八百頴に御酒は瓱上高知り瓱腹滿並て山野物は青菜辛菜何等に至迄に横山の如く置足はし積足はして捧奉けむ事云まくも更なり世中の神祭の事は凡て此天石戸の時に規矩定りたる事人の知るが如し食衣宅の三の中にても食物は殊に主と有る甚しき物なれば何よりも取別て此事を物爲可き事なり然るは此事共は主と豐宇氣毘女神の取賄給ひけむ大神宮儀式帳に供㆓奉朝大御饌夕大御饌㆒行事用物事と有る條に御贄淸供奉御橋一處石常一處大神宮正南御門在㆓伊鈴御河㆒當㆓此御門㆒流二俣也此中島爾造奉石疊常造宮使營作奉此止由氣大神乃入坐御坐也云々志摩國神戶百姓等供進鮮鮑螺等御贄乎机上爾備置弖云々止由氣大神乃御前爾跪侍弖則御河爾淸奉弖云々天照皇大神乃大御饌供奉と見えたるを思ふべし又御贄の魚も悉く豐受大神の主し召す事下に引る如く應神天皇の角鹿に幸る時入鹿魚を寄奉給へるに依て氣比大神を御食津大神と申し年中行事祕抄に引る高橋氏文に上總國安房大神乎御食都神止坐奉天云々と有も此神に在り此は海鱠の事なるに此神を祀ふ事由を考ふ可き者なり又豐受大神宮儀式帳にも大御神の御言に丹波國比沼乃眞名井爾坐我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉伎云々山田原乃下石根爾宮柱太知立高天原爾比疑高知氏宮定齋仕奉始支是以御饌殿造奉弖天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と有るを以て天上の御事を恐けれども思議り奉るべし衣服は長白羽神麻を種て青和幣とし天日鷲神津咋見神は穀木を殖て白和幣とし天羽槌雄神の倭文を織りて荒衣と爲し天棚機姬神の絹を織て和衣と爲し給へるなど此なり此も又先に天香山に桑木を種て蠶を養始給ひし事の有つるが此時に當りて大に成整るなり住宅は手置帆負彥狹知二神天御量以て大峽小峽の材を伐て瑞之御殿を作り兼て御笠及矛盾も此時に成り殿祭門祭の事に至まで玆に始れゝは此時に大成せりと云ふ可し此より先に大御神の大嘗聞食す大殿有り忌服屋有と雖も全く備り整へる事は此時に在り若此く世中の顯見蒼生の一日片時も缺く可からぬ食物衣服住宅の資用を各々神々の功德を窮め盡して招請されし故に天照大御神は天石屋戶を出給ひて終古に御照し坐す御光輝を彰はし給ひ豐宇氣比賣神の御稜威も彌々盛に成坐しなり若て須佐之男神は千坐置戶の祓を負せられ給ひしかば御心淸々しく成給ひて彼御誓の時に成坐りし男御子を大御神に奉給ひ大御神より女御子を賜はせる時に豐宇氣比賣神を所祭(イツキマツ)れと令給へる大御命有り神代紀に於是日神方知㆔素戔嗚尊固無㆓惡意㆒乃以㆓日神所㆑生三女神㆒令㆑降㆓於筑紫洲㆒因敎之曰汝三神宜降㆓居道中㆒奉㆑助㆓天孫㆒而爲㆓天孫㆒所㆑祭也と有

る此なり（舊説に所祭を本共に伊都加禮興と訓るは甚しき非訓なりと云れたるは然る事なり下に引る大同本記に併せて曉るべし此段の六十丁の處見る可し）若て須佐之男命御心清々しく成坐る後は永ふるに御父大神の御事依し坐る御旨を重みし奉らせ給ひ國土經營の御事に功德しみ坐る由は第六詞の下に云るが若く成るが國土人民を愛くしみ給ひて先に損害給へる事の御補ひ共有て凡世中に在ゆる食衣宅の用はしも此御神の御所爲に成れり（是を以て先には引替りて天下の人民を顯見蒼生と詔給へり此御一事を以ても萬事の御上を思ふ可きなり）食物の事は奇稻田比賣命を御后と爲給ふも個の事に用有ての御事なる可く又肥河にて酒を釀給へるも止事を得させ給はぬ事乍此も豐受大神の事始賜る事を此國にて起給へるなり豐受大神を酒を釀給へる事丹後風土記を見て知可し宇迦之御魂神亦名は大年神を以て稻穀を作る事に功を立令め給ひて豐宇氣比賣神の恩賜を蓄息しめ給ひ興津日子神興津比賣神を竈神と爲し阿須波神波比岐神に炎炊の事の用を調しめ給ふなど此なり大國主神少彦名神の天下を經營給へるも主とは田園を墾開き給へる事云も更なゝ事代主神の酒を釀し或は鳥遊漁爲給へるなど牧擧爲難し偖古事記中卷に角鹿の筍飯大神の入鹿魚を依給し事有り氣比は豐受大神に在す事上に記せるが如し是を以て稻穀菜蔬は更にも云す魚鳥畜獸に至まで人を養ふ物の限りは悉く豐受大神の御靈物なる事上に引る神代紀の文を考て知るべきなり又年中行事秘抄に引る高橋氏文海蛤膾の條に上總國安房大神乎御食都神止坐奉天と有も此神なる事古始太元考に云るが如し（倘御井神の井水を掌坐すなど種々の事共多かれど此には其大略を云ふのみ）衣服の事は青幡佐草比古命高麻山上に麻を殖給ひ紀伊國所坐三杜神等始て在田郡にて養蠶し給ひし所とて糸鹿糸殿の地名の遺れるなどを以て知可し（糸鹿は糸所にぞ有可く然れば糸殿と云も由有り又伊都部と云も有り）住宅の事は五十猛神木種を天より持降り坐て播殖して青山と爲し給ひ大屋津比賣命柧津姫命も其有功を祐給ひしなどなり（別て云はゞ五十猛神は木種を播殖給ふ事に有功を立給ひ大屋津姫命は屋作の事に有功を立給ひ柧津姫命は材木の事に有功を立給へるなり此三柱は紀伊國に座す）若此く須佐之男命保食神を損害給ひて食衣宅の資用成れるが天照大御神の顯見蒼生の食て活へき物ぞと詔給ひ天上に迎取給て其神の恩賴物を作り始給ひしを須佐之男命は譬ひ人を養ふ物にこそ有れ吾に饗せるは鼻口尻より出せる穢物なり然るを崇重みし給ふ事を異かる御事に思成し奉りて天照大御神の功しみ給ふ食衣宅の事を妨奉給しかば大御神は磐戸隱らせるに

思兼神の思慮に依て食衣宅の三資を悉く成就奉りて豐宇比毘賣神の功用を幽贊奉給ひしかば大御神の大御心大に和み給ひ其幣物に愛て給ひ祈事に感け給ひて出坐しけるが八百萬神等須佐之男命を責りて秡を負せ奉りしが其功驗に依て淸々しき御心に改らせ給ふに併せて三柱の女御子を給はせて豐宇氣毘賣命を所祭(イミキマツ)らせ御はし坐けるに依て彌々其御幸ひ御守を得給ひて此顯國の食衣宅の大凡は成整へりし也然しながら皇御孫命の天降坐む後の御設け顯見蒼生の爲なる事神代紀の一書に素盞嗚尊曰韓郷之島有二金銀一若使吾兒所御之國不レ有二浮寶一者未二是佳一也云々杉與櫲樟此兩樹者可三以爲二浮寶一檜可下以爲二瑞宮一之材上柀可三以爲二顯見蒼生奧津棄戸將レ臥之具一夫須噉八十木種皆能播生と有るを以て天照大御神の大御心を心と爲給ひ御父大神の御依しの如く國土經營の大業を統(スベシラ)領し給ふ御事を明らめ奉る可し（但奧津棄戸とは人の住宅を云へり瑞宮に對たるを思ふべし此を棺槨の事に云ふ非說は先師等と云へども取に足ず）若て大己貴命少彦名命に此國土經營の御事を委ねさせ給ふも其究ゐ所は顯見蒼生に食衣宅の資を生す基本を建立て安居令め給はむ料耳なり然れば豐宇氣比女神の神德を幽贊るの外に事無きを思ふべし然して少彦名命は常世國に渡坐しかば大國主神ぞ表立て此國の主宰と御在しけるに其豐宇氣比賣神を所祭り給へる須勢理比賣命の其嫡后と成給へる深き幽契の有る事とこそ所思たれ（如是く[illegible]揭有て世中の物事の成整ひ行く事は皇祖大神の天地を預啓造坐る御功德に資る事今云ふも事奮りにたれど餘りに奇異く靈妙なる御事と考徵し奉る我ながら漸く記留て後に見れば意表なる事共多かりけり）若て天照大御神須佐之男命の御正統と坐す貴御子に正哉吾勝々速日天之忍穗耳命御在るが此命此國土を前に依され奉給ひしかば豐受大神の御靈形又齋庭之穗をも受賜り坐し故に稻穗を以て御名に負坐り天津日繼の起元なり（天津日繼の御事は下に云ふ可し）然るに天之忍穗耳命天降り坐む大御束裝し發す時に天津日高日子番能邇々杵命を代て天降り坐しめ給へるが其時の大御命は皇祖天神より直に邇々杵命に傳させ給ふ趣なれど先に忍穗耳命に授させ給ふ御事依しなれば此命より瓊々杵命へ授け事依し給ふ事云まくも更なり御父子の御間を以授け受るに非れば天津日繼の御傳統の理に違へればなり然れば皇祖天神等に忍穗耳命相預坐て御天降の萬事は取擬ひ給ひける事決し（先師等も此事に深く力を入て說れざる故に世中に此事に心着る人は有りや吾未だ此を聞かず御父子の御間なる物を御父と坐ながら餘所(ヨソ)事の如く等閑に見て耳御在す可き由やは有る）古事記なる御天降ノ段

を登由宇氣神此者坐ニ外宮之度相ニ者也と有るは其御靈實を附屬し奉給へるなるが神代紀に天照大神勅曰以ニ吾高天原所レ御齋庭之穗ニ亦當ニ御於吾兒ニと有ると一時の事にて古事記には御靈實の傳を存して瑞穗の事を漏し神代紀には瑞穗の起元を記して御靈實の本緣を脱したる物にて此二つを合すれば此時の元由著明なり中臣壽詞に皇御孫乃尊波豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天天都日嗣乃天津高御座仁御座天天津御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依志奉弖天降坐之と見え大殿祭詞に皇親神魯企神魯美之命以弖皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐天津璽乃劍鏡乎捧持賜氐言壽宣志久皇我宇都御子皇御孫之命此之天津高御座爾坐氐天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八州豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止言寄奉賜比氐云々と有るは書紀の傳の詳説なり（此二詞に登由宇氣神の御靈實を云ざるは天津日嗣の御事に耳用有る文なるが故なり）如是く此國土はしも豐受大神の掌し看す衣食住の三の御恩賴に資奉らでは人民安居する事能はず又蕃息する事能はざるの中にも第一に稻穀に依る事なるが故に此瑞穗の事を詔賜へり是を以て齋庭の穗を賜はするに就て將來ユクサキの事を係て豐葦原之千秋長五百秋之水穗國とも豐葦原千五百秋之瑞穗國とも豐葦原乃瑞穗國とも呼イへり（此より先には葦原國と云しなり其は大三輪三社注進次第記に見えて第六祠下に引り神代紀御天降段なる第一の一書に天照大神勅ニ天稚彥ニ曰豐葦原中國是吾兒可王之地也云々葦原中國皆已平竟云々天照大神因勅ニ皇孫ニ曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也云々と有て此差異を甚能く記し別られたり）此瑞穗國を統御して天下百姓の貢賦を召上させ給ふ御事はしも天皇の宇宙に君主と御在し坐す符信シルシにして臣庶の階位を分別つ本緣なり崇神天皇御紀に十二年秋九月甲辰朔己丑始校ニ人民ニ更科ニ調役ニ此謂ニ男之弭ニ謂ニ女之手末調ニ也是以天神地祇共和享而風雨順レ時百穀用成家給人足天下太平矣故稱謂御肇國天皇也と有るを深く味ふ可きなり此意を熟く得られしと見えて記傳十四（三十八丁）に天津日繼の繼は借字にて正字給ツギなり其は天津日大御神の給寄し賜ふ物を受納知看すを天津日繼とは申せり給ツギ寄賜物とは即天下の百姓の奉進る諸の御都岐物にて（貢物を平義隆集に比都岐物と咏り借御都岐物の都岐も供給の意なり今の俗言に人に物を美都具と云ひ又物を都豆久流と云も本同じ借給とは上たる人より下なる者に賜ふに限れる如くも思ふめれど然に非ず下より上へ奉るにも云ふ故朝廷に奉進るをも美都岐とは云なり御調の事は卷五春日祭の下に云り）是即天照日大御神の天皇に給寄し賜ふ物なり借其種々の物の中には稻を主と爲りニ（大殿祭詞に天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾と續けたるは全天照大御神の給寄し賜ふ給を萬千秋の長秋に所知食との意なり中臣壽詞に天津御膳遠長御膳乃遠

御膳止千秋乃五百秋仁云々と有るは大嘗に就て申す故に由庭爾所知食と云ひ大殿祭は天下知看す凡ての御上にて申す故に瑞穂國乎所知食と云る共に其指物は同じ稻穂にて其中に主とし首と爲るは齋庭之穂也故神代紀には主とし首と爲る齋庭之穂を詔ひ寄して其中に天下の百姓の奉貢る稻又種々の御調物も皆兼含みたり○今云種々の御調物とは悉く食衣宅の資物を云ふなり此を以て豐受大神の恩賴の大なるを思ふ可し凡天下に在ゆる諸の品物多しと雖も其宛る所は性命を愛養するの器耳にて悉く食衣宅の資又食衣宅を得受るの用脚ならざるは無し

皇御國は稻に殊なる深き所由有て〔記傳十三卷豐葦原之千秋長五百秋之水穂國と有る註に皇御國は萬の物も事も異國により優れる中にも稻は殊に今に至る迄萬國に勝れて美好きは神代紀に天照大神勅曰以吾高天原所御齋庭之穂亦當御於吾兒と有る如く神代より深き所由有る事ぞ今世諸人斯在る愛き稻穂を朝暮に賜はりながら皇神の恩賴をば思奉らで由なき漢國の事を耳思扱ふは如何にぞや〕右の如く大御神の嚴重き大詔も坐て〔○今云神代紀中臣壽詞大殿祭詞等なり已に上に引り〕後世に至る迄も萬の政の有るが中にも大嘗を又無き大事と爲たもふ物ぞ然ればば天津日繼知食と申せば即天下知食す御事にも成れるなりけりと云れたるは實に確說なり此を以ても豐受大神の天照大御神に相亞て天下に二無く尊き御事を思奉る可し〔是を以て國を瑞穂國と云も豐受大神の殊なる御恩賴の自然に表るゝなり又天皇の天下知食す御事を天津日繼と稱奉るも豐受大神の御恩賜(タマモノ)に依る稱にて甚尊き御事なりかし神宮の古書共に豐受大神の相殿に皇孫爾々杵尊の御在す由なるは然すがに幽契有る事なり〕所以に大倭本記には天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神とは記申せり偖此大神また水取の御政の由に就て食物に和して煮熟る水を司し看す由有り〔但水の本體は罔象女神に御在す事云まくも更なり雲霧は天之狹霧神國之狹霧神雨水は高龗神闇龗神にて其を分配給ふは天之水分國之水分二柱神たり河海は水戸神綿津見神溪流は溝咋耳神溝咋比賣神流水は生井神醴泉は福井神井水は津長井神水取の事は天村雲命と各々掌る所有れば豐受大神の所治無きが如しと云へども委からず水の味を調へ人の飮食の用と爲し給ふ事は此神の預る處なり然れば豐受大神は水神ならず水の食用と爲る所を司し看すなり神宮の古書共に豐受大神を元氣水德の神と云ふ事所由無きに非ず然れども此に蛇足を添て或は御食津神は水德の名とし或は天之御中主神ぞ國之常立神ぞなと云ひて內宮の御榮を簒はむと爲る祕計は惡むべし然れど下に引る水取詞などは其妄書中の賜物なり上十五丁に云る三井瑞井の事考合す可し〕

廣瀨大忌祭に就て倭國六御縣の山口坐神に白させ給ふ詞に皇神乃敷坐須山々乃自口狹久那多利爾下賜水乎甘水登受而天下乃公民乃取作禮留奧都御歲乎惡風荒水爾不相賜汝命乃成幸波閇賜者と有て其說は其下に云るが若し〔山口爾坐皇神等とは第二詞の下に云る若く羽山戶神娶二大氣都比賣神一生子云々と古事記に見えたる此なり大氣都比賣神は此神の分身の神なる由已に上に註り神祇令大忌祭の義解に欲レ令下山谷水變成二甘水一浸二潤苗稼一得中其全稔上故有此祭と見え廣瀨社緣起に若宇加乃賣命伊勢外宮分身也是則水門神也以二一水之德一養二萬品之生一五穀靈神也と見えたり倘此事は大忌祭詞の下に委しく合せ說く可し〕又大同本記の水取詞に豐受宮御井神社右御井水者天孫降臨以來天村雲命理二治于虎珀之鉢一天降留宅也皇大神皇孫之命天降坐時爾天村雲命乎御前立天天降仕奉于時皇孫之命天村雲命乎召天詔久食國之水者未熟荒水爾在介利故御祖神之御許爾參上此由言天來止詔即天村雲命參上豆天孫之御祖之神之御前爾皇御孫之申上事乎子細申上時爾御祖命神議詔久雜爾奉牟政者行奉下氏有度毛水取政道乎波遺天天下甚飢餓久有介利何神乎加奉下牟登思間爾勇乎志天參登來

度詔天天忍石乃長井乃水乎取八盛天誨給久此水持下弖皇大神乃御饌爾八盛獻天遺水波天忍石井止稱云天食國乃水爾灌和天朝夕御饌爾奉獻禮又御伴爾天降仕奉五部神卅二神八十支乃諸人爾毛斯水乎令飲止詔給天下奉支即日向高千穗宮乃御井宗崇居焉奉仕矣自爾以降但波魚井石井鎭移居奉仕支其後從魚井乃原遷于止由氣宮居止焉二所皇大神乃朝大御氣夕大御氣度八盛移居每日二時供進矣と見えたる如く御鎭座傳記に酒殿神云々丹波國與謝郡比沼山頂有レ井其名號ニ麻那井一此處居神則竹野郡奈貝社神是也故豐賀能賣神靈石座也と有れども考ふ可し又丹後國風土記にも比沼山頂有レ井其名云ニ麻奈井一今既成レ沼此井天女八人降來浴レ水云々と有るは豐受大神に隨奉る神等の守り居し事を傳たるか　天忍石井水の豐受大神に附屬せる狀を以て上なる大忌祭詞に對考ふれば實に飮食の用と爲るは全く此大神の御靈實に添て天降來れるなり然れば皇國の地獨此瑞穗の美好き耳ならず井水の清澄にして然も甘味を含む事萬國に比す可き者有る事無し然れど此時の故事の有けるに依て萬國共に皇國の如くは非れど清水を用ふる事と爲れる事齋庭之穗の皇國に降りて萬國に滋蔓せると同じ事なり豐受大神の靈威萬國に彌綸せり然れども古傳無き國は知る事能はず憐むべし　此迄は食物の事の大較なるが穀肉菜菓は云も更なり井水海鹽に至まで悉く此神の恩賴に非ずと云ふ事無し此よりは衣服の此大神の御恩賴に成れる所以を云ふべし其は神代紀保食神段に眉上生レ蠒云々又口裏含レ蠒便得レ抽レ絲自此始有ニ養蠶之道一焉と有る此にて神名祕書に引る機殿儀式に皇大神御ニ坐高天原一之昔殖ニ桑葉於天香山一以テ所ニ養蠶一之御糸ヒと有ると同事なれば此一を以て其余を准へ知る可きなり平田翁の玉襷にも穀木は桑の類木なれば更なり麻も何も和衣荒衣に物爲る料は皆草木の屬なれば皇國のは更なり其原は外國より貢奉れる木綿などいふ物にも有れ豐受大神の分靈神等の御德に依りて成れる事疑無し其は總て神等皇國には生坐せれど其御幸は萬國に及べばなりと樣に云れたり　古史徵三に神代紀に稚產靈此神頭上生ニ蠶與一桑臍中生ニ五穀一と有る稚產靈神に保食神の御胤なるを此神の體に種々の物の生れると云はる御祖子の國にて給たる傳なる事疑無しと云れたるは信に然なり倚上の事を神祇本紀にも其傳を擧て乃是絲織之業者也と有り　尙御鎭座傳記にも調御倉神宇賀能美多麻神座云々亦號ニ大宮都比賣神一亦名保食神神祇官社内座御膳神是也亦神服機殿祝祭三狐神同座神也云々と有るを以て衣服の全は豐受大神の當坐す御事を註る可きなり　丹後國風土記に天女の衣裳の事を云るは此大神の故事なるも衣服に御靈を幸給ふ事を心得違へたる杜撰なるべし然れど衣服に由有る一證には成れり　倭文人の家居は木を以て作り萱にて葺くが神代に始給へるが本製にて其木萱共に豐受大神の分靈に賴て出來る物なり其は古史徵二三十七丁に云く木神久々能智神草神鹿

屋野比賣神共に豐宇氣毘賣神の分御靈に坐なり〇但幸御魂に坐なりと云れたれど此は依難し其幸魂奇魂の事は第三詞の下に粗云へり大殿祭詞に皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿汝屋船命爾天津奇護言以氐言壽鎭白久此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美下津綱根波府虫能殃無久高天原波青雲乃靄久極美天乃血垂飛鳥乃禍無久掘堅多留柱桁梁戸牖乃錯動鳴事無久引結幣留葛目能緩比取葺計留草乃噪無久平氣久安氣久奉護留神御名乎白久屋船久久遲命是木靈也屋船豐宇氣姬命登是稻靈也云々御名乎波奉稱利氐と有るを熟思ふ可し掘堅多留柱桁梁戸牖乃錯動鳴事無久と云るは木神久々能智神の幸賜ふ功德に係り引結幣留葛目乃緩比取葺計留草乃噪無久と云るは野神草野姬神の幸賜ふ功德に係れり其餘の文は屋船命と申す名の凡ての功德に係れり然るを草野姬と云ずて豐宇氣姬命と云るは如何と云ふに此神實に稻穀を生給へる神に坐を餘草をも生し給へるは其分御靈の御業なる故に此は其本御靈の名を以て云るなり又稻も萱も共に草なればも取統ても云ふべし殿造には草は木に亞て止事無き物故に其事を斯く委曲に言壽奉る事なるに草野姬神を祭給はぬ事の有めやは上文に唯屋船命と申せるは御殿の御魂を都て云る御名にて其は御殿は本と草にて造ればなり下文に屋船久々遲命屋船豐宇氣姬命と云るは木草の御靈を別て云る物なり御鎭座傳記に屋船命と有る下の註に木靈久々能遲命稻靈豐宇氣姬命也と見え御鎭座本記にも屋船命草木靈とも和久產巢日神子豐宇賀能賣命屋船靈神也とも見え奧儀抄に保食神宅神とも見ゆ此等の傳何れも實事の旨に符へる物なり此説の確乎として拔可からざるを以て尙思ふに右の大殿祭詞に詞別白久大宮賣命登御名乎申事波皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氐參入罷出人能選比所知志神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氐皇御孫命乃朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒襁懸伴緒乎手躡足躡不令爲氐親王諸王諸臣百官人等乎己乖々不令在邪意穢心無久宮進米進宮勤々之米氐咎過在乎波見直志聞直坐氐平良氣久安良氣久令仕奉坐爾依氐大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久登白と有るは屋船命と申すに對て其御殿内に在る事を守護り坐す御名にて別神には非ず豐受大神を稱申せる也其は結文に大宮賣命止御名乎稱辭竟奉と有るにて著明也此事三詞大宮乃賣神の註に委しく云り偖此御名どもの御靈を都て豐受大神と申奉るが上にも云る如く天照大御神と須佐之男大神と御誓の間に成坐る高光る日御子の御統をしも天下知食す天皇と天津日嗣高御座の大御位に即せ給ひて天下萬國を經綸給ふ御職と成せ給ふ御事はしも豐受

大神の恩賜の食物衣服住宅の資用を過不及の差ひ無く配當給はむ料に平均の御制令を敷行せ給ふ御政事の外無き正旨なり又天下の兆民は其食物衣服住宅に安居せむ爲に各々其職業を稟受て脩り理め固め成して今日有所成來日有所不成の賦命を保護ち各自の德を受賜はる可き筈なり此古今の差なく萬國の別無く須臾も離る可からざるの道なり此德を踐行くを正とし常とす此爲に天皇の御政有り此德に反するを邪とし變とす此爲に朝家の刑罰有りて天津日繼の御上悉く豐受大神の御守護に依る所なり天照大御神の此上無く此大神の崇重給ふ御事所由有る哉（修理固成の實理は第六詞の下に委しく云り立返りて見合す可し人倫の大本此食衣宅に依りて善惡正邪の論も亦此に依て起る物なり）又三柱の女御子を天降し給ひて此大神に仕奉らせ給ふ御事も此御子等の大國主神に御婚坐て其大神の幽冥事知食す御上に就ても顯幽の違こそ有れ天下人民の上を治給ふ御事業は等しければ必斯く有可き御事にて是も其極りを云へば悉く天皇の御爲にして天下人民の爲なる事云まくも更なり神代紀に汝三神宜降二居道中一奉レ助二天孫一而爲二天孫一所祭也と有るに心を潛む可き物なりかし（此三女神の中に市杵島姫命と申すが御在るも此豐受大神を齋祀らせ給ふに依りてなり）偖此大神の天降り坐る事古事記に次登由宇氣神此者坐二外宮度相一神也と有て天照大御神の御靈實と共に皇御孫命の御天降の度に天降らせ給ひけるが上にも云る如く淡路國三山嶽に着せ給ひて其後に丹波國與謝之郡比沼山頂麻井原に遷らせ給ひ與佐宮まで以上六所に遷幸有て鎮坐けるを（此は已に上十五丁に元々集を引て委しく記せるが神祇本源にも天地麗氣記を引て此事有り然れども共に兩部習合者の所爲なれば信には委く依難き事多かり其去取無くば有るべからず然れど豐受大神の天降坐る年を庚申歲と記せるなどは正說にて師の弘仁曆運記考に考記されたる趣に妙に契合せれば必其頃迄慥なる傳說の有し物なるべし）偖崇神天皇の御世に天照大御神の其國に幸行す迄の間は顯には天皇の御祭とし誰人にも有れ其國人此を祭奉り幽には三女神等の仕奉り御在し丶なるが今般は大御神の幽契有て行幸し御事なれば豐受大神の御靈も天上より降らせ給ひて御饗奉らせ給ひけむ此故に三女神の現形し給ひて仕奉給ひ等種々の奇異なる事共有りし故に上十六丁に云る如く神宮の古傳には遺れりしなる可し（此等の事を作物語の如く心得るは神典の學を以て口實と爲と雖も其精義神に入るの道紀無き輩なれば云ふにも足ぬ事なり此大御神の御遷幸の奇異なりし樣今を以て誣可からず）若て天照大御神は國々を經て垂仁天皇の二十六年と云ふに伊勢國五十鈴宮に鎮坐しを豐受大神は猶丹波國に留止り御在して丹波道主命の裔に齋れ御在し丶を雄略天皇の大御世に至て天

照皇大御神の御諭言有共は已にも引る豐受大神宮儀式帳に天照坐皇大神云々大長谷天皇御夢爾誨覺賜久吾高天原坐氐見志麻岐賜志處爾志都眞利坐奴然吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食坐故爾丹波國比沼乃眞名井爾坐我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支爾時天皇驚悟賜氐即從ニ丹波國ニ令行幸氐度會乃山田原乃下石根爾宮柱太知立高天原爾比凝高知氐宮定齋仕奉始支是以御饌殿造奉氐天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と有此にて此同御諭言を神宮雜例集に引る大同本記には吾高天原爾在時素盞嗚尊乃十握劒乎索取三段打折氐所生三女神乎宇佐島爾降居道中奉助天孫而爲天孫所祭止詔之須勢理姬乃齋奉禮留神今丹波國與謝乃比沼乃眞名井坐氐道主王子八乎止女乃齋奉御饌都神止由居乃神乎吾坐國欲止誨覺給支と見えたり 但此は古史徵三の五十一丁に引れたる文に據れるが其說に曰く大同本記の全書は今傳はらず此は神宮雜例集に引るを採れるなり須世理姬乃齋奉禮留の九字無き本も有れど今は一本に依れり度會延經神主の神名帳考證に丹後國余佐郡須代神社の下に大同本記云素盞嗚尊所レ生三女神奉助天孫而爲天孫所祭止詔之神丹波國與佐之郡比沼眞名井坐須勢理姬と引るは予が見たる本と文の體少異なり然れど須勢理毘賣命即三女神に坐す事の狀は違ふ事無し已に十六丁の下に云る若く須世理媛命は幽より此大神を齋り御在るが故に人間には知れ給はざりしを幽より大御神の身行したる狀を以て御諭言は有けるなり此御遷幸の事を神祇本源に引る神記に泊瀨朝倉宮御宇天皇二十一年丁巳十月朔倭姬命夢教覺給久皇大神吾如天之小宮坐爾天下仁志氐毛一所爾坐不御饌毛安不聞爪丹波國與佐之小見比沼之魚井原坐道主子八乎止女乃奉齋御饌都神止由氣皇大神乎我坐國欲度誨覺給支于時大若子命乎差使氐朝廷爾御夢之狀乎令言給支即天皇祥御夢則天皇今日相夢矣 此傳に依る時は倭姬命の御夢に先其御諭言有て朝廷に奏上給ひけるを天皇も云々の御夢の事有て當日夢合せ爲給へるなり上に引る儀式帳の文此なり御紀には此事共を記し漏されたりけるを甚愛き賜物なり從ふ可し雜事記に景行天皇即位廿八年戊戌九月十三日差ニ使五百野皇女ニ奉レ令ニ戴祭伊勢天照坐皇大神宮ニ也齋內親王供奉之始也と有れば齋王は此時に交代らせ給ふが如くなれども倭姬命は尚此御世まで御在して皇大御神は仕奉給ひしなりけり 天皇勅ニ大若子ニ使ニ罷往ニ氐奉ニ布理ニ宣支今歲物部八十氏之人等牽ニ手置帆負彥狹知二神之裔ニ以ニ齋斧齋鉏等ニ始採ニ山材ニ構ニ立寶殿ニ氐 雜事記にも雄略天皇即位廿一年丁巳天照坐伊勢大神宮乃御託宣偁我食津神波坐ニ丹波國與謝郡眞井原ニ須早奉レ迎ニ彼神ニ可レ奉レ令レ調ニ備我朝夕御饌物ニ也託宣賜既了仍從ニ眞井原ニ奉レ迎天伊勢國度會郡沼木鄕山田原宮仁奉鎭給倍利今號ニ豐受大神宮ニ是なりと見ゆ然れば此天廿一年の御託宣の事は縱ひ御紀には記されず共正なり 明年戊午秋七月七日以ニ大佐々命ニ從ニ丹波國余佐郡眞井原ニ之氐奉迎止由氣皇大神度遏之山田原乃下都磐根大宮柱廣敷立天高天原仁千木高知理氐鎭理定理座止稱辭竟奉支と有 此迄の文御鎭座本記に大較同じ但此一段は大佐々命の丹波國に赴れし時其布理奉らるゝ由を奏されし詞也 御鎭座本記にも此文を記れて其續きに明年戊午云々以ニ大佐々命ニ奉ニ布理ニ留共從神中臣祖大御

食津臣命小和志理命事代命佐部支命御倉命屋和古命野古命乙乃古命河上命建御倉命與玉命各前後左右爾相副從奉仕延佳神主の頭書に大佐臣命者彦和志理命之二男也大御食津臣命者天兒屋命四世孫宇佐部支命之子也小和志理命者天牟羅雲命之裔爾佐布命之二男也事代命者爾佐布命之三男也佐部支命者阿波羅波命之一男也御倉命者彦和志理命三男也屋和古命系圖未レ考野古命者阿波羅波命之三男也乙乃古命者阿波羅波命之四男也河上命系圖未レ考建御倉命者中臣祖也與玉命者宇治土公祖神也大田命同神歟と有り偖大御食津臣命は遙に上代の人なれば此事に預る事疑しきに似たれど然らず大御食津臣命と名に負坐るを思へば長生して此大神に仕奉り居られしならむ又與玉命は大田命なるに此度に仕奉られしを思ふに二人共に已く幽冥に入れりし人なれども此事無き由有て現形爲られしも知る可からず 大佐々命小和志理命奉レ戴ニ正體ー輿玉命道主貴奉レ戴ニ相殿神ー相殿神は皇御孫命一柱に坐り與玉命の戴奉られしは御天降の度に猿田彦神の奉導し由に依るか 駈仙蹕比錦蓋覆日綱曳 天御翳日御翳 屏奉行幸爾時 若雷神 天之八重雲乎 四方爾 薄靡天爲御垣天從ニ但波國吉佐宮ー遷ニ坐倭國宇太乃宮ー御一宿座余佐宮より倭國宇太乃宮まで 行程凡五日路計りも有ぬへし古事記玉垣宮段に圓野比賣命の京より丹波國に還給ふ順路の山代國相樂より弟國に到坐るを以て案ふに上古よりの往還なるべし此を以て推すに丹後國より丹波國氷上郡多紀郡桑田郡を經山城國乙訓郡宇治郡相樂郡より大和國に遷り添上山邊城上の三郡を過りて宇太乃宮には行幸しなるべし丹波國氷上郡伊都伎神社式に見え同國多紀郡櫛石窓神社二座と有る社傳に伊勢大神の此より移し〻由を傳へ後に今京に成てち齋主の嵯峨野に齋爲給ひ又其群行も其豐受大神の御遷幸の跡を遂へす物爲させ給ふなどを思ふべし尚能く正さま欲き業なりかし但此宇太乃宮は前に皇大御神の座りし宇太乃阿貴宮なる可し 次伊賀國穴穗宮御ニ宿坐于時朝夕御饌箕造竹原幷箕藤黑葛生所三百六十町亦年魚取淵梁作瀬一處亦御栗栖三町國造等貢進仍ニ所皇大神之朝大御氣夕大御氣之料所爾定給支儀式帳に皇大御神の伊賀穴穗宮に坐し由見えたれば此と同宮なりけり偖此三百六十町は神田には有る可からす此趣を以て見れば藤原野山などなりけらし大神宮式に神田伊賀國伊賀郡二町封戸伊賀國二十戸と有是也 次伊勢國鈴鹿神戸御一宿皇大御神の行幸りし鈴鹿小山宮なるべし 次山邊行宮御一宿今號ニ壹志部稻家村ー是也○萬葉集一卷に和銅五年壬子夏四月遣ニ長田王于伊勢齋宮ー時山邊御井作歌山邊乃御井乎見我氐利神風乃伊勢處女等相見鶴鴨と有る山邊御井は必此なるべし御井の名高在しも豐受大神に由有り 次遷ニ幸渡相沼木平尾與于行宮ー 天三箇月坐焉 號今處天名ニ離宮ー也 夜々天人降臨而供ニ神樂ー今世號ニ盤明ー其緣也 來目命裔屯倉男女小男童神宴焉離宮は延佳神主の書入に今號ニ高河原ー社祭祀之と有り夜々天人降臨而供ニ神樂ーと有るは人世に奇怪なる事の有るべくも非すと思ふは未し凡て大御神宮度會宮ともに御遷幸の時は幽より神等の現形給ひて顯に足はぬ事共を功しみ給ひ且は顯に知られぬ神祭共を行ひ給へば必如此有るべき物にこそ思ひ定たれ 戊午 九月 望 從ニ離宮ー遷ニ幸山田原之新宮ー奉鎭御船代御樋代之内樋代則天少宮之日座儀也實謂ニ天御陰日御陰隱座ー視ニ此緣也船代則謂ニ天材木屋船之靈ー故瑞舍名號ニ屋船ー緣也天御翳日御翳隱坐古語也○樋代は日宮の由船代は御舍の由なり 以ニ天衣ー奉レ飾レ之如ニ日少宮之儀ー也日少宮は古始太元考に注る如く天極紫微宮なるが其は豐受大御神の常宮と寂然に靜り在す神域日宮は天津國にて豐受大御神の宇宙に御恩賴を幸給ふ本宮なれば此なる大宮も其を摸擬せりとなり 依天照大神御託宣御鎭座本緣に于時豐御子白倭姬內親王ニ宣給是也と十四字の細註有り 大神第一攝神多賀宮伊弉諾尊洗ニ右眼ー因以生名號ニ伊吹戶主神ー即大神分身坐故亦名ニ大神和魂ー也 奉レ傍止由氣宮也此事多賀宮の條下に委しく云ふ可し且上二十口丁にも此に就て云る事有り考合す可し 亦天照大神御託宣相殿坐神ニ前止由氣宮相殿神皇孫命爾奉陪從留故號ニ止由氣宮相殿ー而東西座東天皇孫命一座西天兒屋根命靈形笏天津賢木執劍坐太玉命靈形瑞曲玉坐但東御靈常西相殿並座給也云々○笏は天石戶段の笏扣子の御なり天津賢木は天津神籬

なる可し瑞曲玉は彼八尺瓊なり 自レ介以往以二天手力男神萬幡豊秋津姫命一天照皇大神乃爲二相殿神一座（元是戯二御戸開神一也〇此事上廿五丁に委しく云りき）と見えたり倭御靈實の事は上十丁に云る如く眞經津鏡に御在り御鎭座本記に御形靈鏡坐仕昔天鏡神鑄造三面眞經津鏡是也と有にて炳然し天鏡神は同書に鏡作神名號二天鏡神一と見えたれば決く石凝姥命の作なり然も有らば古語拾遺に初度所鑄少不レ合レ意と有るは必二面にて其一は紀伊國日前大神に坐し其一は此豊受大神の御に坐して其に次度所鑄其狀美麗と有るは天照大御神の御に計合(カナフ)れば都て三面にて大倭本記に天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面と有る數に合(カナ)ひ天德御記及其餘の古書に内侍所なる御圖象の御を三所と記せるにも叶ひて滯る所無し倭姫命世記に豊受大神元丹波國與謝郡比沼山頂麻奈井原坐御饌都神御靈形眞經津鏡坐圓鏡也神代三面内也と有るぞ證據なる（然るに神宮の書共には此三面と云ふに就て強て據も無き名共を儲けて三面の數に充たるは甚忌はしき言なり然れども天より傳る所は三面なる由に云るは然すがに美たゝ且豊受大神の御を眞經津鏡と記せるなどは決めて古傳にして神代紀より八咫鏡と眞經津鏡とを混らして分明ならぬを訂正可き眞文にて甚美たし且八咫鏡は八頭(ヤアタ)鏡眞經津鏡は圓縁(マフチ)鏡と云ふ事にて其形容に就て號たる物なり心を平にして考ふ可し）若て皇孫天津日高日子番能邇々杵命も元より豊受大神の相殿に御在りしなり上に引る御鎭座本記に興玉命道主貴奉レ戴二相殿神一と見え又天照大神御託宣相殿坐神二前止由氣宮相殿神皇孫命鬧奉陪從留と有にて知れたり然らば何時より然ならむと考ふるに已に註る若く天照大御神より齋庭之穗を賜りて天津日繼の御業を始て定給へれば豊受大神の御德は此皇御孫命に彰れさせ給へば殊に御因み厚く御在る事云まくも更なれば然る幽契に依りて始て彦火々出見命の御代よりぞ豊受大神の相殿神とは成奉り給つらむ又皇御孫命の荒魂も御在り御鎭座本緣に皇孫天津彦々火瓊々杵尊御靈形金鏡坐也二面之内一面是也今一面是皇孫荒魂御靈形也（御鎭座次第記にも相殿三座左一座皇御孫命御靈形金鏡坐大西小東以レ西爲レ上同御船代内座是神代靈異物也以二二面一爲二一座一是神代靈異物也道主貴奉齋神是也大物忌内人奉仕其縁也と有二面爲二一座一に神名式にも度會宮四座相殿坐神三座と有て皇御孫命と荒魂とを一座とし天兒屋命天太玉命を二座として合せて三座なれば朝廷よりは一座と爲て祭らせ給へるなり神宮秘傳問答に瓊々杵尊荒魂を天上玉杵尊と申て同御船代に一座にして御神靈の御形は二靈御在す此を五神西座の秘事と云と有り道主貴奉齋神是也と有るは豊受大神と共に丹波道主貴命の祭祀り御在りとなり延佳神主の說に今世遷レ之時大物忌父奉レ戴二東相殿正體一之由然と云るは然る言なり其は道主王の子八乎止女は此大宮に仕奉る大物忌の始たればなり）又天兒屋命天太玉命の此相殿に坐す事は上に條々云る如く天照大御神の御託宣に依て皇御孫命に奉傍しめ給へる物なり其は御天降の時に此二神に詔言給へる大御神の御言を古事記に思金神者取二持前事一爲レ政と

見え神代紀に天兒屋命太玉命惟爾二神亦同侍ニ殿内一爲ニ防護一と見えたる如く此二神は幽には大御神に仕奉り顯には皇御孫命に仕奉る事天上の儀の如く物爲可き御定なるが故に天より降坐し時も御靈實と現御身と二軀つゝにて天降給へば皇大御神の御方にも親昵く皇御孫命にも親昵く御在るを以て皇御孫命の神上り坐る後は二神も天に神上り坐て現御身にて御在し坐し間の復命を聞え上給へりし故に其御靈實耳皇大御神に副從ひ奉給しを今般は皇大御神の御託言に依て皇御孫命の御方に御靈實にて移り奉仕り給へる物なり　倍思金神は天兒屋命の御事なるが古事記には太玉命を脱されたり古語拾遺には宜下太玉命率ニ諸部神一供ニ奉其職一如ニ天上儀上と有て天兒屋命を脱せり此彼校合せて知る可きなり　倍天兒屋命の御靈形を御鎭座本記に笏天津賢木執副坐と見え御鎭座傳記には御靈形笏坐是即天磐戸開之時天兒屋命祝詞啓之笏也と見えたり但師説に笏は拍子の笏にて御鎭座本記に木々合々而備安樂之聲と見えたる此神物を御靈形とは爲給へる物なり　御鎭座次第記にも此事を記して天兒屋命靈形笏坐牙像也珠玉一隻賢木二枝坐天石戸開之時天兒屋命捧持祝詞敬拜鎭祭笏賢木是也と有る笏坐牙像は笏の化石と成たるが牙の如く堅固なりとの儀なるべし珠玉一隻は次なる太玉命の璽より混れたるべし倭姫命世記に笏坐と有るが正説と通ゆれば決く錯亂なり又賢木は齋鎭奉らしゝ時に刺立し天津神籬なるべし經佳神主の説に按天岩戸開之時天兒屋命捧ニ持笏賢木一之由神代久遠也非ニ金石一何存矣但天石戸以下二十二字後人加筆歟と云り然れども皇天の神物縱ひ金石に非ずとて終古に朽廢る可きならねども此は天石戸開の度のにには非る可し　又太玉命の御靈形は御鎭座本記に瑞曲玉坐と見え倭姫命世記には寶玉座と見えたるにて炳焉し　然るを本縁また傳記などに御靈形八坂瓊之曲玉奉レ藏ニ寶宮一也是即天石戸開之時天太玉命奉レ懸ニ眞賢木枝一之玉也と有るは疑はし眞賢木枝に懸奉りしは皇御孫命の大御許に齎れ御在坐す天津璽なるを此に混らし傳たる物なり然れども天兒屋命の御に准へて思ふに此も彼時に出來りし物也けり　○別宮多賀宮御事は神名式に高宮（大月式　新嘗）と見え伊勢大神宮式にも多賀宮一座（豐受大神荒魂去ニ神宮一南六十丈）と有て豐受大神の荒魂と御在す事相違無き證文なるに上に引る御鎭座本記に皇大神第一攝神多賀宮奉傍止由氣宮也と見えて其多賀宮は師説の若く皇大神の和魂なるに豐受大神の荒魂と云ふ事少か心行ぬ樣なれど其は神幽の秘蘊に得索隱ぬ龐説なり實には皇大御神の和魂宮に豐受大神の荒魂を令坐奉給ひて御力を戮せ給ひ御心を一に給ふ御事にて豐受大神は世間の食物著服住宅を守護給ふ甚も止事無く貴き大御德を有たせ給へば其御荒び共の有むには顯見蒼生の苦瀬に惱めらむ事も有むと思慮給ひて天下千萬國人の爲に辱くも大御神の和魂を傍奉り給ひて其御心を執申させ給ふ御事なり　倚第一卷なる第三詞の下に委しく云るを見合す可し荒魂と和魂と力を合せ給ふ例は大倭神社註進狀に大己貴命荒魂與ニ和魂一經ニ營天下之地一と有る此なり其他にも佗神と力を合する事神典に許多なれは今云はず　神宮の古書共に天照大御神と豐

受大神と豫結ニ幽契ーと有るは此事なり第三詞第六詞の下に云る如く荒魂は物を成すの御靈和魂は事を務るの御靈なるが故に此二靈に合ひて修理固成の妙用活機大に遂る事を得て益々其德を施し有所成より有所不成を補綴し皇祖天神の賦命を全く備る世間の常道なれば皇大御神も深く其事を所思し坐て豐受大神の荒魂に已命の和魂を傍奉給ひて其御靈を留め鎭め給ひ其御德（ミサチ）を彌々貴く在しめ給はむとの神量にて其歸る處は天皇の御爲顯見蒼生の爲に物爲させ給ふ御事にて辱しとも尊しとも云ひ知らぬ御事なりかし但如是く皇大御神の和魂を傍奉給へば皇大御神の御方には荒魂のみ御在むかと云ふに然らず多賀宮に齋れ給へる和魂をこそ傍奉給へれ全體の和魂は荒魂と共に皇大御神の御許に在して各々其御德を施し御在す事云まくも更なり 然れば天下蒼生の朝夕に御蔭蒙る豐受大神の御靈も云ひ以て行けば事の極は皇大御神の大御心にて其御守護に就ても御力を傍させ給ふ事にて此を物に譬るに草木の應に生むと爲るに日光を資ざれば生出さるが如く又生育爲ざるが如きなり此理を以ても天照皇大神豐受大神と幽契を結給ひて天下に其御德を布施し給ふ御事を恐けれど思測り奉るべし 是を以て天照皇大御神の和魂は幽に立ち給ひ顯には豐受大神の荒魂にて齋れ御在す御事と定り給へり故大神宮式に多賀宮一座豐受大神荒魂と記され倭姬命世記にも多賀宮一座豐受荒魂也と記せる如く其御祭典は一柱にて享給ふ事上に云る如き所謂に依ればなり 豐受大神の相殿に坐す皇御孫命も荒魂と並び御在れど其御祭典は一柱にて預給ふ事上に云るが若し然れば予が常にも云ふ事なるが式内の神社に何座と有るは官より祭祀らせ給ふ座數にて實には帳の如くなるも有るべく又帳外に幾座も併せ祭るも有るべければ社傳等に依て知る可き事なり然れども其社傳と云ふ物多くは後人の僞說多ければ又漫りには依難き物なり 借豐受大神に傍奉給ひて其荒魂に幽契を結給ひ御力を合せ給へる天照皇大御神の和魂はしも御名を神直日神とも大直日神とも申せり其は倭姬命世記に多賀宮一座豐受荒魂也と有る下に脫文有て其次の文に大御神の和魂の御事を伊弉那伎神所生神名伊吹戸主亦名曰ニ神直日神大直日神ー是也と有る此正說なり 但多賀宮一座豐受荒魂也と有る下に脫文有るべしと云るは伊非那伎神所生神云々は皇大神の和魂の御名を記し彰せるなればなり何にも爲よ豐受荒魂也迄は一段の文なれば其下に挹さるなり記傳及大祓詞後釋にも此文を引て是を豐受荒魂也と云るは心得ずと云れたれど此條理を解分られざりしが故なり又古史徵にも此事を疑ひて豐受荒魂也と有るは決めて皇大神和魂也と有しを書改たる物なりと云れたれど上件の子細を熟く心得ざる故の僻說なり 倍此多賀宮の御鎭座は豐受大神より先立て垂仁天皇の御世に皇大神の五十鈴宮に鎭り座る度なり倭姬命世記に天照大神並荒魂和魂宮止奉鎭也と見えたるが如し然ば多賀宮の御事を荒祭宮に對へて和魂宮と稱せりしを雄略天皇の御世に豐受大神の度會宮に鎭り坐る時に豐受大神の荒魂を皇大神の御託言に依て多

賀宮に齋鎭奉らしゝかは或は皇大神に係て和魂宮と稱ひ豐受大神に係て豐受荒魂宮と云ひけむを朝廷には豐受大神の荒魂と云ふ說耳傳はり神廷には元因に依て皇大神の和魂宮と傳りし物なり寶基本記に荒祭宮高宮者所謂荒魂宮和魂宮是也と有るを以て當昔の狀を思ふべし然ればこそ神宮の古書にも豐受荒魂也とは記しながら伊非那岐神所生神名伊吹戶主亦名曰二神直日神一是也とは傳はりたるなりけれ○大前爾白久此大御神を除ては諸祝詞ども皆唯に前爾白久と云るを此に大前としも申させ給ふ事は殊に深く崇重奉給へる物也於保麻幣さ訓む可し字を太に作りて布登麻幣と訓るは今本の誤なり古事記朝倉宮段歌に多禮賀意富麻幣爾麻豆須と見え遠飛鳥宮段人名に大前小前宿禰と有るなどを思合す可し古語拾遺に天照大神者惟祖惟宗尊無ν二因自餘諸神者乃子乃臣誰能敢抗と見えたる如く天照日大御神に大座坐せば天地の間に二無く尊く畏く御在との義なれば其御禮典も御崇敬も自餘の諸神には實に超越させ給御事なるが故に古事記中卷日代宮段には倭建命參二入伊勢大御神宮一拜二神朝廷一とさへ記されたるをや倭姫命世記にも天照皇大神宮者天神地祇之最貴者也我國家神物靈蹤今皆觸ν事有ν効不ν可ν謂ν虛焉と記せるも拾遺の旨に同し建曆御記に凡禁中作法先神事後佗事旦暮敬神之叡慮無二懈怠一白地以二神宮幷門侍所方一不ν爲二御跡一萬物隨二出來一必先被ν奉ν之と有る御旨を覲奉りて伊勢兩宮ノ内侍所御神の殊に御親しく坐し且御尊の比無き御事を知る可し伯家部類に例幣齋籠中遣拜之事と有る條に伊勢兩宮内侍所兩神祇官八神殿已上と有り其外少しの遺例も有れども主上の御拜の應大較如此き古例なり職原鈔にも神祇官を第一に擧る故實を記されて以二當官一置二諸官上一是神國之風儀重二天神地祇一故也とも祭官之職者上古之重任也又神國之故以二當官一置二大政官之上一乎と有り天神地祇を重みし奉給ふ事天照大御神に始る故に日本後紀第一卷延曆十一年十一月の下に神祇伯者是天照大神神主也と見え十五卷弘仁十二年八月の下に伊勢大神宮云々此大神者天下貴社と有るなどを參考して其大凡を知る可き者なり但し此に引く日本後紀二箇條は通例の本とは異なり天野信景か鹽尻に日本後紀乙酉七月讀ν之乃嘗於吉見氏家藏書二十卷是雖ν似二全本一猶ν有二闕文一と有るを引たるなり又豐受大神は天上にしては天照皇大御神の御饌都神と御在して天津磐戶に常在に鎭坐し乍其御靈實を皇大御神の御靈實に副て天降給ひて御幽契に違はせ給はず內宮外宮と相對ひ鎭座坐て天下國の八十國島の八十島に在とし有ゆる生とし生る動物に衣食住の恩賜を幸給ふ事已に上に說る如くなれば生民の大本續命の根基として一日片時の間も御蔭に漏奉る事能ふまじき大御德に坐せば伊勢兩宮と相並ひ給ひて甚も尊く坐て其御禮典も亦

自餘の神とは並ばせ給はぬ御事なり倭姫命世記に豐受大神の度會宮に鎭坐る後に皇大神重託宣久吾祭奉仕之時先可レ奉レ祭ニ止由氣大神宮ー也然後我宮祭事可ニ勤仕ー也故則諸祭事以ニ此宮ー爲レ先也と有るに心を潛めて熟思ふべくこそ斯在れば兩宮に於て異り有まじき御事なるを內外宮の神人等相共に片方をば貶しめ奉らむと構へて內宮方よりは豐受大神を勝部神の如く貶しめ奉るは如何にぞや掛卷も甚も恐き皇御孫命の御尊さの限無きすら豐受大神の相殿と爲給ひて御在るに非ずや尤豐受大神宮儀式帳に豐受大神の鎭坐る下に是以御饌殿造奉弖天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と見え皇大神宮儀式帳にも供ニ奉朝大御饌夕大御饌ニ行事用物事と有る條に止由氣大神の入坐て御饌料理（ト、ノヘ）給ふ由記されど其は大御神と豐受大神との御上に在る事にて此兩宮の尊卑に係はる事ならず然れば內宮方の神人の說も信び難し又外宮方よりは豐受大神を御饌都神と申すは御食物を主宰（シロシ）めす神と申す事なるを其にては飽ず思えて元氣水德神なりとして天之御中主神よ國之常立神よと云ひ閣まして大御神宮の上に强て巧めるなと此も彼も伊勢兩宮は朝廷より殊に尊崇奉給ひ天下蒼生の仰ぎ依る所なるを妄れて恐くも神を活物として多く利を射むと爲る姦しき禍心より起れる私心なれば大御神等の大御心に叶奉らぬ事は云まくも更也苟くも神習ふ輩の且ても爲まじく又有るまじき匪業なり幽冥の御罰の程甚恐く如此云ふにたに畏縮（シ、マハ）るゝ物なや偖第□十□段より次に大御神宮に申詞と度會宮に申詞と各々別々なるを此祈年祭詞と六月十二月月次祭詞とに限て度會宮詞とて別に無きは第□十□段詞耳を白さしめ給事と聞えたり伯家部類に御即位由奉幣御祝詞掛毛畏支伊勢兩宮天照皇大神乃廣前爾云々天正十四年十一月云々天照大神と計有之時且雖ニ以有ニ不審ー天照大神を天子被レ奉レ敬御心則豐受宮可レ難歟已上口傳但伊勢を兩宮と申し內侍所を兩神と申奉る事傳受候事なり云々と有れば此も一つを兩宮に用られたるかと思ふに然らず此詞は垂仁天皇御世より毎年の新年祭に用來れる詞にて元より有つるを雄略天皇御世に豐受大神の伊勢に御遷座有る後にも依然の如く大御神に耳用ひられたる物なりけり

皇神能見霽志坐〇四方國者〇天能壁立極〇國能退立限〇青雲能靄極〇白雲能墜坐向伏限〇青海原者棹柁不干〇舟艫能至留極〇大海原爾舟滿都都氣氐自陸往道者荷緒縛堅氐磐根木根履佐久彌氐〇馬爪至留限〇長道無間久立都々氣氐〇狹國者廣久〇峻國者平久〇遠國者〇八十綱打掛氐引寄如事〇皇大御神能寄奉波〇

此は天照大御神の天津磐戶より押張して御照し坐る大御德と皇御孫命に天下國の八十國島の八十島の有の悉事依し奉給ふ御天降段の故實を兼て當今の御事實を白させ給ふ者にて古文の神妙此に盡せり結句に皇吾睦神漏伎神漏美命登宇事物頸根突拔氐皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と有れば神漏伎神漏美命の御言なりけり此を以ても上に云る若く垂仁天皇御世頃より申させ給ふ古文にて其は亦初國所知食し筑紫大朝廷にてぞ申初させ給へるなる可し然らずは此國土にしては如何に爲ても見認まじく又心も詞も及ぶまじと思ゆる神妙の文有ればなり天象地理の全形をさへ覽ひ測知るゝ物をや皇神能見霽志坐の見は所知食また所聞看の食看の言に同じく其躬に稟持て其事を知行ふ由なり大山津見神大綿津見神などの見に同じ此事委しくは第三詞なる知食の註に云り引合見る可し徒に目して見る事と爲ては下に貫かず又御の意と爲ては上に力無し然れば別に意を求む可きなり靄志は照志と云に同じ其例は欽明天皇の大御名を天國排開廣庭天　皇と申せるも天と國を押照し坐て場

廣く御立し所知食す由の稱號なり古事記に天國押波流岐廣庭命と作るを以て開字を波流岐と訓可き事を知る可し尚繼躰天皇御紀にも此御名の出たる本注に開此云ニ波羅爾ニと有れば波流とも波羅をも通し云るなる可し今世にも晴字を波流々とも波羅須とも云れば然も有る可き事なりかし 斯在れば天智天皇の大御名を天命開別天皇と稱奉る其開字は此に准へて波留加須と訓むべき事云も更なり 然れば御鎭座本緣にも天照大御神の御諭言に我高天原爾坐瑕戸押張原如レ見見志眞伎志國ノ宮所波是也 鎭理定理坐給止覺給支と有る瑕戸押張は瑕戸押開にて遙に遠く見晴かし坐りとの義にて其極りは御照し坐す由に歸めり其は出雲國造神壽詞に麻蘇比乃大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能已登久明御神能大八島國乎天地日月等共爾安久平久知行牟事能志太米と有るを以て知られたり 眞澄の大御鏡の面を御晴して見行く事の如く明了(アキラカ)にと云ふ事を明御神と係て云るに心を着く可く又天地と日月と共に安けく平けく知行むと云る知看むの言は此なる見霽志坐の見の言に近く當れるを思合す可き物なりかし ○四方國者は大御神の高天原より御霽かし御照し坐る境域を大凡に云ひて天地の底際の內を差なり是を以て神代卷なる日神御生坐段には生ニ日神ニ云々此子光華明彩照ニ徹於六合之內ニとは記されたり 漢籍に天地四方曰ニ六合ニの義を取て六合の字を用られたり鈴屋大人の神代正語に此文の六合之內を天地能裏爾と訓れたるは萬葉十五に安米都知乃曾許比能宇良爾と有るに依られたる物なり 然れば同語ながら大祓詞に四方之國中登云々と有るとは用法甚異なり此詞の四方國は天日の御照し坐る四方上下を取都て云ひ大祓詞なるは天下にて皇御孫命の所知食す四方國と云ふ事なり 遷却祟神詞にも四方之國中止と有て大祓詞なると同意なり 偖皇御孫命は天下の大君として此國土をこそは所知食けれ天日の御照し坐る御光の及ぶ限りを悉く統御給ふと云ふ義には非れども其統御給ふ天下に於て四方上下悉く皇御孫命の國土に非る事無れば如此く此語を用られたり 皇御孫命に限らず其宰持て一國一鄕一村の主たる者(ヒト)と雖も其方疆四方上下悉く其有に非る事無きを思ふ可し其我か仰ぐ天は我天なり我住る地は我が地なり東南西北の四至は各々掌分て有つ人に境域を分つと雖も上下に至ては上は蒼々たる上天下は坤軸まで其際限無きが如くならずや ○天能壁立極は國能退立限に對へて蒼天の壁の如く常在に立る極みと云事也天之常立神の亦御名を天壁立命とも稱して天の至り極る所を立給しと稱す御名なり 但此は姓氏錄に宮部造天壁立命之子天背男命之後也と有を取て云ふなり師は壁字を曾伎ニ訓て天底立命と同神なりと云れたれど曾伎と加伎と對語にて號り給へる事を思漏されたるなり壁も牆も同義の語にて其限を云ふなり 皇大神宮儀式帳などに御壁代と御絹垣とを通はし記せるを以て壁と垣と同名なる事を察む可し 然れば彼八雲神詠の夜幣賀伎も須佐之男神の共爲夫婦(ミトノマクハヒ)し給たむ身屋の御絹垣に見成し給へるなり然らずは雲を宮外の垣と見成し給ふ事似著はしからぬに似たり又妻隱にと有を以ても御絹垣なる事を

思ふ可し絹垣は御壁代にて中昔より御綺帳（ユチヤウ）と云ふ物是なり此は事の因に云ふ出雲國風土記に神須佐乃嗚命天壁立廻坐之と有るも青雲の靄く極み廻り坐しと云ふ事なり偖天は遍く際限し無く廣々と行徹りたる物にて實には其極盡を指て何處を速と云ふべきに非ずと雖も其極盡り無き極盡りの至り窮る處迄も悉く天之御中主神の御立し主領き坐す所高皇產靈神皇產靈神の產靈を布施し給ふ所宇麻志阿斯訶備比古遲神の天の五百綱打延て堅固め坐す所天之常立神の退方の極み常在に立給ひ有ち坐す所にして其全は天照大御神の天中央なる日宮より天津瑤戸押張り見霽し御照坐して所知食す高天原なるが故に八百萬千萬神の神留り坐せば八百萬千萬星の群在る外方なる大虛空の竟迄も何方か神の在處に非ざらむ何處か神の正處に非ざらむ皇神能見霽志坐四方國者天能壁立極と云ふ事所由有る哉此は故大人等の説れし趣とは甚く異なる見解有て云ふ事なり古始太元考に委しく詳記せれば今は略きつ尚國能退立限の下に云る事共を見合すべし〇國能退立限の國は此大地の全を云り大地の全體はしも球圓にして環の端無きが如くなれば其何處を竟る極みとも云ふ可からねども我が居所を以て大地の正中と定め四方を觀覽すれば我が居止する處大地の最高と爲り四方皆甚

卑下かる故に其故を以て退立限とは云り退に彼處の意を含み又其曾許の曾に膂肉空國又背面など云ふ曾の義をも兼たり曾久は放りと同くて離れ遠放る事なり其意を得て考ふべし其は天文測量を爲る者など我が居所を以て地の中央に定め此を地平と稱ひて其より仰觀俯察するなどを思ふ可し地平より以下の處は何も退立つ地と爲る意ばへ大に此意に近し自他主客の差別如此くなる故に彼處の意をも本より含まり有るなり記傳三十九丁に底とは上に有れ下に有れ横に有れ其至極る處も何方にても云り萬葉六藤原宇合卿西海道節度使に罷らるゝ時の高橋連蟲萬呂の長歌に筑紫爾至山乃曾伎野之衣寸見世常伴部乎班遣之と有る曾伎も極を云て同じ事なり細く云ふ時は曾伎は曾久を體言に云るにて曾久とは離放る意なり離居（ソキヲリ）遠曾久退（シリゾク）などの曾久なり斯て其を體言に曾伎と云ふは離（ソキ）たる處を云語なり又曾許と云ふ時は許は彼處（カシコ）此處（コヽ）などの處（コ）にて曾伎處の意なり故曾伎と意は全同じきなり偖曾伎も曾許も離放れる處を云て自然其離放たる至極の處の稱にも通はし云ふ事常なり又四に天雲乃遠隔乃極遠鷄跡裳九に天雲乃退部乃限十七に山河乃曾伎敝乎登保美十九に天雲能曾伎敝能伎波美又三に天雲乃曾久敝能極とも有りと有りて境域の極界の地を底と云ふに同じく此の退立限と云ふも其義なり古始太元考國之常立神の下に委しく説るを見るべし然れば國之底立神と申すも國の退立限を主領き立定め給ふ義なる事云まくも更なり偖此大地はしも天之御中主神の御立し主領き在す天中に居止り高皇產靈神皇產靈神の大氣に擧られ宇麻志阿斯訶備比古遲神の天綱に載り天之常立神の天國に

因(シタカ)准ひ天日の周圍を回旋(クネリメグル)る天地の常經(ミチ)なるが故に皇御孫命の所知食す此國土を云ふにも國能退立限に對へて先には天能壁立極と云り（此らの深意を藏たる文なれば必入代と爲りて作れるなるべからず已にも云る如く筑紫大朝廷にて天璽を齋奉らせ給ふ時に申行給ひ初けむが傳りて伊勢大宮に申させ給ふ詞とは爲れるなり天虛空を天翔り國翔り爲て大地を傍より觀行しゝ神ならずは如是まで明白(アカラサマ)に誰か知む古傳の神妙奇靈しむに堪たり）若此く此大地天中に浮經て天日の周圍を回旋る所由に緣て久遹とは云ふなり天能壁立極を處去(クネ)りて常在に立るを以て國之常立神と申し國の退方の限まで缺欠(カヽヌ)事無く立定め御在るを以て亦御名を國之底立神とも稱せり然れば天能壁立極國能退立限は大地　百六十五日餘の大運に係りて天之壁立神國之底立神の御德を以て稱る詞にて下に青雲能靄極白雲能墜坐向伏限と有るに大く對たり（下なる對語は宇麻志阿斯訶備比古遲神と豐雲野神との御德を祖述て大地一晝夜の私運の事を云るなる事下に委しく記せるを以て知る可し甚も奇しき神語とこそ思得奉らるれ）然れば國能退立限とは國土に就ては環の如く何處を竟と極界無く底際の立るを云ひ天中に係ては天能壁立極を回旋りて一年を爲し歲々年々終古に無窮き事を兼て云るにぞ有ける（但下文に術前の事に終たれば我が說の如くにては其事に叶はざるに似たれど然らず此公運私運に依て大地立ち定りて生々化育の道此に因りて有る事なれば奇しき迄其歸る所に能く契合せり）○青雲能靄極青雲とは經星緯星の天を冈羅て稱ふなり然るは被蒼々と見ゆる天霏をしも高皇產靈神皇產靈神の大氣の充滿たる處なるが其質實は水氣也是を以て其重疊せる形色の蒼々と見ゆるなるに火氣を含蓄て流動する脉有り是乃葦牙の如く萠騰りて天の大綱と爲りて五百綱千綱結ばり合て網成して天としも爲れる此は宇麻志阿斯訶備比古遲神の靈威に依る處にして天能壁立極み終古に定在(サダマリ)て常なる事此青雲の霏き薫れるが故なり又天之浮橋天之八衢と云ふ物も此氣脉の號なり（天日の天中央に位し經星緯星の羅別し大地の天中に羅りて天の瀰と爲可く常有る事は專此大氣天霏の如此なる故なり）若て元より垂靡く天霏の大氣有るが上に此大地(クネリ)の天日の周圍を三百六十五日有餘に公運する回旋に就て一日晝夜の動みを爲して私運するに依て天日の光輝に蒸れて薫り出る朝霧有り凡地外に三四十度計りは滿たるべし其は大地萬物の蒸氣にて水なる事云も更なるが天霏の大氣に層なるが故に此大地より瞻望する處彌々蒼々と見ゆるなり是を以て其差別を云ずして此をも彼をも混(ヒト)つに青雲とは云る也此は豐雲野神の靈威なる事古始太元考に說ふが若し偖雲とは右の若くの子細を以て氣聚の義なるが汲組の意を兼て凝固る由をも含めり（然れば形象有る天地には天之壁立神國之常立神に係て天能壁立極國能退立限と云ひ無象の天氣地氣には宇麻志阿斯訶備比古遲神豐

雲野神に係て青雲能靄極白雲能墜坐向伏限と並べ云る此祝詞の明文の妙處を此に依て明む可き也又海觀瀾と云ふ書に日月諸曜之所ㇾ懸浩瀚大虚至大至廣不ㇾ可ㇾ極ニ涯際一而稀微之天氣充ㇾ焉此謂ニ之氣海一地球爲ニ氣海中之一大體一亦有下所ニ自發一之氣上周ニ圍其外一此謂ニ之雰圍一と有るが予が意を得たる說なり倩神代紀に伊井諾尊曰我所生之國唯有ニ朝霧一而薰滿之哉と有る朝霧はこの雰圍と云ふ物を差すなり第□□龍田風神祭詞の下に云ふを見るべし但師說に此を薰圍と號られたるぞ宜なる 若此く天霧の大氣と地外の薰圍と相層重れる故に其見る處を以て青雲と云ひ其實を彰はして古事記に天之八重多那雲と云り又略きては神代紀及祝詞などに天之八重雲とは云りき若此く宇宙に薰滿て無數の大象を羅列ねて此を擧る故に其充塞する際はしも至堅至剛にして神眞の往來と雖も容易からぬ事と通えたり大祓詞に天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐と有る其下に註るが如し然れば皇祖天神の御許容を受賜はらでは往來を得ざる事云まくも更也天之八衢とは其往來の氣脈にて神等の昇降爲給ふ衢立なり此を以て天之浮橋とは云り仙家に氣橋と云ふ事有るも此道に乘る事なり皇祖天神の許可を得て物爲る事神代國生段に證文有て其說は太元考に云り 靄(タナビク)とは垂靡くなり記傳十五六十七丁多那雲の解に多那は棚引にて虛空に覆ひ亘るを云ふ萬葉に多く輕引とも書る輕字は虛空に浮べる意以て出るなり薄き意には非ず又書紀序に靑陽者薄靡而爲ㇾ天此薄靡をも多那毘伎と訓たれども此等の字は多那毘久と云ふ本の意には叶はず輕字薄字などに就て思ふべからず多那比久は虛空に汎く覆ひ亘る意なり萬葉に霏微(タナビク)靄(タナビク)また障雲なども書たり萬葉七に棚霧合雪毛零奴可十三に棚雲利雪者零來奴など有る棚と同じ又登能具毛流とも多く咏る多那と登能と通音にて同じ多那毘久を輕引とも書又其薄靡の字などに依て登能具毛流を薄く曇る事と心得るは誤なり薄曇りて雨風は零る者には非ず棚と書るは本自借字ながら此棚と云ふ物も雲霧などの空に覆へると同じ狀にて空に擄る故に號たるなれば本は同意なりと云れたる如く宇宙の水氣の大虛空に薰り滿ち垂靡き覆ひ亘るを云ふなり若て其靄極と云ふ時は蒼天の極界を云ふ事云ふも更なるが尙薰圍の事をも兼て云ふ事なるが此大地こそ有れ若此る大虛空をさへに皇大御神の賦與し給ふは何の用ぞと云ふに常も云ふ如く此大地一所に止住爲る物ならず天日の周圍を一回するを一年と云ひ又四游昇降有て東に在を春と云ひ南に在て降るを夏と云ひ西に在を秋と云ひ北に在て昇るを冬と云ひ其一季九十日を三に區分して一月と爲り又晝夜に一動して一日と爲るが其は氣脈に乘りて青雲の靄く空に旋轉する故に何方に在れ大地の羅る所の四方上下悉く皇御孫命の統御す所なれば斯くは云ふなり天を所知食と云ふ義には非ず然々言の意を思ふべし大地の居る所の天を差て若は云るなり倩其四游昇降に就て云はゞ大地天日の東に在て其時春なる時は夏秋冬の坐所乃ち青雲能靄く所なり又天日の南に在て其時夏なる時は秋冬春の坐所青雲能靄極と云ふべきなり餘は此に准て知るべし ○白雲能墜坐向伏限とは上に云る青雲に對へて山川の出氣の升りて雨水と爲り降らむと爲る雲を云り倩此白雲また青雲と同じく共に地外に薰り出る水氣なるが青雲は宇宙の大象より蒸發して大地の全體より薰滿せるが相層りて天之八重雲と靄きたるを雨水と爲るべ

き白雲は殊に山川の出氣なるが故に甚狹く少くして其勢ひ大清慄烈の氣を貫穿ちて升る事能はず是を以て其冷際に及びて凝集し更に白雲と爲りて風氣に壓れて横行し或は斜行して山岳に羅り甚しきに及びては雨水と爲て降下爲る物なり或は雲と號け霞と云ひ霧と差物皆其高低に依り遠近に別れて名を異に爲と雖もその實は同じ山川の出氣なり此は上に云る豐雲野神の共に靈威なる事云も更也 和名抄に雲說文云雲山川出氣也和名久毛と見え霞唐韻云霞赤氣雲也 和名加須美と見え 霧爾雅云地氣上レ天曰レ霧和名岐利今按水氣也老子經云在レ天爲二霧露一在レ地爲二泉源一是也兼名苑云一名雺一名霿 水氣著二樹木一爲レ雺也と見えたり倩雲の久霞の加霧の佊など皆同じ意にて共に氣の言なり然れば上に云る如く雲は氣の聚り凝る意 霞は氣の淀(スホ)み滿塞りて幽なる意 霧は氣の薫りて限れる意に稱る語と通えたり○西川正休と云ふ人の說に空氣は大地を包む物にして其厚き地平より上四十五度の分に及ぶ此を空の界と號ぶ此は天日の光氣大地の全體に融通して其氣又外へ發出して浮ぶ物なり故に自然に水火の氣を帶ぶなり雲霧は一時河海山澤の氣にて空氣とは異なり空氣は地外を圍繞りて常に有る物なり假令は雲は呵氣にて殊更に吐く氣の如く空氣は常に覺えずして呼吸する息の如しと云り 墜坐とは白雲の大清に迫りて其より山岳に下り覆ふなり其は天に在て霧露(イキサシ)と爲るの餘り地に入て泉源(ミナモト)と爲む(ナラ)と爲るの機關なり但此は大同本記なる水取の政事の旨に協るは其由緣に依れるならむ天村雲命と申す神名の起る所以は此大地の泉源に係れゝばなり然れば姓氏錄に白雲別神と有るも此神にて霧露と泉源とに白雲を別つ御德を成し坐ればなる可し 姓氏錄大和國神別地祇に吉野連加彌比加尼之後也謚神武天皇行二幸吉野一到二神瀨一遣二人汲一レ水使者還曰レ有二井光女一天皇召問レ之汝誰人答曰臣是自レ天降來白雲別神之女也名曰二豐御富一天皇即名二水光姬一今吉野連所祭水光神也と有る白雲別神を天村雲命と見る時は其女ならば神名式に阿波國麻殖郡天村雲神伊自波夜比賣神社二座と有る伊自波夜比賣命其ならむか伊自波夜は石光映(イシハヤ)と云ふ事にて井光女に大に近し又天村雲命の子に天波與命有るも天光映命なる可く思合されて傍由有り但此傳は紀記共に見えたるが今は姓氏錄に本着て云なり 向伏限向は遠きを云ふ語なり昔(ムカシ)在と云ひ正對と云ふも我を離に客(カナタ)なる方を差云ふなり伏とは白雲の遠く靄き沈みたる象形を以て云ふ其所にては高く仰ぐ計なるも遠く在て此を觀る時は卑く沈めるが若くなるを以て此を向伏とは云り然るは上にも云る如く大地の全體は渾圓にして何處に在れ我が居る處高地にて其四方は皆低在れば極めて遠さは極めて低く沈みて見ゆればなり 船の近きに在れば全形を見漸遠くして船隱れて桂のみ見え彌遠くして全形を見る事能はざるに至る此大地渾圓なるを知る證據なり 若此く國の八十國島の八十島の竟迄も何處までも極を盡す事無し是を以て大地の全體を差て白雲能墜坐向伏限とは云るなり 但萬葉五には許能堤羅周日月能斯多波阿麻久毛能牟迦夫須伎波美と有りまた青雲なも唯に天雲と云り萬葉二に天雲之八重搔別氏云々と咏り然れば如此く對云ふに非ざる時は天雲と耳云ふも常なり倩大地は圓體にして此より白雲の白伏す限と指すも其所に至れば其彼方白雲の向伏す限と爲て經に窮に其限り有る可からず此を以て大地の全を云ふ語と爲れり萬葉に遠國を差て天雲の向伏國と云り思合すべし 倩是迄天能壁立極國能退立限は宇宙の大象を對て此大地の運旋を云ひ青雲能靄極白雲能墜坐向伏限

は天零の廣遠に對て此國土の薫園を云て迂回なる事の如くは有れど然らず此を熟く玩味(カミワケス)爲れば皇祖天神の產靈の靈威を成給ふ處の天機(ミシワザ)を窺奉り此國土に在と有ゆる動植(ヨロヅノモノ)の依て生(ナ)る所以(コトノモト)依て育(タモ)つ所由を知る可き神語なれば心を深めて此を思明らめ奉る可し然てこそ天照皇大御神の高天原に大君と御在して八百萬千萬神の惟祖惟宗と尊き事比(フタ)つ無き御事も恐けれど仰窺奉り又皇大御神の皇御孫命に此天下を御事依し奉給へる御事は云も更なり神代に寶祚之隆當與天壤無窮矣と詔賜へる證據の終古に違變無く爲て此を皇輿に徵し仰觀俯察爲れば天地實に謀と爲可く天地實に常有る大經を知明らるゝ神語には有けれ修理固成の神德(カムサチ)も此に因て爲す可く鎭魂の神術も此を得て行ふ可し其は知る人ぞ知らむかし 此は殊に神習ふ者の大事なるか此餘に道有る事無く此外に敎有る事無く天下の蒼生須臾も離るべからぬ道と爲る物此を除て何事か在む ○青海原者棹柁不干舟艫能至留極大海原爾船滿都々氣氏は暫く大海原爾船滿都々氣氏を青海原の上へ同して意得可し下にも此格の對有如此く錯綜せる事は句を隔て狹國者廣久へ係るに依てなり 其は次に自陸往道者荷緒縛堅氏磐根履佐久彌氏馬爪至留限長道無間久立都々氣氏と有るも長道無間久立都々氣氏を自陸往道者の上へ同して意得る時は大に明なり青海原とは唯に海

を云り如此く青と冠らせたるは青雲などの青も等しく其處に至らずして遠く望たる形象を以て公然(オホヂカ)に云ふ語なり常には唯に海原と耳も云り偖此大地を細分(コワケ)爲れば種々なりと雖其大較海と陸との二有る耳なり此を以て陸上に對て青海原とは云り 但青海原潮之八百重と云ふ時は陸土と稱と爲れり第二卷八十丁の所に云るが若し思ひ混ふ可からず師說は少か其事を盡さず 棹柁不干は船路の行至る處の極みを云不干は不休息と云に同じ古事記韓征段に新羅國主の畏惶の詞に自今以後隨ニ天皇命一而爲ニ御馬甘一每年雙レ船不レ乾ニ船腹一不レ乾ニ柂檝一共與ニ天地一無退仕奉と見え神功皇后御紀にも從今以後長與ニ乾坤一伏爲ニ飼部一其不レ乾ニ船柁一而春秋獻ニ馬梳及馬鞭一復不レ煩ニ海遠一以每レ年貢ニ男女之調一と有る此にて鹽沫の至留極み國の八十國島の八十島の土物を八十船列並て我が朝廷に貢奉る事の起元なり 推古天皇御紀に 新羅任那王二國遣使貢調仍奏表之曰天上有レ神地有ニ天皇一除ニ是二神一何亦有レ畏乎自今以後不レ有ニ相攻一且不レ乾ニ船柂一每歲必朝と有るは萬國に亘りて然有る可く又然有らま欲き言なりかし 但此由來は神代紀簸川段第五の一書に素盞嗚尊曰韓鄕之島是有ニ金銀一若使吾兒所御之國不レ有ニ浮寶一者未ニ是佳一也云々乃稱之曰杉及櫲樟此兩樹者可ニ以爲ニ浮寶一と有る浮寶は船の事なるが有ニ金銀一と宣へるは豈韓地耳ならむや外國の皆

を差て宣へり此も天照大御神の御心より出たる事は師說の如く此事の結は神功皇后の韓征なるが古事記に是天照大御神之御心者と有にて知へし但萬國の東頭に位(アタ)れる韓地を耳征令め給へる事は皇威を萬國に提伏(カシコマ)令め給はむとの神議なり其深意は二卷第六詞註に云るが如し然れば青海原者棹柁不干の詞は皇國より始め萬國の末に至る迄船棹船柁の行至る極と云ふ意也此を唯に皇國內の船路の極みと見る時は前後に行窮る處有て了解爲難き事多かり是を以て見れば萬國の全は悉く皇御孫命に臣伏し奉りて仰ぎ寄べき幽契千年五百年の後に悉く其符節を合せたるが如くなるべし其は此詞は垂仁天皇の御世に伊勢大宮に始て申させ給へるが其間幾許の時世をも經ずして韓征の事有て此詞に在る事を彼國主も畏惶の詞に申と云ふも異(ケシ)かる迄奇靈に非ずや垂仁天皇の御世に誰か將來に若此き事の有可しと思はんや然れば上に云る如く高天原より天降坐し御世より朝廷に傳れるを皇大御神を伊勢に齋奉給ふに就て申せるにこそ有れ實には甚も久しき天つ神語とこそ所思たれ　舟艫能至留極は萬葉十八三十二丁に布奈乃倍能伊波都流麻泥爾と詠るに同じく舟の艫先の向ひ到る極限と云語なるが上に棹柁不干と有るをうけたれば外國の有の悉く大海の環たらむ中を漏さず云ふなりけり漢籍に統御四海と云ふ意なり船艫の行至る限は悉く皇御孫命の所知食す御國なる事此を以て悟るべし　大海爾船滿都々氣氐は句を隔て狹國者廣久へ係りて下へ續き又上に回復て青海原者云々の語を引起す意有りて其義上下に亘るの明文なり然れば大海に船滿續けて青海原八重の汐路の極みは棹柁を休息す爲て世の有む限り舟艫を向て行盡すとも竟し無く洋々(ヒロ〳〵)と其終る所を知られざる如くなるも此より彼より朝貢を絕ず仕奉る由を含めたる文なり　借擶の滿續くと云ふに二義に亘りて聞ゆる事有り其一は八百船千船の外國より參り湊(ツト)ひて萬國の酋長等の貢賦を奉る義と一には狹國は廣く峻國は平く爲りて國土人民の漸大に蕃息して皇孫命の國を弘給ふ義とを兼たり船滿都々氣氐より自陸往道者云々へ直に續けて意得るは非なり又思ふに予が此考は非にて舊說の如く船滿都々氣氐自陸往道荷緒縛堅氐磐根木根履佐久彌氐馬爪至留限と續くにや若然らば青海原は棹柁干ずして船艫の行至らるゝ限り迄も大海原に船滿續けて其先に有る所の自陸往道は馬爪の至り留る限迄もゝ云ふ意にて海を渡て向なる國よりもと云ふ事にて海外の事を云るにやと思ゆれども皇國の事を打置て然る海外なる國を耳主と云へくも非ねば此考は惡かり又對語をも亂るれば此は依難し　○自陸往道者荷緒縛堅底磐根木根履佐久彌氐馬爪能至留限長道無間久立都々氣氐は上の例に長道間無久立都々氣氐を自陸往道者云々の上へ回して意得可し此も亦句を隔て峻國者平久に亘る爲に錯綜せる者なり上なる青海原者云々の下に云る例(タメシ)を此に正し辨ふ可し　自陸往道は國土の通路を云り陸とは國處の意なり久我とも久奴我とも云ふを合せて國處なる事を知る可し　荷緒縛堅氐は荷前の箱の荷緒を縛堅て馬に着る料なり下に馬爪能至留限と有るに應たり萬葉□に「東人の荷前の箇の荷緒にも妹が心に乘にける哉(カモ)」と詠り荷緒を縛堅むる事は岩根木根を履凹みて馬に負せ通しめむ料なり　磐根木根履佐久彌氐は鈴屋大人說に磐根木根にて凸凹有る道を履行くを云り裂なりと云る考の說は由無し記傳五卷石柝神根柝神の下に萬葉二に石根左久見手名積來之又六卷には五百重山伊去割見とも二十卷に奈美乃間乎伊由伎佐久美と

も有を或説に人面の凹凸有るを志夜久美面と云に同じ馬邪久里と云ふも能面に佐久美と云有るも同語なり源氏物語に児童の小賢きを佐久自理於與須介多留と有るも平穏ならぬ意にて同じと有り　馬爪能至留限は萬葉十八（三十二丁）宇麻乃都米伊都久須伎波美と詠る如く馬爪の至り盡す極界と云ふ事にて即國の竟を云ふなり二十（防人の歌）に宇麻能都米都久志能佐伎爾と續けたるも同意なり但此は筑紫國に罷れる人の歌なるに依て筑紫崎に馬爪の盡す竟を兼て詠り冠辭考に馬は爪を衝て歩む者なれば然續けたりと云れたれど主盡す限を云ふなれば此解宜しからず長道無間久立都々氣氏は句を隔て峻國者平久云々へ係りて下へ續き又上に回復て自陸往道者云々の語を引起す意有て其義上下に亘る文なる事上なる大海原爾船滿都々氣氏の例也考に此處を暫く云切て次の荷前へ續けりと云れたれど委からず○狹國者廣久は二巻（八十丁）に云り此も其と同意なるが青海原者棹柁不干舟艫能至留極大海原爾船滿都々氣氏より受て皇御孫命の所知食す國の良々に弘り行く事を云り皇國は更にも云はず海外なる國々の貢調を奉る事の廣くなる此皇御孫命の御國の廣まる表也第六詞なるは皇御孫命の所知食す此大地萬國の國形の廣く大きく成以行く事を云るにて同意の言ながら其用たる上に聊心得の違（カハ）り有るべし能く上下の文を照し見可し　○峻國者平久は二巻（八十丁）に云り此も其と同意なるが自陸往道者荷緒縛堅氏磐根木根履佐久彌氏馬爪能至留限長道無間久立都々氣氏より受て馬爪の至留る限り皇御孫命に貢上る租税の運送ひ易からむ事に云るなり峻國と云るに皇御孫命に歸順ひ奉仕らずして情進に僑奢り居る國をも安く平けく在しめ朝廷の御趣けに隨ひ奉令めて朝貢を入て奉仕る事をも兼たるべし但第六詞なるは皇御孫命の所知食す國の峻岨にして人民住可からず草木蕃息すべからざるをも平旦に爲し且田畑と爲り山林と爲りて人民の用に足る地を爲給ふ事に云るなり　然れば第六詞なる此二の對語は生國足國神の國土を經營爲給ふ修理固成の神幸に就て云ふにて體なるが此は皇御孫命の國土を統御爲給ふに就て其歸順の表（シルシ）に萬國より海と陸の幸を献る事に就て用なり其は次詞に遠國者八十綱打掛氏引寄如事と有を以て差別有る事を知可し第六詞には狹國者廣久峻國者平久島能八十島墜事無久皇神等能依左志奉云々と續て此は荷前には拘ずして國の本體を云るなりあじはふべし　○遠國者八十綱打掛氏引寄如レ事と有る遠國は海外なる諸國を云り此大地の有の悉皆皇御孫命の所知良す御國なる事今云ふも事舊りにたり然れども其國々の中には極めて卑賤しく汚穢しく爲て皇御國に往來を元より皇大御神の大御心を斷給ふも有れど其方物の皇國に利用と爲る可きは悉くに知らず知らずも引寄て献令め給へり其深意は二巻九十丁に委しく云れば披見て知るべし八十綱打掛氏は外國の方物を引寄て貢令め給ふ譬なり但狹國者廣久云々の詞上に有を以て按ふに考の説の如く出

雲風土記なる國引の文に初國小く作れりしを佗國の國の餘有る處を三自の綱打掛て縫足はし作足はしゝ事有る例にて國土經營の當昔には何らも斯任る事の有る可ければ其故事に本就て此譬は有るなり狹國者廣久峻國者平久より續きたる文意を熟く思ふ可し但國引の文に就て予が思得たる說は第六詞の下に云り第六詞は皇御孫命の所知食す御國を修理固成の體を云ひ此詞は皇御孫命の國土に大君と在すに就て貢賦を奉りて君臣の義を定むる用を云り○皇大御神能寄奉波は上に皇神能見霽坐四方國者云々を此に摠括て受たるなり天の壁立つ極み國の退立つ限り青雲の靄く極み白雲の墜坐向伏す限り天地の底際の中に照徹り坐る高光る日大御神に座坐せば大御光の及ばせ給ふ限り盡く皇大御神の八百萬千萬神に惟祖惟宗と大坐まして見霽し所知食す境域なるを此顯國は皇御孫命の大君と坐して天津日繼高御座の大御業と授給ひ傳給へば皇御孫命の御職と天下の蒼生を統御し給ひ豐受大神の御幸と爲て成し給ふ食物衣服住宅に各安居爲しめ給ひ國家平均の御政令を敷給ひ行はせ給へば皇御孫命の御物を賜りて資用ふ事なるが故に其御恩賴に報奉ると爲て天津日繼の瑞穗は更なり男の弓弭の貢女の手末の調を献上りて其億兆の人民の歸順ひ仕奉る物實を表す事なるが上豐受大神の條に云る如く其德は豐受大神の恩賜にて天照大御神の事依し奉給へる物なり朝廷より伊勢兩宮と相並て齋奉らせ給ふ事斯在る所由なり已に云る如く神功皇后に韓征の事を依し奉給へるも天照大御神の御心なるを思ふ可し其は外國より朝貢爲令むべき時と神隨思ぼしての御事と恐けれども推察り奉らるゝなり然れば天津日繼に係れる御事は左にも右にも皇大御神の神御計ひとこそ何奉らるれ

荷前者皇大御神能大前爾如橫山打積置氐殘乎波平
聞看

荷前の前は借字にて荷幸の義なり萬葉二十に東人之荷向篋乃荷之緒爾毛妹情爾乘爾家流香聞と有り政事要略に職員令を舉て其下に基案義解所謂荷前者四方國進御調荷前取奉故曰荷前と有を合て思ふに幸は其得る處より云るに先の意を兼て俗に早物と云事なり先とは大神宮儀式帳に赤引先糸四十斤註に神郡度會郡調先糸と有る先糸は荷前糸と云が如し同宮年中行事に赤良引荷前御調糸とも有り又外宮儀式帳に織乃大御衣二匹云々此度會郡調先絲織奉また養蠶乃糸先乎神宮並云々奉進また佃奉拔穗乃御田稻乎先穗乎波拔穗爾拔弖と有も先穗は初穗と云が如し今も商客の物を運ぶ馬の荷前を取と云事有り荷とは朝廷に貢上る貢調の物に限らず凡て何物に在れ此處より彼處に運送るに就て云ふな

り考に此は諸國にて出來る調の初物を朝廷に奉るを荷前と云て匵に納め荒薦に包み緒して馬に乘駄(ノセツクル)るを荷緒續堅氏と云りと云れたり但此處に用有て隠と上に引ざりし也遖とも能とも通はし云る事上には荷緒(ニノ)と云ひ此には荷前(ノサキ)と云るにて知る可し重荷また荷緒など體言に云ふ時は遖と云ひ荷前など連る時は能と呼(イヘ)り詞捷徑に云る如く第二音より第五音に轉じて火串(ホクシ)木材(コムラ)などの如く比を保と云ひ伎を許と云ふ例にて上の意輕く下の義重き時に常有る事なり此も荷前の前の義重きが故に能と轉じ云り神功皇后御紀に荷持此云二能登利一と見え色葉字類抄に荷を運ぶ丁(ヨホロ)の事を荷持(ノトリ)と訓り幸(サキ)とは神代紀に海幸山幸と書て幸此云二左知一と有る如く海幸山幸に限らず人の得て幸と爲し資用ふ所の品物を云て此を朝廷に其幸を荷と爲して献る故に荷前とは云り崇神天皇御紀に十二年九月始校二人民一更科二調役一此謂二男之弭調女之手末調一也と有るを以て稻穀の佗にも海山の幸を献りし事を知るべし記傳十七海佐知毘古山佐知毘古の條に幸とは凡て身の爲に吉事を言ふ稲字なら書り此にては海にて諸魚を漁(ト)るを海佐伎と云ひ山にて諸獸を獲るを山佐伎と云ふ凡て物を得るは身の爲に吉事なる故に幸とは云りと云たるは實に然る言なり但幸(サキ)に先(サキ)の義をも包たる事先に云りき伊勢大神宮式九月神嘗祭條に調荷前緒一百十三疋一丈二尺五色幣料絹一疋門幌料絹三疋二丈絲三絇綿五十三屯布一端木綿十斤麻十八斤腊二十斤蒸海鼠十二斤堅魚十四斤鰒十二斤鹽六石油六升海藻廿斤已上諸國封戸調荷前と有るは此に云る荷前の較略なり其は九月神嘗祭詞の註に全文を引て委しく云れば此には略きつ其次に足折櫃八十合折櫃二百合と有るは其荷前の筵なるべし但

此詞の荷前は朝廷より九月神嘗祭に進らるゝ幣帛を云り其は四時祭式に伊勢大神宮神嘗祭に幣帛二筥內藏寮供設絁三疋絲八絇倭文一端一丈席二枚鞍二具馬四疋離頭料布一端一丈四尺と見えたる此にて江家次第例幣次第に九月十一日早旦先裹二內宮料一內侍辨忌部內藏官人二人綿一匹藏人所進之兩面一匹綾五匹五色青赤黄白黒以二調布一結二其上一入二柳筥一以木綿結以二葉薦一裹レ之付短冊又裹二外宮料一五色絹次居二小安殿一東第一間薦上外宮料在外內藏寮護レ之同寮書二送文一云々と有るは其員數こそ同じからぬ其荷前の幣帛の趣意に異り無し四時祭式に幣帛二筥と有るは荷向の匵にて朝廷より奉らせ給ふ所なり又江家次第十二月荷前條の頭書に前一日內侍於二縫殿寮一裹レ幣行事藏人向二其所一と有るは內を五色絹などにて包むなるべし貞觀儀式神嘗祭條に置二幣葉薦一とも鋪二裹レ幣葉薦一とも有るはこの箱の外を裹ことと聞えたり儀式及び江家次第に依て見る時は荷前の幣物上に擧る如くなりと雖ども其最(モト)も主と奉らせ給ふ荷前は當年の新穀なり荷前は穎爾毛汁爾毛と有る穎にて其穎は和稲荒稻なる事既に考定て第五卷春日祭下に云り荷前は國々より朝廷へ奉る貢調にて其品種々なりと雖も稻穀を第一と爲る事萬葉十八に須米呂伎能之伎麻須久爾能安米能之多四方能美知爾波宇麻乃都米伊都久須伎波美布奈乃倍能伊波都流麻泥爾伊爾之敝欲伊麻乃乎都頭爾萬調麻都流都可佐等都久里多流曾能奈里波比乎と有は稻穀を萬調の主宰と云るなり其は神嘗と云ふ事はしも當年の新穀を皇大御神の大前に奉らせ給へるを皇大御神の諸ひ納受給ひ聞食し初る由にて天皇の聞食させ給ふを新嘗と申し天皇の聞食すに就て然る可

き神等の祀典られ給ふと同じければ縦ひ神郡にて農れる神税にも在れ朝廷より奉らせ給ふ所の幣帛は其二等に就く事云ふも更なり神郡の神田も其元本は朝廷より寄せ奉給ふなれば即其天皇の奉らせ給ふ神税なり此詞に荷前者皇大御神能大前爾如横山打積置氐殘乎波平聞看と有るに應(カナヘ)て九月神嘗祭詞に三郡國々處々寄奉禮留神戸人等能常(ノ)毛進留由紀能御酒御贄懸税千税餘五百税乎如横山久置足成天云々と有るを思ふ可き者なり其は上に引る大神宮式の次ぎに米三石三斗酒米十石雜供料米二十石鹽一石神酒二十三缶小税二百三十束（以一把爲レ束）大税一百八十束（以五把爲レ束）斤税一千二百二十二束（斤は掛(カク)る事にて掛税なる可し）云々次に度會宮同祭に小税一百二十束大税八十束斤税八百束云々と有りて其員數の差異は有れども兩宮及び攝社などにも奉らせ給ふ御事なり（第二詞に云々皇神等能依左志奉者初穗乎波千穎八百穎爾奉置氐云々と有ると同趣なり且此詞に對せても稻穗を奉らせ給ふが主と有る事を知可し荷前字を初穗と訓る本も有り其は謬訓なから荷前は初穗を奉る證と爲るべくや但十二月荷前使なるは然訓まず）〇如横山打積置氐は廣瀨大忌祭詞に如横山打積置氐秋祭爾奉牟と有ると同じ又春日祭詞にも如横山積置氐と見え平野祭詞又鎭御魂齋戸祭詞火鎭祭詞に如横山置高成氐と見え道饗祭詞に横山之如久置

所足氐と見え伊勢神嘗祭詞にも如横山久置足成天など種々に云り（大神宮六月月次祭詞には如二山海一置足成氐とも見えたり山海の如と云ふ事珍らし）偖横山の如打積置くとは上に云る種々の幣帛其なるが其主たる者は當年の新穀なるが故に龍田風神祭詞には如横山打積置氐と此と同し樣に云ふ可き處を初穗者甁能閇高知甁腹滿雙氐汁爾毛穎爾毛八百稻千稻爾引居置氐秋祭爾奉牟と云るを以て辨ふ可し然るは廣瀨大忌祭詞に初穗者汁爾毛穎爾母千稻八千稻爾引居氐如横山秋祭爾奉牟また同詞に初穗者汁爾毛穎爾毛甁乃閇高知甁乃腹滿雙氐如横山奉牟と有るを合せて疑無き者なりかし（此等を以て如横山と云ろ物は稻なる事を察(アキラ)むべし引居置氐とも引居氐とも云るは其幣帛を引連れ居置く事を云り然れば如二横山一云々と同じ）〇殘乎波平聞看は皇大御神の大前に荷前の初穗をば九月の神嘗祭に横山の如く打積奉置て稱辭竟奉給ひ其餘をば皇御孫命の新嘗に聞食し天下の兆民にもたまはせむとの意なり（此に新嘗の事を云はず又天下の兆民に給ふ事をも云ざれども其義言外に含りて聞ゆるは然すがに天津祝詞なればなり然れども斯く心着る人も世中に有りや我此を知らず）殘の字を考に餘なりと説れたれど其意を盡くされず平聞看と續けたるを按ふに此は究て重き語にて此詞ノ中の眼神なり然るは天照坐皇大御神に奉らせ給ふ詞なるが故に此語有て佗詞には全く無き例なり

第十段水分神詞に遺乎婆云々聞食故と有れども少し云ひ様異なり此詞には殘乎波乎聞看と云ひ彼詞には聞食故と云ひて其續きに取て少か意輕きを此詞は然らず（作詞にも初穗者云々秋祭に奉牟など有れども殘をば皇御孫命の聞食と云ふ事無きを以て皇大御神の格別なる御事を想像奉るべし然れば此殘乎波の語こそ殊異なる深義を索隱る證文とも云へけれ）常も云る如く天地の底際の内は天照坐皇大御神惟祖惟宗と神隨に尊き事比類無く御在して六合を總給へば國土萬物の全は悉く天照坐皇大御神の有なり神代紀（一書）に豐葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當下與二天壤一無上レ窮者矣と記させ給へるが如し皇大御神の有に非ずは爭か事依奉給ふ事を得む然ればは皇御孫命を此國土萬物の全を悉く事依奉給へる事はしも天下の人民は皇大御神の顯見蒼生と詔給へる天之益人なるが皇御孫命は此を主宰（シロシメ）す大君と仰れ奉給ひて天下の人民を大御寶と成し給へり然れば國土は人民の居住（スマヒ）する爲の國土なり萬物は人民の資用（ツカ）ふ爲の萬物なり是を以て天下は皇御孫命の天下なり國土は顯見蒼生の國土なれば人民此に主たる事云ふも更なるが其本緣を云ふ時は皇大御神の有に非ずと云ふ事無し此故に天下の人民は皇御孫命に國土に出來る萬物の初物を貢上り皇御孫命は其を又皇大御神に奉らせ給ひて其殘をば己命の聞食し初させ給ひ其を頒せ給ふとは無れども天下の人民には其殘をば賜る義なり食物を賜ると云ふ語有るも上下貴賤の差別無く大道の自然存して廢ざるを思可し（天皇の大御位を天津日繼と申奉る御事も天下人民の日給の貢賦を所知食す由とを兼たる稱なる由鈴屋大人の詳説有て上に引るが如し又建暦御記に凡禁中作法先神事後他事旦暮敬神之叡慮無二懈怠一白地以二神宮并內侍所方一不レ爲二御迹一萬物隨二出來一必先被レ奉レ之自二僧尼及僧人一許所進之物不レ奉レ之と記させ給へる萬物隨二出來一必先被レ奉レ之と有る御言ぞ此詞の殘乎波乎聞看と有る御旨を表發し給へる物なりける）儲萬物の中にも辭別て天津日繼の瑞穗を事依奉給へり神代紀（一書）に天照大神又勅曰以二吾高天原所レ御齋庭之穗一亦當レ御二於吾兒一と有るを以て知るべし然れば此瑞穗はしも高天原なる天津甕戸の神物なるを皇御孫命の此國土に大君として初國知食す時に賦與し給へれば其本因を云ふ時は皇大御神の御物なるを皇御孫命の受賜はり坐て天下の人民に農ら令め給ふが故に上にいへる如く天下の人民の貢調は皇御孫命に奉り皇御孫命は其初穗を皇大御神の大前に横山の如く置高成して奉らせ給はでは得有まじき御事を思ひ奉る可し（然れども此瑞穗は國土萬物の有るが中にも人の命を續ぐ可美物なる故に殊に顯見蒼生の喰て活べき物ぞと詔ひ言擧給へれば瑞穗耳を天降し給へるが如しと云へども然に非ず國土萬物の全は悉く皇大御神の御心と成整れば此なる瑞穗には限るべ

きならず　又天照坐皇大御神と豐受大神と預結幽契と有るも此事なる由を察む可し伊勢ハ兩大宮に並在して齋れ給ふ事由緣有る哉（上なる豐受大神の條下に委しく說る意味を思亙して知へし）平聞看は其年の十一月中卯日に新嘗の御政有て天皇の聞食初させ給ふを云然るは此詞に荷前者云々と有るは大御神宮の神嘗祭の事を云るに就て天皇の新嘗の御事を申させ給ふなり（神祇令義解に新嘗祭謂嘗ニ新穀一以祭ニ神祇一朝則諸神之相嘗夕則供ニ新穀於至尊一也と有て天下の諸社の相嘗は天皇の新嘗の當日に物爲給ふ事四時祭式に見えたるか如し）記傳九（八丁）に皇極天皇御紀に御ニ新嘗一續紀三十（十五丁）に今日方新嘗乃猶良比乃豐乃明聞許之賣須日仁在また大嘗祭詞に今年十一月中卯日爾天都御食乃長御食能遠御食登皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾皇神等相宇豆乃比奉氐堅石爾常石爾齋比奉利茂御世爾幸閇奉牟止依志氐千秋五百秋爾平久安久聞食氐豐明爾明坐牟云々此を見るべし新嘗大嘗共に天皇の御自聞食す事を主と云りと云れたるは然る言にて此大嘗祭詞は中臣壽詞に豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天天都日嗣乃天津高御座仁御座天天津御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依志奉豆天降坐之と有る結びなり此彼照し合すれば此なる平聞看は彌々新嘗の御事を顯し詔給ふ事疑無き者なり（尙第十段なる大嘗祭詞の註に委しく云る事共を合せ讀て其說を察む可し）

又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋奉茂御世爾幸閇奉故　皇吾睦神漏伎神漏彌命登宇事物頸根衝拔氐皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

此の文は上なる第三詞に異有る事無きが唯宇事物頸根衝拔氐の一句添れる耳なり其說に於ては少しも異無しと雖も此は神代紀（第一の一書）に天照大神勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可レ王之地也宜ニ爾皇孫就而治一焉行矣寶祚之隆當下與天壤一無上レ窮者矣と有るぞ此なる皇御孫命御世乎手長御世云々と同趣意にて分て詔ると受て云ふとの條理に異有る耳也（然れば第三詞なるも此御命に依れるかと思ふに然らず凡て此時の事は天照大御神高皇產靈神皇產靈神三柱並坐て相共に物爲させ給ふ事なるが其御給ふ御言の條理に依ては別々なり倚此なるは天照大御神は豐葦原瑞穗國は吾子孫の可王之地なりと宣給ひて皇統に係れる御言を受けて云ひ第三詞なるは高皇產靈神皇產靈神の皇御孫命の大御身を護らせ給ふ由に就たる御言を受たるにて天津神籬云々の文即其元由たり）○皇吾睦神漏伎神漏彌命登は第三詞の下に已に云る如く皇大御神及び天社國社の神等を如此く齋奉らせ給ふ御事は皇祖天神の詔命に因准給ふ者なり（第一詞の最初に高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏美命以天社國社登稱辭竟奉と有る結なり心を平にして考ふ可し然るに鈴屋大人說に皇吾睦神漏伎神漏美命登云々此は天照大御神は比賣神に坐せば神漏彌なるを神漏伎とも崇奉給ふ由なり登と云る上の八神の例の如しと云れたれど心得ぬ說なり）

天照大御神には比賣神には坐せど古語拾遺に天照大神者惟祖惟宗尊無レ二因自餘諸神者乃子乃臣誰能敢抗と有て八百萬千萬神と神等は多く坐せども此大御神より尊き神は坐まされば何を以て比古神と稱奉りて其を尊しと爲むや此大御神の比賣神に坐すが元より尊かるを如何にしてか思漏されけらし　然れば此は大凡に皇祖天神の詔命に依せ給ふ御事を神にも顯し白せるにて此の登の辭は其に就て云り偖此は神代紀（御天降段第二の一書）に是時天神大神手持二寶鏡一祝之曰吾兒視二此寶鏡一當二猶視一レ吾可下與同レ床共レ殿以爲中齋鏡上復勅二天兒屋命太玉命一惟爾亦同侍二殿内一善爲二防護一と有る此を云なり又古事記にも天照大御神云々於是副二賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劒及常世思金神一云々而詔者此之鏡者專爲二我御魂一而如レ拜二吾前一次思金神者取二持前事一爲レ政此二柱神拜二祭佐久々斯侶伊須受能宮一とも見えたり共に此なる皇吾睦神漏伎神漏彌命登と有る詔命の因起（ヨリドコロ）なりけり此は已にも上に云るが又此に用有て再擧たるなり師云く此紀記の文を相照して熟思ふも古文と漢文との差別こそ有れ同題にて互に聊か遺漏たる事の有る耳なり其は神代紀に視二此寶鏡一當二猶視一レ吾と有るは古事記に此之鏡者專爲二我御魂一而如レ拜二吾前一伊都伎奉と有ると全同じくて古事記に可二與同レ床共二殿と云ふ語を漏せり又天兒屋命太玉命に勅給へる御言に同侍二殿内一善爲二防護一と有るは古事記に思金神者取二持前事一爲レ政と有ると文に精麁の違こそ有れ全同じきを神代紀にも古事記の如く此二柱神者拜二祭五十鈴宮一と云ふ文の有るべきに其を漏したり其は上に勅二天兒屋命太玉命一惟爾二神と有を以て知るべし偖斯く照し合せ見て古事記に亦常世思金神の下に次思金神者と有る神者の間とに布刀玉命の御名を脱し政此の間に故字を脱たりとは云ふなり偖思金神兒屋命一神なりと云れたるは然る言なり此に因て今紀記の文を按合し試るに天照大御神手持二寶鏡一祝之曰此之鏡者專爲二我御魂一而可下與同レ床共レ殿而如レ拜二吾前一伊都奉上復勅二天兒屋命太玉命一惟爾二神亦同侍二殿内一取二持前事一爲レ政故此二柱神者拜二祭五十鈴宮一など作く可きや　偖皇吾睦神漏伎神漏彌命登と云ふ事は此詞と第三詞を除て佗詞に全に有る事無きは上に云る天社國社と齋奉らせ給ふ事は皇祖天神の詔命に依せ給ふ事云ふも更なるに此二詞に殊に如此く有る事はしも佗神社とは殊異に齋祀奉給ふ可き因起有る事にて皇統を無窮に傳させ給ふ一大事に關れり其は第三詞に皇吾睦神漏伎命神漏美命登と有るは其下にも云る如く神代紀に高皇産靈尊勅曰吾則起二樹天津神籬及天津磐境一當下爲二吾孫一奉上レ齋矣汝天兒屋命太玉命宜下持二天津神籬一降二於葦原中國一亦爲二吾孫一奉上レ齋焉と有る此にて此詞の因起の上に引る紀記の文に對て其義理甚著明なる物なり此を以て古語拾遺（神武天皇段）には爰仰從二皇天二祖之詔一建二樹神籬一とは記せり上に引る紀記の文にも天兒屋命太玉命に同侍二殿内一善爲二防護一云々と有てまた取二持前事一爲レ政と有るに此にも汝天兒屋命太玉命云々と有て其相對ひたるを思ふべし如此く徵を待て此祝詞共を說き見るに事理分明にして少も隱れたる事有る事無し　○字事物は鵜其物にて事は其字の義なり其を古く斯（シカ）とも云しなり古事記下（高津宮段）に斯賀阿麻理と有るは其之餘（アマリ）なり此餘古書に多く見ゆ斯在れば古書に畏自物男自物鹿子自物鳥自物鴨自物馬自物犬自物鹿自物など何れも自物と續けたるは自を其の

意と見て暫く其を上に回して鵜事物は其鵜と云ふ物の如くと意得可きなり鹿自物は其鹿と云ふ物の如く若て其自に實の義をも兼たる可し出雲國造神壽詞に神乃禮自利臣能禮自登と有る自此なり 但出雲本に臣能禮自利と利字を補はれたるは中々に狡亙なり自にて能く通えたり 倭自は實(シロ)の義にて其と其意同じき由は如何と云ふに其と向(サス)を指す時は其實を標的と爲る辭なるが故に固く執する由なり然るに歴朝詔詞解二に大平主の説とて自物は狀之(サマノ)なるへし邪麻(サマ)と自毛(ジモ)と音通へり鹿自物は鹿狀之にて此類皆同じ男自物は男の狀として云ふ意にて聞ゆと云り此考然も有るへしと諸はれたれど何とかや言足はぬ心ちす 宇は借字にて鵜なり記傳十四 五十六丁 に和名抄に辨色立成云大曰鸕鷀 日本紀私説云志萬里止利 小曰鵜鶘 俗云志萬豆止利 爾雅註云鸕鷀水鳥也觜頭如鉤好食魚者也と云り 大小に分たるは非なり庭津鳥鵜また野津鳥雉と云格にて島津鳥鵜と云は一なり又字を俗に云と云るも如何にぞや字てふ名既に神武天皇の御世の歌にも見えたるをや字鏡には鸕をも鵜をも共に宇と云り と云れたり此に宇事物と有るは天皇の大御祖神と坐す故に天皇は申も更なり其神事に仕奉る人等も佗神よりは殊異に崇重にし奉りて其額突き拜み奉る有狀を譬たり 此鳥の水中に潜入る貞と人の額突き拜む狀と能似たり 人頸根衝拔氏は考に鵜の潜くには頸を倒に水に衝入るを人の頭以て地に突き敬ふに譬たり萬葉に宍自物膝折伏氏と人の膝を屈めて敬に譬たる類なりと有り 然れば頸根衝拔氏は其畏敬する實事を云ひ宇事物は頸根衝拔たる有狀を譬たるなり此差別を知るへし 頸は和名抄に陸詞切韻云領頸也 和名久比 頭莖也また項陸詞云項 和名宇奈之 頸後也

と見ゆ此を頸根と云ふは其莖根に有る骨を云ふなり人體の根基は骨幹たれば然號く可きなり 項を宇奈之と云るは其屈伸する狀を以て云ふ言にて枉曲の由なるへし然れば枉曲成(ウナシ)の意ならむか鵜を宇と云ふも其に依れるなるへし然れば此字の書は和章字惡眞と活機く字なりけり 人の畏敬する狀はしも頷骨を以て頸根を衝けば頸後の項に莖根の骨拔出つ此を頸根衝拔くとは云ふなるべし 考に頸根は首根なり頭を倒に爲るには先頭が本なりと云れたり因に云ふ水に入るを加豆久と云ふも頭衝くと云ふ事なるへし 如此く殊に此詞を加られたるを以ても伊勢の大宮の御會釋の格別なる御事を知るべし又豐受大神の亞て貴く御在し坐す御事をも察むへし 廣瀬大忌祭詞にも此詞有り此は豐受大神に專敬に用ひたるか又龍田風神祭詞にも有り其餘の詞には全く無き事なり 上に云る如く申すも恐けれど現御神と天下統御す御事は天照皇大御神の大御事依しに定り坐し天津日繼は豐受大神の御恩賴に定り給ふ御事にて君臣の大義立ち供給の大本成りて卑高位し上下亂れずして天下一日の如く終古に變易らせ給ふ事無きは此二大御神の預結幽契給ふ所有るに依て然なり 天下の蒼生此二大御神の御蔭に貴ずては爭でか世に生るゝ事を得む人と成る事を得む幸に人も多かるに萬國の秀眞と有る此瑞穗國の公民と生出て生長る事は殊異なる御恩賴に依る事也然るを我人の如く斯在る古傳の有るを知らで惜ら生涯を空しく送らむは口には如何に孝悌仁義を唱ふとも眞の孝悌仁義を得知ぬなり豈我小子等虫に鳥にも非ぬ行狀に習はめやも

延喜式祝詞講義四之巻

嘉永二年正月十九日

淡路國　鈴木重胤　著
越後國　今井繁次
出羽國　清室俊明　挍

御縣爾坐皇神等前爾白久高市葛木十市志貴山邊曾布登御名者白氐

御縣とは朝廷の御料にて供御に備ふる雜菓雜菜を貢る地を云り內膳式に園地と云る此なり又同式に耕種園圃云々と云るも此と同じ縣は頒田の義なる可し方疆を限て頒ち知る意にて號たるなり田とは陸田をも水田をも統たる名なるが阿賀多と云ふ時は一方域の搃稱と爲れり記傳二十九に阿賀多は上り田にて元は畠の事なり古事記上卷八千矛神の御歌に夜麻賀多邇麻岐斯阿多泥都岐云々下卷高津宮段の大御歌に夜麻賀多邇麻祁流阿袁那毛云々と有るに山縣の謂なるに蒔し茜舂る青菜など有を以て山なる畠なる事知る可し」と云ひて此詞をも引きて云れし說有れど依難し然るは此詞に此六御縣爾生出留甘菜辛菜云々と有るは古大和國の六郡なりけるを差て云れば田をも畠をも搃て云るなれば強に畠耳とも云難ければ上り田にては非るなり○天野信景が鹽尻にも阿賀多に縣字を用ふ然れども漢土にて云る郡縣の縣に似て同じ聲の言には非ず阿賀田は吾田の意にして田舍に有る己が領知する所なり」と云り此說また似て非なり郡縣の縣も頒田にて一方域を頒ち知る故の名なればは同意同言と見て共に妨無き物をや然れば方疆を頒ち別て朝廷の有せ給ふ御菜園の地を御縣と云ひ封建されて私の有なるを縣とは云り推古天皇御紀に蘇我大臣奏二于天皇一曰葛城縣者元臣之本居也是以冀之常得二其縣一以欲レ爲二臣之封縣一於是天皇詔曰云々然今當二朕之世一頓失二是縣一後君曰下愚癡婦人臨二天下一以頓亡中其縣上豈獨朕不レ賢耶大臣亦不レ忠是後葉之惡名則不レ聽と有を以て知る可し古事記朝倉宮段に此蘇我大臣が同族たる都夫良意美が女子訶良比賣を奉る所に亦副二五處之屯宅一以獻所謂五村屯宅者今葛城之五村苑人也と有に御紀には此人を葛城圓大臣と見え和名抄に大和國忍海郡に園人鄕有る是其五村之地なる可きが翁の說の如く忍海郡は葛城上下郡の間に在て葛城の內なる事云も更なり姓氏錄大和國諸蕃に園人首と云有も此地より出たるなるべし然れば古より縣とも園とも通はし云りし事知る可し　孝德天皇御紀に其於二倭國六縣一被レ遣二使者一宜下造二戸籍一幷校中田畝上と有れば田畠を統たるながら倭國六縣は鈴屋大人說古事記傳廿九の如く此は殊に近く京畿に在て朝廷の御料ふ陸田物を作りて奉れゝど此に准て餘國の縣をも然なりと云むは僻說なる可し記傳に云く縣字地名の下に附け云ふも其外も上に言を連れて云ふ時の縣の唱は上代のは多く阿を省きて賀多と云りと聞ゆ年魚市縣松浦縣など云類此なり然るに漸後には海邊の潟と混れて後年魚市縣松浦縣などの縣をも唯潟と耳心得て後には海邊の地名に耳云ふ事の如くなれゝど古は海無き國々の地名にも菜縣と云るが多きをや　記傳廿九六十一丁に云く皆後世まで諸國の司人の其任國を指て縣と云ふも古に京より國々の御料の縣に官人などの往來ひし頃の名目の遺れりしなり萬葉七に青髮依網原に人も遇ぬかも石走近江縣の物語せむ此歌遠江國司の下る道に參河國の依網原にて詠る

にて近江縣とは任國の遠江を指て云るなり又古今集端詞に文屋康秀が參河掾に成て縣見には得出立じやと云遣れりける土左日記に或人縣の四年五年竟て云々など有るも縣とは其任國を指て云るなり然るを此等の縣を唯田舍を云と耳心得來つるは非なり唯に田舍の事を縣と云る事無し倚又縣名と云ふ事も御料の縣の官人を任す山の名目なり唯に田舍の官を任すと云ふ意には非ず斯て漢字を用る世になりて此阿賀多に縣字を當て書習ひて良後には必しも朝廷の御料ふ地ならねども彼漢國にて縣と云ふに當る程の地をば總て某縣と云ふ事に爲れるなり」と云れたるは然る言ながら神武天皇の御世に封建の制定りて初て國縣の御定こそは有けらし國造本紀に既而初都二橿原一即二天皇位一勅褒二其功能一寄二賜國造一誅二其拒逆者一亦定二縣主一即是其緣也云々凡簡遣二三臣一巡二察治否一則有功者隨二其勇能一定二賜國造一誅二戮逆者一量二其功能一定二賜縣主一者矣と有るを以て考ふ可し其は御紀に二年春二月甲辰乙巳朔天皇定レ功行レ賞以二珍彥一爲二倭國造一又給二弟猾猛田邑一因爲二猛田縣主一弟磯城名黑速爲二磯城縣主一復以二劒根者一爲二葛城國造一と見えて其證有る事なり國造は其地を賜ひて其を主領くを稱ひ縣主は御縣に司として其地を治るに就て其御縣の中にて別に邑を賜ふを以て縣主とは云るなり給二弟猾猛田邑一因爲二猛田縣主一と有るを考ふ可し然れば各國の中にて朝廷の御料ふ地を

別に取領ちて縣とは云るが其縣の中には殊に長大なるも有て自然に其區分無ては其方彊の知らるまじき勢なりしかば何時となく何縣某縣と字して漢國に云ふ縣に當る事とは成れりしなり然れば景行天皇御紀神功皇后御紀應神天皇御紀などに某縣と云ふ事の多く見えたるは當昔の有狀なり然るを記傳に當昔は縣と云はざりし地をも撰者の意以て漸後の稱に隨ひて縣と記されたるも交れりと見ゆ書紀には然る事常に多し其心して見る可しと云れたれど中々に其は强事ならむ務めて漢籍めかさむと其文を潤色られたる事こそは多からめ其實を添(サヘ)に易ふ可くも非ぬ物をや若て記傳の說の如く孝德天皇の御世に至て其頭まで縣と云し程の地をみな郡と號けて天下悉く國を分たる名を郡と定められて某國の其郡と云ふ事に成れりしかども尙其國の區分の名に用ひられたる縣の號は廢り乍ら某縣主と云ふ姓も多く且受領の人の任國を縣と云ひ又御料の官人を任すを縣召と云ふ稱呼は遺れるなり孝德天皇より後にも郡大領にて縣主たりし人多かりと見えて天武天皇御紀に高市郡大領高市縣主許梅と云ふ人有り高市縣主は姓氏錄に天津彥根命之後也と見えて本より高市御縣の主たりしが孝德天皇の御世に縣を郡に改られたる故に郡司には任(ヨサ)されたりしが共尙縣主とも云しなり此縣主は姓の縣主には非ざるなり倚朝廷の御料を上古には總てを御縣と云ひ區別ては御園をぞ云りけむ此故に賜りて人の有たるをも園と云り允恭天皇二年御紀に皇后隨レ母在レ家遊二苑中一時鬪雞國造云々嘲レ之曰能作レ園乎汝者也また武烈天皇御紀に穿レ池起レ苑また孝德天皇御紀に按二田

畝其薗池水陸之利ニ與ニ百姓ニ倶と見ゆ天武天皇御紀五年の下に是年將レ都ニ新城ニ而限薗内者不レ問ニ公私ニ皆不レ耕ニ悉荒ニ遂不レ都矣と有る薗を波多祁と訓り苑園共に御縣と同じく菜菓を殖るの地を云ふなり故御園と云ひ其民を苑人と云けらし古事記朝倉宮段に葛城之五村苑人也と有を見つ可し此を職員令に園戸とは云り今京になりては内膳式に園地三十九町五段二百歩 京北園十八町三段奈良園六町八段三百一十歩山科園九段奈美園五町五段二百四十歩羽束志園四町九段泉園一町平城園二町 雜菓樹四百六十株 樝梨百株桃百株柑四十株小柑四十株柹百株橘二十株大棗三十株郁三十株 覆盆子園二段田六段二百三十四歩 種芹水葱料在乙訓郡 耕種園圃營大麥一段營大豆一段營小豆一段營大角豆一段營蔓菁一段營蒜一段營韮一段營葱一段營薑一段營蕗一段營薊一段營早瓜一段營晩瓜一段營茄一段營蘿菔一段營萵苣一段營葵一段營胡荽一段營蕓薹一段營蘇良自一段營蘘荷一段營芋一段營水葱一段營芹一段と有て此は供御の料の御園なるを思ふ可し此を統領るを園池司と云ふ職員令に園池司正一人掌ニ諸苑池種ニ殖蔬菜樹菓ニ等事ニ佑一人令史一人使部六人直丁一人園戸と有る此なり園池と云ふを思ふに御贄の魚をも此司にて主れりしなり今京になりては園池司の官廢て内膳司に

悉く屬る者なり 但此式のは甚く文を切(チヾ)めて出せり委しくは本書を探ぬ可し 中古に莊園と云ふ者は此御園より轉りたる物にて言義は御園に同じく爲て上古に御縣と云し名殘りなり 但御縣に就て某縣と云ふ國の小分の名起り夫より郡と云ふ事に轉れるも元本は皆此より始れりけり 然れども今京にても上古の制を然すがに易させ給ひ難くて御園は上に引る式文の如く京近き地に移させ給ひしかども猶古制に因准て大和國の六御縣に坐神等を主と祭らせ給ひて京外の御園神は尚次に立給へり 其由下に云ふを待つ可し 偖此詞に御縣爾坐皇神等と申せるは決く豐宇氣毘賣神なる可し然るは廣瀨大忌祭詞に倭國能六御縣及山口爾坐皇神等前爾母皇御孫命能宇豆乃幣乎云々と見え四時祭式同條にも大忌祭 廣瀨社七月准此 云々是日以御縣六座山口十四座合祭と見えたるに子細有る事委しく其說に云る如くなればなり若て古事記 水垣宮段 に又於ニ坂之御尾神及河瀨神ニ悉無ニ遺忘ニ奉ニ幣帛ニ也と有る坂之御尾神は此御縣神河瀨神は廣瀨大忌神なるなり其坂之御尾は記傳十 五十七丁 に山の坂路の前の引延たる所を云なる可しと云れたれば菜菓を殖る園などの有所に似着はしければ必然ならむと所思えたり若て此時始て祭給へるは葛木御縣神社ならむか土地高くして然も坂之

御尾と云ふ狀なるが上に廣瀨社に程も遠からぬなどを彼此思合するに必然る可く聞えたり但此祝詞には倭國能六御縣乃と有れど乃は決く及字の誤なる事著明ければ今は改て引つ大祓詞後釋の附錄に委しく辨られたる事共も多かれども允當を得ざるなり其は大忌詞の下に云ふ可し御縣爾坐とは天皇の供御ふ御縣に坐て其營る所の物を守坐す神と申す意なり然らば其神は誰か坐む豐宇氣毘賣神を除ては非じと所思ればなり但此詞に此六御縣爾生出甘菜辛菜乎持參來氐皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故云々と有るからは其分御靈と有す大氣都比賣神と申す方にて廣瀨に坐す若宇加能賣命と同體なり但此差別は第三卷に委しく云りき又大忌祭に御縣神六座山口神十四座を合せ祀る所以は古事記に羽山戸神娶大氣都比賣神生子若山咋神次若年神次妹若沙那賣神次彌豆麻岐神次夏高津日神亦名夏之賣神次秋毘賣神次久々年神次久々紀若室葛根神と有る事實に契合り其は羽山戸神は山口神に當り大氣都比賣神は御縣神に當りて廣瀨神に由有り此なる羽山戸神娶大氣都比賣神と有ると同記に大山津見神娶野椎神二神因山野持別而生神云々と有ると能似通ひたる事なり此に因て思ふに大山津見神の用は羽山戸神に在る可く野椎神の用は大氣都比賣神の爲し給ひて御德を成し給ふかと所思るなり此事第九詞の下に委しく云ふ可し又其御子八柱の中にも羽山戸神に四柱大氣都比賣神に四柱宛屬き坐て若山咋神は山の樹群の繁榮ゆる事を知坐し彌豆麻岐神は大忌祭詞に山々乃自口狹久那多利爾下賜水乎甘水登受而云々と有る御德なる可く久々年神の久々は木々にて木の年々に蕃息るを云ひ久々紀若室葛根神は室家を爲し給ふ由にて此二神は大殿祭詞に所謂屋船久々遲命の分身なる可し大山津見神の御德を羽山戸神の爲し坐る本緣を思ふ可し古事記に須佐之男神娶大山津見神之女名神大市比賣生子大年神と有て羽山戸神は其御子神と御在るが其は御年神にて豐受大神の御德を幽贊奉る神なり次に若年神は穀を農る神なり若沙那賣神とも申すは田を殖る事に就たる御名なり夏高津日神の夏は稻の成立つ田なるに高津日と云ふは彌豆麻岐神の水を引せるに天日の照入りて良沸騰する氣勢を得て彌々滋蔓せる由なり秋毘賣神は稻の熟らむを云ふ偖其稻の藁は菅草と成るを以て思へば此は野椎神の分身なる可し上に云る如く、豐受大神の分御靈大氣都比賣神の羽山戸神に御力を合せて生坐れば斯く有るなり偖羽山戸神は水を兼て木を司す事なるに大氣都比賣神は氣を兼て草を司す本と坐て右の如く八柱神は成し給ひけるが其太元を申す時は豐受大神の分御靈の御幸ひに因れる物なり木草を二つに分て心得るは非なるが如くなれども然らず木と草とに自然と剛柔の等差有るは男女の別ちにて此なる幽契の旨に妙なる造協へりけり首卷第二詞の下に云る如く田神の山に在すと云ふ事此に由有り然れば御縣爾坐神と申すは豐受大神の菜園を守らせ給ふ分御靈神なる事云も更なり今京になりては此を園神

と申せり予が考の如く竟して御食津神に坐り三代實錄に貞觀三年五月甲戌朔授二園池司無位御氣津神從五位下一と有る園池司後に廢て內膳司にて管領せるが故に式には內膳司園神十四座と有り此なるは其政所一座と有を云ふなり但式に宮內省坐神三座（並名神大月次新嘗）園神社韓神社二座と有るは別なり思ひ混ふ可からず（此園韓神社は江次第頭書に園韓神口傳云件神延暦以前坐此遷都之時遣官使欲レ奉レ遷二他處一神託宣云猶座二此處一奉レ護二帝王一云々仍鎮二座宮內省一と有り此事古事談にも見えたり又記傳に引る內侍所御神樂式に韓神之事素盞嗚尊子也有二帝基安泰之誓一故宮中祭之云々と有るは此事を云なり）內膳式に園神祭春秋（並同）十四座（京北園二座長岡園三座奈良園三座山科園一座羽束志園三座奈美園一座政所一坐）右五位一座（京北園）六位十三座と有る此內に政所一座と有るは三代實錄に見えたる園池司御氣津神なる事上に云るが如し但六位十三座の內なる事心得ず貞觀三年に從五位下に敍せられ給へれば五位二座と有けむ一位を脫されたるか若脫せるならずば京北園一座と有は誤にて政所と有つるなる可し其は左まれ右まれ園神と申すは御食津神に御在る事此文に依て明けし此にて式なる御縣爾坐神も決く同神なるが舊都と今京と御世を經て其唱の替る耳にて其祭祀給ふ主意に於ては少も異なきを知べきなり然れども尙古に因准せ給ひて表立たる御祭は舊儀の如く此六御縣の社々にて行はれし故に右の十四座の園神は帳外とは爲れりし者なり（五位一座六位十三座とは右の神社の神階を云る物なり）偖右の御縣坐神社は其縣主と有る人の齋祭る事なりと見ゆ其は廣瀨大忌祭詞に倭國乃六御縣能刀禰男女爾至萬氏と有る刀禰は其縣主を古くは指りしなり其詞の下に云るを見合す可し其を其祖神なりと爲むは僻說なる可し（國造の神事を祭て其國の政を執ると同じかる可し國造の神事を行へばとて其國の神社を祖神とは云ふ可からぬを思ふ可し）神名式に依る時は御縣坐神は云ふ迄も無く一座なりと雖も此詞に皇神等と有る上は豐受太神の分御靈大氣都比賣神を始て其御子神等も必鎮坐す事云まくも更なり（先には高市葛木十市志貴山邊曾布の六御縣に坐を以て皇神等と云るかと思しに熟考ふれば第二詞なる御年神も神名式には一座なれども詞に皇神等と有れば其屬坐る神をも共に申せると一事なるを考合す可し）高市は今の吉野郡宇智郡をも凡たる古名なりけらし式に大和國高市郡高市御縣神社（名神大月次新嘗）と見えて外五社に抽出て此社耳名神なるは當昔の京近き所なりし故なる可し三代實錄に貞觀元年正月二十七日授二大和國高市郡御縣神從五位上一と有る此にて高市縣主は姓氏錄に天津彥根命十二世孫建許呂命之後也と有りて其氏より奉仕する神なり（天武天皇紀に高市郡大領縣主許梅と有るは其裔孫なる可し偖此社を大和志に在二四條村一今稱二高縣社一と有り偖高市葛木十市志貴山邊曾布と次序たるを平城宮以來の文ならば曾布葛木などゝ今の郡名の次序を用ひらる可きに高市葛木と次序ら）

れたるを以て思ふに實に古に高市郡の地に大宮敷坐て天下知看し御世よりや用ひ初られけむ此に因て崇神天皇の御世ならむかと思ふに倚古かりけり神武天皇の白檮原宮は高市郡なれば倭國の六縣に其より斂ふる御制なりけむ故に高市葛木云々と次序られたる物なりけり葛木は後に葛上葛下忍海と三郡に成れるを都たる古名なり式に葛下郡葛木御縣神社（大月次新嘗）と見えて三代實錄に貞觀元年正月二十七日授㆓葛木御縣神從五位上㆒と有る社なり此に奉仕（ツカヘマツ）る縣主の姓の人は物に見えざれども神武天皇御紀二年の下に以㆓劔根者㆒爲㆓葛城國造㆒と見え國造本紀にも葛城國造橿原朝御世以㆓劔根命㆒初爲㆓葛城國造㆒即葛城直祖と有れば此氏人ぞ仕奉れりけむ（姓氏錄にも大和國神別に葛木忌寸高御魂命五世孫劔根命之後也とも葛木直高魂命五世孫劔根命之後也とも見えたり上古は葛城國と云しを葛上郡葛下郡と二郡に分れしより忌寸の姓にも直の姓にも爲れるなる可し又忍海郡も葛城より分れしなり倚此社の所在今詳ならず）十市は式に十市郡十市御縣坐神社（大月次新嘗）と見えて三代實錄に貞觀元年正月二十七日授㆓十市御縣坐神從五位上㆒と有る社なり此縣主は姓氏錄に見えざれども古事記黑田廬戸宮段に十市縣主之祖大目と有るを孝元天皇御紀及舊事紀にも磯城縣主大目と記せれば大目の裔に十市縣主磯城縣主と二派有しなるを十市縣主の方は既く絕廢たりし故に古書に所見の無きなりけり（大目は大咩布命かとも思へども此命は垂仁天皇の御世に仕奉りし人なれば然る可からず天孫本紀に饒速日命三世孫大彌命湯支命子也と有るや其ならむ若然も有らば紀記に大目と書るは於保美と訓む可く又大彌の彌は彌に宜む可くぞ所思る此命片鹽浮穴宮御宇天皇御世爲侍臣仕奉と有れば然く叶へり但七世孫に十市根命と云ふ人も有れば其遷りな主織るなる可し又大系圖に中原本姓十市宿禰安寧天皇子磯城津彦命之後也と有るは別なり思混ふ可からず倚此社の所在未詳ならず）志貴は後に城上城下と云る二郡を都たる古名なり又宇陀郡も地此に攝すれば志貴の部內なりけらし此社は式に城上郡志貴御縣坐神社（大月次新嘗）と見えて三代實錄に貞觀元年正月二十七日授㆓志貴御縣坐神社從五位上㆒と有る是なり此縣主の事は神武天皇御紀二年の下に弟磯城名黑速爲㆓磯城縣主㆒と見えたるを國造本紀に誅㆓志貴縣主兄磯城㆒以㆓弟磯城㆒爲㆓志貴縣主㆒と有るは紛らはしき書樣なり天皇の磯城を志貴縣主に任し賜ふ以前は其志貴の地の魁首にこそは有けれ譬縣主と自稱せるにも有れ己が私に稱れる潜號なれば兄磯城は志貴縣主と云ふ可からず然れば誅㆓兄磯城㆒以㆓弟磯城㆒爲㆓志貴縣主㆒と爲は御紀の文に對て明亮ならむかし然るに古事記葛城高岡宮段に師木縣主之祖河俣毘賣と見え片鹽浮穴宮段に河俣毘賣之兄縣主殿延之女阿久斗比賣と見え輕之境岡宮段に師木縣主之祖賦登麻和訶比賣命と見えたるに姓氏錄なる大和國神別を見れば志貴連神饒速日命孫日子湯支命之後也と有れば此も彼も一事の別異に傳はれるなり此等

を合せて按ふに兄磯城弟磯城共に宇摩志麻治命の子にて兄は其叔父たる長髄彥に屬て滅び弟は天皇に順ひ奉て志貴縣主とは爲れるなり若て古事記なる縣主殿延は安寧天皇御紀に一書云大間宿禰と有る如くならば天孫本紀に彥湯支命亦名木開足尼と有る木開は大間を譌(アヤマ)れる物にて殿延は彥湯支命にて其は弟磯城なる事彼此を思合せて知らる 但天孫本紀に建新川命倭志紀縣主等祖と有るは此命より支別たるに依て如此く記せるなり○此社を或說に今長谷與喜山天神是乎與喜湯支語通誤稱歟と云り然も有る可し一說に今金屋村と云ふに在りて志貴宮と稱(イ)ふとも云り孰れか是なるを知らず尚能く訂す可き事なり 山邊は式に山邊郡山邊御縣坐神社 大月次新嘗 と見えて三代實錄に貞觀元年正月二十七日授二從五位下山邊御縣神從五位上一と有る社此なり天孫本紀に建麻利尼命 山邊縣主等祖 と有る此氏よりぞ齋祀りつらむ 但姓氏錄右京皇別に山邊公和氣朝臣同祖と見え攝津國皇別に山邊公和氣朝臣同祖鐸石別命之後也と有るは別なり 曾布は後に添上添下と別れ平群廣瀨と支派たるをも該たる古名なり式に添下郡添御縣坐神社 大月次新嘗 と見えて三代實錄に貞觀元年正月授二添御縣神社從五位上一と有る此なり姓氏錄に添縣主出レ自二津速魂命男武乳速命一と見えたり 此社を今添田天神と曰(マチ)すと云り又大和志には在二三碓村一亦稱二天王一とも云り能く考定む可し 此外にも大和國中に御縣神社尚有り式に高市郡久米御縣神社二座と有れど小社の列なり又高市御縣坐鴨事代主神社大月次新嘗と有るは高市御縣の地に坐と云ふ事にて御縣坐神の列には非ず偕御縣坐神社は其縣々の縣主の遠祖より齋祭れる物にして其を祀祭る縣主共の祖先の謂には非ず其御縣の爲也廣瀨大忌祭にも其祭典に預給ふ所由を考ふ可し 其縣主の祖先ならむには廣瀨神に更に由有る可くも非ぬを思ふ可し ○御名者白氏は考に此神等の御名は別に在れども此處には唯其社の坐す所を御名と云ひ成せり式にも六ながら御縣坐神社と耳擧られたりと云れたるが如し但其地名を稱へて御名と爲るは其神の其地に坐て其事を爲給ふなり譬へば次詞なる山口神水分神などに某山口神某水分神と申すも各其御德を其地より立給ひて佗に遍く及し給ふ由なり 此例尚有て山口坐神ノ詞水分坐神詞も然なり伊勢大御神宮熱田大神宮などゝ其祭神を表(アラハ)さず其地を以て呼ふも古の常なり 然れば御名者白氏は御名者稱氏の意なる可きなり第三詞に大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久云々登御名者白而辭竟奉者云々と有るを約たるが如き語と聞えたり 第四詞第五詞第六詞共に此例なるに心を着て深く考ふ可し

此六御縣爾(コノムツノミアガタニ)生出甘菜辛菜乎(オヒイヅルアマナカラナヲ)持參來氐(モチマヰキテ)

此六御縣とは橿原御世より以降大宮柱太敷き坐て萬國を統(シメシ)御(タマ)給ふ京畿(ウチツクニ)なる大和國を六縣に分屬(キリミ)たる古名

なり孝德天皇御紀に其於二倭國一六縣被レ遣二使者一宜下造二戸籍一幷校中田畝上と有れば其頃まで尙六縣なりしなり然らば何時の間より十五郡には爲れりけむと思ふに同御紀に大化二年詔宜下觀二國々壃堺一或書或圖持來奉上示國縣之名來時將定と有れども此度には有る可からず天武天皇十二年御紀に限二分諸國之境堺一云々また聖武天皇天平十年御紀に令二天下諸國一造二國郡圖一進と有れば此節々に今の十五郡とは成つるなる可し 倭此六縣に分られしは景行天皇の御世と通ゆ御紀に五年秋九月云々則隨二山河一而分二國縣一隨二阡陌一以定二邑里一云々と有るな思ふ可し記傳廿九に上代の國境の御制は細なる事は詳に知難けれども古書共に事に觸て往々見えたる趣に就て考るに後世の如く際やかなる事こそ無りつらめ大方には元よりも國々の堺限なども有りは爲けむを此御世に徇隨に定賜しなりと云れしは實に然る事なり又云く其國縣邑里な定らへたゞ大方を以て云はゞ國と云るは廣くして縣と云ふは國より小く又村里など云ふは縣より又小し常に其國之某縣と云ひ又古事記帶日宮ノ段に末羅縣之玉島里崇神天皇御紀に茅淳縣陶邑景行天皇御紀に八代縣豐村など有を以て其稱の大なる小きを辨ふ可し後世の分國・(キザミ)と大形は違はざるなり 推古天皇御紀に今當二朕之世一頓失二此縣一後君曰下朕凝婦人臨二天下一以頓亡中其縣上云々と有るを以て此詞に合せて此を思ひ惟を思ふに倭國の六縣の全(ミナ)は朝廷の御料なる事疑無き者なり但此詞に生出甘菜辛菜乎持參來氐と有る故は鈴屋大人說の如く陸田物を作りて貢進る地耳なるが如くなれども然らず其御縣に生出る植物は稲穀より始て甘菜辛菜に至る迄に總守護坐るが此祈年と六月十二月月次祭とには菜蔬を守護給ふ御靈を祭らるゝ事にて四月七月の大忌祭に就ては稲穀に係る御靈を祭らせ給ふ事大忌祭詞に倭國能六御縣及山口爾坐皇神等前爾皇御孫命能宇豆乃幣帛乎云々と有るは秋の稲穀の爲の御祭なるを思ふ可し然ればこそこの祈年月次等の祭詞には菜蔬の事有て稲穀の事無く大忌祭詞には稲穀の事有て菜蔬の事は云はざりけれ 此外にも有て次なる山口坐神祭詞にも月次祭詞にも山より伐出す材木の事を耳云るに大忌祭詞には山より出て田地を貸ふ水の事を云ひて百(カメ)みに當けると同じ例也 此に由て此を見れば御縣とは頒田にて田畠(ハタケ)を共たる語なりけり記傳二十九五十九丁に神代紀に陸田種子(ハタケツモノ)水田種子(タナツモノ)と有るは田に成物と畠に成物とを分て云るなるを總て云ふ時は二共に多那都母能と云ふて田は畠をも包たる名なる事を知る可しと云れしは然る言なり上に引る孝德天皇御紀に校二田畝(カムガヘタハタケ)一と有るに證して知る可き物也 鈴屋大人も大忌祭詞に此六御縣の神の事の有るに就て六御縣には御田も有るなる可しと迄は云れながら縣は上田にて畠の事を云なりと立られし說は非なり 〇生出の生は表發する事なり其は第七詞三卷三十九丁に云る如く天日の光輝大地に照徹る時は大に芽し萠む可き奇靈なる神氣を生するに種子を蒔るは其殼より表發し自然生(オノヅカラ)の物は其苗を表

發して根より幹を出し幹より枝を出し枝より葉を出し竟れば其植物の形躰備はり花實の用を遂ぐ神氣の得る所各土に異有りて自然山野に草木生じ田園に稻穀生(ナ)り菜蔬生りて同じ物と雖も氣味同じ可らず各自(コト〴〵)なるは天日の光輝の大地を照温する間に生る神氣も亦其土の形勢に因て異り有也然れば於布とは表發の義にて其表發する有は天地氤氳せる神氣の土質を資て形躰有るなり此六御縣爾生出と有るにても唯に其土毛を以て備進る謂には非ず其土毛を生し給ふ由なるは上に云る如く豐受大神の分御靈なる事云も更なり次文に皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故と有るを以て其縣主などの出自の神には非る事を知る可し此は其作物に功を成し坐る神より餘には申さぬ祝詞の例なるを思ふ可し〇甘菜辛菜 第二詞を始め諸祝詞共に大野原爾生物者甘菜辛菜と有るに同じく此は菜蔬を該羅て云ふ稱なり甘辛は其味を以て分つ耳にて此二語を以て其多きを聞せたる文にて第二詞なる手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐の例の如し斯る例甚多かり菜を那と云ふ所由を先辨ふ可し那とは主と立る物有れば其に相對ひて輔相くる物必有る其を云ふが本にて物に名と云ひ吾に對ふを汝と云ふ如く膳に相對へては菜と云ふなり然れば田園の菜蔬を始て海藻をも魚物をも摠云ふ語なり甘菜辛菜に限らず凡て諸の菜蔬は上に記せる如く若宇迦乃賣神の御靈物なるが神代紀に保食神云々嚮レ海則鰭廣鰭狹亦自レ口出又嚮レ山則毛麁毛柔亦自レ口出と有る如く魚獸に至るまで人の菜(ナ)として性命を養ふ所以の資は悉く其神に成幸給ふ處なり古事記中に伊奢沙和氣大神の太子と御名易の禮代に入鹿魚を氣比大神の寄奉給しに依て御食都大神と申し高橋氏文に磐鹿六鹿命云々山野海河者多爾久々乃佐和多流岐波美波多乃廣物波多乃狹物毛乃荒物毛乃和物供奉雜物等云々是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉天と安房大神は粟大神と申事にて古事記に粟國謂大宜都比賣と有る大宜都比賣は豐受大神に坐事古始太元攷に云る如くなればなり 鈴屋大人云く萬葉十一四十二丁に朝魚夕菜と作る是朝も夕も那は一なるに魚と菜と字を替て書るは魚菜に渉る名なればなり魚に在れ菜に在れ飯に副て食物を凡て那と云ふなりと云れたり此は記傳十四卷なる眞魚咋の註を取れるなるが尙魚を那と云ふは饌に用る時の名なり只河と無く海川に有るをば佐と云て那とは云はず此差異を心得置く可し持統天皇御紀に八釣魚(ヤツリナ)と云ふ蝦夷の名の訓註に魚此云レ儺万葉五に多良志比賣可美能美許登能奈都良須等美多々志世利斯伊志遠多禮美吉と有る奈都良須は魚釣なり此等魚は饌の料なる故に那と云り今世にも鮓に爲る魚を須志那と云ひ魚を鬻(ヒサ)ぐ尾を那夜と云へれば菜(ナ)も魚(ナ)も同言なり此を別の如く思ふは文字に泥める後の僻なり今世にも菜を字音にて佐伊と云ふ時は魚にも渉る如く古那と云ふ名は魚にも菜にも亘れり又肴は酒に副る菜(ナ)にて魚菜に亘れり其那の中に菜よりも魚をば殊に愛て美き物と爲る故に稱て眞那(マナ)と云りと云れたり此は甚く文の序を改め又切めて云けり 如此く那は魚にも菜にも渉る言なれども朝夕に用ふる所園菜の方耳多かる故に打任せて那と云ふは菜の事なり此は內膳式に年料供奉雜菜日別一斗蘗料三升生瓜三十顆准三升自五月迄八月所レ進茄子四十顆准一升六七八月莧四升五六七八月薊六把准六升自三月迄九月蕗二把准一升五六七八月蔓菁四把准四升自正月迄十二月莖立四把准四升三四月薺四升正二十一十二月萵苣四把准一升三四五月葵四把准一升五八九十月羊蹄四把

進二升四五八九十月 韮二把進二升自三月迄九月 葱二把進一升正四五九十十一十二月 蒜一百根進二升正二四十一十二月青進五六七八月子進三四月雜業五六月子 生薑八房進二升六七八月 蜀椒二合 蓼十把進二升自四月迄九月 蘭二把進一升自正月迄十二月 胡荽二合正二九十十一十二月 蘿菔根四把進四升正二十十一十二月 芹四把進四升自正月迄六月 水葱四把進四升五六七八月 芋莖二把六七八九月 雜菓子五升生大豆小豆各六把並六七八九月 生大角豆六把六七月 芋子四升正九十十一十二月 豉豉古五升二三月 熟瓜八顆六七八月 栗子三升七八九月 桃子四升七八九月 柚子十顆九十月 柿子二升九十十一月 枇杷十房五六月 李二升五六月 覆盆子二升五月 笋四把五六月 中宮准レ此其 東宮雜菜五升 壺料二升雜菓子三升生大豆小豆大角豆各三把波々古芋子各二升栗子一升桃子二升柚子五顆柿子李子各一升枇杷十房笋二把云々進ニ何升と有るは御縣より供進する所の料の假(ツモリ)なり 漬年料雜菜蕨二石料鹽一斗 薺蒿一石五斗料鹽六升 薊二石四斗料鹽七升二合 芹十石料鹽八斗 蕗二石五斗料鹽一斗米六升 蘇良自六斗料鹽二升四合 虎杖三斗料鹽一升二合 多々良比賣花搗三斗料鹽三斗 龍葵味葅六斗料鹽四斗八合楡三升 瓜味漬一石料鹽三斗 蒜房六斗料鹽五升 蒜英五斗料鹽四升四合 韮搗四斗料鹽四升 蔓菁黃菜五斗料鹽三升粟三升 右漬二春菜一料 瓜八石料鹽四斗八升 糟漬瓜九斗料鹽一斗九升八合汁糟一斗九升八合滓醬二斗七升醬二斗七升 醬漬瓜九斗料醬滓醬各一斗九升八合 糟漬冬瓜一石料鹽二斗二升汁糟四斗六升 醬漬冬瓜四斗料鹽八升八合醬滓醬味醬各一斗六升八合 菘菹三石料鹽二斗四升楡一斗五升 蔓根須須保利六石料鹽六升大豆一斗五升 蔓菁菹十石料鹽八升楡五升 蔓根搗五斗料鹽三升 菁根須須保利一石料鹽六升米五升 醬菁根三斗料鹽五升四合滓醬二斗五升 糟菁根五斗料鹽九升汁滓一斗五升 蔓菁切菹一石四斗料鹽二升四合楡二升 茄子五石料鹽三斗 醬茄子六斗料鹽一斗二升汁糟味醬滓醬各一斗八升 糟茄子六斗料鹽一斗二升汁糟一斗八升 龍葵菹六斗料鹽六升楡二升四合 龍葵子漬三斗料鹽九升 水葱十石料鹽七升 糟漬小水葱一石料鹽一斗二升汁糟五斗 蘭菹三斗料鹽二升四合楡一升二合 大豆六斗料鹽六升汁糟一斗八升 山蘭二斗料鹽四升 蔓菹四斗料鹽四升楡一升六合 荧一石五斗料鹽一斗五升米七升五合 蘘荷六斗料鹽六升汁糟二斗四升 稚薑三斗料鹽六升汁糟一斗五升 爵蔛草搗三斗料鹽四升五合 和太太備二斗料鹽二升 舌附一斗料鹽二升二合 桃子二石料鹽一斗二升 柿五升料鹽二升 梨子六升料鹽三升六合 蜀椒子一石料鹽二斗四升 荏裹六斗料瓜九斗冬瓜七斗茄子六斗青橡四斗鹽一斗一升醬味醬滓醬各一石 右漬二秋菜一料云々と有る如く年中供御料を其御縣より朝廷に召上させ給ふ事なりしを但其品々の物共も其時に取て增減も有る可ければ強て拘る可からず唯延喜の當今の有樣を思ふ可し今京になりて後は上に引る山城國の御園と替れゝども尙橿原の御世よりの遺制に因准せ給ひて其御祭共は尙此六御縣にて有し故に其地より出る趣に申成し給へるなり此に就て說有り御縣山口水分など今京にては山城國に定させ給ひて祭らる可きを然らぬは大に所由有る事なりけり其は出雲國造神壽詞に大穴持命乃申給久皇御孫命乃靜

坐牟大倭國申天巳命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐云々皇御孫命能近守神登貢置天八百丹杵築宮爾靜坐支と有る如く皇御孫命の大宮處と敷坐す國は大和國に定させ給ふ神界の御制有る事なるが故に皇御孫命の御心と佗國に都城を遷し易給ふ事有ても其は內々の事の如くなる因縁などに依て大和國に尙依然の狀には祭らせ給ふらむかし 此事委しく說徵す可き事有て大祓詞出雲國造神壽詞などの下に云り然れど一應(ワタ)り此事を心留置すては得有ぬ事なるが故に少驚し置なり ○持參來氐は其甘菜辛菜を所々の御縣より運送りて貢奉るを云なり次文に皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故と有るへ續けたる樣何とかや言足らぬ心ちの爲めれど如此云ふぞ古文の格なりける 持參來氐は其御縣の仕丁などの運送奉る事を云ふなり且(フ)と見ては皇御孫命の御自持參來坐す樣に聞ゆめり 然ればは持は其御縣より貢上る方に係り參來氐は其を受納給ふ天皇の御方に係れるが必如此云ふ可き文法なり其は御縣の仕丁は朝廷より其員數を定めて任けさせ給へれば此二を合せて云ひ續く可き者なりかし內膳式に營園仕丁十四人 一人直丁十三人駈仕丁 川船一艘 長三丈 在ニ與等津ニ右漕ニ奈良奈美等園供御雜菜ー など見えたるを考ふ可し 其外にも耕種園圃にも其單功を記して耕地把犁駁牛料理平和畦上作殖功芸(クサギリ)採功打功下子運功分畦𢪸苗ー度制刈功擇功堀畦溝蹈位拂虫䟽(ツチカヒ)採苗堀功擇功などの員まで御定有る事也

皇御孫命能 長御膳能 遠御膳登 聞 食 故皇御孫命能字豆能 幣帛乎 稱 辭竟奉登 宣

長御膳能遠御膳登聞食故は其菜蔬を水分神詞に長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故云々廣瀨大忌祭詞には皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤丹能穗爾聞食牟皇神能御刀代乎始氐云々龍田風神祭詞には皇御孫命乃遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾閉食須五穀物始氐云々大甞祭詞に天都御食乃長御食能遠御食登皇御孫命乃大甞聞食牟爲故爾など例多し 中臣壽詞にも天津御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久云々と見ゆ但天津御膳遠と有る遠は必乃なる可し遠にても聞ゆるが如くなれども然ては次に瑞穗遠と有る遠と重れりと玉勝間に云れたるは此大甞祭詞に合せて然る事を通ゆれども尙然には非じ此は天神より由庭の穗を皇御孫命に賜る御命なれば其乃チ天津御膳也然れば遠字甚重くして乃に替難し又遠の重復咎む可き非す 長御膳能遠御膳とは日夜間斷無くと云ふより其大御世の久しき後迄を豫て云るなり 古書の中に長く遠くとも彌遠長爾とも重ねて云ふ常ノ例なり又唯に遠とも長とも云り 長御膳の長は其時を正中と指云て竟を見ぬ義なり物の間を中と云ふに其旨違はず然れば長中の言は去來にて澁滯する事無き由なるを以て其久遠なる事に云ふ語と爲れるなり又神隨などの奈賀良此に同じ 水に流ると云ふも其岸と岸との中間に在て淵下する事久遠なる由なり心を着て考ふ可し 遠御膳は遠は其處を所在と定て

其經歷する事の久しきなり然れば處大の義なり物の中に通徹するを登保留と云ふに近し然れば遠徹の言に又通歷の意も有る可し（物を問ふ人を訪ふなど云ふも彼に行徹りて事を爲て由なり近と對へる例は下に云り三十口丁の處見る可し）此を以て考れば長は中より敷演る意遠は此より通徹する意にて同じく久遠なる義の言ながらも長は此より後を云て古に云はず遠は此より以前の事を遠世遠 神遠 人など云て將來の事に大凡云はず一端なる語の如くなるが此も彼も常云ふ所廣邈く遠大なる語共なるが長と遠と此二語を合せ聯る時は其旨彌々深し然れば此の續きも遠神世より聞食し來る御膳の甘菜辛菜を奉りて長く遠く聞食すと云ふ義なり（斯る言義を餘り言痛く説くは益無き事の如くなりと雖も一應り此心得無くては其說の當不を得知るまじきを恐れてなり）

山口坐皇神能前爾白久飛鳥石村忍坂長谷畝火耳無登御名者白氐

山口月次祭詞に山能口と有れば能の辭を加へて稱ふ可し此は麓山の事なり廣瀨大忌祭詞に皇神等乃敷坐須山山乃自口云々又古事記下卷高津宮段に那良ノ山ノ口など有るも此に同じく山に入立つ口と云ふ義にて俗に山の上り口と云ふ此なり物の端方を指て口と云ふ事常多かり然れば口は此方と云ふに近し（水の落る所を水口と云ふなども此例なり又川口湊口なども其外にも多かり）但山口は山の蹈本ながら谿谷より應に登らむと爲る所の名なり谿谷は和名抄に爾雅云水出レ山入レ川曰レ谿水與レ谿相屬曰レ谷（和名太爾）と有り太爾は垂にて上に引る廣瀨大忌祭詞の次文に山山乃自レ口狹久那多利爾下賜水乎甘水登受氐と見え大祓詞にも高山之末短山之末與理佐久那太理爾落云々と有るを以て悟る可し（式に近江國栗太郡佐久奈度神社名神大と有るを今櫻谷と云ひ又伊勢の度會郡瀧橋郷豐宮崎に井谷と云ふを神祇本源には井是と記せりと云り此は平田翁說なり此等を以ても多利と多爾と同しきを思ふ可し倚廣瀨大忌詞また大祓詞の下に云へし）偖此詞は宮室を營る料の宮材を伐るの用に就て山神を祭らせ給ふなるが其御祭は山口にて行はせさせ給ふ事なるが故に其御社は山口にして齋祀らせ給へり（下に引る山口神社の所在を見るへし）但此祈年祭に預らせ給ふは年中遠近の山々より宮材を京に送り奉りて宮室を造らせ給ふに就て也六月十二月月次祭も此に同じ然ども其時に臨て其材を採せ給ふ時には其事に就て別に御祭有り及大嘗祭式齋場條に卜部率二國郡司以下及役夫等一入二卜食山一採レ木即祭二山神一訖酒造兒先取二齋斧一始伐レ木然後諸工下レ手（採大嘗宮材進レ此）又卜部率郡司以下雜色人等入二卜食野一刈草即祭二野神一訖酒造兒先苅次諸人下レ手（苅二大嘗宮草一進レ此）と見え酒米事ノ條に凡造酒司酒部一人

率ニ燒灰一人駈使五人一入ニ卜食山一先祭ニ山神一云々と見えたるが如し又儀式の齋郡にて祭ニ六神一と有る下にも竈門井山積意加美水神と見えて山積神其列に加給ふ御事をも思ふ可き物なり 但上に引る文を儀式には次各爲レ採ニ大嘗宮御殿料材一禰宜卜部國司率ニ造酒童女物部人井夫等一向ニ卜食山一祭ニ山神一云々祭畢造酒童女執レ斧伐レ木夫等終レ之運ニ置齋場一次終爲レ苅ニ同殿料萱一稻實卜部宮主禰宜卜部國司郡司率ニ造酒童女物部男井夫等一向ニ卜食野一祭ニ野神一云々祭畢造酒童女執レ鎌苅レ之夫等終レ之運ニ置齋場一と見えて少く精麁有り卜食は儀式に卜定採ニ大嘗宮材木萱井御琴料材柏等山野一即下ニ知卜食國一と見え式にも其文を記して令下山野所屬郡司一人專當禁守一勿ち入ニ穢人一と見ゆ 又臨時祭式に造遣唐使舶木靈幷山神祭と云も有て屋宇は更にも云はず舟車を造るにも先此山神を先に祭て後に物爲給ふ事此一條を以て思ひ毀(タト)らる 古語拾遺神武天皇ノ段に建ニ都橿原一經ニ營帝宅一(テイタク)仍令下天富命率ニ手置帆負彥狹知二神之孫一以ニ齋斧齋鉏一始採ニ山材一構中立正殿上と有る齋斧齋鉏の名は神事に依て冠れる語也山材を採るに其祭典の式有て濫りならざりし事の狀を熟思ふ可し 蓋上古の世神物官物分ち無く爲て皇神に仕奉る事は天皇に仕奉り天皇の御爲に爲る事は皇神の御爲にも物爲仕奉る定例なりし故に神廷に於ても山口祭の御政有り其は大神宮度會宮共に造替の度每に有る事なり伊勢大神宮式に凡大神宮廿年一度造ニ替正殿寳殿及外幣殿一 度會宮及別宮餘社造神殿之年限准レ之 皆採ニ新材一構造云々と有て次に山口神祭幣物の事有り次に操正殿心柱祭の幣物の義有て此二條の結めに右造宮使忌部自率ニ內人幷役夫等一就山木本祭之と見ゆ 此幣物の數は下に儀式帳を引て記せり其所々に校せるを見る可し 儀式帳にも新宮造奉時行事幷用物事ノ條に云々次取ニ吉日一山口神祭用物幷行事鐵人像式形四十口鏡四十面鉾四十柄 式ニ云已上三物度會宮減レ半以下祭准レ之 大刀二十柄 式作長刀子廿枚 忌手斧一柄忌鎌一柄 式作鉾一張 小刀一柄 式無 五色薄絁五尺木綿二斤麻二斤庸布五端 給宇治大內人一人山向物忌一人父一人御巫內人一人忌鍛冶內人一人已上人別一段○式用內人明衣料庸布五段度會宮減ニ一段一 已上授ニ官庫之物一即金物造ニ忌鍛冶ニ內人 酒一斗米一斗堅魚二斤鮑二斤雜魚一斗 式曰雜腊 雜海藻二斗 式無 鹽二斗鷄二羽 式雄一雌一 鷄卵十丸 式枚 陶器五十口土師器五十口已上物以ニ神稅一大神宮司所ニ充奉一 右祭造宮驛使忌部宿禰告刀申畢即山向物忌以ニ忌鎌一且草木苅初然以後役夫等草苅木切所々山野散遣(チラシスツ)然宮造畢時返祭料物如始 此まで式なる山口神祭の幣物の數に替る事無し山向物忌は宮材を伐取る物忌なり儀式帳に山向物忌無位磯部祖繼と云ふ人有り磯部氏の事は第三巻に委しく云ると同じ 次に取ニ吉日一爲ニ正殿心柱造奉一率ニ宇治大內人一人諸內人等戶人等一入ニ杣木本一祭云々と有るも山口ノ神祭なるか諸調度の山材を以て造る物の祭此に同じ 但此に一例引出たるは式に操正殿心柱祭と見えたる祭の事なり上に引る大嘗宮の營奉る時の山神祭に異ならず此を以て神廷朝廷其揆一なる事を知る可し 又式に凡操下營ニ神田一鉏鍬柄上者每年二月先祭ニ山口及木本一然後採レ之所レ須鐵人像鏡鉾各八十枚と見えたるは朝廷の山口祭に同じく每

年の恒例の神事なり此事を儀式帳の二月例に先始來子日大神宮朝御饌夕御饌供奉御田種蒔下始爾宜內人等率ニ山向物忌子ニ湯鍬山爾參登時波忌鍛冶內人乃造奉留金人形幷鏡鉾種々物持弖山口神祭然到ニ櫟木本ニ即木本祭（祀物員如ニ山口祭ニ）云々と見えたり但櫟は鍬柄に造る料なる故に其木本に至て祭らるゝなる可し然れば山口にては摠ての山神を祀り木本にては其用有て伐取る木神を祭らるゝなりけり（尙山神の田作る事に預り給ふ由緒有り其事は次々云ふが如し尙大忌祭詞に委く辨てむ）如此く山口神を祭らるゝに二例有り其一は造宮の度に當て採用らるゝ所の宮材の用に就てなり此は其材を採る山にて有る事なるが故に定處無きが如し（大嘗宮の山神祭皇大神宮の山口祭などにて其は其時に臨みて必祭らるゝ事にて每年の事に非ず）其一は年中伐用らるゝ山材の御祈に依て祭らるゝなり此は朝廷なるは山口坐神社神廷なるも必定所有る可し（其は此祈年祭六月十二月月次祭また大神宮每年二月の山口木本祭等なり）故山口神と云ふは云ふ迄も無く大山祇神に御在らるが御力を合せて共に所居せるは闇龗神に御在す可し此神の御事を皇大神宮儀式帳及び古書共に大水上神とも大水上御祖命とも大水神とも深水神とも深溝神とも大山罪御祖命とも大山津比賣神とも申して決く大山祇神の后神と通えたり然るは廣瀨大忌祭詞に皇神等乃敷坐須山山乃自レ口狹久那多利爾下賜水乎甘水登受而天下乃公民乃取作禮留奧都御歲乎惡風荒水爾不相賜汝命乃成幸賜者と有るを思ふ可し大山祇神は摠ての山神に御在せば其山に採る所の材木に就てこそ祭給ふ可き業なるに大忌祭詞に主と水の事を耳云るは斯る所由に依れるなり然れども神記官文共に其傳を漏されたれば據る可き證も無りしを山城國乙訓郡小倉神社記を閱て美き眞說を得たり此に依て古書を再復さひ閱るに其徵と爲る事少からず其精說は例の太元考に委りて其較略を云むに闇龗神與ニ大山祇神ニ合レ力而坐神也故亦謂ニ山神ニ也と有るぞ正說にて必然有る可き事と思えたり又記傳六闇淤加美神の注に久良は谷の事なりと云れしを思ふに大山祇神は摠ての山の主宰と在し闇龗神は其谷を司り給ひて兼て水の事を守り給ふなる可し然れば儀式帳に大水上神と記せる事彌々慥なり但記傳に書記に高龗神と云ふも有り其は山上なる龍神闇淤加美神は谷なる龍神なり」と云れたれど淤加美神は本一柱なるが山上なるに高と稱し谷なるに闇と申

せるにて別神に非ず式に大和國吉野郡丹生川上神社名神大月次新嘗 此社は闇龗神を祀る由諸書に見えたるが雨師神とも申せるを類聚三代格なる寛平十七年符に右社祝禰宜等解狀你謹撿名神本紀曰不聞人聲之深山吉野丹生川上立我宮柱以敬祠者爲天下降甘雨止霖雨者依神宣造件社云々と有れば谷に御在る事決し然れば山神と申す事大に所由有る事なりけり古史徵第十七段に上に擧たる高龗神の亦名どもを大山祇神の亦名と爲られたるは深くも考られぬ說にて今依難し 然るは此神を大山罪御祖命と申すは即后神の謂にて神產巢日御祖命の例なり然るに古書に記せる樣は必其御母を指云ふ事にて其御子の方より稱給ふ語なれば如此云ふまじきに似たりと雖も然に非ず大山祇神の后神なる事をも知しめたる物なり次々に其御子神なども記せるに心を着く可し尙上に引る貞觀儀式に祭六神と有る處に山積意加美と相並へるをも思ふ可し 斯て四時祭式に廣瀨大忌祭の下に是日以御縣六座山口十四座合祭と見えたるに就て說有り其は前段御縣坐神詞の下に引る如く古事記に羽山戸神娶大氣都比賣神生子若山咋神次若年神次妹若沙那賣神次彌豆麻岐神次夏高津日神亦名夏之賣神次秋毘賣神次久久年神次久久紀若室葛根神と見えたる羽山戸神は大山祇神の外曾孫に坐せば其御靈を受坐て大山祇神の御功德を幽贊奉給ふ神に御在り其は同記に大山津見神野椎神二柱因山野持分而生神云々と有るに似通ひて體用の等差こそ有けれ事趣は異る事無し大山津見神と羽山戸神とは體用なり豐受大神の分身と坐す野椎神と大氣都比賣神とは躰用なり此は甚も大切(イミ)じき事共にて神典の秘縕を探索奉るの要領にて予が秘說なり 其御子八柱の中より四柱は農作の事に功しみ坐て御縣の方に就て祭られ給ひて此四柱神は御母大氣都比賣神の御德を幽贊け奉給ふめり若年神若沙那賣神夏高津日神秋毘賣神の四柱を云ふ委しくは前段に云り 自餘の四柱は山材の事に功しみ坐て山口の方に就て祭られ給ふと思ゆ此四柱神は御父羽山戸神の御德を幽贊け奉給ふ故に御名義悉く山に依れり其は先若山咋神の若は生の意咋は木合にて山材の蓊欝り蓄息る由なり大山咋神に對せると思ふは非ず大山咋神は事代主神の亦名にて國土經營の時に大山を忌鍬以て平に成し國作り給ふ由なり 彌豆麻岐神は大忌祭詞に山山乃自口狹久那多利爾下賜水乎甘水登受而云々と云ふ意にて山材大に扶疏と爲れば自然大虛より水氣を呼びて枝葉より滴瀝と爲り根幹より流水と爲て下る其積る事久しくして終に溪流と爲る其より田園に灌ぎて稼穡を浸潤す此故に水引神とは申せり神功皇后御紀に爰定神田而佃之

時引(マカセテ)二儺河水一欲レ潤二神田一と見えたるが如し安閑天皇御紀に此田者天旱難レ漑レ水潦易二浸賁一と有る漑字を麻加須と訓り此の麻岐に同じ（中古の歌に多く水を引(マカ)すると咏る此なり谷川氏の通證にも清少納言曳レ水云二字之呂乎麻加世氏一と云る事見ゆ）久久年神の久久は莖なり和名抄木具部に莖玉篇云莖（和名久木）枝之主也と見え字書に草木之幹也とも有れば草木の立る狀を云ふ也皇大神宮儀式帳に久具社一處稱二大水上神御子久々都比賣命一と有る久具社を神名式にも元々集に引るにも久々都比賣神社と有る其若此神ならむには久久刀自神の義なる可し大水上神は儀式帳に大水上神社一處稱二大山罪乃御祖命一と有て上に云る高龗神なるが小倉神社記に亦謂二山神一と有て大山祇神と力を合せて一躰なれど其御子と有る事甚床しきを若くは其御子には坐ながら羽山戸神大氣都比賣神の生坐ると有るを案ふに其御德を成坐るは後度なりし故に神廷には生(ア)れ坐し傳を存し朝廷には功を成し坐る傳の存るにて此亦上に云る體用の差異などぞ有るらむ（此まで考置て尙後の定を俟つ者なり記傳五巻十二巻に云れし說は此考を起し出る種子とは成れゝども大に此趣とは違ふ事有り）久々紀若室葛根神は右に引る儀式帳久具社の下に久々都比賣命又久々都比古命と有て順序此に久久年神の次に久々紀若室葛根神と有るに符(コト)を合せたる如く甚正しく聞ゆるに就て思へば此は木神久々能智神の御德の成就る由の御名也其は久久能智神は師說の如く豐受大神の分身なりと雖も其土着する山に非れば木の質を結ぶ事難し羽山戸神大氣都比賣神の御間に久久紀若室葛根神の生坐る事深き所由有る事なりけり然れば此亦久々能智神と體用の差異に見て可け(コ)む借名義は記傳十二（五十五丁）に久々は上なると同じく紀は木なり斯て是は室に造る材木の長く立延たるを云若室は書紀に宮を美て日之少宮と云る（日之少宮は檜之若宮なり眞木割檜之板戸檜之御門などの類なり○今云日之少宮は宮殿の事に非す天日に對て天極紫微宮を云ふ古稱にて予が大に考有る事なり太元攷に詳記せり）少と同くて室をも美稱て若と云るなり（其は美豆垣の美豆と同意なり○記傳三に云く和訶は物の盛に美麗き方に云り美稱に若菜と云類なり若は本凡て物の未成り整はざるを云ふ語なれば甚く異なる如くなれども本は一意なり）葛根は都那泥と訓べし葛は綱なり顯宗天皇御紀なる室壽御詞に築立稚室葛根と有るは此と全同じ（古は都奴と都と通はし云り故に都奴佐波布伊波と云は蘿這石(ツヌハフイシ)なり石綱乃又變若反(マタヲツカヘリ)と訓るは又還ひ返る意の續けなり又都多を都具とも通はし云り都夏は今世には蔓葛と云ふ是なり借今思ふに物を結縛ぐ綱にも古は多く葛藤を用ひし故に都那とは云ふなり續紀十九に聖武天皇御世の謚を千尋葛藤高知天宮姫尊と奉給ふを思ふ可し然れば綱も本は蘿と云ふも同じければ葛とは書るなり）又大殿祭詞に此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美下津綱根波府(ツガヒハ)虫能禍無久云々注に古語番繩之類謂二之綱根一と見え

又彼室壽に取結繩葛者此家長御壽之堅也なども有るは凡て甚々上代の家造は何處も何處も繩葛を以て結固し物なり 其中に下津綱根と云るは柱の本の方又床などの邊(アタ)り凡て下の方を結固めたる所を云るなり 然れば此神は民の舍屋造の事に功有し神なる可し」と云れたるが如し偖大神宮儀式帳に毎年七月日祈內人爲ㇾ祈ニ風雨一所ㇾ須絹四丈と有て其を別たるゝ中に此久具社も加り給ふ事故有可し誠に此社は木神に坐せば其御祈ども必有る可き筈なり 但民の舍屋耳ならず天下の舍屋造の事を悉く掌給ふ神に坐り 上件四柱神は何れも舍屋に就て功しき神に坐せるに國々に此神等を祀れる社の全に見えさるは如何にと云ふに其舍屋の用材を出す所山なれば高山短山の中に立して大山祇神に屬御在るなる可し然れば此詞に山口坐皇神等と有るは其祭る所の員數には非ずて其所齋給ふ神等の座數の多き由なり 其は第八詞に御縣爾坐皇神等と有ると同例なり委しくは此卷の八丁に云りき 偖今京に爲りては山城國にこそ山口神社を定めさせ給ひて齋かせ給ふ可きに尙大和國にて祀典せ給ふ事は上十七丁に云る如く神代の幽契を重みし給ふ所なり 神名式に山城國愛宕郡賀茂山口神社有れども此は同じ大山祇神ながら別雷神と申すは事代主神の御男に御在るを祭られしなる可ければ異なり別雷神の別御名なる事など委しく考得たる說も有れども其は太元考に云む 但此社の神にも三代實錄に貞觀元年正月廿七日從五位下を授奉給へり 偖大和國に大宮敷坐し御世頭と雖も宮材を他國に採給ふ事往々見えたれば其所に就て祭らせ給ふ可きに尙山口神社にて毎年の御祈共有る事は伊勢神宮の宮材を他國に採給ふ事と成て後も山口祭は尙其國にて行はるゝが若し 何處に在れ神の御功德の及ふ事等しければ尙古くより祭來る社にて祭祀せ給ふ事故實を失はせ給はぬ御政にて甚貴き御事なり 飛鳥は神名式に大和國高市郡飛鳥山口坐神社 大月次新嘗 と有る是なり 三代實錄に貞觀元年正月二十七日授大和國飛鳥山口神正五位下と見ゆ大和志に在ニ飛鳥村上方鳥形山一と見ゆ日本紀略に天長六年三月己丑 大和高市郡賀美鄉甘南備飛鳥社遷ニ同郡同鄉鳥形山一依ニ神託宣一也と有るは此社の事ならむか偖飛鳥神社は事代主命に御在せば其社に隣給ふ事は大に由有り 石寸は式に十市郡石寸山口神社 大月次新嘗 と有る是なり 三代實錄に貞觀元年正月二十七日授ニ大和國石村山口神正五位下一と見ゆ石寸の寸字は一本及三代實錄萬葉集共に村に作れり鈴屋大人說に石寸は石村なるを村字の偏を省きて書るなり大和國に石寸と云ふ所は無し神名帳の石寸も同じく石村なり是を四時祭式また臨時祭式なとに此社の事を石根と有るも石村を誤たるなりと云れたるは然る言なり 神武天皇御紀に村を阿禮と訓み仙覺が萬葉抄に引る常陸風土記に石村玉穗宮大八洲所馭天皇と作(カ)き續紀にも石村池邊宮御宇云々と見えたり村を阿禮と云ふは在(アリ)の義にや此社の所在尋(タヅ)ぬ可し 忍坂は式に城上郡忍坂山口坐神社 大月次新嘗 と有る是なり 三代實錄に貞觀元年正月廿七日授ニ大和國忍坂山口神正五位下一と見ゆ大和志に在ニ赤尾村一今稱ニ天一神一と有り 長谷は式に同郡長谷山口坐神社 大月次新嘗 と有る是なり 三代實錄に貞觀元年正月二十七日授ニ大和國長谷山口神正五位下一と見ゆ大和志に今在ニ長谷街中一と云り一說に初瀨村今稱ニ手力雄神祠一見ニ初瀨寺緣起一と云り 畝火は式に高市郡畝火山口坐神社 大月次新嘗 と有る是也 三代實錄に貞觀元年正月廿七日授ニ大和國畝火山口神正五位下一と見ゆ一說に今畝火山稱ニ神功社一疑山口神社歟昔在ニ畝火山腹一今遷ニ山頂一云々と云り伴信友が神名帳書入に頓阿自筆の神名帳に宇爾美大明神と有るは此か

りと云耳無は式に十市郡耳成山口坐神社（大月次新嘗）と有る是也（三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國耳成山口神正五位下一と見ゆ大和志に今俗曰二天神山一稱二其天神一者山口神歟と云り）若此く此祈年に就て祭らせ給ふ山口神は此六社に限れるが如くなりと雖も然らず此餘にも尚有りて共に其祈年に預給ひて佗社に超越たる例有る事なり其は四時祭式なる祈年祭ノ條に定れる幣帛を記せる次に高御魂神大宮女神及甘樫飛鳥石村忍坂長谷吉野巨勢賀茂當麻大坂膽駒都祁養布等山口幷吉野宇陀葛木竹谿等水分十九社各加二馬一疋一と見えて此に擧たる山口神は十二社なり（但甘樫は式に高市郡甘樫坐神社四座並大月次新嘗と有る社にて別なり此社今も豐浦村と云ふに立せ給へば水分神にや神名式に攝津國住吉郡天水分豐浦命神社と有るに由有て通ゆるが上に甘樫も木の名には非ず地名なるが若くは雨に由有る事にや尚水分神詞の下に云り）然れば同式廣瀨大忌祭條に山口十四座合祭と有るに二社合はず此に因て彼此を比校るに此詞に載れる山口神六社の中に飛鳥石村忍坂長谷の四社耳有て畝火耳無の二社を遺せり然れども此二社を都合すれば大忌祭に十四座と有る數に符るを何を以て此に減省かれけむと熟考るに畝火耳無の二山は甚も上代には宮材を採る可き繁山なりけむを國中に尖起せる山なる故に既く伐り盡したりけむ故に自然祈年の幣帛に異りは無き乍に別に馬を奉らるゝ事は何時と無く絶廢たりしなり此を以ても此詞の甚古き事を思ふ可きなり（此は崇神天皇の御世より祭始給けるなり然れども其は神武天皇の御世に宮坐るにて其祭事は水垣御世なる事下に云るが如し然れば飛鳥は畝火の都より遠からぬ深山なるを最前に云ひて畝火耳無にも及べるを見る可し此に依て十四座の中より此六座を除きて見れば吉野巨勢加茂當麻大坂膽駒都祁養布等の八座は其より後の御世々々に遷都有し其近き山を祭始られし物にて一時の事ならず是を以て此詞の極めて古き證とも成るべきにや）合せて山口神十四座の中より六座は上に擧る如し餘りの八座の事を說く可し吉野は式に吉野郡吉野山口神社（大月次新嘗）と有り（三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國吉野山口神正五位下一と見ゆ大和志に龍門莊山口村今稱二天神一と有り）巨勢は式に葛上郡巨勢山口神社（大月次新嘗）と有（三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國巨勢山口神正五位下一と見ゆ大和志に在二古瀨村一今稱二高社一と有り巨勢山は郡西に有て高市郡と攝（ツラ）なる地なり若て其山は葛上高市兩郡に跨れりと云り神名式に高市郡巨勢山坐石椋神社許世都比古神社と云も有り）賀茂は式に葛上郡鴨山口神社（大月次新嘗）と有り（三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國鴨山口神正五位下一と見えたり但山城國愛宕郡にも賀茂山口神社有れど此なるは大和國の賀茂也大和志に在二倶尸羅村高鴨山一松樹一株下有二小祠一土人云樹頭時見二靈火一と有り）當麻は式に葛下郡當麻山口神社（大月次新嘗）と有り（但大月次新嘗は京本又一本に依れりと或人の云るぞ可き大十三座と有る當郡の總數に合り三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國當麻山口神正五位下一と見ゆ倭下部氏の神名帳頭注に人皇五十五代仁壽三年始レ之內藏寮式夏四月冬十一月並上申日祭と有るは據有る事にや能く考ふべし此社の所在を大和志に在二高雄寺山口藥師堂西一今稱二新宮一と有り）大坂は式に葛下郡大坂山口神社（大月次新嘗）と有り山口神社の多かる中に其御祭に始て預給ふ事は此社也崇神天皇御紀に九年春三月甲子朔戊寅天皇夢有二神人一誨レ人曰以云々祠二墨坂神一亦

以二黒盾八枚黒矛八竿一祠二大坂神一四月甲午朔己酉依二夢之教一祭二墨坂神大坂神一と有るはこの神社なる事下に記傳を引て註るが如し 三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國大坂山口神正五位下一と見えたり大和志に在二穴蒸村一今稱二牛頭天王一と云り和名抄に葛上郡大坂郷有れば兩郡に亘る名にや 膽駒は式に平群郡伊古麻山口神社 大月次新嘗 と有 三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國伊古麻山口神正五位下一と見ゆ大和志に在二櫟原村一今稱二瀧宮一と有り 都祁は式に山邊郡都祁山口神社 大月次新嘗 と有り 三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國都祁山口神正五位下一と有り此社大和志に在二山口村一と云り 養布は式に添上郡夜支布山口神社 大月次新嘗 と有り 文德天皇實錄に嘉祥三年冬十月乙巳朔辛亥授二大和國夜岐布山口神從五位下一と見え三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國夜岐布山口神正五位上一と見えて他社の例に異れるは何なる故にや此社の所在大和志に在二大柳生村一今稱二天王一と見えたり 偖上に擧たる六座と次なる八座と合せて十四座と成て大忌祭條に山口十四座合祭と有る惣數にも符合て甚分明なるが臨時祭式なる祈雨神八十五座 並大 と有る中にも此十四座を漏さず載られたるは上に云る如く大山祇神と高龗神と力を合せ坐て其御德即水の事にも及ばせ給へばなり續紀に祈二雨于名山大川一と云ふ事時々見えたり名山は此山口神を指すなり大川は水分神なる事決し 廣瀨大忌祭詞に山々乃自レ口狹久那多利爾下賜水乎云々と見えたるに思ひ合す可し 又淸和天皇實錄に貞觀元年九月八日庚申云々巨勢山口神賀茂山口神當麻山口神大坂山口神膽駒山口神石村山口神耳成山口神養父山口神都祁山口神長谷山口神忍坂山口神飛鳥山口神畝火山口神吉野山口神 云々遣レ使奉レ幣爲二風雨一祈焉と見えたれば此時に始りて祈雨止雨の御祈ども有る事ならむと思ふに然に非ず此度なるは爲二風雨一祈と見えたれば古より有來し事なるを風雨の御祈の事異れるが殊なれば別に記されし者なる可し 恒例の祈雨止雨の御祈ならむには態と記さる可くも非ぬなや 若此く記畢て記傳を見れば古事記崇神天皇段に於二宇陀之墨坂神一祭二赤色楯矛一又於二大坂神一祭二黒色楯矛一また御紀に九年春三月甲子朔戊寅天皇夢有二神人一誨之曰以二赤盾八枚赤矛八竿一祠二墨坂神一亦以二黒盾八枚黒矛八竿一祠二大坂神一四月庚午朔己酉依二夢之教一祭二墨坂神大坂神一と有る大坂神は神名帳に大和國葛下郡大坂山口神社と有る是なり龍田風神祭詞に志貴島大八島國知志皇御孫命乃遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物乎始弖天下乃公民乃作物乎草乃至萬弖不成云々皇御孫命詔久神等乎天社國社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行須乎誰神曾天下乃公民乃作々物乎惡風荒水爾相都々不成傷神神等波我御心曾止悟奉止宇氣比賜支是以皇御孫命大御夢爾悟奉久云々我御名者天乃御柱乃

命國乃御柱乃命止御名者悟奉弖吾前爾奉牟幣帛者云々と有を此に思合するに今墨坂大坂神を祭賜ふも年穀の爲にぞ有けると云れたるは甚美好き說と聞ゆるに就て思ふに決て龍田神の御悟の有けるも必墨坂大坂神と同時にて有可きなり（其は其詞の下に委く云ふ可し如何にも墨坂神は水分神に坐るに合せて考るに此山口祭の其御世に始れる事違ひ有ましき者なり）遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐皇御孫命能瑞能御舍仕奉氐 此は大殿祭詞に皇御孫之命乃御殿乎今奥山乃大峽小峽爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐採氐本末乎波山神爾祭氐中間乎持出來氐云々と有ると精粗の異有る耳にして其事は全同じきなり古語拾遺石屋戸段にも令手置帆負彥狹知二神以天御量伐大峽小峽之材造瑞殿及云々と有て異なる事無し（倭姫命世記に伊勢大御神を遷坐へませ奉る處に今歳倭姫命詔大幡主命一名大若子命物部八十支諸人等五十鈴原乃荒草木根苅掃比大石小石造平氐遠山近山乃大峽小峽爾立並木乎齋部之齋斧乎以伐採利本末乎波山祇爾奉祭氐中間乎持出來氐云々と有り）遠山近山を大殿祭詞には唯に奥山乃と有り（倭姫命世記にも遠山近山と云り）遠と近とは對へる語なるが其言義をも辨へ置く可きなり否ざれば其意を得難し遠は上十九丁に云る如く處大にて此より到る處の大なるなり大なれば行く事久し其久しき即遠の語なり（長とも對へり其說上に委し）近は聯處にて其處に聯る義なり（遠は到る處の大きにして久しき語なれば其對語は斯く有る可き物なり）如此く遠山近山と並たるに依て熟此を思ふに遠山は考の說に諸國の山なり萬葉に藤原の宮造の材を近江の田上其外四方の國々より持參る事を云り是を以て此を知る可しと云れし如くなり然れば大和國なるを近山とし諸國なるを遠山と爲られしを今京に成ては山城國を近山とし大和國を始めて諸國を遠山と爲らる可きに尙古の語を用られて其宮材を採る儀式共は依然の如に大和國にて行はれ其山口神をも其國にて祭られて同國の如く物爲給ふ例と通えたり（但宮材を採給ふ儀式を今京と爲りても尙大和國にて行ろゝと云ふ所見無しと雖も此詞に依て考ふれば尙古來の隨に大和國にて有る事にて伊勢大御神宮の宮材を今しは他國に採らるれども山口祭は其昔宮材を採られし近傍の山にて有ると同じ例なり鈴屋大人說に遠山近山とは只文に斯く云る耳にて大祓詞に高山短山と云る類なり遠山を諸國の山と見むは惡けむと云れたるは粗し）○生立留は生立有なり古事記高津宮段に淤斐陀弖流佐斯夫袁また朝倉宮段歌に淤斐陀弖流毛毛陀流都紀賀延波と有りて木に云ふ語なり草には唯生出と云り（其は第八詞に此六御縣爾生出甘菜辛菜と有るより始て古書共に甚多き語なり木と草と云ひ樣の異なる事此にて知可し）出雲國造神壽詞に彼方古川原此方能古川原爾生立若水沼間能彌若叡爾御若叡坐と有るも此の例なり（此に就て鈴屋大人の辨も有れど予が思ふ山と少異なり彼方の古川原此方の古川原の若水沼間に生立る木の彌若枝の指す如く天皇の

若やさ坐せと云事なり又生立とは云はずして唯に立（タテ）ると耳も云り大殿祭詞に奥山乃大峡小峡爾立留木乎と有るを以て知る可し倭姫命世記には大峡小峡爾立並木をと云り常に木立と云ひ立枝と云ふなど此に同じ倘大殿祭詞の註に云ふべし○大木小木 大殿祭詞 には木の生立つ地を大峡小峡と云ひて木の大小を云はず此詞には大木小木と云ひて峡の大小を云はずして偏を省きたる古文の神妙此に發見て此二共に大峡小峡爾生立留大木小木乎と云義に歸（オツ）めり又大殿祭詞には遠山近山乃と云ふ可き所を奥山乃と云ひて其遠近の義をば大峡小峡の大小に含（モダ）せたるなど奇靈しむに堪たり偖此大木小木を意富岐袁岐と訓ても意富岐許岐と訓ても尚落着ぬ心ちす然れば意富岐加那岐と訓て正しく大小の意に當れるにや此に依て今此本の訓を改めて小木を加那岐と爲り大木は柱桁梁などの料其餘屋字を作る料木は幾許も有べし小木は部と爲し維と爲すの料なり其餘にも用る所倘多かり小木を加那岐と云ふ事は大祓詞後釋天津金木ノ條に考云金木は齊明天皇御紀に兵盡ニ前役ニ以レ棓（ツカナキ）戰と有る棓は若木を棒と爲たるなり大きならで手に取る計りなる木の由なり○後釋云棓（ツカナキ）は握加那紀と云ふ事にて手に取持て戰など爲る今世の棒なり神名帳に大和國宇陀郡都賀那木神社と云ふ有るも此物に依れる神名にこそ加那紀は細木の惣ての名なるを其中に手に取持つ金木を握加那紀の意にて都賀那木とは云なり○今云文德天皇實錄に仁壽二年七月辛卯以ニ大和國都那木神ニ列ニ於官社ニと有るは此都賀那木神社なる可し但通本には那を郡と作り郡を加奈の假字に用ひたるかとも思ゆれども倘細井貞雄の本に那と有るや然る可からむ此社を大和志に山路村上方伊那佐山今稱ニ貴布禰ニ十三村民共祭祀歲旱祈レ雨有レ應と見えたり貴布禰は闇龗命なれば大山祇神の高龗神に娶坐て生坐る御子也然ればば大山祇神は山神に坐せば大木を司して其を御靈代と爲給ふに對ひて此神は小木を以て御靈代と爲給ふ由なる可し 孝德天皇御紀の大御歌に舸娜紀都該阿我柯賦古麻播比枳涅世儒と詠せ給へるは小木を馬足に結着けて羈（ホダシ）と爲るを云ふ比枳涅世儒は引出不爲なり万葉五に柜槽（マセ）越爾爹咋駒乃との麻世を柜槽と書るも等し或人今も東國人は小木の枝を加那紀と云り又遠江人の諺に賤しむ若木（カナギ）に目衝しと云ふも小く賤しむ若木（カナギ）の芽を衝と云事なり 又和名抄刑具部に鉗加奈岐以レ鐵束レ頸也又云鈦和名同上胅（ホダシ）沓也此は後の漢字を當たるにこそ有れ此の古は趹（ホダシ）にも小木を用たりし故に加那紀てふ名は有るなり○後釋云和名抄に刑具の鉗鈦を加那紀と爲たるは考に云れたる如く本は小木を用ひたりしが後に鐵に代りても名は古の儘なりしなり 後釋云文選東方朔が文にも以レ筳（カナギ）撞レ鐘と有て註に小木枝也と云りと云れたる如く金木は小之木なる事云も更なり但此文選に筳を加那紀と訓るは管家の點なり偖加那紀の那は能の連聲の轉にて上の言の轉る時は能も隨に轉るなり手之心を多那許々呂手之俣（テノマタ）を多那麻多など云ふ如く下の言の意重き時は上にて其音轉るが其より受るは皆那（ナ）と云ふなり此は小を許（コ）と云ふを加（カ）と轉せるが故に那なり

○本末打切氐は其遠近の山にて採る所の大小の木共の本末をば山神に奉り置て其中間を宮材に用ふ事を云るにて大殿祭詞に今奥山乃大峡小峡爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐採氐本末乎波山神爾祭氐中間乎持出來氐と有るに等し然れば本末打切氐は本末を打切り殘し置くを云ふなり皇大神宮儀式帳に山口祭木本祭

と並へ記して共に行るゝ事なるが心柱條に入レ杣祭ニ木本ニと記し御船代條に杣山木本祭と記して其終(トヂ)めに山向物忌先以ニ忌斧ニ立木本切始云々と有るは其材を採るに就て唯其木本を祭るならむと思ふに然らず其は木の根株(クヒセ)は山に遺る物なる事云も更なれど其杌(キリクヒ)を山神に祭る事を記せるなり斯れば樹梢をも捧る事著ければ大殿祭詞の旨に全く等しきなり上にも云る如く神廷の御事を以て朝廷の公事を比校(カムカ)へ朝廷の御事を以て神廷の故實に比校る事我が古學の要と有る事なり尚貞觀儀式の大嘗宮條に稲實卜部率ニ造酒童女ニ國郡司各一人物部男六人子等五人工十八人夫等爲レ採ニ内院料材ニ向ニ卜食山ニ即祭ニ山神ニ云々祭畢造酒童女先執ニ齋斧ニ伐レ樹工匠次之役夫次之と有るも山に向ひ祭して宮材を伐るを云るなり予此を杣人に聞くに杣人山に入て大木に在れ小木に在れ此を伐る時は其樹梢を折て其木の傍に刺て祭る事なるが其根株も土中まで伐込みて殫く盡す事を大に忌す此を犯す時は山神祟を爲して殃罰を與ふとて大に其禁有る事とぞ縣居大人說大殿祭詞考に遠江國人大木を伐ては其梢を打て切たる木株の中らに刺立侍りぬ古昔も然爲るを本末を山神に祭るとは云ならむと云はれしは然る言にて諸國共に大較此に同じ美濃國邊りにては狗賓餅と云ふ物を拵へて山神に供へ杣人共も祝喰て後に木を伐るなり然らざれば種々の怪しき事有て中々に斧を入れ難し長く處々を伐回る山などは殊に時々其祭を爲ざる時は其祟有りとぞ○大瀧光憲云く出羽國田川郡飽海郡にては杣人の山に入る時其伐らむと爲る木の梢を傍なる所に刺て山神に祀典らざれば究めて其祟有りとぞ且大木を伐る時には鯱魚(オコジ)と云ふ魚の乾したるを携行て其木を倒さむと爲る方に向ひて祈念する事なるが速に應驗有りと云り此事を椎學童に云て其越後國の事を問しに然りとぞ彼國にては鯱魚を山に持行く時は必失ると云り國に依り所に依りて神の心も種々有る物なり○持參來氐は持出來と云ふに同じ大殿祭詞には然云り倭宮材を引く事は萬葉集一卷藤原宮役民歌に筏に造りて川より流し歩より運ぶなど種々なり委しくは其歌に就て見る可し皇大神宮儀式帳に造宮驛使忌部宿禰其忌柱造奉畢自レ杣出前追運來置ニ正殿地ニ也とも御船代料材自レ杣出時前追進ニ正殿地ニ之とも見えて皇大神宮の宮材を引くには警蹕(ミサキバラヒ)前導して其儀ひ行幸の如くなりし趣なり然れば上古の天皇の大宮造の材共も其如く甚嚴めしく物爲りけむ事此詞また大殿祭詞を考て知る可し其神廷に同じ在(カラ)むと思ふ由は齋斧齋鉏など云ふにて知られたり必忌愼しめりし上古の有様見るが如し○皇御孫命能瑞能御舍仕奉氐は第四座摩神詞には皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氐と乎の辭添へり同じ事なり但第四詞なる座摩神は古語拾遺に大宮地之靈と有れば其地に宮室を營み給ふを以て御舍乎仕奉と云ひ此は山材を採來て宮室と爲す由を以て山神を祭られ大殿祭詞は宮室と爲れる上を以て御殿神を齋き祭らるゝ事にて各々條理に於て異なる所有思ひ紛ふ可からず其地を祭ると其材を祭ると其宮を祭ると甚際々しは甚愛たる賜物なり又大祓詞なるは其宮に住

給ふ天皇の御事に係りて神等に預らず能々前後の續きに思を潜む可し予が説言には斯の若く微細に事を判つに依て其續きに依て異なる説共多し心を着て考ふ可き物なりかし

天御蔭日御蔭登隱坐氐四方國乎安國登平久知食須賀故

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

此所仝第四座摩神詞に同じ上にも云る如く彼は大宮地の靈と坐す神なる故に其所に大宮柱太敷坐る恩賴の慶びを申給ひ此は皇御孫命の天御蔭日御蔭と隱り坐む瑞の御舍を遠山近山より伐取て宮營り給ふ由の辱き由を申させ給へるなり然るに山口神には靇神も从ひ御在して水の事をも預知食すなり其は大忌祭詞の下に説く可し然れば此は木の事に耳用有て祭らせ給ふ物にて六月十二月月次も此に同じ四月七月の大忌祭に靇て祭らせ給ふは水の事に耳用有て木の事には預ざるなり知食須賀故は第四座摩神詞には知食須我故と作り此二つに證を得て思へば第五御門神詞に夜能守日能守爾守奉故また第六生島神詞に皇神等能依左志奉故また第七大御神宮ノ詞に茂御世爾幸閇奉故また第八御縣神詞に長御膳能遠御膳登聞食故また次なる水分神詞に赤丹穗爾聞食故と有るもみな云々我故爾と訓む可く思えたり六月十二月月次祭詞も此に同じ此外には見當らぬ詞なり此は先に云ふ可かりしを思ひ漏せりし故に今此に擧ぐ○宇豆乃幣帛は第一詞下に引る定れる員數の如し然るに山口神十四座の中此詞なる畝火耳無を除て餘社には各馬一疋を奉らるゝ由已に四時祭式を引るが如し此神等の御會釋の重かりし事是を以て悟る可き物なり畝火耳無の二社の此事に漏たるは宮材を其地に採る事は良稀になりけむ故ならむと思えたり其事上にも云り

水分坐皇神等能前爾白久吉野宇陀都祁葛木登御名者白氐辭竟奉者

水分坐神を古事記には速秋津日子速秋津比賣二神因河海持別而生神名沫那藝神次沫那美神次頰那藝神次頰那美神次天之水分神次國之水分神次天之久比奢母智神次國之久比奢母智神自沫那藝神至國之久比奢母智神并八神と有る此天之水分神國之水分神の二柱なるが其出自は異に考る所有り其は云ふ如く大山祇神高靇神の生坐る御子ならむと所思るなり尙古事記なる右の前文に生水戸神名速秋津日子神次妹速秋津比賣神と見え又神代紀第六の一書に水門神等號速秋津日神と見えたる等字は彥と姬とを包なる可く思ゆれとも然らず大祓詞に荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾座須速開都比咩止云神持可可呑氐牟と有るに依る時は比賣神一神に御在り記傳五三十一丁に此二柱は

阿波岐原の御禊段より錯亂せる者なりと爲て此を伊豆能賣神に配られたるは云れたる說なり若然も有らば一柱の比賣神の二柱に分れて男女と並坐す例佗に有る事を聞かざれば此は必速秋津比賣神一柱なる可し然らば惜しき傳ながら因河海持別而生神云々と有るは依難し（倭姫命世記に伊勢の瀧原宮は此日子神並宮は此比賣神と記せれども大神宮式及び皇大神宮儀式帳共に大神遙宮と有れば後人の加筆なる可し尙委しくは第三卷に其宮の出る所有りて辨たるが如し）沫那藝神沫那美神は沫蕩尊生二伊弉諾尊一と有る凡ては非傳なれど强に捨難き事有り然るは宇比地邇神須比地邇神と申より始て次々の御名は伊邪那岐伊邪那美命の修理固成給ふ御事と其物の形貌とに依て負坐る御名なるに准へて此を思ふに神代紀一書に此二神青橿城根尊之子也と有るに等しく且は靑と沫と甚近き語なるを以て見る時は全く沫那藝神沫那美神は伊邪那岐伊邪那美神なる事疑無き物なり然れば此は水戸神の御子ならず此を除く可し（記傳三の五十丁五の三十九丁に有る說は信ひ難し其は太元考に云ふ可し）頰那藝神頰那美神も同じく上に例して伊邪那岐伊邪那美神の御名なる可し此二柱神の天瓊戈を下して磤馭盧島を探得坐し時の御行事を以て負坐るなる可し頰は記傳の說の如く都夫良にて水の粒立つを云ふ然れば此も水戸神の御子ならず此を除く可し（但し御名義は記傳五の三十九丁に說れたるが如し）天之水分神國之水分神は龍神とも申して一神なるが大倭神社注進狀なる率川坐大神御子神社三座の傳に中御子神左事代主神右玉櫛姬云々と見えて玉櫛姬を子守神と記せり其中なる御子神は事代主神の玉櫛媛に娶て生坐る御女にて神武天皇の太后ノ坐す伊須氣余理比賣命に坐せば其御子に對へて子守神とは云ふならむと思ふに然らず實には玉櫛媛は水分神に坐て大山祇神闇龗神（亦名大水上神）の御女に坐り故事代主神八尋熊鰐に爲て娶給ひ后神とは爲し給へるなり（神名式山城國乙訓郡小倉神社大月次新嘗と有るを社傳に丹生川上神社貴布禰神社と等しく闇龗神を祀ると云り）所以に皇大神宮儀式帳に小杜神社大水上命兒高水上命形石坐と見え次に許母利神社粟島神御玉形無と有る粟島神は神名式志摩國答志郡粟島坐伊射波神社二座（大名神）と有る此にて伊射波は率川の略ならむと見え志摩國風土記に事代主神到二子伊勢島一而得レ鱸祭二天神地祇一因其地曰二鱸藪一と見えたれば事代主神子守神二柱を合せて粟島神とは記せる也又伯家神名帳に式に河內國若江郡長柄神社と有るを祭神事代主神也曰二子守神一と見えたるは其后神の御名の方を俗に傳たる物なり又

神名式に山城國愛宕郡鴨川[河イ]合坐小杜宅神社（名神大月次相嘗新嘗）と有る社を年中行事秘抄に延喜元年十二月太政官符儞件川合神是御祖別雷兩神苗裔神也と有れど所見無し同式に大和十市郡皇子神命神社姫皇子命神社小杜神命神社屋就神命神社（以上四神大社皇子神）と有る大ノ社は神武天皇御紀に神八井耳命多臣始祖也と見えて神八井耳命の母は伊須氣余理比賣命なれば其は姫皇子命神社に祭られ給ふ可く又小杜神命社は其御母と坐す子守神に坐す事決し是を以て見れば鴨川合坐小杜宅神も同神たる可き事云まくも更なり然らば小杜宅神は賀茂別雷神の后神たり別雷神は事代主神たる事已委しく見えて太元考に云るが如し（但宅字の訓は健（タケ）の意なるにや然れば小杜宅（コモリタカ）神社とぞ訓む可き靇神の御女と坐す稜威を備たるなる可し舊訓乎許曾（チコソ）夜部と有れ共其據る所を知らず神名式に河内國石川郡建水分神社有る大に由有て小杜宅神に近く聞ゆるなも思ひ合す可し）如此く水分神を事代主神の后神玉櫛媛又活玉依比賣又溝咋比賣又伊古奈比賣共に一と定むる時は其所緣甚分明なり神代紀に事代主神化二爲八尋熊鰐一通二三島溝樴姫一或云二玉櫛媛一生二兒姫蹈鞴五十鈴姫命と有るを舊事記には都味齒八重事代主神化二爲八尋熊鰐一通二三島溝杭女活玉依姫一生二一男二女一兒天日方奇日方命妹姫蹈鞴五十鈴姫命次妹五十鈴依姫命と見えたるにて水分神と同神なる事の動くまじきを明らむ可し尙雄略天皇御紀に七年云々天皇詔少子部連蜾蠃曰朕欲レ見二三諸岳神之形一云々乃登二三諸山一捉二取大蛇一奉レ示云々と有を或云二菟田墨坂神一也と見えたるを思ふ可し假令此時に捉取たるは墨坂神ならぬにも爲よ已に此神の形の大蛇なる事の聞え高在し證ならずや此墨坂神を記傳に水分神と定められたるは實に確說にて下なる宇陀水分神の下に云るが如し事代主神の熊鰐に化て娶坐し事の状を考亘して明らめ知る可し（三島は攝津國地名なり溝咋耳は高靇神なる可し式に攝津國島下郡三島鴨神社溝咋神社並るを見る可し活玉依姫の依は延と訓むべし古歌にも三島江の玉江と咏る此なり古事記白檮原宮段に大物主神の事と爲れど彼は山城風土記なる丹塗矢の故事の混れなり又水垣宮ノ段に大物主神娶二陶津耳命之女活玉依毘賣一云々と見えたるは事代主神の事を大物主神の事と爲たる僻傳にて中々に舊事記の方正しき事云も更なり能辨ふ可し又伊豆國三島神社は事代主命なるが其后神を伊古奈比賣神と申して伊豆國に在るを以て伊豆佐賣神とも申にや陸奥國宮城郡伊豆佐賣神社を惣國風土記に祈祭溝咋比賣也云々と見えて式に志波彦神社名神大と相並るも由有り志波彦神は鹽彦神にて事代主神其國に坐て始て鹽を製造り給ひしに依れる御名なり）此に就て事代主神の大山祇神に殊に親しく御在す事を云可し神名式なる伊豫國越智郡大山積神社（名神大）を世に三島社と申て大山積神一柱の如くなれども伊豆國賀茂郡伊豆三島神社（名神大月次新嘗）を土俗の傳記に伊豫國より遷り坐りと云るが主と祭る神は事代主神なり然

るに一宮記及び諸書に大山祇命と有るも強に僻事とは云難し然るは事代主神は其大山祇神闇龗神の御間に生坐る伊古奈比賣命を娶坐せば官より祭らるゝ所は如何に在れ男と坐し婿と坐せば共に御在す可き事云ふも更なり（此を以て何れの國にても事代主神の鎮坐す社の近邊りに大山祇神の鎮坐す由來を知る可し）然ればば大山祇神は山神に在して水源を掌りて能く雲霧を起し給ひ闇龗神は雨師神と坐して膏雨を降し給ふに其御子と坐す水分神は山より出る水を分理して灌給ふ神なれば大山祇闇龗二神の御子なる事著ければ速秋津日子速秋津比賣神の子に非ず然れば古事記の此文を除く可し（尚水分神の委しき事は下に云ふ可く此は其出自を正せる耳なり）天之久比奢母智神國之久比奢母智神は神代紀（第三の一書）に伊弉冊尊生二火產靈一時爲レ子所レ焦而神退矣亦云神避矣其且二神退一之時則生二水神罔象女及土神埴山姫一又生二天吉葛一と見え鎮火祭詞に火結神生給氐美保止被レ燒氐石隱坐氐云々吾名妹命能所知食上津國爾心惡子乎生置氐來奴止宣氐返坐氐更生子水神匏川菜埴山姫四種物乎生給氐此能心惡子乃心荒比曾波水神匏埴山姫川菜乎持氐鎮奉禮止事教悟給支と有る此正說にて天吉葛と匏と同物なるが水神匏埴山姫川菜乎持氐は師說の如く水神は匏埴山姫は川菜を持て鎮奉れと教給へるなれば水神の鎮火の時に持給ふ料なり然らば御禊の時に成坐る水戸神の御子と爲ては理に叶はず然れば此を除く可し（水神匏埴山姫川菜云々と教給へるは伊邪那美命の未黄泉國に行坐さりし前なり伊邪那岐命の御禊は其黄泉國に行坐して還り坐る後の事なれば全に叶はざる也）如此く古事記の此一段は事實に叶はぬ事共の多きに依て思へば此は決めて神代より傳にては無くて良後に種々の神名共の殘れるを惜しみて杜撰る傳なる可ければ予は此を取らず鈴屋大人の此邊りの傳を訂正れたる後乘と爲りて予亦此錯亂を訂正す事斯の如し（此を訂正したる上ならでは神の御上を說徵し奉る事の成難きに依て恐けれども如此く考徵し奉る物なり）偖水分神を申奉るは雨師神の寄せ給ふ水を分配給ふ神なり天之水分神國之水分神と稱し奉るを思ふに久麻理の久麻に雲の意を藏（タモ）ち麻理に餘（マリ）の義を兼たれば雨師神の施給ふ雨水を虛空にて分配りて其潤ひを遍く導き物爲給ふ可し此天之水分神と御名に負坐る所以なり（式に攝津國住吉郡天水分豐浦命神社と云ふ有り大和國高市郡甘樫坐神社四座大月次新嘗と有るは古くより豐浦と云地に坐り然らば甘樫は雨師（アマカシ）などの同語にや然も有らば天水分豐浦命神社は水分神と雨師神とを合せたる御名なり豐浦は其祭る地名なるが甘樫四座の中より此二神を別に移し祀ひし物にそ有可き文武天皇御紀に二年四月奉レ馬二于吉野水分峯神一祈レ雨也と有るを考合す可し尚式に丹後國與謝郡籠神社名神大月次新嘗と有るを天水分神なりと云ふと記傳に記されたり又三代實錄二に安藝國水分天神と有るは天之水分神なる可し）國之水分神は考に萬葉に神左

振磐根己凝敷三芳野之水分山乎見者悲毛など有るにて瀧川の分れて落る所を方々へ分ち配る意なり此に因て田の水に就けて祭給へりと云れしは然る言なり久麻理に隈在（クマリ）の義をも兼て川隈の所などに在すなる可し一言にして兩義を包みたる例尚有り記傳に古今六帖片戀題歌に美許毋理ノ神と多く咏み清少納言冊子に神はと云ふ中にも美許毋理神有り此等も水分を誤れる名かと有り　如此く其德を施し給ふ所を以てこそ天とも國とも別に御名には負坐れ實には一柱に坐る事已に云るが如し偖其神社の所在を說明めむとす吉野は神名式に大和國吉野郡吉野水分神社（大月次新嘗）と有此にて右に引る萬葉の歌に三芳野之水分山と有る此山に鎭座せり文武天皇御紀に二年四月奉レ馬二于吉野水分峯神一祈レ雨也と見えたり續後紀に承和七年十月己酉授二大和國無位水分神從五位下一と見え三代實錄に貞觀元年正月二十七日授二大和國吉野水分神正五位下一と見えたり此御社吉野の水分山に立せ給ひて子守明神と申せり本居大人の玉勝間十二卷に委しく記されたり就て見る可し大和志に丹治村相傳昔在二水中址一水分山年々山崩遷二神社于此一每歲初夏吉野山僧修二祭于社前一と見えたるは別社なる可し何にも爲よ今子守社に相違なし　宇陀は式に宇陀郡宇太水分神社（大月次新嘗）と有る是なり記傳廿三（三十八丁）に水垣宮段に於二宇陀墨坂神一祭二赤色楯矛一崇神天皇御紀に九年春三月甲子朔戊寅天皇夢有二神人一誨之曰以二赤盾八枚赤矛八竿一祠二墨坂神一云々四月甲午朔己酉依二夢之教一祭二墨坂神大坂神一と有るは此水分神なるが龍田風神祭詞に依て思ふに此水垣御世に如此殊に祭給へる神等は祈年の爲なりけむを凡て祈年には水分神山口神を祭給ふ例にて祈年月次の詞共に山口坐皇神等能前爾白久云々水分坐皇神等能前爾白久吉野宇陀都祁葛木登御名者白弖云々と並言ると此に大坂神（大坂山口神社なり）並て祭賜ふを思ふ可し三代實錄に貞觀元年風雨の御祈に遣レ使奉幣四十五社の中多くは山口神と水分神とにて其中にも大坂山口神宇陀水分神も入れり右の趣共を熟く考るに墨坂神と申すは宇陀水分神社なる事決かる可しと云れたり祈雨神祭式には宇太を宇陀に作れり三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國宇太水分神正五位下一と見ゆ此社今母理村に在と云り大和志に在二下井足村一云り萩原の隣村なりとぞ井足と云ふ名に依れば此方貫に然る可し　都介は式に山邊郡都祁水分神社（大月次新嘗）と有る是なり和名抄には都介に作り四時祭式には竹谿に作れり三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國都祁水分神正五位下一と見ゆ考頭書に云く今山邊郡鞆田村に都介山と云ふ山有り此處なる可し　葛木は式に葛上郡葛木水分神社（大月次新嘗）と有る是なり本に名神と爲るは衍なり四時祭式に見えず且他社の例に異なるに依て今此を改む三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國葛木水分神正五位下一と見ゆ此社今關屋村に在と云り考頭書には今葛上郡增村と云ふに美許母利と云ふ處有りと云れたるは宜しき心ちす然れば或說に關屋村と云ふに在と云るは增村の隣村などなるを誤れるにや　如此く吉野水分神宇陀水分神都介水分神葛木水分神と地名を以て稱云ふは御縣坐神山口坐神などの例にて吉野山の水分神葛木山の水分神と其地に在て其處の水を分配り給ふ御功を

施し給ふに依れるなり（此事第八詞なる御名者白氏の下に委しく解說せるが如し）偖四時祭式なる此祈年祭條に吉野宇陀葛木竹谿等社各加ニ馬一疋一と有るは豫に田に引せて稻を養はむ料の水を乞求給へるなり（但上に引る文武天皇二年四月に馬を獻給ふは祈雨の御爲なるにて恒例の事には非ず此祈年なるとは別なり）臨時祭式なる祈雨止雨神八十五座の中に此四所神も加り給ふは事實に於て然も有る可き御事なり（文武天皇御紀に大寶元年四月戊午奉ニ幣帛于諸社一祈ニ雨于名山大川一また元明天皇御紀にも元正天皇御紀にも祈ニ雨于名山大川一と云ふ事時々見えたり名山大川は漢風の文を擬られたるかと先には思しかども然らず山口神水分神を祭らせ給ふ事祈雨止雨神條に合せて知らる）皇神等能寄志奉牟奥津御年乎八束穗能伊加志穗爾寄志奉者皇神等爾初穗波穎爾母汁爾母瓱閇高知瓱腹滿雙氐稱辭竟奉氐

此同文上なる御年神詞に在り然れども御年神は農事を守護給ひ水分神は水理を知し給ひて其主宰る所殊異なり是を以て彼詞には皇神等能依左志奉牟奥津御年乎手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取作牟奥津御年乎云々と續けて田を殖るより稻の成立つ迄其勞く狀を悉く云ひ含めたる者にて此詞と同事の委しきならず本より別異なるなり能く其條理を正し辨ふ可し（立返りて其詞の下に云る事共を見合す可し）此詞に皇神等能寄志奉牟云々と有るは其とは異也然るは水分神は上にも註る如く田に水を分配附與給ふ神に坐すが故に農事の上には抱り作に抱り給はぬ所有り是を以て農事を云はざるなり偖雨水こそは人力の及ばぬ事なりけれ田に灌く水を引する事は農作る民の事業なるを皇神等能寄志奉牟と云るは顯にこそ人の引する水なれ幽より水分神の相預はして其事を善く爲令め給へるが其即水分神の天皇に奉らせ給ふ由なり是を以て寄志奉牟云々寄志奉者とは云り然れば第二詞の下に云る如く古語に事依奉と多く見えたる與佐須は與須にて其任を人に寄る意なる事は云も更なれど尚深く此を考ふるに古來より依と授との差別を知らずして混同せり與佐須は令レ爲レ善にて我事業を人に附託て善く爲さ令むるにて人に爲令むれども何處迄も依せたる方も寄られたる方も相離るまじきを授は眞附にて彼に委ねたる上は授たる事無くして授りたる一方に落著く義有り然れば依すは主の方重く授くは客の方重き也神等の人に事を依せ給へるも然にて凡て神等の各自に殊異なる功德を保ち坐るは天壤と共に其窮り御在し坐すまじ

き御業なり然れば顯世に在と有ゆる物も事も悉くに人草の物と爲り事と爲れる若き物から其は神等の成し給ふ表向なる方をこそ人に依せて其人々の事業として善く爲さ令め給ふには有けれ其實は幽冥より預鎔造らせ給ふ事にて授けて神の傍より守護せ給ふには非ず依して神の幽より共に成し給ふにぞ有ける然れども其爲す所人事に在て神の所置を我も見ず人も知られば我が爲す所は神の爲さ令め給ふ所なるを人皆知ざるが故に世人の神を思ふ事甚遠くして鬼神の我が左右上下に在て護持する事を知らざるは憐むに堪たり ○八束穗能伊加志穗爾寄志奉者は田に水を分配りて人の農作り養育ふに神の御守に依らずては霖雨旱損の蔵厄有りて能く登る可からず神の冥助に非ずては水をも心に引す可からざるが故に其事を神等に係て申せるなり此事は一巻の三十九丁に云れば考合せて悟る可し ○皇神等爾初穗乎波穎爾母汁爾母甕閇高知甕腹滿雙氏稱辭竟奉牟は第二詞に初穗乎波千穎八百穎爾奉置氐甕閇高知甕腹滿雙氐汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟と有ると大同じく少異にして義に於て異る事無し然れば此の穎爾母の穎は上に初穗乎波と云る其を指す事にて第二詞に有る千穎八百穎爾奉置氐の詞を省かれたるなれども其なりに能く通ゆるなり鈴屋大人說に此詞にも六月十二月月次祭詞にも穎爾母汁爾母と云ひながら次に其汁の事を耳云ひて穎の事無きは語調はずと云れたれど初穗卽穎なる事を思ひ漏されしなり又考にも此所の言の略きに過たり常有る事ぞとて濫りに略く時は俗に落るなり上代には此境を能く爲りと云れしも如何なり後世の如く多々しく云はずして能く聞ゆるは上代の詞の妙なる物を如何に思ひ僻められけむ

遺乎波皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故皇御孫命能宇豆能幣帛乎稱辭竟奉久乎諸聞食登宣

遺乎波は上に初穗乎波穎爾母汁爾母云々と有るを指て云るなり第七詞にも殘乎波平聞看と有りて其語は同じながら其用ひ方に輕重の差有て其下に云るが如し第三巻の九十七丁に云り ○朝御食夕御食は大殿祭詞に皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉と有る其なり古事記日代宮段には朝夕之大御食と記され皇大神宮儀式帳に朝大御饌夕大御饌と作きて常住不斷聞食す大御食と云ふ事と心得て宜しけれども尙考るに天皇の供御を始て諸人の食物古昔より朝夕二度耳在しなり朝餉夕餉の稱有るを以て知る可し大膳式新嘗祭條に當日給食料を記されて其男辰日旦女卯日夕辰日旦給之また辰日於二省家一給之なども見えて旦夕の二度より外無し但卯日夕辰日旦など記るは其參仕する時を以て云ふなり今も然にて表立たる儀式などは上下共に朝夕の二度に物爲て日中の食は唯内々の

事に爲めり此は古昔は朝夕耳なりし趣を傳たる物なり予が淡路國などにては朝夕なるを朝御膳夕御膳と云ひ日中なるを御茶漬と云ひて儀式に立ざるは古風の自然に傳はれるなり然れども部會の地は然らず晝を表向に立て御膳と云ひ朝夕なるを茶漬と云ふは凡ては商賈の者の辨理に隨ふなり然れども其出來始めは佛に淫する痴者の朝夕魚肉を避たるより傳染(ツッレ)るにて忌はしき事云ふ計り無し○加牟加比は上に朝御食夕御食と云る料の稻にて神穎なりと考に云れしは然る言なり然れば穎に例の神某と云ふ神の語を冠たる物なり穎の事は一卷なる第二詞の下に云り世人彼葉牙の詞備と此加比とを混つに思ふは如何にぞや詞備は芽み出る意加比は食實にて自然に別なり又一ノ義を包たり鈴屋大人說大祓詞後釋附錄に加牟加比爾の加は宇迦之御魂など云ふ宇を省るにて食なり食も宇氣の宇を省るにて加と氣とは一なり酒を佐加竹を多加とも云ふ如く宇氣も上に在る時は宇加とも云り牟加比は萬葉歌に御食向と詠る向にて神に物を手向と云ふも同言なり○今云萬葉二に御食向大殿之宮六に御食向淡路之島また御食向味原宮九に御食向南淵山など見えたり倭牟久流と云ふは命レ向にて奉る方より云ふ語牟加布は其を受給ふ方より云ふ語なれば加牟加比は食向にて御膳に着給ふを云ふなり然れば爾てふ辭は下の聞食へ係て云り」と云れしも然る言にて此も彼も捨難きを以深く考ふるに神穎と食向とを兼て此には云るなり出雲國風土記飯石郡の所に須佐之男命至ニ坐須佐郷一而此國者雖ニ小國一國處也故吾名者不レ著ニ木石一詔而即鎭ニ置巳命之御魂ニ而定給大須佐田小須佐田矣故云須佐即有ニ正倉ニまた島根郡の所に須佐之男命詔ニ朝御餼勘養夕御餼勘養五贄組之處ニ而定給之處云ニ朝酌郷一也と有り如此く須佐の御田を定給ひしと朝酌郷との故事を合せて思ふに勸養は神穎にて御食料の稻穗なるが加牟加比に食向の義も有るを以て加比には養字を書り古人の心遣ひの深切なる事を思ふ可し但養を加比と訓るは藤原宇合卿を馬養とも書れて例甚多かり又明文抄に引レる大倭本記に天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面子鈴一合也註云一鏡者天照大神之御靈名天懸大神也今伊勢國磯宮崇敬拜大神也一鏡者天照大神之前御靈名國懸大神今紀國名草宮祭敬拜大神也一鏡皮子鈴者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神今卷向穴師社所坐拜祭大神也と有る朝夕之食向と云ふ事此詞に朝御食夕御食能加牟加比爾と有ると全同事なり但釋紀にも此書を引たるか朝夕御食夜護日護云々と有りて明文抄に引るとは此耳ならず外にも大に異なる事多かり故今其を知令む爲に其全文を載つし然れば此事二義に亘れるが神穎の意の方は爾の辭を直に受け食向の方は爾の辭を聞食へ係て心得可きなり古文には斯る事時々有る物なり心狹き識者の說とは雲泥の相違有る事なり○長御食能遠御食登は上に朝御食夕御食と云る照應なり此は第八詞に此六御縣爾生出甘菜辛菜乎持參來氐皇御孫命能長御

膳能遠御膳登云々と見えたると同じ續け樣なるが彼は菜蔬を以て長御膳能遠御膳と云ひ此は稻穀を以て長御食能遠御食と云るが其差異分(ワキ)明しからでは得有るまじき事なるに依て上に朝餉夕餉に着坐す事を云るなり（尚第八詞の下に云る事の有るを見合す可し） ○赤丹穗爾聞食故は廣瀨大忌祭詞に皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤丹能穗爾聞食牟皇神能御刀代乎始氐云々また龍田風神祭詞に皇御孫命乃遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物乎始氐云々と有る此二つは下に云ひ續く可き事の序に云る物にて體に云るなり此なるは云々赤丹穗爾聞食故は上より云ひ下したる事を受て用に云るなり中臣壽詞に悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠云々赤丹乃穗仁聞食弖豐明爾明御坐弖と有るは此なると同じく用の格なり高野天皇御紀に由紀須伎二國乃獻禮留黑紀白紀能御酒乎赤丹乃保仁多末倍惠良伎又貞觀儀式午日儀にも三代實錄四十六にも此と同じく赤丹乃穗食惠良伎能止爲弖云々と見えたり此等は廣瀨龍田の例にて體の方にて下に云ひ續くる料なり能く思ひ辨ふ可し（此故に大忌龍田の二詞には云々乎始氐と下へ云ひ下さむ料に如此く云るなるを此詞は然らぬを以て同語ながら其續き樣に自然に體用の分別有るを知可し）赤丹穗の赤は大嘗祭詞に千秋五百秋爾平久安久聞食氐豐明爾明坐牟云々中臣壽詞に天津御膳遠長御膳乃遠御膳止汁爾毛實仁毛赤丹乃穗仁所聞食弖豐明爾明御坐弖云々と有る豐明の明と同じく御食に在れ御酒に在れ聞食す時は其精氣一身中に充滿て大御顏の麗はしく赤らみ坐す意なり出雲國造神壽詞に赤玉能御阿加良毘坐と有るも大御顏の麗はしく照給ふ事を申せり此豐明の事は下なる大嘗祭詞に云ふを待つ可し（歷朝詔詞解五に豐明の豐は稱辭明は酒を飲て顏の赤らむ意にて酒宴を云ふなりと云れたれど右の大嘗祭詞中臣壽詞などの趣にては酒耳には非ず酒と食とを合せて云るなり） 丹は古事記に阿那邇夜志神代紀に憙哉美哉など書き一書には妍哉此云阿那而惠夜と見え神武天皇御紀には妍哉此云鞅奈珥夜と見え又玉をも瓊(ニ)と云ふ如く物の麗はしく美好きを云ふ言にて擔て諸物の氣韻の云ひ知らず微妙なるを匂(ニホヒ)と云ふなど此に同じ（此詞万葉十六に墨江之還里小野之眞榛持丹穗之爲衣云々と咏り爲ㇾ匂（ニホシ）と云ふ義なり記傳四に阿那邇夜志の注に字書に憙悅也とも好也とも注し研麗也とも美好也とも記せりと云れたり是等の字を充られたるを以て此なる丹の言なるも察む可きなり） 又萬葉十六に丹因子等(ニヨレルコラ)何と詠るも匂(ニホヤカ)宜有子等にて其艶なる貌を云り同卷に二布、二夫爾咲而(ニフニエミテ)十八にも爾布夫爾惠美(テ)と詠るも艶々爾咲にて上なる匂と同じ（卷七に山跡之字陀乃眞赤土左丹着者十六に丹津蚊經色丹など詠る丹色は艶はしく麗はしきを云ふ也） 同三に狹丹頰相(サニツラフ)吾大王者十に左丹頰經(サニツラフ)妹乎念登七に雜(サニ)

豆臘漢女乎座而十三に散釣相君名曰者など云る發語の狹は起辭丹は其氣韻の麗しく美きを云ひて冠辭考說の如く艶然に色着る顏ばせを云ひて赤縣に紅顏と云ふが如くなり 如此く吾大王とも妹とも漢女とも君とも續けたるを以て其艶然にて麗はしく美き狀を美稱ふ言なるを知る可きなり又卷六に狹丹頰歷黃葉散乍十一に散頰相色者不出十二に左丹頰合紐開不レ離など云るは紅色の佐色より美好く麗はしきに依て云るなり都良布は連相(ツラフ)にて其艶ひの滿極る意なり丹着(ニツカノ)ふとは其意殊異なり都加布は佐より來着て其氣韻を添るにて別意なり 穗は考に其赤き餘光を穗と云ふ萬葉に紅衣染雖欲著丹穗哉人可知など云りと云れたるは然る事なるに就て尙餘に此例を求るに如何にも其餘光を云るにて稻穗又瑞穗などの穗の言も元一なりしを彼は虛字此は物名を定りて自然殊異なるが如く成れりしなり 又万葉一に榜乃穗爾夜之枉落十三に雪穗麻衣服者など有る穗は物名には非ず赤丹穗など云ふ穗にて榜の甚白く潔白(アキラカ)なる餘光を穗と云なり七卷に白榜爾丹保布信土(マツチ)之山川爾と咏るを合せて悟る可きなり 然れば物の精粹純正なるを指す事にて神武天皇御紀に磯輪上秀眞國と有る秀景行天皇御紀歌に區珥能摩保邏摩と有るも眞秀にて秀の義は上なる穗に同じ 但此事を古事記にも記せり 良麻は續紀の宣命に天皇大命良麻止詔と有る良麻なり鈴屋大人說に良麻止は附て云ふ辭と聞えたり武烈天皇御紀に臣(ヤツコラマ)顯宗天皇御紀に御裔僕(ミナスヱヤツコラマ)など訓るに同じ現御神云々乃大命ぞと謂に云ひ聞する意に添たるなるべしと云れたる如く國之眞秀と謂に云む料に良麻とは云る也然れば良麻は等眞(ラマ)にて物を取束ね總合する義とこそ聞ゆなれ 借赤丹穗と云ふ語は右に云る如く御食物は更にも云はず御酒などを聞食させ給ふ時は其精氣一身に彌漫て大御顏の明らに榮えに艶はしく照り麗はしきを美稱たる語なり然るに常に多くは酒の事に全云ふ例となりたるは酒氣の一速く循還る事食物に對ては此上無ればなり 上に引る續紀貞觀儀式三代實錄共に然なり然れども酒耳と限れるは尙後世意にて上古は酒にも食にも云るを考へざるなり ○宇豆能幣帛は諸社の比に貿らせ給ふ新年の幣物の外に各馬一疋を奉らせ給ふ事四時祭式に見えて上に引るが如し佗社に勝れて如此くなるは水分の御德を殊に仰がせ給ひ其御幸ひを乞ひ給はむ料なり 山口神も然り山口神は水上に在して水を作醸り給ふ水分神は水源を派(リケ)て分配給ふ御德にて新年祭は令義解に欲レ令二歲災不一レ作時令二順度一と有る御祈なる故に殊より御恩頼を仰ぎ乞給ふ可き御事なりかし ○諸聞食登宣は第一詞に集侍神主祝部等諸聞食宣と有る結なり 考に諸聞食ちふ言を此中らに擧し祝詞共には略きて其始の文と此とに云て事を終たり」と云れたれど然らず 然るは此祈年祭詞較て十段なるを各々其社こそは別なりけれ宣命を受賜る事は一同に爲る事なる故に事は各自に異りながら其首尾は同じ度の事なる故に此を混同に爲る物なり其は第一詞は天社國社の神等に總て申給ふ詞なれば表立て新年祭詞と云ふは其にて其餘の詞共は僻別にて殊に附添らるゝ詞なる事次に註る如くなるに第一詞に高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以と有る結を第三詞

にて皇睦神漏伎命神漏彌命登云々第七詞にて皇吾睦神漏伎神漏彌命登云々と照し應て結へると同例なり 然れば此新年祭詞を十ながら錯綜して見亘すに非ずば誤得る事有る可からざるなり 次なる辭別も此十の詞を都て後に宣る詞なるは其も一々に其詞の下に宣る可きを事畢て後に然爲るを以て此諸聞食登宣も總てに係る事なるを知る可きなり 尚立返りて第一詞の下を考ふ可し

辭別忌部能弱肩爾太多須支取掛氐持由麻波利仕奉禮留幣帛乎神主祝部等受賜氐事不過捧持奉登宣

此は上に擧たる諸祝詞に云々皇御孫命能宇豆能幣帛乎稱辭竟奉と有る其幣帛を取頒つ度に宣る詞なり 此と同文にて月次祭大嘗祭に有り又大神宮九月神嘗祭豐受宮同祭にも忌部弱肩爾太襁取懸云々と有り但此二は辭別に非ず上より續けたり大殿祭詞には齋部宿禰某我弱肩爾太襁取懸氐言壽鎭奉云々と見ゆ 貞觀儀式又四時祭式共に中臣進就レ座宣ニ祝詞一毎ニ一段畢一祝部稱唯宣訖中臣退出云々と見えて右の詞共は幣帛を頒るゝより先に中臣此を宣るが其後に在る事故に辭別と云ひて其境を分てり 江次第新年祭條にも此事を次祝師申レ祝と有る本注に知レ式十段度別稱唯と見えたり此を以ても上なる祝詞共とは別に此辭別を宣る事なるを知明むかし 若て右の儀式共に其次ぎの文に然後皆復ニ本座一伯命レ史奉レ班ニ幣帛一史二人共稱唯各取レ札分ニ立案兩頭東西ニ忌部二人率ニ神部二人一進夾レ案立監ニ頒幣事一史以レ次唱御巫及諸社祝各稱唯云々と有れば此辭別は其幣帛の度に宣るなり然れば此一段は忌部の宣るなる可し諸社祝稱唯と有ればなり 但儀式も皆同じ事なるが文字遣ひなど少の異有る耳にして格別の違無き故に儀式の方に依て記せり別に引出む事の煩はしければなり江次第にも次神祇史二人持レ簡召ニ諸社祝ニ忌部二人立ニ案下一と記せり ○忌部記傳十五丁六十に元來忌部とは神を祭奠る種々の物を造り又然らでも凡て齋潔淸在て事を爲す職を云ふ名なりと云れしは然る言にて此も亦職號なるが儀式に忌部二人と有るを指なり また儀式式共に前條十五日充ニ忌部八人木工一人一令レ造ニ供神調度一當曹忌部官一人監造若曹內無ニ忌部官人一及忌部不レ足ニ九人一者兼ニ取諸司一充レ之云々と有るを以て忌部の主たる事を知る可し 朝廷にては忌部と云ひ神宮にては物忌と云ひて其職掌共に同じ古事記石屋戸段に此種々物者布刀玉命布刀御幣登取持而云々又神代紀下にも乃使下太玉命以弱肩被ニ太手襁一而代御手以祭ゥ此神上者始起ニ於此一矣など見えたる如く此忌部の職掌は太玉命に始れるを以て次々太玉命の神胤の人供作る諸忌部を統領て仕奉れりし故に其長なる由を以て忌部首と云る由古事記に見えたり故其率る氏々の起元は記傳十五に古語拾遺に太玉命所率神名曰天日鷲命阿波國忌部祖也手置帆負命讚岐國忌部祖也彥狹知命紀伊國忌部祖也櫛明玉命出雲國玉作祖也天目一箇命筑紫伊勢兩國忌部祖也また令下太玉命率ニ諸

部神一造中和幣上云々また宜下太玉命率二諸部神一供二奉其職一如中天上儀上また仍令下天富命太玉命之孫率二手置帆負彥狹知二神之孫一以二齋斧齋鉏一始採二山材一構中立正殿上云々採レ材齋部所レ居謂二之御木一造レ殿齋部所レ居謂二之麁香一また又令下天富命率二齋部諸氏一作中種々神寶鏡玉矛盾木綿麻等上云々又天富命率二諸齋部一捧二持天璽鏡劒一奉レ安二正殿一云々また又令下天富命率二供作諸氏一造中作大幣上と有るを以て知る可しと云れたるにて忌部の較略を知る可きなり尚神事に拘はる事には齋舘齋柱などより始て齋某忌某と云ふ事常に多し又皇大神宮儀式帳禰宜內人物忌等職掌行事事と有る條に大物忌宮守物忌地祭物忌酒作物忌清酒作物忌瀧祭物忌御鹽燒物忌土師器作物忌山向物忌など有るは大神宮式に物忌九人と有る數に合るが皇大御神に奉る種々の物を製造る職掌にて朝廷にて忌部の掌る所と粗相同じ尚忌鍛冶と云ふも有り玉作を齋玉作と云ふも同じ倚同書山口祭ノ條にも右祭造宮使忌部宿禰告刀申畢即山向物忌以二忌鎌一草木苅初云々など此外にも忌部氏の京より下りて伊勢の物忌と立交りて行事有り忌部物忌同じき事如此し倩右の忌部物忌忌某など云ふ忌は伊波布伊都久などの伊また悠紀由志理由麻波利などの由より活機きて嚴重に齋み愼しむ由なり然れば伊は氣牟は聚にて世間の汚濁に混同ざる謂にて淸を伎與志と云ふも氣具にて穢を祁賀禮と云ふ氣涸の反語なると同じ事なり又物を忌避る事にて用ふ語なるは主と忌愼しむ事の有るに依て其佗を避るなり三代實錄にも貞觀十三年九月伊勢大神宮に奉らせ給ふ告文に忌部神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善加弱肩爾太襁取懸持齋波利令捧持天奉出賜布云々と見えたり考に云く万葉に色に出つな由米と云るは忌愼しみて顯す事勿れと云ふ言なり仍て此由米の言に齋謹勤勞などの字を書し歌多し○弱肩は鈴屋大人說に肩は番ひめにて折屈む所なる故に弱とは云ふなり今世言に腰を弱腰と云ふも肩と同じく腰も番ひめにて折屈む所に云ふ事同じと云れたり考に禮紀の宣命に弱き身に重き任する事を詔へるに均しく文に云ひて且忌部の勞き仕奉るを顯せりと云れたれど然には非ず此說に就て思ふに弱肩としも云るは其屈伸する狀にて忌部の供作る樣の忠々しきを顯し云るなり出雲國造神壽詞に弱肩爾太襷取掛天云々と其次に祭奠の較略を云るを思ひ合す可し然らば此なるも仕奉禮留幣帛乎と云べく重く係れる事疑ひ無し○太多須支取掛氐は月次祭詞大殿祭詞大嘗祭詞には太襁に作き出雲國造神壽詞には太襷と書り大殿祭詞大祓詞には手襁掛作緖と云も有り此は其詞の下に云ふ可し考云忌部は神事の時手行有る故に襁を掛くめり御膳に仕奉る男女の領巾な掛るが如し後世神を拜む人由も無く木綿襁を掛るは如何に太は全と同じく物の形を具て全き由なり第一詞に宇豆能幣帛と有る下に云る如く

宇豆また全にて一二の二な布多都と云ふも一にては不足(カタハ)なるを尚同等の物を具へて太くなるなり
多須支は記傳八五十一丁に書紀には手繦と書て此云ニ多須枳ニと有り繦字は多須伎に當らず其故は先古の手次も今世に綬人の掛ると全く同物にてか恭天皇御紀盟神探湯の處にも諸人各着ニ木綿手繦ニ而赴レ釜探レ湯など有り然るに繦負レ見衣と見えて多須伎の意無し字鏡に繦帶兒帶也須伎また繦束ニ小兒背ニ帶須支ト有り是に依て思ふに兒を負ふ帶を須伎と云ふを本にて袖を褰(カヽ)ぐる帶をも手より懸る物なれば手須伎とは云るなる可し故書紀には手字を添て多須伎に此字を用られつらむヽ和名抄に本朝式云襷襷各一條襷多須岐襷知波夜今按未詳と見ゆ襷は袖を擧る由の和字なる可しと有り
多須伎とは袖を褰げ透令め又其活機をして壯健に自由に爲さ令む由なる可し然れば須伎と云ふが本にて後に手襷の名有るに非ざる可し○持由麻波利仕奉禮留は大殿祭詞に持齋波利持淨麻波利造仕禮留云々九月神嘗祭又豊受宮同祭の詞には持齋波理令ニ捧持ニ云々遷奉大神宮祝詞には雜御裝束物五十四種神寶二十一種乎儲備天祓清賣持忌波理氐云々など見えて記傳六卷伊豆能賣神の下に說れたる如く伊豆は汚垢の滌祓て明く清まりたる意にて齋忌齋庭などの齋も伊豆と同意にて語も本一なりと云れしは然る言にて古書共に多く齋ノ字をも忌ノ字をも當られたり其意上なる忌部の忌に其義同じ大嘗會の悠紀主基も悠は清潔に齋む意紀は所の義なる可し然れば主基の主は清明るき由なる事云も更なり日本紀私記に湯者潔齋之義也由紀者伊波比支與麻波留之辭也主基者古稱ニ須支ニ師說次ニ於齋忌ニ也云々と有り考に古は齋(イ)む事を由と云りと有り但伊牟の約言なりと云れしは如何有らむ鈴屋大人の古事記下卷取ニ持來王之嫡妻ニの說に持は輕く添言辭なり以伊都久などの以字と同じ万葉十一に紅花西有者衣袖爾染着持而可行所思此の持も以字の意なりと云れたる如く持を輕く見る方宜しきにや捧持などの持は其用を云ふ詞なるが故に重きを持由麻波利の持は其意ならればば輕く見る可きなり但考の說の如く取擬ふ意を以て添たる事云も更なり

中臣壽詞に由志理伊都志理持恐美恐美母淸麻波利仕奉利と有る由志理伊都志理は神等に奠らせ給ふ物を指て云るにて崇神天皇御紀に取ニ倭香山ニ墨ニ領巾頭ニ祈曰ニ是倭國之物實ニ則反之物實此云ニ望能志呂ニと見え古事記に是後所生五柱男子者物實因ニ我物ニ所成故自我子也先所生之三柱女子者物實因ニ汝物ニ所成故乃汝子也など有る如く此の志理は物實禮自利など云ふ實の意なるが其は齋實嚴實の義なり其由は記傳四十一三十四丁に云れたる如ゝ凡て古に由々斯と云は忌憚らるゝ事をも嫌はしくて憚らるゝをも云り儲此二より轉て後には善惡に亘りて甚しき事を云ふ由々しき大事など賛ても惡ても云皆是なりと云れたる如く言義は忌憚るより出たる者なり殊に神事など齋戒を本とすれば由は齋字の義なる者なり此志理の言は□十□段遣唐使時奉幣詞なる禮代の下に注す可し由の事は上なる忌部の條に云る事をも思合す可きなり儲由麻波利

と續く麻波利は侍在字の意にて此は其齋清めたる形狀を云ふ事なる可し第一詞の集侍に思合す可し然れば由麻麻利は齋侍在淸麻波利は清侍在の義なる事疑無し 蕃息(ウマハリ)も生侍在(ウマハリ)なり此等を思ひ合せて其義を知る可くなむ ○仕奉禮留は忌部の齋侍在て其事に勞き功しむ事を云ふなり記傳十四五丁に仕奉は上たる人に事る業には萬事に云なり都加閇は被レ使にて君に使はれ奉るなり 然れば使と事と漢字は異なれども下を使令(ツカフ)と上に被レ使(ツカハル)と云方(イヒザマ)の替れる耳にて言の本は一なり倩雄略天皇御記歌に都何陪麻都羅武また推古天皇御紀歌に訶之胡彌弖兎伽倍摩都羅武烏呂餓彌弖兎伽倍摩都羅武など有て都加閇奉なるを中昔よりは都加宇奉と云ひ又其宇を牟に轉して都加牟奉と云ひ又其牟を略きて都加麻都留と云り如此言の轉れる可ならず其意も漸に轉り來て今は都加麻都留と都加閇麻都留とは甚く異にて同言とも思えぬ如くなれり と有り倩思ふに都加閇の都加は物を束など云ふ如く其事に手携て就て其任を爲すを云へば言義は就方なるを其方の活機て閇とも布とも云ふなり然れば都加は其就く人を指し閇は其就く方にて其任を爲す域を云り 然らば被レ使と云ふ義は末にて就方は本なり 麻都留は歸順を麻都侶布と訓る如く畏み伏ふ事にて身聯在の義なり我身を君位の方に寄せ聯ねて其制令を仰ぐより出たる言なるが弘く敬詞とは爲れるなり又身仕布の意と有る可し萬葉に諂を閇都加布とも詠るにて其通へる事を知る可し然れば祭を麻都流と云ふも其神に親しく身を寄せて仕る事を云なり供神之物は此に亞く事と見ゆ 諂は方聯布(ヘツラフ)にて此の麻都留を麻都侶布と云に均し 又物を獻る事を立奉と云り古事記足名椎手名椎神の語に自ニ然坐者恐立奉一また大氣都比賣の所に種々味物取出而種々作具而進云々爲穢汚而奉進云々また事代主神の語にも恐之此國者立奉天神之御子一また大國主神の御言に此葦原中國者隨命既献也など有る例共を思ひ且して悟る可し記傳九二十七丁に奉字は多豆麻都流とも訓めども又常に麻都流と計にも用る故に斯く立字を添ても書るなり倩献るを立と計り云るは皇大神宮儀式帳 六月十七日夜御食直會歌に 佐古久志侶伊須々乃宮仁御氣立止云々 御食奉るとてなり 此なり 又萬葉一卷に山神乃奉御調等六に宮柱太敷奉など有る此二の訓は誤とは見ゆれど奉を多都とも云ふ事の有に該古くより如此訓るなれば此等も一の證とは爲可くなむ と有り今此說に依て思ふに稱辭竟奉の稱も此立と同意ならむか多都とは家を建つ柱を竪つ言を立つ身を立つなと云ふも壯健に物を興し足はす意なれば稱の義に異ならず 倩第一詞稱辭竟奉の注を見る可し倩忌部の造り調進るには仕奉禮留と云ふを神に申させ給ふには稱辭竟奉と有り然れば稱辭竟奉と云ふ稱は献る幣帛に係り辭は其祝詞にて竟は其物をも事をも盡す義なれば其等を餘(ノコ)して見れば立奉と云ふに粗意を得たるが如し ○幣帛は第一詞の下に出せる員數の幣帛なり 委しく其所に四時祭式を引て記せり能く心留む可き物なり ○神主祝部等受賜弖は第一詞に集侍神主祝部

等諸聞登宣と物の序に云し終めなり其祝詞は畢りて今は幣帛を頒ち行るゝ所なるに依て受賜氏とは云り受賜るは其受る方に就て云ふ語なり中臣壽詞に天兒屋命云々天忍雲根神遠云々神漏岐神漏美命乃前仁受給波利申仁云々と有るも天津水を受賜りに天上に參上れるなり此時天神の御言には其天津水を賜ふ事を事依奉支と有り然れば與す方よりは事依と云ふに相應て授る方にて受賜と云ふ對語なりけり文武天皇御紀の宣命に貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐弖此乃食國天下乎調賜比平賜比云々と有り（受は彼より來るを得るの意賜はるは君より給ふ處を身に戴け載く義なり借此は俗に持返りて云々爲よと云ふに異なる事無し歷朝詔詞解に此詔の受賜利を解て此に持統天皇の捧給ひ負せ給ふ大命を文武天皇の受被賜給ふなり常に人の云ふを受賜ると云ふも本此字の意にて此も又聽給ふ意にも寄りて聞ゆるなり又物を請ふを[illegible]と云ふも通へりと云れたり）○事不過の事は其社々へ祈り奉らるゝ事なり譬ば御縣神には菜蔬の事を乞白させ給ふに依て其祝詞有り其幣帛有り山口神には宮材の事を祈申させ給ふに依て其祝詞有り其幣帛有るが如く各々其天社國社の神等の成し給ふ所の御德を仰がせ給ふ由なり然れば事は言にて此詞共をも兼たる事云も更なり（朝廷より此祈年祭を行はせ給ふ事は天下の爲に大切（イミ）しき御政なるが故に殊に懇到に如此く其事を忽卒に爲しめ給ふまじく御怠らるゝ事なり）不過の阿夜麻都は誤にて我心に思えず其爲す業の案外に惡しく成り行くを云ふ語にて俗に間違と云ふに當れり其證は古事記大若日子段に此二柱神之容姿甚能相似故是以過也と有る過は間違の義なるを以て知る可し（俗にも意表（オモヒノホカ）なる事を見もし聞もしては阿夜阿夜於々など云ふ語共も此に同じきなり又奇しきの阿夜も此意なり）借事不過は中臣の祝詞を以て宣り聞せ忌部の幣帛を取頒たるゝを神主祝部共に忽卒に心得る事無く懇到に受賜はれと令する也（許登阿夜麻多受と訓む可し然るに阿夜麻多受と訓れたれど太しき誤訓なり阿夜麻多受は己が其事を誤つまじと謹しむ義なるを阿夜麻多受に自然になりて其心着る所薄くなるなり能く思ひ辨ふ可し）○捧持奉登宣は祈年の頒幣を捧持て神に獻れと令するなり借事不過捧持云々は江家次第右の頒幣の下に以二召使一傳レ辨曰下諸社幣能可レ被二頒行一と有ると同意の言也但此詞なるは其納る祝に云ひ江次第なるは其を頒つ官人に示す言なれど其究る所は一事なり然れば其能可被頒行の能字は此は事不過と同義なりけり捧は指上也記傳十四（二十三丁）に此は手を高く伸て其末に擧るを云り（俗にも手を高く伸擧て物を持を佐須と云へり）と有る如くなるが此は其頒幣を戴持返りて其神主祝部共を仕奉る社々の神の御前に獻る狀の容々（サヤサヤ）しき事を云ふなり但西宮記に近社幣祝來請遠國幣納二官庫一付二朝集使一と有れば當日集侍るは京近き國々

の社々の祝等なるが遠國のも其新年に預る社の限りは其神主祝部共豫て神祇官に參上りて其祝詞官幣共に自受賜りて立奉る可き法制なるに依て其令する言に差別は立ざるなり 儀式 祭式共に 大神宮幣帛者別置ニ案上一差ㇾ使進ㇾ之と有れば此例に非ず其餘天下の諸社は一に異る事無し文武天皇御紀に大寶二年二月戊戌朔庚戌是日爲ㇾ班ニ太幣一馳ㇾ驛追ニ諸國國造等一入京と見ゆ 其頃未だ國造の神主を兼たるも多かれば此新年の大幣に上りしなり 江家次第にも遠社幣納ニ官庫一と有り此は朝集使に附て其國に下らるゝ由なり但同書に藤氏公卿預ニ春日幣一之後或早退出云々源氏若江氏預ニ平野幣一之後可ㇾ出歟と有るを以て思ふに橘氏は梅宮などゝ然る可き由縁有る社には其氏人より此を受賜りて奉らるゝ事と思ゆ ○因に云ふ四時祭式に國司祭新年神ニ千三百九十五座 ○此は神名式の發端に記せる天神地祇惣三千一百三十二座の中にて並預ニ祈年月次新嘗等祭之案上官幣一と有る大三百四座また並預ニ祈年案下官幣一と有る小四百三十三座を合せて神祇官祭神七百三十七座を措(おき)たる餘なり 大一百八十八座 東海道三十二座東山道三十八座北陸道十三座山陰道三十六座山陽道十二座南海道十九座西海道三十八座○神名式の始に大四百九十二座と有る中より三百四座案上官幣と有るを擢たる餘にて並預ニ新年國幣一と有るは此なり 座別絲三兩綿三兩 ○小は座別絲二兩綿二兩と有れば小よりは各一兩を增たり 小二千二百七座 東海道六百八十座東山道三百四十座北陸道三百三十八座山陰道五百二十二座山陽道百二十四座西海道六十九座○神名式の始に小二千六百四十座と有る中より四百三十三座並預ニ新年案下官幣一と有るを擢たる餘にて並預ニ新年國幣一と有るは此なり但此に五畿內の小社無きは五畿內なるは小社と雖も神祇官祭神七百三十七座の中に加はり給へばなり已に第一詞天社國社云々の下に云りき 座別絲二兩綿二兩 右國司長官以下准ㇾ例散齋三日致齋一日其會祭ㇾ之 祭日並班ㇾ幣者並遣ニ神祇官一 其齋潔用ニ正稅一と見えたる如く遠國の社々の御事は神祇官にて行はせ給ふ事無く其國司に就て其班幣は行はせ給ふと雖も其儀を神祇官の式に准は令め給ひ其幣は官倉庫を開かせ給ひ其國の正稅を用ひさせ給ふを以て御手代を爲給ひて其事を行はせ給ふ者にぞ有ける然れば其祝詞は第一段天社國社神詞を用ひさせ給へ事云ふも更なり 但物に見えたる事無ければ云ふ人も有むか其は其文義を甘(ウマ)こく暁らぬ人のいふなれば取に足らず 備國司の神事に預る事は朝野群載に國務條々事として初任の國司の政務の次第式有るが中に神拜後擇ニ吉日時一初行ㇾ政事云々一擇ニ吉日一始行ニ交替政一事神拜之後擇ニ吉日一可ㇾ始ニ行之一云々と見えたる神拜は即國神巡拜の事なり 更科日記にも東より入來り神拜と云ふ事なして國內歩行しに云々と有るを鈴屋翁の玉勝間國守神拜と云ふ條に是菅原孝標の東國の國司に任(ナ)りて下りしも許より云ひ遣せたる事なり昔は國司任國に下りては先部內の神社に詣し事なりと著されたり又平田翁も玉襷にも有の朝野群載の文を擧られて是より前に神拜の大は見えたれど神拜之後云々と有るを思ふに國に其任國に到ては國ノ神の巡拜は恒例の事なる故に書著さゞる者なるべしと云れたり 又同書に太宰府官人加賀國司但馬國司不初任の時に下さる廳宣の文を載たる何も三條づゝ有て一神寶勘文事右任ニ代々例ニ可ㇾ進ニ上之一一可ㇾ勤ニ仕恒例神事一右國中之政神事爲ㇾ先專致ニ如在之嚴奠一須ㇾ期ニ部內之豐稔一云

々と見えたり玉勝間に此文を擧られて新任國司の廳宣に神事を先と爲る事と云條を立られて云く古は諸國にても神事を重く爲られし事斯の如しと著されたり一に神寳と云ふは社々の神に朝廷より奉らせ給ふ調度を云ふなり一に恒例神事と云ふは國ノ神巡拝の事より始て其神祭の當日は國司も其社に參仕て其祭奠の事を取掟ふ事を云ふなり國中之政神事爲レ先は上に引る神拜後擇ニ吉日時一初行レ政事云々などの如く國政の最首に先神事を以て主と爲る由なり致ニ如在之嚴典一須レ期ニ部内之豐稔一と有るは此なる新年國幣等の事を行ふを云ふなり倘谷川士清が和訓栞に或曰古者國府必建ニ惣社一有レ事ニ國内官社一則國司率ニ僚屬一先修ニ典禮於此一其儀如ニ京師神祇官一と云ふ事見えたり然も有る可し尙元明天皇御紀に和銅四年四月乙未詔賀茂祭日自今以後國司毎年親臨檢察焉など有るを以ても當昔國司の神事に主と預りし事を知る可し但其當然には國司其神社に到りて其祭祀に預る可きを廳に在て出行ざりし故に如此く改て詔は有けるなり如此く國司の神事を務と爲る事は中古の御定かと思ふに然らず此は幽冥事所知食す大國主神の御心と始りける事と見えたり然るは垂仁天皇御紀なる倭大神の御誨言に皇御孫尊專治ニ葦原中國之八十魂神一云々と有るは天皇の御職として天下の諸神を祭らせ給ふ事を云ふ事次文に然先皇御間城天皇雖レ祭ニ祀神祇一云々と有るにて知らる天皇の如此く有る上は其國々の宰持仕奉る人等各々其掌る國處の神祠を持齋く可き事勿論なるに又更に御誨有り崇神天皇御紀に七年秋八月癸卯朔己酉倭迹速神淺茅原目妙姬云々三人共同夢而奏言昨夜夢之有一貴人誨曰以ニ大田田根子命一爲下祭ニ大物主大神一之主上亦以ニ市磯長尾市一爲下祭ニ倭大國魂神一之主上云々有る大田田根子命はその裔と有れば氏人の其祖神を祀るにて別なるが市磯長尾市は垂仁天皇御紀に倭直祖と見えて其倭直の祖は珍彥なるは神武天皇二年御紀に以ニ珍彥一爲ニ倭國造一と有る如く其邊りの地を主領き居たりしかば長尾市を以て祭祀ら令めよと乞給へるなり是を以て大國主神の御心よりぞ出たるならむと所思るなり但倭大神は其荒魂に坐せば殊なる如くなれど然らず惣て神の事を渡し給へる樣の其事の意に依て其和魂に魂を使ひ給ふ事にて伊勢大御神の御託言は常に荒祭宮を以て物實給ふに等しかる可し且皇御孫尊は葦原中國の八十魂神を治給はむと仰給へるに合せ考ふ可し此所由に因れりと見えて其御世に四道將軍の其一に任給ひし丹波道主命遣ニ丹波國一と有るに既く其國にて豐受大神を齋き御在りし也其は大同本記に雄略天皇の御世に大御神の豐受大神を伊勢に迎まく欲す由を御託坐る大御命に今丹波國與佐乃比沼乃眞名井坐豆道主王子八乎止女乃齋奉御饌都神止由居乃神乎吾坐國欲止誨覺給支と有るを見つ可し御鎮座本記にも開化天皇孫子丹波道主貴苗裔八小童女寳殿御鑰關奉開ニ寳殿一と見えて後々迄も度會宮に仕奉る由なり倘第七課下に云るを見よ又倭姬命世記に垂仁天皇の御世に伊勢大御神の

鎭坐せる事を奏させ給ふ時の文に爾時天皇開食旦即大鹿島命祭官定給支大幡主命國造兼大神主定給支と有るを以ても國造に爲て神事を兼る故實なる事を思ひ明らむ可き物なり日本後紀に延暦十八年六月戊子勅祭祀之事在二徳與一レ敬不レ致レ敬神寧享レ之廣瀨龍田祭所下以鎭二彊風災一禱中祈年穀上也而大和國司觸レ事怠慢都無二肅敬一差二遣史生一祇承二朝代一祀無二報應一職二此之由一自今以後守介一人齋戒祇承若有二事故一聽レ遣二判官一と見えたり其嚴なる事如此し（此外古書共に數知らす思ひ合せらるゝ事の多かるを然耳は餘し繁雜しけれは今は唯一二の例を示す耳）○臨時祭式に凡新年賀茂月次神嘗新嘗等祭前後散祭之日僧尼及重服奪レ情從レ公之輩不レ得レ參二入內裡一雖輕服人致齋並散齋之日不レ得二參入一自餘諸祭齋日皆同二此例一と見えたり四時祭式上にも凡踐祚大嘗祭爲二大祀一祈年月次新嘗賀茂等祭爲二中祀一大忌風神鎭花三枝相嘗鎭魂道饗園韓神松尾平野春日大原野等祭爲二小祀一（風神祭已上並諸司齋レ之鎭花祭已下祭官齋レ之但小祀祭官齋者內裡不レ齋其遣勅使之祭者齋レ之）とも見えて其重き事如此し踐祚大嘗會は天皇の大御位に即せ給ひて御一世に一度の大御祭なれば此上も無き大祀なるに其に次ては此新年の御祭を比（マヽ）無き物に爲給へりし事此を以て曉る可き者なり（然るを江家次第公事根源などに二月七月兩度の新年穀奉幣有り此は二十二社の定まる元由なるか其を初めて記さは二十二社注式に村上天皇康保三年依二雨經一レ月八月二十一日被レ奉二官幣於十六社一伊勢石清水賀茂下上松尾平野稻荷春日大原野大神石上大和廣瀨龍田住吉丹生貴布禰等也また一條天皇正曆二年炎旱逕レ日萬物焦レ色六月二十四日加二吉田廣田北野三社一被レ奉二官幣於十九社一吉田廣田北野次第事可レ爲二住吉之次丹生之上一由宣下また同五年二月十七日新年穀之日加二梅宮一被レ奉二官幣二十社一梅宮事可レ爲二住吉之次吉田之上一由宣下また長德二年二月二十五日被レ奉二臨時官幣一之日加二祇園一爲二二十一社一また後朱雀天皇長暦三年八月十八日被レ奉二官幣一之日加二日吉社一爲二二十二社一日吉事可レ爲二住吉之次梅宮之上一由宣下と見えたり日本紀略に天慶六年七月十五日辛卯官府於二五畿七道諸國名神一可新年穀也と見えたれば其頃に始られし事なる可し若此く二十二社を定めさせ給ひて新年穀奉幣爲させ給ふ事甚愛たき事也と云へども同じ二月に有る新年祭の有來し本の儘にて在むには如此く同に斯樣なる事を二度に行ふ可くも非ぬを已く新年祭は廢れたりし故に斯る御定共は出來にけるなり然ればこそ江家次第にも新年祭の次第は甚麁く記されたるに新年穀奉幣ノ條は殊に委到に記されたるなりけれ神漏岐神漏美命以て掟させ給へる事の漸々に違ひ行くこそ天神之御子の御上に有まじき御手違の御事共多く出以て來て朝廷の甚く衰坐す可き端なりけらし返々も偲ばしき者は古昔（ムカシ）なりけり）散齋は神祇令に凡散齋之內諸司理レ事如レ舊不レ得二弔レ喪問レ病食一レ宍亦不レ判二刑殺一不レ決二罰罪人一不レ作二音樂一不レ預二穢惡事一と有る此を六種忌と云り江次第（新年穀奉幣ノ條）に散齋二日（謂前後兩日有二六種忌一）と有るを以て知る可し大嘗會式に凡散齋一月（十一月自レ朔盡レ晦）致齋三日（自レ丑至レ卯）其齋月者預告二諸司一及レ下二符畿內一不レ得レ預二佛齋一清食其言語死稱レ直病稱レ息哭稱二鹽垂一打稱レ撫血稱レ汗宍稱レ菌墓稱レ壤と見えたるか如く其愼み甚嚴重なる物なり（但齋宮式に內ノ七言外七言と云ふ忌詞有り齋王は大御神宮に奉仕らせ給ふに依て常に其御愼の嚴密なる可き事は勿論なるか此なるは外七言なり朝廷の重き大御神事に當內七言の忌詞勿らむや其不レ得レ預二佛齋一さ

有るを以て內七言の忌詞有る事を知らせたる者なり 齋宮式忌詞條に凡忌詞內七言佛稱二中子一經稱二染紙一塔稱二阿良々岐一寺稱二瓦葺一僧稱二髮長一尼稱二女髮長一齋稱二片膳一外七言云々又別忌詞堂稱二香燃一優婆塞稱二角筈一と有る如くなるを大嘗祭式には取捨て不レ得レ預二佛齋一とは記されしが止事を得ざる時は右の內七言を用らるゝ事と知られたり此事今まで心着る人も無かりしにや未其說を聞かず 致齋は神祇令に致齋唯爲二祀事一得レ行自餘悉斷二其致一致齋前後兼爲二散齋一と見えたるが江次第の上に引る續きに致齋一日 謂二當日一也唯祭事外不レ行二他事一 と有る如く祭事を致の外佗事を悉く行はず忌愼しむ事を云ふなり致齋前後兼爲二散齋一と有るは右に引る大嘗會式に凡散齋一月と有りて神事は卯日一日なるに一月の間六種忌を守る耳にて其愼しみ緩なる方も有るを致齋三日と有るは卯日神事迄共に三日の間の事にて止むを散齋は尙致齋の了りて後にも係る事なる故に致齋前後兼爲散齋とは記せるなり 此なる新年祭は前祭十五日と有れば半月の散齋にて致齋は當日一日なるべし國司の散齋三日致齋一日なり朝廷のは此と同じからず其は其調度に日を經る故也 ○臨時祭式に凡祈年月次神今食新嘗等祭料楯板置座木等之類仰二五畿內諸國神戶百姓一令レ操二-進之一 山城國楯板二百枚大和國四百枚置座木一萬二千五百隻攝津國楯板三百九十枚置座木一萬二千隻又河內國楯板二百四十枚置座木一萬二千隻又靭編戶百姓等置座木一千八百三十二隻和泉國楯板百十一枚 と有る楯板置座等の事は四時祭式に前レ祭十五日充二忌部八人木工一人一令レ造レ供二神調度一 但靭者靭編氏作楯木者讚岐國送納前五日令木工寮受レ之此楯木の事は臨時祭式に凡楉木千二百四十四竿讚岐國十一月以前差二綱丁一進納と有る此なり 當曹忌部官一人監造若曹內無二忌部官人一及神部之中忌部不レ足二九人一者兼取二諸司一充レ之其潔衣料布人別二丈七尺 官人細布 一段一人日米二升酒六合 五位二升 鮨三兩 五位五兩又加二東鰒烏賊煮堅魚各二兩一 鹽二句 五位五句 海藻二兩但木工者不レ給二潔衣及食一と有る此を謂ふなり 楯板の故實は廣瀨大忌祭詞に又其置座の事は大祓詞の下に云ふ可し ○臨時祭式に凡甲斐信濃兩國所レ進祈年祭料雜弓百八十張 甲斐國槻弓八十張信濃國梓弓百張 並十二月以前差レ使進上とも有 四時祭式新年祭條に社毎に弓一張と記されたり但其社の數は百九十八所なるに右の弓百八十張にては其員合ざるなり右の臨時祭式の次條に凡但馬因幡美作三國以二神稅一交易所レ進之弓矢大刀者充二臨時祭祓料一と有る中より此を出し擬はるゝなる可し尙弓の事は次なる春日祭詞の下に云可し ○上古より新年月次新嘗等の祭典は朝廷の大御政の有が中にも最尊く重き御事なりしを中古に至ては漸神事の違例共出來れり其は類聚三代格なる官符に太政官符 應下殊加二檢察一敬中禮四箇條上事 右檢案內二月祈年六月十二月月次新嘗等者國家之大事也欲レ令下歲災不レ起時令順上レ度預二此祭一神京畿外國大小通計五百五十八社因レ玆之特致二潔齋一愼令二祭禮一而敬惟疎簡禮非二如在一毎レ至二祭日一奸濫雲集至レ獻二幣帛一老少挐攫徒有二陳設之營一曾無二供神之實一禰宜祝部須レ問二神祇官一敬受二幣物一是奉二其社一而件等人無レ致二其敬一或雇二出身代一不二自參進一或雖二躬受取一無レ心二奠祭一頑愚之

饗狎ニ瀆神禁ニ神靈之祟識ニ此之由ニ凡祭神之禮以ニ神主禰宜祝部ニ爲ニ其祭主ニ而不レ勤ニ職掌ニ踈ニ略神事ニ非ニ唯神主等之怠ニ還又祭官不レ加ニ糺勘ニ之所レ致也中納言兼右近衛大將從三位行東宮大夫藤原朝臣時平宣奉レ勅自今以後京內諸國社所帶諸司殊加ニ檢察ニ畿內外國當國官長相共監ニ臨祭禮之日ニ必致ニ齋敬ニ若祭事不レ愼監察有レ怠者官司處ニ之重責ニ神主禰宜祝部科レ祓解レ職一如貞觀十年六月廿八日格ニ不ニ寬宥ニ寬平五年三月二日と見えたり此は宇多天皇の畏き叡慮に出で甚も甚も尊き御事也當昔既く人心漸に賢しく成て神事を踈簡に物爲初けむ故に如此は宣へる也又同書に太政官符應下二月祈年六月十二月月次祭國司一人率ニ禰宜神主等ニ向ニ神祇官ニ受中取幣帛物上事右可下受ニ取幣物ニ如レ法愼守上之狀去年三月二日下ニ符五畿七道諸國ニ已畢今聞國司緩怠不勤祝部踈略無レ愼中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉レ勅國之大事莫レ過ニ祭祀ニ不レ守ニ符旨ニ怠在ニ國司ニ須下畿內幷近江紀伊等國選ニ國司椽目若史生品官之中謹厚恭敬者一人ニ充ニ使者ニ率ニ禰宜祝等ニ向ニ神祇官ニ受ニ取幣帛物ニ即使每レ社如レ法愼祭々畢之物之狀差レ使言上上致ニ闕失ニ殊處ニ科法ニ又其見參祝部交名者前レ祭一日使者等進レ官事據ニ祈福ニ不レ得ニ乖違ニ自今已後立爲ニ恆例ニ寬平六年十二月十一日と見ゆ如此く懇到なる仰事共の有けるは一向に古道を以て天下を御給ふに依れり如何に尊き御事ならずや（此二の官符の御旨を熟讀み熟思はゞ明亮ならむ者ぞ國宰たらむ人は云も更なり神主祝部に至る迄も今世は此御旨に違たる所行の多かるは如何にぞや天下泰平五穀豐登の御祈は理世安民の御事なるを思はざるこそ氣疎けれ）

延喜式祝詞講義五之卷

嘉永二年二月九日上申

淡路國　鈴木重胤　著
出羽國　田村清彥
越後國　建部倚行　校

○春日祭

神名式に大和國添上郡春日祭神四座（並名神大 月次新嘗）と有る御社此なり此社に勸請奉し由來は春日社記春日小社記二十二社注式等に稱徳天皇神護景雲元年丁未六月廿一日武雷命自常陸國鹿島郡遷幸御乘物以レ鹿爲ニ御馬ニ以ニ柿枝ニ爲レ鞭伊賀國名張郷一瀨河御沐浴以レ鞭爲レ驗立給成レ樹生付自其復御同國薦生中山數月御宿時風秀行等仁燒栗谷一賜天宣久汝等子孫無ニ斷絶ニ可ニ我仕ニ者其殖レ栗必可ニ生付ニ即生附了因レ之始號ニ中臣殖栗連ニ（時風秀行は公事根源に中臣連と有り聖武天皇御紀に天平十八年常陸國鹿島郡中臣部二十烟占部五烟賜中臣連之姓と有れば其氏人なる可し姓氏錄左京神別天神に殖栗連大中臣同祖また未定雜姓に中臣栗原連天兒屋根命十一世孫雷大臣之後也と有るは共に中臣殖栗連の由縁に因れるなる可し三代實錄貞觀八年正月の下に常陸國鹿島神宮司言鹿島大神宮總六箇院二十年間加ニ修造ニ所レ用材木五萬餘枝工夫十六萬九千餘人料稻十八萬二千餘束採造宮材之山在ニ那賀郡ニ去レ宮二百餘里行路嶮岐挽運多煩伏見ニ造レ宮材木ニ多用ニ栗樹ニ此樹易レ栽亦復早長宮邊閑地且栽栗樹五千七百株槝四萬株云々と見えたり伏見ニ造宮材木ニ多用ニ栗樹ニと有るは上古よりの制にて鹿島神に栗樹な殊に好ませ給ふ故由と聞ゆ）同年十二月七日大和國城上郡安倍山御坐（公事根源には安部山に着せ給ふと有り神名式に大和國城上郡殖栗神社見ゆ大和志に在所未詳と有り若此傳の如くならば今安倍村有り其地なる可からむ）同二年正月九日大和國添上郡三笠山御垂跡公事根源に云く同二年正月九日三笠山に跡を垂給て天兒屋根命齋主命姫神の御許へ各此由を申させ給ひければ齋主命は下總國香取より遷らせ給ふ天兒屋根命姫神は河內國平岡より遷り給ふ（但姫大神と有るを大なを省きて姫神と記せるは祝詞及び國史に比咩神と有ればなり又「姫神は伊勢より遷り給ふと有るを取らずて共に平岡より遷り給ふと改たるは續後紀に承和三年五月奉レ授ニ河內國河內郡從三位勳二等天兒屋根命正三位從四位下比賣神從四位上ニ同六年十月奉レ授ニ坐河內國河內郡正三位勳二等天兒屋根命從二位從四位下比賣神正四位下ニ三代實錄に貞觀元年正月奉授河內國從二位勳二等枚岡天兒屋命正一位云々正四位上勳四等枚岡比咩神從三位と見えたるを以て證と爲て平岡よりとは爲るなり神名秘書に天照大神相殿之姫神栲幡千姫命於ニ春日ニ者第四神殿坐也と有るも據無き說に有る可からず其は比咩神の注に云ふ可し但伊勢より遷坐と云ふも天照大御神に坐と云ふも俱に非なり）同年十一月九日戊申三笠山頂宮柱立三所御座（三所御座は初て三笠山頂に祀給へる時に武雷命一所齋主命一所天兒屋根命比咩神一所と三社に祀ひ給へるにぞ有ける其は此次の文に第四殿を始て物爲給へる由見えたるにて著し三代實錄に元慶八年八月廿六日甲寅新造ニ神衾二面ニ奉レ充ニ春日神社ニ以ニ神護景雲二年十一月九日ニ所充破損也と有るは今日の事なり是を以ても彌々御鎭座の日を續紀に記し漏されし事著し）公事根源に云く同年の十一月九日託宣の事に依て御門より勅使を立られて三笠山の下津磐根に宮柱太敷立て彼四柱の明神を崇奉らる（「此時勅使を立られし事は國史には見えねども此詞に天皇ニ我大命爾坐世と有るに依て明らかなり託宣の事に依ては

渠田寛云按神祇官勘文遣使奉幣爲神護景雲二年十一月九日事也明矣重亂爲四年恐謬

彼三笠山頂に祝給ひし度ならず同四年の事なるを此は混たる傳なり又下津磐根樹云々も四年の度の事なるを一に爲るなり四年正月十二日戊寅三笠山下津磐根南向宮柱立御遷宮在之其時第四御殿奉ニ祝副一也三笠山頂にては天兒屋命比賣神一所に坐りしを別殿に祝給ひて四所と爲されし事を云る也但此本文の次きに長者左大臣正一位藤原朝臣永手御時也と有るは藤氏長者の其社を進退し給ふ事を云るなれど此に用無ければ省きつ春日社の遷座の次第如此し萬葉集三卷なる譬喩歌に千磐振神之社四無有世伐春日之野邊爾粟播益乎また春日野爾粟種有世伐待鹿爾繼而行益乎社禰留乎また吾祭神爾不有丈夫爾認有神曾好應祀と咏るも其旨御社の春日野の地を愛て定れるか名高かりし故に譬喩には爲るなりしかるに神宮雜例集に聖武天皇天平十二年四月五日春日御社奉遷壽久山御社これ右大臣大中臣清麿公致仕籠居攝津國島下郡壽久鄕之間住家近所奉ㇾ祟なりと見え師云く此壽久山御社と申すは神名式に攝津國島下郡須久々神社二座と有る此にて此社は今宿久莊星羽村に有り須久々神社二座と有るは天兒屋根命比賣神二柱なる可し春日御社と云るは後名を例に及ぼせるにて此時未春日御社と云名無し此は枚岡社より遷されし事下に委しく述るか若し又同書に孝謙天皇天平勝寶八年三月十一日春日御社奉ㇾ祭ニ鎭於伊勢國度會郡津島崎ニ也是宮司從五位下津島朝臣子松所ニ申請ニ也と有るは其壽久御社を申請たるなり天平十二年に壽久社を祀初られしより十六年なり又同書に桓武天皇延曆十六年八月三日宮符移ニ立離宮院於度會郡湯田鄕ニ之時離宮院は神名式に所謂官舍神社なり伴社自ニ津島崎ニ奉ㇾ遷ニ鎭彼院西方ニ也千﨑祭主參議正四位下行神祇伯大中朝臣諸魚宮司正六位上中臣朝臣眞魚等也と有るは彼津島崎に奉遷れる社を再湯田鄕離宮院西方に遷鎭祭たる由也偖此は式の湯田神社は皇大神宮儀式帳に湯田社稱鳴雷（ナルイカヅチ）又大歲御祖命形無大長谷天皇御宇定祀と見えて祭神は鳴雷神と大歲御祖命と二柱と通えたるが師說に此鳴雷神と云ふは主水司に祭る神にて決く天兒屋根命の御子天忍雲根命なる可く所思と云れたるは然る言にて今も度會郡湯田鄕小俣村なる離宮院の境內に春日社有り元々集には社記曰在ニ湯田村ニと云るを今小俣村の舊名は宇羽西村と云ふと云り此社を二所大神宮神名略記に離宮院坐中臣氏社四座在ニ院西ニ或云春日社元在ニ度會郡津島崎ニ延曆十六年遷ニ此地ニ四月十一月上申祭ㇾ之と有れは春日社と云ふ事を後名を借て申せるにこそ有けれ大中臣清麿公の始て壽久鄕に祀ひ給へる天平十二年より大和國なる春日社を鎭祭給ひし神護景雲四年迄凡三十一年計も以前又壽久山より津島崎へ移されし天平勝寶八年より右の神護景雲四年迄凡十五年計も以前の事なれば此は其祭神の同じきを以て其名を後に稱するにこそ有けれ春日社より壽久山に遷せるには非る可し然らば何處よりならむと強て考るに式に須久久神社二座と有る故は天兒屋根命比賣神二柱なりしにて河內國枚岡社より遷されしなる可し然るは神名式に載る所枚岡坐神社四座と見えたる事なれども三代實錄貞觀元年の所に枚岡天子屋根命枚岡比咩神と有て二柱なる趣なれば四座と成れる事其よ

り後なる事明なればなり貞觀二年の所に河內國彌加布都命神比古佐自布都命神と有るは同社に坐す四座の中と通ゆるが此時從三位より從二位に上奉給へるを思ふに其よりは古く四座と成給けむかし然れども主たる所天子屋根命比賣神なるが故に枚岡云々とは申るなり尙下に遠江風土記を引て證す可し右の神名略記に中臣氏社と云るぞ正しき號なりける偖其中臣氏社四座と有れば其祭神は後に春日に祭る所の四神なめりと思ふ人も有る可けれど然る可からず右の湯田神社に祭る所の鳴雷神大歳御祖命二柱と須久久神社より申請し天兒屋根命比賣神二座と合せて中臣氏社四座なるなり思ひ混ふ可からず（然れば本より春日社に祀る處と祭神は異なるなりけり偖右の湯田神社は式に依る時は一座なるに鳴雷神と大歳御祖命二柱ならに說有り大歳御祖命は離宮院の主たる神にて式なる宮舍神社の祭神なるを同じ所なる故に紛れ傳りて湯田神社の祭神には收れるなる可し又大歳御祖命と有る又ノ字に心を着く可し）若て春日社を藤原氏の氏神と云ふ事は其出自天兒屋根命より出たる故に論無き事乍其より先に鹿島社を氏神と申して崇られし事往々有り常陸國風土記久慈郡の下に至淡海大津天朝光宅天皇之世遣ニ撿藤原內大臣之封戶一と有る內大臣は鎌足公の御事なり世繼物語に鎌足は常陸の生れに爲て鹿島には氏神有りと云るにて著し此事尙下に委しく云ふ可し（下學集にも鎌足公常陸國鹿島郡人也と云り水戶殿の常陸國誌に鎌足屋敷と云ふ地有る由記されき）然らば鹿島神宮を鎌足公の其國に生れしに依て產土神と爲て京に上られし後も殊に翠到に祭られしが此公に至りて藤原姓を始て賜はり大に家を興されし故を以て其裔と爲りても尙氏神とは所齋れし者なり然れど武御雷命天兒屋根命は殊に親しく御在す御因み坐せば縱產土神ならずとも又氏神とも齋奉らる可き御中間なりかし又其に亞て香取神宮をも氏神とは申せり其も亦右の例なり（尙此は甚長き事にし有れば其神々の御傳を云る下に云可し）偖春日社の神階の事は光仁天皇御紀に寶龜八年七月乙丑內大臣從二位藤原良繼病叙其氏神鹿島神正三位香取神正四位上と見えたる此其始なり其は神護景雲四年に春日社を祀給へる後は其鹿島香取兩社の事をも兼て此方にて行るゝ事と爲て此より後は藤原の氏神は春日社なる事能く人の知る如くなればなり然るに天兒屋根命比咩神の神位の漏給へるは殊に其產土神たるを以態と彼二社の神位を申請れし者なる可し然藤原氏の出自と坐す天兒屋根命比賣神は此迄京近く河內國枚岡に在しつれば物には見えねども速く其神位の事は其社に授け奉られし

を鹿島香取神は此間春日に遷來坐し故に殊更に申請れしかと思ふに鹿島香取神の御心と乞申さしめ給へるなる可し良繼公の病なりとて朝廷に預らせ給ふ事に非れば行難き理なり若て其春日社に奉らるゝ神位は即鹿島香取兩神宮の神位と爲りて外の例とは殊異なり故式にも春日祭神四座とは記されたり祭神と云ふ事本宮を主と立て其遙宮の義に近ければなり然れば次に春日社に奉らせ給ふ神位は各其本宮の神位なる事を先心留置く可し此例外にも有り神名式に山城國葛野郡平野祭神四座と有るも其本社の方を主と爲て平野は京にて祭らるゝ所なるなり然らば右の二神には拘はるまじき事と思えたり（或問右の神位の事若春日社ならむには鹿島神香取神と記さる可くも思えず神の御名をこそ記さる可き物なりけれ如何答云神名式を閲るに春日祭神四座と有て春日坐神とは記されず其各其本社の方を主（ムネ）と爲て春日は其處より御靈を京近く迎奉給ひて其本宮の遙宮と爲て祭らるゝ由を以て春日祭神四座とは記せる也故祝詞にも恐伎鹿島坐健御賀豆智命香取坐伊波比主命枚岡坐天之子八根命比賣神云々と見え神位を奉らるゝにも其國を稱ふ例にて次に引る續日本後紀に承和三年五月丁未奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正二位常陸國鹿島郡從二位勳一等建御賀豆智命正二位河內國河內郡從三位勳三等天兒屋命正三位從四位下比賣神從四位上など有るを以て知る可し然れは春日祭神社は右の如く鹿島香取枚岡三所の別宮の如くなる者也尙山城國平野祭神四座と有るも然にて今木久度古開を本社とし、其遙宮の如き物なり能々思ひ辨ふ可し）此より後は鹿島香取兩神宮及枚岡社共に春日にて祭らるゝ例と定りて殊異に其本社に限る事に耳は別に其本社に敕使を遣し給へりけむ仁明天皇御紀に承和三年五月丁未奉レ授二下總國香取郡從三位伊波比主命正二位常陸國鹿島郡從二位勳一等建御賀豆智命正二位河內國從三位勳三等天兒屋根命正三位從四位下比賣神從四位上一　其詔曰皇御孫命爾座四所大神爾申給波久大神等乎彌高爾彌廣爾仕奉止奈毛思保志食是以件等冠爾上獻狀爾中務少輔從五位下藤原朝臣豐繼內舍人正六位下藤原朝臣千万等爾令捧持氐奉出事乎申給久止申辭別豆申給久神那我良母皇御孫之御命乎堅磐爾護奉幸閉奉給閇又遣唐使參議正四位下藤原朝臣常嗣乎路間無風波之難久慈賜比矜賜比天平久可太良爾歸之賜倍止稱辭定奉久止申と有るは此春日社の御事なり然らずは斯の如く四柱を並べ連ぬ可きに非ざるを思ふ可し春日社なる事は次々に階を經て上奉給ふ順次の一事なるが上に嘉祥三年の策命に至て悉く贈合爲るを以て知る可し尙彼御社は申日に祭らるゝ御定にて京より勅使の發遣せるは未日なるを以て此を知る可し且若其三所の神等に使を遣はさるとならば各其社に向ふ人有むを正使（藤原豐繼朝臣）副使（藤原千万朝臣）唯一連を耳記されたるを以ても春日社に申させ給ふ事を曉る可し

此は右の文に見えたる如く遣唐使に就ての御祈なるが尙翌六年十月にも在り 但春日社と雖も當時の御事は必しも春日に限る事には非ねども此に春日用ひられたるは豈偶然ならむや必其祭らるゝ當日を用られたる也此より先に夏四月甲午頒ニ奉幣帛於畿內七道名神一爲レ有ニ遣唐使事一也と有るを諸社の並を超越て春日社に使を奉らるゝは國史に見えざれども鹿島本緣と云ふ書に神功皇后三韓を討當ふ時武甕槌神は御船の舳に立て先鋒を爲し經津主神は艫に立して櫂を取給ふと見え名法要集神道大要等にも此神の擁護に依て御船忽ち行自在也と記し八幡愚童記にも祖其説有り又住吉社傳にも此御軍を助奉給ふ事有て栖御前三矛前の兩社は經津主武甕槌神也と見え詞林采葉抄にも神功皇后三韓を攻させ給ふ時云々三月初巳日香取明神途出し給ふ午日鹿島に着給て兩神共に坐給ふ今世旅の途出を鹿島立と申すは此緣なりと見え肥前國風土記に三根郡有神社名曰ニ物部經津主神一曩者小墾田宮御宇豐御食炊屋姫天皇令ニ來目皇子爲ニ將軍一征ニ伐新羅一于時皇子奉レ勅到ニ於筑紫一乃遣ニ物部若宮部一立ニ社於此村一鎭ニ祭其神一因曰ニ物部郷一と有るは石上大神の事なり又竹取物語に大納言大伴御行と云ふ人難波の邊より船に乘て筑紫の方へ漕出ぬる時風吹來て舟已に海に沈まむと爲し時大納言神に祈て楫取の御神聞食と云るも此香取神を申せり北遣唐使を發せらるゝに就て春日社に策命を奉らるゝ事右の所因に依てなり 又承和六年冬十月丁丑奉レ授ニ坐ニ下總國香取郡一正二位伊波比主命坐ニ常陸國鹿島郡ニ正二位勳一等建御加都智命並從一位坐ニ河內國河內郡一正三位勳二等天兒屋根命從一位從四位上比賣神正四位下上と見ゆ此は同三年五月遣唐使を遣されしが歸來む事を祈り申させ給ふ事前に引る文に引合せて曉る可し 其は當年八月庚戌以ニ內外諸國奉ニ幣神祇一以ニ期ニ酉戌(タノミ)一焉とは秋登(タナツモノ)の御祈なるが三年夏四月甲午頒ニ奉幣帛五畿內七道名神一爲レ有ニ遣唐使一也と有るに合せて思に酉戌を兼て其御祈を物爲られしなり其は同月己巳遣ニ神祇少副從五位下大中朝臣礒守少祐正七位上中臣朝臣礒守ニ奉ニ幣帛於攝津國住吉神越前國氣比神一並祈ニ船舶歸着一と有るを以て前年の事を尙襲るゝなるを知る可し 又古本文德天皇實錄に嘉祥三年九月己丑遣ニ參議藤原朝臣助向春日大神社策命日天皇我詔旨止大神廣前爾申賜倍止申久皇大神乃厚護爾依天之天日嗣乃高御座爾波平介久知賜止奈毛所念行須因茲天先先爾禱申賜比之御冠止爲天奈毛建御賀豆智命伊波比主命二柱乃大神乎波正一位爾天兒屋根命乎波從一位爾比賣神乎波正四位上爾上奉利崇奉留状乎神財乎令捧持出須此状乎聞食天篠篠爾天皇朝廷乎堅磐爾常磐爾幸倍奉賜比天下平安爾護賜比助賜倍止恐見恐見毛申賜波久止申と見えたるは承和六年の度よりは各一階を増奉給へるなり 此にて鹿島香取二神共に正一位に叙し給へり然るに或書に香取神主式名の説に正一位勳一等文武天皇大寶元年二月辨官小山中島鷹口宣綜紙也神主躬庶奉レ納ニ內陣之神寶一也云々是經津主神二十七世篤足の時の事なり篤足の事大宮司家譜に見ゆ武名は宣年の孫躬庶の子なり宣年は篤足公五代の裔にて延喜昌平の頃の人なりと云れど此神位の事に信難し其は天武天皇御紀に役壬申の度の御守護の事に依て身狹村屋神云々勅等ニ進三神之品一と詞て所見たれど神位を授奉給ふよしは言難きを續紀に天平勝寶二年十二月丁亥奉ニ大神一品比賣神二品一と有る八幡神階を初と爲べけれど返々も信じ難かり 此を以ても右の實錄八年承和三年同六年の共に此春日社へ授奉給へる事を曉る可し然れども神名式に春日祭神と有る上は各其本社の御事なるを春日にて執行はれし物にて 百練抄四條天皇仁治二年二月鹿島社燒亡の事有て次に三月十二日庚子攝政家奉ニ幣春日社一被レ謝ニ申鹿島火事一と有を以知べし此例にて大原野吉田等も同じ神位と所思ゆ同書に三月廿七日乙卯奉ニ幣春日大原野吉田三社一被レ謝ニ申鹿島火事一と有を以想ふ可し 其策命は一年に本社常社共に相兼たる神位な

る事を思ふ可き者なり然る證は下に引る四時祭式春日祭條の結びに右祭料云々其封物者割二下總常陸兩國香取鹿島二神封云々一と有るにて著し斯在れば春日は鹿島香取の遙宮の如き物なり枚岡も此に例して知る可し此文類聚國史にも載れり然れども實錄の今刊行の本には見えず脫漏爲る物なり右の如く鹿島香取神宮を春日にて祭らるゝ事なれども尙本宮にも御使を立られて祭らせ給ふ事あり其は鹿島香取神の御傳の下に內藏式を引るが如し然れども春日の御祭の此上なきに及ばざるなり理を以て云ふ時は鹿島香取は本宮たり春日は遙宮たれば其本宮の方を重く物爲給ふ可きに然ぬは他社の如く其神を移して別社なるに非ず鹿島香取を祭る社なるが故なり　若て三代實錄貞觀元年正月廿七日奉レ授二河內國從一位勳三等枚岡天子屋根命正一位正四位上勳六等枚岡比咩神從三位一と見えたり今般は其本社の方へ授進られたるも春日社の方の御位なり其は上に次第を逐て次々引證せる順次にても著く且枚岡神社も上件の四座を祀祭らるゝが殊更に天兒屋根命比咩神の二柱を態と擢出て御位を授奉給ふ由を思ふ可し其は天兒屋根命の神位是迄從一位にて武御雷神經津主神より一階後れ給へるを以て同じく正一位に上給ひ其に就ても比咩神の御位をも一階進めさせ給へる者也然れば春日祭神四座の中比咩神を除ては三柱共に同等の御位にて座坐すを其を知れる人の無き故に何迄も天兒屋根命比咩神二柱耳は右の嘉祥三年の任に渡らせ給ふと思ふは餘りに愚昧なる事なりけり如此く此二柱神の後れ給ふ所由は彼貞觀八年に始て鹿島香取兩神に御位を進られし以來次々後れ給へりしを此貞觀元年に至て等しく爲給へる者なり枚岡社の祭神は春日社と同じき事此詞の畢に大原野枚岡等祝詞准此と有るを思ふ可し然れども決て天兒屋根命比賣神二柱なりけむを後に春日より武御雷神齋主神は配給へるにや其は神宮雜例集に天平十二年春日御社を菩久山に遷すと有る須久々神社は式に二座なるが此は上に云る如く決く枚岡より遷坐りと思しければなり此を皆其本社の御位に云る其に右に次々擧たる中に嘉祥三年の度正春日社の御位を爲るを若其度を始と爲は其前後の混じて出來て此も後も猶白合ぬ事とは爲るめり且其度に天兒屋根命從一位比咩神は正四位上に御在して此は春日へ奉らせ給ふ御位なるを貞觀の度に引出て從一位勳三等天兒屋根命正四位上勳六等比咩神從三位と有るを如何にや思ひて春日社へ授られし位を枚岡二社に係す可き由緣無きをやをもて春日は鹿島香取枚岡三所の神を祭給ふ所にして本社當社差別無き事を曉る可し

倡國史に所見無しと雖も春日若宮と申す御社在し給ひて其御祭典なども本社に准へて物爲給へるは必所由有る可きに就て思ふに其は神名式に添上郡鳴雷神社大月次新嘗と有る此ならむか然るは四時祭式春日祭の前に鳴雷神祭一座十一月此坐三大和國添上郡二云々右差中臣一人供祭と見え年中行事秘抄にも二月擇吉日之條に鳴雷

神祭事云々大和國添上郡神祇官遣二中臣一人一供祭と有て其祭に中臣を遣さるゝ事故有る可きに就て考るに師說の如く鳴雷神は天兒屋根命の御子天忍雲根命に坐り但二十二社注式に人皇八十六年四條院治四年嘉禎二年十二月七日宣旨春日別社若宮祭宜レ令官幣前日發二遣其使一事と見えて若宮祭と云ふ名目初て在り此は爲に其事の始なるか別に子細有て鳴雷神祭とは別に物爲られたる事下に云るが如し鳴雷神祭は水取の事に就ての祭なる故に春日祭には拘はらぬ事なるを若宮祭と云ふ時は春日祭に就ての事なり能く辨ふ可し神名式に宮中神卌六坐の中に主水司坐神一座鳴雷神社と有る此にて鳴雷とこそ御名に負坐れ彼臨時祭式に見えたる霹靂神には非ず中臣壽詞に中臣の遠都祖天兒屋根命皇御孫命乃御前爾奉仕弖天忍雲根神遠天乃二上仁奉上弖神漏岐神漏美命乃前仁受給波里申仁皇御孫尊乃御膳都水波宇都志國乃水仁天都水遠加弖奉牟止申世止事教給志仁依弖天忍雲根神天浮雲仁乘弖天乃二上仁上坐弖神漏岐神漏美命乃前仁申世波天乃玉櫛遠事依奉弖此玉櫛遠刺立弖自二夕日一至朝日照萬弖天都詔戸乃太詔刀言遠以弖告禮如此宣波麻知波弱韮仁由都五百篁生出牟自二其下一天八井出牟此遠持天天都水止所聞食止事依奉支と有る水取の故事に依て負坐る御名なるが忍雲は壓雲にて天の二上に參上らしゝ形象の甚しかりしを以て負坐る御名にて鳴雷神と申すに其義違はざるなり然れども臨時祭式に謂ゆる霹靂神とは別なり思ひ混ふ可からず亦此水取の事は此神に並給ひて天村雲命も天上に物爲給へりしを其後に天忍雲根命は皇御孫命の御水の事を有ち給ひて主水司にて鳴雷神と祭られ給ひ天村雲命は皇大御神の御水の事に預給ひて忍穗井を守護り給ふ事と爲れりかし但此社の事今神殿村に在と云り然れども此より今の若宮に後に遷坐る物と見ゆ注式に七十五代崇德院保延以後造神殿遷御と有に說有て下に委しく云り此に依て天忍雲根命を太祝詞命と申す事と思ゆ師說には太祝詞命と申すは日神の石屋隱りの時に天兒屋命の太祝詞言白給ひし御功(ツトメ)に依て負坐る御名なりと云れしかとも其は自力て物爲給ひし者にて此なるは神漏岐神漏美命の御言以て天津詔戸の太詔刀言以て宣れと仰給へる者なれば必天忍雲根命の負坐す可き當然の御事なり神名式に太祝詞神社大月次新嘗と有るは大和志に在所未詳と有れど必春日社の攝社末社の中に在る可し倍榮倶本書入に天兒屋命也と有れど闇推の說なる可し倚鹿卜起元と云書にも大祝詞命天兒屋命也と見えたり偖春日若宮の事は然計り止事無き御由緒の神なるに何處の何なる社より移り坐ると云ふ傳無く其祭神をさへに若宮一社の秘傳なりとて侘に漏さゞるは其緣の詳ならざる爲の遁辭なり然れば其起原は春日本社よりは甚古く在せりしなり二十二社注式に若宮御出者神代也と見えたるは正しき傳說と見ゆ今京と爲りても主水司に祭らるゝ事は其大和國より遷(ウツ)されしにて實は神武天皇の御世に高千穗宮より勸請

されし者なる可し天種子命其供奉仕奉られしかば其御盡形をや當昔遷置れしが主水の事に功しき神に坐す故に毎年二月十一月に祭られしを其裔と有る氏人を用る故實を以て中臣は差されし者なりけり備春日祭神四座の此春日の地に鎭坐す事豈幽契勿らむや此に因てなり尙此下に若宮の御事を云るを見合す可し又神名式に春日神社と云ふ有り此は天兒屋命の御所縁の神ならず或說に姓氏錄に大春日朝臣出レ自二天帶彥國押人命一と有る其祠なりと云るは然も有らむか或書に春日の處の地主にて今榎本社此なりと云へり然れども此榎本社を巨勢姫大明神と云ふに符合難し尙春日末社の條見る可し○此御社の御祭の事は二十二社注式に或云第五十五代文德天皇仁壽三年始と有るは然も有る可きなり諸神記春日祭の條に治大抄を引て文德天皇仁壽三年九月始之云々如二國史一者非二祭禮之濫觴一と見えたり同書に又清和天皇貞觀元年十一月四日始と有るは本說ながら違るに似たり然るは三代實錄に天安二年十一月三日庚申停大原野春日等焉とも丁卯停大原野祭とも見え又貞觀元年十一月九日庚申率野春日神祭如レ常と有れば已に春日大原野兩社共に並祭は有けるなり然らば仁壽三年始と有るや正說ならむ江家次第抄も春日祭神護景雲元年遷二御三笠山一貞觀元年十一月九日庚申祭二春日神一未日使參向內藏馬寮不二參內一遠社祭以二立使日一禁中神事と有り但文德天皇實錄を閲るに其事見えず其は記し漏されしなる可し然れども右の貞觀元年始と有るは然る可からざるなり三代實錄に清和天皇貞觀元年二月十日丙申春日祭如常と見えたれば天安二年に停られしは觸穢などの事に依てならむも知る可からず此より次々二月申日の下に春日祭如常と云ふ事時々見ゆ其頃已に常式と爲れりし事著し但注式また祝詞考共に此文を引誤りて貞觀十八年二月丙申春日祭如レ常と見えたれども三代實錄に見えず按ふに同年二月七日乙卯の下に停二大原野祭一以大膳職觸二死穢一也大祓於建禮門前一承レ前之例有二事故一停二春日大原野祭一之時不修大祓辨官依二神祇官依常而行之由レ是責神祇官令レ進二過狀一また十二日庚申停二春日祭一以皇太后犬死內裏染汚一と有れば廿四日丙申に當れり是を以て註式に誤云るを加茂翁の承て考には記されし者なり同十五年二月十三日戊申令月一日初申可レ修二春日祭一而彼日有レ事停而是日祀之と見え又十六年正月廿九日庚寅云々來月上旬應レ祠二祈年大原野春日等一仍是日大二祓於建禮門前一また二月六日春日祭例云々內裏犬產內織寮馬出レ血及右馬寮牛斃左馬寮馬死由レ是停レ之と有るを以て春日祭の恒例の神事と定りし事の狀を思ふ可し○春日並大原野等社の齋女の事は三代實錄に貞觀八年十一月廿五日丙申詔以二藤原朝臣須惠子一爲二春日並大原野神齋一と有れば此時ぞ始なる可き同十年閏十一月廿一日庚戌是日宣二詔內外一曰春日大原野兩社齋女藤原朝臣可多子大政官貞觀八年十二月廿五日下二所司一符注二藤原朝臣須惠子一今追改爲と見え又廿五日甲寅勅令二大和國一差二充騎兵四十人執杖士廿八人一備二春日齋女參社之威儀一每レ至二春

祭ニ在レ前差ニ課國郡司各ニ一人一相共祇立爲ニ恒例一と見えたり　此藤原朝臣可多子の傳尋ぬ可し但藤原氏の盛なりし時なるが故に伊勢齋宮賀茂齋院に皇女を奉らるゝ准(ナゾヘ)に氏の女を以て齋女とは爲せりしなり　同十一年二月八日丙申春日祭如常是日齋女始參ニ於社一告文曰天皇我詔詞掛畏岐春日大神能廣前爾恐美恐美毛申賜倍止申久先先爾禱申賜布事有天掛畏岐皇大神乃齋女爾藤原朝臣可多子乎定天令奉仕之狀乎聞食天天皇朝廷乎御坐志米食國能天下毛無事久令有賜倍止爲天奈毛從四位上行左中辨兼皇大后宮亮藤原朝臣家宗乎差使天禮代能大幣帛乎令ニ捧持一天奉出賜布此狀乎聞食天天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐爾夜守日守爾護幸奉賜比天下平安爾風雨隨時五穀豊登志米賜倍止恐美恐美毛申賜波久申と有るは其時の策命なり　十七年十一月の下に藤原朝臣意佳子を齋女に進られし事下に見ゆ其は藤原朝臣可多子の喪に遭ろに依てなり　同十七年六月八日己來遣從四位下行左馬頭藤原朝臣秀道於春日神社奉ニ兼禱一欲下奉ニ齋女一以祈中甘雨上也告文云天皇我詔旨止掛畏岐春日大神乃廣前爾恐美恐美毛申賜倍止申久近來經レ日陟旬天雨澤不レ降之天百姓農業枯損奴倍之仍茲卜求爾皇大神乃齋女不奉爾依天致ニ此災一賜倍利止申世利是非ニ故怠一今必卜定天令ニ奉仕一牟及且其由乎爲レ令ニ禱申一止之天奈毛從四位下行左馬頭藤原朝臣秀道乎差使天禮代大幣帛乎令ニ捧持一天奉出賜布此狀乎平聞食天甘雨忽降之五穀茂熟之天天皇朝廷乎常磐堅磐爾夜守日守護奉賜倍止畏美毛申賜波久止申遣ニ左衛門佐從五位上藤原朝臣利基於ニ山城國大原野神社一其祈同ニ春日社一告文曰云々と見え同年十一月四日癸未藤原朝臣意佳子爲ニ春日大原野齋女一以ニ前齋藤原朝臣可多子遭レ喪也意佳子中納言兼右近衛大將行皇大后宮大夫藤原朝臣良世女也と有れば春日大原野兩社を兼て一人なりしなり然れども本社の方に就て春日にぞ居ら令めけむ其は八年十二月に勅令ニ大和國一差ニ充騎兵四十人執杖士廿人一備ニ春日齋女參社之威儀一云々と有て大原野社に就て記せる事無れば也　○二月十一月祭神料は四時祭式に春日神四座祭祭神料安藝木綿大一斤絁七尺調布二丈三尺已上官物神祇官所レ請　曝布一端八尺商布十二段筥八合已上封物内膳司所レ請　稻六束神祇官所送　米糯米各三斗大豆小豆各五升已上大炊寮所レ送　酒一石五斗用ニ社釀酒一　鹽五升鰒堅魚烏賊鹽藻各六斤腊十二斤鮨三斗雜菓子二斗橘子一斗韓竈四具由加二口叩盆四口盆六口堝十口酒盞八口シタミ加水桶二口折櫃円合匏四柄杓二柄箕一枚羅一口擲二俵菅簀四枚食薦十枚已上大膳職所送　散祭料白紙廿張色紙四十張曝布一端已上封物　酒六斗用ニ社釀酒一　五色薄絁各二丈木綿二斤麻一斤五色木綿一百枚

五色玉二百枚絁一疋絲一絇綿一屯（已上官物神祇官所レ請）米糯米各一斗五升大豆小豆各五升（已上大炊寮所レ送）鰒堅魚平魚各六斤鮭二隻海藻六斤鹽五升雜菓子三斗擀一俵折櫃四食薦二枚（已上大膳職所レ送）解除料五色薄絁各二尺木綿三斤麻二斤坌四口（已上官物神祇官所レ請）酒六升（用ニ社釀一）鰒堅魚腊雜盛二籠海藻六斤鹽一升盆一口（已上大膳職所レ送）米五升（大炊寮所レ送）稻四束（神祇官所レ送）庸布一段商布三段（已上封物）餝神殿料五色薄絁各二丈四尺絁四尺綿一屯木綿八斤麻一斤（已上官物神祇官所レ請）黑葛十斤檜榑一材（已上木工寮所レ送）琴緒料絲六兩（神祇官所レ送）釀神酒並駈使等食料（前祭請レ之）黑米四石調布五尺匏二柄杓一柄羅一口韓竈一具擀十把（已上封物釀ニ神酒一料）酒缶十四口酒壺二口（祭日納レ酒料）庸布□段（覆瓱缶十四口四口料）白米三斗六升鮨三升海藻三十把鹽九合（已上釀酒女一人駈使二人十五日食料）釀ニ神酒一解除料（前祭請レ之）五色帛各四丈絁四丈絲四絇綿木綿麻二斤白米一斗酒二斗鰒堅魚腊海藻各六斤鹽四升稻四束黃蘗八枚坌盆堝各四口坏六口食薦二枚匏一柄擀二十把庸布四段祝詞料布一端釀ニ神酒一竈祭料（前祭請レ之）五色帛各二尺倭文一尺木綿麻各八兩坌四口米酒各四升鰒堅魚二斤腊八兩海藻二斤鹽二升祝詞料布一端齋服料物忌一人料交纈帛三丈五尺羅帶一條紫絲四兩錦鞋一兩（已上封物）錦二條（一條長三尺五寸一條長六尺並廣四寸）絁三疋二丈九尺絲絁一疋紗七尺韓櫛二枚紅花一斤二兩東絁二尺五寸綿三屯半支子五升神主一人神祇官人一人別當色一領（內藏寮所レ充）絁二疋綿二屯（已上官物）細布二端調布二端（封物）神主軾料絁二疋絲三絇調布二端彈琴二人別絁一疋三丈綿三屯膳部八人卜部二人別佐渡調布二丈七尺紅花二兩（已上官物）守ニ神殿一仕丁二人別商布二段（已上封物）右祭料依ニ前件一春二月冬十一月上申日祭レ之其封物者割ニ下總常陸兩國香取鹿島二神ノ封調布五百端（香取神封二百端鹿島神封三百端）庸布三百段商布六百段麻六百斤（已上鹿島神封）紙六百張（香取神封）送ニ神祇官一仍收ニ官庫一依レ件充用其雜給料諸司各供ニ備之一其物忌一人食日白米一升二合鹽一勺二撮預神部二人別日米一升六合鹽一勺六撮仕丁二人（常陸國鹿島神封四丁）別日黑米二升鹽二勺其衣服神部別夏絁四丈五尺冬絁一疋三丈綿四屯（並用ニ神封物一）と見えたり其式は貞觀儀式に春日祭儀（二月十一月上申日）前祭預令ニ陰陽寮擇ニ定祓日時及方地一前祓一日辯官仰ニ所司一立ニ幄於社頭一祓日時尅齋女駕レ車向ニ祓所一其儀式左右京兵士各一人（執白杖）在ニ道左右一前行防令各一人次レ之官人各一人次レ之前行六位左右各二人次之五位各一人次之院別當在ニ道中央一次レ之（從左右各二人）左右衛門大長各五人在ニ道左右一次レ之（相當ニ前行者一）門部各

一人次レ之着二青摺衫一近衞兵衞亦同左右兵衞各一人次レ之左右近衞
各一人次之齋女車在二中路一次レ之車從左右各八人着鵄衫褐
小意忌イ左右各一人次レ之服色同レ上走孺近レ車左右同二人着濃紫襴
執屏繖左右各一人次レ之並着二退紅染衫一院司左右同二人相當近衞陪
從左右各三人次レ之清器韓櫃一荷在二中路一次レ之今良二人相分在レ後從レ之
女別當車次レ之男從左右各四人女從近レ車左右各二人其車乘二私車一以下宣旨及陪從第一二車亦同但第三以下童女以上乘二馬寮車一宣旨車次レ之男從同上女從近車左右各一人膳物韓櫃二荷次
之祿物韓櫃四荷次レ之荷須韓櫃左右各三人陪從女車六兩次レ之第一二車男從左右各三人女從近レ車左右各三人第三四五六車男從左右各二人女從同上車一兩次レ之男女從同上
山城國司五位一人六位一人率二都司等一候二京極大路一
引レ道到二祓所一辨史史生官掌各一人率二所司一行レ事中
臣供レ麻宮主讀二祓詞一事了饌祿有レ差訖還二本院一此迄解除の事なり右に引る四時祭式なる解除料は此の用物なり前二日早且神祇官人一人率二神
主神琴師神部卜部等一掃部官人率二掃部等一內膳官人
率二膳部仕丁女等一向レ社行レ事前二日は午日なり前一日鷄鳴齋女
駕車參社除下非二國司之外一前行上陪從等物等陪列六第一卮被日儀比レ至二大和國堺一國祇
承山城國祇承從レ此而還至二佐保頓舍一宿是門外記史與二供奉諸司一
於二社西方一祓禊訖辨脩供神物前一日は未日なり祭日平旦神祇官
人率二物忌童女一掃二除四神殿內一神部木裝飾二神殿一以
レ榊立二殿頭及垣邊一所司供レ張如レ常訖大臣以下入

レ自二西方南門一就二外院座一六位以下藤原氏人依レ次就
レ座名字書札札及筆硯辨官掌預前備レ之是間齋女駕輦參レ社共行列
也都司二人在二道中央一前行六位國司一人次レ之五位
一人次レ之步兵左右各十人在道兩邊道頭與二六位國司一平頭騎兵左
右各廿人次レ之內藏寮幣左中路次レ之與二第四騎兵一平頭中宮幣
次レ之與二第五騎兵一平頭春宮坊幣次レ之與二第十四騎兵一次レ之院幣次レ之與二第十八騎兵一次レ之
春宮坊走馬左右各一騎在二道北右一中宮走馬各
一騎次レ之近衞走馬各六騎次レ之○○○○○在二中路一
走馬各一騎次レ之下近衞以下院司以上皆同用二五位一其從左右各三人近衞官人一人
次レ之次中宮使一人次レ之內藏官人一人次レ之院司一
人次レ之左右衞門門部各一人在二道左右一相二當走馬一左右兵衞
各一人次レ之左右近衞各一人次レ之齋女車在二中路一次
レ之輦前左右近衞各一人松擔丁各五人輦左右前後各
二人後左右各五人走孺次レ輦左右各二人在二松內一輦左右
各四人次レ輦在二擔一外一輦長着二黃衣一用二院人一擔下着二黃布衣一前祭五日院司申二辨官一仰左右近衞兵衞等府一充レ之府別七人執屏繖左右各一人次レ之相二當擔丁一執翳各一人
次レ之執笠各一人次レ之已上並着二退紅染衣一駕レ馬女左右各四人次
レ之相二當馬並一男從左右各二人女從近左右各一人駕馬童女左右各四人次レ之男女從同レ上
清器韓櫃在二中路一次レ之今良二人相分在後次レ之廁人掃守在二道左右一
次レ之相二當駕馬童女一也廁人在レ右掃守在レ左院司左右各一人次レ之陪從左

右各二三人次レ之膳物韓櫃三荷次レ之（膳部左右各三人夾櫃從レ之）服物韓櫃六荷次レ之（左右各三荷相分行列也荷領櫃別各一人在ニ櫃外ニ相從）內侍車次レ之（櫃相ニ當服物ニ在ニ中央ニ也男從左右各八人女從近車左右各一人）女別當車次レ之（第一二車男從左右各三人女從近車左右各二人第三以下車男從左右各二人女從同レ上）童女車次レ之（男女從同第三次下車）比レ到ニ社西方北門ニ前行大夫以下下レ馬列立陪從女下レ車執ニ行障ニ候ニ輦下ニ齋女下輦著座之後大夫以下出去內侍以下亦著座（門內西方纔有之二間屋北一間設齋女座ニ南二間設內侍以下座也齋女及內侍自ニ鳥居ニ出入宮旨以下破ニ却社西方柴垣ニ開道出入）爰內藏頭令レ持レ幣進ニ門外棚上ニ須臾祇候次內侍以下入就ニ神殿座ニ檢ニ校供神物ニ次齋女脫レ道（上カ）間更著ニ神態服ニ入就レ座供齋內藏頭執幣入置ニ瑞籬前山棚ニ兩段再拜退出次二一宮使亦如レ之次氏人並諸家使以レ次執幣入置ニ下棚ニ各兩段再拜退出訖神部四人進執ニ內藏寮幣ニ入授ニ物忌ニ退出物忌進納ニ神殿ニ退出神部四人各執ニ食薦ニ敷ニ神殿前ニ退出次氏人五位以下昇ニ神饌机ニ依レ次陳列（以東殿爲首）次神部昇ニ酒樽ニ入立ニ諸殿前ニ（神酒一樽立ニ一二殿間ニ一樽立ニ三四殿間ニ與レ机相配社釀酒四缶立中重每殿相當）訖五位以下退出復ニ外院座ニ內侍以下入開ニ饌蓋ニ次酌レ酒奠レ之殿別二坏（一坏一夜酒一坏社釀酒）退出就ニ神殿前ニ昇ニ內座ニ（北面東上）次大臣以下及朝使氏人就レ座（北面東上重行）神馬四疋走馬八疋牽ニ列神殿前ニ近衞少將馬寮頭前行次神主著ニ木綿縵ニ就ニ祝詞座ニ兩段再拜拍手四段訖各就ニ直會殿座ニ次神部散幣次馬寮牽ニ神馬ニ廻社八度訖賜ニ頭並織人神酒ニ訖退出次近衞少將牽ニ近衞等ニ入而東舞次大臣喚ニ召使ニ一聲召使稱唯出レ自ニ南方ニ進北向而立大臣宣喚ニ宮內省ニ召使稱唯東南去二許丈喚レ之二聲亟稱唯趍立（召使立處）大臣宣御飯早速令賜亟稱唯差退喚ニ膳部ニ二聲膳部二六人共稱唯亟仰去御飯賜ニ膳部ニ稱唯大膳進以下共起依レ次分頭賜之訖大膳退趍立（省亟立處）申云御飯賜了于時神祇副（若無副則祐代レ之）喚ニ琴師名二人ニ共稱唯次喚ニ笛工名二人ニ共稱唯副命云琴笛相和（詞云ニ美許止爾布衣安波世ニ）四人共稱唯先吹レ笛一成次調ニ琴聲ニ次歌人發レ聲（先ニ神祇ニ後ニ雅樂ニ）次神主倭舞次祐以上二人次氏人五位以上二人次六位以下二人觴三行拍レ手一段訖齋一還ニ西門內座ニ換レ衣即還ニ頓舍ニ如ニ初儀ニ外記執ニ五位已上六位已下見參文ニ進ニ大臣ニ大臣覽了返賜之ニ外記復レ座即以ニ六位已下見參文ニ付ニ官史ニ此間官掌率ニ仕部等ニ積ニ祿物於案上ニ了昇ニ立庭中ニ史出就ニ賜祿座ニ唱ニ氏人名ニ賜レ之訖大臣以下赴ニ於馬場ニ令レ馳ニ御馬ニ內侍臨レ檻但冬祭齋女不と見えたり又江家次第に二月上申日春日祭事先十許日別當辨以ニ可レ參五位以上差文ニ覽ニ長者ニ見畢返給（辨付ニ外記ニ上卿不參時外記事ニ其由ニ仰云以レ辨可レ爲ニ上）

代(辨不參者史申其由仰云以參會諸大夫可爲辨代) 當日上卿先着宿院饗所(上卿東面)(辨南面五位已上氏人南北相分六位西面上卿自南辨並諸大夫從北着之諸司使中有氏人者同着) 催諸司使內侍等(有官別當奉勅仰以雜色令催之內侍近衛府使遣國氏人催之) 有坏饌三獻或一獻使使來集列見辻上卿率辨氏人等參向(長者殿神馬未參辻前參若)(使使遲參者或不必待) 各着祓戶座(長者參下時立幄自餘不立地上敷座) 六位別當催氏人使使等上卿座(行)一辨座(行)一使使座一行(其後參會氏人座次外記史並有官別當座次使座內藏寮近衛府馬寮后宮春宮長者殿神馬使以上北面東上兩箋者着外院西門西第一座小使等取幣立前) 祓畢(異姓使使自此退歸)着着到殿(不氏人者不着氏六位以上任次着到筆研辨官設之上卿西面五位氏人等南面東上有官別當六位氏人着南座無官別當氏人着其後座並北面東上) 一獻辨申上卿曰所掌令定申牟上卿揖許辨召有官別當名(一音) 稱唯(乍立座稱之) 辨仰曰所掌奉仕禮稱唯有官召雜色召簡見之次有官申曰六乃位與利下着到仕禮留若干有官幾人姓戶名姓戶名無官支幾人姓戶名々々々辨疊之曰(如彼詞) 稱唯辨申上卿(同詞) 上卿揖許次又辨申上卿曰倭舞乃人令定申牟上卿揖許次辨召有官別當名(一音) 稱唯辨仰曰和舞可奉仕支六乃位定申世稱唯有官申曰倭舞可奉仕支六乃位其官某丸其官某丸辨又怙曰然然申歟稱唯辨又心中豫點(下)可奉仕(相舞)五位二人(上)次辨申上以上四人名上卿揖許次又召五位二人六位二人(各一名) 稱唯(乍立座稱之) 辨仰云和儛仕禮稱唯次外記申代官着膝突

某官々々不參代官給牟 上宣誠多利也外記申曰某官代某官姓名誠天候不上宣令勤與外記稱唯退出(或仰某人) 次三獻下箸次起座洗手幣使內侍等參進(先是幣置御垣外棚)(待內侍等着座) 幣使賚幣置瑞垣前(再拜兩段退) 諸官諸家幣參入(或昇棚畢)如前(拜法加前) 神部執幣授物忌奉納神殿(四殿是內藏寮也) 次神部四人以食薦(四枚) 敷神殿前次氏上卿以下供私幣(後奉之) 次氏上卿以下賚机次第陳列(以東一殿爲首帶劍之人暫解) 神部昇酒樽參入立諸殿前(神酒一樽立一二殿間二樽立三四殿間一瓶二御机一相並又社釀酒四缶立中重)(每殿當之) 次上卿以下退出復外院座次內侍入開御膳蓋酌酒奉奠(殿前別二盃一盃一夜釀酒一盃社釀酒訖是就神殿前并內座若內侍有障不參用氏五位四人) 次藤氏朝使參人着座(北面侍南殿東傍) 神馬走馬牽立(神殿前) 神主着木綿縵着中門座兩段再拜(朝使已下共拜) 讀祭文上卿以下拍手三度着直會殿(馬向立上卿南面辨並諸大夫東面北上六位氏人在後) 神祇官散祭馬寮使牽廻御馬八廻(廻畢給使官入口取御酒) 長者殿神馬此次牽廻之近衛府使令東遊使使着直會殿(北面西上) 所司羞膳(大臣參時用五位官內大膳大炊備饌也) 酒觴三行上卿召召使(二音無上卿時辨召官掌) 召使稱唯立直會殿西妻(當庭中若雷晴時上卿問曰誰曾召使稱姓名) 仰云宮乃內乃省召世召使稱唯出於屛外召之(二音) 有官參入(立於召使立所先名對面) 上宣御飯堅樂仁給稱唯出召膳部(二音) 仰之大膳官人申御飯給畢由次神祇祐已上就南座(祐喚)

（琴師名二人一稱唯次喚笛工名二人一稱唯訖云二御琴爾笛合世一四人稱唯次神樂先神祇次雅樂）次令レ敷二倭舞座一次倭舞（先神主次神司祐以上一人次氏五位一人次氏六位二人）次拍レ手一段外記奉二氏人見參一上卿披見畢召辨給レ之辨復レ座召レ史給レ之官掌令レ積レ祿史就二給レ祿座一召二唱之一（在二庭中一）上卿以下起レ座受レ之一拜退出次向二馬場一馳レ走と見えて大較上なる儀式に逢ふ事無し然れども此頃は已く齋女の事は絕たるにや其事見えず（儀式にも冬祭齋女不供と有れば齋女無き時の式は此次第の如く也けむと思ゆ）又同書に春日祭使途中次第（春日祭使上申日春日祭前一日近衞府祭使參入就二內侍所一令レ奏下參向社頭之由上若召二御前一使率二舞人並陪從等一入レ自二仙華門一參入如二賀茂祭一使參內日冠垂纓闕腋袍木地螺鈿劍巡方帶銀魚袋發向之時改二裝束一冠直衣野劔鹿皮尻鞘半靴共諸大夫皆着二織衣一攝籙一家中少將時勤仕祭使二云々前日於二里第一有二出立儀一舞人陪從裝束等便調二這之一有二勸盃求子等一次渡レ庭見レ之或渡二院御棧敷前一共諸大夫各着二色色狩衣一）於二內裏一事訖於二近邊人家一改二裝束一（攝政關白御子孫者尚自二內藏寮一可二進發一歟）參舞人十人陪從四位八人五位中將又八人加二陪從一同レ上（當府並府官人中無レ止宿老者）纔官人二人番長二人隨身皆騎馬共人且相從馬副八人騎馬於二七條大宮二官人行二除目一左右大辨各一人以二番長一任之頭中將一人以二府官人一任レ之大夫判官一人酒正一人今日宿二於淀美豆御牧一申日着二梨子原一次改二裝束一渡二大路一如二一條大路儀一經二山階寺北並東一着二祓殿座一其座辨次內藏寮次近衞司次馬寮次諸宮使次長者殿神馬使社頭事訖馳二御馬一使馳引馬（隨身騎馬在前舞人等馳）歸來解レ劒放レ弓隨身同放レ之着二梨子原一終夜醉遊頭中將召二大夫判官一曰御前邊褁錯恐有二犯人一可二搦進一即搦二府下部一人一爲二犯人一問レ之盜人申云盜犯已實贓物在二使君御衣櫃一隨レ申給二衣櫃一預納二祿凡絹一宮人等分取酉日朝官人等戲設二餝馬一駄爲レ馬以レ蓬爲二雲珠一以二土器一爲二杏葉一載下無二衆望一下部一人上嘲二咲之一次歸京至二不退寺之邊之間一又搦盜人令レ申二贓物一如レ前今度預納二褂單衣一分取如レ前次引二落大夫判官一每レ人兩足蹴レ之次到レ淀立二雷馬陣一官人以下皆着レ笠負二胡簶一府下部一人令レ着二紅衣一稱二雷公一曰爲二春日明神御使一所二送申一也依レ此可下至二大臣大將一給上次官人以下給祿次歸京作法在別云々と見えたり此等にて當昔の形象想像る可し（尚下なる大原野祭の條に委しくいへる事共を對せ考ふべし）

又內藏寮式春日祭條に五色薄絁各二丈四尺安藝木綿八斤絲四絇曝布四端麻小八斤裹料商布二段一丈七尺薦一枚付木四枚明櫃二合（加二筥形一机已上官物）使儲幣五色帛各一丈五尺安藝木綿大一斤麻小一斤紙三十張付木二枚巾料洗布一丈三尺（已上寮物）使等裝束外記一人史生一人辨官史一人史掌官各一人喚使二人寮五位助以上一人史生二人舍人一人仕丁一人近衞少將若中將一人近衞

十二人馬寮五位助以上一人馬部一人御馬十二疋使官人別當色一領（寮物）絁七疋（寮官料自餘官見大藏式以下倣之）調綿七屯細布五端史生當色一領絁一疋調綿二屯調布三端（已上官物）近衞別緋貲布袍一領（寮物使納各府隨損請換通用佗祭）帛一疋調綿一屯調布一端刀緒料緋帛七尺五寸布帶細布一丈四尺馬部貲布四丈紅花大一斤（染衣料）齎幣仕丁衣商布一段御馬別結領料淺緋絲二兩轡鞚腹帶各一條（轡鞚長四尺二寸腹帶長七尺）料曝布三端一丈四尺四寸（已上官物）舍人細布二丈一尺紅花大一斤齎儲幣仕丁衫料商布一段（已上寮物）女使料緋絹一疋綠絹二疋纈絹一疋調綿一百屯（已上內侍料）調綿三十屯（闈司女史女孺並王人各十屯並用寮物）右春二月冬十一月並上申日祭之前一日使人率史生晝備幣物訖就內侍申進發之由著寮饗所然後向社頭下諸祭准之と有り（此に謂ゆる付木と云ふ物は幣帛を取着る木枝にて天石屋段の太玉串の遺制なる者なり）又大膳式に春日祭雜給料（春冬並同）白米二斛五斗（使料一斛膳部間食料一斗裝料四斗祭料）酢醬各一斗五升鹽三斗五升東鰒三十七斤隱岐鰒堅魚各三十七斤繩貫鰒二十八斤煮堅魚熬海鼠各二十九斤雜腊三十四斤蛸二十五斤烏賊二十七斤鮭六十四隻半雜腊百二十八斤鯖百二十斤雜腊五缶堅魚煮汁三升雜海菜五升海藻六十二斤芥子三升二合盛雜腊一籠覆敷案料信濃布四端三丈敷折櫃一百合布七端二丈三尺大筒一百合蒜一斗四升葱三斗蘿菔七十把蒿苣七斗葵三斗芹三斗蕓薹三斗胡蒜五升蘭十把（已上九種內膳司所進）弓弦葉二十七擔干柏六俵炬油六升竹三擔黑葛六斤簀四枚干柏三俵食薦七十八枚鮮魚充直（鮮物菓子雜器等之直並運賃料布二十端）官人當色一領史生膳部等明衣料佐渡調布九端染料紅花小一斤五兩襷拭布料商布六段と有り（干柏は四時祭式春日祭條には唯に槲と記り同物なり）又內膳式春日春祭條に絁一疋綿二屯（官人一人當色料）調布四端（膳部八人衫料二丈一尺）紅花一斤（染膳部衫料）紺布一端（女丁裳料）商布六段（四段仕丁擔夫各二人衫料二段膳部仕女等巾料）右雜物預前申省自大藏省請受（但供神物見神祇式）官人率膳部仕丁等赴向祭所以供其事秋祭准此（擔夫臨時申省）と有り（女丁仕女同しき者か能尋ぬ可し）

天皇我大命爾坐世恐岐鹿島坐健御賀豆智命香取坐伊波比主命枚岡坐天之子八根命比賣神四柱能皇神等能廣前仁白久

天皇我大命爾坐世は平野祭詞久度古開神詞にも見え續紀第三詔に此乃天豆日嗣之位者大命爾坐世大坐坐而治可賜止云々第九詔に天皇大命爾坐西奏賜久第十四詔に斯天日嗣高御座乃業者御命爾坐世伊夜嗣爾奈賀御命聞看止勅天第二十五詔に御命坐世宣久云々又類聚國史天長二年十月詔に大命爾坐世石作山陵爾申

給久又文德天皇實錄嘉祥三年七月の策命に天皇我詔旨仁坐天御柱國御柱神等乃廣前爾申賜倍止申久また三代實錄貞觀七年二月の告文に天皇我詔旨爾坐掛畏岐八幡大菩薩乃大前爾申賜倍止申久と見えたるを通考るに佗例天皇我詔旨止某神乃廣前爾申賜倍止申久と云ふに異ならず然れば天皇我大命爾坐世は鈴屋翁說の如く天皇我大命爾令隨にて句を隔て廣前爾白久へ係れるなり尙下に云ふを見合す可し佗例皆然り天皇の大御命の隨(マヽ)に申傳令め給ふと云ふ義なり歷朝詔詞解三三十九丁に此義を解て云く坐は借字にて令隨の意ならむか先坐世を借字ならむと云ふ故は令隨とは本麻と云ふが即隨の意にて其より麻々爾とも麻爾々々とも麻加世とも云ふなる可し偖大命爾令隨とは先萬葉の歌に常に天皇の御命畏みと詠るは天皇の大命は如何なる事にても背き難く其詔命の隨に畏りて仕奉る由にて其は臣民の方より云ふ言なるを此大命爾令隨は其を天皇の御方より詔賜ふ詞にて天皇は天下の萬事大命の隨に令爲給ふ由なり然れば大命に任せと云ふと同意なり偖此言は古言に惟神と申す類にて天下の萬事を大命の任に物爲させ給ふ天皇と申す意にて此詞即天皇の御事と成れるにて彼大命に坐詔久と云る類は天皇の詔曰と云意又大命爾坐世大坐坐而と云るは天皇と爲りて大坐にてなり然れば大命とは唯に其詔を差て云るには非る事彼第六詔第十四詔などの語の續きを以て曉る可しと云れたるは甚美好き說なるに就て思ふに天皇我大命爾坐世云々は天皇の大御命の隨に其事を違へず取傳て申す義なる可きなり然るは右に引る嘉祥三年七月の策命貞觀七年二月の告文などを按るに天皇が大御命の隨に某神の廣前に申賜へと其御使の人に仰給へるが其を取傳て其神に白す故に申賜倍止白久とは云るなり然れば此も天皇我大命爾坐世は宣命にて其御使に仰給ふ事にて云々廣前爾白久は其御社に到て演る言なればなり祝詞に宣命を兼たる事に第三卷の初に委しく云れは披き見て知る可し然るを唯に祝詞と耳見る故に盡されざる說古今に少からずして何れも允當を得ざるなり考に本文を天皇我大命爾坐衆と改て今本の誤なる由に云れたるは甚しき誤にて其說等はた悉く强說なり○恐岐常には掛卷母恐伎と云ふ例なり續紀の詔に關母恐岐また掛畏岐と見え其餘宣命に多く且萬葉にも數多咏り偖此は言に掛て申すも恐しと云ふ義にて萬葉一口丁に珠手次懸乃宜久遠神吾大王乃云々十五丁に子等名丹關之宣朝妻之十二九丁に妹登曰者無禮恐然爲盤懸卷欲言爾有鴨など皆言に掛て云ふ事を云り今俗言にも掛ても云々爲まじなど云ふ掛と少しも異り無し恐岐は俗に恐多し云ふ義なり記傳三四十四丁に訶志古は古書に畏可畏恐惶懼などの字を書て畏志畏伎と活用きて其伎は加伎久都と活く言なり○今云其畏志畏伎と活用は其畏き狀を見て云ふ言にて畏然の義なり又畏加夏牟畏加利と樣に活用は其畏く有る狀を以て云ふ言にて

畏在の義なり又畏麻牟畏美畏牟畏米と活用は畏き物に對ひて畏縮するにて將レ畏の義也又畏良武畏利畏留畏禮と活用くは其畏縮す可き前にて自然畏まる事にて其字爲レ畏の義なり　懼（オソル）恐るなり（又賢をも智有るをも云ふは然る人は畏る可き故に轉りて云ふなり）と云れたるが如し倩其訶志古の言義を解見るに心醜（シコ）と彼處（カシコ）と二義を兼て活用ける言なり心醜の醜は恐怖しき形容を以て相對ひ難き由なる可し（賢き人智有る人を訶志古志と云ふ此なり）彼處（カシコ）は尊上の方には近く可からざるが故に遠く仰き敬ふ由なり（漢籍論語に鬼神者敬而遠レ之など恐懼する事を云ふなり然るは遠放て近附ぬ義に說るは曲儒の謬解なり）然れば心醜と彼處と二義を兼たる言なるが其語を成す上を以て畏とも可畏とも恐とも惶懼とも當つ可き字義に爲れるなり倩此に恐岐掛卷母より續くとは異りて唯に其神の御稜威の恐懼き由にて言に掛る謂には非ず（考に恐岐ちふ言は伊勢の神宮の御事にも斯る所は無し言憚能く居侍らず如何にぞやと難められたれど誤なり）○鹿島坐は神名式に常陸國鹿島郡鹿島神宮（名神大月次新嘗）と有て餘社の例とは大に異にて宮號を稱せらるゝ事は神代の功績に依る所なり（其由健御賀豆智命の御傳に云ふ可し）倩古語拾遺に武甕槌神今常陸國鹿島神是也と有る如く官より祭らるゝ所は一座の如くなれども鹿島志と云ふ書に左天兒屋命右經津主命と記せり然も有ぬ可き御事なり斯在は官よりは摠ても鹿島神宮と祭られて座數は幾座とも別られぬ者なりけり（然れば此三柱神を合せて鹿島神宮申す事にて武甕槌神一柱を官より祭られて餘の二神は祭らせ給はぬかと云ふに然らず官よりは鹿島神宮と稱して摠體に祭らるゝなり然れども鹿島神と指す時は武甕槌神なる事云も更なり）御鎭座の事は常陸國風土記香島郡の所に天地草昧已前諸祖天神（俗云賀味留岐賀味留美）會三集八百萬神於二天之原一時諸祖天神告云今我御孫命光二宅豐葦原水穗之國一自二高天原一降來大神名稱二香島天之大神一天則號二曰香島之宮一地則名二豐香島之宮一と見えたる如く天上なる香島之宮は大神の神積り坐す常宮なるが常陸の豐香島之宮は大神の御靈を留め鎭め給ふ宮處たり（倩天上にて香島之宮と云ふを此國にて豐香島之宮と豐字を冠（ソ）へたる所以は古始太元考豐雲野神の下に說る如く豐は動にて大地の動みに依れり其は大地に天日を中心にして三百六十五日有奇の大運有り又一日一夜に一轉の地動有るが故寒暑晝夜の差別有て天神の造化此に依て行はれ神祇の全能此に因て發るゝ事なれは世間に在と有ゆる物事の上に此に勝れる美好き事なく又此に超たる豐太（タフト）き事無きが故に此大地上の事には豐の語を從へと稱辭とは物爲るなり然れば神名にも豐呆神と申せるが甚多かり其も此國の神か此國に降坐て功を立給ふ神に非れば稱さぬ例にて天神に負坐る事無きなり然るを天照大御神の御事を鎭魂祭歌に豐日孁と稱奉れるは此國にて後に稱奉れる御名なるが故なり熟此差異を思ふ可くなむ）鹿島とも稱ふ由は師說に風土記に武甕槌神を香島大神と稱し其坐し處を香島之宮と號し（イヒ）を此國にては豐香島之宮と名くと云るを思ふに疑無く鹿を愛養ひ置給へる島なる故の名なりと云れしは信に然る可し然れども迦具志摩と訓れたるは如何有む國造本紀に建借馬命と有るを風土記に建借間命と作たれば舊訓の如く迦志摩と訓むぞ宜

し在る可き（萬葉二十卷なる那賀郡の上丁大舍人部千文が歌に阿良禮布理可志麻能可美乎伊能利都々須米良美久佐爾和例波伎爾之乎と見え和名抄にも常陸國鹿島郡加之末と有り）偖此神宮の御位の事は景雲二年大和國春日社に祭給へる後其本宮の御事を兼て春日社にて執行はせ給ふ御定にて已に上に引るが如し往昔より毎廿箇年に一度造替爲らるゝ御定なりけらし日本後紀に弘仁三年六月辛卯是日神祇官言住吉香取鹿島三神社隔二廿箇年一皆改作積習爲レ常其弊不レ少今須下除二正殿一外隨レ破修理永爲中恒例上許レ之と見えたり（已に此頃妖佛の毒盛にして神事を疎略に爲させ給ひし者なり桓武天皇は石上神宮に一十五萬七千人の單功を惜ませ給ひ乍に延曆寺と云ふ大寺を建立し給ひ嵯峨天皇は此住吉香取鹿島の造營の料を惜給ひ乍に高野山を創建し給ふなど自他本末の意を違へさせ給へり悲しむ可し）此に因て臨時祭式に凡諸國神社隨レ破修理但攝津國住吉下總國香取常陸國鹿島等神社正殿廿年一度改造其料便用二神稅一如無二神稅一即充二正稅一と有り斯在れば弘仁より已前は正殿は更なり悉く造替有し事と見ゆ偖此は何時より定りけむ大神宮諸雜事記に天武天皇朱雀三年九月廿日依二左大臣宣奉勅一伊勢二所大神宮御神寶物等差二勅使一被レ奉レ送畢（色目不記）宣旨狀儞二所大神宮之御遷宮事廿年一度應レ奉レ令二遷御一立爲二長例一也云々抑朱雀三年以往之例二所大神宮殿舍御門御垣等波宮司相二待破損之時一奉二修補一之例也而依二件宣旨一定二遷宮之年限一又外院殿舍御倉四面重々御垣等所レ被二造加一也と有れば此度など定りけるにや然れど國史に見えず（但二所大神宮の廿年に一度の遷宮は天武天皇彼壬申の御軍に勝利を得給ひし報謝に依れる事神宮の書共に記せる如くなぞか住吉香取鹿島三神社の事の例には引難きに似たりと雖も必鹿島神の御祐有つるならむと思ふ由有り天武天皇御紀に高市社所居名生雷（イクイカツチ）神者也と人に託りて諭奉給ひし事有る生雷神は建御雷神の建を省きたると聞ゆればなり牟狹は武者の字音を以て呼る物なる可し神名式に大和國高市郡牟佐坐神社大月次新嘗と有て三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授二大和國從五位下牟佐坐神從五位上一と見えたる社此なり然れば壬申の度に御祈共有し報謝に住吉香取鹿島の造營の事は定させ給へるにや）三代實錄に貞觀八年正月廿日丁酉先是常陸國鹿島神宮司言鹿島大神宮總六箇院二十年間加二修造一所レ用材木五萬餘枝工夫十六萬九千餘人料稻十八萬二千餘束採二造宮材一之山在二那賀郡一去宮二百餘里行路嶮峻挽運多レ煩伏見造宮材木多用二栗樹一此樹易レ栽亦復早長宮邊閑地且栽二栗樹五千七百株楹四萬株一望請付二神宮司一命二加殖一兼二齋守一大政官所分並依レ請と見えたり（日本後紀延曆廿四年の下なる石上神宮の功程を奏する文に單功一十五萬七千餘人と有るに劣緜たり是を以て此神宮の大造なる事想像奉る可し）日本後紀に延曆廿三年六月丙辰制常陸國鹿島神社云々等宮司人懷二競望一各稱二譜第一自今以後神祇官撿二舊記一常簡二氏中堪レ事者一擬補申レ官と有り神宮司と稱する事其仕奉る神宮の甚重きが故なり臨時祭式に凡諸神宮司禰宜季祿者云々下總國香取神

宮司常陸國鹿島神宮司越前國氣比神宮司並准二従八位官一並以封戸物充レ之と見ゆ漸後世に至りては漫りに宮司社人の位階を高く上せ給ふ事と爲れゝば珍しからねども往昔は然らず大神宮禰宜すら従七位官に准せらるゝ事なり是を以て従八位官に准せらるゝも諸社に異なるが故に別に記されたるなり此等を除ては能登國氣多神宮司准二少初位官一以二神封一給レ之と見ゆ其餘社の祠官は悉く無位なりしなり香取鹿島の神宮司の重き事知る可し當宮攝社の事は常陸國廿八社鎮座記に高房神社在二本宮前一是謂二倭文祠一又謂二之奏者神一祭神建羽槌神と見ゆ偖神名式に同國久慈郡靜神社名神大と有るを西山遺事に手力雄命を祀らるゝ由なるが其處にも高房神社有て所祭健葉槌命なる由右の廿八社記に云り古語拾遺石屋戸段に令天羽槌雄神倭文遠祖也織二文布一と見え神代紀御天降段の正書の分註に一云二神遂誅二邪神及草木石類一皆已平了其所レ不レ順者唯星神香香背男耳故加遣二倭文神建葉槌命一者則服故二神登レ天也倭文神此云二斯圖梨俄未一と有れば文布織の神に在せるが此時二神香取神鹿島神の殿を物爲給ふ故に後取の神とは申せるを似たる唱の別々なるが一つに合て倭文神と稱ふ事とは成れりし者なり神名式に大和國葛下郡葛木倭文坐天羽雷命神社大月次新嘗と見え其餘諸國に倭文神社多かり皆同神也偖香取神宮の攝社にも高房神社有て祭る所此に全同し板神社祀二高倉下神一は天香山命の亦名此神宮に由緒有る事は神武天皇の御世に布都之御靈劒を降し給はりつるに依れり神名式に大和國城下郡鏡作伊多神社と有る伊多と板と同言なれば社説信に諾ふ可し然るに此社を見目神と申す事は鏡作神に在せば也師説に社記に高倉下命と有るを思束無しと云れたれど中々に誤れるなり年神社在二北宮下村一住吉三神後加二神功皇后一也と見ゆ此は三韓御征伐の御時皇軍を助奉りて先鋒と爲り給ふ所以に依れり此事國史に所見無しと雖も正説なり斯る故なるにや住吉末社に楯御前社矛御前社有る其を香取鹿島神と古く云傳る事なり又神名式に攝津國住吉郡生根神社大月次新嘗と有るは諦しく鹿島大神成可き由下に云るが若し沖洲神社此を息洲神社とも稱へり祭神は岐神なる由鹿島社傳記に云るは決めて古説なり此は神代紀御天降段第二の一書に於是大己貴神云々薦二岐神於二一神一曰是當二代レ我而奉レ従也云々故經津主神以岐神爲二郷導一周流削平有二逆命一者即加二斬戮一歸順者仍加二褒美一と有る此に依れり此事委しく師の玉襷に云れたり此を住吉神と云ふ説は由なし尤春日社にも岩本神と云ふ有り次て岐神ならむと所思しきを住吉神と傳たり其下に辨るが如し八龍神社二座相二向本宮傍一又四座在二樓門一二座相向在二町左右一祭二高龗神一謂二之龍神一と見えたり此は火神の御骸より成坐て共に大神の御由縁に在せば祭られ給ふなる可し香取神宮にも樓門八龍神有りて各々其名異なり然れど甚疑はしき名の狀なり倘常陸風土記に行方郡自郡西北提賀里云々其里北在香島神子之社有り香取志と云ふ書に香取神宮の攝社又見神社の祭神

を記せる中に鹿島大神の御子武沼井命と申す御名有れども其出所を詳に爲されば其とも定め難し年中行事秘抄に引る高橋氏文に景行天皇の詔勅を載たるに大倭國者以行事負レ名國奈利と有る如く上古に名の定る所以は各其行事の上を以て稱る例にて如何に此事無き神の御子と座せども然まで功も坐ねには殊に御名有る事無きなり然ればこそ香島神之子香取神之子と樣には傳へたるなれ　又鹿島大神の苗裔神と稱す社有り三代實錄に貞觀八年正月廿日丁酉云々常陸國鹿島神宮司言大神之苗裔神三十八社在陸奧國菊多郡一神名式に見えず國造本紀に道奧菊多國造輕嶋豐明御代以ニ建許呂命兒屋主刀(乃イ)禰ニ定ニ賜國造ニと見えて建許呂命は常陸國茨城國造の祖なれば由有り然らば苗裔神と申すは末社(エダヤシロ)の意なる可くや　磐城郡十一神名式に鹿島神社有りて其餘は未詳なり國造本紀に石城國造志賀高穴穗朝御世以ニ建許呂命ニ定ニ賜國造ニと有れば此も其員に加り給ふにや　標葉郡二國造本紀染羽に作れり神名式斯波郡に見えず　行方郡一神名式に鹿島御子神社有り此なり　宇多郡七神名式に見えず子眉嶺神社名神大有れども上毛野朝臣同祖吉彌侯部氏なる可ければ此は別也　伊具郡一神名式に當部熱日高彦神社鳥尾並神社二座有る中に熱日高彦神社ならむと思ゆ此社島田村に在て日高明神と云りとぞ國造本紀に伊久國造有り　亘理郡二神名式に鹿島伊都乃比氣神社今北山村に在り鹿島緒名大神社今在鹿島村また鹿島天足和氣神社と云ふも在り斯在は亘理郡二と有るに式にては三社なり　宮城郡三神名式に四座有れども今思ひ合せらるゝ社號見えず　黑河郡一神名式に鹿島天足別神社有り　色麻郡三神名式に無し　志太郡一常陸國にも信太郡有り倭神名式に敷玉早御玉神社有り此なるか　小田郡四神名式に見えず　牡鹿郡一神名式に鹿島御兒神社有り　聞ニ之古老ニ云延曆以往制ニ大神封物ニ奉ニ幣彼諸神社ニ弘仁而還絕而不レ奉由レ是諸神爲レ祟物怪寔繁嘉祥元年請ニ當國ニ移レ狀奉レ幣向レ彼而陸奧國稱レ無ニ舊例ニ不レ聽レ入レ關宮司等於ニ關外河邊ニ祓ニ棄幣物ニ而歸自後神崇不レ止境內旱疫望請下ニ知彼國ニ聽レ出ニ入關ニ奉ニ幣於諸社ニ以解ニ神怒ニ其幣料用ニ大神封物ニ云々大政官處分並依レ請と見えたり嵯峨天皇弘仁の頃より幣を奉らざる事と爲りたるは朝廷にて事溢樣の御事を行はせ給ひ馴て漸神事を疏略に爲給ふ程なりし故に自然其弊の下に及べるなり　倩此鹿島大神は上に已に云る如く春日にて祭らるゝ事と成しより神位も何も其社に就て奉られ又其封物をも割ちて春日祭の料に具ふる事となれる由なれど尙其本宮にも御使を奉らせ給ふ事有り其は內藏式に鹿島香取祭幸川祭の下大原野祭の上に在り但四時祭式に載られず鹿島社宮司禰宜祝各一人物忌一人香取社宮司禰宜各一人物忌一人社別五色薄絁各一丈安藝木綿二十枚盛裹料商布一段布綱三條一丈長一丈二尺三條各長五尺廣六寸已上宮物明櫃二合調布二丈數料櫃荷褸二條禰宜人別絁一疋物忌人別夾纈布淺綠帛各三丈已上寮物紫纈帛三丈纈帛六尺絹一疋綿二屯宮司當色一領禰宜祝人別當色一領社別雜給料絲二十絢已上官物使等裝束藤原氏六位已下一人寮史生一人賫幣夫二人使料當色一領夾纈紅臈纈支子帛各一疋中綠帛二疋調綿二十屯細布三端已上官物淺綠綾淺綠帛各一疋已上寮物史生當色一領絹二疋調綿六屯曝布二端賫幣夫別衫一領料紺調布二丈布帶一條長八尺已上官物使等上道日餞料錢一貫文右使名簿前ニ二月春日祭ニ二十日

大臣下當官寮差ニ點史生一申レ官預裹ニ備幣物一其使等當日賫レ幣發レ寮向レ國と見えたり（前ニ春日祭ニ二十日と有るは行程の遠きに依れり祭日は同しく上申日なる事云ふも更なり）常陸風土記信太郡の條に榎浦之津便置驛家東海大道常陸路所以傳驛使等初將レ臨レ國先洗ニ口手一東面拜ニ香島之大神一然後得レ入也と有るは此祭使を初て京より下らるゝ官人は例として榎浦之津より大神を拜奉る事と聞えたり（其國に入るの初めに先大神を拜て後に向ふ事は古き例にて伊勢太神宮式に凡驛使入ニ大神宮堺一者到ニ于飯高郡下樋小川一止ニ鈴聲一と有るは已に神郡に入る故に鈴聲を止むる事なるか正應六年七月十三日公卿勅使御參宮次第にも其宿々にて大神宮を遙拜する事など見えたるを思ひ合す可き者なり）又臨時奉幣の事は類聚符宣抄に村上天皇天曆五年正月廿二日鹿島香取兩社に勅使奉幣の由見えたり（但前祭ニ二十日云々と上に見えたる如くなれば二月上申日の勅使の京より發遣せるを遡記せる也可し）百練抄に四條天皇仁治二年二月十二日去頃鹿島社燒亡垂跡以後無ニ此災一但不開之御殿不レ燒云々社司不ニ參會一御躰者供僧等奉レ取ニ出之一同年十月十七日辛未被レ發ニ遣鹿島香取兩社奉幣一使神祇權少副大中臣行輔被レ謝ニ申火事一也と有も臨時の例なり（不開之御殿は鹿島志に正殿は常に御扉を閉奉れば不開殿と云と云り然れば正殿の外雜舍の燒亡せるなり）

○健御賀豆智命出自に神代紀神達生坐段第六の一書に于時伊弉諾尊云々遂拔ニ所帶十握劍一斬ニ軻遇突智一爲ニ三段一此各化ニ成神一也復劍刃垂血是爲ニ天安河邊所在五百箇磐石一也即此經津主神之祖矣復劍鐔垂血激越爲神號曰甕速日神次熯速日神其熯速日神是武甕槌神之祖也（亦曰甕速日神次熯速日神次武甕槌神）復劍鋒垂血激越爲レ神號曰ニ磐裂神一次根裂神次磐筒男神（一曰磐筒男命及磐筒女命）と見え又此次なる一書に亦曰斬ニ軻遇突智一時其血激ニ越一染於天八十河中所在五百箇磐石一而因化成神號曰磐裂神次根裂神一兒磐筒男神次磐筒女神兒經津主神と見え古事記には於是伊邪那岐命拔下所ニ御佩一之十拳劍上斬ニ其子迦具土神之頸一爾著ニ其御刀前一之血走ニ就湯津石村一所成神名石拆神次根拆神次石筒之男神（三神）次著御刀本血亦走就湯津石村所成神名甕速日神次樋速日神次建御雷之男神亦名建布都神亦名豐布都神（三神）云々と見たり此等と合せて思に伊邪那岐大神其御子軻遇突智神を斬給ふ所の血其御刀の刄より垂落りて激上るが天の安河原なる五百箇石村と成れりけるが其石村に彼御刀の鋒より垂落る血の激越たるに依て其相混合せる神氣の凝て磐裂神根裂神二柱夫妻倶生坐る也（但此二神を夫妻と云ふ事は此に用無ければ經津主神の御傳に云ふ可し倩神達生坐段第八の一書に伊弉諾尊斬ニ軻遇突智命一爲五段云々是時斬血激ニ灑染於石礫樹草一此草石沙石自含レ火之緣也と見えたるは此磐裂根裂に就たる事也其は下に云ふ可し）此二神の子に磐筒男命磐筒女命夫妻二神倶生坐る其御子は經津主

命也（此師の事は委しく下に云ふ可く思て此は闇つ）レ若て其御刀の本鐔の處に垂落りつる血の激上るには甕速日神次に熯速日神生坐して其御子は武甕槌神也（此等の事の論ひは古史徴に論へれば今云はす）斯在れば經津主神武甕槌神共に其成坐る因縁より云ふ時は伊邪那岐大神の裔なる物から其生出る物實を以て申す時は火之迦具土神の末なるを神代紀の御天降段の正書には時有二天石窟所住神稜威雄走神之子甕速日神甕速日之子熯速日神熯速日神之子武甕槌神云々と見え古事記にも坐二天安河河上之天石屋一名伊都之尾羽張神云々其神之子建御雷之男神云々と見えたる證據慥なる上は伊邪那岐大神の御子十拳劒の神靈伊都之尾羽張神の御子と申さむぞ受ばれたる論には有る可き然れど此尾羽張神と共斬られ給へる迦具土神と二柱の神靈の合擬成て生坐る事云ふも更也記傳十四丁三に其血は母の如く此刀は父也故上には因二御刀一所成之神也と云ひ此處には直に御刀神の子と云りと云れたるは然る言也（然るを師の神代系圖に經津主神の御祖と坐す磐裂神根裂神の系を天安河原之五百箇石村より係けて此者依五百箇石村而成坐之神等也と記せるは然る言なれど其は上に引る神代紀に劒刄垂血是爲二天安河邊所在五百箇磐石一也と有るに依られたるなる可けれど一書に其血激二越染天八十河中所在五百箇磐石一而因化成神號曰二磐裂神次根裂神一云々と有る其磐裂根裂神以下の神名を脱せるなれば五百箇磐石を以て經津主神の祖とは云ひ難し又同書甕速日神の左注（カキイレ）に此者依二御刀之御靈一而成坐之神也と有れど此も亦其五百箇石村に就て成坐れば御刀の御靈と申す事闇推に近し又武甕槌神の祖稜威之雄走神も天石窟に住坐れば石に縁なしとも云ふ可からざるに似たり實には經津主神武甕槌神の祖等は稜威之雄走神の神體と坐す十拳劒の迦具土神の御骸に觸て出る所の血の鋒に垂落れるは經津主神の出自と成り且鋒（ホコ）を司給ふ因縁と成り鐔に垂落れるは武甕槌神の出自と成り且劒を司給ふ所由と成れるが其五百箇石村に注きたるに神氣を得て成坐るが其本來の由緒に依て磐裂根裂神は木石に透入て萬物含火の幽契違はず且稜威之雄走神の石窟に住給ふ幽契も其に根ざす事なり）

稜威之雄走神は伊邪那岐大神の迦具土神を斬給はむと以爲る御靈の御刀と化成給ひて迦具土神を斬給ひ稜威々々しく武き勁き御德を具御在す由の御名なり（記傳十四に此神は伊邪那岐大神の迦具土神を斬給ひし御刀の御靈にて即其御刀の名な天之尾羽張とも伊都之尾羽張とも云ふ由上に見えたり倚其處には神と云ざるは直に其御刀を差す故なり此は其御靈を云ふ故に神と云りと云れしは本末の相違なり迦具土神を斬給はむと所思凝し坐す靈に即神にして其思を遂給ふ處は劒なり然れば神は體にて劒は其用なる事著明なり）

稜威は甚しき意と速けき意とを兼たる言なり然れば神氣の內に充て勢の外に動くを云ふ言なり言義伊都は氣津にて津は湊る意と出る義とを兼たり此故に惡神の上に道速振と云ふも其氣津の度に超過て暴凶に至るなり又伊豆も豆を濁り同言同義なり淸氣の湊り充るが淨らけきなれば異る言なし此故に嚴字を當たり冠辭考に記されたる如く古事記に伊登志和氣王と云ふ同じ王を垂仁天皇御紀には膽武別命と書れたり此膽武も此なる稜威に近かる物をや（已に記傳に記されたる加く漢書に憺二乎隣國一註に神靈之威曰レ稜とも有り此意にてぞ書れけむ文選に稜威とも有り）雄走神の雄は雄偉

き意走は記傳の說の如く劒の炎利きを云ふなるが此は伊邪那岐大神の御怒坐る一速き御靈を資て生坐れば稜々威々しく雄偉しく眞利く坐す神なり古事記に且其天尾羽張神者逆塞上天安河之水而塞道居故他神不得行云々と見ゆ是を以て此神の世に畏き御事を思ふ可し 記傳に世に物に水を湛へ其中に砥を安て刀劔を砺くは此神の如此河水を塞湛へ石室に坐るに縁れりと云れき 又伊都之尾羽張神とも天之尾羽張神とも申す尾羽張は記傳に尾は鋒を云り羽は刄にて鋒の張たる劒を云ふなる可しと云れたるが如し 又今世に波婆理と云ふ針は刄の鋭(ツキ)たる針と云ふ意にや若又刄張の針と云ふ意の名ならば此と同じ又物の滿蔓る事を波婆流と云ふも意近しと有り 甕速日神甕は借字にて言義は滿氣なり氣の滿々たる時は勢力柔順ならず剛健なる者なり又嚴とも通ふ言なり其由記傳五十七三丁に委し武甕槌命を健雷神とも申すを思へば正しく通ふ例なりけり 仁德天皇御紀に瀰箇始報破利摩波揶摩智と有る甕潮は速待と云も發語にて嚴しき潮の速きと云ふ意の續けなる由記傳の說の如し凡て物の畏く嚴しきを云ふ語にて甕星甕栗甕蜂など多かり然を通證に甕者大之古語と云ひ冠辭考にも物の大なるを甕と云ふなど云れし說は本義に非ず因に云ふ甕ノ字を借れる所由に酒を伎とも祁とも迦とも云ふ其を藏る由にて甕に美迦の言有るを用(ツカ)へるなり 速日は速火にて殺され給へる火神の御靈の一速び坐す御稜威を受給へる由なり人の怒る時は面火照など此因緣に依れり 勝速日命の速日は速振の意なれば別なり熟く言義を思ふ可き物ぞ 熯速日神古事記には樋速日神と作り記傳に云く

火と書ずて樋字をしも借れるは乾の意なればなり熯字は玉篇に火盛乾也と註せる其意なり然らば甕速日は然る火を云ひ樋速日は乾す火を云ふなりけり 易說卦に燥ニ萬物ニ者莫ㇾ乎火ニと有り尚記傳に就て委しく考合す可し出雲風土記に大原郡斐伊鄕屬ニ郡家ニ樋速日子命坐ニ此處ニ故云ㇾ樋云々と有るは決く此神たり 武甕槌神遷却崇神詞には健雷命と有り武とは氣の太(イタ)く長り音みて其勢ひの甚嚴しきを云ふなり凡て神名に武と冠らせたるは並其義なり 萬葉九に牙喫(タケビ)建怒而と書きたる能く當れり神代紀下卷に蹈誥と見え雄略天皇紀に踏叱など有り又古事記神武天皇段に爲男建と有るを御紀に雄誥此云烏多稽眉と記せる此等の字義をも思ふ可くこそ又古書中多く健をも武をも勇をも猛をも多祁と訓り雄略天皇御紀に感をも多祁利と訓り尚古始太元考に云り 甕槌は甕之持(ミカツチ)なり然れば勇猛(タケ)く威嚴(イカメ)しき御稜威を持ち給ふ意の御名なりけり 木神を久々能智神など申す傍例なり能は都と云ふ例は天之神を天津神國之神を國津神など申すに等し持を知と云ふは字音と訓義と同じきなり記傳に智は男を尊ふ稱なりと云れしには委からず又野椎神の下に都知の知は持なる可し都は助辭にて山雷野椎は山之智野之智と云が如し 倩此大神の御德(ミイツ)の立(チ)給ふ所由は古事記天降御段に於是天照大御神詔之亦遣ニ曷神ニ者吉爾思金神及諸神白之坐ニ天安河河上之天石屋ニ名伊都之尾羽張神是可ㇾ遣若亦非ニ此神ニ者其神之子建御雷之男神此應ㇾ遣且其天尾羽張神者逆ニ塞上天安河之水ニ而塞ㇾ道居故他神不ニ得行ニ故別遣ニ天迦久神ニ可ㇾ問故爾使ニ天迦久神ニ問ニ天尾羽張神ニ之時答白恐之仕奉然於ニ此道ニ者僕子建御雷神可

レ遣乃貢進爾天鳥船神副ニ建御雷神ニ而遣と見えたる如く伊都之尾羽張神を天降し遣はざる可在しを此道には僕子建御雷神を遣てむと白して奉給へり然るに上に引る神代紀に稜威雄走神之子甕速日神甕速日神之子熯速日神熯速日神之子武甕槌神と見えたる甕速日神熯速日神二柱を除て武甕槌神を差遣さるゝに就て思へば此神等は然る御德も坐々ざる如くなれども然らず此二神の御勢ひを兼併せて此武甕槌神の御稜威は太しく高く立給ひけるにぞ有ける但其御稜威を振ひて御勳功を建給へる樣は各其得給ふ所の佐知に異り有り經津主神は鋒に依て功を立給ひ此神は劒に依て德を成し坐り（天迦久神と申すは鹿神なる由師說なり常陸風土記に天地草昧以前云々自二高天原一降來大神名稱二香島天之大神一天則號二日香島之宮一地則名二豐香島之宮一と見えたり然らば天安河河上之天石屋の有る處を香島とは云るなり武御雷神の鹿を使ひ給ふ事此由來に依れり又天迦久神ハ鹿神なりと云れし師說の信ふに足れり）倩此は思金神の八意に思慮り坐るに依れる事なるが此は究て幽深き致有る事なり其は伊邪那岐伊邪那美二柱神妹妋二柱嫁繼給ひて國の八十國島の八十島を生給ひ又八百萬神を生給ひて眞弟子に火產靈神を生給ひけるに御蕃登を被燒坐しかば其火徹を避む爲に石隱り坐しを夫神の不審しく所思坐て甚しき形容を入見給ひしかば得堪難く所思す御心により吾奈妹命は上津國を所知食せ吾は下津國を將知と申給ひて竟に黃泉國に行坐りけり（此事委しく第十段なる鎭火祭詞に就て說云ふ可し然れど一通り心得ずては得有るまじき事なる故に因に云ふのみ）於是伊邪那岐大神宣はく愛しき吾汝妹命や子の一木に易つる哉と宣ひて哭給ふ其御歎の餘りに甚く御怒坐て即其火產靈神を斬給はむと所思し凝し給ふ勇猛く雄偉り給ふ御靈の一柱神と別れ生給ひ神體の御形質は稜威の尾羽張の神しき神劒なりしかば其を得て斬給はむ御心に決坐して其事を遂し給へり此即師說の如く御母神は火神を生坐るに依て下津國に神避給ひ其神避坐るに就て火神は被殺給ひければ火神の彼國を甚く惡み坐す本緣たり（但如何に御怒坐りとも其御子なる火神を斬給はむ事やは有る可き御母神の御陰門を被燒坐しは火神の生坐るに就てなれば其罪有るに似たりと雖も豈火神の御母神を害はむとして孕胎（ハラマシ）給はむや此も彼も偶然の事なるを其御子を罪し給ふはか當らぬ事の如くなれど然す火神を殺し給ふも被殺給ふも其事の極みは皇產靈神の預鎔造給ふ神功の眞徵有る事にて此一の禍事よりて甚美好き物事の多く出來ためるは幽に皇產靈神の預知成し坐る事なるを其事の有る上にては怒坐も止事無き性情に起り罰坐も去敢ぬ御怒に依れる事にて皆事の自然に生出る事なり然れども其大元を主宰る神に坐すは誰か知む）若て伊邪那岐命は其御妹を相見ま欲く所思て下津國に追往坐けるに已に伊邪那美命は黃泉戶喫爲給へるなれば此國に返り給ひ難く所思しけむ（師說に彼國の汚火の戶喫爲給ひて御身の汚れ給へば還坐難く思ほせるなり然るは彼國の火に汚坐て還給はゞ火神の荒坐て此國に殃災有む事を憚思しての御事なる可しと云

れたるは然る言なり　此時に二柱神の挑み給ふ可き事しも出來にしかば伊邪那岐大神の逃還らせ給ひければ伊邪那美神の追來坐けるに千引磐を豫母都平坂に引塞て各對立して絶妻之誓を建て族離れ給ひ先に申置給へる如く伊邪那岐命は上津國伊邪那美命は下津國と分去坐て別處を建保つ事と爲りにたり　絶妻之誓の說故大人等の說に甚く異なり古始太元考に云り　此時千引磐を以て其坂路に引塞給ひけるに其石に就て道反大神生坐し又自此以還へ莫來と宣ひて御杖を投棄給へるに岐神成出坐て共に塞神と守り障給へれば根國底國より疎び荒ぶる禍神は出來まじき事云ふも更なるが如何に爲む其御身に着給ふ所の物に其汚穢の尙遺りつるに時置師神煩神飽咋神と云ふ三神疾病を主る神と生給へり　時置師神は氣を犯して病を延く神煩神は神を勞して心を煩す神飽咋神は食物の度を超過して身を損傷神なる事已に第三詞の下にも云ひ又古始太元考に云る如し　又奧疎邊疎神奧津那藝佐毘古邊津那藝佐毘古神奧津甲斐辨羅邊津甲斐辨羅神合せて六神も成坐り此六神は疎び荒ふる神等なり　此も第三詞下に已に云り又古始太元考に此を濫せり　又是に伊邪那岐大神は其御身に染着る氣枯をこそは氣因め坐れ其禍神等は此國土に遺れりしかば此より彼に逐れ彼より此に掃はれ乍も尙彼に疎び此に荒ぶる惡狀不止有ける故に大國主神の此國を主領き坐す頃ほひに悉く摧伏せ給へりしに依て漸順ふ氣なりしも其は大國主神にこそは尙和順ふ信も有しが本より然る醜神なれば畏き天神の御制令に因准ひ天神の御子に順附ひ奉らざりしかば天照大御神の皇御孫命に此國を事依し授奉給ひて大國主神に國避の詔勅を傳給ふとして天穗日命武御熊命父子を天降し給へりしかども其事の遲引きて何時竟つ可くも非りける故に天稚彦を降し給へるに此神は禍神に交こられけらし忠貞ならざりしかば天罰を降し給ひて滅亡し給へりき　此事を委しく人の得明らめ知ぬ故に大國主神の國避は辜なく神甚く防き拒み坐す狀に云れど甚眞はしからざる說なり縱や早速に大國主神の避奉るとも此國土に在ゆる狹蠅如す荒ふる神等有て天神の御子とは坐せども安くは得坐まさゞる事を思ほして此國避の事も急ぎ給はざりける者ならし　是を以て思兼神深く遠く思慮得て申給ひけるは坐天安河河上之天石屋名伊都之尾羽張神是可遣若亦非此神者其神之子建御雷之男神是可遣と古事記に所見たり此は此國土に道速振る荒ぶる惡しき鬼神共は火神を生坐しに依て御母神は下津國に罷り給ひ其に就て伊邪那岐神の追往しけるに其穢き醜國の汚穢に觸給ふに依て上件の九柱神は其首領と成坐しに屬て其部屬神ども若干に成つらむが共に晝は如狹蠅水沸き夜は如火瓮

炫きて岩根木立草の片葉に至る迄に言語は令(シメ)て天神の御法度(ミナモムケ)を防ぎ拒み奉るなりしかば其禍神共の甚く畏縮(シヤ)ひ恐怖る火産靈神の御等族(ミウカラ)の神等を以て討平令め給ふ可く思慮得坐るなり 妖魅共の清火を甚く恐怖れ又天日の御光に遇ふ事を甚く畏む事は此所由に依てぞ有ける此は今日眼前の實理なるが此を以ても下津國に麗る禍(マカ)神の此武御雷經津主神の御稜威に挫るゝ事状を思ふ可し ○香取坐は神名式に下總國香取郡香取神宮 名神 六月次新嘗 と見ゆ神代紀下卷 御天降段 に天神遣二經津主神武甕槌神一使レ平二定葦原中國一云々是時齋主神號二齋之大人一此神今在二乎東國檝取之地一也と見え古語拾遺にも經津主神今下總國香取神是也と有り鹿島神宮の神代よりの鎭給ふ例に准へて思ふに決めて神代よりの鎭座なる事言ふも更なり香取志と云ふ書に引る長保二年十一月三日の舊記に自二神代一鎭座と有るは實然も有る可くこそ所思たり又建久年中の古記に神武天皇即位十八年戊寅始建二宮柱一と記せりとぞ 但香取志に古老の口碑に傳ふる所神武天皇元年と十八年との兩說有りと云り何れが是なるを知らず集古浪華帖に載る橘逸成朝臣の山階寺菩薩戒文に鹿取鹿島相殿枚岡四所大神と有り香取を鹿取とも作りしなる可し又天兒屋命は主と祀る神に非ずして相殿に坐す事著明なり然れば春日四座は鹿島香取二神を主と齋かるゝ事必せり 又惣國風土記に下總國揖取郡揖取神社所祭經津主神也舒明天皇三年辛卯七月始奉二圭田一行神禮有二神家巫戸祝部之宅一と有り此は朝廷より圭田を若

于奉らせ給ふ始と通えたり 尙惣國風土記に駿河國富士郡中其靈神社所レ祭經津主命也淸日入彥五十狹智天皇三年甲午八月祭レ之と見え又同書に武藏國足立郡植田郷孝安天皇御宇庚寅三月所レ祭經津主神也など見えたるは何れも香取神宮より遷し齋へるなる可きか其甚古ければ神武天皇十八年に始建宮柱と云ふ事強ちに非とも云難し 偖官より祭らるゝ所は右の如く香取神宮と一座の如くなれども社說に相殿神三座比賣神天兒屋根命武甕槌命此三神を祭れる由なり然れども此比賣神と云ふ事心得ず經津主神の后神ならむと思へども考ふる所無し若くは春日祭神四座の中なる比賣神ならむも知る可からず 若然も有らば天兒屋命の後に坐す神なり其天兒屋命は春日にて鹿島神香取神の次に立給へり其後神を香取にては相殿の最初に置く可くも非ず復々も心得難し尙能く考定む可き者なり 香取の地名を古く檝取と作く此正字なり香取志に神功皇后三韓を征伐給ふ時御船を助導奉給ふ事舊記に所見たりと有り鹿島本緣にも此時武甕槌命は御船の舳に立て先鋒を爲し經津主神は艫に立て檝を操ると見えたる是正說にて檝取の地名の起る所緣なり神功皇后御紀に韓征の事は誰神の御心そど問申給けるに幡荻穗出吾也於尾田吾田節之淡郡所居之有也と答給へるは此神なる可し神名式に阿波國阿波郡建布都神社有り 但八幡愚童記にも此事を記せるが鹿島より四十八艘の船に乘給ふ云々と有り何にしても韓征の事に預給ふ事徵と爲可し名法要集神道大要等に此時神明の託詔に依て始て楫を作て御船忽飛行自在也と有るも必受る所有る可きなり偖如此く鹿島香取の大神等の東國に鎭坐せる故に東國の人は常に神武の氣を備たり是を以

て續紀天平神護十三年十月の宣命に東人波奈爾云久額爾方箭波立止毛背爾波箭方不立止云天君乎一心乎以天護物曾云々又萬葉廿に聞食四方國爾波比等佐波爾美知弖波安禮抒登利我奈久安豆麻乎能故波伊田牟可比加弊里見世受弖伊佐美多流多家吉軍卒等云々など古くより云傚はせたる如く今現に其如くなるを見る可し

正殿改造の事は先に鹿島條にも引る如く日本後紀に弘仁三年六月辛卯神祇官言住吉香取鹿島三神社隔二十年皆改造積習爲常其弊不少今須除正殿外隨破修理永爲恒例許之と見え又臨時祭式に凡諸國神社隨破修理但攝津國住吉下總國香取常陸國鹿島等正殿廿年一度改造其料便用神税如無神税充正税と見ゆ斯在ば古は正殿耳ならず雜舍に至る迄も悉く毎廿年一度改造有しを弘仁の頃より正殿の外雜舍は破に隨て修理を加給ふ事とは成にたり然るに三代實錄に元慶六年十二月九日丁未勅以下總國神税稻五千八百五十五把九分四毫充造正一位勳一等香取神社雜舍料隔二十年一作例也と見ゆ然れは弘仁の度の令は行はれずして尙古の任に雜舍をも二十年に一度改造せられしなり（但鹿島神宮には此事の物に見えたる事無し然れば此神宮にのみ限る事と見えたり延喜年中に奏上せる大中臣本系帳に鎌足公五代の孫香取神宮司宣年の弟數並造香取宮使と有れば其人を撰で造香取宮使を置れて式年の改造を令掌給ひし者なり倚右の五千八百五十五把九分四毫の得る所拾芥抄に十藭爲毫十毫爲分十分爲把十把爲束云々一束一斗米舂五升と見え令義解に束稻舂得米五升と有れば一把より得る所の舂米五合にて一年の米二十九斛二斗七升九合七勺にて二十年の積五百八十五斛五斗九升四合なり一應り心得置べ可）又臨時祭式に凡香取神宮樂人裝束者令國司付領若有欠失拘其解由（樂人六人料袍六領襖子六領汗衫六領白袴六腰襪六兩舞妓八人料袷衣八領單衣八領袴八腰裳八腰紕帶八條襪八兩）と有り臨時勅使を進せられたる事は類史に皇極天皇二年三月下總國香取神社奉勅使献綿三百屯馬二疋鋤二丁鍬一丁依水災と見え類聚符宣抄に村上天皇天暦五年鹿島香取兩社へ勅使奉幣の事有り（此餘にも甚多かり）

當宮攝社の事は香取志に所載側高神社又作脇鷹當宮第一の攝社香取郡大倉村に有り所祭神古來秘して云はず神宮の祠官年中九十餘度の大小の祭祀の中殊に重き神事の年に當ては神符を奉て愼て嚴祭れり其文に以脇鷹天神爲大行事可令糺定と有りと云り香取の神官共其神宮へ向ふ時には必先此側高神社に詣る例なりと云り然れば予を以て思ふに香取大神の遙宮などにやと所思るなり今強て試に思へは闇龗神ならむか大倉と云ひ地名も其に依れりと所思しく且鹿島は雷を使はし香取は龍を令はし給ふならむか此は國史神記共に所見無き事なれども然もと所思しき任に今此を云ふのみ古老傳に往昔香取大神脇鷹神を遣して陸奥國より牝牡二千疋の馬を令捉來給ふ於是側高神命を奉て彼國の荒野より馬を捉

得て常陸國霞浦の中なる浮島と云ふ所迄來給ひける彼國神其馬を惜み給ひ追及て此を留めむと爲て此所に來れりければ脇鷹神干珠を出して潮を干令め下總國に渡給ふ此所を馬渡と云ふ彼國神も渡むと爲るに滿珠を出せば潮倏忽に滿て得渡らず脇鷹神此二顆の珠を出し給へる地を玉落と云ふ斯て川を渡て岩崎と云ふに到る故乘越洲と云ふ其より香取の境に到り隱井と云ふ所に隱し置て復命申す因此馬共を當國の郊野に令放給ふ爾來許多の牧出來れりと云り又其脇鷹神干珠を出して潮を令干馬渡を引渡給ふ時彼國神追到り水田の塊に躓倒給ふ其間に馬を引渡畢て滿珠を出せば潮忽に滿て渡り得給はず因此て彼神其國に得歸給はず浮島に止給ふ里人叢祠を建て追手明神と祀へりしを今追島明神と稱て直に側高神社に對へる地なりとぞ是以て今も浮島村の土俗秋田を苅たる後其年中には耕さず若此を犯す時は必祟有り明年の春に至て此を耕せば難無しと云り此は古き風土記などに傳りし事なる可きを其書は亡失て古老の口碑に遺れるを如此く證據なる上は無下に可疑に非ず十一月七日夜脇鷹神社の祭祀有て後津宮に在る忍男社前にて白狀祭と云ふを物爲るは此に依る祭なりと云り此所緣に依て大倉村と浮島村と婚儀を爲さず邂逅に其事有りても種々の罪障出來など終に遂る事なしと云り又此側高神の陸奥より得給ふ所の牝牡二千疋の馬を所々に預進らせて側高神例は片眼盲たる牝馬一疋の得分なりしとぞ此に依て此神主の家は今も飼ふ所の馬始は双眼なるに何時の間にか片眼盲となる事にて現に違はぬ事なる由なり又側高神其干珠滿珠を龍神より取給へるに依て今も必霞浦に就たる其山岸崩るゝ事なるが若不崩時は却て凶災有りと云り此玉今に神殿に收て雨乞の時など大に靈驗有りとぞ斯る證據共多かる上は此將謬無き事なり

返田神社　同郡返田村に在り神宮の南方相距る事一里計一說に輌遇突智神なる由なるは經津主神の出自と在せば篤く祭給ふ可所緣有て究て然そ有る可き土俗此社を惡王子神と云ひ末社記にも然云りと云ふをも思合す可し其は御母神の御陰門を被焦坐しに依て此心惡子と宣る事鎮火祭詞に所見たれは然る可からむ但社傳に傳る所は鸕鶿草葺不合尊なりと云れども其書を知らず當社神女子の臨產時に至るに逮て祈奉るに必究て安產せしめ給ふ靈驗炳焉たるを以て御母豐玉姬命產期方に急りて產屋の葺合ふたも得待給はずして御子產しける緣に就て然るにか詳ならず予が心には安產を守給ふ事は輌遇突智神の生坐る時に御母神の甚く悶熱懊惱給ひ將御陰門を燒焦れ給ふに由て黃泉國に罷らせる爲に己命の斬れ給へれば世人を愛しみ所思看て然る懊惱を救助給はむと守護給ふ者なる可し然ば輌遇突智神と傳たる方此にも彼にも能く事實に叶へりと所思たり

大戶神社　神宮を相距事二里同郡大戶莊大戶村に在り社傳に天武天皇白鳳年中建此社所祭手力雄神也と云り神寶に木にも非ず又金石にも非ずして其質を辨難き龍面有て同郡矢作野と云ふ處に天隕れりとぞ今此龍面の天隕りし處を天降と呼ふとぞ里人小祠を建て此を祀れり村里に旱魃する時に請雨塚と云ふ地に此面を出し三度水を灌げは必龍起て雨を降すと云り按るに大戶とは此神の天石戶を開き給ひし由に依れるか信濃國水內郡戶隱山

（も此手力雄神を祀れるが戸を以て御社號に負坐ればなり）神前神社神宮を相距事四里計神崎莊神崎村に有り香取志に內官儀式帳を引て云く神崎神社一處稱國生神兒荒前比賣命と有るを配（アテ）たるは謂れたる說なるに就て思ふに神前とは神后と云ふ事にて則經津主神の后神にもや御在すらむ尙思合せらるゝは近江國高島郡に香取浦有て万葉の歌に此を詠み神名式に伊香郡伊香具神社（名神大）神前神社相並び又同國神崎郡名有るなど其緣に引むも强事ならず此事を以て彼儀式帳に及ぼす時は國生神兒は國生坐し伊邪那岐神兒と云ふ事にて荒前比賣命は火神の支族（エダ）神（カミ）ならむと所思るはや（但此は試に云ふ說なるか社傳には所祭而足尊惶根尊と云り倩此社今神宮の攝社と云ふにも非れば緣無きが如くなりと雖も香取志に載る所を見るに然らず大禰宜家に所藏の長寬二年六月の下文に關白左大臣家政所下下總國香取社司等可レ任二法家勘狀一令三大禰宜眞房知二行大戸神崎并小野織服村一事と有るが大戸神社は當宮の末社たれば神崎も當昔末社たる可しと云るは然る言なりかし）又見神社所祭五神天苗加命武沼非命天押雲根命天稚彥下照姬命以上五神なり末社記に始在二若宮一春日遷坐以後五柱神鎭二座此處一故以稱二又見一と有とぞ天苗加命は神別記と云ふ書に故以經津主神之始產裔天苗加命一爲二日之奧國長一と有るが此書は信難けれど社傳に傳る所同じければ實事なる可し武沼非命は社傳に鹿島神宮の御子と有れども其出所を知らず天押雲根命の事は論無し天稚彥下照姬を祀る事其由詳ならず（此處の土人雉を忌て喰はず此は天稚彥を祭れる故なりとぞ併此は少論有り雉を使されし天神の御方にてこそ喰ふを禁忌とも云はゞ云ふ可けれ天稚彥の方よりは自射る計り敵と見たる雉を憚る事如何なる事なり然れども神の御心は甚異かる迄測り難き者なれば敢て禁を犯す可きに非ず）高房神社神宮を相距事十五町計同郡多田村に在り末社記に佐軍神所祭建葉槌命と云り鹿島神宮にも高房神社有て所レ祭此に同じき事已に註るが如し（又末社記に勝手明神を祭とも云るは合祭れるにや勝手神は大和國吉野郡にも在て倉稻魂神なる由云傳へ尾張國知多郡にも同社有て所祭大知に同じき由當國名所圖會に社傳を載たり）忍男神社又云二東宮一神宮を相距事乾方十六町可津宮村に在り所祭彥火々出見尊とも或は伊弉諾尊とも云り孰か是なるを知ず（但當社六月晦日御禊の祭有り然らば伊弉諾尊を祀れるなる可しと思ゆ）膽男神社又云二西宮一同村に有り所祭豐玉姬命とも或は大己貴命とも云り（但忍男神社を東宮と云て彥火々出見尊を祀れるに對て思ふに豐玉姬命と云ふ方正說にや有む然らば主と祀ると合祭れるとを混らして或祭大己貴命と傳たるにや）竈神社同村少南方に在り所祭奧津彥神奧津姬神と傳たり此社素津宮と云りとぞ（香取志に一說に此社竈神に非ず竈は龗を誤れるにて神代紀に高龗闇龗神と有る其龗神にして水を掌坐す神なりと云りとぞ若然らば神宮に由有る神にて大に叶へり）匝瑳殿所祭磐筒男神磐筒女神と云り（此神宮の御父母神に坐は然も有る可く思ゆ）（アサメド）嬬殿所祭磐裂神根裂神也と云り（磐筒男磐筒女二神の御父母にて神宮の御祖父母の神等なり）鹿島新宮所祭武甕槌神天香山命也とぞ相傳云く奉招禱大和國山邊郡布留神也と云り（此社傳の如くならば鹿島より勸請爲るには非

で大和國石上神宮より移祀へるなり酒殿大宮司家傳に云く罔象女命也雖レ爲二一神一以二荒魂和魂一或爲二女神一或爲二男神一有二秘密之旨一而存矣と稱り今按ふに罔象女命と云るは誤なる可し神名式に酒殿神社二座酒彌豆男神酒彌豆女神と有るを取違へたるなり此は事代主命の御事にて慥なる証有れども事長ければ此には云ず古始太元致に委しく註す可し香取志に孝謙天皇御紀に幸二春日酒殿一蓋移二於吾神宮一乎と云れども春日は春日にて別なる可し但春日社記に酒殿神島田明神と有る祭神は同在むと所思たり　杖取神社所祭岐神也神代紀に乃大巳貴命云々薦二岐神於二一神一曰是當二代レ我而奉レ從也云々故經津主神以二岐神一爲二鄉導一周流削平有二逆命者一即加二斬戮一歸順者仍加二褒美一と有れば神宮第一の攝神なり此亦深き幽契有る事なるが第十段なる八衢祭詞の下に云るが如し杖取と申すは此神伊弉諾尊の投弃給ふ御杖に依て成坐るが故なり　別雷神社社傳に所祭味耜高彥根命大巳貴神之御子也相二距神宮一東方百間餘又云賀茂神宮同躰也と有るは美き傳說なり賀茂坐別雷神を味耜高彥根命と云ふ事出雲小綠起に山城國加茂大明神者當社第一王子阿式大明神是也と有ると同じきが眞說にて佗に無き古傳なり此出雲小綠起と云ふ書子が見たるは千種殿藏本なるを小泉康敬が寫持たりしなり此外は取る可き事も無きを此一條に於ては甚動くまじき古說なるに合せて此別雷神社の傳說の出來る事甚奇異なる者なり然れど此に說盡す可くも非ねば古始太元致に云ふ可くなむ　若宮香取志に所祭天苗加命也神宮之御子也神別記故以經津主神之始產裔天苗加命爲二日之與國長一延喜式曰陸奥國牡鹿郡香取伊豆御子神社又曰同國栗原郡香取御兒神社常陸風土記行方郡椒池北有二香取神子社一同郡男高里栗池北有二同社一又同郡當麻有二香島香取二神子之社一皆其祭二此神一也今此社淸歌春日遷座以後鎭二坐又見社一也と有り偖此天苗加命と申す御名は神別記に出たる耳なるを彼陸奥國なるを香取伊豆御子神社と云ふを以て說有り伊豆は國名にて其國にて生坐し御子と申す事なる可し此に就て伊豆國に香取大神の御子神は御在ると探索るに神名式に賀茂郡に多祁富許都久和氣命神社杉桙別命神社那賀郡布刀主若玉命神社有り此全く伊豆御子に御在す可し姓氏錄に矢作連布都努志命之後也と見え上野國一宮社傳に經津主命の子石比彥命は矢作連之祖と云り石比彥命の名珍らし伊豆國賀茂郡意波與命神社有り此先には伊豆は稜威ならむかと思ひしかど此證を見てより始めて伊豆國にて生坐し御子なる事を知れり倚思合せにかゝる事共多かりと雖も今は省く因にいふ前に擧たる又見神社の末社に三島社社有りて社傳に伊豆國賀茂郡三島神社同體也所祭大山祇命也と有るも此傍證とは爲るにや　此條にも猶多在と雖も悉く上古より此神宮の所緣に就て祀られ給へると見ゆるも非れば省

きつ其委しき事は香取志に就て見る可し（古昔の攝社末社は必其主神の御祖又は后神又は御子神又は其御親族神又は其御附屬神などにて悉く所縁の神等なるを後世になりては其穿鑿は無くて唯其時の流行神を祭りて幣物を貪る事と爲り然れば其心して熟く考へ正す可き者也然れ共其所縁無き神と雖祭祀に隨て其招請奉る方に鎮坐て其御幸ひ有る事云まくも更也必此を蔑如する事勿れ今は唯其主神の所由に就て云る耳也）○伊波比主命は神代紀に天神遣經津主神武甕槌神使レ平ニ定芦原中國ニ云々是時齋主神號齋之大人此神今在ニ乎東國檝取之地ー也と有て此時に齋主神と申す御名坐す芦原中國を平定に出立す齋事を物爲給へるが其齋之大人と御在りしを其國平の功立しかば即齋主神と稱られ坐し者にぞ有ける其は神武天皇御紀に天神訓之曰宜下取ニ天香山社中土ー以天平瓮八十枚並造ニ嚴瓮ー而敬中祭天神地祇上亦爲ニ嚴咒詛ー云々於是天皇甚悅乃以ニ此埴ー造ニ作八十平瓮天手抉八十枚嚴瓮ー而陟ニ于丹生川上ー用祭ニ天神地祇ー云々時勅ニ道臣命ー今以ニ高皇產靈尊ー朕親顯齋用レ汝爲ニ齋主ー云々と見えたるを以て此齋主神の御事を想像奉る可し道臣命は此度の元師と有けるが齋主と爲て天神地祇を祭る齋主と爲し事神代の趣に全同じきなり尙古事記（黑田宮段）に大吉備津日子命與若健吉備津日子命二柱相副而於ニ針間氷河之前ー居ニ忌瓮ー而針間爲ニ道口ー以言ニ向和吉備國ー也と見え又（水垣宮段）に大毘古命能往於高志國之時服ニ腰裳ー少女立ニ山代之幣羅坂ニ而歌曰云々故大毘古命更還參上請ニ於天皇ー時天皇答詔之云々伯父興レ軍宣レ行即副丸邇臣之祖日子國夫玖命而遣時於ニ丸邇坂ー居ニ忌瓮ニ而罷往と見え此事を御紀には復遣大彥與ニ和珥臣遠祖彥國葺ー向ニ山背ー擊ニ埴安彥ー爰以ニ忌瓮ー鎮ニ坐於和珥武鐰坂上ー則卒ニ精兵ー進登ニ那羅山ー而軍之と有るなど軍の首途には必其主將たる人の齋主と爲りて天地の神祇を祀祭る例なりしなり肥前風土記に三根郡有ニ神社ー名曰ニ物部經津主神ー曩昔小墾田宮御宇豐御食炊屋姬天皇令ニ來目皇子征ニ伐新羅ー于時皇子奉レ勅到ニ於筑紫ー乃遣ニ物部若宮部ー立ニ社於此村ー鎮ニ祭其神ー因曰ニ物部鄕ーと有は此齋主神を祀れる也齋とは清潔にして神を祀る事と物を鎮め平定る事とを兼たり大殿祭詞に言壽鎮白久と有る鎮を鈴屋翁の伊波比と訓む可しと云れたるは然る言なり出雲神壽詞に天皇命乃手長能大御世止齋止爲氐云々伊波比乃返事乃神賀吉詞奏賜波久登奏云々汝天穗日命波天皇命能手長大御世乎堅石爾常石爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閇奉登仰賜志次乃隨爾供齋仕奉氐云々と有る伊波比の言に齋

愼む事と鎭平定なる事とに用ひたり然れば齋主神と申すも淸潔にして神を祀給へると猛威を震ひて葦原中國を平定給へると二義を兼たる御名なりけり 但神代紀に此神を齋之大人と申すは自其齋を物爲給へるなるを此は祭られ給へるにて主客の相違有りと雖も其元の所由此神に發起れる事なるか故に其祭には領り給へる者なる可し然らば古の黑田宮段なるも水垣宮段なるも此齋主神を祭れりけむと所思るなり此御名の右の如き由來有て負坐る御名にて神代記の趣も義理甚著明なるを磐華山薩に是時齋主神號齋之大人此神今在乎東國檝取之地也の文上よりの續きも由無くして是時と云ふ事何事の時とも聞えず齋主も何の齋主にか聞え難ければ此上に文多く脫たりと思しきに其文今傳らざれば如何なる由とも知難けれども姑く今本の上に就て云はゞ此齋主も大物主神を祭始給へる時の齋主と聞えたり齋主は後世の祭主の職の如しと云る說の如し偖大物主神の祭の齋主ならば此文は而奉仕焉の下に在る可きに先此に云るは聞え難し云々と云れつれど信難し是時と云ふ事は經津主武甕槌神の天より降給ふ時なり齋主とは大物主神の祭に就て負給へる神號に非す其首途に神を齋祀給ひて其無事を祈らせ給ひし事次に古事記傳の說を引て云るか如し然れば而奉仕焉の下に在る可くも非れば此說は依難し又平田翁の古史徵四卷にも此說を諾れて本は是時齋之大人號齋主神と有けむか紛れて前後に成れると所思たりと云れて自撰の古史成文にも其如く爲られたるは非なり

記傳廿一五十丁に黑田宮段にも水垣宮段にも軍の首途の處に居忌瓮と有は凡て國言向に出立つ道口にして必爲る行事にて行先平安（マサキク）て言向竟む事を鎭ひ祈るなる可し 材を伐に入むと爲る時山口祭を行ふか如し又古事記水垣宮段なる建波邇安王を討平る時の文に爾日子國夫玖命乞云其廂人先忌矢可彈云々と有る忌矢を傳に此は戰はむと爲る初に互に先一矢を射交す式なり其は物の初なれば殊に重みして齋瓮み神にも祈禱て發つ故に忌矢とは云なり後世にも矢合せと云儀の有は此式の遺れるなりと云れたる忌矢も軍立の初に先神を祭て物爲る古の儀式なるを思ふ可し 偖其を唯居忌瓮而と耳云て神を祭とも何とも云ざるは古神を祭て祈る事を居忌瓮とぞ云けむ 萬葉三に齋戸乎忌穿居また齋忌戸乎前坐置而十七に久佐麻久良多妣由久吉美乎佐伎久安禮等伊波比倍須惠都安我登許能邊爾廿に伊波比倍乎等許敝爾須惠而など多く咏る中に十七をなる歟など殊に明に然聞ゆ然るは祭祀の具はしも種々有るが中に取分て此物を居るなしも其行事と爲るは上代の禮與にして深き理有る事なる可し中古より以來斯る儀式の絕廢たるは甚歎かはし と云れたる如く古は旅行は更にも云ず殊に軍事に就て首途するには必神を齋祀りて其任に赴く制合にて此は經津主神に始りたる神事にして神武天皇に定りたる由緣上に云るが如し齋主神と稱奉る由は上件の如くの所由に依りて負坐るなり 此傳に云れつる如く古神を祭て祈る事を居忌瓮と云けむか此は神武天皇御紀に自此始有嚴瓮之置也と有れば此御世に始れる神事なる事云ふも更なり但經津主神の齋之大人と在て其祭祀を物爲させ給へりける御有狀は如何なりけむ今知る可き由無し 偖此神の出自は神代紀神達生坐段第七の一書に斬軻遇突智時其血激越染於天八十河中所在五百箇磐石而因化神號曰磐裂神根裂神兒磐筒男神次磐筒女神兒經津主神と有る此正說なり同書同段第六の一書に于時伊弉諾尊遂拔所帶十握劒斬軻遇突智爲三段此各化成神也復劒刃垂血是爲天安河邊所在五百箇磐石也即此經津主神之祖也云々復劒鐔垂血激越爲神號曰磐裂神根裂神次磐筒男神 一云磐筒男命及磐筒女命 と見え古事記に爾著其御刀之前血走就湯津石村所成神名石拆神根拆神次石筒之男神 三神 と有るなどを合せて思ふに御劒の刄より垂落る血天に上りて五百箇磐石と

化成（ナレ）るが其因緣に依て劔鋒より垂落る血五百箇磐石に激越て相感和る氣勢に依て磐裂根裂神は生坐るにぞ有ける但同紀（同段第八の一書）に伊弉諾尊斬ニ軻遇突智命一云々是時斬血激灑染於ニ石礫樹草一此草木沙石自含レ火之緣也と有るは此磐裂神根裂神の御德を成坐る由を演たるにて別事には非るなり然るは劔鋒の尖利（スルド）なる形象と垂落る血の激越く勢の猛烈（ハゲシカ）在りしとに依て石を裂て冲り根を拆て透れる御靈の出來れりしなり石礫樹草と上に對たるを思ふに根裂神の根は草木の事なる可し記傳に石根裂と云言を二に分て二柱に號たる者なれば根も（ネ）根の意なりと云れたれど委しからず（記傳五卷石拆（神根拆神の注）に式の祝詞に磐根木根履佐久彌氏萬葉二に石根左久見手名積來之又六卷に五百重山伊去割見とも廿卷には奈美之間乎伊由伎佐具美とも味り或說に人面の凸凹有るを志夜久美面と云に同じくて岩の凸凹有る上を通行くも馬邪久里と云ふも能面に佐久美と云有るも同詞なりと云り此意なる可しと云れたれど尚粗し佐久と佐久美とは別なり佐久は其物の底まで破裂する意佐久美は物の上方（ウハツラ）の窪み見ゆるを云ふにて別なり此は思脫されたるならむ）次に磐筒男神磐筒女神は彼天安河邊所在五百箇磐石の靈神にて磐石を所司坐す御功坐り磐筒ゝ（ツヽ）筒は借字にて傳（ツヽ）なり傳は其任（シム）に就の就と同じく其（シ）事を卜て掌る由なり物を卜る即其事に主たる意なり古事記及神代紀（第六の一書）共に男神耳の趣に記せるは脫たるにて一曰磐筒男命及磐筒女命

と有と同（第七の一書）に磐裂神根裂神兒磐筒男神次磐筒女神と見えたるぞ正說なる尚下卷（天降段正書）に磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經津主神と有るは磐裂根裂神も磐筒男磐筒女神も共に夫妻俱生神に御在けり此に就て思ふに古事記（既生レ國竟更生レ神の條）に石土毘古神石巢比賣神と有る二柱は究て此神に御在す可し鈴屋大人の傳には此を御祓の段の錯出なりとして此二神を上筒之男命に配當られたれど一柱神の二神に男女と形體を殊異にして分り給ふも何とかや信難き心の爲るを上（ウハ）と磐（イハ）と通音と爲て混（ヒトツ）に爲られたるも甚賴み難かり然れば石土は磐筒に同じく磐石を司（ツカサドリ）給ふ由石巢は石爲（イハス）にて五百箇磐石を作爲（ナシ）給ふ神と見て何云ふ事か有む（但予が此二神を五百箇磐石の靈神なりと爲るを或人呀りて問けらく若し然らむには磐筒男磐筒女神有て後に磐裂根裂神の生坐る次序に非ざれば前後倒反せるに似たり如何答云く軻遇突智神を斬給へる血の天安河原に到れりしは其五百箇磐石の質を爲す初にて次に其鋒より垂落る血の上りて其磐石に冲り透れるに依て凝結して固成れるなれば磐裂根裂神の功を成坐しは前にて五百箇磐石の其質を全く爲るは後なり磐筒男磐筒女神の其子と有る事所以有る事なり）經津主神は鋒突主（フツヌシ）にて矛を主り給ふ由なり其所由は彼軻遇突智神を斬給ひし時其御刀と無く摠體より激越り上れる血は彼五百箇磐石なるが殊に其劔鋒より垂血の激越り上り灌ぎし其猛なる火徹に成坐る磐裂根裂神の孫にて火徹

りの深く染入て崔嵬き形象を成る五百箇石村い精靈と坐す磐筒男磐筒女神の子と在すが故に其物に貫通る稜威の甚嚴めし在つる故に鋒突主神(フツヌシノカミ)とは御名に負坐るなり（神名式に伊豆國賀茂郡多祁富許都久和氣命神社有るは此神なる可し又杉桙別神社有る杉は逋(スキ)の借字にて同神ならむか本國神名帳にはほこわけ明神と記せり又甲斐國八代郡に桙衛神社有り惣國風土記に天細女命なる由云れど違へるに似たり）若て經は鋒にて矛を主すと云ふ徵は神名式に上野國甘樂郡貫前神社（名神大）と有るを名神祭の下に或作ニ拔鋒一と見え上野國神名帳にも正一位拔鋒大明神と記して此は矛に依れる御名と通えたるを或書に人皇二十八代安閑天皇二年顯ニ坐經津主神此所一也と記し社傳亦此に同じければ經津主神の矛に依て功を建給ふ事を思ふ可し此に對ひて武甕槌神は稜威之雄走神に屬て劒を以て功を建給へるに思准て知る可き者なりかし（因に云ふ矛を保古と云ふは鋒木(ホコ)の義なるが其は柄のツキたるを云稱にこそ有けれ唯に其品を指す時は保と耳も云ふ可し然るを其を又布とも云ふは萬葉一長谷朝倉天皇の御製歌に布久思と詠せ給ふは和名抄に鑱加奈布久之と有る同物にて今俗に保久世と云ふ物なるが布久思は鋒串の義なるを思ふ可し津は突く意なり出雲風土記に衛桙等乎留比古命和泉風土記なる衛桙等乎而留比古命の衛桙を倒反爲る御名なり又記傳十八布都御魂の下に書紀に韴靈と書て此云赴屠能瀰哆磨と有り韴字廣韻玉篇などに斷聲と註せる意を以て用られたるなる可し今俗言にも物の鈍無く清く斷離るゝ貌を布都と云り又布都理など云ひ狹衣に布都と見放つなども有り然れば此劔の稱して物を清く斷斷つ意を以て稱つる御名なる可しと云れども其は却て後なり其元は經津主神の鋒突主たる御所爲の神速なるを假借して用へるなれば本末の相違なり又神代記に眞經津鏡有り此經津は同しと雖も事異なり眞は圓形なる事經津は縁に八所華咲に出て）

る稱なり此事太元攷に云り）若て古事記に建御雷之男神亦名建布都神亦名豊布都神と見え同書（白檮原宮段）に建御雷神の降奉給へる横刀を此刀名云佐士布都神亦名云甕布都神亦名布都御魂など有るに就て記傳五（四十七丁）に建御雷神と此經津主神を同神に定られしかども然らず素其神等の成坐る出自より異なりける物を何ぞ一神と爲る事を得む然れば彼横刀の名を佐士布都神と申は刺鋒衝神(サシフツノカミ)甕布都神(ミカフツノカミ)と申は嚴鋒衝神布都御魂と申は鋒衝御魂と申事にて劒に在れ戈に在れ其作用に就て布都と云るが輕津主神と申す時には其總體を主給ふ御名と爲るなり斯在れば建御雷神の亦名なる建布都神豊布都神も其亦名には此横刀の名より混れたるなる可し然れども其御功の狀に依て然負坐むも知る可からず古傳の任に心得可し（但經津主神は矛を知給ふ由にて經津は鋒突なりと云て此に其横刀の名に某布都と云ふを取れるは乖戻るに似たれど上古の刀劍の制二樣に有て諸刃なると片刃なると有て片刃なるは唯に太刀とも劒とも云て其は刃を以て横に薙く物なるが故に都牟刈之大刀或は大葉刈或は草薙劒とも云ひ諸刃なるは其用法戈と全同じく突くを主と爲る故に某布都とは云るならむ須佐之男神の大蛇を斬給へる劒を曰ニ蛇之麁正一此今在ニ石上一也と有るを神名式に備前國赤坂郡石上布都之御魂之神社と見えたり然れば一の劒の名に非て其製り樣を以て布都とは云るなる可し）○枚岡坐は神名式に河內國河內郡枚岡神社四座（並名神大月次相嘗新嘗）と見えたる此なり三代實錄に平岡に作り且四時祭式此に同じく又姓氏錄（河內國大神）

に平岡連津速魂命十四世孫鯛身臣之後也と有れば平岡とも記りしなり（但並字本には脱せるを今此を名神祭の條に稽るに四座共に名神なり此に因て佗例に考合するに脱たる事著明ければ補て引つ）祭神は白井宗因が神社啓蒙に引る當社古記に天兒屋命葺不合尊大國主命天照大神若宮一座天押雲命也と記せれども依難し（谷川士清が通證にも此古記を出して神武天皇の孔舍衛坂の御軍に利無くして退還らせ給ふ時に祭祀給へる狀にて所謂退還示レ弱祀二祭神祇一者即此矣社有二國平祭一と記せれども必然る可しとも定難し下に云を待可し）此祝詞の終なる細書に大原野枚岡等祝詞准レ此と有て直に此詞を用らるゝ趣なるを以て思ふに所祭春日に同くして唯天兒屋命と比賣神とを主と祭らるゝ事にて武甕槌神經津主神は客たる事云も更なり其證は三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授二河內國從一位勳三等枚岡天子屋根命正一位正四位上勳六等枚岡比咩神從三位一と有て餘神を擧ざるを思ふ可し（然らば當社に古來より祭來る所は天兒屋命比咩神二柱にて有しなり然るは上に引る神宮雜例集に聖武天皇天平十二年四月五日春日御社奉レ遷二壽久山御社一と有れども此時に未春日社は立せ給はざりしなれば此枚岡よりと思しきを神名式に攝津國島下郡須久々神社二座と有は決く天兒屋命比賣神二神なり然るは遠江風土記に敷智郡岐佐岡神社俗號二岡槽垣所所祭天兒屋根大宮比咩一也と有も二座なれば也然れども春日御社と云ひ岡槽垣など云るは後に春日に祭てよりは却て春日の方本社の如くなれゝば其名を以傳たるなり）同書に貞觀二年七月進二河內國從三位彌加布都命神比古佐自布都命神階一並加二從二位一と有を鈴屋翁（記傳十八）に是は何れの神社にか神名帳に見えず當昔從二位を

授奉給ふ計の神の官帳に載ざる事有るまじきを不審き事なり若くは枚岡四座の內にや有む」と云れしは然る言にて彌加布都神は武甕槌神比古佐自布都神は經津主神なりと聞えたり然れば天兒屋命比咩神の本より鎮坐つるに奈良朝に春日御社を定られし後に春日と同じく鹿島香取神を合せて四座とは爲られし者なる可し其は貞觀元年の下に右の如く枚岡天子屋根命枚岡比咩神と有るに同二年の下に彌加布都命神比古佐自布都命神と見えて此時は未主客の如くなるに同七年十二月十七日の下に河內國平岡神四前准二春日大原野神一春冬二祭奉レ幣永以爲レ例と有る文意を思ふ可し春日大原野共に武甕槌神經津主神天兒屋神比咩神四柱を祭るが故に枚岡も其に准て四座を合祀り其祭儀を春日大原野に准ふと云ふ義なる者をや（神名式に河內國若江郡弓削神社二座並大月次相嘗新嘗と有るを今布都大神と申す由なれば此社ならむと思ふに然らず其は枚岡四座の神は並に名神祭にも列り給ふ計の神なるに天兒屋命比賣神の二座を其神階を奉らせ給へるに其並坐す神の無位にて名神ならむ理無ればなり上に擧たる如く鹿島香取神も式文の如きは各一座なるに古來より其所祭は鹿島は武甕槌神なる左にに天兒屋命右に經津主神を相殿とし香取は經津主神なるに左に天兒屋命右に武甕槌命の在せども官よりは其主と坐す神一柱にて祭らせ給ふ如く此も然にて有けむが二神共に從三位より從二位に神階の進給へる其從三位は何時奉れしか詳ならざれども前紀に一として其從三位まで進せ給ふ運びの見えざるは右の貞觀二年に從三位を奉給ひし引續きて從二位に進給しが從三位の事を記漏されしなる可し平田翁に若江郡矢作神社の御事なる

可しと云れき其は姓氏錄河內國未定雜姓に矢作連布都怒志乃命之後也と有るに依られたるなる可けれど然ばかりの神位を奉らせ給ふ神の小社ならむも胞合せざるに似たり故取らず大國主命の說は國史に合はず　然れば枚岡四座の內なる𦿶不合尊に四座の數に合せむと為て別宮攝社の神を本殿に配祭れるならむ又天照大神と云も心得ず其は枚岡比咩神を今一層貴く為むとての杜撰にて信難き社傳なり比咩神は天兒屋命の后神なるを春日にても天照大神と云ふ事にて中古より然る私說は出來りしなり予が其比咩神を遂に見出て其下に述るを見よ　倩當社遷座の事は古書に所見無し唯右に引る古記に神武天皇東征の度に鎭坐成奉る趣なるは然る可からむ其は其供奉に天兒屋命の孫天種子命の仕奉られしかば南へ幸行るにも其御靈形を留奉置けむと所思るが倘其裔の人等に大御食津臣命臣狹山命など河內國に由有るが多在ば也大御食津臣命は神名式に高安郡恩智神社二座並名神大月次相嘗新嘗と有を三代實錄に大御食津彥命大御食津媛命と有れば大御食津臣命夫妻と通えたるを姓氏錄河內國神別天神に恩智神主高魂命兒伊久魂命之後也と有る伊久魂命は津速產靈神なる由第三詞下に徵せれば由有るを臣狹山命と云ふも神名式に丹比郡狹山神社大月次新嘗と見え又其狹山と云ふ地名に據れる名と通え又神名式に若江郡仲村神社有るが姓氏錄左京神別天神に中村連己己都牟須比命子天乃古矢根命之後也と見えたるなど傍由有れば其氏族の多く其國に住へれば其人々の氏神と齋祀れりけむかと思ふに然らず公より祭らせ給へりと所思ゆれば必神武天皇の御世の事なる可し倘姓氏錄河內國神別天神に同族の姓氏多くして平岡連川跡連中臣連中臣酒屋連村山連中臣高良比連菅生朝臣中臣連中臣など同統なるが神名式に丹比郡菅生神社大月次新嘗と有るは右の菅生朝臣の氏社と聞え同郡酒屋神社有るに中臣酒屋連の氏社と聞え若江郡川俣神社鐵敍と有るは川跡連の氏社と聞えたるなどなも思合す可し　當社祭祀の事は三代實錄卷一十に貞觀七年十月廿四日河內國平岡神主一人給二春冬當色幷料絹布等一一如二平野梅宮神主一又春秋二祭差二神祇官中臣官人一人一擬二挍祭事一付使二幣帛二又差琴師一人供二奉祭場一立爲二恆例一と見え又同年十二月十七日の下に河內國平岡神四前准二春日大原野神一春冬二祭奉レ幣永以爲例と見えたれば式文に載る所の恆例の神事は此年に始れる也春日社の神祭の始れる文德天皇仁壽三年よりは口十口年計り後れたる可し　四時祭式に平岡神四座祭の條に祭神料五色絹各二丈四尺絲四絢曝布四端安藝木綿八斤麻八斤褁二幣帛一料交易商布一段一丈七尺明櫃二合筥形一具杷一枚已上官物神祇官所レ請布四端封物白米六斗四升糯米一斗二升酒七斗大小豆各四升鮨一斗腊四斤烏賊堅魚各四斤雜鮨一籠海藻四斤滑海藻二斤生鮭一隻鹽四升菓

子一斗五升稻四束韓竈由由加各二具箕一枚椀形四口叩戸二口瓮四口堝五口酒壺二口洗盤片盤各四口覆坏廿口酒壺八口坏四十口杓二柄水桶二口匏四柄筥簀四枚食薦十二枚羅一口柏三俵薪五擔（已上用三河内國正税一）解除料五色絁各二尺凡木綿二斤麻二斤鍫四口交易商布二段庸布一段（已上官物神祇官所レ請）酒一斗鮨三升腊二升烏賊堅魚各四斤海藻四斤鹽二升稻二束瓮三口堝三口缶四口坏六口杓二柄水桶二口匏二柄食薦二枚羅一口黃蘗十二枚（已上用河内國正税一）散祭料五色絁各二丈絁一疋絲一絇四兩凡木綿二斤麻一斤紙二十張曝布一端色紙三十張五色玉二百丸五色木綿一百枚（已上神祇官所レ請）神殿裝束料五色絁各二丈四尺絁四尺麻二斤綿一屯黑葛十斤檜榑一材（已上官物神祇官所レ請）醸二神酒一竈神祭料（前祭請レ之）五色絁各二尺倭文一尺木綿八兩鍬二口（已上官物神祇官所レ請）醸二神酒一斛除料（前祭請レ之）五色絁各四尺絁四丈絲四絇木綿麻各二斤庸布四段鍬四口黃蘗八枚祝詞軾料布一端（已上官物神祇官所レ請）白米五斗（用河内國正税）盛酒雜用料庸布一段覆二醸酒甕口一料布五尺（官物神祇官所レ請）韓竈一具（醸酒料用河内國正税）雜食人食新白米一斛三升二合絹一斗八升腊十一斤四兩和布十一斤四兩鹽一升八合酒三斗五升（並用三河内國正税一）齋服料物忌一人裝束絹四疋九尺夾纈三丈五尺綿三屯六兩綿九尺五寸紗七尺紅花一斤三兩支子五升錦鞋一兩紫絲四兩韓櫛二枚神主一人當色一具裝束料絹二疋細布二端綿二屯布二端（神祇官人一人料准レ此）軾料絹二疋絲三絇布二端彈琴一人裝束料絹一疋三丈綿三屯庸布二段膳夫八人料布六端二丈八尺（別三丈五尺）紅花一斤四兩卜部二人料交易商布二端（別一段並官物神祇官所レ請）祝禰宜各一人料布十二端（封物）同祭祿料調布三十八端（幣帛使神主各八端物忌二端禰宜祝各八端彈琴笛工各一端卜部二人各一端）右春二月冬十一月上申日祭レ之官人一人率二雜色人一供二奉祭事一と見えて香取鹿島兩神宮よりも揔ての樣の甚しきは此も彼も合せて春日に祭らるゝ中にも京近き故に殊に如此く兩神宮に勝れるにて別の子細非ず（但貞觀七年に淮二春日大原野神一と有る如く其頃藤原氏の甚盛りなりし社なりければ氏人より申請れたるらむも知る可からず）若て上に註る如く鹿島香取兩神宮の正殿は廿年に一度造替爲らる可き由なるに當社に其事無きは國家の闕典なる如く思ゆれど然に非ず臨時祭式に凡枚岡社武藏國封戸調庸租穀者停レ收二此官一收レ社充二修レ社料一と有るを以て見つ可し右の如廿年とこそは限ざりけれ其修造料を充給ふ所を以見れば大凡其年限に修造爲らるゝ御定にぞ有つらむ（此官とは神祇官を云ふなり武藏國は封戸は何處なりけむ今知難し今埼玉郡に春日部と云ふ所名有り春日の封戸と云ふ事にや若然も有ば其地などなるべし）○天之子

八根命は古書共多く天兒屋命とも作り此神の出自又鹿島香取兩神に深く御因緣坐す所以を説く可し此神は神代紀に興台產靈兒天兒屋命と見え姓氏錄（河內國神別天神）に中村連巳々登牟須比命天之古矢根命之後也と見えたるが其興台產靈神は舊事紀に市千魂尊兒興登魂命と見え其市千魂尊は同書に津速魂尊兒と見えたり（是にて姓氏錄に津速魂尊三世孫天兒屋根命と有るに熟符て正說なりとは知れたり）斯るに其津速產靈神の出自を記さず延喜　年に奏覽せる大中臣本系帳の解狀にも自ニ居々登魂命一以往本記雖レ存扑略不レ詳從ニ大祖天之兒屋根尊一以來父子相承兄弟載錄と見えたれば當昔已に不詳りしなり舊事記（神代系記條）に高皇產靈尊次神皇產靈尊次津速魂尊と有るに尙古語拾遺の異本にも其次序は異りながら天御中主神其子有三男長高皇產靈神次津速產靈神次神皇產靈神と有る高皇產靈神神皇產靈神は相接る神に御在せは前後人混亂たる者なる事著ければ舊事記の如く神皇產靈神の次に津速產靈神の位る可き理なり（古語拾遺の通本には神皇產靈神と有て本註に是皇親神留彌命此神子天兒屋命中臣朝臣祖と有り此には津速產靈神省りたれど本註の意は此神子津速產靈神の裔と云ふ心得なる可し子は子孫を博く云ふ古の常なればなり若此く異說の傳るは廣成主の稿本と眞本と共に世に傳來る者なるべし）若此く錯置を訂正して尙熟思ふに津速產靈尊と申は可美葦牙彥舅神に御在らめど思定たるに平田翁の說を聞くに津速產靈神は決て火產靈神なるべし津速は一速の略語なるが天上に在す神等の中に一速振る神は火神を除て誰神ならむ鎭火祭詞に御心一速比給波志止爲氏と有を思ふ可し此伊邪那岐命に斬れ給しかど其御骸は天に上りて香山と爲れゝは即其御靈の彼山に坐にて更に無疑き者なり」と云れしは粗き說樣なれど實に天兒屋命の武甕槌經津主二神に御由緒有て親しく坐す因緣に就て此說の捨難きに就て此を思ひ此を思ふに甚止事なく奇異に妙在る說有り天地の初時に高皇產靈神皇產靈二柱神の陰陽の氣勢の天中に感和交通せるに依て如浮脂くして其形貌難言き一物成出て如水月す漂在り（此は國の元質なるか如浮脂とは其地に居て此質實を見玉へる神語なり天地の元始の物なる故に浮脂の如く光澤（テラ〳〵）として清濁相混りながら甚麗美し在けむを此地を離れて虛空より觀覽る形象は[illegible]々たる大氣の中に在る狀貌海月（クラゲ）の水底に游く如くなりけむ故に神代紀の正書には開闢之初洲壤浮漂譬猶ニ游魚之浮一ニ水上一也とは云り唯魚の水上に游くに譬たるに非ず古事記に國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣流云々と有を云るなり此事今且と思出る任に事因に云せるなり然れば浮脂の譬は其漂蕩る物の中に居て言ひ海月の譬は其漂蕩る物を外より觀て言るにて其判然たり但浮脂も海月も此物の狀に依て名となりけむを其名定りて又其を借て國土の稚在し樣を傳たるなり彼を取て此に似たる物に字し其字を其本質の樣を傳されば天地已成の後に天地未生の事實を云ふにも語るにも方術無が故なり）若て其中より清濁の眞氣の上升る狀葦牙の如くして萠騰れり其は一物中より

麗美く生伸るが故に可美と云て產生の義なり阿斯訶備とは明然氣火と云ふ事にて其體は氣にして著く其質は火にして赤在けむ稱なり比古とは其葦牙を引伸する意遲とは道にて此葦牙の如き物直立して天日と爲り其天日より天極に上窮り其より八方に彌滿して無數の綱と爲り其綱に載て恒天の星宿成りて其相結ばる狀を以て摠天を阿米と云ふ阿米とは綱の義なり日月星辰の位する所なり是を以て綱と云ひ綱と云ふが其神氣の往來涉降する街路を天之八達衢とは云るが此は可美葦牙彥舅神の高皇產靈神皇產靈二神に稟て德を成坐る較略なり（綱の事綱の事は平田翁の說に本就るが其取る所大に異なり古始太元攷及び此書第七詞青雲能籌極の下に云るが如し若て其綱ゟ綱に結成玉へるに依て角凝魂命角己利命角魂命の別名有り師は天之常立命の亦御名と爲られたれど姓氏錄異本に税部神魂命子角凝魂命之後也と有れば此神なる事無疑し舊事紀に天八百日命天八十萬魂命と有るも御名義を解て心得るに天八百日命とは恒天の列星は火球の如き者なり其を結成給ふ由天八十萬魂命は無數の天象を成玉ふ義に然らば此も亦此彥舅神に近く聞ゆ）若て其氣脈の綱は水氣にして火光を含みたる質なるが无數に支派て宇宙に靄滿て聯り續く由を以て此を津とは云なり然るに天日初て天中央に立しより日少宮とし天頂に成り其を本據と爲て列宿定りしを猶此大地より氣脈の連接せる事本の如くして有けるに此天地に就て伊邪那岐伊邪那美二柱神妹妋と爲り嫁繼給ひて國の八十國島の八十島を生給ひて伊邪那岐命我生る國は唯朝霧耳有て薰滿る哉と宣ひて吹撥はせる御氣吹に風神成坐り此に依て天中の氣脈迫切にして剛健なる事を得たり天御柱命國御柱命と稱す本緣なるが其より八百萬神等を生玉ひて最末子に火產靈神を生給けるに伊邪那美命は御陰門を被燒坐て神避り黃泉國に岩隱れ往坐〻しかば伊邪那岐命甚く怒給ひて火產靈神を斬給けるに其御體は天上に上りて天香山と爲り其血はしも天上に上りて天安阿邊なる五百箇磐石と爲れりしが其物等の天上に升騰るには彼可美葦牙彥舅神の氣脈を除て何處よりか升騰らむ偖思ふに彼氣脈は神代紀に所謂る精妙之合にして天上に引伸する事云ふも更なるが其火產靈神の斬れ給し血の上騰るに就て益々其氣勢神速に爲りつる間に一箇の神靈の成坐る此即津速產靈神に御在り此氣脈の言と血の言と同じきも妙在るに非ずや鹿卜起源と云ふ書に高美牟須比命加牟美牟須比命久志眞智產靈命と有る久志眞智產靈命は決く此津速產靈神と通えたり此眞智の智は字音に非ず字義に同じく智の古言なり又人の神より稟る所に各一得たる德の有

るを佐知と云ふ佐は此眞に同じく知は智にて其得たる德に妙用不測の事有を云ふなり尙下に云ふべし姓氏錄未定雜姓に都早古乃命とも有るは津速凝命と申す事にて角凝魂命と申すに言義異ならざるを思ふべし然れども可美葦牙彥舅神も火產靈神も其本體は各自にて津速產靈神は可美葦牙彥舅神の功德の火產靈神にて全く成就たるが故に右の兩神の功を兼て一種の神と顯玉へる者なりけり是を以て予は舊事紀の高皇產靈尊次神皇產靈尊次津速魂尊と有る次序を正說と爲て取れるなり此故に第三詞の下に辯る如く伊久魂命は此津速產靈神なるに高魂命兒と姓氏錄恩智神主下に見えたり恩智は大氣脉(オフシチ)と云ふ事なりと通えたり又天辭代主命は此津速魂神の孫なるに高魂命三世孫と見え又思兼神は師說の如く天兒屋命同神なれば津速魂神三世孫なるを神代紀の一書に高皇產靈之息思兼神と記し古語拾遺に神皇產靈神子天兒屋命と有るを思ふに息と有も子と有を子孫の幾世も後なるを子と云て裔の義なり又萬幡豐秋津姬命は神代紀に思兼神之妹と有て其如くなるを紀記共に高皇產靈神の御女と爲るなど其祖を高皇產靈神皇產靈神に係て傳たるを以て師說の如く火產靈神の亦名には非る可し熟々心を盡して此を思ひ此を思はゞ其旨明亮ならむかし　又舊事紀に津速魂尊兒市千魂尊と見え姓氏錄に津速魂命男武乳速命と有れば必一神なるが市は營(イトナ)む義にて天地の生氣を作成す意なる事魂(ムスビ)と申すにて著明し武乳速命の武は高にて彼氣脉に火神の靈威の血と共に預上(ソヒノボ)りて天日を晶明にし尙天地交泰の氣脉を榮し給ふ由の御名也師の古史徵に天相命を此神の亦名に定められて其說に云く姓氏錄山城國神別天神に呉公天相命十三世孫雷大臣命之後也と有る雷大臣命は藤原系圖に據て考に兒屋根命十一世孫なれば其十三世祖は天相命に當れり然れば雷大臣命の十四世祖は津速魂命にて天相命は其子に坐事炳焉し」と云れたるは然る言なるに就て考るに天相命と申す名義亦熟符へり其は天相命と申すは津速魂命の始給し氣脉に火產靈神の血の乘移り合乍も天上に昇騰て天日の光輝を彌々炫し又無數の氣脉に結り成れる日少宮及び列星の光と成れゝば天相命と申す事理甚穩に通えたり但師は市千魂命武乳速命一神別名なりとは心着れざりし故に其說亦同じからざる可きを未聞には何とも云難し古史成文に市千魂命の魂を多麻と訓るは宜からず本須比と訓べきなり僃市千の千は幸な佐知と云ふ事の起元又其千は人の聰明なるを智と云ふも此に同じ智は音訓共に同じき事なり第三詞の下に足產日神と申すは此神なりと云りしが天相命と申にも熟符て通ゆるは甚奇異なる者なり天相命の名義も師說は知ず　又舊事紀に市千魂尊兒興登魂命と見え神代紀には興台產靈と作たる興台は姓氏錄に己々登と有に隨て訓可し己々は凝々にて登は津速產靈神の津(ツ)市千魂命武乳速命の千と同物なり然るは津速產靈神の津を市千魂命の營作り武乳速命の天上に高く神速(ハヤ)し上給ひ氣脉の神靈彌々益々盛に成れるが其神靈の凝々て奇靈なる神威を爲し給ふ由の御名と通えたり師說に己々登は

心利なりと云れしは然る言ながら心利と云ふは末にて凝レ津の意ぞ本なりける第三詞の下に玉積産日神は此神なりと云る玉は靈なるが靈積と凝津と言の同じきをも思ふ可き者なり此に因て思へば天相命の御功にて天上は成就ひ與台産靈神に至て全く事竟給けるとは知れたり其は心有て事有り事有が故に言有り師説に姓氏録（左京神別天神）に伊與部高媚牟須比命三世孫天辭代主命之後也と有る辭代主命は即此與登魂命の別名なり其出自を高皇産靈神と云ふに拘りて其三世と云ふに泥む可きに非す」と云れたれども予が取る所は別にて其高媚牟須比命三世孫と有るを極めて恂恰く所思るなり其は高皇産靈神の次に神皇産靈神は御在せども二世にも一世にも數ふる古書の法にて難無れは其より津速産靈神市千魂神此辭代主神と三世の數に熟符ひたれば與台魂神の亦名と云れし師説の間然く所有まじく所思たり第一巻（第三詞下）に云る如く辭とは心速にて心感る所有て思を發すれば事有り事とは心の内に位て身を使令にも被使令にも其所置は心に在なから動く所身體に預る事にて別異なるが如き故に事とは云り事有れば聲に發揚て不言る事を得ず此詞辭の起る由緣なり然れば天日御國も天相命に至る迄は事無りつらめど日大御神の天日御靈と爲て所知看初給しより須佐之男神の御荒振の事有り天石窟隱の事有り此に就て太兆の事起り太祝詞の事始る心に就て事有り言有の理諸を近く人身に取ても思ふ可き者なりかし（心の許なし神の迦(カ)など同じく氣を云ふなり人體中に心在りと雖も呼吸を塞く時は精神其身を去る此に依て其身死す是心は氣なる證なり）又神代紀に與台産靈兒天兒屋命姓氏錄（河内國神別天神）中村連巳々登牟須比命子天之古矢根命之後也と見え藤原系圖に天津兒屋命本系帳云與登魂尊娶玉主命之女許登能麻遲媛命所生と有れば與登魂神の后神は玉主命に在り此神は天石門別安國玉主命とも申す由度會延經が神名式考證に考記せるが如し此神は予が古始太元玫に云る如く同く火産靈神の裔に坐すが玉主は靈主にて許登能麻遲媛命は言之眞智なる事云も更なり與台産靈神に配合坐す事深契有る事なり（古史成文の次序は宜からず予姓氏錄に深く見得たる事の有て火産靈神の裔に定たる元由今爰に記さま欲かれど褻雑(クダ〳〵シ)きを厭へれば本編に記り）天之子八根命は古書共に多く天兒屋命とも天兒屋根命とも天津兒屋根命とも記して異る事無きが名義は師説に八意思兼神同神なる由定られて兒屋は八意に倒反にて意彌なりと云れたるは然る言なる

に就て思ふに根は主の義なる可く所思たり其は古史第五十二段六十段百三十三段に見え又予が說を合せて此書第一卷なる第三詞第三卷なる第七詞の下に云れば今は記さず東照神祖命の聖訓に天地の道理を約れは一身の事と爲り一身の道理を演れば天地に充滿と仰給へる眞詣に因准て諸を天地に則り諸を人身に說むとす蓋人身の稟る所天地萬物と異る事無くして氣形神の三の外は非ず其人身を養ふ事食に在て衣住は其を覆ふ所以の者なり所以に天照大御神の大御言に是物者顯見蒼生可ニ食而活ニ之也と詔給へる趣を考徵奉る可し人身の存在せるを活と云ふ活とは食物の神氣體中に充滿して呼吸の往來爲るを以謂なり素問内經に五穀入ニ於胃ニ也其糟粕津液宗氣分爲ニ三隧ニ故宗氣積ニ胷中ニ出ニ於喉嚨ニ以貫ニ心脈ニ而行ニ呼吸ニ焉又曰宗氣留ニ於海ニ其下者注ニ於氣街ニ其下者走ニ息道ニと云り食物の糟粕は屎汁と爲て身外へ放（マヽ）り津液は胃府より心藏に入りて其より頭腦に上り其に宮り其より數條の神經を網羅して身體諸器の作用を爲令む宗氣身體の中府より津液と共に身體に充滿て生々たる德を施爲するなり素問には津液と宗氣とを別に爲れど津液中に宗氣有り宗氣中に津液を含るなど相離れぬ物なり倚此を演て天地に比ぶるに糟粕は地と爲り海と爲れる者なり津液は如葦牙にて其始天日を潤し上騰して日少宮に止り其より無數の氣脈を網羅して宇宙の大象を自持爲るに同じく宗氣は宇宙の大象より各自の神氣成て薰滿つ此天中に充滿る所の大氣なり何ぞ天地人身殊異なる事を得む倚其食物の神氣津液と爲て心より頭腦に至り其より數條の神經に注ぎて身體中に彌綸して運動の神功を奏し意識の妙用を爲て窮無し此即津速產靈神の所管にして亦名生產日神の活せ給ふが故なり然

れども此神經の津日々に缺乏ず是を以て市千魂命其營爲を主給ひて益々其德を施給ふ武乳速命と申すは此故なり若て身體の諸器各自其位を得て官能有り天相命と申す義此なり若るに其神經中に含む所の神靈有て各々其性有り此は與台產靈神の主る所にして心とは此を云ふなるが其心有る時は必事有り事は言に依て通ひ言を以て催促す此辭代主神の預る所なるが其心緒の愈伸て思を發す八意思兼神の深く遠く思慮の智坐る本緣此なり此は人身に取れる說なるか立復て天地の事を云むとす此天兒屋命の御功の彰坐し起元は天照大御神の磐戸隱の時と皇御孫命の御天降の始と此二度の事なるが天照大御神の石窟隱の所由は須佐之男神の火神に被焦て神避坐し御祖伊邪那美神を戀奉給ひて妣國に罷むと申給けるが其國は世界の穢惡の輻湊る處禍災の止住る處にて御父伊邪那岐神の不須也凶目汚穢國と詔給て別處を建て令往來給はざる地なるに其國に引れ給ふ神性に乘て荒振る凶惡神等相交り相口會けむ故に種々の穢惡はしき事共を行給ひ惡しき禍業不止轉有しかば天照大御神甚く怒らせ給しかば天石戸を閉て刺隱給けり故天原は更に

も云す此大地の悉も常夜の闇と成れりしかば八百万神等天安河原に神集ひに集給ひて奉禱む方を謀給けるに高皇産靈神の命以て此八意思兼神に深く遠く思慮ら令給ひけり師說を聞くに津速産靈神市千魂神興台産靈神と次々に火産靈神の功業成々て天兒屋命に至て思慮の智全く整ひ石屋戸隱の大禍事を直給へる功德の高く比類無き事は幽き由有事なりけり其は彼招事に用る物を悉く天香山より取れる所以を先思ふ可し抑火産靈神は御母伊邪那美命の己命を生給へるより事起て黃泉國に往坐し其事に依て己命も被殺給し故彼國を惡み所思す事甚深在ば彼國に屬る事物をば甚く惡み坐て彼國に却てむと稜威速び給ふ神靈の盛大なる故に其神靈に資て此大禍事を却失むとて彼神の御骸の化れる天香山より招事の物は採れるが思兼神の其思慮の中に太兆の鹿はしも火神の御骸に化坐る大山祇神の御末にて鹿を迦久と云ふも輌遇突智の輌遇に依れるを思ふ可しと云れしは尤と聞ゆるに就て今一層此を深ゝ思慮るに天兒屋命の宇宙の事を八意に思慮り知す可き所以有り其は其祖と坐す津速産靈神より次々上に說る如き由縁共有て宇宙の氣脈に神氣を含めて保せ給ふ元本を主る神なるが故に天兒屋命にて全く思慮の功整しと云ふも其氣脈を引伸て被知る可き理なればなり故神代紀に天兒屋命主神事之宗源者也故俾以太占之卜事而奉仕焉と傳たり神事の宗源を主るとは唯祭祀を主給ふ耳ならず神業の起元をも知ると云ふ事を兼て記せるなり如此く世界の事共は吉凶共に神の御心に出るが何在る神と雖も天地の外に身を置ざれば影の形に隨ひ響の音に應る如く神事の宗源を知る神の所知看ぬと云ふ事は全に無き事なるを思ふ可し然れば天照大御神の天石戸隱の時の事も然にて火神の喉に御末なる因縁耳には非す倩此神の鹿島香取神と何社にても相殿と御在る事は何れも火神の御裔に坐て甚近き御親族と坐す耳ならず彼御天降の時に此思兼神の思慮得坐て葦原中國を言向に經津主神武甕槌神を擢て其本分の御功を令建給し故を以て殊なる御睦び坐事と通えたり又此二神の功績世に高く御在して思兼神の思慮り的當せるに就ては其識鑒の功績も高く立し故に香取鹿島兩神宮に其裔孫の人々仕奉り又其氏神と副に仰奉る事にて世繼物語に鎌足は常陸の生にて鹿島には氏神有と云る如く其產土神と云ふ耳には非す常陸風土記香島郡の下に藤原系圖に大鹿島命と云ふ人の有るなど其由緒の少縁ならぬを思ふ可し天兒屋命の遠裔の鹿島香取神宮に仕奉たる事の物に見えたる由を師說に

合せて今此を詳に爲むとす先常陸風土記香島郡の條に年別四月十日設レ祭灑レ酒卜氏種屬男女集會云々神社周匝卜氏居と有る卜氏は卜部氏神社は鹿島大神なり又元正天皇御紀に常陸國久慈郡占部御蔭と云ふ人見え萬葉二十に常陸國占部小龍と云ふも見え目錄に占部實力と云るも記せり又聖武天皇御紀に天平十八年常陸國鹿島郡中臣部二十烟占部五烟賜中臣連之姓又光仁天皇御紀寶龜八年の下に授二常陸國鹿島神社祝正六位上中臣鹿島連大宗外從五位下一とも見えたり又持統天皇御紀に鹿島臣有るは同族なる可し又玉葉寬喜元年五月一日の下に二條中納言來中香取神主問レ事當時神主本流中臣也助道者大中臣也鹿島神主餘流也而康治之頃中臣氏無二其仁一之時掠申子細拜任後三代雖二相續一中臣氏互相交補也又東鑑建久二年の下に鹿島社禰宜中臣親廣と云も見えたり續紀に天平寶字二年九月丁丑常陸國鹿島神奴三百八十人便爲二神戸一又姓氏錄に神奴連天兒屋命十一世孫雷大臣命後也と有る此神奴を主る人なり又天智天皇御紀に常陸國中臣部若子と云ふも見え此書の始に春日社記春日小社記公事根源を引て記せる中臣連時風秀行と云ふ人の有るなど天兒屋命の裔孫の鹿島神宮に仕奉る較略此なり又香取神宮に天兒屋命の裔孫の仕奉る事は續紀に天平元年外從七位上香取連五百島獻二私穀於陸奧國鎭所一授二外從五位下一と見え大中臣本系帳に宣年香取宮司從七位下又清暢香取宮司又從七位下また仲澤香取宮司と見ゆ此三人は大中臣清麻呂の裔なり又古下總國司を宮司に補任し宮司にして國司を兼たる例有り香取志に云く久安元年八月七日大政官符下總國司正六位上中臣朝臣助重右者七月廿八日補二任香取宮司一畢國宜三承知一事已上依レ例令二執行一符到奉行と有り其子助康其子助道三代宮司にして國司を兼たりと香取宮司の家譜に記る由云り師說に東大寺奴婢帳天平勝寶二年の治部省牒の文に下總國香取郡神戸大槻鄕戸主中臣部眞敷と云ふも有と云れき此等を參考て知る可し

○比賣神は鈴屋大人說大祓詞後釋附錄に比賣神は枚岡四座の内なり兒屋根命の后神などにや御在らむ今云誠に天兒屋命の后神なる確證を見出て其說を得たるに依て下に詳に記せるが如し眞に大人の恩賜なり續後紀に承和三年五月奉授河内國從三位勳二等天兒屋根命正三位從四位下比賣神從四位上其詔曰云々同六年十月奉レ授下坐二河内國河内郡一正三位勳二等天兒屋根命從二位從四位上比賣神正四位下上三代實錄に貞觀元年正月奉授河内國從一位勳二等枚岡天子屋根命正一位正四位上勳六等枚岡比咩神從三位など有を以知る可し今云ふ但此には古本文德天皇實錄に嘉祥三年九月己丑遣二參議從四位上藤原朝臣助一向二春日大神社一宣命曰云々天兒屋根命乎波從一位授比賣神乎波正四位上爾上奉利奈奉留云々と有を脫されたり其は春日社へ進せらるゝ宣命なる故に枚岡の神階には非じと思はれけむ故に思漏されたる可し倩上にも云る如く春日は神名式にも春日祭神四坐と有て作社の例と異なるは鹿島香取枚岡三所の神の遙宮の如くなるが故に春日に奉らるゝ神階は其本所にも神階なる事上に辨たるが如し然れば後紀に承和六年に天兒屋根命從二位と有より二階進みて從一位に成給ひ比賣神は正四位下と有より一等進みて正四位上に成て前後の次序熟符へるは春日社にて其本宮の事なも行るゝが故也 然るを世に天照大御神ぞ萬幡姫命ぞなど申すは正史をも考ざる漫言なりと云れたるは然る言なり此比賣神を天照大御神ぞと云ふ妄說は二十二社注式春日社記春日小社記共に比咩大神伊勢國度遇郡御影向と見えて何れの神とも無きを公事根源神社考神社啓蒙など其に本就て天照大神と爲るを漫言なりと云れたるなり但萬幡姫命と云ふは[illegible]詳き說なり下に說くを見よ 攝國風土記に遠江國敷智郡岐佐岡神社俗號二岡糟垣一所祭天兒屋根大宮比咩也と有る證文を得て天兒屋命の后神は大宮比咩命に在す事決しと思定たるに式に攝津國島下郡須久々神社二坐と有は此に同じく天兒屋根命比咩神二神ならむと所思たり天兒屋命の本社は枚岡なれば須久々神社なるも此の岐佐岡神社も枚岡より移せるならむ然れども春日社定て後は春日より勸請する事勿論なり思混ふ可からず駿河風土記に安倍郡宮沼神社所祭糟垣大神也と有るは天兒屋命一座なる可し然るは春日祭神四坐の内に主と坐神は第一殿に坐ば其神をこそ春日神と稱ふ可きに春日神とは天兒屋命の事と申昔より心得來る事なればなり 神代紀を閲れば以二思兼神妹萬幡豐秋津姬命一配二正哉吾勝々速日天忍穗耳尊一爲レ妃と有る命配の間に兒玉依姬命の五字を脫せるなり其は右の一

書の中に栲幡千々姬兒萬幡姬命また火之戸幡姬兒千々姬命と有る此二は共に同神の別名を親子の名と爲たるにて此は誤なれど栲幡千々姬命の兒に聚たるは由有る傳なり其は第七の一書にも高皇產靈尊之女天萬栲幡千幡姬（一云高皇產靈尊女萬幡姬）兒玉依姬命爲天忍骨尊妃云々と有以て知可しと云れたる師說の如く忍穗耳尊の妃と爲給へるは天兒屋命の栲幡千々姬命（亦名大宮比咩命）に聚て生坐る兒玉依姬命に在り此名義は靈具と通えたれば愈其兒なる事據有て思ゆるなり所以に忍穗耳尊の御爲には天兒屋命は御外舅萬幡姬命は御外姑と坐し瓊々杵尊の御爲には外祖と御在すが故御天降の事も何も專天兒屋命の主と執行奉給へるなりけり（但神代紀の諸本共に栲幡千々姬萬幡姬命と有て兒字は無きを師說に栲幡千々姬の下に兒若くは女字を脫せりと云れたるは火之戸幡姬兒千々姬命また天萬栲幡千幡姬兒玉依姬命など有に對思ふに實然る言なるに就て兒字を脫せる事決ければ補て引るなり）然れば二十二社注式に比咩大神伊勢國度遇郡より御影向と云ふ事も所由無き事には非ず神名祕書に天照大神相殿之姬神栲幡千々姬命於春日第四神殿坐也と有るに右の遠江風土記を合せて栲幡千々姬命大宮比咩命同神なる證有て天兒屋命の后神なる事決き者なり偖此神は此書卷二（第五詞）卷三（第七詞）に往々說るが如く天石門別神の御女に在り其は古事記に次手力男神萬幡豐秋津師比賣神者坐佐那縣也と見えて神名式に伊勢國多氣郡佐那神社二坐と有る此にて此社今も佐那の仁田村に在て大森社と稱ふが式に阿波國名方郡天石門別八倉比賣神社（大月次新嘗）有て當國神名帳に佐那の河內村に在て天磐門別神社と云ふ由なるは伊勢より然る由有て遷奉しなる可し然るは名方郡と云ふも佐那縣の名を取れりと思しければ也（師說に八倉比賣命の八倉は石倉の義ならむか其は神名式に伊豆國賀茂郡伊波久良和氣命神社石倉命神社有り此は彼石屋戸を開給へる功を稱て號たるならむ石屋即石倉なればなり又石座の義にも有可し神名式に參河國寶飯郡石座神社有り此は今大宮村に在と神名帳考に云り大宮村と云ふは亦名を大宮比咩神と申すに殊に由有と云れたるは然る言なり）偖栲幡千々姬命と申すは天朝廷にて衣織の功有る故の御名なり然れば古事記に天衣織女と有るは此神なる可し然るを神代紀（天石窟段第一ノ一書）に稚日女尊坐于齋服殿而織神之御服也云々と有る神之御服は天照大御神の御衣と云ふ事なるを神宮雜例集に載る少神部神服連公俊正大神部神服連公道尙等の嘉應二年解狀に於神御服勤者掛畏天照坐皇大神御坐天原之時以神部等遠祖天御梓命爲司以八千々姬爲織女奉織云々と有に合せて天衣織女八千々姬同神たる事知れ又亦名を稚日女命と申す由も通えた

り神名式に山城國葛野郡天石門別稚姫神社（名神大月次新嘗）と見えたるなど此彼思合すれば彼天石門別八倉比賣神と申も一に切（ツヾマ）るなり所以て神功皇后御紀に天照大御神の荒御魂撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命と御名乘坐る次に亦問之除二是神一有レ神乎答曰幡荻穗出吾也於二尾田吾田節之淡郡一所レ居之有也と有るが此下に於是天照大神誨レ之曰我之荒魂不レ可レ近二皇后一當レ居二御心廣田國一即以二山背根子之女葉山媛一令祭亦稚日女尊誨之曰吾欲レ居二活田長峽國一因以二海上五十狹茅一令レ祭と有るを以見れば於二尾田吾田節之淡郡一所レ居之神也と宣るは此天石門別八倉比賣命なる事著明し其は今しこそ阿波郡と名方郡と郡名も違て所も異なれども古昔は然ばかり際々しくも非りければ難無き者なり又大御神の荒御魂に添給へるも神宮にて後に相殿に坐す故實に能く叶へり（先には稚日女命と申すは大日女命と申すに等しく稚も大も美稱にて天照大御神の御事在（ナラ）むと思しは僻說なり其は稚は物の幼稚き事大は物の老實なる事に云れば遠近の違甚しき者なり然れば和訶比留米とは訓可きに非ず和訶比賣と訓可きなり）又此神の亦名を大宮比咩神と申す事は上に引る遠江國風土記と神代紀に思兼神妹萬幡豊秋津姫命と見え又神名秘書に栲幡千々姫命於二春日一者第四殿坐也とも有を合せて著明きを其大宮比咩神は天鈿女命同神たる由古史徵に記されたれども未其說を聞（カ）ず仍思ふに倭姫命世記上代本記御鎭坐本記御鎭坐傳記御鎭次第記神名秘書御鎭坐本緣などに御戸開神二座天手力男神栲幡千々姫命と有て大御神の相殿に鎭坐す事第七詞に云る如くなるが此を古書に稽るに古事記に天手力男神隱二立戸掖一而天宇受賣命云々の結構有て次に其所隱立之天手力男神取其御手引出と有り然れども天手力男神は天石戸をこそは開給へれ其御手を取て引出奉りしは天鈿女命なる事論無き者なり能々照應て知る可きなり偖大宮賣神と云ふ所緣は姓氏錄（山城國神別天神）に神宮部造云々磯城瑞籬宮御宇天皇御世天下有レ災因遣二吉足日命一令レ齋二祭大物主神一災異即止天皇詔曰消二天下災一百姓得レ福自レ今以後可レ爲二宮能賣神一仍賜二姓宮能賣公一云々と有る可レ爲二宮能賣神一と有るは心得ぬことなれどこのことを大三輪三社注進次第に腋上池心宮御宇天皇御世神明憑二吉足日命一曰吾國造大己貴命也云々遣吉足日命令レ崇二齋大己貴命大物主命一詔二吉足日命一自今已後可レ爲二宮能賣一云々と有を以見れば宮能賣は神主の事を云ふなりけり古語拾遺に大宮賣神如レ今世内

侍善言美詞和ニ君臣間ー分ゆ震襟悅懌ヒ也と有る故(カラ)は其神は天鈿女命を除て誰神か在む侍大宮賣神は萬幡豊秋津姫命の右の如く大御神の御前に侍奉りて大宮仕爲給へる功を稱たる御名なる事無論き者なり師說に此栲幡千々姫命を天鈿女命と別神と爲ては御戸開神と爲て祭らむ事は更に由無く且天手力男神と共に祭て御戸開神と申は事狀を思ふに必天宇受賣命なる可き者なり然れども栲幡千々姫命を御戸開神と云ふ說の熟符誤とも聞えざるは決て天鈿女命亦名大宮賣神同神たる可く所思たり又天鈿女命は然許り大功(イミ)じき神なるに其を祀れる社とて一だに有事無て宮咩祭など必天鈿女命なる可きに大宮賣神を祭れるなどを以知る可しと云れたるは實然る言なり 但上の第三詞なる大宮乃賣神と大殿祭詞なる大宮賣命と此二は決て豐宇氣毘賣命の衣食住の資(モノ)に幸給ふ中に住宅に御靈を幸給ふ御名なり思混ふ可からず同名異神にて彼は大宮造の事に功を立給ふ由にて大宮主(オホミヤメノ)と申す義なり此は大御神の大宮仕の事に依て貢給へれば大宮女(オホミヤノメ)と申す由なり尚第三詞第 大殿祭詞の下に云る事共を見合す可し但古語拾遺に大宮賣神是太玉命久志備所生と有るは誤なり廣成主の私事と聞ゆ 右の如くなれば比咩大神伊勢度遇郡御影向と云ふ事旁々由有るに依て伊勢よりや遷(ウツロ)坐けむと思ふに然らず枚岡より天兒屋命に相副て移はしけるなり天兒屋命は高天原の朝廷にも筑紫大朝廷にも大臣の如く其后大宮比咩命は内侍の如く殊に親しく仕奉給しは君臣の紀綱神代に立て萬世に動き坐ぬ基本にて天下の模範の定れる起元豈奇しからずや 如此く考徵奉れば甚不明(オホ〻しき隈無く成て吾乍も甚𡚴くこそ然ばれ皇天(スメカミ)の斯文ヲ喪給はぬと先師の思慮の深かると是神の我心を開て考得令め給へるとにて殆落涙さへ為らるゝはや ○春日の別社の較略は手力雄神内院御寶殿の東南に在す此神は天兒屋命の御母許登能麻遅媛命の御父に坐し天兒屋命の后神萬幡姫命にも御父と坐せは殊に由縁坐す神なり神社考に神書抄曰伊勢内宮相殿左脇祭ニ此神ー此神者思兼神之子也爲ニ春日別社ニ或云戸隱明神是也と有る思兼神之子也は非なれど其餘は正説なり 社記小社記注式共に其北裏飛來天神其北並八龍神十坐と云り然れども此は此神に漢様の怪しき名を稱(ツケ)たるにて飛來天神とは彼神社考に多力雄神取岩戸擲空落在ニ信州戸隱ーと有同義の稱名なる可く八龍神王と申も右の戸隱山に九頭龍と云ふ神の有を以設たる名にて皇國の古義に非ず 梅本明神亦海本(梅カ)神とも申す祭神未詳 内殿の後に在と云り 粟辛明神所謂隼明神在ニ其北ーと云り此神の事神名式に左京四條坐神一坐隼神社と有る同神と通えたるが台記別記久安六年正月六日の下に自ニ今日ー五个日奉ニ幣帛於東三條角振隼神社ーと見え又台記に久安六年十月十七日己未奉ニ拜隼神ー奉幣七ヶ日 時料紙 祠官 陸奥鼻節神社同神也と見えたり鼻節神は決く猿田毘古神ならむと思ゆ神代紀に其鼻長七咫と

有に由有ればなり其上天鈿女命と御問答の事共有て共に皇御孫命の御天降の事を取擬申給へれば必此に御在して無窮に御力を合せ給ふ可き事云まくも更なり此に祭られ給ふ社名を粟辛明神と申せれば所謂隼明神と有る隼（ハヤブサ）は雀（サザキ）の誤にて少彦名命ならむと思しかども隼神と申す御名も甚古き事にて彼左京四條なる隼神は已く三代實録に貞觀二年七年十年十六年に神位を進られし事見え大炊御門經實公の大府記日本紀略保元物語古本今昔物語十九卷榮花物語兵範記諸社根元記等に見えて甚古くより唱來る號なれば強に誤とも云難し其外大内裏圖考證にひける中外抄に保延四年正月廿八日云々朝隆申云東三條の隼明神は春日王子也又尾州熱田御子也云々と見ゆ春日王子と云ふ事は別社に在すを以云なる可きが熱田御子也と云ふ事未思得ず日吉神道秘密記及注式共に日吉の末社に早尾と云ふ社有り所祭猿田彦神と云り隼と早尾と言相近し然れば此に由有るに似たり　椙本明神其北佐軍神四御殿後に在と云り佐軍神は上に註る香取別社高房神社の祭神は建葉槌神なるが佐軍神と申すに等ければ其神なり鹿島にも高房神社有りて此も上に云りき　椿本明神角振明神是也中院乾方脇戸本と有り角振神は上に引る臺記別記に據ば角振隼神と一神の如くなれども諸社根元記に京中隼社坐ニ朱雀院内ニ坐ニ四條坊門油小路ニ之小社爲ニ隼神ニ者角振隼者格別事也と見え日本紀略に永延元年十月十四日天皇行幸攝政東三條第云々授ニ角振神　隼神從四位下ニとも角振隼兩明神とも有れば別神なる事決し古本今昔物語十九に東三條の戊亥の角（スミ）に御在る神榮花物語に三條院の角（スミ）の神と有る此二共に此隼角振兩神

社なるを春日の内院の乾方に坐すも共に方位には拘るまじき事乍由有げなり祭神の事未思得ず強て此を思ふに若くは角凝魂命は津速産靈神の亦御名なる事上に說るが如し然も有らば天兒屋命の祖神に坐ば由無きに非ず東三條院にも春日にも乾方に坐事は周易に戊亥を乾位に配たる其乾は君父の象なれば祖神たるを以て然は物爲る中世の所爲ならむか然れども此は唯試に云ふ耳伊豆國神階帳に正五位上角の明神有り角凝魂命なる可く所思ゆ　風御子明神四御殿西方に在と云り祭神未思得ず若くば風神とて龍田と同神ならむも知る可からず小社記に風御子明神金命是也と有り思金命の思字を脫せるにや然れども風御子と云ふ事心得ず　岩本神内殿坤方に在ス住吉神是也と云り今思ふに岩本神は岐神ならむか其は鹿島の末社に息洲神社有て本國の時に大に熟符へる眞說なるを住吉神と誤り香取の末社にも息栖神社有が住吉神を祭れりとして詳ならねども其誤來る所を推考るに岐神は彼黃泉平坂の許に在して其國の凶惡神を攘給ふ御德の高く御在て下なる道饗祭詞の下に說る如く大八衢に湯津石村の如く塞り御在せば岩本神と云事能允當れるに似たり且船玉神と申して海路を守給ふも必此神なる事決ければ此より住吉神と大凡には申せるにて實には神名式に攝津國住吉郡船玉神社と見えたる此神なる者をや尙道饗祭詞の下に云ふ可し青榊明神幸榊明神穴栗明神井栗明神などの社有とも今祭神を知る由无し但穴栗神社は社記に穴次神也と云り然らば神名式に載るなるを或書に在ニ古市村ニ管内と云り景行天皇御紀に春日穴咋邑と見え續紀に延曆七年八月對馬守正六位上穴咋皆广呂賜ニ姓春日忌寸ニと有

るに依れば古市の方近きに似たり注式に白二本社一南十餘町去穴栗明神井栗明神と有る其なる可し此内院なるに後に勸請する所なりとぞ外院水屋明神、三所謂牛頭天王是也本社乾方三町計に有と云り牛頭天王は所謂る山城國愛宕郡八坂鄕に坐す祇園神社の御事なるか祭神は素戔嗚尊稻田姫命大己貴命の三前を祀れるが水屋と云ふ事の心行す思えたりつるに橋經亮主の說に式に山城國愛宕郡出雲井於神社大月次相嘗新嘗と有は今の下賀茂の攝社なゑ比々良木神社を云ふなり祭神は須佐之男神なり出雲と云にも故有る可し又按に井於と申せは舊は井上に社の有たるらむ洛東祇園尾張津島社も同神なるに共に井上に社を建たり」と云れたるに依て此に水屋神社と云ふ所由も知れて愈祇園神に相違无き者なり因に云神名式に大和國平群郡猪上神社有之舊訓韋能倍と見えて萬葉に春霞井上山と有は此にて今信貴山と云り然るに山上に毘沙門と云ふを祀れるは古く素盞嗚尊の御像の有けむを佛樣に祭なしたるなる可し或書に嶺上有二大池一无二旱涸一故呼二加那度乃池一猪假字訓韋井上山今呼二信貴山一と有も鄕亮主の說に熟く合り　榎本明神自二本社一坤方に在り小社記に福擁主榎本明神所謂女神號二巨勢大明神一と見え注式に巨勢姫大明神と見えたり祭神は上野國神名帳に群馬西郡榎本於神明神と有る例を引く時は闇龗神を祀れるなり此神の亦名を大山津比賣命と申す事古始太元考に說るか如く火神の御骸に化坐れば必祭られ給ふ可き神なり然れば榎本は借字にて江源と云ふ事ならむか亦名を闇罔象女神とも申て水を主る神なればなり先には神名式に巨勢山坐石椋神社と有に據て上に說る如く天石門別八倉比賣神ならむと思しかども石椋神社は女神とも通えざれば此考は捨つ香取にも津宮に坐神の坐す事上に說る如くなれば今は上野國神名帳に就て定たり尙同郡に從四位下榎本明神と云も有り此を式なる春日神社と云るは無稽の說なり上に云り又諸神記に榎本明神女神也號二巨勢姫明神一一書曰榎本社者猿田彥、津姫命也と有れば二神の如し按ふに猿田彥妻ならむを中間に字の脱たるならむか然れども其據る所を知ざれば容易く隨ひ難し　祓戸明神榎本社より一町西に在り小社記に所謂瀨織津姫明神と有れども祓戸神四柱共に在すなる可し神人は更にも云ず勅使參向の時修禊の所なる可し其は貞觀儀式春日祭使途中次第に到二山階寺北并東一着祓殿座と有は此處と思しければなり　船戸明神本社より一町西に在り小社記に船戸明神所謂道祖神と有り注式に猿田彥明神は此神を道祖神と心得たる非說を受て記るなり上なる岩本社の下に云る如く同じ岐神なるが何を以二所に祭別たると按るに內院に坐すは此神經津主神武甕槌神を鄕導給し由緣に依り此は例の八衢比古八衢比賣神と共に鎭坐て道路を守御在すなる可し道祖神と有るからは三柱共に鎭り御在る事疑無る可き物ぞ　○春日若宮は上に註る如く天兒屋命御子天忍雲根命なる可し二十二社注式に若宮御出者神代也と見えたり河內國枚岡社にも若宮と有るは同神を祀れゝばなり斯計り大じき御社の式外ならむ事思も依らされば深く考るに神名

式に大和國添上郡鳴雷神社（大月次新嘗）と有る此御神なる可きなり或書に此社今神殿村に在と云れど其據を詳に爲ず然るに注式に近衞院天皇久安三年正月十九日預祈年月次新嘗と有れば式外なるに似たりと雖も鳴雷神天忍雲根神同神なる上は暫く祈年月次新嘗等の中絶せるを再興せるとも云ふ可くや有む又は其傳を失て別神と思紛へて此御世に其御擧は有けるにも有る可し然るを春日社記に若宮殿御出生朱雀院御宇承平三年也其後六十六代一條院之長保五年癸卯三月三日己丑時風五代孫中臣是忠拜見之と有は天忍雲根神の事には非ずて朱雀天皇の御世に生給しは鹿島大神の御子なるを天忍雲根神の元より鎭坐るに合祭るなる可し其證は同書に若宮殿鹿島大明神と有を年頃不審しく思度りしに注式に第一第二相殿無二別御殿一と見え第七十五代保延以後造二神殿一遷御と有にて氷解せり若宮御出生と云事は如何なる樣なれど此社に鎭坐る御靈の御子を生坐るにこ人眼にこそは見奉まじけれ幽には人世に於るが如く幾在も有可ければ疑ふ可きに非ず然れば鹿島大神の御子の御社は先くして第一第二の相殿に坐しを天忍雲根神に合せて其社も元は神殿村に在けむを今地に引るに在可きなり（此社の事は此卷首に殊に委しく云れば今此に省つ注式に人皇八十六代四條院仁治四年嘉禎二年十二月七日宣旨春日別社若宮祭宜、令二官幣前日發遣其使一事また第八十六代四條院治五年嘉禎三年十一月廿九日祈年穀奉幣宣命辭別云云々若宮之祭禮者當社之壯觀也殊凝二叡慮二天可奉二日幣一十二月十七日庚子若宮祭也云々自二今般一被レ獻二內藏寮官幣二雖補等所日發遣之奉幣四分之一用途也と有て其頃よりの事と見ゆ）若宮の攝社注式及小社記に若宮內院大刀辛雄明神太玉明神と有る大刀辛雄明神は手力男命にて若宮に坐す天忍雲根命の外祖父と有り太玉命の祀られ給ふ由は古說の如く天兒屋命と左右の大臣の如く相並び仕奉られしかば其御緣に依れるにかと思ふに然らば大宮の內院にこそ齋れ給ふ可きに然らずして此若宮に攝し給ふは如何と云に此太玉命の出自は姓氏錄（右京神別）に齋部宿禰高皇產靈命子天太玉命之後也と見え又古語拾遺に高皇產靈神男と有れども依難し姓氏錄なるは其裔を汎く子と云るなる可く拾遺なるは中臣朝臣の出自神皇產靈神と傳はれるに今一層超過むとての結構なればなり然れども栲幡千々姬命天忍日命天太玉命と御兄弟の次序の任に物爲るは家に傳る古記に依て記されたる可きを此に說を得て證徵を佗書に索るに栲幡千々姬命は第二卷（第五詞）第三卷（第七詞）此卷（比賣神條）にも考記る如く天石門別神（亦名手力男神）の御女なり此、

より天忍日命の系統を訂正すに姓氏錄に高御魂命五世孫天押日命と見え又天押人命とも申が其は天雷神孫と見え振魂命四世孫とも有を此彼對考(カムアヘアハセ)て第二卷に天忍日命の弟に列たれば論無くして天石門別神の御子なり然れば布刀玉命と申す御名も天石門別安國玉主神の御名を襲坐るにて太靈命なる事云まくも更なり然れば天兒屋命は其御姉を娶坐るに依て御兄の如く何時も太玉命の上に立て並坐す事幽き旨有る事なりけり此若宮の内院に坐は天忍雲根命に御叔父と坐ばなり 此は故大人等の說には悉く違たる新奇の說なるが拾遺は右の如く構て杜撰の事共多かるは故有る事なり因に其一二を云はゞ櫛磐間戸命豐磐間戸命は古事記に記せる如く天石門別神の亦名なれば此なる說に合せて云へば太玉命の御父なり然るを拾遺に是並太玉命之子也と有は杜撰に非ずや尚後に至て殿祭門祭者元太玉命供奉之儀云々と有り御子神の御祭を御父と坐す太玉命の行給ふ由有むやは餘なる漫言なり予を以て云ふ時は御門神は御父と坐す故にこそ太玉命の殿祭と共に御門祭は物爲給へりとこそ所思れ因に云二十二社注式に此若宮の事を記して本地之號手力雄神太玉神兩神云々秘說云々と有るは若宮御垂跡深秘之故難レ注レ之と有るを云ふにか今辨難し手力雄神太玉神兩神の鎭坐す所以の知れざりし故に如此は云るならむ 外院兵主明神次南宮明神次一童子明神自本社北三所御坐と云り兵主明神は神名式に大和國城上郡穴師坐兵主神社名神大月次相嘗新嘗と有る此神を祀れるが祭神は素盞嗚尊なる可し諸神記に八千矛神と爲るは非なる山神名式考證に委く辨へたり 南宮明神は同式に美濃國不破郡仲山金山彦神社名神大 此社を南宮と云れは所祭同かる可し 但別社に勸請(マセマツ)る所以は未思得す 一童子明神は未思得す 若宮の御子神等にも有かむ 三十八所明神社記に云金峰山藏王權現注式にも所謂藏王權現其南裡左祭氣明神と見えたり藏王權現とは左祭氣を訛れるなるが其は神名式に大和國吉野郡金峯神社名神大月次相嘗新嘗と有る此社の祭神を紀伊國粟島社傳に少彦名命と傳へ武藏國御嶽山社は右の吉野より勸請せるが所祭少彦名命大巳貴命神武天皇一云安閑天皇と云ひ神名式に所見たる甲斐國山梨郡金櫻神社を御嶽山と云て吉野より勸請せる由云傳たるに所祭少彦名命大巳貴命素盞嗚尊なりと傳て其相殿神こそ異同も有れ主と祀る所少彦名命なる事熟焉ければ左祭氣神とは云りしなり其は式なる近江國蒲生郡沙々貴神社を頭注に仁德天皇一說少彦名と見え但馬國出石郡佐々伎神社を同書に少彦名と記て少彦名命を左祭氣神と申事著明なり此は神代紀少彦名命出現の條に初大巳貴神之平國也行二到出雲國五十狹々之小汀一而且當二飮食一是時海上忽有二人聲一乃驚而求レ之都無レ所レ見頃時有二一箇小男一以二白蘞皮一爲レ舟以二鷦鷯羽一爲レ衣隨二潮水一以浮到と有る五十狹々之小汀と云も此

事に依る名なる可く神名を左祭氣と申も以ニ鶺鴒羽一爲レ衣と有と有ニ一箇小男一と云ふ程に御身の小く御在しとに依て負坐るなる可きなり偺藏王と云ふは鶺鴒字を切て鵲と短呼て其に王字を从て鵲王なるを藏王と轉云るなり尙丹波國天田郡に佐々木山と云ふ有て其祭神を藏王權現と云ふなと祭氣と藏王と同神たる證徵なる者なり例の僧等の僻として金峯の神威を掠むと物爲て種々の妄説に杜撰れゝども然すがに左祭氣神の御名の隱沒爲む事の惜(アタラ)しくて若此く藏王とは稱奉れる者なる可し大凡天下の名高き社々の神を佛氏の方人に爲として大御神を大日に素盞鳴神を不動若くは毘沙門大己貴命を藥師と其方に取込て今は祭神の傳らぬ社も多く有れども其糸口を得て此を解分る時は何處よりか發見(アラハ)るゝ端を見附る者にて全に傳來を失たるには勝る事有り誇社小社記に辨財天なりと云り佛氏に辨財天と稱ふ者は我が宗像神にて多くは其中にも市杵島姫命に御在り誇社の號未思得ず小社記に其南一町去所と有は若宮より南を指なる可し紀御社社記には紀伊社と作り小社記に紀御社本社四所之内と有は四社並坐事を云るならむ紀伊社と申は常陸下總河內より移來坐る准(ナゾラヒ)に其本國を云るなる可ければ今も其意を得て說く可し赤穗明神は式に大和國添上郡赤穗神社と見ゆ此は式に紀伊國名草郡靜火神社名神大香都知神社有る此二社より移坐るにて赤穗は赤火にて火產靈神ならむか此神は上にも云る如く武甕槌神にも經津主神にも天兒屋命にも比賣神にも搃ての出自と坐せば如此祭給ふ可き者なり但末社の中に愛宕權現と申せるも有て所祭に異無けれども斯る御祖神等を少緣の御社に祭る可くも非れば此を僞とす島田明神は式に島田神社と有る御社なり此は式に紀伊國名草郡志摩神社名神大音相近ければ此神ならむか社記に春日酒殿島田明神と有は由有る事なる可し孝謙天皇御紀に幸春日酒殿と見えたるは此ならむ祭神未思得ず先には姓氏錄に島田臣神八井耳命之後也と有に依れゝとも然は非ず前立明神小社記に御前石立明神と有て此は式に載れる御前杜原石立命神社なるが社字古本杜と有に從ふ可し原字は一本及衆俱本に无きは脫たるならむも上田百樹說に原は天乃の二字を誤れる者なる可し次に天乃石立神有る其例なりと云るは然る言なり此を亦紀伊國に祟るに神武天皇御紀に進到ニ于紀伊國一云々遂越ニ狹野一到ニ熊野神邑一且登ニ天磐盾一仍引軍漸進と見えたる天磐盾は通證に磐盾謂ニ磐石自成レ盾今見然爾と有り續古今に眞熊野の神倉山の石疊登り果ても猶祈る哉と咏るは此なりと云り神名式に紀伊國牟婁郡天手力男神社有り此神の亦名と通ゆ尙出雲風土記に意宇郡楯縫鄕云々布都努志命之天石楯縫直給之故云ニ楯縫一と見えたるに當郡に熊野坐神社名神大と式に見たるに紀伊國牟婁郡に亦熊野坐神社名神大と載り如何に寄しからずや必深き幽契有る事なる可きなり尙式に天乃石立神社有り其は此御前社天乃石立命神社の別社なる可し此社或書に在ニ小柳生村岩戸谷一と云り岩戸谷前宮相

近き者也　天石吸明神は式に天乃石吸神社と有り此は紀伊國に考る所なしと雖も上に經津主神の御父母を磐筒男命磐筒女命の注に古事記なる石土毘古神石巣比賣神は此二柱なる由記る如くなるが此に就て思ふに石吸は石巣日(イハスヒ)にて速秋津比古神速秋津比賣神を大祓詞に速開都比止云神と有て比古比賣の下言を省き云ふ古言の格なり　然らば石吸の須比は音便にて須革とは訓ざりけらし比は日(ヒ)の如く正しく唱けむと所思たり　○四柱能皇神等能廣前仁白久の廣前を考に廣(ヒロ)は大(オホ)と云ふに同じ偖伊勢神宮の外は皆前(マヘ)と耳有る其中に平野に耳廣前と有は天皇を齋奉る宮なれば然も有る可し春日には例無れど藤原氏の盛なるに依る者也と云れつる如く此詞の下には皇大御神とさへ云るは餘なる事なり　但平野社は考に天皇を齋奉れる由云れたれど予が說徵せるが如く天皇の祖神には坐ざるに今木神を皇大御神と云ひ久度古開神を皇御神と云る如く奈良京より以來は我が古眼より見れば例に違たる文法共(多かり)但其は此卷中なる大方の天津祝詞に計較(クラヘミ)る故に然るにて其奈良京已來の文も中々に打上りて愛き事今世の准らひに非ず　鈴屋大人說に廣前と云事古くは見えず古は大前と云るを今京に爲(ナ)りては摠て廣前と耳云りと云れたるは然る言なり　此等の事第　卷なる第　詞の下に云り見合せて知(サト)る可し

大神等能乞賜比能任爾(オホカミタチノコハシタマヒノマニマニ)春日能三笠山能下津岩根爾宮柱(カスカノミカサノヤマノシタツイハネニミヤハシラ)廣知立高天原爾千木高知氐(ヒロヒリタテヽタカマノハラニチギタカシリテ)天御蔭日乃御蔭止定奉氐(アメノミカゲヒノミカゲトサダメマツリテ)

大神等能乞賜比能任爾より天乃御蔭日乃御蔭止定奉氐までの文は平野祭詞久度古開詞にも見えたり龍田風神祭詞に皇御孫命大御夢爾悟奉久云々吾宮者朝日乃日向處夕日乃日隱處乃龍田能立野爾小野爾吾宮波定奉氐吾前乎稱辭竟奉者云々是以皇神乃辭教悟奉處仁宮柱定奉氐と有る文意に髣髴たる語勢なり　但春日平野久度古開共に神の方より宮殿の事を乞申給へるが此は此方より間申給へるに依て然らばと神より其宮を求給へるにて心得に少異の有るなり　大神等は鹿島香取枚岡三所神を申せり但春日に鎭坐むと所思し立給ふは鹿島大神なる事卷首に記せるが如し所以に公事根原に神護景雲二年正月九日三笠山に垂跡給て天兒屋根命齋主命姬大神の御許へ各此由(マチサ)を申させ給ふと有は鹿島大神より時風秀行して奏聞令(シ)め給ければ朝廷より御迎の勅使を立られて此由を申させ給ふと云ふ事なり　若此く見ざる時は鹿島大神より直に御使を進せられて迎給ふ事となるなり熟く心を留て悟るべし　乞賜比能任爾は同書に同年の十一月九日託宣の事に依て朝廷より勅使を立られて三笠山の下津岩根に宮柱太敷立て其四所の明神を崇奉らると見えたる此事を云なり　委しくは卷首に註れば立復て見るべし此言の續き方(サマ)は顯宗天皇御紀三年の下に月神日神の御託言に若依請(マニ〳〵コハシメ)獻レ我當二福慶一また事代便奏レ依二神乞一(カミノマハシノマニ〳〵マチス)と有例にて請

乞（コヒコヒ）同し○春日能三笠山能は記傳廿一（四十一丁）に春日和名抄に大和國添上郡春日郷（加須加）と有る此也神名帳同郡に春日神社春日祭神四坐（並名神大月次新嘗）と有る此地なり開化天皇御紀に遷都于春日之地（春日此云二箇酒一）繼躰天皇御紀に播磨比能（ハルヒノ）賀須我能（カスガノ）倶儞（クニ）など有此地名の起の事は姓氏錄（左京皇別）に大春日朝臣云々仲臣令重二千金一悉レ糟爲レ堵（カキ）于時大鷦鷯天皇臨二幸其家一詔號二糟垣臣一後改爲二春日臣一と有此說に依る時は本糟垣なりしが後に省りて加須賀とは成れるなり（然れとも此說の疑しき由は先綏靖天皇御紀に既に春日縣主と云事見え又古事記黑田宮段に春日之云々と有は正しく地名なるに彼糟垣の事は遙に後大雀天皇の御世と有ればなり然れば地名は本にて彼姓は其地に因れるにこそ有けめ然れども猶彼說を助て云はゞ糟垣の事は甚上代の事なりけむを誤て大雀天皇の御世とは傳たるにや其は若くは彼糟垣に因て其地名を加須我と云來つるは後に姓に賜しが大雀天皇の御世なりしにや有む偖糟を以て垣と爲と云るは如何なる事ぞと云に古には川の堤の如く廣く築たる垣も有と思しければ然る樣の垣なる可し歌なとに垣穗と云も然る堤の如くなる垣に生したる草を云なり○今云此より加須我に糟垣の字をも書りと見えて上に已に引たる遠江風土記に敷智郡岐佐岡神社俗號二阿糟垣一所祭大兒屋根大宮比咩也また駿河風土記に安倍郡菅沼神社所祭糟垣大神也など有ば正しく春日に當たるなり）三笠山は萬葉集三卷（二十六丁）に春日乎春日山乃高坐之御笠乃山と咏るを始として古歌に往々咏る此なり春日は上に記せる如く郷名にて此邊を總ての大名にて三笠山は其春日の地の内なる山なり顯昭密勘に大和國春日山に引下りて小き山に春日社御在し坐す御笠杜とも咏り春日の社の麓に在り然れば春日在る御笠山と咏り春日の山は總名なり御笠山は別なりと云り（同卷なる反歌に高按之三笠の山と有る按は久賀と訓るは字書に按案也と有るに依れるなる可し其次に雨零者將蓋跡念有笠の山と咏るを以見れば笠山と云ふぞ本號なりける三には三熊野御吉野の三御（ミミ）の如し）○下津磐根は常に云ふと同事乍に此は三笠山麓の意に用たり春日社記に神護景雲二年十一月九日戊申三笠山頂宮柱立三所御座同四年正月十二日戊寅三笠山下津磐根南向宮柱立御遷宮在レ之と有も麓を下津磐根と云るなり三笠山頂と有に對考ふ可し（下津石根の委き事は卷二なる第四詞下に云り）山麓を下（シタ）と云ふ例は古事記中（境原宮段）なる人名に山下影日賣と見え萬葉十五（二十七丁）に安之比奇能山下比可流毛美知葉能六（四十四丁）に山下耀錦成三（二十九丁）に山下赤乃曾保船に山下動など咏るにて知る可し記傳廿一（十四丁）に山下は諸木葉の變紅したる秋山の色を云と記されて同三十四（三十三丁）に其說を委しく爲られたるは眞に然る言れども其も亦一涯（ヒトカキ）の論なり（其說は右の卷々に就て諾ふ可し此には山下の映る事に用无く唯山下は山麓と云ふに用有て右の萬葉の歌をも引出たるなり）○宮柱廣知立古くは太知とも太知立とも太敷とも太敷立とも云るを今京に成ては此を廣と換たり（下野久慶古開共に廣敷立と云り尙此事の沿革は卷二なる第四詞下に已に云り）○高天原爾千木高知氐は卷二（第四詞條）に云り倩此御社の制樣はしも甚神々しく在つらむを今しは

甚足ぬ宮造なりけり其は廿一社記に春日社天兒屋命坐云々本社河内國平岡なり云々當社鎮坐の初は神護景雲年中の事なり今興福寺の鎮守に坐す彼寺は本山背の山科に有レ之爲ニ大職冠ノ建立淡海公時今の平城に移さる其時は即勸請無りけるにや遙に送ニ年月ニ景雲年中遷坐なり常陸鹿島より遷坐と申傳たりと云るは此書の作者北畠殿とも思えぬ曲言なり春日御社を興福寺の鎮守と云るは僧共に欺れたる私説にて未曾て正史に據無き事なり然れとも其由來る所無きに非ず其は桓武天皇の延暦寺を建立爲給ける御過より延て興福寺はた藤原氏の勢を恃みて朝廷に誇れるか彼日吉神を方人と爲れは此また春日神を強て吾有と爲るにて畢竟る所は事を神に託して其天譴を遁れむ料に物爲れば其御神を信奉するには非ずと雖も我奉仕する佛の上に置て彼を衒ふの術計に其社にも仕奉けむが神主祝部は彼に壓れて其下司の如く爲れりし故に終には其故實を忘れて傍より見る所日吉社は延暦寺の鎮守の如く春日社は興福寺の鎮守の如く成れりし者にて今猶然り況て古の有様は想像る可し（新古今集十九に補陀落の南の岸に堂建て今ぞ榮えむ北の藤浪」と有て左註に此歌は興福寺の南圓堂作始ける時春日の榎本明神咏給へりとなむと有るを公事根源にも此を引て春日の明神の人夫の中に交り給ひて遊されし事は此南圓堂を建立の時の事なり然れば藤原氏も南家北家京家式家とて四家に別れたりしかども三家は絶果て北家のみ榮ぬる事は偏に彼神の德なるにやと有れども此歌は藤原氏に佞媚る者の譌作て欺しなり其神咏を作れる人夫こそ甚しき曲者なれ）百練抄に治承二年五月三十日春日社今度修造之時可レ造ニ回廊ニ之由衆徒進ニ奏狀ニ云々被レ行ニ御卜ニ處官寮共不快之由申之而衆徒申云不レ可レ依ニ卜吉凶ニ云々遂改ニ瑞垣ニ造ニ回廊ニと有り此にて上古の制を易たる事の其餘にも多在る事を察む可き也玉葉集二十巻に熟々と思し解ば唯一法菩提の道そ我山の道と左注に此歌は春日社の回廊造られ侍ける時大神の告させ給けるとなむと有も僧共の譌作なる事著し然るは御卜を行はれし時に神祇官陰陽寮共に不快之由申レ之と有る不快は神の御心なれば也如何に畏き御事ならずや（春日御社の靈威を記せる書に春日驗記と云ふ物有り此將僧共の手に成れる者と見えて其甚だしく、尤く畏める靈驗共は悉く小利益なる者にて此大神の御功の太く高く御守の廣く尊く御在し坐す事頃には似着はしからぬ事共多く且春日神の佛氏に黨せる事と藤氏に與せる事耳なるが佛氏に黨せるには神國をして戎狄の下に置むと爲る計議也藤氏に與せるには人臣たる藤氏を崇て君上を御在し坐す朝家に不義を成しめ給へるは何たる僻事ぞや京近く鎮坐て守らせ給はむと遙々移坐る益無（カイナ）くして惡に與黨すると云事の豈有めやも）○天乃御蔭日乃御蔭此定奉氏の天乃御蔭日乃御蔭は宮殿の作用を云也卷二（第四詞ノ條）に註り考に定奉氏の上に言足はず今京地方には斯く略に過て雅ならぬ事多かりと云れつれども幾在省略き過

ても聞ゆる處は其雅なると云ふ者也太祓詞などに下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氐皇御孫命乃美頭乃御舍仕奉氐天之御蔭日之御蔭止隱坐氐云々と有は用る所に自佗主客の違は有れども如此く委しきも天之御蔭日之御蔭云々は美頭乃御舍仕奉れる其用を云ひ下津磐根爾云々高天原爾云々は美頭乃御舍仕奉る其躰を云るに同じく（定奉氐は風神祭平野祭久度古開祭詞等に有り御鎭坐本緣に鎭理定理坐給と見ゆ定の例なり此は風神祭詞の下に云り）此なるも其定にて下津岩根爾宮柱廣知立高天原爾千木高知氐は其造宮の事なるか其宮殿はしも神等の其に鎭給ひて雨を覆ふ蔭日を凌く蔭と定奉る由にて義理甚分明しく然も簡古なる古文の妙處と云ふ可き者なるをや（然れば文の略に過たるに非ず其解く事の文意に不足すると云ふ者なりかし）

貢流神寶者御鏡御横刀御弓御桙御馬爾備奉理御服波明多閇照多閇和多閇荒多閇爾仕奉氐四方國能獻禮留御調能荷前取並氐青海原乃物者波多能廣物波多能狹物奥藻邊藻菜山野物者甘菜辛菜爾至氐御酒者甕上高知瓱腹滿並氐雜物乎如横山積置氐神主爾某官位姓名乎定氐獻流宇豆乃大幣帛乎安幣帛乃足幣帛登平久安久聞食者登皇大御神等乎稱辭竟奉久白

貢流神寶者の神寶は調度の物を云ふ寶とは其物を以て用を取擬ふが故に稱たる言に高在の義なる可し遷奉大神宮祝詞に雜御裝束物五十四種神寶廿一種乎備天と有を以て其差別有る事を知る可し此詞に神寶者云々御服波云々と分てるを以考ふ可し（平野祭詞久度古開神詞にも進流神財波云々と云り同じ御身に着させ給ふ物乍御裝束を神財と云ざるに心を着べし出雲風土記大原郡神原鄕の下に所レ造ニ天下ニ大神之神御財積置給處也と有る神御財は調度の器財を聚置し所と聞ゆ）神代紀に八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劒を三種寶物と記し天照大御神の御言に此寶鏡と詔給ひ素盞嗚神の浮寶と宣へるは船を云なり此を以て寶は高在また尊有の義を以て稱たる名なる事を知る可きなり崇神天皇六十年御紀なる神託の言に玉萎鎭石出雲人祭眞種之甘美鏡押羽振甘美御神底寶御寶主山河之水泳御魂靜挂甘美御神底寶御寶主也と有も鏡玉を云と通えたり仲哀天皇御紀に有レ神託ニ皇后ニ而誨之曰有寶國譬如ニ美女之睩ニ有ニ向津國ニ眼炎之金銀彩色多在ニ其國ニ也と有は金銀彩色多在に依て寶國とは謂なり（然れば鏡劒玉は云ふも更なり大刀梓弓矢を始て金銀彩色なも都て美稱へたる言にて畢竟は身の調度と爲り作用の利と爲を以て多加良と云るなり）○御鏡御横刀御弓御桙御馬爾備奉理と有る此物等は四時祭式に見えす御手物を進ら

るゝ故に記されぬにや又は遷宮の時などに奉て毎年の事に非ざるが故に此詞には記れぬにも有る可し又思ふに臨時祭式に凡神戸調庸充祭料並造神社及供神調度但田租貯為神税と有れば神戸の調庸を以て供奉ると見る方宜かる可し（平野祭詞久度古開祭詞にも神財を進らるゝ品物の名有て其幣物の條に記す事無し彌々御手物の故なる事知るべし然るは神を祭るに神寶は第一等の重き幣物なり然れば先供神物の最初に記さる可き事なるを然らざるに心を着て考ふ可し）○御鏡は遷却崇神詞に見明物止鏡出雲神賀詞に麻蘇比乃大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能己登久明御神能大八島國乎天地日月等共爾安久平久知行牟事能志太米仲哀天皇御紀に如白銅鏡以分明看行山川海原なと有る意を以て献る表物なり（但此元は然らず誰も知る如く天石屋戸隠の時に招奉る料に物為たるが其思兼神の思慮を以て天照大御神の御戸を開て其俳優の事を見行さむ時に彼鏡を差出て示奉て汝命に益て貴き神在すが故に歓喜咲楽と申む料に物為るが其謀に合(カナヒ)て大御神を招出し奉れるに依て無比き大御寶と成りしを以て他神にも奉らるゝ事と成りしなり然れども其は其祈の表物たる事上に引る文を以て察む可なり）○御横刀は出雲神壽詞に明御神登大八島國所知食天皇命能手長大御世乎御横刀廣爾誅堅米と有る御横刀を美多知とは訓難ければ美波迦斯と訓む可きなり（大神宮式に玉纏横刀須我流横刀など有る横刀は多知と訓べし然れば言の續きと文の様とに随ひて多知とも波迦斯とも訓む事と見ゆ）弓を御執と云ふ如く劒は佩く物なるか故に御佩とは云ふなりけり但弓に執と云ひ劒に佩と云ふは其用の言な

るを稱呼と為るは如何と思ふも有る可けれど古事記景行天皇段に日向之美波迦斯毘賣と有を御紀に御刀媛（御刀此云彌波迦志）と見えたれば波迦斯と云ふ稱も甚古き事也けり（繼體天皇御紀上に天子鏡劒璽符と有る劒を美波迦斯と訓り又萬葉十三には御佩乎劒池之云々と訓り波久には帶字をも多く作り垂仁天皇御紀に大刀佩部また東宮の帶刀など波久の例なり　記傳二十三丁四十）に云く兵器を神社に奉給ふ事は垂仁天皇御紀に二十七年秋八月癸酉朔己卯令祠官卜兵器為神幣吉之故弓矢及横刀納諸神之社仍更定神地神戸以時祠之蓋兵器祭神祇始興於是時也（兵器祭神祇始興於是時也とは如可既に崇神天皇御世に以盾矛祭神を祠る事有者なを○今云古語拾遺にも泊手巻向玉城朝始以弓矢刀祭神祇更定神地神戸と有り因此て思ふに崇神天皇御世に兵器を奉られしは御紀に見えたる墨坂神大坂神祝詞に依るに龍田神など此等の神は兵器を乞給へるに依邂逅に奉給ふ耳にて天下の諸社に擬へて奉給ふ事に非りしにや其は古事記に作天之八十毘羅訶定奉天神地祇之社又於宇陀之墨坂神祭赤色楯矛又於大阪神祭墨色楯矛と有を以て知る可し然らば垂仁天皇の御世に泊て其事を天下の諸社に遍く奉らせ給はま欲く思ほし成て御卜問有けるに吉在けるを以て其より恒例とは為給へる者なる可きなり）神功后皇御紀に云々皇后曰必神心焉則立大三輪社以奉刀矛矣など見えて後々まで恒の事なりと云れたるか如し偖此を奉る意は遷却崇神詞に打斷物止大刀また仲哀天皇御紀に提是十握劒平天下など有る表物を兼て神の御料に進るゝなり（此下に猶云れたる事有れど此に用無れば次に引るを見る可し）○御弓を古來美登良斯と訓り上なる御横刀の例に據て思ふに實に

然る可し萬葉集一二丁に八隅知志我王乃朝庭取撫賜夕庭伊緣立之御執乃梓弓之奈加弭乃音爲奈利と有て人の能知れるが如し然れば弓の用を取て號と爲る事炳焉し備此弓には矢をも副て奉れしなり其は備奉氐と有にて著し臨時祭式に凡但馬因幡美作三國以二神税一交易所レ進之弓矢大刀者充二臨時祭祓料一と有も必矢を副る事の證なる者なり萬葉に梓弓手爾等里母知弖と有る等里を活用して登具斯とは云る者なり○御梓は例に依て思ふに御楯御梓と有つらむを脱たるにや在む龍田風神祭詞に神の乞給ふにも楯戈御馬爾云々と見え廣瀬大忌祭詞にも楯戈御馬また楯戈至万氐と有て楯戈を並て獻らるゝ例なればなり但平野祭久度古開詞共に文の様は同しかれど楯戈を漏せり然らば此詞にも本より無りしにや尚能く考ふ可し記傳二十三なる上に引る文の續きに三代實錄十に石淸水八幡宮に楯矛並御鞍を奉給ふ告文に新宮搆造天岐楯矛及種々神財可二奉出一而神財波且奉出已止畢太利楯矛並御鞍等乎奈毛忌利介留此乎今造餝天云々奉出給布など有を思ふに有が中に如此楯矛をしも殊に重く爲て奉給ふ事は此水垣宮御代の列の次第に傳り來る者なる可しと云れたるは然る言なりかし但此なる楯矛を殊に重く爲て云々と云れたるは然らぬにや其は種々の神財は奉給しかども楯矛は遺せるを後より更に心着せ給ひて奉給へりと通ゆればなり然れども楯矛並て奉られし徵とは爲(ナ)れり○御馬爾備奉理は儀式に神馬四疋走馬八疋牽二列神殿前一近衛少將馬寮頭前行云々次馬寮牽二神馬一廻レ社八度云々大臣以下赴二於馬場一介馳二御馬一と見え江次第にも神馬走馬牽(ヒキ)立神殿前云々馬寮使牽二廻御馬一八廻云々次向二馬場一馳レ馬と有此也備龍田風神祭詞に楯戈御馬爾御鞍具氐と有る例して御馬爾御鞍備奉理ならむと先には思へりしかども然は非りけり此の備奉理は上より云並たる御鏡御横刀御弓御梓御馬共に總て係て受たるにて其中には御馬の鞍も含(コモ)有る事云も更なり其は風神祭の右の續きに品々乃幣帛備氐と有る備氐と此の備奉と事は一なればなり然とば右の風神祭の御鞍具氐と有る具は御馬にのみ係て狹く此なる備奉理は甚廣く用ひたる者なり備(ソナヘ)は其並(ソナハ)にて物の闕缺(カケ)たる所無く悉く滿足へるを云ふなり故古書共に具とも備とも書り備は兼備の意にて記し具は具足の義なるを以て通たるなり○御服波明多閇照多閇和多閇荒多閇爾仕奉氐は卷一第二詞條に云り但彼には稱辭竟奉と有を此には仕奉と云り其用たる意に異無し春日祭式に祭神料安藝木綿大一斤絁七尺調布二丈三尺已上官物神祇官所レ請曝布一端八尺商布十二段筥八合已上封物內膳司所レ請と見え又散祭料云々曝布一端已上封物五色薄絁各二丈木綿二升麻二升五色木綿一百枚五色玉二百枚絁一疋絲一約綿一屯

已上爲物神祇官所レ請餝神殿料五色薄絁各二丈四尺絁四尺綿一屯木綿八斤麻一斤已上官物神祇官所レ請など有る此等を云也但稱辭竟奉は十分に其事を盡したる義なるが仕奉は事物を唯に調進する事耳に成れり○四方國能は第二卷第四詞條に云り考に此能を俗なり國與利と有る可しと云れたれと又は義の通ゆるを詮とす通ゆれば俗なりとて改難し○御調は記傳二十三八十八丁に云く水垣宮段に調遠飛鳥宮段には御調と書り書紀に調また賦なと皆美都岐また美都岐母能と訓貢をも然訓り敏達天皇御紀に調物とも有り朝貢また脩貢職などを美都岐母能多豆麻都流と訓り脩美都岐と云名義は美は御都岐は都具を體言に爲たるにて御供給なり給は相足(タス)也とも供也とも備也とも注せり此字常には多麻布と訓て上より下に賜ふ事と耳心得めれども然耳には非す然れば俗言に人に物を看給と云ふ都具と同書にて都具は續くる意なれば御調と云ふは公に用ひ給ふ諸物を下より供給奉る意の名なり美を省て都岐と耳も云る事次に引く萬葉十八の歌にも萬調と詠み書紀の訓にも然見えた拾遺集に調絹を月の衣に云係て咏る歌も有り脩朝廷に貢る物は諸物皆美都岐にて田租も美都岐の內なれども次に引萬葉十八の歌にて知べし常には田租の外に貢る種々物を美都岐とは云り男弓端之調女手末之調と云も然なり脩字に調庸賦貢なと有て其別紛はしきなり其大形を云はば調は下に委く云るが如し庸は役に赴者(タツモノ)の赴ざれば其日數に合(カナ)へて代に物を輸を云ふ令の御制に一日の代布二尺六寸宛也庸布と云ふ者は此なり賦は斯る類の事を凡て云名なり別に一有には非す貢は賦と同意ながら其物を献る事に多く云り萬葉一十九丁に山神乃奉御調等春部者花挿頭持云々此は山の花黄葉を山神の天皇に奉る貢と云成るなり言以行けば天下に所在る物は信に神の貢給ふ御調なりけり十八に天之日嗣等之良志久流伎美能御代々々之伎麻世流四方國爾波山河乎比呂美安都美等多弖麻豆流御調寶波可蘇倍衣受都久之毛可禰都またすめろきの之伎麻須久爾能安米能之多四方能美知爾波宇麻乃都米伊都久須伎波美布那乃倍能伊波都流麻泥爾伊爾之敷欲伊麻乃乎都頭爾萬調麻都流都可佐等都久里多流曾能奈里波比乎此は稻穀を萬調の司と云り司とは第一なるを云脩此を以見れば田租も美都岐物の內なり六に御食都國日之御調等淡路乃野島之海士乃海底奧津伊久利二鰒咲左盤爾潜出船並而仕奉之貴見禮者二十に伎己之米須四方乃久爾欲里多弖麻都流美都奇能船者金葉集賀に調物運ぶ丁を計れば二萬の里人數副にけりなど有り脩上代の調の御制は如何有けむ細なる事は知難し孝德天皇御紀に大化二年春正月甲子朔宣ニ改新之詔一曰云々其四曰罷ニ舊賦役一而行ニ田之調一凡絹絁絲綿布並隨ニ鄕土所一レ出田一町絹一丈絁二丈布四丈絲綿約屯諸處不レ見別收戸別之調一戸貲布一丈二尺凡調副物鹽贄亦隨ニ鄕土所一レ出云々右文を略て引り本書を考ふべし秋八月庚申朔癸酉詔曰凡調賦者可レ收ニ男身調一此は正月に定られたる田の調戸別の調を改めて男身調に定られたるなるべし脩賦役令に凡調絹絁絲綿布並隨ニ鄕土所一出正丁一人絹絁八尺五寸六丁成ニ疋一絲八兩綿一斤布二丈六尺並二丁成ニ約屯端一○今云約は義解に絲十六兩爲レ約也と有り米(メ)と訓るは群(ムレ)の義なる可し屯は天武天皇御紀に阿世と訓み和名抄に一屯比度母知と訓り義解に綿二斤爲レ屯也と有り若輸ニ雜物一者云々雜物の色目は此には略けり本書を見べし次丁二人中男四人並准正丁一人其調副物正丁一人云々副物の色目も此には略けり京及畿內皆正丁一人

調布一丈三尺次丁二人中男四人各同ニ正丁ニ正丁とは男の年廿一より六十迄なるを云次丁とは六十一より六十五迄なると殘疾者とを云中男は十七より二十迄なるを云倭右の雜物を一人別に皆輸には非す或は絹或は布何に在れ其土地より出る物を一色宛輸なり[illegible]物副物も然なり倭諸國の調の色目は主計式に委しく見えたり又諸國貢獻物は右の調の外に在り倭諸國其國内の調を收集て國司郡司此を部領して京に上り大藏省に納む其使を貢調使と云なり倘調の事賦役令民部式主計式などに委見えたり考べし以上記傳の說なるが以下に倘云れつる事有れ共此に用無れば省つ又文をも所々取捨して引出つ倘御調の事に就て天津日繼の起れる所以など奇異しき事共多かれど其は豐受大神の御靈に依る事など委しく卷三第七詞に云り○荷前は稻の事なり四時祭式春日祭條に祭神料稻六束神祇官所ㇾ送米糯米各三斗大豆小豆各五升已上大炊寮所ㇾ送散祭料米糯米各一斗五升大豆小豆各五升已上大炊寮所ㇾ送など有此等を云なる事取並氐と有にて知べし其は大忌祭詞風神祭詞に御酒者甕能閇高知甕能腹滿雙氐和稻荒稻爾云々と有る如く同文格なるを此詞には御酒者云々と云て穎の事を云ざればば平野祭詞久度古開祭詞共に四方國能進禮流御調能荷前乎取並氐御酒波云々と有て證して荷前は佗詞に初穗者穎爾毛汁爾毛と有る穎の事なるが其即和稻荒稻にて此に云ふ荷前なる事を察む可し荷前の事は第三卷に委しく云り見合すべし○青海原乃物者波多能廣物波多能狹物奧藻菜邊藻菜は春日祭式に祭神料鹽五升鰒堅魚烏賊平魚海藻各六斤腊十二斤鮨三斗已上大膳職所ㇾ送散祭料鰒堅魚平魚各六斤鮭二隻海藻六斤鹽五升已上大膳職所ㇾ送と有る此なり倘卷一第二詞條に云り但此には奧津藻菜邊津藻菜と書べきを津字を省記せり○山野物者甘菜辛菜爾至麻氐他詞には多く大野原と云るを此詞と平野久度古開祭詞共に山野能物波と換て別意有に非す然れども甘菜辛菜の上を以云ふ時は大野原の方勝れるに似たり但春日祭式に祭神料雜菓子二斗橘子一斗散祭料雜菓子三斗榲一斗と有れは山野と此は云ふ可き所なり但菜蔬を記されざるは其地に取れる故なる可し大野原の事は卷一なる第二詞に注し甘菜辛菜の事は其所にも卷四第八詞の下に委しく記せるを見よ○御酒者甕上高知甕腹滿並氐は春日祭式に祭神料酒一石五斗用ニ社釀酒一散祭料酒六斗用ニ社釀酒一と有る此也儀式に神部舁ニ酒樽一入立ニ諸殿前一神酒一樽立ニ一二殿間一二樽立ニ三四殿間一與ㇾ机相配社釀酒四缶立ニ中重一每ㇾ殿相當と見えたり江次第にも此事見ゆ煩はしければ此に引出ず甕上の上を佗詞に閇とも戸とも書るは假字にて此に上と書る此正字なり御酒者の伎は酒の本名なり中臣壽詞に悠紀主基乃黑木白木乃大御酒乎と有る美は借字にて美伎の伎に同し然れば美伎は眞氣佐祁は正氣にて美も佐も上に冠れる言にて伎と云ふぞ本なりける又美に敬詞の御の義をも包たる事云まくも更なり縣居翁の酒を佐氣と云は此を飮ば心の樂る故の名なりと云れしは信ひ難し記傳三十一久志能加美の解に横井千秋云久志は酒の本名にて應神天皇の大御歌に須々許理賀

迦美斯美岐邇和禮惠比邇祁理許登那具志惠具志邇和禮惠比邇祁理と有る二の具志此なり（此に上より連ける言有る故に具と濁れり）偖御酒白酒黒酒なと云ふ伎は此久志の約れる名なりと云るも翁も信れたれど然らず其は須々許理が釀し御酒に我醉にけりと上に謠はせ給へるは其物名を彰し給へる者なり次に許登那具志惠具志に我醉にけりと謠給へるは其酒を聞食て醉せ給へる形狀を宣るにて酒の用を云なり（故右の御歌の前文に於是天皇宇羅ニ宜是所レ獻之大御酒ニ而御歌曰と有を思ふべし尚古事記若櫻宮段にも於ニ大御酒ニ宇羅宜而大御寢坐也と見え出雲風土記に大神大穴持命御子云々爾時詔神御子乘レ船而率ニ巡八十島ニ宇良加志給云々と有を契沖說に小兒を詑ふを手宇良加須と云ふ此也、と云る如く言義は情樂(ウラゲ)にて他念無く遊樂び給ふ事を云るなり）然れば許登那は翁の說の如く事和にて憂事哀事の和さむ意惠は御情樂坐て咲榮え給ふ事にて久志は神代紀に大己貴命與ニ少彥名命ニ云々復爲ニ顯見蒼生及畜產ニ則定ニ其療レ病之方ニと有るを神功皇后の御歌に久志能加美登許余邇伊麻須伊波多々須々久那美迦微能と有を合せて思ふに久志能加美は縣居翁の藥之神なりと云れたるに依て藥と爲す可きなり酒を藥と爲る事の此の古書に見えたるは丹後風土記に天女八人降來云々爰天女善爲レ釀レ酒飲一盃吉万病除云ことと有を以知る可し然れば久志とは酒の利用を云るにて其名に非る事愈明けし然れば久志は氣汁にて物の精氣を絞取て用るの名なるが藥物と爲ては相應ふ所靈妙奇異なるが故に久志に奇異の義をも含有せり（漢籍に酒百藥之長と有るを始め此藥物の最初に置く事故有る事なり其は太元攷に云ふ可し鈴屋翁の串和酒咲酒と爲られたる義に於ては然る言なれど酒を久志に配られたるは非ず又丹後風土記に復至ニ竹野郡船木里奈具村ニ即謂ニ村人等ニ云ニ此處我心奈具志久ニ乃留ニ居此村ニ云々と有て注に古事平善者云ニ奈具志ニと有ば久志は辭なり然れども此なる二の具志は藥にて正しく物を差云るなり）然れば伎と云ひ美伎と云ひ佐祁と云ひ連語に佐加と云ふ加伎祁また久志の久共に如何なる意ぞと此を考るに何れも氣字の義にて音訓共に同じきなり偖酒に釀ス料物は米に在れ麥に在れ菓に在れ各自固有の粹氣有る其を絞取て用るが故に其身に應する所も氣を導て能く神經を循還るなり此は氣の氣を御するにて其功驗尤神速なるを以て酒を伎とは號たる者なり（上に云宇雜宜また事和酒咲酒の事を考且して熟思はゞ知る可からむ尚第三詞大宮賣神の下に委云へり）〇雜物乎如横山積置氐の雜物は上に擧たる神寶御服荷前魚物菜藻御酒などを云て尚此餘にも品々の獻物の有を聞せて一に云終めたるなり（委しくは初に引る春日祭式の供物を見る可し）如横山積置氐は卷三第七詞に如ニ横山ニ打積置氐と有る下に委註せり（其下に就て見べし）〇神主爾官位姓名乎定氐献流と有るは此御祭に京より向ふ人を悉云りと通ゆ但其中に一人別に神主と云者有り

此は儀式に前二日早旦神祇官人率ニ神主神琴師神部卜部ニ向レ社云々と有て當日の處に大臣以下及朝使氏人就レ坐（北面東上重行）次神馬四疋走馬八疋率ニ列神殿前ニ近衛少將馬寮頭前行次神主著木綿縵就祝詞坐兩段再拜四段と有を以見るに神祇官人にて階位卑き人なるが唯祝詞を申す料に依されつる者也然らば其は誰ならむと深考に新年祭儀式に中臣進就ニ庭坐ニ讀ニ祝詞ニと見え祝詞式の首にも凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞以外諸祭中臣氏祝詞と有を以知れたり（神祇官人と云るは副祐なり其は儀式に神祇副若無レ副則祐代レ之と有り副祐の人の率るを以て其卑き事知可し彌中臣なる事著明し）神主爾其官位姓名乎定氐と有れば此祝詞中の人一人の如く聞ゆれども今日の神事に預る人等を悉く並ニ言ふ事と見ゆ然れども爾の辭にては言足はず爾副氐の意なる可し然るは儀式に大臣以下入レ自ニ西門ニ就ニ外院座ニ六位以下藤原氏人依レ次就座名字書札（札及筆硯辨官々掌預前備之）と有る名字書札は此の用と通ゆればなり（江次第に延喜廿一年二月三日庚申云々今日上卿不レ參仍不レ敷レ座此間官掌參ニ着到殿ニ合置ニ簡并筆硯等ニ被擧氏四位以下六位以上次第着到と有を合せて考ふべし）偖右の神主は神祇官より發遣する事なるが故に四時祭式に齋服料神祇官人一人云々神主云々膳部八人卜部二人云々守ニ神殿ニ仕丁二人云々と見えたるが（儀式に神祇官人率ニ神主神琴師神部卜部ニと有を思ふ可し膳部八人は右の神部を以物爲さするにや）摠て參向の人々は内藏式に春日祭使裝束の下に外記一人史生一人辨官史一人史生官掌各一人喚使二人寮五位助已上一人舍人一人仕丁一人近衛少將若中將一人近衛十二人馬寮五位助已上一人馬部一人御馬十二疋と有り（公事根源にも先未の日使立つ近衛の中少將勤む云々上卿辨も今日同じく向ふ云々と有り上卿辨は南曹のなる事云も更なり）○宇豆乃大幣帛は平野久度古開詞共に有り但古き祝詞には大字無し（尙此事首卷第一詞の下に云り）○安幣帛上件の幣帛の具數具りて奉れるに猶心足ひに奉らせ給はむ將來の事をも係て稱云ふなり偖安は殖爲にて物事の事故有る事無く殖る義なる可し安は求て伸る意足は自然に廣る義を持ればなり古言に安禰久平禰久また安國止平久所知食また安見知之また安御世乃足御世など有る安なるが此を唯安泰の義に耳見るに徧滿なる可し偖夜須とは廣邈たる所迄も進至り及ぶ意なるが故に不足なる事無き由なるを以て殖爲の義を帶る者なり（神武天皇御紀に取ニ天香山之埴土ニ遂得ニ安ニ定盡字ニ故取土之處曰ニ埴安ニと有る安定は安泰の由埴安の安は殖爲にて其意通えたり崇神天皇御紀に武埴安彦之妻云々取倭香山土云々祈曰ニ是倭國之物實ニ則反之と有るは神武天皇御事を潜擬せるが香山の土を取て倭國の物實として國を得むと爲るより武埴安彦と自稱せりと通えたり此また兩義を存せり萬葉二に我者毛也安見兒得有と詠るも安見兒は人名ながら安泰と我有と成れりとなり）神代紀に天安河を八十河中と爲るも安に八十の意相似たるが故

なり記傳に安河は彌瀨之河にやと云れたるは然る言なれど八十河と云ふは河流の八十有るに非ず八十瀨有(ナ)る由を以て安河とも八十河とも云るなり但安は八十の義に非ず物を廣く云ふ名なり　○足幣帛は上件の幣帛悉く具足せる由を受て云也借足は多有也但多は字音ながら此の言も然なり貴は多太俳倜は多回なるに例して其餘を知る可し是を以て闕落る事無き由なるを知る可し萬葉二卷に天原振放見者大王乃御壽者長久天足有と有る足も充滿具足の義なり物に對て誰と云ふも測知れぬ由なり是を以て足の意を思ふ可し上に云る如く安は求て伸る意足は自然に廣ごる義を有てるを見つ可し　水などに垂と云ふも其至る所の測知れぬを云り萬葉に天之足夜爾また天地爾思所足なと數多咏り　又上に引る如く安と平と對へ安と足と對て並云ふを思ふに足に平の意をも含たる可し　但平は多廣の義なれば足に由無きに似たりと云も物は充滿具足して平和なる理なればば其平の義を含ざるに非ざる者なり　○平久安久は上に出　第四詞の下に云り　○開看者登の言義上に出　第七詞殘乎波乎聞看の下に云り　○皇大御神等乎稱辭竟奉久登白考に云く皇大御神等と申す事は古事記を始て古書共に皇祖神等續ては天皇を申奉る例なり今此文に然申せるは今京と成りて古義の不委なりと云れしは然る言なり此詞の中に古義に違へる一二を云はゞ大前とは伊勢大御神に耳申て佗神には唯前と云ふ例なるを廣前と云て大前に擬し幣帛に大を添て他例に違ひ皇神等乎云々と申す可きを此に皇大御神と云るなど時世の移來し任に文法も漸易り行ながら當昔斯る事の知られざる世に非ず此は決く藤原氏の廷臣等の朝廷に跋扈して驕傲なる頃ほひなりしかば權貴の門に走る神祇の官人等其佞媚の心を以て其實を漫りたる者なりとぞ所思る然れど斯在る事を今論云むは大神に對て甚無禮く畏く罪去り所無き心ちの爲めれど如此予をして令論給ふは即大神の御心ならむも知べからず然るは武甕槌神經津主神は荒振不伏神を罰平給へる御功を以て無窮に帝基を守奉り天兒屋命は取ニ持前事一爲レ政と有る御德を以て萬世に朝廷を守奉給ふ御神と坐せば君をして君たらしめ臣をして臣たらしめ上下安穩ならむ事守らせ給へば理に違たる事共に神事公事共に愉快くは所思すまじき故有を以てなり　平野祭詞共にも皇大御神等と有るは其誤を受て記るなり但予が今云ふ事は世間の事共の古義に違へるを遺憾(チシミ)て云るにて獨此春日祭耳の事には非ず然此を察む可し

如此仕奉爾依氐今母去前母天皇我朝廷乎平久安久足御世乃茂御世爾齋奉利常石爾堅石爾福閇奉利預而仕奉流處々家々王等卿等乎母平久天皇我朝廷

爾伊加志夜久波叡能如久仕奉利佐加叡志米賜登稱辭竟奉登宜久白　大原野枚岡等祝詞准レ之

如此仕奉爾依氏其祭典を先に云て御祈を後に廻したるにて第二詞に云々皇神等能依左志奉者初穗者云々稱辭竟奉牟など御祈を先に演て祭典を後に係たるの反也（此等を以て古文の妙處を知べき也）○今母去前母今は當今去前は將來を云也續紀宣命に多く見えたり又今母今母と重云るも多在り（今を伊麻と云ふ麻を眼前(マノアタリ)など云ふ麻也然れば言義は在眼(イマ)なるべし去前(ユクサキ)の由久は行字の意なるか在旋(ユク)也俗其伊にも由にて現在の意有也）○天皇我朝廷は大祓詞後釋に天皇朝廷は須賣良我美加度と訓べし同詞にも天皇我朝廷鎭御魂齋戶祭詞に皇良我朝廷をなど見え又續紀の詔に天皇大御命天皇羅我命など有例を以知べし如此云るぞ古言なると云れたるが如し（縣居翁の須賣良と耳ふは古からぬ如云れつる事も有れど萬葉二十にも須米良美久佐と有なども古く聞ゆるをや）天皇を須賣と申す事は天下を統御す由也其說上に出（卷一第一詞の下に云り記傳十六に云く天皇の字を須賣良美許登に當奉しも其上代よりの事と聞えたり若は仁德天皇などの御世に和邇などの如き博士の定奉りしにや有む然るは漢國孔丘の春秋に彼酋長を天王と書るなどに本就て皇に天ノ字をは冠(ソヘ)奉けるなる可し彼國にても唐高宗の時に天皇と云號を新に立たりし事有りしかども未徹らざりしをたゞ我天皇の御號ぞ眞の理に協て天地の際限り竪にも橫にも行通り足はして動く事無く易る事無く允當れる大御號には有ける○今云天皇の字を當られたるは彼國の古傳に天皇氏地皇氏人皇氏と云る三皇有り我天神御子は彼酋長等の比に非れば其王等の尊號を用させ給ふましければ天皇氏より取れる事決し谷川氏の通證に唐書高宗紀日帝稱二天皇一后稱二天后一或以爲三天皇之稱據二之也然推古天皇御紀賜二隋主一書既曰二東天皇一則疑高宗反傚二于我一也と云るぞ謂れたる）美加度は嚴處の義也朝廷と作るは其に當る正字御門と記るは言の同きに依て借れる也萬葉集一卷藤原宮御井歌に埴安乃堤上爾大御門始賜夫と詠るは此朝廷の借字にて御門を云るならず日經乃大御門日橫乃大御門背反乃大御門と詠る此三は御門の正字に當れるにて朝廷の義に非ず美加の言の上に有と加度の言の下に有と合て語を爲せる事は異ながら美加度と唱る上よりは此も彼も同事なる故に混れて美加度は御門を云ふ事と思來れ其然らず朝廷の美加の例は神名に甕速日神武甕槌神など申し甕栗甕瀦甕蜂など物名にも多く有る美加にて決て畏く稜威々々しき形狀を云ふ言なるが此語を冠らせて嚴處とも云す所以は天照坐日大御神の天統を傳させ給ひて天地の共變易る事無く終古に動坐ず天下を經綸させ給へば其御憲に因准り違背奉るまじく其御分に歸順て仕奉る可き道はた天地の共窮無き大義有る事なれば其由を以て誰が云初ると無く提縮ひ恐惶て申し習はしたる語なりけり實に天皇の御事を神等と申せども尊て天神御子とも天津日高とも虛

空津日高とも奉稱給ひ人世となりては現御神とも現人神とも遠津神とも尊み來れる古よりの風俗なれば嚴處と畏み申せる事甚美好き御事なり又神社には伊勢大御神宮に限て神朝廷と申せり其事古事記（日代宮段）に所見たり是を以て見れば天皇命の御上は何事も天宮の准據せ給ふ例なるに依て思ふに天宮の稱を用させ給ひ來るなりけり其は御鎮座本緣伊勢の五十鈴宮御鎮座の所に皇大神倭姫命乃御夢爾喩給久我高天原爾坐底戸押張原如見見志眞佐志國宮所波是也鎮理定理坐給止覺給支と有を併考べし（因に云ふ公式令に東宮皇太子を殿下を云ふ事有り此は漢土にて秦漢以來人の名の下に從て敬云ふ詞なるが此方にも其を用させ給へるが後には何殿某殿と云ふ事に定れるが職原鈔百寮訓要抄に云る如く禁中にて殿と稱すは關白に限れる事なりしが廣く成るなり世間の物識の常云ふ云に關白は天下第一人なるが故に殿を以稱し君上は天下に比類無く尊く御在るが故に御門と稱すと云るは其殿と云ふ事の漢籍に出たる事迄に深く考ざる僻說（ミタリゴト）なり）萬葉三（十丁）二に皇者神二四座者天雲之雷之上爾廬爲流鴨と詠るが如く眞に現人神にて御在し坐す御事をも打忘れて直に指て神と稱奉る古人の常なれば嚴處と申て仰敬奉けるぞ諸なりける（古書に天子（ミカド）と記るは直に天皇を指し朝廷また朝と記るは大宮の惣（スヘテ）を指し天下に對ては國家（ミカド）を云ひ外蕃に對ては我朝と云ふ如く廣くも狹くも用ふる語なり然れども大宮の唱なるぞ本なりける）○足御世は第三第七詞共に手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾云々と有るに對て見れば手長御世に當れる語なりけるに就て尙熟思へば彼は足御世と長御世と二合せるにて（手長の手は足の義なる由鈴屋翁の說を引て第三詞の下に云るが如し）此は直に足御世と云るなり御世に足と云ふ事の冠れるに深く心を留めて思ふに神武天皇御紀に又聞於鹽土老翁曰東有美地青山四周其中亦有乘天磐船飛降者余謂彼地必當足以恢弘天業光宅天下蓋六合之中心乎と有る足にて天業を恢弘て天下を光宅す皇威の至り及ぶを云ふ言なりけり偖足は具足る言なるが其具足ふ事は平均にして過不及の偏倚たる所無きの謂なり故古事記には神倭伊波禮毘古命與其伊呂兄五瀨命二柱坐高千穗宮而議云坐何地者平聞看天下之政猶思東行と有る平字は上なる足字に對たるを思ふ可し記傳に此の平は安くと云むが如し偖其は難きの反にて何地に坐は天下は治易からむと云ふ意なり云々と說れたれど平は安なりと云はゞ平と云ひ安と云ふ語の所詮無る可し平にも安にも各自の義有るに依てこそ言靈の幸ふ神驗も有べけれ且此議は高千穗宮に天降坐て初國知看し天皇より御三代の間此西偏に在して天業を恢弘給はせざりし故に遼邈なる地は未王澤に霑ざるに由て六合の

中心の美地に幸行て天威を振ひ天統を輝して八紘を治め大に元元を鎮させ給はむとの大御意なる事紀記の文を對考て知べきなり然れば平は足廣にて唯安然たるの謂ならず大に恢弘るを云ふなり（亂を治るを平ぐと云ふも然にて其亂れたる所即偏倚たるなれば其を治めて均しく爲るを云ふ事丸當る言なり）足は其平均にして闕缺る事無く大に徹達る由なり天皇の皇威の遍くして天下に光宅す即其足御世と云ふ者なり所以に古の天皇命等の大御名に日本足彥國押人天皇大足彥天皇稚足彥天皇足仲彥天皇と稱奉るも天業を恢弘給ひ天下に光宅給ふ御德を稱奉れるなり（倘古く大高本乘根王なと有る亜は足根は主にて大高本の地を主領を美稱へて足根と申せるなど考合す可し）萬葉二一四十丁に天地日月與共滿將行神乃御面跡九三四十丁に望月之滿有面輪二と有て面の足と云は不足處無く具り整るを云ふと心得て事も無けど猶滿將行と云も漸次に具足ふ由又望月之滿有面輪二と云るは漸不具なるより次に具足ふ由なれば生々として息む事無く物の滿足ひ行を謂なり然れば足とは至り徹り及ぶを以て物も成り事も就ふを云ふなりけり（萬葉二卷に大王乃御壽者長久天足有るは天智天皇の御不豫の時に大后の詠せ給へる御歌なるが天皇の御壽は長く天地に足はし坐りとの意にて足極るを云ふには非ず足調を天足とは謠へる也）○茂御世は御世の動無きを云ふ事也茂は大殿祭詞に五十橿に作り齋內親王奉入詞に茂桙と有を舒明天皇御紀に嚴矛と作き皇極天皇の大御名を天豐財重日足姬天皇と申す重日また續紀の宣命に重美と云ふ言の多かるなど此彼考合せて說べき也（萬葉集中に重石を伊加利と訓るも此例なり和名抄船部に碇四聲字苑云海中以レ石駐レ舟曰レ碇和名伊加利と有は此也）如此く古書に茂また嚴また重字を當たるに何の字が相應へると云に重字ぞ允に熟く當れりける重石を伊加利と訓るも石の重きを以て船の漂流を靜め止むる義なれば此に例して茂御世は動無き御世の義ならむと所思る也然るは第三詞第七詞の如き手長御世の長御世と堅磐の如く常磐の如く齋奉て茂御世に幸給へと申す事にて其に堅磐常磐と云るは茂御世を云む序なるに此詞も其如くにて足御世乃茂御世爾齋奉利常石爾堅石爾福閇奉利と云る狀こそ少の異は有けれ同意同事にて常石堅石の語を茂御世に係たるを思ふ可きなり（然れば伊加志に重字に允に能く當れるなり）然れば重は物の重累り厚く沈く茂く嚴しき意を兼たる言になむ有ける俗言に物の數の多きをも物の體の大きなるをも伊加伊と云ふは伊加志を伊加伎と活用かせてそれより轉れる者なり（此に就て思へば嚴矛と云ふは當矛に對たる語也けり當矛は其穗先の平にして然も廣きを云ひ嚴矛には凡ての重く太きを

云ふ稱ふるが此は嚴櫃矛と云ふ事にて今云ふ棒と云ふ者なる事委しく考得て齋内親王奉入詞の下に云ふ可し是を以看れば足御世は皇威の天下に彌綸て平なるを云ひ茂御世は朝憲の天下に布行れて靜なるを云ふ事にて先には足御世は繁榮の由茂御世は茂盛する事と思へりしがども今思へば其は甚不足なる說にて皇御孫命の所知行す天下の悉く靜謐豊饒ならむ事を申させ給へるにぞ有ける天皇我朝廷乎足御世乃茂御世と連たるは天下の靜謐豊饒なる其即朝廷の御榮なればなり此に天下公民の事を盡せる故に次には預而奉仕流王等卿等乎毛と云り獨王卿耳の事を云て顯見蒼生を豈殘す事の有むやも王等卿等と云て天下公民を擧ざるは足御世乃榮御世と指す者其即天下公民の上の事なればなり先には此を天皇御一己の御事と見誤つる故に其御一己の事を天下に及し給ふ義なるが故に天下公民の事は聞え上させ給はざる事と思しは大に誤れりけり此足御世乃茂御世は天下公民の上の事なる由を今日考悟て前日の非を改る事甚辱く貴くなむ有ける因に云神嘗祭詞に御壽乎手長乃御壽止湯津如磐村常磐堅磐爾云々と有は天皇御一己の御事なるが故に其下に阿禮坐皇子乎毛惠給比百官人等天下四方國乃百姓爾至萬天長平久云々と天下公民の事を別に云り能校合して知る可き者也　○常石爾堅石爾福閇奉利の注は上に出、卷一第三詞を見る可し但古文には堅石爾常石と續るを今京以來は此詞の如くに成れり

○預而奉仕流は關白を云ふと見ゆ然らざれば王等卿等は天皇の子なり臣なり預と云ふ事理に叶はず然らば預而奉仕る人を何人とか爲む但公卿補任に元慶四年十二月攝政太政大臣藤原基經改二攝政一爲二關白一と有て三代實錄も此に同じければ春日祭の始れる貞觀の頃に後に出來む關白を知て詞に述べくも非れば然らじかと思て此考は棄たれど其は非りけり譬ひ關白の職は當昔無らむに在れ己に忠仁公より天下の政を攝し給ひて藤氏一家の業と成れゝは預而奉仕流と云ふ可き勢なり能々其時世を思ひ察む可き者なり　職原抄に關白は關二白一萬機一之由也と記されたる如く天皇の御手に代奉り天下を管領し萬機を關白す職に御在す耳ならす此春日大神の第三殿に坐す天兒屋命の神統と有る藤原氏なるが故に殊更に此事を申さする事と聞ゆ百寮訓要抄に攝政は藤氏の長者第一の人是に補す云々天子幼く渡らせ給ふ時政を預りて攝行するなり又關白は藤氏の長者にて代々昔より家に管領し來るなり云々攝政關白を殿下と號し殿と申すも天下に於ては傍若無人の間衆庶此を貴て申也と有り　○處々家々王等卿等乎毋平久の處々家々には京中の事を云り此は大祓詞又續紀の宣命などに親王諸王諸臣百官人等など並云るを約めたるなり但處々家々にて其百官人の皆を云ふ事を能く聞せたり處々とは京中の坊々(マチ〳〵)を云ひ家とは其一構有を云ふなり舍宅とは殊なり　王等は意富伎美多知と訓べし鈴屋大人の說の如く古に意富伎美と申すは天皇を始奉りて皇子諸王迄に通れる名なり然るに後に親王と云ふ號の出來ては親王を美古と申すに對へて諸王を意富伎美と云別つ事とは成にたれど尙親王諸王を合せて呼ふ時は美古多知と云ひ意富伎美多知とは稱りしなり此も其にて親王諸王を摠たる者なり此の王等卿等に同じきは推古天皇御紀に諸王諸臣と並擧たる有り此も皇子等を始て宮々の人等をも皆摠たるなり此事委しくは記傳四十の三十一丁に云れたり披見る可し

卿等は麻弊都岐美と訓む可きなり天皇の御前に侍ひて事執申す由なり大臣を於保伊麻宇知岐美と云るも麻弊都岐美より轉れるなり然は此の卿等も大臣以上の人等耳を云るならむと思ふに然らず朝廷の諸官人を摠云ふに其主々しき方を抽出て其他を思はせたる簡古なる古文の法なり考に處々は官省寮司衞府京國職廳を皆云ひ家とは王卿百官の家々なりと云れたるぞ然る言なる（此にて卿等の事甚分明に知らる）○天皇我朝廷爾伊加志夜久波叡能如久仕奉の伊加志は上なる茂御世の茂とは同言にして別意なる可し然れば大殿祭詞に五十橿御世と記る五十橿は其には假字にて用無きを此の伊加志には正しく當れる字なり（言の同しきを以て思ひ混ふる事勿れ下に委く云り）此は五十橿と八桑枝と二物を譬に取れるが其又由無き物を借に非ず抑橿木はしも上古より賢木と云來る者なるが決て榮ゆる美き木なるが故に神武天皇の畝火橿原宮に初國所知食しも偶然とは云ふ可からず崇神天皇の大御世に天照大御神を倭笠縫邑に遷奉りて嚴橿之本宮と稱奉給ひ垂仁天皇の御世には甜白檮之前なる葉廣熊白檮を御誓に用給ひ倭建命は命の全けむ人は疊薦平群山の隱白檮が葉を髻華に挿せ其子」と歌はせ給ひ應神天皇の御世には吉野の白檮生に大御酒を介釀給ひて熟に聞食給ひ雄略天皇は御室の嚴橿が本橿が本齋々しき哉（カモ）と謠はせ給ひ倘日下部の此方の山と疊薦平群山と此方々々の山の峽に立榮ゆる葉廣熊白檮と詠せさせ給へるも由有て祝事は更なり神事にも專と此物を用ひ來るが故なり（此は唯其事を一二擧ゐる耳なり本書に引合せて其趣を知る可し）夜久波叡は中臣壽詞に八桑枝乃立榮令仕奉云々と有る八桑枝乃は如八桑枝と云ふ事なるが此も又神世に殊なる由有る木にて神代紀に稚産靈神頭上生蠶與桑と有る稚産靈神は保食神と御父子の間に（實イ）て紛れたるにて實は今一の傳に保食神云々眉上生繭（蠶イ）と有る傳正しきは此には桑を脱せれど必繭と桑と相離るまじき理なれば保食神の身より成れる物なり然るに神名秘書に引る機殿儀式に皇大神御坐高天原之昔云々殖桑葉於天香山と有を以知べし若て此木は葉に用多き木なるが其枝葉の茂盛する事他木の比に非れば此を譬に取れるは所謂有る事也（考に彌久波叡は彌木榮なり彌か上に木の生榮るを林とも波叡とも云遠江入の木草の孫枝の生茂れるを夜其波叡と云も是なりと云れたるを信はれて記傳十一八河江比賣神名も此と同にやと云れたれと共に誤れり上なるを橿と見る時は此も桑にて甚能く聞ゆるをや）○佐加叡志米賜登は介榮給なり雄略天皇の大御歌に許知恭知能夜麻能

賀比爾多知邪加由流波毘呂久麻加斯と賦せ給へるに此は能似たり五十槅及八桑枝の如く立榮え仕奉らしめ給へとなり然れは此は唯繁榮の由耳には非ず宮仕の事を云るにて大殿祭詞に宮進米進宮勤勤之米氐云々と有を云ふ也古事記高津宮段の大御歌に宇知和多須夜賀波延那須岐伊理麻韋久禮と有も打渡す八桑枝如す來入參來れにて朝に參る人の事を賦せ給へるなり（此御歌は大后の山城に徃坐て奴理能美が家に居坐す程天皇の幸行て賦せ給へるが其前文に奴理能美が蠶蟲の事有を以て八桑枝なる事を察むべし）〇稱辭竟奉久登白は上に出〇大原野は山城國乙訓郡に在り此御社の事は二十二社注式に舊記曰仁壽元年二月二日乙卯依二太皇大后御祈一山城國葛野郡大原野仁宮柱廣知春冬乃御祭加賜と有は然も有べし公事根源にも此神社は后宮の參らせ給はむ爲春日の本社遠きに依て都近き所に遷奉らると有（同書吉田社の條に引る御堂關白御書曰奈良京時春日社長岡京時大原野平安城之今吉田社占二帝都之咫尺一有神祠之鎭護と有るは違へるに似たり此事公事根源にも有ども信難し此は后宮の參らせ給はむ爲に京近く祀給へるにて長岡の京に由無し尚吉田社の次に云ふを見るべし其下に云へる如く長岡京時大原野の七字は後人の挽入疑無き者也）文德天皇實錄に仁壽元年二月二日別制二大原野祭儀一准二梅宮祭一と見えたるは其事なり江次第大原野祭の旁注に大原野祭仁壽元年二月二日右大臣宣二據春日式一以二平野梅宮祭式一彌縫而行レ之と見ゆ（但太皇大后の御祈の事を記されざるは其元は太皇大后の思し立給へるにも爲よ京都近く移し祀れて朝廷の守神と爲し給ひ其御祭事も何も總て公より行せさせ給へば表立（オシタチ）て記されざるなる可し公事根源大原野祭條にこの神社は后宮の參らせ給はむ爲春日の本社遠きに依て都近き所に遷奉らる然れば大原野の行啓など申す事の侍るにやと記されたるは此注式に載る舊記に依られたるにや此舊記は藤原氏の家記なる可し其欲（ユカ）しき書なり）三代實錄に貞觀七年四月十七日丁卯敕奉レ充二諸明神神田一云々大原野神五段並以二山城國愛宕紀伊乙訓葛野郡得度除田一充レ之は祭神料を奉られたる成可し（此に云々と記せる文は松尾神五段賀茂御祖五段別雷神五段稻荷神三段平野神五段と有を云り）二十二社注式に人皇六十二代村上天皇治十九年康保二年乙丑霖雨經レ月九天覆レ雲依レ之閏八月廿一日被レ奉レ獻二官幣於十六社一止雨と有て春日の次大神の上に列り給へり（十六社とは伊勢石淸水賀茂下上松尾平野稻荷春日大原野大神石上大和廣瀨龍田住吉丹生木船等なり以上十七社なれども賀茂は下上を合て一社と計入たるなり）此所謂二十二社の權輿なるが後漸く後朱雀天皇長曆三年に至て二十二社の員數定りて上七社中七社下八社と分られたるにも中七社の首に坐給へり（上七社とは伊勢石淸水賀茂松尾平野稻荷春日等なり中七社とは大原大神石上大和廣瀨龍田住吉等を云ひ下八社とは日吉梅宮吉田廣田祇園北野丹生木船等合せて二十二社なる者なり）第六十八代後一條院治十四年長元三年二月廿日預二祈年月次新嘗祭一四度幣と見えたり然れ共公の御崇信他に殊に度らせ給ひて貞觀儀式にも春日祭の次に大原野祭儀を載られて萬事春日社に大綱（オサ〳〵）異る事無く四時祭

式にも大原野神四座祭右料物同春日祭春二月上卯冬十一月中子日祭レ之と見えたり內藏式に大原野祭五色帛各二丈四尺絲四絇曝布四端安藝木綿大八斤麻小八斤褁幣料商布二段一丈七尺付木四枚朋櫃二合如筥形韧並官物〃使儲幣五色絹各一疋五尺安藝木綿大一斤麻小一斤付木二枝紙三十張巾料洗布一丈三尺寮物使寮允一人史生一人近衛將監一人近衛十八馬寮允一人騎士二人御馬十疋使等裝束使寮官當色一具寮物絹三疋綿六屯細布五端史生當色一具絹一疋綿二屯曝布一端賚レ幣仕丁商布一段幷官物賚ニ儲幣ニ仕丁衫料商布一段寮物女使料絹一疋緋絹一疋纁絹二疋調綿百屯已上內侍料調綿三十屯闈司女史女孺各十屯並用ニ寮物ー右春二月上卯冬十一月中子祭之其日祿料交易商布春五百段冬一百段と見えたり大原野祭の較畧如此し二月上卯日に祭る事は上に引る文徳天皇實錄に仁壽元年二月二日別制ニ大原野祭儀ーと有る二月二日乙卯なれば其を用らるゝなる可し斯在は其勸請の日の支を取て其祭の當日とは定られけるなる可し然れば十一月も中卯日に定らる可きを其日は新嘗なるが故に上に及して中子日とは爲られたる者ならし儀式に十一月子日祭若子有三月中子有二月用ニ下子ーと見えたり儀式に大原野祭儀祭日平且所司供張如レ常神祇官人率ニ物忌等ー裝ニ束神殿ー大臣以下就ニ外院座ー神殿南垣之外外候之殿西向設ニ大臣座ー西北相對設ニ五位已上座ー幣帛使並近衛將監等同就北座下中宮職供酒食女御內侍及女官供給若不レ立中宮氏宗公卿設レ之藤原氏六位已下次第就座著到著到之座設ニ五位已上座西ー也東面北上飲食之時亦同預出ニ筆硯ー合辨官々掌設幣帛使及內侍參進幣帛置御垣外棚候內侍命婦入レ自ニ南方西門ー就座幣帛使賚ニ幣帛ー參入奉レ置ニ瑞垣前棚ー兩段再拜退出謂ニ內裏並中宮東宮幣帛ー次氏人並諸家使各執ニ幣帛ー參入奉レ置ニ幣棚ー再拜如レ前次神部四人進執ニ內藏寮幣四褁ー參入令レ取ニ物忌ー奉レ納ニ於神殿ー退出神部更執ニ食薦四枚ー奉レ敷ニ神殿前ー退出次氏人大夫已下舁ニ神饌机ー依レ次陳列東首殿次神部舁ニ酒樽ー參入立ニ諸殿前ー社釀一樽立ニ一二殿間ー一樽立ニ三河殿間ー與レ机相配所司酒四缶立ニ四重ー訖大夫已下退出復出就ニ外院座ー次內侍已下參入開ニ饌蓋ー次酌レ酒賚レ之殿別二杯一坏一宮酒一坏社釀酒退出就神殿前並內座北面東上次大臣以下及朝使氏人入就座北面東上重行次神馬四疋走馬八疋牽ニ列神殿前ー近衛將監馬寮允前行次神主著ニ木綿鬘ー就祝詞座南段再拜拍手四段訖名就ニ直會殿座ー次神部散幣次馬寮牽ニ神馬ー廻レ社八度訖賜ニ頭並織人神酒ー訖退出次近衛少將率ニ近衛等ー入而東僻次大臣喚ニ召使ー二聲召使稱唯出レ自ニ南方ー進ニ北向ー而立大臣宣喚ニ宮內省ー召使稱唯東南去二許丈喚レ之二聲丞稱唯趍立召使立處大臣宣御飯早速令レ賜丞稱唯差退喚ニ膳部ー二聲膳部五六人共稱唯丞仰云御飯賜レ之膳部共稱唯大膳屬以下共起依次分頭賜レ之訖大膳屬立省丞立處中云御飯賜

訖午時他氏五位以上入就座（隨喚而入）神祇祐（若無祐則喚史代之）喚琴師名二人共稱唯次喚笛工名二人共稱唯祐命云琴笛相和（詞云美許止仁布江安波世）四人共稱唯先吹笛一成次調琴聲次歌人發聲（先神祇後雅樂）次神主和儛次祐一人次氏人五位以上二人次六位二人觴三行拍手一段訖內侍候院給五位已上食（中宮職准此）又外記執五位以上六位以下見參文進大臣大臣覽了返給之外記復座即以六位以下見參文付官史是間官掌率使部等積祿物於案上了昇出庭中史出就賜祿座唱氏人名賜之訖大臣以下起於馬場令騎御馬內侍臨檻と見えたり春日祭儀と大較同じき中に齋女の事の無き耳にて其餘は格別の異無き事卷首に引る春日祭儀に計較て知る可き也（三代實錄に貞觀八年十一月廿五日丙申詔以藤原朝臣須惠子爲春日幷大原野神齋と有を以見れば一人にて兩社の齋女を兼たるなりけり尚此卷の首に委しく云り）江家次第に大原野祭先着行事座（所司弁南面外記史東面官掌召使北面）居膳（所司弁居宮）上卿參入弁並外記史出立舍前（東面）相揖着着到處（先上卿次弁入自舍北〈辨侍褰幔〉着南面）次氏人院別當等同着座坐定弁申上卿云（乍座申）居所掌定女給牟上卿諾弁稱唯召院別當（只召其名）別當稱唯弁仰云所掌奉仕別當稱唯畢一獻（宮司勸盃）弁參進上卿前（跪）笏受坏復座飲畢轉氏人次卜串（或二獻後有此事）弁仰史令敷座（着座下）次神官參着卜畢神官退並撤座次外記進卜串上覽畢退（氏人中下祝師等也外記可令仰知）二獻（汁）三獻畢弁披奢申上卿云某朝臣某朝臣遂以錄事奉仕牟上卿諾弁稱唯仰云某朝臣某朝臣各以稱唯即仰云錄事奉仕（禮）各又稱唯着到事院別當申云氏人着到奉仕（禮）留正六位某司藤原朝臣某辨（カズトリ）結取天云六位乃上階某司政藤原朝臣某申（歟）別當稱唯辨申上卿云着到奉仕氏人某司政藤原某上卿諾稱唯和舞辨申上卿云和舞定給牟上卿諾辨稱唯召院別當名別當稱唯仰云和舞可奉仕支六乃位下定申世別當申云和舞可奉仕六位某司政某申歟又辨申上卿云某朝臣某朝臣和舞令奉仕牟上卿諾辨稱唯仰云某朝臣某朝臣和舞奉仕禮各以稱唯代官外記申代官申畢氏人等先起座次辨起座次上卿起座次於鳥井下洗下昇御棚次着庭中座奉幣（官幷弘或內侍下之後奉幣）內侍下歸畢次祝師着座祝詞畢拍手次着直會殿（東方）（昇入自廻）御馬（八度）所司羞膳三獻（但無傳盃）次上卿召召使仰云宮內司召世即省丞參入上卿仰云飯堅給大膳（參入申）堅給畢之由次和舞（雅樂發音舞畢）次外記進見參上卿給辨（辨作居座給之）辨下史（自史來辨給之）次給祿各以退出皇宮不被祭之時不居饌於着到殿又不仰祿事自餘如前着到殿作法

后不祭時座定先所掌次卜串次着到次和舞と見えたり上に引る儀式に較合せて其沿革せる趣を知る可し○枚岡の御事は委上に云り○次に吉田の御社の御事を申す可し二十二社注式に云く吉田社山城國愛宕郡式外祭神四座神名同二春日社一鎭座年紀不分明或云人皇五十六代清和天皇貞觀年中鎭座中納言山蔭卿始奉レ渡レ之勸請云々公事根源にも然る由見え江次第裏書又大鏡裏書共に元者山蔭中納言一家所祭也と見えたれども百練抄に氏三社春日大原野吉田と見ゆ然ば一條天皇永延元年に官幣を奠られし當昔より既く藤原氏の氏社と爲て春日大原野に並祠られしなり大鏡に春日明神を振奉りて大原野と申云々猶も近く振奉りて吉田と申て御在し坐すめり此吉田明神は山蔭の中納言の振奉給へるぞかしと見え同書裏書に藤氏社事鹿島社云々春日社云々大原野云々吉田社平安帝都之時祝レ之一條院御宇永延元年四月始二吉田祭一と見えたり百練抄に氏三社と云るに思合て知べし伊呂波字類抄に吉田社以レ榊爲二正體一と有は神籬の制を用らるゝなる可くや山蔭中納言は公卿補任に依に參議從四位下藤原藤嗣孫越前守從五位上高房二男母從二位眞夏女仁和二年六月叙二從三位一仕二中納言一同三年五月十一日兼民部卿仁和四年二月四日薨と有り然れば貞觀の頃は末下臈にて在しなり偖此社は右の如く山蔭中納言一家の鎭守と崇られし者なる事上に引る文共にて明なり宣胤卿記に御堂殿御書案奈良京之昔者以二春日社一爲二氏社一平安城之今者以二吉田社一爲二氏社一隨二社頭之興廢一宜レ測二藤門之榮衰一者一天安全四海平定殊可レ抽二當氏繁昌之祈禱一愼レ之莫レ怠矣長和元年十一月十八日云々と見ゆ上大原野社條に引る二十二社注式に載る所の御堂關白御書と云ふ物は此を採出て長岡京時大原野と云ふ七字を情進サカシラに加つる者なる可し此事上に委けたるか如し公事根源吉田祭條に云る所は此宣胤卿記に據たるか長岡の京の時は大原野と記させ給へり今此を思ふに御堂殿の書に然有しるを宣胤卿の異ならす所思て省かれたるなる可きを公事根源は何の事も無く本の任に記されしなる可きか此社の所在は山城名勝志三十に社家說云當社元坐二吉田山西一文明中遷二神樂岡麓一舊跡今有二一株松一若宮殿跡在二石像彌勒堂東南一と云り神樂岡とは吉田山の邊なり卜部氏家說に神樂岡神裂雷神也昔此岡與二高野山一爲二一山一雷裂開爲二二故吉田地主本是雷神也云々日神居二天岩戸一時奏二神樂一其處所爲レ山故曰二神樂岡一と云るは風土記などに有し成可し天山天香山の故事に似たる作なから僞には非す公事根源に一條院永延元年より始て官幣を奉らせ給ふと見え廿二社注式にも人皇六十六代一條院永延元年十一月廿五日甲申今年始二祭禮一依二誓願一爲二公家御沙汰一云々歷代編年集成及帝王編年記等にも永延元年公家始有二吉田祭事一元山蔭一族所祭也と見えたるは官社に定られたるの權輿なり日本紀略に一條院寬和二年十二月朔日詔以二吉田社一准二大原野行二二季祭一を以知べし但寬和は花山天皇の御世所知し食す年號にて寬和三年改元有て一條天皇の永延元年と成れ

れば二年（は三年の誤なる可し玉葉集に吉田社を詠る歌に天皇も賴む宮居と爲（ナリ）にけり唯山蔭の名殘計りにと有も此時まで山蔭中納言の鎭守なりし官社と成れる由を詠るなり）同天皇の御世に十九社の員數に列り給へり二十二社注式に第六十六代一條院治五年正曆二辛卯炎天送レ日萬物變レ色依之六月廿四日祈雨奉幣時加ニ吉田廣田北野以上三社一被レ奉レ獻ニ官幣一爲十九社吉田廣田北野次第事可レ爲ニ住吉次丹生之上一由宣下と有は村上天皇康保二年に官幣を奉られたる十六社に今度三社加給へるなり（十六社の事は上に大原野の條に記せり此にては伊勢石淸水賀茂松尾平野稻荷春日大原野大神石上大和廣瀨龍田住吉吉田廣田北野丹生貴布禰と云ふ順なり）同五年に梅宮を加られたる下に梅宮事可レ爲ニ吉田之上住吉之次一由宣下と有て後に二十二社に定れる其下八社の一員なり（上に已に云り立復て大原野の下見る可し）諸社根元記に堀川院長治三年官符預四度幣祭（四月中子日十一月中申日）と有れ共四月十一月の祭は永延元年に始れゝば四度幣は祈年六月十二月々次新嘗等の祭に預給ふを云なり（但此文二十二社注式にも載るを嘉承元年の事と爲り長治三年改元有て嘉承と替れゝは同事なり）注式に第九十九代後光嚴院治九年延文五年六月卅日正一位使藤氏五位一人幣四前と有は始て神社を奉られしなり但大原社も同じく春日より移せるに神位の事無きは春日に准らるゝ故なるを此社は大原野社に准られたる故に態と神位の事有し者なり（此神位の事は諸社根元記にも見ゆ）

延喜式祝詞講義六之卷

嘉永二年閏四月廿一日

淡路國　鈴木重胤　著

出羽國　廣瀨嚴雄

同國　松山紀民　校

○廣瀨大忌祭

神名式に大和國廣瀨郡廣瀨坐和加宇加賣命神社（名神大月次新嘗）と有る御社此なり天武天皇御紀に四年四月甲戌朔癸未遣二小紫美濃王小錦下佐伯連廣足一祠二風神于龍田立野一遣二小錦中間人蓋大山中曾禰連韓（カラフト）太一祭二大忌神於廣瀨河曲一と有は此社を祠る事の物に見えたる始にて翌五年の御紀に夏四月戊戌朔辛丑祭二龍田風神廣瀨大忌神一秋七月丁卯朔壬午祭二龍田風神廣瀨大忌神一と有は例年四月四日に此神を祭らるゝ起元と聞えたれば前年四月に龍田廣瀨神は祀始給へる如く所思ゆれど然らず此兩社の鎮坐は諦しく崇神天皇九年四月なる事次に考證せるが如し（龍田廣瀨兩社は祭も何も同日にて此兩神は殊に御由緣御在す所以有て次々述るが如し大忌神と申す事は下に委しく云り但七月丁卯朔壬午は十六日なり若くは崇神天皇九年四月に大坂墨坂神を祭られしは甲午朔己酉にて十六日なりし例を用られたらむも知る可からず）然るは古事記水垣宮殿に御二伊迦賀色許男命一作二天之八十毘羅訶一定二奉天神地祇之社一又於二宇陀墨坂神一祭二赤色楯矛一又於二大坂神一祭二黑色楯矛一又於二坂之御尾神及河瀨神一悉無二遺忘一以奉二幣帛一也と見えたるに御紀に九年春三月甲子朔戊寅天皇夢有二神人一誨レ之曰以二赤盾八枚赤矛八竿一祠二墨坂神一亦以二黑盾八枚黑矛八竿一祠二大坂神一四月甲午朔己酉依二夢之敎一祭二墨坂神大坂神一と有を合せて傳二十三卷に大坂神は神名式に大和國葛下郡大坂山口神社（大月次新嘗三代實錄に貞觀元年正月奉レ授二正五位下一）と有る是にて墨坂神は神名式に同國宇陀郡宇太水分神社（大月次新嘗三代實錄に貞觀元年正月奉レ授二正五位下一）と有る社なる可し下に引る龍田風神祭詞に依て思ふに此水垣御世に如此殊に祭給ふ神等は祈年の爲也けむを凡て祈年には山口神水分神を祭給ふ例にて祈年祭又月次祭の祝詞にも殊に山口坐皇神等能前爾白久云々水分坐皇神等能前爾白久云々と並云ると此に大坂神○（大坂山神社）墨坂神（宇太水分神社）と並べて祭給ふを思ふ可し」と云れたるは甚美き考にて此詞に倭國能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾母皇御孫命能宇豆乃幣帛乎明衣照衣和衣荒衣五色物楯戈至萬氐奉と見え四時祭式に大忌祭一座（廣瀨社七月准レ之）云々是日以二御縣六座山口十四座一合祭

其幣物者座別五色薄絁各一尺倭文五寸木綿二兩麻五兩楯鉾一口（料鐵用社分）四座置八座置各一束楯一枚庸布一丈四尺褁葉薦二尺云々と有る如く山口神の此大忌神に屬給ふ所以を以て考れば其主たる大忌神の此御世に祭られ給へる御事を思定む可き者なり此に就て深く考るに已に第八詞の下にも云る如く古事記に又於坂之御尾神及河瀬神無遺忘奉幣帛也と有る坂之御尾神は御縣神河瀬神は大忌神なりと見ゆ何を以河瀬神は大忌神ならむと云に此社の立せ給へる地を廣瀬川合と云る其即河瀬なりし地に祀始たりと所思れば也且此詞に荒風荒水爾不相賜など見え此豊受神の水取の事を掌すなど旁由有ばなり（此事第七詞の下に云れば見合す可し且坂之御尾神の事は第八詞の下に云り）廣瀬社縁起と云ふ書に當社者人皇十代崇神天皇御宇大和國廣瀬郡河合村出現給と記せる社家の傳來は所謂有る眞説なりけり御紀に四月甲午朔己酉依夢之教祭墨坂神大坂神と有る己酉は誤にて丁酉には非るか若然も有らば天武天皇御世より定來る大忌祭の四月四日七月四日なるも由有げなり四時祭式に四月七月に此祭の有る由なるが其は本朝月令四月四日廣瀬龍田祭事條に弘仁式云大忌神

一座（廣瀬社七月准之）風神祭二座（龍田社七月准之）右二社云々又云大忌風神二社者四月七月四日祭之と見ゆ（尚大坂神山口神に楯矛を進られたる例と見えて此詞に楯戈の事を云ひ四時祭式に桙鉾一口楯一枚と有るなど旁由有り）然れは御紀に天皇夢有神人誨之と有は廣瀬神龍田神の御諭言も有けむを御紀には記し漏されなから廣瀬の神の御事は屬神たる大坂神山口神を以考得られ龍田神の御事は諦しく其詞に遺存れる者なり尚次なる風神祭條に引る神祇令集解なる風神祭の釋に廣瀬龍田祭也卿木五穀等風吹而枯壞之此時不知彼神心即天皇齋戒願覺夢中即覺云龍田廣瀬祭二社云々と有は崇神天皇御世の事を云るなり（其は次なる其詞の下に委しく證す可し如此く古書は甚面白き者にて此を以て彼を比挍し彼を以て此を探索るに何れよりか其端を見著る事の有る者なり豈尊き事ならずや）○又天武天皇より以來の御紀を閲るに祭廣瀬龍田神とも祭廣瀬大忌神與龍田風神と毎も有るは其祭禮の同日なる故に合せ記さるゝ耳ならず初て齋奉初られし崇神天皇の御世より何事も同等同事なりし故なり然れば其詞も此彼と相通して思合す可き事少からずと知べし（大坂山口神には廣瀬の屬神なるが夢を以其御祭の事を乞給へるに龍田神の天皇の御夢に其御祭を乞せ給へる事の同じきを合思ふ可し）○大忌神と申は物忌の義なり其は此廣瀬に坐す和加宇加賣命の亦名なるが少意得有べし和加宇加賣命と申す時は衣

賓住の神と申す事にし有を大忌神と申す時は天宮にて皇大御神の御饌神と仕奉始給へる御職の號なる者也其證は豊受宮儀式帳に天照坐皇天神云々大長谷天皇御夢爾誨覺賜久吾高天原坐氐見志麻岐賜志處爾志都麻利坐奴然吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食坐故爾丹波國比治乃眞名井爾坐我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支爾時天皇驚悟賜氐即從丹波國令行幸氐度會乃山田原乃下石根爾宮柱太知立高天原爾比疑高知氐宮定齋奉始支是以御饌殿造奉氐天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と有る文意を詳に悟る可し天照大御神の我御饌都神と詔給へるは我御饌を主る神と申す意なり若て度會宮に鎮定り給へる時に宮中に御饌殿を造奉れるは豊受大神より天照大御神へ朝夕の大御饌殿を奉らせ給はむ料に造奉れる由なり

但豊受大神より大御神に大御饌を奉らせ給ふ事は此大神の甚も清く御在す故由なるを然る事を御身自物爲させ給ふ事は得有まじき事の如く説なすは後世の俗意なり食物を調る事は上古は甚止事無く重き事にて有し故に大殿祭詞には皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒襁懸伴緒乎手躡足躡不令爲氏と先云て次に親王諸王諸臣云々の事を云こ大祓詞にも天皇朝廷爾仕奉留比禮掛伴男手襁掛伴男と先御饌に預る人を云て後に靭負伴男劒佩伴男と云る古義を熟思ふ可し

神宮雜事記にも此事を記して云く雄略天皇即位廿一年丁巳天照坐伊勢大神宮乃御託宣備我食津神波坐丹波國與謝郡眞名井原須卑奉レ迎二彼神一可レ奉レ令レ調備我朝夕御饌物一也云々即依二託宣一豊受神宮之良角造二立御饌殿一朝御饌夕御饌物調備令二捧賓一令レ參二向大神宮一云々と所見たり斯在に聖武天皇神龜六年正月十日御饌物を豊受神宮にて調備て大御神宮に賓參れりけるに浦田山の邊にて不淨ぬ事に行遇たりけるを避去る可き道無りしに依て其所を過り行て供進けるに二月十三日天皇御不豫の事有り此に因て卜食せしめ給へりければ大御神の御祟有る由卜に出たりけるに依て三月十三日に御使を進られ其事を謝申され又大祓の事共有て其後依宣旨卜定豊受神宮新建二立御饌殿一可レ令レ供二奉大神宮朝夕御饌一之由神祇官陰陽寮其卜申既に宮司千上豪二別宣旨一致二不日功一豊受宮外院建二立御饌殿一一宇瑞垣一重一自爾以降於二件殿一供二進朝夕御饌物一令號二御饌殿一是也永停二止賓參之勤一と有も豊受大神の大御神に御饌物を奉らせ給ふ事を徴すに足れり

然るを倭姫命世記を始て外宮の神記共に豊受大神の御鎮座の所に右の儀式帳及雜事記と同旨の事を二所皇大神宮の朝大御饌夕大御饌乎日別齋敬供進之と有る二所の字は後人の心有て加つる者なり其は豊受大神の皇大御神の御饌物を調備て供進せ給ふ事の快からず思ふにて二所皇大神宮とは物爲るなり此二所の二字衍るか故に前文に打合ぬ事の有を如何にとか爲む下に引る儀式帳に二所大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌日別仕奉と有は其職掌の大物忌の事に就たるにて別なり

尚倭姫命世記天照大

御神の御遷幸の所に御間城入彦五十瓊殖天皇即位三十九年遷幸但波乃吉佐宮積四年奉齋從此更倭國求給此歲豐宇介神天降坐奉御饗と見え御鎭座本緣にも此事を和久產巢日神之子豐宇賀能賣命生五穀而善釀酒奉御饗と有るなど怪異しき事の如くなれども必如此き事の諦しく有つる者なる可し（然れば丹後風土記に天女八人降來云々爰天女善爲釀酒飲一盃吉萬病除と云る古事も此時に大神の凡人に化て酒を釀給し事などの有つる也）又皇大神宮儀式帳に供奉朝大御饌夕大御饌行事用物事御贄淸供奉御橋一處（長十丈弘二尺高八尺）石疊一處（方四尺）大神宮正南御門在伊鈴御河當此御門流二俣也此中島爾造奉石疊常造宮使營作奉此止由氣大神乃入坐御座也御橋者度會郡司以黑木造奉三節祭別禁封御橋人度不往還則齋敬供奉十六日夕大御饌十七日朝大御饌爾並御筒作內人造奉御贄机爾忌鍛冶內人造奉御贄小刀乎立弖志摩國神戶百姓供進鮮鮑螺等御贄乎御机上爾備置弖禰宜內人物忌等御贄御前追弖持立弖開封御橋弖參度弖止由氣大神乃御前跪侍弖則御河爾淸奉弖御饌料理畢則如先持弖御贄御前追弖天照皇大神乃大御饌供奉と見えたるは皇大神宮に於も六月九月十二月三時祭には朝夕の大御饌を供進る豐受大神を招請奉て料理奉るなり此即豐受宮儀式帳に天照皇大神の我御饌都神と詔給へる所以なり（又年中行事祕抄及本朝月令に載る高橋氏文に掛畏卷向日代宮御宇大足彦忍代別天皇五十三年癸卯冬十月到于上總國安房浮島宮爾時磐鹿六鴈命從駕仕奉矣天皇行幸於葛飾野令御獵矣大后八坂媛波借宮爾御坐磐鹿六鴈命亦留侍云々即磐鹿六鴈命云々獲堅魚數双云々得八尺白蛤一具獻於大后即大后譽給比悅給弖詔久甚味淸造欲供御食云々是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉天若湯坐連等始祖意富賣布連之子豐日連乎令火鑽天此乎忌火止爲天伊波比由麻閇天供御食幷大八洲爾像天八乎止古八乎止咩定天神嘗大嘗等仕奉始支但云安房大神爲御食神者今大膳職祭神也云々と有る安房大神は予か太元攷に註る如く豐受大神に坐すが其を天皇の御食神と此料理の時に當て招奉れるなり其は此時の詔勅に即歡給比譽給天勅久此者磐鹿六鴈命獨我行波非矣斯天坐神乃行賜倍留物也と有る如く此事を天に坐神の行賜へる事と見庶給へるが故に然有しなり然りとて天皇の常に聞食す御食を豐受大神の奉らせ給ふに非ず其御守の爲に大膳職には齋かせ給へるなり）此豐受大神の亦名和加宇加賣命を大忌神と申す所以は上件の如くにて大忌は大物忌と申すも同事なるが忌とは上にも往々說るが如く忌淸の愼しみ敬ふ由なり（倭姬命世記大御神御遷幸の條に佐々波多門仁童女參相云々即御共從奉仕件童女乎大物忌止定給比天天磐戶乃鑰預贈利弖無黑心一志弖以丹心弖淸潔久齋愼美左物乎不移右右物乎不移左左左右右左返右廻事毛萬事違事奈久志弖大神奉仕元元本本之故也と有な物忌爲る事の嚴密なる事を知り又物忌と云ふ事の意をも察む可き者なりかし）皇大神宮儀式帳に大物忌云々右卜食定補任之日後家之雜罪祓淸齋愼供奉職掌天照大神朝御饌夕御饌供奉云々と見え豐受宮儀式帳にも大物忌云々右人行事卜定任日後家雜罪事祓淨天他人火物不食宮大垣內立忌殿造不歸後家宮侍氏拔穗御田穗乎御炊物忌爾令舂炊氏御鹽燒

燒仕奉留御鹽並志摩國神戶人夫進ニ御贄ー乎土師物忌造備奉雜器爾盛奉氐著ニ明衣ー木綿手次前垂懸氐天押比蒙氐洗手不干之氐二所大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別齋敬仕奉と有は殊に委しき者なり其餘菓物忌と云て兩宮共に多在るも皆大旨同じく齋敬ふ事を云ふなり（但此に二所大神乃云々と有は其仕奉る豐受大神を主と仕奉る事は勿論にて豐受大神の仕奉らせ給ふ御饌殿の供御なるも御手代と爲て仕奉る由なり上に倭姬命世記などに度會宮御遷坐の時の事に二所皇大神宮云々と有とは異なる者なり）但此は共に顯國に鎭給ふ御靈實の御上の事にこそ有れ其天宮にしては殊に此御事の太しく御在すらむ事畏けれ共其を思遣奉るだに正眼に見奉る心ちぞ爲る大御神の御言に吾一所耳坐ば甚苦し大御饌も安く聞食す坐故に我御饌都神等由氣大神を我許欲と天皇に諭申給へる大御命を深く味奉る可きなり神典の趣を一通り見て能く意得る時は此大神は須佐之男神に所殺給へれば御靈耳に坐て顯御身は坐ぬ神の如く誰も思ふ事なれども其は人民の準ひに神祇を強る偏見にて甚不具なる者なり神祇の御靈は人種の身體に於るが如く御靈は本にて身體は却て末なり然れは顯身は所殺坐ども其御靈は斬とも斬れず突ども突れず奇異しく微妙なる神物なるが故に分體を爲て窮る事無く盡る事無く御在せり故神代紀にも古事記にも保食神（亦名大氣都比賣神）は所殺給へる趣なるを攝津風土記には稻倉山昔止與岐可乃賣命居ニ山中ー以盛ㇾ飯因以爲ㇾ名又曰昔豐宇可乃賣神常居ニ稻椋山ー而爲ニ膳廚之處ー後有ㇾ事不ㇾ可ㇾ得ㇾ已遂還ニ於丹波國比遲乃麻奈韋ーと有を思ふ可し然れば右の稻倉山の故事の趣を以考に須佐之男神に所殺給て五穀などの神物を其地に遺給て後又顯身を産巢ばせ給て丹波國には出坐しなりけり（大瀧光憲云く稻倉山は我が出羽國の飽海郡鳥海山に稻倉居と云る名有り後には稻村居と云れる事と成しりとも古老の傳ふる所稻倉居と云て其山の有が中にも奇しき神境なり此は神名式に大物忌神社名神大と有ス神の立せ給へる山なるが倉稻魂命と云り師の考の如くならむには攝津國の稻倉山の名を移せるならむは如何答云然らば鳥海山を今字者に呼ふも本は假字にて鳥海ノ山と書るならむを鳥を鳥に誤れるより其を山中なる湖水の名と心得て鳥海と字せるにて實には大物忌神の在す山なるを以て乎加ノ山と云りしには非るにや稻倉居の名も耳に留りて聞ゆるを以て思ふに神代に其事の有しは若くは此山のならむも知べからぬを其國の風土記などの傳はらぬが故に定めては云難けれど都近き攝津國の方に其故事の傳はりて此には其說を失ひつるなる可し此國中に月山と云ふも有て其は神名式に月山神社名神大と有も月夜見命と通えたるに思合せらるればなり但倉稻魂命は和加宇加賣命を誤れるなる可し平田翁の古史徵には保神と定られたれど強說なり）其より天宮に參上らせ給ひて日朝廷に今も伊勢に並坐が如く大座坐て大御神の萬物造化の靈威を幽賛奉給ひて食物の御靈を施給ひ御食津神と在して御饌物を供御らせ給ひ下土に照臨給ひて顯見蒼生を守惠幸給ふ事決き者なり此大神の天上に在す證は古事

記に登田宇氣神此者坐外官之度相神者也と有て御靈形を天降給へる趣見え儀式帳に皇大神の我一所耳坐波甚苦と仰給へるも天上にても二柱並坐が故なる事云まくも更なるが神樂歌に天爾坐豐遠迦比賣能宮之云々と詠み神名式に土佐國長岡郡豐岡上天神と有も同神と聞ゆる耳ならず神祇本源また元々集にも引れたる天地麗氣記と云ふ書は兩部習合の徒より出たる書なれども中には實事を掇ひて記せる事も多かるが此には豐受大神の淡路國三上岳に天降らせ給ふと云古說の存在るも其國を萬葉集三に御食津國と咏るに合せて虛說に非りけりとは所知また神宮の古書共にも豐受大神の天上より下らせ給ふ事を記せるなど此は捨ても彼は閣き難く彼を妄としても此に實有るを如何に爲む（然れば鈴屋平田二翁共に此神の須佐之男神に殺され給へる故に天上にて其御靈を大御神の祭らせ給ふ由に解れたる說々は神幽の大道を貫きたる大人等とも所思ぬ僻事にて全に信順ふ所無しと知べし）偖天宮にて大御神の大御許に大御饌都神の御德を以て大御饌を奉らせ給ふが故に大物忌神と稱し大忌神と申せるは御職の御號なるが其所以を失ひて知れざりしを幸に神名式なる出羽國飽海郡大物忌神社（名神大）の社說に祭神倉稻魂命と傳たるは御名の樣の同じき故に混たるなれど其祭神は此廣瀨社と同しく若宇賀賣神なる事を徵すに足て甚貴き事也又此山の北麓に象潟と云ふ地有が和漢三才圖會に出羽國由利郡象潟神社祭神豐岡姬命と記せるも旁由有る者なりけり（倉稻魂命は古事記に依に須佐之男神の神大市比賣神に娶て生坐る神なる事委しく卷一第二詞に注るが如し）然れば天照大御神の大物忌として其御饌を供進らせ給ふが故に和加宇加賣命を大物忌神とも大忌神とも申す事決き者なり偖此物忌の御職の號の次々流傳る所以を心得置く可し天照大御神豫て豐受大神の御靈形を天降し給はむの御心坐す故に其素盞嗚神の事有つる後に其罪の贖を兼て其御女宗像三女神をして豐受大神を所祭ら令給へり神代紀一書に以二日神所生三女神一令レ降二於筑前洲一因敎レ之曰汝三神宜下降二居道中一奉レ助二天孫一而爲二天孫一所祭上也と有は皇御孫命の御爲に令祀給へるなり其は大同本記に雄略天皇の御世に大御神の豐受大神を伊勢に迎まく欲す由を御託坐る上に引る豐受宮儀式帳同事の御言に吾高天原爾在時素盞嗚尊乃十握劍乎索取三段打折弖所生三女神乎宇佐島降居道中奉レ助二天孫一而爲二天孫一所祭止詔之須勢理姬乃齋奉禮留神今丹波國與佐乃比沼乃眞魚井坐弖道主王子八乎止女乃齋奉

御饌都神止由居乃神乎吾坐國欲止誨覺給支と有を以て事狀を知へきなり此は幽顯を兼て詔給へる勅言にて三女神は幽より齋せ給ひ丹波道主命の御子八少女は顯に其祭主たるが共に豐受大神を祭給ふ所以を以て物忌とは云り其は御鎭座本緣上代本記共に大御神の丹波の吉佐宮に遷幸し時の文に今歳止由氣之皇大神結幽契天降坐云々如天上之儀一處雙座矣和久產巢日神之子豐宇賀能賣命生五穀而善釀酒奉御饗と有るは然る事ながら止由氣大神と豐宇賀能賣命を別神の如く傳たるは妄なり然れば此は一神の事の書樣に依て二神と通ゆるにぞ有ける但此も豐宇賀能賣神の大忌神たる證なるが次文に御炊神氷沼道主（素盞嗚尊之孫也亦云粟御子神今世號御炊物忌是其緣也）率竈神而朝大御氣夕大御氣乎炊備氏奉御饗留と有る氷沼道主は神代紀一書に前なる同事を即以日神所生三女神者使降居于葦原中國之宇佐島矣今在海北道中號曰道主貴此筑紫水沼君等祭神是也と有る水沼君が祭神なるを以て其名を移して丹波國に氷沼の地名は出來れるに其處に豐受大神の御靈を靜め奉給ひて右の道主貴（亦云三女神）の其大神を祭奉給しを大御神の吉佐宮に幸行るに就て二大神の事を兼て朝夕の大御饌は仕へり此に因て御炊物忌と云ふ御職號は御在るなり（但此は大御神の御饌契有て幸行るに就て豐宇賀賣神は御酒を釀て進給ひしなるが右の三女神も御炊物忌と爲て供御を進獻せ給へるにて人世と雖も神氣盛なる當昔と云ひ殊に倭姬命の奇異しき神減坐すとに依て顯形し給へるにぞ有ける然れども其は一時の御饗にこそ有れ常に必しも然るに非るが故に上に引る大同本記なる御託言には顯と幽とを宣ひ別ちて大御神の御饌は有しなり）次に右の大同本記の御言に道主王子八乎止女乃齋奉と有る道主王は上なる三女神を申す道主貴に非ず古事紀に依て云はゞ開化天皇の皇子と坐す日子坐王娶近淡海之御上祝以伊都玖天之御影神之女息長水依比賣生子丹波比古多多須美知能宇斯王にて崇神天皇十年御紀に丹波道主命遣丹波國と有る此程より丹波に在しゝなり上代本記御鎭座本緣共に右の續きに丹波道主貴（大日々天皇之子彥坐王子也）子（今世號大物忌是其緣也）爲御杖代天品物備貯之百机而奉神嘗焉と有は其氷沼道主神（亦名三女神）の御手代と爲て丹波道主命（亦名丹波道主貴）の御女等品物を百取机に備奉られけるより初て豐受大神に仕奉られし故に大物忌とは申せるなり（大物忌の職號の事は上に委しく云り立復て見る可し）然れは流傳する所右の如く菜物忌と云ふ職號と爲りて種々なりと雖も其淵源はしも誰か有む豐受大神の天宮の御饌都神と坐す御職の由來に起れる事著明き者なり大物忌神と稱

實按日本紀略弘仁十三年授從五位下敍至嘉祥加從五位上也重胤恐缺精考

へ大忌神と申す御名はしも如何に良はしき御名ならずや尚此事は粗巻三第七詞の下にも云り引合せて考ふ可きなり○當社神階の事は文德天皇實錄に嘉祥三年七月丙子朔丙戌大和國若宇賀乃賣神加従五位上と有は神位の物に見えたる初なるが授と記さる可きを加と有れば前に従五位下を授奉給けむを御紀には漏たるなる可し總て神位の事も何も龍田風神に同じければ今是を對考るに其位も同時に従五位上を加られたる趣なるに其前に従五位下の事總て御紀及類聚國史を始て其餘の書にも稽る處無し然れば共に記し漏されしにこそ同錄に仁壽二年七月庚寅大和國若宇賀乃賣命神加従四位下と見えたるは一階進給へるなり龍田神此に同し　又同年十月癸亥朔甲子大和國若宇賀乃命神加従三位又三代實錄に清和天皇貞觀元年正月廿七日奉授大和國従三位廣瀬坐若宇賀乃賣命神正三位と有て此餘は見えず龍田神此に同し但廣瀬社縁起にも貞觀元年正月廿七日奉授正三位と耳有て其外に御位の事を云さるは此後には非ぬにや　○祭の事は上に云る如く崇神天皇九年四月に墨坂神大坂神を初て祭らるゝ時より此廣瀬龍田兩社の御祭は有初つらむを其後は其四月の月中にて何日と云ふ定も無りし故に後れなども爲つるが終には止て過にし年なども有つる故に其よりは唯臨時に行るゝ耳なりしを天武天皇四年に再興爲させ給て其より恒例の神事とは定りける者なる可し但其年は四月甲戌朔癸未云々祠大忌神於廣瀬河曲と御紀に記されたる癸未は十日なるが翌五年四月戊戌朔辛丑に祭られしは四月四日に定られたる權輿なる可きが同年七月丁卯朔壬午に祭られしは七月の祭の始と通えたるに壬午は十六日なり然れば未此時四日と云ふ御定も殆に立ざりしにや但此は崇神天皇九年に大坂墨坂神を祭れしは四月十六日なるを取られたるも知る可からず此事巻首にも委しく已に云りさ　但此は四月七月四日に祭らるゝ起元の知まほ欲さに如此く鑿說るにこそ有けれ同御紀より持統天皇御巻まで讀通るに實に四日と云ふ御定にては無く卜食などにて定られたるに詳ならず考に持統天皇御紀にも毎年四月七月御使有しかど日は定無りし斯て令に常例の祭と成てより後の紀には皆略きて記されずと云れしは然る言なり光仁天皇御紀に寶龜九年六月辛丑奉幣帛於廣瀬龍田二社也爲風雨調和秋稼豐稔と有るは臨時の奉幣にて此祭の例には非ず本朝月令四月四日廣瀬龍田祭事の條に弘仁式云大忌祭一座廣瀬社七月准之風神祭龍田社七月准之右二社云々又云大忌風神二社は四月七月四日祭之と有を思ふに弘仁造式の年に當て定られたりとも見えざるが上に神祇令に常例の御祭例に記されしより後の御紀に記されざるを思へば大寶の御定と通えたり若違例の事共有むには必御紀に記さる可き者なり左經記に長元七年七月三日庚寅大夫史義賢朝臣來云去一日東宮有犬死穢仍俄被停祈請幣使畢又或人云廣瀬龍田祭依内裏穢可延引云々是可然乎奏之尋先例可行歟と見えたり　令義解に大忌祭謂廣瀬龍田二祭

也令下山谷水變成二甘水一浸二潤苗稼一得中其全稔上故有二此祭一也と見えて集解に廣瀬並龍田祭自二山谷一下レ水奕甘水成而爲レ令二五穀成熟祭一也差二五位已上一充使也以上是迄の文本朝月令に或記云と記して擧たり　古記無二別跡一云祈年祭祭二甲神一大忌祭祭二乙神一之類依二別式一也と有るが如此く大忌祭謂廣瀬龍田二祭也と有て大忌神風神祭は二にして一なる者なり其は義解に風神祭謂二亦廣瀬龍田二祭一也欲レ令二沴風不一レ吹稼穡滋登一故有二此祭一也と有て大忌祭に風神祭を兼風神祭に大忌祭を兼たる者なり尙此は龍田祭下にも云はすては通え難き事なるに依て其下にも註す可し考合す可し祈雨祭神八十五座の中にも此廣瀬龍田兩社共に入り公事根源にも廣瀬龍田祭是兩社は大和國に在祭日は廢務なり年に二度行はる使は前日遣つ大忌風神祭と云ふ是なり風水の難を除きて年穀の豊なる事を祈申さるゝにや」と有り廢務の事の有など甚重き神事なり廢務は延曆御記に諸司不レ政止レ音奏二警蹕一坐二清涼殿一云々と有て禁裏の御愼を云ふなり然るに貞觀儀式及江家次第に此式を載られたるは漏たるには非ず違例の事共無ればなり本朝月令に大同新抄云大政官府大和國司應守介一人祗二承廣瀬龍田祭所一事右被二右大臣宣一偁祭祀之事寔德與レ敬苟無二敬心一神豈可レ享今件神祭所下以鎭二𫝸風雨一禱中祈年穀上者也而國司恒事怠慢都無二肅敬一差二遣史生一以宛二祗承一不二報應擧一由レ無レ敬自今以後守介一人齋忌祇承不レ得レ習二常差宛二下吏一若介以上有レ障者聽二掾祇承一者國宜三承知依二件行一延曆十八年六月十五日と見えたる祇承は京より差さるゝ王臣を饗應ふ在國の官人を云なり此に因れは延曆より以前は究て大しき祭なりけむと見ゆ其は此右大臣宣の趣にて其頃旣違例の事共の出來れりしほど知れたり三代實錄に元慶二年七月大和國廣瀬龍田兩社造二立倉各一宇一爲レ納二神寶一と有も其幣帛の佗社に超過て格別也し事と通ゆ此に因て臨時祭式に凡春日廣瀬龍田等社庫鑰匙者納二置官庫一祭使官人臨レ祭請取事畢返納と有り但此は下に記せる官幣を收納らるゝ料なる事云も更なり○幣物の事は四時祭式に大忌祭廣瀬社七月准レ之絁一丈八尺絲二絇綿五兩五色薄絁各一丈五尺倭文一丈三尺調布一端一丈庸布一段一丈四尺木綿二兩麻二斤五兩五兩祭料二斤祓料四座置八座置各一束楯一枚鐵三斤五兩鞍一具米三石酒二石五斗稻十束鰒堅魚烏賊各八斤鮭八隻腊八斗比佐魚一斗五升海藻十二斤滑海藻十斤雜海藻十六斤鹽二斗裹葉薦二枚祝料庸布二段是以御縣六座山口十四座合祭其幣物者座別五色薄絁各一尺倭文五寸木綿二兩麻五兩槍鋒一口料鐵用二社分一四座置八座置各一束楯一枚庸布

一丈四尺鬘葉薦二尺其酒肴共用社料但御縣六座別加絁三尺風神祭云々右二社差ニ王臣五位已上各一人神祇官六位以下官人各一人ニ充レ使（卜部各一人神部各二人相隨）國司次官以上一人專當ニ行事ニ即令諸郡別交易令レ供ニ進贄二荷ニ其直並米酒稻並用ニ當國正稅ニ自外所司請供但殺隨レ損供進と見えたるが如し（令集解風神祭の釋にも五位已上充レ使と記せり右二社云々以下の文は本朝月令に弘仁式云とて此を擧たり全く同文なり）

廣瀨能川合爾稱辭竟奉流皇神能御名乎白久御膳持須流若宇加能賣能命登御名者白氐此皇神前爾辭竟奉久皇御孫命能宇豆能幣帛乎令ニ捧持ニ氐王臣等乎爲使氐稱辭竟奉久 主祝部等諸聞食登宣

廣瀨能川合は大和志に此社を今在ニ廣瀨河合村ニと有る此なり廣瀨は郡名なるが其河合村より起れる地名なる可し（續紀に廣瀨女王と云ふ人名有は廣瀨王に紛ゆ爲に字を替たるにて當昔受張て用たるには非ず又廣湍女王とも作り天神本紀に天乳速日命廣湍神麻續等祖と有を以見れば稀々には廣湍とも書し也）川合は考に此所を川合村と云り初瀨川の末と佐保川の流合る所なれば川合と云る事著し今は大和川とて大川と成れるも此處なり爰を廣瀨と云るも大川原なりしに依て郡名と成つらむと見ゆる地の狀なり（同頭書に云く初瀨川の末は東方より佐保川の末は北方より流來て爰に合て今の大和川に入なり）と云れつる如く川と川と落合ふ所を川合と云ふ事此處耳ならず佗處にも例多き事なり（縁起に舒明天皇御宇池邊右大臣深則奉レ恨ニ帝王ニ捨ニ妻子ニ隱ニ深山ニ妻子啼泣而三七日參ニ籠當社ニ祈請不レ懈云々深則隱而有ニ龍田山ニ云々妻女從ニ神託ニ果而深則到來互欲レ渡ニ其河ニ中瀨而相合故名ニ此地ニ曰ニ河合ニと云るは笑ふに堪たる妄談なり）天武天皇御紀に祠ニ大忌神於廣瀨河曲ニと有る河曲は川と川と落合ふ所は其流脈の曲る者なればなり此を以見れば古事記に又於ニ坂之御尾神及河瀨神ニ悉無ニ遺忘ニ奉ニ幣帛ニ也と有る河瀨神は此大忌神なる事愈著し此は唯川神と思ふは麁し（和名抄郡名に伊勢國河曲加波和と訓るに從ふ可し此郡名も彼鈴鹿川の河曲を取れるなり皇大神宮儀式帳に河曲鈴鹿に山宮坐支彼時川俣縣造祖云々と有る川俣は川合の事を云ふなり）○皇神能御名乎白久と云ふ意は此廣瀨神を常に大忌神と申し祭を大忌祭と云ふ事なれども今は大神の御名を顯し其御德を言擧白むとなり然るは總て神號は其御所行を以て御名に負せ奉る事なるが故に御名を顯し申事は即其御德を顯し奉るにて禮事の至極なればなり（然るを中世より名を呼ぶ事を大に無禮き事と爲る樣に成れるは唐戎風の染し者なり大に天朝の古義に背けり）然るは高橋氏文に記せる景行天皇の大御言に大倭國者以ニ行事ニ負レ名國奈利と詔給へる如く人世と爲ても各其行事を以て名に負ふ古の習俗なりしにて神も人も各自に行ひ勤むる事業は彼皇祖天神の修理固成と事依し給へる天賦の德

たる故に此を以て名とし佗よりを其を稱たる事にて正しく御名を稱奉る事は此上も無き敬禮の至りなり然れども八百萬千萬人と年々歲々に蕃息る人號を悉く其行事に應て號たらむには武士は何人なるも武士農夫は何人有も唯農夫と云ふ樣にて其差別無き事なるに依て漸其群を別ち其職を負せて中臣齋部猿女鏡作玉作と名の上に冠て云ふ事と成つるなり又其も多く成る自然の勢なりし故に其尊卑上下の等差を立て中臣連忌部首猿女君鏡作連玉作連と樣に成て其名と合せて呼ぶ事なるが其中臣忌部猿女鏡作玉作など名有て實無き後世の官位の如くは非す各其家に傳て朝廷に仕奉る所以の職號なれば何よりも重くして必其名の上に呼て中臣連鎌子忌部首子首など云ふ定なりつるを後に藤原朝臣菅原宿禰なと其本居の地を以稱たる一種の氏出來れりしより終に其職號の方なるも名耳有て其實は無なりつるなり此即姓氏の起る元由なるが尙云まほしき事の多在を此に用無れば略きつ然れば姓氏の出來れる後も正しくは氏と名と連ねて云ふ可きを良古義を失ひて其名を稱するを諱て氏耳を呼ぶは何の由ぞや其も上古に中臣忌部など云ふ職號ならばこそ有め甚混りなる事共なり但此は此に要無き事ながら名を正しく云ふ上古の禮式なるを得さま欲くての事也

〇御膳持須流は二義有べし一には御膳持は御食物を有たせ給ひて世に恩賴を蒙らせ給ふ由なり一には御膳津神と坐て天照大御神に奉らせ給ふより始て其御靈を世に遍く幸給ふ由なり此事巳に上に云れば暫く此所に移して見合す可し　今此を說むと爲るに此も彼も捨まじく所思るが故二義には說けども其趣一に歸る事なり先其御膳持須流を御膳を有ち給ふ意と云ふは神代紀一書に葦原中國有二保食神一保食神此云宇氣母知能迦微と見えたる其神は此若宇加能賣神の別名なる事先師等の考の如くなるが私記に宇氣者食之義也言是保二持食物一之神也と註るは神代紀の右の保食神の段に保食神乃廻首嚮レ國則自レ口飯出又嚮レ海則鰭廣鰭狹亦自レ口出又嚮レ山則毛麁毛柔亦自レ口出矣云々と有る文意を甚熟得たる說なり其は國中に生出る穀物は更にも云す海に住む魚其山に居る獸等に至る迄も人の食物と爲て身命を保護ち育養に限の物は悉く此大神の恩賴に依る事とは誰も大凡に知居る事なれ其此故事は今にも事實にて奇異に玄妙なる產靈の御所爲を現前に仰見奉る心ちぞ爲る也其は神代紀一書に軻遇突智娶二埴山姬一生二稚產靈一と有は天日の光輝大地の精氣絪縕處

和て宇宙に萬有を生々結ばむとする神靈是に成る是即稚産靈神の御靈の依て生坐る所以也稚を和久と訓る和久は水に屬き土に就く物の其質を劃判て伸出る義なるが其氣を天日に稟け其質を大地に資る故に此亦其所生の氣質より分配る由なり大陽の神氣地中に透達りて物の生出る事は男女交接して子在か如し水の漲出るを和久と云ひ虫なとに和久と云ふ事の有なも思ひ合せて考ふ可し古事記に和久産巣日神此神之子謂二豐宇氣毘賣神一と有は天日大地の氣質綱縕感合て宇宙に萬有を生々する稚産靈神の神靈此に成て其含む處大なりと雖も宇宙の風氣を以て此を搖動すに非れば茅み出る事能はず此に因て大地中に含藏む所の稚産靈神の神靈は有と雖も生て長る事は其神に保持て豐宇氣毘賣神風氣に乘保持せ給ふ所の宇氣を國土に嚮ひて施し給ふが故に土中に在る所の神物此を稟受て茅萠み穿出る事を得此即草木なり又海に嚮給て其宇氣を施し給ふが故に水中に在る所の神物此を稟受て蠕動き出生る事を得此即魚貝なり又山に嚮給て其宇氣を施給ふが故に山中に在る所の神物此を稟受て蠢化き出生る事を得此即禽獸なり豐宇氣毘賣神の風氣を兼て其德を施給ふ證は此時の品物は皆自レ口出と有る傳と大忌風神祭の一なるとに思合せて其御力を發せさせ給ふ御事を伺見奉る可きなり譬へば硫黄に發す可き勢は在ながらに火氣を得ざれば發する事能はざるに似たり稚産靈神に生發の勢力御在も豐宇氣毘賣神の神氣を稟受ざれば其御德の彰難き理を思合す可し此に神物と云るは稚産靈神の靈を云ふなり　然れば神代紀に此事を記されたる文に天照大神在二於天上一曰聞二葦原中國有二保食神一宜二爾月夜見尊就候一レ之と有も且と見ては保食神を唯候見よと詔給へる如くなれど熟見るに保食神の產靈を爲給ふ消息を候見る可しと詔給へるなり此時月夜見尊に奉られし御饗は態と吐出給へる狀なれど其常を以物爲給へる乍其口より出るを以て穢はしとし鄙と爲て打殺給へるにぞ有ける但若此して其體を換給ふ故に種々の種子の成れりし事云まくも更なり此に因て思へば此時まて國に海に山に嚮給しは現身なるを此より後に國に海に山に嚮て萬有を造化し給ふは隱身なり然れば此時に殺され給へるは五穀と蠶と桑と牛馬との種子の出來れる始にて例の皇産靈神の幽より預相謀造給ふ事今云ふ限に非ず神代卷を見る者古來神祇の御事を人事の如く其小く見成すが故に一として天地の眞理に叶へるは無きを予をして如此き考を物爲させ給ふ事は本居平田二大人の賜物なり此を天照大神の就て候よと詔給へるに就て思ふに大御神は宇宙を照撤し給ふ御上よりは大

地の氣に網縕り感合て其中間より稚産靈神の神物の出來る事は熟々所知看せども保食神の恩賴に憑ざれば生長ましゝ所謂を所思るが故に月夜見尊を就はし給て候しめ給ひ倘御靈を預給ひて顯見蒼生の食て活べき物を御心足ひに成給はむと所思る御事なりかし（天照大御神の保食神に御靈を預給ふ事は第三卷第七詞の中なる多賀宮條に委しく云るを見る可し且大御神は天日の主宰に坐は宇宙の火の大元を掌給ふ事にて此にも深き幽契有る事なり神代紀に軻遇突智娶二植山姫一生二稚産靈一と有を熟思ふ可し）右の如くなれば草木の出來始は豐宇氣毘賣神（亦名保食神）の生坐る後なる事云も更なれど已に伊邪那岐伊邪那美二柱神國生の初に葦倘不立の御言有り伊邪那美命の黄泉に往しゝ時に替二子之一木一と詔給へる事も有て已に國土有る上は草木も隨て生出可き理なれば此保食神より前に草木の有と爲ば保食神は草木の本神とは申すべからず又無しと爲ば右の葦牅一木は何と説むと是に於て予が説窮るに似たりと雖も聊も窮らず却て深義を啓發くに至れり其は天日は天照大御神より前に成て有と雖も宇宙に其光輝を發ちて照徹給ふ事は大御神に始れるが其發たせ給ふ光輝の由て生へき種子無てはならず若由て生べき種子有ば其種子に天日の光輝を含藏て有べきなり然れば大御神の天日神と爲給ふ迄は宇宙に含藏る光輝を以て光輝と爲る故に天日の光輝無て事足り天日神の定坐て後は宇宙に含有る所の光輝は悉く天日の光輝と爲て宇宙の間其天日の光輝を仰て光輝と爲れ其日神未生の前の光輝已生の後の光輝も光輝に於て水火の差有べからず精と粗と熟と不熟の次第は有へきなり此譬の如く保食神以前の大地も天日の光を禀て形生に物の出來る理は同しければ草木は素より萬物共に出來る可き者にて未生の前に保食神の神靈の有なれば何の疑しき事か有む（風火金水土神より前に風火金水土の有て此天地は立れども其天地定て後に風火金水土神有る事を思て其體用を知る可き者なり）於是一の奇説有り神代紀に風神の成坐るに引續きて又飢時坐兒倉稻魂命と有は火神土神の御裔と坐神の事を先に及せる傳にて次序違へるに似たれとも此時の狀を思ふに實に顯身と現坐て國土を經營給ふ今と成ては伊邪那岐神と申せども飢ぞ爲給はむ是以て御心を凝し給へば風神を得て朝霧を吹拂たる空より天日の光輝漸次に大地に徹達りしかば天地の精氣の交和感通する間より萬有を生々する神物成り其に就て食と爲す可き者の出來れりし事にて火神土神の娶て稚産靈神を生み稚産靈神の保食神を生給より以前に

前身の保食神は有けるなり然れとも此時未保食神ならす保食神に屬く可き物の成れりしなり熱く心を留て其味を知べき也若此く見る時も葦船も子の一木も何の異しき事も無く通えたり且廣瀨龍田神の共々に親しく坐す由緣にも叶へり此に倉稻魂命と有は素盞嗚尊の御子の宇迦之御魂命より混れし者なり然れば此は唯宇氣の靈神の成初たると見て宜しからむ　然れば御膳持須留は食物を保持と云ふ私記の說を佳として其保持せ給ふ本說は予が此考の如くならては聞え難き者也かし偖又保持と云ふに自有てると持運べるとの義を兼たるが此神の御名に豐と負坐る豐は動の義にて風神と御力を合せ給ひ宇氣の御靈を四方八面に持運給て稚產靈神の神物を動み生しめ給へるが故に然負坐るにぞ有なる風氣の萬物を動搖して生長せしむる事の委しき事は次なる龍田風神祭の所に云るを考合す可き物ぞ○若宇加能賣能命は廣瀨社緣起に若宇加乃賣命伊勢外宮分身也と見え上代本記酒殿神の下に謂和久產巢日神子豐宇賀能賣命座也丹波國竹野郡奈具神社是也五穀種所化保食神分身也と有も由有る傳說と通えたるが此に因て思ふに豐宇氣毘賣神の分身にて若宇加乃賣命保食神は同體なる事三卷第七詞條に云る如し此に竹野郡奈具神社は神名式にも載されたる社なるが其隣き丹波郡比沼麻奈爲神社有る其は豐受大神に在るに思合す可し但分身とこそ申せ一柱の同神に坐て何の異なる事も無れと其本體と分身とに就て體用の心得有

事なるが故に此亦辨へずては有べからず何を以て然云ぞならば已にも記せる火產靈神埴山姬神二柱娶坐るが其御靈は天上に在す事體なる證據有り軻遇突智神の御骸に化て其御名を負る天香山天に在り其香山の天より降れるが大和國在るに神名式に大和國十市郡畝尾坐健土安神社大月次新嘗と有る畝尾は古事記に香山之畝尾と有れば論無きを神武天皇御紀に取二天香山社中土一と有も此社の事にて神代より鎭座なる事云も更なるが其は天香山に火神土神二柱並御在りし天上の儀を移せる者なり此に就て推索るに神名式に大和國十市郡天香山坐櫛眞命神社大月次新嘗元名大麻等乃知神と有る櫛眞命は鹿卜起源に久志眞知產靈命と有る神にて津速產靈神なる由第十一段春日祭詞の註に說るが如くなるを其は火產靈命に在れば此山に火產靈神埴山姬神並鎭坐る由緣實に熟符へり然れば天上の儀の如く此國に降れる後も此二柱神の並立す山の少緣ならぬ事を知べきなり然れば右の火神土神の御子稚產靈神は何方に在すと云ふに御父母神と共に此亦天上に坐神なり其は釋紀及明文抄に載る大倭本紀に天皇之始天降來坐之時共副護齋鏡三面子鈴一合也の本註に一鏡者天照大神之御靈名二天懸大神一也今伊勢國磯宮崇敬拜大神也一鏡者天照大神

之前御靈名國懸大神今紀國名草宮祭敬拜大神也一鏡及子鈴者天皇御食津朝夕之食向夜護日護齋奉大神今卷向穴師社所坐拜祭大神也と有る卷向穴師社は右の子鈴にて神名式に大和國城上郡卷向坐若御魂神社（大月次相嘗新嘗）と社の御靈形なるが天上より降し給へるは其身實の天上に止住給ふが故なり（名義は已に上に説れば今云ふに及ばす卷向と云ふ地名も此神に依て起れるなる可し卷は眞木(マキ)にて向は茂(ムク)にて纒紀の眞命に牟久佐加爾云々と有る牟久此なり茂を字音の如く思へども我古言の茂(モ)も其字の義なり神代紀下卷に扶疏(シキモシ)と有る和志の岐も茂字の義に同じきを思ふ可し齋明天皇御紀に好在(モキシハヘル)と有も同意なり）右の文に一鏡云々者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神と有は古事記に上に御靈實の事は記漏されたれど次登由宇氣神此者坐ニ外宮之度相ニ神者也と有る其御靈實の事なり斯在ば此神も天上に在すが故に御靈實を天降給へるにて天上に坐神なる事灼然き者なり（此事は卷三第七詞の下に委しく記せる耳ならず此卷の首にも天照大御神の御饌都神と坐す所以を委しく説れば其處に立復て考合す可し）若て稚產靈神豐宇氣毘賣神二柱御親子の間ながら其產靈を爲給ふ御上に於て其屬給ふ所各異にて稚產靈神は御母神埴山姬神に依給ひて土中に含藏て萠芽し豐宇氣毘賣神は御祖父火產靈神に就給ひて地上に伸出て形作り給ふ事と見ゆ（稚產靈神は物將に起らむと爲るを始を主り給ふ事趣を以見るは其物と爲(ナリ)て形作る事其本質を土に得されば成出來ましき理なれば土神に依給ふとは云ふなり天日の大地を蒸て物と爲るべき神物は在ながら土に其精無れば物とは成ざる因縁を思ふ可し又豐宇氣毘賣神は天地交感て土中に神物を孕むと雖も火氣を資されば地上は萠芽し發見ろ事を得ず又發見る後に水を含て風氣の動搖(トヨモ)さゞれば生て長ると能はず長て茂盛(サカユ)ると能はず此即此神の天照大御神に屬仕奉給ひ又風神と御力を戮せ給ふ所以なり）其豐受毘賣神は天上に在す本體なるが其分身に御在す故に若宇加能賣能命と申せり此の若は上なる稚產靈神の和加に異無しと雖も一には和加に分身の由を以て別の義をも兼たり然れど和加は生來の本義にて其生來出るは土に在れ水に在れ其中に本質を保持ち含藏たるが土に別れて草木と爲り水に別れて魚貝と爲りて其草木は土に生來ると雖も土質に非す魚貝は水に生來ると雖も水質に非す草木は草木なり魚貝は魚貝なり此に依て和加は別にて和久は生來なる事を察らむ可し（物の幼稚きを稚(ワカシ)と云ふは其本義は其初生の由に依れる事此にて悟るべし然れば萬葉などに三日月を稚月と詠るも晦に及びて見えざりし影の旦々(ホノ〴〵)發見初るを以て云なり）宇加に招く意と生く意と頒つ意と受る意を兼たり其招く意と云ふは神名式に土佐國長岡郡豐岡上天神社と見え神樂歌に豐遠迦比賣と謠へるは此神の亦名なるが遠迦に招く由有と云るは天日の光輝大地を蒸成は神物土中に成て地上に生來出むとす然れども此神の靈威を施爲されば生出る事を得ざること上に云るが如くなるが此神の靈威を施

す事は土中に在る所の稚産靈神の神物を地上に招出すなり 是を以て遠迦に招の義有とは云ふなり又神楽歌に然詠るも同じ神名ながら招請の意有る方を用ひたる在（ナル）べし 宇加に生く意有と云るは地上に物の生出ることは土中を穿ち裂て出來るなり神代紀に是時保食神云々唯有其神之頂化ニ爲牛馬一顱上生レ粟眉上生レ蠒眼中生レ稗腹中生レ稲陰生ニ麥及大豆小豆一云々と有を思ふへし豐遠迦能賣神の遠迦此義なり 但神世に一度其ことを有て種子の出來初たる由耳ならず今も顯に見蒼生の食て活べき物其種子を土に蒔は生立て其實を結ぶなどなり 須つ意とは神代紀に保食神乃廻レ首嚮レ國則自レ口飯出嚮レ海則鰭廣鰭狹亦自レ口出又嚮レ山則毛麁毛柔亦自レ口出云々と有は須つ意なるが上に云る如く土に水に物と成べき種子の神物此神の靈威を須配給ふに依て各自に品物成る此即若宇加能賣神の宇加に須つ意有と云ふ據なり 但宇迦は遠迦とも轉云ふ宇にて和韋宇惠遠と活用く次序なるにて阿伊宇延於と轉用（ウツリウゴ）くに非れば然は說難きに似たれども其宇の言の阿行なるも和行なるも音韻の所生こそ異なれ同じく宇と呼ぶ上に異無れば其宇より阿行に活機きたるなれば須つの意全に無しとは云ふ可からす 又受る意とは上件に云る如く天地交感て土中に物と成て發見むと爲る神物はしも豐宇氣毘賣神の靈威を稟受て發見る又稚産靈神の生々蕃息むと爲る神物を此神の稟受て入我我入び給ふ故に草木穀種繁榮茂盛する事を得るを云ふが其より人民此を受賜りて

續命の術とす神代紀に天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可ニ食而活レ之也と詔給へるを考見る可し 但人の受賜る由を以て御名に負坐は自佗彼我の差有に似たれど受るも令受るも其受る所以の者に於て異無を思べし 如此く其義種々なるも皆含蓄せる意趣なるが取較ては味氣の義なり若て其味氣の料は草木 魚獸も此に屬 なるが食物と爲て姓命を養ひ衣服と爲て寒暑を防ぎ住宅と爲て身體を容るなど皆以て氣に預る事の外は有へからず 木を氣と云し例は景行天皇御紀に御木此云開萬葉二十に眞木柱を麻氣波之良また松木を摩都能氣と詠み私記に古者謂レ木爲レ介と有などなり草は木狹（クサ）の義なれば草木に亘りて氣と云ひ衣食住を共に氣と云ふ例也とは知れたり令義解に土地之所レ生爲レ毛也と有を思ふ可きなり 此故に食物の事に於て御食津神と稱申すを思ふ可し凡人の食て可活き物悉く氣非る事無く味非る事無し其質は食へども其稟受て身體を養ふ所は氣と味と二物の然らしむるなり此故に漢藉老子の語にも食レ氣者神明而壽と有は然る言にて神眞の境界にては氣を食て糧とす氣に味有て氣味具る然れば氣は食物の精粹水穀の本主なる事を知べし此即宇氣は味氣なりと云ふ所以なり咋物と云ひ喰ふと云ふなど皆は食物を饌と云ふより轉れるなり 素問内經に水穀皆入ニ於胃一五藏六府皆稟ニ氣於胃一五味各走ニ其所レ喜穀味酸先走レ肝穀味苦先走レ心穀味甘先走レ脾穀味辛先走レ肺穀味鹹先走レ腎穀氣津液已行營衞大通乃化ニ糟粕一以レ次傳下と有は甚愛しき言なりこれ寔に言に此の物知人も心得置べき事にこそ水戶の原南陽が醫事小言に凡飲食胃に入れば精氣化して氣と爲る是乃人身の陽氣にて即元氣と云

者なり云々此陽氣の通暢して運動するが人身の當體なり故に食を絶て死するは胃氣盡て作の陽氣を造る事ならぬ故なり呼吸の氣二便の利皆胃より敷く所なりと云るは然る言にて予が説に合り實に穀氣の一身の外に疎通する者にて其氣閉塞するが内鬱する所有ば病を招く事呼吸を止れば死し二便閉れば病に同じ又衣服の作用も歸る處は氣の一耳なり寒を防ぎ暑を凌く事は身體固有の氣をして寒に邪を延ず熱に氣を犯されざるが爲なり其防ぎ其凌く所は即宇氣の味氣たる所以也衣服を御衣また着物と云ひ着る事を祁流とも祁勢流とも古言に云るは着を本にして轉れるなり師翁は衣食住の神なりと迄は考得られたれど其説に於ては予が如くは非るべき者なり此衣服の委しき事は神衣祭詞の下に委しく云ふべし住宅は雨露霜雪を覆ふ所以の器なり雨露の人に中り霜雪の身を損ふ所は悉く皆外邪の然らしむるに依る事上に説る衣服の用を爲に同じきが親しく身に着くと遠く身に覆ふとの差異有耳なり此亦宇氣の味氣たる所以なり住宅を宅と云ふより大宅屯倉など云ひ住所在處直處と云るも家を本にして轉れるなり家は音訓同意の字と云者なり源氏物語にも夜加の巽の隅に云々と云事有り此神の分御靈に屋船神在して此住宅の事に御靈を幸給ふ事委しくは大殿祭詞の下に説を待べし如此く豊受大神より受賜る味氣の靈物たる食物衣服住宅は人倫の一日も缺べからざるの至寶にて財貨は此を求るの使令此を與るの奴隸たれば三なから此を一貫にして離るべからず何れを勝れりとし何れを劣れりと爲へからざるが中に殊に其急なる所は食物なり天皇の高御座に坐て天津日繼所知看す御上より奉始て人民の營爲は食物を求むるを以て家業とし又勤めとす鳥獸魚類に至る迄食物を求るを以勤と爲るより外無き物なり衣服は此に次く食すれども着ざれば身命を保持つ事能はず然れば衣服は食物に等しき寶器なり繼體天皇御紀に元年二月辛卯朔戊辰詔曰朕聞土有當年而不耕者則天下或受其飢矣女有當年而不績者天下或受其寒矣故皇后躬耕而勸農業后妃親蠶而勉桑序況厥百寮暨于萬族廢棄農績而至殷富者乎有司普告天下令識朕意と有は此事に深く御心を任させ給へる御言擧なりかし鈴屋大人の國號攷に云く皇國は萬の物も事も異國には勝れる中にも稻は殊に萬國に比類無く遙に勝れて甚美好き事神代より深き由緒の有て今に至る迄實に水穗國の名に負る尊さ云も更なるを天下の諸人斯る愛たき稻をしも給ながら皇神の御恵を輕慢に思成すべき物かは抑人は命ばかり重き物は無を其續て永らふる事は專稻の功にし有れは世に是ばかり重く尊き寶は何物か有む其稻の斯計り勝れ

て愛たきにも皇國の萬國に勝れて最尊き程は著明さき者ぞ」と云れたるは深く此詔命の御旨を諭されたる者なりけり或人も食物衣服の無上く至貴き寶なる事を論ひて後世に至りしは奇器異財を求る爲に生命を保つ可き米を賣拂て其食はれも爲ぬ物に易るは甚愚成事に云るに然る言なから其食ふ糧の餘は賣て國用と爲すも融通なれば一概には云難けれど畢竟〔ツマリ〕に宣化天皇御紀に元年夏五月辛丑朔詔曰食者天下之本也黃金萬貫不レ可レ療レ飢白玉千箱不レ可レ救レ冷と有り如く食物衣服は天下萬族の至寶なり此至寶の外に何なき寶と爲む然れども其至寶を求る爲の使令に金銀白玉の尊きなり能く其本末を察らむべし但此文面に御膳持須流若宇加能賣能命と有る上は此御名に就て食物の外を說可からざるに似たれ共此御名に其衣服住宅に御靈を幸給ふ言義の含藏(コモ)るを知ずはこそ有れ知ては說ざる事を得ず尙云はゞ此詞の前に皇神能御名者白氏云々と有て後に登(シリヘ)御名者白氏と有るも其御名の中に御行事の含藏るを顯申す意なれば必心の及ふ限は探索て言痛き迄ぞ說へきなる侭御膳の氣は衣食住の物實なる草木五穀などに總て亘る名なる事上に注る如くなるが須佐之男命の御身の毛を拔散して木種と成給ひし故事に符合て木をも氣と云ひ景行天皇御紀に木此云レ開(ケ)と見え萬葉集にも木を毛と咏る事某有り合義解に謂土地之所レ生爲レ毛也と有を思ふ可し然れば御膳持須流を文に云るは御食物に係る用を云耳にて狹きを御名に負せ給へる宇加の加はしも其衣食住の事を兼て無盡の意を含たるに依て甚廣ければ御名を重みして御名者云々と云る也漢籍春秋左氏傳にも食土之毛註毛草也と有り康熙字典に桑麻五穀之屬皆曰レ毛と見え黃帝素問に地有二草木一人有二毛髮一應レ之と見え其外にも窮髮不毛など云る事多かり我か淡路國などにては稻の田に生立を立(タチ)毛と云るは古義の存れる者也○御名者白氏は上に說る如く御名に神の御所業の限を悉くに盡せるが故に其御名を彰申す事無上き稱辭とは爲るなり故大人等は神の御德を說くに事實の傳說を主と爲て物爲られける故に其御名に於ては唯に稱辭と耳說れたれば其實に當れりと所思しきは非ざるを予が說に於ては然らず御事實も天津神語なれば次には下すまじき事は勿論なれど此の事を彼に隷て傳へ彼の亦此に錯亂たるも多ければ其を暫く客と爲て神の御名義を主とし其を諸古傳に合せて說奉るに意表(カモヒノホカ)なる古意を得る耳ならず經にも緯にも滯凝る事無く古今に貫き萬國に通りて甚希有(ケシカル)まで奇異しき說言をぞ得める此偏に景行天皇の大御言を截捧て此を思ひ此を思ふが故に其恩賴を蒙奉る事なりかし尙上に皇神能御名乎白久と有る註に云る事共を引合せて考ふべきなり然るを考に上に御名乎白久と有て次に又御名者白氏と云る類次の龍田祭にも有古文共に斷る事の見えれば是も奈良朝と成て文の拙く成れる者なり後人是を例と思ふは中々に委からぬ業ぞ」と云れたれと却て古文に委からぬ言なり又此を奈良朝と成て文の拙く成れる者なりとは何たる強言ぞや予を以て此を云はゞ悉皆今京の文なり然れども上古より有來りたる文の任に時々の御會釋の沿革は有ぞ爲つらむ其時々に少の取捨は有事なれども全く崇神天皇の御世の古文なり○此皇神前爾の此字如何と鈴屋翁說なり然れども此廣瀨皇神の前と云義なれば難無

し但今本には御前と有る其も然る事なれと此詞風神祭詞共に凡て同じ文法なるを何れも御字無れば衍なり其は本朝月令に皇神前ど有ぞ却て正しく所思たる御前の例は記傳十九十六丁能ニ治我前一の下に天照大御神の詔に如レ拜ニ吾前一伊都伎奉また思金神者取ニ持前事ニ爲レ政中卷水垣宮殿に大物主神の御言に令レ祭ニ我御前一神氣不起（此に傚て前後に引るをも共に美麻幣と訓べし）同段に於ニ御諸山一拜意富美和之大神と見え風神祭詞に龍田能立野爾小野爾吾宮波定奉弖吾前乎稱辭竟奉者など見ゆ此中に唯事も無く其神の御前と心得て有べきも有れども又常に云ふ前にては通え難きも有り故思(オモフ)ふに前(マヘ)は座(クラ)と同くて本其神の御座位を指て云なり（右に引る文に前事と有る是なり）偖御座位を指て云が即其神を指て云なれば治ニ我前一とは即治レ我と云事也右に引る文共を考て知べし（中昔の言にも貴人を指ては意麻閇と云り今世にも御前と云是に同じ又中頃婦人の名に某前某御前と云聞ゆ）偖又墨江之三前大神伊豆志之八前大神など有も三座八座と云と同くて座とは其神の座位を以て其神の員數を申也（是又中昔の物語文などに貴人をば一人二人とは云ずして一所二所と云るも同意なり稱德天皇御紀詔にも二所乃天皇と有り）其は神耳にも非ず孝德天皇御紀の詔に神名王名逐ニ自心之所レ歸忘付ニ前々處々一と有て註に前々猶レ謂ニ人々一也と有

は人にも云し也（付とは名に付るを云神名又古の皇子等の名を妄に人々の姓名に付るなり）偖神名帳の首に天神地祇總三千一百卅二座社二千八百六十一處前二百七十一座又四時祭式に祈年祭奠ニ幣案上一神三百四座社一百九十八所前一百六座又不奠ニ幣案上一祈年神四百三十三座社三百七十五所前(マヘ)五十八座と有る前も神の數を云るなり（この社と前との分を能考知れる人無し皆推量の妄説を耳成せり己考るに社と云るは神座の數に拘らず一社を一として其數を都合て社若干處と云前と云るは二座以上の神社の中に主たる神一座を除きて其餘を幾座にても前として若干座と云なり譬は三座を祀れる社ならば中に主たる神一座を除きて餘の二座を前二座と定たる者なり主たる一座は社と云中に在故に前と云中には入さる者ぞ此格を以計る時は右の式に擧たる數皆善合り但宮中京中の神は其神名を擧たるは各一社とす譬は御座祭神八座の如き各名を擧たる故に八社と爲なり其餘神名を擧ずして某社幾座と有は皆右の格なり凡て社と云數中に入る神は幣物多く前神は幣物減(オトレ)れり偖主たる神一座も實は前なれども其は其社の主たる故に社を指て申し餘は其社の主にも非る故に神座を指て前とは申なり故に社には若干所と云ひ前には若干座と云二を總ても若干座と擧られたり大神宮年中行事に朝熊宮祭の詔刀の次に前皇神如此申進と有も此社六座の中に主たる神を除きて餘の五座を前の皇神と云る事式の御定と合り今世言に物を分充るに一人前二人前と云も神々に充らるゝ幣物より出たる言なる可し古語の遺れるなり）と云れたるぞ然る言なる此餘に云ふ可き節無れば全文を其儘に擧つ（但此は第一詞の下に引へかりしを其には唯前と云る所なる故に此詞に御前(ミマヘ)と有を幸に此所の注に引出つ）○稱辭竟奉久は神の御功德を稱奉れる御名を申て次に宇豆能幣帛を令捧持氐奉らせ給ふ事を云むと爲る故に風神祭詞に稱辭竟奉爾と有や勝るらむ然れば久は爾の誤なる可し字形髣髴たればなり（此事の差別は第十三詞なる稱辭竟奉爾の註に云り）○皇御孫命

能宇豆能幣帛乎令ニ捧持ー氐は次に御服云々以下の幣物の事を取都て云なり（然れば此は大綱にて次文は其小目なり）○王臣等乎爲レ使氐の臣字本朝月令には卿に作れり偖考に天武天皇四年癸未には（甲申朔にて十日に當る）遣ニ小紫美濃王小錦下佐伯連廣足ニ祠ニ風神于龍田立野ー遣ニ小錦中間人連蓋大山中曾禰連韓大ニ祭ニ大忌神於廣瀨河曲ーと有よりして持統天皇迄凡絶ず御紀に四月七月御使の事は有れど使人の名は略けり（今此文奈良朝の筆と見ゆるに斯有からは廣瀨の王使も甚已くより有つらむ○今云奈良朝の筆と云ふ事は上に辨たる如く僻言なり廣瀨の王使は舊古昔に勿むにも爲よ延喜の當今に至て王使を進らるゝからは事實を以て王臣等乎爲使氐とは書ざるべき者在（ナラ）すや）四時祭式には（大忌祭風神祭）右二社差ニ王臣五位以上各一人神祇官六位以下各一人ニ充レ使ーと見えたりーと云れたるは然る言なるに就て今思ふに右の天武天皇四年の度には龍田へは王使を進られ當社へは其事無りしかども翌五年より四月七月兩度に御使を進せられ崇神天皇御世の古例に復りて恒例の神事に定りつるを以て兩社を兼て程も遠からぬ所の事故に御使は一に爲られたるなり（翌五年御紀に夏四月戊戌朔辛丑祭ニ龍田風神廣瀨大忌神ーと有より次に何時にても一に並擧られたるを思ふ可し又御參の次序も當昔は龍田廣瀨と云ふ順なれど八年四月御紀より次々大方廣瀨龍田と云次第に記され式にも大忌祭の次に風神祭を記されたれば御使の參詣て神事を行るゝ事も廣瀨より龍田に赴く事と見ゆ）○稱辭竟奉久乎は上に稱辭竟奉爾と有を受て其宇豆能幣帛を進らるゝ事を斯云なり（風神祭詞も凡ては同じ續なるに稱辭竟奉久止皇神乃前爾申賜事乎と有り）

○神主祝部等諸聞食登宣此の稱辭竟奉迄は神に告す祝詞にて此は宣命なり偖王臣等を御使に進せらるれども祝詞は其社の神主祝部をして令申るに依て御使の王臣より宣聞しむるなり（上なる春日祭の如きは京都より御使の中に神主を定て進せられ直に其社にて宣る事故に神主の其神前にて申通りに稱辭竟奉久登白とは記されたり）是に於て神主祝部等稱唯して受賜り神前に進て其宣命の詞共を略きて神に申させ給ふ詞耳を告申す事なり（下なる皇神前に白賜登宣の宣も此例なり）

奉流宇豆乃幣帛者御服明妙照妙和妙荒妙五色物楯戈御馬御酒者甁能閇高知甁能腹滿雙氐和稻荒稻爾山爾住物者毛能和支物毛能荒支物大野能原爾生物者甘菜辛菜青海原爾住物者鰭能廣支物鰭乃狹支物奥津藻菜邊津藻菜爾至萬氐置足氐奉久止皇神前爾白賜止宣

奉流宇豆乃幣帛は其幣帛の條目を云む料に先云り上に皇御孫命能宇豆能幣帛乎令ニ捧持ー氐云々と有を受たる事云も更なり（文の重復せると思ふ可からず古文の運びなり）但此幣帛の事は侘例に異る事無しと雖も少心して聞べき事有り侘詞に異りて毛能和支物毛能荒支物と云事は道饗祭詞にも在れど此は神代紀なる保食神の御身より成れる物

の大凡をば悉く奉らせ給ふ義にや全文は上に引たるを見合て知る可し○御服明妙照妙和妙荒妙は上に出巻一第二詞見るべし○五色物は次なる風神祭詞にも有り考に云く四時祭式に絁一丈八尺絲二絇綿五兩五色薄絁各一丈五尺倭文三尺云々と有を此なる明妙と云より下へ係て見に五色物は右の五色の絁なり同頭書に云く陰陽式の儺祭に唱る文に五色寳物海山種々味物云々と有に依て此なも五色の神寳と思へる人も有と見ゆれど此に引が如く祭式の註文と合せて別有事を知るべし○楯戈御馬は六御縣山口神詞風神祭詞等にも在て外なると云樣異なり此は上にも已に記傳を引て辨つる如く崇神天皇御紀に九年春三月甲子朔戊寅天皇夢有ニ神人ニ誨之曰以ニ赤盾八枚赤矛八竿ニ祠ニ墨坂神ニ以ニ黒盾八枚黒矛八竿ニ祠ニ大坂神ニ四月甲午朔己酉依ニ夢之教ニ祭ニ大坂神墨坂神ニと有る大坂神は此祭に就て祭らるゝ山口神なるを以思ふに此廣瀬龍田神も此時に御諭の有て如此く楯戈に御馬をも添て進らるゝなる可し此事は委しく巻首に云り考合すべし四時祭式に楯一枚鐵三斤五兩鞍一具と有る鐵は戈の御料也然れば社に於て鍛ふ事と見ゆ鞍を云て馬は記さゞるは寮の御馬なとには無て當日の用耳に其國司より出せるならむ但鞍隨レ損供進と有は如何なるとなり此に因て思ふに鞍も神庫に收置て其毎祭に出さるゝにて何時迄も古きを用らるゝなりけり馬も准知べし○御酒者甁能閇高知甁能腹滿雙氐

は上に出祭式に酒二石五斗と有る此なり巻一第二詞○和稻荒稻爾は風神祭詞にも出つ考に和稻は籾を捐去て米と爲たるを云ひ荒稻は穗ながら有穎を云と云れたるが如し祭式に米三石と有は御膳の料にて和稻なり又稻十束と有ぞ荒稻なる龍田風神祭と此詞と如此く似附たる事多かり同時の撰文の故在べし○山爾住物者毛能和支物毛能荒支物は考に毛能和支物は鳥を云毛能荒支物は獸を云と云れたるは然る言なり此は神代紀に保食神云々嚮レ山則毛麁毛柔亦自レ口出と有る所縁に依て奉給ふなるへし龍田風神祭詞遷却祟神詞に山爾住物者毛乃和物毛乃荒物道饗祭詞に山野爾住物者毛能和物毛能荒物など見ゆ然れば鳥獸を云る古の雅言なり但獸は和名抄に毛群部に列たれば然云ふへきを鳥は同書に羽族部に收たれば羽と云べし毛とは云まじきに似たりと雖も羽は空を翔る用を云ふさて其實體は毛なり和名抄羽族體に毳細弱毛也和名爾古計と有は和毛(ニコケ)と云事にて此の毛能和支物に同じ又[illegible](フクケ)和名布久介[illegible]和名豆々介と有て何も毛羽始生貌也と見え又倍羅歷和名鳥い和岐乃之多乃介と見え尾鳥獸尻長毛也と有など羽を毛と云る證據也　神事は云も更なり凡て神事預る人は常と雖も獸肉を喰ふを忌事にて神祇令六色禁法條にも食レ宍を禁み齋宮寮式齋院司式には其詞をさへに忌て宍稱レ菌と云ふめる に祈年祭御歳神

詞に白猪を奉る事見え此詞及龍田風神祭道饗祭遷却祟神祭の詞共に毛能和物毛能荒物を進らるゝ事の見えたるは何も古き神事なるに甚不審しき事なるに就て尙熟思ふに六畜は忌て獸は忌さりけるにや然るは古語拾遺に昔在神代大地主神營レ田之日以ニ牛宍ニ食ニ田人ニ于時御歲神之子至ニ於其田ニ唾レ饗而還以レ狀告ニ父御歲神ニ發レ怒云々宜下獻ニ白猪白馬白鷄以解中其怒上とあるは牛宍を穢とし給ひて怒給へる神の白猪白馬白鷄を乞給へる白馬は食料に非ざらめとも白猪と白鷄とは全く供御の料なるを以考るに六畜と云中にも羊豕は本より有事無れば牛馬犬などを忌て鷄には其禁無りしと見えたり天武天皇御紀に自今以後莫レ食ニ牛馬犬鷄猿之肉ニ以外不レ在ニ禁例ニと有を以視つへし神武天皇御紀に大設ニ牛酒ニ以勞ニ饗皇師ニと有は後漢光武紀に爭持ニ牛酒ニ迎勞また馬援傳擊レ牛釃レ酒勞ニ饗軍士ニと有を取て文な成るにて實に牛酒の事有しには非る事先師等の云れたるが如し此時の大御歌に我餓未菟夜辭藝波佐夜羅壽伊殊區波邇區旎羅佐夜離と詠せ給ふを以見れば鯨魚を奉出しゝなり古事記天之日矛の段に有ニ一賤夫ニ云々此人營ニ田於山谷之間ニ故耕人等之飲食負ニ一牛ニ而入ニ山谷之中ニ遇ニ逢其國主之子天之日矛ニ爾問ニ其人ニ曰何汝飮食負レ牛入ニ山谷ニ汝必殺ニ此牛ニ食是牛ニ即捕ニ其人ニ云々此は他國の事在ども古牛を喫を忌事なりしなり皇極天皇御紀に元年秋七月甲寅朔戊寅羣臣相謂之曰隨村々祝部所レ教或殺ニ牛馬ニ祭ニ諸社神ニ云々と有を以其頃已く獸肉の古汁混れて牛馬を殺して內々には神にも進しなり然れども其は正しき神には非る可し桓武天皇御紀に禁殺牛而祭漢神と有る類にて元より此方の古法は用ざりし者なるべし上に引る神代紀に保食神の山に嚮て毛

麁物毛柔物を口より出して素盞嗚神に奉られしに起りて天宮にこそは非さめれ國神の上にては常多在し也出雲風土記に大己貴命及其子若布都主神の御狩し給ひて猪を追せる事見え神代紀天稚彥段に鳥爲ニ宍者ニと見え古事記に火遠理命者爲ニ山佐知毘古ニ而取ニ毛麤物毛柔物ニと有れば天神御子と雖も此國にては供御に奉りしなり崇神天皇御紀に十二年秋九月始校ニ人民ニ更科ニ調役ニ此謂ニ男之弭調女之手末調ニ也と弓弭の調物は弓以て射獲たる獸肉又其皮等の類を貢るを云り仁德天皇御紀に牡鹿の苞苴の事見え雄略天皇御紀には天皇ト葛城神と相共に葛城山に射獵し給へるなど尙多在り同御紀十一年の下に鳥官また鳥養部の事見え姓氏錄に鳥取連鳥取部連など又猪使宿禰猪甘部首と云も有など御贄に猪鹿を奉りし證なり孝謙天皇御紀に自今以後以ニ猪鹿之類ニ永不レ得ニ進御ニと有れとも永く行れざりしと見えて內膳式に近江國元日副ニ進猪鹿ニと有り但此頃と成ては日々の供御に奉る事は無りつらむ其は江次第元日供御藥條に猪宍一坏鹿宍一坏と見えたる耳なり其も其下を見れば猪宍一坏以ニ雉ニ代之鹿宍一坏以ニ田鳥ニ代之と有はシヽ猪とキジ雉と言相近くシカ鹿とシギ田鳥と言相近を以換つるなり主計式にも鹿猪ノ脯雉ノ腊鹿猪腊など見えたり萬葉十六に佐男鹿乃來立來嘆久云々吾宍者御奈麻須波夜之吾伎毛母御奈麻須波夜之吾美

（義者御鹽乃波夜之云々と詠り吾美義者は吾美美にて肉を云にや御鹽乃波夜之は上に在べし）然れども上に齋宮式を引たる如く伊勢大宮には殊更に惡せ給ふ御事と通えたるに尙倭姫命世記及神宮の古書に皇大神の御遷幸の事を著して從二其處一幸行大河瀨乎渡給爾鹿宍流相支是穢惡止詔氐不二渡坐一其處乎相鹿瀨止號と有を以其禁重く惡嫌はせ給ふ御事今云ふ限に非ず（大膳式に釋奠祭料鹿脯三十斤鹿醢一升兎醢一升鹿胎一升鹿五藏一升脾析菹一升羊脯十三斤など有て殊に獸肉を用る事多在を古今著聞集に孔丘人の夢に入て告げらくは漢土にては獸肉を以祭らるゝ事も有しかども皇國にては天照大御神の御禁重に依て佗物に代させ給はむ事を乞る事有り外國の神と雖も皇國にて祭らるゝ限は獸肉を用まじき事推て知る可し）佗社の神と雖も都て二は獸肉を奉らぬ例なるに此詞に毛能和支物毛能荒支物と有が不審しくて此を四時祭式に對攷るに幣物の中に其事無く龍田風神祭には羽二翼鹿角二頭鹿皮四張と有て獸肉の事見えず道饗祭に牛皮二張猪皮鹿皮熊皮各四張と見え遷二却祟神一祭は臨時祭式に載る八衢祭又疫神祭などの事と所思るに其幣物に又獸肉の事は有事無くして牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張と有耳にて更に似着はしき事非ず此等を合せて思ふに古語拾遺に彼男弭之調女手末之調の事を記して今神祇之祭用二熊皮鹿皮角布等一此緣也と云るに允當れり然れば鳥などこそは奉も爲つらめ神事に獸肉を奉る事は古に無りし事と見えたり其は臨時祭式に凡觸二穢惡事一應レ忌者其喫レ宍三日（此官尋常忌之但當二祭時一餘司皆忌）と有れば何の神祭にも宍を喫ふ事は忌憚事を知べし文に泥みて實を誤る事勿れ然れば此なる毛能和支物毛能荒支物は全く鳥の大小を云と心得て可也（然れば天皇等の猪鹿を聞食しゝも内々の御事にて表立たる事には非りけるならむかし古今に亘りて神の御心に異有まじければ今も猶其愼嚴重なるべし）○大野能原爾生物者甘菜辛菜は祭式に見えず此時に有合たるを用るなる可し（卷一第二詞一條）○青海原爾住物者鰭能廣支物鰭能狹支物奧津藻菜邊津藻菜爾至萬氐は祭式に鰒堅魚烏賊各八斤鮭八隻腊八斗比佐魚一斗五升海藻十二斤滑海藻十斤雜海藻十六斤鹽二斗など有此を云なり上に出（卷一第二詞の下見るべし但此詞に毛能和物毛能荒物と云べきを和支物荒支物と云ひ鰭能廣物鰭能狹物と云べきを廣支物狹支物と云り一種の詞遣にして義に於て異無し本朝月令に引るに廣物狹物と有は支字を脫せるなり諸本の有に從ふ可し）○置足氐は平野久度古開詞又鎭火祭詞共に置高成氐と見えて同し道饗祭詞には置所足氐と見えたり（字に於て異は有れども意に少も異なる事無し）第七詞を始此詞にも如二横山一打積置氐と云ふ如く都て神に奉らせ給ふ幣物は御力の及ばせ給ふ限り物をも事をも極盡させ給ふ由なり（上に稱辭竟奉と云ふ詞の下に注せる意を此へ移して心得べし）○皇神前爾白賜部止宣此も一段なり御使の王臣等より預奉來つる幣帛を奉らるゝ事狀を神主より皇

神の御前に白せとなり（此にて稱唯有事當の如し）

如此奉宇豆乃幣帛乎安幣帛能足幣帛止皇神御心平久安久聞食氏皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤爾能穗爾聞食牟皇神能御刀代乎始氏親王等王等臣等天下公民能取作奥都御歳者手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氏取將作奥都御歳乎八束穗爾皇神能成幸賜者初穗者汁爾母穎爾母千稻八千稻爾引居氏如ニ横山ー打積置氏秋祭爾奉皇神前爾白賜登宣

如此奉宇豆乃幣帛乎は上より奉宇豆乃幣帛者云々と云下したる結なり春日祭詞に如此仕奉爾依云々と有に等しく上を承て下を起す詞なり（又風神祭詞にも奉宇豆乃幣帛者云々と有て如ニ横山ー打積置氏奉此宇豆乃幣帛云々と有など同じ續なり）○安幣帛能足幣帛止は上に出（巻五春日祭詞の下に説り止字を本朝月令に引るには爾と作り誤れる者なるべし）○皇神御心平久安久聞食氏は次なる風神祭詞にも皇神能御心爾平久聞食氏と見ゆ（此に依て皇神能御心爾と訓つく可きなり）御心より平と續く例は顯宗天皇御紀室壽御詞に取置蘆雚者此家長御心之平也と有り神功皇后御紀に御心廣田國と續けたるなども御心の稜々しき事御在し坐す長閑に御在す謂なり平と廣と言義同じき事春日祭詞に云り（足幣帛の下見る可し因に云ふ室壽御詞に御心之鎭也御心之林也御心之齊也御心之平也と云ふ事四有り御心之鎭也は心の落着て混に動かぬ事なり御心之林也は林は榮の義にて心の榮（ハヘ〳〵）しきなり御心之齊也は靈の太く成齊ふなり此等に對へたる義など合考て此の御心平久云々の意を求べし）聞食氏は其幣帛の神の納受給ふ事なり（下なる聞食とは事別なり）皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤丹能穗爾聞食今本に遠御膳乃と有れども祈年祭詞風神祭詞大嘗祭詞などに登止の辞を書は乃は正しく止の草書より誤れる事着ければ考の本に改られたるに依つ（然れど登字を書（シル）されたるは宜からず）本に云々赤丹穗爾聞食御刀代乎始氏と續けたる事足はぬに似たり然れども此は皇神に先奉らせ給ひて天皇は其殘をば聞食す御義にて新年祭詞の中に皇大御神能依奉波荷前者皇大御神能大前爾如ニ横山ー打積置氏殘乎波平聞看また皇神等爾初穗乎波云々稱辞竟奉氏遺乎波皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故云々と全同義なり古語拾遺（神武天皇段）に當ニ此之時ー帝之與レ神其際未レ遠同レ殿共レ床以レ此爲レ常故神物官物未ニ分別ーと記されたる上古の遺制なり（此ーを以ても此詞の崇神天皇の御世に成れる事を知べきなり然るを考に赤丹能穗爾聞食の下に牟五穀物（ムイツヽノタナツモノ）と云ふ四字を補れて下の皇神能御刀代の六字は衍字かと云れたれと此古義を得知れざる説なれば依に足ず然るを鈴屋大人説に此皇御孫命能長御膳能と云ふより王臣等と云迄の文混りがはしく入交りて調はすと云れたるは予が説の如く熟くも思得られざりし僻事なり甚能く義理鮮明なる古文とこそは見えたりけれ）偖四時祭式を閲るに此大忌祭

に屬て是日以二御縣六座山口十四座一合祭と有る山口神祠は此次に在るに御縣神の詞の別に非るは祈年祭（御縣神詞）の註に云る如く其所祭同神に在すが故なり然るに彼には其六縣に生出る甘菜辛菜を持參來て皇御孫命の御食に奉るを云此には其六縣に作る所の稻穗を聞食す故に皇神能御刀代と云り然るは卷四（祈年祭詞第八註）に云る如く此六御縣は天皇の御縣（ミアガタ）田にて供御の料に備たる所なればなり廣瀬大忌神は其を統知す神と聞えたり（今京に成て御縣の制易りて御園と云ふ事に成たるが其を司る園池司に坐神の御食津神なるに心を着て祈年祭詞又此詞を讀ば思ひ半に過なん者ぞ）是を以て此には御縣とは云ずて御刀代とは云る者なり但同物ながら御縣と云ふ時は園菜を主と爲るなる可く御刀代と云ふ時は稻穗を主と立る差異有る事と聞ゆ然れば此は官田と神田とを兼て御刀代と云る者なりけり（令の御定に官田とは供御の料に畿内にて令作る田を云ひ公田とは諸國に私田口分田等に當られたる外の乘田を云ふが此は其公用迄に係たるには非るべし）○皇神能御刀代乎始氐は崇神天皇御紀に班二幣於畿內天神地祇一及增二神戸田地一又垂仁天皇廿七年御紀に仍更定二神地神戸一と有る此なり同御紀に定二神地於穴磯邑一祠於大市長尾岬と見え又神功皇后御紀に神田を美刀志呂と訓み持統天皇御紀に神戸田地を然訓り續後紀十八に賀茂御祖大社禰宜語云奉レ充二御戸代田一町一ニ充た乙訓郡山崎明神御刀代田二町尙三代實錄には御戸代と見えたり但御刀代と云ふ事は神田に限れる名なるへし鈴屋翁說に御刀代は御年代なり年は稻にて神の御稻を作る田を云ふなり」と云れたり（神社の封田を御刀代と云ふに風土記には多く圭田を作り備或說に御刀代は御戸代にて所謂神戸の事なりと云れと戸を刀と云たる例も聞えざれば當ならず又谷川士淸が常代なりと云るも從難し令義解に神田不輸田也と見え又戸令に神戸調庸田租並充造宮及供神調度と有り）又思ふに御紀に神田と作れたるを以見れば御刀代の御刀は御處（ミト）にて其神社の地に就て封田を定らるゝ由ならむか（但此例を以遠處なるも御戸代と云ふ事に其神社に就て定らるべき當然なれど然は有難きに依て遠處に定らるゝ故に其本名を用ふるなり）代は田地の事なり御紀に頃を志呂と訓み萬葉八に五百代小田と詠み姓氏錄に賜二輕地三十代一と云ふ事見え常にも苗代など云る其也（或書に小窓別記と云を引て云く漢武帝詔二田方一今之務在二力農一以二趙過一爲二搜粟都尉一過能爲二代田一畝三甽一歲代處故曰二代田一古法也云々積二七十二步一爲二一代一五代爲二一段一俗にも村里の東なる田を東代西なるを西代と云り春田を耕を爲代なども云り）○親王等王等臣等は此なる王等の等字を諸本に脫せるを本朝月令に有に從て加へつ其は次なる六御縣詞にも王等臣等と有と事に異は有れども續樣の一なるに依てなり偖此云々は各封戸の田地に就て云るなり（令に所謂る王臣の私田なども此に兼綜たり）親王等は美古多知と訓べし古昔は天皇の直御子耳ならす其御子孫をも姓を賜はぬ限は

皆美古と申せりき然るに天武天皇御紀四年の處に始て親王(ミコ)の字を用られ其余を王(オホキミ)と稱ふ事と成りたり繼嗣令に凡皇兄弟皇子皆爲二親王一以外並爲二諸王一自二親王一五世雖レ得二王名一不レ在二皇親之限一と見えたり此に就て記傳廿二(五十丁)に親王を美古と申す故に其に分て諸王をば某意富伎美と唱る定りなれども意富伎美と申す御稱は天皇を始奉て親王諸王迄に亘る御稱にて先主とは天皇を申なれば諸王に限ての稱の如く成れるは當らぬ稱なり（○今云此事は春日祭詞なる王等臣等の下に云るをも考合すべし）選叙令に凡蔭皇親者親王子從四位下諸王子從五位下其五世王亦從五位下子降二一階一庶子又降二一階一云々續紀六靈龜元年九月詔に皇親二世准二五位一三世以下准二六位一と有は蔭位をも賜はぬ以前本よりの品を云なり准字にて知べし同紀三慶雲三年二月制二七條一其七に准レ令五世之王雖レ得二王名一不レ在二皇親之限一今五世之王雖レ有二王名一已絶二皇親之籍一遂入二諸臣之例一顧二念親レ親之恩一不レ勝二絶籍之痛一自今以後五世之王在二皇親之限一其承嫡者相承爲レ王自余如レ令」と見えたり然れども上代には一世二世など云ふ差別無く押並て同く美古と申し汎く指す時は意富伎美と申

せりしを何時と無く別々には成れりしなり（親王の號出來れりしより後は親王は一等重く親しく諸王は皇親の限と云へども臣下の例なり）○天下は萬葉十八(三十二丁)又廿(二十四丁 五十丁)に安米能之多と有に依て訓べし（能を賀と云る例は古に絶て無き事なり）鈴屋大人説に此は漢籍より出たる稱にて神代よりの古言を非じかと云れたるは彼に天下と熟せる字の有に依ての疑なれど此方に安米能之多と云ふ古語の有けるを彼に天下の字を以て當たるに心着れざりし誤にて天地初判れし始輕淸は上て天と爲り重濁は下て地に成れるが天は地を覆ひて地は天の中に在れば地に四方上下無く唯人の戴く天を上とし載れる地を以て下と爲る事なる故に此大地の全體に取て較て天下ならぬ隈處は無き理なり此故に祈年祭(第七詞)に此大地の事を青雲能靄極白雲能墜坐向伏限と云り（此事巻三）詞に長短の差は在れども其義に於て異る事無し（第七詞の下に委く云り大地に對ひて黄泉國を下津國と云ふは大地は圓體なる者なるが故に其地心に在る域は何地よりも下と爲るが故なり又其黄泉國よりは此土を上津國と云ふ事其對なる者なり此事鎭火祭詞の下に云り又此土よりは下津國と云し例無れど海神宮より上國と云ふ事見ゆ其は地の凹き處なるが故に其凹き處を上國と云ふ事なり此は此に用無き事ながら天下の例に心得置べくここそ）此言古くは神代紀なる伊弉諾尊の御言に素盞嗚尊者可以治二天下一也と詔給ひ天石窟段に於是天下恒闇無二復晝夜之殊一と見え出雲風土記に所レ造二天下一大神と有

は神代より大國主神を然稱申せりしと通え出雲神賀詞に高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎事避奉之時云々天穗比命云々天能八重雲乎押別氏天翔國翔氏天下乎見廻氐返事申給久と傳へ古事記白檮原宮段に坐二何地一者平二聞看天下之政一と宣へる御言を記され同段神八井耳命より弟建沼河耳命に讓聞え給ふ御言に故吾雖レ兄不レ宜レ爲レ上是以汝命爲レ上治二天下一僕者扶二汝命一爲二忌人一而仕奉也と有るなどは語の續きを思ふに究て後名を及せるとは聞えざる者也此次なる風神祭詞に天下乃公民乃作作物乎云々と詞の地よりも云ひ天皇の御言にも宣給ひ神の御諭にも然申給へるなど此等は漢籍の參來ざる前の事なるに既く天下と常云ふを思ふ可し（若漢籍の渡參來し後に換たりと爲は其より以前に天下に當て如何なる詞を用たりと爲む熟く文義の間然する所無きを思察む可き者なり）○公民は意富伎美多訶羅と訓べし天下の兆民を大御寶と詔給ひ來る事は神等より顯見蒼生と仰給ふる對にて甚も尊き美稱也此を以見れば神等の愛（ウツ）憐しく所思養育給ふ蒼生を受賜りて天皇の大御寶と成給ふ御事炳焉し天皇の公正なる御所置（オモムケ）は仰くに尙餘有て辱しと申さむも中々に尋常なることなりかし皇國の上古より神隨言擧せぬ國としも云繼來れるが如く言痛き敎訓の論（サゲ）こそは非りけれ此御言を以ても千書八千書の敎訓には彌勝りて人をして良民に至らしむるに難からざるなり然るは人民の大綱を四等に分て士農工商と云ふめるが押並て大御寶と號られたるは天地國土有と雖も人民の爲の天地國土たり四時八節有て生長收藏の用有るも人民の爲に施給ふ所の造化たり若人民有ること勿らむには天地國土は無用の長物たり造化の神機亦所詮無きことなり人民の爲を以て天地造化の德立て神祇の功績成る人民を御し天下を齊給ふ故に天皇は上に坐て尊く臣民は下と在て卑く君臣父子夫婦兄弟朋友の等定り長幼の序成る顯見蒼生と宣給ひ天下公民と詔給へること豈虛しからむやは然れば人民（ミナヒト）の上に於ても身こそは等級しからざるが故に卑く賤しかりけれ上より大御寶と指給ふ所に貴賤を別たず長幼を隔てず同等なれば天下に在と有ゆる人民の內何れか顯見蒼坐に在ざらむ誰かは大御寶の列に漏奉む此を以て此を思ひ此を思へば彼修理固成の業を脩め德を積て神祇の恩賴に報奉る可く修理固成の業を勉め國を弘めて天皇の公民と仕奉る可きなり斯在は孝

悌忠信の道其中に在て眞に天下の良民にして大御寶の大御寶たる所以に違ふ所勿るへきなり此に反すれば叛民たり賊子たり幽には神祇此を糺彈し顯には朝廷此を殃罰す天下の人民を大御寶と美稱給ふ御旨如此くなるを麁略に心得たるも古今に多くて上より大御寶の美稱を賜りたる其公民の一員に在ながら其大御寶たる所に拂戻て修理固成の天賦を脩めず天下の遊民と爲て佗業を奪ひ人功の掠むる類も多かり顯見と所思す神の御心に如何に心惡く淡め給ふらむ朝廷の罪人と爲て古今其殃罰を遁れぬ事なるに心着ざりけるは如何にぞや惡むべく將憐むべき限ならずやも　記傳廿三二十四丁に云く意富美多訶羅は書紀に民人民萬民兆民黎民民庶衆庶黎庶億兆人物人夫庶人居人戸口百姓元元蒼生業々黔首なと皆然訓り但美は皆牟と訓り其は漸後の音便なり古言は正しく美と訓べし　大御寶と云義なり又王民公民良人などをも然訓事なり是等は賤奴に對へて云稱なり中略江家次第非常赦に撿非違使の仰る詞に依其專殊以免給各罷ニ還本貫ニ重犯不レ奉レ仕爲公御財御調物備進禮と有又廿四丁六十浄公民の註に云く公民とは奴婢に對へて良人を云稱にて古書に常多く見ゆ孝德天皇御紀には王民とも有り良良人良男良女などゝ共に皆意富美訶羅と訓り續紀四十に公民之徒變作ニ奴婢ニ云々又廿九に寺神封戸百姓云々公戸百姓云々一准ニ公民ニ云々と有は神戸寺戸の百姓と對へて公戸の百姓を公民と云りなと見えたり但必しも奴婢に對へねども唯天下公民など云は民と云ことなり中略俗民と云は下樣の賤き者に限れる如くなれども然に非ず天皇の御上より貴人をも押並て稱ふことなり臣連伴造國造八十部天下公民など並云ふ時は公民は下樣の者を云るなれども又貴き賤き天下の人を凡て公民と云る事も有り孝德天皇御紀凡國家所レ有公民大小所領人衆云々など有は正しく官位を帶て人衆を領る程の人を指ても公民と云り又名々王民とも有は朝廷に仕奉る凡ての人共を王民と云り　○取作奧都御歲は祈年第二詞に皇神等能依左志奉牟奧津御年乎云云又第十詞に皇神等能寄志奉牟云々など有と全同意の續きなり故此にも皇神能御刀代乎始氐云々と云り上に說る如く此詞を云て皇御孫命の料給ふ御縣のことを聞せたるを思ふへし然るを賀茂翁の言に祈年祭詞には云得て聞ゆ此には能も居ぬ心ち爲らると云れしは其詞に對へ考られざりし僻說なり鈴屋大人も取作奧都御歲者の七字除去て宜し此言此處に有ては甚々拙しと云れ平田翁の本にも削去れたれど共に誤なり　○手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取將作奧都御歲乎八束穗爾は祈年祭詞の下に註り卷一第二詞の下見べし考に此次に茂穗爾などの言今一無くては文の調足はず聞ゆと云れしは他例に依に信に然る言なれど無くても能く文義通りて聞ゆれば難む可きに非ず　○皇神能成幸賜者は龍田風神祭詞に見ゆ又次なる御縣山口神詞に汝命乃成幸波閇賜者と有る例にて祈年第二詞に皇神等能左志奉牟云々皇神等能依左志奉者同第十詞に皇神等能寄志奉牟云々爾寄志奉者などの如し但依左志奉牟の方は某神の御功德の任に善作成賜ひて即其を皇御孫命に寄奉給ふなり祈年祭詞なるは共に然り能く其神々の御功德に合せて知るべきなり　成幸賜とは已命の其稻穀の神靈と坐て

其を出來ら令給ふを云り然れば依左志奉は顯明に抱はり成幸賜は幽冥に預る事なり熟く事實を思ひ分ちて悟る可し（古より此二を打任せて同意の如く思紛へしと見えて此解説無きは疏漏なりと云むも強言ならず）寄とは佗より其物を寄せ屬て人をして成しむるを云ひ成とは其物に就て自成し功しむを云ふことと云も更なり故御年神分水分神なとは其稻靈に非す耕作の事に御功坐し水分の事に御功坐て稻穀の事を幽贊て其成功は田人を顯に立て令遂給ふが故に依左志奉牟と云ひ（古語拾遺に御歳神發レ怒以レ蝗放二其田一苗葉忽枯損似二篠竹一云々と有な以て稻靈に非す稻を作る神なるを知べし又水分神は水を分配て稻を育養給ふと云も更なり依左志奉と云と成と云との差別も此に出たり）此廣瀨神は稻穀の靈神に坐が故に善成て田人に賜ふ由を以て成幸賜とは云り（次なる六御縣山口神詞なるも然り此神等は已にも卷四第九詞に說るが如く此廣瀨神の支屬神も在すが故に成幸閇賜者と云ひ龍田風神祭詞なるも其註に云るが如く稻穀の生て長ることは風氣の搖動に依るこなるが故に此廣瀨神に殊に親しく御在る故を以て此詞と同じく成幸賜と有り）幸は神等の人に相預給ひて幽より其功を立德を積しめ給ふ活機妙用を幸魂と申し其功を立德を積む事は人爲に在れども其本來は神の幽贊給ふ御功德の預るが故に其の顯るゝ所我が所業ながら己が思慮の外に成り意表に功立つ此奇魂と申す者なるか此なる幸も其例にて佐伎とは神靈の放分（サカリワカリ）て幽より相預て人として其物を成し其ことを令遂給ふ此即神の御守護にて有也御守護有が故に無恙く平安なり（萬葉五に佐伎久伊麻志巳十三には眞福また福とも有此外幸眞幸と甚多見ゆと記傳十六に見えたり）佐伎波閇は幸延（ノビサカ）にて延は其事の滯り止る事無く延然なるを云ふ神の御守護の窮盡無く打延て長久しかるを云なり（但此波閇は辭なるが故に幸延と續見まじきが如しと雖も然らず其辭と云へど各其格有て活用運轉の法則有が各其自己の意義有る其を帶て活用運轉せる其活用運轉は過去現在未來を分別し自佗を差別め禁止希求を令知るとの用なり然れど其義に於ては何處迄も同じからざるとを得ず通ると云も更なり偖此の佐岐波閇の例は災（ワザハヒ）業（スギハヒ）味（アシハヒ）種（クサハヒ）などの波比何れも延の義なるを以て悟可きなり）賜者は秋祭爾奉牟登に係たるなり祈年祭（第二第七第十）詞共に寄奉波と有るに同じ（何れも秋祭に係たるを讀味へて考ふべきなり）○初穗者汁爾母穎爾母は第二詞に出（卷一見るべし卷四第十詞にも見ゆ但彼には穎爾母汁爾母と云て此に汁爾母穎爾母と云るに次第違へるに似たれども別意有に非ず第七詞には御前者と有り但其は少し別義有るとなり）○千稻八千稻は風神祭詞に八百稻千稻と見え又祈年第二詞に千穎八百穎爾奉置氐云々など有に同じく稻穗を數多に奉て酒にも釀り或は穎乍も奉るを云なり但本に八千稻を八十稻に誤れるを賀茂翁の改られたるに依つ（千代に八千代になど常も多く云例なれば必八十稻には非で八千稻なるべき筈なり）偖稻（イネ）を伊爾と云ひ志爾と云に就て思ふに共に氣根と云ことなり氣を氣吹など云時は伊と云ひ息長（オキナガ）を志長（シナガ）と云など氣息を共に伊と云ひ志と云證なり爾とは其本着く所を以て云稱なり偖此を氣根（イネ）とも息根（シネ）とも云ふ所以は已に此卷首に說る如

く食氣を稟受て氣息調ひ世に長存し久視する者なれば氣息の根源にして壽域の保護つ所たり此故に稻を諸穀の最首とし氣息の淵底とは爲るなり上古より此大忌風神兩祭を共に物爲させ給ふ事は斯在る故有に依れり然れば大忌神は稻穀の神靈にして其功能の顯見るゝ所風神の御幽贊なる事云も更なり（巻一第三詞の下に云る事共を考合すべし）〇引居氐は風神祭詞には引居置氐と有り引とは持運ふ事を云なり出雲風土記に國引坐八束水臣津野命と國を引寄て造給ふ由なり又此第七詞に八十綱打掛氐引寄如事と有も持運び寄る事なり（宮材を運ぶを宮木引と云など此に同じ）居氐は崇神天皇御紀に坐と作り古書の例居忌瓮又齋戸乎忌穿居など有は多く地上に置事を云れば引居氐は奉るより前に先其社の庭上に持運び居るを云也斯在ば居は惣體を合せて大きく置は其を分る所有て小さなり熟此差別を心得可き者なり祈年祭詞には此ことを云ざる故に初穗乎波云々奉置氐云々稱辭竟奉牟と云り此の居は其稱辭竟奉牟に當りて究めて多く盡す意を含たり鈴屋大人說に引居氐と云て又如二横山一打積置と云るも甚拙しと云れたれど其は居と置とを混同に思僻められし說にて依難し此詞には

庭上に持運び居備神前に如横山打積置く事の綱目を委しく分ち云るは風神祭詞には其二を一に約たる故に引居置氐と云る心を潛めて思ふ可くこそ（若其居（スエ）と置と同意の言ならむには其風神祭詞なるも拙きに似たり言各別なるに依てこそ云知ぬ意味も見ゆる物なりけれ）〇如横山打積置氐は千稻八千稻に引居たる稻を汁と爲し穎と爲て神の御前に積置く事の多在るを云り（此同語第七詞及春日祭詞次なる六御山口神詞にも在り其說は巻三第七詞の註に云るが如きに事乍此は上に引居氐より續けたるに少か意に味ひて聞くべき事有り）〇秋祭爾奉牟登は龍田風神祭詞にも有り考に今四月の祭に七月の祭を云なり其七月には此等の言を換可しと云れたるは尤なる言ながら甚能き說なり成る程其文を換て用らるゝことなる故に成幸賜者は將然の言なれば其を成幸賜問者と已然の言に言換へ此なる如横山打積置氐秋祭爾奉牟登も如横山打積置氐奉久登と換るなる可しとは思ゆれ共大なる僻說なり次なる風神祭詞の下に云ふ可し（予も先には如此く一二字を換たるながら用らるゝとは古文の妙處なりと思へしかども中々に曲說なりかし）〇皇神前爾白賜登宣此にて神主祝部共の稱唯有り合せて三段なり（考に云く龍田祭には此にも神主祝部等諸聞食登宣と有此にも有べきに落たるにや上にも云如く此文には字の落も衍も甚多し重胤云く此詞の始に云々稱辭竟奉久乎神主祝部等諸聞食登宣と云る故に中にて二段共に略るなり此次に至て六御縣山口神詞に至ては其結なる故に神主祝部等諸聞食止宣と云り又此文には字の落る衍も甚多しと云れしも心得ず上に說云ふ如く聊も衍文脫字有ること無くして甚々美麗しく美好き古文なるを如何に思混られけむ）

倭國能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾母

此は廣瀬大忌祭に屬て御縣六座山口十四座の神等を祭添らるゝに依て山口神に辭別て令申給ふ詞なるが其御縣神に申詞無くして山口神詞耳有を以て脱たるかと思ふに然らず御縣六座の神は祈年第八詞の下に註る如く御食津神に御在て此廣瀬坐大忌神と同神に御在るが彼は蔬菜のことを主として祭らるゝに依て其詞も殊に別に在を此は稻穀のことを主として祈らるゝことと故に其趣意に於ては大忌神に申させ給ふに異ること無きを以て其詞は此大忌祭詞を相通して用給ふにて有べきかと思ふに然らず此は御縣山口神を一に連たる辭別なり下に云ふを見るへし其證は本朝月令に右の大忌詞を擧られたるに此を記さざるは辭別の文なるが故なり　四時祭式大忌祭條に是日以二御縣六座山口十四座一合祭其幣物者座別五色薄絁各一尺倭文五寸木綿二兩麻五兩槍鋒一口料鐵用二社分一　四座置八座置各一束楯一枚庸布一丈四尺褁葉薦二尺共用二社料一但御縣六座別加二絁三尺一と有を以て見れば其御縣山口神等共に廣瀬社にて饗し祭らるゝ也其用二社料一と有れば當日廣瀬にて祭られ其幣帛六御縣の刀禰に屬て其の本社に奉らるゝ事と聞えたり然るを鈴屋大人説に此段殊に拙く甚しき非事耳なりと云れしは深く思はれざりし者なり次々この因々に論へるもの有を以て見べし〇倭國能考に大和と作以を思ふに慶雲和銅の間の文ならむ」と云れたるは委しく見られたるなれと慶雲和銅の文ならず慶雲和銅以前に筆記されたるにて其實は崇神天皇以來の古文なり其は天武天皇四年に始て祭られたる趣なるに六御縣の古名は孝德天皇以前の稱なるを思へ〇六御縣乃の乃字は及字にて山口の上に有つる字なりけむを誤て乃の假字としてに小書には爲る也若辭の乃ならむには能を書べき例なり此下にも六御縣能と見え風神祭詞にも倭國六縣能と有をも思ふへし　六御縣は所謂る御縣六座にて卷四第八詞條に記せる如く高市葛木十市志貴山邊曾布と有にて神名式に大和國高市郡高市御縣神社名神大月次新嘗葛下郡葛木御縣神社大月次新嘗　十市郡十市御縣坐神社大月次新嘗　城上郡志貴御縣座神社大月次新嘗　山邊郡山邊御縣坐神社大月次新嘗　添下郡添御縣坐神社大月次新嘗　と有る以上六座なり但此御縣神は古事記に坂之御尾神と有り坂之御尾と有を以思へば葛木より始れるにや尚上に云るを見て知べし此中に高市と葛木と二の御縣には坐字無きは本より非ざりしか脱たるか御縣は御園と云に同じきを以て今京以來は園神と申て祀ふと内膳式に見えたるが如し園韓神とは異なり思混ふへからず三代實録貞觀二年五月の處に授二園池司無位御氣津神從五位下一と有る證文に依り遂に進上りて終

に御縣坐神は御食津神に坐事を悟明めて巻四（第八詞條）に云るが如し（園池司は所々の御園より日々の供御料物貢上るを收る司なるか各其御園を主す園神有を取較て司にも祭祀らるゝ事なり）偖此六御縣神の大忌神と同神にして各別に祀れ給ひ其祭の大忌神に屬るを思ふに必崇神天皇御世に此廣瀨社を祀祭られし間より各其御縣の御守護の爲に廣瀨より勸請爲られし者にて廣瀨は其六御縣の本宮と云べき樣なり（此御縣坐神社を各其處々の縣主の祖神の如く心得たる人も多かりと見えたるは如何ぞや其縣主の遠祖たる人の祀祭りけめども其所祭は別にて上に云る如く御食津神也思誤ること勿れ）偖廣瀨を本宮とし六御縣を枝社として國造縣主を始め六御縣の刀禰男女に至迄參集て其祭の事を執行し也けり四時祭式大忌祭風神祭云々國司次官以上一人專當ニ行事ニ即令ニ諸郡云云ニと見え此詞に倭國乃六御縣能刀禰云々と有にて炳焉し（此等は天武天皇以來の遺制なるべけれど其上古は國造は主と廣瀨龍田神祭を主と掌て仕奉り六御縣の縣主は各々其御縣神を常には祀仕奉り其祭に臨ては刀禰男女に至迄率ゐて其本宮に參集ひ國造と共に其祭祀を執行へりけむと今も眼前に見が如し）偖此詞に皇神等乃敷坐須山山乃自口狹久那多利爾下賜水乎までが山口神の御功德に抱り次に甘水登受而天下乃公民乃取作禮留云々は御縣神の御所業なるを錯綜（ヒトツ）に爲る古文の妙なる處なりと雖も六御縣乃と有る乃字を及字と見ざれば此にも彼にも滯る處の出來て事實に協はず式文に合す是を以て故大人の

此文を疑れし者なり（鈴屋大人說に所々の山口神は宮材のことに就てこそ祭給へ水の爲に祭賜ふ由無しと云れたれど其宮材のことは二月祈年に祈申給へれ此には水の御祈ならずは宮材のことに就て此に祭給はむ由も知て無き害なる者をや）○山口爾坐は四時祭式（大忌祭條）に山口十四座と有る此なり此中祈年祭詞に見えたる飛鳥石寸忍坂長谷畝火耳無等の六座の外は四時祭式（祈年祭條）に見えたる吉野巨勢賀茂當麻大坂膽駒都祁養布等の八座にて神名式に大和國高市郡飛鳥山口坐神社（大月次新嘗）十市郡石寸山口神社（大月次新嘗）城上郡忍坂山口坐神社（大月次新嘗）長谷山口坐神社（大月次新嘗）高市郡畝火山口坐神社（大月次新嘗）十市郡耳無山口神社（大月次新嘗）吉野郡吉野山口神社（大月次新嘗）葛上郡巨勢山口神社（大月次新嘗）鴨山口神社（大月次新嘗）葛下郡當麻山口神社（大月次新嘗但今本に無きを一古本又一本に依て補つ葛下郡大十三座と有數にも合り）大坂山口神社（大月次新嘗）平群郡伊古麻山口神社（大月次新嘗）添下郡夜支布山口神社（大月次新嘗）山邊郡都祁山口神社（大月次新嘗）と有此なり但祈年祭詞に載れるは右の如く六座なるを此は國中の山口神を共（ヒト）つに祭る故に合せて十四座なる也然れとも右の祈年祭も祝詞の上にてこそ六座なれ其餘の八座にも馬を奉る事四時祭式に見えたるが如し其外畝火耳無の二座は右の六座の列ながら馬を進せらるゝ事は見えず（但坐字の有と無と有れど異なる義有に非ず元より無りつる者なるべし）偖此神等を

祀給へる本緣は卷四（第九詞條）又此卷首にも云る如く崇神天皇九年御紀に春三月甲子朔戊寅天皇夢有二神人一誨レ之曰以二赤盾八枚赤矛八竿一祠二墨坂神一亦以二黑盾八枚黑矛八竿一祠二大坂神一云々と見え古事記同段にも於二宇陀墨坂神一祭二赤色楯矛一又於二大坂神一祭二黑色楯矛一云々と有共に同事なるを記傳廿三（三十九丁）に大坂神は右に引る神名式なる大坂山口神社（大、月次新嘗）なるを考徵されて其說に云く御紀の文と龍田風神祭詞に合せて思ふに此水垣御世に如此殊に祭給へる神等は祈年の爲也けむを凡て祈年には處々の水分神山口神を祭給ふ例にて祈年祭又月次祭の祝詞にも山口坐皇神等能前爾白久云々水分坐皇神等能前爾白久吉野宇陀都祁葛木登御名者白氐云々と並云ると此に墨坂神（宇陀水分神社なり）、大坂神（大坂山口神社なり）と並て祭賜ふとを思ふ可し三代實錄に貞觀元年九月風雨の御祈に遣レ使奉幣四十五社の中多くは山口神と水分神とにて其中にも大坂山口神宇陀水分神も入れり」と云れたる言の床しき說なるに就て（但此は文意を此に續る爲に大に取捨して此に引出たり其心して見るべき者なり臨時祭式祈雨神八十五座の中に此十四座の山口神も列加給ひ又水分神等も此列なり然るを大祓詞後釋附錄なる大忌祭條に山口神は宮村のもとに就てこそ祭給へ水の爲に祭給ふを由無し水の御祈には水分神をこそ祭給ふとなれ又惡風荒水爾不二相賜一と云事も御縣神山口神には似着ぬをなり」と云れしには記傳の如き美き說を出し乍此詞の續きの且（フ）と見ては然は聞え難きに從て不意く思脱されたる者也然れば記傳の方を取て此說は捨て可なり）此廣瀨大忌神も龍田風神と共に同崇神天皇御世に勸請（ミヤマツ）れると此卷首に考記せる如くなるが其に屬て此山口神も祀れ給へるけるを御紀には廣瀨龍田神の事を記漏され祝詞には御縣山口神の事を載られて水分神のことは祈年月次に耳有て此大忌祭の列には預給はざる者なり然れども此詞に皇神等乃敷坐須山山乃自レ口狹久那多利爾下賜水乎までの文は其水源たる山口神の主る所甘水登受而云々は御縣神の流末を受て田地を養育給ふ御業を云て水分神のことの見えざるは其山口神と共に御功を施給ふが故にて元より水分神を此に祭る事にては非りけるなり（能く文意を味へて思ふべくこそ）偖此山口神に黑盾黑矛を奉らるゝ事は御紀其の外は見えざれども已に上に引る大忌祭式なる幣物の中に楯鉾一口楯一枚と有は其餘風を傳たる者なり（但黑盾黑矛などは當昔初て大坂に祠給ふ時に一度奉られし迄にて其後は年々に增減など有も爲けむな式文御定の由に至て各一口一枚と爲れるなり）○皇神等前爾母は右の御縣神六座山口神十四座を合せて申せるなり上に云る如く右の神々は大忌祭に屬て廣瀨社にて祀らるゝ事爾母の辭にて通えたり偖其幣物は各其社々に頒ち納らるゝ事は猶祈年祭

を神祇官にて物し其幣物を頒ち行はれたるに各諸社の神主祝部共の其を受賜り持下りて其社に納めて祭を行ふに異ならず四時祭式（大忌風神祭條）に國司次官以上各一人專當行事即令諸郡別交易令供進贄二荷其直並米酒稻並用當國正稅自外所司請供云々と有を思ふべし（此に就ても廣瀨龍田祭に就て御縣神山口神を祭りて當國司より始め擧國押並て祭なると所知たり）

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎明妙照妙和妙荒妙五色物楯戈爾至萬氏奉

宇豆乃幣帛の帛字今本に脫せり此佗の古書共には幣字一字を書て美氏具羅と訓る常の事なれども此本に例無れば決て脫せるにて有べき也故今補つ（世に常字の有る善古本有べければ如此く補置て其出を待のみ）○明妙照妙和妙荒妙五色物楯戈爾至萬氏奉は四時祭式（大忌祭條）に是日以御縣六座山口十四座合祭其幣物者座別五色薄絁各一尺倭文五寸木綿二兩麻五兩檜鋒一口（料鐵用社分）四座置八座置各一束楯一枚庸布一丈四尺裹葉薦二尺共用社用但御縣六座別加絁三尺と有此を云なり（但四座置八座置は右の幣物を載る料なり）

如此奉者皇神等乃敷坐須山々乃自口狹久那多利爾下賜水乎甘水登受而天下乃公民乃取作留奧都御歲乎惡風荒水爾不相賜汝命乃成幸閇波賜者

上に楯戈爾至萬氏奉は其御縣山口神等を廣瀨社に合祭て當日其幣物奠らるゝ現在を云ふ故に多氏麻都流と訓み此なる如此奉者は其廣瀨社より御縣六座山口十四座の神等の社々に各贈て進ら令る將來の事を云故に多氏麻都良婆と訓べきなり（然らざれば今奉らるゝ幣物のことを云ずて秋祭の幣物の事耳に成て佗例にも異なればなり心を平にして味ふべし）○皇神等乃敷坐須は山口神御縣神に係て云なり敷坐の事は上に出（卷二第四詞の下に云り）然るは山口神は水源より出る水を狹久那多利に下賜ひ御縣神を其を甘水と受賜ひて田地を養育給ふ事を下に云る大網を此に如此云ひ上に倭國能六御縣及山口爾坐皇神等前爾母と云るを此に受て其神等の功用を云分たむ料也皇神等乃敷坐須とは其功用を施給ひ其地を主領き在すを云ふ事云まくも更なり（此を唯に山口神に耳係て心得むは無下に此文義を得悟らぬ所爲なり）○山山乃自口は新年（第九詞）の下に云る如く山口を云なり然れど山乃自口と云べきを然は云ずて山々乃自口と云るは右の十四座の山口神の主領き在す山々を漏さず云が故也（然れども其說に於ては少も異ることを無し卷四に云るを見る可なり）○狹久那多利は大祓詞後釋なる佐久那太理の註に佐は例の眞にて眞下垂なり川水の山より落る形容を云り

偖然水の落る所を久良とも多爾とも云ふ久良は久那多爾は多理にて共に久那多利より出たる名なり（谷を久良とも云る事古事記傳五關淤加美神の處に委云るが如し○冠辭考石走垂水の下に云く垂水とは即瀧のをなり今も遠江の奥山人は大なる瀧をも多流と云り同山中に今多流山と云ふ山、名有も其處に三の瀧の落れば云なり）萬葉十七（十七丁）に鶯能奈久久良多爾と詠るも久那多利と通て唯谷の事なり又神名帳なる近江國栗太郡佐久奈度神社を櫻谷と云を以ても久那と久良と同じき事を知べく又此社は勢多より二里計下鹿飛と云所の瀧の落口の東岸に在り此にても狹久那多利の意を知る可し然れば多爾と云も久良と云も本水の下り落るより出たる名なり（考に久那の約加なれば逆垂ゐ延て狹久那多利と云りと云れたるは心得ず水は本より下る物なる故に上るをこそ逆登ると云へ下るをば爭か逆と云む且佐加を延て佐久那とは云ふにも非ず）と云れたるは實に然る言なれば今云べき節も無に似たれど予が心には狹久那多利は狹回垂には非しかと所思ゆ久那は久良とも相通ひて谷の事なる事は上の說の如し其谷の形容はしも右に左に回りて水の流るゝ者なればなり物の眞直ならぬ事を久彌流と云事は古始太元玫（國之常立神また來名戶之祖神條）に云る如く續紀宣命に久奈多太禮と云ひ常も頑愚など云ふ久那は回の意にて正路ならぬを云なり今も東國語に垣を久彌と云ひ循巡る事を久彌流と云も古言の遺れるなり（此久奈多夫禮又頑愚などの久那の例は源氏物語に久彌流と云ひ久彌久彌志と云語有て何れも同事にて眞正ならず片偏て傾け何れるなり）水の谷に沿ひて流るゝも回る處に當て勢を增し瀧つ流を爲す事現に知る如くなれば是を以て狹久那多利は狹回垂ならむとは言試るなり（見む人其宜しきを取る可し或說に狹久那多利は分流垂にて山口には分流せるなりと云るは非ず）○下賜水は其山口神の狹久那多利より下賜ふなり此より彼祈年（第十）詞に云る水分神の分配給ふなり已に記傳を引て云る如く崇神天皇九年四月に墨坂神大坂神に楯矛を進りて祭らせ給ふは祈年穀の御事にて所謂る水分神山口神なれば今も其例に因准て水分神をこそ祭らせ給ふ可きに此には御縣神を祭らせ給ふ事は已く古義を失るにかと思ふに然らず水分神の水を分配給ふ事は畢竟山口神の山々の口より狹久那多利に下賜ふ上の作用なるに依て此にては山口神に祈申さるゝが其山口神より水分神に其事を令成給ふが故に別に祭られざるは主宰たる神を祭れば其支屬神は其に從て共に其祭を稟給ふ事常例なればなり山口神は水源の神水分神は其流末の神たるを思ふ可し祈年祭には山口神は其宮材の事を主として祭らるゝを以て水分神の祭は別に在なり（此疑の御在す故に鈴屋大人も山口神は宮材のとに就てこそ祭給へ水の爲に祭給ふを山無し水の御祈には水分神をこそ祭給ふとなれと云れたれど予が此說

にて能聞ゆるをや今此に思得つる任に書附く古事記に大山津見神野椎神二神因ニ山野一持別而生神名天之狹土神次國之狹土神次天之狹霧神次國之狹霧神次天之闇戸神次國之闇戸神次大戸惑子神次大戸惑女神自天之狹土神至ニ大戸惑女神一幷八神と有に就て思ふに此なる野椎神と申は師說古史徵の如く豐受氣毘女神の分御靈に坐て野神と坐し草靈と御在るが此趣を以看れば大山津見神と御夫婦(イモセ)の御中間と見ゆ然れども其本體の豊宇氣毘女神に非ず其分靈の野椎神なり混ふ可からず尚大山津見神の闇淤加美神を娶給て御子數多御在すと神世の語事に記し其說は古始太元攷に委く云りき持別而は其山野より其雲霧と爲りて國土の水源と爲るべき種子を持別ち來會(キツトヒ)て御合座事を云なり記傳に此持別而の說無きは輕く見られし者なるべし天之狹土神國之狹土神名義狹(サカ)土は字の如くなるべし此大地の內を山と區り野と界ふ此即各一區なるが故に狹土とは云なり偖雲霧の起る事は山野草木の水氣を吐に依れり但神代紀の首に國常立尊國狹槌尊と有國狹槌尊を誤なりと先師等の云つれど彼神は亦神名を國狹立尊とも申せるが實には國之常立神の別名なるを誤て別神と記せるにて此とは異意なり然れど此に似たると有國狹槌尊有て其次に豐雲野尊有は此と大小の差なり其は國狹槌尊はこの大地の圓まり凝まりたる地面の形勢に就て負坐る御名なるが豊雲野神は地外の際還の神たると此に狹土神有て次に狹霧神坐と全同じ樣のとなりけり委くは古始太元攷に云るを見る可し此の狹土を記傳に坂豆知なりと云れたるは今取らず唯狹土の土は字の如くにて土より霧の發云々と有ぞ云れたる天之狹霧神國之狹霧神名義此も字の如く狹霧なり山野草木の氣を吐たるが薰滿て雲霧と爲るを云ふ元來雲と云ひ霧と云ひ霞と云も共に同物なるが其形勢に隨て稱呼の異れる也雲は氣聚にて水氣の屯り凝る事霧は氣有にて水氣の空に滿有る事霞(カスミ)は幽水にて水の其體を氣に化て空中に靡くを云て同物異稱なり記傳に狹霧は坂限(サキリ)にて境と同じと云れたるは當らず今一の考說に字の如く霧と云れしは尤なり天之闇戸神國之闇戸神名義闇戸は記傳に說れたる如く久那太理の義にて水氣の屯凝て雲霧と爲り雨と零るゝ時は谷に水有て流るゝを云なり太理を戸と耳云事は佐久奈度神社の例なり記傳の一說に闇き意に說れたるは當らず又此なる神等の皆天之國之と負坐るは唯天と國とに二柱並坐神の名を對偁たる耳にて殊なる意は有べからずと云れたれど然には非らず天之國之と負坐るは天に屬き國に屬坐る所縁有なるべし麁忽に思ふべからず大戸惑子神大戸惑女神名義戸麻刀は門餘處(マト)にて山門より水の餘り出るを主す神なり闇戸の久那太理なるに續て心得可きなり記傳に刀袁麻理處にて山の多和美て低き所を云ふ多和と刀袁と通ふ事は萬葉などに多和々とも等乎々とも云る刀袁を切て刀と云麻理の理を略るが美と云に同じ萬葉に山の常陰と云るも刀袁陰にて山の多和美て低き所の陰を云と云れしは今依難し又今一の考に惑字の義に見られたるも非ず又神代記に大戸之道尊大苫邊尊亦曰大戸摩彦尊大戸摩姬尊と有も此と同神ゝ甚異なる傳なり」と云れしも深く思はれざりし者なり此と同し御名ながら彼は彼にて御名義異にて甚止事無き所謂の有事なるが其は古始太元攷に委く云りき如此く見るときは天之狹土神國之狹土神は山野の區域を爲し雲霧をおこす可き草木の地を定給ひ天之狹霧神國之狹霧神は其山野草木

より發る所の蒸氣を以て雲霧と爲し雨師神に此を委任給ひ天之闇戸神國之闇戸神は雨師神の雨を零せ給へるが地中に含み岩間木根より涌出で溪流るを主し大戸惑子神大戸惑女神は右の溪流より洪河と爲るい際を守護ふ神と聞えたり已に川と爲ては罔象女神の司る所なれば此神の預る處に非ず（雨宮神は大山津見神の子神闇淤加美神に坐す事委き説有て太元攷に云れば此に略きつ且卷四第九詞第十詞の下にも云りき）偖大忌神は其豐宇氣毘賣神の分靈に在すが其野椎神（亦名草野姫命）は此神より分身と在す神なれば處々の山口神十四座を此大忌祭に攝ねて祭らせ給ふ事幽契有事と通えたるに此山口神に係て山々乃自口狹久那多利爾下賜水乎云々と云ひ又惡風荒水爾不相賜と云ふ事など悉く深き所由有事也けり（能々其條理を明らめ悟るべし如此く有る上は右の山野に因て持別て生給へりし八柱神も表にこそは立給はれ山口神と共に在て其祭祀を享給ふ事云も更なり）偖卷四第八第九詞の下に云る如く同記に羽山戸神娶二大氣都比女神一云々と有る其御子神等の二派に分れて稻穀を主れると宮材を知すとなるが其事を此に合せて思ふに稻穀を主れる神等は御縣神に屬て祭られ宮材を知す神等は山口神に屬て祭られ給ふが其神等は右の祈年に祭られ給ひて今度は水の事を知る神耳祭らるゝ事と所思め（此事に就て豐宇氣毘賣神の水の事にも預給ふ由有を其は卷三第七詞の下水取の故事を引て其因に委く記せる事有併考て悟る可こそ）○甘水登受而は令義解に大忌祭謂廣瀨龍田二祭也令下山谷水變成二甘水一浸二潤苗稼一得中其全稔上故有二此祭一也と有る集解に釋云廣瀨弁龍田祭自二山谷一下レ水変甘水成而爲令二五穀成熟一祭也云々と見えたる此なり此文に依時は山口神耳ならず主と大忌神の功み坐由なり（其は下に委く說く可し）甘水とは下なる荒水の對なり甘美の謂に非ず和熟する由なり（物の熟なるを能く和熟せ令るを字麻須と云ふなど此語例なり應神天皇御紀に和を阿麻那倍と訓るを思ふべし）大同本記水取の故事に皇天神皇孫之命天降坐時爾天村雲命乎御前立天天降仕奉于時皇孫之命天村雲命乎召天詔久食國之水者未熟荒水爾在介利故御祖神之參上此由言天來止詔云々御祖命神議詔久云々天忍石乃長井乃水乎取八盛天誨給久此水持下氐皇大神乃御饌爾八盛獻天遺水波天忍石井止術云天食國乃水爾灌和天朝夕御饌爾奉獻禮云々と有る未熟また荒水また灌和など有を以て甘水は熟水にて荒水の對なる事を思定む可き者なり（但此水取の故事は食用の水なれば別なりと思はむ人も有むか然れども其は別事にも有れ甘水荒水の事は此も彼も異無し）然るは山澗より出る所の水は究て能なる者なり流るに隨ひ巖石に觸れ土砂を泳りて漸其質熟和て田園を養ふ可く又食用に充可なり山谷水變成二甘水一と

は此を云なり水は物を養ふの物たりと雖も其儘なるに合へば却て物を損るに至る此を以て此詞は有なり（予は淡路國の仁井村と云ふ山谷の地に生れて能く水の精麁に依て得失有る事を知れゝど部會の地の人は格物窮理の事を騒がしく云罵るには似ても非ず心着ぬけなるは笑ふに堪たる事なりけり我上古の如きは神隨言擧不爲國と云て實に物事を言痛く論ずる事無き國風なれども如在る事に至ては更に人智の臆度に出まじき事耳ぞ多かりける仰ても尚余有る皇神の遠御世々の故事なりけり已に賀茂翁すら考に此詞に甘水と云るは皇朝の言とも無し是も上に云る頃の文人撓て漢語を移せる僻なりけり」と云れたるなど此甘水を味の甘美の事に見成たるにて取に足ず）受而は田に受て苗稼を浸潤すを云なり此は山口神の御所爲と山々の口より狹久那多利に下賜ふ水を御縣神の其田所に在て荒水を熟和給ひて受賜り稻穀を養育しめ給ふが故に甘水登受而とは云るなり此を以て上に此は御縣神に係れりとは說たり現世の凡眼より見ては山より出る所の水の其ながらに用を爲す如く見ゆれども神等の御上にては其荒きを熟す迄に幾許か御手を勞(イタツカ)して物爲給ふらむと斯在る古文を見るに就ても其御所爲の較略は恐けれど想像奉らるゝ事なり（世人皆生賢しき漢籍意に惡く奕こりて斯在る深意を伺奉む者とも思たらず神等の如此く勞き功爲給ふ事の微細に亘りて其功德を施し漏し給はぬ事に露も心の着ざりけるこそ速無けれ豈人爲の能爲る所ならむや恐しと云も中々なり）○天下乃公民乃取作禮留奥都御歲乎は已に上に出たり但上なるは廣瀨本社へ稻穀の豐熟を祈申給へなり其は若宇加能賣命は稻穀の神靈に坐が故に唯何となく摠てのことを祈申さるゝが故に成幸賜者と云ひ此御縣神山口神は其若宇加能賣命に附屬て其稻穀を成育給ふ神なるが故に云々乎惡風荒水に不相賜と云り但其廣瀨神の事を兼て汝命乃成幸波閇賜者とは云り（此等の事能々其條理を解分て心留ざれば終に深義を見附る期無るべし少縁の人の豈知る所ならむや）○惡風荒水爾不相賜は此より下文に至て專龍田風神祭祠と大凡同しきは已にも云る如く大忌祭風神祭共に崇神天皇御世に祭初られし當時より然有けらし其幣物に於ては神の座敷に合せて異有ることなれども其御使も何も兩社を兼て一社の如く勤むる古格なるが上に兩社の神等の殊に御力を戮(アヒアナ)給ふ由縁有て其守護坐所も物に體用有が如く相輔(アヒタスケ)相ひ相輔弼御在るが故に格別の異も無なり（鈴屋大人說に此の惡風荒水爾不相賜と云事も御縣神山口神には似着ぬ事なり云々此は龍田風神祭詞を取て書りと見えて此亦漫なる言なり」と云れたれど此は且と見混へられし物にて中々然る事に非る也）惡風は時令に相應さる風氣は能く物を枯壞(カレソコナ)ふ此を謂なり此ことと委しく卷七風神祭の條に云り神祇令風神祭義解に謂二亦廣瀨龍田二祭一也欲レ令三沴風不二レ吹稼穡滋登一故有二此祭一也と有る集解に廣瀨龍田祭也草木五穀等風吹而枯壞之二此時不レ知二彼神心一即天皇齋戒願覺二夢中一即覺云龍田廣瀨祭二二社一同日共祭二其妹㚨神一亦五位以上充

ㇾ使と見えたるを以見れば大忌祭風神祭共に相通ひて其祈給ふ所等しきなり是以て風の御祈を此大忌神に物爲ることとなりけり（但大忌神御縣神山口神等相共に御力を致させ給ひ御守護有る事云も更なり尙風神祭詞の註に云るを考合す可なり）荒水は上に甘水登受而の下に云る如くなるが其は地上に流るゝ所の水は精麁に抱りて荒水と云るが此も其に異は無れども雨水の溢るゝ時は苗稼の滋漫せさる故に荒水と云るにて此は暴雨霖雨洪水の事を云なり質の麁なると物を荒蕪(アラ)すと共に荒水とは云り（縁記に有二一龍池一是號二水足池一云々是地上可三造二立社壇一云々其明日平旦水足池成二陸地一里長達二天聽一則被三立二勅使一仰二諸司百官一造二立七宇社一號二水足明神一此外眷神末社廿一所又造二立之一と有は崇神天皇御世に此社を勸請せる事を云るが一龍池など號たるこそ信られぬ水足明神など申す事此に由有げなりや）○不相賜は風神祭祠にも在り相とは暴風洪水の災害に令遭給はすと云事なり阿布(アフ)とは佗と我と相寄事を逢と云ひ物と物と相共事(アヒツクコト)を遇と云るに同じきが其は相寄り相共へき物と物と相接る事なるが其に反して挑戰ふ事をも云り萬葉一卷なる三山謌に高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎と見えたる相諍競伎の相は虛字に添る相かと思ふに然らず其反歌(ミジカウタ)に香山與耳梨山與相之時と有に合せて思ふに相は挑戰ふ事にて今も試合また相手など云ふ阿比は此例なり（此に反して善き事に用へるは靈合また合口なども云り）此も其如くにて惡風荒水の稻穀に迫り轢るを阿布とは云るなり（然れば阿布は善惡に亘る語なるを以思ふに物と物と相接向ふ事を云る事違有まじき者なり）○汝命は古事記上卷伊邪那岐命の三貴子神等に汝命者云々と詔給へる御命見ゆ（記傳七の七丁）に那賀美許登と訓べし（賀は之なり）續紀宣命（十七の廿七丁）に伊夜嗣爾奈賀御命聞看止勅天また武內宿禰歌に大雀命を指奉て那賀美古とも詠る此等に依れり（此稱記中に甚多し）前にも云る如く後世には汝と卑めたる稱なれども上代には尊む人をも云り故命とも云るなり（白檮原宮段に神沼河耳命御兄を指て那泥汝命とも詔ひ式の祝詞に倭六御縣の山口坐神等を指ても汝命と詔る文見ゆ）と有が如し自に對する佗(ヒト)を指て那とも那泥とも那妹とも那禮とも那人とも那貴(ナムチ)那賀命とも云ふ那は（那汝(ナ)なり那泥は汝主(ナネ)なり那妹那妹は汝妹汝妹なり那禮は汝在(ナレ)にて禮は我(ワ)な和禮と云るが如く形に附(ソヘ)る辭なり那人は汝者(ナヒト)なり允恭天皇御紀に見え雄略天皇御紀には那毘登と作り那貴は人を尊稱なり此等の事記傳四卷二十のひらに說あり）佗に對ひて自の事を和とも和禮とも云ひ自に對へる意を彰して吾兄とも吾妹とも我君とも我主とも云ふ對なり（但此にも和禮と云ひ阿禮と云ふ如き差別有て其用樣に異なる所有り）那は物に離るへからずして相從ふの謂なり事物の各々なるは名有て其事に從ひ食に菜と云は食に從ひて離る可からざるが故なり自(オノレ)に對ひて佗(ヒト)を汝(ナ)と云も此に同じ然れは汝が其標的として指方に限て汎からざる語なりけり（自に對て

他を指乍ら汎く向なる人を總て汝とは云べからず然し乍ら向なる人は多きにも爲よ汝等など云時は其用の方に狹る故に汎きは然は非る者也此心得亦可有也 ○成幸波閇賜者は御縣神山口神共々に惡風荒水の災難を避て稻穀を能く成幸賜はゞとなり 此例上に已に出たりき

初穗者汁爾毛穎爾毛瓺乃閇高知瓺乃腹滿双氐如横山打積置氐奉牟登王臣等百官人等倭國乃六御縣能刀禰男女爾至萬氐今年某月某日諸參出來氐皇神前爾宇事物頸根築拔氐朝日乃豐榮登爾稱辭竟奉久乎神主祝部等諸聞食止宣

初穗者云々は龍田祭祠なる此と同事の下に委しく云りき○王臣等百官人等云々は次なる風神祭の結句にも王卿等百官能人等云々と出たり其は當日朝廷より御使に進らせ給ふ人々も其行事に當る國司以下の人々も大忌風神兩社の事を兼行るゝ令また式の御定の如くなれば必然有へき者なりけり但此語の主と有る大忌神祠の終に云べきを客に合祭る此御縣山口神祠の下に云るは此彼の差別無くして共に其祭に預給ふが故なり所以に令式共に大忌祭と云て御縣山口神の祭事を別に擧られざるなり 鈴屋大人說に王臣百官等云々參出來氐と云るも心得ず此祭に廣瀨社には百官人諸の詣る事も有むか其尙思束無を御縣又山口神社へ耳百官人の詣む事有べくも非ず云々此は龍田風神祭祠を取て書りと見えて漫なる事なり」と云れたるは御縣山口神祭の廣瀨社に隷て其祭をも共に行るゝ事を思漏されたる說にて依難し 此を以て思ふに祭式は其時世に依て變易有る事と見ゆれども此祠は崇神天皇の當昔の文を儘なる者と所思たり其は上に引る天武天皇御紀四年の處なる大忌風神を祠らるゝ所にも王臣等百官人等の參向るゝ程は甚じき事とは見えざるに此祠の趣の甚く齟齬て見ゆるを以證す可也然れば式なる此祭條に差王臣五位以上各一人充使と有は往古に皇子等を始奉り臣連伴造及官々の人等の參向ふ事春日大原野祭などの如夥しかりけむを今は王臣五位以上の人各一人を進らせられて形計り行るゝ事にて有し者也此祭の上古には似てしも非す甚衰微たりし事は令に載らるゝ所は甚しき樣なるに四時祭式の幣物の員數なども餘社よりは劣りて見え貞觀儀式江家江第などにも其儀式次第を載されざるを以て祝祠の旨に違へるを察ふ可し 此事尙風神祭祠の下に委云を見べし ○百官人等の百は風神祭祠に百能物知人等と有と等しく諸に當りて

百官人は諸官人百能物知人は諸能物知人と云むが如し八十伴男八十氏人など云むが如く數の多き事を如此樣に公然に都云ふ古言の格にて必しも漢籍に倣へりとには非ねど自然相似たる也大祓詞後釋上に百官と云事は何時の間より云初けむ甚古くして古事記にも見えたり然れど此は本漢籍に倣へるなるべしと云れしは然る言の如くなれ共已に崇神天皇御代に出來る風神祭詞に百能物知人等の名目有る上は其頃未漢籍の聞え無き其程より云物つる也又都加佐豆加佐とも訓べし記傳三十二(五十六丁)に云く古事記明宮段に百官恭敬往來と見え若櫻宮段に百官佘拜なども見え續紀宣命に官々又百官々とも有り人大祓詞に天皇我朝廷爾仕奉留官官人等など有り書紀に百寮百官有司など然訓り又毛々能都加佐とも訓り○倭國乃六御縣は上に出卷四第六詞また此卷にも委く云り○刀禰男女爾至萬氏は處主(トネ)にて戶母(トシ)を男女に依て其稱の易る也戶母は女に限れる事云も更なるが刀禰は打任せては男の稱なるを比賣刀禰と云は女の稱とも成れるなり故此に刀禰男女とは云るなり因に云女を戶母(トシ)と云事は允恭天皇二年御紀に出たり神名には神名式に出雲國出雲郡神魂意保刀自神社見え文德天皇實錄齋衡三年の下に造酒司酒甕神大邑刀自小邑刀自と見え造酒司には右の外に次邑刀自と云も見えたり天武天皇御紀に夫人を意富刀自と訓み萬葉集には吾兒之刀自なども有り類聚國史節婦部和邇部廣刀自女漢部福刀自多產部に村國連等志賣三村部黑刀自などは唯婦人の稱なり谷川氏說に袖中抄に戶自と云事は或は女官なり或は官ならぬと老女にも若女にも涉りて云り今按家自(イヘトシ)見二現報靈異記一主人母(イヘトジ)見二遊仙窟一波々刀自阿母刀自見二萬葉集一此指二老女一也薩戒記曰內侍所刀子年來在二南朝一此女官也云々と云る如く老若に涉て稱ふ號なりけり俗戶毋(トジ)は處知(トジ)にて其家の事を女の專と取

疑ふより出たる稱ならむ　偖此に刀禰と云るは倭國六縣の縣主より始て其處々の里長を云なり此にて刀禰は處主(トネ)なる義な察む可なり鈴屋翁の刀禰てふ名義は伴之部なるべし母を省て能弭は爾と切れりと云れたるは今取らず記傳卅三(五十五丁)に此祠又風神祭祠を引て其次に續後紀九に公卿百官及刀禰等また諸祝部刀禰等西宮記五月五日條に內辨云刀禰召少納言唯出召王卿以下列入又釋奠條に上卿宣云刀禰奉レ入禮與諸太夫以下入レ自二南門一又九日宴條に云云大節大夫稱二刀禰一云云仰レ召二刀禰一云云神樂立歌に伊世之末乃安萬乃止禰良可太久保乃計大神宮儀式帳に二箇郡司子弟及諸刀禰等中右記に嘉保二年云々大原刀禰等爲二雨院下部一不レ隨二行事所召一歟又西七條刀禰申二同爲二下部一不レ進二行事所召ノ針事など見え伊勢神宮の書共に宇治鄉刀禰沼木鄉撿刀禰諸鄉刀禰小俣村惣刀禰職射和村刀禰職など後拾遺集神祇部祠書に里の刀禰とも有り散位をも刀禰と訓み命婦官人などを比賣刀禰と訓り凡て刀禰とは元上中下に亘りて公に仕奉る者の總名にて甚賤き品の者迄を云り故後には白賤稱の如くにも成れるなり神樂歌に海人の刀禰と有も海人は公の御贄を捕となむ仕奉る故に云り里の刀禰は村長などを云なるべし○今云庭訓往來と云者に淀河尻刀禰と云も有　吏部王記に百官主典以上稱二刀禰一也と有は主典は最下き官なる故に云るにて此は百官に就て云る

なり然れば主典より下をば刀禰とは云ずとには非す偖主典以上と有ればは上は大臣迄をも云事知る可し（然るに或は六位を云と云ひ或は六位以下を云と云る說などは皆非なり西宮記に刀禰召と有て王卿以下列入と有を以ても王卿以下皆刀禰なることは著明きなるをや）偖此刀禰と舍人とは本は一名なりしが後に別れたる者かの疑有り（師の考に刀禰は後の稱にて本舍人より轉りたる者なりと云れしかど然には非ず刀禰も甚古き名とこそ聞えたれ且舍人より刀禰には轉ましく若本一ならば舍人と云は刀禰よりぞ出つらむ偖又舍人をも理を略きて云しかど所思しき由有り）御紀に欽明天皇の御子に舍人皇女と申す有を古事記には泥杼王と有は杼泥を下上に寫誤れるか杼字は濁音なれば疑しけれど猶舍人を刀禰とも云しとは聞ゆる也（當時御子等の御名は多く其御乳母の姓を取られたれば此も然るべし姓氏錄に河內國地祇等禰直また未定雜姓に舍人と云姓有り偖又後世の書等には彼惣名の刀禰のことを舍人と書ること有り此は何と無く混れて書るが將舍人をも刀禰とも云ながら借て通はし書る者か）云々と云れつる如く刀禰と舍人と本は必一也つる後には別物になれりし者なりけり（但此記傳の說は舍人のことを說るゝ因に刀禰の說にも及しなるが刀禰と舍人と別物と爲て云ふ舍人のことに今は用無れば古く刀禰と云りしことに就たる說を耳記せり所以に甚く文に取捨有て引り見む人本書に引合せ見て我が取れる所を知べき也）○今年某月某日風神祭祠には今年四月（七月者云今年七月）と有り但此に某月某日と有からは右の風神祭祠に依て四月七月成事は著ければど古必しも其月の內にて然る可き日を取て行れし者成事此卷首に云が如し（考に某月某日と書れたれど四月と七月となることは天武天皇御紀より後も均しくて日耳古は定無りしなり然れば其日の定め無きに引れて暫く某月とは書しならむ斯在ば此文書く迄は日の定り無なるも知べし其後各四日と定られたりけるを式の時に至て本の儘に尙記されて加此は有ならむ」と云れしは然なり但此文書く迄は云々と云れしは此文を奈良宮の頃に作れりし者と見られたる誤なり此文の甚古くして風神祭祠共に崇神天皇の御代に成れりしこと己に云る如し）○諸參出來氏の諸は上に見えたる王臣等百官人等倭國乃六御縣能刀禰男女爾至萬氏と有を取都て云り（尙諸のことは己に第一詞の下に委しく云り考ふ可し）參出來氏風神祭祠には參集氏と有り此社に諸の詣來る事を云ふ事人の知れるが如し（參は罷の對なるが其言義は大殿祭詞參入罷出の下に說く可なり）○皇神前爾宇事物頸根築祓氏は上に出（卷三第七詞）○朝日乃豐榮登爾は新年祭詞及次なる風神祭詞伊勢大神宮六月月次祭詞同九月神嘗祭詞出雲神壽詞等に見えたるが大祓詞に夕日之降と有る對なり其說は己に祈年祭詞の下に說置しが視動實動の事は吾古學の徒と雖も必知ては得有ましき事なるに依て今因に云むとす先宇宙の所在天日は天の最中に位して終古に動く事無く六合の柱礎と爲り天極に正對（ムカヒ）て世界の樞機たるが故に五星及びこの大地は常にその周圍を運旋て有が地上に在る人我住る大地と三百六十五日餘にして公運（オホメグリ）を爲て一歲春夏秋冬を爲を知ず又一歲に三百六十五回餘の私運（コメグリ）有て一晝夜を爲事を知ず人の望視る所天日の南至し北至するに依て一歲春夏秋冬を爲が如く且天日の一歲三百六十五回天を旋

轉くが故に晝夜を爲が如く所見るなり此を視動と云ふ然れども我動て彼は實に轉らざるなり所以に大地靜なるが如しと云へども實動なり 但此等は後世天學家に號る所なるが我古學の徒と雖も天外に身を置ず何ぞ如此き實理を知ざるを可と爲む 古書を讀む者先此事を心留て見ざれば甚不具なる事こそ多からめ今視動實動の例を示さば古事記上沼河日賣の歌に青山に日が隱らば烏羽玉の夜は出なむ朝日の咲榮來て」と有は唯地上より見る所を詠るにて視動なり 此詞の朝日乃豊榮登また大祓詞に夕日之降など云るは大地の靜にして天日の昇る如く降る如くなるを其儘云ふ故に同視動なり 常陸風土記に自二高天之原一降來大神名稱二香島天之大神一天則號曰二香島之宮一地則名二豊香島之宮一と有は 大地の運動有は萬有を茂生する甚美き事なるが故に豊を冠らせたるにて地動なる時は天は靜なり地に實動有て人其を所思ざるが天地に往來坐す神は其視動實動共に明亮に知召が故に此二を以て云ふ事多在り 尚此とは委しく古始太元考豊雲野神の下に云れば今は唯一例を出して云る耳 然れば天の動の實は靜にて見るゝ所視動にて地の靜の實は動にて隱るゝ所實動在が故に神代より以來其事實を云ふ時には漏さず天靜地動を示せり 譬へば天照大御神の大御名の如きは天日神と在して六合を御照し坐す由にて終古動くと無くは方に御光を放たせ給ふ義なれば天の常靜なると云ても炳き大御名なると云も更なるが万葉集二卷の歌に指上日女命と咏み神樂歌に豊日女命と有などは此國にて現に見奉る所の視動なるを以然稱奉れる者なり上なる常陸風土記の例なり又神代紀下卷御天降段第一の一書に是時勝速日天忍穗耳尊立二于天浮橋一而臨睨之曰彼地未平矣不須也頗傾凶目杵之國歟云々と宣へるは天の靜なる時に在ける御心に地の傾頓し運動くとを見行して甚く驚給へる樣なり此則地の實動を云るなり 然れども大地より仰觀る所は朝に天日の東方に咲榮えて昇れば夕日は西方に降る故を以て何處迄も其發見する視動を以云ふ事常なるが故に天靜地動の事は飽まで所知看す神等にも朝日乃豊榮登爾また夕日之降爾と云ふ定格なり 神を欺くに似たりと雖も豈欺くならむや天靜地動の所由は天學に委しき者などならでは得知るまじきことなる故に其所迄は深く索(モト)めず大らかに云ふと古の惣ての有樣なればなり能く思ふ可き者なりかし 〇稱辭竟奉久乎神主祝部等諸聞食止宣は上より受て摠ての結なり此にて神主祝部等稱唯常の如し 考の本に稱辭竟奉久乎の乎字を脱せり然る本も有にや尋ぬべし然れど今予が見る所皆乎字有は其には依らず

延喜式祝詞講義七之卷

嘉永二年五月十一日

淡路國　鈴木重胤　著
丹後國　佐治正道
出羽國　宮野定勝　按

○龍田風神祭

神名式に大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座並名神大月次新嘗と有る御社此なり此詞に依に崇神天皇の大御代に祠始給へるか其は其天皇の御世所知看す九年四月なる事下に鈴屋大人の說に本着て委考注せるが如くなるか其大御世より毎年の例として其御祭は行はれけむを漸其古義は亡て已くより風日祈の爲に臨時にぞ其祭祀の事は有けむを淨見原宮御宇天皇の御心と御再興有せさせ給へりけむ然云ふ所由は萬葉二卷に度相之齋官從神風爾伊吹惑之天雲乎日之目毛不令見常闇爾覆賜氏と訓るは天皇と大友皇子と彼御合戰の事を詠るなるが種々神威を蒙給ひし事有れば此等の事の賽謝を兼て再興爲させ賜へるならむと所思ゆ御紀に四年夏四月甲戌朔癸未遣二小紫美濃王小錦下佐伯連廣足一祠二風神于龍田立野一遣二小錦中間人蓋大山中曾禰連韓犬一祭二大忌神於廣瀨河曲一と有て其翌年より次々御紀に記載れたる事上なる大忌祭詞注に云るが如し祝詞に王卿等百官能人等倭國六縣能刀禰男女爾至万氏爾今年四月イミ七月者云二今年七月一參集氏云々と有に合て思ふに上古は甚も太じき御祭儀なりつらむを尙此御再興も其太じきに合ては形計なりと所思ゆ四時祭式風神祭條に差二王臣五位已上各一人一神祇官六位以下官人各一人充レ使卜部各一人神部各二人相隨國司次官以上一人專當行事と有は右の御再興の度より次々如此く定れるなる可きか尙上古の俤耳と所思たり大忌祭も然り然れども祝詞は崇神天皇御世に用初られたり其任に用らるゝ事と見ゆる也四時祭式の外は貞觀儀式にも江家次第にも記されず偖此御社の廣瀨大忌神と共に崇神天皇九年四月に祀始られたるならむと云ふ證は已にも引く如く記傳二十三四十一丁に御紀に九年春三月甲子朔甲寅天皇夢有二神人一誨之曰以二赤盾八枚赤矛八竿一祠二墨坂神一亦以二黑盾八枚黑矛八竿一祠二大坂神一四月甲午朔己酉隨二夢之敎一祭二墨坂神大坂神一と見えたると此祝詞とを合せて水分神墨坂神山口神大阪神を祭始給へる事を徵されたるが尙思ふに此時必廣瀨大忌神をも此度に祠られたる可し然るは山口神は大忌神に屬て祭られ給ふ神に御在せは其支神を祭られて本神を遺さる可き故無ればなり此に因て深く考るに古事記に右の墨坂神大阪神を祭給へる續に又於二阪之御尾神及河瀨神一悉無二遺忘一奉二幣帛一也

と有る阪之御尾神は御縣神河瀬神は大忌神なるなり然れば龍田神の事は漏たれど御紀九年三月の下に天皇夢有二神人一誨之と有は此風神祭と同じきを以て此彼比挍れば其同時なる事判然と所知たり　若て天武天皇御紀以降の書に大忌風神二祭の二に一なるが如く記されたるは上古より此二神共に同時に祭來れる例に因(ヨラ)れたる事灼然なれは龍田風神も同しく祭始たる事紛無きが上に御紀に夢有神人云々と有と此詞に志貴島爾大八島國所知志皇御孫命云々是以皇御孫命大御夢爾悟奉久云々と有と專同事なるを思合すれは御紀には此度に大忌風神を祠られたるを記漏されたる者なり其由は下に委しく云り倭御紀を稽るに五年國内多疾疫民有二死亡一者一且大半矣又七年春二月丁丑朔辛卯詔曰云々於是天皇乃幸二于神淺茅原一而會二八十萬神一以卜一問之是時神明二憑倭迹々日百襲姫命一曰天皇何憂二國之不一レ治也若能敬二祭我一者必當二自平一矣天皇問曰教二如此一者誰神也答曰我是倭國域內所レ居神名爲二大物主神一時得二神語一隨レ教祭祀然於レ事無驗云々秋八月癸卯朔己酉倭迹速神淺茅原目妙姫穗積臣遠祖大水口宿禰伊勢麻績君三人共同レ夢而奏言昨夜夢有一貴人誨曰以大田田根子命爲下祭二大物主大神一之主上亦以二市磯長尾市一爲下祭二倭大國魂神一之主上必天下太平矣云々天皇曰朕當二榮樂一乃卜下使二物部連祖伊香色雄一爲中神班物者上吉之又卜下便祭二他神一不吉云々十一月丁卯命伊香色雄而以二物部八十手所レ作祭神之物一即以二大田田根子一爲下祭二大物主大神一之主上又以二長尾市一爲下祭二倭大國魂神一之主上然後卜レ祭二他神一吉焉便別祭八十萬群神仍定二天社國社及神地神戸一於是疫病始息國內漸謐五穀己成百姓饒之と見え古事記にも此天皇之御世疫病多起人民死爲レ盡爾天皇愁歎而坐二神牀一之夜大物主大神顯二於御夢一曰是者我之御心故以意富多多泥古而令レ祭二我御前一者神氣不起國安平云々於是天皇大歡以詔二之天下平人民榮一即以二意富多多泥古一爲二神主一而於御諸山拜祭意富美和之大神前又仰伊迦賀色許男命作二天之八十毘羅訶一定奉天神地祇之社云々悉無二遺忘一以奉二幣帛一也因レ此而役氣悉息國家安平也と有を按ふに五年より七年爾至迄三年の間疫疾と凶年と共に行れしなり和名抄に疫衣夜美一云度岐乃介說文云民皆病也と有る度岐乃介は時氣にて風氣の令然る所なれはなり斯て其疫疾の事は大物主大神の御心凶年は大忌風神の御心にて行れし故に此詞に天下乃公民乃作物乎草乃片葉爾至万氐不成一年二年爾不在歳眞

泥久傷故爾云々とは云り（御紀には五年より七年迄三年計の間の事と見ゆれども其前年より已に其萌は有つらめども大に見るゝ事は五年より以來なりしなり右の度敁乃介は時置師神の所作なる事予委しき說有て此注にも時々云るが如し）倚風氣は萬物の吐納して能其生を保ち長て榮ゆる所以の者なる事下に云る如くなるが其に反りて春温なる可して大に寒く夏熱かる可して大に涼しく秋涼かる可して大に熱く冬寒かる可して大に温なるなと其時節に應ひて當に行はる可き氣の行れず其時にして時に非る氣の行るゝ時は此に觸る者悉く病む人此に感れは忽疫疾と爲て民皆病む（此天地不正の厲氣（アシキケ）に感る事は歲運（トシノメグリ）に在（アタリ）て多寡有り方隅（クニトコロ）に在（ヨリ）て厚薄有り四時（ナツフユ）に在（アリ）て盛衰（サシヒキ）も有れども此氣の行るゝ時は老少強弱を論ふ事無く此に觸る者內に正氣充塞るに非れば邪氣口鼻より入て犯すなるが其邪氣の著所に天受（ミツカラナクル）有り傳染（ウツレル）有と雖も其疫疾と爲て病む所一なり凡人の口鼻の氣は常に天氣に通へるが身體の中府に正氣充滿たる時は邪氣の犯して入所無しと雖も邂逅正氣の虧欠（カク）る時呼吸の間より此に乘て犯すなり然るに其感の深き者は中（アタリ）て忽に發り感の淺き者は正氣に壓れて頓に發る事能はず或は饑或は疲（チカラ）を労し或は憂び或は怒るなど正氣の缺乏（トモシク）なる時に當て邪氣此に交代し始て張溢（ハリミツ）る害を得て天稟の衛氣此が爲に其所在を失ひ外感の邪氣に阻られ其衛氣の屈曲る間より熱と爲り終に疫疾と爲る此は時置師神の所爲に依れりと雖も其元因風氣の令然るなり）草木此に觸るれは其生々の德を亡ひて螽蝗敗を爲し當秀草して長茂ず或は果實蚕成り或は晩熟り或は零落ち或は解落るなとの殃災有て水災此と與に並行るゝ事常なり此詞に天下乃公民乃作作物乎惡風荒水爾相都々不成傷波云々天下能公民能作作物乎惡風荒水爾不相賜皇神乃成幸賜者云々と云るは此に因てなり暴風來格る年には必大雨時行はれ苗稼を損る事多き者なる事人の能知れるが如し（此暴風の人に中るが如きより草木に觸て損害ふ事は甚多き事其感る事の蚤きを以て悟る可なり）然れは五年より七年に至迄時令の順度ならざりけるが故に天下は悉く疫疾と凶年と共に行はれたるが疫疾は人民に預る事なるが故に大物主大神の御心なりつるが御紀幷に古事記共に其大神の事を主と記して其佗は省れたるながらに七年の結交に於是疫病始息國內漸謐五穀既成百姓饒之と有る中に大忌神風神の事を含て有る事云も更なり（其は右の二神の祭詞に記されたる所を考て自然炳在る可なり）故思ふに七月十一月丁卯命ニ伊香色雄ニ而以ニ物部八十手ニ所レ作祭神之物即以ニ大田田根子一爲下祭ニ大物主大神ニ之主上又以ニ長尾市一爲下祭ニ倭大國魂神一之主上然後卜レ祭ニ佗神ニ吉焉使別祭ニ八十万群神ニ仍定ニ天社國社及神地神戸一と有れば大物主大神倭大國魂神二社を祭られたる後に天社國社を祭られたりしかは大忌神風神社も其度に始て祭られたるかと思ふに然らず未此時に朝廷には疫病の行るゝ所以を知食し初て大神大和二神の御心なる事を悟らせ給ひて其祭祀有る因に天社國

社の神々を祭らせ給ひしかは於是疫病始息國内漸謐五穀既成百姓饒之と云に至れりと雖も其五穀の豊饒ならざる事は大忌神風神の御心なりと迄には熟く所知食給はせざりしなり（此時の事は龍田風神耳なるが如なりと雖も然に非る事大忌祭詞にも天下乃公民乃取作禮留奥都御歳乎悪風荒水爾不相賜と有が此詞の趣と同しく且大忌風神祭と云て其祭の二にして一なる如く惣ての事然有を思ふ可なり尚其詞の下に考合す可きなり）上に云る如く九年春三月の下に夢有ニ神人ニ云々と有は廣瀬神に屬る山口神の祭の事なるを思ふに必此度の御諭言は大忌神風神共に告賜へりしか其神々の祭は異在る事無か故に省き大坂神墨坂神等には赤黒の楯矛を進らるゝ事の別なりし故に其事の別なる如く傳りて御紀記共に遺れるか祝詞には大忌風神共に其方に預る事を主と爲るが故に別事は載ざりしなり（然ども此詞に志貴島爾大八島國所知志皇御孫命云々大御夢に悟奉久と云ひ大忌神詞に倭國能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾母云々と有なと有て互に考れば思合せらる可き種子有る事甚も奇しき者なり）先には大忌風神共に天社國社の中に含（コモリ）て七年十一月の事ならむと思しかども尚熟思ふに此詞の中に皇御孫命詔久神等乎波天社國社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行波須乎誰神曾天下公民乃作作物乎不成傷神等波我御心曾止悟奉禮止宇氣比賜支と有は諦しく御紀七年の下に定天社國社及神地神戸と有る其事を云るなれば

其より後ならでは協ひ難し然らば彼計（カハカリ）の大事の御紀に其面影計も絶て無る可き理非ざれば上に註る如く九年三月に大御夢に悟奉給ひし事有て同四月に其始祭の有ける事更に無疑る可き者なりかし（此事は總てに亘りて此大御世に祀始られたる趣を知るに必明らめずては解難き事多在れば熟々思ふ可き者ぞ）○風神と稱す事は神代紀（神逵生坐段第六の一書）に伊弉諾尊與ニ伊弉冉尊ー共生ニ大八洲國ー然後伊弉諾尊曰我所レ生之國唯有ニ朝霧ー而薫滿之哉乃吹撥之氣化爲神號曰級長戸邊命亦曰級長津彦命是風神也と見え又古事記にも既生レ國竟更生レ神云々生ニ風神名志那都比古神ーと有る此なり古史徵に云く彼神代紀には級長戸邊命亦曰級長津彦命是風神也と有り（山陰に云く級長戸邊命は女神の名なるに亦曰ニ級長津彦命ーとは如何此は一云を後に亦曰とは誤れるなる可し）古事記には志那都比古神耳有れども此詞に吾御名天乃御柱命國乃御柱命云々と有て奉宇豆乃幣帛者比古神爾云々と有にて加茂翁も言れたる如く男女二神なる事灼然し（然るを山陰に女神と爲るも男神と爲るも又男女二神と爲るも各一の傳なりと云れしは委からず）と云れたる如く御紀には比賣神の傳有て比古神を亦曰と傍に爲し古事記には比古神の傳有て比賣神の事を漏せりしなり（然れば御紀の文乃吹撥之氣化ニ爲神ー號曰ニ級長津彦命次級長戸邊命ーなど有けむが後世に錯簡せるより亦曰の字などを加たらむも知へからず思えたり）御名義志那は氣長にて

加是の氣進なるに同じ宇宙の洪大深遠なる際限有る事無か遍く唯一氣の充塞れる者有る耳なるか屈伸爲る此陰陽と爲り其陰陽を變化して風火金水土の五元と爲り其五元相合織て萬物と爲る然れば天地萬物の混元は悉に天之御中主神の大元の一氣に在く耳屈伸して陰陽と爲る者は高皇產靈神神皇產靈神二柱なり五元を含て變化を爲す所以の者は天地なり伊邪那岐神伊邪那美神二柱の所掌坐す所なり然して風火金水土神相混り相造化て萬物を成し給ふ事漢土には二氣五行の古說有り天竺及び洋蠻にも地水火風等の說有りて共に我が古說の彼に漏たるなり右の風火金水土の精神妙合て凝れば物と爲るか陽にして剛なれば男と爲り陰にして柔なれば女と爲て各其氣を稟る先に陰陽二氣に屬く所の勝劣に依て男女の形體を異にする所以て人は更にも云ず萬物各男女の別有り然れば歲年と云ひ四時と云ひ八節と號るも悉く一氣循環の外に出す生長收藏は氣の消長の次序色聲香味は氣の餘蘊の等差たり萬物此を得て形有り此を吐納して生是を以て形は氣足聯にて氣の大に相聚て物を成を云ひ生は氣來有にて氣の往來有て長存するを云なり萬物其氣の吐納を失ふ時は死す此故に氣往の義を以て云なり經は天地に昇降り緯は萬物に往來爲る者は風氣の所爲たり所以に天際は至虛在りと雖も天地萬有の混元たる一氣の二五合て充塞るが故に眞空なる事無し天地を載せ萬物を覆ひ漏さゞるを以知べし金石至實なりと雖も寒暖の氣出入して所として眞實なる事無し然れば宇宙の間は悉皆虛實の二にして唯一元の大氣耳に歸めり譬へば土と水と相混りたらむが如く土中所として水に非ずと云事無く水中所として土に非ずと云事無が如し其大氣中に蒴して彼に動き此に搖く物は風なり然れば天際の水氣日光を引入て大に伸れば風と爲る是予が風は氣の進なりと說る所以なり神名の志那も氣長の義なる事云も更なり偖加是と云ふ時を氣を加と云ひ志那と云ふ時は氣を伊と云て其言義髣髴しきに似たれども其義又大に別々なる子細有り加と云ふ時は惣てに亘りて甚大きなり天之御中主神の中は長氣高皇產靈神の高は足氣神皇產靈神の神は氣聚にて全天に充滿る氣に亘る名なり所以に古事記天稚彥段に下照比賣之哭聲與風響到天と有此なり此を以見れば所謂る地氣の薰滿る所を離れたる外より動くを以風とは云なり然れども今扇より搖して出る冷氣をも風と云は違へるかと云に然らず必譬ひ微風と雖も云以て行けば全天充滿の氣を搖かさゞる事を得ず風とは云ふ可きなり老子の語に天生天地氣中動作喘息皆應于天地云々と云るは此なり志と云は地外に薰滿る朦氣中にて動搖くを云り神代紀に伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化爲神號曰級長戶邊命亦曰級長津彥命是風神也と有を以見へし地外の朦氣を吹撥給し故を以て級長と負坐る此其證なり然れば全天に亘るを風と云ひ地外の朦氣に動くを志那とは云なり斯在ば水氣を負て長るを云か霜は水氣の凝れるを云れば其志は此の志と

同じかる可し地外の濕氣の水氣なる事は天日に蒸るゝ時は熱く燰なりと雖も夜になれば寒冷なり然れば寒冷なるは常にて却て温燰なるは外物の爲に變るなり所以に人は更にも云ず世中に在とし有ゆる萬物は悉に其志那都比古志那都比賣二柱神の氣を呼吸して在る故に生々するなり此に反すれば人は疫病を受て腦み萬物は厲氣に觸て倒る其甚しきに至ては人死萬物枯る偖草木などは根幹枝葉ともに木目有て其より風氣を吐納するなり木葉を水に浮べて試るに裏の方を下に爲れば終に水を吸て傾洮むが表方は下に爲すとも發る氣有れば決て水を吸ふ事無して速く色を變るに至るなり記傳五志那都比古神の註に纂疏に級長は息長と云むが如し其由は師說に此神は伊弉諾尊の御息より成賜へれば級長とは云なり萬葉詞に志長鳥と云は鸊鷉の事にて息長鳥と云むが如し同廿卷に爾保杼里能於吉奈我河波と續け詠るを以知べし此歌は沖中川と心得たるは論に足ず此鳥水底に入て浮出ては長く息續く故に然云係しならむ息長川は近江國坂田郡也天武天皇御紀に近江軍戰ニ息長横河ーと見え坂田郡なる事は諸陵式に見ゆ仙覺萬葉釋に息長は坂田郡穴郷の內に在と云り和名抄に阿那と有又廿卷なるは河内にての歌なるを其は近江にて詠る古歌を河內にて宴に誦しならむ又河內國石川郡の磯長も本彼息長の略にても在らかと有り神名帳に彼坂田郡に日撫神社伊夫伎神社並びて載り日撫志那都語相近し偖科戶之風とは此神ノ御名より出て凡ての「風の事なり」と云れたり科戶の戶は利トの義にて急速なるを云るならむ故大祓詞に科戶之風乃天之八重雲乎吹放事之如久とは譬たり次に朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久と云て別ちたるを思ふ可し然るは緩急の相違有が故に如此二に云り尙下なる天乃御柱乃命國乃御柱乃命の下に云るを見べし御柱と云に風氣の天地を保つ心有り

〇神階の事は文德天皇實錄に嘉祥三年七月丙子朔丙戌龍田天御柱命神國御柱命神並加從五位上と有て策命有り天皇我詔旨爾坐天御柱國御柱神等乃廣前爾申賜倍止申久國家乎鎭護賜布爾依天御位奉授天乃後年月久成太利因茲神祇少副大中臣久世主乎差使天御位上奉利稱奉留今毛今毛風雨隨時比五穀豐登之女天下平安爾天皇朝廷乎堅磐爾常磐爾護賜比助賜倍止申賜波登久申と見えたり但授と記されすして加と書れたるを以見れば以前に已に從五位下を奉授られしか前記に漏たるなり此事は已に大忌祭詞の下に云り仁壽二年七月庚寅大和國天御柱命神國御柱命神並加二從四位下一と有は一階進給へるなり廣瀨神此に同じ同年十月癸亥朔甲子大和國天御柱命國御柱命神並加從三位と見えたり廣瀨神此に同じ三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授二龍田神從三位一と有は當社に非す神名式に龍田比古龍田比女神社二座と有此なり三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授二大和國天御柱命神國御柱命神並正三位一と有て此餘に見えず以上大忌神と都て異り無きなり〇祭の事は上に考證せる如く崇神天皇九年四月より始て恒例の大祀なりつるか中頃良衰廢など有りけむを天武天皇四年に祭典の再興有て毎年の例なり本朝月令に引る弘仁式

に太忌祭一座（廣瀨社七月准レ之）風神祭二座（龍田社七月准レ之）右二社差ニ王
臣五位已上一人ニ宛レ使國司次官已上專當ニ行事ニ即令ニ
諸郡交易ニ供ニ贄二荷ニ其直並米酒稻並用ニ當國正稅ニ自
レ外諸司請供但鞍隨レ損供進又云大忌風神二社者四月
七月四日祭レ之奏曆日如常式定五位已上卜食者四人（社例王臣名一人式部錄各封移神祇官令卜）赴社監察（事見神祇式）と見ゆ此四日と定ら
れし事は大寶令の御定と見ゆ（其委しき由は大忌祭詞祭事條に云り此と少も異非れば互考す可なり）續紀に寶龜九年六月奉ニ幣帛於廣瀨龍田二社ニ爲ニ
風雨調和秋稼豐稔ニ也と有ば臨時の御祈にて常例に
非ず（其餘にも尚有べし二十二社注式にも村上天皇康保二年閏八月止雨の官幣を獻らる丶十六社の内にも入て廣瀨の下住吉の上に在り一條天皇正曆二年六月祈雨の官幣十九社の中に列り給ひ同五年二月祈年穀には廿社と列り同天皇長德二年廿一社に列り後朱雀天皇長曆三年廿二社に列り給ひて終に廿二社と爲れるの後に其祭儀殊に有る事と成れり江次第祈年穀奉幣條見る可なり）伊勢大神
宮式に凡每年七月日祈内人爲レ祈ニ平雨風ニ云々と有
る十座の中にも風神有り此は朝廷の此祭に准據て行
る丶事と見えたり但此風神は當昔社號にて有しを蒙
古襲來の時に御稜威を顯し給へるに就て其賞に宮號
を進られたる神也所祭當社に異なる事無き由神宮の
書共に詳なり（但式に唯七月と有れば祭日は當社の大寶以前の如く定日有事無して可然き日を取て行れしなり）神
祇令風神祭義解に大忌祭謂ニ廣瀨龍田二祭ニ也欲レ令下
山谷水變成ニ甘水ニ浸ニ潤苗稼ニ得中其全稔上也故有ニ此

祭ニ也又風神祭謂ニ亦廣瀨龍田二祭ニ也欲レ令ニ沴風不吹
稼穡滋登ニ故有ニ此祭ニ也と有る集解風神釋に云ニ廣瀨
龍田祭ニ也草木五穀等風吹而枯ニ壞之ニ此時不知彼神
心即天皇齋戒願覺ニ夢中ニ卽覺云龍田廣瀨祭ニ二社ニ同
日共祭ニ其姊妹神ニ亦五位以上充使と有り如此く風神
祭謂ニ亦廣瀨龍田二祭ニ也と有て其祭の二にして一な
るが如きなるは廣瀨神は五穀の本體の神なるを龍田
風神の風氣を吐納て成熟するの故なり（此事は大忌祭詞の下にも云り臨時祭式なる祈雨祭神八十五座の中にも此神の列り給へるは風氣に依て雨を催し又雨を止る御功坐が故なり但此集解の文は本朝月令に或記云と云て此と同しき文を載たり然る古記に依て注（イヘ）るなり）公事根源にも廣瀨龍田是兩社
は大和國に在り祭日は廢務なり年に二度行はる使は
前日遣つ大忌風神祭と云是なり風水の難を除きて年
穀の豐なる事を祈申さる丶にや」と有り廢務の事の
有など甚重き神事なり（廢務の事は大忌祭詞の下に云り貞觀儀式江家次第共に此二祭の事を記されざりき但大忌祭條に引る本朝月令なる大同新抄の文に依るに古より甚嚴重なる法則等も有て行はれし者なり其下に見合て知る可し）三
代實錄に元慶二年七月大和國廣瀨龍田兩社造ニ立倉
各一宇ニ爲レ納ニ神寶ニ と見え臨時祭式に凡春日廣瀨龍
田等社庫鑰匙者納ニ置官庫ニ祭使官人臨レ祭請取事畢
返納と有て當時幣物を納置る丶宮庫を置れしなり
（幣物は員數は下に載つ）幣物の事は四時祭式に大忌祭（廣瀨社七月准レ之）云々

風神祭二座（龍田社七月准レ之）絁二疋絲四絇綿一屯四兩五色薄絁各二尺倭文一丈三尺布一端一丈庸布五段木綿一斤麻六斤九兩（五斤二兩祭料 一斤七兩祓料）臭八兩弓四張箆一連羽二翼（已上二種大和國所レ送）鹿角二頭鹿皮四張鐵六斤十兩鞍二具多々利一枚麻笥一合加世比一枚（已上三物並金塗）漆一升金漆一升黄蘗三斤五兩茜十六斤九兩黑葛廿斤米酒各一石五斗稻五束鰒堅魚烏賊各七斤鮭七隻腊七斗比佐魚一斗五升海藻八斤滑海藻十斤雜海菜十四斤鹽一斗褁葉薦三枚馬二疋祝料庸布二段右二社差王臣五位已上各一人神祇官六位以下官人各一人充レ使（卜部各一人神部各二人相隨）國司次官以上一人專當二行事一即令三諸郡別交易一令レ供二進贄二荷一其直並米酒稻並用二當社正稅一自外諸司請供但鞍隨レ損供進と見えたり（令集解にも五位以上充レ使と見ゆ但右二社云々の文は本朝月令に弘仁式云とて此を擧たり全く同文なり）○當社別社の事神名式に大和國平群郡龍田比古龍田比女神社二座と有て（但本には二社と有が異本共に二座と有て佗例も此に同じければ改つ）龍田坐天御柱國御柱神社に並へり三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授二龍田神從三位一と有は此御社なり萬葉集より以降秋の歌に多く龍田姫と詠るは此神の風神に在する故なり秋は風の强る者にて赤らむ木葉など良落るの時なるを以て詠るなり谷川氏の通證平田翁の古史徵に風神の亦名と定られたるは然る言なり其鎭坐す地名を取て直に神名と爲る例枚（カゾヘ）擧（ツクシ）難し萬葉に龍田彥勒此花乎風爾莫落と有る次歌に風莫吹登打越而名負有杜爾風祭爲奈と有を以て風神同神なることを知るべきなり（記傳廿二沙本毘賣命の註に云く後世の歌に佐保姫と云事有り春の歌には佐保姫秋の歌には立田姫と詠り是奈良京の頃云出たる事なる可し立田は奈良の西に在て龍田比古龍田比女と申す神坐に對へて佐保は奈良より東にあるを以て春に取て佐保姫と云ふ名を設たるなるべし西三條公條公の高野山參詣記に奈良の邊の所に佐保姫社に參しにと有は然る社も有にや」と有り佐保姫若歌人詠物の料に設たるならずはその神のかならず奈良の東に御在す社有る可し然るは佐保といふ地名狹生（サフ）の義有て物を生ず神の在す由に縁有て聞ればなり）この社も本社と共に立野村の同處に本宮の右方に二社並び鎭坐て東向なりと云へり（今法隆寺の坤方に別に龍田社と云ふ有り此は離宮なり本社に屬く思混ふ可からず）○伊勢神宮に風宮と申す有り大神宮式に風神と有て元は式外の小社也しを蒙古襲來の時に神風を吹せ給し御稜威の事に依て風宮と奉稱る由兩宮神異記に見えたり（其餘神宮の書共に往々其事を記せり）增鏡老波に弘安四年夏伊勢勅使經任大納言と有は頃間蒙古襲來の聞え有に就ての御祈なり（增鏡六巻に其頃蒙古起るとかや云て世中騷立ぬ色々樣々恐しう聞ゆれば云々伊勢勅使に經任大納言參る云々大神宮へ御願に我御代にしも斯る亂出來て實に此日本の損はる可くは御命を可召き由御手自書せ給ける大宮院甚淺ましき事也と猶諫め聞えさせ給ふで理に哀なる云々）＝七月朔日宮廳行幸依二日蝕一夜陰之儀也自官廳行幸子神祇官此儀希代之例也大風爲二伊勢勅使發遣一也

と有は右の御祈の驗也（增鏡の右の續きに故院の御代にも云々斯る事有しを程無くこそ靜謐りにしを此度は甚苦々しう牒狀とかや持て參れる入など有て煩はしう聞ゆれば上下思惑ふ事限無し然れども七月一日夥しき大風吹て異國の船六萬艘兵卒乘て筑紫へ寄たる皆吹破られぬれば或は水に沈み自殘れるも泣々本國に歸にけり云々倚我國に神の御在し坐す事皎然「アラタカ」に侍けるにこそ倚爲氏の大納言伊勢の勅使にて上る道より申送ける「勅なして祈る信驗の神風に寄せ來る浪そ且碎ける」云々○塵添埃囊抄六に斯ては以二人力一難レ防とて神祇の名帳に所レ載三千七百五十餘社其外小禿倉樂社に至る迄捧二幣帛一致二如在一云々眞に神力の所レ致にや七月一日賊船悉く漂蕩して凶徒皆沈レ海云々と有て三百萬七千餘騎十萬餘艘に乘て來る」と有り）同二日勅使中御門大納言扈從殿上人發遣（帝王編年記に閏七月二日天皇幸神祇官依二公卿勅使發遣一也依二蒙古御祈一也と有ば同事と聞ゆるが七月閏七月何れが是なるを知ず）同九日宰府飛脚至來云々朔日大風頓吹而異國兵船悉以漂沒了是併神明之靈感非二人力之所一レ及云々と見えたる此神風は即風宮に坐神の靈威なる事云も更也（度會元長が神祇百首自注に是則別宮の神科長津彦命行向ひ給ふにやと有るは然る事なり此事大神宮神異記にも見ゆ）倚此風神の天照大御神に御由緣在て如此く重き別宮の列に加り給ふ事は豈少緣の由ならむやは神代紀（四神出生段正書）に伊弉諾尊伊弉冊尊云々共生二日神一號二大日孁貴一此子光華明彩照二徹于六合之內一故二神喜曰吾息雖レ多未レ有二若此靈異之兒一不レ宜三久留二此國一自當下早送二于天一而授中以天上之事上是時天地相去未レ遠故以二天柱一擧二於天上一也有る此傳に二神の相共に生坐しと有は先達の說の如く紛たるなれ共以二天柱一擧二於天上一也と有ぞ眞に愛き正說なる然るは此神を天御柱命國御柱命と聞え奉て男女二柱に坐るか此を以見れば男神は總ての天霧の風氣を主り女神は地外朦氣中の風氣を主て互に參伍給ひて造化し給ふと聞ゆるか此天御柱命の天照大御神を乘奉て天上に送上奉給し事甚々奇異き旨有り然るは萬物の光輝は風氣を資て遠く伸び宇宙の風氣は天日の光を稟て宇宙に生るを思ふ可き者也（已に伊邪那岐命の朝霧を拂給へば風神生坐し次に伊邪那美命の火神を生坐る本因なも思ふ可なり此は殊に幽深き致有る事なるが太元攷に云りき）外宮にも土宮風宮と並給へり其は豐受大神は廣瀨坐若宇加能賣命の本體に在せは此神の副在る事は大忌風神の例なり神名秘書に風神社件神者內宮風神與同體也云々舊記云山谷水變成二甘水一浸二潤苗稼一得二其全稔一故有二風神祭一名曰二柏流一也豐年則浮流逢凶年沈覆損云々四月七月祭之と有り（但此內外宮なる風宮神を伊勢津彦なりと云說も有は事實に叶ざる甚淺ましき說にて依に足ざる痴言なり）○神名式に伊豆國那賀郡國柱命神社は同神なる可し稻宮命神社と並給へるは故有る事なる可し（稻宮命は伊豆國神階帳に稻宮姬と有て女神たれば必廣瀨神と同體なる可し同書に國序姬と有は此國柱命神社に當れるか國柱姬にて龍田にも國御柱命の女神なるに能く契へり）○神名式に信濃國水內郡風間神社は風守神社ならじか持統天皇御紀に五年八月己亥朔辛酉遣二使者一祭二龍田風神信濃須波水內等神一と有は神名式なる

信濃國諏訪國南方刀美神社名神大　水内郡健御名方富命彦神別神社名神大と有る其ならむと思ふに倚熟思へは記傳十四三十二丁に云れつる如く伊勢國風土記に神武天皇中州に入坐す頃ほひ天日別命を遣して伊勢國を主領る伊勢津彦と云神令言向給ふに始は詔命に從奉さりしかは天日別命軍を起して攻けれは竟に順ひて其國を避奉る時に大風を起し波を立て信濃國に遷住給ひけり神風の伊勢國とは此由なりと云事有りと云れたり倩此伊勢津彦と云は建御名方神の亦名なるか此神風の事より延て風を掌坐す事と成れるか又は其神風の甚荒スサマしかりつる故に風間神社は其防禦の爲に鎭坐るか倚可考但記傳に此を風土記に神武天皇の御世の事と爲るは傳の誤なりと云れつれと然らす予か彌彦神系攷に云るか如し倩伊勢外宮の邊り彼伊勢津彦の住りし高倉山の續なる高神山と云に客神社とて有は建御名方神を祭れりと神宮の書に在と記傳に云れたり又記傳に此諏訪水内神を龍田と同く風を祈らせ給けむ由は清輔主の袋册子に「信濃在る岐蘇路の櫻吹にけり風祝に透間在すな」と云俊頼主の歌に就て是は信濃國は究て風早き地なれは諏訪明神の社に風祝と云者を置て春始に深く物に籠置て祝して百日の間尊重爲る也倩其年凡風靜にて農業の爲吉なり其に自然透間も有り日光も見せつれは風治らす」と云ふ其意は如何有む知ねども何樣にも風に由有る事は古く云傳けむ」と云れたるに依て按ふに風祝とは諏訪社の祝には非すて風神に屬たる祝なる可し建御名方神の神風を起して飛去給ふも風神の御靈に依ずては出來まじき理を思ふに其神の御世より風神を別社に祀始られたらむも知へからす風間神社の事能々國人に問聞へし○官帳には載られねども出羽國田川郡に椙尾社と云ふ舊社有り飽海郡大物忌神社の舊記に當社一王子椙尾大明神と有て社傳に小物忌神社なる由云傳るは必然有へく所思たり但式に載る所に物忌神社は飽海郡椙尾神社の今立せ給ふ地は田川郡に在は其所在違へるに似たれとも式なる月山神社は飽海郡なるに今月山の現存する所は田川郡なるを以倩思ふに此兩郡の名耳古に異らすして地の所在に今古違タガふ所出來りし者なる可し然れは郡名の異は今咎む可きならす小物忌神社の所在詳ならざるに就て今飛島と云ふ小島有り古老傳て云く往昔大物忌神の立せ給へる稻倉岳の北方離別れて島と成れり依て別島とも飛島とも云由なるか此島に大社と云ふ有り所祭級長津彦命にて式なる小物忌神社なりと雖も倚依難かり　此椙尾社祭神級長津彦命級長戸邊命二柱に坐て相殿に倉稻魂命月夜見命左右に並鎭坐り此即小物忌神社に大物忌神月山神を配祀れるなりと云るは實に然る言と所思たり　又正月に奉る供御に田川郡遠賀神社伊氐波神社由豆佐賣神社平鹿郡鹽湯彦神社波宇志別神社山本郡副川神社の神神をも併て祭る事なり若くは國司の國中の神を祭祀れりし例の遺れるなる可し倩此社は已も殊に親しく仕奉る可き由緒在て其神の立せ

給へる大山村と云に到る毎に常に詣で見奉るに甚神々しく奇異なる御社にて中々中昔などに出來りし神垣の樣ならず妙なる迄神進たるは小物忌神社を除て何とか爲む然るを此御社を近昔迄此大山の城主たりし武藤家の氏神と始て國中の神を祀れりしなど云は心淺き人の論にて取に足ず大物忌神亦名豐宇加能賣能命の敷坐る稻倉嶽俗云鳥海山に相對ふ地にして社傳に傳る所古老の語る所共に所祭級長津彦命級長戸邊命に在して風神なる由其說の符るに因て尙思ふに大忌風神を朝廷にて並祭らせ給ふ由縁に少も異なる事無きは妙に奇異なる者なり尙龍田に坐す天御柱命國御柱命社の下に云ふ如く朝日の日向ふ東方に向はせ給ふ可き由緒坐を當社の東向なるも熟符へり尙文德天皇の大御世に大物忌神の石礫を降せ給し事の有より始て今も現に其事有は風神と坐す此楫尾大神の幽賛給ふ者と所思しきを其は庄內神跡攷と云書を著述して云れは此には省つ○駿河風土記に廬河郡横走井社大泊瀨幼武天皇御宇所祭級長戸邊命也と有り

龍田爾稱辭竟奉皇神乃前爾白久志貴島爾大八島國知志皇御孫命乃遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物乎始氐天下乃公民乃作物乎草乃片葉爾至万氏不成一年二年爾不在歲眞尼久傷故爾

龍田は大和國平群郡にて立野村の邊の惣名なり神武天皇御紀に皇師勒兵步趣龍田其路狹嶮人不得並行と見え履仲天皇御紀に自龍田山踰之時云々と見えたる地にて天武天皇御紀八年冬十一月の下に是月初置關於龍田山と有も此なり谷川氏の通證に關屋趾在立野村西天文八年收立野關錢事見信貴山寺日錄と云り ○志貴島爾大八島國知志皇御孫命は第十代崇神天皇の御事なり但古事記に天國押波流岐廣庭天皇坐師木島大宮治天下也と有は欽明天皇の御事なり思ひ混ふ可からず 志貴島は崇神天皇御紀に三年秋九月遷都於磯城是謂瑞籬宮と有り古事記にも御眞木入日子印惠命坐師木水垣宮治天下也と見えたり記傳廿三三丁に大和志を引て此宮は在城上郡三輪村東南志紀御縣神社西と云れたるは必然ぞ有へき神武天皇御紀に倭國磯城邑垂仁天皇御紀に磯城嚴橿之本と有なとも此なり欽明天皇の師木島宮も此地なり 又記傳四十四三十六丁名小島とは凡て本周廻に界限の有て一區なる域を云名にて海中には限らず秋津島と云も本孝安天皇の都の名にて大和の內の地名應神天皇の都も輕なるを輕島明神と云類也此事尙委くは國號考の秋津島條師木島條に云り此も彼秋津島宮輕島宮なとの例の如く師木の地なるを師木島とは云なり」と云れり尙天武天皇御紀に元年九月庚子詣于倭京御島宮癸卯自島宮移岡本宮と有る島は庭中に島山を築たる故にて秋津島輕島などの例とは別なり万葉二卷に島宮句池なと詠るを以て其狀想ふ可し ○大八島國の事は鈴屋大人の國號考に委けれは就て見る可し但天下知志と云ずして大八

島國知志と有は下に遠御膳乃長御膳止云々と瑞穗の事を云る故に其意に係て如此は云るなる可し古人の詞を用へる事の委きを思ふ可なり（又記傳五卷にも見ゆ大殿祭詞の下に云り）偖大八島國とは皇國の惣號なれとも大八島國知須なと云ふ時は汎く天下を統御す事になるなり故御世々々の宣命に天皇の世中を統御す御事を明御神止天下所知看須天皇命とも現御神止大八島國所知食須天皇とも宣へり（公式令の詔書式に種々に云分てれとも其は當昔の定にて古義在す）如斯く公然に云事は上古の風儀にて古事記泉國段に伊邪那岐命告桃子汝如助吾於二葦原中國一所レ有宇都志伎青人草之落ニ苦瀬ニ云々と宣ひ又天石屋段は高天原皆暗葦原中國悉闇と有なと獨皇國耳ならむや大地の全を云事なるに葦原中國と云て千萬國の末迄をも兼併たるを思ふ可し（我が古典を讀む者苟も此心掟無くは天地日月をも皇國限の天地日月と爲し神祇の造化をも皇國限の事と思ふに至る可し我が戴く天は彼も戴く天我が戴る地は彼も戴る地なるに非ずや然らば天の覆ふ所地の戴る所神祇造化の行はるゝ所の有の悉我が天皇の所知看す域にて大八島國は萬國を統御給はむ爲に都城を造り住せさせ給ふ本域の義を以て大八島國知須と云にも有べし）○遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物始氐は中臣壽詞に皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天天津日嗣乃天津高御座仁御座天天津御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依志奉豆天降坐之と有る此故事に依て御饌物の事を如此は云也此事已にも有て上に委く注り（祈年御縣神詞同水分神詞廣瀬大忌祭詞の下に云りき）其文の續きに照し合すれば五穀物の五穀は赤縣にて黍稷麻豆麥と五穀と云由禮記月令に見えたるか唯熟字を假用たるにて其義に非す神代紀に以稻爲水田種子と有此にて此處は瑞穗と云る事灼然けれは多那都母能と訓へし田之物の義なればなり然れば此は大忌祭詞に皇御孫命能長御膳能遠御膳登赤丹能穗爾聞食皇神能御刀代乎始氐親王等王臣等天下公民能取作奥都御歲者手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取將作奥都御歲乎と有て全同事なるを思察む可なり（種物（タナツモノ）と云説も有は宜からず又平田翁は水田種子を美多都母能と訓れたれと尚舊訓の方宜し又縣居翁の此なる五穀物を古事記に大宜都比賣神死坐て於三目一生稻種於二耳一生レ粟於レ鼻生二小豆一於レ陰生レ麥於レ尻生二大豆一と云是五穀也と云れたれと稻穀なる事は右に引る大忌祭の證文にて明なれば依難し此次文に天下公民乃作物を云々と有る右の五穀の類を惣て言含たるなる）○天下乃公民乃作物乎は紀記に所見たる五穀を始として甘菜辛菜爾至迄を惣て云なり偖此に作物と云ひ下には三處此と同事なるを作物と云易たるに意味有事なり此は下に草の片葉爾至萬氐と云言有か故に作物乎と云ひ次に二處作作物と耳云るは事足ぬ樣なれと其草の片葉爾至萬氐の事

を兼たる故に作字を累云るなり其最末に作作物者五穀乎始氐草乃片葉爾至萬氏と義解爲る者なり古人の用語の法如此く精しき事なるを人は然心着さりけるにや未其説有を見す　耕種を都久流と云ひ其物の成熟するを奈流と云事は已に二巻に説る如く修理固成の義なり古事記に營田と見え古語拾遺にも大地主神營田云々など常に多く都久流と云例にて此に人爲なり其成と不成とは神の御心に在る故に奈流と云て自然なり斯る事に至迄も精しく究議さゝれば古意は得難し　○草乃片葉爾至萬氏は五穀より始て菓樹菜蔬等をも遺さす總たるなり大祓詞などに云る草之垣葉と此と同物ながら此なるは人の陸田に作れる菜蔬等を云るに彼は自然生の野草の類にて別の事なり草も木も大小の差有る耳を以て名を分てるなり木は莖（キ）なり草は莖狹（クサ）なり又莖は氣より成れゝは其義をも合めり皇國の古に風火金水土神の造化を爲給ふ古傳有て赤縣に五行の古説有る其中の木は風氣の位を云るをも思ふ可し鈴屋大人の莖多（ク、フサ）なりと云れたるは尤（ケニ）もと陸ゆれど木も山に生るに多ならざる事を得す然れば草を莖多と云も穩當ならざるに似たり片葉は大祓詞後釋に垣葉の垣字合せて思ふに垣葉とは先凡て草は大體三葉五葉宛並て生る物なるに其を闕取て唯一葉なと殘て有る狀を朝野群載には破と書り此破字と又片葉とも書るとを以云詞にて意は唯少（イサヽカ）の草の一葉迄と云なる可し一と云はれたるか如し但此詞に用へるは小草の末々迄もと云意なる可か　○不成鈴屋大人説に不成は那佐受と訓へし神の御心にて傷ひて成し給はさるなり那良受と訓ては上の作物乎の乎に協はす　と云れたるは實に然る言にて崇神天皇御紀に天下大に疫疾の行はれしを以ても風神の御守薄在しを思ふ可し不成は風神の御祟にて成給はさるには非す其御祭を物爲給はさりける故に自然成さりしなり然れとも其は神の遙に遠放給ひて御徳を施給はさりしなれは實に那佐受とは云へきなり尚上に引る御紀の文に就て其下に云る事共を合考ふ可なり　此詞に依て深く考るに萬の草木共に水を以て其根抵を養ひ風氣を以て其枝葉を動搖さゝれは生長（オヒタチ）て茂盛る事を得さるなり風水相共に自持る事譬は木草を殖て水を注かさる時は風氣を吐納する力無して枯れ又木草を風氣の通無き密室に藏く時は幾計の水を注くとも萎るか如し此を以て大忌神風神の共に草木を相保護坐す由來をも思ふ可なり又上に云る木と云ひ草と云に氣の言を含るを見よ　又其木に菓成り草は菜蔬と成て人を養ふに同しく草木に含る所の神氣薰出て地上の氣の用火の爲に乾燥して滋潤ひ乏しく成を補ひ人身の毛孔九穴より吐納て人體を資け養ふ事の少縁ならす尊き由縁をも又想ふ可なり此等は甚近き事にて行住坐臥共に須臾の離るましき事なれとも大凡人の心も着ぬ事なるは甚淺ましき事にこそ然れど我が古學の徒と雖も斯る事迄の説に及ふを言痛く思ひ淡むるは彼精義の入神を惡むにて取に足す　○一年二年爾不在は御紀に五年國

内多㆓疾疫㆒民有㆓死亡㆒者且大半矣と有れは時氣の順度ならさりし事灼きを同七年の下に於是疫病始息國内漸謐五穀既成百姓饒之と有は三年計の事なれとも此大忌風神の社々を始て祀給へるは九年四月なる可き事上に考記せる如くなれは如此は云へきなり此を以ても九年四月に始祀れる事疑無者なり○歳眞泥久は歳遍にて年數を經る事なり萬葉一三十丁に浦左夫流心佐麻禰久と有は情進（ウラサブ）る心（ココロ）眞遍（サマネ）くにて心の遠く行至る心にて此の眞泥久も其例なり考に年々損はぬ間無なり萬葉に間無を麻禰久と訓りと云れたれど此は阿麻禰久の阿を省たるなり鈴屋大人說に歳眞尼久は幾年も累る事なり萬葉に多き言にて度繁く重るを云り無間の意には非ずと云れたるは諸なる言なり歴朝詔詞解第三詔遍多久（タビマネク）の下にも此の詞を引て五十四詔に一二遍能味仁不在遍麻年久萬葉十九に多婢未禰久廿三詔に年長久日多久（マネク）五十九詔に麻禰久在萬葉二に眞根久往者四に麻禰久通者など多し數多と書たるにも眞泥久と訓べき此彼有り」と見えたるは此の例なり○傷故爾の傷は削（ソク）の義なる可し此は上に云る如く未上にも草木の茂盛する事は大忌風神の御心に依れりとは所知看さりける故に但此傷は悪風荒水の殃災に依れり其は風神の御諭言に天下公民の作作物乎悪風荒水爾相都々不成傷波云々と有る以知べきなり其御祭をも未行はせ給ふ事も無りしかは年遍く不順の厲氣の爲に損傷れけるなり凡て神等は其守護らせ給ふ所以を原て此を祭奉に非れば其御徳を施給ふ所も少きなり垂仁天皇御紀なる倭大神の御言に先考御間城天皇雖㆑祭㆓祀神祇㆒未㆑探㆓其源根㆒以粗留㆓於枝葉㆒故其天皇短命也是以今汝御孫尊悔㆓先皇之不㆑及而愼㆓祭則汝尊壽命延長復天下太平㆒矣と告給へる神意を索隱て知へき者なり然れは心を枝葉に留す其源根を探て神祇を祭祀奉るに非すは終に其御守護無き事由を知て後人尚能く其戒と爲す可なり然れば神は祭祀ぬに依て祟て物を損傷ひ給ふに非ず祭祀さるが故に神の御靈を留給ふ事無に依て自然其厚からざる者なり恐愼ますは有べからず履仲天皇御紀に五年春三月戊午朔於㆓筑紫㆒所㆑居㆓三神見㆓于宮中㆒言何奪㆓我民㆒矣吾今慚㆑汝於是禱而不㆑祠秋九月乙酉朔壬寅天皇狩㆓于淡路島㆒云々癸卯有㆑如㆓風之聲㆒呼㆓於大虛㆒曰劒刀太子王也亦呼之曰鳥往來羽田之汝妹者羽狹丹葬往也云々十月云々天皇悔㆘之不㆑治㆓神祟㆒而亡㆗皇妃㆖更求㆓其咎㆒云々則負㆓悪解除善解除㆒而出㆓於長渚崎㆒令㆓祓禊㆒既而詔之曰云々乃悉收以更分之奉㆓於三神㆒と有る此文に禱而不㆑祠と有る文に深く心を留めて神の御心を取奉るには須先禮典を盡す可き事云まくも更なり事の狀は少違ひたるに似たれども神の御祟に依て治奉れる傍證に引合て心得可き事なり然れは物事を守らせ給ふ神と坐せとも御心に叶はせ給はぬ事其の有れは其守らせ給ふ方の反にて却て其物を損ひ傷らせ給ふ事無に非す漢意佛意を以て論爲可に非ず彼は唯に紙上の理屈を小賢しく云るにこそ有けれ事實の上に於て違ふを何とか爲む甚も奇靈しく微妙なる神の御心にし在れは我等凡人の

爭か測知る所ならむや唯に畏み敬ひて其御徳を仰き信み奉らむぞ古意には有へきなり（尙所々に此事の論有を考合す可し）
百能物知人等乃卜事爾出牟神乃御心者此神止白止負賜支此乎物知人等乃卜事乎以氏卜止母出留神乃御心母無止白止聞看氏
百能物知人等乃卜事爾出牟は百の物知人をして卜を令爲て神の御心を問求る事人の知れる如くなるか少意得有へきなり其は物知とは下に述る如く神祇の御情狀を知れる人を云か百能物知人と有を以思ふに彼天石屋戸段御 天降段に思兼神及八百萬神等を神集に集て神議々給し如く各々其物知人等の家に相傳る古傳と今思測り得る所の眞說とを相並合せて衆議必是と決定する事有て偖後に斯神の御心にか坐む其神の所爲にか有むと卜合申せるなり崇神天皇御紀に七年春二月丁丑朔辛卯詔曰昔我皇祖大啓鴻基聖業逾高王風博盛不意當朕世數有災害恐朝無善政取咎於神祇耶蓋命神龜以極致災之所由也於是天皇乃幸于神淺茅原而會八十萬神以卜問之云々又秋八月癸卯朔巳酉云々卜使物部連祖伊香色雄爲（中）神班物者上吉之又卜便祭佗神不吉なと有る此等を云なる可し（但此春二月なるは大物主神の祭祀に就たる事耳の如くなれども風氣の順度ならざりけるに依て疫病行はれ又天下凶年なりしかは必此中に含たる可し）○百能物知人は鈴屋大人說に多くの物知人と云事にて百は物知人の數を云るなり」と云れたるか如し師說に物知人とは太兆の卜事を行ふ人を云稱なる事明なり凡て物と云稱は萬に泛く亘る中に神祇を指て云事常に多し其は御門祭詞に四方四角與利踈備荒備來武天能麻我都比登云神乃云々自上往波上乎護利自下往波下乎護利と有る此同事を祈年祭御門詞に踈夫留物能自下往者下乎守自上往者上乎守と云ひ道饗祭詞に根國底國與利麁備踈備來物爾云々下往者下乎守理上往波上乎守理と云へるを對思ふ可し（御門祭詞には神と云るを祈年及道饗祭詞には物と云る者をや又神代紀に葦原中國之邪鬼と有る邪鬼を私記に安之岐毛乃と訓み中昔に物氣なと云又物忌 物狂物の所爲憑物の爲たるなと云物も是にて此は神と云に同じく泛く云る語なり○今云大物主神と申す御名の物も神代紀に是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合八十萬神於天高市師以昇天陳其誠款之至時高皇產靈尊勅大物主神云々宜下領八十萬神永爲皇孫奉護と有を以見れば八十萬神を領給ふ故に大物主神とは申せるなり又萬葉集中に鬼字を母能の假字に用たる所數多在り）知とは深く遠く思慮の智有て神の所爲の幽りて著明からぬを知辨る由にて言本も漢文に著明炳焉明白灼然なと書るを志留斯とも伊知士留斯とも訓に同し（是等も幽れたる事を著明く爲る由に用たり）俗に物知とは今現に見たる小

事を辨たる程の人をも云へと其は事知とこそ可云けれ豈か物知とは云む」と云れたるは然る言なり但太兆の卜事を行ふ人を云と云れたるは當らず神祇の情狀を古傳に徵し古説に合せて悟得る偉人を云なり卜事は其思慮の至り及ばざるに當て物爲るなれば却て末なり孔子家語及説苑辨物篇に顏淵問二於仲尼一曰成人之行何若子曰成人之行達二于情性之理一通二于物類之變一知二幽明之故一睹二遊氣之源一若此而可レ謂二成人一也既知二天道一行躬以二仁義一飭レ身以二禮樂一夫仁義禮樂成人之行也窮レ神知レ化德之盛也と有は我が物知と云者に能協へり〇卜事は鹿卜に在れ龜卜に在れ其占兆の所爲を爲るを云り上に引る御紀に蓋命二神龜一以極二致レ災之所由一也と有ふ此也因に云ふ上古と鹿卜耳有て龜卜は我上古に非ずと云說把りて釋紀に引る龜兆傳の古說を疑ふ事なれども鹿卜は天上に始て成り龜卜は國神の事行給ふ事にて有しなり然るを顯幽相易る當昔以前に我大國主神少彦名神及び其餘の神々の赤縣州を開闢に出坐し時彼國にて專其事を行ひ給へるが人間に漏傳りて彼にも龜卜の古說は有なり然るを却て龜卜は彼に傚へるなりと思ふは其末を見て本を忘竟たる者にて先達の說區々なりと雖も悉皆取に足らず　宇良は本義は性情の情なり然るは事有て其を誂行むと爲るにも物來て其に相應むと爲るにも吉凶悔吝の事を且く打忘て彼左物を右に移さす右物を左に移さす左を左とし右を右とし左に復り右に廻り萬事無違事々本を本として本の本に入り元を元として元の元に任せる隨在天神なる眞心と成て深く思ひ遠く慮るに自か眞情に然ぞ有らむ然ぞ有へきと所思る事の出來るに其事の極に至ては天地神祇の御心に在と雖も幽顯界を分てれは神と我と相攝りて共言へからす故眞鹿神龜の骨に兆文を彫て此を焚く時は是に於て兆文の火拆に隨ひ吉凶悔吝の象を形す其時に我情に合せて其事に隨ひ其物に應ふるか故に其事を爲すを卜相と云て卜合の義なり我情と神の心と合るを以云なり宇良那布は卜並にて卜合の義に同し此等の事予異なる見解有て古說に等からざる事多かり古始太元考三卷に云り　借卜事とは右の卜相の事を物爲るか其兆文に見はるゝ所を以て其指す所の神の御心の隱々も悉く所知れ世に幽ろひたる事趣も眞清明に知るゝ事なるか故に如此は云なり　借其卜事の狀を今此詞に依て思ふに卜事を物爲るの始に先百能物知人等の思慮て天下公民の作物の不熟は其神の御心に坐り某神の所爲に坐りと申せるか各々當然に聞ゆるか其を何れ然在むとは天神御子と坐せとも現人神と在す間は定得させ給ふ可ならす譬は此神を登美に配其神を保に配此處の宮を加美に配彼處の社を延美に配或は多米に配なとして其兆文の町形を焚くに其火拆の有無を以て其事を定むるに此時に某神某神と配たるに火拆の應無き時は又次に佗神々の似著はしきを配て其應有る迄幾度も爲る事と所見たり古事記玉垣宮段に布斗摩邇々占相而求二何神之心一爾祟出雲大神之御心と有なとも兆文の上にて某神とも知了

る可ならす此方より其心當なる神をトに出して求るか故にト合て所知るゝなり此詞の次文に出留神乃御心母無止白止聞看氐と有を思ふ可し是ぞ甚正しきト事にて眞に神の御心の依來坐て其應の必有へき事なり 然るを後世の龜卜の書共に此を彼國の八卦に配て煩はしき判断を加て其當否を試る事の有などは甚も甚も貿氣無き事にて云に堪たる狡意なり偶當る事も無には非れども先は神を强る事にて甚畏しとも何とも云む方無き事なりけり上古のト事は然らず其時に當て吉凶悔吝を象に配て其應を賜りて其事を決るなれば其正しき事言計無し ○出牟神乃御心者此神止白止負賜支此の出牟(アラ)をト事爾出牟と上より續て見るは惡在り此は所見る神の御心と云意なれは神の上に冠らせて心得可なり次に出留神乃御心母無止白止聞看氐と有を併て知可し偖ト事爾出牟と云ひト止母出留云々と云るは上に蔞腿(タダ〳〵)しき迄云る兆文の火拆に所見る所を以て即其神の御心と受賜るを云なり下に引る類聚國史なる天長四年の策命に頃間御體不愈大坐爾依亞占求留爾稻荷神社乃樹伐禮留罪祟爾出止申須と有る出も此の例也 是を以ても判断などを物爲るには非ず正しき兆文を得て定むる事を知可なり 神乃御心とはト事に依て發覺る其即神の所思す所なるか故に云り然れは御心とは御所爲と云に異ならす 記傳廿三二十五丁に爾天皇愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯㆓於御夢㆒曰是者我之御心と有る下に其例を引て云く同記玉垣宮段布斗摩邇々占相而求何神之心爾祟出雲大神之御心又訶志比宮段に天照大神之御心者また景行天皇御紀に今風起浪泌王船欲㆑沒是必海神心也神功皇后御紀に時軍卒難㆑集皇后曰㆓必神心㆒焉則立大三輪社以㆓奉刀矛㆒矣軍衆自聚允恭天皇御紀に獵㆓于淡路島㆒云々終日以不㆑獲㆓一獸㆒於是獵止以更卜矣島神祟之曰㆘不㆑得㆑獸者是我之心也赤石海底有㆓眞珠㆒其珠祠㆑於㆑我則悉當得㆑獸云々また類聚國史に天長四年正月詔曰天皇詔旨止稻荷神前爾申給閇止申佐久頃間御體不愈大坐須爾依亞占求留爾稻荷神社乃樹伐禮留罪祟爾出止申須云々實爾神乃御心爾志坐波 土佐日記に千早振る神の心の荒るゝ海に云々目も現々鏡に神の心をこそは見つれ楫取の心は神の御心なりけり なと見ゆと云れたるか如し 此等の例を合せて神の御心と所思立給ふ事をも成給ふ事をも共に神乃御心と云事なるを知べし ○此神止白止負賜支は此より上なる歳眞泥久傷故爾迄は地詞なり次に百能物知人等云々より此迄は宣命なり此次に此乎物知人等云々より聞看氐迄は奏上の詞なり其次に皇御孫命詔久云々より宇氣比賜支迄は神に告る詞なり其を受て是以云々以下は神の御論言なり如此く條理分明しく而も滯無く聞ゆるは古文の妙にて後人の係ても及ふましき所なり 然るを考の自序に祈年廣瀬龍田の祭々の詞は奈良宮の

始頃作るにて同し古言以て爲れと文云ふ物を心に得て云成ししなられは又一等劣にたり」と云れたれと此翁こそ文云ふ物を心に得て説成されさりしかは然る妄説を以て後人を誤られたる者なりかし鈴屋翁の此等の論を諾れざりけるは實に尤なる事なり　此神止白とは百の物知人等の思慮定たるに卜事を以て其應へりや應はすや合卜合るに其太兆の占形に出る所を明し白せとなり上に云る事共を能々思合て悟る可し　負賜支は天皇の詔勅以て仰給へるなり此は命令の義にて人に物を言附るを云なり續紀宣命に此言多く出たり古事記天石屋段には多く科字を用たり　○此乎物知人等乃卜事乎以氐卜止母は上を承て云る也卜止母は雖二卜相一にて物知人等の其思慮る所を以て徵を神に取て其事を決定む爲と雖もと云義也其は次文に皇御孫命詔久神等乎波天社國社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉云々と有る忘事無久遺事無久にて炳焉たり此方に定むる所有て其正を神に受賜るを卜事とは云也　卜事を爲に神の秘して告給はざるに非ず物知人等の心當の神を卜合するに其心當の神の本より違却て有れば其可(ソレシカ)なりと兆に顯し坐ぬなり　○出留神乃御心母無止白止聞看氐は上に出留神乃御心者此神止白止負賜支と有る對也出留神乃御心母無とは卜相つる人の其有狀を奏せる也偖此卜事に發見さるは百の物知人と雖も年穀の不熟は風神の御心に在りとは豈測知むや此に依て占兆には出さゝりしなり是を以て終に其悟る時勿らむ事を所思して天皇の御誓有事とは成れりし者なるを思ふ可し　且は此御世に疾疫多に行れしなと甚事多在ければ風神などゝは心も着せさせ給はさりし故に御紀七年の下に記させ給へる如く大物主神大國魂神を祭られて其餘の神々の御事迄悉くには未至盡さりしなり　聞看氐は上に負賜支と有を應答を聞看すなり　考に此聞看の字に就て云につる事有と用無れば擧す

皇御孫命詔久神等波天社國社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行乎　誰神曾天下公民乃作作物乎不成傷神等波我御心止悟奉止宇氣比賜支

皇御孫命詔久本朝月令に引るには皇御孫乃御命詔久と有り然らは御命詔久は美許登能理斯多麻波久と訓へきにや然れと容易く改難ければ本の任に措つ偖此は神等に對て詔給へるなり百の物知人等を召給ひて其卜事に出む神の御心を顯申せと負賜へは百の物知人等其を受賜りて卜相申せとも出る神の御心も坐すと奏聞を聞看て更に神等に詔給へるなり御紀に天皇乃幸二于神淺茅原一而會二八十萬神一以卜二問之一なと有趣を以悟る可し　但神に申させ給へるなれば白給久など云べきを詔久と云ふは掛まくも甚も畏き天神の御子に坐はなり詔詞宣命の例如此(カクノゴト)き文法有事を知ざれば熟く古意は得難し　○神等乎波は次に天社國社と云る其なり　新年祭詞に天社國社登稱辭竟奉皇神等と有は其天社國社に向ひて申詞なるが故に皇神等と云ひ此は風神の事に就て天社國社と云るにて其神の前に申すならねば神等とは云る也　○天社國社の事は卷一第一詞に云り御紀に七年十一月丁卯命二伊香色

雄ニ而以ニ物部八十手所レ作祭神之物一即以ニ大田田根子一爲下祭ニ大物主大神一之主上又以ニ長尾市一爲下祭ニ倭大國魂神一之主上然後卜レ祭ニ佗神一吉焉便別祭ニ八十萬群神一仍定ニ天社國社及神地神戸一と見え古事記（水垣宮段）にも此同事を以ニ意富多多泥古命一爲ニ神主一於ニ御諸山一拜ニ祭意富美和之大神前一（大國魂神の事脱たり）又仰ニ伊迦賀色許男命一作ニ天之八十毘羅訶一定ニ奉天神地祇之社一と有此なり記傳廿三（三十七丁）に書紀に天社地社とも天社國社とも有り（此等も此記に天神地祇之社と有る文に依て阿麻都迦微久邇都迦微能社とも訓可きなり）和名抄に天神和名安萬豆夜之呂 地祇和名久爾豆加三或夜之路（此は天神の方をも安萬豆加三或夜之呂と云べき事なり正からぬ記し樣なり）萬葉廿二（十丁）に阿米都知乃可美と有神祇令に凡天神地祇者皆依常典祭之また凡天皇即位總祭ニ天神地祇一（義解に謂即位之後仲冬乃祭下條所謂大嘗）義解に謂天神者伊勢山城鴨住吉出雲國造齋神等類是也地祇者大神大倭葛木鴨出雲大汝神等類是也（出雲國造齋神とは出雲熊野を云るにて須佐之男命なり大汝神とは杵築大社を云○今云山城鴨は御祖神社二座祭神大己貴命玉依姬命即別雷神の御母なり建角身神の女の玉依日賣には非ず別雷神社は祭神味鉏高彦根神にて葛神鴨と同神たるを天神地祇に別てる事義解の說甚其謂無し又住吉も天神には非ず俗の學者此義解より誤を延く事多ければ今辨へつ）と有り天神とは天に坐す神又天より降坐る神を申し地祇とは此國土に生坐る神を申なり（令義解に跪曰レ自レ天而下坐曰レ神也就地而顯曰レ祇也と云り就と云顯と云る事穩ならず）と云れたるぞ尤なる此に就て稽るに祈年（第一）詞に高天原爾神留坐云々天社國社登稱辭竟奉皇神等能前に白久云々と有に四時祭式（祈年祭條）を閲れは三千百三十二座の中に神祇官にて祭らせ給ふ所七百三十七座を除て國司の祭神二千百九十九座をも共に然云るなれは天社國社とは大小の謂に非す唯天神地祇の社と心得て可なり（名神大社を天社と云自餘の小社を國社と云と云る說などは取に足ず）○忘事無久は百の物知人等に深く遠く思慮り令得給ふ事に係て云る也古事記に定奉天神地祇之社又於ニ宇陀之墨坂神一祭ニ赤色楯矛一又於ニ大坂神一祭ニ黑色楯矛一又於ニ坂之御尾神及河瀨神一悉無ニ遺忘一以奉ニ幣帛一也と有此を云なり（和須留とは所走（ワシル）にて心に留むる事の放（サカ）り亡（ウス）る義なり倍下に思志行波須と有る思志は此より應（ヒゞ）きたり）○遺事無久は記傳廿三（四十二丁）無遺忘の下に其三字游都流許登那久と訓可し（忘字も遺也と注せり）祈年祭詞に（月次祭詞にも）島能八十島墜事無萬葉一に川隈之八十阿不落なと有意にて漏さす遺さぬを云なり續紀第十詔に漏落事母在牟加止辱美云々とも有と云れたるに依へし但上の忘事無久は天神地祇を漏さぬ事を云ひ此は其祭祀の闕典無を云なり（尚卷三第七詞の下に云るを見合す可なり倍下に思志行波須の行波須は此より應きたり）○稱辭竟奉止は天社國社の神々を祭らせ給ふ事を云なり（此事上に往々云りき）○思志行波

須乎の思志は上に神等乎天社國社止忘事無久より受て皇御孫命の大御身自深く御心に懸させ給ひ倘遺漏有むかと所思して百の物知人等に懇到に令思給ひ其上にも神等に卜相申させ給ふ事を云也考に續紀の詔に所思行佐久止又所念行爾又所思行支止など書たる多かれと皆右の如く訓なり字に泥む事勿れと云れたれど尙字の如く訓可なり此を考の說の如く訓む時は古文の妙なる差異を別つ事難きなり鈴屋大人說に此は訓べき任に委しく書たるなれば字の任に行字を淤許那布と訓可し此古言なり云々と云れたるは然る言なり然れども今此說に意有て全文を引出す 行波須は遺事無久より受て此は天社國社を定奉給ひ又恐に幣帛を奉らせ給ふ事を云なり然れは行の字大に力有り行は其事を成て其物を整る事なるを思ふ可なり○誰神會は神等を天社と稱辭竟奉らせ給ひ遺漏る事は非しと思し行はす物を誰神ぞと句を切たるに大に尤たる由を會の辭にて聞せたり御紀七年の下に時得㆓神語㆒隨敎祭祀然於㆑事無㆑驗と有る文を今此に置て考ふ可し古事記朝倉宮段に多禮會意富麻幣爾麻袁須と有る語勢に甚能く似たり 御紀七年の下に天皇乃幸㆓于神淺茅原㆒而會㆓八十萬神㆒以卜問之㆒是時神明憑㆓倭迹々日百襲姫命㆒曰天皇何憂㆓國之不㆒㆑治也若能敬㆓祭我㆒者必當㆓自平㆒矣天皇問曰敎㆓如此㆒者誰神也云々と有誰神也此に同し云狀なり古事記御天降段に使㆓何神㆒而將㆓言趣㆒云々亦使㆓何神㆒之吉云々又遣㆓曷神㆒以問云々と有なとは總てに涉て泛きを此の誰神會は總ての多き中より抽出て云なれは甚狹きなり會の辭は其の義にて多く有る物の中より其一に目を著るを云辭なり ○天下公民乃作作物乎不成は五穀を始て草の片葉に至迄を漏さゝるか故に作作物とは云り唯作物と云るとは別なり斯て作作物と云時は在と有ゆるなと云ふ語の格にて佗を漏さぬ事なり其は上に云る事共を見合せて差別を知べし ○傷神等波は上は一年二年爾不在歲眞泥久傷故爾と有其にて下に惡風荒水爾相都々不成傷波と有る如く沴風の難にて傷へる其即神の御心なれは如此く云り上なるは唯に傷へる事耳に用有て神等に係らざるを此は神等に用有が故に傷字上の如くは重からす ○我御心會止の會は誰神會の會に相對るなり輕く見過す可からす上に神乃御心者比神止白また出留神乃御心母無止白と有る二事を取攝て詔給へるか故に意に甚迫切なる味有り古事記水垣宮段に大物主大神顯㆓於御夢㆒曰是者我之御心と有なとは客よりの御言なるが故に其意然迄も急には非るを此は主より天下の凶稔の事を愁させ給ひて其神の御心を知むと急迫れるなれば其意得有べし ○悟奉禮止は百の物知人等の思慮に出す卜事に發見るゝ所無かりしかは今は其詮方に盡させ給ひて直に其御諭有む事を請せさせ給へるなり雖然顯幽界別なれは直に神等の御言語在せさせ給ふ可くも非りしかは天皇の大御壽なとにもや係させ給へりけむ字氣比賜支と有は尋常の御祈とも聞えされはなり

御紀七年の下に春二月丁丑朔辛卯詔曰昔我皇祖大啓鴻基其後聖業逾高王風博盛不意今當二朕世一數有二災害一恐朝無二善政一取二咎於神祇一耶云々と有に此天皇の大御心灼然けれはなり考に宇氣比は誓ても祈ても云り此は祈を云と有に粗なり悟奉禮は御紀の右文の次に蓋命二神龜一以極二至レ災之所由一也と有如く百穀の不熟を成す所由を明白に悟し白せとなり佐登留と云は凡て不審しき事を了解するを云なり但此は神に伺て其不審を決定せむとなり○宇氣比賜支の宇氣比は徵を我に取り信を神に試るを云り然れは宇氣比は受合なる可し萬葉四に得飼飯而雖宿夢爾不二所見來一十一に妹相受曰鶴鳥など有も同じ源語にも宇氣比給と云ふ事所々に見えたり神代記瑞珠盟約章第二の一書に天照大神復問曰汝言虛實將二何以爲驗一對曰請吾與レ姉共立二誓約一誓約之間生レ女爲二黑心一生レ男爲二赤心一と有を視つ可し此は天照大御神の武備を爲て待設給へる時に立二誓約一と申給へるなれは言以て行けは其虛實の謂に依て御壽に係らすとは云へからす又御天降段正書なる皇御孫命の一宿にして姙娠る事を疑給へる條に故鹿葦津姫忿恨乃作二無戸室一入二居其內一而誓之曰妾所娠若非天孫之胤必當二燋滅一如實天孫之胤火不レ能レ害云々と有て一一書共の趣も然なるを思ふ可し神武天皇御紀に復有二兄磯城軍一布二滿於磐餘邑一賊虜所レ據皆是要害之地道路絕塞無二處可一レ通天皇惡レ之是夜自祈而寢夢有二天神一訓レ之曰宜取二天香山社中土一以造二天平瓮八十枚一并造二嚴瓮一而敬二祭天神地祇一亦爲二嚴咒詛一如此則虜自平伏と有て次に天皇既以二夢辭一爲二吉兆一云々椎根津彥云々弟猾云々勅之曰宜汝二人到二天香山一潛取二其巓土一而可二來旋一矣基業成否當以汝爲占努力愼焉是時虜兵滿レ路難二以往還一時椎根津彥乃祈之曰我皇當三能定二此國一者行路自通如不能者賊必防禦と有を以て此祈も唯神に禱請る耳には非す誓て徵信を神に索るなり此亦神に誓ふに損亡の事に係たるを思ふ可し此次に又因祈之曰云々と有なと天皇の初國を定めさせ給ふ大事なるは故に容易き御誓には非りけり又古事記玉垣宮段に本牟智別命の事を記されたるに是御子八拳鬚至二于心前一眞事登波受云々爾祟出雲大神之御心云々爾曙立王食レ卜故科二曙立王一令二宇氣比白一因拜此大神誠有レ驗者住二是鷺巢池之樹一鷺乎宇氣比落如此詔之時宇氣比其鷺墮地死又詔二之宇氣比活爾一者更活又在二甜白檮之前一葉廣熊白檮令二宇氣比枯一亦令二宇氣比生一と有る誓の狀の凄しかりつるを見るに今世の誓言にも神祇の御罰(ミキタメ)を蒙りて壽命を召れ奉らむと云なと此に同し其應の迅速き事は同記豐浦宮段に於是息長帶日賣命云々上幸之時香坂王忍熊王聞而思將二待取一進二出於斗賀野一爲二宇氣比獦一也爾香坂王騰二坐歷木一而見大怒猪出堀二其歷木一

即咋ニ食其香坂王一と有は神の納受給はぬ事に其誓には負たるなり（尚此等の侘にも誓の事の古書に出る事多かりと雖も唯一二例を引く耳）是等の故事を合せて此の御誓の甚少縁ならぬ状を想像り奉る可き者なり（此を唯に御祈と耳見る人も多かれども其は事の意を得知ぬ所爲なれば云に足ず）
是以皇御孫命大御夢爾悟奉久天下乃公民乃作作物乎惡風荒水爾相都々不レ成傷波我御名者天乃御柱乃命國乃御柱乃命止御名者悟奉氐
是以より悟奉久迄は此祝詞の地より云るなり次に天下以下は先に誰神曾云々一と有る皇御孫命の詔を承て神の悟申給ふ所なり（故此に是以と上を承て下を起す詞を用ひたり）○大御夢爾悟奉久は御紀に九年春三月甲子朔戊寅天皇夢有ニ神人一誨之曰以ニ赤盾八枚赤矛八竿一祠ニ墨坂神一亦以ニ黑盾八枚黑矛八竿一祠ニ大坂神一と有る此度の事なる可なり然るは此前文に神等乎波天社國社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行波須乎と有は御紀に七年十一月云便別祭ニ八十萬群神一仍定ニ天社國社及神地神戸一と有此に當れは必此九年三月なる可を（此事大忌神詞にも此卷の首にも云り）古事記に定奉天神地祇之社と有て其次に又於ニ宇陀墨阪神一祭ニ赤色楯矛一又於ニ大坂神一祭ニ黑色楯矛一（此は水分神山口神なる事記傳の說に本就て大忌祭詞の下又此卷首にも云り）又於ニ坂之御尾神及河瀬神ニ悉無ニ遺忘一以奉ニ幣帛一也と有る坂之御尾神及河瀬神を祀られしは御紀に對攷ふ可き所無れども熟思ふに坂之御尾神は御縣神に當り河瀬神は大忌神に當れるは（鈴屋大人說に坂之御尾は山の坂路の前の長く引延たる處なる可しと云れたるに就て思ふに御縣は御高田なりと云れたるに依れは坂之御尾に苑囿を作るを以然云と所思ゆ又河瀬神は大忌神ならむと云は廣瀬川合と云に同じかれば然思ひ定めたるに依れるなり）其御縣山口神等の大忌神に屬て祀られ給ふと此風神と大忌神と當昔より同日の祭にて相共に預給ふ事上に云る如くなれは此彼より攷て此大御夢の御諭は九年三月甲子朔戊寅天皇夢有ニ神人一云々の度ならむとは思定けるなり（如此く比校する時は祝詞文の傳はるに預けて御紀には載漏されたる事知らる）當に云如く神と人と幽顯相界て有れは天神御子と申せとも現人に在す間は直に御言語爲させ給ふ可からず故物知人に仰て卜事を以て神の御心を問奉らしめ給へるか斯在る大事に至ては豈卜事の能く及ふ所ならむや是を以て天皇大御身自神牀に入坐て御誓申給ひ困して御寢坐る大御夢に神の入給ひ悟奉給ふ事にて夢の御諭を持て神牀に御寢坐るならす其精一なる大御心神祇に通徹り神祇の御心御夢に入せ給ふ事也
又神武天皇御紀に既而皇師欲レ趣ニ中洲一山中嶮絶無ニ復可レ行之路一乃棲遑不レ知其所跋涉時夜夢天照大神

訓二千天皇一曰朕今遣二頭八咫烏一宜三以爲二郷導者一なと有は天皇の御心若せ給はざるを神の得忍ひ堪給はて御夢に入て諭奉給へるなり御紀四十八年の下に天皇勅豐城命活目尊曰汝等二子慈愛共齊不レ知二曷爲レ嗣各宜レ夢朕以レ夢占レ之二皇子於是被命淨沐而祈寢各得夢也と有も同し狀なれど此は兆を取む爲なれば輕なりこの例古事記水垣宮段に此天皇之御世疫病多起人民死爲盡爾天皇愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯於御夢曰是者我之御心云々と見え此事御紀七年の下に天皇乃沐浴齋戒淨殿內而祈之曰朕禮レ神尙未レ盡耶何不レ享之甚也冀亦夢教之云々と有れども此は夢に神教を得給る前に及して書されたるなり其は亦夢教之と有る亦字は前に夢の御諭などの有て亦其教を乞(コハ)ごるゝ趣なれど此より前には百襲姬命に御託言有しなれば又其御託言をこそ乞給ふ可けれ亦夢教之とは爭は宜にむ然れば此は記を正しとす　又玉垣宮段に本牟智和氣御子の眞事問ざりし時の文に於是天皇患賜而御寢之時覺二于御夢一曰修理我宮如二天皇之御舍一者御子必眞事登波牟云々など有を考合せて悟る可し然れは礎細の小事に至ては直に御夢に乞せ給ふ事も無に非れとも其實は天皇の已命を忘竟させ給ひて直にも神等に御言語せ給はむ御心に成せさせ給ひ祈因して神床に打臥給へるを度(トキ)と神の御夢に顯れて悟し給ふ事更に疑勿る可き者なり倚此は神代に已に有て出雲風土記に見えたり委しく大元玫に云ふ可し○天下乃公民乃作作物乎云々は先に天皇の如此詔給ひて其は誰神ぞと誓請給へるに應て神の告給ふなり此事上にも云り○惡風荒水は大忌祭詞にも見ゆ其下に云る如く大忌神風神の御心に依る故に雨方に係て云り然れとも大忌神の稻穀の靈神と在して甘水の事をも兼知せ給ひ風神は風氣を通(シレ)はし靡けて稻穀を成熟給ふ神に坐は各々所掌る處異なりと雖も水は風を起す所以の器なり神代紀に伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化二爲神一云々是風神也と有を以知へし又神名式に大和國城下郡朝霞黃幡比賣神社大月次相嘗新嘗と有も神代紀と同意の續にて朝霧は發語にて黃は氣幡(キハタ)は溢(ハタ)にて氣の氤氳する由の神名なり　又風は水を進退する所以の具なり風氣の雲雨を導て往來し又東南風の物を浸潤し西北風の物を乾燥するを以知へし此皆水氣を含むと含まざるとの合然る處なり是を以て神祇令義解に大忌祭謂二廣瀨龍田二祭一也云々又風神祭謂二亦廣瀨龍田二祭一也云々とは云り此等の事大忌祭に惡風荒水と有る條にも云り倩此風水の元因大虛の廖廓たる處悉く元氣の充塞て而も大寥にして其氣剛健なる中央に天日の光彩六合に彌綸て其元氣をして屈伸變化無窮しめ天地造物の妙用を施給ふ神妙不(トホリ)測の御德に出つ所以に天日の光暉大虛の水氣に徹(サキリ)入て水體と交和(アヒマジハ)る力を以て大に伸れは風と成て游氣に和し小く伸れは霧と成て亦終に伸ては游氣と成る者て此風霧伸て上れは游氣愈々濃く成るか風行の變に

依て游氣の淡濃求合て小く凝る時は雲と成り大く凝る時は雨と爲りて天地と共に盡る期有へからす雷電霹靂の又此に副も常なり是に於て游氣始て輕虚に成て晴る事を得るなり所以に風神の朝日の日向處夕日乃日隱處と乞申させ給ふ事有り其は天日に御德得給ふ所由有て下に述たるを見る可し　如此くして循環る中に風時の氣に乘て八節を調へ寒暑を序るの神物たり所以に師說の如く東方は風神の御靈の關る方にて其氣の春に行れて風色は青くして温なり此故に草木生る然るは風神の御言に吾宮者朝日乃日向處夕日乃日隱處乃龍田乃立野乃小野爾吾宮者定奉氏と宣へるは東を前に西を後に爲ま欲く所思す由にて東方に御心の向る狀なるを内宮年中行事に風日祈宮の神拜は巽座東上と有て東方拜有子細歟と見えたるなど由有て聞ゆるに就て思ふに四方四隅より種々に吹く風の多在る中に東方より吹風の能物を生し立るは此方に御靈の向坐す故由有べく思はるればなり　南方は火神の御靈の關る方にて其氣の夏に行れ且其氣を含る故に風自然熱なり此に依て萬物長ぶるなり其は南方より吹く風は火を含みて靡くが故自然に輕くして暖伸するなり風の火勢を勝し火の風勢を強らするなど然る可き由有けるなり　西方は金神の御靈の關る方にして其氣の秋に行れ且其氣を含る故に風自然涼なり此に依て萬物收る金氣の剛強にして締有る故に萬物成熟して實を結ふなり　北方は水神の御靈の關る方にして其氣の冬に行れ且其氣を含る故に風自然寒なり此に依て萬物藏る藏るとは外表に在る所の陽氣内に沈て葉落つ葉落るが故に將に芽むと爲るは水氣の陽火の氣を孕て伸出むと爲るなり但北方より吹風は重くして冷屈するが常なり　中央は土神の關る所にして其氣の上用に行れ風氣の本體土中より薫發る所なるが故に能く萬物に關て質を爲す又雲と爲り雨と爲て土に降るも元氣本其土に生して土に歸入るの故なりけり　此は古史傳に註されたる師說に根據て今按を加たる說なるか皇國に風火金水土の五元神の古傳有る其青赤白黑黃と次序る理に妙契有り其は草木の出來始より長する迄の其色は青きが實を結ぶに至て赤らみ葉落て白く爲り腐る際は其色黑く土に變ては其色黃なるなど天自然に其消長の氣の本色の彰るゝ者なりけり但此に出せる史傳の說は已直に見たるに非す鐵胤が史傳を講するに就て聞たるが金色は黑く水色は白しと云れたるなど予が心甘なひ難きは取す先は予が說なり　斯て卷首に說る如く春温に夏暑に秋涼に冬寒に行るゝは四時の正氣にして此正氣の行れざる時は天下公民の作と作る物は五穀を始て草の片葉に至迄に能く成熟する事無し此即風神の大忌神と共に其化育を主給ふ事なるか故に惡風荒水云々とは云り荒水の事は大忌祭詞に云り上に風は水を進退する所以なりと云て其所に說る如く水の事にも係れる所由を考ふ可なり　○相都々は大忌祭詞には不相賜と有り其は祈て未然を禦く詞なるか故なり又此詞の下にも然有は即神の御言を承て祈申にて同事なり　此は當昔因年の打續たる所以を神の示給ふ御言なるか故に相都々と云り斯て相都々は合遇の義なり都々と云に一向に神の御守護非りし事所見たり　○不成傷波は天皇の詔に不成傷神等波我御心曾止悟奉禮止と仰給へるに答て宣ふなり天皇の御方より

は神幽の事測知難に依て傷神等波と詔給へるを己命等二柱を除ては在ぬ由を知せ奉て傷波とは悟奉給し者なり能く心を留て味ふ可し○我御名者は我御心曾止云々に對て宣へり天皇の御方より御心と詔給ひて御名と無く神よりは御名と悟奉て御心を無は互に略きたる古文の格なり○天乃御柱乃命國乃御柱乃命とは深き幽契有る御名なり其因起は古事記に於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言依賜也故二柱神立天浮橋而指下其沼矛以畫者鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而引上時自其矛末垂落之鹽累積成島是淤能碁呂島於其島天降坐而見立天之御柱見立八尋殿と見え神代紀書正に以磤馭盧島爲國中之柱柱此云美簸旨邏と見えたり又一書には記に同きを天柱と作り此天柱國柱と云ふ起元なり舊事紀及び私記にも天神所賜瓊矛既採得磤馭盧島畢即以其矛衝立此島爲國柱也と有は國中之柱を國柱と云り此天柱は元氣の天に通ひて生々の德を稟受り國柱は元氣の地に冲りて萬有を固むる事を爲す造化の神器にて大元の靈物たり天極地軸相牽制の元由天日地心相因准の本緣たり天極に對て上升下降して四時成り天日の輪を運旋して一年の時日定る事此に因り答て二柱神大八島國を生竟給ひ蛭子千島蝦夷淡島諸外蕃國は御子の列ならすながらも放給ひ畢て伊邪那岐命の我所生りし國は唯

游氣耳有て薫滿る哉と詔給ひて吹撥はし丶御氣息に此風神の化生坐しは必此淤能碁呂島なりけり風神の御名を天乃御柱乃命國之御柱乃命と申すは此に因れり漢籍岳瀆名山記に天柱五岳を記せる東岳廣桑山者在東海中青帝所都と有は此の古說の彼に傳はれるにて青帝とは風神なり上に云る如く風色は青きなり氣炮を打を見たるに水色と云狀爲たり且其根元たる大虛の青を以も知べし御柱は眞經氣有にて蒼々として大虛の空しと雖も眞空なる隱處有る事無く元氣六合に彌綸て天地を載て墜さすながら而も其氣の往來昇降止む期有る事なし此謂ゆる天浮橋と云ひ天八衢と云物にて宇麻志阿斯訶備比古遲神の天綱の立ち天網の成れる此なり已に第三詞第七祠の下に說る如く此天綱を天之常立神の結成て天綱を欵々と建給けるに天日其中心に在て清明きな火産靈神の斬(き)られ給し故に其血其綱に乘て天日に入り天日愈々光華明彩に成れり此風神と火神と共々に親しみ坐る事の本にて大御神の亦風神に親しき所以なり神代紀書正に生日神號大日靈貴此子光華明彩照徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未有若此靈異之兒不宜久留此國自當早送于天而授以天上之事是時天地相去未遠故以天柱擧於天上也と有る天柱其にて此天乃御柱乃命の天上に擧奉給へる者也又大同本記なる水取詞に大橋小橋と有も此天柱と同じき也此は天浮橋など云も同じきを其浮橋の實を彰せるは神代紀一書に伊弉諾尊伊弉冉尊二神立於天狹霧之中云々と有を以て思ふ可し故大人等の云れたる說一として取へき者無也故天柱國柱とは天地に通ふ氣脈の剛健に立る謂にて衆神の上下爲給ふ

も此に縁る事にて天地の機關の根抵(モトヰ)たり古事記(天御降段)に下照比賣之哭聲與レ風響到レ天と有も神靈を載て運送ふ所以なり人の精神の表るゝは言語なり其言語は喉内より風氣の靈を載て外發し人の耳より達るなり隱身の神明は靈を以て體とす風氣に乘て上下爲る事譬は人の精神の言語と爲て人耳に傳るが如し是を以て見れば天柱國柱の波斯良は天地の間に在て天地を支持つ由を以て間在の義を保ち又此より風氣の往來するを以て此言に走有の意象をも含る者なりけり　偖御柱は上に眞經氣有と說る其眞は氣の純粹なる者にて萬質の混元なり天地間に充實して天地を保有ち萬品を化成するは本源たり古始大元攷に說る如く天之御中主神高皇產靈神神皇產靈神に各々御の言有は祟詞の御に非ず氣の純粹なる者の上に就たる言にて各々其物に係て御德を爲給ふ由の御名なり　經(ヘ)は歷なり天地の眞氣の往來升降するの謂なり偖物に經歷循環の活機有は悉く火の勢を稟るに在り然れは天日其本所たる事上に風の起元を說るか如し所以に此詞に吾宮者朝日乃日向處夕日乃日隱處乃龍田乃立野乃小野爾吾宮者定奉吾前乎稱辭竟奉者と乞申給ふ御言を截たるを思ふ可し此事上に惡風荒水の注に委しく云るを此に校合す可し氣は已に級津彦命の傳に云り有は形狀言なり又被字所字の義なも含みて物を然する樣の意なも備たり　如此く或は斷ち或は續けて考徵し奉されは言靈の德用(サキハヒ)を伺奉る可からぬ者ぞ倘古始太元攷に說るをも見合す可き者なり

〇御名者悟奉氐は大御夢爾悟奉久と有に相應て云結たるなり是にて我御心曾止悟奉禮止宇氣比賜支と有る事の微信の灼然なるを強く見せる者ぞ御名の發見れたるに依て其事實の明に知るゝが故に此にて此語有なり

吾前爾奉牟幣帛者御服(ミツハ)者明妙照妙和妙荒妙五色乃物楯戈御馬爾御鞍具(ソナヘテクサグサ)氐品品乃幣帛備氐吾宮者朝日乃日向處夕日乃日隱(カクル)處乃龍田乃立野乃小野爾吾宮者定奉氐吾前乎稱辭竟奉者天下乃公民乃作作物者五穀乎始氐草乃片葉爾至萬氐成幸閇奉牟止悟奉支

吾前爾奉牟幣帛者云々は其祭式を悟奉れるなり但此は次なる吾宮者定奉氐の次に有へき文なり然れとも其如くにては祭式の事の主々して聞えさるか故に其宮定の事よりは前に云て文勢を強く爲る者にて能く後人の企及ましきは然すがに神の御言なり此所謂る錯綜の文法にて究めて人耳へ深く達る者なり　〇御服者明妙照妙和妙荒妙五色乃物楯戈御馬爾御鞍具氐品々乃幣帛備氐は御紀に九年春二月甲子朔戊寅夢有二神人一誨之曰以赤盾八枚赤矛八竿祠二墨坂神一亦以二黑盾八竿黑矛八竿一祠二大坂神一と有る類にて此にも楯戈の事の有を以見れは上にも云る如く此九年三月の事なる事決し古事記にも有の赤黑

の楯矛の事有に大忌龍田神に其を進らるゝ事の見えぬは記漏されたる事云迄も無れと社も多在るに右の墨坂神大坂神耳に献られたる事跡の傳るは赤黒の楯矛の異(ケヤ)けき物なりけれはなり（尚奉宇豆乃幣帛者云々の下に說く可し）○吾宮者は御靈の鎭坐む御在所なり偖此神の如きは天柱國柱と天地を大氣に載て有たせ給ふ計りの甚しき大神在るに其宮をしも乞給ふは如何なる如きに似たりと雖も此神に限らす大地の御在處は朝廷の御定に依らせ給ふ事なり其は此大地の全(ミナ)は天照大御神より皇御孫命に事依し奉給へれは神と雖も朝廷の御定には漏させ給ふましき所謂なり（此即顯幽の界を爲す所以なり吾古學の徒の尤心を潛めて思ふ可き處なる者なり）然れとも又世中の事は悉く神の御心と作爲給ふ所なり天神御子とは申せとも其恩賴に資せ給はては所知看す御世の事は御心にも任せさせ給ひ難き御事なる由緣此詞に見えたる如く天皇は天下豐稔の御祈有り風神は御在處及其祭祀を乞申給へる御旨を對攷て悟る可し（此事已に祈年祭詞の下に委く云置たり）若然も有は風神の宮居よりは常に風氣起り火神の宮居よりは常に火氣然(モエ)むかと云に然らす各々其造化は天地間にて行ひ給ふ事にて天照大御神を齋奉る宮中より天日の出來る事無か如し宮居は其御靈の鎭坐て其祭祀を享給ふ處也（是故に其神の宮を定て祭る時は其氣の天地間に徹りて終には其感應に依ては造化を動すに至る事有る物なりかし）○朝日乃日向處は古事記に朝日之直刺國と有る如く東方に向ひて天日の初て指入る影に正對ふ義なり偖風神の如此しも朝日の日向處夕日の日隱處と請給へる所以は上に註せる如く空氣の動て風と爲る事は天日の光輝に成れり然れは其御緣に因て天日に朝夕對向ふ處に坐まく所思すなり將此に依て其神の御德の加り給ふ事の非しとも云へからす（邇々杵命の朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地詔而云々と有も天日の御國より天降らせ給へば其本土に向へるを甚吉と詔給へるに准へて知すべきなり）日向とは東に向ふを云なり國名に日向と云も景行天皇御紀十七年の下に幸二子湯縣一遊二于丹裳小野一時東望之謂二左右一曰是國也直二向於日出方一故號二其國一曰二日向一也と有意にて古事記（御禊段）に筑紫日向之橘小門之阿波岐原と有なとも東に向へる地を云るなり又（國經營段）に是時有二光レ海依來之神一云々大國主神曰然者治奉之狀奈何答言吾者伊二都岐奉于倭之青垣東山上一此者坐二御諸山上一神也と有を神名式に大和城上郡神坐日向神社（大月次新嘗）と記し垂仁天皇御紀に有る倭日向武日向彥八綱田と人名も日向は東の義なる事御炙たる以二豐城命一令レ治レ東

と有を以知へきなり萬葉十三にも高北之八十一隣之宮爾日向爾と詠り古事記朝倉宮段歌に麻岐牟久能比志呂乃美夜波阿佐比能比傳流美夜由布比能比賀氣流美夜と詠たり大神宮儀式帳に朝日來向國と有も日向國と同し風神の殊に此朝日の來向ふ處を美しみ所思すは此方即風神の掌坐す所以有はなり赤縣の古説にも五行の木は風にて其位東に方るの説なり師の三五本國考に云れたる如く古書共に大昊伏羲氏風姓以二木德一王たりと云るを見よ〇夕日乃日隱處は古事記朝倉宮段歌に由布比能比賀氣流美夜と有に依て訓へし同書に夕日之日照國とも有る如く西方の遠く打晴て夕日影の永く刺入る迄見畢りて其宮內に沒るか如くなる處を云なり故大神宮儀式帳には夕日來向國と云り記傳に日隱處は賞べきにも非れとも唯朝日を主と爲て其對に詞の文に云る耳なり」と云れしは深くも思はれざりし說にて云計り無き僻事也龍田風神の斯る大事に臨て天皇に悟奉る御言に文（アヤ）處の事にては有ましき者也夕日乃日隱處は夕日の沒（チヽ）ろ迄永く日に向ふを云也記傳十五八十六丁に萬葉二九十二丁に朝日豆流佐太乃岡邊爾又廿丁且日照島乃御門爾十六丁十五に夕附日指哉河邊爾構屋之なと皆日影の刺を以て其地を美たり又物の美麗き事を賛るにも日影を譬に云り萬葉十三五丁に內日刺大宮都可倍朝日目イ奈須日細毛暮日奈須浦細毛云々百礒城之大宮人者云々此は女官等の五十師原行宮の宮仕爲る狀を賛て云るなりなと是なり偖地を賛るに日影を云事は大方日影の刺ぬ地も大概無き物なれども高く打晴て殊に能く刺す地を賞するなる可しと有り又此發語の內日刺は愛日刺なり然るは人情の常として何よりも愛しく所思る者は日なるか故に朝夕に心も著す日に向ひ膽る者なるは即其を愛しむ意の固有り身に具るか爲なり皇御孫命の朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地と詔給へるは其天日の本域より天降らせ給ふか故に其本域の慕しく坐し如く天下蒼生も然にて靈と氣を天神の御許に受賜り質を大地に稟受て生る〻故に靈氣は常に天を欲ひ質は大地に緣る事なるを以て愛日刺と云て偉慶（オムカシ）む事なるなり冠辭考二卷內日刺の條に麗しき日の刺宮と續たるなりと云れたるを鈴屋大人も取られたれど叶はず〇龍田は上に出其下に云り〇立野乃小野爾の立野乃の乃を諸本爾と誤れるを考に乃と改られたるか然る言なるに就て數本を校合るに本朝月令に引るには立野乃小野爾と有は善本の有て其に依れる事著けれは今は改たるなり偖若く立野乃小野爾と云ふは打任せての大名にて小野は其に攝ぬる區別なり立野は今も此處を立野村と云り天武天皇御紀に祠二風神于龍田立野一と有る此なり考に立野村の社の瑞籬の內に東に向て大なる社二有り此天御柱命國御柱命の社なり〇今云或書に右の本社の右に中社二有り此式內龍田比古龍田比女神社二座と有社なりと云り今法隆寺の邊に宜しき社二有り此を龍田本宮そと云成すは例の僞なり此は立野の御旅處なる事今も然り然

るを此を耳拝みて立野の本宮は其法隆寺より南方へ今の道二十町計り有り木深くして物舊たる社なり」と云れたり今立野越と云て大和より河内へ越る街道も有とぞ小野爾は立野の地形を善て云り此は地名に非す筑波山を小筑波山と云ふなどは此例也物の形の成整ひ行くを善て若菜と云も此に同じ○吾宮者定奉氐は右の朝日乃日向處夕日乃日隱處の吉處を吾宮處と爲て宮柱を定奉氐と云義也春日祭詞に大神等能乞賜比能任爾春日能三笠山能下津岩根爾云々天乃御蔭日乃御蔭止定奉氐と有るに同し定奉の例上に出巻五春日祭詞の下に云り又巻八平野久度古開神詞の下に云り○吾前乎稱辭竟奉者は吾前を云々して齋祭給はゞとにて此は上に吾前爾奉牟幣帛者云々の事に宮柱の事をも兼て宣へるなり且此に皇御孫命詔久神等乎波天社國社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行波須乎誰神曾云々と詔給へるに應て猶其闕典有る事を示給へるにて文義の對照奇異在る迄神妙なり今人の言語を爲すにも誰神曾など尤められたる時の口語には如此くも出來るを筆を取り事と意と乖違る事有て其義理の詳ならぬは何事ぞや○天下乃公民乃作作物者五穀乎始氐草乃片葉爾至萬氐は上に天下乃公民乃作作物乎と有を此に委しく宣へるは即皇御孫命の御誓を諸奉て天下公民の作と作る物の有の悉く守護坐む事を懇切に宣へる也此等何所も同詞を用へる故に其義の一にして異無か如く説爲すは深く意味を考ざる者なりかし○成幸閇奉牟止悟奉支は此神の御言に先に天下乃公民乃作作物乎惡風荒水爾相都々不成傷波と有る反なり良風の吹き甘水の灌く時は自然其全稔を得る故に成と云ひ又惡風荒水に傷されは豊登なり此を幸閇と云り惣て幸と云事は其物により引伸て眞幸在る事を云り佗より來るの謂に非す神の御靈の幸ふと云も其神靈の引伸て人を守るに至るにて此亦其物なから光輝の及ぶを云なり

是以皇神乃辭敎悟奉處爾宮柱定奉氐此乃皇神能前爾稱辭竟奉止皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎令捧持氐王臣等乎爲使稱辭竟奉止久皇神乃前爾白賜事乎神主祝部等諸聞食止宣

是以より以下は神の御悟言を承て其に因准し當今其神を祭る事實を述るなり且皇御孫命の我御心そと悟奉れと誓給し事の結と爲る處なり能く心を着可し○皇神乃辭敎悟奉處爾は龍田乃立野乃小野爾と有る其處なり倩辭敎の辭は事なり事とは宮柱を定め幣帛を奉る等の概略なり然らずば御言と云ては叶難し此事記傳四巻言依賜也の傳に言は借字にて事なり若言の意ならば御言依と有べきに何の書にも御と云るは無しと云れたると同例也○宮柱定奉氐は吾宮者定奉氐云々と悟奉れる神の御言は承て今の事實を云るなり今祭る時に新に宮柱を造立る謂には非ず其社に神の鎮坐る事を云なり定奉氐は令鎮坐氐と云に同し御鎮座本緣に大御神の五十鈴宮に鎭

坐る條に愛倭姫命朝日來向國夕日來向國浪音不聞國弓矢鞆音不聞國風音不聞國打麻（厚カ）乎志賣留國敷浪七保（シホ）之吉國神風伊勢國之百傳度相縣之佐許久志呂五十鈴宮爾鎮利定利給止國保支給比支とあるを以て悟る可し（但此なる鎮利定利給を大神宮儀式帳には大御意鎮坐國止悦給邑大宮定奉支と有り倚此に打摩乎志賣留國は打麻乎志賣留國にて亜仁天皇御紀に傳國可怜國など云に同じ状にて打麻乎は發語志賣留は縁有なる可くや又敷浪七保之吉國は同御紀に常世之浪重浪歸國と有に合せて考るに七保之吉國は鹽之直國にて此は萬葉二に神風之伊勢國波云々鹽（シホ）氣能味香乎禮流國と有る意なるにや）○此乃皇神能前爾は龍田に進らるゝ御使に託て令申給ふか故に此乃と云り（此は宣命ト祝詞とを相兼たる故にて何の詞の例も皆然り）○稱辭竟奉爾は幣帛を獻て參向ふ事を云なり（考に奉止と改られたるは甚しき強言なり幣帛を奉らむ爲に王臣等の御使に參る事なれば奉爾と云べき處なり大忌祭詞ら文は此と同じきに稱辭竟奉久と有は爾を久に誤れるなり然らずば下への續き惡在り）○皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎令捧持氐の幣帛の員數は已に上に四時祭式を引て註せり令捧持氐は大忌祭詞にも有り僣其捧は指擧なり古事記に爾其后取大御酒坏立依指擧而歌曰と見え又朝倉宮段に三重婇指二擧大御盞一以獻と有り（記傳十一に云く佐々宜は佐志阿宜を約たるにて此字の意なり）○王臣等乎爲使氐は崇神天皇の大御世より皇子等を始て重き官位の人等を御使に進せらるゝ御定なりし者なり天武天皇御紀に遣二小紫美濃王小錦下佐伯連廣足一祠風神于龍田立野と有は此御再興に當りて當昔の形を遣されし者なり此より例と成て四時祭式には大忌祭云々風神祭云々右二社差二王臣五位已上各一人神祇官六位以下官人各一人一充レ使（卜部各一人神部各二人相隨）と有り（令集解に五位以上充レ使と有は此に依て記せるなり）○稱辭竟奉久止皇神乃前爾白賜事乎の稱辭竟奉久は皇御孫命より神に申させ給ふ詞にて祝詞なり皇神乃前爾白賜事乎より以下は祝詞を兼たる宣命なり（大忌祭詞には皇神乃前爾白賜事乎の詞は無ながら凡ての意は同じきなり）○神主祝部等諸聞食止宣は此にて宇豆乃幣帛を奉て此祭を爲す所以を云て大綱なり下に云々云る事は其小目なり（倚大忌祭詞に此と同語なる處有り其下に云りき披見る可し）

奉宇豆乃幣帛者比古神爾御服明妙照妙和妙荒妙五色能物楯戈御馬爾御鞍具氐品品乃幣帛獻比賣神爾御服備金能麻笥金能椯金能桛明妙照妙和妙荒妙五色能物御馬爾御鞍具氐雜幣帛奉氐

此は天御柱命國御柱命の比古神比賣神に在す證徵なり然るは古事記に生二風神名志那都比古神一と見え神代紀に吹撥之氣化二爲神一曰級長戶邊命（亦曰級長津彥命）是風神なりと有て古事記には比賣神の傳を漏し神代紀には比古神の傳を脫されたるを（但神代紀には亦曰級長津彥命と有れば男女二神の傳なるに似たりと雖も然る事に心着て書れたるには非ず級長戶邊命と云ふ傳有て記されたりけるか級長津彥命と云ふ御名の有を以て亦曰とは書

れたるなり　此詞に此古神爾云々比賣神爾云々と有に依て記紀の脱漏を補綴ふに足れり亦名を龍田比古神龍田比賣神と申に思准へて明らむ可なり此故に令集解風神祭釋に同日共祭ニ其妹姝神ーとは註せり（此事委しく上に記傳及古史徵祝詞考共を合せて云るを見合べし）○奉宇豆乃幣帛は上に風神の御言に吾前爾奉牟幣帛者云々と有を承て下を起す料なり（彼には奉牟と未然を云ひ此には奉と現在を云るを熟思ふ可し）○御服明妙照妙和妙荒妙五色能物楯戈御馬爾御鞍具氐品々乃幣帛獻も上なる風神の御言に御服者明妙云々品々乃幣帛備氐と有る其なるか神の乞しの處には備氐と有を此には獻と有を以て其御言に應たる趣なる事を知へし四時祭式（風神祭條）に絁二疋絲四絇綿一屯四兩五色薄絁各二丈倭文一丈三尺布一端一丈庸布五段木綿一斤十兩麻六斤九兩（五斤二兩祭料一斤兩祓料）枲八兩と有此なるか此中に比賣神の御服料をも兼たり（此事下に云べし）○楯戈御馬爾御鞍具氐は四時祭式に鹿皮四張鐵六斤十兩鞍二具馬二疋なと有此なり比賣神のをも兼たる事上に同し下此に倣へ（鹿皮は楯に縫ふ料鐵は戈に鍛ふ料なる事は云も更なり御鞍は毎年に調進爲らるゝにては無にや鞍隨ゝ損供進と見えたり）御鞍具氐は御鞍は云も更なり御馬に屬たる御調度の事を聚饌しく云すして此一語に含たるなり（曾那布は其並の義にて事の缺乏しからぬを云ふなり）○品々乃幣帛獻は上に擧たる御服御楯御馬の類下に出たる御酒以下の供物の外に奉らるゝ物を云四時祭式を稽るに弓四張箆一連羽二翼鹿角二頭なと有類なる可し（尙外にも臨時に奉らるゝ物も有なる可し但鹿角は御弓の矢筈に爲る事と見えたり）○比賣神爾御服備は佗社の例多くは比古神に耳奉られて比賣神の御服迄には悉く及はさるに此社へは態と比賣神の御給（メシ）む料に調進る事を如此云るなり（考に此は明妙云々五色物云ふ迄の言を略て御服備と云なりしと云れしかと然らず此は比賣神の御服迄を殊更に設備る事を云るにて其色物は下に明妙照妙和妙荒妙五色能物と有此なり然るを考に此十一字を衍文の如く云れしは中々に委からぬ者なりかし）○金能麻笥の金は金色の事なり祭式に多々利一枚麻笥一合加世比一枚（已上三物並金塗）漆一升金漆一升なと有を以て視つ可し偖金は我か上古には非ぬ物にて聖武天皇天平の御世頃に始て出たるか如く心得めれと然らす其は山を穿て堀出ることそは其時を始とは爲めれ實には神代より有來しなり然れとも上古なるは皆悉く沙金（コガネ）なりし故に山を穿て得る如く多くは非りけらし元々集類聚本源なとに出たる神名に金鵄命と申ゝ黄金色なる鵄の事に依り神武天皇御紀に有ニ金色靈鵄ー飛來止ニ皇弓弭ー其鵄光曄煜狀如ニ流電ーと有ると上古に黄金と云者有て其を稱呼に爲なり（但神代紀なる素盞嗚尊の御言に韓郷之島有ニ金銀ー又古事記訶志比宮段に西方有國金銀爲ゝ本目之炎耀種々珍寶なと有は地を穿て金銀を得る

（事は彼に先有初つるなり然れど我の上古にも沙金を得て用たりし故に今古き陵墓より出る所の金環など眞に黄金なる者なり彼未歸化爲ざりし當昔に斯在る事の有を以て上古に黄金無とは云べからざるなり然れば此風神祭の有初し祟神天皇の御世にも物を金色に塗る事も有そ爲けむ此詞に金能麻笥云々と有を徵と爲べき者なり）麻笥は麻を績て盛（イル）る器なり大神宮式に金銅麻笥二合（口徑各三寸六分尻徑二寸八分深二寸二分）と有にて其制樣を思ふ可し笥（ケ）は凡て物を盛る器の稱にて處の義なり（櫛笥飯笥など尙甚多在り）○金㯭は桛を懸る者なり考に云く大神宮式に金銅多々利二基（高各一尺一寸六分土居徑三寸六分）是を令義解に線柱と書るを思ふに三寸六分四方の物を下居と爲て其に高一尺一寸六分なる柱を立たる耳（同頭書に云く和名抄に絡䊩を楊氏漢語抄云多々理と訓り字は異なれど物は同じ○今云多々利とは立在と云事にて桛を懸る料に柱を立たるを云なり姓氏錄諸蕃に多々良公出二御間名國主爾利久牟王一也天皇諡欽明御世投化獻二金多々利金乎居（ホコ）等一天皇擧レ之賜二多々良公一也と有れば多々利とも多々良とも云しにこそ）○金能桛は籰の絲を引懸る物なり大神宮式に金銅賀世比二枚（長各九寸六分手長五寸八分）と有り考に萬葉に少女等之績麻繫止云鹿背之山と詠るを續日本後紀に山城國相樂郡桛と書るを合見るに桛は績麻を懸る物と聞ゆと云れたり古語拾遺に以二麻柄一作レ桛桛レ之と有も同物たり（但其は麻柄にて製れるにて尋常の木にて造れるとは異なるなり倩桛は懸爲木なる可く思ゆ）加世比は懸爲（カセ）合（ヒ）なりと聞ゆ然れは籰の如く木を組交合て製造る名なり倩籰と桛とは同物なり和名抄（蠶絲具）に籰收レ絲者也と有て和久と云るは訓に非す字音なるを以思ふに上古は其稱呼に異無りしを後に唱別たるには非じか（又は上古に無て後に其事の工に成て新奇に出來れるか桛より出たる者なる故に其名を通し用たるか大神宮式にも籰の事の無きは當昔未有さりけるが故ならむ）倩手長五寸八分と有る下は和名抄に棍（和久乃江）籰柄也と有に當れるにや（但和久は字音の隨に江に耳訓を用ひたり）○明妙照妙和妙荒妙五色能物は上に比賣神爾御服備と有る其目を記せる也（考に此十二字今本此に有は誤にて加りし物なり上に御服備と云は既に比古神に明妙云々の事出て一續の文なる故に略し者なり祈年祭にも此略き有り然るを此に同事を云へからず且明妙云々の事は佗皆獻物の初に在を此耳御調度と御馬との間に在にては僻事なる事明けし依て除捨可しと云れたるは甚しき僻事なり其は上に御服備と有は比賣神の料をも殊更に設備て奉らせ給ふ事を先云るなり倩麻笥桛は比賣神の御爲に最重き物なるが故に其を前に立て倩次に此明妙以下の事を詳記るなり）○御馬爾御鞍具氐雜幣帛奉氐は上に祓る祭式に鞍二具馬二疋なと有る如く比賣神に相並て進せらるゝか故に如此云るなり（但祝詞には如此こそ云別てれ其奉る所の物に彼此の分別は殊に無なり）

御酒者（ミキハ）瓱能閉高知瓱能腹滿雙氐和稻（ニキシネ）荒稻（アラシネ）爾山爾住物者毛能和物（ニコモノ）毛能荒物大野原爾生物（オフルモノハ）者甘菜辛菜青海原爾住物者鰭能廣物鰭能狹物奧都藻菜邊都藻菜爾至萬氐如横山打積置氐奉此宇豆乃幣帛乎安幣帛能足幣帛止皇神能御心爾平久聞食氐

上に奉宇豆乃幣帛者比古神爾云々比賣神爾云々と各自に奉らせ給ふ幣物の色目を別てるを此より以下は

其二柱神に共に奠らせ給ふ處の物を擧られたるなり已く鈴屋大人説に御酒者と云より下は皆比古神比賣神合せて一に奉る物共なりと云れたるは然る言なり如此く見別さる時は上の雜幣帛奉氐より續きて悉く比賣神の御事と爲るなり混ふ可からず○御酒者甕能閇高知甕能腹滿双氐は祭式に酒一石五斗と有此なり○和稻荒稻は大忌祭詞に有り祭式に米一石五斗稻五束と見えたる其なり和稻は米に成したるを云荒稻は穎なからなるを云○山爾住物者毛能和物毛能荒物は大忌祭詞に出其下に云る如く古昔獸肉を食す事は常なりしかとも其は物忌なとの時ならぬ程こそ内々に聞食す事も有つらめ神事には此を全忌む事と聞えたるに此語の有か不審しくて祭式を稽るに羽二翼鹿角二頭鹿皮四張と有耳にて更に獸肉の事有る事無れは此等を云なる可し但羽は矢に作(ハ)き鹿角は箭筈に爲り鹿皮は楯に縫ふ事云も更なり○大野原爾生物者甘菜辛菜は祭式に載られす其は其時の物を其地に取て奉る故に其色目を擧さる者なり○青海原爾住物者鰭能廣物鰭能狹物は祭式に鰒堅魚烏賊各七斤鮭七隻腊七斗比佐魚一斗五升と有此なり○奧都藻菜邊都藻菜爾至萬氐爾は祭式に海藻八斤滑海藻十斤雜海藻十四斤と有り○如横山打積置氐は上に出第七詞に云り○奉此宇豆乃幣帛乎は上に奉宇豆乃幣帛者と有る事を結て下に句を起せるなり故此には此宇豆乃幣帛と有り大忌詞にも上に奉宇豆乃幣帛者と有て下に如此奉宇豆乃幣帛乎云々と結たるに照し合せて悟る可なり○安幣帛能足幣帛止皇神能御心爾平久聞食氐は大忌祭詞に出

天下能公民能作作物乎惡風荒水爾不相賜(アハセタマハズ)皇神能成幸閇賜者初穗者甕能閇高知甕腹滿雙氐汁爾毛穎爾毛八百稻千稻爾引居置氐秋祭爾奉牟止王卿等百官能人等倭國六縣能刀禰男女爾至萬氐今年四月七月者云ニ今年七月ー諸參集氐皇神能前爾宇事物頸根築拔(ウシモノウナチツキヌキテ)氐今日能朝日能豐榮登爾稱辭竟奉流皇御孫命能宇豆乃幣帛乎神主祝部等被賜(ウケタマハリテ)氐惰事無奉禮登宣命(ノリタマフオホミコトナ)乎諸聞食止宣

天下能公民能作作物乎惡風荒水爾不ニ相賜ーは前章に吾前爾稱辭竟奉者天下乃公民乃作作物者五穀乎始氐草乃片葉爾至萬氐成幸閇奉牟止悟奉支と有る神の御悟言を奉て當今(イマコヽ)に其禮典を物爲仕奉給ふか故に其御祈の條理を此に表して宣へるなり能々對(アハセ)考れは文意の深味云知す感けらるゝなり○皇神乃成幸閇賜者は御悟言に成幸閇奉牟止と有を受たるなり大忌祭詞の下に此說有り備此の賜者は多麻波婆と將然を云ふ語なり然れは大忌祭此祭共に四月の時は然も訓む可を七月の度は秋なれは多麻閇婆と訓附

て已然る事と爲て上下の文に其用意爲るに非れは通え難きに似たれは何と爲は其說に合へからむと此を思ひ此を惟ふに秋祭は七月の祭を謂に非す其は新嘗祭を云るなれは此詞は四月七月共に多麻波婆と訓む方宜しきなり然るは伊勢大神宮の神嘗の御祭を九月に仕奉らせ給ふ上ならては諸神に其年の稻穀を奉らせ給はむ事理に於て有る可からす且七月に出來れる早稻を奉らせ給ふ事全に物に見えされはなり但四時祭式に米酒各一石五斗稻五束と見えたるは四月七月共に奉るゝにて詞に御酒者甕能閉高知甕能腹滿双氐和稻荒稻爾云々と有を云にて初穗の事ならさるを思ふ可し若此祭料なる米稻を當年の初穗と爲は四月の詞には省る可きを然らぬは如何にぞや大忌祭詞なる秋祭云々の考に云れし說共の非なるを已に辨たりき○初穗者は新嘗祭に貢らせ給ふ所の供御を云り第二詞第十詞大忌祭詞等に出○甕能閉高知甕腹滿雙氐汁爾母穎爾母八百稻千稻爾引居置氐大忌祭詞の下に云り鈴屋大人說に汁爾母穎爾母と云事酒と稻との間に在て如何と云れたれと此如く錯綜爲る事後人の係ても思ひ及ばぬ所にて古文の深味なり○秋祭爾奉牟止は秋祭は此祭の四月七月兩度に在る四月の度に七月ナカノ\の祭の事を然云るならむと先には思へりしかとも却に僻事にて新嘗祭を云なり新嘗は十一月の祭なれば秋祭とは云へからず大御神宮の九月神嘗祭の如きをこそ秋祭とは云へけれと思ふも有へけれど古始太元攷に說るか如く新嘗と雖も舊儀は九月なりつるは大御神宮の神嘗を九月に物爲させ給ふか故に自餘の諸神の神嘗及び皇御孫命の聞食す新嘗共に十一月には成れりしなり心を平にして思ふ可し然るは當年の秋に至て熟めぬ新稻を以て貢る由なるを以て秋祭とは云るにて時節の秋を云よりは初穗者云々と云事の重きを以て察ふ可し初穗者云々の例は已に新年第二詞第十詞なとにも有つるか其下に云る如く其等は十一月新嘗祭を以て初穗を貢らせ給ふを云と同しきを以知へし若然らすと爲は何れの時とか爲む且七月祭ならむには早稻と雖も末穗には出さる可し其餘の時に初穗を奉られし由も見えされは右の新年祭に云る初穗に例して秋祭の新嘗なる事を諦らむ可なり但崇神天皇の當時は四月の祭に其新穀の豐登を祈らせ給ふ初穗の出るを待て秋祭は行れけむ故に詞には秋祭と傳れるなり然るを何時の程よりか七月にも倚其祭を行ふ事を成てより四月七月兩度の祭は共に豐登の祈の方に就てより秋祭の方は即諸社の例に延て新嘗に合祭らるゝ事と成りし者とこそ所思たれ然れはこそ秋祭爾奉牟止王卿等百官能人等云々と續けたれ其は初穗を進せらるゝ秋祭には王卿百官の參向はさるか爲に七月の度に此事を申置せらるゝにて此七月の度も祭神料物は四時祭式に載る所四月に少も異無きは初穗を奉ふ祭は別なる證なり思混ふへからす然れば此時王卿百官の參向るゝに就ての幣帛は四時祭式に見えたる如くにて此詞に擧たる所在る品々の物等なり然れば初穗者云々の事は如何に見ても四月七月の祭の外ならでは聞え難し○王卿等百官能人等は大忌祭の下に云り四時祭式に差王

臣五位已上各一人神祇官六位以上官人各一人充レ使と有る此なり尙大忌祭の下に委しく註せるを見て悟る可也○倭國六縣能刀禰男女爾至萬氏爾は大忌祭詞に出る其下に註せるを見べし考に同日の朝廣瀨龍田の御使は別に至て祭らるゝなれは同六縣の人々も分れて二所へ參り集ふなる可し」と云れたるは然もと聞ゆれと熟考るに勅使の別れて參らるゝ事所見無れは信難し然れは事の次序を以思ふに御使の人等及國司以下の人々先に廣瀨神を祭りて後に龍田に參向はるゝにて有へきなり然れとも六縣の刀禰男女は豫て二社に別れ居て其事に預仕奉るなる可し○今年四月七月者云ニ今年七月ーは大忌祭詞此に同し但此如く有を以て秋祭は此七月の度ならざる證なる者なり○諸參集氏の諸は王卿以下刀禰男女を云なり諸の事は第一詞に出○皇神能前爾は比古神比賣神を併せて申せるなり○宇事物頸根突拔氏今日能朝日能豐榮登爾稱辭竟奉流は大忌祭此に同し但彼詞には今日能の事を省きて有り○皇御孫命能宇豆乃幣帛乎上に出第一詞の下に云り○神主祝部等被賜氏は宇豆の幣帛を受賜はるを云なり鈴屋大人說に被賜氏は多麻波理氏と訓へし幣帛を受取を云り凡て多麻波流と云は受る方に就て云事なる故に古書には多く被賜と書り其を唯賜と書るは略なり」と說れたるぞ謂れたる故舊訓字氣多麻波理氏と有を改めつ已に第十詞の末なノ受賜の下に註るが如くなれば本の儘ならむも宜しきに似たりと雖も尙此は被賜の字の正訓かへす可し○惰事無は速にと急かせたる意なり惰字は於古多流と訓へし續紀第一詔に御稱々ネモ而緩怠事無久務結而仕奉と有を此に並へて其事を大切に物爲へき由なるを曉る可し詔詞解に十三詔又五十一詔に無ニ緩怠事ー久卅二詔に今由久前毛仁緩怠事無之天四十一詔に晝毛夜毛倦怠止已無久なと有」と有り祈年詞第十の末に此と同格の所に事不過と有も怠惰爲しとの義なるを思合す可し然れば考の左訓に於都流事無と訓るは取ましきなり溷落るの義には少し遠く聞ゆればなり此は唯其事を促したると見て有べし○奉禮登宣命乎諸聞食止宣と有る此は宣命の結句なり祝詞は此なる奉まてなり考に命の上に大字脫たるにやと云れたれと命を書て大命と訓む例續記宣命に在て鈴屋大人の歷朝詔詞解に註されたるが如し偖祝詞と宣命とな一に爲る凡ての例なる事前に委く云りながら前後の宣命の詞の用捨して神に申す時は祝詞なり神に申さ令給ふ祝詞をも兼て其儘用る時は宣命となる事云も更なり

延喜式祝詞講義八之卷

嘉永二年六月二十一日

淡路國　鈴木重胤　著
出羽國　鈴木秀直
淡路國　岡部保嗣　校

○平野祭

神名式に山城國葛野郡平野祭神四座（並名神大 月次新嘗）と有る御社此なり（座字諸本共に社と有は例に違て誤なり四時祭式臨時祭式に座と有が正しきに據て改引つ）抑當社の御事の諸書に傳はる所何れも紛紜（マギラハシ）くして更に一定の明文なく又諸家の注せる處悉く允當（アタ）れりと思しきは全くに無して唯二十二社注式に第一今木神（日本武尊 源家氏神）第二久度神（沖哀天皇 平家氏神）第三古開神（仁德天皇 高階氏神）第四相殿比賣神（天照大神 大江氏神）と有れども皆此推當の牽強言（ヒキツケゴト）にて所謂無し且今木神は日本武尊久度神を沖哀天皇古開神を仁德天皇比賣神を天照大神と云などは殊に拙き漫言なり（其は此下に委しく辨るを見るべし）又日本武尊を源氏に沖哀天皇を平氏に仁德天皇を高階氏に天照大神を大江氏に配當たるは何の由ぞ我此を知ず（人も此を知ずと見えて更に明辨あるを未聞ず）記紀姓氏錄等の古書に據て考るに日本武尊の裔孫は犬上君建部君讃岐綾君伊勢別登之別麻佐首宮道之別鎌倉之別小津君石代之別漁田之別和氣公別公等の氏族こそ有れ更に源氏の因に非ず源氏は嵯峨天皇清和天皇宇多天皇村上天皇花山天皇等の皇裔に出たりと雖も日本武尊を氏神と定めむ事甚所謂なし然れ其源氏の公卿を以て令祭給ふ御掟にては有ける也其は江家次第（新年祭條）に藤氏公卿頒ニ春日國幣ニ之後或早退出云々源氏（若江氏）頒ニ平野幣ニ之後可退出歟と見え左經記に寬仁四年四月三日甲戌參ニ平野祭ニ事如例（兼官之後未レ參ニ諸政所ニ雖然初任辨人未初參以前間々着氏祭云々）上卿源中納言と見えたるを思ふ可し（左經記は參議左大辨源經賴卿の記なるが此卿は宇多天皇の御末の源氏にて其拠り給ふ所を見る可し倍中院通秀卿記に文明十三年三月廿五日兼倶卿參會平野奉レ加ニ餝事也凡源氏神以ニ平野ニ爲レ正也於ニ八幡宮ニ淸和源氏義家以來事也云々と有は甚思慮なき說也八幡宮を淸和源氏の氏神と爲るも唯其氏の信（タノミ）奉るに依てなり然れば當社をも源氏の人々の信奉る社には有つらめども其氏神とは云べきに非るなり）沖哀天皇を平家の氏神と爲る事も更に所謂無し其は此社を創立（ハジメ）給へる桓武天皇の皇子葛原親王の子大學頭從四位下高棟王に天長二年始て平朝臣の姓を授給し事有れども其由を以て平氏の祖神とは申難し然れど氏社と爲る事は已に其頭よりの事なりけらし（但此は下に記傳の說を引て云る事あり其所に就て明らむべき者なり）大政官式に凡平野祭者桓武天皇之後王（改姓

（爲臣者亦同）及大江和等之氏人並預ニ見參一と見えたる後王は必平氏を云なる可し尙吉記にも壽永二年七月傳聞平家公卿連署以ニ日吉社一爲ニ氏社一云々棄ニ平野社一用ニ氏社ニ神慮有レ恐事歟と有り如此くなる時は其祖先ならぬ神を氏神と爲て齋く中昔の風儀に流れたる者にて由無き事ながら桓武天皇の後王等の其御代に京都近く祀ひ給へる所謂を以て氏神とは爲けるにも有るべし（但平氏は桓武天皇葛原親王高棟王を氏神と祀む事似着はしきに似たり）仁德天皇を高階氏神と爲る事も更に由緣無き推當の事なりけり高階氏は姓氏錄（左京皇別）に高階眞人出レ自ニ諡天武皇子淨廣壹太政大臣高市王一也と有て仁德天皇の其氏神たらむ由なし（凡て此據と爲る可き者は未古書中に見當らず）天照大神を大江氏神と爲る事其據を知らず但續紀延曆八年の下に皇太后姓和氏云々母贈正一位大枝朝臣眞妹云々同九年詔曰朕外祖父高野朝臣外祖母土師宿禰並追ニ贈正一位一其改ニ土師氏一爲ニ大枝朝臣一云々亦宜ニ菅原眞仲土師菅麻呂等同爲ニ大枝朝臣一其土師氏有ニ四腹一中宮母家者是毛受腹也故毛受腹者賜ニ大枝朝臣一自餘三腹者或從ニ秋篠朝臣一或從ニ菅原朝臣一と見え姓氏錄（右京神別天孫）に大枝朝臣土師朝臣同祖と有て同書に土師宿禰也天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也光仁天皇天應元年改ニ土師一賜ニ菅原氏一有レ敕改賜ニ大枝朝臣姓一と有る此なるが天穗日命をこそは氏神とも爲べけれ天照大神と申む事甚所謂なし（但天穗日命は天照大神の御子に在すが故なりとも云べけれど皇統は申も更なり御世々々の皇子等の支流餘裔悉く天照大神の太祖たらぬは無し然れば此大神を氏神とは何れよりも爲べし豈大江一姓に限れる事ならむや序に云ふ大江氏系圖と云書に平城天皇の皇子阿保親王の御子備中守本主賜ニ大枝姓一と有て其子音人卿有り如此くなる時は其出自は各異なれど共に同姓なり貞觀の御時音人卿奏申されて大枝を改て大江に更たり）如此く源平高階大江四姓の氏神の事は決に由なき事なるが上に其所祭神を傳たる說も中古に其傳來を失て後に杜撰れりし强言にて上古の本旨ならず（其は今木神久度神古開神比賣神の本說の此下に出るを竢く其正旨を明らむ可き者なりかし）然れども桓武天皇の後王等の姓を賜て臣と成れる家々及大江和等の氏人の此社を氏社の如く尊崇奉るべき由緒又別に在り類聚國史に延曆元年十一月丁酉敍ニ田村後宮今木大神從四位上一と見えて光仁天皇の御世より尊崇奉給ひけるが其大后の御名を新笠と申せるも其地名を採れたるなり續紀に延曆八年十二月皇大后云々上レ諡曰ニ天高知日之子姬尊一皇大后姓和氏諱新笠贈正一位乙繼之女也母贈正一位大枝朝臣眞妹后先出レ自ニ百濟武寧王之子純陀太子一云々其百濟遠祖都慕王者河伯之女感ニ日精一而所レ生皇太后即其後也因以

奉レ論焉と有る此所因に縁て桓武天皇の今木大神を尊崇き給へるが故に其後王の家々は其御心を後世に至る迄も受繼て崇奉る者なるべし此事下に委く云り此に就て大江は其皇大后の外戚を以て共に加はり和氏は皇大后の出自を以て共に祀る事とは成れるにて桓武天皇の當今の事の延ヒキて恒例とは成れりし者なり所以に四時祭式（平野祭）齋服の條に物忌王氏に並て和氏大江氏共に其祭に預る由見えて已に引る大政官式の趣も此と同じ（和氏は姓氏錄左京諸蕃下に和朝臣百濟國都慕王十八世孫武寧王之後也と有る此なり又和連和造と云も有り如此く朝臣の重姓を賜りしは全く其皇大后の故に依なる可し）此より其祭神の正説を顯し奉むとす今木神は神名式に大和國山邊郡石上坐布留御魂神社（大月次相嘗新嘗）と有る此社に座す布都主劒大神に坐る証は下に引る日本後紀の文に對考れば甚灼然き事なるが粗其説を云はゞ天皇本紀又天孫本紀に天孫磐余彦尊詔二命有司一始經帝宅大歲辛酉正月庚辰朔天孫磐余彦尊都二橿原宮一初即二皇位一號二曰元年一云々宇摩志麻治命先獻二天瑞寶一亦竪二神楯一以齋矣謂二五十櫛一亦云二今木一刺二繞於布都主劒大神一奉レ齋二殿內一云々と有る此ぞ今木の所據なる此より次に宇麻志麻治命の子孫其業を傳て石上大神宮の事を掌り併て天下の物部を率て仕奉れりし故に其氏族に今木氏有り姓氏錄（山城國神別天神）に今木連神饒速日命世七孫大賣布命之後也と見えたる大賣布命は饒速日命よりは七世孫にて宇麻志麻治命の六世孫たるを思ふ可し然らば今木神と申すは物部氏の祖神なる如聞えたれど然らず其氏人の祖先より仕奉來る神名を冒して今木と稱ひ石上と稱ふ姓も出來りし者なる事天孫本紀に物部布都久留連公と云人名の有る其も布都主劒大神の祭祀を統括メ掌れる由を以負るに例して知るべし然れば今木神は日本武尊に非ず決く布都主劒大神なる事下に說るが若くなり（但姓氏錄山城國神別天神に今木連神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命之後也と有は別なり混ふべからず因に云ふ今木氏の物部の支族たるに就て今一證と爲べき事有り日下部景衡が老談一言記と云書に江州淺井長政は藤原氏の由申す事僻事なり藤原家よりは家を繼し事も侍るなり本姓は物部うて守屋大連の後なり守屋大連の領せし地は北近江なり太子の軍の所々も皆近江に侍るなり然れども秀賴公の母にて淀殿天王寺信向深かりし故に守屋を僞献なりとて其の子孫と有を忌給ひし故に藤原家にて有由披露有し所なり借淺井の家に淺井絶なば長門繼べしと云傳て淺井長門と云者淺井沒落の後淀殿繁榮の頃大阪に仕て苗字を改て今木源右衛門と名乘しなりと云り今木に苗字を換る事物部氏の入なれば其所由有て物せるなり）久度神は神名式に大和國平群郡久度神社と有る此社より仕奉れるにて祭神は御竈神なり其証は日本紀略（天德四年十一月十九日の條）に今夜坐二內膳司一忌火庭火等御神奉レ遷二冷泉院內膳一仍權大納言師尹卿以下奉レ遷レ之平野謂二釜二口一也庭火謂二鑄一

口ニ也各有レ臺長櫃等衞士持レ之奉レ移ニ院乾方新屋ニ庭火平野別々屋也安置之後宮主申祝詞と見えたる平野云々にて又中右記（寛治八年十一月三日條）にも内膳司御竈神三所也一所平野件（共イ）美御祭奉仕之神也一所庭火是等尋常御飯奉仕之神也一所忌火三神也是則十一月新嘗六月神令（今イ）食祭奉仕之神也と有る平野件美即此なり件美は一本に件共と有方正しくて久度と訓べき字と通えたり其は下なる久度古開の條に右の全文を擧て云べし増鏡四にも同説有り寛治二年十月十四日内膳屋燒て神代より傳れる御竈も燒損れけるをぞ甚淺ましき事には申侍し彼竈は昔は三有ける一をば平野一をば忌火一をば庭火と申けるを云々と見えたるをおもふ可し然れば久度神と申は沖哀天皇には坐ず御竈神なる事論無き者なり（又神名式に淡路國三原郡久度神社有れども同神とは通えたるが平野に遷坐しは大和よりなり和名抄に竈後穿也和名久度と有り久度は凹處の義にて竈處を云なりけり）古開神は諸書共に古開なるを文德天皇實錄に古關と作り今此兩説に據て古今の書典に索るに此も彼も有る事なし此に依て甚畏ければど若くは古閇（フルヘ）にて古瓮（フルベ）を祀れる社ならむか瓮（ヘ）は物を盛る器の名にて此は御食を炊く瓮を祭れるなりと思て考るに叶はず字は古閇にて布留御魂大神なる事下に云るが如し（是を以て古瓮ならむの考は廢たるなり）偖此社に鎮り坐る四座の中に始より主と祀らせ給ふ所は今木神にて其餘は合祭る者なり類聚三代格に貞觀十四年十二月十五日大政官符應レ充ニ平野神社地一町ニ事在ニ上林郷九條荒見西河里廿四坪ニ得ニ彼社預從五位下卜部宿禰平麻呂解狀ニ偁謹檢ニ舊記ニ延暦年中立ニ件社ニ之日點ニ定四至ニ奏聞既訖而社預等不レ詳ニ事意ニ無レ領ニ件地ニ因茲嵯峨院去承和五年十月割ニ取八段ニ賜ニ時統宿禰諸足ニ其後加ニ野地二段ニ轉ニ給典藥寮ニ本有ニ藥園地ニ重請ニ神地ニ耕ニ作品畝ニ今除ニ件地ニ之外四方被レ限ニ禁地ニ無レ有下行ニ神事並走御馬ニ之處上又會集諸司貴賤車馬塡ニ塞社邊ニ無レ道ニ出入ニ望請被ニ早返給ニ永爲ニ社地ニ謹請ニ官裁ニ者右大臣宣奉レ勅依請と有り（本朝月令注式共に延喜格を引て此文有り今は校して引り公事根源に延暦に此神社を造立有り云々と云るは此文に據れる者なり）斯在るに御紀に所見無し桓武天皇の平安城を造給ひし頃ならむと思ふに斯計の大社の初を記されざる事やは有べきと尚此を撿るに唯一つ証す可き者有り其は日本後紀に延暦廿四年春正月辛未朔廢朝聖體不豫也二月庚戌造石上神宮使正五位下石上朝臣吉備人等支ニ度功程ニ申ニ上單功ニ一十五萬七千餘人大政官奏之敕曰此神宮所ニ以異ニ於佗

社ニ者何或臣奏曰多收ニ兵杖ニ故也敕有ニ何因緣ニ所レ收之兵器奉ナルン六昔來天皇御ニ其神宮ニ便所ニ宿收ニ也去レ都差遠ニのレ愼ニ非常ニ伏請卜食而運遷(セン)垂仁天皇御紀に三十九年十月五十瓊敷命居ニ於茅渟菟砥川上宮ニ作ニ劍一千口ニ因名ニ其劍ニ謂ニ川上部ニ亦名曰ニ裸伴ニ于藏ニ石上神宮ニ也と有る此兵器を收ろの始也履仲天皇の住吉仲皇子の亂を避坐て石上振神宮に幸行しも其兵器を賴み思食すか故なり偁履仲天皇御紀の傳に云へし是時文章生從八位上布留宿禰高庭即脩レ解申レ官云得ニ神戶百姓等欵ニ偁比來(コノゴロ)大神頻放ニ鳴鏑ニ村邑咸恠不レ知ニ何祥ニ者未レ經ニ幾時ニ運ニ遷神寶望ニ請奏ニ聞此狀ニ蒙レ從ニ停止ニ官即執奏被ニ報宣ニ偁卜筮吉合不レ可ニ放言ニ所司咸來監ニ運神寶ニ收ニ山城國葛野郡ニ訖無レ故倉仆吏收兵庫御紀に廿五年三月丙戌日赤無レ光兵庫夜鳴と有は此御祟なり布留宿禰高庭の申止め奉りしを卜筮吉合不レ可ニ妨言ニとは天皇命と坐せども神幽の道に御心淺き御所爲にて餘りなる強たる大御命なりけり既而聖體不豫典闈建部千繼被レ充ニ春日祭使ニ聞下平城松井坊有ニ新神ニ託中女巫上便遇請聞女巫云今所レ問不ニ是凡人之事ニ宜レ聞ニ其主ニ不レ然不レ告レ所レ問仍述聖體不豫之狀即託語云歷代御宇天皇以ニ慇懃(ナリ)之志ニ所ニ送納ニ之神寶也今踐ニ穢吾庭ニ運收不當所以唱(イサナヒ)ニ天下諸神ニ勤レ讃贈ニ天帝ニ耳如此き巫女の神託は疑はしき樣なれど石上大神女巫の言を借て託宣(カムガヽリ)給ふ所なり此に由て思へば先に卜食と有は官寮より卜筮の二共に御心に合へる樣に僞り奏せりし事灼然し然らずば運收不當とは宣給はせまじき者なるをや天帝(スナハチ)とは天照大御神を奉始て高天原に神留坐す所の皇祖天神を中奉るなり登時入レ京密奏即詔ニ神祇官並諸司等ニ立ニ一幄於神官(宮イ)ニ御飯盛ニ銀笥ニ副ニ御衣一襲ニ並納ニ御輦ニ差ニ典闈千繼ニ充レ使召ニ彼女巫ニ令レ鎭ニ御魂ニ女巫通宵忿怒託語如レ前遲明乃和解詔書に大御夢爾覺志坐爾依弖云々と有る大御夢は今宵天皇の大御夢に見(アラハ)れさせ給へる者なる可し借召ニ彼女巫ニ令レ鎭ニ御魂ニと有は石上大神を祭給ひて天皇の御爲に鎭魂祭を執行しめ給へるなり此祝詞中にも思合せらるゝ事有て其下に云り有勅准御年數屈ニ宿德僧六十九人ニ令レ讀ニ經於石上神社ニ天皇大御病に臨坐けるが故に如此き事に有けるなり然こそ石上大神は耳塞ぎ坐けめ然れ共天皇の前非を謝し申させ給ふ大御心に愛坐て神の御怒は和解(ナゴ)み坐けるなり讀經の功力と思ふは僻事なり此事に限らず中昔に弊風と爲て事(コト)し有れば天下の御爲にも神の御心を取奉るにも佛狀の醜めく穢き業を以て物爲る事常なり神の受給ふ所は然らず其祈り申さるゝ御心に感けて其功驗は有なり努々佛經の預る所と思ふべからず倍古書に石上神宮と記さるゝを此より下の正史には石上神社と作り單功十五萬七千餘人の多きを厭はせ給ふ御心にて有しかば何となく神への御會釋も古義に背く事多くなれり詔曰

天皇御命爾坐石上乃大神爾申給久波大神乃宮爾收有志器杖乎京都遠久成奴流依弖近處爾全治止爲弖奈去年此爾運收有志然爾比來之間御體如常不御坐有爾大御夢爾覺志坐爾依弖大神乃願坐之任爾本社爾返收之弖驚久无咎久平久安久可御坐止奈念志食是以鍛冶司五位下作良王神祇大副從五位下大中臣朝臣全成典侍正五位上葛井宿禰廣岐等乎差使弖禮代乃幣帛并寛令持氐申出給御命乎申給止申辭別弖申給久神部賀毛皇御孫乃御命乎堅磐爾常磐爾護奉幸閇奉給止閇稱辭定奉久申道典藥頭從五位上中臣道成等ニ返ニ納石上神社兵仗ニと

有る此文中に監ニ遷神寶收ニ山城國葛野ニと有は格に延暦年中立ニ件社ニ之日點ニ定四至ニと有る其地にて即後に平野の社地と成れりと所思たり然るは無故倉仆更收ニ兵庫ニとは有れども尙後に石上神宮に還し收られたる上にも如此く神異の畏く御在るを見奉給ひては其神靈を祭宥められて其跡は認置る可き事なりかし此平野祭詞の鎭魂祭詞に拳髻(ヨクニ)たるも石上大神同神なる可き一の證なるに後紀の文に令ニ鎭ニ御魂ニと有が同じきを思ふべき者なり然るに類史に田村後宮今木大神と記され此詞に今木與利仕奉來留皇大御神云々と有を以見れば田村後宮に祀られし神を遷し齋れたる者にて此度の石上大神の事とは別異なるが如くなりと雖も然らず其は右の石上大神は布都御魂とも布留御魂とも申す事なるが何れも表立て稱ふ中に布都御魂と申す時は彼布都主劒大神を申て所謂今木大神此なり又布留御魂と申す時は饒速日命の奉られし天瑞十種神寶を稱奉る御名なるが共に石上大神と申して其差別を立ざるなり所以に光仁天皇の未台壁王と申て凡人にて御在ける時其田村宮にして鎭魂祭を行れし時殊なる恩頼を蒙給し事の有けむ故を以て其宮中に鎭魂の時ならぬ時も常に崇奉給ひければ即其地の地主神の如くも持抑れ

給ひける程に桓武天皇將其宮にて降誕(アレマ)し給へれば自然大御產土神としも持齋れ御在し坐て今の平安城(タヒラノミヤコ)を防給へる時も內々にて齋祀り御在しけ〻が故に即其本宮なる石上神宮の兵仗を尙(スラ)も京都に召上給ひて大御許近く御在し坐しめ奉ら欲(マホシ)く思ほして上に引る後紀の趣なる御計ひは有けるが案外に神の御心に違ひ御在し坐るに依て神の御心の如く其兵仗は本宮に還し奉給ひしかとも詔書に大御夢爾覺志坐爾依氐云々と有を以致るに兵仗は上古の天皇の收させ給ふ所なれば其宮にこそ還り坐せども御靈は田村宮より御產土の由緒有れば彼葛野郡に止め給はむ其處に宮居は定させ給へど天皇に悟し敎申給ひしが故に皇大御神乃乞志給乃任爾云々とは云る也 斯在れば同じ神を祭らる〻乍に石上大神は本宮に還齋ひ今木大神は都に留り給ふ者あるが故に石上與利仕奉來流とは云はず今木與仕とは申せり且布都主劒大神は彼鹿島神に在らず鹿島春日共に二月十一月中申日を以て祭らる〻例に合せて平野祭の四月十一日上申日なるも合せて思へは今木大神は彌々布都主劒大神なる事疑ひなく所思たり 此說を得て尙徵を餘に索るに此詞に天皇我御命爾坐と有は彼詔書に本據(モトヅキ)て天皇御命爾坐と有に出たるなり又詔書に禮代乃幣帛幷鏡分持豆申出給と有は此の詞に神財波御弓御太刀御鏡鈴云々と有る其出所なり又此詞に天皇我御世乎堅磐爾常磐爾齋奉利

伊賀志御世爾幸閇奉と有は詔書に辭別豆申給久神奈賀良母皇御孫乃御命乎堅磐爾常磐爾護幸閇奉給と有る文を取て委く爲る也又此詞に萬世爾御坐令在米給と有る文は鎮魂祭詞に自此十二月始來十二月爾至萬氏爾平久御坐所令御坐給止齋比鎮奉止申と有を取て此社に屬て少く換たるにて此を以て彼を校し彼を取て此に合すれば悉く密合(アヒカナヒ)て間然爲る所無き者也（此等は古今の學者の且ても云ざる所なれば俗眼を以て見誤る事勿れ暫く延暦の古に在て平野社を祭始給ふ其事に拘る人の心に成て予が此說を味はゞ思半に過むとぞ思ふ）此を以此を見れば平野大神を源氏平氏高階氏大江氏の祖神と云ふ事は且ても無き妄說なり但記傳三十三八丁十に云れたる事有り其說に云く平野を平氏の氏神と爲る事の由は桓武天皇の御產土神に坐る故なる可し其は續紀に寶龜六年三月置ニ酒田村舊宮ニ群臣奉レ觴上レ壽極日盡レ歡と有を思ふに田村舊宮は光仁天皇の未白壁王と申し時の御宅にて今木大神は其地に鎮坐し神なり斯て桓武天皇も其地にて生坐つれば御產土神なる可し然ればこそ延暦年中に分て位階をも授奉給ひ終に平安京に移祭給へるなり此大神を平安京平野に移奉られしも延暦年中の事なり其由類聚三代格に見えたり」と云れたる氏神は產土神の事を云れたるにて其祖神の謂には非ず（立返りて上に云る仲哀天皇の條下を見る可し但大人は今木大神と石上大神と同神なるも別々の子細に依て平野に迁坐し事に心着れざりし故に其說有る事なし）○二十二社注式に縣神（天照大神子穗日命中原清原菅原秋篠已上四姓氏神）と見え色葉字類抄にも縣社坐平野社　菅原秋篠二氏は天穗日命の裔なる由姓氏錄に出たれば論無れども中原は同氏系圖に外記局本姓十市宿禰天延二年十二月改ニ宿禰ニ賜ニ朝臣ニ安寧帝第三皇子磯城津彥命後也と見え淸原は姓氏錄左京皇別に淸原眞人大原眞人同祖百濟王之後也と有て百濟王は敏達天皇の皇子なれば天穗日命の由緣に非ずと雖も公事根源にも此說を取れりと見えて「凡て八姓の祖神に坐ますなる可し」と云れたり（本姓四座神を四姓の氏神と爲るに今案の四を合すれば凡て八姓なり）天穗日命を縣神と申す事更に古書に於て所見無し然れば例の社撰ならむも亦知べからず予此を思ふに縣神は古くより御縣神社の御在るを後に當社の攝神の如く成れるにて其元は別にて有し者なる可し御縣神の事は卷四第詞八の條に說り（宇治の邊にも縣社と申す御在り此も古の例ならむか倭天穗日命を縣神と云ふ可き由の無に依て尙案ずるに姓氏錄に大縣主天津彥根命之後也と有れ共更に此に緣無し）神階の事は上に引る類史に延暦元年十一月丁酉叙田村後宮今木大神從四位上と有ぞ始なる（但此は未平野に遷坐ざりし以前の事なり此神階の事は續紀にも出たり）續後紀に承和三年十一

月庚午從四位上今木大神奉レ授ニ正四位上從五位下久度古開兩神並從五位上ニと有り 但比賣神は未叙位の事非りし也本朝月令に引るには古關と作り 同十年十月丙辰朔壬申平野社一前預ニ之名神ー 一前とは今木大神耳を云なり 嘉祥元年七月壬午奉レ授ニ正四位上今木大神從三位從五位上古開神久度神並正五位下無位合殿比咩神從五位下ーと見ゆ 此時合殿比咩神始て神階の事有り故此を以ても天照大神に非る事明けし 文德天皇實錄に仁壽元年十月己亥朔乙卯遣ニ使者向ニ平野神宮ー策命曰天皇我詔旨止平野大神等爾申給倍止申久大神等乎彌高爾彌廣爾崇奉牟奈毛止所念行須故是以正三位今木大神乎波從二位爾正五位上久度古關等二所乃神乎波從四位下爾合殿爾坐比咩神乎波正五位下乃御冠爾上奉利崇奉流狀乎參議正四位下左大辨兼行左近衞中將陸奥出羽按察使藤原朝臣良相乎差使底申奉出須此狀乎聞食旦神那我良毛天皇御孫命乎堅磐爾常磐爾護幸奉賜比天下平安爾守矜賜倍止申給久止申 但此に古關と作るは古開を誤れるにて古開は又古關を寫違へる者なり但此は本朝月令に載るに校して引り天皇御孫命は須賣良美麻乃彌己止と訓可きにや 三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授ニ從二位平野今木神正二位從四位下久度神古開神從四位上ニ 但此度には合殿比咩の神は漏され給へり 同七月十四日丁卯授ニ平野正二位今木神從一位從四位上久度神古開神從三位正五位下合殿比咩神從四位下ー 此時に合殿比咩神々位の事有り 同五年五月二日甲子平野從三位久度神古開神並加ニ正三位ー從四位下相殿比咩神從四位上 此度にては今木神の事なくて此次の度に有り 同六年七月十日甲午遣ニ使者ー進ニ平野從一位今木神階ー加ニ正一位ーと有り 此時今木神は極位に進み給へれど自餘の神等は並に前年の神階の任なり 借帳には平野祭神四座共に並名神大と有れども御紀には今木神一神承和十年十月に名神に預給ひて久度古開神比咩神共に名神の事見えざるは記漏されたるながら例を以思ふに貞觀五年五月に從三位に進められ給へれば合殿比賣神共に此時より名神大社の列に加り給ひけむと所思たり 此より外に攷ふ可き者見當らず 若て村上天皇康保二年閏八月官幣を獻られし十六社の列に加はり給ひ松尾の下稲荷の上に序られ給ひ後朱雀天皇長曆三年八月に廿二社の員にて上七社の部と成給へるも今木大神は石上神宮を京外にて祀らるゝ神なるを以て其本宮よりは凡ての御會釋も重き方に成給へり 其例は春日祭神は鹿島香取枚岡三所の神等を春日にて祭る社なるを各々其本宮よりは重く崇奉給へるにて此の例なり借神名(メイ)式に春日祭神四座と見えたるに准て此も平野祭神四座と記されたるは共に其本社を京城近く祀らるゝが故なり ○當社四月十一月上申日祭禮の事は本朝月令に弘仁官式云凡四月十一月上申祭大臣若參議以上赴進或皇大子親進奉幣と有れば桓武天皇の御世

よりの例にて此頃の常と聞えたり然るに二十二社注式に第五十六代清和天皇貞觀元年十一月九日始祭と見えて然も根源も其說也但注式の或說に延暦年中に始て被行之とも弘仁年中に被行とも仁壽九年十月被行之とも有て何れ是と爲て據有る事無が如しと雖も今此を考るに眞に延暦中に始て被行けるよりして次々も被行けむを偶弘仁仁壽の度に有しが物に見えたるを取て此或說は擧たるなる可けむが此等を合せて思ふに彼貞觀元年に儀式も何も整ひ定まれる者なるを云なる可し類聚三代格に載る延暦廿年五月の大政官符中祓の條に平野祭の事出たれば已に其頃より祭れりし者也けり 彼貞觀元年に記せるは儀式に載たるを以て此時始なめりと推當に云るにも有べし 貞觀儀式に云く平野祭儀四月上申十一月上申 其日早旦所司供張如常辨大夫及外記史各一人先參行事神祇官幷備神机廿前膳部以神部爲膳部 十六人舁机供之 四人舁二机每神机四前白今木神始焉次久度古開次相殿比賣其四前立舞殿 卜部二人執賢木前行至社門外左右分跪二人執食薦入敷神殿前膳部入而立机却廻訖炊女四人執食薦敷舞殿膳部十六人舁机四前立之每神一前 爰外記喚中務省仰侍從已上見參事喚正親司仰王氏見參事喚木工寮仰丈杖事但非侍從見參者外記率史生就祭座點之史喚諸衛府仰下可制闌入之狀即令進名簿 多 左右衛門府生各一人門部各二人火長各三人左右兵衛府生各一人兵衛各二人 于時皇太子於神院東門外下馬神祇官中臣若無中臣部卜部傳授進以上令供 迎供神麻灌鹽水訖入就休息舍先是進一人率執幣舍人 執幣者在前進次之 至神院東門曳神麻灌鹽水共至祭場訖皇太子出自舍進就神前座次親王以下各就座訖山人候東門水琴師率炊女等盛酒肴入於脚机而迎東門內 琴師南向炊女東向 山人廿人用左右衛士 執賢木入列立机前西面北上 串神壽詞訖炊女四人進受賢木復本座謂門內座 于時琴歌發聲炊女四人東而起舞訖以酒肴賜山人等訖琴師炊女復本座謂舍內座 訖山人左右相分立薪庭中退出大臣喚召使二聲召使稱唯出自西方差進立舍西北角而北面 若日闇問同召使申姓名以下侍徵之 大臣宣喚大藏省召使稱唯南去二許丈喚之二聲承稱唯趍立庭中 召使立處 大臣宣賜藝木綿承稱唯退出即納木綿於箱相率而入先賜神祇官人訖傳授春宮大夫大夫轉獻皇太子皇太子拍手稱唯受而著之次承賜參議已上錄賜五位已上次史生賜諸司判官已下召使已上次藏部賜諸司史生以下哥女已上 主典已上安藝木綿史生已下凡木綿 訖神主就祝詞座左

右馬寮御馬四疋(二疋被鞍)率立社北頭南面神別各二疋(一疋被鞍)神主再拜皇太子已下亦再拜(神主起拜自餘居拜下同)神主讀祝詞了皇太子已下亦兩段再拜拍手四段訖神主退出次神部散祭次左右馬寮率御馬廻社四度允各一人前行(若無允則屬就外記申障由外記由大臣以屬代之)氏人貢馬在其次于時皇太子還宮預中臣候門外供神麻次燃庭火於南北次神祇副(若無副則祐代之)喚琴師名二人共稱唯次喚笛工名二人共稱唯副命云琴笛相和(詞云美許止仁布江安波世)四人共稱唯次笛吹一成次調琴聲次歌人發聲(先神祇後雅樂)左右山人共起和舞次神主二人共舞次祐已上一人次侍從二人共舞次內舍人二人次大舍人二人訖辨大夫喚官掌二聲官掌稱唯趍立庭中(召使立處)辨大夫命喚宮內省官掌稱唯西南去二許丈喚之二聲錄稱唯趍立庭中(官掌立處)辨大夫命御飯早速令賜錄稱唯退出喚膳部二聲膳部五六人共稱唯錄仰云御飯賜之膳部共稱唯大膳進屬以下共起左賜神祇官次親王已下訖大膳屬趍立(省錄立處)申云御飯賜了諸司拍手三(先稱唯後)觴三行亦拍手一段訖外記執見參文進大臣大臣授勅使各退出其冬祭者廻御馬了即物忌神舞次山人和舞諸司各以見參文不經外記逕中務省但非侍從幷外記史各一人大政官史生二人左右史生各一人官掌一人召使二人見參外記史生記錄授中務省省摠作錄法逕外記外記進大臣覽了返賜是間大藏省積祿綿於庭中務省以諸司見參幷錄法案逕大藏省于時中務官人執筒唱名大藏官人隨品頒賜物祿綿五百屯(三百屯男官料二百屯女官料)

と有り氏人とは平家の人々を云るなる可し事上に說るが如し江次弟平野祭條一本首書に氏人者大江氏和氏也と見ゆ(桓武天皇の御末なる故に祖神の如く持齋く事と成れり)山人とは神樂採物歌に卷向の穴師の山の山人と人も見るがに山鬘せよ」と有る此に仙人を摸擬せるなり仙人とは人間を斷て深山幽谷の內に在て長生久視(ナガラフル)人を云なり此祭に山人の摸擬(マネビ)を物爲る事は深き由有る事なり下に委しく說く可し(神仙は皇國の古書に沙汰せぬ者ながら已に此歌に然有る上は古く人口に膾炙せし事也けり此說は予が說ながら山人の考は師の悉き說有也就て聞く可し)○幣物の事は四時祭式に平野神四座祭(今木神久度神古關神相殿比賣神)五色帛三丈二尺絹三丈二尺倭文一丈六尺絲四絇綿四屯木綿麻各十六斤裹幣料布三丈二尺(已上幣料)米四斗糯米四斗大小豆各一斗油一斗三升(雜用料通)鰒堅魚海藻各二十四斤腊四斗鹽一斗六升折櫃十六合壺酒坏各二十四口(盛酒)瓫堝各十六口由加缶(モタヒ)各四口韓竈八具匏十六柄食薦二十枚柏一百六十把八足案四脚檜榑八村

薪九擔輿籠三脚覆敷料曝布五端二尺懸燈料綿三屯酒五斗三升三合調布二端（已上神料）祭絹一丈二尺五色絁各一丈二尺倭文一丈二尺木綿麻各四斤（已上祭料）散五色帛各八尺絹四丈倭文四尺木綿麻各四斤鍬八口稻八束（神祇官所充）米八斗酒二斗七升糯米二斗大豆小豆各八升堅魚鰒海藻各八斤腊四斗鹽八升瓫叩瓮各八口坏四十口匏四柄柏八十把輿籠三脚食薦八枚薪五擔雜物直調布四端祝詞料庸布六段（已上解除並竈井祭料）木綿四斤米四斗糯米四斗大豆八升小豆一斗二升酒三斗鰒堅魚海藻各四斤腊四斗（已上山神祭料）米二石瓱三口大案三脚臼三口酒槽三隻杵六枝箕三枚匏三柄（已上六種隨損可レ替）布三端薪五擔（已上釀神酒料）飯三石九斗海藻十六斤腊六斗鹽八升（膳部十六人衞士卅人二箇日食料）齋服料物忌王氏夏絹五疋一（冬加尺）綿十屯紅花小六斤錢一貫六百卅文（冬料進レ此）和氏大江氏並夏別絹二疋一（冬加疋）綿三屯紅花小三斤錢六百卅文（冬料進レ此）彈琴二人夏別絹三丈布二丈八尺冬黃帛三丈絹一疋綿三屯膳部十六人夏別絹三丈布三丈二尺紅花一兩一分冬黃帛三丈絹三丈布一丈二尺炊女四人夏別絹四丈五尺布一丈冬絹一疋三丈綿二屯布一丈神主二人夏別軾料絹三丈絲三絢卜部四人夏別絹一疋絲一絢布二丈八尺冬亦如レ之神主二人神祇官人二人並給二當色一（禰宜祝亦同）冬祭給祿十八人神主二人官人二人彈琴二人長上二人史生二人神部五人卜部三人祿法有レ差右夏四月冬十一月上申日祭レ之並用二官物一其所レ供神物神祇官請受設備雜給所レ須者所司各供二備之一祭日平明所司設二皇太子輕幄及群官幄於祭院一大臣以下各就レ座訖監二祀官一進申二行事一參議以上即令二治部調二歌吹一大藏賜二蘰木綿一次神主中臣二人進宣二壽詞一訖奏二歌舞一（先山人次神祇官一人次神主中臣一人次侍從二人次內舍人二人次大舍人二人）既而給二群官酒食一訖各去と見えたり

天皇我御命爾坐世今木與利仕奉來流皇大御神能廣前爾白給久皇大御神乃乞志給乃任爾此所能底津石根爾宮柱廣敷立高天乃原爾千木高知氏天能御蔭日能御蔭登定奉氏神主爾神祇某官位姓名乎定氏

天皇我御命爾坐は上に出（第十一段春日祭詞の下に註（イヘ）り）但今本に世字を脫せるを本朝月令に有るに從ひて今此を補ふ（其は右の春日祭次なる久度古開にも坐世と有ればなり）○今木與利は上に引る續紀に田村後宮今木大神と有れば奈良の今木を差す事論ふ迄も非ねど倘深く考るに今木は神名なり田村與利云々と云はでは通えず田村は記傳四十四（五十六丁）田村王の解に

田村は地名なる可し其は姓氏錄吉田連條に奈良京田村里續紀十八に藤原朝臣仲麻呂田村第又二十に田村宮三十七に田村後宮など有も此地也と有る地なる可し」と云れたる如くなれば桓武天皇の御代に其地より遷給へらむには田村與利とこそは云ふ可けれ今木與利とは宣ふまじき理なり此に因て思ふに石上大神を古く今木大神とも申せりしには非るか其大神を祀ひ奉る物部氏の支族に今木連と云が有るも其大神に仕奉る由緒に據て稱る姓なる事上に云る如くなれば今木の地名は元來石上邊にて呼來れる小字也けるを田村宮にして其大神を勸請る時に今木與利云々とは申給ひつらむを今京に移さるゝ時にも其任に用たりつらむとは所思るなり今木の事は已にも云るを尚下に委く云ふを得見る可し但萬葉九三十丁に宇治若郎子宮所歌とて妹等許今木乃嶺茂立嬬待木者古人見祁牟と有は記傳に云れたる如く疑はし遙に後の歌と聞ゆ欽明天皇御紀の七年下に倭國今木郡と有を谷川士清の通證に今無此郡疑吉野郡今木村と云るは然る言にて皇極天皇御紀の元年下に造二雙墓今來一と有を大和志を引て今在二葛上郡古瀨水泥邑一與二吉野郡今木邑一隣と云るを以ても古昔今木郡なりし名殘の其邊に存れるなり孝德天皇御紀の五年下に今來大槻と有も

同處なり齊明天皇御紀の四年下に今城谷上と見え大御歌に伊麻紀那屢乎武例我禹杯爾まだ於母之樓枳伊麻紀能禹知播と詠せ給へる上なる今來に異る事なし斯在ば今木大神は此地に由有て御在し丶神なるが此處より奈良の田村に移給ひ後に平野に遷坐るに依て今木與利云々とは云るならむと神名式など其餘の古書に索隱るに古昔に今木郡なりし吉野葛上二郡の邊に更に考ふ可き者全に有事無きは如何と云ふに其今木郡と云ふ地名は雄略天皇御紀に新漢槻本南丘と有が始にて其七年の下に百濟所貢今來才伎また新漢陶部など時に見えたれば今參の蕃客を始て置れしに依て起れる地名なれば今木大神を其に當て考ふ可きならず強て云はゞ光仁天皇の皇后の父は和氏にて贈正一位乙繼の女母は贈從一位大枝朝臣直の妹にて其先は百濟國武寧王の後なるが上に說る如く御名を新笠と申す由に就き止事を得ぬ子細共有て其を田村後宮にて祀始めて其意を以て今木大神とは稱給ひし故に大政官式に平野祭者桓武天皇後王改如レ為レ臣者亦同及大枝氏和氏並預二見參一と見え江次第平野祭條の一本首書に氏人者大江氏和氏也と有れば愈光仁天皇の皇后の祖神

たる如く見ゆれども然に非ず桓武天皇の後王と共に大江氏和氏の預る事は其御外戚の御親しみを後葉に傳給へるにて今木神は審神に非る事延暦元年御紀に大神と記させ給へるを以て思ふ可き者なり（二十二社の次序にも伊勢石清水賀茂松尾平野稲荷春日と上七社の列なるは其祭る所の少縁ならず尊き神に御在す御事を明らむ可し然れば梅宮は橘氏の氏神なるが其所祭の酒解神は大山祇命に在し大若子命は瓊々杵命に在しに若子神は彦火々出見命に在し酒解若子神は木花開耶姫命に在せればば橘氏の祖神と云には非れども嵯峨天皇の皇后橘嘉智子の族に尊崇給へる社なるを以て時勢に牽れて即氏人も共に信じけるが何時と無く其氏神の如くなれると同事にて平野の今木大神も桓武天皇の皇大后の御崇信の名殘其氏人に遺れるなり能く心を平にして事の狀を思ふ可し）若此く右の吉野郡なる今木の事は別なるに就て其正旨何ならむと云ふに已にも説るが如く天皇本紀に神武天皇元年辛酉正月庚辰朔都橿原肇即二天皇位一云々宇麻志摩治命奉獻天瑞寶乃竪神 楯以齋亦立二今木亦五十櫛一刺二繞於布都主劒大神一崇二齋殿內一藏二于十寶一以侍二近宿一と見え天孫本紀にも同事を記せるが謂二五十櫛一亦云二今木一と有て今木は齋木（イミキ）にて五十櫛は齋串にて太玉串又天玉櫛と云と同物にて神代紀に所謂神籬なる者なり（萬葉集に五十串立神酒座奉云々とも詠り）然れば今木は神籬なれば何れの社に祀れるをも然云ふ可きを石上大神に限て今木大神とも稱する所以は如何と云に天孫本紀を閱るに宇摩志麻治命より次爲下串二食國政一大夫ト奉レ齋二大神一と見えたるが六世孫伊香色雄命の條に此命春日宮御宇天皇御世以爲大臣磯城瑞籬宮御宇天皇御世詔二大臣一爲レ班二神物一定天社國社以二物部八十手所レ作祭神之物一祭二八十萬群神一之時遷二建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑一則天祖授二饒速日尊一自レ天受來天璽瑞寶同共藏齋号二石上大神一以爲二國家一亦爲二氏神一崇祠爲レ鎭則皇后大臣奉レ齋二神宮一と有て此より下に奉レ齋二神宮一と有は石上神宮の御事なるが今木を刺繞して奉齋れし事云まくも更なり總ての事餘社には甚く異なりけるが故に今木大神とも稱し亦其石上の地に今木と云ふ字も出來りし者なりけり此詞に今木與利仕奉來流と有る地名なるに思合す可き者なり（但此文を崇神天皇御紀に絞るに七年十一月のことなり）若て十五世孫物部石弓若子連公（今木連等祖甲火連之子）また十六世孫物部耳連公（今木連等祖大人連公之子）弟物部今木金弓若子連公（今木連等祖）と有れば姓氏錄には今木連神饒速日命七世孫大賣布乃命之後也と耳有て其餘は佗姓の今木にて此一統を除ては無きを此天孫本紀に依る時は物部氏族にして今木連の姓を冒る者三統なり（但物部石弓若子連は小治田豊浦宮御宇天皇御世の人物部耳連公物部金弓連公は難波朝御世の人と見ゆれば今木連姓を賜りしは推古天皇舒明天皇の御代なりしなるべし）若て十七世孫物部麻侶

連公の條に此連公淨御原朝御世天下萬姓改二定八色之日一改二連公一賜二物部朝臣姓一同朝御世改賜二石上朝臣姓一と有て石上の姓此時に定れるも其住處を以て命賜ふ者也けり（其は十四世孫に物部石上贄古連公と云ふ人の有にも思合せて悟る可なり）然れば石上は布留川に就て素より有る處の地名なるが神宮をも石上大神と申し其仕奉る物部氏をも石上朝臣と成されたる事著明きを今木と小字（セウジ）を呼たる事所見無に似たりと雖も上件の如く此を以て彼を考へ彼を取て此を校る時は今木とも呼りし事知らる然ればこそ續紀に田村後宮今木大神とは記されたれ若然ずは田村後宮今木坐大神とか何とか記されずては今木與利云々と云ふ事の聞え難きを思ふ可し是を以ても田村後宮へは鎮魂の爲に石上より其御靈を招て祭られたりしを桓武天皇の御世に石上大神の神寶を京へ召上せられし其事と打合て其神寶は石上へ還納られし後も即其御靈の止り坐可き由緒有て平野社には齋れさせ給ふ者也けり（其由緒と云は天孫本紀に宇摩志麻治命先獻二天瑞寶一亦堅二神楯一以齋矣謂二五十櫛一亦云二今木一刺二繞於布都主劔大神一奉レ齋二殿内一即藏二天璽瑞寶一以爲二天皇一鎮祭と有如く天祖の御命の隨に物部氏の人の必此今木の祭事を爲ずでは叶ふまじき事なるを漸々に十一月鎮魂祭を耳毎年に行るゝ例と成て年を遂て石上大神の神事の薄らき以行くを惜しみ給ひて京近く祭られ給ひて天皇の大御守な物し給はむ幽事にてぞ有ける穴かしこや）○仕奉來流は今木の地に鎮坐る御靈を分て其本處に齋奉る任に祀奉る意なり式に平野祭神四座と有る如く今木の本宮に坐す神を平野にて祀らるゝ事なり此は式に春日祭神四坐と有と此二を除ては餘社に例無き事なり（其説は己に第十一段春日祭詞の下に云り）然れば此仕奉來流を近く心得る捷徑有り神名式に山城國乙訓郡自二玉手一祭來酒解神社と有る祭來と同し心ばへに解けば了知るゝなり自二今木一祭來皇大御神と續けて味ふ可なり（但式に平野祭神四坐と有る上は本宮は本宮にして別に存する事を知るべし然るに世の古學者たち其本宮の何處ならむと索隱ざるは如何にぞや其考得らるゝ限は究盡さずは有べからず）○皇大御神能廣前爾白給久は春日祭詞の下にも云る如く此は打任せては天照大御神に限て申せる事なりしを文法の頽れたる者なり尤今木神は續紀にも大神と記され予が説の若くは石上大神に坐せば大神とは稱す可き當然の事なり如何に尊き神ならむからに皇祖天神と稱呼を亂る事神の御心にも協ふ可からず甚恐き事なり（但如此き稱呼の亂れは藤原氏の權勢良盛りに成れりし頃よりの事なる事己に春日祭詞の下に註りき）○皇大御神乃乞志給乃任爾の大字本朝月令に引るには無し任爾を同書に麻備と作り然れば舊訓然訓りしなる可し借此は元來田村後宮に齋奉らるゝ始に有ける事と見ゆ田村宮は天平寶字元年五月御紀に天皇移二御田村宮一爲レ改

修大宮ニと有て光仁天皇以前に已に有しかども其時には有べからず天平寶字元年四月大炊王（淡路天皇）を皇太子に立給ふ時の紀文に先是大納言仲麻呂招大炊王居ニ於田村第一と有て是より後は大炊王の宮と成れりしなるが其時は孝謙天皇の御世にして宮中にては専と佛を信ぜさせ給ふ時節なりしかば石上大神を宮中に勸請（マセマツリ）て今木を刺立て齋給ふ神事などは怠らせ給ひ鎭魂の祭式なども上古の舊式を廢給ひ形計りを行はせさせ給ふ事と成つるが故に大炊王の皇太子にて渡らせ給ふ時に己命の御爲に時々に齋奉給ひけむを大神の御諭し坐て田村宮には鎭坐す事と成つらむ（儀式或江次第共に平野祭に皇太子の參起給ふ事其所謂有て思えたり）然るを光仁天皇の是を傳領し給へるが彼謂ゆる田村後宮今木大神なりと所思たり（田村宮の其後に存して有し事は同御紀寶龜六年三月の下に置ニ酒田村舊宮ニ群臣上レ壽極レ日盡レ歡と有を以見れば光仁天皇も潜龍の間此宮に住せ給ひけるが天統を知食て後に今木大神の御守の事共の有けるを辱なみ思ほして其田村舊宮にして群臣を召上給ひ壽詞を上らしめ給ふ事と聞えたりき）其淡路天皇（大炊王）の御信仰に起れる事は外に證すべき事も無れど此天皇は淡路國に遷御有つるが其神をも配處にて祭らせ給ひけむと所思る由有り神名式に淡路國三原郡久度神社笑原神社有り久度神は大和にも有が朝廷の御竈神なれば由無く此所に渡らせ給ふまじく思え又笑原神社は天孫本紀に物部麻作連公（借馬連笑原連等祖）と有が由有て思めくが故に如此は云なり（但是等は餘りに鑿ち過たる説なれども心に浮びたる事を云はで止べくも有れば強て言試るなり）但淡路天皇を島に配流の後も田村宮は存して有しかば其祭來れる詞の任に平野にても用ひたりし者にて實には桓武天皇の御世なりし石上大神の御祟を和奉給ひし時の策命に大御夢爾覺志坐爾依氐大神乃願坐之任爾本社爾返收云々と有る時に田村後宮にて齋奉られし御靈實を齋奉給ひけむ事疑有まじき者なり（然れば桓武天皇二十四年に召上給ひし御靈實は本社に返し納給ひ田村後宮に今木大神と稱奉る御靈實を祀はれたる者にして其所祭神は共に同じ石上大神なり）○此所能は類聚三代格なる貞觀十四年十二月十五日大政官符に應レ充ニ正一位平野神社地一町ニ事在ニ上林郷九條荒見西河里廿四坪ニ云々と有る是にて後紀に石上より召上給ひし神寶の事を收ニ山城國葛野郡一と有る遺跡なる可き事上に辨たるが如し平野と云は其荒見西河里に在る處の小字と通えたり此處に鎭坐る後の書には平野今木神平野久度神なども申し平野神とも平野社とも稱奉らるゝ事なり（但此所能と有を以見れば往昔に平野と云ふ名に無りしにや平野の地名三代實錄に始て見ゆ）○底津石根爾宮柱廣敷立高天原爾千木高知氐天能御蔭日能御蔭登定奉氐は上に出（春日祭詞の下に云り但彼に）

は下津石根と有を此には底津石根と換たり ○神主爾神祇某官姓名乎定氏と有る神主は此祭に臨て殊に任れたるなり但本朝月令に引るには此なるも久度古開なるをも神主を爾宜に作れり然る本も有けるにや儀式に神主二人と有れども何の人とも知難し若くは其日早旦の儀式にト部二人執賢木前行至社門外左右分跪二人執食薦入敷神殿前と有て此より後の行事にト部の無を以見ればが其神主と云はト部の事なりけり但四時祭式には次神主中臣二人と有り此方宜きに似たり賀茂翁は此神主には主典を用らる可し主典は公文を讀申例なればなり」と云れつれど然に非ず此巻首に引る三代格の文にも右社預従五位下ト部平麻呂解狀爾云々と有を以ても思明らむ可なり

進流神財波御弓御太刀御鏡鈴衣笠御馬乎引並氏御衣波明多閇照多閇和多閇荒多閇爾備奉利氏四方國能進禮流御調能荷前乎取並氏御酒波甕戸高知甕腹滿並氏山野能物波甘菜辛菜青海原乃物波波多能廣物波多能狹物奥津毛波邊津毛波爾至氏雜物乎如横山置高成氏

大體春日祭に同じきが鈴衣笠等の二は彼に無き物の此に多きなり○神財波云々は衣笠までに係れり此所にて暫く句を切て意得べし鈴屋大人は衣笠の下に爾字脱たる可し」と云れたれど然に非ず久度古開詞にも爾字ある事無く已に春日祭詞にも貢流神寶者御鏡御横刀御弓御桙御馬爾備奉理」と有るも神寶者の語は御桙までに係りて御馬へは續かざるを思ふ可し鈴屋大人說に云く此文衣笠の下に爾字脱たるなるへし其故は御馬は神財とは云まじければ神財波と云に衣笠までなる可きに御馬へ續けて云ては如何其上引並と云は御馬のみの事なるに上より續けて云ては引と云ふ言總てに係りて如何神財は引とは云難し然れば必某々に御馬乎引並氏と有るべき文なりと云れたれど此彼の例を思漏されたる者なれば據り難き心ちす ○衣笠は和名抄十四服玩具に華蓋和名岐沼加散と有る物是なり大神宮式大神宮裝束に蓋二枚淺紫綾表緋綾裏表各三丈裏加之頂及角覆錦枚別所須一丈垂淺紫組總枚別所須八兩但縫料絲臨時斟酌請受以下准之緋綱四條二條蓋料二條笠料長各二丈と有る此なり儀制令に凡蓋皇太子紫表蘇方裏頂及四角覆錦垂總親王紫大纈一位深緑三位以上紺と見えたり但平野神は伊勢に准られて紫なりしが伊勢は萬事天皇に准じて奉らせ給ふ例なるに依て紫を用らるゝなり天皇の御蓋の紫なる事式に見えたり ○御衣波明多閇照多閇云々此の照多閇は脱たるを本朝月令に明妙照妙和妙荒妙に作れり所以に考に補はれたるに從へり新年第二詞春日祭詞大忌祭詞風神祭詞久度古開詞鎭火祭詞大嘗祭詞鎭御魂齋戸祭詞等各々明妙照妙荒(アラ)妙和妙の四を並たれは此は脱たるなる事論なし 如横山置高成氏は鈴屋大人說に高成も古言めきて聞ゆる詞なり」と云れたる如く美き古言にて如横山より照應には置所足より今一際勝りて思ゆ次詞及鎭火祭詞鎭御魂齋戸祭詞等に見えたり但此詞の鎭御魂詞に似たる事の多かるは由有る事なり下に云べし倩考に足してと書は常なり高成と云は例も見えず言も略に過

て聞ゆ若文字の誤なと云れたるなど大なる謬なり且頭書に云れたる事共も尤當れりと思しき事は據て見えず
獻流宇豆乃大幣帛乎平久聞食氐天皇我御世乎堅石爾
常石爾齋奉利伊賀志御世爾幸閇奉氐萬世爾御坐令在米
給登稱辭竟奉登申又申久參氐仕奉流親王等王等
臣等百官人等母夜守日守爾守給氐天皇朝廷爾
伊夜高爾伊夜廣爾伊賀志夜具波江乃如久立榮米之令
仕奉給登稱辭竟奉登申

此段の文勢鎭御魂齋戸祭詞に彷彿たるは故有る事な
りけり然るは今木大神は上に註る如く石上大神にて
布都主劒大神に在し次詞なる古開神は鎭魂祭に祀ふ
所の十種神寶の御靈と坐す布留之御魂神に在し相殿
比賣神は此神の后神ならむと思ふに然に非ず大宮比
咩神に在せば必此彼相通ふ趣意の有べき筈なり此事心な得置て見ざれは全に解得る所勿らむ者ぞとよ ○天皇我御世乎堅石爾常石爾齋奉
利伊賀志御世爾幸閇奉氐は鎭魂祭詞に皇良我朝廷乎
常磐堅磐爾齋奉茂御世爾幸閇奉給氐と有に同じきが
此には次詞に親王等王等臣等云々の事有に依て天皇
我御世乎と云るを彼には其意を含めて親王等云々を
其中に存するか故に汎く皇良我朝廷乎とは云り但鎭御魂祭は天皇御一已のみの事の如くなれど然に非ず王臣なども含たる詞なる事其下に云如し萬世爾御坐令在
米給登稱辭竟奉久登申は鎭御魂齋詞に自此十二月始
來十二月爾至萬氐爾平久御坐所令御坐給止今年十二
月某日齋比鎭奉止申と全同意の文なり巻首に引る後
紀なる石上大神の御怒を解く所の文に即詔二神祇官
諸司等一立二二幄於神宮一御飯盛二銀笥一副二御衣一襲一
並納二御輦一差二典闈千繼一充レ使召二彼女巫一令レ鎭二御
魂一云々と有るは石上神宮にて在つる事耳の如く聞
ゆれども然らず召二彼女巫一令レ鎭二御魂一と有は京に
て天皇の御爲に鎭魂祭を臨時に行はれて大御壽の永
く坐む事を希給ふ事を記せるなり然るは御紀に延暦
廿四年春正月辛未朔廢朝聖體不豫也と有より始て凡
ての事其より延て起れる故に策命にも比來之間御體
如常不御坐有爾大御夢爾覺志坐爾依氐云々辭別亘申
給久神那賀良母皇御孫乃御命乎堅磐爾常磐爾護奉幸
閇奉給閇云々と有を以知べし然れば此文も其意を孕て作れりし者とこそ見ゆれ但
石上神宮の御事を神名式に大和國山邊郡石上坐布留
御魂神社名神大月次相嘗新嘗と見えたるが履仲天皇御紀に石上
振神宮と見え顯宗天皇御紀には石上振之神榲と有れ

ばず布留御魂神と古來稱來る事なれども尙委しく考るに布都御魂神布留御魂神共に其神實の別に坐るが其を混同にしては唯に石上神宮と稱し御靈實を指ては右の兩名を稱せりしなり所以に神名式の一古本には留を都に作り此も彼も相誤れるには非ず兩説を存せるが故なり（又神名式に備前國赤坂郡石上布都之魂神社有り此は神代紀簸川段の一書に其斷蛇劔號曰蛇之麁正此今在石上也と見え又其素盞嗚尊斷蛇之劔今在吉備神許部也と有る是なり神部は地神本紀に素盞嗚尊十一世孫大鴨積命弟田田彦命磯城瑞籬朝御世賜神部直大神部直姓と見え神名式に同郡鴨神社宗像神社並べるを以見れば大和の石上に在した後に備前國へは其氏人の遷住む時に遷幸奉れるが大和の名を移して此にても石上とは云也）然るは古事記（白檮原宮段）に天より建御雷神の降給へる横刀の事有る其本注に此刀名云佐士布都神亦名布都御魂此刀者坐石上神宮也と見え天孫本紀（伊香色雄命段）に磯城瑞籬宮御宇天皇御世云々遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑云々と有を合せて思ふに布都御魂神とは此御刀の御魂を申せるなり（然れば一本に留を都に作るは誤には非ず鈴屋大人は留と都と言通ひて同義なる由に説れたれど委からず神代本紀に建甕槌之男神亦名建布都神亦名豐布都神今坐常陸國即石上布都大神是也と有なども思合す可なり）布留御魂神と申すは天皇本紀（神武天皇即位元年段）に十一月丙子朔庚寅宇摩志麻治命奉齋殿內於天璽瑞寶奉爲帝后崇鎭御魂祈禱壽祚所謂御鎭魂祭自此始矣凡厥天瑞謂宇摩志麻治命先考饒速日尊自天受來天璽瑞寶十種是也云々

天神敎導若有痛處者令茲十寶謂一二三四五六七八九十而布瑠部由良由良止布瑠部如此爲之死人返生即是布瑠之言本矣所謂御鎭魂祭是其緣也云々と有て天孫本紀（伊香色雄命段）なる上に引る文の續きに則天祖授饒速日尊自天受來天璽瑞寶同共藏齋號曰石上大神云々と有を以見れば布留御魂神とは十種神寶の御靈を稱申す御名なる事著き者なり（其は天武天皇御紀十四年十一月條に爲天皇招魂之と有にも思合す可き者なり委しき由は鎭御魂齋戸祭詞の下に云れば見合せて知べし次詞なる古閇神の説にも云る事有を見よ）所以に天孫本紀に宇摩志麻治命先獻天瑞寶亦竪神楯以齋矣謂五十櫛亦云今木刺繞於布都主劒大神奉齋殿內即藏天璽端寶以爲天皇鎭祭之時天皇寵異特甚云々と有て其終に凡厥奉齋端寶而祈鎭壽祚兼崇靈劒而治護國家如此之事裔孫相承奉齋大神と記せり是を以て布都御魂神と布留御魂神と素より二神を存したるが此を合せて石上大神と齋奉給ひし事を察らむ可き者なり（尙此事次詞また鎭魂祭詞の下の條に云を見る可し年中行事秘抄に引る鎭魂歌に石上布留の社の太刀が本に」と有るにても此事は著き者なり）然らば平野の今木大神は彼布都御魂神にて劒の靈に坐せば國家の治護をこそ祈給ふ可きに壽祚を祈鎭給はむ事は由無に似たりと雖も其

は僻き說にて古くは右の二柱を共に石上大神と申して布都御魂神とも布留御魂神とも一柱の御名を表に立て此彼の隔無く祀給へるが故に同じ事を祈申さるゝ者なりけり（次詞なる久度神は竈神なるに古開神と同じく鎮り坐が故に壽詐を祈給ふと同し例なる者ぞ）○又申久天皇我朝廷爾云々我字は本朝月令に從へり考に此字を加へて例以て補ふと云れたるは月令を見られざりしなり朝廷爾の爾字を月令には乎と有り此にても聞ゆ（其は大祓詞にも天皇朝廷と見え其餘にも例有れは難無れど久度古開詞に天皇我朝廷と有を以見れば諦く此に脫せる事著ければ從へるなり）○伊夜高爾伊夜廣爾の伊夜字彌に作れり考に王臣の官位彌益に高く氏族も彌廣くなり元正天皇御紀の詔に天下乃政乎彌高爾彌廣爾と有は天皇の御稜威の彌貴く御食國彌弘にして少異なり」と云れつるは然る言ながら月令には天皇我朝廷乎と有り然る時は此詔の如く天皇が朝廷を彌高く彌廣く立榮奉らしめ給へと云ふ事になりて王臣の身上の事ならず王臣の仕奉て御德を成し奉る事になるなり（但次なる伊賀志夜具波江は茂八桑枝なること春日祭詞の下に說る如くなれば高も廣も其緣を架て云る者なり）○伊賀志夜具波江乃如久は上に出（春日祭詞の下に云り）考に江は延を誤れりとして改られたるは然る言ながら次なる久度古開詞なるも江と作れど二所迄同じ事を誤る可くも思えざれば據難し（考頭書に云く正しく假字は字音を用る事古事記日本紀にて知べし然るを寬平の頃書し新撰字鏡にも和名抄にも延の假字に江を用びしは今の京此方斯る事漫りに成たり此祝詞は後の文なれば江を用びしかとも云べけれど此卷の例を思ふに猶延の誤とす」と有れと固陋なりや）

○久度古開

久度神は神名式に大和國平群郡久度神社と有る此なり（又式に淡路國三原郡久度神社と申が有れども其には非る事上に云る如し）久度の事は記傳十二十四丁に俗に竈を久度と云は誤なり和名抄に文字集略云窻竈後穿也和名久度と見え竹取物語に竈處を三重に爲籠て云々久度を開てと有り然れば古は竈は後に穴を開て其を久度とは云しなり（備窻字は字書に見えず若くは窻の誤か窻は窗と同し竈突也）續紀に天平三年正月神祇官奏庭火御竈四時祭祀永爲二常例一大膳職式に御膳神八座高部神一座竈神四座竈神四座と有る竈は上に引る和名抄の窻と同じ在る可く聞ゆれば久度と訓べし（以上採要）と云れたるに據て思ふに右の御膳神八座は大嘗の齋院少所祭の神八座を云ひ高部神とは高𤭖神にて和名抄に鐺（漢語抄云阿之奈倍）小鼎也の御靈神を申せるなる可く竈神は物を炊く鍋神なる可く竈神の久度は即竈の事にて俗に久度と云ふ者是也（事の因に云ふ文德天皇實錄天安元年四月の下に內膳司忌火庭火神並授二從五位下一と有より始て諸書に忌火庭火に並記さる忌火神は同條に大炊寮齋火武主比神と記せれば摠ての火の御靈神に在し庭

火神の庭(ニハ)は場(ニハ)にて物を煮もし炊もする時に用る所の火神にて體用の差異なり然れば和名抄に竈後穿也と有は烟の出る穴などを開たる者にて無用に穿たるにては有べからず久度は凹處(クボト)の意にて鍋を懸る處を云なり然れば摠ては其土にて築堅めたるを竈(ヘツヒ)と云ひ其炊爨の用を爲す處を久度とは云なりけり予が生れたる淡路國の仁井村と云邊には土にて高く築立たるを釜處(カマド)と云ひ其前邊りを釜前と云ひ土を穿ちて庭に物爲るを久度と云ひ久度の前と云て差異有る事なるが餘國に有や無しや知らず又閇部比共云り偖平野に祀る處の久度神は所祭忌火庭火の皇神等にて御靈實は釜と鑄とに御在りと見ゆ若て內膳司なるは其御模造にては無きやと思ふ由有り日本紀略天德四年庚申十一月十九日の下に今夜坐ニ內膳司ニ忌火庭火等御神奉レ遷ニ冷泉院ノ內膳ニ仍權大納言師尹卿以下奉レ遷レ之平野謂ニ釜二口ニ也庭火謂ニ鑄一口ニ也各有レ臺長櫃等衛士持レ之奉レ移ニ院乾方新屋ニ庭火平野別々屋也安置之後宮主申ニ祝詞ニと見えたるにて然もやと思しければ也記傳に引れたる西宮記に內膳御竈奉レ遷ニ他所ニ事以ニ生絹ニ覆レ上衛士八人舁之宮主先解除次納言一人非外記史以下歩行供奉と有る式に合り又禁秘御抄にも竈神行ニ他所ニ之時中納言以下供奉尤可レ爲ニ靈物ニ女房不レ忌レ之男主上之外不ニ沐浴ニ也[illegible]五破但指合用レ之不可說物也と有り中右記寛治八年十一月三日の下に內膳司御竈神三所也一所平野件(共イ)美奉仕之神也一所庭火是尋常御飯奉仕之神也一所忌火是則十一月新嘗六月神今食祭奉仕之神也と有る平野件美は一本に件共

と作れば若くは此字久度と訓へきにや然れども上に引る中右記と其數同じくして其神に違有て思ゆれど其に平野謂ニ釜二口ニ也と有は平野供(グド)共と忌火神と二神なる事を表(アラハ)せる者にて其件(クトノ)共神も同じ忌火神なる由を徵す可き文なる者なり但三代實錄に貞觀元年正月大炊寮從五位下大八嶋竈神八前並授ニ從五位上ニと有は大膳式に竈神四座窖神四座と有を合せてにや有むニと記傳に云れたるは然る言にて竈神と窖神とを通はし云るなり此如く其實は殊神に坐さるを其器に依て御名を解別たる耳なれば深く拘(ナヅ)む可きに非ず說文にも竈炊竈也亦作窖と有て其別無が如し百練抄に寶治元年十月廿二日內膳屋燒亡御竈神燒損給廿四日近日御竈神燒損可鑄改哉否事被レ問ニ諸卿ニ十一月十九日軒廊御卜內膳竈燒損事也閏十二月廿二日被レ定下內膳御竈可ニ鑄改ニ日時上定ニ來廿八日ニと有る此事を增鏡烟の末々巻に內膳屋燒て神代より傳はれる御竈も燒損れけるをぞ甚淺ましき事には申侍し彼竈は昔は三有けり一をば平野一をば忌火一をば庭火と申けるを圓融院の御代永觀の頃二は失にけり今一殘るだに斯る宜からぬ事(ワザ)なりとて神祇官に尋られ古き事共考らる平野と云けるを陰陽寮に居て癸祭と云ふ事に用ひけれど中頃より彼祭は絶ぬ忌火と云にては六月十二月の御神事の御膳を調じけり庭火にて一の御膳は仕れり斯れば甚戲々(タイタイ)しき事にて始て鑄

物師に被命る可しとも申し古きを損れたる所計を直さる可きかとも色々に定め難られたり入道大政大臣猶古きを直さる可しと申さるとぞ聞えける」と有て上に引る中右記に更る所無く內膳司御竈神三所の其說熟符ひたり右の增鏡に神祇官に尋られ古き事共考らる」と有を以見れば當時平野久度神の古意は朝廷にも官にも已に其所傳を失へりし者なり然るは官より答に平野と云けるを陰陽寮に居て癸祭と云ふ事に用ひけれど中頃より彼祭の絕ぬ」と有を以て知るゝなり併ながら天の斯文を喪ひ給はざる恩賴に依て古を考索るの便宜と爲れる事は此等の書共の傳はれるに賴れり此則古註を捨て新說を立る所以なる者なり右等を通考すれば鈴屋大人說記傳十二に內膳司なる竈神は即竈を神と稱るなりと云れたるは然る言ながら右の三の御竈を神體と爲て記略に平野謂二釜一口一也と有る其一を久度神其一を忌火神と稱給ひし者なるが其竈の神は忌火神にて渡らせ給ふ事著く庭火神は釜神にて爨炊き爲る用火を主る神に在る事疑無るべき者なり 然れば竈を神と字へるのみには非ず其主り給ふ所に於て神體を分別たれし者なり心を平にして考ふ可し尚委しき事は古始太元攷に說盡す可し〇古開神は上にも略說る如く文德天皇

御紀には古闕と作れり然れども孰か是なるを知ず其餘は書共には皆古開と有を以て推す時は古闕の方非なるに似たり然れども古開と云ふ事の據と思しき者古今の書に絕て此有る事を聞ず 賀茂翁も此事に甚く迷惑せられしと見えて考に古開の開の訓は阿伎か佐伎か又古開の二字假字にて異訓有か左右く考得難し」と云れたり 此に因て此を惟ふ事年久しかりつるに神我か心を開て然もやと思ほしき事に至るの考を得たり然るは闕は誤なる事本より論ひ無れど開字に於ては誤る可くも思えねとも世を經人を易て其證徵無く且說明す可き者なきを以考れば必誤無しとは云べからず先には欽明天皇の大御名を御紀に天國排開廣庭天皇と有を記に天國押波流岐廣庭天皇と作れば開は波流岐と訓む可かと思へども布流波流岐と續きて語熟せず因此て古闕の字を立て廢闕の神を祭れりしにやと思へど現存る闕神こそは其所にして祀給ふべけれ態と廢闕の神を迎て祀給ふ可くも有ず又祝詞に久度古開二所乃宮爾之氐と有れば縱開は闕にも有れ地名なれば此考は立難くて悉捨つ 又四時祭式なる平野祭料の細書に以上解除并竈井祭料と有れば竈は久度神に配(アテ)井は古闕に配て堰などの神なるにかと思しか共此は平野本社を祭らるゝ爲に其調度に就て竈神井神を祭らるゝなれば是も强言なり 然れば開は多く開問と續くる字の畫數も何も彷彿たるに依て打混れた

る者にて古閉は古閇を誤れる者なりけり若て其布留閇と云ふ言の因て起る所は已にも引る天皇本紀（神武天皇即位元年段）に十一月丙子朔庚寅宇摩志麻治命奉於天璽瑞寶為帝后崇鎭御魂祈禱壽祚所謂御鎭魂祭自此而始矣凡厥天瑞謂宇摩志麻治命先考饒速日命自天受來天璽瑞寶十種是矣所謂瀛都鏡一邊都鏡一八握劒一生玉一足玉一死反玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神敎導若有痛處者令茲十寶謂一二三四五六七八九十而布瑠部由良由良止布瑠部如此為之者死人返生矣即是布瑠之言本矣所謂御鎭魂祭是其緣矣と有る此事に依て布瑠部由良由良止布瑠部と云ふ言起りつるが天孫本紀（伊香色雄命段）に磯城瑞籬宮御宇天皇御世云々遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑則天祖授饒速日尊自天受來天璽瑞寶同共藏齋號曰石上大神以為國家亦為氏神崇祠云々と有る如く布都御魂神と共に石上邑に鎭り定り給ひしより布留御魂神と奉稱る事神名式に大和國山邊郡石上布留御魂神社（名神大月次相嘗新嘗）と申にても著かりけり偖十一月に鎭魂祭と云ふ事有るが此は右の十種神寶の御靈と坐す布留御魂神を招請り

給ひて御靈整の神事を物為給ふが故に鎭魂祭の字を四時祭式に於保無多麻布利と訓み天武天皇御紀に招魂の二字を美多麻布利と訓み（古語拾遺には鎭魂を於保牟多麻布利と訓り御靈整の義なり整を布留に充たる意は漢籍史記に軒轅乃修徳振兵と有る正義に振整也と訓るに依れり舒明天皇御紀に振旅（イクサトヽノフ）と有を通證に出ニ左傳注振整其徒旅也と有り）職員令集解には右の天皇本紀なる古説を擧たるが其首に問鎭魂祭云々答云々問布利之由答古記云云々と記せるなど何れも右の布瑠の言本に因れるが故也然れば布留閇は可鎭にて用言なれば布留とのみ云て事足れるを心行ず思ふも有べけれど布留と申すは十種神寶の本體の御名也布瑠部と申すは鎭魂の神事を為て御魂招し為る事なれば何か妨有む（然れば石上大神の事を布留とも布留閇とも相通はし云れしなり）其は鎭魂祭詞と此詞と共に結句の同義同意の言成を以ても知る可く且年中行事秘抄に載る鎭魂歌に「阿知賣於々於々天地爾氣為動者眞為動神亦我亦神是其者可來々動來動在者阿知賣於々於々石上振社之劒之本所希其子爾其立奉之と有る石上振社の劒か本」と云るは布都御魂大神の神體を申し其本と差せるは十種神寶にて布留御魂大神に在せば其御恩賴を希ふ其人に其十種神寶の御靈を賜りて靈く太く為むと也（但此は予が始て説たるにこそ有れ古人に如何なる説有りや未此を知すと雖も）

必如此く説ずして、は通え難き者なり此等を合せて古開神は布留御魂神と思定たる者なり今木神の布都御魂神なるが別なる御由緒に依ながら同じ平野の相殿に並鎮り坐ける事豈少縁の事ならむや京城に近く鎮給ひて帝基を守らせ給ふ幽事の顯るゝになむ尚上に云る事共を此彼照し合せて其深意を思ひ明む可き者なり但餘りに入ほかなる説と罵る人や有む然れど其笑に怖て將止べきに非ず○相殿比賣神は何れの神の后神とも詳ならず春日の例に准る時は其並坐す神の后なり然る時は古開神の后神たらむとも思はるれども證文無し二十二社註式に天照大神と云るは春日の比賣神にも紛妄説せる事有るが共に云にも足ぬ僻事なり此事已に春日祭詞の下に委しく辨たるが如く中昔より以來諸社の神主ども其仕奉る神を尊く申成して世に衒はむと爲る惡幣起りて中々に入の惑と爲ること少からず然るに春日は比賣神も共に正殿の中に在る祝詞にも載られたるが平野の例は少しく異なり然るは今木神久度神古開神の三神のみ正殿にて比賣神には何も合殿の言を冠たり神名式に載る所は平野祭神四座とありて甲乙無が如くなれども内々の事に至ては甚く劣れる樣なるは故有る事と通えたり其は此卷首に云る神階を以考るに延暦元年の今木大神從四位上より後承和三年久度古開神共に神階の事有るより次なる嘉祥七年の度に始て無位合殿比咩神從五位下と見え仁壽元年の策命には合殿坐須比咩神と記され其餘何れも合殿と稱ふ文法なるを以見れば餘の三神の本社なる事は云はても著き者にて全く后神の御會釋あらず必別に由有る神の本社の列に祟れ御在るにぞ有ける神階の事は上に委しく云れば其下に引合せて悟る可き者なり此に因て其神寳を思ふに此なる比咩神も春日なると同じく大宮比咩神には渡らせ給はずやと恐けれど思なりぬ但春日にては後神にて齋はれ給へるを此にては其御禮に依て共に鎮坐では得有ましき由來とも有てなり此故に古開神の后神の如く並び鎮坐る也大宮比咩神は師説の如く天鈿女神に御在るが予が説は其神の天兒屋命と后神にして天忍穂耳命の大后玉依毘賣命の御母たる事委く春日祭詞及太元攷にも説る事なるが古史徵五十五段に古語拾遺に凡鎮魂之儀者天鈿女命遺跡と見えたれば鎮魂祭の儀は天石屋段の故事より起れる成事論無く將其式を貞觀儀式に載されたるに大藏錄以二安藝木綿一枚一實二於筥中一進置二伯前一御巫覆二宇氣槽一立二其上一以桙撞レ槽每二一度畢一伯結二木綿一訖御巫舞訖次諸御巫猿女舞畢と見え江次第にも神祇官雅樂寮神樂次御巫衝二宇氣一次神祇官一人進結二糸於葛筥一自レ一至十此間女官藏人開二御衣筥一振動神琴師彈二和琴一衝二宇氣一神遊之儀也神代卷宇氣船不美止々呂賀須義也以二賢木一衝船也結糸自レ一至レ十と見え天

孫本紀に凡厥鎮祭之日猿女君等主ニ其神樂ハ擧ニ其言ー大謂ニ一二三四五六七八九十ー而神樂歌儛と見えたり」と説れたるは然る言に動き無る可きに就て佗書に徵を索るに年中行事秘抄（賢所雜事）に舊記云天照大神閇ニ天岩戸ー隱坐之時云々天鈿女命日影爲レ鬘取ニ竹手球ー石屋戸伏レ船置而蹈登動搖爲ニ神樂ー八百萬神一共咲之（十一月鎮魂此由也）云々新嘗祭神態之前寅日供ニ奉件鎮御魂祭ー其神所行事立ニ廻賢木ー其中伏船御巫上ニ此船上ー以レ金付レ木歌レ合儛レ樫猨女亦儛只似ニ彼義ー良有レ以也と有を以て鎮魂の祭儀はしも天鈿女命の遺跡なる事愈明亮なる者なり（但此所作に就て云も得難く奇異しく微妙なる神術有て大に神の御恩頼の著明く顯るゝ方法有て我是を得たり鎮魂祭詞の下に其秘蘊を傳（シルべ）す可し）偖古書に稽るに右の鎮魂祭の因て起る事彼天石屋戸段に始りて天鈿女命に成れる儀式なるが皇祖天神の御心以て八意思兼神に思得しめ給ひ天鈿女命をして行はしめ給へる神術なるが天祖邇邇藝命の天降坐し時に天鈿女命五伴緒の列にて供奉給へりしかば筑紫日向の天朝廷にして年々に行はしめ給ひて壽祚（イノ）を祈禳り物爲させ給ひ天皇命も大御身自大御魂振の御政を行はせ給ひ彼離遊の運魂（ウル）を身體の中府に招鎮めさせ給ひ大御心朗かに好美はしく大座坐て御心安（ミウツ）く天下を統御（シロシメ）し傳へさせ給へる常例なりしが神武天皇の大御世知食す初め高天原より皇祖天神の詔命を奉（ツケタマ）はらせ給ひて天降給ひ初國所知食む大宮處と萬世に定給ふ可き大和國にて其幸行を待迎奉給ひし饒速日命の十種神寶を奉る事ありて初て鎮魂の祭儀の朝家に傳る如くなりと雖も熟く事狀を思ふに一事の二度に傳はれるなるが各自に味有り其は天鈿女命の當昔より傳る處は所謂鎮魂の神術なればは實に其如く行たらむには天地の神祇に交通感和の道を得るが爲に期（ハカ）らずして神明に至る事云まくも更なるが豈天下の人々悉く其事を行ひ能く爲るに至らむや是を以て皇祖天神の深く遠き思慮を以て十種の神寶を以て一より十までの神體と定て天降し給ひ其疾（ヤマ）しき處有は此十の寶を一二三四五六七八九十と云て振へ寛々と振へ如此是を爲さば死者も生返らむと其變に就て治るの術を傳授給へる者なり然れば天鈿女命のは饒速日命なるは變に所するの術なり如何に奇しき神量ならずや（此事を能く心留めざれば同じ事の其始め二有が如く通えて甚混らはしく終に已が管見の及ばざるを以て古書を疑に至る者なり）若て神武天皇元年（ヨクトシノ）に其天璽十種の神寶を獻られし時に其式を合せて大成へられけむ是

より別式有を聞かず天皇本紀に十一月丙子朔庚寅宇摩志麻治命奉ニ齋殿内於天璽瑞寶ニ奉ニ爲帝后ニ崇ニ鎭御魂ニ祈ニ禱壽祚ニ云々其鎭魂祭日者猿女君等率ニ百歌女ニ擧ニ其言本ニ而神樂歌儛尤是其縁者矣と有より以降其例にて行はれし者と見えたるが物部氏は其十種神寶を振奉て祈禱し猿女君は布瑠の言本を擧て舞へりしなり然るに儀式江次第を閲るに物部氏の其祭に預る事の無きは甚く其氏の衰たりし故に其職掌は神祇伯以下の官人に歸したる者なり　令始め職原抄神祇官の下に以ニ當官ニ置ニ諸官之上ニ神國之風儀重ニ天神地祇ニ故也云々と有て大政官の上に列れられたるは然る事なれど是は家々の職掌を失へるが故に成れりしが其成れるに依ては佗氏にて仕奉來る事ども自然穢く樣に成て家々の職掌是に依て廢れたる事も多かる可し且喜び且歎く可き者と知るべし　其衰耗たる由來を思ふに物部氏の盛なりし頃は條々にして行れけるを物部守屋大連の凶災に罹られし程より天下の風儀萬に漢樣ならぬは佛樣に悉變り竟たれば此程よりや物部氏は家業を失ひ猿女は職業を佗氏に奪れける故に存るが如く無が如くに傳れりけむ其は古語拾遺に鎭魂之儀者天鈿女命之遺跡也然則御巫之儀應レ任ニ舊氏ニ而今所レ選不レ論ニ佗氏ニ所遺九也と其畜憤を口られたるにて著かり　平田翁も此事を引て臨時祭式に凡御巫取ニ庶女堪ニ事充レ之と有を合て考ふ可しと云れたり　斯れば推古天皇の御世より天武天皇の御世に至る迄の間物部氏の衰に依て表立たる神事に行はれずして唯其家に存するのみなりつらむを此天皇の思ほし立せ給ひて再興し給へる其度も尙其氏人は用ひ給はずして全くの舊式に立復らさりし故に古昔は實事にて有つるも皆擬事耳に成れりしが其即大寶令に載られたる鎭魂祭にて其儀式は次第に取捨有つるが彼貞觀に至て今ノ本の如く定れりし者と見えたり　其實事の擬事に成れりと云は此鎭魂の儀式はしも何よりも身を振動かして筋骨を强壯にし大淸の神氣を吐納する古儀なるを御衣を筥に納て振動かす樣に成れるなど鎭魂祭祠の下に云り　此沿革は暫く差置て故實を徵す時は鎭魂祭の御靈實は十種神寶にて所謂布留御魂神に在し其神事の立つ所は天鈿女命の御所業に起れゝば必此二柱を以て主と齋奉るべき由來なるを思ふに此合殿比咩神は必其神にて平野第三殿なる古開神に从ひ御在る事疑ひ無く所思るに依て如此は定めつる者なり　尙此神の事は春日祭條に說き此神等の行事は鎭魂祭祠の下に委しく考記せれば此彼見合せて悟るべし

天皇我御命爾坐世久度古開二所乃宮爾之仕奉來流皇御神能廣前爾白給久皇御神能乞比給之任爾此所能底津石根爾宮柱廣敷立高天能原爾千木高知氏天能

御蔭日能御蔭止定奉氏神主爾神祇某官姓名乎定氏進能神財波御弓御太刀御鏡鈴衣笠御馬乎引並氏御衣波明多閇照多閇和多閇荒多閇爾備奉氏四方國能進禮流御調能荷前乎取並氏御酒波甕戸高知甕腹滿並氏山野物波甘菜辛菜青海原乃物波鰭能廣物鰭能狹物奧都毛波邊都毛波爾至天末雜物乎如横山置高成氏獻流宇豆乃大幣帛乎平久所食氏天皇我御世乎堅石爾常石爾齋奉利伊賀志御世爾幸閇奉氏萬世爾御坐令坐米給登稱辭竟奉登久申又申久參集氏仕奉親王等王等臣等百官人等乎毛夜守日守爾守給氏天皇我朝廷爾彌高仁彌廣仁伊賀志夜具波江能如久立榮氏令仕奉給登稱辭竟奉登久申

此詞は全く上なる今木神詞と同じければ今注すに及ばず其中に少の異同有り下に記せるが如し（立復りて上なる解説を讀味ふ可し）　○久度は上に記せる式に大和國平群郡久度神社此なり續紀に延暦二年十二月丁未大和國平群郡久度神叙從五位下と見えたり昨年十一月に今木大神はしも從四位上に叙せられ給へるに依て此にも奉られたる者なり（然れば神託に依て平野に遷坐ざりし頃も朝家の御崇敬佗に例なかりける者也けり）是より後平野に遷坐し後は神位を平野にて受させ給ふと見えたり續後紀に承和三年十一月庚午從四位上今木大神奉授正四位上從五位下久度古開兩神並從五位上と有を以知べし（今木大神の從四位上は田村後宮に在し時の御位なるを平野にても此を稱し久度神の從五位下は大和國にての神階なるを平野にても此を稱せると同じきなり春日祭詞の下に云るが如く春日と平野の兩社は佗社の例に異りて春日平野は其本社の神を祭る社にて各其本社に有るなれば其春日平野にて祭る所は其本社の御靈を招て祭るが如くなれば其心得無くては有べからずなむ）　大和志に今在葛下郡王寺久度邑と云り考にも龍田の立野の社近き所の大和川の河邊に久度村を云ふ里有て其氏神と齋ふ社を久度神社なりと國人云ふ」と有は同地なる可し（但古は平群郡なりし地の今は葛下郡に屬る者なる可し又或書にも今曰久土村在勢盖村巽属葛下郡と云るは久度久土同音なるが故ぞ）　○古開は式に大和國山邊郡石上坐布留御魂神社（名神大月次相嘗新嘗）と有る此なり（委しくは上なる今木神古開神の下に辨たれば今云す）　但石上に坐す所の神體を遷して平野に祀らるゝには有べからず其御靈を遷し奉れるなり（譬は鹿島神香取神枚岡神などを春日に合祭て四座と爲るが其本處の祭を兼て執行はしめ給ふと同事にて春日は春日の神體を遷奉れるには非ると同じきなり此故に平野祭神四座と此にも記せるをや）　○皇御神は須賣於保加微と訓べし上にも天皇我御命爾坐世と有る御を於保と訓るに例を得べき也考に今木には皇大御神と書き

此には大と無は始より神位の卑かりし故なる可し文德天皇實錄に今木大神久度古關神と有に等し」と云れたるは實然る言にて續紀續後紀共に今木大神と見え承和十年丙辰朔壬申平野社一前預二之名神一と有も今木神なる事云はでも著き者なり三代實錄以下の書には今木神と記して別に大神とは稱書さす其は餘の三神共に名神と爲り給へれば其差異の用無ればなり然るに神名式に載る所右に四座に並に名神なるは貞觀の頃に至て漸々神階の貴く成給へればなり若くは三代實錄に貞觀五年五月二日甲子平野從三位久度神古開神並加二正三位一從四位下合殿比咩神從四位上と有る此時などにもや有む考○乞比給比之任爾を今本に給万と有るを考に萬字衍なり給比之と有べし」と有り然る言なり本朝月令に然有に從ひつ○定奉氏は春日龍田平野此詞と同じ云樣なるが今此に此文の義を得たり其は乞比給万比之任爾より受る結なるが故に定奉氏と云るにて常に稱辭竟奉と云ふ所とは異なり然るは神の處を指定て云々の所に鎭坐むと神託の有けるに依て其を承諾(ウツナヒ)奉て宮柱太敷立て神の宮居を造作て鎭め奉るを以て定奉氏とは云り春日祭詞の考に定の上に言足はず今京此方には如此く略に過て雅ならぬ事多かり」と云れつれど此差異を知られぬ說にて未し豐受宮儀式帳にも宮定齋仕奉始支と有り此も大御神の御悟しを得て豐受大神を齋仕奉る事を云り然るは風神祭詞に吾宮者朝日乃日向處夕日乃日隱處乃龍田乃立野爾小野爾吾宮波定奉氏吾前乎稱辭竟奉者云々是以皇神乃辭教悟奉處爾宮柱定奉氏此乃皇神能前爾稱辭竟奉云々と有を以て神の乞給ふに任(ヨリ)て宮造奉るを定奉と云ひ御諭無して宮造仕奉給ふを稱辭竟奉と申す例と見ゆ其は天社國社登爾稱辭竟奉など心を着て案むれば數多有り但風神は古の如く宮處を毛給ふに依て文中には定奉氏と有を首に龍田爾稱辭竟奉皇神乃前爾白久と佗例を用たるは未其神託の事を云ざるが故也然るに神の此所ぞと御諭坐す處は神の御心に欲(ホリ)し給ふ地なれば慥に定奉と實に云ふ可き理なるが顯明より定たる宮處は實に神の御心に叶はせ給ふや否や測奉る事の恐きに依て大らかに稱辭竟奉とは申す也此等を以ても上代人の甚く眞心にして幽眞を畏れ愼めりし事を見つ可きなり○奥都毛波邊都毛波爾至末天の爾に今木神詞に有に依て加へつ必無て叶はぬ所なるが故なり然れども予が情通(サカシラ)に補へるには非ず此詞の末と今木詞の末と惣て等しきが故を以てなり○御令坐を月令に載たるには令御坐と有る方宜し然る本も有なる可し善本を得て正す可し

延喜式祝詞講義九之卷

嘉永二年十月二十五日

淡路國　鈴木重胤　著
出羽國　秋野重業
同國　村井政儀　挍

○六月月次祭 十二月准之

四時祭式に云く月次祭六月十二月十一日と有て中祀に載られたり 祈年月次神嘗新嘗賀茂祭等爲中祀と有り 神祇令月次祭義解に於神祇官與祈年祭同祭如庶人宅神祭也と有る此を以見れば當時は庶人の宅に於ても物爲つるなりけり月次とは公事根源抄の書入に六月十二月必行る丶神事なる故に月次祭と云毎月の意に非ずと云る如くなるが下に引る賀茂翁説の如く月毎に奉らる丶幣を六月十二月二度に奉らる丶の故に月次とは云なりけり鈴屋大人說 大祓詞後釋附錄 に此祭に預り給ふ神は諸國合せて三百四座にして皆大祀の神等の官幣に預り給ふなり因て神名帳には此祭に預り給ふ神社には各々月次と記されたり其餘は預り給ふ事無し然るを考に此は祈年と等しく京畿諸國を合せて三千百三十二座の神等へ月毎に奉給ふ幣を六月と十二月の十一日に諸國の神主祝部を神祇官へ集て頒給ふ也其正月より六月迄の幣は六月に頒ち給はせるなりと云れたるは四時祭式の此祭條に右所祭神並同祈年と有るを且と思誤られたる者なり同祈年とは此祭に預り給ふ神等も祈年祭に幣を案上に奠(オク)三百四座の神と同じ神等なりと云ふ事なり其所の上文を見て知べし」と云れたるは然る言なり 其文は下に引たれば見合す可きなり但考に云れたる此は祈年と同じく京畿諸國を合せて三千百三十二座云々の事は誤なれども其餘は取べき文なるに依て今は本書を以て補ひ引つ 偖此祭の起りを公事根源抄に弘仁年中に此事始る」と有は心得ぬ事なり若くは大寶の令の御撰などの時より恒祀とは成つらむかとも云ふ可けれども續紀に大寶二年七月詔在山背國乙訓郡火雷神毎旱祈雨頻有徵驗宜入大幣及月次幣例と見えたる文意を熟々味ふるに此頃珍らしからぬ樣なれば甚も久しき大古より有來つる事にて祈年月次神嘗新嘗共に人世に出來し神事とは思えず然れば公事根源抄の説は弘仁頃の記文を見給て且と其始よと宣へる誤なり本朝月令に弘仁式云凡六月十二月十一日奉班幣帛大臣以下集神祇

官ニ如ニ祈年儀一其應レ供ニ神今食及大忌一小齋中納言已上一人參議一人散齋之日外記錄ニ名附ニ神祇官一令レト但次侍從五位已上中務輔率ニ其身一向ニ神祇官一ト定訖即並中務奏其諸司六位已下女孺等致齋之日本司各錄ニ歷名一送ニ宮内省一（外記史等各召レ省付）即神祇官ト（事見宮内式）訖各歸レ舍沐浴晡後入レ内供奉其事と見えたり此文を見誤て弘仁中に始とは記し給へるにぞ有む（弘仁式の全（ミナ）は今傳はられば知べからねとも若くは此文に依て然宣へるなるらむ）然るは此詞を見るに全く祈年祭詞と同文なる事人の能く知る所なるが其中に御年神詞の一つ省りたる耳にて摠ては同しきか（御年神詞の省りたるは祈年は稻穀の御祈を主と爲させ給ふが爲なるを此は唯大御世の事の御祈を以て主として祀らせ給ふが故也心を着べし然るは年中行事歌合に月次祭を夏の暮年の終に月毎の報賽の神の幣帛と詠るにて著明かり又齋宮式六月十二月月次祭條に右供神調度准ニ祈年祭一但除レ鍬と有も月次祭の稻穀を祈るを以て主と爲さるが故也）高天原爾神留坐皇親神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉皇神等前爾白久今年六月月次幣帛（十二月者云ニ今年十二月月次幣帛一）云々皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登久宣と有れば皇御孫命の奉らせ給ふ幣帛は皇祖天神の詔命に依せ給ふ由也此にて此文の首尾の整へる事云も更なれど次詞又伊勢大神宮詞などの結句に故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登久宣と有は右に高天原爾云々と有る結と爲る文なるが伊勢大神宮詞の首に辭別氐云々と有を以て其統一なる事所知れたり借其說は祈年祭詞の下に條々云るが如く天社國社と稱辭竟奉る事は皇親神漏伎神漏彌命の詔命に因准（ヨラ）せ給ひ祈年（若くは月次）祭共に今如此しも行はせ給ふ事も亦其詔命に因准て物爲させ給との義なれば其時は何時も有む高天原より天降り來坐て初國所知食し丶高千穗の大朝廷に始れる事云まくも更也萬葉十三丁三に葦原乃水穗之國丹手向爲跡天降座兼と有も天社國社の皇神等に手向爲給はむとして天降坐しと云にて此の趣なるを思ひ合す可し（此は故大人等の說には異なれど予が眼目と爲る事共なれば能く心を留て味ふ可し）若て月次の御政畢る其夜に入て神今食の御祭有て六月十二月共に行るゝ事なるが世人此を別神事の如く思ふめれど然に非ず諸社の新嘗の幣帛を行れて其夜天皇の新嘗を供（タテマツ）らせ給ふが如く神今食は月次祭の最重き者也公事根源抄（神今食條）に此神今食の義は年に二度なり伊勢天照大神を勸請申されて天子御身自神饌を供（タテマツラ）せさせ給ふにやと有に心引れて考るに伊勢大神宮の六月十二月月次祭は九月神嘗祭と此三を以て年中三節祭と云て無上く甚しき御祭なるが爲に勅使發遣の日を以て

天皇御身自神饌を供らせ給ひて御神事を行はせ給ふ者也然れば神今食は斯る重き神事ながら倘月次祭に隷るが故に四時祭式に月次祭云々祭畢即中臣官一人率ニ宮主及卜部等一向ニ宮内省一卜下定供ニ奉神今食一之小齋人上供ニ神今食一料云々と有て儀式等の事に於ては別異なる事云も更なれど其摠てを云ふ時は一にして二ならざる者なり（但月次祭は神祇官にて行はしめ給ひ神今食は中和院にて行はせ給ふなり然れば月次祭は幣物を班るゝに就ての神事なるが故に官にて行ふ所倘諸社の神事なるが神今食は其月次祭に就て内々にて行はせ給ふ事なれば大内の神事なる者なり是を以見れば唯内外の異に依て別事の如く見ゆる者なり）然れば臨時祭式に凡月次等祭前後散齋之日僧尼及重服奪レ情從レ公之輩不レ得レ參ニ入内裏一雖ニ輕服人一致齋幷散祭之日不レ得ニ參入一と有て神今食を別條に立られざるは其本一なる故なり建曆御記（神事次第條）に二季月次神今食自ニ一日一至ニ十一日一也十二日朝解齋仍自ニ一日一僧尼重輕服等人不參云々と有て二に擧たれど事は全く一に記せり公事根源抄（月次祭條）に是は先神今食以前云々と有るも同事の前後なる文法なり（若懸離れて別事ならむには先神今食以前とは記さるまじき者なりかし但公事根源抄の此事は宜けれど神今食條に靈龜二年六月より始ると云るは正文無き事なり實には甚も久しき古昔より有來りけむ事云まくも更なり）今食は鈴屋大人說（玉勝間韓藍卷）に字音に耳唱來て正しく如何に唱ふ可きにか昔より說も無く知れる人無し書紀の私記に古者謂レ木爲レ介故今云ニ神今食一者古謂ニ神今木（カムイマケ）一矣と有に本就て迦牟伊麻氣と唱ふ可きなり其迦牟は神嘗祭などの神に同じく今（イマ）は新の義なり凡て新に物したるを今某と云事多し古漢國より新に參來つる人共を今來の漢人（アヤ）と云て御紀に新漢（イマキノアヤ）と見え大かたも新に參れる人を今參と云類なり偖今食と云は世俗言に稻を粟（モミ）にて貯置たるを新に磨て米にしたるを今磨（スリ）と云ふ其意にて新磨の御食と云ふ事なる可し古に今毛人と云人名の見えたるも今食と云ふ事の有しに依れるなる可し若て此神今食は毎年の六月と十二月との十一日にて月次祭の同日の夜に行るゝ事なり先其月次祭は三百四座の神等に幣帛を奉給ふ其を月次と號る由は月毎に奉給ふ可きを合せて二度に奉給ふにて六月には其年の七月より十二月迄のを奉り十二月には來年の正月より六月迄のを奉給ふなり若て其同夜に行るゝ神今食も其同趣にて天皇の月毎に新磨の御食を聞食す由にて其度毎に行ひ給ふ可きを合せて二度に行ひ給ふ由にて其は新穀には非れども新磨を聞食し始るをさへに重く嚴に齋給ふにて先神に奉給ひて然（サ）て天皇の聞食す事專新嘗大嘗の心ばへに同じ然

る故に此祭の儀式は何事も大凡新嘗大嘗の如くなるなり」と云れたるは千古の發明なる者なり隨ふ可し今思ふに神名式に武藏國賀美郡今城青八坂稻實神社今木青坂稻實荒御魂神社今城青坂稻實池上神社など有る今城今木共に齋食なる事稻實云々と云續きなるに思合す可き者なり是將神今食の一證に備ふ可くや○月次祭儀式は祈年祭と全同じくして異例無ければ首卷第一詞條に擧たるを見る可し今江次第を以て此を校す可し其書六月祭條に云く

月次祭廢務於ニ神祇官ニ行レ之○建曆御記に云く廢朝者諸司政ハ如レ恒天子一人不レ臨ニ朝政ニ廢務者諸司不レ政一日或三日と有前ニ散祭ニ一日少納言付ニ內侍所ニ令レ奏齋文○抄に云く齋文ハ式云聽供神今食及新嘗小齋中納言以上一人參議一人散齋之日外記錄レ名付ニ神祇官ニ令トと有り然れば齋文は小齋書(ヲミブミ)と云ふ事なり大嘗會式に供ニ奉御湯ニ三度と有る小注に一度大齋湯云々二度小齋湯云々と有り此事を大忌は荒忌なり小忌は眞忌なる由雲客諸役抄に見えたり小忌は大忌よりは物忌の深き由なる者なり神祇官率ニ御巫ニ著ニ西廳ニ上卿著ニ神祇官北門座ニ大臣參者著ニ門內西掖ニ東面云々參議以上者著ニ門內東掖ニ西面王大夫座在レ外外記在ニ外西掖ニ史生外記北或史生等在レ前群官著ニ南門外西掖幄ニ上卿著ニ北門東掖ニ先立ニ座南ニ一揖着レ座又揖西面外記申ニ供神物辨備畢由於上卿ニ西宮記史申云々然而北山抄幷近代例如レ此○儀式に云く外記申ニ庶事辨畢之狀ニ上卿着北廳座兼置ニ式宮ニ大臣著入レ自ニ北面東戶ニ着東第三間北壁下座南面參議以上入ニ巽角ニ著ニ東第一間ニ上卿召ニ召使ニ二聲召使稱唯參立二人立ニ艮壁下壇下ニ同音稱唯一人給ニ東屋幷倉後立ニ庭中ニ上宣式部省刀禰奉入禮止宣二遍○儀式に云く二と有り今此に據て補ふ召使稱唯出召レ之式部唯式部省率ニ群官ニ入レ自ニ南門ニ著ニ南屋座ニ東上北面五位前六位後御巫坐ニ西廳前座ニ左右馬寮各引ニ馬二匹ニ立ニ刀禰殿東庭ニ神部祝部等入立ニ西廳南庭ニ神祇官人降

座次上卿以下降ニ著廳前庭ニ兩儀由上敷レ薦南屏幷以下亦同著ニ砌下座ニ中臣進宣ニ祝詞ニ十段度別祝唯其詞在レ式○今按るに二月祈年祭は第一天社國社詞第二御年神詞第三大御巫祭神神詞第四座摩神詞第五御門神詞第六生島神詞第七伊勢大神宮詞第八御縣神詞第九山口神詞第十水分神詞等併せて十段なり六月十二月月次祭には御年神は列り給はざれば合せて九段なり然れば其次なる辭別と共に數へて十段なるにや因に云江次第には祈年祭月次祭を分ち記されたれば紛ふ方も無きを儀式には一に記されたれば能く心を着て見る可きなり中臣退上卿以下拍手兩段不レ唯各復本座祝還レ座御巫廻ニ見幣物ニ三人出レ自ニ西屋ニ始レ自ニ伊勢ニ三百餘所○西宮記に所を送に作れり史二人持レ簡召ニ諸社祝ニ次第班レ幣兩儀立ニ砌上ニ遠社幣物納ニ官庫ニ朝集使入レ京日可レ付ニ送之ニ訖史申ニ其由ニ上卿以下退出近代上卿立ニ伊勢幣ニ後令ニ召使ニ觸ニ辨諸社隨可レ頒由ニ退出○中右記に云く大治二年十二月十一日予以ニ召使ニ仰レ辨云春日幷諸社幣隨可ニ分給ニ也注(コガキ)に作日同藤氏上卿所レ始也と有る此を云なり自ニ左近陣ニ發ニ遣伊勢使ニ○儀式に云く大神宮幣帛者差レ使進レ之と有りと見えたり公事根源抄にも月次祭六月十一日是は先神今食以前上卿神祇官の北門の內東の掖に着く神物の具否を尋ぬ次に廳に就て事を行ふ神祇官掌祝詞を申す祝師祝詞座に着く本官の人皆木綿を着たり上卿檀下の薦座に置て御巫幣物を見る儀有り云々と有り本官は神祇官を云なり○幣物の事は四時祭式に月次祭奠ニ幣案上ニ神三百四座並大社一百九十八所座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩倭文纒刀形絁纒刀形布纒刀形各一口四座置一束八座置一束弓一張靫一口楯一枚槍鋒一竿鹿角一隻鍬一口庸布一丈四尺酒四升

鰒堅魚各五兩腊二升海藻滑海藻雜海藻各六兩堅鹽一升酒坩一口褁葉薦五尺祝詞座料短疊一枚前一百六座座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩四座置一束八座置一束楯一枚槍桙一口褁葉薦五尺右所レ祭之神並同二祈年一其大神宮度會宮高御魂神大宮女神各加二馬一疋一（但大神宮度會宮各加二籠頭（オモツラ）料庸布一段一）前祭五日充二忌部九人木工一人一令レ造二供神調度一（其監造幷潔衣食料各准二祈年一）祭畢即中臣官一人率二宮主及卜部等一向二宮內省一卜定供二奉神今食一之小齋人上と有り（如此く記したる引續きに供二神今食一料云々と見えたり然れば儀式に月次祭六月卯一尅十二月辰一尅と見え神今食に就て主上行幸は同夜戌尅なるが其豫め當日平旦主殿寮供二浴湯一辰刻輔若丞一人執二小齋一次侍從以上名簿付二內侍一奏レ之月次祭畢神祇副祐各一人率二宮主及長上卜部一向二宮內省一云々と儀式に記されたる所右の式文に相同じきを以見れば六月十二月十一日は終日終夜の神事なる事云も更なるが其中に諸社頒幣の就て神祇官にて行るゝ所を月次祭と云ひ其月次祭に就て天皇御自行はせ給ふ神事を神今食と號け別たるが上に云る如く共に一の神事の序列にて異なる所無き者なり）

集侍神主祝部等諸聞食登宣高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉皇神等前爾白久今年乃六月月次幣帛（十二月者云二今年十二月月次幣帛一）明妙照妙和妙荒妙爾備奉氏朝日乃豐榮登爾皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

考の本文に月次幣帛波と有は私に加られし者なる可し波よりは乎の方勝れゝば今此を採らず（倭國六御縣山口神詞に皇御孫命能宇豆乃幣帛乎明妙照妙云々と有る乎に依れり）○明妙照妙和妙荒妙爾備奉氏の事爾字は本朝月令に從て補たるなり但此明妙云々の事祈年詞には見えず態と此に令申給ふは月次祭は月次の幣帛を進らるゝが主たる故なり詞に月次幣帛と表し給へるを思ふ可し（然れば下なる各詞に其御所の言有も月次幣帛を進せらるゝ就て祈申させ給ふなり此祈年の趣意とは異なる所なり但此は大嘗祭詞より取れるなり然るは上に考記せる如く神今食は此月次に屬る者なるが其神今食は即大嘗月次に同じき者なれば此を以ても予が考の強さる事明亮なり）

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久神魂高御魂生魂足魂玉留魂大宮賣御膳都神辭代主登御名者白氏辭竟奉者皇御孫命乃御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閇奉故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣

神御魂の御字祈年祭詞には無を此に有は甚美し正しく迦牟美武須毘と訓奉る可き證なり（但此書中に祈年祭詞には神魂高御魂と見え國造神壽詞には高天能神王高御魂神魂命と有て共に御字無ければ此に有は正しきながら本より無りつるにやとも思ゆれと然に非ず此に校て祈年祭詞なるも迦牟美武須毘と訓奉る可き徵と爲可し但高御魂神魂命など有る時及ひ神產巢日御祖命神魂意保刀自神など其下に續く語の有るは皆迦微武須毘と云例なり但本朝月令に載るには神魂と有て御字無し然れども今は諸本の多きに從へり）○大宮賣祈年祭詞には乃ノ字有り（其唱同じければ無ても有る可し）○御膳都神祈

年祭詞には大御膳都神と有り然れど此に大字を脱せるには非ず（大を冠もし又省ても申す事常なり）

座摩乃御巫辭竟奉皇神等乃前爾白久生井榮井津長井阿須波波比伎登御名者白氐辭竟奉者皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立高天原爾千木高知氐皇御孫命瑞乃御舍仕奉氐天御蔭日御蔭登隱坐氐四方國乎安國登平久知食須故皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

御巫の下に祈年祭詞には乃ノ字有り○波比伎の波字祈年祭詞にも此詞にも婆と作るは誤なり今は本朝月令の本に從て改め又祈年なるをも改つ古事記に波比岐と有を證と爲可きなり○太知立本朝月令には太知と有り然云ふ例も無に非ねども此は本より太知立とぞ有つらむ故從はず○瑞乃御舍仕奉氐祈年祭詞には御舍乎と有れば此も脱たるらむと思ふに諸本共に無れば本より無りつるなり（但乎ノ字有る心にて訓へし爾と訓まむは中々なる非事なり祈年第四第九詞又大祓詞の下に云り）○天御蔭日御蔭を本朝月令には天之御蔭日之御蔭と作り

御門能御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白氐辭竟奉者四方能御門爾湯津磐村能如久塞坐氐朝者御門開奉夕者御門閉奉氐疎留物乃自下往者下乎守自上往者上乎守夜乃守日乃守爾守奉故皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

御巫能辭竟奉を祈年祭詞に稱辭竟奉と有る稱字は衍なり然るに神に對ひて其御舍の事又は幣物の事を申す時は必稱辭竟奉と云ひ唯に其神の御功徳を顯し申す時は辭竟奉と申す例にて差異有る事なり（此事卷一祈三詞の下に云れば能く心を留む可き者なり）偖四時祭式に四面御門祭（十二月准之）五色帛各四丈絁四丈絲八絇木綿各八斤綿八屯紙二百張倭文四丈布八端錢一百文鍬十六口黄蘗五十枚糯米八斗大豆小豆各四斗米八斗酒五斗糟八斗稻十六束鹽十六顆鮭十六隻鰒堅魚腊海藻各四斤席薦各四枚食薦十六枚明櫃折櫃各八合坏八十口籠四脚匏五柄槲二俵御川水祭（中宮亦同　十二月准此）五色帛各二丈五尺五色絁二丈五尺綿五屯倭文二尺絲五絇木綿麻各五斤紙一百張布五端錢八十文鍬五口酒二斗米糟各五斗大豆小豆各一斗糯米三斗稻五束鮭五隻鰒堅魚腊海藻各二斤鹽五顆明櫃二合

坏五十口食薦五枚席薦各二枚折櫃五合蕢籠一脚槲一俵匏五雨右四面祭御門巫御川水祭座摩巫各行事と見えたるは此御門神は四面御門に齋く所座摩神は御川水に在す所也と雖も常には神祇官西院に齋れ御在して祈年月次新嘗等は其所にして祭らるゝ所なるを六月十二月兩度然る可き日に其守護り坐す四面御門に就き御川水に就て祭らるゝ其幣物是なり（但祭式には六月祭と云ふ事を霹靂神祭の下御贖祭の上に記されたるに依て誰しも五月祭と心得て有る事なれども然らず惣ての神事四月六月に在て五月に行はれたる例を聞かず且十二月准之と有るは六月祭に對へるに耳有る事なり但日は其月の内にて何日と云ふ定りも無きと見えたり）此を齋部氏の仕奉る御門祭の料ならむと思ふは非ず其は祝詞式の首に凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞と見えたるに少しも抱る狀ならぬは別なるが故なり思ひ混ふ可からず齋部の行ふ御門祭は大殿祭に攝行はるゝなる事下に云るが如し（御門祭詞の下に委しく云れば此には漏しつ）因に云ふ御川水神は卷二（第四段座摩神詞の條）に云る如く神祇官西院坐神廿三座の中なる座摩巫祭神五座（並大月次新嘗）と有る此神等を云なり然るは右の幣物の員數を以て校るに御門神は八柱なるが故に凡て八數なり御門神の例を刻みて見るに座摩巫の行事に御川水神の料は凡て五數なるは其祭神即座摩神にて五柱なるが故なり（御門神の五色帛各四丈絁四丈と爲るが如きは一前に就て五尺宛合て八柱の積なり御川水神の五色帛各二丈五尺絁二丈五尺と爲るが如きも各五尺宛にて五柱の積なり餘は此に准へて知る可きなり但此等は然しも用無き事の如くなれども座摩神と申すは何れの神と云ふ事を徵さずは有べからず御川水神と申すは常に何れに坐て齋かれさせ給ふと云ふ事を說明さずは得有まじきが爲なり）此を以て御門神御川水神等の常は御門御溝の所に在て守護坐し神祇官にて祭らせ給ふ所は即其御靈を齋かせ給ふ所なるを知べし

生島乃御巫能辭竟奉皇神等乃前爾白久生國足國登御名者白氐辭竟奉者皇神乃敷坐島乃八十島者谷蟆能狹度極鹽沫乃留限利狹國者廣久嶮國者平久島乃八十島墮事無久皇神等寄志奉故皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣

嶮字新年祭詞には嶮に作れり墮ノ字祈年祭詞には隧に作れり

辭別伊勢爾坐天照大御神乃大前爾白久皇神乃見霽志坐四方國者天乃壁立極國乃退立限青雲能靄極白雲乃向伏限青海原者棹枚不干舟艫乃至留極大海原爾舟滿都々氣氐自陸往道者荷緒結堅氐磐根木根履佐久彌氐馬爪至留限長道無間久立都々氣氐狹國者廣久嶮國者平久遠國者八十綱打掛引寄如事

皇大御神寄志奉波荷前者皇大御神乃前爾如横山打積置氐殘波平聞看又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齊比奉茂御世爾幸閇奉故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登鵜事物頸根衝拔氐皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

白雲乃向伏限祈年祭詞には墜坐向伏限と有り然れども此なるも例有り（萬葉に天雲の向伏國ともあり白雲の向伏限ともあり）○大海原爾祈年祭詞には原ノ字無し（彼には本より無りつらめども有る方勝れり）○下長御世の乎ノ字今本には脱せるを例に依て補つ（其は第三詞第七詞第十七詞を始て其餘ノ例も悉然なればなり）

御縣爾坐皇神等乃前爾白久高市葛木十市志貴山邊曾布登御名者白氐此六御縣爾生出甘菜辛菜乎持參來氐皇御孫命乃長御膳乃遠御膳登聞食故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

上なる新年祭詞に少異る所無し

山能口坐皇神等能前爾白久飛鳥石寸忍坂長谷畝火耳無登御名者白氐遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐皇御孫命能瑞能御舍仕奉氐天御蔭日御蔭登隱坐氐四方國乎安國登平久知食我故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登宣

山能口の能ノ字祈年祭詞には無し此に例して其なるも能字を添て訓可きなり

水分坐皇神等乃前爾白久吉野宇陀都祁葛木登御名者白氐辭竟奉者皇神等依志奉奥都御年乎八束穗乃伊加志穗爾依志奉者皇神等爾初穗者穎母汁母甁閇高知甁腹滿雙氐稱辭竟奉氐遺波乎皇御孫命乃朝御食夕御食乃加牟加比爾長御食乃遠御食登赤丹穗爾聞食故皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登諸聞食止宣

稱辭竟奉久登の登字は乎を寫誤れる者なる可し（然れども祈年祭なるも登と有を二ながら相誤る可くも非れば改め難かり）

辭別忌部乃弱肩爾太襁取掛氐持由摩波利仕奉留幣帛乎神主祝部等受賜氐事不過捧持奉登宣

此も祈年祭なるに異無なり因に云ふ考に此なる座摩よりして御門生島伊勢御縣山口水分辭別迄は皆祈年と全同文なり故に略けり」とて記されざるは遺憾きことなり其は同文ならむからに彼は祈年此は月次と

其用る所同じからざれは必載さる可く且互に異同をも挍ふ可きことなり彼此比挍る中には又善きことをも見出る者なり能略に思ふこと勿れ（但此は我が子弟の爲に誡め云ふことなり）

○大殿祭

此祭の起元はしも古語拾遺（天石窟段）に天照大神赫怒入二于天石窟一閇二磐戸一而幽居云々令下手置帆負彦挟智二神以天御量伐二大峡小峡之材一而造二瑞殿一兼作中御笠及矛盾上云々爰令下天手力雄神引二啓其扉一遷中坐新殿上則天兒屋命太玉命以二日御綱一廻中懸其殿上令三大宮賣神侍二於御前一豐磐間戸命櫛磐間戸命二神守中衞殿門上と有る此時に始れることと同書に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀と有を以て徴と爲べし（但此は平田翁の古史徴五十七段の說なるが今此に據れり）其は同書（神武天皇段）に建二都橿原一經二營帝宅一仍令下天富命（太玉命之孫）率二手置帆負彦狭知二神之孫一以二齋斧齋鉏一始採山材構中立正殿上云々其物既備天富命率二諸齋部一捧二持天璽鏡劒一奉レ安二正殿一並懸二瓊玉一陳二其幣物一殿祭祝詞（其祝詞文在二於別卷一）次祭二宮門一（其祝詞亦在二於別卷一）と見えたるに合せて天太玉命の供奉給ひしと云ふことの諾る丶なり（舊事紀は此と同じ文の有るは古語拾遺より取れるなり）但此大殿祭の由來ることはしも少緣の故には非ず乞其天機を傳ふ可し天地の初の時皇祖天神の詔命を以て伊邪那岐伊邪那美命二柱神に此漂仕る國を修り理め堅め成せと宣へり此則古今を貫通さ宇宙を綱羅て大道の起る所德功の立つ所の者にして神祇造化の全能の發見る丶所人民資生の成功の徴用有る所の基本此なるが此を該羅ては食物なり衣服なり住宅なり此三の者にして能く成し能く保つ所以の者は修り理め堅め成を以てなり此故に神祇の上に在す此を安く爲るの外無く人民の下に在る此を保つの外有る事無し此神と人と相授け相受る所の正經なるが故に古語に神隨とは云り此を行ふを以て幸と云ひ成すを以て德とは云り（但此は殊に奇異なる子細の有て予が考得る所なるが容易くは盡し難し別は道論と云ふを著して古始太元考に隷て萬世に幸ふ可き者なり然れど其大旨此に違ふ所無し）斯て人は經營て食衣宅の資は得るを神は然らず土木の功を積すして屋宇成り耕田の勞苦を爲ずして食物織絍の艱幸を爲ずして衣服成りて人は難きに處て易きに赴く者なるに相反て意の如く成ずと云ふ者無きは神の不測なる所なり所以に二柱神游能碁呂島に天降坐て八尋殿を化堅給へるは土木の功を盡すに非ず又黃泉戸喫の事有り此は不淨ぬ者にて變なり此を淨からじとして忌避給ふを以見れば淸き食を以て常と爲給へる

なり此時未耕して食ふ者に非す又御髻御櫛御衣御褌等の御裝束有り是等は織て服製(キックリ)て着る所に非るを以見れば食衣宅は更なり人事を勞するが如に非す自然に生て其用に充ぬ所無き者なり凡人の上よりは然は有まじと怪るゝ事なるが其は何も至も無く凡人の心の度量(タケ)に比較ての論なれば取にも足ざる事ながら今少し此を悟さむ其は此二柱神の如きは天地造物の神なり神代は除て今日の上にても凡人の修理固成て成る所の者と雖も皆神造なるが人の功に任して其形と爲し物と成し給ふなれは止る所神の御所爲の外無き物なりながら神明の如何にしてか相造り相成し給ふとも知られぬが如し我物を神の爲給ふをさへ伺奉り得ぬ身にして此を怪しみ奉るを豈允當れりと云むや

此は天地神祇の靈妙不測にして人とは實に殊なる所以を知ることなれば心を深めて伺奉る可きなど有ることなり此は人世と爲ても有ることにて續後紀九に伊豆國言賀茂郡有ニ造作島一名ニ上津島一此島坐阿波神是三島大社之本后也又坐物忌奈乃命即前社御子神也新作ニ宮四院石室二間屋二間闇室十三基云々其島東北角有ニ新造神院一其中有レ壟高五百許丈基周八百許丈其形如ニ伏鉢一東方片岸有ニ階四重一靑黄赤白黒沙次第敷レ之其上有ニ一閣室一高四許丈次南海邊有ニ一石室一各長十許丈廣四許丈高三許丈其裏五色稜石屏風立レ之嚴俊レ波山川飛レ雲其形微妙難レ名其前懸ニ朱欄歛障一即有ニ美麗瀆一以ニ五色沙一成修次南傍有ニ二磯一如レ立ニ屏風一其色三分之二悉金色眩曜之狀不レ可ニ敢記一亦東南角有ニ新造院一周垣二重以レ壟築固各高二許丈廣一許丈南面有ニ二門一其中央有ニ一壟一周六百許丈高五百許丈其南片岸有ニ十二閣室八基一南面四基西面四基周各二十許丈高十二許丈其上階東有ニ屋一基一並瓦形皆造之一長十許丈廣四許丈高六許丈其壁以ニ白石一立レ周則南面有ニ一戸一其西方有ニ一屋以ニ黒瓦一皆作之一其壁塗ニ赤土一東面有ニ一戸一廊東礫砂皆悉金色又西北角有ニ新作院一周垣未ニ究作一其中有ニ二壟一其周各八百許丈高六百許丈其體如ニ瓮伏一南片岸有レ階二重以ニ白沙一敷之其頂平麗也從レ北角下至ニ未申角ニ長十二許里廣五許里皆悉白沙瀆一從ニ戌亥角一至ニ子丑寅角一長八許里廣五許里同號ニ赤瀆一此ニ院元是大海又山岑有ニ一院一門一其頂有レ如ニ人坐一形一石高十許丈右手把レ劍左手持レ梓其後有ニ侍者一跪膽ニ貴主一其邊嶮岨不レ可ニ通達一自余雜物繁備未レ止不レ能ニ具注ニ云々と見えたるを以て神代のことを想像る可し然れば今とは凡人の眼を見ること能はざるが故に顯界の居宇のみなる如くなれども山にも野にも海にも川にも然る神界の幾許か多在るらむ今も稀には其神界を見認るも有り

借二柱神の大地を鎔造り給ふは愛しき靑人草を蕃息し住しめ給はむとてなり所以に萬物の物實と有る風神火神金神水神土神を生給ひて悉く天下を經營給ひ其最終に天神大御神須佐之男命二柱を生奉り給ひて天照大御神には高天原を知し坐しめ奉給ひ須佐之男命には此大地を事依し給ひけるに根國底國に就むと宣給ひて御父大神の事依し給へる國を修り理め固め成し給はざりしかば神隨なる幸を失給ひて其德功立ざりけるが故に根國底國の凶惡き神等に相交こられ給ひし故に靑山は枯山なす泣枯し河海は悉く泣乾し給ふ紛ひに此詞に所謂る磐根木立草の片草に至る迄に言語ひ晝は狹蠅なす水湧き夜は火瓮の如く光神有て人草を損ひ給ひけり

二柱神選合ひ爲給ひて國作竟坐ざるに伊邪那美命は夜見國に避給ひしかば伊邪那岐命の追往坐て其國の穢に依て種々の禍ことに遇給ひ其に依て御身滌のことと出來て天照大御神須佐之男命二柱の貴御子を得給ひ天照大御神に天を須佐之男命に地なこと依給ひて伊邪那岐命は天に復命して日少宮に留り給ふ其中に

在る御事業等の皆自然なるが如くなれども皆幽より皇祖天神の然らしめ給ふ所にして奇異なる理有り譬は陰陽は同氣ならず相反せる者なり相反して萬物成り甘苦は同味ならず相反せる者なり相均にして食物成りなど爲るが如く物皆相剋て相生すの道理なる者なり然れば須佐之男命の此國を修り理め固め成さずして其幸を失ひ給ひ其德功の立ざりしは全く本賦の位置を換給ふに起りたるが故なり海宮段なる山幸彦海幸彦の二神互に幸を換て其幸を失るが如し若て須佐之男命根國底國に到坐むと爲るに其事を天照大御神に聞え上奉むと爲て高天原に上り坐るが此時彼謂ゆる瑞珠盟約の事有て二柱の御誓に依て男神女神を生坐り五男三女神と申す是なり此に依て大地の主宰と爲て天下を經綸す天津日嗣の定る可き基本しも根ざしてければ其國に有ゆる愛しき青人草を治めさせ給ふ神慮の成れりけるが須佐之男神は根國底國に到坐む御心坐れば然は思ほし召ざりし程なりけらし葦原中國に保食神（此詞所謂豐宇氣姬命）有り汝往て其有狀見行して復命せと詔ひ託て天降し給ひけるに鼻口又尻より種々の味物を出して御饗奉給ひしかば穢物貢ると思ほして其保食神の化れる身を打殺して天に復命し給へり（記紀共に打殺し給へるは正身の如く記して有れと共に誤なり此に依て此には其化身とは云なり然るは古事記裏書なる攝津風土記に稻倉山昔比與宇可乃賣神常居二稻椋山一而爲二膳厨之處一後有レ事不レ可レ得レ已遂還二於丹波國比遲乃眞奈韋一と有を以見るに正身の身死り坐るならず其化身なる者なり）於是天照大御神汝は惡しき神なり相見まく欲爲ずと詔給ひて須佐之男神を御許退け給ひ天熊人を遣して其消息を令見給ひけるに其保食神の身より生れる物有り蠶と桑と成り稻種粟稗麥大豆小豆成り又牛馬等も成れりしかば此を取持て悉くに獻れる時に天照大御神甚く喜ばして詔給はく是物等は愛しき青人草の食て活く可き者なりと宣ひて陸田種子水田種子を定給ひ天香山には桑を殖て養蠶ひ紝織の業も此時に始れりけり此に依て衣食の事共始て人工に爲るに至る又屋宇を造る材木は是より先よりや有初つらむ神代紀に伊弉諾尊云々構二幽宮於淡路之洲一寂然長隱者矣と有れども此は例の土木の功を以て建る所に非る事幽宮と有るにて著明なり然れば天照大御神の新嘗聞食し新宮ぞ人工に任して屋宇を建る始なりける事此詞に屋船久々遲命と御名を稱申にて明なり（但此は平田翁の古史徵十三段の說に深く感くる所有て云なり但其說は相同じからず合せ見て其差異を察む可し）借豐宇氣姬命の御身より成れる所の物共を天上に召上給ひける時に其御靈をも正身（ウツシミ）ながら迎取給ひて天宮にぞ齋祭らせ給へりける然るは此詞に依て知られ且は皇御孫命の御天降の時に其御靈實を賜へるにて著明し（其は第三詞第七詞廣瀨大忌祭詞等の下に云りき）於是須佐之男命我心明きが故に我生りし子に男子を得たり此に因て申さば自勝にけりと

云て畔放溝埋樋放重蒔串刺等の禍事有て其御田を毀りて食物を害げ給ひ天照大御神の新嘗聞召す新宮に屎放り又忌服屋に坐まして神御衣を令織給ふに服屋の棟を穿て天斑馬を逆剝に剝て墜し入給ふ如きは衣服屋宇を害げ給ふなり何を以て須佐之男命の如此く荒び給ふと云ふに保食神穢はしき物を奉れるに依て打罰めたるに大御神の尤とも宣はさずして却て汝は惡神なり相見まく欲せずと云て此を遠退給ひ其神の身より化出し物を以て甚く喜はせ給ひ即其御靈をも天に迎取給ひて殊に御親しく齋かせ給ひ愛しき青人草の爲なりと宣ひて食衣宅の設を專と功しみ物爲させ給ふ事を心行ず思ほすが故なり此に因て須佐之男命は禍津日神の御心に愈交こらせ給へり 但母國根國に罷らむと泣哭給へる時に已に其氣ざし在と雖も天上に上給ひては天照大御神の御稜威に依て我心明しと申す迄に清らけく成給ひ根國に罷らせ給ふことなどは全に打忘させ給ふが如くなりしを葦原中國に下らせ給ひて保食神の云々の事に且と惡しく御心止り給ふが故に汝は惡き神なりと罸られ給ふ計りの內事を犯し給へりしが其後も直には惡業は得慕らせ給はず大御神の新嘗聞食す新宮の下に屎放り散して不平め奉りしより其內事の頻る事とは成たるなり深く思を潜て考徵し奉る可きことなり因に云ふ此亦由て來る所有る事なり然るは平田翁說の如く天照大御神は伊邪那岐命に須佐之男神は伊邪那美命に从(ツ)き御在せるが伊邪那美命は火神を生坐に依て石隱給ひ其火を鎭むる爲に御屎放り御尿放り給へりしが伊邪那岐命は其石隱の後を慕はして黃泉に幸給ひ其國の穢を觸坐しに依て筑紫日向にて禊祓給ひし反對にて天照大御神の日御國は火產靈神の火の依附て光華明彩きことゝ成たるが大御神ゝ高天原を所知すに依て其御德は悉く大御神の御光と成れること云も更なるが是に奇異なること有り其は須佐之男命新宮の下に屎放り給ふと有を事實に考るに屎には其始屎放る者なれば必此二のことと有しならむを片方の重きを記して輕きを省けるなり倩々事に依て不平(ヤクサ)み給ふは彼鎭火の料に御屎放り御尿放り給へる伊邪那美命の御報なり此に因て大御神の石屋隱らせ給ふは伊邪那岐命に屬坐が故に又伊邪那美命の石隱の御報なり又須佐之男命の千座置戸の祓具を責られ給ひて我御心淸々しと詔給ふことゝ成れるは顯には須佐之男命幽には伊邪那美命の御禊なる者なり大凡此等のこと有て始て伊邪那岐命伊邪那美命二柱神日少宮と黃泉國とに分れ坐御在して此國を保たせ給ふこと實に大成ひ天照大御神と須佐之男神と天上に月國に相放らせ玉ひながら二大神の御子孫と坐す天津日嗣の天地と共に極無く傳り坐むことと定り須佐之男命の御子大國主命に二大神の御誓に依て成坐る宗像女神の夫妻と爲給ひて八百萬神の幽事を知食す御事の終古に易るましく定りて此宇宙の大道は立る者なり委しくは古始太元考に記せるを除りに奇異しく妙に思ゆる任に小か驚し置者なり 此時天照大御神の愛しき青人草の爲に豐宇氣姬命の御恩賴を蒙らせ給はむと成し給ふ事も思ほすが如は整らずして足ぬ事に物爲させ給ふ節しも種々の穢共に依て大御身不平み給へりしかば天石窟に入て刺隱り御在す事と成れり故に常は大御神の御稜威を畏みて根國底國に隱り栖ひて踈ひ荒ひたりし神等の所を得て一速ぶる事其多かりければ 禍事を成し行ふ神の甚く大御神を畏み奉ることは人は更にも云ず禽獸に至る迄も御光の照させ玉ふ白晝には禍事を成し行ひ難きが故に多くは人の眼の及ばざる闇昧なる所か或は青山に御光の隱るゝを以て成すを以て不知々々大御稜威を我も人も畏て在ることを知る可きなり 八百萬神等神集に集ひ神議に議り給ひて其御祈の事共の有けるに八意思兼神深く遠く思慮給ひて其遠岐斯八咫鏡十握劍八尺曲玉を作りて天香山の五百枝賢木に懸て奉れり是は天津日嗣の長

御世に傳させ給はむ天津璽の設と自然成らむ其御心に叶はせ給ふ可しとの神量なり但此等は大御神の調度に奉らむと爲しが大御心に協へるが故に卜合りし者なり何でか天津日嗣の長御世に傳させ給ふことと迄には及はむと思ふも然ることながら後に其事の有しを以て見れば天津日嗣の御璽と爲て天地の共傳させ給ふ程の太じき神寶なるが故にこそ御卜には合らなりけれ　又大御神の大御愛しみ思ほす愛しき靑人草の食物衣服住宅の事も諸神の德(サチ)を合せて善くし仕奉りて大御心を安からしめ仕奉むとして先靑和幣白和幣等を作らしめ大峽小峽の木を伐て瑞御殿を造供奉れりしは衣服住宅の始なり然るに食物の事に至ては記紀拾遺共に是を脱せり豐受大神宮儀式帳なる大御神の御言に我御饌津神豐受大神云々と有て其下に是以御饌殿造奉天天照坐皇大御神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と有を以見れは外宮の御饌殿にて仕奉らせ給ふ所の御饌は豐受大神より奉らせ給ふ義なり斯れば其始天宮にて御饌造り仕奉るに非で何時かは有む然ればこそ皇大神宮儀式帳に供二奉朝大御饌夕大御饌一行事事御贄清供奉御橋一處石疊一處大神宮正南御門在二伊鈴御河一當二此御門一流二俣也此中島爾造二奉石疊一此止由氣大神入坐御坐也云々祭別禁封其橋人度不二往還一則齋敬供奉とは見えたるなれ大御神の五十鈴宮の儀式は天宮の儀式を移し用らるゝを以て思ふ可き者なり但此は雖略天皇御世に豐受大神の度會宮に遷坐し後に始れる神事なれば然は有べからずと云むか然れども人の調理して奉る供物などは何時の世にも事始む可し其を神の御座の石疊迄を構て奉らむ事は遂に溯り過したる事なれば容易く出來べき事にも非ざれば上古より傳る所の古說有て傳來れる者なる可し故大人等の說は悉く依り難かり　天下の寶器又衣食住の資と爲る物等又世間に有用(ツカ)ふ所の器械調度の大綱は此石屋戶の時に大成(ヨクナ)れりけるが故に愛しき靑人草を仁惠の所思す大御心に深く愛所思す節から其御祈い事共に感け御在て終に磐戶を出給へりしなり但如此く衣食住の事を言痛き迄云ふ事の古義には非るが如く云ふ徒も有れど踐祚大嘗式を閲るに其歸(ツマ)りは齋場を建て神服を織り酒米を供る三の外無く大神宮式に竈き御神は六月十二月月次祭九月神嘗祭是等は御食に就てなり四月九月神衣祭等是等は年々の例なるが新宮を造奉る時は地祭立二心御柱二祭有て大較衣食住の三事に過ざるを思ふ可し　此に因て兼て儲備たりし所の新殿に移ろはし奉り大宮賣神を御前に侍しめ天石戶別神に御門を守衛しめ仕奉りしかば白和幣靑和幣は神御衣と爲れる事云も更なり又朝の大御饌夕の大御饌等に至る迄に奉り上て天宮の大御儀はしも美く尊く淸く麗はしく成整へりけりとぞ思ふ是則大殿祭御門祭の起元なるが如此く神典を委しく讀むに非れば大に得る所少からむ者ぞ是に於て八百萬神共に議て須佐之男命に千座置戶の祓具を科せ髮鬚及手足の爪をも令拔て其罪を祓へ給ひし故に後に我御心淸々しと詔ふ如く甚も尊き御功坐す大神と天下に立給ふ御功德

の廣く厚く坐す御事比類無く成坐るが此よりは天下の人民を愛しき青人草と宣ひ皇御孫命を吾が御子と美好(ウルハ)しみ給ひて先に損ひ破給へる豊宇氣姫命の御靈を幽贊て其衣食住の料(タメ)に專貴く御功を立給ふ御子神等を蕃息して此國土を經營しめ給ひ皇御孫命の御天降坐む時を下待せ給へり但天上にて被具に穢なさへに責られ坐しに依て御身に屬る所の穢惡は悉くに淨まり給へるが其所謂を背能く思ふに神代紀一書に素戔嗚尊曰云々拔二鬚髯一散レ之即成杉又拔二散胸毛一是成レ檜尻毛是成レ被眉毛是成二櫲樟一云々と有は天上にて如是く毛髮變じて被具を造る料材と成れりしかば其御思え有る事を此土にては物し給へるなり又其時に手足の爪などより成れりしは佗木種となりけむを五十猛命の天上よりは持下り給へるなるが神代紀には互に省略るなり心を着て見る可し若く須佐之男命天上に上らせ給ひて大御神に慇懃に見させ奉給ひて申上給ひけらく我が清明き心を以て先に生奉れる男子は奉上むと申給ひて其根國に幸坐む御暇を聞え上給へれば大御神の御言以て三柱の女神を授下して汝三神は皇御孫命を助奉て皇御孫命の御爲に豊受大神を齋奉れと仰給へり此時に皇御孫命の天降り坐む事を根ざしたり但此は須佐之男神の此國に降り給ひて更に後の事ならむ其は其御言の內に根國に放御在む御名殘の深く見えさせ給ふ事甚功なりしかばなり出雲國の肥川上に至坐る時など此三柱女神を携給ふ事とも見えざるなどを思ふに此は大國主命の長り給ひて其御許に出坐るよりは少し先づ方なる可し其は須世理毘賣命の大國主命の事を所知食ぬにて著明し能々次第を遂て心得可き者なり

若し須佐之男命此國にて豊宇氣姫命の御恩賴に償ひ給ふとして衣食住の神等を次々に生成し給へり住宅には天より率て降坐つる五十猛神大屋姫神柧津姫神の三柱を以て世に幸へしめ給ふ食物には大山祇神の御女神大市比賣を娶て宇迦之御魂神亦名大年神を生給ひ衣服には出雲風土記に青幡佐草比古命麻を殖給ふと有れば其等の神等有る可し是にて衣食住の三の者具足ひて天罪を清く贖ひ竟て許多の大功を建給へる事云まくも更なり若て其數多の御子の中に大國主命には天下經營の御大業を任じ奉給はまく思ほしゝかば甚く艱辛め給ひて深く試給ひ其を委しく見認給へる後に三女神亦名須世理毘賣命を配合(ツハ)しめ給ひ少彦名命を兄弟と契らしめ給ひて天下を經營り世界の物事を爲給ひて終に根國底國に入て其淵處より分出たる月豫美國に到らせ給ひて此大地を巡り守給ふ事と成にたり於是て御父伊邪那岐大神より事依され奉給ふ所の御德大きに成就て修理固成の旨を遂給へる者なり是等の事共は今發に要無が如くなれども如此く埋揚する所有て成出たる事の本末を必留め置ざれば一端は知るとも一端に知る事能はざるに依て神典の微旨を伺見る事の難き者なり能く上下に云る事を見合す可き者なりかくて云る如く大凡の人世に在と有ゆる事物器械はしも悉くにその石屋隱の時に大御神の愛しき青人草と所思して世に幸ひ給ふ御

心を取奉て神等の心々に然る可き所縁に因て各々其德を成し給へれば終古に亘りて神等の世に立給ふ所の御功はしも此時に整ひ成れるが故に其を以て神の御業と爲給ふなり所以に其新宮に功坐し故を以て屋船久々遲命屋船豊宇氣姫命と御名に負坐し又其大宮を守衛給ふが故に大宮賣命と申し其御門を守衛奉る故に櫛磐間戸命とも豊磐間戸命とも申すが如く此等の御功業に就ては又御名も更り坐るなり此則神等に亦御名とて數多御在る所以なり然れば其時に至て成し給ふ事の上に就て御名は種々に更り坐れども先の名を廢て後なるを取と云ふ義に非じ其亦御名と云ふ者は其一事に局れる唱なり（譬ば御門神の如き其功を成し給ふ元は手力男神と申す御名の如く八百萬千萬と多かる神の中にも殊に手力の勝れさせ給ふ神に在すが故に自然と負坐る御名なりしが其手力に依て天石屋戸を開奉る神に任され給ふが其功に依て天石門別神と申す亦御名出來り又其天石門を開給ひし功を以て新宮の御門の守衛に依され給ふが故に櫛磐間戸命とも豊磐間戸命とも申す亦御名出來れるが已に御門を守衛給ふ事と成ては又其開闔の事有る自然の事なり此に依て阿居多都命と申せるにて知べし種々の亦御名は有れども元來手力男神と申す其手力の任を以て種々に御功有るにて懸離れたる御名を不意く中には非ず此事を能々心に留めざれば古書を讀にも通え難き事ぞ多からむ）偖拾遺に殿祭門祭儀者元太玉命供奉之儀と有を以見れば師說の如く此祭の起れる事はしも此時ならで何時の事とは爲む然れば此時に起れる事疑無きが此に因て思ふに佗諸詞なる祭ノ

字は皆麻都理と訓む例なるに貞觀儀式に闈司奏云大殿（保賀比能）事申賜牟止云々大殿（保賀比）供奉牟止云々又宮內省式に宮內省申久大殿祭（此云於保登能保加比）供奉牟登云々と有て祭字を保賀比と唱る故實なるに依る時は其天太玉命の天宮にて供奉給ひし大殿祭はしも天照大御神の新宮の壽詞を申給へるにて顯宗天皇御紀なる室壽の類にてぞ有つらむ（室壽とは新屋を造れる時に其屋作の事と住む家人の事とを合せて言善しく壽ぎ稱ろを云り然れば此屋船命を祭に就て物爲る事にて此大殿祭の例の如くなる事云まくも更なり）若て拾遺（神武天皇段）いに天富命率ニ諸忌部一捧ニ持天璽鏡劒一奉レ安ニ正殿一幷懸ニ瓊玉一陳ニ其幣物一殿祭祝詞（其祝詞文在ニ於別卷一）云々と有を以て見れば其橿原宮にて天富命の物爲られしが始となれる如くなれども倩此詞を熟讀味ふるに天降坐し初國所知食し高千穗の大朝廷を始給へる時に天太玉命の事定め供奉れりしを天富命はしも其祖業を傳て行はれし者なりけり如此く見る時は彼殿祭門祭儀者元太玉命供奉之儀と有る事甚能く聞ゆるなり如何にとなれば元太玉命の天上にて仕奉給ひし殿壽を祭と爲て仕奉給ふ事は佗神の預る所に非ず又此宮にて必仕奉られしなる可しと思ゆる事は同書（天御降段）なる大御神の詔命に宜下大玉命率ニ諸部神一供ニ奉其職一如中天上儀上と有を以

て所知たり俗此は皇御孫命の初國所知食す大宮柱定給ひし時に起て其大嘗の大御政の時より毎年の神今食新嘗等の祭に屬て行るゝ者なり其は貞觀儀式大殿祭條に神今食大嘗會等前後有二此祭一又宮内省式にも神今食新嘗二祭明日平旦大殿祭と有は必神代よりの舊儀の遺れるなればなり記紀を始て諸の古書共に至るまで凡ての事を神武天皇の大御世の條に記載る例なれども其は其橿原宮に仕奉られし人々天兒屋命の孫にて天種子命天太玉命の孫にて天富命各其家に傳る所の祖業を以て仕奉れりし事を記せるにこそ有れ豈其父祖神等にして其事勿る可しや且其父祖神等の成し行はれたる事を親く見もし習も爲て有ればこそ天上の儀の如く子々相傳へて仕奉る事は出來る業なりけれ此を以て觀れば此祭式は高千穂宮にて行はれし儀にて此詞はた其時に成れるが橿原朝より以來追次て行るゝ中には式にも詞にも時世の異少有る可けれども全（スベ）ての事必高千穂宮の舊儀なる者なり然れば考に此詞の少擬を索出て藤原宮の頃の體なり云々と云れたるなどは云にも足ぬ僻説なり○祭儀は玉を以て神璽と爲且幣物の首と爲る事詞に詳なり其下に云ふ可し臨時祭式に凡出雲國所進御富岐玉六十連三時大殿祭料三十六連臨時二十四連毎年十月以前令二意宇郡神戸玉作氏造備一差レ使進上と有り說有り此下に云るを見る可し貞觀儀式に云く大殿祭儀神祇官以二筥四合一一合納レ玉一合納二切木綿一合納米一合納二酒甖一居二八足案二脚一令二神部四人舁一レ之中臣忌部官人宮主史生神部等著二木綿鬘襷一左右相分前行御巫列二於案後一至二延政門外一置案二於簀子上一掃部寮預設レ之大舍人叩レ門如常闈司奏云大殿保賀比能事申賜牟止宮内省官姓名叩門故爾申勅曰令レ申闈司傳宣云二姓名乎令レ申宮内省進就レ版奏云大殿保賀比供奉牟止神祇官姓名候止申勅曰喚レ之宮内省稱唯退出喚二神祇官一稱唯中臣忌部官人著二木綿鬘一忌部更加木綿襷立二案前一直進二仁壽殿一先レ是御巫等入レ自二宣陽門一候二於内裏一隨レ案共入至二殿東簀子敷上一御巫等執レ筥中臣忌部御巫等以次入二仁壽殿一御巫一人進二紫宸殿一散レ米一人至二承明門一散レ米忌部執レ玉懸二殿四角一次御巫等散二米酒切木綿於殿内四角一退出中臣候二仁壽殿南一忌部向レ巽微聲讀二祝詞一訖至二浴殿一懸二玉於四角一次懸二厠殿四角一御巫等一散二米酒一如初訖自二陰明門一退出次宮主引二神部一至二炊殿一懸二木綿一散二米酒一訖於二神祇官一賜レ祿但御巫料返二内侍一令賜神今食大嘗會等祭前後必有二此祭一但祭前者不奏聞亦無二賜祿一と見えたり但此祭は神今食大嘗新嘗等祭に必攝（ツキ）て有る者と見ゆ其は同書神今食儀に戌一尅十二月用二酉一尅一乘輿御二神今食院一主殿寮預設二浴湯一供之神祇官中臣忌部引二御巫一供二奉大殿祭一と有るは其神今食院一云中和院にて行るゝ所の大殿祭にて明日平旦に行るゝとは異なり思混ふ可からず江次第神今食條に未還御之間神祇官供二奉大殿祭一と有り其は右の續の文に卯一尅換二御服一還

御本宮ニ訖祭ニ大殿一と有ぞ此なる大殿祭には有ける然れども此も彼も皆神今食に就て行るゝ所なるが故に此祭の詞別に皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒襁懸伴緒乎云々と有る此は天皇の朝夕の御膳の常に就て云ふ事なれども此神今食に供奉る事を兼て申す事云まくも更なり大嘗祭式辰日條に夘二點神祇官中臣忌部引ニ御巫等ニ鎮ニ祭大嘗宮殿ニと有るは同前祭に神殿を造畢て即中臣忌部率ニ御巫等ニ祭ニ殿及門ニと有る賽謝なるが此等を見るにも此詞の中臣壽詞に彷彿たるも故有る事なり 此に就て天太玉命の高千穗宮にて仕奉られしは中臣壽詞に云ゆる大嘗會の大御政に並び起れる事與著明き者なりかし 又四時祭式に大殿祭 中宮准レ此 絲四両安藝木綿一斤筥四合 各徑一尺五寸 米四升酒二升𨫼一口盞二口案二脚右神今食明日平旦以ニ筥四合ニ置 一合盛レ玉一合盛ニ功木綿二一合盛レ米一合盛ニ酒𨫼ニ 八足案二脚令神部四人執ニ著木綿鬘襷ニ中臣忌部官人宮主史生神部等左右前駈御巫列ニ於案後ニ至ニ延政門ニ置ニ案於門前ニ大舍人叩レ門宮内省官人退出召ニ中臣ニ稱唯即兩官人著ニ木綿鬘 忌部更加ニ木綿襷ニ 立ニ案前ニ直進ニ御殿ニ ○儀式に仁壽殿と記せる此なり 先是御巫等自ニ宣陽門ニ入候ニ於内裏ニ共入至ニ殿東簀子敷上ニ ○仁壽殿の東なる簀子敷上なり 即御巫等各取レ筥中臣忌部御巫等以次入ニ御殿ニ ○仁壽殿なり儀式には此の細書に御巫一人進ニ紫宸殿ニ散レ米一人至ニ承明門ニ散レ米と有り違例なるに似たれども元は然有けむ 忌部取レ玉懸ニ殿四角ニ御巫等散ニ米酒切木綿殿内四角ニ退出中臣侍ニ御殿南ニ忌部向レ巽微聲申ニ祝詞ニ畢次至ニ湯殿ニ ○儀式に浴殿と記し江次第には御湯殿と有り 懸ニ玉四角ニ 次懸ニ厠殿 厠ノ字を毋加波(モカハ)と訓り江次第に御樋殿と記せる此なり厠殿を然云しなり言義を思ふに御樋有て其中を水は流れしにて川屋と云に同じ 四角ニ次懸ニ御廚子所四角ニ ○江次第には是より先に御膳宿(コモノヤドソ)と有り但此は下なる御炊殿の事なり 次懸ニ紫宸殿四角ニ御巫以レ次散ニ米酒ニ如レ初 御巫一人進ニ承明門ニ散ニ米酒ニ○儀式には上なる以レ次入ニ御殿ニの下なる細書に御巫一人進ニ紫宸殿ニ散レ米一人至ニ承明門ニ散レ米と有て此なる御廚子所云々の事無は元は唯御殿耳にて有つるなり紫宸殿承明門と云へども散米せらるゝ計りなり但次なる御門祭は此を云なり然るは散米こそは御巫を以て爲させ祝詞は御殿にて齋部の共に申せるにて御門祭詞は此詞の詞別なる者なり其下に云を見る可し然れど儀式と前後違へる如きは貞觀より延喜に至る程に改りし者なりけり 從ニ陰明門ニ退出次引ニ宮主忌部ニ至ニ御炊殿ニ ○儀式には宮主引ニ神部ニと有り又御炊殿の御ノ字無し江次第に御膳宿(チモノヤドリ)と有は此なり 懸ニ木綿散ニ米酒ニ如レ初畢内藏寮賜レ祿有レ差 數見ニ内藏式ニ 還至ニ本司ニ ○本司は祇神官を云 引ニ使部已上ニ就ニ宮内省解齋所ニ 事見儀式○解齋は神今食の解齋なり 江次第に始て見えたり又禁秘御抄公事根源抄等にも往々記されたり と如此く有て又宮内省式を閲るに神今食新嘗明日平旦大殿祭省輔已上率ニ諸忌部等ニ至ニ延政門ニ令ニ大舍人呼レ門闈司傳レ宣如レ常輔入奏其詞曰宮内省申久大殿祭 此云ニ於保登能保賀比ニ 供奉牟登神祇官姓名率ニ忌部ニ候登申と見えたり此は別事に非ず儀式及祭式中なる事ながら宮内省の職掌を分て記せる

者なり然るを後には漸此事衰たりと見えて江次第には大殿祭(藏人一人相副令レ奉二仕之一)神祇官人(中臣忌部)先石灰壇次經二御帳後奉仕夜御次朝餉次御湯殿次御樋殿次御膳宿次御厨子所次南殿御膳宿散供畢插二土錢一(以レ絲貫レ之○抄に云く留守藏人取二指燭一相共供奉但南殿不二行向一神祇官人直參行レ之若不レ出二御中院一猶有二大殿祭一又他所經レ宿行幸時行レ之云々)と見えたるは故實も儀式も廢れ竟たる業にて遺憾しき事なり(此は中臣の權威に誇りて漫りに忌部を貶せるが故に衰へ行し者なり公事根源抄に此事を記されざるを以見れば已に其頃存(アル)が如く亡(ナキ)が如くして主(ムネ)々しき公事の如くに非るが故なる可し年中行事秘抄六月條及大殿祭曉奉二仕之神祇官一と有て記文無く又本朝月令には名をだに出さゞるを以て衰たりし事知る可し)予を以て此を謂ふに儀式及び式文の如く有るだに神代の故實には良違へりやと思しき事少からず然るは拾遺に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀と見え祝詞式の首にも凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞と有を見れば齋部氏に於ては規模(ムネ)たる神事と聞えたるに然る趣無く此詞の樣とも甚く齟齬(タガ)へるは已くより其衰をぞ氣さしけむ其始を思ふに令の御定に在る所の宮內省木工寮に其家職を掌らるゝ頃よりや違例の事共は出來にけむ然るは同書に凡奉レ造二神殿一者皆須レ依二神代之職一齋部官率二御木麁香二鄕齋部一伐以二齋斧一堀以二齋鉏一然後工夫下レ手云々と有るは廣成宿禰の當時を以て申されし者にて實には豈神殿の造營耳ならむや同書(神武天皇段)に建二都於橿原一經二營帝宅一仍令天富命(太玉命之孫)率二手置帆負彥狭知二神之孫一以二齋斧齋鉏一始採二山材一構二立正殿一と有れば齋部氏は諸の工匠を管領せる者にして其任實に重かりける事云も更なり然るを其家業を宮內木工の官人に管領せらるゝに至ては應に衰ふ可き事なり(天太玉命の天上より以來仕奉り來る事を易給ふは在有まじき事ながら孝德天皇天智天皇の御世に至て天下万姓の職業を召上給ひて八省百官を置給へりしかば神代の舊儀などは万計り神事の上に遺れるが大凡は世に湮沒(カク)ろひ竟る事と成にたり)此に因て廣成宿禰の奏上(キコエアゲ)られたる第五條に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀齋部氏之所レ職也雖レ然中臣齋部共任二神祇官一相副供奉故宮內省奏詞稱下將レ供二奉御殿祭一而中臣齋部候中御門上至二寶龜年中一初宮內少輔從五位下中臣朝臣常恣改二奏詞一曰下中臣率二齋部一候中御門上者彼省因循永爲二彼例一于レ今不レ改と有は上に引る宮內省式に大殿祭供奉牟止神祇官姓名率二忌部一候止申と有る此を云なるか此を以考る時は右の儀式祭式共に記す所の事實の中にも中臣氏の恣に改易たる事も必有るなる可し(其は天宮より以來太玉命の子孫相承て仕奉來る事なれば忌部を主とし餘氏を客と爲べき筈なり然るを忌部は其祝詞を申し其祭に加はる耳にて更に主々しく見ゆる事無き者をや)斯在をさへに歎かれし廣成宿禰の後にしも其氏も絶え其祭も廢れたるを如何に哀しみ御

在ずらむと斯く此說を爲すにも云ひ知ず口惜き心ちぞ爲る然れども古道の如此く開け行く節に遇れば不才き予が此說の行るゝ時しも有むを神の幽府に待つつ在むとす世の古學者等は頁も爲れば古道は衰たりとて儒を罵り佛に怒るめれど眞に其道を起す志は無きにや朝廷にて行はせ給ふに非れば何日かは開けむ今の如くは譬ひ公にて古に復し給はまく思ほすとも其式の眞に古に叶へる者に返らぬ限りは此を復古とは云べからざるなり然れば千年五百年の後世の爲に此言擧は物爲るになむ　○祝詞式に大殿祭御門祭道饗祭鎭火祭の四を擧られたる此も彼も勝り劣りの差異無く相並び行るゝ神事にて究て古は嚴重なる式などが有けむと思はるゝなり其は天神御子の天降坐る時に皇祖天神の詔命を以て此御祭を行ひ物爲給ふ可く仰給へる者なり其は此詞に高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以氐云々天津奇護言乎以氐言壽鎭白久云々と見え御門祭詞には其由も見えざるなれど此詞の詞別の如くなれば論無く又古事記天御降段に其御靈形を副て降し給へるを以て知られ道饗祭詞には高天之原爾事始氐皇御孫之御命止稱辭竟奉云々天津祝詞乃太祝詞事乎以氐稱辭竟奉止申と有り又鎭火祭詞に高天原爾神留坐云々天下所寄奉志時爾事寄奉志天都詞大詞事乎以氐申久云々天津祝詞乃太祝詞事以氐稱辭竟奉止久申なと見えたるを以て悉くに皇祖天神の愛しき青人草を安在しめ給はむ爲に宅神門神衢神火神を祭て其恩賴を令蒙給ふ可く物爲させ給へる者なりけり 然るに大殿御門等の祭は忌部氏の職ト爲て仕奉る所道饗鎭火等の祭は卜部等の祭る所なるを以て別々なるが如くなりし者なり但大殿御門の祭は六月十二月十二日に在り道饗鎭火の祭は六月十二月三十日に在て其行ふ人も時も違へれば此四を相攝ね云べからぬに似たりと雖も然に非ず其は此下に次に說るが如し 今此四を合せて此を說に非れば心行くまじければ其大較を云んに先宮中には屋船神亦云大宮賣神と申す神塞り在して宮中に入來む禍事を防き過め給ひ御門には櫛磐間戶豐磐間戶神二柱塞り在して御門內に入來る禍事を防ぎ過め給ひ宮城の四隅には八衢比古八衢比賣久那斗神三柱塞り在して四方八面より入來る所の禍事を防ぎ過め給ひて夜の守り日の守に守幸へ給ふが故に有る祭事なるが鎭火祭は火災を防く爲のみならず穢火を鑽改て火產靈神の御稜威を希ふ祭なり然るは師說の如く穢火は黃泉火に相屬るが故に其穢火の戶與を爲す禍神共の悉く依託て禍事を爲行ふ故に火產靈神の御稜威を以て此が向火を焚る時は荒ぶる邪神を遠く逐ひ鎭るが故なり其は屋船命天手力男命共に火產靈神の御族に在り岐神等の湯津石村を神體と爲て塞り在す其石村はしも火產靈神の御身より化れる物なるなどを思

ふ可し（是を以て見れば右の大殿御門道饗等の神等の守給ふ所こそは各異なりけれ其事乃極を以て謂ふ時は火産靈神の御稜威に止まれり其は其神等の各相掌給ふ宅内門内村内と雖も忌火を犯す時は必禍事の出來るを以て知る可し然れば皇御孫命の大宮内は更なり天下萬民に至る迄も此四祭は懇切に行ひ物爲べき理なるを思ひて能くも其祭事は仕奉る可くなむ有ける）倭家にも門にも所にも禍事を爲し行ふ神有が故に此詞には神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氏云々と見え御門祭詞には四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久云々谷過在乎波神直備大直備爾見直聞直坐氏云々と云ひ道饗祭詞には根國底國與里麁備疎備來物爾相率相口會事無氏下行者下乎守理上往者上乎守理云々と有る此等を云なり（鎮火祭に其を云ざるは由有る事なり其は御心一速び給はず御稜威の盛に坐む事を云て其裏には其御稜威を以て禍神を防ぎ給はむ事を希ふが故なり）此三を合せて思ふに禍事の根抵を掌給ふは禍津日神に在せり然るは漫りに吉事を換て凶事と爲し善事を轉て惡事と爲すの謂には非ず人の怠り進む時は其身の害と爲り家事の整らざる時は一家仆れ一門の脩らざる時は一門頽れ一村齊はざる時は一村に禍有るが其は身をも家をも門をも所をも守給ふ神の間然を已と求るが故に禍必犯す可き必然の事なり然れども直日神の守り有る時は其事曲る所無が故に禍津日神は退き坐て猶豫ひ御在るが此よりや入

む彼ようや犯さむと彼處に散在け其處に疎居て試見給ふが故に荒備疎備とは云なり譬は薪に就て火燃え濕に因て水の流るゝが如し（此は天神の殊に御心深く定めさせ給ふ者にて愛しき青人草と實に愛しみ給ふが故に然は有なり此禍事と云ふ事の有を以て其ごとくの勤め有て人の萬物の上と有て最も靈（クシビ）なる德をも啄き出る事なりけれ然れば上にも往々云るが如く修り理め固め成すの德を失ては一日片時も得有まじき者なり）倭禍津日神は禍事を成し給ふ神には非ず禍事の元を統領せ御在る神なるが其御政に處て禍事を爲す神の大凡二統有り一には疾病神なり一には禍害神なり其に禍事の外ならずと雖も爲行ふ上は二の條理有が故に如此く品定め爲るなり（崇神天皇御紀に疫ノ字を延夜奬と訓り實に疫は天地間の不正の氣に感るなれば得病（エヤミ）の義なる事云も更なるが此に諸疫病の總てに亘る稱呼也其は天稟より虚弱にして外より疾病を得べき樣無き者なども有が如くなれども其は其稟より得たるなり得病の義に異なる所無し又素問にも邪氣之所乘其氣先虛など云るを思ふ可し）疾病神三神有り其は卷一（第三詞條）に記せる如く氣を犯す時置師神體を損る飽咋之大人神心神を勞らす煩之大人神此なり風寒暑濕の犯す所時置師神此に乘じ飲食衣服の節を失ふ所飽咋之大人神此に和ひ喜怒哀樂の情を勞らす煩之大人神此に交りて其入る所は氣より形より神よりの三有て其病み臥伏て仆るゝ者はこなり此亦不知々々此を犯し不知々々此を求るに因る（譬ば窓を開れば風氣の其下（トキ）より入るが如し風氣は素より空中に充塞る質の者なり此に因て別に風氣の其窓を求入むと爲るの情は無れども其從て入る可きの道を作爲れるが故）

に入ると同じ理なり人も其如くにて神等より受賜る所の身を廢らさず能く攝生の法に則（シタカ）ひて此を養ふ時は病を招く理無き者なるが此に反して病を招く可き間然（ヒマ）有が故に其神は突こり犯すにこそ有けれ　荒振神三神有り水陸に依て妖を爲す奧疎邊疎神は祝詞に謂ゆる癒備疎備來物と云る此なるが人能く神道の神隨なるに因準て修理固成の德貴き時は正しき神等の御守厚きが故に散（アラ）け疎（サカ）りて犯す可きの隙無さを此に反（ウラカヘ）れば正しき神氣遠くなるが故に神等の守り坐ぬ隈々より散け疎り入て犯すが故に主客の相違有が故に萬事倒反錯亂爲る者にて此亦不知々々我より招くを以て不知々々も禍事に遇ふ事有り但其入る所或は所業より或は口舌より爲るが故に祝詞には相挐相口會とは云り相挐とは外人の禍神に先に突こられたるが有て此が所行は神道に違へる事元よりの事なるが共に和ひ突る時は何時と無く其氣質に染る者なるが故に云也相口會とは外人の禍神に先に突こられたるが有て狡意なる言共を云來らむに此方にも禍事の萌す時は其惡事の案外に心床しくなる者なり此と同意せば共に曲らむ此を口論せば我や曲らむ止る所相突こらず相口會ざるに如ずと雖も止事を得ずして相突こり相口會ふ事有りと雖も他人の悖德も此方の行儀の嚴整なるに遇ふ時は彼も神の作れる身なり神の分たる魂なれば心恥しく成て其行を改るに至る者有り其改るに至るは此方に在す正しき神氣の貫きて彼に在る所の禍神を配け疎らしむるなり又他人の禍言を云來るにも此方より善を攻て其志操の曲れるを撓直す事有り教訓此なり其直るに至る者は此方に在す正しき神氣の彼を御して彼に在る所の禍神を追却るが故なり此等の事は何れも顯明の人事なるが共に幽事を出ざるなり熟く思ふ可なり　奧津那藝佐毘古邊津那藝佐毘古神は川澤河海に就て妖を爲す神にて狹蠅の如く水を涌つゝ妖を爲しゝ神なり國造神壽詞に畫波如五月蠅水沸支と有る此正ノ字にて此義なり但記に此を皆涌と有る皆は借字なり故其下にも青水沫毛事問天荒國在利とは云り照し應（アヘ）せて事意を悟る可し此は水行に在る所の妖神なり奧津邊津に遠近大小の意を含たり那藝佐に爲哭の義をも兼て荒ぶる神なる事著明かり但此青水沫毛事問と有を以見れば如ニ火瓮ニ光神は此國の神の如くなれど然らず此は奧津甲斐辨星神香々背男の事なり甕星と云も火瓮の由と聞えたり羅邊津甲斐辨羅神は山岳陸地に就て妖を爲す神にして神代紀に多有螢火光神蠅聲邪神復有ニ草木咸言語一と有る如くに石根木立草の片葉も言語はしむる神にて甲斐は峽なり物の隈處を云ふ言なり國造神壽詞に石根木立云々毛言問天荒國在利と有る其神なり此は陸地に在る所の妖神なり甲斐は山峽など云ふと同じく物の隈處たる所を云なり邊羅は邊在（ヘラ）なるが滅の義をも包たるなり俗世に物の有る可き當然に至るを益有（カヒアル）と云ひ然らぬを益無（カヒナシ）とは云り益無と甲斐辨羅と同義の言なるを思ふ可し　但是等の說は予が始て云ふ事なるが强たりと云む人の爲に其は神代紀正書なる經津主神武甕槌神國平の本注に二神遂誅ニ邪神及草木石類ニ云々登天也と有を常陸風土記に天地權輿草木言語之時自レ天降來神名稱ニ普都大神ニ巡ニ行葦原中津國ニ和ニ平山河荒梗之類ニ云々還ニ昇上天ニと有を合せ見れば山河の荒振神の言語爲つる草木石類なるに非ずや倭右の本注の云々と有る文は其所不順者唯星神香香背男耳故加遣倭文神建葉

槌神者則服と有を第二の一書に天有二惡神一名曰二天津甕星一亦名天香香背男云々と見えたる甕星は先達の已く螢惑星なりと云れ○然る言にて甕星の甕と火瓮の瓮と同種の物なるを以ても國造神壽詞に夜波如二火瓮一光神在利と云る即其なるか此國に夜々來て妖を爲し丶者なり若て此等の神共經津主武甕槌神の言向坐し上に今しも此なる大殿祭御門祭道饗祭鎭火祭等の皇神等夜晝の間斷無く防ぎ守り給ふが故に所を得て荒び健びて人を惱ませし國を惱すの巨害は全に有る事無しと雖も外蕃より渡り詣來る事物の中には其と無く自然の如くに害を爲す事多かり所以に臨時祭式に障神祭とて有は師說の如く此の道饗に所祭の神なるが唐客入京路次神祭蕃客送レ堺神祭の二條有て終に右蕃客入朝迎二畿內堺一祭二却送神一其客徒等比レ至二京城一給二祓麻一令レ除乃入ヨと有り次に障神祭云々右客等入レ京前二日京城四隅爲二障神一祭と有は蕃國の客人共に蕃神の屬來らむ事を厭ひて其を障遏め令給ふ御祭なり此は神功皇后の御世などよりや始りけむ神隨にして甚尊き御事なりかし何を以て云ふぞなれば彼より渡來る者は皇國を大成し給はむ料に皇神等の依て仕奉しめ給ふ者から中には國の巨害とも成る事の少からねば能く去取び採用ふ可き事云も更なるが豈人力の能く盡く究る所ならむや假令其去取は人に在とも玄監に賴ずては其用ふ可き此捨つ可きと云ふ事の微細迄には及ぶ可がらざるが故なり（此則障神に饗して其蕃神を防禦（フセ）ぎ祭遏（トド）め給ふ所以なり）彼道士の異驗釋氏の神通と云ふ者の如きは多くは晝は狹蠅如す水沸き夜は火瓮の如く光き又石根木立青水沫も言語はしむる者なれば云ふ迄も無く妖神に相交これる妖態なり（其は道書佛書を讀て知る可し大凡世人の信從する所は此等の事より甚くなり然れば彼に正しと爲る所は我が妖惡と爲る所なり愼む可し）又漢に澤民の仁有て君臣の大義無く梵に出世の善根と稱し父母を棄て家を出るなどは妖を以惑はすが如きに非ずと雖も道の大本を失ひて國家に殃災を延く引少からず逆臣賊子の先蹤と爲る者は外國の常ならめども皇國の變なる所なり此彼四方四角より散び疎び來る者に相交こり相口會たる所にて妖神の神荒びの外無き者なり（其は漢土などは定れる王無き國なり其民共の中より小賢しき者國民を寶け從へて王と爲る習俗にて天下は天下の天下なりと雖も皇國にて其如く爲ば天照大御神の大御言に背き奉り國體國格に違ふ者なり又隣者の一子出家を爲れば九族天に生ると云ひ衆愚人無爲と云などは彼國にては太（イミ）じき事にも爲らめども父子の親に背き夫婦の愛を割き子々孫々生々蕃息するの道を斷つ事なれば道の正に非ず勞々歎き譏らるゝ事なれ）斯れば祥しと見る事に妖有り正しく彷

れる業に邪徑有て思はず知ず惱さるゝ事常多き者なれば其去取を能く爲るに在り其去取を能く爲る事は皇祖天神の大道に則り皇御孫命の御政教に畏み因准ひ奉て此漂在る國を修り理め固め成す時は動靜云爲共に其道の中に行はれ視聽言動共に事として道に非る所無に至る彼謂ゆる終身此に由て其道なる事を知ずと云ふ是にて須臾も其道を離れざるが故に禍津日神より罰めさせ給ふ所無が故に身治り家齋ひ天下安泰にして實に神隨言擧爲ぬ國を成すなり一身一家の事を希少なりとして自棄べからず一身一家の善は天下の一身一家の善事なり此漂在る國を修り理め固め成すとは應に此を云ふ可きのみ（但斯る事の論迄に及ばむは我乍も余に言痛き心ちの爲れども我が大道の奧區を如此く伺ひ奉るからは顯し奉らずて得止べくも非るが故なり）

高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以氏皇御孫之命乎天津高御座爾坐氏天津璽乃鏡劍乎捧持賜天言壽（古語云二許止保企一、言二壽詞一、如二今壽觴之詞一）宣志久

此段は古事記（天降段）に天照大御神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降也云々神代紀（天孫降臨段第一一書）に天照大神勅曰豐葦原中國是吾兒可王之地也云々天照大神以二思兼神妹萬幡豐秋津姫命一配二正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊一爲レ妃令降之於葦原中國と見えたる此度の御事依と次に其御子邇邇藝命の御天降の事を兼たる文なり然るは天忍穗耳命は古事記に天照大御神高木神之命以詔二太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命一今平二訖葦原中國一之白故隨二言依一賜降坐而知看爾其太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命答白僕者將レ降裝束之間子生出名天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命此子應降也また神代紀にも此事を天照大神勅曰若然者方當レ降二吾兒一矣且將レ降間皇孫已生號二曰天津彦彦火瓊瓊杵尊一時有レ奏曰欲下以二此皇孫一代降上と見えたる如く天忍穗耳命は天降り坐ずして天宮に止り給へども總ての御言依の事の狀など邇邇藝命の御と全同じき事は云も更なるが（所以に第二の一書には是時天照大神手持二寶鏡一授天忍穗耳尊而祝之云々と有て其餘の傳には瓊々杵尊なる御事實を天忍穗耳尊の御事とせり然る時は彌々先にも後にも同じ御事依しの有ける事を知る可し）同じ事を再記さる可くも非るが故に天降坐る邇々藝命の御方に耳記し傳て其止ぬる方を以て省き傳られざりけれども熟思ふに記紀は更なり佗の古書共に葦原中國に有ゆる邪神を言向しめ給へる事を記せる

は未邇々藝命の生坐ざる以前の事にて天忍穗耳命の御爲に物爲させ給ふ御事今云ふ迄も非す能く人の知る所なるが此詞に以二天津御量一氐事問之磐根木根乃立知草能可岐葉乎毛言止氐と有も其を云るなれば右の二度の御を兼たりとは云なりけり（但此詞耳ならす大祓詞遷ニ却祟神一詞など何れも國平の事を云るは其例なるを誰も心着さりけると見えて其明辨有る事無きは疏漏と云ふ者なり）○高天原爾神留坐須は卷一（第一詞條）に注り○皇親神魯企神魯美之命以氐も卷一（第一詞下）に注り但彼詞より始て月次詞など此の如く御天降の事に係て云ざるを其時に當て行ふ神事の其本據く所即神漏伎神漏美命の詔命の隨に受傳させ給ひて今皇御孫命の行はせさせ給ふとの義にて同じ事ながら天統の由來に係て申すと今日の事實に係て申すとの差別有り辨ふ可き事なり（然れば高天原爾事始氐皇御孫命止稱辭竟奉など有は今日の事實に係たるにて天統の由來に係たるには非るなり其心して古書は讀む可き者ぞ）偖神魯企神魯美之命は上に註る如く古語拾遺に高皇產靈神（是皇親神留伎命）神皇產靈神（是皇親神留彌命）と有る此正說なれば此詞なるも然心得て宜しきなり然るは此御天降の擧より始て天宮の大御政はしも天照大御神の大御心と定めさせ給ふ事云ふも更なるが其を執行ひ物爲給ふは高皇產靈神神皇產靈神の輔相奉給ふに依る事神典の趣なり此に因て何時も此三柱の御名を顯し奉る可きを互に省きて一神或は二神を更々記さるゝ古書の例なるに依て祝詞などには神魯企神魯美之命と大較に申す御定なり此に因て常陸風土記には諸祖天神（俗云ニ賀味留岐賀美留美）と記せり其は右の高皇產靈神神皇產靈神は天地にも萬物にも大元の神に坐せば然稱奉る事本よりの事なるが其餘の皇祖天神をも大較に該羅ては然稱奉る俗なりける故に諸祖天神とは書る者なり此を以見れば神魯企神魯命には天忍穗耳尊をも收て心得可きなり其は神代紀（御天降段第二ノ一書）に是時天照大神手持ニ寶鏡一授ニ天忍穗耳尊一祝之云々と有れば天津日嗣の天津高御座は元來天忍穗耳尊に授給へるが瓊々杵尊には忍穗耳尊より請申給へるなれば此御依しには預り給ふ可き理なり然れば此段の全體に於ては諸祖天神より忍穗耳尊瓊々杵尊二柱に御事依しの有けるを合せて記せるなり然れども瓊々杵尊の御方は忍穗耳尊より受給へるなり（但古語拾遺の說を始て固く執られたるは平田翁の卓見にて其說古史徵第一段に出たり然るに同書百三十四段に此大殿祭詞を引出られたる其說に此なる神魯企神魯美之命は天照大御神と高皇產靈神となも申せり然して天津璽乃劍鏡乎捧持賜天云々は天照大御神へ係れり」と云れたるは然る言ながら尚其も神皇產靈神を漏されたる說なり然れば此は大較に右の三柱に係たる方却て宜しく侍にや）偖釋日本紀に引る龜兆傳に皇親神魯岐（天照大神之詠也）神

魯美命（高御産巣日神之諡也）と有るは卜部家にて神魯岐神魯美命と申は天照大御神高皇産靈神を然稱申すとの古傳に依れるなる可きが諡ノ字ぞ甚有まじく所思たる宮主秘事口傳抄（中臣壽詞奏事條）にも右と同じき文有て其左に如斯文者神魯岐者天照大神之諡號也神魯美命者高皇産靈神之諡也尊號者天照大神高皇産靈尊也（神祇官八神殿之内也）と見え同書（壽詞秘説事條）に皇親神漏伎神漏乃命乎持天口傳曰（謂二天神壽詞一者傳二神語一奏二天子一之祝言也 仍天神御名不レ讀二諡號一奏二尊號一也 神漏伎神漏美者是諡號也諡者死後之稱累二生時之行一而諡レ之云々 我后萬壽之初有レ所レ憚之 故不レ讀二諡號一者也」と有は大嘗會の時中臣壽詞を讀む式なるに其遠慮する所甚以て古傳に昧き説なり其は諡號とは人間の上にて生時の德を贊美て沒後に稱ふ所にて我が古には且ても聞えざりし事にて漢樣なる事なり我が上古は然らず在世に其德行を贊美る例にて神武天皇御紀に辛酉年春正月庚辰朔天皇即二帝位於橿原宮一云々故古語稱之曰於二畝火之橿原一也 太二立宮柱於底磐之根一峻二峙榑一風於高天之原一而始馭二天下一之天皇號二曰神日本磐余彦火火出見天皇一焉また古事記 崇神天皇段に 爾天下太平人民富榮於是初令レ貢二男弓端之調女手末之調一故稱二其御世一謂下所レ知二初國一御眞木天皇上也と有を合せて死後に諡號爲ずして生前に稱號有る我が上古淳朴の風を知る可きなり然るは生前の稱號はしも其德に感け辱み賴る筋を誰も誰も同じ樣にて云ひ合るにて公然なるを諡号はしも定る人を任て定しむる事なれば其定る者の心の牽く方に僻て私曲多きが故なり（諡は漢土上世よりの風なり史記秦始皇本紀に朕聞太古有レ號毋レ諡中古有レ號死而以レ行爲レ諡如此則子議レ父臣議レ君也甚無レ謂朕弗レ取焉自レ今以來除二諡法一云々と有るは實に眞道に協へる言なりけり）然るを皇國に於ても中古より彼國の往來屢有しかば惡風には化易き習にて終には彼を見擬ばせ給ひて彼諡號などの擧も良行れ初けるが其は公事には立ざりし故に御世々々の宣命なとには表立て用給ふ事無き後迄の例也唯神武天皇と稱奉り崇神天皇と稱奉る如きは記事などの時に易簡なるが便宜しければなり其等も神武天皇より後こそ有れ神代の神等に一として諡號を奉らるゝ記文無きを右の龜兆傳口傳抄共に餘に愚昧なる記し樣なり思ふに其記す時は稱號の意にて諡とは書つらむを後には其一字より過を延て神代より二無く重き大御政と有る大嘗會の壽詞をさへに心得誤る事とは成にたり（但此中臣壽詞の載る古記別

記は左大臣藤原頼長公記にて近衛院天皇の御世康治元年に大中臣輔親朝臣の奏されしを聞て記させ給へるなるが其時には右の口傳の如き愚説の無りけると見えて正しく神漏岐神漏美命と稱奉りし事其詞を見て知る可し宮主秘事口傳抄は奥書に康安二年壬寅三月日注書之正四位上行神祇大副卜部宿禰兼豐と有れば北朝後光嚴院天皇の御世に記せる書なるが其時の作意とは見えず既く其以前より然る妄口傳は出來し者なる可し思ふに鎌倉將軍の時代北條氏の惡しき人等悉くも朝儀を廢し奉らむ時に皇統を二流に分奉り攝家を五派に別ち申されしかば朝廷の官人も各々思々になりて其家職と爲(ナサムト)る事にも種々の異説を妄作して徒な立る事と成し卜部定家等の孫にて同じ僻説の數流に別れて此彼等しからざるに思合せて其頃の世中の事想像られ侍り　天照大御神は今も眼前に瞻望奉る天日神に大座坐し高皇產靈神神皇產靈神は今も萬物造化の神靈にて渡らせ給へば天壤と共に無極く大座坐す神にて瞬息の間と雖も此御蔭に賴奉らずて人も萬物も生活く可からざる者を神漏岐神漏美命と御代始の時などは幾度も稱奉らま欲き事なるに我后萬壽之初有レ所レ憚之故不レ讀ニ論號一者也とは甚曲々しき狂言と云ふ者なりかし大凡世に云ふ神道者の口傳口授と云ふ秘說共は斯る類の者なり努々我子等欺るゝ事勿れ餘りに繁雜しけれど今しも能く辨明し奉らずては世人の惑を解まじきを不便く思ふが故に止事を得ざる言擧なる者なり心を留て考ふ可し　○皇御孫之命乎は天忍穗耳命番能邇邇藝命を申奉るが正しく其事の御在して天降給ふが故に打任せては邇々藝命なる事云も更なり然れども皇御孫の孫は子の子を云ふ孫には非ず孫は麻にて身ノ字の義なり天下を統御(スメシラ)す御身(ミマ)と云ふ義なる事記傳四十六丁に御身は意富美麻と訓べし貞觀儀式奏ニ御體御卜ニ條に奏云宮內省申久御體詞云於ニ保美麻一御卜供奉禮留事申給牟止神祇官姓名候止申と有る四時祭式宮內省式共に見ゆに依れり身は古言に牟とも多く云れば麻とも云しにこそ」と云れたるに考合せて所知たり然れば古語拾遺に天祖吾勝尊云々生ニ天津彦尊一號曰ニ皇孫命一天照太神高皇產靈神二神之孫故曰ニ皇孫一と云など神代紀に高皇產靈尊の御言に天忍穗耳尊を吾孫ニ所有て此をも須賣美麻と有れば拾遺の說の如きは古人と雖も強言なり平田翁說古史徵第六十四段に神代紀御書段第一ノ一書に於是日神云々敕之曰汝三神宜下降ニ居道中一奉ニ助天孫一而爲天孫所祭也と有を葦華山蔭に此時天孫は未生坐ず此勅如何と云れしは師は天孫皇孫と申すを邇々藝命よりの御事と思はれし故に若る說は有れど此は書紀に美麻と云に孫字を當られたるより思ひ紛へられたる說なり實は忍穗耳命より次々天皇命を汎く稱奉る號なるをやと云れたるは然る言なるに就て倩閲るに同紀御天降段第一ノ一書に天照大神勅ニ天稚彦一曰豐葦原中國是吾兒可レ王之地也と有る吾兒は天忍穗耳尊なるが此下に且將レ降間皇孫已生號ニ曰天津彦彦火瓊瓊杵尊一時有レ奏曰欲下以ニ此皇孫一代降上と有るは天照大御神の皇子(ミコ)なり皇孫(ミヒコ)なりと云ふ事を字に依

て目易く知せたる耳にて皇御孫命に當たる皇孫の謂に非る事云も更なるが一には天忍穂耳命は此國に天降り坐ず邇々藝命はゝと天皇と坐て初國所知食しが故に打任せて皇御孫命と申奉る意など此彼を兼たる文體なり（總て御紀を拜讀するには最第一に此心定を以て見ざる時は大に義理を失ふ事多かり能心得べし）僣師の皇御孫命（御紀には天孫皇孫とも記されたり）と申すは忍穂耳命より次々天皇を汎く申奉る號なり」と云れし說の尤はるゝ事は御紀に天孫と記されたるを記には天神御子と有を以て見れば孫は比古の義を以て書れしには非るなり其は孫ノ字を麻古とは古くは云ざりけり記傳十四（五十四丁）に和名抄に孫爾雅云子之子爲レ孫和名無萬古一云二比古一と有る中に比古と云ぞ正しかる可き孫ノ字古くは皆然訓り又曾孫を比々古と云も比古の子と云意なればなり（今俗に曾孫を比古と云は比々古の訛れるなり借孫を無萬古と有るは馬梅などをも後には牟萬牟米と云例にて本は宇萬古なり其は蕃息子（ウマハリコ）にて子等の又子等の次々に蕃息れる意の稱なり是も古き稱とは聞ゆめり）と有を以て知る可し然れば皇御孫の孫は孫を宇萬古と云る訓を省き用ひたる借字にて何處迄も身ノ字の意にて天下を統御（スメシヲ）す御身（ミマ）と申す義なる事決くなむ有ける此次に皇我宇都御子皇御孫命と有を思ふ可し宇都御子とは御子孫に就て宣ひ皇御孫命とは天統を以て宣へる事實に明亮なる者ならずや（然れば續紀の大御歌に阿未都加彌美麻乃彌己止と有るは天神御身命と申す事にて天皇は同じ人世には渡らせ給へとも實は現人神に御在るも故に然詠せ給へる者なる事天皇を直に天神御子と申奉へると同じ御事なる者なり此を以て見れば鈴屋大人の直に美麻乃命と云れたる事の時々見ゆるは且（フ）と思ひ漏されたる者なり）○天津高御座衛坐氐中臣壽詞にも有り僣此天津高御座は天照皇大御神の天津朝廷の大御坐所を申せり葦原中國を統御す爲に天降し奉給ふが故に其御坐の上に上奉らせ給ひて天皇命の御位に即奉給へるなり若て其天津高御座を授奉らせ給ふが其を天皇命の御在所と爲給ひて天津日嗣を所知食す御事なるを以て歴朝の宣命に天津日嗣高御座乃業と云る事常に多かり鈴屋大人說（直日靈）に天皇の御統を日嗣と申すは日神の御心を御心として其御業を嗣坐が故なり又其御座を高御座と申すは唯に高き由のみに非ず日神の御座なるが故なり日には高照とも高日とも日高とも古語の有を思へ僣日神の御座を次々に受傳へ坐て其御座に大座坐す天皇命に坐せば日神に等しく坐事決し斯在ば天津日神の大御德（オホミイツクシミ）を蒙らむ者は誰しか天皇命には可畏み敬ひ尊みて仕奉らざらむ」と有は此詞などの意を含て云れたる者なり（此は記紀を始て諸の古書中の主と有る最太じき傳說なれば能く心を留めて思ふ可き者なり）僣天照大御神は高天原の大若主宰に在せば天津

高御座に大坐々て八百萬千万神を統御め御在る其天津高御座を皇御孫命に事依し奉給ふが故に獨皇國の君上に在す耳ならず大地萬國の總王に坐る事天皇命と申すは宇宙を統御す由の尊號なるを以て所知たり然れば天津日神の大御光を戴奉らむ限は何れか臣民には非ざらむ古語に當今の天皇を指て天神御子とも高照日御子とも稱奉る事の有を考ふ可し豈可畏しとも尊貴しとも言ふに堪ざる御事なり此天津高御座の御言依しぞ終古に君臣の分定れる所以にて上下方を慢らざる事の本なり天皇の踐祚を即位と云は高御座に即せ給ふとの義にて人の階級をも天皇の御座より次々定れる事なるが故允恭天皇御紀に座長顯宗天皇御紀に下風と有り座上座下を云ふ事なり後位階の品を立られて一位二位と云も一の座に着き二の座に坐ると云ふ區分なり御紀に天磐座と有を古事記に天之石位と作るにて座位同義なる事を悟る可し日本紀私記に座者是置物之名也と見えたるを思ふ可きなり記傳十五に云く久羅韋は座居の意なり又人の坐處のみならず物を居る臺などをも久羅と云り又倉鞍なども同意の名なり坐氐は麻世氐と訓べし令レ坐氐の義なり其は此なる天津高御座爾坐氐は神魯企神魯美之命の皇御孫命を天津高御座に令坐め奉給ふ事なるが故なり下なるは其天津高御座を皇御孫命の葦原中國に持降り御在し坐て云々の事を物爲給へと仰給へるなれば皇御孫命の御自の其高御座に御坐を云なり故麻志氐を訓み分く可し故考にも此說を含れたるか故に上なる坐の上に令字脫しかしと云れたり然る言なり文武天皇御紀の宣命に天津日嗣高御座乃業云々と見え萬葉十八丁十八に高御座安麻能日繼登須賣呂伎能可未能美許登能とも有り冠辭考五に萬葉卷三に春日乎春日山乃高座之御笠乃山爾また高按之三笠乃山爾と有り此は大極殿に高御座を所て天皇の御在し坐す其高座には蓋か有れば三笠乃山に此語を冠らせたりと有り其製樣は内匠寮式に凡每年元正前一日官人率ニ木工長上雜工等一裝ニ餝大極殿高御座一蓋作ニ八角一角別上立ニ小鳳像一下懸ニ玉幡一每レ面懸ニ一鏡一三面當レ頂著ニ大鏡一面一蓋上立ニ大鳳像一總鳳像九隻鏡二十五面云々と見えたる該高御座の古名を襲ひて新に製れる所にて上古の樣ならず思ふに此は文武天皇の御世より即位元正等の儀は漢樣の禮冠禮服を著られ大嘗會及祭禮は上古の風儀を改させ給はずして行るゝ事と成て神事と公事と別異に成以て行く事と成にたれば其頭の作爲なりけむ大體即位朝賀蕃客拜朝の時など大極殿に入御坐て其禮を受させ給ふには其高御座に上らせ給ふ御定なるか其は天津日神の天津日嗣を受繼せ給ふ義を所思しての事ならず蕃客拜朝などにも用させ給ふを以見れば唯其裝飾の如何にも唐めかしかる可く物させさせ給へる者と所思ゆ因に云ふ大極殿は天皇の重き公事に用させ給ふ無上く貴き御殿なるに其製樣漢風なり即位朝賀の禮冠禮服は君臣の威儀を整る止事無き公事なるに其製樣漢風なり天照大御神より御世々々傳させ給ふ大御手風に何の足ぬ事有てか然る卑賤き唐戎の風を摸擬されけむ天津高御座に即せ給へば唐戎は更なり萬國の酋長をも召給ふが天照大御神の道を行はさ給ふなり又萬國の酋長共は御馬飼と爲て仕奉り皇國の

御刑度を畏み仕奉るが天照大御神の道なるを共に忘竟給ふぞ淺ましき然れども一度始りては先例とも成れる事なるが故に御世々々の君臣の間には其事を足ず所思ずも有へけれど容易く其弊を改させ給ふには及ばせ給ひ難きに依て猶豫ふ事なる可きが其に就ても斯る過を爲出給ひて災を後世に及ぼされし其頃の君臣等ばかり恨なるは無きぞかし但如此く申さむ事は古の天皇を始奉り名臣賢将と聞ゆる人々をも併せて誹謗（ソシ）り奉るに當て甚畏き申し事なれども斯る事を論ふに至ては暫く天照大御神より傳させ給ふ天津日嗣を以て重とし其世の天皇を輕として定め奉る可き事なり

若て其古製は絶たるらむと思ふに然らず中臣壽詞に皇孫尊波高天原仁事始天豊葦原乃瑞穂乃國遠安國止平久介所知食天天津日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穂乎平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉弖云々如此依奉志任々爾所聞食由庭乃瑞穂遠云々大嘗會乃齋場仁持齋波利參來弖云々大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穂仁所聞食弖豊明爾明御坐弖天都神乃壽詞遠稱辭定奉留と有を以て見る時は大嘗の大御膳は高御座に御在して聞食す古式なる事此文の上下を對照（テラシアハ）せて知る可きなり然るに大嘗會の時に當て其高御座にて聞食と云ふ事の物に見えざるは其漢様に造れる高御座に名を襲はれたるが故なり（此壽詞の文を以ても漢様に造られし高御座は即位元正蕃客拜朝などの爲に麗はしく物爲られたるにて眞の高御座の別に在る事を思ふ可し。）其眞の高御座と申すは大嘗會の悠紀主基の殿内に在る所の御席（ミマシ）ぞ天照大御神の事依し奉給へる天津日嗣の瑞穂を聞食し始相嘗の皇神等にも奠らせ給ふ御座なれば中臣壽詞に云ふ所の高御座は此御座所を云なりける如此く一時の御過より高御座の古式の廢竟たるを何にか遺りて古に復し給はむ時を下待させ給ふ皇神等の大御心は甚辱く尊く且公然なる御事なりかし（然れば此製様を以て上古の高御座の大凡は悟る可きなり尚神宮の古書に云る天照大御神の御座の事をも合せて眞の高御座の状を顯記し奉むとす中臣壽詞に云ふを竢つ可し）

○天津璽乃鏡劔乎捧持賜天　を諸本に劔鏡と有は上下に誤れる者なり考に鏡劔と有は然る善本の有けるなる可し然るは古語拾遺檣原宮段に天富命捧ニ持天璽鏡劔ニ奉レ安ニ正殿幷懸ニ瓊玉ニ陳ニ其幣物ニ殿祭祝詞と有に合るを以今從へり偖此は神代紀（天降段第一書）に故天照大神乃賜ニ天津彥彥火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種寶物ニ又古事記に於是副ニ賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劔ニ云々而詔者此之鏡者專爲ニ我御魂ニ而如レ拜ニ吾前ニ伊都岐奉と有を云なり記傳十五（二十三丁）に三種神寶を連擧る次第は鏡劔玉とか鏡玉劔とか有べき理なるに（其由は次に云）記紀共に玉を先にし書紀には殊に玉及鏡と鏡の上に及ノ字をさへ置れたるは如何と云に崇神天皇の御代に至て此御鏡劔をば他處に齋奉り給ひてより天皇の御許に

坐は神代の舊物には坐さず唯玉のみぞ今大御神の授賜へる任の物にて坐故に彼御世よりしては三種の中に玉を第一とぞ爲られけむ然れば其神代より後は常に玉を先に中馴（ナラ）ひたる其次第の任に古事記も書紀も記せる者にして神代より然るには非ずなむ然るを或說に元來玉を鏡よりも殊に重き物の如く說成し又師の祝詞考大殿祭條に伊邪那岐命の御頸珠を天照大御神に賜ひて所レ知二高天原一と詔へれば彼御頸珠は大御神の天を知食す御璽なり借今天孫に賜ふ句玉は天岩戸前にして招禱ぜし時彼天照大御神の御頸珠に准へて作りしを今天孫天降て國の主と成給ふ御璽に天照大御神此を賜はせしなり」と云れたるもて皆協はず云々此は記紀共に玉を三種の中の第一に擧られたる故に強て其意に協へむとてなり譬ひ實に御國知食む御璽と爲て賜へりとも大御神の御魂と有る御鏡の上に立む事は難くなむ有べき然れども其鏡に並て賜はせし一種の御寶物にし有れば自御國知看す御璽と成れるは元來然有べき理なり云々　今此に大御神の授賜ふ時を以云はゞ鏡第一なる事は更なり次には劒次には玉なる可し其故は繼體天皇御紀に大伴金村大連乃跪上二天子鏡劒璽符一再拜神祇令に凡踐祚之日中臣奏二天神之壽詞一忌部上二神璽之鏡劒一義解に此即以二鏡劒一稱レ璽大殿祭詞に天津璽乃劒鏡乎捧持賜天云々此神祇令又祝詞の文を以見れば繼體天皇御紀なる璽符も即鏡劒を指て云るか假令玉なりとも鏡劒の次に有るをや　是等鏡劒を耳云て玉を云ず祝詞考大殿祭條に璁に御身に着坐す寶にて人の手觸る物ならざる故に古より鏡劒二を以て大儀の時の御璽とは成來るなり既に大寶の頃の儀式の表に依て二を耳云つる者にて是も上代の文ならぬを知一なり」と云れつるは心得ず璁は身に着坐寶にて人の手觸る者ならずとは常にこそ然も有め踐祚の時何てか本より御身には着坐む抑彼令に踐祚の日と有は義解に即位を云と云る如く古は踐祚即即位なりしを後には踐祚と即位と別に成て即位の儀式には忌部上二鏡劒一事は見えず大嘗會に此事有なり然れども是本は始て御位を嗣給ふ時の儀式と聞ゆるなり借後世には踐祚の時舊主の御許より新帝の御所へ劒璽を渡さるゝ義有り又其餘の儀式にも內侍二人劒と璽を執て供奉す此を以推察るに上代又大寶の定の頃とても舊主より新帝へ寶物を渡さるゝ時璽も必渡されずは有べからず然るに鏡劒を耳云て璽を云ざるは本鏡劒は重くして璽は一段輕き故なる可し然れば此は水垣朝よりして璽を先と爲らるゝ定に拘はらずして神代の本よりの定めに就て云る者にて返て古意とこそ思はるれ借後世に劒璽を云て鏡を云ぬは鏡は內侍所に坐て動き給はぬか故なり　古語拾遺には即以二八咫鏡及草薙劒二種神寶一授二賜皇孫一永爲二天璽一所謂神璽之劒鏡是也矛玉自從と有を以知べし此拾遺の文は世に玉を第一と思ふか古意に非る事を慨みて殊更に玉を貶して鏡劒には比び難き事を知せたる文なり自從とは鏡劒の如く正しく御璽として賜へるには非ず予と玉とは唯何と無く其に添て賜へる由なり　此等三種の中には玉は本は輕きが故なり」と云れしは實に然る言なり但右の文は甚く功めて引り其心して見る可し　此に就て思ふに此詞は天津璽乃劒鏡乎と有も鏡劒の二のみなるが如くなれども倚玉は輕さが故に左右の御手に執せ給ふ鏡劒を列云て其餘は省るなり古語拾遺に矛玉自從と有るに合せ考なば其事の大凡は知らる可くなむ　然言ふ故は或記に天照大神乃チ左御手に八咫鏡を持ち右御手に草薙劒を携へ八尺瓊曲玉を以て天香山の眞賢木の葉類に藏て皇御孫命に授給ふ其時に左物を右に移さず右物を左に移さず左を左とし右を右とし左に復り右に廻り萬事違ふ事無く寬々に天下を所知食と宣ふと有に合り此は究て古傳と通えたり但後の駿河風土記にも此と同じ傳有り其を取て記されつるにも有む　然れども其輕重こそは有けれ鏡劒玉の三種を天津璽と

は云來るなり景行天皇御紀十二年九月條に神夏磯媛云々聆二天皇之使者至一則拔二磯津山賢木一以上枝掛二八握劍一中枝掛二八咫鏡下枝掛二八尺瓊一云々仲哀天皇御紀八年の下に岡縣主祖熊鰐聞二天皇車駕一豫拔二取百枝賢木一以立二九尋船之舳一而上枝掛二白銅鏡一中枝掛二十握劍一下枝掛二八尺瓊一參迎云々また筑紫伊覩縣主祖五十迹手聞二天皇之行一拔二取五百枝賢木一立二于船之舳艫一上枝掛二八坂瓊一中枝掛二白銅鏡一下枝掛二十握劍一參二迎于穴門引島一而獻之因以奏言臣敢所三以獻二是物一者天皇如二八尺瓊之勾一以曲妙御宇且如二白銅鏡一以分明看二行山川海原一乃提二是十握劍一平二天下一矣と有は此等は素より其輕重を立べからざれども合せて三種なるは神代より鏡劍玉を三種神寶と云るに倣ふ者なり（然れば神代よりは鏡劍玉と次第たりけるを崇神天皇御代に至て鏡劍の二を別に作給ひて眞の劍鏡は伊勢及尾張に鎭坐が故に玉を先に立る事とは成れりしなり）然れば平田翁の二種と云るは信難くなむ有る其は其說の如く鏡は天照大御神の御靈實劍は須佐之男神の御靈實に坐して皇御孫命の御爲に此上無く最尊き御璽なるが玉も大御神の御靈を託て皇御孫命の大御許離たせ給はぬ珍寶なる者なり然れば上代よりの唱の任に三種神寶の古名を失はずして其中に鏡劍は神の御靈實にして重く玉は傳統の御璽にして其次なりと心得むてこそ古意なる可かりけれ（予も先には右の二種ノ神寶の心得なりしかども此書を著述す時卷三第七詞に至て其說の古義に非る事を明かに悟り得今又此詞の說を仕奉るに至て愈先入の說を改る者なりかし）如此く三種神寶の眞說定れる上に尙思ふ事有て云出むとす此詞に天津璽乃鏡劍と有は此二の重きを云て輕きを合ませたる者と見て事も無けれど然は非るかと思ゆ其は古語拾遺（神武天皇段紀）に天富命率二諸齋部一捧二持天璽鏡劍一奉レ安二正殿一並懸二瓊玉一陳二其幣物一殿祭祝詞（天皇本紀同段にも同文有は拾遺より取れるなり）と有る殿祭の事を暫く放て見る時は神武天皇の大御世に其三種神寶を大殿の內に安かせ給ふ消息を見る文なり其は此三種神寶はしも古事記（天石屋段）に此種々物者布刀玉命布刀御幣登取持而天兒屋命布刀詔戸言禱白云々と有を合せて思ふに太玉命の掌れりし所なるを以て其孫天富命の其祖業を繼て仕奉れりし者なり（但石屋の時の幣物は記紀に依るに劍は見えざりける事なれども拾遺に令三天目一箇神作二雜刀斧鐵鐸一と有る刀にて謂ゆる草薙劍なるが古史徵に引れたる雲州樋川上天淵記に素盞嗚命奉二劍天照大神一大神曰我所二天岩屋一時落二江州伊布貴山一是我劍也と有る此なり若て上古より鏡劍玉の三を並掛る幣物の例なる事上に景行天皇仲哀天皇御紀を引たるが如くなれば天石屋段の幣物の具にて劍も其中に在し事知る可し）拾遺に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀と有を以推すに天照大御神の新宮を造奉りて令坐奉る時に大殿祭仕奉るの

始に其招禱の神鏡を以て大御神の正殿に安奉り（劔は此時伊布貴山に落し給へば後に須佐之男神より奉りてより共に安奉れりけむ）玉は齋柱に懸て祝奉り大殿祭を物爲給へる例を以て高千穗宮にて然行奉り又橿原宮にても其事不過仕奉れりけるが故に此詞に瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃玉の事は有なり若て崇神天皇の御代迄は然有來しを其御世に當て鏡劔は御摸圖を造て眞のは別處に齋奉給ふ事と成て深く神威を畏奉らせ給ふ勢なりしかば玉は大御許を離ち奉らせ給はねども齋玉作に合せて其御摸圖を造奉らせ給ひて大殿祭には令用給へるなり此よりは玉は幣物と爲て天璽の玉には抱はらず成りたり（是を以て其式に改る事出來れりし事下に云ふ）但玉は幣物なるを予が說の如きは彼齋部の齋鉏を以立たる齋柱に取懸て皇御孫命の手長の御世を堅石に常石に護奉り茂御世に幸奉る料にて其實は神代紀（天御降段第一ノ二書）に天照大神乃賜二天津彥彥火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種寶物一因勅二皇孫一曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可レ王之地也宜二爾皇孫就而治一焉行矣寶祚之隆當下與二天壤一無上レ窮者矣と有る詔勅を承たる祝事なれば上古は其天璽の玉を懸て鎭給へる者なり所以に拾遺には捧二持天璽鏡劔一並懸二瓊玉一と並字を以て今造る玉に非る事を知せたる者なり然れば陳二其幣物一と有る中には彼拾遺に櫛明玉命之孫造二御祈（儻イ）玉一其裔今在二出雲國一每年與二調物一貢二進其玉一又臨時祭式に凡出雲國所レ進御富岐六十連（三時大殿祭料三十六連臨時二十四連）云々と有る玉も有なり故此には其等をも含て一に陳二其幣物一とは云るなり然れば橿原朝より以來此大殿祭に用る所の天璽なるは神體此なる御富岐玉は幣物なるを崇神天皇御世などよりや天璽なるは別に齋給ひて大殿祭には忌玉作が作れるを耳用ひさせ給ふ事とぞ成來つらむ（能く條理を正し辨へて讀味ふ可し此事を解得ざる限は三種神寶の古義を何知る事難からむ）是を以て見れば此詞に出る所も鏡劔の二耳ならす八尺瓊曲玉も並て惣ては三種神寶なるが鏡劔を別處に出し奉られし頃より玉も天璽なるは大殿祭に齋柱に懸させ給ふ事は非ず大御許に崇秘奉らせ給ひて齋玉作等が造奉る所を其に換て用させ給ふ事と成つる故に此詞も其に從て唱る自然の事なるが故に別々には成れりしなり然らは古語拾遺に鏡と劔を二種神寶と云しは上件の如き沿革有て此詞も改れりとは心着れずして今詞の上を以て其家說を主張む爲に然る新奇の言を立られし者と見えたり（然れば鈴屋大人の此拾遺の文は世に玉を

第一と思ふが古意に非る事を慨みて殊更に玉を貶して鏡劒には此雖き事を知せたる文なり」と有は然る言なれども二種神寶と云て玉を其員外に置く事誤なる事明かなる者なり〇捧持賜夫は右の鏡劒を云なり玉も其時に賜つる事上に云る如く或記に八坂瓊曲玉を以て天香山の眞賢木の葉類に藏て授給ふ」と有て右の鏡劒の後に擧たる此正說にて此詞の趣に合り然れども此詞に互に略る文有り 拾遺に捧二持天璽鏡劒一奉レ安二正殿一并懸二瓊玉一陳二其幣物一殿祭祝詞と有れば鏡劒玉を共に祀ひて大殿祭は物爲る事なるに前に皇御孫之命乎天津高御座爾坐爾天津璽乃鏡劒乎云々と後に其鏡劒の事を云ず又後に齋玉作等我云々瑞八尺瓊能御吹乃五百都御統乃玉爾云々と云て前に其玉の事を云ざるは上に說る如く上古は右の天璽の三種神寶を以て祭ふ大殿の殿壽なりしを鏡劒共に大殿に安置奉れる任に合祭給ふが故に鏡劒を今云々爲とは云ず玉は御祈玉に換用らるゝ當時の消息を主と云て古云々有りとは云ざる者なり 是を以て見れば甚古くより改來ぬる例にて決く崇神天皇の御代よりの事と見えたり上に說る事共を考ふ可し 捧持は神代紀御天降段第二ノ一書に是時天照大神手持二寶鏡一授二天忍穗耳尊一祝之曰視二此寶鏡一當レ猶レ視レ吾可二與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一と有る其捧持なるが劒をは畧き記されたれども或記に載る古傳を以見れば左御手に御鏡右御手に御劒なる事所知たり 右御手に劒を取せ給ふ事は今の事實も然なるを以て明らむ可し此を以て御記に劒をば略記せりとは云るなり玉をも此には記されず〇言壽 古語云二許止保企一言二壽詞一如二今壽觴之詞一 は神代紀に天照大神手持二寶鏡一云々祝之曰云々と有る此を云なり其は天津璽を賜る其上に言を以て皇御孫命の天地と共に隆坐む事を祝ぎ稱給ふが故なり 俗に言夫久（コトブク）と云は此轉語なり 保具神代紀寶鏡開始章に神祝祝之と有る其も同言なり谷川士清が說に今俗不レ搭レ情而盡レ言曰二保佐久一蓋祝之遺也と云る然る言にて思ふ事を面に表すなり古語拾遺に御祈玉 古語美保伎玉言ハ新禱也 顯宗天皇御紀に室壽と云るなど此例なり 倘下に云ふ壽觴の事見る可し 本注に如二今壽觴之詞一と有は酒宴の壽爲るが如しと云ふ事なり其は神功皇后御紀に十三年春二月丁己朔甲子命二武內宿禰一從二太子一令レ拜二角鹿笥飯大神一癸酉太子至レ自二角鹿一是日皇太后宴二太子於大殿一皇太后擧レ觴以壽二于太子一因以歌曰云々と有を古事記にも有て其歌の終に此者酒樂之歌也と見えたるが其歌ノ中に神壽ぎ賀ぎ狂ほし豐祝ぎ祝き同ほし」云々と有を以て 此に就て說有り其は下なる詞別白久の下に云る如く決めて此は大殿祭を兼て行はせ給へる者なり 久代の壽觴には善言美詞を盡し極めて云ふ事なれば天神の此言壽は今世に然る事の有る如くなり」と

注せる者なり然れば大殿祭は壽觴と同じくして其言壽爲る狀の似たる耳ならず一事なりしなり（萬葉六祈酒歌に焼太刀之加度打放大夫之壽豐御酒爾吾醉爾家里とも見えたり此に就て思ふに古語拾遺に崇神天皇の御世に天照大御神を倭城神籬を立て遷奉る條に其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌曰云々と有も右の壽觴なり倩保賀比は保岐と緩なる意なり保岐と云ふ時は同じ言ながら其意急にて自然の差別有り然れば保岐は其人に指著て云ひ保賀比は其撿てを係て云なり和名抄に乞索兒保加比比止と見ゆ）○宇志久は孝德天皇御紀（口年の下）に誨を能多麻志久と訓るを以て能理多麻比志久と訓べし續紀十七（二十七丁）に詔之久三十（八丁）に勅之久と有り（考にも記傳に引れたるにも能理多麻波志久と有り成程能理多麻波須の須を延たりと見て事も無れど慇しく雅しくなどの例なるにやと思え侍りて今は舊訓に依つ）

皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氐天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平久所知食（古語云志呂志女須）止言寄奉賜氐

皇我は天照大御神の御自の御事なり（我は辭に非ず吾ノ字の意なり萬葉□□に須米良朕と有る例なり）卷三（大神宮祈年詞）の下に說る如く高天原を所知食す御上の御事は高天原を悉く統御す御業なる故に打任せて皇と申奉る時は大御神の御事なるを天忍穗耳命邇々藝命に葦原中國を言依し奉給ひ天津日嗣を知食しめ奉給ふが故に其尊號を賜りて皇御孫命と稱奉る御事なる其證即此なり所以に上古には此大御神を除ては努々皇大御神と稱奉る事は無りしなり豐受大神宮儀式帳に天照坐皇大神云々我御饌都神等由氣大神と記し分たれたるを以見れば外宮の神にも昔時は皇字を加奉らざりしなり（然るを後には其古式廢れて外宮の神に皇字を稱奉るより始て春日にも平野にも賀茂にも此を稱奉る事と成れりき）但一神を差て皇神と申す事は少き事にて古くは數多の神等を一混けに申す時に皇神等と敬白す例と見ゆ出雲風土記に杵築宮に參集の神等を皇神等と云ひ祝詞にも某々乃皇神等と多く云り但廣瀨龍田祭共に其神を指て皇神と云るは珍らし此を以見れば皇神と迄は佗神にも稱申す事と見ゆ但大神の上に加ふるは古義に非ず（第七詞第十一詞の下に云るを見合す可し但其も時々の神の御心にて斷に然る御定の成れりしか顯に人の所濟に成るも知べからず）○宇都御子皇御孫之命は前には天忍穗耳命に謂ひ後には邇々藝命に宣へる者なり古事記神代紀共に伊邪那岐命の天照大御神須佐之男命（亦名月夜見命）を指て然宣へるに貴子珍子の字を作れたるも此と同し心ばへの稱言なり記傳七丁に右の神代紀の訓注に珍此云二于圖一と見え神武天皇御紀に珍彥此云二于弩毘古一と有る宇豆は師ノ說に高く嚴しき事なり」と有り（今言に人の容貌を宇豆高きと云も能叶へり又玉篇に珍字に貴也と云ふ注有り）尙例は万葉六（二十五丁）に天皇朕宇頭乃御手以云々又諸祝詞に宇豆乃

幣帛なども有り以上取意と見えたり偖出雲風土記意宇郡條に伊射奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂命また國造神壽詞に伊射那伎乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命と見えたる麻奈子日眞名子共に宇都御子と申すと同じ樣に聞えたるが熟思ふに上よりは宇都御子と宣ひ下よりは麻奈子と申す例と見えたり万葉七に父母爾吾者最愛子(マナゴ)曾と詠るを證と爲て考ふ可し宇都御子は親の方より愛しみ親しむ言と通え麻奈子は眞子にて子の方より親の愛しみを乞ふ樣なる意有り右の風土記神壽詞共に熊野に坐須佐之男神の方を立て申すが故に眞子の例に依れる者なり偖日眞名子の日は御の義なるなり若て此に宇都御子と申せるは御子にも御孫(ヒコ)にも御曾孫にも百繼八十繼と傳り坐む天照大御神の大御裔に係て總てに亘る稱なり古事記傳十四の十五丁に事代主神の天神之御子と崇申給ふに天忍穗耳命は天照大御神の御子に坐ませば本よりの事にて此次々には御孫(ミヒコ)なる邇々藝命をも又鵜葺草葺不合命をも神武天皇をも皆天神御子を申せり子とは子孫末々迄に亘る名なるが故なり」と云れたるを考ふ可し尚古事記橿原宮段には天照大御神の御言に天皇の御事を我之御子と詔給へり御紀に天孫と有は天神御子と云ふ事なるを字簡に書る者なり偖續紀一の宣命には文武天皇の御事を天都神乃御子と申せり古意を失はせ給はぬなり 若て皇御孫之命とは上に已に記せる如く天照大御神の御子孫の意に非ず實祚の高御座に坐て世中を統御(スヘシロ)しめす義なる事此に皇我宇都御子皇御孫之命と續け連ねたるにて紛ふ所無く分明しくなむ有る若子孫の意と爲ば子(コ)と云ひ孫(ウマゴ)と云ひて一事を二に言分たむ事何の用なりけるぞや若る明證有る事に故大人等も心着れざりけむ其說無きは惜しき事なり○此乃天津高御座爾坐(マセ)氐と有氐鈴屋大人說に此乃とは上に天津高御座爾坐る御座を指て詔ふなり其は上文を味ふに其高御座を天より降して此御國にても即其天より持降れる高御座を用ひ給ふ由なり彼天之磐座放と有るとは事の趣異にして是は持て降り給ふ可き御料に設られたる御座と通えたり故此には此乃天津高御座爾坐(マシ)氐とは詔へるなり若然らざれは始に天津高御座爾坐(マセ)氐と云ふ事用無し能く味ふ可し考に此を如何と疑はれたれど能通えたる事なり先此祭は大殿の祭なる故に殊に如此く高御座の事の詔命有るは實に尤(ウベ)なる事なりと有るぞ謂れたる然れば坐字上なるは麻世と訓み此なるは麻志と訓別て能聞ゆるなり麻世は佗より然爲しむる言麻志は自然爲(ス)る言なればなり ○天津日嗣平記傳十四の三十八丁に萬葉歌には安麻能日繼とも詠り此は天津日大御神の大御任を受傳坐て其大御業を嗣々に知看す由の御稱なり天武天皇御紀に皇祖等之騰極と有る處に古云三日嗣一也と注せられたり書紀などには漢國にて天子と云者の位の上に用る字な

書るなれば凡て皆阿座都比部岐と訓り借此御位を嗣給ふ可き儲の皇子を日嗣御子皇太子の字を當つと申奉るなり〇今云直日靈に云く天皇の御統を日嗣と申すは日神の御心を御心と爲て其御業を嗣坐が故なり斯て右の意は必動くまじく誰も然思定めて有ぬ可き者なれど記に大國主神の天神に令申給へる御言に此葦原中國者隨レ命既獻也唯僕住所者如二天神御子之天津日繼所レ知之登陀流天之御巢一而云々治賜者云々と有に就て別に今一の考有り天津日繼又天津日嗣と作る繼嗣は借字給にて天津日大御神の給寄し賜ふ物を受納知看すを天津日繼所知とは申すが給寄し賜ふ物とは即天下の百姓の奉進る諸の御都岐物にて貢物を平兼盛集に比部岐物と詠り借御都岐物の都岐も供給の意なり今の俗言に人に物を美都具と云ひ又物を都々久流と云も本同じ借給(ツグ)とは上たる人より下なる者に賜ふに限れる如く思ふめれど然に非ず下より上へ奉るにも云ふ故朝廷に奉進るをも美都岐とは云なり　是即天照日大御神の天皇に給寄し賜ふ者なり借其種々物の中には稻を主と爲り其由は書紀に天照大神又勅曰以二吾高天原所一レ御齋庭之穗一亦當レ御二於吾兒一と有る是なり中臣壽詞に天都日嗣乃天津高御座仁御座天天津御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉氏天降坐云々と有ると〇今云玉勝間初若菜卷なる此詞の下に天都御膳遠の遠字は必乃(ノ)なる可し遠にても聞ゆるが如くなれども借は次に瑞穗遠と有る遠と重なれり」と云れたるを師も古史徵に諾はれたれど然る可からず天津御膳遠は高御座に御坐て天皇の御養す御膳其即天津御膳なる由なり其天津御膳を長御膳の遠御膳と云々由庭に聞食せと云ふ義にて瑞穗は其を調る料なるを以て云るにて別事なれば遠字の重なれるを厭ふ可きならず大殿祭詞に皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氏天津日繼乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗國乎安國止平久氣所知食止言寄奉賜氏此と有るとを中臣壽詞は大嘗に就て申す故に由庭仁所知食と云ひ大殿祭は天下知看す凡ての御上にて申す故に瑞穗國乎所知食と云る共に其指物は同稻穗にて其中に主とし首と爲るは齋庭の穗なり故書紀に彼勅には主とし首と爲る齋庭之穗を詔ひ寄して其中に天下の百姓の奉貢る稻又種々の御調物も皆兼含みたり　合せ考へて日給の意を思ふ可し皇御國は稻に殊なる深き所由有て右の如く大御神の嚴重き大詔命ら坐て後世に至る迄も萬の政の有が中にも大嘗を又無き大事と爲給ふ者そ然れば天津日繼知食と申せば即天下を統御す御事にも成れるなりけり天津日繼と云て所知食と云はず又日嗣御子なとゝ申す類は普く云馴て漸後に所知食と云ふ事を省ける者か此事は猶疑はし但古事記には此言門庭に見えたる皆所知と有り〇今云實に天津日嗣と云ひ日嗣御子と云ては言足はぬ如くなれども已に稱呼と成る上は格別にて難無き者なり　と有り以上取意　實に此說の如く天津日大御神の給寄し給ふ物を受納知看すを天津日繼所知とは申すが給寄し給ふ物とは即天下の百姓の奉る諸種の貢調にて是即天照日大御神の天皇に給寄し賜ふ物なり借其種々物の中には稻を主と爲る事なるが其は天下の百姓の農作る所なれとも天皇の耕種らせ給ふ由を以て天津日繼とは申奉る御事なり祈年祭詞に天社國社登稱辭竟奉皇

神等乃前爾白久今年二月爾御年初將賜登爲而皇御孫命宇豆能幣帛乎云々稱辭竟奉登久宣また御年皇神等能前爾白久皇神等能依志左奉牟奧津御年乎手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氏取作牟奧津御年乎八束穗能伊加志穗爾皇神等能依志左奉者云々と有は天下の百姓の農作る生産はしも天皇の御手に代りて仕奉しめ給ふ由なり然れば此詞に天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止言寄奉賜と有は事の趣意は異なる狀なれど彼古事記に天神諸命以詔ニ伊邪那岐命伊邪那美命二柱神ニ脩ニ理固成是多陀用幣流之國ニ賜ニ天沼矛ニ言依賜也と有と同事なり此を神代紀には天神云々宜ニ汝往循ヒ之云々と記されたり是を以て此詞の安國止平氣久所知食と有は彼宜ニ汝往循ヒ之に當り循之は修理固成に當りて何れも經國の事なるを以て天津日繼の繼は修の義をも並兼てる由を察らむ可し〇然れば伊邪那岐伊邪那美二柱神に修ニ理固成是多陀用幣流之國ニと天神の事依し賜へりし時は人民無く萬物無き程なりしかば漂在る國を修理固成て人民を生み萬物を成せとの御事なるが故に安國止平氣久所知食とは事依し給はず後に皇御孫命に事依し給へる時は人民有り萬物有り所以に人民に續命の業無ては有へからず萬物に可用の道無ては有へからざるが故に此漂在る國を云々とは詔給はざるの異有る耳にして事の極に至ては豈此も彼も別なる事ならむや熟思ふ可き者なり　又大神宮祈年詞に皇神乃見霽志坐四方國者天能壁立極國能退立限青雲能靄極白雲能墜坐向伏限青海原者棹枚不干舟艫能至留極大海爾舟滿都々氣氏自陸往道者荷緒縛堅氏磐根木根履佐久彌氏馬爪至留限長道無間久立都都氣氏狹國者廣久峻國者平久遠國者八十綱打掛氏引寄如事皇大御神能寄奉波荷前者皇大御神能大前爾如橫山打積置氏殘波平聞食と有などは天下の百姓の奉る諸種の貢調を召て受納給ふ由なり是等を以見れば天下の百姓の經營む所も奉貢る所も共に天皇の御事御物なれば天津日嗣所知食とは此二を兼綜て統御し給ふを云なり然れは天照日大御神の事依し奉給ふ天津高御座の大御業を受繼ぎ坐て天下に照臨み給ひ四方の食國の百姓に修り理め固め成しめ給ふ物事の元本を摠ね給ひ萬千秋の長五百秋に立奉り上る御都岐物を所知食す其即天津日嗣を所知食になむ有ける倭詞別に皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流と有は此天津日嗣所知食云々の結なり能く其語脉を正して辨ふ可し〇然れば上に引る鈴屋大人說は其末を耳摘出て云れたる者にて其本を遺されたるなり能々右に引る書等を合せ考ふ可き者なり
萬千秋乃長秋爾は瑞穗に係て宣はせたる壽詞なり中臣壽詞に天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗乎平介久安介久云々皇神等毋千秋五百秋乃相嘗仁

相宇豆乃比奉利堅磐常磐仁齋奉云々と有を合せて知る可し　又大嘗祭詞にも天都御食乃長御食乃遠御食登皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾皇神等相宇豆乃比奉氏云々千秋五百秋爾平久安久聞食氏豐明爾明坐牟皇御孫命能云々と有り　然れば古事記に豐葦原之千秋長五百秋之水穗國神代紀に葦原千五百秋之瑞穗國など有る國名は此御言壽に依て天神の號させ給ふ所なる者なり　此には御天降の後に出來れる名ならむと思ひしかども記の國避段迄は葦原中國と有るを科ニ詔ニ日子番能邇邇藝命ニ此豐葦原水穗國者汝將知國言依賜と有れば此時に定給へる嘉名ならむか然れば御天降段の始に豐葦原之千秋長五百秋之水穗國と有るは其事の首なるに依て態と此に置るなる可し若て御天降の時の猿田毘古神段又橿原宮段などに元の葦原中國を以て記されたるは嘉名を稱す可き事に非るが故でかし　記傳十三丁三に云れたる如く神代の年數に抗ては萬千秋などは何程の事にも非さるを壽詞と爲給へる意は然に非ず萬千秋の長秋に回々重ね行く事に宜へるにて言は天地と共に窮り無を云なり　次に云に大八洲云々なども皇御孫命の知食す限りを盡したる意にて大地萬國なる事を含めたるに同じ　〇大八洲豐葦原瑞穗之國は大地の全を係て詔給ふ可き筈なるに皇國のみを擧て其佗の萬國を云はざるを以て見れば萬國は各萬國にて皇御孫命は大八洲と區分せる皇國の地をのみ所知食す大君にして天下の摠てに亘らぬが如く麁漏に讀ては見ゆるなり然れども此詞に記す所は天下の大君主宰と坐て其都城敷坐す瑞穗國の瑞穗を萬千秋の長秋に長く遠く所知す事を云が故に大八洲云々とは侍るなり抑萬國と多かる中に此大八洲國を耳伊邪那岐伊邪那美二柱神は御子と詔ひ古語に皇神の愛しき國と稱云る如き所由の有て佗萬國と同等に列云ふまじき故實なるが故に並べ載られざるにこそ有けれ本國を云ふ時は其屬國は云はでも著明き事なればなり所以に國號考に大八洲國と云號は外國に對はず獨立て天下を統言ふ名なり八千矛神歌に夜斯麻久爾と詠給ひ倭建命の御言に吾者坐ニ纏向之日代宮ニ所ニ知大八島國ニ大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子と宣ひ孝德天皇の詔にも現爲明神御ニ大八島ニ天皇と宣へり公式令の詔書式も朝廷の大事に用らるゝ詔には明神御宇大八洲天皇詔旨と有り」と云れたり　神典の事實は何事も皇國の事限の如き記し樣なるは斯る所由を以てなり心得ずては辨說する者ぞ　外蕃萬國の出來始めは卷二　生島足島神詞　の下に說る如く蛭子淡島是にて二柱神の御子の列に員へさせ給はざる卑しき末國なるが故に稻穀生立ず物類宜からざる地なるを以て天皇命の御食國をは召給はざるなり　然れども大地に豈二人の王有むや外國の王等は悉くに皇御孫命の僕に使ひ給ふ酋長共なるが故に一系にして連綿する事能はざる者なり如何に奇異ならずや　偖神代に葦原中國と云るは大地の全を云るにて皇國の稱には非ず然れば豐葦原瑞穗國と云ふ時は皇國に限れる稱にて狹き

を葦原中國は天にも對云て廣きなり其は古事記に伊邪那岐命告二桃子一汝如レ助レ吾於二葦原中國一所レ有宇都志伎青人草之云々有は大地人類の居止限りを摠て云なり同書石屋戸段に高天原皆暗葦原中國悉闇又猿田毘古神段に上光二高天原一下光二葦原中國一なと有る天に對ひて皇國を耳云へからざるを以て知る可し此に葦原を冠らせ云ふ所由は國號考に云れたる如く元來天津神代に高天原より云る號なりけらし今其說に依て云はゞ甚々上代には四方の海邊は悉く葦原にて其中に國處は在て上方より見下せば葦原の巡れる中に見えける故に高天原より如此は號たるなり其は大三輪三社注進次第に初伊弉諾伊弉冉二神共生二大八洲國及處々小島一而國稚如水母浮漂之時大巳貴命與少彥名命戮レ力一レ心殖二生蘆葦一固二造國地一故號曰二國造大巳貴命一因以稱二曰葦原國一と有る處々小島は大八洲國の國形を爲りし時も未に潮沫水沫の凝竟ざりし蛭子淡島にて外國の種子なるが其迄に及びて葦を殖生し給へりしに依て曰二葦原國一と云義なるを仁明天皇御紀の長歌に日本乃野馬臺能國遠賀美侶義能宿那毘古那加葦菅遠殖生志津々國固米造介牟與利云々と詠るは古傳の大八洲國の事を耳云て處々小島の事を脫せるが故に然しもの鈴屋翁も此歌に依て不意く葦原中國は皇國を天より字たる所也として大地の全なりしてとを思ひ漏されたるなりけり彼西洋人の云ふ五大洲の中に皇國赤縣印度などの部を阿自夜洲と云るが葦原國と云に近きも由有る事なる可し因に云ふ記紀共に蛭子の事を雖已三歲脚尚不立と有る脚は葦の借字にて其始め三歲迄待試給へりしかとも葦尙（スラ）に生立ざりしと云ふ事にや然れば大巳貴少彥名神の外國に周流して殖生し給へるは二柱神の太古に不毛なりし所々をも善く作成し給へる者にて幽深き旨有る事を考得たれども古始大元考日本紀傳に註りき瑞穗之國古事記には水穗國を作り瑞水共に借字にて滿の義なるが闕たる處無くして美好しく豐饒び足へるを云なり冠辭考瑞垣の條に美豆とは先は草木の稚く麗（ウツ）くしく榮ゆるを云より萬の物を讚稱て美豆云々とは云けらし萬葉十三に美豆垣を瑞（ミヅ）垣に作り同卷に槻木に水枝刺と詠み世にも若木を美豆木若枝を美豆枝又若く壯健なる人を美都美都斯など云を思ふ可しと云れたり紀傳十三三丁に穗は稻穗なり神代紀に天照大神又勅曰以二吾高天原所レ御齋庭之穗一亦當レ御二於吾兒一と有る穗なり○國號考に云く穗は稻穗を云り葦のには非ず凡て稻穗を唯に穗と耳云るは萬葉に秋穗など云り偖水穗國と云號も此齋庭之穗に由緣有る事なり云々と見ゆ偖此事を國號考に皇國は萬の事も物も萬國に比無く負に殊勝て甚美好き事神代より如此く深き由緒の有て今に至る迄實に水穗國の名に負る尊さ云も更なるを天下の諸人斯る美好き稻をしも朝夕に給べながら皇神の御惠を麁略に思成す可き事かは抑人は命計り重

き者は無きを其續て長存ナガラフる事は專稻の功にし有れば世に是計り重く貴き寶は何物か在む其稻の斯計り勝れて美好さにも皇國の萬國に勝れて最尊き程は著明き者ぞと云れたり但此は記傳にも細書にて諭されたれど斯る止事無き說の細書なるが惜しくて國号考なる方を擧たるなり寔に此說の如く世中に寶はしも多しと雖も一日も無て叶はざる者は食物なるが其食物の在が中にも勝れて貴き物は稻穗なり其は人は命と云ふ者有て萬の事は有るなり戎狄に藁して皇國を貶しめむと爲る儒佛の學徒と雖も美好く尊き瑞穗國に生れ泰平の御世に住て飽まで喰ひ温かに著て在る故に朝夕の飢を知す寒暑の苦しみを思えざるを以て高上なる理屈は物爲めれども少しも食物の時を失こハツこすか聊かも衣服の時節に應はざる事など有る時は食を思ひ寒暑を厭ふ外に心は無き者にて衣食と云ふ中にも殊に食物は切なる者にて腹中の空虛しき時は高上なる理屈も何も出來る者には非ず人は命有てこそ學問も修行も成すべかりけれ此瑞穗國に生れたる事の喜こばしからざる人は其主人より賜はる俸祿も辱しとは思はぬ惡徒にこそ有らめ俸祿の辱からぬ人は主人の爲に命をも捐て仕ふる忠節は出來まじくこそ思ゆれ其大本亂るゝが故に其末迄も治らざる者ぞ惡む可し禁しむ可し〇安國止平氣久所知食止古語云ニ志呂志女須ーは卷四第九詞條に云り考頭書に云く訓注は本語を以て爲る事古書皆同じ然れば注には女須と有れど文に續けては女世と訓べきなり但上は此乃天津高御座爾坐氐より受て下に云る瑞之御殿の事を孕めり其は右の第九山口神詞に山口坐皇神等能前爾白久云々遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐皇御孫命能瑞能御舍仕奉氐天御蔭日御蔭登隱坐氐四方國乎安國登平久知食云々と有を此詞に皇御孫之命乃御殿乎今奧山乃大峽小峽爾立留木乎云々皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮留瑞之御殿云々とも有る如く瑞之御殿の內に坐々て天下を平げく所知食シロシメセとの義なり能く此ニ詞の首尾を稽へて思はゞ知られなむ大祓詞などに云る所も此と全く同じ趣(サマ)なり天皇の正殿を大安殿と申せるも此故實に依れる者なる所し神代紀天孫降臨段第二一書に皇孫因立ニ宮殿ー是焉遊息と有る遊息字を夜須美麻須と訓るは安見し給ふ義なり此事大殿詞の下に云り又鈴屋大人說玉勝間初若菜卷に天武天皇御紀に天皇御ニ大安殿ーと云る事所々に見え續紀にも多く見えたり大安殿は意富夜須美杼能と訓べし即大極殿の事なり又天智天皇御紀に西安殿天武天皇御紀に向安殿內安殿外安殿舊宮安殿文武天皇御紀に東安殿なども有る皆夜須美杼能なり夜須美は古歌に安見しゝ我大君と詠て是安らけくて天下を見し給ふ意見し給ふとは所知食なり然れば天皇の坐ます殿を皆安見殿と申す御事なり甚く後の物なれど西行か撰集抄に崇德天皇の御陵に參りて其御事を申せる所に清涼紫震の間に夜須美し給ひて百官に齋かれさせ給と云るは邂逅古言の遺れる者なる可し偖皇極天皇御紀天武天皇御紀に大極殿を意富阿杼能と訓み天智天皇御紀に西小殿と有るを邇志能古阿杼能と訓み上に出せる天武天皇御紀の內安殿を宇知能阿牟杼能と訓るなどは何れも夜須美杼能と訓しめむ爲に傍に安ドノと書たるを見て誤て安を音に訓る僻事なり又傍に晏ノ字を書る所も有る此も彼安を音に讀む事と僻心得して阿牟と訓しめむとてなり〇重胤云く萬葉集に內南安殿とも有り大極殿は第一の正殿なるが故に安見殿

と云るを即大安殿とも書れたるなり續紀に大極殿と大安殿とは別なるが如く聞ゆる所も有れど然らず同じ事なり」と云れたるは然る言にて宮殿を造り給ふは其内に在して天下を安國と平げく所知食むとの御事なるが祝詞の例悉く然にて正殿を安見殿と云ふも此に因て起れる號なり○言寄奉賜比氏は言は事なり天津高御座に坐て天津日嗣所知食す事を寄せ給ふが故に事依とは謂なり依の事は祈年第二詞の下に云り雄略天皇七年御紀に拜な許登與佐志と訓り字典に朝廷授レ官曰レ拜と有る義を思ふ可し　奉賜氏此の奉は天皇の御方を崇め申し賜は皇神の御方を尊奉るなり俗に爾敬と云に當る詞遣ひなり

此ノ所ハ原書ノ附箋ニ從ヒ除ク

此段は大祓詞に八百萬神等乎神集集賜比神議議賜氏云々國中爾荒振神等乎波神問志問志爾問志賜神掃爾掃賜比氏語問志磐根樹立草之垣葉毛乎（コトヾクナ）語止氏云々天降依志左奉支と有る同じ事を約めて簡易に文を成せる如くなれども然らず專大殿造の事に用有るが爲に荒振神云々の事は省れて其殿造に用と有る磐根樹立草葉の三の者の治れりし事を云るなり但斯る者の言語ふも荒振神の爲る所爲の外ならねども是は所謂有る事なり

若て此なる磐根は次に齋鉏乎以齋柱立氏と云に亘りて下なる此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美云々に應（コタ）へ次なる木根立知は次の大峽小峽爾立留木乎云々に亘りて下なる柱桁梁戸牖乃錯動鳴事無久に應へ其次なる草能可岐葉は次なる天之御翳日之御翳云々に亘りて下なる引結幣留葛目能緩比取闢計草乃噪岐無久に應たる文なり如此く三條有て文義の調へる者なり能々正し辨ふ可きなり此狀を以て考る時は神代の草昧（アシカリ）なる頃はひは非情の磐石草木に至る迄も咸く能く強暴て言語を爲し妖孽を作て其用ふ可き用をば爲ざりけるなり神代紀に伊弉諾尊與伊弉冉尊共生大八洲國云々然後悉生萬物焉と見えたる國土は人民の居住（スマヒ）する處萬物は人民の御使（ツカ）ふ處の物と定させ給ふ天然（カムナガラ）なる處にして古往今來變る可からず又易ふ可からざるの常則なり萬物多しと雖も或は食物衣服と爲り或は居室機械と爲り或は藥物玩好と爲るの外は非ず此を以て各々人民の營爲の爲に萬物を使御ふ所以なり又使令はるゝ所以なり然るを此詞の首に云る如く伊邪那岐神の黃泉國より歸らせ給ひ筑紫日向の橘小門に御禊祓給はむと爲て脫棄給ふ御裝束の物より其醜國の穢惡に凝成れる疾病神と荒

振神と成坐るが共に禍津日神に屬奉る所由しも有れば萬事共に其神の厭給ふが爲に今しは所を得て然る荒びは成し得されども皇御孫命の御天降の前に當て經津主武甕槌神を降し給ひて事向令め給ふ以前は甚喧擾しかりし事上に云る如くなり（但此等の禍神等は悉く禍津日神の預り給ふ所なるが故に其神の御勢を畏み奉りて自己の荒びは爲す事を得まじき筈なれども然る禍々しき神なるからに時としては其荒び無きにしも非ず且人の上に神等の其德を試み給ふ時か又は罰め給ふ時などには禍津日神より其神等を遣して窘め給ふも常なり）此時まで磐根樹立草群に何たる靈有て如何にしてか言語は爲せりと云に上に云る如きの邪神姦鬼等悉くに其靈を託て妖孽は爲せりし者なり萬葉二に玉葛實不成樹爾波千磐破神曾著常云不成樹別爾と詠るも其頃の人の詠出べき事ならず必古傳の受る所有る者なるを察らむ可し（漢籍左氏傳に石言二于晉魏楡一と有る注に師曠曰石不レ能レ言神或憑焉と云るは然る說なり此なるも其例なりと知べし）偖此詞に右の者共の言語を止しめ給へる趣なるは然る邪鬼を神攘ひに掃ひ退け給ひて其靈を託て妖孽を爲す事を止めて其言語に至る迄に勿らしめ給ふとの義なるが此を此詞又大祓詞共に御殿造りの前に云るは如何と云に先久代然る荒び有し世には人民の屋宇を營むと爲るに磐石に靈有り言語を爲して其上の可否を云ひ草木に小靈有り其も言語を爲して其需に應不應を云て容易く雨露を凌ぐ事も出來ざりしが故に其邪神姦鬼を退治して人民の屋堂の內に心安く止住ひ爲る事を云ふに皇御孫命の大殿を以て言を爲せりし者なり若て此次に其を用ひて大殿造り爲る事を云ひ其次には其大殿に若くも在む妖孽を止め給ふを可く聞え上げ偖其幣物を云ふ是大殿祭の主意なり輕く見過す可からず（是にて此祭の子細を心得て後見る可なり）〇以二天津御量一は大祓詞に八百萬神等乎神集々賜比神議々賜氐と有る此を謂なり天津御量とは天神之御議にて其議は古語拾遺に令下手置帆負彦狹知二神作上天御量一云々と有る天御量の本注に大小斤雜器等之名也と有る如く度量を計る器を波加理と云ふ其と同言にて議とは相共に其是を云ひ聚めて此を其物と其事とに計り合せ其理の長たる方に因准ふの言なり萬葉二（二十七丁）には神分々と記るは其義を思ひての所爲なり（考にも是に量と書しは出雲風土記にも此字を書り漢國にては量度計議など物々に字を作て書しゝと皇朝には波加留ちふ言一を事に因て意得分る例なれば其本書に就て量と書るぞ古意なると有り）〇事問之 大祓詞には語問志と有り神代紀（天孫降臨段正書）に高皇產靈尊云々彼地多二有螢火光神及蠅聲邪神一復有二草木咸能言語一と有る此にて上に記せる如く彼與疎邊疎神以下六神を首として其眷屬の邪神

姦鬼の依託て素より非情なる者をして有情の者の如く能く言語を爲しめ人を惑はし惱めたるにて天下の奇性(マガコト)此に過たるは非ざりしなり萬葉四に事不問木尙云々と詠る事有り然れば同段第六ノ一書に磐根木株草葉猶二能言語一と有る如く彼に口有て元より言語を爲す可からざるが故に其依託の者の所爲なりけり尙下なる言止氏の下に云るを合せ讀む可し考大祓詞の下に云く物言ふ事を古は言(コト)問ふと云り萬葉歌に多く見ゆ○磐根木根立知草能可岐葉毛は大祓詞後釋に磐根は唯磐にて根は添て云ふ言なり屋を屋根羽を羽根杵を杵根矛を矛島根を島根と云ふ類なり考の大殿祭條に岩の高く顯れたるを巖と云ひ深く土に在るを岩根を云と云れたるは惡(ワロ)し木根乃立知と有る乃ノ字は決て衍なる可し大祓の樹立は紀爾多知と訓べきに合せて乃と云ふ辭有ては調も甚惡しき上に乃と云ふ可き詞に非ず紀爾多知なり偖佗の祝詞には皆木立と有れとも許陀知と訓ては協はず是は常に云ふ木立の事には非ず考の說に新撰字鏡に杌支利久比と有る此なりと云れたる如く杌(キリクヒ)なれば根ノ字有るに依て訓べきなり書紀に木株と書れたるも其意なり株は字書に木根也と注せり然らば唯樹立木立など書るは如何と云ふに彼岩根屋根などの例の如く唯木の事をも根を添て木根とも云故なり然れば木立など書る

は木の一字を木根に用ひて書るにて屋の一字をも屋根羽の一字をも羽根と訓むが如し偖意は木根立にて此は根に意有るなり本を木根と云るは古今集神樂採物歌に霜彌度置けど枯せぬ賢木葉の立榮ゆ可き神の木根かも」此木根は即上の榊を指て云るにて神の木がもと云るなり然るに後には惡しく心得て詠る歌有て人皆巫祝の事と心得たるは太(イミ)じき僻事なり榊の歌に巫祝を詠む可き由無し又巫祝を立榮ゆとは云ふ可き物かは萬葉一に岡の草根を去來結びてな十四に久佐禰可利曾氣是等も結ぶと云ひ苅と云れば草を草根と詠るなり木を木根と云ふ云も進へて思ひ定む可し又思ふに大殿祭詞の木根の根字は上の磐根の根より紛ひたるにて衍にて木乃立かとも思へと紀能多知また許能多知など云ふ言は有べくも思えず猶紀爾多知なる可し○今云此說の動かし得ましきに從て本には木根乃立知と乃ノ字は存しながら訓は引合せて紀爾多知と訓着つ但木立を常には許多知と訓べしと雖も此に木根乃立と有からは大祓なるも故翁の訓に從ふ可き者なり拾遺集十神祇歌に貫之足曳の山の眞榊常葉なる蔭に榮ゆる神の木根哉とも有り草能可岐葉毛乎は大祓詞には草之垣葉に作る此垣字を朝野群載には破と書り此破字と風神祭詞遷却祟神詞共に片と書るとを合せて思ふに可岐葉とは先凡て草は大かた三葉五葉づゝなど並びて生る者なるに其を闕取て唯一葉など殘て有る狀を以て云ふ詞にて意は唯希少(イサヽカ)なる草の一葉迄と云ふなる可し書紀には唯草木と有れども其は例の漢文體に約て書れたるなりと有り以上取意重胤今此說に就て思ふに磐根の言語し事は更なり有と有ゆる摠ての草木の類は悉く皆言語へりしかば杌(キリクヒ)又は痿(カジ)け殘りたる希少なる草に至る迄も

と云ふ意なる故に態と殊更に取出て木根立知草能可岐葉毛乎とは云るなり神代紀に復有二草木咸能言語一と有る咸ノ字に此なる乎毛の辭を合せて知る可き者なり 然れば一書に木株と書き此詞に木根立など云るは一體の草木の其餘を云る者なり大祓詞の樹立も此に同じ然れど常には紀の多知とは云べからず許陀知と讀て岩根には對なる格なり ○言止氏は大祓詞遷却祟神詞には語止氏と作り此は彼神代紀に彼地多有二螢火光神及蠅聲邪神一復有二草木咸言語一と有る下に經津主神武甕槌神を遣して此者共を罰平給ふ處の結びに於是二神誅二諸不順鬼神等一と有も其本注に二神遂誅二邪神及草木石類一皆已平了と有る誅を即此の言止氏に當て意得べし 常陸風土記には天地權輿草木言語之時云々和二平山河荒梗之類大神化道已畢云々と有て此の和平も即草木の言止たるをも含たるが其山河荒梗之類は言語へりし草木なる事を此彼思ひ合せて悟る可き者なり 止氏は右の二神の令止たるなり後釋の右の續きに止氏と云るは今の世の心を以て思へば自止たる如く聞えて乎毛と云に協はぬ如く聞ゆめれど然らず夜米は令ㇾ止の約りたるなれば佗をして止しむる意也 然れば自身の上に云ふ時も自然止む事には夜美と云て夜米とは云はず夜米は殊更に將ㇾ止(ヤ)と思ひて止る事に云り と有を以て辨ふ可き者なり偕此は下に神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氏と有を以て結と爲り其は別事の如くなれども神代に然る殃々しき者の言語を止め給へるが今しも然る惡神の言語へらむには言直し和し坐せと云ふ義にて家内に然る禍事の在むは顯身の目にこそ見えね幽に然る暗擾の時と爲て有る事なる可きが其響きにて人の殃災を受る事有が爲なり

天降利賜比食國天下豐天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎今奧山乃大峽小峽爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐採氏本末波乎山神爾祭氏中間乎持出來氏齋鉏乎以齋柱立氏皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿古語云二阿良可一汝屋船命爾天津奇護言古語云二久須志伊波比許登一以氏言壽鎭白久

此段は御天降の始より歷世に相承て食國天下を看給ひ天津日嗣所知食む天皇の大殿造り仕奉む料の支度を云て其成れる瑞之御殿を直に屋船命の神體と爲して祝ひ鎭奉る事を云なり然るに前段には未天降り坐さりし以前の草昧なりし事を云るが今は磐根木立草葉の類に至る迄も然る妖々しき事は非りける故に其大殿造りの甚平易る趣を句中に包持て歸る處は皇御孫命此大殿に坐まして食國天下を調給ひ天津日嗣を平けく所知食す事を壽ぎ申せるなり宮内省式に大殿祭此云二於保登能保加比一と有る言の意を思ふ可し 此文

の體裁を見るに祭祀の事よりは祝言の方多かるは即其大殿を直ちに屋船命と觀象（ミナシ）て其所に坐て天下所知食す御上を合せて壽ぎ稱るなり）偖天降利賜比志食國天下登天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎は彼邇邇藝命の高千穗宮の御事より始て歷世の天皇命等の御事に申せるが直に其より奥山乃云々と云ふに續くる時は當代の天皇の御上とは成らざるを中間に今ノ字を差挾て當今の御事と爲る文法實に奇しとも妙なりとも決めて神ならぬ人の企及ぶ可き處に非ず（此今ノ字有るが故に食國天下云々の事の又當今の御事にも通ひ聞ゆるなり然れば今字を天津日嗣所知食須皇御孫之命の上に置て見る時は彌々彷彿しき限無く鮮明なり）○天降利賜比志は大祓なるも同じ事ながら彼は皇祖天神（カムロギカムロミ）の御方にて物爲させ給ふ事を申すが故に天之磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐天降依（クダシ）志左奉支と有を（所以に此の放を波奈知降を久陀志と訓めり皇御孫命の御上に係ては放を波奈禮降を久陀利と云ふ可き語の格なるを思ふ可し萬葉十八卷原能美豆保國乎阿麻久太利之良志賣之家流と有り）此は皇御孫之命の御自食國天下を所知す爲に天降り給ふ由に云て其言を下へ連くる故に天降利とは云り若て次なる詞を反復して食國天下登天津日嗣所知食云々止天降利賜比志と錯綜て見れば事義明らかなる者なり（凡て古書を說くには如此き活用無くては解り難き事多かり心得有べし）○食國天下登は天降來坐て初國所知食し御事を云なり然れば今代の天皇ならず邇邇藝命の御上に係れり偖此の食國即天下

天下即食國なれば重復れるが如くなれども然らず天下は其體を以て云ひ食國は其用にて上なる大八洲豐葦原水穗國云々より受たるなり（續紀宣命にも食國天下云々と多く見えたり偖此なる食國天下登に味ひ有り其は此下にも云る如く食國天下登天津日嗣所知食と此は續く可きを此詞に界（サカヒ）て上下に亘る事にて上なる天津日嗣乎萬千秋云々に合せて邇々藝命の降臨の事を終め又此なる食國天下登天津日嗣云々に續きて當今の天皇の御事を始め云るなり）記傳七（八丁）に食國とは皇御孫命の所知食す此天下を總云ふ稱にして食は元物を食ふ事なり（書紀などに食を美袁志須と訓み食物を袁志物と云りて萬葉十二に袁志と云辭にも食字を借書り）偖物を見（ミル）も聞（キク）も知（シル）も食も皆他物を身に受入るゝ意同じき故に見（ミス）とも聞（キコス）とも知（シラス）とも食（チス）とも相通はして云ふ事多くして（其例は此次に見ゆ）君の御國を治め有ち坐をも知（シラス）とも食（チス）とも聞看（キコシメス）とも申すなり（是君の御國を治め有ち坐は物を見が如く聞が如く知が如く食（チス）が如く御身に受入れ有つ意有ればなり所知食と云も知見と云事にて同意なり漢國に食邑と云ふ事有て幾千戸を食など云も自此の食に意の合るなり）又萬葉五（七丁）に大王云々企許斯遠周久爾能云々又十八（十八丁）に高御座安麻能日繼登須賣呂伎能可未能美許登能伎己之乎須久爾能麻保良爾云々又二十（二十五丁）に伎己之米須四方乃久爾云々此なる伎己之乎須も伎己之米須も即知看と云と全く同意（物食を聞食と云ふも同く通はして云なり）なるを以て知と聞と看と食と皆通はして國を治有ち給ふ事に云るを曉る可し（是にて所知の義も自明けし）偖食國と云る例は記に詔二月讀命一汝命者所二知夜之

食國ニ矣と見え又輕島宮段にも大雀命執ニ食國之政ニと見え續紀宣命などに食國天下とも四方食國とも聞看食國とも數多有り萬葉にも多かる中に十七四十二丁に須賣呂伎能平須久爾なと有り（美部都久爾なも御食國とも書て同文字なれど其は大御饌に備ふる御贄物な獻る國を云て表須久爾とは別なり此袁（チ）須國なと御食國と書る事も萬葉六又十八卷に見ゆ勿見混へぞ）と有り（以上取意）如此く物を見も聞も知も食も皆佗物を受入るゝ意なるに就て尙思ふに袁須を米須と云通はし云ふ常の事なるが其は共に物に預り親しむ意なるなり（鶯鶯を袁斯と云も親しみ愛しむ意物を吝（チシ）むと云も其物を親しむが故に惜しむなり又物事を敎ふと云も其人を親しむ意より出來るなどを思ふ可し）然れば食國天下と云ふ事は悉くに天下の公民を統べ親しみ給ひて治め有たせ給ふ由にて事は御政に係り天津日嗣所知食とは天下の貢調を聞食して百姓の仕奉る道を治給ふ由にて事は實祚に係れるが共に天皇の天下を有たせ給ふ御事を申に於ては同じきながら其條理を分別ち云ふ時は如此く殊異なる所有るが故に此に此二をば並べ云るなり古事記（明宮段）なる天皇の大御命に大山守命爲ニ山海之政ニ大雀命執ニ食國之政ニ以白賜宇遲能和紀郎子所レ知ニ天津日繼ニ也と詔別給へるをも思ひ合す可し（大山守命の山海を治給ふとある此は樵夫漁者の事に預り給ふにて事は狹ければ措く大雀命に食國の政を白賜へとは天下公民の御政を白給へとなり次に宇遲能和紀郎子に天津日繼を所知と有は百姓の貢調を知食し實祚を繼坐せとなり能く讀味ふ可し）因に云食國天下登の登の辭は食國天下と與にの意の登なる事云も更なるが尙此上に兼含める意有り其は天降利賜志（此）より受る時は邇邇藝命の御事の終と爲り天津日嗣云々に續く時は今の天皇命の御事の始と爲て二に亘る界なる義有り能味ふ可し（上なる天津日嗣乎萬千秋云々より受て邇邇藝命の御事を貫き下なる天津日嗣所知食須皇御孫之命に累り續きて今上の御事を保つ登なり）○天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎は今上の御事を指奉るなり次なる今ノ字を此頭に回らして心得べし（其趣已に上に云り）○今は每年に大殿祭供奉る時の今にて其御世を指て云ふ此言を以て天孫降臨の古を別てるなり（其事上に次に委しく云り）○奧山乃大峽小峽爾立留木乎は木を採る深山を云なり祈年（山口神）詞には遠山近山爾生立留と有り其は山を司坐す神に申す詞なるが故に汎く然云るが此は唯に宮材の用に就て云ふ故に奧山とは云るなり（其は今云ふ迄も無く眞材の出る事は專深山なる故なり）大峽小峽は山間を云なり古語拾遺に令下手置帆負彥狹知二神作ニ天御量ニ伐ニ大狹小峽之材ニ而造中瑞殿上と見え倭姬命世記にも五十鈴原乃荒草木根苅掃比大石小石速平弖遠山近山乃大峽小峽爾立材乎云々と見えたり古事記（朝倉宮段）の大御歌に久佐加部能許知能夜麻登多多美許母幣貝理能夜麻能許

知基知能夜麻能賀比爾多知邪加由流波毘呂久麻加斯云々と詠せ給へるも山の峽は木の生立ち宜しく又扶疏する所なるを以てなり（和名抄に峽山間狹處也俗云山乃加比と有て山と山の間なる處を云なり古今集にも山櫻咲にけらしも足曳の山の峽より見ゆる白雲」と有り）　立留木乎を山口神詞には生立留大木小木と有り其は山口神には總ての木の事を申すが故に然汎く生立とは云るを此には用有る宮材の事を殊更に取立て云ふ所なるを以て唯に立留木乎とは云り（生とは云ざるを以て其差別を知べき者なり但山口神詞なるも宮造りの事は云るなれども凡ては山に木を生し給ふかたの御德を申を事と爲る故に此と異なり）　○齋部能云々此事は卷四第十詞の下に委く云れど尚云はゞ古語拾遺に天太玉命（齋部宿禰祖也）太玉命所ㇾ率神名曰二天日鷲命（阿波國忌部祖也）　手置帆負命（讃岐國忌部祖也）　彦狹知命（紀伊國忌部祖也）　櫛明玉命（出雲國忌玉作祖也）　天目一箇命（筑紫伊勢兩國忌部祖也）と有て（但此は下に石屋段に用有て此に列記せるなり借出雲國忌玉作祖也の忌字を本には無きを此に加て引たるは此の例を見るに齋部氏の所率の國々の忌部を云ふ所なれば忌ノ字尤字眼と有る所なれば決に有つらむを脫せる者なる可し此詞に齋玉作と有を以て補へり）　天石屋段に令三天日鷲神造二木綿一云々令三櫛明玉神作二八坂瓊五百箇御統玉一令下手置帆負彥狹知二神以二天御量一伐二大峽小峽之材一而造二瑞殿一兼作中御笠及矛盾上令三天目一箇神作二雜刀斧及鐵鐸一云々と見えて其功用各此時に立ち（但此外にも雜物を作給ふ神なれど此は齋部神の所率を以て出せるなり）　神武天皇段に令下天富命（太玉命之孫）率二手置帆負彥狹知二神之孫一以二齋斧齋鉏一始採二山材一構中立正殿上云々櫛明玉命之孫作二御祈玉一云々天日鷲命之孫造二木綿及麻並織布一云々と有て此時に成定れりし也（但此中に天目一箇神の裔の事は見えざれども崇神天皇段に至て造ㇾ劍と云ふ事有るは上の結びなり）　偖齋部とは上件の如く必天太玉命の裔孫ならざれども供神の物を調進し天皇の御調度の物等を調進せる由を以て負る職號なる故に齋清まはり仕奉る部と云ふ事也同書神武天皇段に當二此之時一帝之與ㇾ神其際未ㇾ遠同ㇾ殿共ㇾ床以ㇾ此爲ㇾ常故神物官物亦未二分別一宮內立ㇾ藏號二齋藏一令三齋部氏永任二其職一と有を以て知る可し後には帝と神と事を分別たるゝ事に成れりしより齋部の職は唯神事耳に預る事と成にしかども實には如此く有まほ欲き者なりけり（神宮の書共に物忌と云ふ者の多く有は此なる齋部の義に等しく物作る職々の稱なり）　○齋斧乎以の齋は齋ひ愼みて淨からぬ事を避るなり古書中に齋場齋館齋藏齋殿など云より始て雜具に至る迄も齋斧齋鍬齋鎌など其具の上に冠云ふ事常なり大神宮儀式帳に山向物忌先以二忌斧一旦木本切始云々と有り此例なり偖和名抄（工匠具部）に斧和名乎能一云與岐と有る此なり（但和名抄には兼名苑云斧神農造也と有り兼名苑の說は易繫辭に神農氏造二舟楫宮室一云々などより取て云るが彼國にては神農の始たるらむを我が天津神代より此等の器械の有を以て皇國の萬邦に師國たる事を仰ぎ奉る可き者なり）　○伐

採氏は拾遺に伐ニ大峽小峽之木ニと有るは天上にしての事なるが神武天皇段にも以ニ齋斧齋鉏ニ始採ニ山材ニ構ニ立正殿ニと有り二を合せて心得可き者なり（但上なるには伐と云て採字を略き下には採と云て伐を省けるなり）考にも引れたるが貞觀儀式（大嘗祭條）及踐祚大嘗會式に凡在京齋場者預分設ニ兩處ニ悠紀在左主基在右云々即先鎭ニ祭其地ニ訖造酒兒先執ニ齋鍬ニ始掘地並掘ニ院四角柱埳ニト部國郡司以下及役夫等入ニト食山ニ採材即祭ニ山神ニ訖造酒兒先取ニ齋斧ニ始伐木然後諸工下手（採ニ大嘗宮材ニ准此）又ト部率ニ郡司以下雜色人等ニ入ニト食野ニ苅草即祭ニ野神ニ訖造酒兒先苅次諸人下手（苅ニ大嘗宮草ニ准此）其齋場者分爲ニ內外兩院ニ以柴爲籬編木爲門云々また凡造ニ大嘗宮ニ神祇官中臣齋部二官人依次立率ニ悠紀國司及雜色人等ニ爲ニ一列ニ亦中臣齋部相別率ニ主基國司以下ニ准上皆單行云々鎭ニ祭其地ニ云々二國造造酒兒各執ニ賢木ニ著ニ木綿ニ堅ニ於院四角及門處ニ訖執ニ齋鍬（國別四柄納以ニ布袋ニ結以ニ木綿）始掘ニ殿四角柱埳ニ埳別八鍬然後諸工一時起手云々と有て大旨上の例なり此造宮の凡ての較略は專此大殿祭詞に在る所の趣意なる者ながら總ての事の狀を思ふに齋部の掌る可き事を多く佗氏の人に任せり其は古語拾遺に凡奉造ニ神殿ニ者皆須依ニ神代之職ニ齋部官率ニ御木麁香二鄕齋部ニ伐以ニ齋斧ニ掘以ニ齋鉏ニ然後工夫下手造畢之後齋部殿祭及門祭訖乃所ニ御坐ニ而造ニ伊勢神宮及大嘗由紀主基宮皆不預ニ齋部ニ所遺四也と有を引て比校るに造酒兒先執ニ齋鍬ニまたト部率ニ國郡司云々ニまた造酒兒取ニ齋斧ニまたト部率ニ郡司以下云々造酒兒先苅など有は何れも神代より齋部の職と爲る所なる可きを如此きは神代の故實に違へり又此を神宮の書に稽るに倭姬命世記垂仁天皇廿六年十月甲子に大御神の五十鈴宮に鎭坐る乃の下に五十鈴原乃荒草木根苅掃比大石小石造平豆遠山近山乃大峽小峽爾立材乎齋部之齋斧乎以天伐採天本末波山祇爾奉祭豆中間乎持出來氐齋鉏乎以天齋柱立云々と有を以て見れば右の拾遺の語の如く齋部の素より預り仕奉れりし事明らかなる者なり延曆儀式帳（新宮造奉時行事幷用物事ノ條）に常限ニ廿箇年ニ新宮遷奉造宮使長官一人次官一人判官一人主典二人木工長上一人番上工四十人參入來云々と有を同書（取ニ吉日ニ山口神祭用物幷行事條）に云々右祭造宮驛使忌部宿禰告刀申畢云々又（取ニ吉日ニ爲ニ正殿心柱造奉ニ云々條）に右祭告刀申造官驛使忌部宿禰其忌柱造奉云々など見え大神宮式にも造宮使忌部云々とも

有れば素より齋部氏の其造宮の事に預り仕奉る所なり尙倭姬命世記度會宮御遷座の下に率二手置帆負彥狹知二神之裔一以二齋斧齋鋤等一始採二山材一構二立寶殿一と有を以て知る可し然るを廣成宿禰の造二伊勢神宮及大嘗由紀主基宮一不レ預二齋部一と云れたるは如何と云ふ此造宮使はしも垂仁天皇御世より太玉命の神胤なる齋部氏の悉く預り掌る事天上の儀の如くなりつらむを大寶の御定有しより以來修理職木工寮の官人をして齋部を率參赴かしめ給ふ常例と成れりしを憤り聞えられし者なりけり大神宮式にも右の儀式帳と同文有て凡大神宮年限滿應二修造一者遣レ使と見えたる本注に使判官主典各一人但使判官任二中臣忌部兩氏一と有を見れば延曆の例よりは少し改れる成可く思て尙考るに使には中臣判官には齋部と聞えたり然れば神代の舊式には協はざる者なり惜む可し然れども然る表立たる造宮の事にこそは預られ然すがに悉くは廢させ給ひ難くや有けむ齋部宿禰をして山口木本神を祀らしめ且其上無く重き忌柱を作爲ら令め給ふなどは皇大御神の大御心と天上の儀を遺し給へる者なり○本末乎波山神爾祭氐中間乎持出來氐倭姬命世記にも此文有り但祭氐を奉祭氐と作り新年月次祭山口神祠には本末打切氐持參來氐と有ると同じ趣意にて事を細かに云ふと麁く云ふとの差

別有る耳なり此と事は異れども顯宗天皇御紀に天皇詣之曰石上振之神榲本伐截末云々と有も彷徨たる語なり然れば本末を伐截て其中間を宮材に用る事を引て偏無く固無く正大中正にして天下を經綸給ふ事の譬とは爲る者なり皇大神宮儀式帳にも山向物忌先以二忌斧一氐木本切始と有て末の事は云ざれども中間を耳取て仕奉る事著ければ此の例なり大祓詞にも天津金木乎本打切末打斷て云々天津菅曾乎本苅斷末苅切氐云々と有り○山神祭氐は儀式大嘗會式共に凡應レ採二大嘗殿材幷御膳柏一山及菇萱草野齋場地等云々申レ官令下山野所屬郡司一人專當禁守勿上レ入二穢人一採二鎮魂琴材一山造に此云々また凡在京齋場云卜部率二國郡司及役夫等一入二卜食山一採レ材即祭二山神一訖造酒兒先取二齋斧一始伐木然後諸工下レ手採二大嘗宮材一准レ此など見えたる如く古は必材を採るに如此く齋清めて先山神を祭れりし者なり神宮の古記には山口祭木本祭の二有り神廷朝廷共に用ひ給ふ所の儀は天津宮事なれば其異有る可きに非ず此は山神祭に兼て行るゝなり大嘗宮には黑木の柱を立て別に木造りとては爲ざるが故に山神祭に併せて物爲給ふ事と見えたり伊勢大神宮式に凡操下營二神田一鉏鍫柄一者毎年二月先祭二山口及木本一然後採レ之と見え又凡大神宮廿年一度造二替正殿寶殿及外幣殿一皆採二新材一構造云々と有る其下に山口神祭云々採二正殿心柱一祭云々右造宮使忌部自率二內人幷役夫等一就二山木本一祭之と見えたり然れば山口神は山材を伐に就て大山

祇神を祭り木本祭と云は心柱を造るに就て祭るなり而して其神は決て屋船神なる可し大神宮儀式帳にも取ニ吉日ニ山口神祭云々右祭造宮驛使忌部宿禰告刀申畢即山向物忌以ニ忌鎌一氏草木苅初然以後役夫等草苅木切所々山野散遣云々また次取ニ吉日ニ爲ニ正殿心柱造奉ニ宇治大内人一人諸内人等戸人等ニ入レ杣木本祭云々右祭告刀申造宮驛使忌部宿禰其忌柱造奉畢自レ杣出前追運來置ニ正殿地ニ也など見え尚其餘にも見えたれども煩はしければ略きつ○中間ヲ持出來氏は本末をば打伐て山神に幣(マヒセ)爲る其中間の宜しき用木と爲る可き所を持出來るを云なり考に此中間を用るは本よりの事なり本末を神に祭るは今も遠江國人大木を伐ては其梢を折て切たる本株の中らに刺立侍ぬ古も然爲るを本末を山神に奉るとは云ならむ他國にも然爲るか問べし」と有り遠江に限らず諸國にも爲る事なり○齋鉏ヲ以は考に云く貞觀儀式大嘗宮の柱立る前に大祓有て始作ニ内院雜殿ニ造酒童女執ニ齋鉏ニ掘ニ稻實殿四角柱穴一物部次レ之役夫次レ之と見ゆ」と有り但柱穴は童女の掘初る事此文にも出雲風土記にも見ゆ然れば此柱穴は忌部の掘初るには非る可し」と有は如何なり大嘗會式に凡在京齋場者云々兩國所レ送拔穗稻到レ京即先鎭ニ祭其地一訖造酒兒先執ニ齋鍬ニ始掃レ地幷掘ニ院四角柱穴一また凡造大嘗宮者ニ云々二國造造酒兒各執ニ賢木一著ニ木綿ニ竪ニ於院四角及門處ニ訖執ニ齋鍬一國別四柄納以ニ布袋ニ結以ニ木綿一始掘殿四角柱埳埳別八鍬然後諸工一一時起レ手と有る此等の柱埳は彼忌柱を建る料なり但式に齋柱を建る事は記されずと云へども其殿の四角の柱即齋柱なり下に云り大神宮儀式帳地鎭祭條に右祭告刀申云々地祭物忌以ニ忌鎌一旦官地草苅始次以ニ忌鋤一旦宮地穿始奉禰宜大物忌波忌柱立始然後諸役夫等柱竪奉と有る此事を大神宮式鎭ニ祭宮地ニ條に右鎭祭畢地祭物忌淸ニ掃其地ニ掘ニ心柱穴ニ禰宜竪レ柱云々と見えたり宮地を穿てる御心柱の穴なり忌鋤を用るは此に依てなり○齋柱立氏は倭姬命世記に齋鋤ヲ以天齋柱立一名天御柱一名心御柱又皇大神宮儀式帳に正殿心柱造奉と有る本注に其柱名號稱ニ忌柱ニと見え寶基本記には心御柱一名忌柱一名天御柱一名天御量柱と有り此等を推考るに齋柱と云は齋斧齋鉏などの如く齋まはり淸まはり仕奉るを以て然云ひ一名を天御柱とは彼伊邪那岐伊邪那美二柱神の八尋殿を化作(ミタテ)給ひし時に化竪(ミタテ)給ひし天之御柱にて記傳四二十四丁に說れたる如く身屋の中央の柱にて所謂心御柱此なるが又天御量柱とも云は拾遺に天御量(ミハカリ)と有る本注に大小斤雜器等と有を以て考るに御量(ハカクラベ)は身度にて其殿に住せ給ふ大御神の大御身の長に度量て建る事にて殊に古昔は齋ひ崇く(カシヅク)事にて有けるなり師說に手置帆負彥狹知ニ神は尺度に因て負坐る名なりと云ふ由なり古史傳も末世に出されば其說を聞ざれども此に就て今思ふに手置帆負神の手置は漢籍大戴禮記に布レ指知レ寸布レ手知レ尺と云ふ義なる可く帆負は大貢(オホオヒ)にて屋作の事を棟梁爲給ひ工匠に主宰たる由ならむか又彥狹知命は右の身度を度器(モノサシ)に移し易て用給ふ神にて彥は男神の稱狹知は尺知(サシシリ)の義なる可し予此考有て桂譽重に語けるに同人の云けるは然らば古史百二十二段に成文爲られたる出雲風土記に所ニ以號ニ楯縫ニ者神魂命詔云々天御量持而所レ造ニ天下ニ大神之宮造奉詔而御子天御鳥(アメノミチノ)命楯部爲而天下給之と有る天御鳥

命の烏（チ）は鳥（トリ）字の誤にて天御鳥（アメノミトリノ）命ならむと思ゆ其は上に天御量持而云々と有に照し應せて考るに御鳥は身度（ミトリ）にて尺度を掌給ふ由なるにやと云り從ふ可し　後世に至て齋柱の事は神宮に耳有て朝廷に其聞え無きは已く其古式の廢たりけむ甚惜しき事なり然るに此詞に齋柱と云るは唯に御殿の柱を指て云ふ事とは成れりしかども古くは天皇の天下に臨給ふ大極殿に有けむを其製樣を唐風に造り替られたる頃などが絶たりけむを詞は古の任にて用ひ來る事と思えたり　記傳に今人の屋にも中央の柱を大黑柱と云て重く爲める大黑の名は後世人の漢籍なる大極てふ事より云出し情進（サカシラ）事ならむかと云れたるは然る言ながら大極殿に心御柱を立て齋き崇き給へるに倣ひ物爲る由ならむ　摠ては信られぬ書ながら寶基本記に心御柱云々是則一氣之起天地之形陰陽之原萬物之體也故皇帝之命國家之固富物代千秋萬歳無動下都磐根大宮柱廣敷立稱辭定奉焉と有る云樣こそは例の漢風の文にこそ有けれ言ふ意は古傳なる者なり其は一氣之起とは正殿の中心に在て四方此に則る由なり天地之形とは上下の位を謂なり陰陽之原とは記紀に見えたる如く二神此天柱を巡りて御媾合し給ひ國土萬物を生給ひし物ぞとなり萬物之體とは常住不變の謂なり顯宗天皇御紀なる室壽御詞に築立柱者此家長御心之鎮也と宣ひ万葉二廿丁に眞木柱太心者と詠て大にして不動ぬ心を譬たるに同じ故皇帝之命國家之固とは右の如く四方上下安靜にして陰陽相感通し品物安寧なるの表物なるが故に皇帝の靈威盛大にして國家の固となる者ぞとなり富物代の富人古始太元致（大斗能地神條）に說る如く舍宅を云ふ事なり太玉命の孫を天富命と云も大殿造の事に御功坐し故なるを思ふ可し物代は崇神天皇御紀に倭國物實と有る其と同言にて物信と云義なり千秋万歳無動云々は古語拾遺（神武天皇段）に以齋斧齋鉏始採山材構立正殿所謂底都磐根宮柱布都之利立高天乃原爾搏風高之天利皇孫命乃美豆乃御柱乎造奉仕也など有る稱辭にて其文意を了解る時は少しも漢意の言には非るなり（記傳四に其說共を後人の設つる安妄の如く云れたる成程後人の文には違無き物から意は古意なるなり）　偖此齋柱を天御量柱と云に就て今一說有り其は古事記國生段に見立天之御柱見立八尋殿於是問其妹伊邪那美命曰汝身者如何成答曰吾身者成成不成合處一處在故以此吾身成餘處刺塞汝身不成合處而以爲生成國土奈何伊邪那美命答曰然善爾伊邪那岐命詔然者吾與汝行迴逢是天之御柱而爲美斗能麻具波比如此之期乃詔汝者自右廻逢我者自左巡逢云々と有る此天之御柱は師の說

言には天柱に擬作て國中の天柱を建給ふ事なる由然も有る可きが記傳四（二十三丁）に凡夫婦遘合の初に先此天之御柱を行廻り給ふ事上代の大禮と見えたり此は其男女遘合の始にして先此禮を行ひ賜ふ事は甚々深き理有る事なる可し（書紀に此柱を國中之柱とも國柱とも云るをも思ふ可し國土の生れる本元を此柱に負せたる名ぞかし）其理は傳無れば凡人の如何とも測り知る可に非ず然れど試に強て云はゞ先男女交合の狀男は上に在て天の如く舍にては屋の覆ふが如し女は下に在て地の載るが如く舍にては床の如くなるを柱は其中間に立て上下を固め持つ物なれば夫婦の間を固め持つ理にや有む（鶺鴒の一名を麻那婆斯羅と云ふも學柱にて柱を交合の意に取て號けたるにや有む）と云れたる實に然る言にて彼寳基本記に心御柱云々是則一氣之起天地之形陰陽之原万物之體也と有る期せずして符合る說なるが此を天御量柱と云ふは上に云る如く天身度柱なる事と思定めて偖思ふに其舍長の身に度て物爲るには非ず家の中央に立て其生長る程を計る古法には非るか其は二柱神の天之御柱を見立給ひて汝身者云々吾身者云々と問答給へる狀を思ふに男根女陰も成整ひて已に交合し給はむと爲る御氣勢の起る時節なれば即其御身の長をも計較る事などぞ爲給ひけむ此に依て其天之御柱をも天御量柱とは此時より初りつる名なるむも知る可からず若て其御子を生せ給ふ時は其柱に計較へて其生長の程をも壽ぎ爲る事にてぞ有けむ然れば古は此上無く齋ひ崇く事大凡ならざりし者なりかし（伊勢物語に比べ來し振別髮も肩過ぬ君ならずして誰か結べき」と詠るは髮の事にて此には預らぬ事ながら昔夫婦と爲む始に必柱にて身長を比較る事などの有しに依て其を含詠るかと思しきなり）○皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕留禮は此迄に舍を建る事を云ひ此には草を菅て屋を覆ふ事を云なり其は上に磐根木根立知草能可岐葉乎毛言止氐と見え下に底津磐根乃極美云々堀堅多留柱桁梁云々引結繫留葛目能緩比取葺計留草乃噪役無久云々と有る中間に在て此段は其磐根草木の用を云ふ所なるが故に屋を覆ふ事を云とは說るなり（考に云く上に陰と書しは正し翳は理以て云ふ耳」と見ゆ偖此天御蔭日御蔭の事は卷二第四詞條に說り）大嘗會式に卜部率國郡司以下及役夫等入卜食山採材即祭山神云々又卜部率郡司以下雜色人等入卜食野苅草即祭野神訖造酒兒先苅次諸人下手（苅大嘗宮草進此）など見えたる如く山材を採る如くに草を苅る事をも齋愼て物爲しなり（但卜部の仕奉る山なるは已にも云る如く違例にて古昔は決めて齋部なる可なき者なり）又大神宮儀式帳山口神祭條にも右祭造宮驛使忌部宿禰告刀申畢即山向物忌以忌鎌

氐草木苅初然以後役夫等草苅木切所々山野散遣と有り但所々山野散遣は何れよりか錯亂にて其幣物を頒ち散すを云なり思混ふ可からず如此く忌鎌を以て草を苅る事はしも其御屋を覆ふが爲なるを以て殊に齋愼て仕奉れりし者なり○瑞之御殿（古語云阿夏可）考に乎ノ字を加られたるは中々なる情進なり（其は下に云ふ可し本の任にて能く通ゆるなり）古語拾遺（天石屋段）に令手置帆負彦狭知二神以天御量（古語云美豆能美阿夏可）伐大峽小峽之材而造瑞殿兼作御笠及矛盾と見え又（神武天皇段）に建都橿原經營帝宅仍令天富命（太玉命之孫）率手置帆負彦狭知二神之孫以齋斧齋鉏始採山材構立正殿云々故其裔今在紀伊國名草郡御木麁香二郷（古語正殿謂之麁香）採木齋部所居謂之御木造殿齋部所居謂之麁香と見えたる此にて瑞は美麗はしく豐饒び滿足る義御殿は御在所の義なり（尚此事は卷二第四詞なる瑞能御舍の下に說たりき）此を瑞之御殿汝と引續けたる意に詠む可し下に皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐と有るに相應せる文なり○汝屋船命爾上なる瑞之御殿より乎（チ）の辭を以て界はすして汝屋船命と直に續きたるは大に深き義理有る事なり其は瑞之御殿を指て屋船命の神體と爲るが故なり心を深く留めて考ふ可し（古昔の例劔に在れ玉に在れ其物を直に差て神と申す事寔多かり）汝は御殿を屋船命と崇て其を汝と指るなり汝字續紀の宣命に美麻斯と有に依べし御坐（ミマシ）の義なり又此を伊麻斯（イマシ）と云は所在にて共に汝字に當べき言ながら美麻斯は上樣なる方に申し伊麻斯は其所に在を指云て崇詞に非れば同等より以下へ係て云ふ語とと聞えたり記傳四（廿丁）に万葉十一（十四丁）に伊麻思毛吾毛事應成又十四（五丁）に伊麻思乎多能美云々續紀高野天皇大命に朕我先帝乃御命以天朕仁勅久之天下方朕子伊末之仁授給云々是等なり（萬葉十四又後物語書などに麻之とも有り）又續紀の宣命共に（九の十六丁十七丁三十一の十五丁）美麻斯とも有りと云れたり（但其次に那も伊麻斯も後には下樣の人に耳云へども甚上代には然らず其本は尊む人にも云る稱なり」と云れつれど上に說る如き差別の有を見脫されたるなり）屋船命は下に至て屋船久々遲命屋船豐宇氣姫命と稱別たれど其本は一神なり其は屋船命と申す時は木を山に伐り草を野に苅て造成したる全體の御殿の御靈と坐す神の謂なるが（師の古史徵第十三段の細書に御鎭座傳記に屋船命と有る下の注に木靈久々能智命稻靈豐宇氣姫命也と見え上代本記にも屋船命草木靈とも和久產巢日神子豐宇可能賣命屋船稻靈神也とも見え奥儀抄に保食神宅神とも見ゆ此等の傳何れも實事の旨に符へる者なりと有り）其を辭別て云ふ時は木神草神に坐り此故に久々遲命豐宇氣姫命と申せるを屋船と上に冠（ツヘ）て申すは已に其木草を以て作れる御殿にて稱申すが故にて受張たる御名に非す（然さば御殿の事に拘はらず申す時は）

其木神草神の御名に冠て屋船云々とは申さゝる事なり屋は舍宅なり宮と云も御屋なる意なり神祇令義解また靈異記等に宅神と見え野府記にも長元三年十一月廿五日乙卯宅神祭と有り昔は人臣の家にても殿祭に擬て行へるにこそ奥儀抄に保食神者宅神也と有をも思ふ可き物なり船は和名抄に舟船共に和名布禰と有る水行の舟船に倣て舍宅をも船と云と思ふは俗意なり然に非ず屋船の船は舍宅に拘るならず神號にて布禰は大根と申す稱言にて根は主なり布と保と通ふ例は天穗日命を出雲風土記に天乃夫比命と書し古語拾遺に御祈玉古語美保伎玉と有を此詞には御吹乃支五百都御統乃玉と有など甚多かり若て其保言の大なる由は記傳十二三丁に御大之御前の大の例を引て記中に穴大部書紀には穴穗部と作り天武天皇御紀に迹太川万葉十三二十四丁に爾太遙十九二十六丁に爾太要など有と云れたる如し古事記伊邪河宮段なる開化天皇の皇孫神大根王を御紀には神骨と作るを以て保の大なる事を以て明なり根は主と云ふ言なり其は豐雲野神を豐國主神と通はし申に同じ又天忍穗耳命を御紀一書に天忍穗根尊神名式に豐前國田川郡忍骨命神社など有を以て見るに耳と根とは相通ひて同じ義なる稱號なる可し美々は眞々にて物の精氣を云るなれは此彼考合するに屋船と申すは家内に大しく彌綸たる精神と申す義なる者なり記傳七の五十四丁に美々は靈々(と、)なりと云れたるは然る言なり漢籍老子に其精甚眞と見え莊子刻意注に精者物之眞也と註し字書に凡物之純至者皆曰レ精と云ひ又精細也密也粹也潔也とも見えたり此の古説に符へる者なり　〇天津奇護言古語云ニ久須志伊波比許登ー は下に此乃敷坐云々と有るを指て云なり此に例して奉護留を伊波比麻都留と訓べし此なるも同じ事なり　上に天神の言壽宣志久と有は天上にての護言なるが其に因准て宮柱太敷立て屋船神を鎮奉り其祝事を物爲る事なるが故に天津奇護言とは云なり　但天神の言壽は食國天下と天津日嗣所知食すが故に磐根木根立草の片葉迄も令言向て御殿を造仕奉らしむる由の護言なるが今此大殿祭の護言は皇御孫命の大宮の内に靜り坐む事を平けく令在奉給ひて天下を安く所知坐しめ奉給へと言壽く事なり然れど言壽は即護言護言は即言壽なる者なり但少か差異有り下に云ふ可し　久須志は久志と同じく久志は豐と並稱ふ稱辭なるが物にも事にも自然にして備る處の妙有て意表に靈なる事の有を云ふなり然れば久は氣にて須志また志は晋みて靈妙の德を成すを云なり忌部正通が神代紀口訣に奇魂者不念而成とは此謂なり次なる御門祭條に委しく説く可なり奇と豐と並稱ふ例は櫛磐間戸命豐磐間戸命又櫛明玉命を神代紀一書に豐玉神名式に阿波國名方郡天石門別豐玉比賣神社など有を以て知べし然れば豐は御功の盛大なるを以て稱へ久志は其御功の上の靈妙なるを以謂なり　護言は言壽なり然れども出雲國造神賀詞に掛毛麻久母畏岐明御神止大八島國所知食須天皇命乃手長乃大御世止齋止爲氏云々伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波久登奏云々天皇命能手長大御世乎堅石爾

常石爾伊波比奉云々供齋仕奉弖云々御禱乃神寳獻良久登奏云々と有を引て考るに言壽は其對ふ所の神に在れ人に在れ其德と爲す可き所の美を列ね善を擧て稱言ふ事なるが伊波比許登は其幣物を奠りて齋き崇づくを本として即其物事の上に於て如此こそ有まく欲けれ然こそ願はしけれと希求る條理を告る由なり然れば神を社に祠くを伊波布と云ふも此由なるが其には保具とは云ざるを以て此の差別を定む可し（其は右の神賀詞に御禱乃神寳獻良久登奏と有も禱言に就て其言に合ふ所の神寳を獻るにて、白玉能大御白髮坐赤玉能御阿加良毘坐云々とは有れども大御白髮坐む料(タメ)に白玉は獻り大御面の赤らび坐む爲に赤玉は獻るなり然れば其祝言に就て神寳を獻るは言壽にて神寳に從(ツヘ)て其祝言を云ふは伊波比なる者なり）斯在は奇護言とは天津宮に事始め給へる奇靈なる護言と云ふ義にて幣物の御祈玉及び明和幣曜和幣を獻て屋船命を鎮奉り給ふを云が久須志と冠らせたるを以て此祭の世に妙なる功驗有る事を聞く可き者なり（其は恵と奇と云るを以て思定られ侍り）○言壽鎮白久考に守坐す神を齋ひ鎮め奉るなりと有る然る言なり（鈴屋大人説に鎮は伊波比と訓べし此字は唯弖豆米と訓む事と耳世人思ためれど然らず古書共の中に必鎮た伊波比と訓べきも多し此所も祝申すなり考の説惡しと云れたれど予は取らず下に云ふ處を見て知べし平田翁の古史徵に引れたるにも志豆米と訓れば從はれざるなり）何を以て諾ふぞならば下に柱桁梁戸牖乃錯動鳴事無久と有るに照應せて云ひ且は顯宗天皇御紀室壽御詞に築立稚室葛根築立柱者此家長御心之鎮也と見え已にも引る萬葉歌に眞木柱太心者有之香杼此吾心鎮目金津毛と有る如く家には先柱を云ひ柱には鎮る由を云ふ常例と聞たればなるが此詞なるも其如くなる上に凡ての御殿の全體を以て屋船命の神體と爲し其御靈を天津奇護言以て齋ひ鎮奉り其屋船命の平けく安けく鎮り坐む事を言壽申す由にて其裏には其御殿の內に坐て天下所知食む皇御孫命を動無く鎮り坐しめ給へと乞祈む由なるが故に次に此乃敷坐大宮地云々の事を言竟して其終に平氣久安久奉護留神御名乎白久屋船久々遲命屋船豊宇氣姬命登御名乎波奉稱利氐云々と稱別て屋船命と申す一神の功用の木と草とを集て大成る事を委曲に徵したる文なる者なり（然れば此の鎮は伊波比と訓ては混雜して其條理悉に別難き者なり）

此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美下津綱根（古語番繩之類謂之綱根）波府虫能禍無久高天原波青雲乃靄久極美天乃血垂飛鳥乃禍無久掘堅留多柱桁梁戸牖乃錯比（古語云伎加比）動鳴事無久引結留葛目能緩比取葺計留草乃噪岐（古語云蘇々岐）無久御床都比能佐夜伎夜女乃伊須々伎伊豆都志伎事無久平氣久安

久奉護留神御名乎白久

此段は御殿の全體は屋船命の齋ひ鎭り坐て守り給ふ處なるが其御殿を造仕奉る木と草とを用ひて物爲る所の物々に就て其禍災を防護り給はむ其々の禱言有るが故に其木と草との本に復りて久々遲命豐宇氣姫命と御名を顯し申給へるが揔ての山野に在る處の木草を祭るならず此は御殿と作れる木草に因て齋祭らせ給ふなれば屋船命と揔云ふ御名を稱別て屋船久々遲命屋船豐宇氣姫命と其功用の別異なる所を以て御守護と爲り給ふ所以を云る天津奇護言なる者なり（其は件々に辭別て云ふ事なれども其大較を心留（シタド）め得ざれば辨へ難きが故に豫め先云ふなり）若て彼前々段に在る如く磐根木根立草の片葉に至る迄言語へりしも悉く前段に至ては皇御孫命に和順ひ仕奉り磐根木根草葉共に天下の利用と爲る趣にて至極に治る狀なりしを治る時は必亂る所以に此段は將來を防ぐ爲に屋船命を祭鎭て其御守護を仰ぐ所なり是を以て此天津奇護言の擧は有なり（是迄の沿革を能く考定めて其然る所以を知る可き者なりかし）○此乃敷坐大宮地は當今の大宮所を云り譬は邇々藝命は高千穗神倭天皇は橿原などの類なるを謂なり敷坐の事は上に已に註り（巻二第四詞の下に在り）○底津磐根乃極美は下に掘堅留に照應る詞なり（其下に云るを見合す可し若て上よりは磐根木根立云々より句を隔てゝ齋鉏乎以と受け其より此に迄て其事實を慥に明せるなり）此は大地の根底までも大宮柱太敷坐る際限を云なり高天原に對たるを以て知べし（尚此事は巻二第四詞の下に委く云り）此を以て見る時は屋船神は御殿耳の神には坐ず其敷坐す大宮地の守護を兼て鎭り坐す事決し大嘗會式に凡在京齋場云々先鎭二祭其地一訖造酒兒先執二齋鍬一始掃レ地並掘二院四角柱埳一また凡造二大嘗宮一者云々鎭二祭其地一云々執二齋鍬一始掘二殿四角柱埳一など見えたる趣と此詞に齋部能云々齋鉏乎以齋柱立氐と有るに符合ひ大神宮儀式帳及延喜大神宮式等にも山口木本神の二祭有て然て後に鎭二祭宮地一の式有るは全く大嘗會式の旨趣に同じかる可し然れども此神を揔ての大宮所の神とは云べからず其屋舍の建る處に就て守護す在御神事なり大宮所の神は古語拾遺（神武天皇段）に坐摩（是大宮地之靈今坐摩巫所レ奉レ齋也）と見えたり思ひ混ふ可からず（地鎭の祭の柱埳を掘る事に係て行るゝに思ひ合す可し但土之御祖神を合祭る事勿論なり）○下津綱根（古語番繩之類謂二之綱根一）は天之血垂に對たる語なり記傳（久久紀若室葛根神條）に葛根は綱根なり顯宗天皇御紀室壽御詞に築立稚室葛根云々又取結繩葛者此家長御壽之堅也なども有るは凡て甚々上代の家庭は何處も何處も繩葛を以て

結固めし者なり其中にも此詞に下津綱根など云るは柱の本の方又床などの邊り凡て下の方を結固めたる處を云るなり（萬葉十九に天爾波母五百都綱波布萬代爾國所知牟等五百都々奈波布又續紀十九聖武天皇御母の諡を千尋葛藤高知天宮姫尊と奉給ふ葛藤も天宮に依れる事なり此に因て思へば右の萬葉なるも天とは新嘗宮の屋根を賀て云るなり○平田翁の五十音義訣に右の萬葉の歌を引て天空の最中に寂莫にして動き移らず其本つ眞洞の域有り是域乃天の本綱なるが是より五百綱千綱を引延たる如く圓々に向伏し餘り編成れる物にて天空即世界の大綱なる義なり故是を以て古語に此を都て高天原と云り其は今見放る如く綱目如（ナ）す彌張に張餘りつゝ原成して見ゆればなりと說れたりき）考の頭書に引れたる神代紀（御天降段第二の一書）に高皇產靈尊云々勅ニ大己貴神ー曰云々又汝應レ住ニ天日隅宮ー者今當ニ供造ー即以ニ千尋栲繩ー結爲ニ百八十紐ー云々出雲風土記にも此事を神魂命詔五十足天日栖宮之縱橫御量千尋栲繩持而百結結八十結結下而此天御量持而所レ造ニ天下ー大神之宮造奉詔など も有を合せ考るに地に掘堅たる柱根を束み結る料なるが故に屋造りの首に如此く稱云ふ事なりと見えたり（百八十紐とも百結八十結なども有を以て其堅固なる狀を知べし或書に荷田在滿主の說とて記せるを見るに小蓄繩は昔は宮室を作るに材と材とを繩にて綴（ツガ）ひ着て作れる成可し其繩の床の下に有れば下津綱根とは云ふか即下には葛目乃緩比と有り然れば此所は葛を以て諸の柱を互ひに繫ぎ合すと見えたりと有は然る言也）○波府蟲能禍無大祓祠には昆蟲乃災と作り鈴屋大人の後釋に雄略天皇の大御歌にも波布牟志母と詠せさせ給へり蟲は這ふ物なる故に都て蟲を然云なり（鳥を飛鳥と云に同じ尙又雨を降雨花を咲花と云も同じ事なり）偖此蟲の災の事は神代紀に夫大己貴命與ニ少彥名命ー云々爲レ攘ニ鳥獸昆蟲之災異ー則定ニ其禁厭之法ーと見え十種の神寶の中に蛇比禮蜂比禮などの有るも其を攘はむ料なり上代には民の住家野山に交りて假初なる搆なりしかば蟲の害多かりしなる可し（又大殿祭詞に擧られたるを思へば上代には唯並て此害の多かりしにも有へし今の世とても蝮蜈蚣蜂などに刺れて惱む事無きに非ず○考にひ波府蟲は地に這ふ蛇虹の類なり上代に國荒く家の搆疎に人も平土に臥し時は此昆蟲の害有けむと見ゆ）と有り（以上取意）繼體天皇御紀に伏地之蟲を書て波布牟志と訓り都ての蟲共に冬は地中に伏す者なれば綱を以て結固めたる御床の下などより然る者の蠢めき出て葛目より上に上りて人を咬もし刺も爲たりけむ故に此に波府蟲能禍無とは云なり（然ば上代に耳多かりしとは云べからず今世と雖も上古の屋造りならむには必然る事無しとは云ふ可からず禍の事は次なる飛鳥乃禍無の下に云り）○高天原は天日とも天極とも一區の域を指すには非ずして地外を圍繞れる氣中を稱ふ號にて此は高天原爾神留坐處また高天原爾事始氐など云ふ例とは異なり其は靑雲乃靄極美と續けるを以て知る可き者なり（但此事は古始太元攷に委く云りき）○靑雲乃靄久極美は卷三（第七詞下）に註り○天乃血垂は屋搆の中なる一處の名ならむとは先に下津綱根と有に對へて然思はるゝ者から尙思ふに下津綱根は這蟲の往來爲る處天乃血垂は飛鳥の上下爲

る處なる者なり（記傳に祝詞考に血垂飛鳥と云を以て思へば本草ちふ漢籍に姑獲鳥と云ふ鳥夜飛て屋また兒の衣に血を落せば惡しと云ひ又鬼車鳥とて滴血鳥も有りと云り後世字夫米と云は彼姑獲鳥に當ると云ふ人も有り古然る類の鳥の此國にも有しを以て云ならむ」と云れたる說は甚しき誤也彼文を能く見よ御殿の下方と上方と相對へて綴れる文にて底津磐根乃極と高天原云々極とを對たれば其次の下津繩根に對へたる天乃血垂も必御殿の上方屋根なる所を云る事明けき者なや」と云れたれど予は從はず）記傳十四（三十九丁）に登陀流と知陀流とを混つに說れたれど予が心得る所は異なり其は登陀流は其說の如く富足（トダル）なるが天之御巣の豐（トミ）大たる形容を云ふ語にて御巣乃（チ）天之御舍と云むが如し其は下に於出雲國之多藝志之小濱造天之御舍而云々於高天原者神產巣日御祖命之登陀流天之新巣之凝烟之云々と有を以て思ひ定む可き者なり天日隅宮を出雲風土記に十足天日栖宮に作れる日栖は御巣なる事云まくも更なり（又記の玉垣宮段にも此出雲大神の御諭言に修理我宮如天皇之御舍者御子必眞事登波牟と有るなどを思ふ可し）登陀流を富足と云れし說の信るゝ由は元來富とは家居に就て云ふ稱辭也其は古事記に意富斗能地神大斗乃辨神と有るは大殿主神大殿女神と申す事なるを神代紀には大富道尊大富邊尊と申す亦名有て此は伊邪那岐命伊邪那美命の彼天之御柱を見立八尋殿を建て御在しける時の行事（サマ）に因て負坐る御名なるが故に寶基本記には其天御柱（一名心御柱）の事を富物代と稱辭し橿原の御世に仕奉られし太玉命の孫天富命と申すも諸の齋部を率て大宮造り仕奉る功を以て稱給ふ名なる事著く顯宗天皇御紀室壽御詞に取葺草葉者此家長御富之餘也と有るも屋根は屋外まで葺餘す者なるが故に御富の餘とは云るなり古今集にも此殿は諸も富けり三枝の三端四端に殿造り爲り」と詠たり然れば古に金銀珠玉の多く聚る耳を富とは云はず其宅居の豐大にして物事の具足るを美稱て富とは云しにて漢籍に富潤屋と云にも心ばへ粗似たる事なり（尚下なる同殿の下に言義を說くを見る可し）是等を合せて登陀流とは天之御巣の形容を云ひ天之御巣とは天之御舍と云ふ事なるが故に登陀流と知陀流とは格別なりとは云るなり（記傳に古も今も人の家の富る事には炊烟の繁く起由を云ひ貧きには炊烟の發ぬ由を云ふ事下卷高津宮段に於國中烟不發國皆貧窮云々於國滿烟故爲人民など有るが如くなれば炊烟の稠く發つ事を祝ぎて即富足と云徵はしけむ云々と云れたれど然らず炊烟の事は其下に載る櫛八玉神の言に登陀流天之新巣之凝烟之八拳垂摩弖云々と云る其なれば登陀流の用に非ざるなり）知陀流は神武天皇御紀に細矛千足國と云る千足と同しきが千は借字にて正字は道なり其由は下に云べし但記傳に引れたる明宮天皇大御歌に知婆能加豆怒袁美禮婆毛々知陀流夜邇波母美由久爾能富母美由と有る知陀流は此と同じからずして百千足の義にて彌（イヤ）と連きたるなり記傳に夜邇波を家庭（ヤニハ）と解れ

たる其も然る言ながら庭とは平易なる地を云て此なるは家庭の義ならず國號考に葛野の邊りは今の平安京の地なれば山の巡りて褁たる中に在て山代國の奥區なるを以て國の秀と宣へるなり」と云れたる如く其地の平易なるを以て國の秀とは歌はせ給へる者なるをや然れば此毛々知陀流も家の事には拘るまじきなり因に云ふ庭とは水にも陸にも云ふ事なり萬葉三に飼飯海乃庭好在之また武庫海之船庭乎志など見え又國名の丹波國も國號考に丹波國丹波鄕より起れるが後に二國に別れて丹後國に隷るが丹波は借字にて多庭の義なる可し丹波丹後兩國共に山甚多き國なるに隨て里亦甚少きを丹波郡の邊は漸少し打開けて國の秀とも云ふ可き地なるが故に多庭とは云るなる可し其外にも齋場を由爾波など何れも平易なるを以て稱ふ處なり然れば千足國の千足は道足にて此の血垂も同言ぞと云ふ由は倭は國の眞秀にして天下の中區なれば東南西北を御し給ふ道足ると云ふ事にて足は幾條も多きなる可く所思ゆ然れは天乃血垂も所謂天之八衢とも云ふ如く幾條も多き氣脈を云なるが天翔り國翔り爲給ふ神は更にも云ず大虛を往來ふ鳥と云へども各其道路有て其を通ふ事と見えたり其は各々其鳥に依て高くも低くも經にも斜にも其往來爲る處の異有て其々に別なるを思ふ可し此故に人も常に試み知て網張度しなどして鳥を捕る事多かり此を以て見れば人の目にこそは見えざりけれ其道略有るなり天乃血垂とは其を云ふ事と聞えたり然れば下津綱根は屋造の用に就て云る者から這虫の通路と見て宜しけむ○飛鳥乃禍無は大祓祠に高津神乃災高津鳥乃災と有る此等を云なり遷都祟神詞に天若彥毛返言不申氐高津鳥殃爾依氐立處爾身亡支と見え神代紀に爲レ攘ニ鳥獸昆虫之災異ニ則定ニ其禁厭之法ニとも見えたり此等を合せて攷るに師說古今妖魅考の如く邪神姦鬼の類ひ世にも人にも妖を爲し恠を爲して殃災を爲すに或は天狗と爲り鷲と爲り鵄と爲りて皇神等の御守護の事を伺ふ者を云なり但此等の中には彼が化れるも有べく又其靈を飛鳥に取託て枉惡事を行ふも有べきなり此等の委しき事は古今妖魅考に詳なれば今云ふ限に非ず大祓詞後釋の說は未深く思ひ得られざりし說等にて依り難し禍は災とも殃とも災異とも書て其義なるが正しき神等の御罰め御祟り御咎めなどゝは樣異りて爲まじき妖鬼の不祥を行ひて不意く世をも人をも犯し惱むる類を云ふなり福また祥の反なるを思ふ可し言義は爲延ならむ其は彼に成す所爲の此方に來りて害と爲る由なる可く思はるればなり尙卷一第三詞なる幸の解を見て其に反對たるを知る可く且其幸の意を知りて禍の義を解く時は明かならむぞ○堀堅留多柱は佗祝詞に下津磐根に宮柱太敷立とも賀め云るを此は事實を云ふ所なる故に稱辭は爲ざるなり記傳十五丁十九丁に凡て上代には神宮も人の舍宅も伊勢神宮などの製の如く地を掘て立る事にて殊更に礎を爲るには非ず深く掘て立る事なり」と云れたるぞ此の說には能く允當れる又云く今世にも賤が家

には是有り地上に不居なして柱を立るは後の事なり）又玉勝間（橋巻）に地の發語に阿良加彌能と云は殿舍根之なり借古の殿舍は伊勢大御神宮の如く都て柱を地に掘入て建たりしかば殿舍根なる由なり（古昔殿舍を阿良加と云しは常なり其を御と云はで唯阿良加と耳も云りし事古語拾遺に造レ殿齋部所居謂ニ之麁香一細注に古語正殿謂ニ之麁香一と有にて知べし）と有り（右二書取意）上に引る大嘗會式に執ニ齋鍬一始掘ニ殿四角柱掐一掐別八鍬また大神宮式に掘ニ心柱穴一など見えたれば今の製樣に變改れる後も神宮及悠紀主基宮などは古製に因准て作らるゝ所なり然るに此大殿祭は天皇の常御殿にて祭らるゝ事なるを祝詞に其變改らざりし以前の事實を云るを以て此詞の甚古く天津神代の遺文なるを知べきなり（然れば考に此を藤原宮の頃の體なりと云れたれど其頃は正殿の製樣の漢めかしく成れる程なれば事實に符合はざる者なり）柱は上に云ふ所の齋柱を始として凡ての柱を云なり和名抄（居宅具）に柱（和名波之良）と有り波之良は間在にて記傳說の如く屋と地との間に立る者なれば也（記傳四に柱と云名義波斯は間（ハシ）なる可し間を波斯と云例多し間入又萬葉歌に相競端爾と云るも端は借字にて間爾の意なり又木にも非ず草にも非ぬ竹の節（ヨ）の間に我身は成ぬ邊（ヘラ）也」と云ふ歌も竹を木と草との間と云る也云々と見えたり）○桁は和名抄（居宅具）に桁（和名計太）屋桁也と有り掛板と云ふ事なる可きなり姓氏錄に天湯河桁命も温湯の桁に由れるなる可し（玉篇に屋桁屋横木也と有り）○梁は和名抄（居宅具）に梁（和名宇都波利）棟梁也と見えたり名義は全張なる可し（爾雅釋地に屋背柱曰レ棟負レ棟曰梁と見え釋宮に楣謂ニ之梁一と有るを說文に楣秦名屋櫋聯也と見えたるに楚辭九歌に擗蕙櫋兮既張と有て全張の義無きに非ず）顯宗天皇御紀室壽御詞に取擧棟梁者此家長御心之林也と見ゆ因に云此棟梁を御心之林と譬へ祝き給へる意は出雲風土記意宇郡拜志鄉の條に所レ造ニ天下一大神命將レ平ニ越八國一爲而幸時此處樹林茂盛爾時詔吾御心之波夜志詔故云レ林（神龜三年改ニ字拜志一）と有る如く物の茂く盛なるを林とは云ふが棟梁は柱桁などの如く茂く有る物に非ず譬へば物の樞柵の如く結めたる處なり然れば茂く盛に立列ねたる柱縱横に懸度したる桁等都ての樞柵と成れる處なるを以て御心之林とは祝給へるにて御心之林とは博く宇宙の物事を智識て心の榮と爲す義なり（和名抄に說文云平地有ニ叢木一曰レ林和名八也之と見えたり林野の林も心の林も同義の言なり）○戸は外にして室中に界ふ處なるを以て云り門は處外また宅外の義なるを思ふ可し和名抄（門戸類）に野王案在ニ城郭一曰レ門在ニ屋堂一曰レ戸と見えたり古書中に騰戸とも掖戸とも前戸とも後戸とも殿戸とも多く在れども此處は其差別無くして唯大凡に戸とは云るなり（又戸は外なるに物の界と爲る意を以て處（ト）と云ふ義も有り戸外など云ふ時は處外にて家の外邊なる由なり）○牖は間戸なり和名抄（門戸類）に說文云在レ屋曰レ窻（和名末止）在レ墻曰レ牖と有れども屋なるをも牖なるをも末止とは

云なり人の往來爲る爲なるを戶と云ひ戶有て往來無きを間戶とは云なり但櫛磐間戶命豐磐間戶命の間戶は此例なり其は卷二第五詞に云り尙戶牖と云るに次なる御門祭に由有り其は其詞即此の詞別なるが故なり其下に委しく云り○錯此古語云二伎加比一は木交（キカヒ）にて杜桁梁戶牖の行合ふ處を云なり古歌に片（カタメ）木の行合と讀たるも交雜の意なり○動鳴事無久は此詞に言壽鎭白久と有るに御殿を屋船神の神體として杜桁梁戶牖に至る迄惣てを齋ひ鎭る由なるに就て此は其變事を豫に云ふ故に如此く云るなり顯宗天皇御紀に築立柱者此家長御心之鎭也と有なも思ふ可し○引結幣督葛目能緩比は句を隔て丶下に無久と有り其意なり上に下津綱根と有る下に註る如く上代の家造は何處も何處も繩葛を以て結固めし者なるが故に其結目の緩ふ事無くとは云なり○室壽御詞に取結繩葛者此家長御壽之堅也と有を堅也を此の緩比に對へて思ふ可き者なり杜桁梁戶牖乃錯と造る錯の木交なる可く所思るに就て考るに釘などをこそは未用ひざりけれ製樣は今の伊勢神宮の若くなりしかば穴を穿ち木を貫通し其上を繩葛以て結び固むる事にて有しなる可し此事上に云る下津綱根の下に合せ見る可し大嘗會式に編レ搭爲レ扉と有る其編む所の者は葛を以て物爲る事云も更なり○取葺計督草乃噪蘇々岐古語云無久は彼室壽御詞に取葺草葉者此家長御富之餘也と有る此に同じ大嘗會式齋場條に卜部率二郡司以下雜色人等一入二卜食野一苅レ草即祭二野神一訖造酒兒先苅次諸人下手苅二大嘗宮草一准レ之云々皆以黑木及草構葺又大嘗宮條に悠紀院所造正殿一宇構以二黑木一葺以二青草一とも見えたる如く古は葺草をも用材と共に勝劣無く齋ひ愼しみ物爲ける事を知る可し前に天之御翳日之御翳止造奉仕禮留とは右の事共を云るなり下津綱根また葛目など有る物等は皆蔓草なれば卜食野に取る可し草は加夜と訓べし記傳五四十四丁に加夜は記に以二鵜羽一爲二葺草一と有て訓二葺草一云二加夜一と註せるが本義にて何にも有れ屋葺む料の草を云也萬葉一卷に吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草乎苅核又四卷に扳蓋之黑木乃屋根者山近之明日取而持將參來また黑木取草毛刈乍仕目杼勤和氣登將譽十方不在又八卷に波太須珠寸尾花逆葺黑木用造有家者萬代迄など此等を合せて思ふ可し茅と云一種有るも屋葺くに主と用る故の名也倭記に鹿屋野比賣神と申し書紀に草祖草野姫と有りて野神の御名に負給へる故は野の主と有る物は草にて草の用には屋葺ぞ主なりける故草字を即加夜とも訓り上代には大御殿を始て凡て草以葺つればなりと有り噪は源語野分卷に曾々計たる藁などもと有り偖此なる鳥などの啄み散すを云なる可し上に飛鳥乃禍無より少か響く樣なり噪は字書に騷とも群鳴とも注せるが騷には擾也とも訓たり都ては屋上に取葺く所の

草の亂れ無くとの義なる事云も更なり蘇々岐とは物の亂るゝ狀を云ふ語にて髮などにも屋根にも常に云ふ事なり下なる伊須は伎の下考合す可し○御床都比能此よりは御在所の事を云ふなるが此對に夜女能云々と有るは夜御殿の事を云ふ事著ければ此御床は譎しく晝御座を云なり江次第此祭條に夜御所朝餉など有を以て知る可し若て都は例の之に通ふ都にて天津神國津神など云ふ津に同じく比は邊にて御床之邊と云ふ義なり海邊留邊(ワナビハマビ)など多く有る語なり考に都比と續けて繼合(ツキアヒ)を略けりと云れたるは迂遠なり偖此は先に皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氐云々の照應にて凡ての御殿を云ふなり唯に御床と云ふは高御座及常の御在所を云るが御床之邊と云ふ時は甚廣くして凡ての事になるなり右の文より移りて天降利賜比志食國天下登天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎云々皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿と有る其瑞之御殿を汝屋船命を指て其神の御靈形と仰ぎ其を皇御孫命の坐敷るに就て如此は申せるなり神代紀天孫降臨段第二ノ一書に是時天照大神手持二寶鏡一授二天忍穗耳尊一而祝之曰吾兒視二此寶鏡一當レ猶レ視レ吾可三與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一と有を此詞に比校せて床乃高御座殿乃正殿なる事を察らむ可き者なり此事は古語拾遺にも記せり但壇々杵尊の御事と傳へたり是を以ても天降の御事依しは二度有し事を知る可きなり駿河風土記に引る香具山日記には同レ床共二大殿一氐座志止云々と見えたり此に依れば書紀なるも拾遺なるも殿字を大殿と訓りしなり○佐夜伎は古史徵此詞を引たるに掘堅留多杜桁梁戸牖乃錯比動鳴事無久と云るは屋船久々遲命の幸賜ふ功德に係り引結幣留葛目能緩比取計留草乃噪無久と云るは屋船豐宇氣姬命の幸賜ふ功德に係り餘の文は屋船命と申す名の惣體の功德に係れりと云れたるは然るに言にて上には用る所の木草の用異なるが其異なる所に依て有る變事を云るが御床之邊は惣ての御殿を云ふなれば是等に有る變事は屋船命の惣體に係れるに依て熟思ふに右の禍ども又動鳴また緩び噪ぎなどの事はしも何れも荒ふる邪神の所爲と其靈を物に取託て喧擾の響を爲しむる事にて磐根木根草葉の言語し餘韻を起す所なり心を深く留めて能々正し辨ふ可き者なり佐夜伎は古事記に豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝弖有祁理と有る傳に神武天皇御紀に聞喧擾之響と書て此云二左揶霓利氣離一と有り又此記の同段伊須氣余理比賣命の御歌に加是布加牟登曾許能波佐夜牙流萬葉二十九丁に小竹之葉者三山清爾亂友小竹之葉云々は風と云れども風に吹るゝ音なり又六十二丁に御山毛清落多藝都共に清は借字にて佐夜具良を云なり古今集に甲斐が嶺を佐夜にも見しかなど云

るは明亮にて別意なり古今集に小竹の葉の佐夜具霜夜を（顯昭注に霜の明亮かなる夜なりと云るは誤なり後の歌にも霜佐夜具なと誤り詠り）など有る如く物の音の喧しく騒がしき事なり此の佐夜藝は下に道速振神多在と有る是なり」と見えたり（此詞に以三天津御量一氏事問之磐根木根立知云々と有るを大祓詞には國中爾荒振神等乎波云々と有を以て其佐夜伎を爲す者は荒振る邪神なる事を知る可し家船命の御稜威の室中に彌綸(ミタ)ざる時は荒振る邪神の事を爲すが故に諸の災異の室中に在る事を恐れ愼しむ可し）○夜女能伊須々伎御床都比云々は已に說る如く晝御座を云るなれば此は決めて夜御殿の事なり江次第此祭條に夜御殿次朝餉云々と有を考合せて曉る可き者なり夜女は借字にて夜目なるが朝目の對なり萬葉十八丁に夜目見侶と見え源語（若紫巻廿七丁）に中門の甚々う斜み跟はひて夜目にこそ著きながらも」とも見えたり是等の歌は唯夜に至て見ゆる事を云ふなれど此詞なるは鈴屋大人說の如く夜眠れる間を云ふ古事記（白檮原宮段）に阿佐米余玖と有るも朝目の寤たるを云て其反なればなり（先には夜女は古今六帖に夜女の子の子鼠如何に成ぬらむ大美(アナウック)しと所思ゆる哉と見え定頼集和泉式部集などに鼠の事を夜女と詠み若狹國の方言にも然云ふを聞たれば鼠などの荒ろゝ事を云るにやと思ひしかども然は非ず又考に夜女は女童を云ふ云々の說は妄なり）伊須々伎は急進きなる可し古事記に立走伊須須岐と有る傳（二十巻十八丁）に此詞を引て夜睡れる間に物に厭はれなどして驚く類ひを云ふ（記なるは驚きて立走る狀なり）又源氏物語（朝貌巻）に西なる御門を云々

驚き開させ給ふ御門守寒げなる氣はひ宇須々伎出來て速にも得聞えやらずと有る宇須々伎も同言なる可し（伊と宇とは殊に近く通音也此も門守が驚きて立走來るを云り○重胤云く浮舟巻にも少し於受かる可き事を思ひ依るなりけん」と有を孟津抄に於受は荒々しく恐ろしき事を云ふと云るは此なる宇須々伎と全く同言なる者なり）偖又榮花物語（耀く藤壺巻）に曾々伎立て云々狹衣に若宮御在して曾々伎步き給ふなどは驚くには非れども事の狀は同じ（須と曾とは通音なり今世に人の行狀(フルマヒ)の靜やかならず騒がしきを曾々許志と云ふも同言なり）又大殿祭詞に取蒔草乃噪伎無久と有る蘇々伎は亂れ曾々久留を云て此も事は異なれども意は通へり又萬葉十六九丁に古部狹々寸爲我哉と有るも少年の進ろき騷ぐを云り（倚傳十七の四十二葉須々鉤の下考合す可し）と見えたり（以上取意）○伊豆都志伎事無久は鈴屋翁說の如く此は上の御床都比能佐夜伎夜女乃伊須々伎と有る二を受たるなり偖此の伊豆は大祓詞に伊頭と作て豆頭共に濁音の字なるは古事記に伊都と有るに從ひて清音に訓へし（字の任に濁音に訓む時は清淨の意に成て此の義には迂遠なり思混ふ可からず）伊都は神代紀に稜威此云二伊都一と有り其餘伊都之男建稜威之道別稜威之噴讓など凡て事に係る事に云ふ語なるを以て思ふに稜威稜威然と云ふ義なる可し言は右の佐夜伎また伊須々伎の二を合せて共に稜々しく威き事なるが然る殃災勿ら令め給ふ由なり

記傳七に稜字は漢書に威稜憚乎鄰國注に神靈之威曰レ稜と有り此意にてぞ書れけむ文選に稜威と有りと有り　○平氣久安久奉護留神御名乎白久は御床都比云々夜女能云々は畫御座夜御殿の事なるが其に闇に夜日の詞を藏して夜守日守爾平氣久安久と續きたるにて此總括は此詞の結句に在り偖屋船命と申す時は全躰の御殿の神に在すを其屋船命と申す一柱の功用の成る所は久々遲命豐宇氣姫命の掌別給ふ功用を鳩集て爲す所なるが故に今已に其二柱の御名を表はさむ料に如此は云なり其二柱の御名の上に屋船と冠らせたるに意味有る事云も更なり上に汝屋船命爾天津奇護言乎以氐言壽鎭白久云々と有て此に平氣久安久奉護留神御名乎白久屋船久久遲命屋船豐宇氣姫命云々言壽鎭奉事能漏落武事乎波云々と有る護と鎭との用格に心を着べきなり深く文意を校へて此に云ふ事共を辨ふ可し奉護留は上なる天津奇護言古語云久須志伊波比許登と有るに異無れば伊波比麻都留と訓べし其は先なるは此方より護言を以て言壽き鎭め奉る由なるが此は鎭り坐て云々の禍無く護奉り御在る神の御名を申す所なるが故に護は神の護給ふ事にて奉は神より天皇に奉なり能く此主客を心得べし護を守と訓とも僻事には非るが若くなれど然訓ては文中の妙處無きなり

屋船久久遲命是木靈也屋船豐宇氣姫命是稻靈也俗詞宇賀能美多麻今世産屋以二辟木束稻一置二於戸邊一乃以レ米散二屋中一之類也御名乎波奉稱利氐皇御孫命乃御世乎堅磐常磐爾奉護利五十橿御世乃足良志御世爾田永能御世止奉福爾依氐

此段は屋船命と申す全躰の御靈を稱別て屋船久々遲命屋船豐宇氣姫命と申す其御功用を申す所なるが此二神は木と草との御靈なり若て此二柱の事を古史徵第十三段に古事記に伊邪那岐命伊邪那美命云々既生國竟更生レ神云々生二風神名志那都比古神一次生二木神名久々能智神一次生二山神名大山津見神一次生二野神名鹿屋野比賣神一亦名謂二野椎神一神代紀正書に生二木祖句々廼馳一次生二草祖草野姫一亦名野椎又一書に伊弉諾尊與伊弉冉尊云々木神等號二句々廼馳一山陰に等字如何と云れしは實に然る言也など見えたれ共悉誤れる傳にて實は木神野神共に豐宇氣毘賣命の幸御魂に坐なり其は此詞に皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿汝屋船命爾天津奇護言以氐言壽鎭白久云々平氣久安久奉護留神御名乎白久屋船久々遲命屋船豐宇氣姫命登御名乎波奉稱利氐と有るを熟味ふ可し此文に掘堅多留柱桁梁戸牖乃錯動鳴事無久と云るは木神久々能智神の幸賜ふ功徳に係り引結幣留葛目能

緩比取賞辭計草乃喋無久と云るは野神草野比賣神の幸賜ふ功德に係れり（餘の文は屋船命と申す名の凡ての功に係れり）然るを草野比賣と云はずて豊宇氣姫命と云るは如何にと云ふに此神實は稻穀を生給へる神に坐を餘草をも生し給へるは其幸魂の御業なる故に此は本御靈の名を以て云るなり（又稻も萱も共に草なれば取都ても云つ可し）殿造には草は木に次て止事無き物故に如此く委曲に言壽奉る事なるに草野比賣神を擧給はぬ事の有めやは上文に唯屋船命と申せるは御殿の御魂を都て云る御名にて（其は御殿は木と草とにて作ればなり）下文に屋船久々遲命屋船豊宇氣毘賣命と云るは木草の御靈を別て云る者なり（御鎭坐傳記に屋船命と有る下の注に木靈久々能智命稻靈豊宇氣姫命也と見え御鎭座本記にも屋船命草木靈とも和久産巣日神・豊宇可能賣命 屋船稻靈神也とも見え奥儀抄にも保食神宅神とも見ゆ 此等の傳何れも實事の旨に叶へる者なり）如此れは古事記書紀共に木神野神を伊邪那岐命伊邪那美命の生坐る神と爲たるは混亂なる事炳焉し如此考定めて木神野神を豊宇氣毘賣神の幸御魂神とは云なり」と云れたるは千古未發の考なるに就て尙深く思ふに久久遲神草野姫神と申すは實に考の如く豊宇氣毘賣神の幸御魂なる事決き者から神代紀に使下山雷者採二五百箇眞賢木八十玉籤一野椎者採中五百箇野薦八十玉籤上と見え神武天皇御紀に薪名爲二嚴山雷一草名爲二嚴山雷一と見え祈年月次詞共に山口坐皇神等能前爾白久云々遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐皇御孫命能瑞能御舍仕奉と見え大嘗會式に卜部擧二國郡司以下及役夫等一入二卜食山一採レ材即祭二山神一訖造酒兒先執二齋斧一始伐木然後諸工下レ手（採二大嘗宮材一准レ此）又卜部率二郡司以下雜色人等一入二卜食野一苅レ草即祭二野神一訖造酒兒先苅次諸人下レ手（採大嘗宮材准レ此）と見え皇大神宮儀式帳にも大神宮式にも山口祭木神祭有るなど總てを考合するに木神と申すは山神の御事と諦しく見ゆる事なれば右の豊宇氣毘賣神の幸御魂の說は立難きに似たり然れども然は云れぬ由有り其は木は山にも野にも生る者なれども山を主とし草も其如くなれども野を主と爲るは其常を以てなるが故に山神は木野神は草と別れ知せる事なれども其原因を云ふ時は天日の光輝地大に照徹る時は土中に生發の神氣（ジク）を釀成す是即若御魂神の御恩賴（ミタマノフユ）なるが其形質を爲りて生出る所の者は豊宇氣毘賣神の全能にて其大較は草と木の二に過ず此二の物は剛柔强弱の差有るに依て草木とこそは云ひ分てれ其實を云ふ時は悉皆唯一種の生物なれど其功用に差別有て木神草神とは成出給

へる者なりけり然れば豐宇氣毘賣神の御功德を大山祇神に託て成給ふが故に木神久々遲命と申す一軀の神と成坐しなり又山にも依ず田畑に依す唯に平土の地に御靈を依せて幸給ふが故に野椎神と申す一軀の神とは成坐せり凡て此二柱神を幸御魂とは申す者の已に一柱神と坐して正身は大山祇神に靈合ひ坐て山材を知食して久々遲神と申す功用を施し給ひ野椎神は本の豐宇氣毘賣神に相屬て別に鹿屋野比賣神と申す御功を立給へるなり野椎神の木神に屬坐る證は大嘗會式の如きは山神野神を別ち祭らるゝ事なれども祈年月次等祭に山口神詞は有れども別に野神の詞は非ず又大御神宮にても山口神を祭る事は有れども野神を祭られざるは豐宇氣毘賣神に相屬坐るが故なり師も殿造には草は木に次て此事無き物故に草神を祭給はぬ事の有めやはと云れたるを思ふ可なり大山祇神の豐宇氣毘賣神と御力を合せ給ふ證は廣瀨大忌祭詞に廣瀨能川合爾稱辭竟奉流皇神能御名乎白久御膳持須留若宇加能賣能命登御名者白氏云々倭國能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾母云々と有るに辞別氏とも云ひ別たざるを思ふ可し然れば山口神祭の如きも山材を採る事に就ては豐宇氣毘賣神大山祇神二柱の大に幸給ふ御靈久々遲命と申す御名にて享給ふ事なる可し其は此詞に皇御孫之命乃御殿乎今奧山乃大峽小峽爾立留木乎云々と有るが已に御殿と造仕奉れる上にては屋船久々遲命是木靈也と有を照應せて知る可き者なり此を以て見れば豐宇氣毘賣神は其木の生出る本の御靈大山祇神と申すは其木を生し育る地の御靈なるが其生坐と生立との御靈合に久々遲命は生坐して山にては大山祇神に屬て其功德を建給ふが其山神は木靈に非ず生し立る所を主坐が故に祈年月次詞には遠山近山爾生立留大木小木乎云々此詞には今奧山乃大峽小峽爾立留木乎云々と有り又家にては豐宇氣姬神に屬坐て其家を守給ふが故に奧儀抄などにも保食神は宅神也ヤカツカミナリとは傳はれるなり但家にては其生出る所の元由と材を爲したる所とを以て豐宇氣姬神を屋船命と申して祀るが此にては山神を祭らざる事山にて宅神を祀らざるに同じ然れば久々遲命と申すは其二神の功德に成れる木神にて別神の如くなりと雖も其攝屬する本神有て功を立給ふ所なれば別に一柱とは立ざる者なり是を以て師說を予は信ひ從たるなり其は屋船も上に冠らせたるを以て山と屋とに依て其屬給ふ所の異れる事を思ひ明らむ可し尙委しくは祈年第九詞大忌山口神詞等の下に云るを見る可きなり源語東屋卷に「夜加の罪の隅の崩れ甚危うし」と有を宅を夜加と云なり ○屋船久々遲命屋船と冠て稱奉れるは御殿に屬てなり其說上に云り名義記傳五四十四丁と久久は莖なり和名抄木具部に莖和名久木と有り莖は字書に草木之幹也と云り其

を久々と云るは萬葉十四に久君美良なり莖韮又九久多知和名抄に豊久々多知蔓菁之苗也などなり俗に物の速に長る貌を久々登と云も此意なり記に久々年神久々紀若室葛根神有り此等の久々も同し智は男を尊む稱なり」と有り以上取意此に就て思ふに師說の如く豊宇氣毘賣神の幸御魂木神久々遲神草神草野姫神と二柱に成坐るが自然にして木神は男神草神は女神と成給ひ草木の剛柔は實に男女の差別なり古始太元考伊邪那岐命伊邪那美命の傳に云る如く岐は莖(キ)にて男根の象なるか岐とは氣の張出むと爲る如く晋み伸るを云ふ語なるに併せて此の久々遲命と申す名の遲は男を尊む稱なるに木神なる事奇しき迄に妙なる處なり倭記傳に草は莖多(クキフサ)なりと云れたれど然らず莖少なる可し草神の比賣神に御在るが上に其草また女なれば云なり若て記に羽山戸神娶二大氣都比賣神一生子云々久々年神次久々紀若室葛根神と有るが心床しくて今此に合せ考るに是亦大山津見神豊宇氣毘賣神の睦靈合に依て木神久々遲命を生出給て木靈と爲給ふ所の功用彌々滋蔓り著見れたる也久々年神は木々の年に蕃息り扶疏す事を以て負坐る御名久々紀若室葛根神は山材を取て御殿を造り固むる由の御功坐れば此神をしも併せ祭らる可き事なるに然らぬは此二柱は國土にて其御功を立初坐るに依て天津奇護言には載られざる也然れども信には其家造の事に御功を令立給はむ爲に須佐之男大神大山津見神の女を娶て大年神を生給ひ其子に生坐しめ給へるなれば久々遲命に相共ひ坐て大き功坐す神なる事疑無き者なり其は豊宇氣毘賣神は稻靈神なるに大年神の此國土にして農作る功を以て輔佐奉て稻穀の出來るが如く各其體と用と有る事なるが凡人に傳る所或は體を知て用を知らず或は用を知て體を知らざる者少しと爲す能々神典を讀み考へ尚此を思ひ思ふ可き者ぞ此事卷一第二詞の下に云り考合す可し　○屋船豊宇氣姫命は屋根に葺く所の草神なり然らば草野姫命とか野椎神とか申す可きと如此くなるは辟木束稻(サキツカシネ)の事をも兼たるが爲に其本御靈の名を表章せるなり上に引る大嘗會式の如きは辟木束稻の用無し此故に山材を採るに就て山神を祭り草を苅るに就て野神を祭らるゝ事なるに此は同じ木草の上を云ふに久々遲命豊宇氣姫命を祭らるゝ右の子細に依り且は上に天津日嗣所知食須云々と有て下に其結有て皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流と見えたる其事を兼たれば屋船草野姫命とは云ふまじく本を以て屋船豊宇氣姫命とは申す可き事なり古史徵に引結幣登葛目能緩比取登計登草乃噪無久と云るは野神草野比賣神の幸賜ふ功德に係れり然るを草野比賣と云ずて豊宇氣姫命と云るは如何と云ふ此神實は稻穀を生給へる神に坐を餘草をも生し給へるは其幸御魂の御業なる故に此は本御靈の名を以て云るなり又稻も萱も共に草なれば取總ても云つ可し」と云れたるは然る言ながら予が說の如くならむには其辨にも及ぶまじき程の事なり　○分注に是稻靈也俗謂二宇賀能美多麻一今世產屋以二辟木束稻一置二於戶邊一乃以レ米散二屋中一之類也と有る今世は延喜の當今を

云るなり因に此を說く可し是稻靈也は其豐宇氣姬命の本分の御德を注せるなり久々遲命の下に是木靈也と有る注に對たれは草靈と記す可き所なれとも束稻の事を兼たる故に草野比賣神と記さゝるを以てなり俗謂ニ宇賀能美多麻一と有は甚しき誤なり古事記に須佐之男神云々娶ニ大山津見神之女名神大市比賣一生子大年神次宇迦之御魂神と有る此正說にて神名式に山城國紀伊郡稻荷神三座並名神大月次新嘗と有を記傳に引れたる或書に本殿宇賀御魂命第二殿須佐之男命第三殿大市比賣と有は古傳の遺れる者なる可し然るを已くより豐宇氣毘賣神に混れたる傳有り神代紀に伊弉諾尊又飢時生兒倉稻魂命倉稻魂此云ニ宇介能美拖磨一と見え倭姬命世記に豐受大神一座亦名倉稻魂命是也とも又調御倉神宇賀能美[]麻神坐亦號ニ大宜都比賣神亦保食神一神祇官社內坐御膳神是也共見え廣瀨社緣起に倉稻魂命此大忌廣瀨社坐也又曰ニ若宇加乃賣命一伊勢外宮分身也とも注式稻荷神社の下に中社倉稻魂命播ニ百谷一神也と有は宜けれ共其下に一名豐宇氣姬命云々と有るなと舊くより此俗謂の如く混雜れ來る所なるが豐宇氣毘賣神は實に稻穀の靈神なるか故に一名を保食神とも大宜都比賣神とも申す事なれとも宇迦之御魂神とは異なり御魂とは其本體の豐宇氣毘賣神坐る其功用を輔相給ふ謂にて恩賴と云ふ意ばへ也注式なる倉稻魂命播ニ百谷一神也と有る百谷は百穀の音を借て書るが百穀を播と有にて曉る可なり記傳九五十二丁に彼は食の元始の靈此は其食の事に功坐し神なり」と云れたるは豐宇氣毘賣神と宇迦之御魂神とを甚能く差別を立られたる說なり此に因て古史第十一段の徵に亦名と定められたる說には從はず卷一第二詞卷六大忌祭詞の下にも此辨有るを考合す可なり碎木ゝは木を割て束ね其中に木葉を刺し葛以て結へる我が淡路國の方言に齋木と云て年始て門外宅內に立る物有り佐伊木は佐伎木の音便なる可し又正月に山神を祭るにも立る事なり此を以て思ふに此碎木束稻は產屋の事耳には非ず正月の門松注連餝等の事と見えたり此事の來由を何れの書にも記せる事無きぞ却て上古より有來る天下一般の風にて年の始に此屋船命を祀ふ神事なる者なりけり此事卷一第二詞の下に云るな見合す可し古き歌に年木伐ると詠るは佐伎の佐伊と轉れるた歳と心得誤れるにや束稻は稻を束ねて外邊に懸置て妖氣を避るなる可し田令義解に束稻と有は束ねたる稻を云るが此なるは正月などに引く所の注連繩に束ね下たるを云に見えたり稻の妖氣を避る事は日向風土記に曰臼杵郡內知鋪鄕天津彥火瓊々杵尊離ニ天磐座一排ニ天八重雲一稜威之道別道別而天ニ降日向高千穗之峯一時天暗冥晝夜不レ別人物失レ道物色難レ別於玆有ニ土蜘蛛名一曰ニ大鉗小鉗二人

奏ニ言皇孫ニ以ニ尊御手ニ拔ニ稻千穗ニ爲レ粈投ニ散四方ニ必得ニ開晴ニ于時如ニ大鉗等所ニ奏搓ニ千穗稻ニ爲レ粈投散則天開晴日月照光因曰ニ高千穗二上峯ニ後人改號ニ知鋪ニと有を以て曉る可し是を以も豊宇氣毘賣神の御稜威の世に祟はしく尊く坐す御事を思ふ可し尙大祓詞の下に散米の事を云るを見る可し　置於戸邊は產屋の戸の邊に置くなり其狀如何に有けむ今知る可からざれども辟木は立て置き束稻は穗を下へ向けて垂るゝなる可し今國々にて爲る所の正月の餝に物爲る門松注連繩など皆が淡路の齋木にて此にも似たる事なり　乃以レ米散ニ屋中ニ之類也は神事に物爲る散米にて此は殊に妖氣を拂ひ不淨を淸々しく爲る事なる故に諸神事には遺傳はる者と思えたり源語横笛巻なる女三宮の產屋の所に男君も寄り御在して如何なるぞと宣ふ宇知麻伎散しなどして亂りがはしきに夢の阿波禮も混れぬ可しと見え紫式部日記にも上に渡らせ給ひて御覽ず若宮御在し坐せば打蒔し罵る云々殿の公達二所源少將雅通など打蒔を投ナゲ々尻高う打なさむと爭ひ騷ぐ云々若君御誕生の後御湯殿の日米を打散す事を云なり又御產記部類に元永二年五月二十八日皇子誕生崇德院　同廿九日御浴殿右大臣女高倉殿持ニ御劒ニ典侍藤能子散米また治承二年十二月十二日中宮御產氣此間內外周章當障子聲頻未ニ點皇子降誕など有るも其頭產屋の不淨を攘ひ且妖氣を退ハラふ習俗にて有けるを取て書けるなり今も淡路國などにては打蒔とて產屋に搗精けたる米を置くは古の遺れるなり　平田翁の說を聞くに或る神仙の言に產屋に散米を爲る事は豆津魔と云ふを攘ふなり此豆津魔と云ふ小鬼は土龍（ムグラモチ）の數歲を經て妖を爲す者なるが此小鬼精米を殊に畏怖るゝ者なる故に古より散米は爲る事なり此は胞衣の土中に埋れたる所に好みて生するが年長るに隨ひ漸々其子の害を爲して或は病者と爲し或は夭死爲させ或は運命を折きなど爲る者なる故に胞衣の埋處に心を着可き者なりと云れて其說玉襷と云ふに記されき　但此は此祭に預らぬ事には有れど甚忝き說なり其は瑞御殿を始奉て凡て人の宅內に住む事は其身を保護つ事は更也夫婦相婚ぎて子孫ウミノコの八十連聯に傳はり續く爲の故なり此を以て產屋には此二柱神の御靈形に辟木束稻を齋ひ物し米を散して妖鬼を逐ふ故實の有ける事を知るに足れる明無り依る可く行ふ可き者なり　然れば大殿祭は朝廷に耳行はれて民此を知ざりし故に朝廷ならぬ所にても產屋には其祭を行へる其即大殿祭の儀の如しと云義なり　○御名乎波奉稱氏利は素より久々遲命豊宇氣姬命と申す御名に屋船と加て稱奉り又其二柱を合祭て屋船命と稱申すとなり此事已に上に云れば見合す可き者なり　○皇御孫命乃御世乎堅磐常磐爾奉護利は上に出巻一第一詞　但祐には齋比奉とも伊波比奉とも記るを此は少しく心して書るなり上なる天津奇護言また平氣久安久奉護留神御名乎などの說を見合す可し　○五十橿御世乃は上に出巻一第三詞の下に註せり又巻五春日祭下にも云りき　○足夏志御世爾は五十橿御世は茂御世にて尙滿足ると云ふ事なり萬葉二に天原振放見者大王御壽者長久天足有と見えたり　鈴屋大人說に五十橿御世乃足夏志御世爾田永能御世止と有る此文言の重り樣劣く煩はしと云れたれど垂仁天皇の大御子を五十日帶日子王と申す五十橿足と重

れたるなれば煩はしと云ふ可きにも非るにや　〇田永能御世登奉福爾依氏は上に出卷一第三詞但上に禍無久と有る反なり考合す可し

齋玉作等我持齋波利持淨麻波利造仕禮留瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃玉爾明和幣爾依氏古語云曜和幣乎附氏氣齋部宿禰某我弱肩爾太襷取懸氏言壽伎鎭奉事能漏落武事乎波神直日命大直日命聞直志見直志氏平久良氣安久良氣所知食登白

齋玉作等姓氏錄右京神別に忌玉作高魂命孫天明玉命之後也天津彥火瓊々杵尊降ル幸於葦原中國一時與二五氏神部一陪二從皇孫一降來是時造ニ作玉璧一以爲ニ神幣一故號ニ玉祖連一亦號ニ玉作連一と有る此なり其を古語拾遺に太玉命所率神云々櫛明玉命出雲國玉作祖也云々令ミ櫛明玉命作二八坂瓊五百箇御統玉一と見え又神武天皇段に令下天富命率ニ齋部諸氏一作中種々神寶上鏡玉矛盾木綿麻等櫛明玉命之孫造ニ御祈玉一古語美保伎玉言祈玉也其裔今在ニ出雲國一每年與ニ調物一貢ニ進其玉一と見え臨時祭式にも凡出雲國所進御富岐玉六十連三時大殿祭料三十六連臨時二十六連每年十月以前令ニ意宇郡神戶玉作氏造備差レ使進上一と有る此にて神戶は出雲風土記意宇郡條に忌部神戶郡家正面は廿一里二百六十步國造神吉詞奏參ニ向朝廷一時御沐之忌里故云ニ忌部一即川邊出湯と有るは玉作氏の住りしより忌部と云を國造の神吉詞奏しに上京の時に其湯にて沐浴せりし故に忌部と云ふと其頃誤りしにて實は齋玉作に因る忌部なる事云も更なり又同郡に玉作山郡家西南廿二里有社また玉作川源出ニ郡家正西一十九里拜志山一北流入ニ于海一有ニ年魚一と見えたり神名式に玉作湯神社有て風土記にも載れるは玉作山のなる可し因に云ふ此玉作氏の出雲國に住む元由は神代紀一書に素盞嗚尊將レ昇レ天時有ニ一神一號ニ羽明玉一此神奉レ迎而進以ニ瑞八坂瓊之曲玉一故素盞嗚尊持ニ其瓊玉一而到ニ之於天上一也云々と有る其御緣に依る所と見えたり又國造段の一書にも大物主神を祀る所に櫛明玉命爲ニ作玉者一とも有り尚古始太元效に云ふ可し僣齋玉作と齋を加て云るは太玉命以來其裔の率る所の齋部なればなり鈴屋大人は齋玉作は齋て玉を作る人なり齋は作る人に係れる稱にて考に齋玉は忌謹て作れる玉なり」と有は非なりと云れたり尙記傳十五玉祖連下に見合て辨ふ可し　〇持齋麻波利　持淨麻波利は上に出卷四第十詞淸麻波利の意は大祓詞なる淸給の下に說く可し麻波利は齋麻波利の下に見ゆ　〇造仕禮留は考に造仕奉禮留と訓れたるに從ふ可し上に天之御翳日之御翳止造奉仕禮留と有と事は異れども語例同じければなり第十詞の次なる辭別に持由麻波利仕奉禮留と有に依て然訓む可きかとも思ゆれども齋玉作より續きたれば造も字の如く訓べきなり　〇瑞八尺瓊の瑞は美麗しき意と物の足整へる意有り御紀にも見えたり出雲神賓詞に靑玉能水江玉と云る水も此と同じく瑞吉玉と云ふ事なり其下に說くを待つ可し此は上に瑞穗之國の下に委く云り八尺は緖に連ねたる玉の數多きを云ふなり皇大神宮儀式帳に八咫緖乃曲玉と有る咫は尺の誤にて八尺緖と云ふ事なる可し考に八尺瓊は長き緖に五百箇を多くの玉を貫たるを

稱云なり其八は彌にて限り知られぬ事尺は漢字を借し耳にて八十量なり」と云れたるは然る事にて玉は緒に長く連ねたるを賞る事にて記に即其御頸珠之玉緒母由良邇取由良迦志而と見え萬葉十に玉緒長春乎十一に玉緒長意哉なと有を以て知べし然るに神壽詞後釋に八坂八尺など書るは皆借字にて八は彌の意尺は佐明なり羽明玉櫛明玉など云ふ神名も玉に因れる事神代紀を見て知べし佐は佐夜中佐寢る云々の類の佐にて云々佐霧を大祓詞に御霧と有る御は本より眞と通へるを以て佐も然る事を知べし云々と有れど尙此は考ノ說勝りて聞ゆ因に云ふ尺は字音かと思へども此の古言にて一丈を十に割(サキ)たる由にて尺(サカ)とは云るなり何の事も無く彌尺と見るぞ宜しき　瓊を迩と訓む言義は麗々(キラ〳〵)と光澤(ヒカリウルハ)しき意なる可し古事記に二柱神等各御面の麗美しきを見愛給ひて相共に阿那迩夜志と詔給へるを神代紀には憙哉又美哉また妍哉と作きたるを以て曉る可し記傳に字書に憙悅也とも好也とも注し妍は麗也とも美好也とも有と記されたる如く祝詞に赤丹乃穗爾と云ひ萬葉十八卷に二布夫爾咲而十六に丹因子等何また丹成見羅また丹津蚊經色また丹名著來また丹穗之爲衣など多く見えたる皆右の字義に異ならず尙此外にも左丹頰布また爾保布など多かるも邇の義は同じ　御紀に天之瓊矛と書て瓊此云努と有を努字一本に貳と有し由私記に見えたり瓊を邇と云ふ證なり因に云瓊を努と云るに木(キ)之末を木末(コヌエ)など云例にて第二音の第五音に轉りて下へ續くなり古事記に天沼矛と見え神代紀に瓊響瑲々此云ニ奴儺等母母由羅爾など見えたり記傳四卷天沼矛の下考ふ可し　○御吹支(ミホキ)乃は御祈なり古語拾遺に御祈玉古語美保伎玉言祈禱也四時祭式に御富岐玉と見えたり考に此祭を大殿祭と云て保賀比には保岐を延たる言なり上に言壽鎭とも云ひ下の神賀に玉以て壽申せり然れば總て祈る祭に奉る故に御壽の玉とは云なり」と有り

○五百都御統乃玉爾は記傳七三十六丁に五百津は唯數の多きを云ふ津は一ツ二ツの都なり百の假字は富なり𦾔と書くは非なり美須麻流は神代紀に御統此云ニ美須磨屢ーと有り纂疏に以レ絲貫穿總ニ括之ー也と有る意にて即須夫流と語通へり志婆流志麻流なども本同言の轉れるなる可し又谷川氏云和名抄に昴星須八流と有は彼星の形勢の此御統に似たる故の名なる可し又天門冬を須末呂久佐とも云も葉の細かに集れるが似たればか竟宴歌には御統をも須婆流の玉と云りと云り　記中の高比賣命歌に多麻能美須麻流美須麻流邇邇は瓊なり　萬葉十二十六丁に水良玉五百都集乎解毛不見十八二十四丁に思良多麻能伊保都々度比乎手爾牟須妣など賦るも同物也集と云るも即統の意なり」と見えたり是にて心得可し臨時祭式に御富岐玉六十連云々と有る連字も此御統の義に同きなり　偖玉を多麻と云る多は字音共に同義にて太しき意麻は眞にて物の精妙の極なるを云ふなり物を多麻布と云も此より出づる言なる由記傳に註されたるが如し然れども予が說は多眞(タマ)の詞有る其に辭の添て活機せるなり尙別に下能御統と云ふ書に委しく云りき　偖此御祈玉を用らるゝ事の其元初は彼天璽の八尺之曲玉を以て物爲給ひし者なる事上に委く說るを以て其沿革を曉る可き者なり然るに江次第なる大殿祭條を閱るに御祈玉の事は無くして散供畢撒ニ土錢ーと有て細注に以レ絲貫レ之と有は已に此頃絕たるなり土錢とは土を錢の如く圓め燒たるに淸き麻を以て緒と爲たる者なり今しも用らるゝは右の土錢なるは且惜しき事なり舊儀の御祈玉に復されむ時もがな　○明和幣古語云ニ爾伎氐ー曜和幣乎附氣氐の明曜は諸祝詞に明妙照妙と云るに

同じ借當には明妙は無紋なるを云ひ照妙は紅白衣を云ふが此なる明和幣は白和幣曜和幣は青和幣ならむと思ゆ古語拾遺に令ニ長白羽神種レ麻以爲ニ青和幣一（古語爾弖）氏令ニ天日鷲神造ニ木綿一津咋見神穀木種ニ殖之一以作ニ白和幣一（是木綿也云々）と見え神武天皇段に天日鷲命之孫造ニ木綿及麻並織布一（古語阿良多倍）云々其物既備天富命率ニ諸齋部一云々陳ニ其幣物一殿祭祝詞と有る次序を考て知る可し四時祭式（大殿祭條）に安藝木綿一斤云々以ニ筥四合一置（一合云々一合盛切木綿云々）また忌部取玉懸ニ殿四角一御巫等散ニ米酒切木綿殿内四角一と有るを見つ可き者也（但安藝木綿一斤の前に絲四兩と有は絹に代て用るにて明和幣曜和幣ならむかとも思へども其は御祈玉の緒に用る料にて此は安藝木綿を云なり木綿を和幣と云ふ事は次に註り）

爾伎氏は記傳八（三十八丁）に書紀に白和幣と有て和幣此云ニ尼枳底一と見ゆ底は多閇の約りたる言にて即爾岐多閇なり爾岐は即和字又熟字などを訓り多閇は師說に絹布の類を總云名なりと有り（此事冠辭考白多閇の條に見ゆ又此次にも云り絹の切を佐伊弖と云は裂多閇なり又俗に云ふ古手は古多閇なり是等皆多閇を約めて弖と云ふ例ぞ）されば幣字を書は神に奉る方に就ての事にて此物の本義には非ず書紀に懸ニ以粟國忌部遠祖天日鷲所レ作木綿一と見え古語拾遺に令ニ天日鷲神以ニ津咋見神一穀木種ニ殖之一以作ニ白和幣一（是木綿也已上二物一夜蕃茂也と有り二物とは麻と二なり又神武天皇の御代の事共を云る處に穀木所生故謂ニ之結城郡一と有り是下總國の郡名なり）豐後風土記に速見郡木綿郷此郷之中栲樹多生常取ニ栲皮一以造ニ木綿一因曰ニ柚富鄉一又寶基本記にも謂下以ニ穀木一作中白和幣上名ニ號木綿一と有り斯在ば白和幣は木綿の事木綿は穀木皮以て織れる布にて古は普く用たりし物也（此を布に爲る事漢籍にも見えたり和名抄に穀加知木也と云ひ字鏡にも穀構也加知乃木と有り借布に爲し事は甚古の事にして漸下りては紙に耳して布に爲る事は絶つと見えて和名抄にも穀紙は見えて布に爲る事は見えす借師は此穀字を即由布と訓れき然も有べし然るを古書共には由布には唯木綿字を耳用たり和名抄祭祀具に本草注云木綿折レ之多ニ白絲一者也和名由布と見え又木部に杜仲陶隱居本草注云杜仲一名木綿折レ之多ニ白絲一者也和名波比末由美と見ゆ此に依て思へば古より由布に木綿字を用るは杜仲の一名を取れるなり然れど其は穀を杜仲と思誤れるにて實に杜仲を用たるには非ず然らば和名抄にも祭祀具に穀を擧てる和名由布と記す可き事なるに木綿を擧たるに古より世に普く用る字を出せる耳にて實に杜仲なりと爲るには非ず故に同陶氏が說を引ながら彼處には杜仲の字をも波比末由美の名をも擧ず其は別に木部に出せり當時已に杜仲をは由布には用ざりし事知べし借又杜仲の外に別に木綿と云ふ大小二種有り其の小きは近代に弘れる紀和多の事なり大なるも共に實の中に白綿有を採て布には爲る物也然れば是等も又由布とは甚く異なり字の同じきを以て思ひ混ふ可からず）其は共に白き物なる故に白多閇とも（古歌などに白多閇と多く詠るも事此布なり白多閇の麻衣白多閇の藤なども有れど其は邂逅の事なりかし）白由布とも白爾岐弖とも云なり（又古書に栲機栲衾栲繩栲領巾など多く有る栲も右に引る豐後風土記に同物なり故萬葉に白栲とも書き又萬の白き物に栲を借て栲角乃など枕詞にも云り角は綱也と師は云れ或人は栲津布也と云り借栲字は楮を草書より誤つと師は云はつれど栲字を書る無ければ如何有む此は何別に和字ならむ）又青和幣は古語拾遺に令ニ長白羽神（伊勢國麻續祖今俗衣服謂ニ之白羽一此緣也）種レ麻以爲ニ青和幣一（古語爾伎）と有り（如此く青和幣をば長白羽神に白和幣をば天日鷲神にと二神に分て云れども末に神武天皇御代事を云る處には天日鷲命之孫造ニ木綿又麻幷織布一仍令下天富命率ニ日鷲命之孫一求ニ肥饒地一遣ニ阿波國一殖ニ穀麻種一其裔今在ニ彼國一當ニ大嘗之

年ニ貢ニ木綿麻布及種々物ニ所以郡名爲ニ麻殖ニ之緣也云々と云ひ式に阿波國麻殖郡忌部神社或號ニ麻殖神ニ或號ニ天日鷲命ニと有れば青和幣も共に日鷲命の掌て作れりし事知れたり然れば以津咋見神云々と云る如く麻をも以ニ長白羽神ニ同じく天日鷲命掌り作らせたるなる可し其證尙次にも云べし倭麻を責と云は緒の意にて絲を云名なれば本麻には限らず然れば麻殖郡てふ名も麻耳ならず穀を殖たるにも亘れり字に泥む可からず 麻は木綿に比れば稍青き故に青和幣と云なり倭書紀に下枝懸ニ木綿ニと云ひ又天日鷲神爲ニ作木綿者ニなど云るは此記など彼此と合せて思ふに白和幣耳には非で必青和幣も具ふべければ如此く云ふ時は穀と麻と二種を凡ても木綿と云りと見ゆ是又二種共に天日鷲神の作れる證とも爲べし〇重胤云く皇大神宮儀式帳天八重賢木の事を云る所に右の神代紀に下枝懸ニ木綿ニと有を下枝懸ニ天眞麻木綿ニと有る眞麻は青和幣を云ひ木綿は白和幣を云るにて事の趣を委しく云別てるなり尙又式などに其料物を擧たる所に木綿と麻とを出せるに其を用る所には唯木綿と耳云て麻の事は見えぬが多きも二種を合せて木綿と稱故なりけり凡て賢木に木綿を附など云るは二種を合せての名なり倭白和幣青和幣共に織たる布をも云ひ萬葉六に木綿疊手向などゝ有は必織たる布と聞ゆ又未織は爲で唯絲に爲たる任なるをも用たりと見ゆ但古書に木綿をば作と云て作と書て波具と訓り剝なり織とは云ず若布ならば倭文織などの如く織と有る可き事なり 又式などに布若干端木綿若干斤麻若干斤など布の外に擧げ端などは無て斤と有も絲ながら用る證なり斯れば木綿手次木綿疊なども糸の任なる可し 然れば今賢木に垂たるも是なり麻も常には未織ざるをも云へども又其布をも同じく麻衣なと云る如く木綿も然なり然れば總名の多閇ら織たる未織さる共に通はし云べきか〇重胤云く四時祭式此祭條に安藝木綿一斤と有て宮にも盛ニ切木綿ニと有れば此も未織ざるを云なり又江家次第大殿祭條なる土錢の製を見るに麻を以て緒と爲たり土錢は御祈玉に代て用ひ麻は明和幣曜和幣に代て用らるゝなり然るに此詞に明和幣曜和幣乎附氣氏と有るを以て見れば古は必織たるを用られけむを齋部氏の衰より延(ヒキ)て切木綿を用るなる可し 又神に手向る奴佐幣また幣帛など書も絹希をも云ひ未織ざる木綿麻をも云り麻と書は種々の中の一に就てなり又後世に紙を用るは木綿の代なり と見えたり〇齋部宿禰某我は齋部遠祖天太玉命天照大御神の新宮の大殿祭仕奉り其天上の儀を擬して高千穗の皇大宮の大殿祭仕奉られし先蹤に因准て天富命橿原宮に初國所知し天皇の大殿祭仕奉られし以來其裔孫と在る齋部氏の歷世相承て仕奉る職にて在し故に如此は云なり祝詞式の首に凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞と有て上に四時祭式を引て云る如く唯殿祭門祭の祝詞耳を申す事は神代の舊儀に非ず其大宮造の大較は專此齋部氏の仕奉る事なるに就て其祭祀を掌り其祝詞は申せりしなり其は古語拾遺に凡奉レ造ニ神殿ニ者皆須レ依ニ神代之職ニ齋部官率ニ御木麁香二郷齋部ニ伐以ニ齋斧ニ掘以ニ齋鉏ニ然後工夫下手造畢之後齋部殿祭及門祭訖乃所ニ御坐ニ而造ニ伊勢宮及大嘗由紀主基宮ニ皆不預齋部所遺四也と慨み申されたるにて知る可し但廣成主の慨みは神宮及大嘗會由紀主基の如き神殿耳の歎きなれども實には同書神武天皇段に建部橿原經ニ營帝宅ニ仍令天富命率ニ手置帆

良彦狹知二神之孫一以二齋斧齋鉏一始採二山材一構二立正殿一と有れば大殿造の事に於ては悉く齋部の管領する所にて在し也然るを令の御定に木工寮内匠寮出來て修理職なと出來て其家職は廢たれども此は忌部に限らず他氏と雖も然なれば其を所遺とは云ず唯神宮度由紀主基宮の事を耳故實に違はせ給へるを歎き申されたる殊勝にも哀なり　又殿祭門祭者元太玉命供奉之儀齋部氏之所職也雖レ然中臣齋部共任二神祇官一相副供奉故宮内省奏詞稱下將レ供二奉御殿祭一而中臣齋部候中御門上至二寶龜年中一初宮内少輔從五位下中臣朝臣常恣改二奏詞一曰下中臣率二齋部一候中御門上者彼省因循永爲二彼例一于レ今不レ改所レ遺五也とも見えたり　但齋部氏の衰へたる處に乘て中臣氏より如此く蔑視する事に成れる其所以は如何と云ふ中臣氏には鎌足大臣を始め其任重き人々有て朝政に預仕奉れるを齋部氏は幣帛を造り神事に仕奉て耳有しかば其官位をも台（一タカ）きに進められざりし故に中臣の下風に立つ事とは成れりし者なるも甚く神事を輕忽に爲る世中押並ての習俗と成たれば止事を得ぬ勢なり　齋部の委しき由は卷四十或問條に云り又記傳十五忌部首注をも見合す可し○弱肩爾太襁取懸弖は上に出卷四第十詞○言壽伎鎭奉事能漏落牟事乎波瑞之御殿汝屋船命爾天津奇護言乎言壽鎭白久と有る結は上に皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮留瑞之御殿汝屋船命爾天津奇護言乎言壽鎭白久と有る結なり顯宗天皇御紀室壽御詞に築立稚室葛根築立柱者云々取擧棟梁者云々取置椽撩者云々取置蘆萑者云々取結繩葛者云々取葺草葉者云々などの如くに在ゆる居宅具を並へ擧て其々の言壽を爲して屋船命の御靈を齋ひ鎭むるが猶遺る所有むかと其心遣ひ爲て漏落牟事乎波とは云るなり　然れば此なる漏落牟事乎波に其者物などの事を云るに非ず柱に就け桁に就け梁に就けて其實云ふ可き事の限を盡せれど猶遺さゝる處も有むと爲り　然るは上文の如く瑞之御殿を屋船命と稱奉りて材木を屋船久々遲命草葛を屋船豐宇氣姬命と稱別奉りて其材木草葛に至る迄も漏さず言壽き鎭奉る事にて宮處には昆蟲の禍無く宮殿には飛鳥の殃無くと云て福祥有む事を言壽ぎ柱桁梁戸牖の錯動鳴事無くと云て其堅固からむ事を述へ草の噪無くと云て葛目の緩無くと云て締り亂ざらむ事を云ひ晝御座は暄援しからずして穩びしからん夜御殿にしては恐く稜威しき事無く心安からむと各その反語を用ひて其義を殊に勵しく齋ひ鎭る事古文の妙處なり　能く心爲すば其妙處を見出る事ぞ難からむ深く思べし　倩斯文の如此く盡したる上にも猶漏落牟事乎波云々と有る總ての事の趣を考見よ屋船命は瑞之御殿の神靈（實イ）なるが居宅の具と成れる物悉く木なるは久々遲命草なるは豐宇姬命と二柱神等の主領き在す事なるが故に平けく安けく住居する事なり然れば少しき葛目の緩ひ少なる草の噪と雖も此神等の能く守給ふと守給はざるとの間に在る事なれば殊に此大殿祭また庶人の宅神祭は能く爲ま欲き業なり此の文の運ひを佗に考合するに

次なる御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃云武惡事爾云々また遷却祟神詞に云々荒備給比健備給云々に當りて共に神等の荒びに依て家内の禍は起る者なるが故に次に神直日命大直日命とは云り（此神等の御守護無き時は荒振る邪神所を得て入來り木にも草にも靈を取託て禍災を起して甚く荒び健ぶ者ぞ然れば素より木にも草にも御靈を齋ひ鎭めて夜の守日の守に守り在す上に申す所の神々の御靈の放り給はざる可くなむ物爲へかりける）○神直日命大直日命上に云ふ所の諸の禍の如きは悉皆枉津日神の擧給ふ荒ぶる邪神の爲る事なるを以て其を防ぎ避む爲に有ゆる木以て草以て造れる居宅具共の品を分ちて屋船神等の御靈を言壽ぎ齋ひ鎭奉れるが豈諸種の物共を悉く擧る事を得むや漏しもし落しも爲たらむを神直日命大直日命其を所知食て諸の禍災事勿ら令め給んとなり（但佗詞の如く神に祈る事を後に立て其神の守居給ふ所の當然を先に云ふ故に漏落牟事乎波云々とに云るなり）此神は古事記に伊邪那岐大神云々於是詔ニ之上瀬者瀬速下瀬者瀬弱ニ而初於ニ中瀬ニ墮迦豆伎而滌時所ニ成坐ニ神名八十禍津日神次大禍津日神此二神者所レ到ニ其穢繁國ニ之時因汚垢而所レ成之神也次爲レ直ニ其禍ニ而所レ成神名神直毘神次大直毘神と見え神代紀にも伊弉諾尊云々便濯ニ之中瀬ニ也因以生レ神號ニ曰八十枉津日神ニ次將レ矯ニ其枉ニ而生レ神號ニ曰神直日神次大直日神ニまた于時入レ水吹ニ生磐土命ニ出レ水吹ニ生大直日神ニ又入吹ニ生底土命ニ出吹ニ生大綾津日神ニなど有り記傳六五十九丁に直とは末直からざるを直す意の御名なり既に直れる意には非ず上に爲直と有を以て曉る可し（同言ながら直佊など云は既に直れるを云ふ直須に直からざるを直から令る爲（シワザ）を云て既に直きに至れる意には非ず然るに口訣などに既に清明時生神なりと謂へるは叶はず）然れば此二柱は穢より清に移る間に成坐る神にして直日とは禍を直し給ふ御靈の謂なり（毘を日意と爲るに非ず）御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久云々咎過在乎波神直備大直備爾見直聞直坐氐云々遷ニ却祟神ニ詞に皇御孫之尊乃天御舍之内仁坐須皇神等波荒備給比健備給事無志氐云々神直日大直日爾直志給比氐云々と有る此等は神議に議賜神逐に逐賜など云類の語にて唯直し賜と云ふ事なり（是時は此の神名を申せるには非ず彼祝詞共の前後の語を能く見て辨ふ可し思ひ混へて神名と爲べからず○重胤云く荒備給比健備給比に相對へて云るに思を深む可なり）直し賜と云ふ事を如此云るにて（○重胤云く何れの神の見直し聞直し給ふも此神直日大直日二神の御靈には洩す）此の神名の義をも曉りてよ又大殿祭詞に漏落牟事乎波神直日命大直日命聞直志見直志氐平良氣久安良氣久所知食登白此は此二神を指て申せり（倭姫命世記に多賀宮一座豐受荒魂也伊弉那伎神所生神名伊吹戸主亦名曰ニ神直日大直日神ニと云り此神の豐受大神の荒魂に坐は加何なる由にか

知はど伊吹戸主の此神たる由は大祓詞に遺罪波不在止祓給比淸給事乎云々氣吹戸坐須氣吹戸主止云神根國底之國爾氣吹放氏牟云々是此の穢を滌ぎ滌むると同意にて此神に當れり凡て後世記は信べき書には非ねども斯る事は古傳說有て記せるも知難し○師云く豊受荒魂也は外宮延曆儀式又神祇式にも然有れど元は決めて皇大神和魂也と有しを書改たる者と所思たり然るは多賀宮も甚古くは荒祭宮と共に內宮に鎭給ひて攝神と申しゝ宮なり其は先世記に垂仁天皇の御世に內宮御鎭座の事を記せる所に天照大神並荒魂宮和魂宮止奉鎭也と見えたる此和魂宮は卽多賀宮を申せり寶基本記にも荒祭宮高宮者所謂荒魂宮和魂宮是也と有り若て雄略天皇の御世に豊受大神を今の外宮の地に遷奉らせる時大御神の御託宣に依て多賀宮をば豊受大神に傍奉られしなり其は世記に皇大神宮第一の攝神和魂多賀宮乎波豊受大神に奉副從給者也と見え御鎭座傳記にも多賀宮則伊吹戸主神天照大神第一攝神也依ニ神誨ニ奉レ傍ニ止由氣宮ニ也と有り御鎭座本記にも依ニ天照大神御託宣ニ第一攝神多賀宮奉レ傍ニ止由氣宮ニ也と見ゆ大御神の和御魂と坐て第一の攝神と坐ます神を放ち奉て豊受大神に傍奉る事何にも大御神の御託宣に依ずは得爲まじき事なれば此傳說信に然る可し斯在ば貞觀式共に多賀宮を豊受大神荒魂と有るは何にも後に書改たるなる事疑無き者ぞ二十二社本縁に神直日大直日神登申波天照大神乃荒魂也と有る荒魂は非なれど天照大神乃と云るは然る言なりと有り倚此等の事は卷三第七詞外宮攝社の條に云りき

と有り倚此は屋船命に神直日命大直日命の御靈登相須て所知食せとなり○聞直志見直氏志は齋部宿禰の祝詞して言壽き鎭奉るとは雖も屋船命の守らせ給ふ所の千重の一重をも齋ひ鎭め奉り得まじかれば猶恐くは蓋し敢ず漏しもし落しも爲つらむかとてなり倩聞直志は祝詞に係り見直氏志は幣物に係れる事云も更なり源語若菜下に彼世なからも見直されなむ又見直し給ひてむ又今見直し給ひてと有り古言の遺れるなり但其所作にも係て考ふ可し○平久眞氣安久眞氣所知食登白は上に平氣久安久奉護留神御名乎白久云々と有る總括なり上に已に云る說有り立復りて見合す可し所知食は漏落事乎事波より續く意なり然るは瑞之御殿の惣てを屋船命と稱辭し材木と草萱を久々遲命豊宇氣姬命と稱辭して其御靈を天津奇護言以て言壽き鎭申せれども尙漏落る事の有むを心の及ばざる隈々の有むを其は事の及ばぬにこそ有けれ心には少かも鎭め奉り漏さゞる有樣を沒て所知食と云ふにて祈言には非ず其言壽の鎭め奉り蓋さぬ所有むとてなり此の諸祝詞は祭に就て宣るを此も祭の外は非ねとも屋を壽き稱るを主とはせる事になむ有ける宮內省式に大殿祭此云ニ於保登能保加比ニと有る保加比は保岐の意の平和(ナヽカ)なるなり此意を能く思ふ可き者なり此詞を承ふるに祈言と并見る時は非ぬ僻事の出來る事有かし祈言と祝(ホキ)言の差別を得辨ぬ人は終に曉る世勿らむぞ

コトワキテマヲサクオホミヤノメノミコトトミナヲマヲスコトハ
詞別白久大宮賣命登御名乎申事波

詞別白久は瑞之御殿の惣體を以て屋船命と稱へ其採用る所の草木に就て久々遲命豊宇氣姬命と御名を表章し其事の整ひ備る上に於て大宮賣命と稱申す御事なるが其當然を云ふ時は引續きて上文に附く可きを其には其物々に依て各々別々に言壽き齋ひ鎭る事の有か故に所狹く云ふ可き處無く且彼は御靈を齋ひ鎭る事を主と爲し此は其神の守賜ふ所詮を云列ね其御防護を祈奉るを主と爲ればば自然其事の別なるが如く

なるに就て一聯の文とは成ましきが故に殊更に申せるにこそは有けれ別神有て申す由に非るが故唯に詞別白久とは云なりけり 鈴屋大人説に此文言足はて理調はず詞別氏大宮賣命乃前爾白久大宮賣命登御名乎申事波と有べきなり本は如此有しを後人の猥意に同じ言の累りて煩はしと思ひて省きけるにや有む」と云れたるは理に聞ゆれども此は必然には有べからざる者なり此下に云ひ解くを見よ 然るに誰も云ふ如く古語拾遺に于時天照大神云々遷ニ坐新殿ニ云々令ミ大宮賣神侍ニ於御前ニ 是太玉命久志備所レ生如下今世内侍善言美詞和ニ君臣間一令中宸襟悦懌上也 豐磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿門 是並太玉命之子也 と有を古事記 御天降段 に次天石戸別神亦名謂櫛石窓神亦名豐石窓神此神者御門之神也と記せる事例に依て大宮賣命此神者御殿之神也と云ふ文も必有べきを諸書に然る古傳無きは此に云ふ處の大宮賣命は師説に天鈿大女命の亦名と考定められたる其にて御殿之神には非ず御殿を守衛る神にて此詞に詞別白久大宮賣命登御名乎申事波と有る屋船命の亦名なるとは異なるを拾遺には此彼を一に記し混らされたる者也其證は同書に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀と有て累世其裔と有る齋部氏の職となれるを以見るに此詞なる大宮賣命は其天照大御神の太敷坐す天宮の殿祭に太玉命の言壽き齋ひ鎮奉られたる神にて御子の謂には非す 又拾遺に櫛磐間戸豐磐間戸二神を是並太玉命之子也と有など甚しき誤なり此も太玉命に祭られ給へる神にて其系脉大に相違せる事なり凡如此く廣成宿禰の同じ一書の中に如此く乖違(タカヘ)る事の有に依て凡ては信難きに似たりと雖も然らず國史家牒に記し漏せる古語の世に散在せるを拾ひ載たる由其序に見えたる如くなれば却りては信(タノ)もしき事ならずや 然れば同名にて其正身は異神なるなりけり然れども此二柱共に御功の大較も同し程にて又異る所なきが故に古より混れたる者から其御功を成し給ふ上を見るに屋船命の亦名大宮賣命は大宮主命と申す意にて惣ての大宮の事を統御して其御殿に安見し給ふ天皇の御上に殃災無く福祥奉給ふ神にて其御徳内より外に及び給ひて體なり 本文に此の敷坐大宮地波云云と有るは此に大宮賣命と云む料なり深く思ふ可し 天鈿女命の亦名大宮賣命は大宮女命と申す意にて天照大御神の大宮仕へ奉給ふ御徳より延て御殿に安見し給ふ天皇を守衛奉給ふ事は云も更なり其仕奉る人等にも咎過勿ら令むと其君臣の御中に立て守護給へば自然に外より内を守衛奉る御徳に坐て用なるは此亦深き幽契有る事なりけり其は巻五 春日祭條 に遠江風土記に敷智郡岐佐岡神社俗號ニ岡糟垣ニ所祭天兒屋根大宮比咩也と有を引て云る如く此神は所謂る御戸開神と坐す栲幡千々姫命に坐て天兒屋命の后神と坐れは其妹神天兒屋命の皇神の御中皇御孫命の御中執持て茂檜の本末頭けず中間(ナカラ)ふる功徳を共しく成

して仕奉られしなり所以に古語拾遺にも如下今世內侍和ニ君臣間ヲ令ム宸襟悦懌上也とは見えたり後宮職員令に內侍司尚侍二人掌レ供下奉常侍奏請宣傳撿ニ挍女孺ヲ兼知ニ內外命婦朝參ヲ及禁內禮式之事上と有を合せ考ふ可し（此を以て見れば天兒屋命大宮比咩命二柱はしも天照大御神の大宮仕への長として仕奉れりし者なり然れば天兒屋命は大臣の如く大宮賣命は內侍の如くにして大宮仕へ爲給ふなり）偖屋船命を大宮賣命と申て賣は女の義に非ず主字の意なりとは類史聖武天皇九年の條なる八月甲寅詔に大宮主御巫座摩御巫生島御巫云々と見えたるは大御巫の事なるが其仕奉る八神殿の主（ウシ）たる由と通えたるに併せて大三輪三社注進次第に腋上池心宮御宇天皇御世神明憑ニ吉足日命ニ曰吾國造大己貴命也云々隨神託立瑞籬於大三輪山遺ニ吉足日命ヲ令ムレ崇ニ齋大己貴命大物主命ヲ詔下吉日足命自今已後可ト爲宮能賣是神宮部造先祖也と有るを姓氏錄（山城國神別）神宮部造葛城猪石岡天降神天破命之後也六世孫吉足日命磯城瑞籬宮御宇（崇神）天皇御世天下有災因遣吉足日命令レ齋ニ祭大物主神ヲ災異即止天皇詔曰消ニ天下災ヲ百姓得福自今以後可レ爲ニ宮能賣神ヲ仍賜ニ姓宮能賣公ヲ然後庚午年籍註ニ神宮部造ト也と見えたり此彼考れば賣（ベ）は部にて其群（ムレ）を云ふ事なり然れば瑞之御殿の全體を屋船神の神體にて渡らせ給へば其內に滿す隈々無く御靈の充塞り坐すが故に大宮賣命と申して即大宮主と申す義なり神名式に宮中神三十六座神祇官西院御巫祭神八座（並大月次新嘗中宮東宮御巫亦同）と有る中の大宮賣神必其なる可し其は儀式祭式共に大殿祭條に中臣齋部御巫等以次入御殿云々忌部向レ巽微聲申ニ祝詞ヲと有る向レ巽は其鎭坐す神祇官西院に向ふなりけり（神祇官は郁芳門の內にて大炊寮の南雅樂寮の北眞院の東に在て內裏よりは辰巳方に當れる所あるを思ふ可し）又造酒司坐大宮賣神社四座（並大月次新嘗）と有を造酒司式には大宮賣神四座（竈神）と有が四時祭式祈年月次祭に加ニ馬一疋ヲと有は決て此神なり（其は齋宮式に齋宮祈年祭社百十五座大社十七座在ニ齋宮內ニ大宮賣神四座御門神八座云々とも有て但加ニ宮賣神馬一疋ヲと有を合せて此なる事を知る可し）大嘗會式於ニ齋院ニ祭神八座の中にも大御食神大宮女神並坐り然れは造酒司なるも大嘗なるも天鈿女命の方と見て事も無れと尙似著はしからすや有らむ丹後風土記に比沼山頂有レ井其名曰ニ眞井ト今既成レ沼此井天女八人降來云々爰天女善爲レ釀レ酒飮ニ一盃ニ吉萬病除レ之云々斯所謂竹野郡奈具社豐宇賀能賣命是也と有れば此なる大宮賣命と申すは豐宇賀能賣命の造酒の事を掌（モダヒ）坐す御名なり其は倭姫命世記に酒殿神豐宇賀能賣命缶座丹波國竹野郡奈具

社坐神是也天女善爲レ釀レ酒飮一坏吉萬病除之形石座也又御鎭座本緣にも此事を酒殿神豐宇賀能賣神靈石坐亦酒造天之瓱一口大神靈器以敬拜祭也古語吉祥甕腹滿ニ甘露酒ト名號ニ御酒ト獻ニ三節祭ニ也と有を以て知へき也（大嘗會式に大御食神大宮女神と並たるは同神ながら御膳と御酒との事に依れる者なり倭宮と三輪と言相近きを以て思へば右の姓氏錄なる宮能賣公も其由に依て負るなる可し又右の造酒司式に從五位上大邑刀自從五位下小邑刀自次邑刀自と三座の神を記せるに古本傍書に古老口傳於宇大宇女古太宇女須伎乃太宇女止云就字案レ之於保伊於布止師須奈伊於保止師須伎乃於布止師止可讀歟と有り此は式外なれども文德實錄に造酒司造甕神大邑刀自小邑刀自等並預春秋祭と見え三代實錄貞觀元年造酒司從五位下大刀自神等從五位上と見え續故事談にも造酒司大刀自と云ふ壺は三十石入なりと云々と有に此の御靈形を思ひ合す可し）又丹後國丹波郡大宮賣神社二座（大名神）と有る社今主基（スキ）村と云に在るも大嘗の齋部と成れりしより鎭り坐るなる可きが社傳に所祭豐宇氣持命豐宇賀能賣命と傳へたる豐宇氣持の豐は保食神の上に狹意に添たるが正しき古書には見えざれ共然も申せるか知ねたも此も大嘗會式齋院八座の中に大御食神大宮女神並坐るに契合（カナヘ）れば決めて右の由に因れるを所思たり（但其は何れの御代に齋部と成れりしか知らず甚も久しき大古の事にぞ有べき）然れば大宮賣命は豐宇氣姬神の御靈の幸ひ分りて御殿の神と坐し酒殿の神と坐すに局れる御名なりけり此に就て思合するに此詞の首に言壽（古語云許止保伎言壽詞如ニ今壽觴之詞ニ）と有を先には大殿祭には似着しからずと思へりしかとも神功皇后御紀に十三年春二月丁己朔甲子命ニ武內宿禰ニ從ニ太子ニ令レ拜ニ角鹿笥飯大神ニ癸酉太子至レ自ニ角鹿ニ是日皇太后宴ニ太子於正殿ニ皇太后擧レ觴以壽ニ于太子ニ因以歌曰云々と見えたるを古事記には還上坐時其御祖息長帶日賣命釀ニ待酒ニ云々此者酒樂之歌也と有て唯に壽觴の事耳の如くなれども宴ニ太子於正殿ニと有を見れば大殿祭に就て又壽觴は物爲給へるが其は笥飯大神と申すは豐宇氣毘賣命に坐す由予が卷三（第七詞條）に考記す如くなれば愈由緣有り又古語拾遺（崇神天皇段）に立ニ磯城神籬ニ奉レ遷ニ天照大神及草薙劍ニ云々其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂云々と有なと擧りて大殿祭の狀なり然るは古に新しく宮殿なとを建て移り住せる時には必右の壽觴を物爲させ給ひし事なるが其は其屋船命亦名大宮賣命を祭祀らるゝ常典なりし故に此の言壽を如ニ今壽觴之詞ニとは注せる者なり（景行天皇御紀に宴を爾比牟呂宇多介と訓み雄略天皇七年御紀に讌ニ于新室ニと有るを合せて考ふ可き者なり）四時祭式（大殿祭料）に米四升酒二升瓱（サラゲ）一口盞二口と有て散ニ米酒切木綿殿內四角ニと有も尋常の供物の例ながら右の子細共の有に依て也且儀式（大殿祭條）に神今食大嘗會等祭前後必有ニ此祭ニと有に深く心を留む可き者なり

出雲風土記楯縫郡の條に佐香郷郡家正東四里一百六十歩佐香河内百八十神等集坐御厨立給而令レ釀レ酒給之即百八十日喜讌解散坐故云二佐香一と有も右の御厨（カヮヤ）を建たるに就ての壽觴なり彼顯宗天皇御紀なる室壽段に夜深酒酣次第儛云々と有て出雲者新墾新墾之十握稻之穗於淺甕釀酒美飮喫哉云々と御詞に宣させ給へるを思ふ可し又古事記日代宮段熊曾建が條に於是言二動爲二新室樂一設二備食物一云々而盛樂と有も同じ　偖四時祭式二月祭條に大宮賣神四座祭坐二造酒司一云々春二月冬十一月上午日祭即神主供事と有れば二月十一月の祭なるに兵部省式に凡伊勢齋宮祭宮賣祭云々と有は此なり　兵範記に保元三年正月九日殿下宮咩祭如例右大臣殿御方初有此儀云々家令大舍人允紀宗賴爲二祝師一と見え色葉字類抄にも宮咩祭正月十二月初午日院宮諸家祭之と有を見れば院宮諸家には二月十一月上午に混ふまじき故に其を避て祀れるなる可し拾芥抄世間不靜時方部第二十に載る宮咩祭文は其詞なる可きが江次第を見るに甚く大殿祭の式は衰たりしかは其頃宮咩祭に轉れるなる可し大祓詞後釋に枕册子に此大殿祭詞をも宮の女の祭文と云り彼祭を宮之賣祭と云ふ故なり拾芥抄に宮咩祭文とて載るは後世の甚き者拙なりと見えたり　其詞に云く維永承何年歲次何其年壬午年が中に月を擇び月が中に日を擇び日が中に時を擇て掛畏支宮咩五柱笠間の廣前に從四位上行官姓名恐美恐美毛白給く絹は乍レ編綿は乍レ結進物は高坏か彌高々に飯の方毛利加に淸酒の早に堅酒の堅橘の忽に餅の持て榮に鯛の平に鰭の彌益々に鰢の好み好に鮑の片岡蠣の搔寄て薺の庭佐良須嚴く聞食し受納給て壽長く身全め天地不祥内外の惡事未萠以前に兼て遠く拂ひ退ケ玉ひて官爵如意に叶しめ給て萬世に子孫繁昌の門と有しめ夜の守日守に常磐堅磐に守幸給へと恐々申す以上全文　此詞の凡ての狀大殿祭より取捨して作れりと見ゆるが永承は後冷泉天皇の御世號成が此に顯せるを見れば拾芥抄には其頃の記錄より抄出たる成可きが其御代頃よりぞ此祭は諸家にて行はれつらむを大殿祭また其頃より絕て無きが若にぞ成つらむ枕册子に此詞を宮の女の祭文と云を以知べし或云執政所抄には宮咩奠祭文と記せりとぞ　年中行事歌合公事根源抄年中行事秘抄本朝月令等に大殿祭の事の見えざるを思ふ可し又右の宮咩祭も載られざるは諸家にて物爲る私事にて朝廷の公事に非るが故なり式に武藏國埼玉郡宮目神社有り所祭を知ずと雖も同神と思ゆ借右の祭文も諸家にて行ふ所の詞なり空穗物語國讓卷に壺の蓋に女の手にて今日ならむ幸うして一ツ祈りつる盤手淫手（ヒラテテクボテ）にて何とか「願言も聞すなりにし笠間には神の多かる淫手（クボテ）解くとぞ」と有るも右の造酒司に坐す酒甕な大邑刀自小邑刀自次邑刀自と祀れるにも思合せられて此の一證と爲すに足れり大嘗會式に葉椀久菩弖笠形葉盤比良弖似二笠形一と有も酒器の名なるを以て此空穗物語の歌に效るに笠間は笠椀（カサマリ）ならむか實方集に天に坐す笠間の神の無りせは雨にし中を何で聞はまし」と詠るも此神に依せて雨を云笠と云傳と云るなり神名式に越前國坂井郡笠間神社有り繼體天皇の其國に在し時に祀らせ給ふ者なる可し足羽神等を其國にて齋かせ給へるに思准へて知る可き者ぞ　若て造酒司坐大宮賣神の祭も何時と無く其頃より絕て式なる山城國紀伊郡稻荷神社三座並名神大月次新嘗と有る此社に二月初午詣は物爲る事と成り

し也其は右に云ふ如く大宮賣命と申すは豊宇氣毘賣神の御殿と酒殿の神に在すが其は稻穀の元靈と坐す神なるが故に稻荷神は倉稻魂命に坐て稻穀を耕作す神に坐て其御功相近きが故に詣初たるなり忠峰集に二月上午稻荷詣云々夫木集に二月や今日初午の驗とて稻荷の杉の本つ葉も無し」なと有て古くは聞えざる事なり（年中行事秘抄又公事根源抄等に稻荷祭四月上卯日と見えたるを二十二社註式には祭四月中卯日那有二則初卯日也天曆勘文云禰宜祝仕ニ春秋祭一と有り此は朝廷より祭らせ給ふ所なるが二月初午は人々の私に參詣る事なりしが後に祭の如く成れるなり偖諸書に此稻荷の祭神を下社大宮賣命中社倉稻魂命上社猿田彦命と云ふ傳も有ればこ二月初午に祭る由無に非ず又此より再轉して二月初午に觀音と云ふ蕃神に詣る事水鏡の序に見えたり是は僧等の掠め物爲るなり）如此く此彼より說き迫れば諸書に在ゆる大宮賣命は悉く豊宇氣毘賣神の亦御名に歸て唯古語拾遺に令ニ大宮賣神侍ニ於御前一（是太玉命之久志備所レ生如下今世内侍善言美詞和ニ君臣間一令中宸襟悦懌上也）」と有と遠江風土記に岐佐岡神社俗號ニ岡糟垣一所祭大兒屋根大宮比咩也と有るぞ天鈿女命の亦名なるにて同名異神なるが此彼考合するに豊宇氣毘賣神の衣食住に幸ひ給ふ御靈屋作りの事の本を執せれば已に屋船命と申し其亦名を大宮賣命と申して御殿の神に在せるが其御殿にて在る所の諸種の事業はしも幽より天鈿女命を賛けて又大宮比咩命たる功用を令立給ふ所也（記傳に引れたる和名抄に護田鳥於須賣止里常在ニ澤中一見レ人輙陽有レ似レ主ニ守宮一故以名レ之と有は此神の名より出たるなるが天鈿女命の大宮比咩神と在して大殿を守給へる名を移して鳥名とは呼たるなり但天鈿女と云るは大宮賣と同意なる由御門祭の下に云り）然れば此詞に大宮賣命と申すは右の二柱の御力を合せて一神の如く守給ひ總ての御殿を知食すが故に意に少の異は有ながら御名の唱の一なるに就て唯に大宮賣命と一には申たる者の其實は別々にて體用の差異有る事なり是を以て詞別白久と上より受て下を起しながら大宮賣命登御名乎申事波下に言を起して上には拘はらざる如く美く用ひたる者にて神武天皇御世に大殿祭仕奉られし天富命などの心用ひなりけむ飽まて右の御事實に明るき人ならでは如此は云ひ出ましければなり（然れば此の本文は高千穗宮にて天太玉命の大殿祭仕奉られたる文なるを御世々に少の增減は有れども全く高千穗宮の遺文なり此詞ㇵは高千穗宮に出來るには有べからず天鈿女命の世を去て後ならでは其御名を稱へ祭るまじければ此は決めて橿原宮の御世なり）如此く考定めて下文を見るに大宮比咩命の天宮に侍奉給ひて防護給ひし御事實はしも天兒屋命と夫婦二柱共に茂檜の中執持て仕奉られし事の狀なる故に拾遺にも其心を得て如下今世内侍善言美詞和ニ君臣間一令中宸襟悦懌上也と記せるが其實は同書に謂ゆる强捍猛固なる神性坐が故に幽に豊宇氣毘賣神の御靈相預して其全功は成し坐るなり此故に上文に屋船命云々と言壽た

る事の此には祈言と爲て出たるぞかし然れば右の二柱を此に一に大宮賣命とは申て有れども各一神を別ちて申す時は屋船命の亦名を大宮賣命天鈿女命亦名を大宮比咩命と申し別く可きなる然れども各々互に御靈通ひて幽贊け坐事云も更なり　○大宮賣命登御名乎申事波云々は次なる御門祭詞に櫛磐牖豊磐牖命登御名乎申事波四方内外御門爾如湯津磐村久塞坐と有と對せる文なり御門神と御力を合せ給ふ由有る事次に云るが如し偖此は上に云る如く屋船命を天鈿女命と御靈を合せ坐るに因て一箇の大宮賣命と申す神は成坐るが下に述る所の御功用は其御名に含藏て有る故に此に顯し奉て下には其を釋せるが如くなるを以て登申事波とは云るなり本朝月令に引る高橋氏文に掛畏卷向日代宮御宇大足彦忍代別天皇云々勅久云々大倭國者以二行事一負名國奈利と詔給へる大御言を　持て此は說く可き事なり御事實の許多なるも御名をだに解得れば甚著明なる者なり能々此大御旨を思ふ可し上古の傳說と雖も御事實の上耳にては誤傳る事も有む其は世を靡人を綿る故に多き中には必事る人に依り記す人に依て訛れるも誤れるも有むを唯御名に於ては然らず各々其所業に依り德功に依て誰か解申とも無く自然に負坐る所なれば有來し隨にて違はざれば神御名計り其正實の著明なる者有る事無れば天下の語言に能く通(タケ)て說奉る可き事なりかし

御名乎申事波に就て說有り次詞に云べし

皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氐參入罷出人能選比所知志神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和古語云夜波志坐氐

此文以下は屋船命亦名大宮賣命　鈿女命亦名大宮比咩命　二柱神等大殿の鎮めと在し衛と在して其御德を合せ給ふ大宮賣神の御守を祈らせ給ふ文にて凡ての文意を惟ふに參入罷出人云々は下に親王諸王諸臣云々にて此に神等能伊須呂許比阿禮比坐は其王臣等に依託て顯に忠ならぬ事を爲しめ神の御守の間隙を伺ひ寄て大殿裏にて禍を幽に爲す神の所爲をも錯綜せる文なり能々上下に心を通はして知る可き者也偖大較の事の趣は上の祝詞は禍無くして福有む事を壽き稱て禍福共に天然なるを云ふか此の詞別は咎過無くして安く全けからむ事を祈申せるにて人爲の上に有る事を云ふ此祭と詞別とを混に爲ざる所以なり神等の御靈合坐て御心を合せ給ふ所より如此く一柱神と成坐て一箇の御功用を大に顯はし給ふ所は譬へば木灰と硝石と硫黃との三を相混和すれば鹽硝と爲り其用る所に猶て巨嚴なる堅き堅城を拔くに等し所以に豐宇氣毘賣神の如き食物の神に坐すも山神に御靈合坐せば木神久々能智神と成坐し唯に土神と御靈合坐せば草神鹿屋野比賣神と成坐し各々相異る御功用を立給ふ事上に委曲に說るが如し此を御夫婦と爲り給ひし由に說成し且其幸御魂神なりと耳云も云以て行けば麁き論說なり　○同殿能裏爾の同殿は舊訓於奈自意富登能と有に從ふ可し殿を意富登能と訓む證は古語拾遺に大殿祭の大を省て殿祭を作き神代紀に同床共殿と有を駿河風土記に引る香具山日記には同床共大殿と有を此彼合せて知る可なり此祝詞の首に御殿古語云阿良可と有は在處の由にて總てに亘る稱なれ

ば汎きを登能と云ふに然らず狹きなり殿は和名抄に止乃と有を弘仁私記序に古語謂二居住一爲レ止と見えて美斗能麻具波比また久美度また美刀阿多波都なと其外にも寢處伏處祓處なと云て處の義なり止乃と云ふ時は處主の意にて君と坐す方の居住爲させ給ふ御在所の稱申す事なり偖意富斗能地神大斗乃辨神と申も大殿に依れる事古始太元孜に云るが如し尙上なる天之血垂の下に委しく云り然れば在所と云ふ時は總ての御搆內を云ひ止乃と云ふ時は天皇の住せ給ふ身屋に局れる名なりけり但後には人臣の住家なるも殿と云ふ事には成れり此に就て思ふに公式令に皇太子謂二殿下一と見て後には人を敬ふに名の下に殿と附云ふも處主(トノ)と云ふ義以て云なり裏は御殿內なり○塞坐氐は御門祭詞に四方內外御門爾如湯津磐村久塞坐氐云々道饗祭詞に大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等云々と有る其と同意にて物に蓋をして剩塞ぎたる如く神の御靈の御殿內の充塞り在すを云ふ上に瑞之御殿汝屋船命と其御靈の別に鎭り坐とは申さずして其殿を其任に屋船命と指たるに對考ふ可き者なり其は天照大御神月夜見命は日神月神に坐り然れども天日月宮を其御正體と仰き奉ると同し事なり唯御殿の御扉の邊に塞坐には非ず能々思ふ可き者なり此解卷二第五詞條に云り○參入罷出云々は上なる御床都比能佐夜伎を受たり次なる神等能云々は夜女乃云々を受たると對へ見る可し偖上なるは禍を云ひ此なるは罪と爲れるを云て同物ながらに其趣同じからず下に親王諸王諸臣云々と有る其を云む料なり然れば此詞を暫く其上に向らし心得べし此は日々に王臣の朝參する事を云り記傳七二十六丁に參は貴所へ向行を云此は出る方を卑めて趣く方を尊む時に云なり○記傳四に云く凡て古は參を麻韋と云り參入を麻韋琉と云は麻韋伊琉の約りたるなり後世の假字に麻伊琉と書は誤なり○重胤云く此處は麻韋伊琉と訓べし罷出も麻加理伊豆流と訓む可きに對へる語なればなり罷は貴所より退去るを云故に去る方を尊み趣く方を卑むる時に云言なり萬葉十八に京より越中へ來れる事を末加利天と訓り此意に叶へり故中古迄は此辨を知て用へるを中昔の物語又文なとに罷出と云へるも叶へり但必しも貴所ならぬとも同し程の所にても其對へる人を尊みて云詞には他へ去を罷と云ひ又鄙にて都へ行を罷と云へるも對へる人を尊みて語る詞なり近代に至て混れ以ノ有り○人能選比所知志は天皇の大御許に參入り罷出る人の品を鑒定給ひ然るまじき人の出入を止めさせ給へとなり下に引る選敍令義解に謂選者選擇言選レ才授官也と有る此のみには非ず上に皇御孫命の同殿能裏爾祭坐氐と見えたるは此事に係つらふなり此に深き所以有り其は人はしも天神の恩賴に依て世中に生出て各々稟賦の國事を修り理め固め成す可き大任を戴く大御寶なれば且ても惡しき人不善ぬ人は出來ましき理なるを善き人のみにも非す不良きも世に多かるは如何と云に眞に天賦の神性は淸明なる者なりと雖も已に一人と成り一身と爲て

は靈も其人たけの靈心も其人だけの心と成る物にて外物の來る事有て必其感動無き事能はず（譬へば火を見ては熱く水を見ては寒く所思るなど其身に觸る所を感くる者は心なり又味き物を見れば喰はま欲く善き衣を見れば着ま欲く思ふなど凡て其感觸する所の外物を以て心を動かす事如此きなり）偏無く固無く隨在天神なる時は其靈一身に不足無く饒ひ繞ばりて天地に充塞る者なる此を和魂と云ふ然るに人皆各自の事業有り將に此を修り此を理め此を固め此を成むと其德（サチ）に進みて立つ所有り此を荒魂と云ふ此に於て其德を守りて能く修り理め固め成して其幸違ばす成る所有り此和魂の功用にて此二は外物に御せらるゝには非ず能く外物を御する所にて宇宙の間に人を最靈と爲るは此謂なり然るに嫩弱にして成す事能はず此和魂の變なり放逸にして立つ事能はず此荒魂の變なり外物此に來りて其變に乘ず是に於て君より賜はる所親より授かる所身に受得る所の德を快しと爲す又相樂しまず終に其幸を易むと爲る時に當て外物を御する事能はず外物に御せらるゝが爲に其心常無し（譬へば金銀の如きは皇神等の民用を利する寶器たり其道を以て用ふ時は世中平均くして民大に利有むを漫りに巨萬の財を儲へ藏して民用を利せざる人など多き者なり此等（スキ）は外物（オカ）の爲に本心を失へる者ぞ此餘は傚て知べし）その心常有る事無きの虛を乘して荒ぶる惡しき神の曲心來りて此が主たり妖神には鬼形なるも有り禽獸なるも有り正身は人にして其心は人に非ず妖神に相交これる者なり（譬ば漢籍佛書などに讀耽る徒など其正身は皇國の大御寶なから其心は漢魂佛心なるは云も更なり其所作も亦漢人に擬せ天竺法師に類へるが如し）然れば御門祭詞などに四方內外御門爾如湯津磐村久塞坐氐四方四角與利疏備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許理相口會賜事無久と云るも此に參入能出入能選比所知志と云るも事は同事にて彼は人に託する所の本を以て神と云ひ此は本は神より託せるにも有れ其所業を爲す者は人なり此を以て人能選比とは云り選とは邪惡を去り正善を取るの謂にて彼惡事能相麻自許理相口會賜事無久と有る其徵信と爲る所は幽に神の選び所知し給ふを以て然なり（尚御門祭詞道饗祭詞等に云ふ事を見合す可し凡て此三には內外の異こそ有れ其防護を爲す者は妖神其鎭衞を仰ぐ所は善神にて事趣は大較同じ在る可きなり選字は選叙令義解に選者選擇言選レ才授レ官也と有て宮仕の人の才藝を選て其任に就しむるなり獄令に凡察獄之官先備二五聽一と有る義解に謂五聽者一曰辭聽觀二其出言一不レ直則煩二曰色聽觀二其顏色一不レ直則赧然三曰氣聽觀二其氣息一不レ直則喘四曰耳聽觀二其聽聆一不レ直則惑五曰目聽觀二其眸子一不レ直則眊然也と有る此等の事なら常に意得居て能く人を選ぶ時は禍事に相交こる事有べからず字書に擇也と見え禮記運篇に選レ賢與レ能左傳襄九年に擧不レ失レ選など有る其義を取て記れたるなり鶡冠子博選篇有て四稽五至の論有り選擇也と云る能く當れる者なり）○神等能云々此は上に夜女能云々と有るを受たり倭上なるは禍なるは此なるが此は其禍の本を云れは罪なるなり倭此は右に參入能出入能云々と有る對にて彼も此も同

じ神の所置ながら彼は人の作業に發見する所を以て語をなし此は本草に擧る所の諸の禍の類にて自然の如く來る所なるが眞には自然に非ず殃災福祥共に神業なるを徴せる古語なり但此等の惣ては古語拾遺に令ニ大宮賣神侍ニ於御前ーと見え又天鈿女命と有る本注に其神强捍猛固故以爲レ名今俗强女謂ニ之於須志ー此緣也と有る所因に依れる事なる故に神代紀素盞嗚尊の再度上天に參上給ひし處の文に廼復扇レ天扇國上詣ニ于天ー時天鈿女見之而告ニ言於日神ー也と見え又古事記（御天降段）猿田毘古神條に天照大御神高木神命之以詔ニ天宇受賣神ー汝者雖レ有ニ手弱女ー與ニ伊牟迦布神ー面勝神故專汝往而將間者吾御子爲ニ天降ー之道誰如此而居故問賜之云々など有る如きの御功坐すが故なり（但此詞にては屋船命も本より相預り給ふ事上に云るが如し）　○伊須呂許比阿禮比坐乎と見えたる伊須呂許比の伊は氣差しの強き事にて一速ぶるなどの意也（發語に伊栞と置くも其語に勢を添へ力を添るが爲なり弓を射ると云も箭の勢猛く進み至る義なり）須呂は進にて壯士は眞進士なると同じ萬葉九丁（卌五）に須々師競と有も進競なる此等も相近き語なり又焱利などの須留も此の進に異無し（辭の須良も進なり進む意有るより佗を顧ざるなり一向（ヒタスラ）の須良此に同じ又不意（スゾロ）にと云ふ語も有り思ひ儲ぬ事にて驚く意有り上なる伊須々伎の下に引合せ見る可し）許比は來歷にて進來る者の所作を云なり須呂許比と續く時は歡喜の反對なり（二合して下に許比の附く語は迺（ハコ）ぶ咒詛（トコフ）など多かり皆同意なり歡喜と云ふ時は依來歷（ヨロコビ）にて然る可き物の事の當然に來りて具足（ヨロコ）ふ賛くるの意有が須呂許比は何の子細（ワケ）もなく騷ぎ來るなれば古事に非ず）　此は荒振る邪神の荒び猛び來るを云なり言義を切めて見るに道速振などに努々異る所無き樣なり神代に道速振る邪神の成せる禍事はしも上に天津御量以て事問りし岩根木立草葉に至る迄も皆能く言語へりしを言止しめ給へるが故に已に說る如く瑞之御舎造の事は出來初て天下の人民居宅を構て安居爲る事とは成れりけるが然る磐村樹草の言語こそは爲ざれ世には道速振る惡しき神等も有て常には正しき善神の逐はれて耳有けるが時と爲ては其御鎭衞無き居宅を伺入て其磐に託り木に留まり草に着て其を靈の依處と爲して何と無く家に災禍し身に害げ爲る事多かり此を凡人の心を以て見る時は自然の如く偶然の如く思ふ事なれ實には人眼の能く及ぶ所に非るが故に自然の如く偶然の如くなるなり（春秋左氏傳莊十二年の下に妖由レ人興也人無レ釁焉妖不ニ自作ー人棄レ常則妖興と有る此意味にた無にしも非ず）　然れども此詞には神代の神等の然る禍福の因緣も何も御自直ちに見行し丶事を有が隨に言述られたるなれば其心して伺ふ可き者な

り（此を凡心に引當て說けらむには終に悟り得る事勿らむ者ぞとよ）〇阿禮比坐乎は上に事問之磐根木根立知草能可岐葉毛乎言止氏と有る其物に託て妖を爲す禍神を云なり遷却祟神詞に皇御孫之尊乃天御舍之內爾坐皇神等波荒備給比健備給比崇給事無志氏と有る同意なり（其下文に神直日大直日爾直志給比弖と有は此に阿禮比坐乎言直志和志坐氏と有と同じきを對せ考て味ふ可き者ぞ）阿禮比は古事記に道速振荒振國神等多在と見え大祓詞に國中乎荒振神等波乎云々遷却祟神詞に水穗國能荒振神等乎神攘々平氣牟登云々出雲神壽詞に豐葦原乃水穗國波晝波如五月蠅水沸夜波如火瓮光神在石根木立靑水沫毛事問天荒國在云々荒振神等乎攘平氣など有る其なり但此は上に言寄奉賜氏云々と有る寄に對せる語にて荒とは物の强き事耳には非ず物を大凡に爲る意と物に疎々しき意とを兼たる意なり御門祭詞なる荒備の下にも委しく云ふ可し合せ考ふ可し大祓詞後釋に荒振神と云るは書紀に謂ゆる殘賊强暴橫惡之神の類耳には非ず凡て天神に依來ずして疎々しき神を汎く云るなり借依來ずして疎々しきを荒ぶと云る例は萬葉二に住鳥毛荒備勿行四に筑紫船未毛不來者豫荒振公乎見之悲左十一に白濱浪乃不肯緣荒振妹爾戀乍曾居古今集にも故鄕に非ぬ物から我爲に人の心の荒て見ゆらむ」と有と

云れたるは實に謂れたる言なりけり（記傳十三に引れたる後拾遺集に今よりは荒ふる心坐ますな花の都に社定めつ」と有も遠放る心坐などなり）然れば本なり歸て順ふ可き者の歸順はずして散け退くを云ふ其本義にて（神功皇后御紀なる天照大神の御誨言に我之荒魂不可近皇后と有を思ふ可し上の月次祭條に引る雲客諸役抄に大忌者荒忌也小忌者眞己也小忌供三忌火御竈之役大忌人不昇殿也と有る荒も疎々しき意なり）彼殘賊强暴橫惡之神など云意なるは末なり其も正しき神等の守坐す御稜威を恐惶り散け遠退居り其處にて善からぬ事を爲すが故に云なり（人事の上に於ても然り凡て世の爲にも人の爲にも善かる可き事は態と疎々しきをも親しく物爲る事なるが世にも人にも害有る事は人の聞見を恥ぢ且恐怖り人を避けて此彼闇昧の處に依て行ふ其皆から惡事ならぬは無な思ふ可き者ぞかし）是を以て神代紀には然る類に當りて邪神とも邪鬼とも作られたり此も然にて大宮賣神の御守り薄き時は其荒振る邪神邪鬼の其間を得て犯す事有るが故に云なり
〇言直志は御門祭詞に天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久云々待防掃却言排坐氏云々道饗祭詞に根國底國興里麁比疎比來物爾相率相口會事無氏云々遷却祟神詞に高天之原爾始志事乎神奈我良毛所知食氏神直日大直日爾直志給比氏と有る此は上の例とは違ひて其荒振神の自直し給ふにて別なるが若くなれども同事なり借此は上に以天津御量氏事問之云々言止氏と有るを引合せて見る可き事有

り其は今しも磐根本立草葉の言語こそは爲ざめれ伊須呂許比阿禮比坐神等の來寓りて不祥を爲すは其靈を右の物等に取託る常なるが故に幽に大宮賣命の防護り給ふが言能く饗しらひて却し給ふ事と見えたり 御門祭道饗祭遷却祟神祭等詞も此に同じ或問如此く世に荒ぶる凶惡神の在むには打も罰めさせ給ふ可きを言直し給ひ或は言排るなど甚神の御稜威の深からぬに似たり如何答其間は一概なる論なり縱や荒振る惡しき神ならむにも妖も未だ成さゞる前に罰めさせ給ふ可くも非れば未前に言直し却排け給ひて人にも禍に遇しめす神をも禍無らしむるぞ此等の祭の旨趣也 古事記石屋戸段に須佐之男神の荒び坐事を云て故雖然爲天照大御神者登賀米受而告云々詔雖直云々と有る其御荒ひは須佐之男命の御心に非ず相交こり奉る禍津日神の心なる事を大御神の所知食すが故に其素を糺して其惡行を暫く善事に詔直し易させ給ふなり然爲れば必徴信の有る事なるが故に此詞なるも其例を引て朝參の人等の已知ず禍津日神に交これるが若くも有むに其人と相交こり相口會ふ時は其禍心に習染せるを以て其枝葉の滋蔓らむには終に一家の大事一國の大事一天下の大事をも引出る者なるが故に元より然る事は幽に於て神の勿ら令め給ふが已に顯に出て其實事の有る等に至ては又善言美詞を以て此を直すに其驗有て惡心を翻し善事に進む者有て其禍の除く事有り此等をも

兼たる詞なり 然れば幽にて有る神事をも顯にて有る人事をも簡易にして之を貫く事妙に奇しき文なり 然れば言直の言は事業に非ず言語を云也因みに言靈の功用の神奇なる趣を說く可し古語に皇國の事を稱て言靈能佐吉播布國また事靈之所佐國また言玉乃當國とも云ふ神語を傳へたるが其言の妙用活機に不測の神靈を備て一言一句神有り靈有て漫に爲べからず此を漫にして鳥如す囀の如く呼ぶ時は神無く靈無くして其義相反す言語の愼しむ可き事如此し神代紀に天兒屋命廣厚稱辭祈啓焉于時日神聞レ之曰下頃者人雖二多請一未上レ有二若此言之麗美者一也乃細二開磐戸一而窺レ之と有を思ふ可し大御神をして感け奉ら令る者は眞に言靈の幸はふ處又佐くる處にて其功驗如此く當に非すや 此は唯神代に著き一例を耳出せるにこそは有けれ眞には此祝詞なども悉く然る著明き感應は有にて狹意無き人の漢心を離れて後に知る事なれば今此を云はず 然れば荒ぶる神の惡しき心が起して氣參こび來るも言直し申す時は其荒ぶる曲心を和め坐す事決き者なり 此詞を證として心得むには違ふ所勿る可し豈尊き神言ならずやも ○和志 古語云和夜波志 坐氐は古事記御天降段に問二天若日子一狀者汝所下以使二葦原中國一者言二趣和其口之荒振神一之者也何至二于八年一不二復奏一また故建御雷神返參上復下奏言三向二和葦原中國一之狀上又水垣宮段に各和三平所レ遣之國政一

而復奏又(日代宮段)に倭建命然而還上之時山神河神及宍戸神皆言向和而參上また爾天皇亦頻詔ニ倭建命ニ言ニ向ニ和ニ平東方十二道之荒夫流神及摩都樓波奴人等ニ云々幸ニ于東國ニ悉言ヲ向ニ和ニ平山河荒神及不伏人等ニ云々自レ其入幸悉言ヲ向荒夫流蝦夷等ニ亦平ヲ和山河荒神等ニ而還上云々なども見えたり又倭姫命世記に夜波志志都米又萬葉二(三十四丁)に千磐破人乎和爲跡又廿(五十丁)に知波夜夫流神乎許等牟氣麻都呂倍奴此等乎母夜波志とも有り(常陸風土記にも天地權輿草木言語之時自レ天降來神之名稱普都大神巡ニ行葦原中津國ニ和ニ平山河荒梗之類ニと有り)上件の例の如くにて夜波志は荒るゝ者を和むるを剛き物を解くとの二義を存せる言なり(但上に引(本ノマヽ)るとものの和を那碁志など訓附るは大なる謬なり)所以に言直志は言語を以て其曲るを直す由なるを和志坐は御業を以て其荒びを鎭むる意有り(御門祭詞に惡事に相麻自許利相口會賜事無と有て言と業とに係れるなる事其下に云るか如し)然れば古語拾遺に天鈿女命と有る本注に古語天乃於須女其神強捍猛固故以爲レ名今俗强女謂ニ之於須志ニ此緣也と見えたるも此に熟符へり(又言直志は同書大宮賣神の下に如ニ今世内侍善言美詞和ニ君臣間ニ令ニ宸襟悅懌ニ也と有に叶へり然れども幽には豐宇氣毘賣命の賛け御在す恩賴に依る事云まくも更なり)皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒襷(スメミマノミコトノアシタノミケユフベノミケツカヘマツルヒレカクルトモノヲタスキ)懸伴緒乎手躡足躡(カクルトモノヲテナテノマガヒアシノマガヒ)(古語云ニ麻我比ニ)不令爲氐(ナサシメズテ)

此段は天皇の聞食す朝夕の大御饌供奉る女官等の身に手足の過無ら令給へと祈申す耳の如くなれども然らず儀式(大殿祭條)に神今食大嘗會等祭前後必有此祭と有を以て見るに大殿祭は右の神今食大嘗(新嘗祭)等の事に就て有る神業なるが上に說るが如く此詞の最首に高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以氐皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐天津璽乃劒鏡乎捧持賜天言壽宣志久皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氐天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平久氣所知食止言寄奉賜氐(比)云々天降利賜志(比)食國天下登天津日嗣所知食須皇御孫之命と有る此迄は御饌に預る事にて大嘗會の中臣壽詞に高天原爾神留坐須皇親神漏岐神漏美乃命遠持天八百萬乃神等遠集倍賜天皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平久介所知食天天都日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依奉旦云々と有と專同意の文なるは深き由有る事なりけり然るは大殿祭は天津高御座を定めさせ給ふ言壽(コトホギ)を本と爲て天津日嗣所知食す御事を共に言壽き申すが故に大殿の方主と爲り

御膳の方客と爲れるを大嘗會は新世の天津日嗣所知食初させ給ふ壽詞を本と爲て天津高御座の壽詞をも並申すが故に御膳の方主と爲り御殿の方客と爲て各共に神漏岐命神漏美命の事依し奉給へるを二に別たれたる耳こそ有れ此二の文に依る時は高千穗宮の古昔より共に行れ來る者なり併中臣は大嘗の壽詞齋部は大殿の言壽と某々に掌別る事なりしが中臣は一層重く有て家唱(昌カ)へ齋部は其次に在て氏衰へたりしかば終に大嘗會年々の新嘗神今食等の祭に就て大殿祭は物爲供奉る事に成れるが故に儀式に注せる如く神今食大嘗等祭前後必有二此祭一と云ふ樣には成れるなり（廣成宿禰も此所には心着れざりし故年々に行はるゝ所の違例を耳こそ憤み歎き申されたりけれ此事に心着れて有ましかば如何ばかり其嗇憤は益らむと思ふにも恐怖き計なり）此は己が私言を立るに非ず右の二條の神語を證據と爲て如此しも論(サダ)め云なれば神ならぬ人の信用(ウケヒ)く可きには非ずと雖も能く思ても見よ此上文に以二天津御量一氐事問之磐根木根立知草能可岐葉乎毛言止氐と有も荒振る惡しき神を言向て皇御孫命を鎭めたる事ながら右の物共の用を爲す所は瑞之御殿となり天之御蔭日之御蔭と成て寒を凌け暑を避るの德用なり此に安見し給ひて高御座を定め給ひ天津日嗣を所知食す御事なれば上も無く尊き寶は御殿なる故に御天降の當時大嘗の大御政聞食し初給ふ神事に大殿祭をも兼行はしめ給へる事右の二文を校て知べきなり（斯るを中古より其前と爲り後と爲て並行はせ給はざるを以て別物の如く成れりしは其階しき事なり能々古の狀を思はゞ思ひ得る事有む）然れば此に皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流と有は初に天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止言寄奉賜比氐云々天降利賜比志食國天下登天津日嗣所知食須云々屋船豐宇氣姬命登御名乎奉稱利氐云々と語脉を引て來る終(トヂメ)にて天神の授奉給へる天津高御座に大座坐て天津日嗣の瑞穗を聞食す御事を申せるなり然るは御殿神屋船命亦名大宮賣命はしも其本躰は豐宇氣毘賣神に在して稻穀を主り給ふ事は本と有る御德に坐るが故ぞ（然れば此の文を惡しく見損る時は其御饌を調理供奉る比禮懸伴緖襁懸伴緖の上耳を云ふ如くに成るなり然見ては終に此奧旨は知られぬ者ぞ愼む可し）○朝乃御膳夕乃御膳供奉流上なる新年月次祭詞に朝御食夕御食と作り其下に注せり（卷四第十詞の下を見る可し考ノ本に御膳の下に爾の辭を加へて訓れたるを却て僻事なり美頭乃御舍仕奉などの如く直に續け訓む可し此に何の事も無く御膳を調進するを云ふ）明文抄に引る大倭本記に天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面子鈴一合と有る本注に一鏡者云々一鏡者云々一鏡及子鈴者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神今卷向

宍師社宮所坐拜祭大神也と有を以て見れば天皇の大御食も幽に豊宇氣毘賣神此を調理給ひ顯には人の供奉る事卷五（大神宮祈年詞）に云るか如して（又此卷首に云る事なも讀度して辨ふ可し凡て世中の人事はしも人どら各（カタミ）に我爲す所人の爲す所共に幽に我を使御ふ神在て使御れ奉る事を得知ざる故に僻々しき事共多かり）〇比禮懸伴緒大祓詞にも天皇朝廷爾仕奉留比禮掛伴男手繦掛伴男靱負伴男劒佩伴男云々と有て有が中にも重みして如此く最首に云ふ事はしも大御膳を萬よりも殊に重みし尊とみ給ふが故なり彼皇大神宮儀式帳に供二奉朝大御饌夕大御饌一行事用物事御贄清供奉御橋一處（長十丈弘二尺高八尺）石疊一處（方四尺）大神宮正南御門在二伊鈴御河一當二此御門一流二二一俣一也此中島爾造奉石疊常造宮使榮作奉此止由氣大神乃入坐御坐也御橋者度會郡司以二黒木一造奉三節祭別禁一封其橋一人度不二往還一則齋敬供奉十六日夕大御饌十七日朝大御饌爾並御笥作内人造奉御贄机爾忌鍛冶内人造奉御贄小刀乎立弖志摩國神戸百姓供進鮮蛇螺等御贄乎机上爾備置弖禰宜内人物忌等御贄御前追弖持立氐開封御橋一弖參度弖止由氣大神乃御前爾跪侍氐則御河爾清奉弖御饌料理畢則如先持氐御贄御前追弖天照皇大神乃大御饌供奉と見え豐受大神宮儀式帳にも天照坐皇大神云々爾後大長谷天皇御夢爾誨覺賜久吾高天原坐氐見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴然吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食坐故爾丹波國比治乃眞奈井爾坐我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支爾時天皇驚悟賜氐即從二丹波國一令行幸氐度會乃山田原乃下津石根爾宮柱太知立高天原爾比疑高知氐宮定齋仕奉始支是以御饌殿造奉氐天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と有を以て倩考るに止由氣大神はしも上に說る如く食にも衣にも宅にも御恩頼を幸はへ給ふ本つ神に坐ながらも皇大御神の御饌都神と在して日別の大御饌を供奉らせ給へれば御膳に預り仕奉る事は上古の重職にして其位諸司の上に在ける者なり（古事記高津宮段に大后爲レ將二豐樂一而於レ採二御綱柏一幸二行木國一と有り斯在ば豐樂の供奉は大后の主と仕奉給ふ事にて有けるなり比禮懸伴緒の如きは大后に屬て仕奉りしなり高橋氏文に磐鹿六獦命の仕奉られし膳夫の事も大后に從奉りて物爲る事なりしなど思合せて曉る可し）神武天皇御紀に勅道臣命今以高皇産靈尊朕親作二顯齋用一汝爲二齋主一授以二嚴媛之號一而名二其所レ置埴瓮一爲二嚴瓮一又火名爲嚴香來雷水名爲二嚴罔象女一糧名爲二嚴稻魂女一薪名爲二嚴山雷一草名爲二嚴野椎一と有も神事に因て道臣命に云々の事は物爲させ給ふが如くなれども神物官物未だ別無き當時なりしかば御膳を重み爲

る其世の風儀を以て如此き大臣たる人に命給へる也（年中行事秘抄又本朝月令に引る高橋氏文に天皇五十三年八月行幸云々磐鹿六雁命從駕供奉矣云々六雁以角弭弓當遊魚之中即着弭而出忽獲數隻仍号頑魚此今諺曰堅魚船過潮涸渚上仁居奴堀出止爲捕得八尺白蛤一貝六雁捧件二種之物獻大后大后譽給旦欲供御食爾時六雁命申久令料理氏將供奉白云々是持上總國安房大神乎御食都神止坐奉爲湯坐連等始祖意富富布連之子豐日連乎令火鑽云々と有る六雁命は大彦命の孫なるに其御食供奉られしを以て古の凡ての風儀を知る可き也又右の景行天皇御紀に日本武尊の東征に出立坐る事を云ふ條に以七掬脛爲膳夫と有る其を古事記に久米直之祖と有れば神武天皇御記なる道臣命の裔なるが輕からぬ人と聞ゆ）但道臣命を嚴媛と號給へるを以て見れは女を以て任さるゝ古の常なりし故に女に易て用ひ給ひしなり

是を以て其淵源を探索るに高千穗宮にして大御膳に供奉給ひしは諦しく天宇受賣命（亦名大宮比咩命）にぞ御在けむ

此詞に御膳の事を云るは更なり古事記に天宇受賣命云々於是送猿田毘古神而還到乃悉追聚鰭廣物鰭狹物以問言汝者天神御子仕奉耶之時諸魚皆仕奉白之中海鼠不白爾天宇受賣命謂海鼠云此口乎不答之口而以紐小刀拆其口故於今海鼠口拆也是以御世島之速贄獻之時給猨女君等也と有るも其御膳を掌て仕奉られしに依てなる可し自爾以後男女夫婦共に悉く朝參して仕奉る事にて有しかば然る可き人等の妻又は女など御膳の事に仕奉れりし也（然れども裝立たる國政などに係つらふ事などは無きに依て皇典には記されざれども能々見以て行けば粗其意ばへ見ゆる者なり中古までも百官男女の朝參して公事に預れる事今枚擧爲べからず）

其より采女と云ふ者出來りて御膳に仕奉れりし女を婇と云ふ又猶其御膳に仕奉る事と成れり其は國々より國造縣主などの女をも召上けて使はせ給へるなり古事記（朝倉宮段）に伊勢國之三重婇と有る此なり記傳四十二（二十七丁）に宇禰辨と云名は宇那宜辨の切りたるなり宇那宜とは物を項に懸るを云（和名抄に項頸後也和名宇奈之）萬葉十六（二十七丁）に宇奈雅流珠之（神代の歌に宇那賀世流と有るも宇奈雅流を延たる言なり）書紀（神代巻）に其頸所嬰（ウナゲ）など有る此なり萬葉の歌に玉手次畝火山と續けたるも嬰の意に宇禰とは續けたるなり此同例を以ても婇の宇禰の宇那宜なる事を知るべし婇は主と御饌に仕奉る者にて項に領巾を掛る故に嬰部とは云なり（御食に仕奉るに殊に比禮を掛る由は比禮は本蟲などを攘ふ料に懸る者なりしが後遂に禮服と成れるなり上代に蟲を攘ふに比禮を振し事は古事記上に見ゆ）太祓詞大殿祭詞などに比禮掛伴男と有も主と采女などを云り（婇の比禮の事は天武天皇御紀又續紀三に見えて下に引り）猶婇の事の物に見えたるは仁德天皇御紀（四十年の條）に采女磐坂媛有り是始なり但此婇の始なるには非ず上代より有し者なる可し（帝王編年記などに履仲天皇御世より始る由云ふは御紀に倭直吾子籠が妹日之媛を獻りて死罪を赦されたる所に倭直等貢采女蓋始于此時歟と有を心得誤れる僻事なり○重胤云く倭姬命世記崇神天皇六十年の下に癸未遷于大和國宇多秋志野宮積四年之間奉齋于時倭國造進采女香刀比賣地口御田と有れば昔時大御神に進る例有を以て履仲天皇御世に進れりしが永例と爲れる也記傳に引れたる履仲天皇御紀令小治田采女賜酒于玉田宿禰雄略天皇御紀に使倭采

女日媛擧レ酒迎進ニなども見え古事記同に伊勢國之三重婇なども有を以て見れば其頃よりや諸國より釆女を貢ぐ事とは成れりけむ併此時頃に至りて漸々に御膳仕奉る婇には重からぬも交り仕奉る事で成けらし倩孝徳天皇御紀に凡釆女者貢ニ郡少領以上姉妹及子女形容端正者ニ從丁一人從女二人以一百戸宛ニ釆女一人粮ニ庸布庸米皆准ニ次丁ニ後宮職員令に凡諸氏氏別貢女限ニ年卅以下十三以上ニ雖レ非ニ氏名ニ欲ニ進仕ニ者聽謂氏別貢一人之外別欲ニ進仕ニ也其貢ニ釆女ニ者郡少領以上姉妹及女形容端正者皆申ニ中務省ニ奏聞軍防令に若貢ニ釆女ニ郡者不レ在下貢ニ兵衛ニ之例上此等は良後の定めにこそ有め上代には必しも如此くにしも非りけめど大方は如此ぞ有けむ倩婇の員は物に見えす後宮職員令に宮人と有て義解に婦人仕官者之總号也と有る此内に婇も有べし員は定りは無りけむ同令水司の下に釆女六人膳司の下に釆女六十人と有り此は惣ての數には非じ釆女司式に凡釆女四十七人膳下近ニ宮城ニ地上と見えたり但此も惣ての數とも聞えず職員令に釆女司正一人掌下檢ニ校釆女ニ等事上佑一人令史一人釆部六人使部十二人直丁一人と有り以上取意と有る如く釆女は嬰部(ウナゲベ)にて其嬰る物は比禮なりし故に此詞に比禮懸伴緒とはいふなり但古は大御饌に仕奉る人の任最重かりしか漸々に諸國の釆女をも其下風(クラジリ)に召仕はせ給ふ事と成て甚輕き方にも成ぬるを詞は太古の任に改らざるなり但大祓詞に比校るに此下なる親王諸王諸臣百官人等乎の名月は其御制有て後に改られたる者なり心を着べき事なり比禮は天孫本紀又職員令集解に載る十種神寶の中に蛇比禮一蜂比禮一品之物比禮一と見え古事記大國主神の須佐之男神の御許へ參到坐る條に即喚入而令レ寢ニ其蛇室ニ於是其妻須勢理毘賣命以ニ蛇比禮ニ授ニ其夫ニ云其蛇將レ咋以ニ此比禮ニ三擧打撥故如レ敎者蛇自靜故平寢出之亦來日夜者入ニ呉公與レ蜂室ニ且授ニ呉公蜂之比禮ニ敎レ如レ先故平出之又中卷天之日矛の持渡來し寶物の中に振浪比禮切浪比禮とも有り記傳三十十七丁に比禮と云ふ物は何に在れ打振物を云ふ然れは魚の鰭も水中を行とて振物服の領巾(ヒレ)も本は振む料にて上代に領巾は必振事を云り○上に引る傳四十二なる婇の下に云く婇は主と御饌に仕奉る者にて項に領巾を掛る故に嬰部とは云なりと有る細注に御食に仕奉るに殊に比禮を掛る由は比禮は元來蟲などを撥む爲に掛る物なりしかば御食の節など殊に其俻に掛たりしが後竟に禮服の如く成れるなり皆一意にて號たる者ぞ以上採要と有り又四十二四十一丁なる比禮登理加氣氏の下に比禮を振る事は欽明天皇御紀歌に柯羅倶爾能基能倍儞陀致底於譜磨故播比例甫囉須母云々萬葉三二十三丁に麻都良我多佐欲比賣能故何比禮布理斯云々など見え古は凡て女は此を掛たりと所思しくて崇神天皇御紀に埴安彦之妻吾田媛取ニ倭香山土ニ褁ニ領巾頭ニ而云々萬葉十三八丁に濱菜摘海部處女等纓有領巾文光蟠云々など見えたり大神宮儀式帳に生絹御比禮八端須蘇長各五尺弘二幅外宮儀式帳にも生絁比禮四具長各二尺五寸廣隨レ幅と見ゆ○重胤云く大神宮式此に同じ縫殿寮式中宮春季條に領巾四條料紗三丈六尺條別九尺北山抄内宴條に陪膳女藏人比禮料羅事舊年仰ニ織部司ニ人別一丈三尺など見えたり此等に依る時は定れる寸法は無くして其度の宜きに從へる也

借色は凡て白きが萬葉歌に拷領巾乃白とも細比禮乃鷺とも續け詠り ○重胤云く冠辭考五に萬葉卷三に拷領巾乃懸卷欲寸妹乎云々此は頸に懸る物なれば懸と續けたり」と有り拷は素より白き物なれば實に拷領巾は白き領巾なりしなり今も京邊りに下樣の女など表立たる禮式に額帽子とて生絹を以て製たる物を夏冬共に必綳るは領巾の遺制なる可し予今年下野國足利部の方に物せりしに其宿れる家に入來る女何れも新しき手拭を項に卷く事京の額帽子の如し主人を呼て此を問に此邊の者貴所へ行くにに然爲る事にて禮の至なりと云り此は上古の領巾の遺意の存れるなり尙國々にも必有べきなり 和名抄に領巾項上餝也日本紀私記云比禮と有り借天武天皇御紀に十一年三月詔曰云々亦膳夫采女等之手繦肩巾ヒレ並莫レ服續紀三に慶雲二年四月先是諸國采女肩巾田依レ令停レ之至レ是復レ舊焉など見えたり 又式の中に帔と有る物も比禮の如く聞ゆれど如何有む能く尋ぬ可し漢籍共に云る帔は比禮には非ず思紛ふ可からず○重胤云く右の膳夫采女は此詞に謂ゆる比禮懸件緒襁懸件緒なり此下に注すを待つ可し 枕册子にも采女の裝束に比禮を掛たる事見えたり 以上取意 と有り采女の大御饌に仕奉る事は尙大嘗會式に薦悠紀御膳亥一剋進四剋退 行立次第最前內膳司膳部伴造一人執二火炬一 次采女采女朝臣二人左右前駈 次主水司水取連一人執二蝦鰭樸盆一與槽一 水部一人執二多志良加一 次采女十人 一人執二刷筥一一人執二巾筥一一人執二神食薦一一人執二御食薦一一人執二箸一一人執二御枚手筥一一人執二飯筥一一人執二鮮物筥一二人執二干物筥一一人執二菓子筥一 云々と見えたる采女は水司膳司を取れるなり後宮職員令に水司云々采女六人膳司云々采女六十人と有るを水司尙水一人掌下進二漿水一謂飯汁爲レ漿也雜粥二之事上云々膳司掌下知二御膳一進食先嘗總二摂膳羞酒醴諸餅蔬菓一之事上と見えたる其部下ムレなる采女なればば御膳の給仕の職と爲て仕奉れりし者なり 記傳四十二の細書に後世にも台記久安六年女御入內別記祿法之所に御膳宿采女卅二人云々と有り此頃も多く有し事知らる禁秘御抄には陪膳采女尤可然事也近代漸令零落無レ極尤可レ有二沙汰一云々と云れたり古より追々に零落ぜりと見ゆ 上に引る天武天皇御紀に膳夫采女等也乎繦肩巾と有る手繦は膳夫の繫る所肩巾は采女の掛る所なり斯在は比禮懸件緒は右の采女を云ふと云々故大人等の說は實に諸ひ依る可くなむ 其は次なる襁懸件緒の下にも云るを委しく見て辨ふ可し件緒の說も此次に[illegible]フサヌ讀むと爲る 右の大嘗會式なる采女朝臣は其采女を撿挍る職なりしが上に引る采女司出來りてより其司に移れゝ共尙神事には古ノ例を以て仕奉りしなり姓氏錄和泉國天神に采女臣神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也と見え續紀二十六に采女司采部采女臣家足と云人も有り此氏人の采女を率て仕奉初けむと思ふ由は高橋氏文安房浮島宮にて大御膳仕奉し條に安房大神乎御食都神止坐奉若湯坐連始祖意富賣布連之子豐日連乎令二火鑽一弖此乎忌火止爲天伊波比由麻閇天供御食並大八洲爾像天八乎止古八乎止咩定天神齋大嘗等供奉始支と有を天孫本紀に依るに大咩布命若湯坐連等祖と有て伊香色雄命子也と順次ツイデたれば大咩布命の率仕奉られたる八乎止咩其若くは采

女なりけるが故に氏と爲されたるなり又同文に東國諸國造十七氏乃枕子各一人令レ進天平次比例給天依賜支と有も釆女の狀なり此に依る時は此頃未釆女と云稱は非るが如くなれども上に引る倭姫命世記には崇神天皇御世に已に有し事を記し又釆女臣と氏にさへ負るを思へば全く此時の功に依ての事なり〇襁懸伴緒は右に云る如く天武天皇御紀に膳夫釆女等之手襁肩巾と有る釆女に肩巾を當れば膳夫は襁懸伴緒なり此膳夫も上古の重職なりしなり仁德天皇御紀三十八年の下に天皇令二膳夫以問一曰云々と有り大御膳に仕奉る此襁懸伴緒の事なり手襁を懸て仕奉れる事は高橋氏文に頑魚白蛤を得たる下に磐鹿六鴈命捧二件二種之物一献二於大后一即大后譽給比悅給且詔久味甚淸造欲レ供二御食一爾時磐鹿六鴈命申久六鴈命令二料理一天將二供奉一止白天遣レ喚二無邪國造上祖大多毛比知々夫國造上祖天上腹天下腹人等一爲二膾及煮燒一雜造盛天見二河西山梔葉一天高次八枚刺作見眞木葉天枚次八枚刺作天取二日影一且爲レ縵以蒲葉一氐美頭良乎卷採二麻佐氣一天多須岐爾多須岐爲帶足纏乎結天供御雜物乎結餝天乘輿從レ獵還御入坐時爾爲二供奉一云々纏向朝廷歲次癸亥始奉二貴詔勅一所レ賜二膳臣姓一と有る六鴈命は皇別の重き人なるに其仕奉れりしを以て膳夫の世に貴かりし事を知る可きなり又安曇朝臣は綿津見神の裔なるが後には甚く重からずこそは成にたれ然る可き氏人なるが御膳の御贄に供奉る職なりしかば此等を合せて襁懸伴緒なりけり安曇は贄肉(アツミ)にて大小雜魚の御贄を奉る事を主れるなり肉(ミ)は魚肉を云ふ應神天皇御紀に三年の所に處々海人訕哤之不レ從レ命則遣二阿曇連祖大濱宿禰一平二其訕哤一因爲二海人之宰一又履仲天皇御紀に對曰淡路野島之海人也阿曇連濱子云々と有るなど海人を宰れりしは綿津見神の子孫なるに依てなり記傳に安曇を海人津持(アマツモチ)なる由云れたるは當らず年中行事秘抄なる高橋氏文なる延曆十一年の官符に高橋安曇二氏の御膳に仕奉れる事有る其高橋氏は膳臣同族にて六鴈命の後なり安曇氏の御食に供奉る事は羹に依れるなり上に引る大甞會式の續きに次内膳司高橋朝臣一人執二鰒汁漬一安曇宿禰一人執二海藻汁漬一膳部五人一人執鰒羹坏一人執二海藻羹坏一二人執二鰒埦案但一人守棚不レ預二行列一酒部四人二人舁二酒案一二人舁二黑白酒案一云々と見えたり高橋朝臣は上に注る膳臣なりければ世々其事を職と爲て仕奉れりしなり然るを此職後に大膳職内膳司に移りて高橋安曇二氏の事を管領爲る事と成れりしかば二氏は唯神事の御膳に耳預り仕奉る事と成て常の供御に抱る主と有る職を廢る事とは成にたり但此は此二氏に限らず凡ての家々の職も其如く成て神事に預る事耳は何にも仕奉る例と成れり然れば今も神事に預る家々の職掌は必上古の朝廷の常の狀なるなり必考究めて古昔の政迹を明らめ奉る可き事なり職員令義解に大膳職大夫一人掌諸國雜調物及造二庶膳羞醢菹一謂具食曰膳熟食曰レ羞肉醬曰レ醢酢菜曰レ菹也醬鼓未醬肴菓雜餅食料率二膳部一以供中其事上云々膳部一百六十人掌レ造二庶食一云々また内膳司奉膳二人掌下總二知御膳一進食先嘗謂在二御所一而嘗レ之凡玉食璃食欲レ遂二天供一膳官營造精誠俱至

然猶慮ニ其誤犯ニ故在ニ照臨而先嘗一事上典膳六人掌下造ニ供御膳一調ニ和庶味一寒温之節謂寒甚者暖熱過者爛令ニ其調適不ㇾ失ニ中上和ニ其依ニ考課令ニ大膳職亦須レ知ニ御膳一云々膳部四十人掌レ造ニ御食一云々と有るは右の二氏の職掌の大較なりつるを佗氏より任るゝ事と成れりし者也偖景行天皇御紀及熱田社縁起に日本武尊東征の出立の下に以ニ七掬脛一爲ニ膳夫一と見え高橋氏文に景行天皇の東國に幸行して磐鹿六獦命を膳臣に任賜へるを以て膳夫の上古に貴かりし事を知へく又御紀五十三年の下に膳臣遠祖名磐鹿六雁以蒲爲ニ手繦一白蛤爲レ膾而進之と有を以て手繦は御膳に仕奉る膳夫の過無らむ料に懸る事を知べく又襁懸伴緒は膳夫を指て云ふ事なるを察らむ可き者なり然れば比禮懸伴緒は陪膳の女官襁懸伴緒は膳部の男官なる事無疑き者なり襁の事は上に出巻四第十詞太多須支の下に云り　伴緒は其部の長を云ふ記傳十五丁十八に凡て伴とは官職にまれ何にまれ一部伴なふを云其伴某伴と云是なり等族など云も此意又何と無て交り親む人を友と云も同意なり伴造と云は其部の長を云　○七巻伴造の傳に云く伴とは部（ムレ）を云三枝部（サキクサベ）などの部（ヘ）なり借は即牟禮を約たる米に通（カヨ）はしたるなり上達部（カムタチメ）など思ふ可し垂仁天皇御記に楯部倭文部神弓削部神矢作部大穴磯部泊橿部玉作部神刑部大刀佩部と云を擧て并十箇品部と有り又欽明天皇御紀に秦人戸數惣七千五十三戸以ニ大藏掾一爲ニ秦伴造一と有る是秦人戸を掌る人を秦伴造と云るなり雄略天皇御記に詔聚ニ漢部一定ニ其伴造者一云々是も漢部を掌る人を其伴造と云なり又孝徳天皇御紀に詔曰若憂訴之人有ニ伴造一者其伴造先勘當而奏と見えたる是も其部々を掌る人を其伴造と云り　緒は長の本語にて長兄名の意なり書紀に魁帥渠帥なとを伊佐袁と訓るも勇長なり然れば伴緒とは其部屬の長と云稱なり玉緒などを袁と云も多くの玉などを總縛る故の名又物の長を袁と云と云も其徒屬を統帥る名にて本同言なり師説に一の緒に數の玉を貫くに譬へて云なれば伴緒と書る正字なり貫首など云貫も意通へりと云れたるに然る事なれども今少し精からず何方を本とも末とも定む可きに非れば玉緒には例には引べけれども其に譬て云とは云可きに非ず師説に伴緒を唯其部類の事と心得て云れたる者にして其長の意に云るには非ず　此處御天降段に天兒屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命五柱を指て五伴緒と云るは石屋戸段に見えたる如くに此神等各掌れる職有て其職々の部屬を帥る長神なればなり五神を指て五伴緒と云れば一伴緒は一神なり然れば伴緒とは其長を以て其部類を云に非る事明けし下巻遠飛鳥宮段に定ニ賜天下之八十友緒氏姓一八十友緒とは所有諸の伴緒を惣云なり偖是は長に限らず部屬迄に亘る如く聞ゆめれど是等は朝廷に仕奉る宮人等を大凡に云る其は何れも種々に帥る部屬有れば皆長なり此外にも部ノ字などを書て廣く其屬を云る如く聞ゆるも皆委しく云へば其長なり　又萬葉に多く物部之八十伴男と詠み師説に古は文官武官を云す凡て諸臣を物部と云りと有り　又七四丁に靱懸流伴雄廣伎大伴爾十九二十七丁に八十伴男者大王爾麻都呂布物跡定有官爾之在者云々此に官と有るも長なる故なり　など詠り大祓詞に天皇朝廷爾仕奉留比禮掛伴男手襁掛伴男靫負伴男劒佩伴男伴男能八十

伴男乎始豆官々爾仕奉留人等（此文甚々美麗し○大祓詞の考に云く男は借字なり古事記ノ大殿祭詞などに伴緒と書るを正しとす緒尾男雄など假字同じければ互に借用るぞ古昔の常なる）と有る是に八十伴男乎始豆と云るを以て伴男は其長なる事を思ひ定む可し借欠に官々爾云々と云るが其下に屬る部々の人等には有ける（以上取意）と有が如し○手躓足躓（古語云麻我比）不令爲氏は考に大御膳に仕奉るに手足の躓き非せぬなり」鈴屋大人說に御膳物を取弛し過つ如き事なりと云れたス其に然る言にて此は雄略天皇御紀（十二年の下）に天皇令木工闘鷄御田始起樓閣於是御田登樓疾走四方有若飛行時有伊勢采女仰觀樓上怪彼疾行顚仆於庭覆所擎饌（饌者御膳之物也）天皇便疑御田奸其采女自念將刑而付物部云々赦其罪古事記（同天皇段）に天皇坐長谷之百枝槻下爲豊樂之時伊勢國之三重婇指擧大御盞以獻爾百枝槻葉落浮於大御盞其婇不知落葉浮於盞猶獻大御酒天皇看行其浮盞之羽打伏其婇以刀刺充其頸將斬之時其婇白天皇曰莫殺吾身有應白事即歌曰云々故獻此歌者赦其罪也など有を思はれたる說なる可きが如此く少の手過ち足過ちなどの有を佝に咎め給ひて其陪膳の采女を殺むと爲給へる如きは其朝夕の大御膳を甚く重み爲給へるが故に終に將殺とは爲給へる者なり（此事此段の初に云り思ひ合す可き者なり禁秘御抄に陪膳采女尤可然事也近代濫令寄落無有沙汰事也と記させ給へるにも其御心を含させ給へり）佝上に引る職員令に內膳司奉膳二人掌惣知御膳進食先嘗事と有る義解に謂在御所嘗之凡玉食瑞飡欲登天供膳官營造潔戒俱至然猶慮其誤犯故在照臨而先嘗また典膳六人掌造供御膳調和庶味寒温之節と有る義解に謂寒甚者隨熱過者爛令其調適不失中和云々と有るをも併考るに手躓とは右等の如きを云ひ足躓とは彼御紀なる伊勢采女が庭に顚仆て擎る所の御膳覆すが如きを云也けり（然るは天皇の聞食す大御饌に仕奉る事故に調理る方も奉る方も共々に齋ひ愼しみて嚴重に供奉る事には在れども大寳令の御守り厚からざる時は其手躓足躓無しとは云へからず所以に此祈事に有るなり然るは其過犯しの有る時は其に依て其仕奉る人をも有怨め置せ給ひ難き事などの有て其罪に行ひ給ふ事等の出來りては其人は云も更なる天皇の御上に於ても甚しき禍事なるが故に祈申さ令め給ふ事なり）麻我比は過禍の意なり自其罪と知て爲す惡事の類に非ずして不意く過つを云なり右の玉食瑞飡欲登天供膳官營造清戒俱至然猶慮其誤犯と有を以て見る可し萬葉二に黃葉乃散之亂爾と有るは黃葉の散迷ふ事に云るか麻我比に亂字は能く當れり（物に紛るゝ混ふなどの麻我の意此に同じ借麻賀比は爪顚（ツマカヘリ）ならむと或人の說も有れど然る狹き意に非ず又躓字も爪突（ツマツク）の意なる字にて麻我布の言の惣てには亘らず說文に躓跲也詩曰載躓其尾と有るを康熙字典に按詩豳風作疐左傳宣十五年杜同躓而顚と註せ）

り偺此詞は大殿祭なるに如此き事を令祈給へるは豊宇氣毘賣命(亦名大宮賣命)の天宮にて大御膳都神と供奉らせ給ひ天鈿女命(亦名大宮比咩命)の高千穂宮にて大御膳仕奉らせ給ふ御徳を仰ぎ坐るにて共に御殿神と等しく坐が故なり(能々右に云る事共を考合す可き者なり)若て是迄に比禮懸伴緒襁懸伴緒乎云々と有れは其部長の事を主と云ふが如く聞ゆれども然に非ず上に天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豊葦原乃瑞穂之國乎安國止平氣久所知食止と有るに對見るに天皇の大御膳を平けく安らけく聞食む爲に伴緒の手躓足躓無く供奉らむ事を祈白せるなり又此大御膳に預仕奉るを以て陪膳の女官膳夫の諸臣共に中古の采女膳部の如くは非す其任重かりける事をも察む可し(大祓詞には此二を云て次に靫負作男劔佩作男云々と云り然るに此には次に親王諸王云々と有て大祓詞の如く續けるに非ず皇御孫命朝乃御膳云々より此まで一章にて畢竟は天皇の大御膳の重きが先に出るに就て親王諸王云々の前には出たるなり)

親王諸王諸臣百官人等乎己乖々不令在邪意穢心無久宮進米進宮勤勤氐咎過在波見直志聞直坐氐平久安久令仕奉坐爾依氐大宮賣命止御名乎稱辭竟奉登白

親王諸王諸臣百官人等の事は巻十(大祓詞條)に云べし天皇の御し給ふ御子等より如て官々の人を摠云ふなり(此尚事は巻五春日祭詞巻六大忌祭詞巻七風神祭詞巻八平野祭詞等の下にも言りき)○已乖々不令在は掛まくも畏き天皇の天津日嗣天津高御座の大御業はしも天照大御神神漏岐命神漏美命の事依し授奉らせ給ふ所なれば天地の間に二無くして貴しとも高しとも云む方無き大君に坐ませば天下の何方の人か此を仰き尊み奉らさらむ如何なる人か其大御心に違ひ奉らむ右にも左にも畏み敬ひ仕奉て其大御趣に靡き順ひ奉るぞ世中に生とし生る人民の天賦なる所なりけるは(此天神より伊邪那岐伊邪那美二柱神に此漂在國を修理固成と仰給へる御事に肪れる事上に已に云るが如し天津日の天上に御照し坐む限りは動き無き大御位に坐せば臣民としては奉違る所無でかし)已乖々は己が向々に氣隨なるを云なり氣隨にして己が欲する所を極むと雖も其得る所眞の富眞の貴に非ず然る氣隨なる僻物には道速振る惡しき神取託て其人を假り其心を借て疎び荒び健ぶ者なるが故に愈其惡に募りて終に改る事を得ず是を以て其身に殃し子孫に害するに至る此は天賦の德を棄て不義の僥倖を索るを以て愛しき青人草に非ず又此を大御寶とは云まじかりけるが故に幽顯より此を責るなり豈不幸の甚しき者ならざらむや(幽より責給ふ所は

六親相和せず骨肉相食み或は壽夭或は嗣無くして其家徒に他姓の人の有と成る等の天誅なとを云ひ顯より責給ふ所は朝廷法有り刑賞制有り其々を以て正し給ひ其制を以て罰し給ふ等の事有るを云なりけり　其不幸にして不義を行ひ天譴を獲顯罰を得たる其概略を今一二云はゞ驕傲にして借上なる者有り蘇我蝦夷蘇我入鹿弓削道鏡藤原道長等なり後世尤甚しき者は足利義滿等也但然る人々は譬ひ其失德失行有るにも爲よ其身大臣の極官に至れる人々なれば予が如く云むも又驕傲潜上なるに似たりと雖も其は君臣の義に關らず唯に其人の何と無き上を云ふ時こそあらめ君臣の大節を失ひ天津日嗣を蔑視(カロシメ)奉りし凶惡を罪するに何で其詞を卑くし其人を敬はむや君臣の大道を説明し仕奉る重胤然る驕惜を惡む性に生れたる此即天神の予をして其罪を罰め令めさせ給へるなれば予が言即神の御言にして神の御言即予が口を借て言令め給ふなり　鄙人にして朝威を奪奉り己が後榮を謀る者有り源頼朝源尊氏等此なり何れも姦雄の輩にして朝廷を欺奉り天下の利を奪ひ以て己が利と爲る輩なり此天譴有て頼朝父子二代にて亡び足利は十三代たりしかども一日も安き事無く治り難かりしなり　驕慢に長じて我知ず朝廷を蔑如爲る者有り平清盛豐臣秀吉等也清盛公は保元平治の亂を靜め其功大也と雖も法皇を押籠奉り又公卿大臣の官爵を削り此を流す此天誅父子二代にて亡ぶ秀吉公は彼足利の狂人の代より打續きて世中は亂に亂れたりしを悉く此を平げ未代泰平の基を定められたれば其功古今に比無く賽しと雖も強て關白と爲り其勢に乘じて天下の姓氏を濫る其罪少しと爲ず但此公は松永貞德が戴恩記に戴る如く實には皇胤の貴族に度らせ給へば大政大臣などには昇給はむも許さるゝを關白と迄は餘りなる事なり所以に秀次を養子と爲て關白たりしも忽ち滅び其末子秀頼に至て其祀を斷つ　惡逆無道(タブレクナ)にして人臣の禮節を失ひ朝廷に迫切れる者有り蘇我馬子藤原伊周平義時平泰時の如き姦賊なり又陪臣に居ながら朝廷を蔑視し天下の政を屈せる北條の徒など悉く此なり　如此きの徒など何れも己が乖々なる所爲なるに暫くは人も從ひ歸(オモム)き強て貴く強て富りしは其禍心の所を得たる者にして打開くにも羨しき計りなりけるは無疆き幸福とは見ゆめる物から素より隨在天神(カムナガラカミ)なる所に非れば其身も生涯奪はれや爲む滅ぼされや爲むの心遣ひ譬ふるに似る物無く又子孫の後榮を謀りしも子孫の能く其輩の如く姦智逞しき者の出來ゝくも非れば終に其姦詐を見顯はされて其家を滅し其統を斷つ事は云も更なり末代の書典に遺りて天下の人民に罰疵爲らるゝは其存在し間こそ然は若しからざりけめども幽冥豈此を許可し給はむや然こそ前非を悔居る事ならし然るは幽冥に入ては識神を以て體と爲す者なり顯明に在ては言語を以て用を爲す者なるが言語に識神の作用なれば天下の衆口に責る所肉身の刀刃に刺るゝが如くなる者なれば如何に若しき呵責ならむ惡む可しと雖も憐む可し不幸の甚しき者とは此を云るなりよ　實に天皇は顯身の現人神に坐せども天神御子とも遠津神とも申して爰に人間とは隔りて殊異なる大御稜威(アマツカミ)の大坐ますが故に臣下として其道に違ふ時は皇天此を罰殛(ツミナ)ひ結ふ御事にて甚々畏く有れば親王諸王諸臣百官人等に然る己が氣隨(ムキ〳〵)なる僻事無らむ事を如此く新ら令め給へるも又深き大御惠になむ有ける漢籍素書と云者に今與レ心乖(ツムク)者雖レ後合繆レ(モトル)前者乖(ツムク)と有る乖の字の義を思ふ可し此は上の令にも乖き又同僞の心にも打合ざる如きを己乖々とに云るなり　○邪意穢心無久は字の如く意得て宜し今言義を説べし邪は惡字の義にて善の對なり善は寄然(ヨキ)にて理の隨に違ふ所無き由なるが故に其事の倚累り寄

る形狀なり惡は彼及にて物の義に離れ違ふ由にて愈其義に遠放る形狀なり（上に阿禮比坐の下に說る事を此に合せて知べし）穢は淸の反にて上なると同意なるが元來此二語共に大虛の氣に因緣て起れり淸め氣寄にて神氣の淸く盛に成る意穢は氣慥無にて淸々しき神氣の薄れて溷雜なるを云ふ事なり然れば善惡は往來の義にて親疎の別有り淸穢は聚散の義にて可否の差有るなり（但此等の言義を說むは此に用無に似たれども斯在る事も相對て見る所有に非れば終に其義を解し得る事無も故なり）偖天下の人民の常として其心を淸く明く正しく直く持べきは天然の事なりながら別に朝廷に仕奉る人などは勝れて能く爲ざれば叶はぬ事なり其は天皇に忠ならぬは然る者にて各其率る人有り是下風の人など有ては其害を延て及ぼす所多ければなり〇宮進米進は大宮仕に怠退く事無きを云なり考に進米爾と爾字を補はれたるは非ず鈴屋大人說に宮進とは百官人の大宮に參入仕奉る事を此神の勵し給ふを云なる可し（考に爾字を補はれたれど此爾は無ても同じ事なり例は神集々神議々伊都乃道別道別などの如くにて是等も爾は有も無も有ればなり）と有り信ふ可き事共なり〇宮勤々氏志米續紀詔に多く見えたり（鈴屋大人說に考に勤爾と爾字を補はれたるは違へり本の任にて有べし又勤を都加倍と訓れたるも惡し字の任に都比米と訓べしと有り偖此は萬葉一に藤原乃大宮都可倍十三に内日刺大宮都可倍など有る宮仕を云なり）三代實錄廿九（十五丁）詔に内外乃政乎取持氏勤仕奉止己夙夜不懈とも有り此は大宮仕へに緩み怠る事無を云ふ〇咎過在乎波の咎は已乖々云々の事は咎なり手躓足躓の如きは過なり此等を云ふ（咎の事は大祓詞の下に委く云ふ可し）〇見直志聞直坐氐平良氣久安良氣久令仕奉坐爾依氐は先に有も大較同じきが其義に大なる異有り然るは本文の惣ては瑞之御殿を屋船命の御正躰と崇まへ奉り其用ふ所の樹草の神靈をも齋ひ鎮め奉るに就て其御殿の内に在む凡ての不祥を未然に防ぎ除き其所に大坐ます天皇の御上に有まく欲き幸福を祈らせ給ふが故に其事を摠括て平良氣久安良氣久所知食登白とは結たるを此詞別は巳に御殿造りて天皇の住せ給ふは親王諸王諸臣百官人を召給ひて天津日嗣天津高御座を所知食む爲なり然るに其仕奉る人に咎過在むは君の御爲には本より祥はしからず其臣と有る人の上には限も無き身の禍事なるが故に大宮賣命と御名を稱別り坐て君臣の間を和し本末傾けず仕奉ら令め坐すに依て平良氣久安良氣久令仕奉坐爾依氐とは云るなり（然れば本文には事と天皇の御上に係る事を云ひ詞別には王臣の上の事を主と云て其極る所は君上にも臣下にも更に亘る事なり然れど本文と此とは體用の差別有て其貴く所異なり）〇大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久登白は上に擧る如き御守はしも悉く君臣の間に係れる國家の大事なる

を此神の大宮の內に塞り在して預り所知食す御靈に依れる故に大宮賣命と稱奉れるなり然るに本文にては屋船命主と立ち御在れども此は已に御殿と成たる上の用を以て稱る故に屋船命は幽に在て天鈿女命は顯に立給ふ所なり此神は天兒屋命の后神に坐るが故に屋船命の御德を負て大宮を守奉給ふ所も大較同じきなり古語拾遺に令ミ大宮賣神侍ニ於御前ーと有る本注に如下今世內侍善言美詞和ニ君臣間ー令中宸襟悅懌上也と有れば唯に君臣の間の事耳の如くなれども此詞に神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氐と有れば神と君との御間をも和し給ふなりけり（又御紀に素戔嗚尊の再上天し給ひける時に天鈿女命の奉迎て天照大神に白給ひ記紀共に猿田彥神に面勝て向ひ給ふなど有を考ふ可し）然れば神代紀に天兒屋命を中臣神と申せる其を中臣壽詞に現御神止大八島國所知食須大倭根子天皇我御前仁天神乃壽詞乎云々皇神等母千秋五百秋乃相嘗爾云々本末不傾茂槍乃中執持弖云々大中臣本系帳に高天原初而皇神之御中皇御孫之御中執持伊賀志桙不レ傾ニ本末ー中良布留人稱ニ之中臣ー者など有を思合す可し（鎌足公傳にも內大臣諱鎌足云々其先出レ自ニ天兒屋根命ー世掌ニ天地之祭ー相ニ和人神ー仍命ニ其氏ー曰ニ中臣ーと有り尙中臣壽詞考に悉しく云りき）然れども其夫天兒屋命は御殿の神には在さず其主り給ふ所は同じくして其知る所は殊異なり思ひ混ふ可からず（但天鈿女命の事な記傳に猿田毘古神に對給へる條に記されたるは委しからず卷五春日祭詞の下に註せり）偖拾遺に今世內侍云々と記せるは職員令に內侍司尙侍二人掌下供ニ奉常侍奏請宣傳ー檢ニ校女孺ー兼知ニ內外命婦朝參及禁內禮式之事上云々と有を取て云れたるなり（義解には天長十年に奏上する所なれば此令文の事な思はれつる者なり）尙此首に云る事其をも合せ考ふ可きなり

御門祭

祝詞式に此詞を如此く別條に出されたりと雖も其式は大殿祭に隷て其に行るゝ事にて眞には其詞別の如くなるなり（其由は下に云を見て知るべし四時祭式に四面御門祭御川水祭と並出たるは別なり六月月次祭御門神祠の下に辨へたるが如し）其は古語拾遺に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀と有は上（大殿祭條）に注る如く同書（天石屋段）に天照大神を新殿に遷座せ奉る下に天兒屋命太玉命以ニ日御綱ー廻ニ懸其殿ー令ニ大宮賣神侍ニ於御前ー豐磐間戶命櫛磐間戶二神守ニ衞殿門ーと有る時に供奉られし事にて皇御孫命の初國所如食し高千穗宮にて定りつる神事と見えたり但守ニ衞殿門ーと有るは深く心有て記れたる者にて常に宮門などゝ云ふとは殊異にて御殿と御門とを守衞り給ふとの事なり然らば大宮賣神は御殿の神なるに

御門神の其を守衛り坐すと爲は如何はしき狀なれど大殿祭の詞別とを合せ考ふるに大宮賣神は專とは其大殿の內に座して君臣の間の事を守らせ給ふを御德と爲し給ひ（拾遺の本注に如下今世內侍善言美詞和君臣之間令宸襟悅懌上也と有るを深く思ふ可し）御門神は御門は云も更なり御殿にも在れ何方にまれ人の往來出入り爲る戶口を守衛給ふ神に坐せば守衛殿門とは甚能く通えたる事なりけり其は古事記に天石戶別神亦名謂櫛石窻神亦名謂豐石窻神此神者御門之神也と有る天石戶別神と申すは天石屋戶を引開仕奉給ひし由の御名なるが石戶は御門の戶に非ず刺隱り坐し石屋の御戶を云るなれば假令御殿にも在れ其開閤爲る御戶の守衛をも兼させ給ふ事云も更なり若て此神即天手力男神に在せり（古事記の右の次の文に次手力男神者坐佐那縣也と有るは御名の異なるが故に別神と心得僻めたるならむと思ふに然らず御門神と御戶開神の御靈質を別てる者なり万葉三に石戶破手力毛欲得と有り古語を詠るなり偖此時天石戶を破りて日大御神を引出し奉る如き手力有る神は此神を除て何れか有む）所以に倭姬命世紀に御戶開神二坐天手力男神栲幡千々姬命と記せるが共に大御神の相殿神と有るは天宮の儀にて拾遺の旨に熟符へり其は御鎮座本記に外宮鎮坐の事を記せる處に依天照大神御託宣大神第一攝神多賀宮奉傍止由氣宮也亦天照大神相殿座神二前止由氣宮相殿而東西座給（東天皇孫命一座而（ニニシ）天兒屋根命太玉命西相殿並座給也）自爾以來以天手力男神萬幡豐秋津姬命天照皇大神乃爲相殿神（元是號御戶開神）と有を見つ可し偖其萬幡豐秋津姬命と申すは上（春日祭詞）（大殿祭詞）に考徵せる如く天鈿女命の亦名にて大宮比咩命の御事なるが此神をも御戶開神と申す事上なる詞別の文に大宮賣命登御名乎申事皮皇御孫命乃同殿乃裏爾塞坐氏參入罷出人能選比所知志云々拾遺に令大宮賣神侍於御前と有るに契合へるが其德を爲給ふ根源を探るに古事記（天石屋段）に天手力男神隱立戶掖而天宇受賣命云々天照大御神逾思奇而稍自戶出而臨坐之時其所隱立之天手力男神取其御手引出と有を神代記一書に天手力雄神侍磐戶側則引開之者拾遺に令天手力雄神引啓其扉と見えたれば天手力男神は石戶破る手力を以て其石戶をこそは開き給へれ御手を取るに暇無らむ天鈿女命強捍猛固く坐て御名に尙に負坐る計りなれば決て其御手を取て引出奉られしが故に此神をも御戶開神とは申せるなり偖思ふには拾遺本注に强女謂之於須志と有れとも於須志は元

來强女の名ならず此神の强捍猛固なるに象て云ふ所なる可し天宇受賣神とは天大宮賣神と申す意にて同名なるを誤て別神の如く傳へたるならむか宇は大なる事受は天之御巢天之新巢なとの巢にて宮殿を云ふ言なるを思ふ可し和名抄に護田鳥於須賣止里常在ニ澤中ニ見レ人輙鳴有レ似レ主ニ守宮ニ故以名之と有も此神名より出たるなればなり神名式に山城國葛野郡天津石門別稚姫神社名神大月次新嘗と有は此神なる事卷三大御神詞の注に云り又阿波國名方郡天石門別八倉比賣神社大月次新嘗と有も同神たる事其下に師說を引て云りき　然れは天手力男神萬幡豐秋津姬命二柱を御戶開神と申す中に天手力男神亦名櫛磐間戶命亦名豐磐間戶命　は御戶を開閤ひ主と掌し看すが其出入の尤大なる所は御門なり是を以て御門神とこそは申せ戶牖の開闔爲る所は何方か此神の守衛坐す所ならざらむ守衛殿門と有る事眞に謂れたる古說なり此詞の大殿祭に屬て其詞別の文なるも又謂れたる古傳ならずや凡て神等の御德を機關(ハタラ)かして、物に幸給ふ所は大旨如此くなる者にて世の古學者の說を爲すか如き偏固狹少なる者には非す心を天地に活かせ鬼神を貫きて知る人ぞ知るらむ　然るは屋船命と申すは御殿は更なり御門にも何にも木を以て造り草を以て覆ひて屋構り爲ス所は悉く此神の恩賴に依る所なるが其內に在る所の物事は大宮賣神此を防護り其戶外に在る物事は御門神此を守衛り給ふか故に彼此相分るか如くなれども共に屋內にして在る事なれは眞に屋船命に屬けてぞ祭らる可き事なりける大殿祭詞に戶牖乃辭北動鳴事無くと有るも其下に說る如く、實に貴る由なるが御門神の守衛坐する所以を此に遞る照應になさずしも非す古語拾遺神武天皇段に天富命云々陳其幣物殿祭祝詞其祝詞文在ニ於別卷ニ　次祭ニ宮門ニ其祝詞亦在於別卷と有るも別々に行れし狀ニ知れよ能く視れば次に引續きて行るゝなり又凡奉レ造ニ神殿ニ者須レ依ニ神代之職ニ云々齋部殿祭及門祭訖乃可ニ御坐ニ云々と有も上の例なり此事を大嘗會式に凡造ニ大嘗宮ニ者云々造畢即中臣忌部率ニ御巫等ニ祭ニ殿及門ニ其幣物云々並中官請受後鎭料並之　と有て此には殿及門祭と有て云はゞ別神事の如く見ゆれども解祭の所の大殿祭は其に云ふ後鎭なるか大殿祭料云々又大嘗御竈祭炊殿鎭等之例與ニ尋常新嘗會ニ同と有て門祭の事を云ざるも一なるが故なり齋宮式にも野宮伊勢共に大殿祭の事有て御門祭の事無し此も其祭に屬て祭らるゝ其頃の常なるも故に記されざるなり又拾遺に殿祭門祭者元太玉命之供奉之儀齋部氏之所職也雖然中臣齋部共任神祇官相副供奉故宮內省奏詞云將レ供ニ奉御殿祭ニ而中臣齋部候ニ御門ニ云々と有るは殊に亮々(アキラカ)なる者なり然るは殿祭門祭者と云れは若別々ならむには宮內奏詞にも件を別て云はでは聞え難きを將レ供ニ奉御殿祭ニ而中臣齋

部候ニ御門一としも云るは御門祭は御殿の中に在て行るゝが故なり然れども祝詞は別に在て混ふましきが為に其祝詞亦在ニ於別巻一と上に断り置る者なり（但中臣齋部候ニ御門一と有るは祭る御門を云に非ず御門外に候して今参入む由を奏せさする詞なり）所以に貞観儀式延喜式北山抄江次第等に其儀式を別に載られざるは大殿祭の中に在を以てなり祝詞式の首に凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞と有れば其頃著明き祭祀なるを何れを見ても其幣物は更なり其式をたに記されざるに疑を附て考ふ可き事ならずや然を賀茂翁の考に四時祭式に四面御門祭（十二月准レ之）「御川水祭（同上）此左に右四面祭御門巫御川水祭座摩巫各行事と見ゆ云々是を巫を神主とし忌部は祝詞を讀む奉幣は本より也」と云れつれとも委からず其は四面御門祭は其御巫有て常に仕奉れる其を以て令祭め給ふ所なれば齋部の本より預る所ならず且御川水祭と並べ行るゝも大殿祭とは別なるが故なり然れは此説は信ひ難し此御門祭は大殿祭に屬て行るゝが故に別に幣物無く唯散米酒の事のみなり此を以ても四面御門祭とは別なる事を思ひ定む可きなり（此事六月月次祭詞の下に云り倩祝詞式の首に凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞と有るは此大殿祭御門祭の二に限れる事にて同じ御門神に白す詞と雖も祈年月次等祭なるは齋部氏の預る所ならず中臣氏の祝詞する所なり四面御門祭の如きは御門巫の行事る事なるが故に態と其事を別て記されたる者なや）然らば何を以て此祭を大殿祭の中に在て行るゝぞと云ふに確證有り其は四時祭式大殿祭條に中臣忌部御巫等以次入ニ御殿一忌部取レ玉懸ニ殿四角一御巫等散ニ米酒切木綿殿内四角一退出中臣侍ニ御殿南一忌部向レ巽微聲申ニ祝詞一畢次至ニ湯殿一懸ニ玉四角一次懸ニ厠殿四角一次懸ニ御厨子所四角一次懸ニ紫震殿四角一御巫以レ次散ニ米酒一如レ初（御巫一人進ニ承明門一散ニ米酒一）と有る御巫一人進ニ承明門一散米（儀式には御巫一人進ニ紫宸殿一散米一人至ニ承明門一散米と有り）と有る此御門祭にて祝詞は忌部向レ巽微聲申祝詞と有る其中に在る可し其は此御門神も大宮賣命と共に鎮坐す所神祇官西院なれは其方を指て巽には向へるなり且御門神には玉の用無きか故に祝詞には記さす散米酒のみなり幣物を進る事無し所以に此詞に云々登御名乎稱辭竟奉久登白と有て祈年月次等祭の例とは異なるも證と為べし然れは大殿祭に隷て行ふと云ふ予が説の誣ざるを知る可きなり（然れば右の四面御門祭の如きとは打替りて別なる所なるを人は知ずてぞ有る状なる）又此詞を其詞別の如くなりと云も櫛磐牖豊磐牖登御名乎申事波と有て上に大宮賣命登御名乎申事波と有るも同しくして考に此上に今少し言の有ぬは無きに此のみ斯在る

は若落たるか」と云れたる如くなるは此詞の云ひ知ぬ味にて大殿祭の詞別と相並へるが故なり然れは彼詞に詞別白久云々より引續きて云ふ故に此には態と略く所なり是を以て觀れば愈其祭に隷て行はるゝと云ふ上に證せる事共に打合て動く所更に無める者なりかし尙次々に說き行くを合て考てよ　尙云はゞ若此祭の別條ならむには彼祈年月次等詞に御門能御巫能稱辭竟奉皇神等能前爾白久とか道饗祭詞に高天之原爾事始弖皇御孫命止稱辭竟奉とか其首に云はずして通えぬを此詞には直に櫛磐牖豐磐牖命登御名乎申事波云々と突然と出たるは大殿をも御門をも屋構り爲る所は一として屋船命の掌坐ぬ所し無れは其神の恩賴を蒙奉らぬ方有る事無きが故に大殿にも御門にも其守衞と成給ふ大宮賣命櫛磐牖豐磐牖命を附副て祀る所にして祈年月次の如く又四面御門祭の如く御門神を指定て祭らるるには非す畢竟は屋船命に添祀らるゝが故なり然るは拾遺神武天皇段に建二都橿原一經二營帝宅一仍令下天富命太玉命之孫率二手置帆負彥狹知二神之孫一以二齋斧齋鉏一始採二山材一構中立正殿上云々其物既備天富命率二諸齋部一云々殿祭祝詞次祭二宮門一と有る如く新に大殿御門を構造られたるに就て祭らるゝ事にて常の御門神祭とは異なるが故なり又此に構立正殿と云て御門をも混たるに心を着く可し鈴屋大人も最初に御門乃皇神等乃前爾白久櫛磐牖云々と有らでは詞足らざる事右の大殿祭の詞別の所に云るが如し」と云れたる其は其下にも云る如く共に思ひ漏されたる者ならむか

櫛磐牖豐磐牖命登御名乎申事波四方內外御門爾如湯津石村久塞坐氐

此は大殿祭詞別に大宮賣命登御名乎申事波皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氐と有るに對せる文なり然れは上に詞別白久は此詞に係れる事決き者なり此は其詞の詞別なる事已に辨へたりき　櫛磐牖豐磐牖命名義は上に出卷二第五詞の下に說り　但櫛と豐と對へるは天之水分神國之水分神など多く天と國とに相對たるに同しくして櫛とは天にて生坐る神は云も更也本より國神なるも天に關る由などの有る時は久志と云ひ豐は國土にて生坐る神に稱る言なるが天神と雖も此國に天降坐るか又由緣有ては登與と稱申す例なり古語拾遺に謂ゆる櫛明玉命を神名式に天石門別豐玉比賣神と申せるにて知る可し此國土に在て成坐る神よ稱たりとは豐雲野神豐國主命などの類を云なり　天神も此國に天降坐るは豐布都神など申し天照大御神をも豐日女命と申す事神樂歌に見えたり此も其御靈を招き降し奉るが故なり神代紀天石窟段一書に玉作部遠祖豐玉者造玉と云るは御天降の後の名を何と無く上へ及ぼして記せる者なり又櫛明玉命を姓氏錄に天明玉命と記したるも

櫛と天と通ふ例なり須佐之男神を櫛御氣野命と稱へ申せるも天より降坐て大なる御功を立給ふが故なり大己貴命の和魂を倭大物主櫛𤭖玉命と稱申せるも天神に歸順奉る由に縁れるなり又幸魂奇魂の奇も幽より其賛くる御靈の御名なる事卷二第六詞條に云るが如し其幽賛る者は天神なる事云も更なり此等を合せて久志と天とは同物なるを察らむ可し 皇御孫命の天降坐し高千穗之久士布流多氣も久志布流は櫛經にて天降り坐し由に因れるか又は天香山の如く天上より降り來れるか何れにも此二の義を離れざる可し俗に其山の事を語傳たるに伊邪那岐伊邪那美二柱神天浮橋の上より霧海を見下し給ふに島の如く見ゆる物有るを天沼矛を以て盪探り其所に天降給ひて其矛を逆樣に下し給へるなり霧島山と云も此由なりと云るは信難けれど無下に由無き事には非ず 久志とは天體を云る說にて氣息と云ふ意なり氣は天霩の茫洋きか如くなれども少も間斷有る事無く薰り充塞りて宇宙の大象を該羅てるを云ひ志は息にて往來の氣を云なり風と云ひ嵐と云ひ飄と云ひ蜺と云ふ言ノ本なり何を以て此を稱言とは爲せるぞと云ふに天上はしも天日天極は更なり其積氣中に至る迄も遺る隈無く悉くに天地を預鎔造ふ天神の御在處にして世中に在と有ゆる萬物を悉くに產靈生し給ふが其產靈ばり成る所の萬の物實は其氣中に存在るが故に其造る本緣を以て又此を氣爲と云ふ義も有て奇靈しとも微妙なりとも言む方無き神事の行るゝ處なるが其發見るゝ所は國土なり此を以て思はすして成り迎へずして來る者を久須志と云ふ語は神隨に爲て出來れる者なりけり然れは天と櫛と其義同じと雖も天とは其象を以て云ひ櫛とは其靈を以て云る者と所思ゆ 久志を氣息と云るは俗に久佐牟と云も氣息病(クシヤム)と云ふ事の切れるなるを思ふ可し 登與は地動に本就たる語にて處緣と云ふ意なり登は處なるが其大なる者は大地なり土を登と云も本より此の古言なるに彼字義の遇中るなり神代紀に泥土此云二于眦尼一沙土此云二須眦尼一と有る尼と登と音通なるを思ふ可し 與は經て行く意なるが此二言を合せて動の一語と爲れるが其動の大なる者は地動なり大地常に動みて天日の光輝を迎へ天氣と相混和りて萬有を生々化育す此大地の德と爲る所にして神祇の全能も此に依て著見するなり此を以て大地にての稱言には此を物の上に冠ふらせて云ふ常なり 此は古始太元故豐雲野神の下に說る趣を約め記せるなるが平譽重此說を信ひて云けらく常陸風土記に自二高天原一降來大神名稱二香島天之大神一天則號二曰香島之宮一地則名二豐香島之宮一と有を以て豐と爲べしと云るは愛しき言なり 古事記御天降段に天石戶別神亦名謂二櫛石窻神一亦名謂二豐石窻神一此神者御門之神也と有れば佗書には二神の如くなりと雖も實には一神に御在るなり何故に如此く

なるぞと云ふに右に説る如く天宮の御門神と坐し皇大宮の御門神に坐が故に自然にして二御靈と分り給ひ二柱神とは成給へるを以てなり 然れば櫛豐は共に例の稱名なりと云ふ記傳の説は甚麁くなむ有ける 俗櫛豐と御名の稱別りたる上の意は久志は自然にして具有る所の靈妙なるを云て其神機の甚神々しく測り知り難き義と爲り登與は豐饒にして其勢ひ有餘(アマリ)有る計なるを云なり又此二を合せて豐久士比泥別また奇稻田美等與麻奴良比賣命なども云り 豐久士比泥別は國名なるが故に豐奇と云ひ奇稻田美等與麻奴良比賣命は天神大山祇神の孫なるが故に奇豐と次序云るなり 但此は其本義を云にこそ有けれ神代より以降右の二を以て稱辭と爲る事と成す事常と成にたれば其意を得て説へきなり 然れと何方迄も久志は氣の作用の妙なるを云ひ豐は質有る者の饒なるを云ふ意ばへは異らず ○御名乎由事波は祈年月次祭詞などに御名者白氐辭竟奉者云々故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登久宣と有るとば同じき狀にて大に異なり其は神名式に御門巫祭神八座 並大月次新嘗 と有が如く常には其を御名と爲て祭らるゝ事なるに此祈年月次の幣帛を奉らるゝに當りて其祭神の御名をも顯出で申させ給ふ事にて本より有來れる所の御名を申す意はへなるが故に其結びをも皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登久宣と云ひ終めて畢竟は幣帛を奉らせるに意有て御名の起元を云ふ意無きを 此は右の二祭の惣ての狀にて獨此御門神のみなるに非ず能く其異を見る可き者なり 此詞又大殿祭詞別共に云々登御名乎申事波云々登御名乎稱辭竟奉登久白は御名に負坐る所以を稱へ申すに意有て幣帛の用無が故なるが此の御門祭は大殿祭と同じくして祈事と云ふ中にも御靈を齋鎭めて大殿御門の言壽を主と爲す故に御名を然稱奉らせ給ふ事を懇到に云ふ所なれば祈年月次とは云樣に異る所有なりけり借御名乎申事波と云るは本よりの御名に非ず其守衛給ふ事に就て稱たる所なるが故に句の上より云々神乎云々登御名乎申事波と有る意なり其は大宮賣命は元名萬幡豐秋津姫命なるを御殿を守坐す故に然稱へ櫛磐牖豐磐牖命は元名天石戸別神たるを御門を守衛給ふ由を以て然稱へたる事の本を言外に表(アラハ)す故に如此は云る也 是等の事共を合せ見れば御門祭の祭字は大殿祭と同じく保賀比と訓べく所思ゆ ○四方内外御門爾は鈴屋大人説に内重中重外重を兼て云なり」と云れたるは然る言なり 内重とは承明門宣陽門陰明門玄暉門の如き内裏の内に在る門を云ひ中重とは建禮門建春門宜秋門朔平門等の如き内裏の外に在る門を云ふ其外に内裏を八省院を始て凡ての官舍其内に在て皇城の外郭と爲れる朱雀門美福門皇嘉門等の如きを惣て外重とは云ふ事なり餘は此に准らへて知る可し 四方御門の稱古は甚も雅たる事なりけむ萬葉一卷藤原御井歌に日經乃大御

門日緯能大御門背友乃大御門影友乃大御門と有るは東南西北の御門の事を文成して如此は詠るにかと思ふに然らず久代の稱呼なりしなり（成務天皇御紀に以二東西一爲二日縱一以二南北一爲二日横一山陽曰二影面一山陰曰二背面一と有を思ふ可し此に因る時は背友影友の友は借て書るにて面字の義なり）正殿の名を天智天皇御紀に西安殿西小殿天武天皇御紀に向安殿內安殿外安殿文武天皇御紀に東安殿など有に例して思ふに御門の名も內東門內西門外南門外北門と樣に呼りけむと所思ゆ然るは大甞會式を見るに大甞宮云々宮垣正南開二一門一內樹二屛籬一東開二一門一外樹二屛籬一正北亦開二一門一內樹二屛籬一西開二一門一外樹二屛籬一と有て此より後は南門北門など云て號を稱ざるは上古の消息なる者なるを思ふ可し後世に至ても上東門上西門など云るは其制の遺れる者なり今世に至ても紫震殿を南殿建禮門を南門と云るに古名を失はざる者也（然るを拾芥抄に或書云西會廂門東會廂門是上西門上東門本名也見二日本紀一と有は本末違へり上西門上東門が本名也けるを會廂門と云が如きは延暦遷都以來の名なれば也然れば是本名上西門上東門也と有るを誤れる者なり）○如湯津磐村久塞坐氏は上に出（祈年月次等詞に在り）

四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾（古語云二麻我許登一）相麻自許理相口會賜事無久自生往波上護利自下往波下護利待坊掃却言排坐氏

四方四角與利は四方正面の御門は更なり其佗の御門々々とも該羅て云なり但下に自上往波自下往波と有を以て考るに宮墻の上下を云なり其は人こそは門掖より往來ふ事なりけれ鬼神の出入豈門掖耳ならむや何方にまれ御門神の禁衛の間然有るを伺ひて宮墻の上よりも築垣の下よりも往來出入爲る事にて續後紀九卷伊豆國阿波神の神異を現し給ふ所に入レ地如レ水坐レ空如レ地と有が如くなる者なり（何れの神の御上も如此くなる者常なるが疎び荒びて妖を爲す惡神などは如何ばかり巧なるらむ思遣る可なり）然れども佗處にて犯すは知ず門戶を搆たる內には御門神の御禁衛有て入る事能はず又其御防護を畏みて疎び散けて在る者なるが假令天神御子とは申せども皇祖天神の天つ神隨なる道に違はせ給ふ時は皇祖天神の詔命を奉て御門神も此を許可し入給ひて窘め奉給ひて其罪を贖はせ奉る事と見えたり況て其餘の凡人共に於てをや（御門神と申は天神の賦命にて御門を禁衛給ふ御職なり然れば其御門內へは惡神惡人は過めて入させ給ふまじき本よりの御神德なれば且ても然る禍々しき事は夢にも有へからぬを然る事の有るは御守護の唯に薄き耳には非ず許可して此を入しめ給ふなり但天皇は天神御子なり凡人と雖も愛しき靑人草と神祇の愛しみ給ふ所なり皇祖天神の詔命を以て責給ひ又神事知す大國主神の謫め給ふ事と所思ゆ噫畏きかな）古事記穴穗宮段に天皇爲二伊呂弟大長谷王子一而坂本臣等之祖根

臣遣二大日下王之許一令レ詔者汝命之妹欲レ婚二大長谷王子一故可貢爾大日下王四拜白之云々恐隨二大命一奉進云々根臣即盜二取其禮物之玉縵一讒二大日下王一曰云々大怒殺二大日下王一而取二持來其王之嫡妻長田大郎女一爲皇后云々詔大后言吾恒有レ所レ思何者汝之子目弱王成人之時知三吾其殺二父王一者還爲レ有二邪心一乎於是所レ遊二其殿下一目弱王聞取使竊伺二天皇之御寢一取二其傍大刀一乃打二斬其天皇之頸一と有るが如きは神代より未嘗ても聞えぬ大禍事にて其本は根臣の禍心に出たりと雖も其微臣の讒を信給ひ同じ金枝玉葉を殺さ令め給ひ剰に其嫡妻を取て皇后と成し給ふ如き神隨ならぬ御所業有し故に吾恒有所思と詔ひ目弱王の成人らは還爲レ有二邪心一乎と戰々慄々給ひ其御心の安く坐ざりけるは皇祖天神の天罰を得給ひ氣勢已く御心を攻奉て有けるが自然御言に發れ終に打斬られ給へるにて根臣が禍言に相交こり相口會給へるが致す所なるが故に御門神と防ぎ過め奉給ふ可き方も無き御事なりかし然も有らば然る禍々しき心有る根臣を御門神の何とて御門内には入れて天皇を相交こり相口會させ奉しと云ふ其始め御使に出し給ふは天皇の御心より出で根臣も本より惡しき心には有べからず押木之玉縵に魂を奪れて其心僻々しく成れりと雖も天皇に天つ神隨なる所坐さば相交こり相口會させ給ふまじく却て根臣の禍心を倚に悔い恥らひて改しめるに至る可きが天皇の一向に若日下王を召て大長谷王子に婚給はむと所思す荒魂耳進み御在りしかば不意く其禍言を迎へて相交こり相口會させ給ひ其事に乘て惡業を成所なる故に目弱王の御寢坐る間隙を伺ふをも理に於て禁衛く可きに非ればぞかし 然れは御守護は常に在て其變は變に於て處し給ふ 但此は人の禍神幽の道也別に此は臣の君を犯す類に非ず同じ王族なる御方にて仇報い爲給ふ處なるなも思ふ可し 神に交こりて著見るゝ事跡也けれ實には四方四角より疎び荒び來る禍神の何在か有らむも測知られぬを御門神の禁衛り御在るに依てこそ此等の事の變とは見ゆるなりけれ御門神の御守護無くは禍事の常に處て善事の變に見ゆるにも至る可し其御守護の厚き事如此きなり豈此を麁畧に思ふ可けむや 世の人の凡ての定め言はしも物に常在て行るゝを云ず邂逅有る一二事の變を尤(トガ)めて其神威の無き如く思ふは愚なる事なり其變の得堪ましく所思る計りなるは其常の安きが故なり寒國の人の暑に堪難く暖國の人の寒に堪難る同しき者ならずや ○疎備 荒備 來武の疎備は神代紀天孫降臨段第二ノ一書に是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合二八十萬神於天高市一帥以昇レ天陳二其誠款

之至ニ時高皇産靈尊勅ニ大物主神ニ汝若以ニ國神ニ爲ㇾ妻吾猶謂汝有ニ疏心ニ故今以ニ吾女三穗津姫ニ配汝爲ㇾ妻宣ㇾ領ニ八十萬神ニ永爲ニ皇孫ニ奉ㇾ護乃使還降之を有る是は惡神の例には非ずと雖も此文を假借て說く可し然るは天神は八百萬神の主宰に坐し天皇は天下人民の君主に度らせ給へば本より歸順ひ仕奉りて其大御旨を仰ぎ奉る可き天地の大道なり此大道に依るを誠欵と云ふ其誠欵を貫く此を誠欵之至とは云ふ此に反して神にも皇にも歸順ひ奉らず其大御旨を放りて親しみ奉らざるを疏心と云と同じ事にて疎備の宇登は大外にて此言は親しく邊に圍ひ順ふ可き者の遠放る由なる事巻二御門祭詞 疎夫留物の下に云るが如し此に依て見れば疎夫留は歸順の反疎備は撓比(マツヒ)の反なり尙下なる天能麻我都比登云神の下に天疎向津媛命の事を引て委しく云ふ可き物なり荒備は寄依の反にて其因准べき所を散在て佗に隷を云ふ其は大祓詞に我皇御孫之命波云々知所食止事依奉岐如此依志奉志國中爾荒振神等乎上事依奉岐と有る御旨に違ふを荒振神と云にて知べし又上なる大殿祭詞にも高天原爾神留坐須皇親神魯岐神魯美之命以弖皇御孫命乎云々大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平久氣所知食止言寄奉賜氏比と有る如く皇祖大神より天下を

言寄奉賜へば神も人も世中に在と有ゆる萬物はしも悉くに天皇に寄て仕奉る可き神隨なる御定なれば其御旨に違奉るを荒ふとは云なり萬葉一に山神乃奉御調等春部者花挿頭持秋立者黃葉頭刺理遊副川之神母大御食爾仕奉等云々山川母依氏奉流神乃御代鳴反謌に山川毛因而奉流神長柄云々と詠る此即依て仕奉なるが荒振る神此に託く時は二に玉葛實不成樹爾波千磐破神曾著常云不成樹別爾と詠る如き妖を爲す者なり然れば神の荒ふと云は天神の賦命に依て仕奉らずして其事を外にして世にも人にも禍災を爲すを云人の荒ぶと云は天皇の公民と爲て公民たる可き天神の賦命の德を行ひ仕奉る可きを其に反して人道に弗るを云萬物の荒ぶは人の器用と爲て天神の賦命に因べきを千早振る神此に著く時は其常を失ふ彼磐根木草の言語へりしが如し此即荒ふなり然れば荒ぶとは其神隨なる所に散在て背ける業有を云なり山川母依氏奉流神長柄と有を以て知べし但此は遷遠なる說の如くなれども古事記に道速振荒振國神等之多在など記せる如く道速振より荒振と續きて用な爲す所に心を著て考ふ可き事なり來武は將來(ユクサキ)を危ぶみたる言なり天神の御許に繞ひて國土を惠み助給ふ可きを天放り向て疎々しく國土に災害を爲し又天神

の御許に在て其御制令を仰奉る可きに散在け遠退きて國土に枉惡を爲す神を如此く疎備荒備來武とは云なり此其本義なる者ぞ（但然る荒びたる神に交こらるゝ事は自其を招べ可き因縁有を引て來るなり其は御門神と雖も制むる所に非るが故に其御門内に在す天皇の然る因縁な引せさせ給ふまじき爲に天神の此神は祭らしめ給ふ所なり）○天能麻我都比登云神乃古事記（御身滌段）に初於中瀬墮迦豆伎而滌時所成坐神名八十禍津日神次大禍津日神此二神者所レ到二其穢繁國一之時因汚垢而所成之神者也次爲直其禍而所成神名神直毘神次大直毘神と見え神代紀（一書）にも此と同傳を便濯二之中瀬一也因以生神號二曰八十枉津日神一次將レ矯二其枉一而生神號ヲ曰云々一と有て此は一神と爲り又入レ水吹二生磐土命一出レ水吹二生大直日神一又入吹二生底土命一出吹二生大綾津日神一云々と有て此に大綾津日神と有は記傳の説の如く亦名なる者なり若て此神は倭姫命世記に荒祭宮一座皇大神荒魂也伊邪那岐大神所生神名八十枉津日神一名瀬織津比咩神是也と有る此甚正しき古傳説なる由記傳及古史徵に註されたるが如くなり神功皇后御紀に神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津姬命と御名乘爲給へるも此荒祭宮の御事に坐り此御名告を古事記には天照大神之御心者と有るに就て大御神の大御名と心得めるは甚しき僻説なり御名義は鈴屋大人說（玉勝間忘草卷）に撞は借字にて齋賢木の意にて嚴と云む發語なり嚴は齋清めたる義なれば齋清め齋く賢木の由なり嚴櫃と云ふに同じ借嚴之御魂とは天照大御神は伊邪那岐大神の檍原の御禊に成出坐て清淨なる御魂に坐す由なりとは有れど（但此説は神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神と有るに深く泥みて天照大御神に當て說れたる者なり五十鈴宮所居神とは大御神の御許に仕奉給ふ由なり）同御紀に載る仲哀天皇への御諭に向匱男聞襲大歷（ミカツチ）五御魂速狹騰尊（キヽオツコノ）と有も同義の御名にて向匱男は嚴津男聞襲大歷は聞惶遣（ハヒフ）にて素より女神に度らせ給へるも嚴つ男も聞惶り遣伏すと云ふ事五御魂稜威の御魂速狹騰は速放りにて疎び荒びの疎の意也是に於て天皇聞惡事之言坐婦人乎何言二速狹騰一也と宣へるも餘りに畏こき宣言なりければなるを思ふ可し（但御紀な記させ給ふ久代と雖も此御名を味くは解り難て有けむ故に迂遠なる字をば當用ひられけむ）然れば神功皇后の度（トキ）に至りて御託言有るに其を除て佗神の宣ふ可くも非れば決く同神なり其意を得て說く時は撞は衝にて賢木は櫃なるが此にて作れるを嚴矛（イカシホコ）と云に同じく刑具にて今俗に云ふ棒の事なり嚴は稜威にて先に五御魂と有に同じ天疎は先に速狹騰尊と有に同じ

く大御神の荒御靈に坐が故に御許を放り進み坐を云ひ向津媛命の向津(ムカツ)は嚴津(ミカツ)禍津(マカツ)同言にて甚畏こく恐怖しき由の御名なりけり 撞は說文に刄擣也と見え廣韻に突也又擊也禮の學記に善待ㇾ問者如ㇾ撞ㇾ鐘戰國策に迫則杖ㇾ戟相撞と有て注に手擣也と見え前漢樊噲傳に持ㇾ盾直撞入立二帳下一と有て注に謂三以ㇾ盾撞二擊人一と有る字義をも且は思ふ可き者なり餘りに齋には遠き字なり嚴は威の甚しき意なり清淨なるを伊豆と云ふも本同言なるを中昔より清濁に就て別たりと見ゆ伊都とは氣出(イヅ)にて氣の張進むより出たる言なり清淨なる事に云も神氣充滿する時は外邪の溷雜(マゴ)す所有べからず此清淨の謂ならずや白井宗因が神社啓蒙に伊勢向神社在二山城國淀驛小橋之東河中一所祭一座天疎向津媛命と見ゆ向神社は向津神社の義ならむ 尾張風土記に丹羽郡吾縵鄕品津別皇子生七歲而不語皇后夢有神 吾多具國之神名曰二阿麻乃彌加都比女一吾未ㇾ得ㇾ祝若爲ㇾ吾充二祝人一皇子能言是亦壽考と有る御行狀も全く禍津日神に坐が故なり 多具國は出雲楯縫郡なり風土記に神名樋山云々古老傳云阿遲須枳高日子命之后天御梶日女命來二坐多久村一云々と有り天御梶日女命は分魂に坐るなる可きなり 又神功皇后御紀に既而神有ㇾ誨曰和魂服二王身一而守二壽命一荒魂爲二先鋒一而導二師船一即得二神敎一而拜禮之云々撝二荒魂一爲軍先鋒請二和魂一而爲二王船鎭一云々天照大神誨之曰 我之荒 魂不ㇾ可ㇾ近二皇后一當ㇾ居二御心廣田國一と詔給へる 其荒魂と云は 撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命と先に御名乘爲給へるを指て云なり 和魂は稚日女尊に御在り其は玉能御統と云ふ一卷を著して委しく云れば此には擧(シル)さず 然るは禍津日神は天照大御神の荒魂直日神は天照大御神の和魂なりと先師等の定め云れたるが如くの事にて天照大御神と申奉るは高天原を知食す大君主宰に坐ませば八百萬千萬神の大君主宰たり其神等の上に於て賞有り罰有り其大御政無くては得有まじき事をしも皇御孫命の天下を知食す御上に四方國の公民を治させ給ふに賞と罰と此二を以て天下を平均(トヽノヘ)給ふ御事に恐けれど思准らへ奉りて想像奉る可き者なり然れば荒魂は武官の如く和魂は文官の如くして共に大御神の御左右の御事なれば此を深く明らめ奉らでは天地の底際(ソコヒ)の內に比無き大御德を得こそは伺奉るまじき事なりけれ神宮雜例集に載る御託言に 我是皇大神 第一別宮荒祭宮也依二皇大神宮勅宣一今更所二託宣一也と有て何も如此く荒祭宮を以て御託言の有る例なるが倩其旨趣を考るに大御神の大御心に叶はせ給はざる事又現世の人は皇御孫命の公民なれば顯露事の御罰を朝廷に仰奏させ給ふと此二なり但此等は大國主神の幽冥に仰せて罰しめ給ふ可きが如くなれども其罪條已に顯露事に屬る所なれば皇御孫命の御所置に預る可く顯はし宣給ふ所なり 世人斯る事をば得知ずて天照大御神と申せば惡しき事を爲たる者と雖も惠み救はせ給ふ者と耳心得ためるこそ速無かりけれ予を以て此を云は、右の如く甚も畏こき大御神に度らせ給ふが故に其御罰も何も佗神に彌勝りて行はせ給ふ事

と所思たり是即大御神の上も無く貴き大御惠と申す者にて天神より授り奉れる修理固成の德の神隨にして成就ふも此大御稜威に依る事なり譬へば皇御孫命の大御政と雖も然り善を賞め惡を罸め給ふに依て善者は益々此に進み惡人は彌此を退て改るに至ると同じ事なり豈大君の惡を罪なひ給ふを以て惡事と云むや此を以て思ふ可き者なり　然れば荒魂とは御紀に爲ニ先鋒ニ導ニ師船ニと有る如く大御神の大御許より嚴々しく天放り向ひ給ひて健く剛き御稜威を行ひ物爲給ふ義にて凶惡の謂には非ず凶惡の事に觸ては兇し給はざる所なりと所思ゆ偖奥疎神邊疎神奥津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘古神奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神等の六神を統領して四方四角より疎び荒ひて其間然を伺はしめ給ふ所なり此事第三詞第五詞大殿祭詞道饗祭詞等の下に委しく注れば考合す可き者なり　是を以て考るに古事記に此二神者所レ到ニ穢繁國ニ之時因ニ汚垢ニ而所成之神者也と有は其穢繁國の汚垢に依て右の六神は成坐し此神に依りて禍事はしも成初たるを惡み所思す御心坐るに因て其を其本に還し劫むと思はし凝し坐る御心の進に依て成坐る事瀬織津比咩神と申すにても著かりけり然れども其六神の已に成れる上を其を統領坐て其用ふ可き方を定め坐が故に禍津日神とは申せるなり然れば心の汚垢身の汚垢家門の汚垢等の事はしも彼穢繁國に屬る事なるが故に然る事の有る時は決めて其御荒びを受奉る事にて甚しきに過る計なり此に依て直日神の御德はしも立つ事上の六神の禍津日神に於るが若くなる者なり若て人の身に禍の有る事は皆自然の如くなりと雖も然らず其身は今生に犯す所無き時は前世の罪なる如く何れか招く所以の有る事なり此禍事に遇て後其德に漸々進む事の有るは身滌して身の淨まると同じ能く此に堪て後に神隨なる道は得可き者なり　若此くなれば冲哀天皇神功皇后に韓征の事を促し給へるも外蕃諸邦は悉く天皇の御奴國なり其諸蕃の酋長は天皇の御奴として彼に在る所の人民を治め令め給ふ任に當れる者なり皇國に御貢物を奉らず臣と稱して仕奉らず天照大御神の天津日嗣を事寄し奉給へる大御趣に乖違ひ奉れるが故に大御神の大御心と荒祭神を以て思はし立しめ給ひ先鋒と爲して大御船を導申し其御罸の事を令行め給ふなり若て和魂は大御身の守と爲て其事には預給はず唯其御許を鎭め御在るに心を着て考ふ可きなり古事記に尒以ニ其御杖ニ衝ニ立新羅國王之門ニ即以ニ住吉大神之荒御魂ニ爲ニ國守神ニ而祭鎭還渡也と有を思ふ可し然て思ふに外蕃諸部の酋長等は其始め一二世こそは民をも安く治鎭めて在なれ何れも永く子孫の世繼せざるは其始の程こそは民を治るに暇しは勿らめ共己に治れる後は必皇國に馴して其御制令をも仰ぐ可き事なるに然る心も着で狎り居るを戒め給ひて王統を絶す事と見えたり此韓征の神軍なるを思ふ可し　然れども天下國家の安泰なる事は右の荒魂の功用と所思たり彼修理固成の德の如きも荒魂を以て立ち和魂を以て成る事なり此韓征の思はし立の如きも荒魂の事なるに合せて大倭神

社注進狀に傳聞大國魂神者大巳貴命之荒魂與和魂戮レ力一レ心經ニ營天下之地一建ニ得大造之績一と有を以て知る可し此事卷二生島足島神の條下に云るが如し且大國魂神は右の如く大巳貴神の荒魂に坐せども凶惡神ならぬを以て禍津日神の凶惡神ならざる由をも察らむ可し（鈴屋大人の記傳の說は凶惡神と見られし者にて詳ならず師は火の穢し有れば禍事を行給ふ由に云れ且此神を五十猛神の亦名なる由の說なれど其は委しからず麁き說なり委しくは大祓詞瀨織津比咩神の下に云ふ可なり）大凡物の理り進む時は必曲り昇る時は必降る物過て必及はざるに猶如さる事有り禍津日神と稱し瀨織津比咩神と申す所以是なり直日神の御靈其所に在て過勿ら令め又悔勿ら令む此を以て古事記に爲レ直ニ其禍一而所レ成神名神直毘神次大直日神とは見えたり（彼大巳貴命之荒魂與ニ和魂一戮レ力一レ心經ニ營天下之地一と有を見よ）所以に彼神功皇后御紀に和魂服ニ王身一而守ニ壽命一云々請ニ和魂一爲ニ王船鎭一と見え其政畢て還給ふ時に我之荒魂不レ可レ近ニ皇后一と詔給へる事の有を思ふ可し其事の發端は荒魂を以て先鋒とし師船の導とは爲給へりしを已に其事を遂る上に尙荒魂を用たらむには終に惡事を萠すに至れゝばなり（此は韓征の事竟給ひて其荒魂の作用の極みに至れゝばなり）疎ぶる凶惡神の此神に屬くを思ふ可し其六神一と統領て治め給ふが故に八十の禍事は慢りに起らざる者なりけり大倭神社注進狀なる大巳貴命の御言に我和魂自ニ神代一鎭ニ三諸山一而助ニ神器之昌運一荒魂服ニ王身一在ニ大殿內一而爲ニ寶器之衞護一と有る其は右の我之荒魂不レ可レ近ニ皇后一と詔給へるとは殊異なる趣に聞ゆれども天照大御神の大御許に荒祭神の坐て輔相奉給ふ如く天皇の大御許にも荒魂神の服ひ御在して衞護奉り天下の事を執行しめ奉給ふに至らずては大御稜威の大坐々す可からざれば必寶器(アマツヒツギ)の鎭衞(ミマモリ)と在す可き事也（荒魂の大御身に彌綸ひ坐てこそ天壓神とも聞ゆる大御稜威は有なりけれ凡人と雖も荒魂無き者は事を務むるの力無くして甚女々しく何の至も無とを思ふ可し）天能麻我都比と申す神名は天疎向津媛命と申すも同意の御名にて天宮より天放り向ひ坐て其荒御魂の事も行ひ給へるが故に在ゆる世の妖鬼共は此御所置を仰く事にて人の德を脩めざる間隙を伺ふなり此故に其を知て德を脩むる時は却て其德を幽賛け成就しむる事譬へば織らざれど寒さに堪へからず耕(ツク)らざれば飢を凌くべからざるを以て豫め其心用ひを爲るに同し（大凡世中の事業は禍事と云ふ事の有に依て其防ぎに備ふる所に起る者なるを思ふ可し）○言武惡事（爾古語云麻我許登）は上より續きにては天能麻我都比神の言む禍事なるが若くなれども第五段御門神詞には疎夫留物と有れば其神の統(ヲサ)め給ふ妖

鬼の御門に出入爲る人に取託て言ふ由なり此妖鬼は麻我都比神の御制に因て御罰めを行ふ可きは勿論の事なれども然る妖々しき邪神の事なれば必然は有難くて良も爲れば一速び荒ひて然るましき妖事をも行ふに至るを云なり　然れども徒(ムサ)とは得物爲ず皇神等の御守厚からざる時を待て行ふなり譬ば現世を攻こたせ給ふにも衛門府衛士府兵衛府等の如きは朝廷を親衛し非違を檢察するの人等なり然るに其卑き使部直丁の如きは直實正行なる者にては其役に却て使ひ給ひ難きが故に却て武勇有る壯士を以て使はせ給ふが何れも然る溢れ者の事なれば却ては人を惱め苦しめ奸利を射て己が安泰を謀るなど顯幽界をこそは別てれ其趣に至ては大概如此し　惡事は言にも行にも正しく履行く可き道に反けたるを云なり下に相麻自許利相口會と云るは此一言の意を二に判ちて受たり　源語藤袴卷に甚禍々しき筋にも云々眞木柱卷に彌々禍々しき事を云散し給ふなども有り　相麻自許利は惡行に黨はるゝを云ひ相口會は惡意に與するを云なり上なる詞別にも神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氏と有も言に直すと云ひ行に直すと云意なるを思合す可し　尚其詞の下又手蹟比足蹟比の下に云る事をも考合す可き者なり　○相麻自許利神代紀天孫降臨段第一ノ一書なる返矢の條に天神見二其矢一曰此昔我賜天稚彥之矢也云々咒之曰若以二惡心一射者則天稚彥必當遭害若以二平心一射者則當無レ恙と有る當遭害は此と同言同意なり道饗祭詞には相率と作り　古事記には當遭害を麻我禮と有り然れば麻自許利は常に交はるなと云ふ如く平(ナダラ)かなる意には非す今俗に邪道に率はるを麻自久眞流と云に同し三代實錄の神の御告有る事を布之許利賜と有り此等の許利は同言にて、怒を俗は於古留と云に等しく少か惡しき方に落るに云なり　麻自許利は禍津日神に屬る所の疎ぶる鬼に相交はり凝て醜めく汚穢く行を物爲るを云ふ北條足利の如き姦賊の如きは素より疎ぶる鬼に相交これる徒なる事云ふも更なるが掛まくも甚も畏こき天皇命を疎み奉り荒びたる逆事を強暴く行へれとも小惠を賣り虛譽を買ひ功名を盜み姦邪を工みに爲れば素より痴々しき愚人共は其正邪を糺し辨ふるに至らず知ず知ずも賊黨と成り終に天誅に伏す類此なり　鈴屋大人は禁厭(マジナ)はるゝなりと云れたれど然る義には非ず　考に今人の目交くり口交くりと云是なりと云れたるは取べし偖云々言武惡事爾と有る惡事は言と行とを兼たる言なり然らば爲武(ナサム)と云べきに似たりと雖も行は事にて事の用は言なれば必如レ此云べし倭姬命世記に爲字を麻自(マジ)と訓り其義を思ふ可なり　○相口會賜事無久は神代紀天孫降臨段第六ノ一書に不レ與二其言一と有を鈴屋翁の神代正語に載られたるに其言母與給波受と訓れたる共言と同し又同大人說に相口會とは彼惡言を諾なふを云偖其惡言を諾なふぞ即交こるなれば交こりてと云意に見べし麻自許利と相口會とは二には非す　○重胤云く惡の表(アラハ)るゝ者必行に在る其行は事なるが事は言に成る者なれば如此く云れつるなり　偖其は百官人等の事なるを此は其神の守坐て然る事無らしめ給ふを云ふ故に賜事無久とは云るなり賜は此神に係れる言なり然れば會は阿閇と訓べし阿閇は

考に云れたる如く阿波世の約りたるにて令ㇾ會の意なればなり考に此事を彼が言を相諾なひ賜はざるなりと此神の自の御上の事に云れたるは違へり此神の諾ひ給ふ事無くと云には非ず百官人等なして相交こり相口會ふ事勿令給ふなりと有り信に諾ふ可き說なり倭此言道饗祭詞には相口會事と有て賜字無し尙其下にも云ふ可なり〇自上往波上乎護波自下往利下乎護利は彼疎ぶる鬼を云なり倭相麻自許利相口會は人の禍神に託れて惡言惡行を爲すを云ふ此は幽冥より出て事は顯明なり上の詞別に親王諸王諸臣百官人等乎己乖々不令在云々と有は顯明に在る所を云て其本は幽冥に起るを所せて言狀こそは異なりけれ事趣は異ならざる者なり本より末に及び末より本に及ぼせる耳の差びなり 倭此の語を疎ぶる鬼なりと云るは上なる祈年月次共御門神詞に疎夫留物能自下往者下乎守自上往者上乎守と有を對考て云るなり上にも云る如く正しきも邪れるも神は甚奇しく靈しき者にて虛空は更なり地下と雖も潜り通りて達る者なりければ如此きの御衞護有る事なり其は此詞の始また祈年第五詞の下に委しく云りき 〇待防掃却は御門神の然る凶惡神の幽よりは虛空地下よりも大宮內に入來りて惡事を爲す事も有むかと待儲て防き塞へ遏め令入給はざるは本よりにて百官の人等と雖も疎ぶる鬼に相交こり相口會たるは禁闕に

參來ざら令め給ふ御守護の狀を云也鈴屋大人說に掃却は禍津日神の來るを掃却也と云れたるは本末の違有りと所思ゆ待に其神の心を配り給ふ義有り防は經塞にて上下左右に經歷し塞き遏め給ふを云軍などに防と云も其義なるを倩思ひ合す可し掃は大祓詞に國中爾荒振神等乎神掃爾掃賜比氐と有ると同じくして神代紀天孫降臨段正書に經津主神武甕槌神を天降し給て大己貴神に令問給ふ條に欲ㇾ降二皇孫君一臨二此地一故先遣我二神駈除平定と有る此也考に万葉にも不奉仕國乎掃部等と有を同廿に麻都呂倍奴比等乎毛夜波志波吉伎欲米と詠めりと有り倭考に此に依て掃を波伎と訓れたるは宜しからず右の駈除の意能く當れゝば也一條兼良公御說に驅除平定者掃二蕩凶孽一澄二清天下一也と宣へり 却は下に遷二却崇神一と有に同じ古事記須佐之男命の哭主ち給る條に伊邪那岐大御神大忿怒詔然者汝不ㇾ可ㇾ住二此國一乃神夜良比爾夜良比賜也又神代紀寶鏡開始段第二ノ一書に已而科罪於素戔嗚尊云々以二神逐之理一逐之と有など同じ但訓注に逐之此云二波羅賦一と有る波字は夜の寫誤なる可しと鈴屋大人は云れたり然る言なり 〇言排坐氐は上の詞別に言置志和志坐氐と有に同じく御門神等の疎ぶる鬼に面勝給ひて禍事を行はむと爲るを退却給ふなり鈴屋大人說に言排は其惡言を言て人を交こらむと爲るを此御門神の言退けて交これ令めざるなり排字は如何に訓べきにか慥に思得ねど字書に推也とも斥也とも注したれば曾氣と訓つ考には許登比良伎と訓れた

（れど如何言閑くなどの此亘久は雅言とも所思えず）と云れたり實に然る言なり尚記傳（三二十九丁）に引れたる萬葉六歌に筑紫衞至山乃衣寸野之衣寸見世常伴部乎班遣之と有る下に曾伎は曾久を體言に云るにて曾久とは離放る意なり遠退（トホソ）く後退（シリゾ）くなり」と云れたる其義にて此の排（ソキ）も其惡言を遠く逐放て相口會しめ給はざるなり然れば人の惡言を云ふも本より疎ぶる鬼に取託れたるなり此方に神隨なる心有て此に答酬る時は其心に耻らふ所出來る其は其疎ぶる鬼の安居爲難きが故に何時と無く亡失て其曲心を翻すに至る者なり其善に歸り趣くは神隨なる本性に反るなるが其惡を知つゝも其に與する時は共に其禍事に相交これるなり此を以て見れば人事即神事にて又幽冥即顯明なる者なり此心を以てぞ今日は度る可き神隨の道なりける（然にど幽冥を疑ふ人の前にては癡人に夢を說が如くならむ此は我古道に志厚き吾徒に云ふ事にて鬼神を貫き幽冥を洞視爲るの秘說なり）

朝波開門夕波閇門氐參入罷出人名乎問所知志咎過在乎波神直備大道備爾見直聞直坐氐平久（良氣）安久（良氣）令仕奉賜故爾豐磐牖命櫛磐牖命登御名乎稱辭竟奉久登白

朝波開門伎夕波閇門氐祈年月次等詞には朝者御門開奉夕者御門閇奉氐と有り其下に說るが尚云はゞ古語拾遺（神武天皇段）に日臣命帥二來目部一衞二護宮門一掌二其開闔一と見え姓氏錄（左京神別天神）大伴宿禰條に云々雄略天皇御世云々奏曰衞門開闔之務於レ職已重若一身難レ堪望與二愚兒語一相伴奉レ衞二左右一勅依レ奏是大伴佐伯二氏掌二左右開闔一之緣也と見えたる如く上古より大伴佐伯の二氏門部を率て御門を衞護（マモ）りしなり（江次第御即位儀に伴佐伯云々率二門部三人一入レ自二西門一云々令二門部開一二門と有り後世迄も主たる儀式には如此くなむ有ける）中古以來六衞府の官出來て諸門の禁衞を主る事人の知れるが如し然るに御門の開闔の神業に託たるは全く人の爲業には在ながら幽より神の贊けて物爲さ令め給ふ所なるが故なり（此に例して人の惡を作すも幽より然る疎ぶる者の有て此を補け爲さ令るを知る可なり）○參入罷出人名乎問所知志は上の詞別には選所知志と有て彼は宮仕の人の善惡正邪を選び然る可からぬ人を大殿內に令侍給はざるを云と同じく此も然にて御門內に入まじき惡人を塞て令入給はざるを云なり然れば家內の主人と在る人の正しきには邪なる人惡しき人の何と無く其內に入る事を憚る者なるは屋船神御門神の守議を畏るゝが故なり此に反して主人の心惡き家には正しき人は到る事を欲せず其は其身を守り坐神の相交こらせし相口會しめじと留止め給ふに依れるなり

深く此奇しき理を思ひて自も其防禦有べく又佗にも其心を着く可きなり斯在る時は家にも身にも禍事とては無害の事なり 問所知志は職員令義解に衞門府督一人掌諸門禁衞出入禮儀以レ時巡檢（謂以レ時猶レ有レ時依二宮衞令一五衞府官長皆以レ時按二檢所部一糺二察不如法一是也）及隼人門籍門牓（謂載二人名一爲レ籍載二物數一爲レ牓）云々また左衞士府右衞士府准レ此督一人掌下禁二衞宮掖一（謂二掖者正門傍之小門一也）撿二校隊仗一以レ時巡撿衞士名帳及差科（謂差二配兵庫大藏之類一也）大備陳設（謂二大備禮儀陳設兵仗一也）云々事上また左兵衞府右兵衞府准レ此督一人掌下撿二校兵衞（謂毎レ番檢校此府不レ稱二門牓一者是即略文更無二別例一）分配閤門以レ時巡撿云々及左兵衞名帳門籍事上云々と見えたる門籍名帳等の事に當るなり宮衞令義解にも凡諸門必謹二關鍵管鎰一令二皆牢固一（横レ木以持門曰レ關牡二於門一曰レ鍵所三以開二管鍵一曰レ鎰）云々凡門牓者中務省以付二衞府一其出入則門部識レ之云々凡奉レ勅夜使レ開レ門別具錄三其所レ應レ啓之門與二出入人之名帳一以宣二送于中務省一省以宣二送衞府一衞府覆奏而後開レ之人名乖錯即執奏聞云々など記されたるをも考合す可きなり然れば考に御門守の所業を此神の御心とすと云れたるは甚能く協へる者なり○咎過在（牟波）神直日大直日（爾）は上に出（大祓詞に云り）○見直聞直坐（氐）は上の詞別に出たり考に御門の出入に咎過有むをも宜しく云直し取直し治め且今より咎過無らむ事をも爲し給ふ」

と有り然る言なり（上の例に依るに見直の下に志ノ字脱たらむかとも思ゆれど然らず）○平（良氣）久安（良氣）久 令仕奉賜故（爾）豐磐牖命櫛磐牖命登御名（乎）稱辭竟奉（良久）登 白と二神の名の櫛と豐とを此にては反して稱たり偖此は上の詞別の結文に少も違ふ所無し此文の然對へるを以ても大殿祭詞は本文にて上の大宮賣命と此詞との二は其に屬たる詞別なる事愈著き者なりかし（又此御名の牖も祈年月次には間戸と有るを然作ざるは此は別條にて上に拘はらざる故なり）是を以て觀れば此御門祭の祭ノ字は保賀比と必しも訓までは得有まじき所なる者なり

延喜式祝詞講義十之卷

天保十五年九月朔日於淡路國　鈴木重胤　著
越後國初稿男光胤閲　出羽國　大瀧光武
嘉永二年極月六日淨書　同國　鈴木光胤　按

○六月晦大祓　十二月准之

鈴屋大人の大祓詞後釋に云く此祝詞は有が中に尊く古く美好き書にし有れば世の人皆の尊み重みして以崇めあふ故に注釋も甚數多有なるを各少かづゝの異は有れども何れも何れも古昔の所爲意詞をば知ずて唯例の漢意に耳泥み惑へる己が心以て慢りに説たる物なれば一も古の正實に叶へるは無くなむ有ける○重胤云く此は近世の神道者と云ふ徒など此詞の前後を省略て中臣祓と號て其に屬たる末書共の甚多かりけるが悉く儒意ならぬは佛に依れる類にして古の事實に是合へりと所思しきは且ても無を以云れたり此に吾師なりし縣居大人は古を深く考へて世中の漢意の慢り言を能く辨へ古學を始め誘ひ給へる其よりぞ世の學者良後世人の漢意の古に叶はざる事をば悟り初ける斯く此大人の祝詞考とて延喜式の八卷なる祝詞を解れたる其中に此大祓の祝詞の考も有る是ぞ眞に古意に叶へる註釋には有ける然れども此大人は始めて古學の道は開れたる事にし有れば未考の及ばざる事も多く猶誤られたる事ども將無きに非ず故今已彼考を本として其説を悉く擧て考云と云ひ頭書に至る迄漏さず引出て次に己が思ひ取れる事共を記し彼考の違へる節々をも論ひて後釋と號けつ（其餘の諸の注釋共は皆云にも足ぬ事耳多かれば其是非は一向に捨て論ふ事無し）事吾大人の考を續弘る者ぞ抑師と有る人の誤ちを擧る事は甚も畏こく罪去り所無けれども今云ざらむには世人永く誤りを傳へて曉る世無く猶古意の明亮ならざらむ事の慨さに得しも默止さるになむ」と有て其釋書を著はされたるなむ此詞の意の世に明亮なる始なりける然るを其後に備中國人藤井高尙が後に釋と云書成て世に行はる此は歌文に耳志せる人にし有れば古意は能くも知らぬ痴人なれど後々釋と云名は何と無く後釋の後の論めきて聞ゆる故に初學の輩などは其後言よりぞ非ぬ方にも惑ひ漂ふも有て終に古意は一向に跋り違ふるも又少からず（此も亦故翁の其餘の諸の註釋共は皆云にも足ぬ事のみ多かれば其是非は捨て一向に論ふ事無しと云れたる部なから故翁の説に繼て成れる書なれば此書中には引て其妄を辨へた

り又師も天津祝詞考と云を著されて後釋の說を補はれたり此に依て縣居鈴屋二大人の說愈明亮たる事を得たれば此等の書共を彼此考合すれば古意の趣は悉く遺る隈無く曉り得べくなむ有れば此講義にも此は必言勿る可く所思て今は措べきかと一旦り此彼見合するに何れが是何れか非と此を辨へ難き事一二耳には非りけり例の心遲きは書に著て章を逐ひ句を分て其說を得るに非れば心に留る事能はず此に依て此詞の註釋にも及べるなり然れども右等の說を悉く棄たらむには見る人其宜しきに隨はむ料には便有るに似たれども然ば得物爲ず唯己が心に此說は是なり取べくと思ふは藏せ此說は非なり捨べしと思ふは記さず又別に予が考出たる說をも交へ記して强て先師の說にも抱る事無し此も亦先師等に對て甚畏くは侍れども其說を續弘るには然ばれ思得たる說を押籠て在る可くも非ざれば今は言痛き迄に論ふになむ備此詞の義を講に就て緊要と有る條々凡八等有り今其序次を爲す事左の如し一に禊祓の起原二に大祓の事三に六月十二月大祓並儀式の事四に臨時大祓の事五に荒世和世の事六に中臣禊詞と云ふ事七に祓法古今沿革の事八に祓は上古の大御政にて有し事以上

○禊祓の起原

一其はしも親神漏岐神漏美の命以て伊邪那岐命の事始めさせ給ふ事なりけり（此も皇祖天神の大御心より出たる事は先師等の云れざりける事なるが必然有では得有まじき說有て次に下に云り）其始伊邪那岐命其妹伊邪那美命の黃泉國に往坐るを相見まく欲しければ即追及て幸行しけるに其妹は彼黃泉戶喫し給ひける故に還坐し難なる耳ならず美しき御心さへに御在し坐ず成にしかば見畏みて顯國に逃還らせ給ひ千引石を其黃泉戶に塞て相對立し族離れむと別處を建させ給ひしかども猶其國に幸行しける上は大御身は更なり其着させ給ふ服御の物共に何時と無く其穢惡を受させ給ひければ筑紫日向の橘の小門阿波岐原に幸行て身滌ぎ祓爲給へりけり是なむ其起原なりけるを此も神漏岐神漏美の命に依れりと云ふ事は先に伊邪那美命の御言先立給ひける時に天神の御命を請給へる事有り其准らひに依て思ふに若計り甚じき大禍事の世に在初め出來初つるを己命の御心と身滌祓給ふ事は所思し立ながら尙天神に御占合せ給はさずては行はせ給ふまじき事なるを此詞に高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美乃命以氐云々と有など此は御天降の詔勅耳なる如くなれ

ども其祓事を伊邪那岐命に始めて令行給へりし舊例有を以て皇御孫命に附屬奉給ふ事と見えたり（此等は證と爲るには足ざるが如くなりと雖も必如此くならでは皇祖天神の御心を御心と爲給ふ伊邪那岐命の凡ての御上に叶はざればなり且神代紀に伊弉諾尊神功既畢靈運當遷云々於是登天報命仍留宅日之少宮矣と有を以て見れば此登天報命は唯に國土を經營給ひける神功を竟し給ひけるなる白上給ひしが如くなれども其間に在る萬事の成就る状を報命し給へるなれば此の御身滌の事なども必其中に在る可きなり偖御卜合を以て神の御命と爲るも亦深き由緒有る事なり此は古始太元考に已に云り）偖其事の状は古事記に伊邪那岐大神詔吾者到於伊那志許米志許米岐穢國而在祁理故吾者爲御身之禊也故於投棄御杖所成神名衝立船戸神次於投棄御帶所成神名道之長乳齒神次於投棄御裳所成神名時置師神次於投棄御衣所成神名和豆良比能宇斯能神次於投棄御褌所成神名飽咋之宇斯能神次於投棄左御手之手纒所成神名奧疎神次奧津那藝佐毘古神次奧津甲斐辨羅神次於投棄右御手之手纒所成神名邊疎神次邊津那藝佐毘古神次邊津甲斐辨羅神右件云々十二神者因脫著身之物所生神也と有る是ぞ伊邪那岐命の大御身に其穢惡と共に附屬ひ來れりし黃泉神の離れ放り奉る始なり此時に此惡しき神は成出初たるが如くなれど然らず大御身より投棄給ふ物と共に別に支離て佗に物爲るにて云はゞ別處に移ろひ出去し者なるぞかし

偖此は罪穢の有る人に贖物を合せて令解除る例と成て其贖物には然る妖々しき神共の託て去る道理をも思ひ辨ふ可し但此時に投棄給ふ物共に依ては右件の惡しき神成出世に疾病と禍害とを布施す事故に伊邪那岐大神の右の祓の徵信は悉に無きが若くなれども然に非ず成程右の神々はしも疾病神禍害神と成出たりとは雖も大御身に附屬て耳有ましかば祓の功用の所詮無る可きを此に於て大に驗有る者なりけり偖此より後に祓を爲すは右の疾病禍害の事に因れるを其時々に自も出し人よりも徵りて出さ令る事なるを其贖物を出す時には必附去て流離へ失る事の證にて眞に祓の功用を顯はす事此時に成初たれば是將皇祖天神の御心なる事云も更なり（此等の神の事は古始太元考に委しく云り尙第三詞又大殿祭詞の下にも云り尙下なる須佐之男命の贖物の條なども見合す可し）其次文に詔上瀨者瀨速下瀨者瀨弱而初於中瀨墮迦豆伎而滌時所成坐神名八十禍津日神次大禍津日神此二神者所到其穢繁國之時因汚垢而所成神之者也次爲直其禍而所成神名神直毘神次大直毘神次伊豆能賣神次於水底滌時所成神名底津綿津見神次底筒之男命於中滌時所成神名中津綿津見神次中筒之男命於水上滌時所成神名上津

綿津見神次上筒之男命云々於是洗左御目時所成神名天照大御神次洗ニ右御目ニ時所成神名月讀命次洗御鼻時所成神名建速須佐之男命右件云々十柱神者因レ滌ニ御身ニ所生者也また神代紀（神逹生坐段第六ノ一書）にも此と同傳有て此は身滌の功驗に依て罪穢の淨まる耳ならず事無き古にも勝りて尙吉事を得る徵なり然るは黃泉國より附屬ひ來れる疾病と禍害を行ふ神共大御身に著させ給ふ物と共に離放れりしかば神氣益々に淸く壯やけく成給へるに依て奇異に靈妙なる神威の顯るゝ事にて在るなり（其は伊邪那岐命の其妹の石隱れ給ひしを戀慕ひ給ひて黃泉國には追到坐るを其國の穢に觸坐るに依て良はぬ事共も有けるを更に其以前には尙勝りて吉事を得させ給へり祓の妙用如此なり大凡に思ふ事勿れ）然れば右の身に著る物を脫去給ひし大御身に附屬て其犯し奉らむと爲る疾病と禍害と二種の黃泉神を逐ひ給へるにて贖物の徵用是にて祓へと云る者此なり（但伊邪那岐命の若黃泉戶喫にても物爲給へる事の有むには伊邪那美命の如くぞ成給へらむを其事無りし故に其黃泉神は大御身の內へ犯し入る事能はず唯大御身に著させ給ふ物に依居たる耳なり其證は神代紀に右の身滌に成坐る神等を吹生と有を以て知べきなり若戶喫の事の在むには然計り淸々しき神の生出御在すまじき理なり）若て後大御身を滌ぎ給ふが故に天照大御神月讀命（亦御名須佐之男命）二柱の貴御子を始奉て其餘の神等をも生出坐て彼天神より事依され奉給ふ神功を大に遂給へる者なり所以に神代紀（正書）に伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是以構ニ幽宮於淡路之洲ニ寂然長隱者矣亦曰伊弉諾尊功既至矣德亦大矣於是登天報命仍留ニ於日之少宮ニ矣と有る此は大御神に上天（タカマノハラ）を須佐之男命に大地を事依し授奉給ふが故に顯身の神功を既に畢させ給ひ彼八尋殿をして幽宮と構成し給ひ隱身の元に復り給ひ其幽宮より隱身ながら天に登て報命（カヘリコトマチ）し給ひ日之少宮には留り住給ふとの古傳なり是全く身滌の靈威（ミタマノフユ）解除（ハラヘ）の全能（サキハヒ）なり（神代紀の此報命は珍御子等を生坐るに依てなる事を知らば其身滌の妙用は知られむかし偖右の幽宮は八尋殿なる事人の且ても知ぬ事なる故に驚し閾なり顯身と幽身の差別如此くなる者ぞ思ふ可し）考に祓とは古事記に伊邪那岐命黃泉に到坐て穢れ給へるを淸め給はむとて筑紫の橘小門にして大御身に着坐る物を悉く脫棄給ふを云ふ穢たるを拂却ふ由なり次に海潮に浸て大御身を滌ぎ給ふ此を身滌と云ふ身の穢を洗ひ濯く由なり此二ぞ祓身滌の本なりける云々と有ぞ眞に然る言なりける（尙記傳を引て下に其由を委しく說くを待つ可し）鈴屋大人の玉矛百首歌に吉事爾麻賀事伊都藝禍事吉事伊都具世間之美知また余能那訶波余碁登麻賀事行加波流中用叙知遲乃事者那理豆流と詠れたるが如く伊邪那岐命其身滌の靈威に憑て二柱の貴御子を生坐りと雖も天照大御神はしも淸々しく淨まり竟給へる時に

成坐れば天上を所知看す事も何も其御事依しに違はせ給ふ所無き物から須佐之男命は然らず事依され奉給へる國を知さずて妣國根之堅洲國に罷むと乞泣給へり思ふに天照大御神を生奉給へるに御心寛(ユル)び爲給ひて斯計り奇異に光華明彩(ウルハ)しく坐を御妹にも見せましかばと所思して下懸坐る御心や引けむ須佐之男命は御母神を乞坐す事甚しかりつる故に彼黃泉神共悉く相交こり奉て天國に上坐し間に種々の惡業なむ轉有ける是を以て天照大御神は天岩窟に隱り天石戸を閇て刺籠り坐ましけり此に因て高天原皆暗く天下悉闇くして常夜往しかば惡神の音なひは狹蠅如す皆涌き萬妖悉發れりしかば八百萬神等諸共に祈出し奉て後に須佐之男命に千座置戸の祓具を責りて神逐に逐給ける時こそ時けれ以前には未聞えぬ善はしき御心出來て此顯國を修理固成して御父大神の御事依しを重みし奉らせ給ひ御子大國主命に其御功を委任させ給ひて御母神の御許に罷給ひ其漏所より分判(ワカレイデ)たる天照す月夜美國に度らせ給ひて此大地の日光を稟ぬ所を夜之食國と爲て日大御神の御照し坐ぬ間を守衛御在る尊く貴き御德の顯れ初たるも專此千座置戸の祓の功用なる者なり考に此事を須佐之男命惡事轉有しに依て贖物を責徵(セメハタ)りて祓具と爲て出させ奉りて逐ひける彼伊邪那岐命の御自捨給へりしも佗より責て出させしも事の意は等しかれば此二大御神の御事共を合せて祓身滌の法として人代に至ても行へるなり（其伊邪那岐命は祓身滌を爲給へるに因て貴き大御神等を生じ給ひ須佐之男命は祓物を出し御身逐はれ給て後淸き御心に成給へるを以て此事の大き功有るを知る可し）と有るぞ云れたる偖其有し狀は神代紀（寶鏡開始段正書）に諸神歸二罪過於素盞嗚尊一而科之以二千座置戸一遂促徵矣至レ使レ拔レ髮以贖二其罪一亦曰拔二其手足之爪一贖レ之已而竟逐降焉又同書（同段第二ノ一書）に已而科二罪於素盞嗚尊一而責二其祓具一是以有二手端吉棄物足端凶棄物一亦以レ唾爲二白和幣一以レ洟爲二青和幣一用レ此解除竟遂以二神逐之理一逐之又同書（第三ノ一書）に日神之光滿二於六合一故諸神大喜即科二素盞嗚尊千座置戸之解除一以二手爪一爲二吉爪棄物一以二足爪一爲二凶爪棄物一乃使下天兒屋命掌二其解除之太諄辭一而宣上レ之焉世人愼收二己爪一者此其縁也既而諸神嘖二素盞嗚尊一曰汝所行甚無レ賴故不レ可レ住二於天上一亦不レ可レ居二於葦原中國一宜三急適二於底根之國一乃共逐降去と見え又古事記に於是八百萬神共議而於二速須佐之男命一負二千位置戸一亦切レ鬚及

手足爪令㆑抜而神夜良比爾夜良比岐又古語拾遺に仍歸㆓罪過於素戔嗚神㆒而科㆑之以㆓千座置戸㆒令㆑抜㆓首髪及手足爪㆒以贖㆑之仍解㆓除其罪㆒逐降焉と見えたるは是等を通覧して其大較を云はゞ須佐之男命の罪過甚重かりし故に千座置戸の祓具を科せたる者なりけるが極めて甚しき穢惡なりければ猶事足らざりけり是以て其穢れたる身に在る所の髪を抜き鬚を抜き手足の爪をも令抜て吉棄物凶棄物と爲し又洟唾を以て青和幣白和幣とは化して其罪禍は贖は令めて天國を神逐ひに逐ひ給へる者なり（此吉棄物凶棄物は履仲天皇御紀に所謂る惡解除善解除の事なるが善惡とこそは有けれ言は淨き方を善と云ひ其淨からぬを惡とは云るなり諸家の說皆當らず此時に天兒屋命の太諄辭を宣へる是に依てぞ淸まり竟たる事と見えたる其は下に云べし）古事記に是以其速須佐之男命云々爾到㆓坐須賀地㆒而詔㆓云吾來㆓此地㆒我御心須賀須賀斯而其地作㆑宮坐故其地者於㆑今云㆓須賀㆒也と有るは全く天上にて罪過を解除給へりしかば其附屬たる凶惡き神共退去れりし故なり且神代紀（簸川上段第五ノ一書）に素戔嗚尊曰韓鄉之島是有㆓金銀㆒若使吾兒所御之國不㆑有㆓浮寶㆒者未佳也乃抜㆓鬚髯㆒散㆑之即成㆑杉又抜㆓散胸毛㆒是成㆑檜尻毛是成㆑披眉毛是成㆓櫲樟㆒云々と有るは已に髪鬚を抜れて贖はれたるが故に今般は種々の材木八十の□□□□成れりしにて先に青山を枯山如す器枯し給へるとは反對（サラウヘ）の御所業共なり解除の功用應に如此し能く上に云る伊邪那岐命の御事に引當て考ふ可き者ぞ（上に引る考に伊邪那岐命の御自捨給へりしも他より貴て出させしも事の意は等しと云れたるは眞に此說に合へり）倩思ふに伊邪那岐命のは（祓も有れど）主とは身滌なり須佐之男命のは（髪鬚を令抜たる如きは身滌の例なれど）主とは解除なり此二共に罪穢を除去る同じ趣意なる事なるが故に常には身滌とも解除とも通はし云ふ所なり（若て祓は御贖に傳り禊は大祓に傳はれるなり其事下に說くを見る可し）倩彼神代紀に所謂る其解除之太諄辭はしも此詞に天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮と有る此なるが其始め伊邪那岐命の筑紫日向に禊祓を爲給へる時に皇祖天神に聞え上させ給へる御詞の傳はれるを天兒屋命の取て申給へる者なりけり（但此大祓詞の外に別に天津祝詞の文有とて其考を出されたるは吾師の弱物なるが其定められたる天津祝詞の如きは天地神祇を感けしめ奉る可き詞に非ず予が定たる所は此解言の末に云べし）神名秘書に引る或書に彦火瓊々杵尊天下坐爾時天押雲命以㆓天津諄辭㆒解除清淨而天八重雲乎出之道別道別天下坐と有る天押雲命は天兒屋命の御子なれば天津諄辭を以て解除ひ清淨め其御前に立て仕奉られし事然も有べきなり（此亦大祓詞の天津諄辭ならぬ證なり然るは大祓詞は御天降の後の事を以て綴れる文なればなり下に引る神祇本源に依れば大祓詞なるが若くなれども彼も其事に聞き答なれば依り難し但其次に皇御孫尊降臨雲驛兒文と有る則天津諄辭な

ろ者なり偖右の或書に彦火瓊々杵尊を彦火々出見命と爲ろを師の古史徴第百三十七段の下に其誤なる由を云れたる眞に然る言なれば今改て引り古語拾遺神武天皇段に令天種子命天兒屋命之孫解二除天罪國罪事一所謂天罪者上既設訖國罪者國中人民所犯之罪其事具在二中臣禊詞一と有る此解二除天罪國罪一と有るは所謂る天津詔辭を以てなり其は其事具在二中臣禊詞一とは此大祓詞を指す事下に云る如くなるが禊詞は天罪國罪を解除ふ其事を具に記在る耳なる由なり此等の事なども能く條理を正し辨へずば有べからず類聚神祇本源神道玄義篇に問何故以二解除詞一稱二中臣祓一哉復天祝大祝詞者祓之外可レ有二別文一歟如何此は解除詞と天祝詞と一なりや又は異なりやとの問を設けたり答以二解除詞一稱二中臣祓一者中臣氏人行幸毎度奉レ献二御麻一之間有二中臣祓之號一云々復次天祝太祝詞者伊弉諾尊小戸之橋之檍原解除天兒屋命解二素戔鳴惡事一神咒皇御孫命降臨靈驛咒文倭姫皇女下樋小河大祓彼此明々也と有る此を以見れば天津詔辭はしも伊邪那岐命の解除に出來れる咒文にて其を天兒屋命始て用給ひて須佐之男命の惡事を解除ひ皇御孫命の御天降には天押雲命雲驛にて此を咒給ひ倭姫命の下樋小河にて大祓爲させ給ひしも共に同じ天津詔辭を用ひ給へりとの答なり彼此明々也と有を以ても其頃世に全知る所なりしを知べし此を以て明む可し偖其天祝太祝詞をしも咒文と記れたるを以て常の祝詞の如く打延たる詞には非りけるを知る可し其天津詔辭は天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮の下に記すを見て知べきなり師は世に美曾岐祓と云ふ此則天津詔辭なる由に云れたれど其文の狀は身滌の祝詞にこそ有けれ天津詔辭と云べき體に非ず何でか此を諾ふ事を得む但大祓詞より外に天津祝詞有りと云れたるは師の比無き功と云者なれば此ばかりの取違へは今論ふまじきが如くなれど今此を云ざらむには終に天津祝詞の古義世に明かならざらむ事の惜たさに得しも止むを得ざるになむ禊祓の事は記傳六四十三丁に美曾岐は身滌なり下文に初於二中瀬一墮迦豆伎而滌と有るを始めて書紀に當レ滌二去吾身之濁穢一また將レ盪二滌身之所汚一また欲レ濯二除其穢惡一など見え萬葉に潔身身祓なども有を以知べし常には沃また注洼字などを曾々久と訓て注へ(ソゝ)ぐと濯(スヽ)ぐとは少し異なるが如く聞ゆめれど浣滌濯盪浴洒などの字をも曾々久とも須々久とも訓て雖同言なり須々呂とも曾々呂とも通はし云が如し倭姫命の御裳長くて穢れしを洗給しに因て御裳濯川と號けしを思へば須曾具とも云しにや有の濯の字世記には須曾と有り下卷歌に美那曾々久游美能意登賣此の曾々久も語一なり今も除服などに海川邊に出で清まはり又許理とて水浴る事有るは皆禊の意ばへなり許理は川降の約りたる也垢離ノ字を書に云に足ぬ事なり又月水の日數を畢て清まはるを伊勢にて假屋須岐(カリヤスギ)とも田屋須岐(タヤスギ)とも云ふ此も過には非で禊なる可し○今云續紀口に道祖王の叛反の發覺たる所に盥水を灌(ソヽ)ぐ事見たり又貞觀儀式平野祭條に皇太子於二神院東門外一下レ馬神祇官中臣迎供二神麻一灌二盥水一訖就二休息舍一先是進一人率二執レ幣舍人一至二神院東門一奠二神麻一灌二盥水一共至二祭場一授二神祇官一と有り今も世に多く物するは永潔の義也波良比は拂なり書紀に即拂濯とも書れた

り右に引る文の滌去の去ノ字濯除の除字なども其義なり又洗とも言通へり今俗に物を買たる直を出すを拂ふとも拂を爲るとも云は祓除の意に當れり又此を瀞すと云も令レ淸の意にて拔の義に通へり倭禊も祓も常には體言に耳言へども本は用語にて祓は本よりにて禊も萬葉三に天川原爾出立而潔身而麻之乎又六に菅根取而之努布草解除而益乎往水丹潔而益乎濱松中納言物語に戀しきを身滌げどな神の受ればや心の内の淸しげも無しど詠り履仲天皇御紀に令ニ祓禊ーとも有り倭美曾岐は必水邊に出て爲るに限りて云り古書皆然り禊字も其意なり○重胤云美曾岐の曾具は物を剝(ソグ)など云と同意なるが曾具に退の意をも兼有て身に染着る禍事の遠き退方に除こり去る由なり禊ノ字は字書に除惡祭名三月上巳臨レ水祓ニ除不祥ー也と註せり波良比は水邊にて爲るをも然らぬをも廣く云名なり故朱雀門前の大祓又人に負する祓などを美曾岐とは云ず水邊の禊をば波良比とも云は常なり○重胤云波良比の波良は散(ハラ)かす義にて罪にまれ穢にまれ遠く霽かし遣る由なり祓字は字書に除レ惡祭也除レ災求レ福也と見えたりと有り以上採要倭右の祓に自爲る波良比と佗より負する波良閇と二の差別有り記傳六四十一丁に波良比は自爲るを云ふ波良閇は令レ祓(ハラハセ)の約りたる言にて佗に令るを云ふ罪咎有る人に負する祓など是なり是人に令祓るなり書紀に祓具此云ニ波羅閇都母能ーと有る是須佐之男命に負せて爲令る祓具なればなり萬葉十七に敷等能里等其等伊比波良倍と詠るは人に負する祓には非ねど人に誂て令爲る祓なる可し伊勢物語に陰陽師巫召て戀爲じと云ふ祓具してなむ行けると云る類なる可しと見えたり以上取意是にて明らかなり○大祓と云ふに種々の差異有り一には朝廷の大祓にて此六月十二月二度なる此なり二には諸國の大祓なり下に引る國之大祓を云ふ三には大上中下と四等に別られたる大祓此にて此大は上中下に對へて云なり若て上の二を大祓としも云るは罪犯を廣く國中に求めて祓爲る由なり大上中下と次序られたるヿと混つに心得可きに非ず其第一なる朝廷の大祓はしも百官男女より始て天下四方國人に迄も行度りて甚々廣かりけり此詞に皇御孫之命乃朝廷乎始氐天下四方國爾波云々天皇我朝廷爾仕奉留官々人等乎始氐天下四方爾波云々と有を見て知べし此事は下に追々に說れば今云はず第二諸國の大祓に各國のを主と爲る事にて朝廷に大祓よりは良狹かりけり其は民の解除を專と探索て行ふが故なり古事記訶志比宮段に更取ニ國之大奴佐ー而種々求ニ生剝逆剝阿離溝埋屎戶上通下通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚之罪類ー而爲ニ國之大祓ー而云々と有る傳卅卷四十一葉に國之大祓と有る國は諸國を云ふ國中悉の祓と云ふ事なり每年の朱雀門前の大祓などと國中には非れども百官悉に爲るを以て大祓と云天武天皇御紀に五年八月詔曰四方爲ニ大解除ー用物則國別國造輸ニ祓柱馬一匹布一常ー以外郡司各刀一口鹿皮一張钁一

口刀子一口鎌一口矢一具稻一束且毎戸麻一條○重胤云神祇令に凡々國須ニ大祓ー者毎レ郡出ニ刀一口皮一張鍬一口及雜物等戸別麻一條ー其國造出ニ馬一疋ーと有る歟に能叶へるは古よりの御定なる可し戸別に麻一條を出す事は記傳に引れたる大神宮儀式帳に三祭十六日西川原祓の儀を記せる所に各奴佐麻令レ持而先宮東方皆悉令ニ向侍ー而人別之瘡幷後家雜穢事令ニ申明ー然於ニ御巫内人ー各所持之奴佐麻一條分授即御巫内人嘗集取持其人別所レ申穢事細令ニ傳申明ー云々と見えたるにて知るべし又七年是春將レ祠ニ天神地祇ニ而天下悉祓禊之云々また十年七月令ニ天下ー悉大解除當ニ此時ー國造等各出ニ祓柱奴婢一口ー而解除また朱鳥元年七月詔ニ諸國ー大解除續紀に文武天皇二年十一月遣ニ使諸國大祓ーまた大寶二年十二月壬戌廢ニ大祓ー但東西文部解除如常○重胤云此は例年十一月大祓にて此前後の例に非ず慶雲四年正月因諸國疫遣レ使大祓また文德天皇實錄に嘉祥三年四月辛亥爲レ除凶服大先遣ニ大中臣氏人ー於ニ五畿内七道諸國ー以修ニ大祓ー大嘗祭式に凡大祓使者八月上旬卜定差ニ遣左右京一人五畿内一人七道各一人ー下旬更卜ニ定祓使ー差ニ遣左右京一人五畿内一人近江伊勢二箇國一人在京諸司晦日集祓如ニ二季儀ー癸丑帝吉服大ニ祓於朱雀門前ー三代實錄に貞觀七年七月廿九日戊申晦先是武德殿前有ニ人死ー仍大ニ祓於建禮門前ー以攘ニ邪氣ー也小右記に天元五年四月廿一日作物所板敷下在ニ犬死ニ云々廿三日有ニ大祓事ー賀茂祭間内裏有レ穢之時先例被レ行ニ大祓ニ云など見えたり抑諸國大祓の儀は記せる物無れども朝廷にて行はるゝ式にて准へ知べし以上採要と有り○大上中下の祓の事是は神官神事に犯有る人には臨時祓を科せて物を出さしむるなり類聚三代格に載る延暦廿年五月大政官符に定ニ准レ犯科ニ祓事ー大祓料物二十八種馬一匹大刀二口弓二張矢二具刀子六枚木綿六斤麻六斤庸布六段鍬六口鹿皮六張猪皮六張酒六斗米六斗稻六束鰒六斤堅魚六斤雜腊六斤鹽六升海藻六斤滑海藻六斤食薦六枚薦六領坏六口盤六口柏十五把匏四柄楉四枚席ニ・領右闕ニ怠大嘗祭事ー及同齋月中弔レ喪問レ病判ニ署刑殺文書ニ決レ罰食レ宍預ニ穢惡之事ー者宜レ科ニ大祓ー所輸雜物具如ニ前件ー官人有レ犯兼解ニ見任ー大嘗祭式に凡散齋一月致齋三日其齋月者預告ニ諸司ー及レ下ニ畿内ニ不レ得レ預ニ佛齋ニ云々と有て大嘗の齋月中は嚴かなる右の御定を守る事にて此に反すれば大祓を科する事と見えたり又大嘗なくぬにも大祓を科せたる例は類聚國史に弘仁七年六月丙辰伊勢大神宮司從七位下大中臣朝臣清持有ニ犯レ穢幷行ニ佛事ー神祇官卜レ之有レ祟科ニ大祓ー解ニ見任ーまた日本紀略に寛弘七年九月廿五日庚子大原野社邊有ニ葬送事ー仍預等負大祓すなど見えたる此也一上祓料物廿六種大刀一口弓一張矢一具刀子二枚木綿三斤麻三斤庸布三段鍬三口鹿皮三張酒三斗米三斗稻三束鰒三斤堅魚三斤雜腊三斤鹽三升海藻三斤滑海藻三斤食薦三枚薦三領坏四口盤四口柏十把匏二柄楉三枚席一領右闕ニ怠新嘗祭鎮魂祭祈年祭月次祭神衣祭等事ー毆ニ伊勢大神宮禰宜内人ー及穢ニ御膳物ー幷新嘗等諸祭齋日犯ニ弔レ喪問レ疾等六色禁忌ー者宜レ科ニ上祓ー輸物如レ右大嘗祭は大祀なるが故に大祓を科せ中祀には上祓を科す例と見えたり所輸の雜物は右の半減に大凡當れるなり臨時祭式に凡祈年賀茂月

次神嘗新嘗等祭前後散齋之日僧尼及重服奪ㇾ情從ㇾ公之輩不ㇾ得ㇾ參ニ入內裏ニ雖ニ輕服人ㇾ致齋並散齋之日不ㇾ得ㇾ參ニ入ㇾ自餘諸祭齋日皆同ニ此例ニまた大神宮式にも凡新年月次祭使參入者大神宮司卜部祓ニ除穢氣河解除ニ若有ニ觸忌ニ者ニ奪ニ其衣服ニと見えたる此は上祓には非れども上の例に引くなり又寶基本紀にも伊勢大神宮神主大小內人祝部等諸祭之日僧尼及重服奪ㇾ情從ㇾ公之輩并輕服人與同宿往反齋日犯ニ弔ㇾ喪問ㇾ病等六色禁忌ニ者宜ㇾ科ニ上祓ニ云々と有は此官符に依れるなる可し玉勝間山吹卷に出されたる續史に弘仁七年六月丙辰伊勢大神宮司從七位下大中臣朝臣清持有ニ犯ㇾ穢并行ニ佛事ニ神祇官卜ㇾ之有ㇾ祟科ニ大祓ニ解ニ見任ニと見えたる大祓は此に謂ゆる上祓なるなり又齋宮式に凡雜色人以上與ㇾ人鬪鬪者科ニ上祓ニまた三代實錄十一に內膳典膳雀部朝臣祖道隱ニ諱司中人死之穢ニ仍科ニ上祓ニと有る此に官符に穢ニ御膳物ニと有る罪に依れるなり又六色禁忌とは神祇令に六色禁法不ㇾ得ニ弔ㇾ喪問ㇾ病食ㇾ宍亦不ㇾ判ニ刑殺ニ不ㇾ決ニ罰罪人ニ不ㇾ作ニ音樂ニ不ㇾ預ニ穢惡之事ニと有る此を云なり　一中祓料物二十二種刀子一枚木綿一斤麻一斤庸布一段鍬一口鹿皮一張酒一斗米一斗稻一束鰒一斤堅魚一斤雜腊一斤鹽一升海藻一斤滑海藻一斤食薦二枚薦ニ領坏四口盤四口匏一柄柏五把楉二枚右闕ニ怠大忌祭風神祭鎭花祭三枝祭鎭火祭相嘗祭道饗祭平野祭園韓神春日等祭事ニ毆ニ物忌戶座御火炬ニ奸ニ物忌女ニ及觸ニ穢惡事ニ預ニ御膳所ニ并忌火等祭齋日毆ㇾ下祝禰宜及預ニ祭事ニ神戶人ㇾ犯ニ弔ㇾ喪問ㇾ疾等六色禁忌ニ者宜ㇾ科ニ中祓ニ輸物如ㇾ右 此は右の上祓より三分の一に大凡當る可し此は多く小祀の違例に依て科するなり齋宮式に凡寮官諸司及宮中男女修ニ佛事ニ和姦密婚者科ニ中祓ニと見えたり罪の次第に依ては上中二を科する事有りと見ゆ年中行事秘抄に載る高橋氏文に安曇宿禰廣吉罪有て上中之祓を科せたる事を記せり　一下祓料物二十二種刀子一枚木綿六兩麻六兩庸布一段鍬一口鹿皮一張酒四升米四升稻四把鰒六兩堅魚六兩雜腊六兩鹽四合海藻六兩食薦一枚薦一領坏二口盤二口匏一柄柏五把楉二枚右闕ニ怠雜祭祀事ニ及祭日毆ニ祝禰宜并預ㇾ祭神戶人ニ犯ニ諸禁忌ニ者宜ㇾ科ニ下祓ニ輸物如ㇾ右 大凡中祓の三分の一に當り大祓に計較（クラブ）れば十五分の一計りと見えたり　以前被ニ右大臣宣ニ偁承前神事有ㇾ犯科ㇾ祓贖ㇾ罪善惡二祓重ニ科一人ニ條例已繁輸物亦多事傷ニ苛細ニ深損ニ黎元ニ仍今弛張立ㇾ例如ㇾ件其毆傷若重者祓淨之外依ㇾ法科ㇾ罪齋外鬪打者依ㇾ律科決不ㇾ任ニ祓限ニ又祝禰宜等與人鬪打及有ニ佗犯事ニ須ニ科決ニ者先解ニ其任ニ即決罰神戶百姓有ニ犯失ニ者行齋之外決ㇾ罪如ㇾ法今具ニ奏狀ニ奏聞奉ㇾ勅依ㇾ請と有り 此文日本後紀令集解等にも出たり　鈴屋大人說に右の內に大祓と有るは大上中下と定められたる祓の品にして國之大祓など云 此に記傳 大祓の謂には非ず思ひ混ふ可らず」と云れたり 廿卷に云れたる事なるが其續きに註されたる事共は右の件々に書入たれば再此には出さず ○臨時大祓は朝廷のにも諸國のにも有る可し六月十二月晦大祓の外なるを總て云なり 除服諒闇の祭大嘗會前なる八月晦十月晦同十一月晦齋宮群行等の事に附て行はれ或は穢等の事に依て臨時に行るゝを云なり下に引る書共を見べし 考に大政官式に凡六月十二月晦日於ニ宮城南路ニ大祓大臣以下五位以上就ニ朱雀門ニ辨史各一人率ニ中務式部兵部等省ニ申ニ見參人數ニ百官男女悉會祓之臨時大祓亦同云々此儀貞觀儀式に委く見

ゆ臨時大祓は建禮門にて有る事三代實録に見えたり」と有り後釋に此は貞觀七年七月廿九日先是武徳殿前有二人死一仍大二祓於建禮門前一以攘二邪氣一也と有を見て云れたるなり大藏省式に凡臨時大祓所立二五丈幄二宇七丈幄二宇一と有るは他所にて行るゝが故なり朱雀門の時は幄を立る事は無きなり」と見ゆ三代實録四十一に元慶六年夏四月甲午於二朱雀門前一修二大祓一以二去八日大膳職人死一平野松尾賀茂等祭停止故也臨時大祓於二建禮門前一行レ之因レ穢不レ可レ用二大藏幄一仍用二朱雀門一也と有を以て證と爲べし但臨時大祓と雖も尚主々しき事なるには朱雀門にて行はれたりしなり然れば天下に預らぬ朝廷の内々の事のみ建禮門にて行るゝ所なり（但此は玉勝間山吹巻に師の祝詞考に臨時の大祓は建禮門にて有る事三代實録に見えたりと云れたるを予後釋に彼三代實録なるは内裏の穢なるに依てこそ建禮門にては行はれたるなれ押並ては臨時のも朱雀門にて有しなりと云りしも誤なり後に史どもを見るに内裏の穢には非ざる時も建禮門にて行はれて大かた臨時のは何時も彼門前にて行はるゝ事三代實録四十一巻に見えたり」と云れたる説に依て憚る所無く其意に隨ひ此には引直せるなり又中古の書に八省院東廊大祓と云事有り此は建禮門大祓兩儀の時に東廊を用られたるを中古内裏焼亡て建禮門の未建る時などに在し事なり又此八省院東廊大祓も八省院焼亡の後は又建禮門にて行はれたるなり其事百練抄文暦元年仁治三年の條に見えたりと或人云り）又後釋に百官の大祓も二季の晦のみならず臨時にも有し事なり大嘗祭式に凡大祓使者八月上旬卜定差遣左右京一人五畿内一人近江伊勢二箇國一人在京諸司晦日集祓如二二季儀一」と見え齋宮式に内親王卜定有て後に擇二日時一百官爲二大祓一（同二尋常二季儀一）また凡齋王將レ入二大神宮一在前七月若八月同時遣二大祓使一（左右京一人五畿内一人七道各一人）と有る次に凡齋王將レ入二大神宮一八月晦日朝廷大祓料云々と有り其外神事の節内裏に穢事有て大祓を行はれたりし事なども古記に見えたり」と有り（尚上に舉たる諸國の大祓の條に載せる共を見て其委しき由を知べきなり）〇祓に善解除惡解除の二等有り今世朝廷に行るゝ所吉事禊凶事清祓など有る其とは別事なる可く所思ゆ（吉事禊とは大嘗會の河原御禊などの如く吉事の在む前に豫行るゝ御禊なり凶事清祓とは宮中に觸穢などの有る其清まはりの祓を云なり）此善惡解除は其とは別にて神代紀（寶鏡開始段第二ノ一書）に已而科二罪於素盞嗚尊一而責二其祓具一是以有二手端吉棄物足端凶棄物一云々又（同段第三ノ一書に）以二手爪一爲二吉爪棄物一以二足爪一爲二凶爪棄物一と有る棄物は其祓具の事にて善惡二祓を云なり偖其は未發覺已發覺の二を云ふ事と通えけり未發覺は罪犯の有りや無しや未佗の聞見する所ならざるを祓ふ此を以て善解除と云ひ已發覺は其罪條已に究りて祓具を促徴（セメハタ）る故に惡解除と云ふと思ゆるなり（一條兼良公御説に凡解除之事有二吉凶二道一吉招レ福凶禳レ禍人之贖手貫足贖故爲二吉凶之表物一即祓具也と有るは信奉り難き御言なり鈴屋大人も善惡祓の事は其儀を記せる物無れば加何なるを善如何なるを惡とも

知難しと云れたれど予が説の如くは知難きに非ず履仲天皇御紀五年の下に車持君に罪有て負ニ悪解除善解除一而出ニ於長渚埼一令ニ祓禊一と有るも已發を責るに就て然る輩には未發の罪犯も無しと云べからざれば善悪二祓共に負せたる也鈴屋大人云此を以見れば犯有る者の祓も水邊に出て身滌ぎけり谷川士清云長洲崎摂津國河邊郡長洲村上に引る延暦廿年格に承前神事有レ犯科レ祓贖レ罪善悪二祓重科ニ一人一云々と見え又皇大神宮年中行事に二月十二日悪祓勤仕次吉祓勤仕御麻奉と有り此を皇大神宮儀式帳三祭十六日西川原祓の儀を記せる所に各奴佐麻令レ持而先宮東方皆悉令ニ向侍而人別之庤並後家穢雜事一令ニ申明然於御巫内人一各所持之奴佐麻一條分授即御巫内人管(スベ)集取持其人別所レ申穢事細令ニ傳申明ニ云々と有るに合せ見るに家穢雜事令ニ申明一また其人別所レ申穢事細令ニ傳申明一と有るが其有る趣を明白に表し云ふ此即悪祓なり然れども人は視聽言動に就ては必罪犯の有る者なるが中には申明らめ難き事も有る其を其任に爲す時は竟に其穢の除去る時有る可からず此は其表れざるを以て假に善として尚其にも祓を科せて善祓とは云るなり但大凡の世の様に取ては申明らむる方明白にて罪無きに似たれども白申すやうの事は人も能く知る所なるも有べければ此は實として悪祓とは爲るなり事の未發れぬを善とする事は公正なる古意なり○六月十二月晦日大祓の事は御天降の始より高千穂宮にて毎年に行ひ始させ給ふ者なり國史には臨時大祓を耳載られて六月十二月の恒例なるは却て記されざる者也此如く際々しく時日を定めらるゝ事は大寶の令の御制ならむとは誰も思ふ事なるが然らず其は大嘗會は今も十一月中卯日なるに中臣壽詞を以て見れば筑紫の大朝廷の御定也鎮魂祭は十一月中寅日なるに神武天皇即位元年十一月中寅日初ての行はれし事天皇本紀天孫本紀等に見えたり此等例に推准へて大祓の六月十二月晦日なるも御天降の始也ける事を察ふ可し然るは此詞中に高天原爾神留坐云々我皇御孫之命波豊葦原乃水穂之國乎安國止平久所知食止事依奉岐云々皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氐天之御蔭日之御蔭止隱坐氐安國止平久所知食武と有るなどは全く御天降の初め天下を所知食し始る時の事を云る也又許許太久乃罪出武如此出波天津宮事以氐云々と有事も天宮の御政を擬ひ摸されたる由也是等を以て見るに臨時の祓耳にては有べからず恒例の定れる時日有しなり其時日は何時か有む必季夏歳暮の二時なりし事更に論ひ無き者なりけり然れば六月十二月晦日大祓の事の正史に記されざる

こそ上古より恆例の事なりし證には有けれ斯在ば大寶二年十二月晦日の御紀に廢二大祓一但東西文部解除如レ常と有るなどは却て其變を以て記さるゝ所なる者也（考に六月十二月晦日大祓の事令條に擧られたり如此く定例としも成たるを思へば此晦日の大祓も已くより有し事か然れど天武天皇の御時八月にも七月の始にも有しと文武天皇の御代始にも此六月十二月晦日の事は見えざるを思へば大寶元年の御定とぞ云べき云々と有るを後釋に此二季の大祓は何れの御世よりか始りけむ詳ならず天武天皇御紀文武天皇の始など迄に此大祓の見えざるを以て大寶の御定なりとは決め（サダ）難し是は毎年に定れる事なる故に記されざりしにも有べし」と云れたるは然る言ながら尚上古より然有し事の説無きは思漏されたる者なり）神祇令に凡六月十二月晦日大祓（謂祓者解二除　不詳一也）東西文部（謂東漢文直　西漢文首）上二祓刀一讀二祓詞一（文部漢音所レ讀者也）訖百官男女聚二集祓所一中臣宣二祓詞一卜部爲二解除一と有る中臣宣二祓詞一とは此大祓詞を宣るを云ひ卜部爲二解除一とは御贖儀を行ふを云て上古より大祓と稱ふ者は此二事を合せて云ふ所なり但東西文部上二祓刀一讀二祓詞一と有る此二氏は諸蕃の種族なり思ふに彼等が歸化し程より其本國にて在ける祓事を内々行ひ居つらむ其を朝廷にても其本國の任にして免し行は令め給ひけむを何時と無く神代よりの儀式に添行ふ事とは成れりけるなり（上に引る大寶二年十二月晦日の御紀に廢二大祓一但東西文部解除如常と有るは此月太上天皇の神上り坐るに依て大祓は廢られたるが東西文部解除如レ常と有を以見れば其儀式の列には收（イラ）ざる事著し　考頭書に文部が解除は蕃國の流にて皇朝の神事に非れば諒闇の程にも爲させられしと有るは然る言也）考に其後元正天皇養老五年七月御紀に始令下文武百官率二妻女姉妹一會上於六月十二月晦大祓之所上と見ゆ　既に令の御定は有つれども妻女姉妹まで集には此時よりなり」と有り後釋に百官男女と有るは女は女の官人を云るにて官人の妻女などを云るには非じ云々と云れたる如く此詞に比禮挂伴男手繦挂伴男など女官を云る是は上古よりの御制にて彼御紀なるは當代の御心にて然令せ給へるなり天皇は皇女にて度らせ給ふが故に女官の外に文武百官の妻女姉妹までを召上給ふにて有る可くや又は文武百官の妻女姉妹まで大祓の所に會ふは古風にて在けるを大寶令の御定より女官等のみを召るゝ事と成しかば然すがに上にも足ず所思し又下よりも然奏請るなどに依れるかとも思はるゝなり然れど其後行はれず（後釋に養老の定め後の延喜式にもたゞ百官男女とのみ有るには妻女姉妹なども籠たるか又思ふに今の令に百官男女と有るは彼養老五年の時に改られたる文にて是も妻女姉妹なども籠たるにも有べしと有り）延喜大政官式に凡六月十二月晦日於二宮城南路一大祓大臣以下五位以上就二朱雀門一辨史各一人率二中務式部兵部等省一申二見參人數一百官男女悉會祓之臨時大祓亦同と有り其儀は次に擧記せるが如し（但宮城南路は儀式に朱雀門前路有と有るを云なり）貞觀儀式に大祓儀（六月十二月並同但臨時大祓者不レ令レ申二刀禰數札一直令進）其日午四尅神祇官内縫殿

等官省寮候ニ延政門外一百官會ニ集祓所一〇四時祭式大祓條に右晦日申時以前親王以下百官會ニ集朱雀門一云々と見え江次第には酉剋諸司會集と有るは追々に後れ來ぬる者と見えたり 先此神祇官陳祓物於朱雀門前路南一分ニ置六所一但馬在ニ南方一北向〇此は神祇官の神部の掌る所なり其山江次第に見ゆ 所司設ニ座於朱雀門並東西伏舍一大臣以下五位以上壇上東方西面北上重行南階東第一間爲ニ四位以下階一第二間爲ニ參議以上階一其女官亦在ニ同壇上西方一隔以班幔開ニ西一ノ扉一從レ此出入 外記官史中務兵部式部三省東伏舍西面北上彈正西伏舍東面北上に〇江次第を以て按ずるに儀式に所司設ニ座於朱雀門并東西伏舍一と有るを朱雀門西第一二間曳慢設ニ內侍座一東第三(ニイ)間設ニ且上座一西面と有り此且上座は儀式に大臣以下五位以上壇上東方西面北上重行と有るを云なり又儀式に南階東第一間爲ニ四位以下階一第二間爲ニ參議已上階一と有るは右の且上座の席を別つ爲に階を分てるなり次第に參議昇レ自ニ東第二階一着レ座辨及三省輔昇レ自ニ東第一階一著レ座と云る此なり又次第に第二間設ニ辨ノ大夫中務式部兵部三省輔座一西面北上と見えたるを以て考るに東第一間より第二間と次第に座上に成るなり第三間設ニ其上座一と有る三ノ字は一本に二と有る方宜し東伏舍西伏舍は朱雀門東西の與居を云なり儀式に外記史中務式部兵部三省東伏舍西面北上と有るを次第に東伏舍西面設ニ外記史三省亟錄座其後史生座一北面設ニ官掌召使等座一南面設ニ三省ノ省掌座一並西面北上と見え又儀式に彈正西伏舍東面北上と有るを次第には西伏舍一東面設ニ彈正忠疏座其後史生座舍南面臺掌座一若ニ伏舍一有ニ汚穢物等者諸司分ニ坐門東西壇上一と見えたり此等の異同精麤をも校へ知る可き者なり

祝詞座在ニ路南一西面 座前置ニ軾布一〇江次第には路南設ニ祝師座一西面雨儀儀數門南中央壇上神部置ニ軾布於其前一陳ニ祓物於路南一分ニ置六所一馬在ニ其南北面と有りて其次に記文云馬六匹牽ニ立朱雀門橋上一又積ニ置稻四五束許一と見ゆ但又字より下は西宮記の文なり本に祝詞座在ニ路南西一と有るを後釋に右の江次第を引て此の西ノ字の下に面字の脫たるにて此二字は分注なる可しと有に從ひて改たり 未一尅外記以下各就レ座自餘諸司屯ニ立東伏舍東頭一女官亦就レ座式兵二省省掌起レ座立ニ舍東頭一〇本には自餘諸司屯ニ立東伏舍東頭一于時式兵二省省掌以上起就レ座と有るを荷田大人の書入に就立未レ解レ義案官本恐亡改者于時誤乎と有るに從ひて此を訂正し引く所也此所江次第には文武諸司屯ニ立東舍東頭一記文云諸司座設ニ東西伏舍南面左右撿非違使官人就ニ東西伏舍南庭胡床一と見えたり 唱ニ計刀禰一式部先唱兵部後唱〇後釋に刀禰とは王臣百官を摠て云ふ」と見えたり 訖彈正忠命レ疏云令レ喚ニ臺掌一 疏稱唯仰ニ史生一喚ニ臺掌一 史上稱唯喚ニ臺掌一 二聲臺掌稱唯出ニ西舍前北向一而立忠命云置レ版臺掌稱唯退出 臺掌捧レ版進置ニ之一舍前東去二許丈當ニ忠前一北向 次三省省掌列ニ參置レ版舍前西去三丈祓座東去六尺置ニ中務版東去六尺式部版東去六尺兵部版一 訖退出立ニ舍南一式兵二省省掌更出召ニ計諸司諸衞一式部先召兵部後召 訖式部亟目錄云令レ喚ニ省掌一 錄稱唯仰ニ史生一云喚ニ省掌一 史生稱唯喚ニ省掌一 二聲省掌稱唯 次兵部 次中務亦如之訖三省省掌共列就レ版式部亟命云司司乎刀禰數札早速令レ申 式部省掌稱唯 次兵部次中務亦如レ之訖三省省掌共列ニ參出式部省掌引ニ列文官一入別持ニ刀禰數札一 就式部版一貫首者申云司司申久刀禰數札進止申 亟命云進禮 諸司共稱唯中分各授最後者摠執ニ疊札一進置ニ於錄前一還就ニ本列一 錄讀ニ申札數一云司司申留刀禰數札若干枚申給止申 亟命云レ縱 諸司共稱唯 參出次兵部次中務亦如レ之三省勘ニ目錄一 訖候御麻既到挾ニ拔稻一拔稻は西宮記北山抄江次第等に祓馬と並に又積ニ置稻四五束許一と有を云なり四時祭式に稻四束と有るは此なり 于時辨大夫並三省輔各一人一列官史及三省亟錄一

列立庭中（五位已上前列 六位已下後列）辨大夫申云大祓所爾參集（讀曰）
（末爲宇古 那波禮留）刀禰數申給止申次式部錄申目錄次兵部次中
務三省申畢大臣宣云常乃任爾任令祓辨以下共稱唯
（五位以上先稱六 位以下後稱下同）訖依次退（三）復本座式部令喚省掌如
前兵部亦同二省省掌各就版式部亟命云刀禰令參
進省掌稱唯兵部亦同二省省掌還趨立本列式部省
掌云刀禰參進米 兵部亦同外記以下起座降立東舍南
頭式兵二省亟錄引文武官刀禰列立（西面北上）彈正忠疏
降立西舍南頭（東面北上）立定神祇官頒切麻（參議以上は史 五位以上史生）
（女官幷諸司神部○江次第に記文云上 ノ料入荒筥進之云々と見えたり）訖中臣移就座（○江次第には 祝師著座と）
見ゆ然るに四時祭式大祓條に右晦日申以前云々百官會集朱雀門卜
部讀祝詞事見儀式と有る卜部ノ二字は後人の中臣を掠めて作（カ
ケ）るにて儀式には無き事なり思ふに卜部兼俱卿などの狡意に然は物
爲るなる可けれど少しも皇典に合ふ所無きは佗より其謊の發覺（アラ
ハレ）む事迄には心着ざりしこそ笑止けれ令には中臣宣祓詞讀祝
卜部爲解除と有て俗にも中臣祓詞など云ふを如何は爲む
詞 ○江次第の此の分注に先讀宣命云々と有る宣命は此に集侍云
々と有を其を差せるなる可し祝詞は高天原爾神留坐以下云々の
文を云なり先には先讀宣命は此大祓詞にて次に讀む祝詞ぞ天津祝
詞なる可きと思ひしかども熟思へば天津祝詞は其解除を行ふ人々の
右の大祓詞を承給はりて後に人々各自に自身宣る事なれば此儀式に
記さる可くも非ず其は其大祓詞即天津宮事を行ひて天津祝詞を宣れ
よとの趣意なればなり 稱聞食刀禰皆稱唯（○大祓詞に集侍親王諸王諸臣 百官人等諸聞食止宣また天皇）
朝廷爾仕奉留云々今年六月晦之大祓爾祓給比淸給事乎諸聞食止宣ま
た高天原爾神留坐云々高天原爾耳振立聞物止馬牽立氏今年六月晦日
夕日之降乃大祓爾祓給比淸給事乎諸聞食止宣と以上三段の聞食止宣
にて刀禰皆稱唯するなり次に四國卜部等大川道爾持退出氏祓却止宣
は卜部等耳に係りて諸司の預る所ならざれば卜部の稱唯するな
り此に記し分たざるは刀禰の中に右の卜部も籠て記せるなり 祓畢

行大麻（○後釋に云く西宮記北山抄江次第なるを考合するに此の 分注に神祇官人以下執之上卿以下座前引之上卿辨大夫
諸司料各異西宮抄曰上卿料裕曳と見え たる是等は儀式には記さゞる事なり）次撤五位以上切麻
既而散去（○江次第には次撤祓畢上卿以下退出と有り上卿は儀式 に謂ゆる大臣を云なり偖儀式の今本に撤を祓に作るを後
釋に引れたるには撤と作れば然る本の有 しなる可し今江次第に合せて改たりき）と有り後釋に頒切麻
また行大麻などは上代より有し態か何とかや後の事
めきて思ゆ」と疑を存されたり然るを古事記（訶志比 宮段）
に取國之大奴佐と見えたる奴佐は記傳に禱布佐に
て其罪穢を除淸め給へと禱ぐ意を以て出すなれば神
に獻りて禱ぐと意ばへ一なり倍布佐は麻なり古語拾
遺に好麻所生故謂之總國古語麻謂之總也云々
と有り」と云れたるに神祇令に凡諸國須大祓者云々
戸別麻一條と見え天武天皇御紀にも四方爲大解除云
々用物則云々毎戸麻一條とも見え皇大神宮儀式帳
（三祭十六日西川原祓 の儀を記されたる所）に各奴佐麻令持而先宮東方皆悉令
向侍而人別之序幷後家穢雜事令申明然於御巫內
人各所持之奴佐麻一條分授即御巫內人管集取持其
人別所申穢事細令傳申明云々と有る奴佐麻は奴佐
に出す麻を云なり然るに四時祭式（大祓 條）なる料物の中
に木綿五斤二兩麻二十斤桌十二兩と有るは儀式に
行大麻また頒切麻など見えたる其なるに何どて

木綿麻を別々に云ざると云ふに記傳八三十八丁に穀と麻と二種を凡ても木綿と云り式などに其料物を擧たる所には木綿と麻とを出せるに其を用る所には唯木綿と耳云て麻の事の見えぬが多きも二種を合せて木綿と稱故なり」と云れたる如く常に相通はし云ふ事と聞えて其料物を擧ぶ所には木綿と麻とを出せるも其を用る所には唯大麻とも切麻とも麻と耳も云て木綿の事の見えぬが多きも二種を合せて奴佐とも稱故なりけり　委しくは大殿祭詞なり明和幣の條に云り考合す可し倍齋宮寮式河頭祓料に安藝木綿大三兩木綿大四兩麻大一斤と記せるを其式には齋王到ㇾ幕臨ㇾ流而禊神祇官中臣進ㇾ麻云々と見えたるも大祓の例に同じ　倩此大祓の料物の奴佐に木綿麻を並用らるゝに說有り其は古昔祓料に用られしは必織たる木綿麻にて伊邪那岐命の身滌の最初に大御身に着させ給ふ大御衣を脫棄給ひし例に因れる者なり然れば古昔に取二國之大奴佐一としも云るは其罪犯有る人の衣服の代に木綿麻を出さしめ給ふ所なるが良世降るに隨ひて其罪犯有る人を推問して出さしむる事は止て却て每戶に麻一條を召て解除爲させ給ふ事と成てぞ古義は廢けるなる可き後拾遺集なる和泉式部が六月祓を詠る歌に思ふ事皆盡ねとて麻の葉を切に切ても祓つる哉と有るは此なる可し

公事根源に今日は家々に輪を越る事有り云々法性寺關白記には此歌を詠す可しと見えたりと有　但古義に違へりとは雖も天下の戶別に麻一條の祓柱を出さ令給ふ事は即其時々の神の御心なる者にて其每戶の人々の中に罪犯有る人の爲には惡解除と爲り又其犯勿らむ人にも必過無しと云べからざれば吉解除と爲りて甚々貴く辱き御事なり　其始を思ふに神代紀素戔嗚尊に祓具を責る所に是以有二手端吉棄物足端凶棄物一亦以ㇾ唾爲二白和幣一以ㇾ洟爲二青和幣一用ㇾ此解除と有る爲二白和幣一爲二青和幣一の二の爲ノ字を化ノ字に易て心得べし古語拾遺に穀木種ニ殖之一以作二白和幣一 是木綿也 また種ㇾ麻以爲二青和幣一と有れば穀麻即白和幣青和幣なり然れば素戔嗚尊の唾の木綿と變化て生立るを取て白和幣に爲り洟の麻と變化て生出るを取て青和幣には作れりとの意にて此二物は御衣料なりしなり萬葉十四に木綿手次可比奈爾懸而在天左佐羅能小野之七相菅手取持而久堅乃天川原爾出立而潔身而麻之乎一と有るも此時の故事を詠るなるに思ひ合す可き者なりかし　但古語拾遺天石窟段に津咋見神穀木種殖之以作二白和幣一と有る津咋見神は若くは月夜見命に非じか然も有らば石窟の時には其所奉る幣帛の料にて此時に素戔嗚神の始て木綿麻は生し初給ふ所なる可し月夜見命須佐之男命の同神なる由は能く人の知れるが若し右歌に左佐羅能小野と云ふも須佐之男命の流離(サスラエ)の事に由有て通え又萬葉に月の異名を佐散良衣壯士と詠るをも思ひ合す可き者なり倩又拾遺に令長白羽神種ㇾ麻以爲二青和幣一と有るは右の考には如何の樣なれど是も須佐之男命の御態に生れるを長白羽神の殖たりと見て難無きなり　然れば行大麻また須切麻と

云ふ如きは實は後世の事めきて見ゆれども其始を思へは罪犯有る人の身に著る所の衣服を出さ令給ひて解除しめ給ふ所なれば此亦時々の神の御心にて取も直さず天津宮事と云ふ者なり（玉矛百首歌に時々之御法母神の時々乃御命備斯阿禮登伊邇傳遺辛と詠まれたるは此を云なり然れども明らめ得らるゝ限りに古書に徴して考記し置べき者なり異しき行ひは努々行ふ可きならず）倩大祓料物は四時祭式に六月晦日大祓（十二月准此）五色薄絁各二尺緋帛一丈五尺絁二疋金裝横刀各二口金銀塗人像各二枚（已上東西文部所預）庸布三段木綿五斤二兩麻二十斤十兩枲十二兩鳥裝横刀六口弓六張篦二百株鐵六口鹿角三頭鹿皮六張米二斗酒六斗稻四束鰒二斤堅魚七斤腊一石五斗海藻卅斤鹽六斗水盆六口匏六柄槲卅把馬六疋祝詞料庸布五段短帖一枚云々と見えたり若て江次第大祓の分注に六月十二月晦日若有二閏月一其月行レ之と見え宮主秘事口傳抄にも節折事有閏月之時以二閏晦日一行レ之（六月祓亦同）應永十三年閏六月廿九日被レ行二節折事一と有れば閏月有れば閏月に行はるゝ例と通えたり（鎌倉殿年中行事にも閏有る年は閏月に輪た御越有之なり一と見えたり此は鎌倉將軍家の風なれば朝廷の御事の傍例にも引出申さむは甚可畏けれど暫く其時俗を顯さむ爲に引たり）大なる月は晦日小なる月は廿九日を晦日と爲て行はるゝ定例なり下に引る小右記に天元五年六月廿九日今日大祓云々と有を以知べきなり（然るを後撰集に六月祓しに川原へ罷出て月の明きを見て讀る賀茂川の水底澄て照月を行て見むとや夏祓する一と有るは此の歳なりし故に朝廷の大祓ならぬ日なりけたり一と思へたり野槌に長元之頃或人記小倉小舍人可レ參二晦月祓一之由觸之有哉六月十二日と見えたり）

○神祇令に中臣宣二祓詞一卜部爲二解除一と有る其は中臣は此大祓詞を參集する百官人に宣聞せ卜部は解除の事を爲る由にて詞に四國卜部等大川道爾持退出弖祓却止宣と中臣の令する此を云なり（然るを四時祭式に卜部讀二祓詞一と有る如きは上に辨たる如く當らぬ事なり此は決く後人の思ふ所有て先に中臣と有しを削て易つる者なり）其解除の事は貞觀儀式及四時祭式に御贖と記し江家次第宮主秘事口傳抄等に節折と記せる此なり（公事根源本朝月令年中行事秘抄等にも出たり）此御贖はしも天皇の大御解除にして六月十二月晦日の御贖の外にも有る事にて本朝月令に引る弘仁內藏式に晦日御贖（中宮東宮並同）云々右毎月晦日御贖依レ件權備進二闈司一と有り此は毎月の晦日の御贖なり（公事根源神祇官獻二御贖物一の條に是は毎月晦日に奉る御麻なれども同じて供す贖物は身の災を贖ふ物と云ふ心なり人形を作て身代と爲る事同じ心なるにや云々」と有り）又弘仁神祇式云御贖祭（中宮准レ此）云々右從六月一日始至二于八日一日別御巫行事其東宮日限並物數並減レ半と見ゆ此事を四時祭式に六月祭（十二月准レ此）御贖祭云々と有て右と同文なり是は毎月の例とは異りて御體御卜に就て行はるゝ事と通えたり公事根源抄御贖物條に是は一日より八日まで贖兒持て參る朝餉にて主上に參

らす四の土器を御指して上に張たる紙に穴を開て御氣息を入るなり云々大凡は素盞鳴尊の千座置戸の祓など云より起りぬる事なり」と見ゆ（贖兒は人像を云ふ四の土器は土錢の事と通えたり已に此頃弘仁延喜の舊式廢れて如此くには成れりしなり）四時祭式六月晦日大祓の引續きに御贖鐵人像二枚金裝横刀二口五色薄絁各一丈一尺絲三兩安藝木綿二斤凡木綿一斤麻二斤庸布二段御衣二領袴二腰被二條（自餘物見ニ縫殿式ー）鍬四口米酒各二斗鰒二斤堅魚二斤腊四升海藻二斤鹽四升水盆坩坏各二口匏二柄柏廿把小竹廿株（經各二分長八尺）宮主一人卜部五人明衣料調布三端三丈六尺中宮御贖（東宮准レ此）鐵人像二枚五色薄絁各一丈一尺絲三兩安藝木綿二斤凡木綿一斤麻二斤庸布二段御衣二領裙二腰（東宮袴）被二條鍬四口米酒各二斗鰒二斤堅魚海藻各二斤腊四升鹽四升水盆坩各二口坏二口匏二柄柏二十把小竹二十株宮主一人卜部五人明衣料調布三端三丈六尺（但東宮凡木綿麻米酒鰒腊鹽柏等八種半減自餘物同ニ中宮ー）云々供ニ奉大祓御贖ー人等祿中臣官一人絹四疋中臣女絹四疋（中宮准レ此）東西文部二人各絹二疋東宮中臣幷女各一人並給ニ坊物ーと見えたり（但此は儀式より後に出す可き事なれども儀式には中宮東宮の御贖物を載られざれば其委しきに就て先には引なり）貞觀儀式に二季晦日御贖儀（六月十二月）神祇官預前受備其料物鐵偶人卅六枚（金銀粧各十六枚無飾四枚）木偶人

廿四枚御輿形四具挾幣帛木廿四枚云々（○四時祭式には鐵人像と有るを此には鐵偶人と有て員數も違へり次なる木偶人御輿形挾幣帛木等は祭式には無き所なり云々は右の祭式の員數に同じき故に記さず但儀には中宮東宮御贖無し）其日卜部各著ニ明衣ー（○四時祭式には右晦日卜部各着ニ明衣ーと有り）其一人執ニ御麻ー二人執ニ荒世ー二人執ニ和世ー二人取レ壺（○宮主秘事口傳抄に此式を記せる中に予取レ壺と有る本注に壺中鐵人形貳黄楊人形貳入レ之云々と有り然れば上なる鐵偶人木偶人を入る料なりけり又木偶人は黄楊人形なる事をも考得べきなり）官主史生神部等左右分頭前行（○祭式には前行を前驅と有り）中臣官人次レ之御麻次レ之（○祭式には次レ之を上へ回らして次中臣官人次御麻と有り下此に准へ脩御麻は卜部の執る所なり）東西文部次レ之（各執ニ横刀ー○江次第に木工造之と有る者此也）荒世次レ之和世次レ之（並著ニ木綿鬘ー○下に引る江次第に縫殿寮官人昇ニ豆豆志余呂比御服ーと有るは此なる可し山田以文が書入に執政所抄宮咩奉祭文に御飯御酒綿布津々志與呂比仁云々と有りと記せり決く同物にて布に云ふ事と通えたり）宮内輔（若無レ輔亟替レ之）陳ニ列御麻等物ー候ニ延政門外ー大舍人叩レ門（○祭式には進候ニ延政門ー大舍人叩レ門宮内輔入奏と有て分注に其詞見ニ宮内式ーと見えたり）闈司問ニ阿誰ー大舍人答云 宮内省輔姓名御麻奉登御門候闈司傳奏如レ常輔入就レ版奏云宮内省申久御麻進止神祇官姓名御門候止申（○此文は祭式に省ける所なり）退出喚ニ中臣ー稱唯率ニ文部四國卜部ー入（宮主在ニ其中ー○御麻荒世和世壺横刀等を執て入なり）候ニ宜陽殿南頭ー（○祭式には候の下宜の上に於ノ字有り）縫殿寮先以ニ荒世和世御服等ー率ニ女孺ー參入即內侍縫司（掌縫以上供レ之）傳取令ニ藏人供奉ー訖縫殿寮退出（荒世賜ニ卜部ー和世賜ニ宮主ー○古本頭書に荒世以下小書十字依ニ下例ー盖大字延喜四時祭式亦爲ニ大字ーと有り脩縫殿寮云々以下の文は四時祭式に載ざる所なり祭式には候ニ於宜陽殿南頭ーに引續きて中臣率下卜部執ニ荒世ー者上就ニ階下ー置ニ於席上ーと有て分注に掃部寮預敷ニ簀席於階下ー縫殿寮置ニ荒世

和世御服於席上一と記せる儀式には次西文部進退如ニ前儀一と有る次に有り西宮記江次第には當日曉景所司供奉装ニ束於御殿一時尅出御先レ是節折藏人縫殿司齋主官主東西文人等祇候縫殿寮官人昇ニ豆豆志余呂比御服一付ニ女官一傳ニ授中臣女一中臣女供レ之天皇著ニ給氣息一即以返給と有り此文に裝ニ束於御殿一と有るは所司供奉分注に藏人儲ニ神祇官一召ニ文武人主殿掃部縫殿等一と見えたる其なり修縫殿式に御贖服皂幞頭二條別三尺四寸湯布袍二領云々と有り　次中臣捧ニ御麻一進就レ版勅曰參來稱唯就ニ階下一中臣女簡ニ氏女堪レ事者一奏定　於ニ殿上一轉取供奉訖授ニ中臣一○江次第に次神祇官中臣官人以ニ御麻一進就ニ階下一付ニ中臣女一供レ之天皇親取摩ニ御體一即返給と見えたるは此事の委しき者なり　還ニ本所一即授ニ卜部一人一令レ向ニ祓所一○本所は延政門外なり祓所は大祓の所を云り此即此祓詞に四國乃卜部等大川道爾持退出氏祓却止宣と有る趣意にて神祇令に卜部爲ニ解除一と云る者なり尙下に次々見エたり　輔吏入奏曰宮內省申久御贖物進止神祇官姓名大和河內乃文部四國乃卜部等率天候止申○祭式には又更宮內省輔入奏と有る分注に其詞見ニ宮內式一と記して略る事上の如し　退出喚中臣稱唯東文部捧ニ横刀一入就レ版勅曰參來稱唯就ニ階下一轉授ニ中臣女一奉レ御畢退出次西文部進退如ニ前儀一○江次第には次東西文人一一以レ劔進就ニ同階下一付ニ中臣女一令レ供レ之天皇又着ニ給御氣一返給と有り此は神祇令に六月十二月晦日大祓東西文部上ニ祓刀一讀ニ祝詞一と云る者此なり下に其詞有り其所に云ふ可し　次中臣率下宮主卜部執ニ荒世一者上就ニ階下一置ニ於席上一○掃部寮敷ニ席於階下一縫殿寮置ニ荒世御服於席上一○祭式には此事を上なる候ニ於宣陽殿南頭一の下次中臣捧ニ御麻一の上に在り　宮主執ニ荒世一授ニ中臣一中臣取授ニ中臣女一即執ニ量御體一摠五度○江次第には次神祇官及荒世卜部進置ニ竹夜於庭中席上一中臣官人卜部等解除畢授ニ中臣女一女取供レ之天皇起給與レ女量ニ御體五度先一量ニ身長一次量レ自ニ兩肩一至ニ御足一次左右手自ニ胸中一至ニ指末一次量ニ左右腰一至ニ御足一次自ニ左右膝一至ニ足小一竹九枝中臣女毎レ度承取示ニ神祇官一と見えたり然れば此時に奉る荒世の御服を以天皇の大御體を量奉るに竹竿(タケノヨ)を持て折懸る此を以て節折(ヨチリ)とも云ふなりけり同條の首に縫殿寮奉ニ荒世和世御服一事神祇官奉ニ荒世和世御贖一事謂ニ之節折御裝束一と有て其目錄には節折と耳記せるを以て知るへし宮主稜事口傳抄六月卅日節折の分注に謂ニ之節折一者以レ條量ニ五體之四肢一と見ゆ然れば儀式祭式共に小竹廿株徑各二分長八尺と有るは右の料なる事知へし口傳抄に友人部(ムトベ)居ニ住西京一云々進ニ篠等一と有る友は六の誤にて決く六人部(ムトベ)なり若て六人部は身度部にて右の節折の事に因れる姓なり天孫本紀に火明命五世孫妙斗米命六人部連等祖また六世孫建手和邇命身人部連等祖と有れば甚古き事なりと知れたり倩口傳抄に右の節折の事を記せるを閲るに事具之後出御次宮主參上御殿階下云々次友人部進ニ篠等一先一筋獻レ之次宮主取傳ニ女官一次女官取傳ニ命婦一次命婦進ニ主上一主上量ニ御身長一返ニ給命婦一次命婦授ニ女官一次女官傳ニ宮主一次宮主折ニ懸之一也云々次又獻ニ二筋一自ニ兩肩一至ニ御足一合量レ之次又二筋獻レ之如レ先量ニ左右御手一自ニ胸中一至ニ指末一返ニ給之一宮主折ニ懸之一云々次又二筋獻レ之量レ自ニ左右腰一至ニ御足一次量ニ左右御膝一至ニ御足一宮主折ニ懸之一如ニ先度一也已上五度量ニ御體一云々次返給之後着ニ庭座一讀ニ祝詞一次讀畢又著ニ階下一進レ篠如先也是曉料也云々次宮主返給次讀ニ詔戶一退出と有りて高天原爾神留坐云々と大祓詞を擧たり讀ニ祝詞一と有るは此詞と通えたり然るは川邊に持退出る卜部に合するなるか故なり葉侍云々の詞を省き記せるに心を著く可し

訖宮主取祝訖授ニ後取卜部一○宮主以下の十字祭式には次なる捧レ坩の下に在り取祝は右に引る口傳抄に返給之後著レ座讀ニ祝詞一と有を云なり　宮主取レ坩授ニ中臣一中臣轉授ニ中臣女一執奉レ御訖授ニ中臣一轉授ニ宮主一宮主取祝授ニ後取卜部一○西宮記及江次第には次卜部捧レ壺授ニ中臣官人一官人付ニ中臣女一供レ之天皇於ニ口氣於壺內一三度訖中臣女傳ニ神祇官一神祇官授ニ宮主一宮主密祝畢云々と有り坩には口傳抄に次予取レ壺と有る分注に壺中鐵人貳黃楊人形二入レ之云々と見えたる如し但此人形は公事根源抄に贖兒と云ふ者なり　荒世事畢退出次中臣引ニ和世一進退如ニ荒世儀一○西宮記江次第にも次和世參入如ニ荒世儀一と見えたり右の如き事を再行ふなり口傳抄には其式の中に次獻ニ鏡劔鈴等一倍進とも又別條に先宮主進ニ鏡鈴御杏御鞭一居ニ柳筥一一度進之とも見えたれとも古無き事なり　其荒世者賜ニ卜部一和世者賜ニ宮主一○祭式には荒世和世を荒服和服と見えたり　訖皆退出解ニ除河上一○祭式には臨レ河解除而去と有り　但中宮中臣祐以上東宮進レ此若不レ足者取ニ他司中臣氏一捧ニ

御簾ニ入候ニ職司ニ〇職は中宮職司には内侍司を云ふ令ニ内侍啓ニ中臣女奉ニ御麻ニ御贖其奉ニ荒世和世亦准レ此〇祭式には准ニ此儀ニと有り東宮坊司入啓訖出喚中臣稱唯捧レ麻進就ニ庭中ニ令云參來稱唯昇レ自ニ南階ニ奉訖退出授ト部一人令レ向ニ祓所ニ亦中臣率宮主ト部進置ニ荒世和世於席上ニ中臣昇階〇祭式には官人昇階と有り轉授ニ中臣女ニ奉レ之餘如ニ供御儀ニ其荒世和世者縫殿寮預置ニ階下席上ニ命婦率ニ女孺ニ取奉訖却安ニ席上ニ縫殿寮退出如初荒世賜ニト部ニ和世賜ニ宮主ニ〇祭式には荒服和服と記せる事上の例なりと見えたり本朝月令に載る弘仁神式の文此に同じ弘仁神式は神祇式を略るにて此は字の脱たるに非ず公事根源抄節折にも晦日ノ夜御贖物參る荒世和世の御裝束二間に御屛風立て御座を敷く御禊の座の如し孫廂昆明池の障子の南の一間に屛風を立つ燈を高燈臺に灯して出御の程には消たり南の方をば遺す庭に主殿寮幔を引て宮主御祓して鏡刀楯など風情の具足有り又ト部竹の筵を庭中の席上に置く節折の命婦竹を持參りて御長より始めて所々の寸法を取果て宮主に切配はせて御解除を勤仕るなり荒世和世とて二度有り二度竟て祿を賜ふ節折をば與遠理と云ふ竹にて御長の寸法を取て其程に折配へばなり」と有り此等の事は止に引る儀式に委し但儀式には節折の事を云ざるに依て當昔然る事は無りつらむと思ふも有べけれど委からず荒世和世と云ふ其實は祭式に記せる如く荒服和服の御贖物なるが其御服の長を大御體に合せ竹を以て量るな以て荒世和世と云ふ事の由を察ふ可し尚此事の委しきは江次第に引る藏人式に見えたる其同じ事を宮主秘事口傳抄に卅日節折謂ニ之節折ニ者以レ篠量ニ五體之四肢ニ先主殿寮打レ幄東南西次左右有ニ幔門ニ掃部寮裝ニ御調度ニ御簾五寸計以ニ紙捻ニ結ニ上之ニ其內立ニ御屛風ニ行東西其內敷ニ小席二枚ニ行東西其上供ニ御半帖ニ東西立ニ御屛風ニ也當ニ于御所ニ之間南北行左右立レ之其內北方敷レ薦爲ニ命婦座ニ簀子敷ニ同薦ニ爲ニ女官等座ニ幄內敷ニ半疊ニ爲ニ詔戸座ニ其西方敷レ薦爲ニ中臣等座ニ次命婦參入事具之後出御次宮主參上御殿階下ニ也自ニ西方幔門ニ引裾正笏參入西方懸レ尻居レ杏中臣宮入參勤之時者宮主東方可レ着也次友人部居ニ住西京ニ云々進ニ篠等ニ云々と有り此云々の文は上に引る儀式の細注に次第を逐て引用たれば今略けり此條々は公事根源なる荒世和世の御裝束なり此御贖一云節折など眞能々儀式に引合せ讀て其消息に知る可き者なり但友人部は六人部なる事決き者なれば改む可しに上古の正しき祓の態の傳はれるにて大祓と云ぞ身滌には有けるを良世の降るに隨ひて祓禊の差別も立ず爲りて共に其實を失へるが如く成れりしかども中古迄此二事の相並びて行はれて在けるぞ皇祖天神の賜物にて此條理を說てぞ天津宮事は伺ひ得らる可く

なむ有ける（但其中に文部が漢文の詞を讀みて横刀を上れる事は中古に加はれる者にて我が上古の有ならず所以に續紀大寶二年十二月晦日の御紀に太上天皇の崩御に依て廢二大祓一但東西文部解除如レ常と有り此を以ても著明し）御贖とは公事根源抄（六月一日御贖物條）に大體は素戔嗚尊の千座置戸の祓など云より起りぬる事なり又年中行事歌合に節折と申は神祇官より十二月晦日御贖物奉るなり節折命婦と云ふ者有り荒妙和妙とて二度奉るにや神代より始りたり云々と有る如くなれば眞に石屋の故事に因て起れる神事にて右の儀式及祭式の御麻は其時の以レ唾爲二白和幣一以レ涙爲二青和幣一と有る其物の代に用るゝ事上に云るが如し（其料物は安藝木綿二斤凡木綿一斤麻二斤と有る其を云るなり）荒世和世は祭式に荒服和服と有て天皇の荒衣和衣の御服にて御衣二領袴二腰被二條と有る此を云也何を以て此を荒世和世と云ふぞと云ふに江次第に六月晦日十二月（進レ之）縫殿寮奉二荒世和世御服一事神祇官奉二荒世和世御贖一事謂二之節折御裝束一と有て節折とは宮主秘事口傳抄に謂二之節折一者以レ篠量二五體之四肢一と云る其作法に事具之後出御次宮主參二上御殿階下一也云々次友（カ）人部（居二住西京一云々）進二篠等一先一筋獻レ之次宮主取ヲ傳女官一次女官取二傳命婦一次命婦進二主上一主上量二御身長一返二給命婦一次命婦授二女官次女官一傳二宮主一次宮主折二懸之一也官人參入之時者中臣可二折懸一也（但宮主折懸例繁多也）次又獻二二筋一自二兩肩一至二御足一合二量之一次又二筋獻レ之如二先度一量二左右御手一自二胸中一至二指末一返二給之一宮主折二懸之一中臣令二參入一者中臣可二折懸一也（但宮主折懸例繁多也）次又二筋獻レ之量レ自二左右腰一至二御足一次量二左右御膝一至二御足一宮主折二懸之一如二先度一也（已上五度量二御體一）次獻鏡劒鈴等傳進（襄レ（ツヽミ）紙一度進レ之）次返給之後著二庭座一讀二祝詞一云々と有て此は節折の事耳の如くにて西宮記江次第共に然なるが儀式祭式共に荒世和世の事を記して即執量二御體一と有て此には節折を云はず彼には荒世和世を記さゞるを以て其一なる事を察らむ可きなり（上に引る年中行事秘抄に節折の事に荒妙和妙を奉由云るに心を着く可し）後釋に凡て祓の狀令の時すら既に文部が漢文の詞を讀む事卜部の解除爲る事など変りつれば況て其後世々に轉變りぬる事推察らる若て中昔より以來は大凡祓は陰陽師の職の如なりて江次第などに六月十二月晦日にも禁中の儀陰陽家の種々の態有り」と云れたる中に文部が漢文の詞を讀む事こそ彼が私事の公事に変りつるには有けれ其餘は神世の遺風にて予が見出たる說の如きを思ひ漏されたる者なり然れば荒世和世は伊邪那岐命の大御

身に著させ給ふ御服を脱棄させ給ひて祓爲給ふに始り須佐之男命の千座置戸の祓具を出し給ふに成て祓法立定りける神事にて上古の天皇の祓事には麁妙和妙の大御衣を棄給ひし態の傳はれる者にて節折は大御身の度を取て其禍を彼に移して大川道に流却しめ給ひて大御身滌を行はせ給ふ事の神隨にして然すがに絶ず傳はれる者と甚も尊くなむ思ゆる彼口傳抄に六人部（居住西京云々）進篠等と有るなどは甚々上代よりの事と通えたり其は六人部の進れる篠は節折の料にて天皇の御長を量奉る料にて六人部も其事に因れる姓なる事上に云るが如し但臨時祭式に凡年中祭祓料所須篠千三百六十四隻者大和國以神稅交易十月以前進之と有るは大祓に用らるゝ所とは異なり混ふ可からず彼萬葉十四に在天左佐羅能小野と詠るは篠在小野と云ふ事なる可きに偕思合す可き者なりかし（此事は上なる大祓の條にも用有て云るを考合す可きなり然れば天津神代よりの事なりける者なや）又其壺に收る所は口傳抄に鐵人形黄楊人形と有り此は儀式に鐵偶人木偶人と云ひ祭式に鐵人像なと云る者なるが一條兼良公御說に解除謂解禍難除汚穢之義也後世祓具有人像解繩散米等物事人像移其禍於彼無解繩其禍如糾繩故解去也散米已解而又散失也と有て此譬の如くなるが其何と無き所に祓の妙旨有る事にて人智の能知る際に非るなり内宮外宮の儀式帳及延喜大神宮式等山口祭木本祭より始て其餘の諸祭に鐵人形を用らるゝ事は右の移其禍於彼と云ふ趣意と通えたり然れは是はた甚も久しき古昔よりの事なりけり（谷川士淸が通證に引る神宮古記に贖物祓棄命以爪髮贖天罪之緣而白和幣是也次人形八枚解繩二條金散供獻錢切八座置四座置二束と有り東西文部が獻橫刀時咒に捧銀人請除禍災と有て四時祭式大祓條に金銀裝橫刀二口金銀塗人像各二枚已上東西文部所預と有るは赤縣の故實依たるらむなからに我が古義にも異非す）若て此等の贖物の皆は禁中の儀式畢りて彼百官の大祓爲る祓所に持向ひ共に流し却ふ事なり儀式祭式共に令向祓所とも解除河上とも有るは大祓に參集ふ事にて時尅の違有るに似たれども可然き程に其時尅の進退を爲るに非ずは右の如くは記さるまじき者なるをや此即此詞に四國卜部等大川道爾持退出氐祓却止宣と有る趣にて神祇令に卜部爲解除と云る所なる者なり上に云る如く御贖は上代の祓の遺風にて身に著る物を棄るなる可く大祓は太古の禊の遺風にて身に犯す穢を洗濯くなる可くして此は中古よりこそ其事の二に別れたなれ眞にはその祓禊を共に行はれし者なるが右の

二式の如く成れる者なり然ればは古書に大祓と耳多く記して御贖の事を載せざるは彼此相離るまじき事なるが故なり然は有れども其行事の異少か無に非ず所以に神祇令に中臣讀ニ祓詞一卜部爲ニ解除一と記して大祓と御贖の別を立たる者なりけり（上に云る六月十二月晦日條考合す可き者なり）○又名越祓とも云なり公事根源抄（大祓條）に大祓と云ふは百官悉く朱雀門に集りて祓を爲侍るなり（中略）又今日は家々に輪を越る事有り「六月の名越祓爲る人は千年の命延ぶと云なり」此歌を唱ふるとぞ申傳へ侍る云々と見えたり此は古今六帖なる作者不知の歌なり此は公事には非る物から家々に物爲る事は甚古き事と思ゆ（此歌の結句を大神宮年中行事には延ぶとこそ聞けと記せり但此歌は萬葉十一に玉久世淸河原身祓爲齋命妹爲と有るを本に取て詠るなり）同頭書に名越とは園大暦延文二年卷云名越と云ふは和むと云ふ心歟鬼を拂ひ和むるなりと云るは然も有べし偖其輪を越る事は謂ゆる茅輪を越る事なり鎌倉殿年中行事下卷（六月晦日條）に名越之御祓同茅輪陰陽頭調ニ進之一輪は御一家中被越なり潤有る年は潤月に輪を御越有之なり」と見ゆ當時を俗を爲すを以見れば尙古くより世には弘れりしなり後釋に私祓は陰陽師に爲さする事と成れりき又近世の神道者と云ふ輩の事々しく祓の作法と云て種々行ふ類ひも皆近世の杜撰事にして云ふにも足ずと云れたる是の其中の一種の如き者から神道者の謂ゆる祓の作法とは異りて此は御贖大祓の如き表立たる天津宮事にこそは非ざりけれ下に引る備後風土記に依るに須佐之男大神の事始め定めさせ給へるにて皇御孫命御天降の前より國神の行ふ所の解除は此なりつらむ陰陽師の職に傳はれるに就ても却て其證と成る可き說有り其は右の陰陽寮に召るゝ賀茂氏は事代主神の子孫たれば必其家に傳る所の祓の事を行へるが何時と無く其寮の職掌とも成れるにて此例餘にも多き事なり（如此と其末は一にして其源の二流有る事有り御卜の如きも鹿卜は天津宮事なり龜卜は國神の傳ふる所なるなど考合す可し）備後風土記に疫隅國社昔北海坐志武塔天神南海神之女子（乎）與波比（爾）出坐（爾）日暮ニ彼所ニ蘇民將來二人在（伎）兄蘇民將來貧窮弟將來富饒屋倉一百在（伎）爰塔神借ニ宿處一惜而不レ借兄蘇民將來借奉即以ニ粟柄一爲レ坐以ニ粟飯等一饗奉饗々畢出坐後（爾）經年率ニ八柱子一還來而詔久我將奉之爲ニ報答一曰汝子孫其家（爾）在哉止問給蘇民將來答申久已女子與ニ斯婦一侍止申即詔久以ニ茅輪一令レ着ニ於腰上一隨詔令レ着即夜（爾）蘇民與ニ女人二人一乎置天皆悉許呂志

保呂保志天伎即詔久吾者速須佐能雄能神也後世爾疫氣在者汝蘇民將來之子孫止云天以茅輪着腰上詔隨詔命着即在家人者將免止詔支と有る此時に創れる事なるが此趣にては輪を越すには非ずして腰に輪を着るぞ本旨なりける偖此は神名式なる備後國深津郡須佐能袁能神社の故事にして北海は出雲國を云ひ武塔天神の塔は齊宮寮式に塔稱阿良良岐と有れば武荒然と申す亦名なりけり（但此は釋紀七及古事記裏書に引く所を以て按して引り向日本紀纂疏にも備後風土記武塔神乃進雄神之別號其祠今見在備後州曰疫隅社と見えて神代口訣にも備後國風土記北海武塔神通南海龍女矣在深津部須佐能袁能神社也有宿借蘇民將來之事と見えたり）但此は國祓にこそ有けれ主たる公事には天津宮事をしも行はせ給ふ可き御事なるに神事を簡略に物爲給ふが故に其本末を取違へたる者なりけり後釋に云く小右記に天元五年六月廿九日今日大祓所公卿一人不參仍以右少辨惟成爲上代被行之內侍等稱障不向祓所仍以女史爲內侍代と有る天元は圓融天皇の御世なり是を見ればば當時既に大祓の甚く衰たりし程知られて甚悲し若て參らぬを咎め給ひし事も聞えぬは凡て神事の等閑に成れりし故なり云々又江次第に近例參議一人行事或納言參著希有例也と有を以て見れば其頃に至ては大臣なとの參會ふ事は永ぶるに絶て無りしと見えたり」と有る如く（康治元年外記日記に六月卅日辛卯大祓也上卿參議不參左少辨源師能信少外記清原景兼右少史中原宗遠等行之と有り淺ましき迄大祓の事は廢れたる者なり）大祓は廢れて名のみを存して有が如く無が如く成れりしなり薩戒記に應永卅年六月廿九日丁酉六月祓如常大祓參向人々可尋注同卅三年十二月卅日己丑大祓被付所司歟可尋と見え康富記に文安四年六月大祓被行事云々と有りて其頃迄も形計りは遺れりし者と見ゆ節折の事は形計り傳はれりし者なり宮主秘事口傳抄に今度以外被興行畢但縫殿寮役荒妙御服和妙御服等无之云々遺恨事也と見え又近代者只竹王最少分紙沓許也宮主幷命婦二人如形執行之許也宮主者申詔戸許也諸司等不及參入也御沓竹玉者所被下宮主也命婦每度有抑留之氣と有て其儀は徒に傳りて其式は空しく絶て行はれざるが故に右の如く茅輪を越る國祓のみ家々の私事に遺れりし者なりけり（口傳抄奥書に康安二年壬寅三月日清書之正四位上行神祇權大輔卜部宿禰兼豐と有れば南北朝の頃の書なる其頃已に斯在しかば況て其後は後釋に近世に神道者と云ふ輩の事々しく祓の作法と云て種々行ふ類も皆近世の杜撰にて云ふも足ず」と云れたる如くに成れりし者なり參○）此大祓詞はしも上に說る如く高千穗宮にて出來れるを橿原宮にて改させ給へる者なり續紀に此詞を指て神語と云

るも由有て思ゆ偖御天降の事を云るは高千穗宮の事なるに宮敷坐る地を大倭日高見之國平安國止定奉氐と有るは橿原宮にて改られたる者なり此例にて上代には臣連國造伴造百八十部など有つらむを後に親王諸王諸臣云々と易へ天津罪は神代に已に在し事なれは其は改む可くも非ねど國津罪の類は當代に在る所の尤けき物をも收らる可ければ御世々々に加へも省きもぞ爲つらむか今の如くに成れるなり又西國卜部等なども卜部を京は本よりなり伊豆壹岐對馬等の三國に預置るゝ世に成ての文なり其始は高千穗宮の文なるも又御世々々に其行るゝ當今の事實に依て名目を易へ改られけむ事云も更にて實に然有べき事なり是は大祓爲させ給ふ由を王臣百官に宣給ふ詞なれば其時々の取捨無くては人耳に入べからざれば殊に其心遣ひ爲られたる可し此即一度りに心得れば考の自序に云れたる如く大津淨御原の御世の詞ことも見ゆめる所以なるぞかし（後釋に此大祓詞今世に此後と有る私の本どもは後人の狹意にて改つる所は僻事多く語の調はぬ所にも有り訓の惡きは更なり柳大祓は公事にて此祝詞も公樣なれば私の祓に叶はぬ事有るに依て世間に或は言を省きしも易へもして續むなるも一度りは理有るに似たれども若公と私と異なるを以て然改むには猶も改む可き事は多かる可く又總ても公の祝詞を私の祓に用ひむは如何なれば皆から作り易すは有べからず然るを已に公のを用ふる上は縱私のには叶はぬ事の交れりとても其任に讀まむに何てふ事か有む中々の狹意爲むよりは本の任に讀たらむこそ勝りたらめ然ばかり古く美く貴き公の祝詞を私に容易く改めむ事は少かにても甚畏こき事なりかしと云れたるは上件の事とは別なり）後釋に右自序の說を挑きて抑諸の古き祝詞の類其始を熟思慮るに先甚上ッ代には其と綴り置て定めたるは有べからず唯其時に臨みて其事の趣を以て其を申す人の如何も宜しき樣にこそ申つらめ然るを年々定れる事などは其年々の趣同じければ申す詞も前々の例に依て大體何時も同じ樣なる可ければ自然定まれるやうに成來にけむ（備其を書記し置て年々用ふる事は何時の程より始りけむ其も詳には知難き事なり）然れば諸の祭の中の古き祝詞は大凡は甚上代より申し習へる任にて甚古きを其綴り樣云ひ樣など少か轉變り來ぬる事も自然有りと見え又後に加はりもし省かりもし易りも爲たる事なども少しづゝは交れるも有と見えたり（斯在て全く今式に載れる如く定まりたるは大寶令の頃ならむか將其より近前つ方天智天武の御世の程などより定まれるも有りや爲けむ其はた慥には云ひ難し云々）然ればば此大祓詞も大凡甚上ッ代の詞どもにて中には皇御孫命の天降坐し御代の程より傳はりけむ任と思しき所も多く見え又實に大津淸御原藤原などの頃にや加はりけむと見ゆる詞も交れるなり然れど其後の詞の希に交れるを捉へて總てを其御代に作れりと爲むは甚當らぬ定めにぞ有ける」と云れたるは眞に然る言

にて鈴屋大人ならぬ人の得も云出まじき確論(サダメゴト)なり信ふ可し然れば予が高千穗宮にて出來るなりと云る說の如きも已く翁の神眼を以て見定め置れたる者なりけり然るを予をして云はしめ給ふ者とぞ思ゆる又此詞を俗に中臣祓と云ふ事も古き事なり然れども祓は事(ワザ)を云なれば正しくは中臣祓詞と云ふ可し古語拾遺神武天皇段に令天種子命天兒屋命之孫解除天罪國罪事所謂天罪者云々國罪者國中人民所レ犯之罪其事具在中臣禊詞と見えたるは正しき唱にて言(イフコト)は中臣は祓を掌る職なり其人の宣る所なるが故に中臣禊詞とは云ふなりけり又同書天石窟段に此天罪者中臣祓詞也とも見ゆ後釋に云く此詞は西宮記在經記などにも中臣禊詞と見え朝野群載には中臣祭文と記し大神宮年中行事には中臣祓祭文と有り祭文とは中昔に如此樣に讀唱ふる詞の類をば凡て然云しと思しくて袋冊子に大殿祭祝詞をも宮の女の祭文と云り彼祭を宮之賣祭と云ふ故なり拾芥抄に宮咩祭文とて載れるは後世の甚拙き者なり偖此詞を唯中臣祓と耳云るは光明峯寺殿の玉蘂に國通讀中中臣祓と有り其頃より已く云し事なりけり抑如此樣省き云も萬に例多かる事なれども是は理違ひて世人の甚く誤る事なり世人の中臣祓と耳云ふは此詞を即祓と心得たる僻事なり○重胤云く類聚神祇本源に問何故以解除詞稱中臣祓哉云々答以解除詞稱中臣祓者中臣氏人行幸毎度奉獻御麻之間有中臣祓之號云々と有る說こそは依難けれ以解除詞稱中臣祓と云る事古く中臣禊詞と云るに契合て義理甚能く聞ゆ今昔物語にも麻亭の注連を木本に結廻して木本に米散し幣奉て中臣祓を令讀て杣立の者共を召て繩墨を懸て令伐るに一人も死る者無し」とも有り　凡て近世に神道者と云ふ者の所作を見るに法師の佛を齋く態を羨み習ひて行ふ事耳多し其中に此大祓の祝詞を讀む事も彼佛の經陀羅尼など云ふ物を讀むに傚ひて或は神の御前に向ひて此詞を讀み或は數百遍も讀み或は五千度一萬度の祓など云ふ事有て是を讀むを祓修行と云ひ又此詞を常に中臣祓と云ひ習へるから祓と云ふ物を即此詞の事と心得又其に准ひて外にも某の祓某の祓とて讀む詞の世に此彼有るは皆祓と云ふ事の狀をも辨へざる後世人の造れる者にて唯例の漢めきたる事を耳云て古の意詞に非ず祓には殊に由無き事耳也偖又右に云る如く啻に此詞を祓と心得是を讀むを祓修行と爲るは甚しき僻事也此詞は祓の事を行ひて其由を神に申す詞なるに○重胤云く此詞は神に申す詞に非ず百官男女を集へて大祓を爲さす由を宣る詞なり此は別に天津祝詞有て其即神に申す詞なる由を考漏されし者なり然れども朝野群載なる中臣祭文の終に云々止祓清給事乎戸乃八百萬乃御神達八佐乎鹿乃八御耳乎振立天聞食止申と見えたればば神にも申せりしなり宮主秘事口傳抄にも節折の庭にて讀祝詞と有て此詞の高天原爾神留坐以下の詞を載たれば此も中臣の宣る宣命と神に申す祝詞とを一に合せたる事已に第一詞以下の例なる如くなれば此詞を神に申す事は其所謂有るに似たり但天津祝詞の此外に在りて添へる事勿論の事なり是等の事を思はれたる說なる可し參其祓の事をば爲ずして此詞を耳讀むは祓を爲ずして爲る由を申すにて神を欺奉るに似たれば此詞如何に美たくとも唯讀たらむ計に

ては罪穢の清まらむ事は思束無し此詞は祓には非ず祓の祝詞なり又此を讀むも祓には非ず祓は穢の事を爲て其時に此詞は讀む者なりと心得べし（然は有れども上件の如く心得誤り來れるも久しき事にて世に遍く讀む習と成れる事なれば今此な讀むを惡しとは咎む可きに非ず祓と祓詞との差異を心得辨へ居て讀む事は世の習俗に因准ひたらむも宜しくこそ）と云れたり（以上採要）○祓は上古の重き大御政なりし事の由を尚說徵す可し高天原に事始めて皇御孫命の天下所知食す大御政を天津宮事と云ふ政は事を神明に質（タヾ）して天下を平均く爲るを云ふ祓は其中に殊に重み爲る所なり然るは古の刑は祓を負するを以て常典と爲る事にて大凡人の家も身も心も穢るゝ時は皇祖天神より受賜はる所の神氣涸れて其身の靈威を失ふ故に知す知すも過を犯して罪咎を延（ヒキ）出（ケ）ふ事なるが故事の本に就て解除を責せ給へる事は尤に諸なる天津神量になむ有ける神代紀に天兒屋命主二神事之宗源者一也と有るも太占の卜事のみに預る語ならず又須佐之男命の罪犯の條に使下天兒屋命掌二其解除之太諄辭一而宣上之焉と有るにも亘る事なりけり然るは天兒屋命は其然る宗源を知れる神なるが故に其禍災を解く本緣（コトノモト）を質正して其解除の事を行ひ給ふ是を以て其徵信著明き事を得給へる如く總て世間の事は悉く顯明事と幽冥事との二に過ざるが其極みを云ふ時は顯明事すなはち幽冥事にて人事やがて神事なれば其本一なるが其事の著見て人にも著かる所を顯露と稱ひ隱沒（カクレ）て神ならぬ身の透視（ミトホ）す所ならぬを幽冥と云て皇御孫命の御方と大國主神の御方と相持分て所知食す御事なるが大凡人の所行たるや善に進む事は求ても顯明に爲さ將く欲する性情なる者なれば云ふ迄も無く人世に著明きを惡しき事の筋は其反にて覆ひ隱す事なるが故に人眼の及ばぬ所も多き物なるが其等は神幽の御罸めも有る事なれども然ばれ人世に在る事を天神御子の所知看ざる時は皇祖天神の天下を事依し奉給ひし顯露事を知行す所詮無く且其大御穢も蔑如（ナキ）が若くして大御政の趣立ずして上下安泰からざる道理なるが故に此事を行はせさせ給ひて其人事の上の隱沒たる所迄も祓禊が令め給ふ者なり（尚幽冥事の委しき由は卷二第五詞又下なる出雲國造神壽詞の下に云り）其事の神代より以降古書に傳る所の樣を少か云べし先此祓禊はしも伊邪那岐命の御禊に始まり須佐之男命の解除にしも其則定れる事上に徵せる如くなるが其より人の罪咎の次第に依て祓柱を負する輕重有て其式各別なる事と見え

たり但吉解除凶解除と有る中に恒例の六月十二月一度の大祓又神事を行るゝ前に在る祓なとは罪犯無き人にも祓柱を出さしむる事なれば是は吉解除の方主と爲り其に就て凶解除をも合せ行はるゝ事なるが臨時大祓及其罪犯有る人に科するは其事有て已に行はるゝ所なれば凶解除を主として其に預からぬ吉解除をも併せ行はるゝ所と見えたり（下に引く履仲天皇御紀に車持君に罪有て負ニ惡解除善解除ニ而出ニ於長渚崎ニ令ニ祓禊ニと有るを思ふ可し）神代紀（天石窟段第三一書）に素盞嗚尊結ニ束青草ニ以爲ニ笠蓑ニ而乞ニ宿於衆神ニ衆神曰汝是躬行濁惡而見ニ逐謫ニ者如何乞ニ宿於我ニ遂同距レ之是以風雨雖レ甚不得ニ休留ニ而辛苦降矣自爾以來世諱下著ニ笠蓑ニ以入中佗人屋內上又諱下負ニ束草ニ以入中他人家內上有レ犯レ此者必債ニ解除ニ此太古之遺法也と有るは天孫降臨の以前より國神の許にて然る定の有ける事と通えたり（爲家の大納言の歌に雨衣笠着て内へ入る事は神逐ひより諱むと云なり」と詠り出雲風土記仁多郡の下に三津鄕郡家西南廿五里大神大穴持命御子阿遲須枳高日子命御須髮八握于生晝夜哭坐之辭不レ通爾時御祖命云々大神夢願給告ニ御子之哭由ニ夢爾願坐則夜夢見ニ坐御子之辭通ニ則寤問給爾時御津申爾時何所然云問給即御祖前立去於坐而石川度坂上至留申ニ是所ニ爾時其津水沼於而御身沐浴坐故國造神吉事奏參ニ向朝廷ニ時其水沼出而用初也云々と有り此等を合せて天孫降臨より以前に國神の許にても禊祓を主と行はれけむ事を知る可く又其禊祓に依て語問せざりし御子の辭通ひ初たりし事をも思ふ可き者そ）神武天皇御紀に天皇以ニ前年秋九月ニ潛取ニ天香山之埴土ニ以造ニ八十平瓮ニ躬自齋戒祭ニ諸神ニ遂得レ安ニ定區宇ニと有る齋戒は常の物忌には有べからず必御身滌の事有しなる可し崇神天皇允恭天皇の御紀に沐浴齋戒と有るは御禊の事なるに合せて思ふに右の九月の下に天皇云々陟ニ于丹生川上ニ用祭ニ天神地祇ニ云々と有る其丹生川にて御禊爲給ひ其川上にて天神地祇を祭らせ給ふ事と思えたり偖此御禊は五瀨命の流矢に中りて崩坐し故にぞ行はせ給ひたるらむ又古語拾遺に令下天富命率ニ供作諸氏ニ造中作大幣上訖令天種子命解ニ除天罪國罪事ニと有り此二所は天兒屋命天太玉命の子孫にして重き列の臣等なるに其を主たる職と定め給ふ事は祓を以て天下を治させ給ふ道なりし事著明し（同書同段に當ニ此之時ニ帝之與レ神其際未レ遠同レ殿共レ床以レ此爲レ常故神物官物亦未ニ分別ニと有るに心を着けて攷ふ可し）崇神天皇御紀に七年春二月丁丑朔辛卯詔曰云々今當ニ朕世ニ數有ニ災害ニ恐朝無ニ善政ニ取ニ咎於神祇ニ耶云々天皇乃沐浴齋戒潔ニ淨殿內ニ而祈之と有る沐浴は大御身滌を爲させ給ふ事を漢文に書されたる者なり出雲風土記に御身沐浴坐と有るは禊祓の事なるに思合す可し然れば上に取ニ咎於神祇ニ耶と有るも殊に由有り同十二年春三月丁丑朔丁亥詔云々然今解レ罪改レ過敦禮ニ神祇ニと有るを合

すれば彌々決く心得らるゝ事なり（此より前五年の下に國内多疾疫民有死亡者且大半矣と見えたるに十二年九月の下には是以天神地祇和享而風雨順時百穀用成家給人足天下太平矣と有る前後の運を見合せて其祓の功驗有る事をも知べし此時の事をば唯神祇を祭祀給ふが故と耳思ふは麁説なり）倭姫命世記に垂仁天皇御代に皇大神宮御鎭坐ましませし後の所に亦祓法定給敷蒔畔放溝埋樋放串刺生剝逆剝屎戸許々太久之罪乎天都罪止告別弖生秦斷死秦斷母犯罪子犯罪巳子犯罪畜犯罪白（本ノマヽ）古久彌川入火燒罪乎國都罪止告分弖天津金木乎本打切末打斷弖千座乃罪座仁置足波志天津菅麻乎本苅斷末苅切弖八針爾取刺弖種々乃贖物等乎案上案下仁如海山仁久置足波志天津祝詞太祝詞事乎宣禮如此久宣良波天津神國津神波朝廷乎始弖天下四方國仁波罪止云罪波不在止清淨爾所聞食武以掌其解除之太諄辭天天罪國罪之事乎大祓除焉と有るを皇大神宮儀式帳にも此と同事を亦祓乃法定給支天都罪止所始志罪波云々國都罪止所始志罪波云々國都罪止定給弖犯過人爾種々乃令祓物出天祓清止定給支と見えたり此國都罪は其頃の世に在し事を探索て罪條に定められたるなり（又世記二十二年の下に乙若子命以麻神蘜蘘等進倭姫命而令晦除及陪從之人留弖劔兵共入座飯野高宮云々自爾以來天皇之太子齋宮知及驛使國司人等到此等川爲晦除止鈴聲之此其儀也此は謂ゆる下樋小川の解除なる者なり）神功皇后御紀の首に九年春二月足仲彦天皇崩於筑紫橿日宮時皇后傷天皇不從神教而早崩以爲知所祟之神欲求財寶國是以命群臣及百寮以解罪改過更造齋宮於小山田邑と有るは仲哀天皇神教を信坐ぬに依り崩御し故に解除をば物爲給へるなり此事を古事記には爾驚懼而坐殯宮更取國之大奴佐而種々求生剝逆剝阿離溝埋屎戸上通下通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚之罪類爲國之大祓云々請神之命と見えたり神の命を信坐ぬは天皇の御罪なるに國之大奴佐を取て國之大祓を行はせ給ふは如何なる樣なれど天下に在ゆる然る穢に塗れさせ給へる故に天皇の御過は在けるなれば其神事の宗源を知てぞ此事は有つらむ（御紀に皇后選吉日入齋宮親爲神主云々喚中臣烏賊津使主爲審神者云々と有るを考ふ可し）又古事記に故建内宿禰命率其太子爲將禊而經歷淡海及若狹國之時於高志前之角鹿造假宮而坐云々其且幸行濱之時云々と有るは香坂王忍熊王を言向給へるが故に其穢を禊がせるなり且幸行濱と有を以て知る可し（記には故ノ字を其事より受たるを御紀には皇后攝政爲給ふ元年に右の二王を討平の事有りて此角鹿に出坐る事を十三年春二月の事と爲り其文に云く命武内宿禰從太子令拜角鹿笥飯大神云々と有て禊の事の見えざるは年數を數多に過しゝ故に然は有まじき物と思ひて撰者の心と省れたるにや今思に早も禊を爲させ給ふ可きに應神天皇の未幼稚く坐せば其生長（ヒトナリ）給ふを待れけるが右の續きの文に太子至自角鹿是日皇太后宴太子於大殿と有を以見れば是迄打延べたりしも太子の新殿に移御ら

せ給ふに成ては必此時を過すべからざるが故に禊には角鹿に幸行るなり然れば古事記の方正しき樣なり　履仲天皇御紀に五年春三月戊午朔於二筑紫一所居三神見二于宮中一言何奪二我民一矣吾今慚レ汝於是禱而不レ祠秋九月乙酉朔壬寅天皇狩二于淡路島一云々癸卯有二如レ風之聲一呼二於太虛一曰劒刀太子王也　亦呼之曰鳥往來羽田之汝妹者羽狹丹葬立往亦曰狹名來田蔣津之命羽狹丹葬立往也俄而使者忽來曰皇妃薨天皇大驚之便命駕而歸焉丙午自二淡路一至冬十月甲寅朔甲子葬皇妃既而天皇悔之不レ治二神祟一而亡皇妃更求二其咎一或者曰車持君行二於筑紫國一而悉校二車持部一兼取二充レ神者一必是罪矣天皇則喚二車持君一以推二問之一云々則負二惡解除善解除一而出二於長渚崎一令二祓禊一既而詔之曰自今以後不レ得レ掌二筑紫之車持部一乃悉收以更分之奉二於三神一と有は其罪を推問(カツヘトヒ)て解除を債り給へる者なり此を以て朝廷の刑と神事の祓と別ならぬ事を心留む可し　彼延暦廿年五月の官符の如く神事の闕怠に依て祓を科するとは同事ながら異なる所有る者なり記傳九卷に御紀の斯文を引て此を以見れば犯有る者の解除も水邊に出て禊祓けり是罪犯も穢も同じければなりと云れき續紀に道祖王の叛反の發覺たる時の宣命に鹽汁を灌ぐ由見えたり此罪犯有る者に水禊せしむる古風の遺れる者なり　允恭天皇御紀に四年秋九月辛巳朔己丑詔曰上古之治二人民一得レ所二姓名一勿錯今朕踐祚於茲四年矣上下相爭百姓不レ安或誤失二己姓一或故認二高氏一其不レ至二於治一者蓋由レ是也朕雖二不賢一豈非レ正二其錯一乎云々戊申詔曰羣卿百寮及諸國造等皆各言或帝皇之裔或異之天降然三才顯分以來多歷二萬歲一是以一氏蕃息更爲二萬姓一難レ知二其實一故諸氏姓人等沐浴齋戒各爲二盟神探湯一則於二味橿丘之辭禍戶碑一坐二探湯瓮一而引二諸人一令赴曰得實則全僞者必害於是諸人各著二木綿手繦一而赴レ釜探レ湯則得レ實者自全不レ得レ實者皆傷是以故詐者愕然之豫退無レ進自レ是之後氏姓自定更無二詐人一と見えたる是は盟神探湯の事耳なるか如くなれども其より前に沐浴齋戒爲るは禊祓なりしなり然れば此時迄僞りたらむ者も禊祓に因し實を徵せりしにて租神探湯に及べるは其深く覆ひ隱せる者に科せ給へる事と見えたり　古事記には於是天皇愁二天下氏々名々人等之氏姓忤過一而於二味白檮之言八十禍津日前一居玖訶瓮而定二賜天下八十友緒氏姓一也と耳記されたるを御紀に沐浴齋戒と有るは此上無き賜物なり　沐浴齋戒の禊祓なる由は上にも已に云りき　雄略天皇御紀に十三年春三月狹穗彦玄孫齒田根命竊姧二采女山邊小島子一天皇聞以二齒田根命一收(サヅケ)二付於物部目大連一而使二責讓齒田根命一以二馬八匹大刀八口一祓二除罪過一云々と有るも　其罪を責るに解除を以て物爲させ給ふ上古の遺風尙此時に存して行はれつる者なり　記傳九に此文を引て云く馬大刀を祓に用ふる事は大祓詞に高天原備耳振立聞物止馬牽立氏

と見ゆ云々此に准へて思ふに大刀は罪咎を斷絶意に用るにや此外用に種々の物も其名又は其形其物の用などに就て意を取る事多かる可し其より後の御紀及古事記に祓禊の事の見えざるは漸外國の習俗の移ふ始の程なりしかば祓は唯神事に就て朝政に交用らるゝ事は無くして今世の状には成れるなり繼體天皇御紀に神祇伯の職有るを見れば神事と公事と別に行るゝ事と成れりし者にて當時の事に取ては神祇伯を置るゝ事は神事の却て疎略になれるが故なり　顯宗天皇御紀三年の下に三月上巳幸二後苑一曲水宴と有る曲水宴は赤縣の禊にて三月上巳臨レ水祓二除不祥一と云ふに依れる也又推古天皇御紀なる十七條の憲法を見れば神祇に預る事は少も無くして其第二條に篤敬三三寶一云々其不レ歸二三寶一何以直レ枉と有るを以見れば枉るを直すに我が禊祓は用られずして彼に謂ゆる懺悔を行はれたる事著明し如此く大旨似たる事ながら外國の禊祓を行ひ用らるゝだけ我が典故に遠放りしなり　孝德天皇御紀二年の下に祓除六條有り其文に云く有二奴婢一欺二主貧困一自託二勢家一求活勢家仍强留買不レ送二本主一者多復有二妻妾一爲レ夫被レ放之日經年之後適レ佗恒理而此前夫三四年後貪二求後夫財物一爲二已利一者甚多復有二恃レ勢之男一浪（ミダリニコトムスヒス）要二他女一而未レ納際女自適レ人其浪要者嗔求二兩家財物一爲二已利一者甚衆復有二亡レ夫婦一若經二十年及二十年一適レ人爲レ歸并未レ嫁之女始適レ人時於是妬二斯夫婦一使二祓除一多　○通證に黑川氏曰去年娶二新婦一者至二正月一朋友聚二其家一持二水桶一大灌二其婿一是祓除之謂也と有り予幼き時本生の淡路國に在し程人の婿人爲るには若き者ども聚りて水を灌ぎて其を祝事と爲るを見たりき他國には在や無しや知ず　復有二爲レ妻被レ嫌離者一特二由慙愧一所レ惱强爲二事瑕之婢一事瑕　此云二居騰作柯一　復有レ慶嫌二己婦奸一他好向二官司一請レ決假使得二明三證一而倶顯陳然後可レ諮詎生二浪訴一復有レ被レ役二邊畔一民事了還レ鄉之日忽然得レ疾臥二死路頭一於是路頭之家乃謂レ之曰何故使三人死二於餘路一困留死者友伴一强使二祓除一由是而兄雖レ臥二死於路一其弟不レ收者多　○事瑕之婢は妻の夫の言に逆らへるを以婢と爲せるにて通證に瑕疵也詩箋瑕猶レ過也言レ醫レ身爲レ婢以贖其罪也と有るが如し萬葉集に兩妻例云有レ妻更娶者徒一年女家杖一百離レ之と有る此も祓除の意なり　復有下百姓溺二死於河一逢者上乃謂レ之曰何故於レ我使レ遇二溺人一困留溺者友伴一强使二祓除一由レ是兄雖レ溺二死於河一其弟不救者衆　○此は世記及儀式帳に謂ゆる國都罪の中なる川入と云ふ者なり　復有二被役之民一路頭炊飯於是路頭之家乃謂之曰何故任レ情炊二飯余路一强令二祓除一　○此は右の二書に謂ゆる火燒と云ふ例に非ぬとも其火を穢すを以ての故なり　復有下百姓一就レ他借レ甑炊レ飯其甑觸レ物而覆於是甑主乃使二祓除一如レ是等類愚俗所レ染今悉除斷勿レ使二復爲一　○但此なる如是等類愚俗所レ染云々には論有り下に云む記傳九に此章を引て云く是は其祓物を取て己が利に爲し事と聞ゆ其は差世降て本意を失へる民間の習俗にぞ有けむ　復有二百姓一臨レ向レ京日恐二所レ乘馬疲瘦不一レ行以二布二尋麻二束一送二參河尾張兩國之人一雇令二養飼一乃入二于京一於レ還レ鄉日送二鍬一口一而參河人等不レ能二養飼一翻令二瘦死一若レ是細馬即生二貪愛一工作二謾語一言レ被二偸失一若

レ是牝馬孕ニ己家ニ使ニ祓除ニ遂奪ニ其馬ニ飛聞若レ是故今立レ制凡養ニ馬於路傍國ニ者將ニ被レ雇人ニ審告ニ村首ニ（首長）也方授ニ訓物ニ 其還レ郷日不レ須ニ更報ニ 如レ致ニ疲損ニ不レ合レ得レ物縱違ニ斯詔ニ將レ科ニ重罪ニ （〇馬の事に依て祓除する事此なるは逆事ながら上古に然る風の有し者なる可し但此は馬を預る者の惡事なり） と有り大凡此等の當其對ましき者の爲す事なれば惡事には違ひ無き者から其始を思ふに上古より以來解除を止事無き大御政の中に執行はせ給へるから罪條は祓に屬くは祓に刑に屬くは刑に各分行はせ給へりしを其頭より祓の事は一向に神事に預る事ならぬには行はれずして刑のみを專と爲る事と成れりしか然すがに天下百姓の上には事に當て祓除を爲す上件の如き定まりも有しなり然れども公廷には絕竟て民間の者の行ふ所なれば其中には種々に善からぬ事も交れりし故にこそ其事は止め給へれ過有る時は解除を負す太古の法を以て云ふ時は朝廷に天津宮事を違へずして行はせ給へらむには其正す可き法も有る可きに 如是等類愚俗所レ染今悉除斷勿レ使ニ復爲ニとは古に闇き御咎め樣なり（但此は上件百の所作を是として其御世を非るには非ず祓を行ふ事を是として行はれざるを非と爲るなり凡て此御世に上古の風儀を漢樣に變易給ふ事多かりければ如此き御過多きぞかし） 天武天皇御紀に至りて五年八月辛亥詔曰四方爲ニ大解除ニ用物則國別國造輸ニ祓柱ニ云々と有れば此時に再興れりし者なり其次に壬子詔曰死刑沒官三流並除ニ一等ニ徒罪以下未發覺已發覺赦之云々と有て祓と刑と並へたるは上古の政蹟に合へる物から尙祓は神事に就て別の事に成れりしなり七年の下に是春將レ祠ニ天神地祇ニ而天下悉祓ニ禊之ニ竪ニ齋宮於倉梯河上ニ云々と見え十年秋七月戊辰朔丁丑令ニ天下悉大解除ニ當ニ此時ニ國造等各出ニ祓柱奴婢一口ニ而解除と有るは奴婢の代を以て祓具を出せりしなり又朱鳥元年秋七月乙亥朔辛丑詔ニ諸國ニ大解除と見えて御紀に出る所は此にて終なり（此大神世には殊に古風を慕はせ給ひけるか故に祓の事なども如此く御再興有せさせ給へるなり尙續紀にも多く出たれど然のみとて省きつ） 然れども其祓の事の衰へたりし時にも六月十二月の大祓はしも依然し任に行はれて記文有る事無し然れど上古の大祓はしも天下に在と有ゆる天罪國罪を求出られて祓柱を負する事も何も嚴重なりし故に其罪穢の淸く除こり其惡しきを改變て善きに至る徵信なむ甚眞幸く有ければ祓詞に所謂る其過犯しは云も更なり白人胡久美の如き重病癎疾と雖も速に直れりし者なり外國の敎とも渡參來しより人心惡く小賢しく成て其事の何の至も無が如

くなるに疑を生して一途に頼る事の出來ず成以て來て彼にも此にも心を分る事と成しかば終に其心天地に貫通く事能はず成しなり其疑ふ心の如く神も其徴信を顯し給はぬ事と成れりし者なり（尚此事は此詞の説の内に云れば其條々に就て明らむ可き者なりかし）

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣

ウコナハレルミコタチオホキミタチモ、ノツカサノヒトタチモロ〳〵キコシメセトノル

四時祭式に六月晦日大祓十二月准此云々右晦日申時以前親王以下百官會集朱雀門と見えたる此即集侍なり貞觀儀式には辨大夫申云大祓所爾參集刀（讀曰未爲宇古那波禮留）禰數申給止申云々大臣宣云常乃任爾任令被辨已下共稱唯（五位已上先稱六位已下後稱下同）と有るは大祓所に着到せる時に其目録を勘へ人數を計ふる所なるが故に參集とは云るを此は已に其祓の庭に會集る刀禰に其祓詞を中臣の宣る所なれば集侍とは云なり後釋に宇古那波流は此集侍字の意の古言と聞えたりと云れたれど此は唯義訓にて集侍をこそは然訓めれ熟思ふに此は決て被行と云ふ事にて大祓の場に會集て其事に預り行はるゝ由なり（考祈年祭の所に宇古那波流を宇豆久麻流と同じ言に云れたるを大祓詞後釋に辨へて云く抑彼祈年祭などの祝詞は諸社の神主祝部共に讀聞するなれば蹲りとも云まじきに非れども此大祓詞は親王大臣なども集ひ給へるに其を指て中臣が詞に宇豆久麻利侍とは何てか云むと有るは然る言なり予が説は第一詞に云り）○親王諸王諸臣百官人等諸は後釋に摠て如此狀に列擧る事上代には臣連國造伴造百八十伴など云りき諸王諸臣と連ね云る事は推古天皇御紀に始て見えたり其頃よりの事なる可し偖天武天皇御紀に至りて親王諸王及諸臣とも親王諸王及群卿とも親王諸臣及百寮人とも親王諸王諸臣及百官人等とも見えたり古は皇子諸王男女共に摠て美古と申して王ノ字を通はし書つれば諸王と云ふに皇子も管れり偖後に親王と云ふ號の出來ては親王を美古と申し諸王を意富伎美と云ふなれど古は意富伎美と申すは天皇を始奉りて皇子諸王までに亘れる號なりき偖百官と云ふ事は何時の頃より云初けむ甚古くして古事記にも見えたり（然れど此は元は漢籍に傚へる語なる可し○今云風神祭詞は崇神天皇の御世の詞なるに百能物知人等と有るに准へて思ふに必然しも非る可し）諸は上に屬て讀べし古事記に天神諸など有が如し（○今云此事第一詞の下に云り）と見えたり尚此等の事は卷五（春日祭詞）卷六（大忌祭詞）卷七（風神祭詞）卷八（平野祭詞）卷九（大殿祭詞）等に云り○宣は後釋に能流と訓べし（能多麻布と訓るは僻事なり）此は中臣の自云ふ事にて俗言に申聞ますと云ふ意なり此祝詞の中に有る宣者中臣の此祝詞を諸に云ひ聞する由なり神祇令に中臣宣祓詞と見え同令に中臣宣祝詞と有る義解に謂宣布也祝賛辭也言以告神

祝詞ニ宣ヲ聞百官ニ故曰レ宣ニ祝詞ニと有るにて心得べし〇今云谷川士清が言に法ハ宣也上之所レ宣下奉而行謂ニ之法ニと云り集侍は被レ行なりと云ふ予が說を補ふに足れる者なり凡て天皇の詔勅を宣と云ふなども詔勅を奉たる人の下へ云聞す事にて宣旨宣命など云ふ類も旨を宣る命を宣ると云ふ事にて宣ノ字は其云ひ聞す人に係れる言なり此宣字を悪しく心得る人有る故に今委しく云りと見えたり儀式に中臣趍就レ座讀ニ祝詞ニ稱ニ聞食ニ刀禰皆稱唯と有るは此の事なり下に聞食止宣と有る所北に同じ

天皇朝廷爾仕奉留比禮掛伴男手繦掛伴男靫負伴男劔佩伴男伴男能八十伴男乎始氏官々爾仕奉留人等乃過犯家牟雜々罪乎今年六月晦之大祓爾祓給比清給事乎聞食止宣

上に集侍云々と有るは親王諸王諸臣百官の御定有し當昔より加へ用られたる者にして此天皇朝廷爾仕奉留云々の文ぞ古文には有べき其證は續紀以下の宣命に親王諸王諸臣百官人等と云て内外文武の諸官を悉く該羅たれば其にて用は足れるを今爰に天皇朝廷云々の文は無くても能く通ゆるを然すがに古文の美きは捨難くや有けむ重復て用たる者なり皆からに易られたらましかば今考る所も無らざらましを皇神の斯古文を失ひ給はせざりし故に高千穂宮橿原宮の舊儀を見る事を得て下に云ふ事の如きも出來れるなり然れど此は常人の爲に云ふに非ず古道の蘊奥を探索て神祇の御上に著明（アキラカ）なる識者の爲に云なり　〇天皇朝廷は後釋に須賣良我美加度と訓べし此末に天皇我朝廷鎭御魂齋戸祭祝詞に皇良我朝廷乎など見え又續紀の詔に天皇何大御命天皇羅我命など有る例を以知べし如此云ぞ古言なる考に須賣良と耳云ふは古からぬ如云れつる事も有れど萬葉草にも須米良美久佐と有るなども古く聞ゆるをや天皇を須賣良と申す事は下に云べしと有り萬葉十一には皇祖乃神御門乎と詠り美加度は嚴所にて御門の謂には非ず天下の人共の仰き敬ひ畏み仕奉る御所と云ふ義なる事巻五春日祭詞の條に云るが如し御門と唱の同しきを以て思ひ混ふること勿れ倭右の如く嚴所の意にて甚止事無き稱なる故に天皇の御所と伊勢大御神宮ならでは申さぬ事なり神武天皇御紀に軍門を美加度と訓るも畏き御許の由を以て當たるなり但中洲を討平給ふ間なりし故に態と軍門の字を書られたるなり〇比禮掛伴男手繦掛伴男は大殿祭詞の下に註る如く天皇の陪膳に比禮を掛て仕奉る采女と料理に手繦を掛て仕奉る膳部を云ふ事其詞に皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳仕奉流と有るを以て知る可し尙此事に就て此大祓の始りはしも高千穂宮にて初國所知看し大嘗の御禊に起れる事を見出たり此下に說く所を見つ可し〇靫負伴男は其始大伴氏の遠祖等天靫負部亦云大來目部を率て仕奉れりし所なり劔佩伴男は物部氏の遠祖等天物部を率て仕奉れりし職名なるに思合す可し古事記御天降段に故爾天忍日命天津久米命二人取ニ負天之

石靫一取ヲ佩頭椎之大刀一取ヲ持天之波士弓一手ヲ挾天之眞鹿兒矢一立二御前一而仕奉故其天忍日命此者大伴連等之祖天津久米命此者久米直等之祖也と見え神代紀御天降段第四の一書に于時大伴連遠祖天忍日命帥二來目部遠祖天槵津大來目一背負二天磐靫一臂著二稜威高鞆一手捉二天梔弓天羽々矢一及副ヲ持八目鳴鏑一又帶二頭槌劒一而立二天孫之前一遊行降來とも有る此ぞ靫負と云ふ本緣なる偖此天忍日命天津久米命は父子にて降給ひし者なり然るを別統の神の如く心得違られて大伴連と久米直と別々に記されたる者なり師は此二神を一柱と爲て天津久米命を天忍日命の亦名と爲られたる其は次に引く萬葉十八歌に大伴の遠つ神祖の其名をば大久目主と負持て仕へし官と有るに依られたる可けれど古事記に大伴連等之祖道臣命久米直之祖大久米命二人と云る其は混ひたる傳なれども其頭に並云るを見れば道臣命に甚近く緣有るが故に然紛れたるなり姓氏錄に據て彼此比挍るに道臣命は天忍日命の孫なる上は天津久米命は其間に在て天忍日命の子道臣命の父なる事疑無き者なり委しくは日本紀傳に云可し　記傳十五に萬葉三五十九丁に大伴之名負靫帶而七四丁に靫懸流伴雄廣伎大伴爾など有て靫は殊に大伴に由緣有るなり故大刀弓矢よりも前に先此物を云り九に白檀弓靫取負而廿に麻須良男能由伎等里於比弖などゝ有り　姓氏錄左京神別天神に大伴宿禰高皇產靈尊五世孫天押日命之後也初天孫彥火瓊々杵尊神駕之降也天押日命大來目部立二御前一降二于日向高千穗峯一然後以二大來目部一爲二天靫負部一天靫負之號起二於此一也〇萬葉草に比左可多能安麻能刀比良伎多加知保乃多氣爾阿毛理之須賣呂伎能可未能御代欲利波自由美乎多爾藝利母多之麻可胡也乎多波左美蘇倍弖於保久米能麻須良多祁乎々佐吉爾多弖由伎等利於保世山河乎伊波禰左久美弖布美等保利久爾麻藝之部々と有るを思べし　雄略天皇御世以二天靫負一賜二大連公一奏曰衛レ門開闔之務於レ職已重若一身難レ堪望與二愚兒語一相伴奉レ衛二左右一勅依レ奏是大伴佐伯二氏掌二左右開闔一之緣也と有り後に近衛府衛門府兵衛府と共に由介比乃都加佐と云も天靫負より出たるなり偖大連公とは室屋大連を云ひ愚兒語とは雄略天皇御紀に大伴談連と有て談此云二簡陀利一と有る人なり此御代に大伴氏より分れて佐伯氏と云出來たり其より大伴佐伯と相並べり此氏人衛門事は江次第御即位儀に伴佐伯云々率二門部三人一入レ自二兩門一云々令三門部開二門一まで大嘗會儀に伴佐伯宿禰開二大嘗宮南門一と有り萬葉十八に大伴等佐伯氏者云々梓弓手爾等里母知弖劒大刀許之爾等里波伎安佐麻毛利由布能麻毛利爾大王能三門乃麻毛利云々と有り　神武天皇御紀に大伴氏之遠祖日臣命帥二大來目一督二將元戎一と見え古語拾遺には逮于神武天皇東征之年大伴氏遠祖日臣命帥ヲ督將元戎一剪ヲ除兇渠一佐命之勳無レ有レ比レ肩など見えて此氏は祖神天忍日命よりして世に專武事を以て皇朝の御守護と有る職なり續紀天平勝寶元年の詔に大伴佐伯宿禰波常母云久天皇朝守仕奉事顧奈伎人等爾阿禮波汝多知乃祖止母乃云來久海行波美豆久屍山行波草牟須屍王乃幣爾古曾死米能杼爾波不死止云來流人等

止奈母 聞召須 是以遠天皇御世始弖今朕御世爾 當弖母 內兵止云々又天平寶字元年詔に大伴佐伯宿禰等波自遠天皇御世內乃兵止 爲而仕奉來云々と見たり 萬葉十八に長歌有り考ふ可し萬葉七に靭懸流伴雄廣伎大伴爾と有る如く八十伴緒の中にも此伴を殊に崇め稱美て大伴とは云か廿卷に大伴乃氏等名に於敝流家持卿の詠れたるなどを思ふ可し 此氏の內兵として仕奉りし狀は後世の左右近衛大將左右衛門督左右兵衛督などの職の如し然れば後の稱を以て云はゞ彼中臣忌部などは文官此大伴佐伯などは武官なり然るを後には文を尊るゝ故に六衛府は大政官より卑きを上代には武を尊れし故に此氏など甚尊かりき」と見えたり 以上御天降段に在る大伴佐伯二氏に係れる傳の中より彼此取合せ引て其本文の任ならず此に要有て引出べき事を切めたるなり 古語拾遺神武天皇段に日臣命帥二來目部一衛二護宮門一掌二其開闔一と有るは天靭負を率ゐ內兵と爲て仕奉り宮門を衛護奉る職にて大伴氏の世々掌る所なりしを其氏より支別て佐伯氏は出來りて左右に並び相伴に仕奉れりしかども公廷の表立たる事には其舊稱の任に靭負伴男とは云來れるなり 此事委しく御門祭詞の下にも云り考合す可し 備思ふに大伴は右の天靭負を多く伴ひ仕奉れる由佐伯は障君(サヘキ)にて御門を守奉れる由に出來れる號なる可くぞ所思る 若て此二氏の職孝德天皇御世に八省百官を定められし頃より他氏に移りて唯大嘗會等の如き神事に預れる事に耳仕奉る事とは成れり 然ばこそ集侍親王諸王諸臣百官人等云々と云て又此文をも捨ざる也けれ 此より其後大伴佐伯の職近衛府衛門府兵衛府等に移らひたる故に和名抄に此三を合せて由介比乃豆加佐と云るが如くなりて佗氏の人此職に補して右の二氏も佗の官務を爲る事とは成れりしなり 但此なる靭負伴男は右の六衛府を指るには非ず言は古の任にして其周捨無く用ひられたると見えたり ○劒佩伴男は物部氏の遠祖より以來天物部を率て仕奉れりし所を云なり 上に云る大伴氏の靭負伴男なりしに思ひ准らへて知べき者なり物部を劒佩伴男と云る由は下に云ふ可し 古事記白檮原宮段に故爾邇藝速日命參赴白於天神御子聞二天降坐一故追參降來即獻二天津瑞一以仕奉故邇藝速日命娶二登美毘古之妹登美夜毘賣一生子宇摩志麻遲命 此者物部連穗積臣婇臣之祖 と見え御紀 長髓彦を討平の所 に饒速日命本知二天神慇懃唯天孫是與一且見下夫長髓彦稟性愎佷不レ可レ教以二天人之際一乃殺レ之帥其衆而歸順上焉天皇素聞二饒速日命是自レ天降者一而今果立二忠効一則褒而寵レ之此物部氏之遠祖也と見え 古語拾遺に物部氏遠祖饒速日命殺レ虜帥レ衆歸二順官軍一忠誠之効殊蒙二褒寵一と有り天孫本紀には此事を宇摩志麻遲命と爲れど其は誤なる可き事記傳に辨られたる如し 天孫本紀に復宇摩志麻治命率二天物部一而翦二夷荒逆一亦帥レ軍平二定海內一而奏也また宇摩志麻治命率二內物部一乃竪二矛楯一嚴增二威儀一と有る此ぞ物部氏の天物部內物部を率て仕奉る始なり倭母能々布は武勇職を以仕奉る武士の稱にして母

能々辨は其を統領する意を以て武士部と云ふ言の切れる稱なり此事は記傳に說れたる言なるを今切めて出せり委しくは本書を見る可し天孫本紀に大歲辛酉正月庚辰朔孫磐余彥尊都ニ橿原宮一云々宇摩志麻治命率ニ內物部一乃竪ニ矛楯一嚴增ニ威儀一道臣命帥ニ來目部一帶レ仗掌ニ其開闔一衞ニ護宮門一矣並使下四方之國以觀中天位之貴上亦俾下率土之民以以示中朝廷之重上矣と有る此事天皇本紀にも出たり倭思ふる宇摩志麻治命の內物部を率て仕奉れりし狀は後世の左右近衞の如く內衞(ウチノマモリ)にて道臣命の天靫負部を率て仕奉れりし狀は左右衞門左右兵衞の如く外衞なりしなり然れば後釋に靫負伴男劒佩伴男を合せて後世の六衞府の類の武官を云なり」と云れたるは實に謂れたる事なり古語拾遺に此を饒速日命と爲るは然るべからず此命は天皇に天瑞を奉りて直に神去坐しと思えたり倭大孫本紀天皇本紀共に二年春二月甲辰朔乙巳天皇定レ功行レ賞云々此日物部連等祖宇摩志麻治命與ニ大神君祖天日方奇日方命一並拜爲下申ニ食國政一大夫上也と有るなど後世の近衞に配(アテ)て彌々近きなり此を劒佩伴男とも云けむと思ゆる所由は天孫本紀に天皇宇摩志麻治命の功を賞給ひて朕嘉ニ其忠節一特加ニ褒寵一授以ニ神劒一答ニ其大勳一と有て其神劒は謂ゆる師靈にて世に其氏人の仕奉る所なるが此より厥後天皇の御許に在て親しく仕奉られしにも刀劒を帶て衞護奉られしより其率る內物部にも刀劒を佩しめたりし故に後世に刀劒を帶る者を武士(モノノフ)と云ふ習俗も出來れるなり垂仁天皇御紀に五十瓊敷命に十箇品部(トモノミヤツコ)を賜へる中に大刀佩部と有るは決く物部を分ち給はせたりと見ゆ其は五十瓊敷命劒一千口を作りて石上神宮に藏めたる因に其神寶を掌る所なるが其主と坐す師靈は物部氏の仕奉る大神に坐るに心を著て考ふ可き審なり倭其大刀佩部は物部の兵士なるが伴男と云ふ時は其部の長にて物部氏に限れる稱なり此故に劒佩伴男を賜ふとは無く大刀佩部を賜ふと有り物部の兵士を頒ち賜ふ由なり倭其物部は令に謂ゆる中務省の內舍人衞門府囚獄司等の物部令外にて六衞府使廳などの府生番長或は禁中の瀧口仙院の北面東宮の帶刀などの如く刀劒を帶て仕奉る部なる者なり職員令に內舍人九十人掌下帶レ刀宿衞供ニ奉雜使一若駕行分中衞前後上と見え衞門府物部卅人の義解に謂此名爲ニ內物部一爲レ決ニ罪人一特置ニ此府一當ニ決罰時一皆帶刀劒また囚獄司に物部四十人謂此伴部之色故式部補任其衞門府門部亦同也掌下主ニ當罪人一決レ罪事上物部丁卅人諸國仕丁帶レ仗守レ獄者即白ニ民部省一所レ充也など見えたる此は其物部は武勇を以て仕奉る部なるに依て其刑罰の事にも及べるなり記傳十九物部連の條に云く雄略天皇御紀に遣ニ物部兵士三十人一誅ニ殺前津屋幷族七十人一また天皇便疑ニ御田奸ニ其采女一自念レ將レ刑而付ニ物部一また付ニ物部一使レ刑ニ於野一欽明天皇御紀に有至(ウチ)臣所ニ將來一民部筑紫物部云々能射ニ火箭一など見え續紀和銅四年十月始定ニ祿法一中に

も召使門部物部主師等並絲二絇錢十文と有り類史に天長八年二月四獄司物部定額四十人依ㇾ元ニ名負氏入色人ㇾ通取ニ他氏ㇾと有る名負氏とは先祖より世々物部なる人を云なり然れども物部氏を其部を率ゐ其長として仕奉る故に甚貴在し事天孫本紀に其歷世の事を記せるを以見つ可し然るを其顯職の舊號を改て石上朝臣の氏姓を賜ひしよりぞ其職また六衞府に歸して剱佩伴男の古義は廢れて唯神事の時に耳且々其家職を形計り行ふ耳なり中臣鎌足公の其地名に取て藤原朝臣の氏姓を賜へりしより神代より傳來れる中臣の職廢れて佗職に就れし樣に思合す可し若て此氏より榎井氏支れ出て石上氏と相共に即位元正大嘗會等の時に內物部を率ゐ神楯を竪て仕奉れりし事次に云が如し此亦大伴氏より佐伯氏の支れ出て後世に伴佐伯と並べるに做へる者ならむとぞ思ゆる　○伴男能 八十伴男乎 始氏 後釋に伴男の男は長にて元其部の長を伴男とは云ひ八十伴とは百官を摠て云るなり偖後世の格を以て思へば此は伴男能と云ふ事衍りて聞ゆれとも摠て如此狀に言を重ね云ふぞ古文の妙なりける乎 始弖 とは上に云る如く伴男は元部の長を云稱なる故に其部々の長を始として其下々迄と云なり此詞にても男は長なる事を知べし以上採要と有る如し伴男は記傳を引て委しく大殿祭詞別に云れば此には云はず○官々爾 仕奉留人等乃 後釋に官々は即上の八十伴男なり仕奉留人等は其長々の下に屬て仕奉る官人共なり○今云上の部負伴男劔佩伴男は其天靱負部大刀佩部を率領る大伴宿禰物部連などにて其伴の長なるが其に屬る靱負物部などは此に仕奉留人等と云る者なり考にも此意を得て官省寮司の下に在る諸部の者共迄を云ふ」と云れたり　と有り偖官は仕にて佐は此を瀨になと同じく的當不て勤仕爲る所を云なり官省寮司など丶各其部を爲せる其を瀨と云るを佐と轉し呼ふなり○過犯家牟 後釋に過とは殊更に心以て爲すには非で思えず犯すを云ふ凡て罪と有る事を知ながら殊更に心以て犯す事は打任せては有まじき事なれば平和に唯過犯家牟 と云るは雅致き事なり○今云此說に就て思ふに天下の人の罪除に過ふ所は皆己が心と爲出る所なれば云ふ迄も無く罪なるを如此宣せる意は天照大御神の須佐之男命の犯給へる罪を種々に見直し開直し坐る大御心に做奉給へるなり此即皇御孫命天津宮事に依て天下の大御政を所知看す所なり　犯とは愼みて爲まじき事を愼まず等閑に疎濶に爲るを云て大然なり大は大凡の意なり然れば假字も淤なる可し　と有り○雜々罪乎 は後釋に天罪國罪の種々なり」と云れたる其にて祝詞此は宣命なるに對て云ふ に國中爾 成出武 天之益人等我 過犯家牟 雜々罪事波 天津罪止 云々天津罪止 法別氣氐 國津罪止 云々許々太久乃罪出武 と有を指て云るなり此を以見れば祝詞宣命の分別明らかに知らるゝなり若て其神に申す時こそは祝詞と爲して申せれ公廷よりは祝詞と宣命とを一にして宣ひ附る御定有る事已に卷一卷三に云りき　又後釋に云く偖是は去年の十二月晦の大祓の後より今年の六月晦迄に犯たる罪共なり○今年六月晦之大祓爾 は考に晦朔を雅言には月隱日月立日と云べしと有り偖

鈴屋大人の眞曆考に云れたる如く一月を三に分て上の十日計りを月立と云ひ中の十日を望と云ひ下の十日を月隱と大然(オホラカ)に云る常の常なりしかば後撰集歌に「賀茂川の水底澄て照月を行て見むとや夏祓爲る」と有る題に六月祓しに河原へ罷出て月の明きを見て詠る」と有れば廿日頃より後其期に當て日を定られたるならむと思えしかども其は私の祓なる故に公廷のには拘らす早く物爲りしにて朝廷の大祓は往古より六月十二月の盡日を用らるゝ所なり 後拾遺集に六月祓を詠侍ける和泉式部思ふ事皆盡ぬとて麻葉を切に切ても祓つる哉」と有る皆盡に六月盡を係たるを見べし ○祓給比清給事乎 此の祓は波良閇と訓べし朝廷より百官人に令祓給ふ所なればなり後釋に百官男女に物を出させて罪を祓へしむる方を以て云はば波良閇と訓べし」と有る依て然訓つ 但波良比と波良閇との差別の如きは上に記傳九卷を引て云れば今爰に引かず且同書に今は廣く云ふ方に就て波良比と訓つ祓給は朝廷より此態を爲て百官の罪を祓給ふなりと有る方は取らず 清を佐與牟と訓むは穢の反なり淨からぬ物事に交こる時は神氣此に由て涸(カ)れ禍事を延(ヒユ)て入るゝを祓と爲し禊を爲せば其外より犯す所の者は解除(ノゾコ)り去て其身清々しく成る此復神氣此に依寄(ヨル)を以て佐與志と云ひ佐與牟とは云なり 然れば穢は氣涸清は氣緣と云ふ義なる者になむ有ける ○諸聞食止宣 後釋に諸とは上に擧云る比禮挂伴男云々官々爾仕奉人等を揔て指なり○今云實に然り然れども如此く事の終に有る上に集侍云々の文なるも共に愛て諸とは云り然るは後に加へられたる詞なる物から今爰に六月晦之大祓爾云々と云る事揔てに係れゝばなり 倩大祓詞は此次高天原爾と云よりぞ始にて是迄の二段は祓の詞には非ず百官の大祓の時別に加へて先初に宣詞なり 此二段には唯宮々の事を耳云て天下四方國など云ふ詞無れば別に百官の大祓の時の詞なる事著明し○今云此まで二段は宣命なり次なる高天原爾以下は祝詞なり解除に用る所の祝詞は此を云ふ此宣命と祝詞を合せて百官に宣聞す事は神祇令に中臣宣㆓祝詞㆒と有る義解に以㆑告㆑神祝詞宣㆓聞百官㆒と有るが如し其を奉る人其宜しきを取て神に告なり 若て二段の內に天皇朝廷爾と云より一段は文殊に古く甚々美たし是上代に百官の大祓の時加へて宣たりし詞なる可し然れば此段の文の古きを以て百官の大祓も上代より有けむ事を知べきなり 但今年六月晦之と云ふ言は後に二季の大祓の定まりたりし時に加へたるなる可し○今云六月十二月恒例の大祓は高千穗宮以來の大御政なる可き由は上に已に云り 倩又集侍親王云々諸聞食止宣と有る初め一段も後に加へたりし詞なる可し抑此段と初ノ段とは唯文詞の異なる耳にして官々を揔擧たるは同じ事なり如此同じ狀の事の重復りて其文の甚く殊なるは此段は上代よりの詞を其任用ひ初段は又後に加へたる物なるが故なり ○今云集侍云々なも後に二季の大祓の定まりし時に加へたる由に云れたるは違へり親王諸王諸臣百官人の號の出來て其時に加へられたるなる可し然號の改りては其後號を耳用ひらる可きに然すがに美き古文の世に廢れむ事を然すがに厭ひて重複れる任に用ひ馴來れる者なりかし 倩高天原爾と云より下祓詞は祠國の大

祓の祝詞なるを朝廷百官の大祓にも兼用られたる者なり」と云れたり然れども諸國の大祓も朝廷百官の大祓も一なる者なり祝詞には天下四方の國人の事を云るに宣命に其事の見えざるは諸國の贖物を朝廷に召上給ひて朝廷百官をして自身の事を兼て共に解除しめ給へるが故なり 諸國と朝廷とを別に爲られたる說は依難く其上高天原以下の詞を諸國の祓詞なりと云れたるも違へたり斯文はしも上に云る如く解除の祝詞にて高きも下きも共に神に告る所の詞なるを宣命の中に收めて中臣の此を宣なり若て其外に天津祝詞の太祝詞別に在て其兇文なる事云も更なり 偖此大祓詞はしも高千穗朝にて出來つるを橿原宮にて大旨改易させ賜へるが傳れるに其前後の文などは時々の稱呼に隨ひて改用させ給へるから古くも新しくも見ゆる事なれど其形(オモ)象(カゲ)は然すがに易らざる者なるに就て此詞の初に天皇朝廷爾仕奉留比禮挂伴男手襁挂伴男靫負伴男劒佩伴男云々と云て御膳に仕奉る伴男を最初に云る趣は上の大殿祭詞の下に云る如く彼祭は高千穗宮の大嵗の初に大嘗聞食し頃に出來れるに倂せて思ふに此詞の狀も凡ては其詞の狀なる准らへ思ふに彼大嘗の御禊に始て用られたる詞なる事決き者なり 然るは橿原宮にて出來る詞ならむには靫負伴男劒佩伴男などを其首にも出さる可きに御膳供りの伴男を先に云るに眼を着べき所なり御禊とは大嘗會式に凡天皇十月下旬臨二幸川上一爲レ禊と有る其を云なり 然るは右の四の伴男は大嘗會の事に主と預る人等にて比禮挂伴男は采女手襁挂伴男は膳部靫負伴男は伴佐伯二氏劒佩伴男は石上榎井二氏なるは一證なり其中に劒佩伴男は物部にて橿原宮以降の事なるが天忍日命天津久米命父子並降り坐るが何れも頭椎劒を取佩坐れば此事をも兼て仕奉りし者なり 然れば神武天皇御世より劒佩伴男は先は物部氏に歸りし者なるが後世迄も大伴氏の職と物部氏の職と大較同じくして其差別少の違有る耳なるを思ふ可し但此は橿原宮より後と見ても有べし 貞觀儀式大嘗會條に諸衛立レ伏諸司陳二威儀物一如元正儀石上榎井二氏各二人皆朝服率二内物部四十人一著二紺布衫一立二大嘗宮南北門神楯戟一訖即分就二左右楯下胡床一 門別内物部二十人左右各十人五人爲列云々 伴佐伯各二人分就二南門左右外掖胡床一待レ時開レ門と有るは天孫本紀なる神武天皇元正の式に宇摩志麻治命率二内物部一乃竪二矛楯一嚴增二威儀一道臣命帥二來目部一帶レ仗掌二其開閤一衞二護宮門一矣と有る如くなる物から宇摩志麻治命より以前は道臣命一人して兼給へれば高千穗宮の舊儀を橿原宮にて用られたると見て難無し 但大嘗會には中臣忌部等の職重ければ其等を先は出さる可きに然らぬは天兒屋命其詞を宣り天太玉命幣帛を作れゝば其餘の人々を先云ふ可き理なり 又悠紀御膳の行立次第に膳部采女等の最前に進む其ぞ大嘗會には主と有る人にて上古は御膳の事に預仕奉る事甚重き任なりしかば其例に依れる者なり

倩此時の比禮挂伴男は大宮賣命なる可き事大殿祭詞の下に云る如く又其時の膳部は天日鷲命ならむと思ゆ姓氏錄（左京神別上天神）に多米連多米宿禰同祖神魂命五世孫天日和志命之後也成務天皇御世仕二奉職炊職一賜二多米連一也又（右京神別上天神）に多米宿禰神魂命五世孫天日鷲命之後也成務天皇御世仕二奉大炊寮一御飯香美特賜二嘉名一又（大和國神別天神）に多米宿禰神魂命二十二世孫意保止命之後也と有る此三を合せて思ふに天日鷲命より以來仕奉りけむ其家職に依て成務天皇御世に多米連と云ふ嘉名を賜へりし者にて其人は意保止命と云ふ事なる可し意保止命は飯粒(イホト)富と云ふ義と聞えたり（若て大嘗に仕奉る高橋朝臣は景行天皇御世より仕奉始たる事其氏文に見て安曇宿禰の御膳に仕奉る事は應神天皇御世よりの事なれば其古に膳夫の必無くて叶はぬ事なり）然れば此詞に有る所の四の伴男は大嘗の事に主と仕奉る人を專と云る所なるが故に大嘗の御禊に宣る所なるを以て考るに若神武天皇以來のならむには其大祓に會集る人の天下の大御政申す人より始て云ふ可き理ならぬを然らぬは決めて御天降の後初國知す時の大嘗に就て行はれたる御禊の時の詞なるを其御世より六月十二月恒例の大祓にも其任にして少か取捨有て用られたりけむが橿原朝より以降に至りて臣連伴造國造百八十件など云ふ詞をも加へて此を宣り其臣連以下百寮に用無くして大嘗の御禊などに用らるゝには右の比禮挂伴男云々の言のみをぞ用られたるらむ上古の事を如此く際々しく云ふを餘りに穿鑿に過たりと思ふも有べけれど尋常の說は人も多く云ふ所なれば予が言を竢ざる可し是を以て予は人の心の及ばざる所人の思ひの至らざる所を明らめばやと思ふ故に如此き說にも至れる者なり

高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美乃命以氐

高天原爾神留坐は天中に神ノ靈の充滿て御在し坐す事を云なり神の鎭坐す本所の謂にて天中悉く神靈の充滿たらざる所無き由なり古事記に於二高天原一成神名天之御中主神次高御產巢日神次神產巢日神此三柱神者並獨神成坐而隱身也と有るを古語拾遺に天中所レ生之神名曰二天御中主神一次高皇產靈神（古語多賀美武須比是皇親神留伎命）次神皇產靈神（是皇親神留彌命）と有て高天原と云も天中と云も同義なり然れば天之御中主神と申すは高天原主と申すに異ならず此を以て考るに天之御中主神はしも其總天中に充塞り坐す神靈にして其總天を神體と爲て鎭坐す大神に坐れば八百萬千萬神と申すも其御身

を分け御靈を別たる所なり此則物々相分れ事々相別にして此世の立る所以なる者なり神漏岐神漏美の令を以て八百萬神を神集へに集給ふは其御靈を一に爲る由にて幽深き所由有る事なりけり萬葉五に宇奈原能邊爾母奥爾母神豆麻利宇志播吉伊麻須諸能大御神等と有る歌を引て後釋に此は其時の船路の海邊又沖なる島々などに鎭坐す神等を申せるにて是鎭坐す事を神豆麻利と云り」と說れたる如く此は住吉神の事を詠るなるが社有て鎭坐すを云るならず其海邊にも洋中にも悉く所として其神の御靈の充滿ぬ隈無きを云り續紀に高天原爾神積坐須と作るも此意を得て書せる者なり然れば此語を近く心得むには高天原に鎭坐すと云ふ義と見て然る可く思ゆ 又今一譬を得たり高天原は土なり神は水なり土を一撮器に盛て水を其程に充むには土より云ふ時は土中に水有りと云ふ可く水より云ふ時は水中に土有りと云ふ可きが如く天中に神の充塞(ミチフサカラ)ざる所無く神靈の內悉く天中ならぬに無きなり深く此理を察らむ可し尙祈年第一詞に委く云り ○高天原とは大地より天日(アマツヒ)天極(ヒノワカミヤ)天霏(アマツミソラ)を全て云ふ稱なり此稱天地の未生ざりける甚も久しき古より有來る名にて上に引る古事記に於二高天原一成神名天之御中主神と見えたる此に因る時は元來天霏を云ふ所なり今此を考るに高とは天の廣大深遠にして涯際無きの謂なるが多迦の義を見るに氣の充塞する由にて天霏の形象なり天とは遍く大氣の充塞て大に圓然なる謂なり原は廣き謂にて高天の形象大地などの如く限量有る事無きを云なり所以て原を省きて高天とのみも云ひ高を省きて天原とのみも云事常なり 記傳三に天原と高天原との差異を立られたるに人も皆信ひ居る事なれど取らず 拾遺には高天原を天中と記せり古傳に然も云けるなり偕天と云ふ義を先熟く說けらずは其事猶髣髴しかる可し先此世の出來始に元より其高天原に神留坐す大御神唯一柱のみ其天中に大座坐けり天とは右の如く遍ねき意なるが其遍き所に自然にして固より其精神有り眞と云ふ神名の御(ミ)即此なり中とは天中に精氣共に充塞て出入爲る所無く又徧固なる所無く虛靜寂莫なる由なり主は此神の精神能く神隨にして貫通るの謂にて成と云に同じく神とは其天中の氣に精神を布演(シキ)坐て天地造化の神機を爲すを云稱にて自餘の諸神は此神を上とし此神に成るが故に傚ひて神とも云ふ事なれども世の始に打任せて神と申すは此大御神一柱に局る大稱なり 此神の御德と爲給ふ所を能明らめ擧ざれば他神の御上を說にも當らざる事多く且は高天原の眞說をも知得まじければ能々古傳に依て明らむ可し此國土の事を說くに國之常立神以下の神の御全功を明らめざれば解り難かるも同じ理なりかし 若て此大御神の神

隨にして天中に主宰たる所の御德を持分給ふ高御産巢日神神産巢日神二柱坐り高は垂氣にて其天中に氣の動き伸るなり動き伸て終に恒天の際に至れるを云ひ神は氣聚にて其氣の天中に動き伸たる際より靜り屈りて相感け相和るを云ふ御は精神にて上に說る眞の義なり産靈は其神氣の感應ひ産ばり合ふ事なり此即天中に神氣の動靜有り屈伸有て天中に天地と爲る可き一物を結成し給ふ御德を以て稱申す所なり此高天原（一云天中）に成坐る三柱神を隱身也と有る言は天中即此神等の形體にて神靈此に充滿たり此隱身と申す所以なり又高天原爾神留坐と云ふ事此なり（此三柱神等天中に御靈を收めて造化を爲給ふ有象には古今有る事無ければ古の形今の象にして異る所無しと雖も天地の出來始めは此神等の御靈の御德を顯し坐す始なれば殊に太（イミ）じかりけむ事云も更なり）然して其二柱神の産靈に賚て天中に一物を生給へり此即陰陽相交りて物有り男女相婚ぎて子有る事の起なり全く二柱神等天中の大氣を屈伸し給ひ隱身ながら御合坐て産靈し給ふ所なり此に依て宇麻志阿斯訶備比古遲神成坐り宇麻志とは産爲の意にて其天中の大氣に含有る所の精神の相得て圜まり約まる義有り然れば得眞の意有る事云も更なり阿斯訶備は其一物より精妙なる所の物又天中に出て物を成す狀にて阿は彼にて幽に明けき意を兼ね斯は息にて其一物より出る精妙の物を云ひ訶は氣にて一物中より出る息を誘ひて相伸る意備は經にて大虛を經て天中の最中央と在る所に到る義なり此を記紀共に如葦牙と有て其物の如しと云ふ事に記せれども神名に阿斯訶備と負坐て其御功を爲給ふ狀なるが本にて葦牙は其に甚能似たりける故に然號かりたるにこそ有けれ彼は末なる物ながら其本の物に譬ふ可き外に物無が故に此に取て文には如葦牙と記れど却て葦の葦牙は其阿斯訶備に彷彿たるなり比古遲の比古は延にて其阿斯訶備の天中に延立つなり遲は道にて其連聯る形象を云ふ此は天中に在る所の所謂氣脈にて古語に天に綱と云る此なり（比古遲を御紀に彦舅と作るに依て男子の通稱と云ふ事なれど其は末にて其本は此神の神氣の天中に延く狀を以て御名に稱申すに起りたる事なり借男を比古女を比賣と云ふ事は男根女陰に依て號くる所なる由委しく古始太元攷に云り但比古の稱は此神に始れるなり）如此く精妙なる阿斯訶備の天中に打延て其狀五百つ綱の如くして經とも緯とも成れる其天中央に天照す日御國成れり此天之常立神の御靈に依る所なり如此く天日定れる上は此神域宇宙大象の本と成りて其より餘れる精妙の阿斯訶備五百つ綱と引延たる天極に日之少宮成り恒星此に於

て定まる亦御名を天之底立神と申す所以なり此に因て天に編の義有るは其綱に結々凝固れる由なり宇麻志阿斯訶備比古遲神の亦御名を角凝魂命と申すは亦此に因れり（但師は角凝魂命と申すを天之常立命と同神なる由に云れたれど思ひ誤られたる也古始太元攷に委しく說るが如し）如此く恒星列宿の外に網羅り天日は其最中央に位を定て其總てを天と云ひ又天日をも天と云ふ事は宇宙の眞域諸神の本域と爲給ふ所なるが故に其總天に法を則天日は內裏に國有て大地の外表に國有る狀とは異なる者なり又天霩をも天と云は其天霩の大氣に天綱有て天象を編み有つ故に云ふ稱にて廣くは天霩を指し次には恒天を指し天地と對へては天日を指て共に天と云ひ高天原と云ふ事にて其差別無が如くなれども此心を得て古書を讀めば悉く其徵有り（但鈴屋翁の虛空の上方に在りと云れたるも高天原を委しく見認られぬ說なり又服部中庸（ツネ）が三大考及師の靈能眞柱などに天日を云と云るも麁く又師の玉襷及五十音義訣に天極なる紫微宮を其なりと云るも麁かりけり）天霩を高天原と云るは古事記に天地初發之時於高天原成神名天之御中主神次高御產巢日神次神產巢日神此三柱神者並獨神成坐而隱身也と有る此なり此に因て唯に虛空を指ても然云ふ事にて同記に於底津石根宮柱布刀斯理於高天原比疑多迦斯理と有を始て祝詞に常多き語なり（萬葉三に天原振放見者度日能影毛隱比照月乃光母不見白雲毛伊往波々苅と詠て日なも月なも雲なも其天原に在る意なり）天極を高天原と云るは出雲神賀詞に高天能神王高御魂神魂命と云るは天地成定りて後は天照大御神其天日を統御す故に右の三柱神は共に天極紫微宮に止住給ふ故なり古事記に於高天原者神產巢日御祖命之登陀琉如天之御巢云々と有る天之御巢の所在は天極なる故也御巢は字の如く御舍の事なれど此は大國主神の幽事知す天日栖宮を請申給へる日栖は潜にて天國の顯事は天照大御神と所知者す御世に至て右の三神は日之少宮にて其幽事を知し給ふ宮に傚へる故なり此所右三神の所在なる事は神代紀に伊弉諾尊の日之少宮に復命し給ふを以て證と爲べきなり（但天之御中主神等の三神は天上にも地下にも所として御靈を布坐ぬ隈しは無きを今如此く云ふ時は其說違ふが如くなれども此を近く人身を以て諭さば心藏は神を寓し頭腦□精を寓せるが其心は天日なり身體の中央に位す腦波は天極なり身體の頂上に位す而して其精神一身中に彌綸として所として精神の充滿ぬ隈しは無れども其所在を一所に指て云ふ時は心に神有り腦に精有て各別なるが如く天日は天照大御神の御舍なり天極は右の三神の御舍なるなり）天日を高天原と云るは古事記に伊邪那岐命三貴子を得給ひて事依し坐る其中に天照大御神に汝命者所知高天原矣事依而賜也と見え又同書（天石屋段）に高天原皆暗葦原中國悉闇と此語三所有て葦原中國は大地の悉を云るに對たる此なり又祝詞に高天原爾神留坐

皇親神漏岐神漏美乃命以氐八百萬神等乎神集々賜比神議々賜比と有などは記紀共に御天降の事を記せるには天安河之河原と有れば決く天日を高天原とは云り常にも天地を列云ふは天日と大地となる事已に先師の云れたるが如し又高天原に對へたるを以て葦原中國と云るは天地の悉を天より呼ぶ所なるを知べし但葦原水穗國と云ふ時は皇國に限れる美稱なり如此く天と云ひ高天原と云るは天霏をも天極をも天日をも摠て云ふ稱にて何れを本何れを末と其差別無に似たりと雖も熟思ふに天霏と天極を云るは本にて天日を云は末なり其は天霏は青雲の靄く極み恒星の羅列れる大綱にて天極は其天綱の結目なれば此にて恒天なり然るに其恒天は內なる所即遍く全世界にして此外に世界有るに非ず此即天と云ひ高天原と云ふ物なり若て其全世界の中心に全世界中の精英を集めて天日を造爲給へる其國はしも外表に國無く內裏なる所神域なるは全世界の象形に法則て造爲給ひて今も見奉る如く所々に穴隙有て恰も大綱を以て編成せる象なり天日を天と云ひ高天原と云ふ事此に因れる故に天霏天極を合せて天と云に傚へれば末なりとは云なり然れば此段に云る事は上件に說る天之御中主神より天之常立神に至迄の功用を明らかにして知る可き事なれば今此に其概略をこそは云れ是にて盡せるに非ず高天原爾神留坐とは天霏の遠に際に至迄も神の御靈の充滿給ひて此全世界を保ち給ふ謂にて甚廣く大にして言も意も及ばざる所なれと今少事の序に云はゞ其本源は天之御中主神より高皇產靈神皇產靈神と二に分れ此二神の絪縕に資て八百萬千萬神と支別れて各自に此全世界を持別け所知看す事なるが天津神量などの時には其八百萬千萬神等悉く會集給ひて右の二神の御制を仰奉る事なる故に神漏岐神漏美乃命以氐八百萬神等乎神集々賜比神議々賜比と云ふ事有る者なり是等は先師等の說に甚く違へる事なれば驚く人も有なむを此事のみにては明らめ難きも多からむ予が著書の凡てを博く讀て得べし○皇親神漏岐神漏美乃命以氐は祈年祭詞の下に云り但彼詞及月次祭詞等に用たると同事ながら少しく異なる所有り彼詞共に然云るは今現に皇御孫命の御祭を行はせ給ふ所即神漏岐神漏美の命令なる由なり此詞い續きは然らず皇御孫命を天降し給はむ事に用有て其命令を下し給ふにて其受賜はる所八百萬神等に係れる者なり然れど其末に至りては其大祓を今現に行はせ給ふ所迄に係れゝども今は言の續きに依て其意異なる云なり後釋云命字朝野群載には御命と書たり

八百萬神等乎神集々賜比神議々賜比氐我皇御孫之命波豐葦原乃水穗之國乎安國止平久所知食止事依奉岐

八百萬神等とは記傳に數の多き至極を云りと云れた

るが如し但此は事の始の八百萬神等の御量に依りて成る大旨を云るにて唯に御天降の神量耳には非ず下に天津神波云々所聞食武國津神波云々所聞食武と有るに相應する所なり等閑に見過す可からず凡て此神語などには少も無用の語有る事無れば文を錯綜して見ざれば其深旨を得難し抑此天地世界に神はしも八百萬千萬神と多かりけれども天之御中主神の御靈の幸ふ所高皇産靈神皇産靈二柱神に結ばりて各自の神と成出給ひ天地の神祇は更なり天氣は青雲の靄く極に至る迄も遺る所無く漏る隈無く所として各自に神の在ぬ所無く實に神充滿り坐れば其數は何計か有らん測り知られぬ所なるを唯大凡に八百萬神等とは云なりけり所以に御紀及古事記には八十萬神と記され萬葉集二巻には八百萬千萬神とも詠り又出雲風土記には天神千五百萬地祇千五百萬と云ふ語見えたり此を以て八百萬と云ふも數を限りて云に非る事を曉る可し（神代紀に高皇産靈尊聞之而曰吾所レ産兒凡有二一千五百座一云々と有るも千五百柱に非ず右の風土記に合せて思ふに千五百と云るは數の極の意にて天地世界に在ゆる神等を凡吾所レ産兒と指たる語と思しきなり其は葦原千五百秋之瑞穂國と云る號も千五百春秋と云義に非ず天地無窮の義に取て號られたるを思ふ可し）○神集々賜比は古事記（御天降段）に天照大御神之命以豊芦原之千秋長五百秋之水穂國者我御子正勝吾勝々速日天忍穂耳命之所知國言因賜而天降也云々爾高御産巣日神天照大御神之命以於二天安河之河原一神集八百萬神集而云々また神代紀（天孫降臨段）に故高皇産靈尊召二集八十諸神一云々と有て御天降の時に至迄に八百萬神等を度々召集給へる此を云なり但記紀共に神皇産靈神の漏たるは脱せるに非ず常に高皇産靈神か何れか一神を記して含たる者なり高皇産靈神一柱ならぬ證は出雲神賀詞に高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎事避奉之時云々と見え祝詞に神漏岐神漏美乃命以氐と有る其を古語拾遺に高皇産靈神（古語多賀美武須比是皇親神留伎命也）神皇産靈神（是皇親神漏美命也）と見えたるにて著き者なり（釋紀に引る龜兆傳及宮主秘事口傳抄の壽詞秘訓ノ條などに神漏岐天照大神之謂也神漏美高御産巣日神之謂也と云るは卜部氏より出たる狹臆なる者也委しく第九大殿祭祝詞神漏岐神漏美之命以氐の下に云るか如し）後釋に都度比と都度閇とは自他の差にて都度比は自集ふなり古事記（天石屋段）に訓レ集云二都度比一と注したるも八百萬神自集へるを云所なればなり都度閇は令レ集の約りたるにて他を令集るなり此は詔命を以て令レ集るを云へば都度閇なり」と有り其如くなり（但此御天降の事を萬葉二に天地乃初時之久堅之天河原爾八百萬千萬神之神集集座而神分々時爾云々と有るは言の續きに依て八百萬千萬神の自集へる狀に詠るなり此故に都度比と詠たるなり）○神議々賜比は右に引る古事記の

續の文に兩高御產巢日神天照大御神之命以於₂天安河之河原₁神₂集八百萬神₁集而思金神令₂思而詔云々爾思金神及八百萬神議白之云々と見え御紀には惟爾諸神勿₂隱₂所₂知云々於是術順₂衆言₁と有る即神議々賜なり其命令の出る所諸祖天神（カムロギカムロミ）に在て其議の定る所八百萬神に成れるは八百萬神と成る其本源諸祖天神に御在れば諸祖天神の命令を以て直ちに其事を仰傳らる可きに思金神に令思給ひ衆言に順給ふは如何と云に已に八百萬神と支別ては其御所業も八百萬千萬と支別れ御在れば其御功德も區々なり是以て彼の長たる所を用ひ此の短き所を補ひ其平均（トヽノホリ）の正しきに順ふ事即八百萬神の八百萬神たる所以諸祖天神の諸祖天神たる所以なり（譬へば土中に種を蒔は苗を生し根幹枝葉と成る同じく種子の一物に出たりと雖も其用互に讓るまじきが如く諸祖天神に出たる八百萬神の御功業各自に在て相等しからざるは此に同じ）大殿祭詞には此を天津御量と云り萬葉二に神分々と書る字義などをも察らむ可し〇我皇御孫之命波の我は臣民百姓より指す我にて萬葉に多く八隅知之吾大王また遠神吾大王また明津神吾皇₁と續けたる吾と同意なり（後釋に我は皇祖神等の我なりと云れたれど此は然らず大殿祭詞に皇我宇都御子皇御孫命と詔給へる我で皇祖神等に係れる我なりける）皇御孫之命の孫は厤の言に借用ひたる字にて已に云る如く天下を統（スベシラ）御し給ふ御身と申す義なり然れば孫は子孫の謂に非ず記紀に依て攷るに天忍穗耳命と邇々藝命と二柱への御事依しを合せて此に云れば皇御孫之命の尊稱は天忍穗耳命に起れるを傳へさせ給ふ者なりけり（此事大殿祭詞の下に委しく注せれば其を見て曉る可きなり）〇豐葦原乃水穗之國乎安國止平久所知食止事依奉岐は上に出（大殿祭詞の下に已に說りき）

如此依志奉志國中爾荒振神等乎波神問志爾問志賜比神掃爾掃賜比氐語問（コトヽヒ）志磐根樹立草之垣葉毛語止氐天之磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐天降志依左志奉支（マツリ）

如此依志奉志は上に事依奉岐と何を切て下に語を起す料に又上に結めたる語を呼出したるなり〇國中爾後釋に云く此祝詞の內に國中と云るに二有り一は俗言にも國中と云ふ意にて此所は其なり久奴知と訓べし萬葉五又十七に久奴知許等基等と有るに依れり今一は四方之國中と有る其は四方の國の中央の意なり（〇今云實に然る言なり然れば諸本に久邇邪迦と有る訓は誤訓（ヒガヨミ）なり）〇荒振神等乎波後釋に云く荒振神と云るは書紀に謂ゆる殘賊强暴橫惡之神の倫のみには非ず凡て天神に歸順ひ依來ずして疎々しき神を汎く云るか當其大名持神も未天神に歸順ひ給はざりし程なれば然云べし借依來ずして疎々しき

を荒ぶと云る例は萬葉二に云々住鳥毛荒備勿行四に筑紫船未毛不來者豫荒振公乎見之悲左十一に白濱浪乃不肯縁荒振妹爾戀乍曾居此外にも猶多し古今集にも故郷に非ぬ物から我爲に人ゝ心の荒て見ゆらむ」今云此說の如く眞に大名持神はしも御父須佐之男大神の御功業と繼奉給ひて國土經營の御功德を立させ給へれば中々に彼殘賊强暴横惡之神の倫には非ず素より天下は皇御孫命の所知食す可き正旨をも所知食ぬ神には在まさねども其皇御孫命に此國土を避奉給はざりし程はしも天神の御許にも未參上り給はざりしかば唯大凡に疎々しく御在せりしが故に此をも一に荒振神とは云りしなり然るは國土經營の事に係つらひ給ひては天上に參上給はむとは所思しながら御暇非ざりしかば自然疎々しく御在せりし者なり然るを記紀の文共に此神の初は忠ならざりし如く記されたるは甚足ぬ事なりけり（其は出雲神賀詞の解に委しく云べし又上なる御門祭詞なる疎備荒備の下にも荒振の義を說註（イヘ）りき）此大國主神の天神に歸順ひ奉らむ御心は御在しつゝも其事を速にも物爲させ給はざりし事は深く所謂有る事なり其は此大地萬國はしも伊邪那岐大神より須佐之男命に事依し給へりし所なり然るに其大神初には此大地を治給を事を諱て伊邪那美命の在せる根之堅洲國に往坐むと所思して泣哭給ひければ心の任に罷る可く詔給へりし故に其御暇給はらむとて天上に參昇給ひ天照大御神と御誓の間に生坐る三女神五男神在り若て男神は大御神に女神は須佐之男命に附属給ふ大御神の御定の任々に奉らせ給へりしが日繼御子と此時より定め置せ給ふ所なる故に其三女神を須佐之男命に副て天降し給へる大御神の詔命に汝三神云々奉レ助ニ天孫ニ而爲ニ天孫ニ所祭也と詔給ひ須佐之男命の御言に吾兒所御之國と詔給へるも右の天孫に坐せば大國主神の知給はぬ故無く又其三女神は其嫡后としも成給へれば其御旨は甚能く所知食しか故に越八國を討平給ひし文にも我造坐而令國者皇御孫命平世所知依奉とも見えたれば此國を造坐しは皇御孫命に奉らせ給はむ下搆なりしかは如此く宣へる者なり（師の古史徴には國避の時の事を爲られたるを予も始は然思へりしかども然有ては大國主神の素より此國を造て皇御孫命に奉らせ給はむと所思る淸き明き御心を覆ひ隱し奉る事なれば今其說を改めつ）然らば天神の詔命の下るや否奉らせ給ふ可きを默止給ひて度々の御使を受賜はらせ給ふに及ぶまじき理なるを其事の速ならざりしは如何と云に一には此國土を全く修理

り畢給はざれば御父神より事依され給へる事を竟(ハタ)し給はざれば全く整奉給はまく思ほし二には此國に荒振る邪神有る其を悉くは討平げ給はざるが故に天神之御子とは申せとも容易に治平させ給ひ難く三に大國主神と爲り顯國玉神と爲りて國土を經營給へるは己命の御心と起れるに非ず御父大神の御命にて其即伊邪那岐大神の御命にて其即天神の御命なり已に大凡の績を建給ふ事は皇祖天神の御恩頼に依る所なり然れば何方迄も此大地に就たる御事依しの事無ては後來御功を立させ給ふ事亡(ナク)なる故に此上の御命を待給へりし事決し如此く三の子細共有が故に初度に天穗日命二度に天夷鳥命三度に天若日子四度に經津主神武甕槌神を天降し給へりしかども容易く歸順給はざりしを唯幽冥事顯露事の依し別を承給ふに順ひて直に歸順ひ奉給へりしは豫て然有欲しく所思るが故なる者なり（唯是は百千が一を顯し申にこそ有けれ中々此所に盡し竟べくも非れば唯其大較を少か云る耳なり世人の餘りに此神の素より此國土を皇御孫命に奉らせ給はむ御心にて物し給へりし事を知ぬが悒ほろしく且は畏さに片端をだにとて云出るになむ）然れば後釋に次なる神掃云々は荒振神に係り神問云々は事を大名持神に係れゝば云々神乎波神問志爾云々荒振神乎波神掃云々と分て有べき事なるに唯荒振神等と耳有るは大名持神も荒び給へる如聞えて如何なれども語を省きて如此も云べきにや」と云れたるは然る言ながら已に說れたる如く荒振とは唯踈々しき耳の意なれば本より一に云る者なりけり（然れば其踈々しき方より又凶惡の事に至り流るゝも多ければ遠く天上より宣はむには然も云べくこそ）○神問志爾問志賜比此の辭の比字本には無きを神宮本に有に依て補へり（次に神掃爾掃賜比氏と有ると對へて書る所なればなり）古事記（御天降段）に爾天鳥船神副建御雷神而遣是以此二神降到出雲國伊那佐之小濱而拔十掬劒逆刺立于浪穗趺坐其劒前問其大國主神言天照大御神高木神之命以問使之汝之宇志波祁流葦原中國者我御子之所知國言依賜故汝心奈何爾答白之僕者不得白我子八重事代主神是可白云々故爾問其大國主神今汝子事代主神如此白訖亦有可白子乎於是亦白云亦我子有建御名方神除此者無也云々故更還來問其大國主神汝子等事代主神建御名方神二神者隨天神御子之命勿違白訖故汝心奈何爾答白之僕子等二神隨白僕之不違此葦原中國者隨命既獻也また神代紀（天孫降臨段正書）には此御使を經津主神武甕槌神として二神於是降到出雲國五十田狹之小汀則拔十握劒倒植於地踞其鋒端而問大己貴神曰

高皇産靈尊欲下降ニ皇孫ニ君中臨此地上故先遣ニ我二神ニ駈除平定汝意何如當レ須レ避不時大已貴神對曰當レ問ニ我子ニ然後將報云々時事代主神謂ニ使者ニ曰今天神有ニ借問之勅ニ我父宜レ當レ奉レ避吾亦不レ可レ違云々故大已貴神則以ニ其子之辭ニ白ニ於二神ニ曰我帖之子既避去矣故吾亦當避云々又同紀（同段第一ノ一書）に故天照大神復遣ニ武甕槌神及經津主神ニ先行駈除時二神降ニ到出雲國ニ便問ニ大已貴神ニ曰汝將ニ此國ニ奉ニ天神ニ耶以不云々故大已貴神以ニ其子之辭ニ報ニ乎二神ニ二神乃昇天復命而告之曰葦原中國皆已平竟と有る此を謂なり大國主神は素より天神御子に此國土を奉らせ給ふ御心にて此國を經營り主領坐れば其事竟て今奉らせ給ふ時なりや以不（イナ）やと問せ給へる趣なり然れば後釋に此神問志爾問志賜は大名持命に係れる語なりと云れたるは實に此事を徹視したる確説なる者なり（此後釋の説に依てぞ大國主神と荒振る凶惡神との差異鮮明なる事を得て甚愉快く思ゆ右の經津主神武甕槌神は此二を兼に天降給へる事下に引る出雲神賀詞にて知れたり然るを此迄の説者大國主神を討平に降されし由に説なすは餘りに事實に闇き者なり）○神掃爾掃賜比は遷却崇神詞には神攘攘給比と作り偖此の神掃爾の爾字神宮本に有に依れり（後釋にも爾字本には無きを考に加られたるに依れり上の神問志爾の所に此字有ればなりと云り）古事記（天降御段）に爾高御産巣日神天照大御神之命以於ニ天安河之河原ニ神ニ集八百萬神ニ集而思金神令思而詔此葦原中國者我御子所知國言依所レ賜之國也故以下爲於ニ此國ニ道速振荒振國神等之多在ニ是使ニ何神ニ而將ニ言趣ニ爾思金神及八百萬神議白之天菩比神是可レ遣故遣ニ天菩比神ニ者乃媚ニ附大國主神ニ至ニ于三年ニ不ニ復奏ニと見えたる此文義を思ふ可し此前文に豊葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝氐有祁理と有る甚く暗擾る者は道速振荒振國神等にて御紀に殘賊强暴横惡之神と有る此なり大國主神の事は素より此國は天神御子に奉らせ給ふ可き由緒有が故に天神の御許にても其事は御心に留めさせ給はず唯其殘賊强暴横惡之神を平治させ給はむ爲に天菩比命をして其消息を見に天降し給へるなり出雲神賀詞に天穗比命乎國體見爾遣時爾天能八重雲乎押別氐天翔國翔氐天下乎見廻氐返事申給久豊葦原乃水穗國波晝波如ニ五月蠅ニ水沸支夜波如ニ火瓮ニ光神在利石根木立青水沫毛事問天荒國在利然毛鎭平天皇御孫命爾安國止平久所知坐之米牟止中氐己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天荒留布神等乎撥平氣國作之大神毛乎媚鎭天大八島國現事顯事令ニ事避ニ支と有る此にて能判然たり古事記

に道速振荒振國神等之多在と見えたるは此に晝波如五月蠅水沸支夜波如火瓮光神在利石根木立青水沫モ事問と有る此を謂なり偖天菩比命は其消息を見に降坐しかども大國主神其國に在て其道速振荒振國神等を討平て此國を經營り給ひし程なりしかば其太(イミ)しき御功を稱給ひ且は皇御孫命に此國を避奉給へと其御心を取給へる間三年に及べりしとなり其は神代紀に夫大巳貴命與少彦名命戮力一心經營天下云々其後少彦名命云々至常世郷矣自後國中所未成者大巳貴神獨能巡造遂到出雲國乃興言曰夫葦原中國本自荒芒至及磐石草木咸能強暴然吾已摧伏莫不和順遂因言今理此國唯吾一身而已と有ると此御天降没し能々引合せ讀て事意を知る可き者なり天穂比命は其央に降り給へる者と見ざれば心行ぬ事共多し若て其道速振荒神等を討平させ給はむ爲に經津主神武甕槌神を天降し給へる事は上に引る記紀の文の如し然るに其は大國主神を國を避奉し後に物爲給へりし後なり其道速振荒振國神等も其大神の生大刀生弓矢を以て摧伏(コトムケ)給ふ稜威に畏怖てこそ暫時和順ひ居けめども其神ならずは得理め給ふまじき強暴る神なりし故緒には起る可き氣勢有けむ此を以て神代紀天孫降臨段第二ノ一書に於是大巳貴神報曰天神勅教慇勤如此敢不從命乎吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治幽事乃薦岐神於二神曰是當代我而奉從也吾將自此避去即躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣故經津主神以岐神爲鄕導周流削平有逆命者即加斬戮歸順者仍加褒美と有る此に右の葦原中國本自荒芒至及磐石草木咸能強暴云々と有を合せて思ふに大國主神の當時まで顯露事を以て其邪神姦鬼を摧伏給へりしを今よりは皇御孫命の御業と其邪鬼を摧伏て平安く天下を知食す可しと奉置て退て幽冥事を治すとして岐神を二神鄕導(ミチビキ)に從はしめ給へるなり然れば此時已に二神の岐神を鄕導して言向給ふ所は即皇御孫命の顯露事なる者なり偖岐神は伊邪那岐命の投棄給ふ御杖に依て成坐るが下に引る常陸風土記に巖杖と信太郡に留置給ひて天上に復命し給ふに思ひ依れる事無にしも非ず此に因て鄕導者を御杖代と申事と見えて倭姫命の天照大御神の御正體を載奉て其鎭坐す國を求給ふ事など御杖代と申せるを思ふ可し又同紀同段正書に大巳貴神云々乃以平國時所杖之廣矛授二神曰吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者必當平安今我當於百不足之八十隈將隱去矣言訖遂隱於是二神誅諸不順鬼神等一云二神遂誅邪神及草木石類皆已平了其所不服者唯星神香々背男耳故加遣倭文神建葉槌命者即服故二神登天也と有も右の一書と同じ趣にて其物を以て云ると名を以て傳たるとの異有る耳なり今此を比校て說べし此に以平國時所杖之廣矛授二神曰吾以此矛卒有治功と有は一書に薦岐神於二神曰是當代我而奉從也と同事なり然るは岐神は御杖に成坐る神なれ

ば大國主神平國の時に杖せる御杖は岐神の神體と成給ふ所なり廣矛とこそは云へれ所杖之と慥に云るを思ふに決く御杖なり天孫若用此矛治國者必當平安と有るは一書に吾所治顯露事者皇孫當治云々と同事にて今より顯露事を知食むに吾所杖し廣矛を用て邪鬼を摧伏給はゞ國平安けむと白上給へるにて顯明の事の根ざす所幽冥に在れば其本を能く治給へと申す事なり常陸風土記（信太郡條）に天地權輿草木言語之時自天降來神名稱普都大神巡行葦原中津之國和平山川荒梗之類大神化道已畢心存歸天即時隨神嚴杖（俗曰伊川乃川惠）甲戈楯劒及所執玉珪悉皆脫履留置玆地即乘白雲還昇蒼天と有る嚴杖（俗曰伊川乃川惠）と有るは右の岐神の事に思合せらるゝ事なり（但正書の趣にては廣矛は天上に持上り給へる趣なれば風土記の傳に合ざるが如くなれども此は廣子の物よりは廣矛を用（ツカ）ふ事を主と申上給へるなれば難無し偖嚴字を本には哭と誤れるを師の決めて嚴ノ字なりと云れたるに依て改め川惠の二字を脫せるを師の補はれたる本に依れり）然れば神掃（爾）掃賜（比氏）は右の二神大國主神の本より荒芒る磐石草木の咸能く強暴るを摧伏させ給へりし央なるを今此國の顯露事を皇御孫命に事避奉給ふが故に岐神を薦め給へるを鄉導者として悉くに道速振荒振國神等を討平給へるを云なり今岐神の事に就て道饗祭詞を閱るに大八衢（爾）湯津磐村之如久塞坐皇神等之前（爾）申久云々根國底國（與里）麁（備）疎（備）來物（爾）相率相口會事無（氏）下行者下（乎）守（理）上往者上（乎）守（理）夜之守日之守（爾）守奉齋奉云々と有て此神の防護給ふ所の者を根國底國より麁び踈び來と云るなり其は右の御紀の一書に經津主神以岐神爲鄉導周流削平云々と有る此にて正書に二神誅諸不順鬼神等と有る共に同じ偖其不順鬼神等と云るは其所の細注に一云二神誅邪神及草木石類云々と有りて著さを其を委しく云ふ時は正書の首に彼地多有螢火光神及蠅聲邪神復有草木咸能言語と有るが如くにて其切る所は古事記に道速振荒振國神等と云ふ所に歸るなり（第一の一書に殘賊強暴橫惡之神と云ふ字を當たるは能其意を得て作る字なり能々右の次序を慥に心留べき者なり）偖其神掃ひに掃はれ奉りし道速振荒振國神と云るは伊邪那岐命の黃泉國より歸らせ給へる時に其黃泉國の穢れに觸給へる物を脫棄給ひしに依て其御身より放り出たる疾病神禍害神なる事已に此卷首にも說るが如し然るを大御身滌の徵信に依て元の根國底國の方へ返し給へるに依て伊邪那岐命の大御身は淸まり竟給へれども已に此土にて成れる神等なれば黃泉戶の內に悉くは歸りも竟

ざれども岐神を其黄泉戸に塞りて守衛給ふ神なる故に黄泉國に屬る神は殊に恐こむ可き所謂なるに依て彼所に逐れ此所に逼られて其方に踈り此方に散（アラケ）て有つるに天照大御神の天石窟に入坐し世中は常夜往しより更に又此神ノ氣の滋蔓る事を得たりしかば其時より漸其勢ひ甚強かりけるに大國主神の生太刀生弓矢を取持して八十神を山尾に追伏せ河ノ瀬毎に追掃給ひし時其八十神に託（ツキ）たる限りは滅されけめども尙悉く平安（シヅマラ）ざりしかば廣矛を御杖と杖して計平給へれども猶踈び荒ぶる事止ざりけり此時しも天神の天忍穗耳命を天降し坐むと所思しゝ程なりけるに此國の甚く喧擾しかば經津主神武甕槌神を以て言向給ふ可き天津神量なむ成れりける（但上に引る出雲國造神賀詞に見えたる如く天穗比命を國體見に遣はせられて其狀を見留て後に思金神に思しめ給へる所なり）然るは人に乘て疾病を與へ禍害を行ふ右の神等は此國土にて生れりと雖も元來黄泉國の穢惡に染て成れりしかば其元因に依て黄泉國に屬く所なるが故に道饗祭詞には根國底國與利麁備踈備來物とは云り然れども其脱棄給ふ所の身に着る物はしも伊邪那岐命の此國より大御身に着て幸行る所なるが故に此國の物質に依て成れるを以て彼國には屬ながら此國に在る事と通えたり（此事の因に依て天神の御許にて道饗祭の神事を定させ給ひて皇御孫命に授奉給へり其委曲は其詞の下に云を見る可し）偖右の神等は黄泉國の穢に依て起れゝば其黄泉國に幸行す事の勿らましかば出來ざる可き事なるを然る醜國に何故幸行せりけむと云ふ已に先師等も說れたる如く伊邪那美命火產靈神を生坐りし故に御陰を被燒坐る此に依て其火穢を避給はむ爲に石隱れ給へるを其より遠く黄泉國に往坐りしかば愛しき我汝妹命や子の一木に易つる哉と宣給ひて終に其火產靈神を打斬給ひけり但此等の事は天地万物造化の始に必斯在る事等の無ては得有るまじき甚止事無き天神の御議に成つる事ならめども其殺れ給ふ火產靈神の御心に豈能く此を所思さむや御母神の黄泉國に往坐しは然こそ御父神に對て御心苦しく思ほしけめ其殺され給へる後に伊邪那岐命の其國に追往しけるに黄泉戸喫を爲給ひて此國に還らせ給ふ事の成難なるも火產靈神の其國を惡み所思すが上に況て其國の火などは殊に忌諱ませ給ふ理なれば此より後は其黄泉國を防ぐ御稜威も又甚じかり此火の穢を禁む事本なり又穢より殃の起る緣なり（又人の靈性は火に觸る者なるが穢を嫌ひ淸きを悅ぶ所以なり）然れば其黄泉國に屬る邪神を

誅はむ事は誰か在む右の火產靈神の統なる神に非れば其勢勝べからざる所を思金神の深く遠く思慮給ふか故に天照大御神の天石窟隱の時も多くは火產靈神の系脈の神等に負せて其幣物を作らしめ給へるに其思慮の如く大御心に叶へるが故に大御神の石戸を出坐て天地の底際の內に照明らせ給へる感應有り（然るは此時の幣物を天香山に採れるは云も更なり其天兒屋命を始として數多の神々悉くに火產靈神に由緣有るが出給へる事日本紀傳に委しく云べし）又此御天降に就て國土を和平給へるにも國中に道速振る荒ぶる惡しき神等は上に說る如く黃泉國に根ざしたる神なる故に火產靈神には甚く畏怖る可き理なり此を以て古事記（御天降段）に於是天照大御神詔云亦遣ニ曷神ニ者吉爾思金神及諸神白云坐ニ天安河河上之天石屋ニ名伊都之尾羽張神是可遣若亦非ニ此神ニ者其神之子建御雷之男神此應遣且其天尾羽張神者逆ニ塞上天安河之水ニ而塞レ道居故佗神不ニ得行ニ故別遣ニ天迦久神ニ可レ問故爾使ニ天迦久神ニ問ニ天尾羽張神ニ之時答下白恐之仕奉然於ニ此道ニ者僕子建御雷神可上遣乃貢進上と見え神代紀にも是後高皇產靈尊更會ニ諸神ニ選下當レ遣ニ於葦原中國ニ者上僉曰磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經津主神是將レ佳也時有天石窟所レ住神稜威雄走神之子甕速日神甕速日神之子熯速日神熯速日神之子武甕槌神此神進曰豈唯經津主神爲ニ丈夫ニ而吾非ニ丈夫ニ者哉其辭氣慷慨故以即配ニ經津主神ニ令レ平ニ葦原中國ニと見えたり此二神共に火產靈神の御子孫にして思金神の謀に合ひ給ひ此國に降坐て彼道速振荒振國神等を悉くに削平給へる事豈少緣の事ならむや必然る可き理有るに依てなり（尙岐神の事は道饗祭詞の下に注れば此所に引合せ見べし倭後釋に此神揺爾揺賜比氏は荒振神に係れりとは能謂れたるなり倭遷却崇神詞には神攘々給比神和々給氏云々と有り）○語問志磐根樹立草之垣葉毛乎語止氏。は卷九（大殿祭詞）に出たり其下に注り（但此は次に皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氏と有るに用有る事なり其は已に注せりき）後釋に云く垣ノ字朝野群載には破と作り○天之磐座放は大殿祭詞に皇親神魯岐神魯美之命以氏皇御孫之命乎天津高御座爾坐氏天津璽乃鏡劒乎捧持賜天言壽宣志久云々と有を合せて思ふに此詞に天之磐座と云る者と彼天津高御座と同じ物にて皇祖天神の御在所を云稱なり（但右詞は皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氏云々と有るは皇御孫命の國土に天降坐て天下所知む御座を云なれば別なり）古事記には天之石位と作き神代紀には天磐座此云ニ阿麻能以簸矩羅ニと見えたり神名式に伊豆國賀茂郡伊波久良和氣命神社と有るは決く石門別神と通ゆるに此詞に天津神波天磐門乎押披氏と有など彼此集め

て思ふに天磐座天磐門共に同じ御在所を云事ながら內外の差別を立て稱ふ所なり（所以に天磐座には離と云ひ天磐門には排と云ふ例なり唯右の神名の伊波久昆和氣希らし神武天皇御紀に闢ニ天關一と有る闢を開に作て伊波久昆と訓る事なれども當らず伊波斗とこそ訓べく思ゆれ）放は波那知と訓べし天神の御許を離ち奉給ふと云事なり（後釋に放は波那知と訓べきが如くなれども次の天之八重雲乎云には皇御孫命の御上を直に云語なれば其と同じく放をも波那禮と訓む方穩なる可し」と云れたれど然らず此は天降し坐す皇祖神の御方に就て云所なり）○天之八重雲乎とは祈年祭（大御神宮）詞に青雲能靄極と有る其にて天霧に充滿たる所の氣を謂なり古事記には八重多那雲と見え萬葉歌には天雲之八重搔別氐と詠り八重とは天霧に垂靡く青雲の幾層にも層なり充塞れる象を云なり一條兼良公御說に天八重謂ニ雲路幽遠一也と宣へる如し（但右の青雲能靄極に對へて白雲能墜坐向伏限と並べたる白雲は右の八重雲とは別なり青雲は天際より大地外なる冷際と云ふ迄に通れる物なるが白雲は山岳江海より蒸せる所の氣にて雨露霜雲と爲る物此なり右の青雲と白雲と共に水氣なる物から少か差別有り青雲は人の普知ず吐き納る呼吸の如く白雲は態と吐出る氣息の如くなる者ぞ）○伊頭乃千別爾千別爾は神代紀（正書）に皇孫乃離ニ天磐座一且排ニ分天八重雲一稜威之道別道別而天降云々と有る如く千別は道別なり神武天皇御紀には闢ニ天關一披ニ雲路一駈山蹕戾止と有り古事記にも押ニ分天之八重多那雲一と有り分の語を以て其有樣を想像奉る可き事なり右の天之八重雲は天霧に幾層々充塞る所の水氣にて而も甚剛烈しかりければ譬へば人の波を披分て水底に入るが如く天國より此土に降着く迄の間其氣の之くに任せなば如何なる遠き虛空にか廢れ亡らむ甚恐こき境なり所以に伊頭乃千別爾千別とは云り（天照大御神の生坐りし時も天柱を以て天上に送上と有り天柱とは風神なり此天霧はしも殊に風神の稜威ならでは行べからざるなり）○天降依志奉支は後釋に凡て皇御孫命の御天降の時の此等の語を讀事心得有り皇御孫命の御自の御上より云時は放は波那禮天降は阿麻久陀理と訓べし然るに此所は下に依志奉支と有て皇祖神の詔命を以て天降らしむる方より云なれば天降は阿麻久陀志と訓べし（中略）漢文にて云はゞ令下皇御孫命放ニ天磐座一云々而天降上と書く心なればなり（天降しの志は令の意なり云々）と有り（以上採要）

如此久依左志奉志四方之國中登大倭日高見之國乎安國止定奉氐下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氐皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氐天之御蔭日之御蔭止隱坐氐安國止平氣久所知食武國中爾成出武天之益人等我過犯家牟雜々罪事波

如此久依左志奉志云々は遷却祟神詞にも皇御孫之尊乎天降所寄奉支如此久天降所寄奉志云々と見えたり（但言の續きに少異有るなり其は其所に云べし）○四方之國中登後釋に天下四方の國

の中央也考に國の眞中又國の奥區(マホラ)など訓べく云れたるも意は然る事なれ共然は訓難し字の任に久爾那加と訓て國の中央と聞ゆる也凡此祝詞など其字の定まれる訓を離れては訓べからすト有り登ノ辭は登志氏と云意なり現御神止御宇天皇など申す止も其意同じ遷却崇神詞にも四方之國中止と見えたり藤井高尚が後々釋と云ふ書に國中爾と改たるは通本の中臣祓詞と云に依れるなる可けれど中々なる僻事なり此は登は漢文に書ば爲二四方之國中一と云事にて次なる大倭日高見之國を主として云語なり四方之國中爾と云時は其義に於て主客の相違出來る者なり ○大倭日高見國乎は其始高千穗宮にて天兒尾命の定申されて宣給へる時には其地名をぞ稱給ひけむを神武天皇の橿原宮にて用給ひし時ぞ大倭とは冠ふらせ給ひけむかし然れど日高見之國の號は其高千穗宮にて稱初たるならむ其は古事記御天降殿に故爾詔二天津日子番能邇々藝命一而離二天之石位一押二分天之八重多那雲一而伊都能知和岐知和岐氐於二天浮橋一宇岐士摩理蘇理多多斯氐天降坐于笠紫日向之高千穗之久士布流多氣一云々於是詔云此地者向韓國眞二來一通笠沙之御前一而朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地詔而於二底津石根一宮柱布斗斯理於二高天原一氷椽多迦斯理而坐也と有ふ朝日之直刺國夕日之日照國と詔給へる大御言ぞ日高見之國と云語の起とは聞えたる日向風土記に宮崎郡高日村昔者自レ天降神以二御劔柄一置二於此地一因曰二劔柄村一後人改曰二高日村一と有れど本より高日と云ふ所有て其所に劔柄(タカヒ)を忘れたる故事も有けむが一に成れるなり高日も日高も同じ事なるを思ふ可し然れば日高見の號は此傳を用て說べし向韓國云々は神代紀正書に膂完之空國自二頓丘一覓國行云と有る其にて膂完之空國は其背向(ソガヒ)なる地名也頓丘は其高千穗の內なる大宮所と爲る可き小丘き地なるが其地より笠沙之御前を視徹せる由也如此く四方は皆打晴て朝日より夕日迄天津日の甚能く見ゆるが故に此地ぞ吉地と詔給ひて大宮柱太敷き坐り此に因て日高見之國の號起れるなり日高とは天日を云事なり天を高と云事古今に多き事なり然れば天日の能見ゆる所を云ふ義と心得て然る可し若て國號の日向と云も日高見に異らず又皇大宮の事を內日刺宮と續け云も皇大宮は天日の能利入る地を選び建らるゝ右の故實に依が故なり日向國號は景行天皇十七年御紀に幸二子湯縣一遊二于丹裳小野一時東望之謂二左右一曰是國也直二向於日出方一故號二其國一曰二日向一也と有る其時に定れるなれど直に向於日出方と右の朝日之直刺國と同じ趣意なるを思ふ可し此に因て日向と日高見と又遠からぬ語なる事を知べきなり又內日刺宮とは內は全(ウツ)の借字にて晨朝より黃昏に至る迄天日の刺入るを云ふ古事記朝倉宮段哥に麻岐牟久能比志呂乃美夜波阿佐比能比傳流美夜由布比能比賀氣流美夜云々と詠るにて著し如此く天日の能刺す地を選び宮室を營給へる起本は其始天日宮より天降坐しに依て其御本生所の親はしく所思るがに始れる事なり此に就て天下の日民の天日を偉度(オムカシミ)こする性有る幽理有る事なれど其は別に云り 若て神武天皇大和國に皇大宮を建させ給ふにも其制度に因准せ給ひて日高見之國なる地に都爲給へり橿原宮此なり御紀に東有二美地一青山

四周云々彼地必當レ足下以恢二弘天業一光中宅天下上蓋六合之中心乎と有るは此なる四方之國中登云々に當り又觀二夫畝傍山一東南橿原地者蓋國之墺區乎可レ治レ之則命二有司一經始帝宅一と有るは此に大倭日高見之國乎安國止定奉氐云々と有るに當れゝば必其高千穗宮にて用られたるに其義違はざるを以て大倭の字の冠て御世々々橿原朝の任に用らるゝ所なり然れば此詞は高千穗宮に世れる事疑無し此詞を神武天皇御世に成れりと云說も此大倭日高見之國乎云々の事にこそ少か叶へりとも云め凡ては高千穗宮に御天降の始の事を主と云るに叶はず且橿原朝などに定められむには譬ひ御天降の故事を序(ハシメ)に出されむにも尙取捨有る可き事多かるなや倭日高見之國とは四方は皆打晴たる平なる地の內にて小丘き所はしも天日の能く見ゆる地には何所にも云事と通えて景行天皇御紀に東夷之中有二日高見國一また蝦夷已平自二日高見國一還西南經二常陸一至二甲斐一と見えたる此は神名式に陸奥國桃生郡日高見神社有れば其邊なる可し常陸風土記に信太郡古老曰難波長柄豐前大宮馭宇天皇之世云々分二筑波茨城郡七百戶一置二信太郡一此地本日高見國也と有は地形に依て日高見國と云るに非ず地名なれど元來地形に依て號る所成可し記傳に續紀三に紀伊國阿提飯高牟漏三郡と有る飯高を和名抄には日高郡と有り又豐後國の郡名日高は比多と和名抄に見ゆ風土記には日田と有り是に因て思へば飛彈國も日高國かと云れたるは然る言なり現存六帖に出る日の高見の國を安國と祈る本をば神や照さむ」と詠るは後釋に日高見國とは山遠くして打晴て平に廣き地を云なり山の近き地にては山と空の日との間近く見えて日を見る事低きを打晴て廣き地は山の遠き故に山と空の日との間遠くして日の高く見ゆる物なればなり大和國の中央は廣く平なる地なるを以て如此云り何れの國に云るも皆同じ事なり」と云れたるに能叶へり或者此說を辯(トガ)めて日高とは今世に入日の暎の多かるを未日は高いなど云類にて晨朝より黃昏迄の間日光を見る山の稱言なりと云れども其切る所後釋の說の如くなるなや又天書と云書に日高見國者所謂天府也と云るも妄說と聞ゆ〇安國止定奉氐は皇御孫命の大宮に安見し給ふに就て云なり神代紀天孫降臨段第二ノ一書に故天津彥火瓊々杵尊降到二於日向槵日高千穗之峯一云々時皇孫因立二宮殿一是二焉遊息と有る遊息字を夜須美麻須と訓る此は宮殿に坐て天下を所知看す事を安見坐と云事の有を言以て傳はりし故に遊息の字義ならむと當たる者にして遊息字に音無く安見坐の言に義有りて傳はる所なり正書にも任レ意遊レ之と作れたり宮殿の內に棲給ふは遊息と云むも僻事ならぬが如くなれども其は古義ならず宮殿の天皇の天下を統御す爲の御在所にして遊息する所に非ず後釋に此安國は大宮敷在して安見し給ふ國と定むるなり上に廣く天下を所知食を云るを宮敷在すと指す所の異なれども安見し給ふ意は等し」と云れしは然る言なり古今六帖に出る月の高見の國を安國と祈る口をば神や照さむと詠也尙此安國の事已に大殿祭詞の條下に云り但後釋に安國は殊に畿內の大和を云て此は神武天皇よりの御事なれば即其御世より大祓に云習へる詞にても有べしと云れたり其は大倭云々と云に依れば然る言ながら高千穗宮の故事を思漏されたる說なれば其允當を得ず〇下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千

木高知氐は已に引る古事記（御天降段）に天津日子番能邇々藝命云々天ニ降ー坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣ニ云々於是詔云此地者云々而朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地詔而於ニ底津石根ー宮柱布刀斯理於ニ高天原ー氷椽多迦斯理而坐也と有ゐ此にて此高千穗大宮造を申せる稱言なるを其任に取用ひて神武天皇より以來大和國に敷坐る皇大宮を申せるなり（後釋には此事を高千穗宮の事とは心着れざりしなり偖此語は上に卷二第四詞の下に云り）○皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氐後釋に美頭は物の麗美しきを稱云なり御舍は御殿なり仕奉は此は造奉るを云ふ（凡て下なる者の上の爲にする事をば何事にても仕奉と云なり今俗言に仕ゐと云は即仕奉るを訛れるにて其仕ゐも物を造る事にも云ふ此の仕奉るも其に同じ）偖御舍の下に爾と訓附るは僻事なり祈年祭詞には瑞能御舍乎と有る此も其意なり（但此には乎ノ字無れば乎とは訓べからず乎は省て云も常也）と見えたり此等の委しき說は已に云り（卷二第四詞卷九大殿祭詞）○天之御蔭日之御蔭止隱坐氐は上に出（卷二第四詞卷九大殿祭詞）○安國止平氣久所知食武國中爾と有る此は上は皇御孫之命波豐葦原乃水穗之國乎安國止平久所知食止事依奉岐と云るを受て今より以後に皇御孫命の御世所知食む事を如此云るなれば此は決めて皇御孫命の天降來坐て未程も無くして此大祓の事を行はせさせ給ふ其時にぞ如此は申せゐならむ所知食武と云ふ事は未然らざる以前なれば其時は何か在む高千穗大宮にして大嘗の大御政聞食し初さぜ給ふに就て其時の御禊に申初たるらむと所思る由は美頭乃御舍仕奉と有るは其天降坐し始大殿造り爲給へるが其事に就て大殿祭は行はれ大殿祭には大嘗祭の共に行るゝ所由已に前卷（大殿祭條）に說る如くなればなり（立復りて此初に在ゐ宣命に此禮挂作男手禮挂作男の下に云る說を引合せ見る可し）偖安國止云々の事以上三所有るに各其意に異る所有り其は初に安國止平久所知食止云々此は皇御孫命を天降し奉らせ給ふ皇祖天神の御事に係れるなり次に安國止定奉氐云々と有るは高千穗の皇大宮に仕奉られし伴緒の神等の用（コト）なり此に安國止平久氣（ニクサキ）所知食武は其宮に初國所知食し初る皇御孫命の御以後の御事を申せるなり此等の文脈を以ても此詞の高千穗宮に出來りし事更に疑を入るゝ所無くなむ有ける（若て此詞次なる國中へ續けるにて此所にて斷絕（キル）るに非ず然るを藤井高尙が後々釋に高天原に神留坐より安國止平氣久所知食武までは序文なりと云るは云にも足ぬ惡說なり憐れむ可し）國中爾は天下四方の國々の內になり（此事上に國中爾と有る下に云りき）○成出武は御天降の始なれば人はし茂此國土に多からざるを此より後逐々に人草の生出む事を云なり（已に橿原宮より以來と爲ては世を歷く多く成行けとも尙彌が上にも年月に多く成る物なる）

が故に古の任に成出牟とは云り　人の生るゝ事を那流とも那須とも宇武とも宇麻流とも阿流とも云ふ語の有る其那流は古事記に於高天原成神名天之御中主神云々次成神名云々などの成にて又以₌爲生₌成國土₋など有る此なり記傳三に此は本より無き物の初て出來るを云と有り　今も不成子（ナサヌコ）など云る類なり　宇武は古事記に宇麻志阿斯訶備比古遲神と申す神名有る此は高皇產靈神皇產靈二神の產靈に資て浮脂の如き一物を大虛中に生成給へるに依て出來れる語にて物の熟して成る意なり言義は得眞にて其御交合の感有て其精眞の聚て物と成る由なり　神代紀には右の宇麻斯に可美ノ字を當られたる如く物を稱美る語と成れるも世に物事はしも多く有れども物の出來るより愛たき事非るが故に稱美の語と成れり　阿流は阿禮坐御子等など云る其にて形の出來顯るゝ由なり　萬葉一に安禮衝武と詠るも生繼武と云事にて賀茂祭を御阿禮など云る此に同じ　此三を合せて思ふに宇武とは其質を爲すを以て云ひ阿流とは質を成して顯るゝを以て云ひ那流とは其整へるに依て云事なり所以に生成と常に續けても云り偖此に成出武と云は自爲に非ず自然にして世に人の生出る事を云るなり○天之益人等　我考に云く古事記に伊邪那美命言愛我那勢命爲₌如此₋者汝國之人草一日絞₌殺千頭₋爾伊邪那岐命詔愛我那邇妹命汝爲然者吾一日立₌千五百產屋₋是以一日必千人死一日必千五百人生也と有此に因て世の人は死ぬるよりは生るゝが多ければ益人と云り　○後釋云彼伊邪那岐命の詔ひし任に世中の人は漸々に多く成以て行く中には國の亂に依て戰に許多亡（コヽラッセ）或は疫病など又諸の災などにて俄に多く亡る事なども有れば少くなる時も有れども古より永く通じて見る時は漸々に多く成行く事なり　偖此人は此國の人を云なれど其本天神の生給ふ由なれば天之益人と稱云なり」と見えたり實に然る言にて人身の世中に生出る事はしも已に祈年第三詞に委しく說るが如く天神の產靈に依る所なり拾遺集に君見れば產靈の神ぞ恨めしき情無き人を何造りけむ」又狹衣に甚如此しも造り置聞えさせけむ結ぶの神さへ恨めしければ云々詞花集に心副へ結ぶの神や造りけむ解る氣しきも見えぬ君かな又長清集に解やらぬ人の心の悲さより結ぶの神を恨らみつる哉」元輔集に誇着侍りしに「千年をば我ならずとも木綿襷結ぶの神も契懸くらむ」十六夜日記にも晝つ方過行く道に目立つ社有り人に問ば結ぶの神ぞと聞ゆると云へば「守れ唯契結ぶの神ならば解ぬ恨に我迷はさで」春雨抄に「信濃なる逢初川の端にこそ宿世結ぶの神は坐ませ」など有り此等は徒に歌詞と耳思ふ事なれ其然る由緣無く詠むやは此を以ても二柱の皇

産靈神の人を造成坐ると云ふ古傳の世に明るなりし事を知べし但此は初卷なる神魂高御魂神の說に引べかりしを餘りに所狹くて煩はしければ此に出せるなり尙此事の委しきは古始太元攷日本紀傳等に讓て云はず是を以て考に天神の生給ふと云れたるを諾へるなり又此天之を數多之と意得て妙理有り然るは天は萬物を引伸し給ふ神の在る所にして世中の萬物は元其天氣を稟受て成る所なればなり天に遍くの義有など思合す可し但此は傳云ふ事なるが本義は天神の生出給ふ意なり偖後釋に凡て天之某と云は本邇々藝命の天降坐し始天より持來つる物を云又天の物に准じて造れる物慣(ナラ)ひて爲る事に云るも廣くなりて必しも然らぬ物にも事にも唯稱て云事と成れるなり天之益人も然なり云々」と云れたる大凡は宜しけれど天之益人の天之は其義に非ず○過犯家牟過とは仕損ひの事を云なり仕損ひとは思ひ違にて爲す事なれば後より然ては過てりと知るゝ事なり偖下に擧るは罪なるを過と宣まはせたる事彼天照大御神の惡行を詔直し給へると全同事にて必此は決めて天神の御心なる者なり後釋に云く諸の罪條の中には自然なる穢又自然有る災なども有る其は過犯とは云べからざるに似たれども此は然委しく事を分て云べき所には非れば姑く過犯す罪に就ても云べく又自然なる穢災なども其身にこそ過犯したるには非ね佗より云へは其も同じく過犯せるなり○今云過とは誤て犯す事の罪と成れるなり抑人の靈性はしも皇祖天神より授り奉る所の物なるが故に其本性の任に云ふ時は淸きを好み穢きを嫌ひ善を求め惡を去る物なり然るを自然の事にも我造る事にも穢と爲り惡となるは如何と云に外物を迎へて我性を易る故にぞ有ける所以に外物を見聞格知する事無くば其志を撓め其心を動かさぬに至る是を以て其罪を指て過犯と云事其何怜き言なり

上に所知食武云々成出武云々と云る武は後を係たゝ辭なるに此には家牟と云る家牟は過去し事を云辭なれば彼武と相協はぬが如くなれど然らず必如此有べき語なり其故は此所は先凡ては後の御世迄を係て云るなれば牟と云べし其中に此罪を過犯は其間大祓の時々に當りて其時迄に既に過犯したる罪を云なれば將來を係て云ふ中ながらも是は必家牟と云べき理なり但祁流多流などは云ずして家牟と疑ふは凡て將來を豫云ふ中なればなり凡て古は斷る詞用(ツカ)ひも委しく分れて混りならざりしぞかし○雜々罪事波後釋に罪事は都々美なれば罪事は都々美事也猶此事下に委しく云べし○今云都々美は其爲事の上に人にも恥らひて打出難く包み覆ひ隱すを云なり其は天神より受賜はれる神性の任に行ふ事共は人にも聞せ將欲しく見せ將欲(ホ)しき事のみなるを穢き事惡しき事の類は其反(ウラ)なる故に都々美なり雜々は種々にて即次なる天罪國罪を先一に合せて云なり」と有り偖此語は下なる天津罪止云々國津罪止云々許々太久乃罪出武へ係れる者なり

天津罪止畔放溝埋樋放頻蒔串刺生剝逆剝屎戸許々太久乃罪乎天津罪止法別氣氏

天津罪止考に次なる七の罪は須佐之男命の天にして犯し給ひし罪なる故に此類の罪をば後に此國人の犯せるをも天津罪と云なり」と見えたり大神宮儀式帳及倭姫命世記には此を天津罪止所始志罪波云々と云り倩此天津罪は衣食住の物を損ね破るを云ふ事なる由下なる天津罪止法別氣氏の下に云るが如し國津罪と告別るに深き所以有る事を予始て考得たりき止は後釋に登氐と云ふ意なり此處は常に云倣へる由を以て云ふ故に登氐と云なり登云而と云むが如し考には國津罪止八と有るに准ひて此にも止の下に八ノ字を加へられたれど然ては中々に意違へり本の任にて宜し朝野群載なるにも八ノ字は無しと有るが如し○畔放古事記に爾速須佐之男命云々離ニ天照大御神之營田之阿一と有る傳に阿は畔なり和名抄に畔田界也和名久呂一云阿世阿世は本畔背の義なり躬恒集に木芽生る時に至る迄苗代の畔をだに未作ざりけり」神代紀に是後素戔嗚尊之爲行也甚無狀何則天照大神以ニ天狹田及長田一爲ニ御田一云々且毀ニ其畔一毀此云ニ波那豆一古語拾遺に毀畔古語阿波那知と有り」と有り次なる溝埋の下考合す可し考に云く畔は田と田との間の界とし又水を貯ふる料なるを取放ちて界を亂し水をも漏しめぬなり○溝埋古事記に離ニ天照大御神之營田之阿一埋ニ其溝ニ云々又離ニ田之阿一埋レ溝者地矣阿多良斯登許曾我那勢之命爲ニ如此一云々と有り傳に云く神代紀に素戔嗚尊春則塡レ渠毀レ畔とも故素戔嗚尊妬ニ害姉田一春則廢渠槽及埋溝毀畔とも有り埋は宇豆米とも訓べけれと古語拾遺に埋溝古語美曾宇女と有に依れり埋其溝の其ノ字も訓べからず和名抄に釋名云田間之水曰レ溝和名三曾渠同レ上と云ひ又畎田中渠也和名太三曾とも有り倩畔を離は其田に蓄へたる水を涸し又水の多かる時は外より漫に入て溢さむ爲の態なり田界を混さむ爲なりと云に非ず神代紀に此種々の惡行共を春と秋とに分て云る中に此は春の事と爲るも水の爲なればなり又須佐之男命の御田の惡きを云とて川依田口鋭田など有も水に就たる名なるを思ふ可し溝を埋るは水を引するを妨げむ爲なり」と有り又考に溝は遠く水を引て田に灌む料なるを埋めて水を引べき田無らしむるなりと云れたるは殊に委しき説なり一條兼良公御説に渠謂ニ溝渠一通ニ水於田一者若土塡ニ於渠一則水滯廢而害稼穡也と有り○樋放神代紀寶鏡開始段第三ノ一書に廢渠槽此云ニ秘波鵝都一と見えたる渠槽は和名抄に械所ニ以通ニ陂竇一和名以比と有る此なるを切て比と云るなり廢は或説に毀レ之也と有り其意の古言なり物を剝(ハク)と云に近き語なり然らば廢(ハカツ)は剝棄(ハカツ)の意なる事云も更なり然るを此詞及儀式帳世記などには樋放と作り同意なり但神代紀に廢渠槽と一處有る耳にして此外に無し倩樋ノ字は右の械ノ字に易て用たるなり後釋に云く此樋は溝に在れ池に在れ構へて常には板以て塞て水を蓄へ置て其水を田に引用ふ可き時に彼板の塞をば放つ事なるに水の用無き時に放ち漏して田に水を溢れしめ且用有

る時の蓄へを失はしむるなり○頻蒔神代記に素戔嗚尊春則重播種子重播種子此云二璽枳磨枳一(シキ)と見え古語拾遺に重播古語志伎麻伎と有り後釋に頻は重なる意にて一度播置たる上へ又重ねて蒔を云なりと有り私記に言有二田夫一既播穀種而後他人重下レ種也と見へ此に依る時は人の播たる上へ我が種を蒔て我有なりと凌ぎ奪ふなり凡て種子を播には其地其物に依て各自の分量有るを尚其上にも蒔時は互に相逼りて速々(スク〱)とも生立ず又扶疏(シキモ)する事を得ざるが故に罪と為るなり○串刺考に神代紀寶鏡開始段第二ノ一書に是後日神之田有二三處一焉號二曰天安田天平田天邑並田此皆良田雖レ經二霖旱一無レ所二損傷一其素戔嗚尊之田亦有二三處一號二曰天樴田天川依田天口鋭田一此皆磽地雨則流之旱則焦之と有り須佐之男命の御田如此有る故に大御神の御田をも然有しめむとて串を多く隱し刺て下立難から令るなり樴串同じ事なり泥中に樴串の多く有る田に下立ば足を害(ソコナ)ふなり今も某ノ田には杭串有るなりと云て田人は心為れど猶誤て惱む類多し又右ノ文の續きに素戔嗚尊姤害二姉田一春則云々秋則捺レ籤伏レ馬云々此に捺籤を秋に就て云るは文に春と秋とを對へて云る耳なり古事記にも紀の本書にも分て云る事無しと有り以上採要然るを古語拾遺に素戔嗚神奉レ為日神一行甚狀無種々凌侮云々刺串古語久志佐志云々と有て如此天罪者素戔嗚神當二日神耕種之節一竊往二其田一刺レ串

相爭と有り此等を合せて思ふに此頻蒔串刺の二條は上なる畔放溝埋樋放など田を耕る害を為には非て其田を爭ふなり然れば右の頻蒔も私記に有二田夫一既播穀種而後他人重下(オロ)レ種也と云る如く人の種を播たる上へ我種を下して其種の類を以て人の耕れる田を我有と為て爭ふなり又此は串刺も忌部正通が說に捺籤者奪二人畔一立二己牓一也と云ひ一條兼良公御說に今世所謂田札也と宣へるなど先には信從ざりしかども今思へは寔に其如くにて秋に至て稻實の熟らみて漸々苅納る期に臨て己が牓(シルシ)の籤を捺て其主に令收ざるなり如此く見れば天樴田の說も違へり其天樴田は杭多き田にて此の串刺と異なる事今說るが如くなり○生剝逆剝(イケハギサカハギ)は古事記天石屋段に天照大御神坐二忌服屋一而令レ織二神御衣一之時穿二其服屋之頂一逆二剝天斑馬一剝而所墮入と見え神代紀正書に見下天照大神方織二神衣一居中齋服殿上則剝二天斑駒一穿二殿甍一而投納又第一ノ一書稚日女尊坐二于齋服殿一而織二神之御服一也素戔嗚尊見之則逆二剝斑駒一投二入殿內一又第二ノ一書日神居二織殿一時則生二剝斑駒一納二其殿內一と見えて生剝逆剝と列云ずして旁を省きたるを舊事記神祇本紀に右の正書と同傳有て其には天斑駒生剝逆剝穿二殿甍一而投納と見えたるを師も書紀の古本

に然在しなる可しと云れたり偖其生剝逆剝は古語拾遺に曰神當ニ織レ室之時ニ逆ニ剝生ニ駒ヲ以投ニ室内ニと有る其如くにて生て在る駒の皮を逆樣に剝ながら其任に生せ置て苦しむるを云なり（古事記に見えたる稻羽の白菟か和邇に其身の皮を剝れて痛苦しみ泣伏る如きも生剝逆剝の類なるを思ふ可し）然れば後釋に伊氣波岐（イケハギ）と云時は令レ生（イカ）置て剝意なり」と云れたる其說に依て訓可なり（伊佉波岐と訓むも生て置て剝意なれば惡しくも非れど猶令レ生置く方能く事實に叶へり）○屎戸 古事記（訶志比宮段）に見えたり（儀式帳世記此に同じ）古事記（天石屋段）に爾速須佐之男命云々亦其於下聞ニ看大嘗ニ之殿上屎麻理散故雖ニ然爲ニ天照大御神者登賀米受而告 如レ屎醉而吐散登許曾我那勢命爲ニ如此ニ又神代紀（正書）に復見天照大神當ニ新嘗時ニ則陰放ニ屎（クソマル）於新宮ニ又（第二ノ一書）及至日神當新嘗之時素戔嗚尊則於ニ新宮御席之下ニ陰自送糞（クソマル）日神不知徑坐ニ席上ニ由是日神擧體不平と有る此なり 神祇本紀には則於ニ新宮御席之下ニ放屎送糞と見えたり（記傳八に神代記に送糞此云ニ倶蘇摩屢ニと有り麻理は大小便を爲る事なり萬葉十六に屎遠麻禮竹取物語に燕の麻理置る舊糞など有り今世に大小便を取器を麻流と云るも此意ぞと有り）記傳三十に屎戸は久曾幣と訓べし上卷に屎麻理散と有る是なり戸（ヘ）字は借字 は幣理の理を省るにて即麻理散を云ふ（○後釋云久曾閇の閇は閇理の理を省ける言也如此樣の理は省く例多し日並知と申す御名を日並斯（ヒナメシ）と申か如し倭屎閇理と古事記に屎麻理と有と同事にて屎を爲るを云ふ）和名抄に痢久曾比理乃夜萬比また放屁倍比流と有る（又嚔（ハナヒル）の比流も本同言なり又俚言に屎の滑ゝなるを屁理屎（ヒリ〻）と云ふ）此比理と通ひて同言なり即今俗言に小蟲などの卵を生出して物に着け置を幣理着と云も此なり ○後釋云此屎戸（ツヘヘ）の戸ノ字を斗と訓て古語拾遺に當ニ新嘗之日ニ以屎塗レ戸と云るなどは皆僻事なり又考に屎處の意と爲られたるも惡（ワロ）し罪の目に屎戸屎處（クソトクソドコロ）など並云ては聞えぬ事なり天罪七な擧たる六は皆放埋蒔刺剝と其爲せる態の言を擧て罪名と爲れば此も閇理と云ふ態の言を云てこそ餘の例の如くには有れと有り又後釋に此は元須佐之男命の犯給へるは大嘗の殿を穢し給へるに依ての罪なれば此國土にして人の上にても穢すまじき所を此事を爲て穢すを罪とは云なる可し（中略）偖右七條の内頻蒔より下四條は本より體言に讀て罪名なれば其例の如く初の畔放溝埋樋放の三條をも體言に讀て罪名と爲可し凡て用言にても罪名に云時は體言に云成す例なり（譬へば今世にも人殺し火附け關所破りなど云ふ云樣の如し）と見ゆ 偖此屎戸の事に就て甚奇しき說なむ有ける然るは鎭火祭詞に神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹妹二柱嫁繼給氐國能八十國島能八十島乎生給比八百萬神等乎生給比麻奈弟子爾火結神乎生給氐美保止被燒氐石隱坐氐夜七日晝七日吾乎奈見給比曾吾奈妹乃命止申給支此七日爾波不足氐隱坐事奇止見所行須時火乎生給氐御保止乎所燒坐支如是時爾吾名妹乃命能吾乎見給布奈止申乎吾乎見阿波多志給比津止

申給氐吾名妹能命波上津國乎所知食志倍吾波下津國乎所知牟止申氐石隱給氐與美津枚坂爾至坐氐所思食久吾名妹命能所知食上津國爾心惡子乎生置氐來奴止宣氐返坐氐更生子水神匏川菜埴山姬四種物乎生給氐此能心惡子乃心荒比曾波水神匏埴山姬川菜乎以氐鎭奉禮止事教悟給支と見えたる水神土神を古事記には於尿成神名波邇夜須毘賣神次於尿成神名彌都波能賣神と見え神代紀にも伊弉冉尊云々に小便化爲神名曰罔象女罔象此云美都波次大便化爲神名曰埴山媛と見えて此神等は右の火神を鎭め坐す爲に成し給ふ所なり祝詞の文を味ふ可し水神は匏埴山姬は川菜を持て鎭奉れと仰給へる事師翁の說の如し若て天照す日御國は火產靈神の御母神の事に就て斬られ給へる血の昇りて照耀く御國なるに天照大御神の其御國を所知看すに至ては其火神の御德は悉く大御神の大御光に歸たるに所因有り其は大御神の天石屋に入坐れば火神の御德も隱れて世中は常夜往くを思ふ可し上に引る如く記紀共に須佐之男命の放給へるは御屎のみなれども神祇本紀に御紀第二の一書の傳と同しきが於新宮御席之下放屎送糞と有るは委しき者にて正說なり事實に於ても屎には屎の共に出る事無を尿には必屎の副ふ物なり然る故に屎のみを以て傳たる者なり伊邪那美神に屬坐る須佐之男命に坐る故に火神の御德の歸れる天照大御神の大御稜威を折き奉らむとしてぞ新宮の御席の下に陰に屎放り尿放り給ひけむ御紀に由是日神擧體不平と有に眼を着べきなり此伊邪那美神の火神を鎭給はむ料に御屎放りて土神水神を生給ひける事の報なる者なり但火神の御荒びは鎭めばこそ有め日神に此火神の御德は歸れるにも爲よ然は有まじき理なるに似たれども元來須佐之男神の惡行なれば必其驗無て叶はぬ事なり又右の續きに故以恚恨廼居于天石窟閉其磐戸と見えたるも祝詞に伊佐奈美乃命云々石隱坐と有る對也其は天照大御神はしも伊邪那岐命に屬坐る神に坐るが故に同じ樣なる事に成行たるにて此卷の首に說る如く須佐之男命の天上なる解除は伊邪那美神にも御禊なると同理なり如此く黃泉國段と天石屋段と各々相反對たる奇しき幽理有る事なり深く心を留めて味ふ可し

○許々太久乃罪乎後釋に云く此に如此云るは大祓の時に求るに右の類の罪共を萬民の犯したるが多く有を云なり天津罪の條目の猶外にも多しと云には非ず偖此は委しく云はば許々太久乃罪出武其をば天津罪と宣別氐と云ふ意なるを出武と云ふ言をば此には省けるなり國津罪の所に出武と有るに准らへて知べしと有り然る言なり偖此許々太久は曾許太久と相對へる語なり然るは考に云れたる如く此所其所と云意なり此故に其用法にも差別有る事にて許々太久は物の品を大凡に並擧て其許多き事を計り盡さずして云ひ曾許太久は物の品を擧ずし

て其數の多かる由を大凡に云なり　古書を讀むに此差別を立て見る時は大に益有り考に云く婆久太久(バクダク)音通ふが故に此を許々婆久とも曾許婆久とも云り婆久は波加里にて此所許其所許(コヽハカリソコバカリ)なり物を量り數ふるには添云ふ事幾婆久また荊婆加などの類多し　後釋に此言は古書中に許紀陀〇今云曾紀陀の對　許紀婆久〇今云曾紀婆久の對　許紀志〇今云記白檮原宮段に在り此對乎曾紀志と云語有けむを世に傳はらぬなり志は然にて形狀を云　許々婆〇今云久の省りたるなり曾許婆の對　許々婆久〇今云曾許婆久の對なり後釋に此言は古書には見えず今京の言なる由に云れたるは此對なる事を思漏されたり　許々陀〇今云今京以來の言に曾許良と云ふ有り許々良に通たれば此より訛れるか　許々太久〇今云曾許太久の對　又曾紀陀久曾許婆〇今云久の省りたるなり　曾許良久〇上の許々陀の下に云り　など種々に云るを萬葉に字は多く幾許と書り物數の多かるを計らずして大凡に云なりと見えたり　其外に云れたる説共に皆當り難く思ゆ　〇天津罪止法別氣氏　後釋に法は借字にて宣別なり大祓の時に民共の犯したる罪共を求めて多く出たる中に右の類の罪共をば別にして此々は天津罪と云て分るを云ふ古事記に神代に天照大御神の某々は我子也某々は汝子也と分給へるをも詔別給と有と同じ　考に天皇の宣命して定給ふな法(ノリ)と云りと云れたる法字には叶へれど此には甚疎くして叶難し此は唯此事を行ふ者の言にて別るにこそ有れ凡て人に云ひ聞するを能流とは云なり　と有るが如し皇大神儀式帳及倭姬命世記にも亦祓乃法定給支天津罪止所始志罪波敷蒔畔放溝埋樋放串刺生剝逆剝屎戸許々太久乃罪乎天津罪止告分と有る告分と此詞の法別と同じ事なり　然れば法は借字にて宣別なりと云れたる説は實に然る可し　又後釋に借天津罪國津罪と別る事は實は一にて差別有まじき事なれども彼須佐之男命に解除を負せたるぞ祓の起にて有れば彼神の當昔天にて犯し給へる類の罪をば此國にても天津罪と號けて別云なり一と云れたる一通りは然る事ながら尙能く事義を詳かに爲るに必天津罪國津罪と分別る可き條理有り抑祓の事に於ては穢と罪との外は本より非りければ穢即罪にて罪即穢也と雖も其犯せる上にても種々の差別有れば一途に定め云まじきが如くなれども尙能く此を正す時は天津罪とは經營の業を害ふを以て罪とし國津罪は身體の上を過つを以て罪と爲る所にして此二を並へたる中に天津罪の方は國津罪よりは今一層重き者にして天津神の殊異に惡ませ給ふ所なりけり　同じ人民の犯す所なれば其別有る可からぬを殊に擢出して天津罪と宣別給ふに深く心を着て考ふ可し後釋に須佐之男命の天にて犯し給ひし類の罪をば此國にても天津罪と號けて別云なりと云れたるは盡さゞる所多き著なり　已に大殿祭詞の下にも云れど尙此天津罪の事に就て其起源を云はゞ先古事記に天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言依賜也と見えたる此ぞ宇宙の大道の立つ所又成る所なりける借此を神代紀一書には天神謂伊弉諾尊伊弉冉

尊曰有ニ豊葦原千五百秋瑞穂之地一宜ニ汝往循(シラス)レ之廼賜ニ天瓊戈一と有て右の修理固成に當て循(シラス)ノ字を書れたり是を以て見れば天下を所知食とは右の修理固成を云ふ事にて其始二柱神の時には國土は未有して漂在りしを修理固成て國土とは成就へるなり〔此國土を修理固成を以て大道と云るは天下の人民各皇祖天神より賦(タマハ)る所の德(サチ)を異にして各國土の漂在る所を修理固成すなり海佐知毘古山佐知毘古など云るに心を着く可し若て古事記に天之尾羽張神を葦原中國を言向に遣し給ふ所に答白恐之仕奉然於ニ此道者ニ僕ヿ建御雷神可レ遣乃貢進と有る此は其任に就く國を道と云るにて其任に就たる國にての功業は其德(サチ)を爲す事なるが故に其を此道とは云るなり是則修理固成すを直に道なる意なり若て天神の賦命(サヅケ)給へる其德(サチ)を以て道に因循を惟神と云ふ孝德天皇御紀に惟神(惟神者謂下隨ニ神道一而亦自有中神道上也と有に考合す可し此に依て其惟神を隨在天神(カムナカラ)とも神隨とも書り〕其國土成就て尙漂在り是伊邪那岐伊邪那美二柱神の八百萬神を生成給ひて各其德(サチ)を以て修理固成さ令給ふ所なり是に於て人民始て成り萬物悉く具る神代紀一書に素戔嗚尊者可ニ以治ニ天下一也と見えたる治天下とは國土を修理固成すの柄(モト)を執る事なり〔此は甚く約めて云り此國を小分して天下萬民此を保ちて修理固成す事天神に稟受て二柱神に繼く所以なり〕其修理固成して立つ所は衣食住の三なり天下萬民の修理固成すの德(サチ)を相共に融通(カヨハ)して衣食住の資(モノ)有り此三の者豐饒なる事を得て國土安泰なる事古今の通則なり古事記に速須佐之男命不レ治ニ所命之國一而八拳須至ニ于心前一啼伊佐知伎也其泣狀者青山如ニ枯山一泣枯河海者悉泣乾是以惡神之音如ニ狹蠅一皆涌萬物之妖悉發と有る此國土を修理固成し給ふ御心在ざるが故に其變を萠すなり〔天津罪の起る事已此時に在と知べし〕神代紀に天照大神在ニ於天上一曰聞ニ葦原中國有ニ保食神一宜爾月夜見尊就候レ之月夜見尊受レ勅而降已到ニ于保食神許一保食神乃廻レ首嚮レ國則自レ口出レ飯又嚮レ海則鰭廣鰭狹亦自レ口出又嚮レ山則毛麁毛柔亦自レ口出夫品物悉備貯ニ之百机一而饗之是時月夜見尊忿然作レ色曰穢矣鄙矣寧可下以ニ口吐之物一敢養上我乎廼拔レ劒擊殺然後復命具言ニ其事一時天照大神怒甚之曰汝是惡神不レ須ニ相見一乃與ニ月夜見尊一一日一夜隔離而住と有るを古事記に須佐之男命と爲るは同神なるが故なり偖此神の國土を修理固成す事を忌諱(イミキラ)ひ給ふが故に保食神は殺給へるなり偖保食神は衣食住の神にて度らせ給ふ事大殿祭詞の下に云るが如し〔天津罪に畔放溝埋樋放頻蒔串刺生剝逆剝屎戸と有る此等の事の因て起る所此なり下に云るを見合す可し〕而るに右の文の續きに是後天照大神復遣ニ天熊人一往看之是時保食神實已死矣唯有其神之頂化ニ爲牛馬一顱上生レ粟眉上生レ蠒眼中生レ稗腹中生レ稻陰生ニ麥及大豆小豆一天熊人悉取持去而奉ニ進之一于レ時天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可ニ食而

活二之一也乃以二粟稗麥豆一爲二陸田種子一以レ稻爲二水田種子一又因定二天邑君一即以二其稻種一始殖二于天狹田及長田一其秋垂穎八握莫々然甚快也又口裏含レ繭便得レ抽レ絲自レ此始有二養蠶之道一焉と有る如く天照大御神は伊邪那岐命の御事依しに天照大神者可三以御二高天之原一也と詔給へる御言を重みし奉らせ給ふを以て顯見蒼生に衣食住の事を修理固成さ令むと所思るが故に其物の成れるを歡喜び給ふに合せて其物を廢り給へるを惡み給ひて御兄弟の御睦びをさへに棄ごせ給ふに至れり（此を以て修理固成すの道の世に重く尊き事を知る可し鈴屋翁の玉矛百首にも命續く食物衣服住家等神の惠ぞ君の惠ぞと詠れたり）若て古事記に天照大御神之營田と見え神代紀に天照大神以二天狹田及長田一爲二御田一また日神尊以二天垣田一爲二御田一また日神之田有二三處一焉號曰二天安田天平田天邑幷田一此皆良田など有るは食物の事なり又古事記に天照大御神坐忌服屋而令レ織二神御衣一と見え神代紀に見下天照大神方織二神衣一居中齋服殿上云々また稚日女尊坐二于齋服殿一而織二神之御衣一也など有るは衣服の事なり又古事記に於下聞二看大嘗一之殿上云々神代紀に天照大神當二新嘗時一則陰云々於新宮また及レ至下日神當二新嘗一之時上云云於二新宮御席之下一云々など有る此は住處の事なり此等の三つ物は其保食神の身より成初て衣食住の事定るなり（天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可三食而活二之也と宣ひ又新嘗など有るを以て此頃に成れる事を知べし住宅も保食神の恩賜なる事大殿祭詞に云り）須佐之男命は國土を修理固成して衣食住の事を治め給はむ御心在ざるが故に保食神を撃殺し給へるを天照大御神は却て保食神の身より成る物を天に召上給て甚く歡喜び坐て其を殖る事に御心を委ねさせ給ひ御兄弟とは坐せども汝は惡神也相見まく思欲さじと御許を却け給へるが不審しかりつるが終に妬み妨げ給ふ御心起れり（此も亦御父大神の御事依しな御心と爲ざりつるに出たり）此に因て食物の事を妨るに畔放溝埋樋放頻蒔串刺等の逆事有り衣服の事を妨るに生剝逆剝の惡業有り住宅の事を妨るに屎戸の穢き事有き此等の天津罪に依て天照大御神の甚く惡み怒らせ給ひて天石屋戸を閉て刺籠り坐るに至れり（大御神の甚く怒らせ給ふ事を修理固成の道其衣食住の事を嘗むに依て成り天下蒼生の世に存（ア）る可き較略（アラマシ）の出來る事を喜び坐す御心の反なり）是に於て八百萬神等相共に右の衣食住の器を猶善くして祈り奉り招奉られしかば天照大御神の大御心良善はしく成て出坐り（此時に衣食住の物等の成整へりと云ふ事幽き所以有る事なり大殿祭詞の下に云り）此に依て須佐之男命に祓を負す古事記に於是八百萬神共議而於二速須佐之男命一

負二千座置戸一亦切レ鬚及二手足爪一令レ拔而神夜良比爾夜良比岐と見え神代紀正書に然後諸神歸二罪過於素戔嗚神一而科レ之以二千座置戸一遂促徵矣至レ使レ拔レ髮以贖其罪亦曰拔二其手足之爪一贖レ之已而竟逐降焉と見え一書共に已而科二罪於素戔嗚尊一而責二其祓具一是以有二手端吉棄物足端凶棄物一亦以レ唾爲二白和幣一以レ洟爲二青和幣一用二此解除一竟逐以二神逐之理一逐之とも科二素戔嗚尊千座置戸之解除一以二手爪一爲二吉爪棄物一以二足爪一爲二足爪棄物一乃使下天兒屋命掌二其解除之太諄辭一而宣上レ之焉世人愼收二己爪一者此其縁也とも見えたり此等の事はしも上に引る古事記に不レ治二所レ命之國一と有る其に根柢て成れる所なるが故に衣食住の神と在す保食神を殺し給ひ其神の恩賴に成れる衣食住の資を悉く害ひ給へりし故に大御神は天石屋に入坐るに依て世中は常夜往りしかば須佐之男命に其解除を負する事も又尋常ならざりしなり（能々事の本因より此を正し辨ふ可し此迄諸家の注古より少しも當れるは無し）又神代紀一書に既而諸神嘖二素戔嗚尊一曰汝所レ行甚無レ賴故不レ可レ住二於天上一亦不レ可レ居二於葦原中國一宜三急適二於底根之國一乃共逐降去云々と有る如く諸神の相共に惡む所は汝所行甚無レ賴と有る其にて言意は御父大神より事依され奉給ひし天下を治めて此國土を修理固成し給ひ顯見蒼生の爲に衣食住の營みを物し給ふ可きを自爲ざるさへ有るに大御神の大御神業と世間に其道の立定まる御時節に當りて又此を妬み妨奉る事の賴もしげ無きと惡み嫌へる者なり但此解除の徵信に依て須佐之男神はしも淸々しき御心と爲給ひ此國土を修理固成し給ひ各衣食住の事を功しみ給ふ神等を生給ひ大國主神に其御功業を事依し給ひて御父大神より授る坐す事を遂給ふ事此卷首に云るが如し（尚大殿祭詞の下に云り但彼には衣食住の事を云ふ次序に此事を説にも及べるが此は天津罪の本縁を云に就て又説く處なるが彼も此も同事ながら云樣に異なる處有り心を着て讀べきなり）若て皇御孫命の天降坐て此顯國にて大祓を行はせ給ふ時にも別に此天津罪の事を重みし給ひて右の條目を出して廣く天下に求させ給ひけむ事は法別氣氏と云にて所知たり然るは天下を所知食す現御神の神隨神道に因循ひ給ひて此國土を修理固成す大御業の歸る所はしも衣食住の三の物大に豐饒なる事を得て天下の人民を安國と平けく統御す外無ければ此を妨げ此を害ふを以て上無き罪と爲る大御定にて其即天津宮事なればなり大御位を天津日繼と稱奉るも天下の貢調を

聞食す義國號を瑞穂國と稱る事も唯に稻穀の美はしき耳ならず修理固成の大道の大に立て其信有るを云なり天津罪を宣別て此を重しと爲る事所由有る事なりけり（然れば國津罪の如きは一人一己の罪咎なれども天津罪は小さしと云へども御國體に拘る事なるが故に重きに處く事になむ有ける）

國津罪止八生膚斷死膚斷白人胡久美己母犯罪己子犯罪母與子犯罪子與母犯罪畜犯罪昆虫乃災高津神乃災高津鳥乃災畜仆志蠱物爲罪許々太久乃罪出武

國津罪八止後釋に（許々太久乃罪出武の條に）大神宮儀式帳に亦祓乃法定給支天津罪止所始志罪波云々許々太久乃罪乎天津罪止告分國津罪止所始志罪波生秦斷死秦斷己母犯罪己子犯罪畜犯罪白人胡久彌川入火燒罪乎國津罪止定給己犯過人爾種々乃介ニ祓物出ニ天祓清止定給支と見えたる天津罪止所始志罪とは天にして須佐之男命の犯し始給ひしを云り偖此に對へて思へば國津罪止所始志罪と云るも皇御孫命の此國に天降坐て始て大祓の有し時に此條々の罪共の出たりしなる可し（扨後々迄其時の條目に依て此を擧云ふ故に所始志罪とは云なる可し心を着べき事なり）と云れたり此說の實に動くまじきに就て尙委しく云はゞ皇御孫命の天降坐し後始て大祓を行はせ給ふに當りて求めさせ給ふに天津罪國津罪と計へ云ふ所の罪條の出來りしかば其輕重を分たるゝに就て某々は天にして己に有つる罪なるを以て其中より擢出で天津罪と告分け給ひ某々は此國土にして始れる罪なるに依て國津罪止所始志罪と云ひ國津罪止定給とは云るなり（倭姫命世記にも此文有て其に倭姫命の定させ給ふが如くなれども然らず往古より定來れる所を以て行はせ給ふ義なり）又後釋に云く止八は天津罪の方には止とのみ云て此に如此云るは先天津罪を宣別て然て國津罪と云は某々と云なり〇生膚斷死膚斷後釋に伊伎波陀多知斯爾波陀多知と訓べし（生死を生乃死乃と訓むは言の狀知ぬ謬訓なり又死を奈保志乃と訓るは死に忌詞なれども若祝詞にても忌べくは直志乃と書べきに唯死と書るは此を讀には忌さりし事著明●偖二の斷は用言なれども體言にして罪名として讀べき事既に天津罪の所に云る畔放などの例の如し）偖此は生人にも有れ死屍にも有れ其膚に疵を着る穢を以て罪と爲るなり人身を損なふ惡行の方を以て罪と爲るには非ず其疵を穢と爲るなり然れば人に疵着る耳ならず己が身に疵着る事も同じ事なり又人に疵を着たる者も着られたる者も共に穢なる可し（穢を罪と爲る事次に委く云べし）と有り此に就て思ふに刑には種々の御定有て假介身に疵着るが穢ならむにも其罪に處て此を宥し給ふ事を

得ずと雖も其猶穢なり履仲天皇御紀に元年夏四月云々召二安曇連濱子一詔之曰汝與二仲皇子一共謀レ逆將レ傾二國家一罪當二于死一然垂二大恩一而免レ死科レ墨(ヒタヒキザムツミ)即日黥(メサキキザマシム)之と有る如く死罪を免じ面黥(メサキ)て使はせ給ふ事なるに同御紀五年の下に天皇狩二于淡路島一是日河内飼部等從レ駕執レ轡先レ是飼部之黥皆未レ差時居レ島伊弉諾神託レ祝曰不レ堪二血臭一矣因以卜之兆云惡二飼部等黥之氣一故自レ是後頓絶以不レ黥二飼部一而止之と見ゆ此等は生膚斷の類なり又古事記穴穗宮段に意富祁王袁祁王聞二此亂一而逃去故到二山代苅羽井一食二御粮一之時面黥老人來奪二其粮一云々我者山代之猪甘也とも有り此を以て見れば罪有る人の罪を宥し面黥(メサキ)して飼部また猪養などに使はせ給ふ事著し但履仲天皇御代より右の如く神の惡み給ふ由を以て飼部には面黥(メサ)かれざる事に成しかども猪養などは猶面黥りしと見ゆ又考頭書に引れたる盜賊律に支二解人一者皆斬子徒三年義解に殺時即支解或支解而後殺レ之皆同支解入二不道一また同律に凡殘二害死屍一註本燒焚支解之類也と有る此等は死奏斷の類なる者なり刑より外は斯在る事の禁嚴重なりし事此を以て知べし此皆皇祖大神の死を惡み生を好み坐す仁愛の御心より出る者なり○白人胡久美は戸令に所謂る惡疾なり義解に謂白癩也此病有レ虫食二人五藏一或眉睫墮落或鼻柱崩壞或語聲嘶變或支節解落也亦能注二染於傍人一故不レ可二與レ人同一レ床也と見えたる是にて後釋に

白人は和名抄に白癜人面及身頸皮肉色變白亦不痛痒者也和名之良波太と有る物の類其外世に白子と云物の類なり」と有る此に同じ又推古天皇の御世に參來りし百濟人の斑白なりしも白人の類なるを其所に惡二其異一於人一欲レ棄二海中島一と有り然る類は穢き物にて世人も惡み況て神は惡み穢み給なり」とも見えたり玉勝間思草卷に云く三代實錄に貞觀八年七月紀伊國人言伊都郡人六人部由貴繼生白人男女二人男年二歲長二尺四寸女五歲長三尺一分兩兒生而肌膚鬢髮眉眼舉レ身純白如レ雪因得レ見二晴夜一不レ能レ向二白日一父母陰藏養成今圖二其形一進レ之と有り此事大祓詞後釋に引べかりしを漏せり」と有に依て今此に擧ぐ胡久美は後釋に和名抄に瘜寄肉也瘜肉和名阿萬之々一云古久美と有る此なり阿萬之々は贅肉なり又其次に擧たる附贅懸疣(ススペサガリフスベ)なども同じ類なり若て此類は共に穢き物なる故に穢を以て罪と為るなり」と有り或書に白人者略二賣人一取レ價也價稱二志呂一胡久美者兒縊也謂如東鄙俗貧屢多レ子則縊赤子也と云るは鑿說に迂濶し又後釋に祓に因て白人胡久美の類の直るには非ざれども祓物を出して解除は其穢の清まるなり」と云れたれど此は甚信じ難き說なりけり已に說る如く伊邪那岐命筑紫日向の橘の小門の阿波岐原に幸行て大御身に着る物を脫棄給ひしかば時置師神飽咋之大人神煩之大人神などの疾病神等は皆禍害神と共に大御身に着て有しを祓物と共に離放り奉りしが故に其

黄泉國の禍事の除こり清まり給へるに非ずや然れば人身に着る疾病も其元因は右等の神の犯せるに依て起る事なれば祓物を出して解除を爲れば穢の清まる耳ならず其疾病の平愈る事云も更也 崇神天皇御紀に五年國内多ニ疾疫ー民有ニ死亡者ー且大半矣六年百姓流離或云々是以晨興夕惕請ニ罪神祇ーと有る請ニ罪神祇ーは祓に非ずして之を何とか云む又七年の下に天皇乃沐浴齋戒潔ニ淨殿内ー而祈之曰云々と有も御禊なる事上に說る如し而して神祇を祭祀給へる驗有て於是疫病始息國內漸謐云々と有を以て病と雖も祓に依て平癒る事有るを思ふ可し 凡疾病はしも多かるに白人胡久美の二を耳此條目に擧られたるは如何と云に戸令に此を三等に分ちて殘疾癈疾篤疾と云るが白人胡久美は右の内の惡疾と號て右は篤疾と云者なり斯る篤疾倘(スラ)に祓に資ては平愈る所なれば況て自餘の疾病は云でも灼き事なるが故に態と惡疾の二を擧て其餘まで韻らせたる者なりけり 殘疾とは一目盲兩耳聾手无ニ二指ー足无ニ三指ー手足无ニ大拇指ー秃瘡无レ髮久漏下重大癭瘇などを云ひ癈疾とは癡瘂(オロカヒトアフシ)侏儒腰背折一支癈などを云ひ篤疾とは惡疾癲狂二支癈兩目盲などを云ふ右の惡疾は白人胡久美なるか其を篤疾と云るを考べし 上古には祓を爲て少も疑ふ所無りしが故に然る徵信は有けるなり今も然らむには何とか功驗の匆らざらむ祓物を出して祓へば其穢の清まる耳ならむには如何に詮無き事ならじやは○己母犯罪己子犯罪後釋に古事記 仲哀天皇段 上通下通婚(オヤコタハケ)と有る是なり ○記傳云意夜古多波祁と訓べし多波祁は交合(アフ)まじき人に文通(アフ)なり字鏡に姧犯姪也太波久また姪太波留とも見え萬葉廿に多波和射と有なども本同言也書紀に姪ノ字姧字通ノ字又婬ノ字婚ノ字抔なども交會(アフ)まじくて交會るを皆多波久と訓り 倩唯母唯子と云ずして二共に己と云は次の母與子犯罪云々の母子と同しからざる事を顯はせるなり倩女に婚事を犯と云は皇國言とも聞えず漢籍に依れる言なるべきに此に如此云るは如何と一通りは思はるれども倘能思ふに然らず此の犯どもは皆愼みて爲まじき態なるを愼まず大凡に爲るなれば犯と云べき事なり 常に惣て婦人に婚事を云とは意味異なり と見えたり犯には多く侵ノ字をも書て佗の持分の事を我爲る事を云ふ言なり己母犯罪とは實母に婬る事なり上古と雖も稀々には下(イヤシ)樣なる者などに然る事も有つらむ故に此罪條に收る也但庶父母は禁る所に非ずと見えたり開化天皇御紀に六年春正月辛丑朔甲寅立ニ伊香色謎命ー爲ニ皇后ー 是庶母也 后生ニ御間城入彦五十瓊殖天皇ー と有り伊香色謎命は孝元天皇の妃なり此を道に反ける御所爲の如く思ふ人も有れども上古より己母犯罪己子犯罪と云ひ上通下通婚など云ふ御制有る上は母子共に實なるを避て庶母は其限りには非りしなり 若上通下通婚など云ふ類ならむには天下を統御す大君の行はせ給ふ可き事にも非ず已に允恭天皇の御代に輕大子の兄弟婚有し故に島に放給ふ事有るを以て上古の法制の嚴重なりし事を知べきなり然れば此開化天皇の御は已母犯罪の例には非りけり又古事記白檮原宮段に天皇崩御の後に大后の庶子當藝志美々命の娶むと爲給へる事有り此は實事有しには非る事

其御子等を殺さむと爲るを知せ給へるにて著きが庶母に事として娶事も有るは罪に非りしなり己子犯罪は玉勝間忘草巻に引れたる東鏡に建長二年六月廿四日今日居住佐介之者俄企二白害一聞者競集圍二繞此家一覿二其死骸一有二此人之聟一日來令二同宅一處其聟白地下二向田舍一訖竊二其隙一有下通二艶言於息女一事上息女殊周章敢不レ能二許容一而令レ投レ櫛之時取者骨肉皆變二他人一之由稱レ之彼父潜到二于女子居所一自二屏風之上一投二入櫛一彼息女不意而取レ之仍父已准二他人一欲レ遂レ志于時不圖而聟自二田舍一歸着入二來其砌一之間忽以下不レ堪レ悲及二白害一云々と見えたる此は未實事に至らざれども己子犯罪に収べき者なり 後釋云考に皇朝に母子相犯せる事は假にも聞えずと云れたるも云れぬ事なり下樣の者の中に然る事有とても序無きに殊更に然る民間の細事までを公の紀に記さる可きに非ざれば紀などに見えずとて世に然る事無しとは爭てか定めむ中昔などにも己が女子を犯しゝ事などもも見え今世にも稀々には然る態する者も無には非らず上代にも有けむ事此罪條に擧られたるにて知べし云々 ○母與子犯罪子與母犯罪後釋に先一人の女に娶て又其女の先に佗人に嫁て生たる女子の有をも後に犯すなり母とは其女子に對へて云ひ子とは其母に對て云るにて己が母已が子には非ず 上條に己と云るにて此は己がには非る事著明(アラハ)なり 偖其母に在れ子に在れ一方に娶は常なるを母と子と列ねて娶ごご犯しになる 考に他人の母と云れたるは己が母と別むとてなる可けれど紛はしき云樣なり他人の母と云ては人の母たる婦人に娶る罪と爲る如く聞ゆるなり外に子有る婦人に娶は常に多き事なるを何か其を罪とは爲む又其意にては又其が子を犯す事重なりて二の罪と成なり と見えたり子與母犯罪は考に先女子を奸して又其女子の母を奸すなり上なるとは上下の違なりと有る此なり偖此は仁賢天皇御紀六年の下に難波玉作部鯽魚女嫁二於韓白水郎暵(ハタエ)一生二哭女一哭女嫁二於住道人山寸一生二飽田女一韓白水郎暵與二其女哭女一曾既倶死住道人山寸上奸(サキニ)二玉作部鯽魚女一生二麁寸一麁寸娶二飽田女一と有る類なるを云なり 山寸は玉作部鯽魚女が生る所の哭女を妻と爲る者なりしを其姑翁韓白水郎暵が亡つる後に哭女が母と在る鯽魚女に娶て麁寸を生りしなり奸字を以て罪し給ふを見べし 是即子に娶て後に其母を奸せるなれば此に子與母犯罪と云者なり後釋に云く上なるは先母に娶るは犯に非ずして後に其子をも列ねて奸(タハク)るが犯なり此は先子に娶るは犯に非ずして後に其母にも奸(タハク)るが犯なり 然れば此二條は唯母と子と先後の違のみなれば合せて母與子犯とのみ一ッ云ても有べきを如此分て云るは古文の妙(タヘ)にて母と子とを下と上とに置易たるのみにて其事の二に能分れて聞けるは後世人の及ばざる文なり心を着べし儀式帳には此二條は省けり ○畜犯罪は古事記訶志比宮段に馬婚牛婚鷄婚犬婚など種々載られたるを此には約めて云るなり日本紀略に應和二年四月十九日丙午齋院禊今日出雲守橘泰胤宅下男一人與レ犬通婬と有る類を云 考に古事記を引れて此も此罪唯一云ては事足はず聞ゆれば今一犯禽罪などの有しが脱たるなる可し」と云れたれど後釋に其說を辨へて一通りは然も聞ゆれど前後の罪條必しも悉く二つゝ對有るにも非れば此も一落たるには有べからず儀式に出たるも此と同じ事なり犯レ禽罪など落たるなる可しと云れたるも惡

(ワロ)し畜と云ふ内に鶏も在ばなり」と云れたりき　後釋に畜は氣母能と訓へし和名抄に獸和名介毛乃畜和名介太毛乃と有るは相誤れるなる可し書紀神代巻に同じ續きの文に畜産と有るを氣母能と訓み獸と有を氣陀母能と訓るぞ正しかる可き皇極天皇御紀天武天皇御紀に六畜と有るをも六種(ムクサ)乃氣母能(ノケモノ)と訓り然れば畜は氣母能獸は氣陀母能なり後ながら源氏物語箒木巻に漢國の烈しき獸と有るも虎にて獸なり古今集長歌に藥けがせる獸のと詠るは實は雞犬なれども雲に吠けむと詠れば此歌にては犬なり然れば畜ながら是も獸の方に取てぞ氣陀母能とは詠けむ　偖氣陀母能は毛津物の意なる可し古書に毛乃和物毛乃麁物とも云へり氣母能は飼物(カヒモノ)の加比を切めて伎なるを氣と云るなり伎と氣とは殊に親しくて常に通ふ音なり毛物の意には非じ六畜は人の家に飼置し物なれば飼物と云なり　然るに獸と畜の似たる名なる故に混らはしきぞかし」と有り然る言なり〇昆虫乃災は大殿祭詞に此乃敷坐大宮底津磐根乃極美下津綱根波布虫能禍無久と有る其下に云り後釋に云く是より以下三條は災を以て罪と爲るなり偖此虫の災の事は神代紀に昆虫の災異を禁厭と云事見え大殿祭詞にも昆虫の禍無くと見え十種神寶の中に蛇比禮蜂比禮などの有るも其を拂はむ料なり上代には民の住家野山に交りて假初なる搆なりしかば昆虫の害多かりしなる可し又大殿祭詞に擧られたるを思へば上代には唯並(ナベ)て此害の多かりしにも有べし今世とても蜈蚣蜂などに刺れて腫む事無きには非ず　考に此は犯罪の條なれば蛇を祝て災を爲す類を云なる可し云々然れは下なる畜仆の上に序づ可きを此に有は文の亂れたるなり」と有は叶はす若虫を以て災を爲す事ならば云々爲る罪と云はでは聞えず唯其の災と云ば其災に遇ふ事を云る詞にこそ有れ抑世々の物知人誰も皆罪字に泥みて都美と云事を唯惡行とのみ心得るから此罪の條々の中に解得難き事共有て種々の強説の出來るなり此邊の文の亂れたると云れたるも非ず亂れたる事も无く誤れる事も无く落たる事も无し都美と云は惡行のみには非ず穢も災も都美なる事な曉る時は少かも疑無く皆能聞えたる事なるをや　〇高津神乃災高は後釋に空を云と云れたる其義を包て禍津神の災と云意なる可し御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久と有を道饗祭詞には根國底國與里麁備疎備來物爾相率相口會事無氐と見えて根國底國より出來る由なるが右の二詞共に自上往波上護利自下往波下護利と有て空虚よりも地下よりも往來爲る事なるが其天翔る方の多きに取て高津神とは云なる可し若て道饗祭詞に物(モノ)と云る其物を萬葉に鬼(モノ)と作るが其鬼(モノ)は此の高津神なる故に後釋に高津神とは雷を云なる可し又世俗に天狗と云

者に捕るゝなども高津神の災と云べし虚空を飛行く物なればなり此等の災に遇ふ事を罪と爲るなり 高は古事記に高往鵠高行や隼萬葉四に高飛鳥など云る皆空行く空飛ぶと云事にて唯に高くと云には非ず次なる高津島の高も同じ と云れたり偖此を御門祭詞に合せて見るに天能麻我都比登云神天虚空に御在るに根國底國より麁び疎ぶる鬼は其御制を仰ぐ御定なるが故に來て附屬つゝ共に天翔り國翔りて人の所犯る可き間然有るを伺ひて災を爲を云なり然れば其高津神の中には雷なるも天狗なるも種々有べきを後釋には其一端を云れたる者なり 御門祭の詞の下に云るを見る可し ○高津鳥乃災遷却崇神詞に天稚彦毛返言不申氏高津鳥殃爾依氏立處爾身亡支と有るは天稚彦罪有るに依て天神の罰めさせ給ふ所なれども此方にては其來由の知られざる故に高津鳥乃災とは云る者なり然れば人身の災に遇るも自こそ犯したる罪有とは覺ざらめ神等の御上より云ふ時は其自も佗も是穢なりとも心も着ぬ所に其災異に遇べき罪穢は決めて有る事と思えたり 大祓に災を罪の部に收たるに深く心を留めて考ふ可き者なり 大殿祭詞に天乃血垂飛鳥乃禍無久と有る天之血垂は飛鳥の往來する大虚の氣脉を云れば高津鳥乃禍無久と云に異なる所無し 後釋に血垂と應神天皇御歌に毛々知陀流夜邇波母美由と詠せ給へる知陀流と一にて古事記上卷に登陀流と有り其は上代人の家の屋樓の竈處の上の煙を出す處の名なり然れば其上を飛渡る諸鳥の毒など有る糞又然らでも毒物など咋來て竈上へ落す事など有て其毒に中る類此高津島の災なりと云れたれど其等も高津鳥の災の中の一種にては有べけれど並て此を高津鳥の災と云はゞ違ふ可し且血垂の說も然る可からず大殿祭詞の下に云りき 怪鳥の家ノ邊に群がり來て妖を爲す類を云なり鷲鷄などの小兒を掬み去るなどは云も更なり凡て人家に不祥を導く惡鳥など世に多き者なり其等の殃即高津鳥の災なり高を禍の義に且く見る可し 此事の委しきは古今妖魅考なり必見て曉る可き者なり ○畜仆志 後釋に畜などの死るを多布流と云ふ斃殪殭などの字を書り多布志は令レ斃にて殺すを云ふ 偖是は罪の目に云るなれば世に人を殺したる者を人殺しと云ふ類にて體言に訓べき事上に云る如し 此は如何なる態にか詳ならねど思ふに上代人ノ家に養へる牛馬なとを忽に令斃る術など有て行ひし事ぞ有けむ其は其主を恨み悒はる事なと有て仇なふ所業なり 然れば此は次の蠱物と同類の罪と爲べし 神代紀に大國主神と少彦名神と爲顯見蒼生及畜產則定二其療病之方一と見えて上代には畜をも重く爲し事なり 或說に鬼魅魍魎の類人家の畜を忽に病斃れしむる事有り土俗此を牛馬の疫神なりと云と云り此も然も有べき事なれども若然らば民家の災にて上なる災の類なるを然は聞えず此は次なる蠱物と一類と聞えたれば人の爲す事とこそ所思ゆれ と有り此は牛馬を殺して邪神を淫祀る事の有けるなる可し皇極天皇御紀に群臣相謂之曰隨二村々祝部所一レ敎或殺二牛馬一祭二諸社神一或頻移レ市或禱二河伯一既無二所効一と有る

此は朝廷の正禮に非ず群臣相謂と有を以て見るに然る淫祀の朝廷に露顯たるなりけり桓武天皇御紀に断百姓殺牛用祭漢神と有を以て知る可し同天皇廿年夏四月已亥令越前國禁断居牛祭神と見えたり新撰字鏡に禰祭牛祭神也字牟須比麻豆利と記せれば其頃多き事なりけり谷川士淸が説に以牛馬祭神者西土之俗而我神之所忌有如斯者其移市禱河伯亦放西土之俗耳と見えたる眞に然る言なるに就て思ふに通證廿九に引る後漢書に會稽俗多淫祀民常以牛祭神また齋州記に齊林郡有池々有石牛歳旱百姓殺牛取血和泥塗石牛背祀また後漢郎顗傳に自冬涉春訖無嘉澤數有西風反逆時節朝廷劳心廣爲祈禱薦祭山川暴龍移市など見えたるを思ふ可し皇大神宮儀式帳及世記に載たる國津罪の條目にも此畜仆志蠱物爲罪の二は無を以て考るに皇國の大古に聞えざりし事なりけり然るを御紀に令越前國禁断居牛祭神と有を以て子細有べく所思るに依て探索るに垂仁天皇御紀に一云御間城天皇之世額有角人乘一船泊于越國笥飯浦故號其處曰角鹿問之曰何國人也對曰意富加羅國王之名都怒我阿羅斯等云々傳聞日本國有聖皇以歸化之云々初都怒我阿羅斯等有國之時黄牛負田器將往田舍黄牛忽失則尋迹覓之跡留一郡家中時有一老夫曰汝所求牛者入於此郡家中然郡公等曰由牛所負物而推之必設殺食若其主覓至則以物償耳即殺食也若問牛直欲得何物莫望財物使欲得郡內祭神云爾俄而郡公等到之曰牛直欲得何物對如老父之教其所祭神是白石也云々と有る此は別事なれども都怒我阿羅斯が越前國に來住ける頃彼國の事を傳聞て土俗の牛を屠て神を祀れりしが近國へも移りたるを我が朝廷の御制には其等の事は畜仆志と云て穢とし罪とも爲給ふ所なるが故に時々に禁止め給ひけめども尙越前には遺れりし者なる可し又断百姓殺牛用祭漢神と有を以て皇國の神を祭るならぬ事著明き者なり如此く外國より渡來る彼國風の汚き神祭なる故に我國神の享給はざる耳ならず却て此を罪とし給ふ所なり

○蠱物爲罪後釋に蠱萬自物と有り咒詛物の意にて人を咒ひ詛ふとて構ふる態なり中昔の書共にも此咒詛(マジワザ)の事の時々見えたり上代より有し態となる可し漢籍にも蠱毒の事多く見えて其遣方なども記載せり見えたり此説に就て今思ふに麻自と云ふ時は唯に人を咒ひ詛ふ事なるを麻自物と云ふは他佗を傭ひ役使ひて人に取託せて殃災に令遇るを云ふ世に多く有る犬神又は狐憑などの類を云なり此事亦我上古には曾ても聞えざる事なり外國より來りつる禍事なる者なりけり其は下に引る大生部多が所祭は常世神なると鞍作得志が妖術を虎に得たると儀式帳世記などに此

罪條の見えざると古事記仲哀天皇段なる國之大祓にも此罪の擧無きを以て知れたり 漢籍朝野僉載に初唐時百姓多事ニ狐神ニと云事見えたり初唐は我が推古天皇二十六年に姓李氏諱淵字叔德と云者成紀より起りて隋恭帝と云を奪て高祖と號れる其が代の始頃より以下を云るなれば其ホ三韓よりも朝貢の便に就來て往來有しかば然る蠱物（マカワサ）も渡來つるなり 皇極天皇御紀に三年秋七月東國不盡河邊人大生部多勸ニ祭レ虫於村里之人ニ曰此者常世神也祭ニ此神ニ者致ニ富與壽ニ巫覡等遂詐託ニ於神語ニ曰祭ニ常世神ニ者貧人致レ富老人還レ少由レ是加勸捨ニ民家財寶陳酒陳菜六畜於路側ニ而使レ呼曰新富入來都鄙之人取ニ常世虫ニ置ニ於淸座ニ歌儛求レ福棄ニ捨珍財ニ都無レ所レ益損費極甚於是葛野秦造河勝惡ニ民所一レ惑打ニ大生部多ニ其巫覡等恐休ニ其勸祭ニ時人便作レ歌曰禹都麻佐波柯微騰母柯微騰枳擧曳倶屢騰擧預能柯微乎宇智岐多麻須母此虫者常生ニ於橘樹ニ或生ニ於曼椒ニ曼椒此云ニ褒曾紀ニ其長四寸餘其大如ニ頭指ニ許其色綠而有ニ黒點ニ其貌全似ニ養蠶ニと見えたる常世神は外國神と云事なり我古に在る處ならぬを知べし 外國より渡來し蠱事（マジワザ）なる證は谷川士淸が通證に五色線曰丹陽人採ニ碎於積石之中ニ得ニ自然圓石ニ如レ拳破レ之有ニ一蟲ニ出ニ於中ニ似ニ蠐螬ノ狀ニ蠕々能動人不レ能ニ然識ニ因棄レ之後有レ人語レ之曰人欲レ求ニ富貴ニ莫レ如レ得ニ石中金蠶ニ畜レ之則寶貨自至詢ニ其狀ニ則石中蠐螬也と有此に類たる事成は彼を傚へる事著し又通證に常世蟲の事を詳此形狀即今橘蠹蟲（イモムシ）也一名蠋淮南子曰蠶與レ蠋相類而愛憎異也と記せり然も有べし此に因て思ふに大生部多は蠋を以て右の金蠶の事に混かして人を惑はせたる也けり 又同御紀に四年夏四月戊戌朔高麗學問僧等言同學鞍作得志以レ虎爲レ友學ニ取其術ニ或使ニ枯山ニ變爲ニ靑山ニ或使ニ黃地ニ變爲ニ白水ニ種々奇術不レ可ニ殫究ニ又虎授ニ其針ニ曰愼矣々々勿レ令ニ人知ニ以レ此治レ之病無レ不レ愈果如レ所レ言治無レ不レ差得志恒以ニ其針ニ隱ニ置柱中ニ於レ後虎折ニ其柱ニ取レ針走去高麗國知ニ得志欲レ歸之志ニ與レ毒殺レ之と有る此は鞍作得志が高麗に在し時に爲る事にして皇國の事ならねども如此る妖術は我が上古に無りし事にて素より外國より出來れる蠱物の一種なりと雖も當時彼此往來多かりし程なれば渡來つらむを後に滋蔓れる狐惑或は犬神などの祖なり考頭書に犬神とは餒たる犬を繫ぎ置て味物を見せながら喰しめずして切に欲する時に其首を斬れば忽に其首飛て其食物を養む其首を急き取て器に盛て祀ると云り蛇をも然すとなり土佐國にては鼬鼠をも爲と云り」と有り 但考の本文に狗神と云ふ蠱物は皇朝には無りし事にて本外蕃より來れる故に筑紫又四國などの西南の國に今も有なり」と云れたるは實に然る事ながら此に依て此詞の甚上代の文には非る一の證なりと有るは賀茂翁とも思えぬ不穿鑿（ヒガコト）にて予が云ふ如く畜仆志蠱物爲罪の二は外國の往來有し頃下ざまにて在し禍事なるが故に上古よりの罪條の上に加られたる者なり假有上代には無りしとて御世々々を經行く間に在る當時の事を措る可くも非ざれば加へさせ給ふ可き事云も更なり 畜仆志蠱物爲罪は元來漢土の道士印度の僧徒が俗人を欺かして其道に誘引る方術の幼術に

て皇神等の甚く惡み嫌はせ給ふ所にして我が皇典に謂ゆる石根樹立草の片葉をも言語はせ晝は狭蠅如す水沸き夜は火瓮の如く炫やきつゝ世をも人をも惑はしける道速振る荒振る凶惡き禍神共の禍事なれば當分に其利益も有るが如くなれども却て其因む縁に依て終に魔男に墮し入らるゝの種と爲る者なるが故に然ばかり外國の教の盛に行はれむと爲る當時と雖も然すがに天神の御子に坐が故に此を穢とし此を罪として大祓を負せさせ給へる者にざりける光仁天皇御紀に如レ聞比來無知者姓搆二合巫覡一妄崇二淫祀一蒭狗之設符書之類百方作レ怪塡二溢街路一託レ事レ福還渉二厭魅一非下唯不レ畏二朝憲一亦長養妖妄自レ今以後宜三嚴加二禁斷一と有る大御旨を忝み奉る可し此に就ても今世の巫祝の行事の上にも道士僧徒の蠱物に傚ひて種々の奇怪を爲すは共に皇祖天神の忌諱はせ給ふ所にて却て神の御罰を得べき蠱物爲罪なる者ぞ愼しむ可し後釋に此を蠱物乃罪と云ずして此にのみ爲と云ふ言を加て云る故は唯蠱物乃罪とのみにては人に蠱物爲られたるも災にて罪なるに混ふが故なり畜仆志と此と一類にして此二は上なる蚚の類とは罪の狀異なるが故に中間に災の類の罪を隔て此には擧たるなりと云れたるが如く此なる二條は惡行なる故に殊に顯はして罪とは云なり蠱物爲られたるも災にて罪なる事は勿論なる物から其よりは蠱物爲る方の惡行を以て罪として一層重く爲る事理に於て然も有ぬ可き事なりかし○許々太久乃罪出武後釋に此は上にも云る如く罪の條目の多きを云には非ず大祓の時國民共の犯たるが多く出むと云なり出武とは古事記に種々求と有る如く大祓を行れむとして先國人共の犯たる罪を探求る任に多くの罪共の顯はれ出來むと云なり今の俗語に吟味爲れば段々出て來ると云ふ意ばへなり古人は心直かりしかば身に犯有る者は問るれば大かた隱さずして顯はし申けむ然顯はし申て祓物を出して大祓に遇ば其罪は除り清まりしなり此は上代の祓の眞趣なり然るを漸後に爲ては犯の有無を問事は無て唯押並て各皆祓ッ物を出させて其中に犯有る者も其にて淨まりしなり然るを彌後に至ては然祓ッ物か各出す事も止ぬと見えて唯其擬(マネ)びの形計りに成れりしなりと見えたる如し但大祓に遇ば其罪は除り清まると云は生膚斷死膚斷等は其穢の亡るなり白人胡久美等は疾病の癒るなり己母犯より以下の蚚も其心改り其罪滅え昆虫以下の災も禁厭畜仆志蠱物等の惡行も解て犯す可からずなるを云れたるにて唯に其穢を其任に覆ひて淨まれりと爲るには非るなり此事は上に往々記せれば立復りて其祓の功用を能曉る可き者なり○後釋に云く上件國津罪共の條々中昔より以來世々の物知人等古の意詞を得ざる故に非ぬ筋に解違へたる事耳多し故今辨云ふ可き事種々有り先都美と云は都々美の約まりたる言にて都々牟と云ふ同言なり都々牟とは何事にも有

れ惡き事の有を云ふを躰言に成して都々美とも都美とも云なり〇都美とは積にて物に行當る意なり穢に在れ病に在れ奸に在れ災に在れ惡行に在れ然る可からぬ事の出來りては皇祖天神より稟受る所の光輝を失ひ神氣其所に於て消ッ盡く此に於て縦横左右に其德の能及ぶ所無し此即チ留(ツマル)なり若て都々牟は都美の言の重復れるにて愈重き所を云なり　然れは都美と云は元來人の惡行のみには限らず病諸の殃災又穢き事醜き事なと其外も惣て世に人の惡しとして惡み嫌ふ事は皆都美なり万葉の歌に人の身上に諸の惡き事の無を都々美無久くも都々牟事無とも都々麻波受とも云るは今世の俗言に無事にて無難にてと云意にて即都美無くと云事なり中昔の物語書などに人の體又心ばへなどの惡き所無を罪なしと云ひ又萬の事の惡きながらも然て兇さるゝを罪兇さると云るなども惡行には非ぬ事を都美と云るは古意の遺れりしなり又爲ま欲く云ま欲き事を憚りて得爲ず得云はぬを包むとも愼しむとも云ふ是も然爲れば惡く然云へば惡き事として包み憚るなれば本同意なり但此は轉たる末の意にて本は惡き事の有を云より出たり包み憚るを本ノ意として包み憚るべき事なる故に惡き事をも都々美と云ふと心得むは本末違べし偖古の如くにて都美と云は惡行耳には限らざるを罪字は惡行一に就て當たる字なれば都美てふ言の惣ての意には當らざるなり然れば此祝詞に擧られたる條々も罪ノ字には拘るまじき事なるに世々の物知唯此字に耳泥みて都美てふ言の本の意を考へす一向(ヒタスラ)惡行とのみ心得たるから解得ざる事多くして種々強たる事を耳云過るなり　偖右の如く世に人の惡き事として惡を厭ふ類は皆罪なれば是に擧たる條々穢と奸と災と惡行と種々の都美有り其中に穢災などは自然有る事にて殊更に犯す罪には非れども世に惡み嫌ひて凶き事なれば此等も罪なり然るに諸の注釋共に此意を得知ずして白人胡久美など又種々の災に遇なども皆惡行を爲る報なりと解成せるは甚物遠くして大(イミ)じき強説なり　偖此國津罪の條々生膚斷より胡久美までは穢を以て罪と爲るなり己母犯より五條は奸なり昆虫の災より三條は災に遇を以て罪と爲るなり末二條は惡行なり〇今云生膚斷より胡久美までは穢を以て罪と爲るなり」と有るは云樣委しからず白人胡久美は病を以て罪と爲る中にも篤疾の重き者を擧たるなり　偖如此四種有る中に祓の要は惡行をば主と爲ず穢を以て第一の罪とす神祇令に凡散齋之内諸司理ㇾ事如ㇾ舊不ㇾ得ㇾ弔ㇾ喪問ㇾ病謂有重親褻病者不ㇾ在ニ預祭之限ニ也食ㇾ宍亦不ㇾ判ニ刑殺ニ不ㇾ決ニ罰罪人ニ不ㇾ作ニ音樂ニ謂不ㇾ作ニ絲竹歌舞之類也不ㇾ預ニ穢惡之事ニ謂穢惡者不淨之物鬼神所ㇾ惡也また貞觀儀式大嘗卷にも可ㇾ忌事六條弔ㇾ喪問ㇾ疾判ニ刑殺ニ決ニ罰罪人ニ作ニ音樂ニ事云々言語事死稱奈保留云々預ニ喪産ニ并觸ニ雜畜死産ニ事云々行ニ佛法事擧ㇾ哀并改葬事ニと有を以て思ふ可し此中多くは穢にて惡行は一も無し又右の預穢惡事の本注に祓詞所云天罪國罪之類皆神之所ㇾ穢所ㇾ惡也と有る此にて穢の都美を主と爲る事を思定めて曉る可し又如此穢を罪と爲るに准へて自然有る災も又罪なる事をも曉る可し又奸の類なば下なる畜仆蠱物と連けては擧ずして中に災の類を隔てゝ別に擧たるを思ふに此は一向に惡行の方を取には非で別に故有て祓清むべき罪ならむ若くは此も穢と成には非るか抑惡行の罪を擧むには猶外に重き罪は數多有る事なるに僅に十條餘の中に奸の類計りを五擧げて古事記の仲哀天皇段に見えたるにも國津罪五條を擧たる皆奸にして他罪は無く又奸の類にては人の妻を犯したらむなどは殊に重き罪なるべきに彼にも此にも其を擧ざるなどを以て思ふにも左に右(カク)に惡行の方を取には非るにや又畜仆蠱物は諸しく惡行を取れりとは聞ゆれど是將別に故有るにや又人を傷ふ罪は外にも種々重きが有べきに殊に畜仆蠱物をしも擧たるも故有べきにや然れば祓に擧る罪の條目共は後世の心を以て不意く雖惡行と耳心得ては違ふ事なり〇今云穢を罪としも爲る事は災に在れ病に在れ清々しき身清々しき心には受る事無

く又諸の罪も清く正しき人の爲す所に非ず畜仆蠱物等の悪行も其身心共に穢るゝに非ずば行ひ難き事なり然れば祓の其罪の元因に就て行ふ事なる故に其發端なる穢を以て主と爲るなり 上件の趣共を以て熟考るに先上代に諸の罪を治るに刑と祓と有て刑ふ可き罪と祓を負す可き罪との異有けむか其異は或は重きは刑輕きは祓にやと見ゆる事も有り 又其重くて刑ふ可きを宥めて重き祓を負せられたりと見ゆるも有り又輕き重きには拘はらず罪の色に依て或は刑ひ或は祓を負せたりと見ゆる事も有り又神事に係れる罪は重きにも祓を負せ又神事ならねど神の祟などに依ても其罪をば祓を負せられたりと見ゆ此等の事史に見えたる上代の跡共を考亘して知べきなり〇今云此等は上に史共を引て己に云り 〇然れば此大祓に擧られたる條目共も諸の罪の中にて刑ふ可き罪には非で必祓清む可き罪の品々にて有けむかし 然るに漸世降る任に刑の方繁く成て祓を負する事は少く成以て行て中昔に至ては祓法は唯神事に預れる事に耳用ひられ又愈世降にては其神事に尙祓を負する法は絶たるなり 偖古文の常として惣て何事に在れ擧べき事は數多く有をも悉くは擧ず唯其中の一二を採出擧て餘をは其に含たる事多し 祈年祭詞に民の田を作る事を云とて手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄弖と耳云て春より秋稻を取收る迄の種々の態をば此に含たる惣て此類なり 然れは大祓に祓清む可き罪も猶數多く種々有べき中に此には唯十條餘を擧て余は此中に含たる者なり必此等に限れる如思ふは古文の例を知ざる者なり 但中昔と成ては此祓詞に出たる條々の罪を主として神事には忌たるなり 大神宮儀式帳に亦祓乃法定給支天津罪止所始志罪波敷蒔畔放溝埋樋放串刺生剝逆剝屎戸許々太久乃罪乎天津罪止告分國津罪止所始志罪波生秦斷死秦斷己母犯罪己子犯罪畜犯罪白人古久彌川入火燒罪乎國津罪止定給且犯過人爾種々乃令祓物出天祓清止定給支と見えたる天津罪止所始志罪とは天にして須佐之男命の犯始め給ひしを云り偖此に對へて思へば國津罪止所始志罪と云るも皇御孫命の此御國に天降坐て始て大祓の有し時に此條々の罪共の出たりしなる可し 偖後々迄其時の條目に依て此を擧云故に所始志罪とは云なる可し心を着べき事なり儀式帳は延暦に出來て甚古き書なり と見えたり以上」重胤今此高論に就て思に天津罪は須佐之男命の天にして犯給ふ所にして增加る事有べからざる事云も更なるが國津罪の如きは御天降の始より次々に生出る人の上に有る所を云れば眞には此等の餘にも幾種か有なむも知べからぬを一に合たる事實に謂れたる事なり然るに祓と禊との二を行るゝ故はしも各條理有る事なりけり穢の罪は禊にて淨め悪行の罪は祓にて清まる可き事と思ゆ然れども卷首に註る如く此二を共に祓と耳常云ふ事と成りしかは中古より以來其を別に爲て行ふとは不知々々も其式は遺在て御贖と大祓の事は並行はれて在なりけり 然れども此二を合せ見るに凡ては氣凋(ケガレ)を氣絲(キヨム)るの外には出ざるなり別事と思はむは非也 神祇令に「不レ預二穢惡之事一」と有る義解に「謂穢惡者不

淨之物鬼神所レ惡也」と有る如く穢惡の事有る時は身を護る所の神靈其授置る神氣(イキホヒ)を引て去給ふが故に邪氣此に乘て其の身の主と爲る此を以て惡行をも物し且は殃災にも遇事にて此其罪と云者なるが元來穢に基就て成る所なるが故に祓は其罪の方よりは穢の事を先祓ふを主と立る事なり（清(キヨマル)とは氣緣にて右の穢惡の氣を去る時は天眞の正氣形の如く寄聚て其身の勢加はる事なり此故にの神靈の守る所厚く事として吉ならざるは無の謂なり）刑と祓とを並行はせ給ふ中にも祓の方を重き公事と爲給ひ其祓に就ては罪の方よりも穢の方を重く爲させ給ひて誠に寛宥なる大御政なる物から天下大同ひ公民安泰なりけるは皇祖天神の愛しき青人草と仁惠せ給ふ大御心より出て萬國に比類無き御事にて眞に神隨事擧爲ぬ國の徵信の甚分明なる所なり（如此る事共は物事に狐疑有る漢土などには且ても行はれまじき事にて脅しとも忝しとも云知ぬ所也然るを中古より以來此方にも彼狡意ぶる風の移ろひて漸疑ふ事と成しに依て祓の信なく其徵無きに依て其事の絕るが如きには至れりしなり然りと雖も然すがに神の此文を襲ひ給はざるさへ有に事は少違ながらも天下の社々に祓の事の遺れるぞ此上なき神等の恩賜なる）

如此出波天津宮事以氐大中臣天津金木乎本打切末打斷氐千座置座爾置足波志氐天津菅曾乎本苅斷末苅切氐八針爾取辟氐天津祝詞乃大祝詞事乎宣禮

如此出波は上件天津罪國津罪の條目なるが出なばと云事にて謂ゆる上を承下を起す詞なる者なり偖此章は天津朝廷にて定させ給ふ所の御禊祓の式を天兒屋命に傳給へりし任に其中臣の氏人の世々仕奉れりし狀なり心を深く留めて稽ふ可き者也〇天津宮事以氐神宮本には天津宮事乎以氐と有り偖此は後釋に高天原なる天照大御神の朝廷にして行はせ給ふ儀式に准ひて其如く行ひ給ふ事を云ふ凡て此國にして皇御孫命の朝廷の儀式も何も天上の朝廷のに准ひて行はせ給ひし事なり（此祝詞に天津菅曾天津祝詞など有るも斯る種々の物も天津宮にて用らるゝ物に准らへたる由なり）と有り實に然る言にて神代紀御天降段第二一書に高皇產靈尊因勅曰吾則起二樹天津神籬及天津磐境一當下爲二皇孫一奉上レ齋矣汝天兒屋命太玉命宜下持二天津神籬一降二於葦原中國一亦爲二皇孫一奉上齋焉と見えたる如く顯國の大御政は天宮にて定行はせ給へるに因准せ給ふ事此證のみならず紀記共に御天降の事實を記させ給へるが如し古語拾遺に宜下太玉命率二其部神一供中奉其職一如上天上儀上と有るは殊に炳焉き者なり（凡て古より此御國に有來れる萬の事業は皆悉く天宮の儀式を摸擬されたる所なり所以に倭姬命世記及神宮の古記共に或は如二天上儀一或は如二日少宮之儀一など見えたり己に天孫降臨より以前に大國主神の鎭坐す宮を造らるゝに天上に准ひ建られて天日隅宮と號ひ櫛八玉神の其神を祀らるゝ所にも於二高天原一者神產巣日御祖命之登陀流云々と有るなど考ふ可し）天津宮とは高天原なる天照大御神の

皇大宮の御事にて倭姬命世記などなる五十鈴宮御鎭座條に爾時皇大神倭姬命乃御夢喩給久我高天原爾坐甍戸押張原如見志眞伎志國宮處波是處也鎭利定理給止覺給伎と有る甍戸押張は朝廷より押露かし見求き給ふ由なり此甍戸即天津宮にて猶物に所見たるは大神宮諸雜事記垂仁天皇御世ノ段に其後奉令鎭坐伊勢國度會郡宇治郷五十鈴川上下都磐根御宮所也抑皇大神宮勅託宣偁我天宮御宇之時天下四方國攝錄可天下宮所放光明見定置先畢仍彼所可行幸御之由宣と有る此天宮は上なる甍戸と同事なる者なり又同書清和天皇十五年ノ條に謹撿故實天照坐皇大神宮天降坐之時天兒屋命天見通命天村雲命等彼爲輔佐之神僕同時天降也而彼代以後兒屋根命之孫賜中臣姓厥見通命並村雲命孫等賜神主之姓始從天宮傳來無止齋庭供奉職之氏也又同書後朱雀天皇三年條に齋宮內侍託宣偁我是皇太神宮第一別宮荒祭宮也而依皇大神宮勅宣今更所託宣也天下四方乃人民皆皇大神宮御寶也其中大中臣並荒木田氏皇大神宮天宮與利天降坐時與利繼氏繼門天代々世々奉仕來輔佐乃神民也など何れも天照大御神の天津朝廷を以て天宮と稱ふ所なり　但萬葉二に天津御廷と訓るは右の天宮の事に非ず當今の皇大宮な然云るなれば別なれど其稱呼は古に傚へるなり　又高天原は人の生出る元處なるが故に此顯國の功業を畢て神退るを天皇などに神上りと稱奉る事なるは身後の靈の參昇て仕奉る所なるが故なり後釋に續紀を引て聖武天皇の大御母命の御諡を千尋葛藤高知天宮姬命と稱申給へるも天津宮と云事の有を以てなり」と云れたる此天宮に就て證を得たり其は百練抄壽永二年六月廿三ノ日條に近曾祭主親俊參法皇云夢想云參神宮乎伏庭上父親定並親章卿兩人過去者在堂上以親定傳御云於レ我者令レ向天宮給畢禪定法皇御事所令申付荒祭宮給也可被奉御劒早可進院也又當宮守護事以奏經可申沙汰也此後夢醒了後朝內宮一稱宜成長持來御劒壽虎云可進院之由有夢想仍自寶殿所取出也と有る於レ我者令レ向天宮給は祭主親定卿の我なり此を以て右の天宮姬命も唯に稱名には非ず神靈の天宮に赴く實事を以て稱申給へるなり　萬葉二巻日並知皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌に天地之初時之久堅之天河原爾八百萬千万神之神集々座而神分々之時爾天照日女之命天乎波所知食止葦原乃水穗之國乎天地之依相之極所知行神之命等天雲之八重掻別而神下座奉之高照日之皇子波飛鳥之淨之宮爾神隨太布座而天皇之敷座國等天原石門乎開神上上座奴云々と詠る此歌生死を貫きて甚詳なる者なり天地之初時より神下座奉之までは皇御孫命の御天降の時の事を顯に立て裏には當今現人神と生出坐る所しを云るなり高照日之皇子波飛鳥之淨之宮爾神隨太布座而云々は御世所知看し間の御事を申し又其所に殯宮を仕奉る事を申し次に天原石門乎開神上々座奴は

其神靈の天上に昇給ふ事を云て其石門は天照大御神の天宮を云なり其短哥に久堅之天所知流君故爾とも乗千者高日所知奴とも詠るを以て證徵と爲べきなり　偖此の天津宮事の天津宮は其如く天照大御神の天津朝廷の御事にて右に引る天宮の事なるを熟文意を思ふに天津宮乃宮事以氏と云義なり偖宮事としも云ふは如何なる義ぞと云ふに萬葉十七四十三丁に乎須久爾能許等登里毛知氐と詠る許等にて其許等は政を云なり古事記御天降段に次思金神者取ニ持前事一爲レ政と見え又同記明宮段に大雀命執ニ食國之政一以白賜など有るを併考ふ可きなり神名に大國主神事代主神と父子にて並給へるも大國主神の和魂を大物主神とも大物代主神とも申せる物代は國領(クニシリ)給ふに對へて事代主神は政知給ふ御名なるを以て事は政なる事を知べきなり若て天下所知食す大御業は神祇を治奉給ふを以て本と爲るが故に麻都理碁登とこそは云れ其實は天下の事を執行はせ給ふ由なるを以て見るに却て事と云るぞ主(モト)なりける若て事は業なり其爲す事有るの謂なり其爲す事は祓の業にて其即天津宮の大御政を皇御孫命に傳へさせ給へるを今現に行はせ給ふ所なるが故に天津宮事以氏とは續けたるにて祈年祭詞に高天原爾神留坐須皇親神漏伎命神漏彌乃命以氏云々と有て其結文に故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と有る旨に同じく其皇御孫命の行はせ給ふ其即天津宮の大御政なるを今物爲させ給ふ由なり　○大中臣大は考に總て天皇の大御事に係るをば大某と云例にて御巫をも神祇官なるをば大御巫と云と同じくて通(ナベ)て諸ノ神仕に奉るには非で神祇官にして直に神と君との御中を奏請が故に大中臣とは云なり古大政を總掌れる人の連の加婆禰なるをば大連臣の加婆禰なるをば大臣と云りしも大と云ふ事相似たり但大連大臣は姓に就て云ひ大中臣は職に就て云るなり　續紀景雲三年六月詔に因下神語有レ言ニ大中臣一而中臣朝臣清麿兩度任ニ神祇官一供奉無レ失是以賜ニ姓大中臣朝臣一と有て此人の子孫は大中臣氏なり神語と有るは即此大祓詞の事なり以上取意と見えたり中臣の事は記傳十五五十五丁中臣連の下に萬葉十七に奈加等美と書り名義は中執臣なり登理の理を省り宣給を能多麻布假字を加奈を云類にて猶多かり又臣の意を省くも常なり此を唯中津臣(ナカツオミ)の約りたると爲るは惡し又或人孝德天皇御紀に上臣下臣と云事有れば其對たる中臣なり又大臣小臣に對たる稱なりなど云るも皆非なり　其由は伊勢齋內親王奉入時詞に御杖代止進給布御命乎大中臣茂桙中取持氐恐美恐美毛申給久止申　○今云此は皇御孫命の大御命を大中臣氏の取傳て皇大御神の大御前に申す事を云るなり　大中臣本系帳に高天原初而皇神之御中皇御孫之御中執持伊賀志桙不傾本末中良布留人稱ニ之中臣一者復レ舊之由惟其義也　○今云鎌立公傳に內大臣鎌足云々其先出自天兒屋根命世掌天地之祭相和人神仍命ニ其氏一曰ニ中臣一と有り　中臣壽詞に與天地日月共照志明志御在事仁本末不傾茂槍乃中執持氐奉仕留中臣云々大中臣朝臣など有る如く祖神天兒根命よりして神と君との御中を執持て申す職なる由なり茂桙云々と云るは

梓ノ柄の眞中を執り首尾を頗ず正しく平等(タヒラカ)に持を以て神と君との御中に立て宜しき狀に執持申すを譬たるなり〔舒明天皇御紀詔に亦大臣所レ遣群卿者從來如二嚴矛取中事一而奏請人等也と有るも中臣には非れど事は同じ此古言と聞えたり中を取とは職員令ノ大納言ノ義解に納二下言於上一宣二上言於下一也と有ると同じ意味にて諸の祝詞などを申すは君の御言を神に納るなり太占の卜事を掌るは神の御言を君に宣申すなり是皆中臣の職にて書紀に天兒屋根命主二神事之宗源一者也故俾下以二太古之卜事一而爲上と有るが如し以上採要〕と見ゆ又後釋の考に官の中臣と氏の中臣との分有り」と云れたる如く後まで職を云と姓を云との差別有り然れども中臣氏の人は即皆中臣の職にて取合て其とて置るゝ事は無し故職員令ノ神祇官の下にも神部三十人卜部二十人などは有れども中臣と云ふ者は擧られず式にも卜部を置く事は見えたれども中臣を置と云ふ事は見えず〔中臣女と云る職も中臣氏の女なり又中臣官と云る事有り其は中臣氏の中に神祇の副祐史などの官にて有る人を云ふなり〕と有り〇天津金木の天津は天上にて須佐之男命の解除の法を以て行はるゝが故に云り〔唯に天上の事に傚ふ由には非ず次なる天津菅曾も此と同じ例なる者なり〕金木は小木にて置座を製造る料なり孝德天皇御紀の大御歌に舸娜紀都該阿我柯賦古麻播比枳涅世儒と詠せ給へるを考に舸娜紀は若木(シモト)にて手に取計りなる由なり是小木を馬足に結著て絆(ホダシ)と爲るを云ふ萬葉五に拒楉(マセ)越爾麥咋駒乃と籬(マセ)を拒楉と書るも等し或人今も東國人は小木の枝を金木と云と云り〔又遠江人の諺に夜涙牟加奈米爾日部久と云も小しと賤しむ若木の芽に目を衡と云ふ事なり〕和名抄刑具部に鉗(加奈岐)以レ鐵束レ頸也又云鈦(和名同上)脛杏也此は後の漢字を擧たるにこそ有れ此の古は絆にも小木を用たりし故に加奈岐てふ名は有なり」と云れたるは然る言なり〔和名抄鞍馬具に絆和名保太之牛馬也均使下牛行不上レ得二自縱一也と有るも此云なり〕又後釋に齋明天皇六年御紀に兵盡二前役一以レ梏(ツカナキ)戰と有る梏を都加那紀と訓るは握加那紀と云ふ事にて手に取持て戰など爲る今世の棒なり神名帳に大和國宇陀郡都賀那木神社と云ふ有るも此物に依れる神名にこそ〔〇谷川士清が通證に菅家訓二梃字一云二加奈岐一攜レ此則都賀那岐之義也字書棓棒本字也抱朴子曰官軍以二白棓一擊レ之と見ゆ此菅家ノ訓は後釋に引れたる文選東方朔が文に以レ筳(カナヤキ)撞レ鐘と有て注に筳小木枝也と有る此を云なり杖筳(ツカナヤ)は握小木(ツカナキ)の方然る可からむ〕偖加那紀は細木の惣ての名なるを其中に手に取持つ加那紀を握加那紀の意にて都加那紀とは云なり偖彼大御歌に木をば紀と書たれば清音なり濁る可きに非ず〔偖又和名抄に刑具の鉗鈦を加奈岐と爲たるは考に云れたる如く本は小木を用ひたりしが後に鐵に代りても名は古の任なりしなり然るに此金木を刑具と心得たるは末の物に依りて本名を誤れるなり〕と見えたり偖金木は卷四(祈年山口神詞)に註る如く大木の對に小木(カナギ)と云れば此なる金木も何れの楉(シモト)にても叶へれども梏(ツカナギ)と云るは棒なるを以て見るに若くは祓柱(ハラヘツモノ)を截る千座置座の料なるも同じく楉木の小枝を用ちるゝ所なるにや在む然

るは此木の本立の速々(スクスク)として曲れる所無きが上に其外皮はた佗木よりは滑らかにして清く物を載るに力有て能其重さに堪べき者なればなり此は唯予が推量には非ず伊邪那岐命の御禊祓の事に始れるなりけり其は古事記に阿波岐原と有るを御紀には檍原と作て檍此云二阿波岐一と有り和名抄に説文云檍梓之屬也日本紀私記云阿波木今按又橿木一名也見二爾雅注一と有れば橿の一名を阿波木と云ふ事著し 然るを殿村常久説に新井君美が東雅萩ノ條に朝鮮人等に萩を見せたるに杻字を當てゝ出せりと云れしに就て杻ノ字を考るに爾雅に杻檍と見え其註疏共に杻一名檍とも或謂二之檍一とも云るを擧て此の阿波岐を萩なりと云るを師も信はれたれど然らず檍は假有萩に當れる字に在れ此には橿ノ一名を阿波木と云る其に當て用られたるなれば字に泥む可きに非ず 若は阿波木原は唯に松原檜原柳原柞原などの類にて此木の生たる地を云るには非ず其地に生る所の小木を以て置座など丶爲給へるが例と成て須佐男之命の解除にも千座置戸は負せ給へるならむ偖阿波岐は橿なるに就て又思ふは冠辭考九に眞賢木は常葉なる木を云が中に彼鏡幣を懸け髻華に刺など爲しは橿なり」と云れたるは然も言にて神功皇后御紀に出たる撞賢木嚴之御魂天踈向津媛命と申す御名も此御禊に依て成坐る由に依れゝば右の橿に大に因縁有り 崇神天皇六年御紀に以二天照大神一託二豐鍬入姬命一祭二於倭笠縫邑一仍立二磯堅城神籬一神籬此云二比莽呂岐一と有を垂仁天皇御紀に一云天皇以二倭姬命一爲二御杖一貢二奉於天照天神一鎭二座於磯城嚴橿之本一而祠レ之と見えたり此に依て考るに神籬は橿を以て製る所の者なるが常にも此木を如此く嚴橿と云るは祓の置座木に用ふ可き由緒有て取用ひらるゝが故に嚴とは云なり 偖金木は右の如く橿なる可きが置座に製る料なるに依て臨時祭式には置座木と出たり 其文に云く凡新年月次神今食新嘗等播板置座木等之類仰二五畿內諸國一神戶百姓令レ採二進之一云々と見ゆ倘下なる彼方之繁木本の條見合す可し ○本打切末打斷氐祈年月次山口神祝詞に遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐云々大殿祭詞に今奥山乃大峽小峽爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐採氐本末波山神爾祭氐中間乎持出來氐云々と有ると事は違へど文格は同じ事なり考に本末をば切捨て中間の宜き所を物の置座と爲るを云り此は次なる天津菅曾乎本苅斷末苅切氐と對へる文なり古事記甕栗宮段に赤幡見者五十隱山三尾之竹矣本訶岐苅末押靡魚簀如レ調二八絃琴一所レ治二賜天下一又顯宗天皇御紀に石上振之神榲榲此云二須擬一伐レ本截レ末伐本截レ末此云二謨登岐利須衛於茲婆羅比一など有る古文の例なり」と有り 如此く本末を除きて其中間を用るに就ても忌清まはりの嚴重なる狀に見ゆるは古語の妙なり麁忽に見る可からず 又後釋に云く切も斷も同じ事なるを言を換て云は文なり偖此次に置座に造る事を云はでは言足らぬ如くなれども造ると云ずして唯に千座置座爾云々と云續けたるは古文の格にて如此樣に云る例多しと見えたり然る言なり

其は次なる八針爾取辟氐の下にも拂ふ事を云けでは足はぬを省けると同例なり　○千座置座記傳九三丁に千位は書紀に千座と作り私記に座者是置物之名也と見えて其祓物を居置物案にても何にても有べし○今云通證に今按府凍蔽燈皆同レ訓後世謂二之案一又謂二之臺一是也古事記作二位字一其義著矣と有るは然る言なりを云ふ人の座處(チルトコロ)を久良葦と云も同意なり故此記には位ノ字を書り千は其數なり犯の重き輕きの任に祓も重き輕き有て祓物も多き少き品有るを此は極て重ければ極めて多きを千とは云なり後世に四座置八座置など云名目の遺れるを以見れば幾位と云て祓の等衣を定めしなりと有り此に依て思ふに千座とは千案(チックヱ)と云ふに同じぎが其上に積置く祓柱の員數を云すして何座(イククラ)と其案を以て云る古文の格なる者なりけり尙此事置座の下に委しく云べし記傳八四十三丁に古神に獻物及人に贈りなど爲る物を凡て久良と云りと見ゆ後世の語に人に物を與るを久流と云も是より出たる事なる可し其は千位置戸の位又儀式大嘗祭條に倉代十輿代は實にて即其物を云續後紀一に倉代物五十荷など有る倉此なり以上採要と云れたるが如し若て千座と云ふ時は其案數の許多なる事を云るにて限れる千の數には非るなり　置座は考に右の金木なり木工寮式に四座置八座置以レ木爲レ之長者二尺四寸短者一尺二寸各以二八枝一爲レ束名稱二八座置一長短各以二四枝一爲レ束名稱二四座置一と有るは其頭は、割木を用ひたるか上代には楉木を用ひたりし故に金木とは云り然れど此式に依て上代の置座の形を知べきなり」と有るを記傳九に云く臨時祭式に凡祈年月次神今食新嘗等祭料置座木と有るは置座に造る料の木を云ふ此は神に奉らるゝ料なり儀式帳に四座置八座置と云品有り四時祭式齋宮式大嘗祭式等にも祭料物の中に見ゆ後釋に置座は人々の出したる祓物を取集めて居置く臺なり其形は木工寮式に依れば考に云れたる如く細き木の本末を切去たるを束ねて結たる物と聞ゆれど然(サ)ては然る物を幾箇(イクツ)も並べずは物を置臺には成し難かる可し故思ふに木工寮式に記されたるは後の事にて唯其形計りを遺せる物なる可し上代の置座は別に製樣有けむ其は思ふに細き木を並編て机などの如く造りたる物にや有けむ」と見え又記傳に今世にも在る柳箱などの狀にても推量らる尙四座置八座置も本は四座の置物八座の置物と云事にて其置座の數以て云たるなれば一種の物名に非ず然れば後世のも彼置座に造る可き木を束ねて即其を置座と稱ひ其木の數を以て彼座の數に易て四座置八座置とは云なりけり取意と見えたり皇大神宮儀式帳に結机捌具と有るや右の遺制ならむ尙其編造れる樣は黑木の丸木ながら葛藤などを以て結束ねたる可き事云も更なり古今集に楉結ふ葛木山と詠るを以て證と爲べし　此に就て思ふに置座は祓柱を載る臺の名なる事著きが尙千座置戸は置所なるに思合せて悟る可く千座

は置座の上に載置く祓柱の名なるを知べきなり四座置八座置は其置物を四座八座並ぶる事を云れば四も八も千も數名なり然らば如何なるを一座と云ふと云ふ時は古事記訶志比宮陵に取二國之大奴佐一と有る奴佐にて天武天皇御紀に五年八月詔曰四方爲二大解除一用物云々且毎戶麻一條と有る其にて此は荒世和世の代なり然れば四座八座千座は四人前八人前千人前など云むが如くとぞ所思たる然るを罪犯の多き者などには其數を多く負する事なるが故に神代紀に科千座置戶之解除古事記に負二千位置戶一などは記されたる也此事は已に此卷首に委しく云れば此に引合せて考ふ可き者なり○置足波志氏は後釋に千座の置座の數の多きを並べて置滿るを云ふ倍祓物と云はざれば置は何物を置にか聞え難しと思ふ人有る可けれど上に許々太久乃罪出武と有るにて各其祓物を出す事は云はでも聞えたれば此も自然祓物を置く事と聞ゆるは古文なり倍此置と云ふ言唯居置にても宜しけれど萬葉十、一卷に逢なくに夕けを問ふと幣に置に吾衣手は又ぞ續べきと有る結句は又續きて幣に置べしと云るにて此置と云ふ事今世に物を質に渡すを質に置と云ふ置に似て同三ノ卷に奈良の手向に置幣者など有る類も幣に奉る事を置とは云りと聞えたれば置座の置も物を祓物に出すを置とは云ふなる可しと見えたり倍置足波志氏の置物は上に謂ゆる祓柱を積充るを云なり別に祓物を出せるならず倍此麻をして置充て千座の置座としも爲す故は彼須佐之男命の罪犯の時に唾と洟を以て青和幣白和幣と爲し給へる故事に依れる者也但伊邪那岐命の御身に着る物を脫棄給ひし例に依る事云も更なり倚此事は卷首にも已に委しく云りき○天津菅曾乎神宮本には麻ノ字を書り誤有り下に云べし考に菅は笠にも爲る菅也此物を祓に用し事は萬葉三に木綿手次可比奈爾懸而在天左佐羅能小野之七相菅手取持而久堅乃天川原爾出立而潔身而麻之乎十五に其佐保川爾石爾生菅根取而之努布草解除而益乎又神樂歌酒殿に也戶久毛能奈可奈留久毛乃奈加止三乃安萬之古須介乎佐支波良比以乃利之古止波計不乃比能多女など有る此なり古の祓には割たる菅を手に取持て塵などを拂ふが如き態を爲しなりけり彼萬葉三の歌祓爲る狀見ゆるが如し中略菅も常には菅と耳云ふを祓には割て用る故に菅曾と云るなり倍古書共に祓物種々載たる中に菅は見えねば此を祓に用ふと云ふを疑ふ人有る可けれど祓柱は國の郡領以下戶々より出す者なり又式に大祓に用る物共をば皆擧て布短帖迄も見えたるに詞を書く紙筆を載ざるが如く菅は祓奉仕る官人一人の手に採る物にて又齋て作れる物にも有れば其人自爲す故に擧ざるなりと有るを信ひて後釋に祓に菅を用る事考に云れたるが如し須宜須賀と云ふ名は此草素より清き由有て負るか今云實に然る言なり天上にて祓事を行はれし時此草を以て妖氣を拂へりしを以て須賀と云ふ名は負りし者なり菅曾の曾は佐乎の約りたるにて緖なる物を何に在れ云名なり其佐は眞

に通ひて眞緒の意なり偖麻をも嘗と云て即菜麻とも書は麻は主と緒に用る物にて即乎とも云ふと同じ是にても嘗は佐緒なる事を曉る可し萬葉九に直佐麻とも有るは直麻なり菅嘗と云も菅を細く割て緒に爲たる物なる故に菅眞緒の意なり（偖阿佐は靑嘗の意にても有むか）偖又式に大祓の用物を舉たる中に此大中臣の取持つ菅嘗も必有べきに無きは此祝詞は古の文の任なる故に此事有るを今京となりての頃は此菅嘗を取持つ事は既く止て無りしにも有べし（此外にも祓の體古と變りし事多きぞかし著右の如く用ひたらむには必式にも舉らる可き事なり）と云れたり（以上採要）此二說共に祓に菅を用ひらるゝ事を詳に記されたる所實に如此しと雖今京に成て以來菅嘗を用らるゝ事の止たるには非ず彼萬葉三の歌は須佐之男命の故事に依て詠る所なるが故に在天と云ひ流離事の大祓を爲たる由を以て左佐羅能小野と云ひ其地の菅を採て身潔爲るが故に天川原爾出立而潔身而麻之乎と詠るなれば菅を以て拂ひつる事は相違も無き物から已にも註るが如く神代紀に以レ唾爲二白和幣一以レ洟爲二青和幣一と見えたる其白和幣青和幣は木綿と麻との二種なるが此二種を常に通はして唯に木綿とも奴佐とも云ふ事となれるを以て古事記（詞志）

（此宮段）には取國之大奴佐と記され天武天皇御紀なる祓柱ノ條には毎戸麻一條とは記されたるに四時祭式（六月晦日大祓條）に木綿五斤二兩麻二十斤十兩菜十二兩と條目を別たれ儀式には神祇官須二切麻一と事も無く記されたるに心を着て考ふ可き事有り（齋宮式なる祓料に木綿各大四斤と有るを河頭祓の下に神祇官中臣進レ麻宮主讀二祓詞一と記せるも此と同じ）往古に麻を用たるを菅に易ば物の簡に隨ふとも云べけれど菅を以て麻に易む事は有るまじく所思るに神宮本には天津菅麻と有り此に依れは記紀令式には叶へれども右の萬葉及神樂歌に合はず甚々難儀なる事共なり又此詞なる天津菅曾の若彼白茅ならむには天津小菅とか天津菅根とか記さる可きに然は無くて菅は淸の形狀言と聞え曾は如何にも實ノ字と聞えたるに就て思へば麻の意に取る事勝れるに似たり（此を菅と麻と二物に取れば先なる金木を金と木と二物なりと云むか如く其說窮るを如何は爲む）然れども菅曾は猶白茅と見る方や宜しく有む外宮儀式帳に菅裁物忌父造奉（流）太玉串（乎）禰宜捧（氏）大神宮司（爾）給と有るも由有て通え又菅裁物忌云々新宮造時宮處草木苅裁始又野山草苅裁始云々など有て内宮儀式帳なる山向物忌の行事と粗似たり然れども此は祓に用る菅を裁て進るが本職なるに就て右の如きの勤仕は

物爲るなりしなる可し然るを石寄文雅と云人の私考と云書に菅裁者清裁也と云るは中々に愚なる說にて此の菅は淸淨の義ならずして實物の菅を指たるなり後釋に式に大祓の用物を擧たる中に此大中臣の取持つ菅曾も必有べきに無きは此祝詞は古ノ文の任なる故に此事有るを今京と成ての頃は此菅曾を取持つ事は旣く止て無りしにも有べし」と云れたれど式には此天津菅曾のみならず千座置座の事をも記されず然れば其頭大祓の古式は廢れたるかと思ふに然に非ず此二種共に天下に負せ給ひて召上給ふ祓柱には非ず解除を爲る器なるが故にこそ載られざるには有けめ然れば賀茂翁ハ詞を書く紙筆の譬は允當れるが後釋の說は叶はざる所なむ有る然れば千座置座は毎戸麻一條と有る其大奴佐を置く料にして其大奴佐は衣の代なるが其を天津菅曾を以て座を拂ふが如く祓ふ事と見えたり此即天津宮事にて上無く尊き祓の眞式なり心を深く留めて讀味ふ可き者ぞかし然れば神宮本に麻字に作りたるは右の祓柱を科する古式の改りて淸麻を以て白茅に代用るが故に何時と無く神宮耳にて改りし者なりと所思ゆ且儀式に頒二切麻一と有る如きも其式の改れるかと思ふに然らず人々に切麻を賜ひて贖物ト令爲給へるなれば此天津菅曾とは素より別なる所なりけり○本苅斷末苅切氏考に右の金木と言を對へて云り」と云れたるが如し借金木には切を本にして云ひ菅曾には斷を本にして云るなり上に引る菅裁物忌の裁も此と同意なるを思ふ可し常にも木には伐と云ふ言なるが草には苅と耳云るを古くは裁とも云りし事此にて著き者なり且上なると此とを對へ見るに木には打と云ひ草には苅と云り然れば此の打は打見る打渡すなどの打には有べからず古く木を伐る事を然も云りしなり○八針爾取辟氏考に引れたる江家次第八省東廊の大祓に祝師着レ座臨二祓詞一及二八張一解レ繩了祓了云々又平野祭に宮主奉二仕祓詞一と云ふ所の細書に到二祓清之處一以二人形一令レ吻給到二中臣祓詞八張取制之處一解レ繩給畢宮主退出」と有る此等を陰陽師などの附添たる事の如云れたれど然らず上の天津宮事以氏より天津祝詞乃太祝詞事宣禮までの文は解除の事を爲行ふ可き式法を云る條なれば必如此きの事全に無しとは云べからず倭姬命世記に乙若子命以二麻神衛靈等一進二倭姬命一而令二解除一と見えたるを以て思ふに甚も久しき遠神代よりの事なりけり麻を須賀と訓るも菅を用たるが故なる可し神衛靈は彼世折の事なる可し此を以て此を觀れば及二八張一解レ繩とは此天津菅曾を以て解除ふ事の少か轉れる者なりと所思ゆ此事は上なる荒世和世

の所に委しく記せれば併せいふ可き者なり　偖八針は後釋に百張蘇我乃國か百枝刺竹田乃國と見え熱田社寬平緣起に倭健命の御歌に麻蘇義乎波理乃夜麻等云々此を合せて思ふに蘇我は菅の意に連けたる事眞菅吉宗我乃河原爾など有が如し麻蘇義も眞菅なり偖百張と云ひ尾張と連けるは共に菅に就たる事なり然れば張とは菅の茂と生たるを云ひ其より轉りて其葉一條二條を一張二張など云しにこそ其は菅のみにも限らず云るにや天武天皇御紀に麻一條と有るも多は添たれ共同じ張か此等を以て思へば此も針は借字にて菅葉を細く數條に割く由ならむか（但麻一條の多婆理は束（タバリ）の意にて此なる張の例とは異なる可く所思ゆ）と有る此にて通えたり　然るを倭姬命世記にも此と同しき文有る其には天津金木乎本打切末打斷氏千座乃置座仁置足波志氏　天津菅麻乎本苅斷末苅切氏八針仁取刺氏種々乃贖物等乎波案上案下仁如海山仁久置足波志天　天津祝詞太祝詞事乎宣禮と見えて此の取辟を取刺に作れり此に就て出口延佳說に今世にも神宮の故家に祓勤仕の時は二三寸に麻を斷て八針とて八本の幣串に狹み八足机の上に刺て修するなり此詞の神宮本に本苅斷末苅切氏八針爾取刺氏と有るは此を云と云るは何とかや後世めきて所思ゆ且世記なる舊訓に刺を佐須とも訓べからねば此說は據難けれど古くも天津菅曾を木に狹みて拂つる事有し遺風なる可きなり（但倭姬命世記なる舊文は菅を緒の如く細く割くに依て麻字を書れたるな以て神宮本にも菅麻に作るなる可きが其を白茅の事とは爲ずして麻の事と爲るは事違へる心ちす）　又後釋に云く此次に此菅を取持事を云へきに略るは例の古文にて上の金木を置座に造る事を略けると同じ○偖此段は解除の事を爲行ふ可き式法を徵せる文なるに然も上無く簡き古文なる故に甚々明らめ難くなむ有ければ此古式を熟く見得て說言爲る書は且ても非ず又儀式及延喜式以下の書には御贖儀と大祓儀とを別て載られたれば各々別々なるが如くなれりしより彌々此詞に合はずなむ成れりける故今此を委しく說むには大中臣云々は神祇令に中臣上二御祓麻一と有る此なり（但卜部爲二解除一と有るは此に漏たり其は中臣に屬て事を行ふを以てなり）　天津金木乎云々は神祇令に卜部爲二解除一と有る其贖物を置く座を造れる事なり若て其御贖は荒世和世にて卜部の職掌と爲る所なる事此卷首に註るが如し然れども天下の人々は此荒世和世に代て戶別麻一條を出す事又令に見えたる所なり此贖物を取集めて其置座に置く事を千座の置座

に置足はすとは云るなり然るを一條兼良公御説に千座置戸者云々後世解除有二四座置八座置之名一各用二一束之稲一是神代之遺法也と有れども此は其頃の祓式の沿革れるを以て神代を推量らせ給へる僻説ながら四時祭式なる大祓に稲四束と有り但此散米の料なる可し天津菅曾乎云々は右の贖物の上より麈を拂ふが如く祓ふなりけり但中臣上二御祓麻一と有る舊式は菅なりつらむを儀式に頒二切麻一と有れば若くは麻(アサ)に易用ふれたるらむも知べからず但此は大祓所に参集へる百官男女の贖物に二頒切麻一て出さしむるが後人能く定てよ如此くして天津祝詞の太祝詞を宣り然て後に其贖物を大川道に持出て流し却ふ者也けり〇天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮は中臣壽詞なる天津神の御言に自二夕日一至二朝日照一氐萬天都詔戸乃太詔戸言遠以弖告禮如此告波云々と有るに同じ偖此は神代紀に即科二素戔鳴尊千座置戸之解除一以二手爪一爲二吉爪棄物一以二足爪一爲二凶爪棄物一乃使下天兒屋命掌二其解除之太諄辭而宣上之焉と有る其にて神祇令に中臣宣二祓詞一と有る職掌の元由なり萬葉十七五十一丁に奈加等美乃敷刀能里等其等伊比波良倍と有るも此事を詠るなり其は下に委しく云べし道饗祭詞にも天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭竟奉久止申大神宮四月次祭詞にも天照坐皇大神乃大前爾申進留天津祝詞乃太祝詞乎と見えたる其等は別なり其下に云べし鎭火祭詞に高天原爾神留坐云々天都祝詞太詔事乎以申久ト有るも共に其文中に天津祝詞の有を指て云るなり荷田在滿説に天津祝詞乃太祝詞事とは此祓詞を指には非す別に祝詞有て其を宣れと教るなり此祓詞は神に告る詞ならねば祝詞とは云べからず且此に太祝詞事を宣れと云ひ下に天津神國津神の聞食むと有れば直に此祓詞を宣ては義通せざるなり神代紀に使下天兒屋命掌二其解除之太諄辭一而宣上之焉と有れば天津祝詞乃太祝詞と稱して別に在し事明らけし」と云るは實に然る言也此在滿説は賀茂翁の祝詞解と云に出たるを再引たり祝詞考の元本祝詞解と云て五卷有り祝詞考は後に其説を改られたる者と見えて其頭書に或人祝詞は神に告る言なり是は人の身滌祓の事なれば祝詞とは云ず唯詞と耳云り然れば此に天津祝詞と有るに別に神代より傳はれる言有るならむと云るは僻事なり云々」と有るは右の在滿説を後には信はれずなりつる説なから却てそ僻事には有ける又後釋にも此に云る太祝詞事は即大祓に中臣の宣此詞を指るなり」と云れたるも共に惡(ワロ)かりけり師も在滿が説とこそは知られね此或人の言を諾はれて天津祝詞考と云を著して云く大祓詞は皇御孫命の天降坐す時皇祖天神の御言以て天下に在ゆる天之益人等に過犯せる罪穢の有む時大祓事を爲て解除却る可き式法天津宮事以てと云より太祝詞事を宣れと云ふ迄の文に熟く心を着て思ひ辨ふ可し又其解除の太祝詞を天津神國津神の聞食せは祓戸神等の受納給ひて罪穢を却ひ失ひ給ふ狀をも御言依し誨給へる事の隨に此事を爲て百官人及四方國の人民の罪穢を天皇命の祓清めさせ給ふ由を集侍る人々に宣聞す詞にこそ有れ神に白す詞には非す斯在ば其太祝詞は別に在けむを式に載漏されたるなる事著明し

其は大祓詞に大中臣云々天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮と有て如此久乃良波と承たるに熟く心を着て思辨ふ可し神に白す太祝詞を別に依し賜へりしが漏たるなる事更に疑無き者をや若然らすと爲ば太祝詞事乎宣禮とは何を宣る事とか爲む云々と云れたるにて愈疑ふ所無き者なり（但此師說は甚く約めて引り且古史傳にれ說たる所なら交へ引たる所なり予未見と云ども光胤が聞持てるを云に任せて記すのみ）宣禮とは下知の詞なり此詞の例云々聞食止宣なと中臣の令する所々は能流と云て其所にて刀禰稱唯と儀式に見えたる此とは別なり此は祓を負（アツラヘック）ずる人の宣るには非ず祓を爲る人に宣れよと使令る詞なり（然るを大祓後々釋と云ふ書に宣利と改めて自宣る事と爲るなどは文体をだに得知ぬ癖人の狭意なれば努々惑ふ可からず宣利と云て下に如此久乃良波とは何でか承む）此に考有り儀式に神祇官頒ニ切麻ー訖中臣移就レ座讀ニ祝詞ー稱ニ聞食ー刀禰皆稱唯麻畢行ニ大麻ー云々と有る頒ニ切麻ーは天津菅曾の餘風なる可く中臣迻就レ座讀ニ祝詞ーと有る此は祓詞なるが何切にて刀禰皆稱唯する例なれは此段にて右の切麻を打振て彼天津祝詞の太祝詞を異口同音に宣りしなる可し此を承て如此久乃良波と句を起し又中臣の祓詞を宣るなる可し然らざれは此大祓處の參侍れる人々又別に祓事を爲るになりて六月十二月晦日に右の祓柱を出さ令めて天下の人の罪穢を祓はせ給ふと云に當るべからざれはなり但其所に參集へる人の各々其太祝詞を此に宣る次なれは如此久宣禮波と云べき語の格（サマ）なりと雖も其は太祝詞を宣竟るを開濟して中臣の次詞を宣るに非されば必乃良波と將然を豫て宣る可き理なり若然らずと爲（セ）は右の天津宮事以より以下は祓を物爲る儀式の文成に此時ならずは何時の事とか爲む上に引る江家次弟なる八省東廊ノ大祓に臨ニ禊詞及ニ八張解ニ縄了禊了祝師奉ニ大麻ー午令持祝師一撫一吻返給了と見え平野祭條に宮主奉ニ仕祓詞ーと云ふ所の細書に到ニ祓清之處ー以ニ人形ー令レ吻給剣ニ中臣祓詞八張取剃之處ニ解レ縄給畢宮主退出と有る此即神祇令に卜部爲ニ解除ーと有る其なる事宮主の預仕奉るを以て知べし然れは天津宮事は此間にて行るゝ事決き者なれば天津祝詞の太祝詞は必此時に宣る可き者になむ有ける（然るを天津祝詞考に必先太祝詞を申して後に大祓詞を唱ふ可き由に云れたるは據處ならざれば信ひ難くや侍む）○天津祝詞乃太祝詞は別に其詞有る事著明きが此大祓詞も又神に白す詞なり續紀には此を神語を云ひ神祇令には祓詞と云るを儀式には祝詞と有り神祇令に中臣宣ニ祝詞ーと有る義解に謂宣者布也祝者贊辭也言以ニ

告レ神祝詞一宣ニ聞百官一故曰レ宣ニ祝詞一と見えたる如く前後の文を取捨して神には申す事なり（凡ての祝詞必しも如此き例にて天皇より神に申させ給ふ詞を先禰宜祝などを召て神に告る任に宣せ給ふ御定にて祝詞に宣命を相兼たる事已に第一卷第三卷などに説るが如し然れば今しも祓事を行ふにて此詞を申さむに集侍云々などを云むこそ僻事ならめ高天原爾神留坐以下の詞は必聞え上べき事下に云るが如し）所以に朝野群載には中臣祭文と載して高天原爾耳振立聞物止馬牽立氐云々と有るを云々止祓清給事乎祓戸乃八百萬乃御神達八佐乎鹿乃八御耳乎振立天聞食止申と有る宣命の任にては神に申し難き故に如此く詞を易て祭文とは爲るなり今世に中臣祓詞とて諸社にて宣る所大旨如此き状なり必しも此を誤なりとは云べからず（此事此卷末に委しく云ればここには省く）儀式の御贖儀は神祇令に卜部爲ニ解除一と有る其なるが荒世和世の度毎に宮主取祝詑授ニ後取卜部一と有るを西宮記には宮主密祝と有る此は必天津祝詞乃太祝詞なる可きが相並びて大祓詞をも唱ふる事なり其は宮主秘事口傳抄に右の取祝と有るに當て次返給之後著ニ庭座一讀ニ祝詞一云々と有て次に大祓詞の高天原爾神留坐云々四國卜部等大川道爾持退出氐祓却止宣と見えたり此は右の御贖儀に仕奉る卜部のみに令する詞なるが故に集侍云々の詞を略ける者なり儀式に即授ニ卜部一人一令

レ向ニ祓所一とも其荒世者賜ニ卜部一和世者賜ニ宮主一訖皆退出解ニ除河上一と有るは御贖の事畢りて大祓處に參赴くを以てなり（如此くなれば人に宣る耳には有べからず必神に申せる詞なる事著明なる者なり師は鈴屋翁の此詞を神に申すと云を破られたる其中に彼太祝詞の別に在る事に心着れざりつるこそは故翁の思漏されしには有けれ其餘に云れし説に於ては誤とは云ひ難し）○天津祝詞乃太祝詞は師説に此は皇祖天神の大御口自に御傳へ坐るにて（其は太祝詞事乎宣れ如此久乃良波と有る文意を熟く思ふ可し大御口自に御傳へ坐る事更に疑無き物なるをや）祓戸神等に祈白す事なるを神事の多在る中に禊祓の神事計り重きは無ければ天津祝詞の中に此太祝詞計り重きは無く天上にて天兒屋命の宣給へる辭も其なる可く所思ゆるに餘の祝詞は悉く傳はれる中に是のみ漏たるは別に重き詞なる故に式には態と載漏されたるにて中臣家には必此を傳られたらむと所思えたり」と云れたるは然る言なり然れども予が思ふ所は今一層上世に在りて必伊邪那岐命の筑紫日向の橘の小門にて宣給へる詞の在しを天上にて須佐之男命の解除の時に用ひ給へるなる可く所思たり（其は實に少緣の由緒には非ず究めて幽深き旨有る御事になむ有ける下に註ふを見る可し）又師は世に傳はる身曾岐祓と云ふ物有る其ならむと彼此異本共を按合されて記されたる其詞に云く高天原爾神留坐須神魯岐神魯美乃命以氐皇祖神伊邪那岐命筑紫乃

日向乃橘乃小門乃阿波岐原爾御禊祓比給布時爾生坐留祓戸乃大神等諸乃枉事罪穢乎拂比賜幣清米賜登申須事乃由乎天津神國津神八百萬乃神等共爾天乃斑馬乃耳振立氐聞食世止恐美恐美毛白須と有る理に於は實に然もや其聞ゆれ其文の躰裁を見るに中々に式なる諸の祝詞抔の麗美しきには似てしも非ぬ者にて中古に出來れる杜撰なる事疑無し又師説に高天原より命以氐までの文は天神の御口自の語には非ず皇御孫命の天降坐て後に此を唱ふる時に冠て申せる文なる事は灼然き物から文に三義有り其一は伊邪那岐命と云る係りて神魯岐神漏美の命以て依し給へる任に事始の給へる伊邪那岐命の云々と云る義なり二には祓賜ひへ係りて祓戸神等に祓清め給ふ可き由を神魯岐神魯美命乃仰給へる由なり三には聞食せと云に係りて高天原に神留坐す神魯伎神魯美命の命依し給へる天津祝詞の任に白す事を祓戸神等天津神國津神八百萬神等に聞食せと云るなり斯れば皇御祖と云より聞食せと云までは天津祝詞にて前後の文は此を申せる人の詞なり」と云れたれど悉く信び難く強て説を立られたる物なる故に語脈通らず文意貫き難くなむ有ける然れは此は身滌の時に中世人の申ける祓詞にこそ有けめ天津祝詞乃太祝詞は然る拙き物に在るべからず凡慮を以て製作り難く又解説難くして神ならぬ人の遠く心も詞も及はぬ所に在る可き者なり倭類聚神祇本源に問何故以二解除詞一稱二中臣祓一哉復天祝詞太祝詞者祓之外可レ有二別文一歟答以二解除詞一稱二中臣祓一者中臣氏人行幸毎度奉レ獻二御麻一之間有二中臣祓之號一云々復次天祝詞太祝詞是又有二多説一此故聖德太子奉詔撰定伊弉諸尊小戸之橘之檍原解除天兒屋命解二素盞嗚尊惡事一神咒皇御孫尊降臨靈驛咒文倭姫皇女下樋小河大祓彼此明々也其以可尋歟と見えたるぞ天津祝詞の太祝詞事の據には有ける又其前條に問開二天磐戸一之時有二咒文一歟如何答咒文非レ一秘訓惟多云々又云布瑠部由良由良止布瑠部此外咒文依レ爲二秘説一不レ及二惡勤一謂二天神壽詞天津宮事一者皆天上神咒也と有る天津宮事は此に謂ゆる天祝詞太祝詞を指て云なり但餘りに略きたる書樣なるに依て且く見ては別々の如く聞ゆめり然れは伊弉諸尊の解除に用給へりしと云ふ詞に右の身曾岐祓にては叶はず且神咒と云ひ咒文と有るを以て見れば然計り長々しき物とも聞えず今しは絶たるらむと旦夕に歎き思ふ餘りに思得たる事有り其は伯家に傳はる大祓式に先中臣祓詞乎讀祓具の作法有り次三種祝詞と有て此詞を百返二百返より千返に至ると有るぞ然すがに天津祝詞の太祝詞事の神隨にして行るゝ所には有ける中臣祓詞を讀む間に祓具の作法有りとは同家の祓之作法と云有り其大略に云く祓には切麻人形解繩洗米の作法有り是を祓具と云ふ天津清麻乎本末斷知八針爾取刺氐と云所にて切麻を兩手に取分て背の左右へ捨るなり切麻は五色の紙を三分四方に切て土器に盛祓机に置也〇今云此文式なるとは違へれども伯家にて用らるゝ所は如此くなると見えたり下此に倣ふ可し且上に引る江家次第にては此所にて繩を解くなり朝夕乃霧乎朝夕能風乃吹拂布と云所にて人形を取り其人形にて我襟を撫て息を

吹懸け置なり人形は時の青草にて小き人形を作り土器に入れ祓机に置なり大𢱢乃舳艫農綱乎解放氏と云所にて解縄を左手にて解き背の方へ捨るなり解縄は米藁四筋を以て長縄に約（ナヒ）曲て結び土器に載せ祓机に置也遺禮留罪波不在止祓比清牟流と云所にて洗米を左右左と三度打蒔なり洗米は土器に盛り祓机に置くと有る此は後世めきたる事と一通りは思ふ事なれど天津宮事の祓式より移來ぬる事なれば其謂無きに非す其中に天津祝詞の太祝詞を宣る事無きは後へ回して三種祝詞を數返白せるぞ其なりける此は伯家に限らず諸家の行事にも三種大祓と云て甚しき物に爲る所にて人能く知れるが如し然るを諸說に異有りと雖も大旨天地人三才の祓詞なる故に三種大祓と云由なるは信用難し今思ふに此詞の所用三種なり一は太兆二には祈年三には大祓と此三種に用來れりしより何時と無く題號の如く成て天津祝詞乃太祝詞事の名目は亡けるなる可し然れども其實は依然の如く在て其三種の神事の祝詞と成て傳來れる事は全く神祇の恩賜になむ有ける世の古學者と云ふ輩など斯る事の在とは心着ずて空言に日を送るは甚々遠無き者なりけり若取にも足らぬ事と思捨たらむには其取用ふまじき正しき物爲て世人にも示す可きに一向に其言擧無きは道を思ふ事の深からぬが故なり〇三種大祓の天津祝詞乃太祝詞事なる由を今爰に徵してむ諸書に吐普加身依身多女と有て此は占方に用ふる詞なるが吐普は遠大にて天地の底際の內

を悉く取統て云なり加身は神にて天上地下に至る迄感通らせる神を申せり依身は能看多女は可給と云事にて遠神能知看可給と乞申せるは簡古に爲て能く六合を網羅たる神咒にて中々に人爲の能及ぶ所には非りけり上なる身曾岐祓と云者と校合せて此三種祝詞の深旨有る事なも思ふ可き者なり神祇令に卜部爲ニ解除一と有るも少か此に由有て思ゆ偖此を占兆の事に用ふる其始を思ふに古事記に伊邪那岐伊邪那美二柱神議云今吾所生之子不良猶宜白ニ天神之御所一即共參上請ニ天神之命一爾天神之命以布斗麻邇爾卜相而詔云因ニ女先レ言而不良亦還降而改言と有る此時は御卜は鹿卜にも龜卜にも未有ず御心合の御占兆なるが此時天神と二柱神と已に隱身顯身の差別し有れば天神と御直に御言語の事は出來ざりければ御心に兆を設て天神の御心と合せ給ふが故に卜相とは云なり又顯身ながらにしては其至り坐む程も際限有る可ければ中天にして其天神の御靈を申降して其御卜相を物爲させ給はむには此吐普加身依身多女の言を告給へりけむ事云も更なり其は右に引る神祇本源に伊弉諾尊小戸之橘之檍原解除に此天祝詞太祝詞を用給ひしと有るにて推量られたり又同記に召ニ天兒屋命布力玉命一而內ニ拔天香山之眞男鹿之肩一拔而取ニ天香山之天波々迦一而令ニ占合麻迦那波一而云々と有る

此鹿卜に宜る所も右の祝詞なる事決し其は天上にては鹿卜を用給ひ國土にては龜卜を用させ給ふも、共に其神等の預給ふ事云も更なるが、下に引る龜兆傳註に時有神女、住天香山、龜津比女命今稱天津詔戸太詔戸命也と有るにて著き者なり其は釋紀に引る龜兆傳なる龜卜祭文に皇親神魯岐神魯美命荒振神者神掃々石木草葉斷其語詔群神吾皇御孫命者豐葦原水穗國安平知食天津事寄之時誰神皇御孫命朝御食夕御食長之御食遠之御食之間可仕奉神問々賜之時住天香山白眞名鹿吾將仕奉我肩骨內拔々出火成卜以問之問給之時已致火偽太詔戸命進啓曰白眞名鹿者可知上國之事何知地下之事吾能知上國地下天神地祇況人情憤悒但手足容貌不同群神故皇御孫命放天石座別天八重雲天降坐立御前下來也吾八十骨乾曝日以斧打天之千別千別甲上甲尻眞澄鏡取作之以天刀掘町判掃之採天香山布毛里木造火燧擣出天香火吹著天母香木取天香山之無節竹ホ原本ノマヽ折立卜串問之曳土者下津國八重將聞曳天者高天原八重將聞通灼神方者衆神之中天神地祇將聞正青山成枯々山成青々川成白川白川成青川國者限退立天雲者限壁立青雲者限棚曳白雲者限向伏日正縱月正橫將聞通焉陸道者限馬蹄之所詣海艫者限船艫之所泊焉灼人方者衆人心中憤悒之事聞正將知故如國之曆曳立高天無所隱愼而莫怠矣と有て土天神人に配たるが多女の無きは多女は給の義にて其兆に表るゝを云が故なり所以に日本紀假字抄一條兼良公御說にも此說に依て龜卜術者皇孫天降之時有龜神名曰太詔戸命服玄衣進延頸曰天照大神曰鹿者知天而不知地龜者知所不知焉請獻甲灼之觀兆則天下之吉凶居可知矣遂進五兆曰地天神人兆如次配北南東西中左爲外右爲內云々と記給ひ兆を多女に配給へるを思ふ可し師時郷歌に思ひ不得(カネ)龜の正占(マスラ)に事問へば兆合(トメアヒ)たりと聞ぞ嬉しきと有るを顯昭が藻鹽草に多女は人なりと云るは違へるに似たり借其龜卜の町形は　と如此く縱橫中央に配當たる者なるが彼遠神能看可給と云言を地天神人兆と賦命て位置を爲るは牽強附會の如く且とは思ふ事ながら右の龜卜祭文に合すれば悉くに神隨の理に契合ふ者なり借吐を地に配たるは土をも地をも吐と云ふ事は泥土沙土の遲は初土窄土の義なるを以て見るに字音ならず處所の言なと同じければ地に當る言なり普を天に配たるは天地と對ふ天は天日を云れば火と云る事

其宜しきを得たり此二言を合せて遠の語と爲れる者と所思たり加は氣なり身は精なり大氣の精神を含みて天地を氤氳して造化を爲給ふ所即神なり依身は人素より形躰無し精神を天神に賜り形躰を天地に得て人たる由なり多女は給なるが言義は多聚にて天地神祇の御靈の依集り結成て物事の世に在る謂なり然れは此五兆の配當も天上の御占に配賦給へる任に傳はれるなり（但注次第に水火木金土に當たるを始て後人の五行配當の言痛き說などは取にも足ぬ者なり）又祈事にも此に用られたらむと所思る由は神代記（天石窟第三ノ一書）に至ニ於日神ノ閉ニ居于天石窟ニ也諸神追ニ中臣連遠祖興台產靈兒天兒屋命ニ而使ㇾ祈焉於是天兒屋命云々而廣厚稱辭祈啓矣于時日神聞ㇾ之曰頃者人雖ニ多請ニ未ㇾ有ニ若此言之麗美者ニ也乃細ニ開磐戶ニ而窺ㇾ之と有るを古事記には天兒屋命布刀詔戶言禱白と見えたれば此將件の天祝詞太祝詞なる事云も更なり其は日神磐戶を閉て隱坐し間なれば此常夜の闇往くを遠神能看可給と一向に所啓給ひし故に出坐るなれば天地に貫き神祇の感應一速き事此に過たるは有べからぬ理なり此故に今傳はる諸家の神祭の行事に其祈事に屬て此三種祝詞を諄返し唱ふる事必上世の遺風なる者なり其は大祓の太祝詞に用らるゝに祓給幣清給幣の語を添て申すを以て曉る可きなり（又神代紀に天兒屋命則以神祝々之と有を神祝々之此云ニ加武保佐枳保佐枳々ニと有るが保佐枳は火柝にて彼占兆の祝詞を用て所啓させ給ひし由なる可し唯に保其の意には有るべからず）又此天津祝詞乃太祝詞を解除に用ひらるゝ事は既に上に說る所なるが今其古例を遮む類聚神祇本源に伊弉諾尊小戶之橘之檍原解除云々と有れば此時の大御禊祓に此詞を以て皇祖天神へは聞え上させ給へりけむ其遠神能看可給は大祓に天津宮事以氐云々天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮如此久乃良波天津神波云々所聞食武國津神波云々所聞食武と有る趣意に奇しき迄打合て聞ゆめり但今世に傳はる所は吐普加身依身多女祓給幣清給幣と有れば如此く申させ給つらむを其任に御世々々の大祓に用來れるなるべし成程予が說く如く遠神能看可給ならむにも解除を爲るには祓給幣清給幣の語無ては得有ましき者なりけり（但神家此に加ふるに寒言神尊利根陀見の語有り此は坎艮震巽離坤兌乾の八卦を竊に入て其字を覆したる者なり此は除去るべき事云も更なり倭漢土に傳はる伏義氏十言之教と云ふ咒文有り左傳定（原本ノマヽ字ナキヤ）四年正義に乾坤震巽坎離艮兌消息と記し易緯乾鑿度鄭注にも伏義初有ニ十言之教ニ而畫ニ八卦ニと見ゆ我が三種祝詞に彷彿たる事なるは大國主神の赤縣にて此を漢語に爲て用給へるが遺れる者なるべし）又天兒屋命解ニ素盞嗚尊惡事ニ神咒と云るは已に引る神代記（天石窟段第三ノ一書）に諸神云々即科ニ素盞嗚尊千座置戶之解除ニ云

々乃使天兒屋命掌其解除之太諄辭而宣之焉と見えたる此を云なり又類聚本源に謂天神壽詞天津宮事者皆天上神咒也と有る天神壽詞は中臣壽詞を云るが天津宮事をは此の太祝詞を云る者なり此は天津宮事の解除の式法定る時なれは伊弉諾尊の解除詞を用て其法則を後世に垂給ふ所なり此も我身實岐祓詞にては似著はしからぬ心ちす心を平にして思ふ可き者なり又皇御孫降臨雲驛咒文とは神名秘書に引る或書に彦火瓊々杵尊天下坐爾時天押雲命以天津諄辭解除清淨而天八重雲乎出之道別々々天下坐と有る此を云るなり神祇本源に中臣氏人行幸毎度奉獻御麻と云るは此故實に依る所なり但彦火瓊々杵尊を彦火々出見尊と作り誤なる事著ければ改て引たるなり天押雲命は天兒屋命の子天種子命の父にて中臣の祖なり倭姫皇女下樋小河大祓云々は倭姫命世記に垂仁天皇二十二年遷飯野高宮四箇年奉齋云々汝國名何問賜白久許母理國志多備之國云々乙若子命以麻神嶺靈等進倭姫命而令祓解云々と有る此時の祓に天祝詞太祝詞を宣給ひしと云事なり神祇式に凡驛使入大神宮堺者到飯高郡下樋小河止鈴聲亦曰凡祈年月次祭使參入者大神宮司卜部祇候多氣河而解除若有闕怠奪其衣服と有るぞ其例に傚へるなりける偖此に大祓と云ひ上に咒文と有を以て思ふに必此下樋小河にて大祓を修し給へるが其詞は今世に傳はる神宮本と云るの基なる可くなむ所思たる斯在れば類聚神祇本源を記さるゝ當時迄は大祓詞と太祝詞と打混れずして傳れりと見えたり然すがに神の朝廷には神世の古儀を存する者にて甚だ尊くなむ

如此久乃良波天津神波天磐門乎推披氏天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏所聞食牟國津神波高山之末短山之末爾上坐氏高山之伊穗理短山之伊穗理乎搔別氏所聞食武

如此久乃良波は右の天津祝詞乃太祝詞は遠神能看可給と申す事なるが故に天地の諸神に通して感應有るの事を云るなり但前段の終にて大祓に會集へる百官男女共に其太祝詞を宣る其を受て如此久乃良波とは云るなり上なる云々罪出武如此出波云々と同例なるに心を着べき者なり今大祓爲る所は天津罪國津罪を祓ふ事なるに指當りて其式法を宣るに思ひ合す可し偖祓は祓處神等にこそは祈申す可けれ次文に依る時は天津神國津神の所聞食に非では罪穢は清まるまじき狀なり此に就て思ふに祓處神は素より其罪穢を祓清め給ふ御職には坐せども在ゆる天神地祇の御納受無くて祓清めさせ給はぬ天津宮事と聞

えたり然れば右の天津祝詞乃太祝詞を聞え上る時は天神地祇の先諸給ひ然て祓處神には達し給ひ祓處神等は其天神地祇の聞食すに隨ひて罪穢を祓清めさせ給ふ事となむ所思たる（何れの神に物事と祈申すも同じ事にて其願ふ所の神は諸ひ坐まく所思すとも天神地祇の悉く聞食し許可（ユル）させ給ふに非ずては其御守護有るまじき事此詞の趣を以て曉る可きなり然計り天地に至徹るに至てこそ眞に罪穢は殘る所無なり竟て却て幸福を得る事は有る可かンめれ）〇天津神は祈年月次祭詞に天社國社と有る如く社を指すには非ずて上天に充滿り坐す神等を總て申せるなり國津神に對たるに思合す可し（此詞なるは國津神も其鎭坐す社を指て云に非ず廣く此國土に在す所を取統て云るにて國社の例には非る者なり）〇天磐門神宮本には天之磐門と有り此は彼天照大御神の隱坐し天石窟の戸を云には非ず後釋には天磐門は唯天津神の在す殿の門なり磐と云は上文なる天磐坐の類にて堅固き由の祝言なり御門神の御名を石眞門と申すも此意なり」と有れども石眞門と申すも天石窟の御戸を開奉れる由に依て負坐るが此神を神宮の古書に御戸開神とも申て御門のみには非ず殿にも戸牖の有る所は悉く守給ふ所なれば天磐門は天津神の在す殿門の戸とは云べし殿の門と耳は云べからず倭姬命世記に宇太乃大采禰奈云々佇童女乎大物忌止定給比天天磐戸乃鑰預賜利氏云々と有る此は御殿の御戸

なるを思ふ可し（天磐座と云るも御殿內なる御在所を云るなり但此は磐は借字にて鎭（イハフ）の義なるにもや在む堅固き山の譬のみには有べからず）借此文に天磐戸乎推披氏と有る續きに依て今思ふに祈年月次大神宮詞に皇神能見霽志坐四方國者云々倭姬命世記に皇大神倭姬命乃御夢喩給久我高天原仁坐瓱戸押張原如見見志眞伎志國宮處波是處也鎭利定理給止覺給支と有る瓱戸押張は磐門推披と同く聞え欽明天皇の大御名を古事記には天國押波流岐廣庭天皇と有るを御紀には天國排開廣庭天皇と作るを以て比羅久と波流久と言の同じきを以て思ふに（天智天皇の大御名を天命開別天皇と申す天命は天嚴處（アマツミカド）の唱を其頭訛りて稱奉れるにも有る可し繼體天皇御紀に開此云二波羅彌一と見え出雲神賀詞に麻蘇比乃大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能已登久と見えたり此等を合せて其義を思ふ可し此事已に卷三にも註せり）此に云ふ天磐門は天日の御國を指りと聞ゆ此大地は外表に國有るを天日は內裏に國有る事服部中庸が三太考に云る如くなるが其質は水晶美玉の如く玲瓏しく照徹る物なり然るに其天日の中に磐門と所思しき穴有り天若日子が返矢の穴なり然れば天日の御國より四方へ往來の御門なるが故に其質と事とを以て天磐門とは云なりけり神武天皇御紀天祖の御天降の事を宣ふ大御言に闢二天開一披二雲路一と有る天開は古本に天闢と有る方宜しきが此字を天之磐座と訓るは

闢(ヒラク)と有るに叶はず必天之磐門と訓べき所なる事此詞に合せて曉る可し此天闢と彼返矢の穴と一物なる事云も更なり偖祝詞に皇神能見霽志坐と有るは此磐門より大御神の大御光の四方八面に照徹らせ給ふを云なり又大御神の甈戸押張云々と詔給へる例を以て此國にても大御神の御殿の御戸をば天之磐戸とは云るなりけり 但天磐門と云るは天日の摠ての稱に亘るを御殿の稱に物為むは事違へるに似たれども何事も天上の事に准へ云ふ神廷の御定なればなり 若て天日の御國より無數の氣脈(ヤホチツナ)と打延(ウチハヘ)て天霏の極際に至る迄網羅(アミナ)したれば其天日の主宰と坐す皇大御神の所聞食せ給へば天の壁立極に坐す所の神等は其大御制を仰ぎ給ふ可き筈なる故に此には天日の御國の事を先にして云る者なり 此次々の事共を此所に合せて心得べき者なり 此は世人の思ふ所とは甚く異なり怪しむ事勿れ ○推披氏は崇神天皇御紀に宇磨佐階瀰和能等能々阿佐妬珥毛於辭寐羅箇禰瀰和能等能渡焉即開二神宮門一而幸行之と見えたる此に同じ 此も三輪神の殿戸を推披なり文に開二神宮門一と有るを以て殿にも門にも戸と云るを知べし 推と云に大に力有り古事記白檮原宮段に即入二其山一之亦遇二生尾人一此人押二分巖一而出來云々名謂二石押分之子一と有るを御紀に披(オシワケ)二磐石一而出者云々臣是磐排別之子と見えて排別此云二飫時和句一と有るも此なる推披に同じきが此は殿門に比(ナズラ)へてこそ云れ實には天日の磐門より天神の押霽(ハル)し臨ませ給ふを云るなれば其心して伺ふ可きなり 此事已に右の天磐門の下に委しく註せりき ○天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐所聞食武は被處に於て其解除の式を為行ひ天津祝詞乃太祝詞事と宣申す狀を天津神の天磐門と推披きて臨給ひ聞食す内にも天國と大地と八重の雲路を隔たれゝは其隈を別て遺る事無く聞食し納給はむとなり 天上より祓する近き邊り高山短山の末に天降來坐て國津神と共に聞食し納給ひ其罪穢此處より祓戸神に渡りて根國に流離る發端の文なり輕忽に伺奉る可からず 後釋に此の下なる伊穗理乎掻別と同じ意味なり」と云れたるは然る言なれども千別爾千別は此には少か心得ぬ詞なり」と云れたるは右の事共を思ひ漏されたる者なり但此は皇御孫命の御天降の文にも在る所なるが天地の間に充塞れる神氣はしも天地を添(サヘ)に戴載る者なれば剛健(スクヤカ)にして須臾も間然する空隙(ヒマ)し有る事無ければ稜威の道別に道別て天降坐しなり 皇御孫命の御天降は顯身以て物為給ふと雖も地質に凝て御形體を成し給ふ迄の大御身は精神(ミタマ)を以て大御體と為し給ふ事予が往々云る如くなり 然ればこそ天照大御神を御父大神の天上に送上奉給ふ時も天柱を以て物為させ給へれ其天柱とは風神の御名なり此を以て思ふに空氣の充塞れる所は風氣を以て稜威の道別に道別る事疑無し斯在ば

此にて唱ふる所の祝詞の風氣と共に天上に聞え至る事疑ふ所無き者なり然れば此下に科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如久と有るは譬なれども此の伊頭乃千別伎千別氏の義を釋するに足れる者なり又其次なる朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事乃如も國津神波云々高山之伊穗理短山之伊穗理乎搔別氏所聞食武と有るに照し應せたる文なりけり（如此く古文に云樣甚麁きに似て上下に語脉貫通して奇異なる所多き者なり）天神の天上より雲霧を披て臨見坐る狀を正目に仰ぎ拜見奉る心ちして此文の世に殊なるは已に説る如く高千穗宮に成れりし神語なるが故なり俗眼を以て觀る可からず俗意を以て説ふ可からず○國津神此も天津神と對云る耳にて何れの神と指定て云には非ず汎く此國土の神を總云なり（此も天社國社など其祭祀る社を指定めて云とは異なり）然るに此國土の神等はしも山野海河は云も更なり所として神の在さぬ隈し無れば八百萬千萬とも計盡し難き程の事なるに社を建て人の祭祀る神々は皇國蕃國と數ふとも猶百千が一にも及ばざる可きが故に如此く汎く唯に國津神と云る事眞に理なる事なり（世人愚昧にして神と云へば皇國に耳限れる者の如く思ふは思の至らざる所なり萬國の末と雖も神の御在ずして能く世を保つ事有むや但皇國の神國にして出來給ふ神々の萬國に出興(イデマ)して夜を馭め給へるなれば其主々しき神は皇國の域に在して萬國には其屬神の交代して渡出坐る事神典の古傳の趣なる者なり）○高山之末は高山の巓を云なり古事記に山末之大主神と申す御名有るも山末は山巓を云るなり齋明天皇御紀に山椒埋矣と有て須惠と訓るを合せて知べし（通證に出二文選謝莊月賦註一山頂曰レ椒と見ゆ又字彙にも巓曰椒と有り）偖此は麓を萬葉には本と作き又山本と云る其對に巓を山末と云ふに依れる言なり○短山之末考頭書に高は低きに對ひ長は短に對へる例なるに就て比伎夜麻と訓べきが若くなれども古くより然は訓ず美自加夜麻と唱來れるは比伎とは訓ざりしなり大凡斯在る類多くは訛れる事も少からねど祝詞の在が中にも是計り世に數多用ふる詞無ければ少なる訛訓こそは有め悉く唱誤る可くも非されば舊に從ふ可し（神武天皇御紀に侏儒と比伎比登と訓る禮記註に侏儒身體短小者也と有れば短は比伎に當る言なる事論無し神名式に大和國城上郡采田神社二座と有る采田も下田(ヒキタ)の意なれば比伎某と云例無に非ず師の大祓詞正訓と云にも比伎夜麻と訓れたりき）後釋に短山は字の任に美自加夜麻と訓べし高きに對へて美自加と云ふ事中昔の言に貴賤を高き短かきと云る事多く源氏物語に位美自加久氏と有る注に位卑選叙令と記されたる令の昔ノ本に然ぞ訓りけむ又天智天皇御紀に卑地を美自加伎地と訓り此等を以て見れば古より低きを美自加志と云るなり（考に此に高山に對へて短山と書るは美自加夜麻とは訓ぬ事を知れる古人の筆なりと云れたる說

當らず若古に低きを美自加志と云事無くば何の由にか短山とは書べき漢文に高と短と對云へる例も無きに短と書るは古言美自加夜麻なりしが故なり考の說は表裏の違ひなり凡て祝詞の文字は大凡訓べき任に書る者にて萬葉書紀などの如く叢雕(ムツカ)しく義理を以て當らぬ字を書る事は無しと云れたるぞ穩當(オダヤカ)なる說なりける○上坐氐は天津神の天磐門を推披きて臨給ふ對に國津神は遠近高低の山頂(ヤマノスヱ)より見霽かし所聞食むとなり偖上坐は大祓の事を所聞食む料になり後釋に山に上坐てと云ふも高き所にては物の能く聞ゆるが故なり」と有るは云れたる說也但高山と耳にても足れるを短山とも云るは古文の文(アヤ)なり下なるも同じ」と云れたれど古文は實事をこそ云れ文を爲す事は非るなり然れば此は高山は云も更なり短山に至る迄もと云ふ意味なり然れば文とは此を云難し偖天津神云々國津神云々所聞食武と有るは上に八百萬神乎神集々給比神議々給氐と其に見合す可き文なり其には事を始の八百萬神等の相集ひ議給ふに成る事を明せるなり如此く古文には悉く有用の語耳を用ひ其實を慥に爲る者なり偖此文面にては各々其所に在(イマシ)ながら所聞食す趣なれども倚熟思ふに天津神は天磐門を推披き天の八重雲を稜威の道別に道別て御靈を降し給ひ國津神は高山の末短山の末に上坐て天津神と共に神議り御議坐て所聞食むと云ふ事なる者なり如此く天地神祇の御議定りて後祓戸神は罪穢を持流離ひ失ひ給ふ事明らけし然らずば祓戸神にこそは其罪穢の除こり淸まらむ事をば祈申べきに天津神國津神云々の事を何と說かば叶はむ○伊穗理の穗を神宮本に惠(カホ)に作り穗字の箒を畧けるなりと云る度會延佳說の如し此を字の任に惠と訓ては聞えぬ事と成る者なり考に伊穗理は雲霧を云ふ其は山氣の騰るなれば氣騰(イキノボリ)と云を畧きたる言なり常に煙に伊夫理と云ひ物の伊伎煩理騰留など云も皆氣の起り立を云て同じ古言なり」と云れたるが如し又は氣蔓(イキボリ)の義も有べきにや山氣の立覆ひ四方に滋蔓(ホビコリワタ)るを云ふ言と通ゆればなり後釋に此氣騰の說を取られざれど此意味將無にしも非ず伊伎と云は大虛の氣を云ひ伊と云は大地より出る息(イキ)にて差別も有る事なれども通じて氣字を書るなり後釋に伊穗理は俗言にも煙などの伊夫流と云と同じくて凡て物の朦朧(オボロ)にして淸明ならざるを云言なり伊夫加斯また淤煩呂なども伊煩伊夫淤煩皆通音にて本同言なり○今云神代紀に素盞嗚尊此神有二勇悍安忍一(イフリナルコト)且常以二哭泣一爲レ行と見え伊勢風土記に惡神伊不加理氐人民亡火氣發起而天下不レ安など有るも鬱悒しく明かならざる山也今世にも相對ふ人の晴々しからぬを氣夫多志と云など皆氣の朦朧なるに出たる言なり三代實錄の藥に神の怒憤坐を布之古利給と云るも此なり萬葉に淤煩本斯久また伊夫勢斯また伊夫加斯などと云言に鬱とも鬱悒とも書る此の伊穗理は雲霧などの立隔りて鬱々しきを云なり萬葉四に朝居雲乃鬱(オホシク)十卷に春霞山棚引鬱(オホシク)など有を以て心得べし偖穗の唱の淸濁の事淤煩呂……淤煩本斯伊夫加斯伊夫勢斯などの保も布も今は皆濁りて唱ふれども古は皆淸しにや萬葉に多くは淸音の假名を用ひたり偖上に八重雲を別と云ひ此に如此云る共に斯在る類の物の立

隔てゝ障るを別け露かして詳かに聞食むと云なり」と云れたるぞ實然る言なりける偖伊穗理の廬の語に同しきを以て惟ふに右の雲霧の中や國津神の幽界にや在らむと所思しき由有り其は神代紀國生坐段第二ノ一書に伊弉諾尊伊弉冉尊二神立二于天霧之中一云々と有る如く雲霧の中を以て人の地上に在が如く物爲給ふ事と聞ゆれば此詞の伊穗理も必其なる可し其幽界の概略を序に説てむ其は紀記共に國生坐段に八尋殿を化作給ふと有るは二柱神の顯身を結給ふ始に住給ふ御殿を造らせ給へるなるを其事竟給ひては其八尋殿を幽宮と成て寂然に鎭給ふと見ゆ御紀に伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是以構二幽宮於淡路之洲一寂然長隱者矣と有を見て知べし此を故大人等ノ説に後に鎭坐す宮を申せる由に云れたる其は神名式に淡路國津名郡淡路伊佐奈伎神社名神大と有には合へれども其にては御紀の古傳も中昔の人の杜撰になるなり此は其神社には非ず何處にか神の幽宮の有るを徵せる古傳なり　世に謂ゆる海市山市の類は此伊穗理にて神界に其幽宮は在ながら人の視る可からざるは彼雲霧と同じ氣を以て製作れる所なるが故なり尚斯在る事は吾師は殊に委しき人にて其著れたる書共に多く説れたる所なれば就て見るべし○搔別氏所聞食武は右の高山短山の雲霧を搔別て聞食むとなり萬葉二十七丁に天雲之八重搔別而と有り搔は探索る由なり古事記須勢理毘賣命歌に

宇知微流斯麻能佐岐邪岐加岐微流伊蘇能佐岐淤知受と有て宇知と加岐と對たり偖宇知は全にて其任に見通さるゝを云ひ加岐は伺にて探索て後に所見るを云なり此差異を以て搔別の意を曉る可し神代紀海宮段第三一書に覘其私屛を私記に加支末美多末布と訓る加支も此例なり諸注悉く垣間視の義なるは俗意なり　偖此の照應は下に朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如と有る其なり其前文に科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之加久と有るは天津神云々の照應の文なるに思准らへて見べし　雲霧を搔別て所聞食すは幽宮を推拔きて所聞食す事なるなり偖天神は雲を別け國神は氣を別て文を對たるをも了解き辨ふ可くなむ

如此所聞食氐波皇御孫之命乃朝廷乎始氐天下四方國波罪止云布罪波不在止科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如久朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久大津邊爾居大船乎舳解放艫解放氐大海原爾押放事之如久彼方之繁木本乎燒鎌乃敏鎌以氐打掃事之如久遺罪波不在止祓給比清給事乎

如此所聞食氐波後釋に云く氐波は而有者の意にて波は濁音なり下なるも皆同し此辭萬葉に多くして濁音の婆字を書り然るを後世には氐婆(テバ)と云ふ辭を聞馴ぬ故に皆婆を清て而者と一に混じたり波を清(ハ)む時は而者の意

濁る時は而有者（テアラバ）の意にて差別有る辭ぞかし○皇御孫之命乃朝廷乎始氐は上に我皇御孫之命波豐葦原乃水穗之國乎安國止平久所知食止事依奉伎云々より云下して皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氐天之御蔭日之御蔭止隱坐氐安國止平久氣所知食武と有を此にて受たるなり　但上下の宣命に天皇朝廷爾云々と有る其中間に在て其括とも成れる者なり然れども彼は宣命此は祝詞にて其脉別なり混ふ可からず　其は如何にも云に上なる右の云々の事は皇御孫命の天下を安國と所知食む御事議なれば決めて其如くならむには朝廷を始奉て天下の人民に於て罪穢と有る事は少しも出來まじき筈なるを現世の常として自犯せる有り他より來れる有て不知々々も罪穢に至るが故に天津宮事を以て其解除の事を令行給ひて天津神國津神共に其を諾ひ聞食すが故に上を受て此に皇御孫之命乃朝廷乎始氐云々とは云る者なり　予此説有て或人に云るを其を甘なひながら然は非じ此詞の首に天皇朝廷爾仕奉云々と有る其を此に受たるなンめりと云るは宣命と祝詞とを打混じたる説にて取に足ず　然れば上に美頭乃御舍云々と有るは此の朝廷の事を云るなれば其心して心得べき者なり　考に朝廷とは先は宮城門の内を云へど此は京城門の内迄も兼云と爲べし次に四方國を云ればなり」と云れしを後釋に凡て美加度と云名は其本は大宮の御門より出たる事なれども古より唯朝廷の字の意に云は常の事にて必しも御門には抱はらず若御門の意と爲ば此は朝廷乃内乎始氐と云ざれば聞えず御門乎と云ては唯御門のみの事に爲て其内の事には爲り難きをや」と論ひ直されたる說は然る事ながら美加度と云名は其本は大宮の御門より出たり」と云れたるは僻事なり美加度は嚴處にて天下の人の仰ぎ畏み奉る御所と云義なり此事已に云りき　○天下四方國波爾は上に四方之國中登云々國中爾成出武天之益人等我過犯家武雜々罪事波云々と有るを受たるなり偖先なる朝廷云々上文に美頭乃御舍云々と委しく云るを此にて朝廷と約たる如く此も其天之益人の事を委しく云ずして態と此には上に持せて聞せたるなり　後釋に此大祓は百官のなれば天下迄は云べきに非るに天下四方國迄を云るは上にも云る如く此祝詞は天下の大祓の祝詞なるを百官の大祓にも其任を用らるゝ故なり上に成出武天之益人等我云々と有るも天下の萬の民を云り」と云れたるは然る言ながら百官の大祓即天下の大祓なり如何と云に其百官天下の萬民を率て仕奉る職なれば其長を云る中に含（コモ）れり　○罪止云布罪波不在止は上に天津罪波云々國津罪波云々許々太久乃罪出武と有るを合せて云るにて後釋に罪と云ふ限の罪は一も遺さず悉くと云ふ意なり不在は皆消失て遺り非じと云義なり」と云れたるが如し偖此より下なる四の譬は此事を解釋せるなり此より下りて又下に云々乃如久遺罪波不在止云々と云り　考に諸人の罪の多少に隨て祓柱（ハラヘツモノ）を出させて天つ傳への任に太詔戸言を宣らば天地の萬の神等明らかに聞し給ひて諾ひ給はむ然らば其罪は祓ひて捨身滌して流す物と共に皆失て今より後天下に遺れる罪は非じとなり」と有るにて能聞えたり　○科戸之風乃の科は息長なる事卷七風神祭詞に云るが如し偖之の辭に續けるを以て思ふに神名の志那都比古神又級長戸邊命の都も戸も共に處の義なる可く所思たり此に就て思ふに此等の之に通ふ都の辭の

頒天津神國津神は天處神國處神上津國下津國は上處國下處國なと津の辭を處と語と為て見るに甚能く聞ゆるを以て思へは實に之に代て置くには非るなりけり偖天之國之と云ふ時は其意急なるを天津國津と云へば中に處の言の挾まる故に意に緩み無く急に迫る義有り（然れど其定格は天之國之など云ふ之（ノ）の所に置く例なるが其を處と云て其所在を慥に為る者なり但天津國津と云る下には之（ノ）の辭を置ぬ例なり此の科戸は其所在に用有れば別なり） 偖此に科戸といへる其は級長處なるが其級長處は何處を指て云ならむと年頃思ひ度つるに漸々に思得たり偖科戸之風乃と云れば風の名には非ず風と為る可き氣を級長と云ひ其迫りて動き進むをなむ風とは云るなる可き斯て其科戸はしも何處如何なる處をか云らむと倩思ふに風神の名を天御柱命國御柱命など申す柱は即天中に氣脈有て天地を截せ又天地往來の梯立にて彼伊邪那岐伊邪那美神の御天降に天浮橋と云ひ天照大御神を天上に送上奉るに天柱と云ひ皇御孫命ノ御天降に天八衢と云る物是なり（此事右の風神詞の下に委しく云れば此彼見合せて曉べし） 天地の神靈の此科戸に憑て昇降り給ふ事人の言語の風氣に憑て往來ひ為ると全同じ狀なる者なり（古事記に下照比賣之哭聲與レ風響到レ天と有る即是なり） 然るは推古天皇御紀歌なる發語の斯那提流を萬葉九に級照と書き同十三に師名立と有を合せて級立なりと冠辭考に說れたる如くなるが斯那は階級の事なるを以ても右の天浮橋及天柱等の事に符合り（又萬葉十七十八十九などに之奈射加流と云ふ發語有り冠辭考には萬葉十九に科坂在（シナザカル）を正字と為て云れたる說は惡くも非れど此發語の天放（アマサカ）る夷離（ヒナザカ）るなどの例にて大氣の放れる由に見られざりしは誤なり） 然れば科戸は唯に空虛を云ならず氣の往來する脉を云るが其より風を起し動もして天地に亘る處の謂なる者なり戸は處の義成に深く心を着べき者ぞかし〇天之八重雲乎吹放事之如久是第一の譬なり偖此は天津神波天磐門乎推披氐天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐所聞食武の照應なる事已に云るが如し此科戸之風より以下四の譬の内に放と掃とを相對はせたり（心を留て見る可き事なり其々文に唯如此云る耳には非ず故有る事なり） 若て此の放の結は下に至りて根國底之國爾氣吹放氐にて落着する事文面の表にて所見たる所なるが此放ノ字大に力有り然るは上に天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐と有る感應の速なる其氣勢を約て云るなればなり（天磐門乎推披氐と有る推などを合せ考るに中々に須臾も猶豫など有べくも非ず甚迫切にして急なる意味自然と表はれたり神代紀正書に生二蛭兒一云々順風放棄また一書に順流放棄などの放も此の例なり矢に放つなど云るを以て此の意の急なるを見つ可なり） 斯て科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如久と云るは天上より其氣の往行徹れる狀にて次なる朝之御霧云々と

は同じ事の重複れるが如くなれども別なり雲と霧とを對へ科戸之風と朝風夕風を對たるに心を着て見る可き者なり偖れば此の雲は地上の雲霧を云るならず蒼々たる天霧を指る事云も更なり〇朝之御霧夕之御霧乎云々は萬葉十四東歌に不盡能禰能伊夜等保奈我伎夜麻治乎毛伊母我理登倍婆氣爾餘婆受吉奴と有るは氣に不醉と云る事なる其氣に同し偖國津神波高山之末短山之末爾上坐氐高山之伊穗理短山之伊穗理乎搔別氐所聞食武より受たる所なり（上なる天津神云々の例に思准へて曉る可し）如此く其照應の拔べからぬを以て見るに此に御霧と云ると上に伊穗理と云ると同物なる事灼し但躰と用との差別は有なり（御霧と云ふは其物の實を指たるなるが伊穗理は其御霧の立覆ひて鬱悒しきを云る者なり）朝之夕之は次に朝風夕風と云む料にて如此く云る意は常住不斷と云る事なり（此を朝と夕とに意有げに云などは強言なり但御門祭詞に朝波云々夕波云云など有は朝夕の事を判然（キハヤカ）に云るにて此の例ならず）御霧は後釋に眞霧にて狹霧と云と同じ」と云れたるが如くなるが此は地外を包み覆へる朦氣を摠て云るなり（但御霧の御は水には非るか、齋明天皇御紀歌に阿須箇我播瀰儺蟻羅毘都々と見えたるを通證に作ニ（ツヽ）水霧合ニ（ミナギラヒ）也萬葉十に水霧相奧津小島爾又云水霧合日方吹羅之濮字之訓亦同義也と有を以て知べし如此く見ても眞にも狹にも障る事無きなり水は實なり眞は形状なり相離る可からざるを思ふ可し）神代紀（國生坐段第二ノ一書）に天浮橋の事を立ニ于天霧（アメノサギリ）之中ニと云ひ其次（第三一書）に坐于高天原と有を以て惟ふに前に說る科戸の大地に近き者を天霧とは云るなり然る故に同紀（神等生坐段第六ノ一書）に伊弉諾尊與ニ伊弉冉尊ー共生ニ大八洲國ー然後伊弉諾尊曰我所レ生之國唯有ニ朝霧ー而薰滿之哉乃吹撥之氣化ニ爲神ー號ニ曰級長戸邊命ー亦曰ニ級長津彥命ー是風神也と有り此即彼天霧を吹撥はせ給へるなり但此の朝霧は此詞に朝之夕之と有る朝には非ず佐の假字に用たる所なり景行天皇御紀に氣如ニ朝霧ー雄略天皇御紀に呼吸氣息（イブクミイキハ）似ニ于朝霧ーと有も共に此例にて朝夕の朝には非ず（然れば天之八重雲と云も御霧と云も二有に非ず虛空の大氣と地外の朦氣との差別有る耳なり）偖此朝霧を吹撥はせ給へる其即先の祓の起とも云べき者なり如何と爲れば身躰に屬たる不淨の如きは洗ふ可し濯くべし躰を離れて氣の穢たるは氣吹に非では淸まる可き理無し所以に神代紀（神等生坐段第十ノ一書）に伊弉諾尊云々親見ニ泉國ー此既不祥故欲レ濯ニ除其穢惡ー乃往見粟門及速吸名門ー然此二門潮既太急故還ニ向於橘之小門ニ而拂濯也と有て大御躰の穢惡（ケガレ）は如此く海潮を以て洗濯き給ひ次には御躰内の穢惡たる氣を吹給へり胎内鬱氣を散す時に淸氣來りて此に代る此に於て其生坐る神悉く善神なり右の續の文に于時入レ水吹ニ

生磐土命ニ出レ水吹ニ生大直日神ニ又入吹ニ生底土命ニ出吹ニ生大綾津日神ニ又入吹ニ生赤土命ニ出吹ニ生大地海原之諸神ニ矣と有るは即是を云なり（此等の事に心着て見る時は後世の祓の事に氣息を吻くなどは其本如此く神代に根據たる事なるを得知ぬぞ速無きや）又須佐之男命の天上に上給へる時の天照大御神の大御言に然者汝心之清明何以知と詔給へるに各宇氣比而生レ子と答白給へりしかば即御誓の事共有り古事記に天照大御神先乞ニ度建速須佐之男命所レ佩十拳劍ニ打ニ折三段ニ而奴那登母々由良爾振ニ滌天之眞名井而佐賀美爾迦美而ニ於ニ吹棄氣吹之狹霧ニ所成神名云々速須佐之男命乞下度天照大御神所レ纏ニ左御美豆良ニ八尺勾璁之五百都之美須麻流珠上而奴那登母々由良爾振ニ滌天之眞名井ニ而佐賀美邇迦美而於ニ吹棄氣吹之狹霧ニ所レ成神名云々と有るを御紀には濯ニ於天眞名井ニ齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神云々と有る振滌又濯ふと氣吹に依て狹霧の立薫り其に資て尊き神等の顯坐し又御心の清明なる事も著く成れるを以て此も亦其氣吹く所は彼伊邪那岐大神に傚はせ給へる事云も更なり（風神の生坐る條と身滌條とを合せて此の意味をも思ふ可き者なり尚下なる氣吹戸の下に委しく云を見る可し）○朝風夕風乃吹掃事之如久是第二の譬なり偖上なる科戸之風云々は天之八重雲を伊頭の千別に千別て天津神に天津祝詞の太祝詞を聞え上奉り又其御感應に資て罪穢の消散する事を云るが故に力を合て放と云るを此は地上に任る所の狹霧を風の吹掃ふ事なるが故に掃と云て對へたり（然るは其大小に依て剛柔の相違有が故に放と掃とを別たる者なり）朝夕は朝之夕之より受て其に對へるが故なり神宮本には此も朝之風夕之風と有れども此本に非ざる上は之の辭を加へて訓べきならず（御霧は立覆て本より在る所の者なれば朝之夕之と云ふ間然も有るな此の掃ふ所に至ては追切にして大に急なり之の辭無きに味有り）偖此迄二の譬は天津神國津神の納受の狀を云るは本にて江家次第（八省東廊大祓條）に祝師著レ座臨ニ禊詞及ニ八張ニ解縄丁禊丁祝師奉ニ大麻ニ作レ令レ持ニ祝師ニ一撫一吻返給丁又同抄（平野祭條）に宮主奉レ仕ニ祓詞ニと有る注に到ニ祓清之處ニ以ニ人形ニ令レ吻給到ニ中臣祓詞八張取割之處ニ解レ縄給畢宮主退出と有る此一吻また以ニ人形ニ令レ吻給などゝ有ぞ右の譬には能く當れりける（然れば此等は陰陽師の態の如く云などは却て右に闇き者なり陰陽師は右の大祓の態を竊みてこそ我が有と爲けめ）○大津邊（爾）居大船乎大津は大門にて船の泊る所なり所以に神功皇后御紀には津ノ字を登麻理と訓り（然れば水門と云も事實に於ては少しも異らざりけり）後釋に大津邊は之邊（ノベ）と訓むも惡からねど猶字の任に大津邊と訓べし居（チル）は泊り居を云ふ萬葉十四に佐吉多萬能津爾

乎流布禰乃可是乎伊多美都奈波多由登母計登奈多延曾禰と有り」と云れしは然る言なり或説に大津は近江の大津彼方は宇治の彼方ならむ神名式に宇治に彼方神社有り伊吹戸は伊吹山佐久那太理は栗太郡佐久奈度神社有　然らば天智天皇大津制のかと云るは甚々辨無き説なり名の似たるを以て其地と定めむは事にこそ依れ歴世に都遷しの有る時々其近き海川の名を以て云むには其より後々にも易らる可き筈なるを何に憚る所有て近江朝の任なるを改給はずとは云む　○舳解放艫解放氐宮主秘事口傳抄には舳綱云々艫綱云々と有り其頃然る本も有しなる可し舳は和名抄に船前頭謂二之舳一舟頭制水處也和語云閇と有るが如し艫は同抄に船後頭謂二之艫一舟後頭刺櫂處也和語云度毛と有るを後釋に解放云々とは泊居る程は舳艫を繋ぎ置たるを解放つなり考に舳綱艫綱と綱字を補ひて此字の無きは落たる也と云れたれば式の本にも朝野群載に出たるにも綱字は無し私の本共に此字の有るは後人の情進に加へたる者なり此は綱と云はでも能く聞ゆる事なるをや　○大海原爾押放事之如久此は第三の譬なり押放は大に力有る事上の例なり第四の譬なる掃の對に此も放と云るなり且押と云ふも尋常の状とは大く異なり　此は天津宮事以て天津菅曾等の祓柱を流し却るに就て下なる瀬織津比咩止云神大海原爾持出武奈と有る其を云む料なり倍後釋に萬葉六に大海乃原と有に依て訓べし押放は押放ち出すなり」と云れたる然る言ながら大海原は淤富和多能波良と訓べし此事は巻三に云れば爰には漏せり　○彼方之繁木本乎後釋に彼方は俗言に阿奈多と云ふ事なり凡て乎知許知は阿知許知と云ふ事にて本彼此の意なるを

遠近とも書は末なり倍此に彼方之と云るは唯打見渡したる所を云て阿奈多能と云ふ事なり齊明天皇御紀の童謠に烏智可拕能阿婆努能枳々始云々萬葉二に大名兒彼方野邊爾苅草乃束間毛吾忘目八又十一に彼方之赤土小屋爾霡霂零床共所沾於身副吾妹古今集に打渡す彼方人に物申す我云々など有る皆然す萬葉十一なるは上句は四の句を云ひ料の序のみなり思ひ混ふ可からず又彼岡に草苅る童云々と云るも彼岡は阿能(アノ)岡と云事にて彼方と云ふも此に同じ○今云舒明天皇御紀天智天皇御紀などに水表ト乎智可拕と有り　又萬葉七に眞玉付越能菅原十三に息長之遠智之小菅なども乎知は地名には非ず彼方之なり　倍此は唯繁木が本にて事足れるを彼方之と云るは徒なる如聞ゆれども如此云ぞ古語の文にて右の御紀及萬葉の歌共なるも皆同じ考合せて知る可し　繁木本の本は末に對へて云ふ本とは少か異にして唯木立を云なり師説に木立を本と云ふ木の數を何本と云も是なり楉も繁本なり孝德天皇御紀に摸騰渠登爾播那波左該騰摸萬葉十四に於布之毛等許乃母登夜麻乃と有る此等皆本とは木を云りと云れたるが如し」と有る眞に然る言にて繁木本は楉なり景行天皇御紀に茂林雄畧天皇御紀に弱木林と見え和名抄に蔞木細技也和名之毛止と記し又同抄刑具に笞和名之毛度　大頭二分小頭一分半など有るにて其量の大凡は知れたり此に准へて楉の狀を思ふ可きなり猶枕草紙

に桃木弱立て甚桙勝に指出たると有るなど此等を合せて曉る可き者なり已に云る天津金木の條を見合せて金木と繋（シモト）と一なるを思べし○燒鎌乃敏鎌以氐打掃事之如久此は第四の譬なり偖此は上なる天津金木乎本打切末打斷氐云々の義を解釋せるが如きなり前なる大津邊爾居云々は天津菅曾の義を解釋して祓の功用を云ると全同じきなり燒鎌は燒大刀など云る如く燒て及を著るが故に云なり考に萬葉に夜伎多知と有に依て夜伎迦麻と訓べし夜以と訓は惡しと見えた後釋にも燒などの伎を伊と云は音便に頽れたる後世の言なれば古書を讀には凡て用ふまじき事なりと見えたり敏鎌は古事記日代宮段歌に比佐迦多能河米能迦具夜麻斗迦麻邇佐和多流久毘比波煩曾と有るを傳に利鎌に眞渡る栈弱細と說れたるが若く敏捷き鎌と云事なり燒鎌乃敏鎌などゝ重云る例は考に引れたる萬葉十八に夜伎多知遠刀奈美能勢伎爾と有る刀も利きなり又二十に安佐欲比爾爾能未之奈氣婆夜伎多知能刀其已呂毛安禮波於母比加禰都毛と有るも及の利を人の心の敏に云係たるなり此等な磨の意と爲ては違ふ者なり打掃は上に本打切末打斷と云る其なるは上は置座を製造る用を云ひ此は其置座は祓具なるが其を以て罪穢を祓ふ事を云故に打掃とは云り偖後釋に物の譬を云に後世には唯云々の如くと云を此に擧たる四の譬皆云々の事の如くと事之と云事を添て云る是古語の例なり古書共に物の譬を云る所々を見渡して知べし」と有るぞ謂れたる但其次に此に如此く大凡同じ樣なる譬を四まで重ねて擧たる事は祓に依て罪穢の除こり淸まる事の速に遺無き事を慥に示（アラハ）さむ爲に返々云るにや云々と云れたる事共は悉くに當らず此は唯譬のみには非ず其々に用有る語なる事已に云る如し○遺罪波不在止と云ひ此に斯云るは上は神等の聞食し入るゝに依て失るを云ひ此は遺り無なる譬より續けて云ふ故に遺罪とは云り」と云れたるに依て今其說を委しく物爲むには此なる四の譬はしも上なる天津宮事以氐云々と有る其事を行へる徵驗を釋し云る者なり然ればば第一譬科戸之風乃云々第二譬朝之御霧夕之御霧云々は彼天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮と有る其天津神國津神の御所に通達りて其天地の神等の罪穢を遠く祓却給ふ徵驗の著明るゝが其罪穢は彼荒世和世に移し放ちたる口氣と共に消失る事を云明らめたる神語なり然れば朝風夕風の下に引る江次第に以ニ人形一令吻給と有る如きは右の荒世和世の事より轉れるなり但到ニ祓淸之處一云々と有るは此罪波不在止祓給比淸給と云ふ所にて物爲るなれども此は必上にて有べきなり第三ノ譬大津邊爾居大船乎舳解放艫解放氐大海原爾押放事之如久は上に天津菅曾乎云々と有る事を行へる信を云るなり其は彼八省東廊大祓に臨ニ祓詞一及ニ八張一解レ繩了と見え平野祭に到ニ中臣祓詞八張取割之處一解繩給畢と有るに

依て知れたり（然るは菅曾を以て祓清めたる物は大川道に流し却ふなればなり）第四ノ譬彼方之繁木本乎燒鎌乃敏鎌以氏打掃事之如久は上に天津金木乎云々と有る事の信を云り其は燒鎌の敏鎌以て打掃ふは彼本打切末打斷氏と云ると全同じきが彼は祓具を設る文なるに依て其置座を製る事を云ひ此は其祓具を用ひて解除を爲る所なるが故に其祓の妙用を云るなり（後釋に科戸之風云々は大海原に持出るを譬へ朝之御霧云々は持可々呑を譬へ大船云々は根國に氣吹放を譬へ繁木本乎云々は佐須良比失ふを譬たるが如此云は餘り叢雁しけれど彼次第も四なるに此譬も四有れば試に驚し置なり」と云れたれど其は當り難し）然れば罪止云布罪波不在は天津宮事を行ふ故に罪と云ふ罪は悉くに有るまじき理を云ひ其より其徵信を述て此所に至ては如此くなる故に罪咎の遺る所無しと云て此語下なる自今日始氏罪止云布罪波不在止に應じたるが然て其間に祓戸神等の功用をば次には云るなり但祓戸神等は右の天津神國津神の所聞食たる上にて祓給ふ事云も更なり○祓給比清給事乎は上なる宣命に天皇朝廷爾仕奉留云々官々爾仕奉留人等乃過犯家牟雜々罪乎今年六月晦之大祓爾祓給比清給事乎と有る此にて朝廷より此解除の事を爲行給ひ官々の人等より始て天下の人民の罪を祓はせ給ふを云なり（但此語上なる罪止云布罪波不在止と此なる遺罪波不在止を合せて受たるなり）後釋に云く此事乎は諸人の犯たる雜々の罪事を指て云なり（常に唯に並て云ふ事には非ず）是を罪事と見ざれば下の大海原爾持出武奈また可々呑氏牟など云るに叶はず心を著て見る可し

高山末短山之末與理佐久那太理爾落多支都速川能瀨坐須瀨織津比咩止云神大海原爾持出武奈如此持出往波荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾座須速開都比咩止云神持可可呑武氏如此久可可呑氏波氣吹戸坐須氣吹戸主止云神根國底之國爾氣吹放氏牟如此久氣吹放氏波根國底之國爾坐速佐須良比咩止云神持佐須良比失氏牟

上件天津宮事を執持行へるに依て天津神は天降て聞食し國津神は山上に登て聞食す事にて云は、天津神國津神等諸共に高山の末短山の末に集會ひ坐て聞食すと云が如くなるが其よりして祓處神等の次々に其罪穢を受取給ひて根國底之國の方に祓却はせ給ふなり斯在は此なる高山末短山之末は上なると同じ所なる者なり（考に二度如此云へ事を轉せるは文の例なり」と云れたるは此を唯文と耳見られたるにて疏漏なり事を轉せるには非ず事の轉れるなり後釋には右の考の説を違へりとして上なるとは異事にて少さも相與からぬ事なるをや」と云れたれど彌々僻事なり）

○佐久那太理は右の高山短山より落る谷川を云り後釋に廣瀨祭詞にも山々乃自口狹久那多利爾下賜水乎と有り佐は例の眞にて眞下垂なり（今云眞同垂なる可し其事卷六なる其說に云り）き川水の山より落る狀を云り偖然水の落る所を久良とも多爾とも云ふ久良は久那多爾は多理にて共に久那太理より出たる名なり（谷を久良とも云る事古事記傳五闇游加美神の所に云るが如し）萬葉十七に久良多爾と有るも久那多理と通ひて唯谷の事なり又神名帳なる近江國栗太郡佐久奈度神社を櫻谷と云を以ても久那と久良と同じき事を知べく又此社は勢田より二里計下鹿飛と云ふ所の瀧の落口の東岸に在り是にても佐久那太理の意を曉る可し然れば多爾と云も久良と云も本水の下り落るより出たる名なり」と有るが如し（此全文は卷六大忌祭詞の下にも引て委しく予が說をも雜へ記せるを此にも擧たるなり然れば其所を見合す可し）然れば神名式なる神足宇奈太理は神谷宇奈谷と云事にや度會延佳說に度會郡繼橋鄕豊宮崎に井谷と云所有り神祇本源には井足と書たり古は谷を足とも云るにこそと云り（谷を足と云るは垂の意にて水の落るを云るなれば落多支都と云ふ續きに能く叶へり）偖此迄は天津神國津神の高山末短山之末より流し下し給ふなり此とは別なれど彼廣瀨祭詞に山々乃自口狹久那多利爾下賜水乎と有を例して知る可し此より下に運送る事は落瀧つ速川の瀨にて瀨織津比咩神の御功用なる者なりかし○落多支都の都ノ字本には脫たるを神宮本に在に從へり後釋に支ノ字をきの假字に用るは伎若は岐ノ字の偏を省る者なり偏を省きて書る例古書に多し偖此支の下に都ノ字脫たり此は多支都と云では下へ語續かず故今補へり私の本共には瀧津と書り」と云れたるは然る言なり（但神宮本に大書にて都ノ字有る事を思ひ漏されたる故に字は補はれながら小書に爲られたるを今は大書に改て本行に加へつ然るは津都ノ字の小書なる例無ればなり）落多支都は水の落沸るを云なり後釋に萬葉九に落多藝知流水之磐觸與杼賣類與杼爾など有り○今云萬葉六にも足引之御山毛淸落多藝都芳野河之河瀨乃とも有り）知と云ひ都と云ふ差は用言へ續く時は多藝知と云ひ體言へ續く時は多支都と云ふ此は速川體言なれは多支都と云へき例なり偖此處文甚愛く實に潔き心ちす」と見えたるが如し○速川能瀨坐須は川の急流なる速瀨を云なり速は古事記に上瀨者瀨速下瀨者瀨弱神代紀に上瀨是大疾下瀨是太弱たた見ニ粟門及速吸名門ニ然此二門潮旣太急なと有るを照し合せて曉る可き者也（但此は海の早瀨と云るにて川の事に非れど例に引る耳なり）瀨は和名抄に水流ニ於砂土ニ也世と見えたり又湍（和名世）急瀨也をも見ゆ偖斯る速川の瀨なる處を古く瀨織戶

と云事も有しにや薦河風土記に烏渡郡瀬織戸と云地に織戸神社有て所祭瀬織津比咩也と記せり又安辨郡井宮神社所祭湍織津姫也と有るも流水に縁りと聞えたれは同じ事なり又富士郡に白絲瀧御守神社所祭瀬織津比咩也と有るなどは愈由有り御守は水守の意なる可くぞ所思たる又止駄郡大津に直江神社所祭瀬織津比咩也と有り大津は川水の海に入る門なり直江と云も此祓の事に由有て聞ゆる樣なりや　〇瀬織津比咩止云神後釋に云く此段は古事記傳にも云る如く凡て伊邪那岐命の御禊ノ段と合せて說べし先此神の御名の瀬織は瀬下にて彼大御神の於二中瀬一降迦豆伎給ふと有る意の御名なり〇今云實に然り但其降迦豆伎給ふ最首に成坐るが故に御名に負坐る事とは成れりしなり又此事に因て其瀧津速川なる瀬織戸に在して祓事を知せる也　此神即禍津日神なり倭姫命世記に荒祭宮一座皇大神荒魂伊邪那岐大神所生神名八十柱津日神也一名瀬織津比咩神是也と云り此は更に後人の思寄まじき事なれば必古傳說有と聞えて禍津日神を瀬織津比咩神と申すは彼初て中瀬に降潜れ給ふ時に生坐る故にて此に熟合へり偖此は祓物に負せて流し却たる罪穢を先受取給ふ神なれば彼中瀬に降て黃泉國の穢を先滌き始給へるに允當れり〇今云此に因て見れば禍津日神は禍事の發ると散(ウス)るとの事を兼領知せるなり　抑禍津日神は世中の禍事を生し行ふ神なるに是は罪穢を祓ひ滅す始なれば生ると滅ると表裏の違なるが如くなれども是ぞ祓の主意にて深き理有る事なりける〇今云此は其津神の禍受し給ひて其罪穢を本處に送出し給へるを持出給ふなり　其は祓を行ひて罪穢を清め流すは黃泉國の穢より起れる禍津日の凶事を又本の黃泉國へ返し遣る所業にて其を先此神の大海原に持出給ひて偖此次に見えたる如く次第に送り遣て終に根國に至るは此罪穢の其本に復るなれは此神の生し行給へる凶事を又此神の受取て本へ返し給ふにて表裏の違の如くなるは同事の來ると往との差異にぞ有ける此を能く味ひて祓の理の深く妙なる事を曉る可し　偖御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久道饗祭詞に根國底國與里麁備疎備來物爾相率相口會事無氐と有る此二と彼伊邪那岐命の御禊段とを合せて凶事は黃泉國より起り來る事を知べく又此大祓詞と此等とを合せて祓は其凶事を本の黃泉國に復し遣る所作なる事をも知べきなり此瀬織津比咩云々より次々は祓の主と有る所なれば等閑には見過す可からず殊に心を留めて深く味ふ可きなり」と云れたるぞ千古未發の卓說なりける其說の如く禍津日神と瀬織津比咩神とは同神に御在るが御門祭詞に

は四方四角與利蹤備荒備來武と云ひ此大祓詞には落多支都速川能瀨坐須と有れば其御在處の違有て信難く前には所思たるに依て猶深く探索るに禍津日神と申す時は本より顯國の神に坐て四方四角の隈々迄も御靈を布き給ひ天下人民の邪正善惡を糺彈し御在るに依て事と有れば御窘めも有り御罰めも有て其終に人の殃災罪穢とは成以て行くを其殃災罪穢を爲行ふ者は道饗祭詞に謂ゆる根國底國より麁び蹤び來物ぞ其御制を仰ぎて物爲るには有ける此事を委しく明らめられざりし故に故翁も世中の禍事は此神の生じ給ふ事と爲られたり然れども此神の關らぬには非ず此神の御心に依る事なれども其を爲す者は別なり所以に御門祭詞には自ㇾ上往波上護利自ㇾ下往者下護利と見え道饗祭詞には下行者下乎守理上往者上乎守理と云て上下倒反せるは此土に在る禍津日神と下より來る鬼（モノ）と相應じて禍事の生るを聞せたるなり然れば同神には異無れども瀨織津比咩神と申すは天津神國津神等此祓の事を納受し て其罪穢を祓清め給ふと爲て高山短山の末より下賜へるを受取坐て大海原へ持出給ふ爲に瀧津速川に坐が故に然御名には負坐るになむ有ける○大海原爾持出奈武は下なる鹽乃八百會の注に委しく云り考に祓物を流し却るを此神の澳へ持出給ふなりと有が如し偖此に兼たる深き意味有り其は此に如此く云下したるは天津神國津神より此瀨織津比咩神以下の神等に託して罪穢を祓清めさせ給ふ所なり然るに此時未祓物を流すに至らず祓の半なる故に持出奈武と將來の事に云て下に四國卜部等大川道爾持退出氐祓却止宣止と有る事を持せたるなり如此く文中に得も云知ぬ奇しく妙なる理を含みたるは然すがに神語なるが故なり麁略に見過す可からず○如此持出往波後釋に往を伊奴と訓れたるぞ宜しき此を以て見るに上なる奈武の辭も本より將ㇾ往の義なれば瀨織津比咩神の罪穢を大海原に持運び出坐る故に此辭は用へるにて下なる云々氐武如此久云々波氐と有る氐武は將ㇾ棄氐波は棄則と大に異なる意味有る者なり其は運送ると取て棄るとの差有るが故に用ひ別たる所なり此を唯に辭と耳輕忽に見ては言靈の妙用を得知ぬ耳ならず神等の功用に於ても心留得る事能はざる所多かり但此を辭とこそ云へ古道を甚能く學得たる輩の其機に當りて啓發（ヒラク）に非れば辨難き事なり努々語學者などに欺るゝ事勿れ神代紀神等生坐段正書に父母二神勅素戔嗚尊云々當ニ遠適ニ之於根國ニ矣遂逐之又同紀第六一書に伊奘諾尊惡之曰可ニ以任ㇾ情行ニ矣乃逐之など有る往より逐と續きたる語の狀此の辭の奈武と氐武とに彷彿たり○荒鹽之鹽乃八百道乃の荒鹽は海水なり物の自然に在る者を云ふ偖此は荒山荒野などの荒にて和と對へる荒には非ず荒忌を大忌など云ふ荒にて荒山は大山荒野は大野と心得むも僻事ならず若て然る人間を離れて

遠きが故自然に恐く怖ましき狀有り此の荒鹽も其意を含みて仁德天皇御紀歌に瀰箇始報と詠る其は嚴鹽にて海潮の速く恐さ由なるに同じ 此を私記に三日之潮其流急速故將レ讀ニ速待一之發語也と有る三日の潮き流れ急速しと云る事其意を得ず 鹽乃八百道は後釋に潮道の多く有るを云ふ四方の海中には此にも彼にも許多の潮道有る可し 現に聞及び潮道も國々の海に此彼有る中に伊豆國より八丈島へ渡る海中に在る潮道廣さ廿町許が程甚しく早く東へ流るとぞ又紀國能野の南の澳にも有て東へ流ると云は彼八丈の道なると同じ筋にや有む と有り此に因て思ふに神代紀 瑞珠盟約章第三ノ一書 に即以ニ日神所生三女神者一使レ降ニ居于葦原中國一云々今在ニ海北道中一と云るも宗像島に在すを云れば海北道中は潮道の中と云ふ事なり 此道中な國中と說ては海北と云に叶はず道は潮道を云る者なりむし神名式に尾張國丹羽郡に鹽道神社有り此言の例なり 齋明天皇御紀大御歌に瀰儺度能于之裒能矩娜利于那俱娜梨と詠せさせ給へるは水門の潮の下り海下りと云ふ事にて此の鹽道の速き狀なり 下ると云は即流るゝ事にて鹽の八百會に流行くを云り ○八鹽道之鹽乃八百會爾座須後釋に八鹽道とは上の鹽乃八百道を受重ねて云るなり 上には八百と云て此に唯八と耳云ふは事違へる如く聞ゆめれども八と耳云ふ時は八十にも八百にも八千にも亘りて廣ければ八百鹽道と云に同じきなり 八百會とは八百の鹽道の集り會所を云ふ方々の潮道より流來る潮の一所に集會て海ノ底へ卷沒る所なり 偖此文如此同じ狀なる事を重ね續けて長々しく云る殊に愛たく上代の文にて更に後世人の係ても及ばぬ狀にて甚も甚も雅たり此事を能味ひて古人の雅びかなる程を曉る可し古今集に渡つ海の澳津鹽會に浮ぶ沫の云々 と見えた。偖此鹽乃八百會とは根國底之國の水門なる所にて神代紀に謂ゆる速吸名門に此渦汐の卷沒るゝにぞ有ける神名式に豐後國海部郡早吸日女神社有るは此に依れる神名と聞えたり 此所より渦汐の卷沒るゝ證は神武天皇御紀御船發しの條に至ニ速吸名門一時有ニ一漁人一云々臣是國神名曰ニ珍彦一と有る珍は借字にて渦なる事此所の趣を以て曉る可し 然れば伊邪那岐命の橘小門にて身滌祓給へるは其所の鹽道より其黃泉國の穢を速送りて速吸名門より彼國に復し却給へるにぞ有ける 此速吸名門より渦汐の黃泉國に卷沒るゝ事は海潮の月に隨ふことを以て知る可きなり尙此に深旨有り根國底之國の下に說てむ 師說に豐前國人西田直養が速吸名門考を引て此は豐前國と長門國との間なる速鞆の湍門にて其豐前なる企救郡なる速鞆ノ浦に速戶社と云有り速吸と云は潮を速く吸込む語なれば速鞆の瀬戶の瀬早く逆卷く間に渦夥しく卷て水底に吸込なども都て當れり」と云る說の然る言なるに就て此を速鞆としも云ふ速は字の如く鞆は借字にて巴の義なり其巴とは海河の渦卷く處を云稱なり抑伊邪那岐大神の御禊し給ふに前に先粟門を見給ひ次に是速吸名門を見給ひし事は元來黃泉國にて受給ひし穢惡なるが故に其を禊祓ひ竟て然る無底の谷より本つ根國へ泄し失給はむ爲の御事なるが直に其

大門に祓除給はむは潮速さに過たる故に其近き水上なる橋小門にて祓給へれど實には其穢惡を是大門に注ぎ失ひ給ふ御事にて大祓詞に荒鹽乃鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會と有るは疑無く此玄牝大壑速吸名門の事なり其は此御禊の時に生坐る神等の中に謂ゆる祓戸神四柱此速吸名門に在て祓除の功德を成し給へる事其詞に依りて知る可し」と云れたるは然る言なり 此は赤縣太古傳三皇紀に出たるを甚く約めて出せるなり尙師の大扶桑國考三五本國考にも記されたれば就て見る可し

此文中に出たる無底の谷は老子に谷神不死是謂ニ玄牝一玄牝之門是謂ニ天地根一と有て此速吸名門江海の輻湊る所百谷の歸する所なる故に列子には渤海之東有大壑焉實惟無底之谷其下無底名曰ニ歸墟一八紘九野之水天漢之流莫レ不レ注レ之而無增無減焉と有る此也又此所を玄牝と云るは先天地の地は谷神の其女陰の狀爲るに想れる稱にて說文に地元氣初分輕淸易爲レ天重濁陰爲レ地萬物所ニ陳列一也從レ土也聲と云ひ也字を也女陰也象形と見えたるを段玉裁が地ノ字の注に坤道成レ女玄牝之門爲ニ天地之根一故其字從レ也土生ノ物故從レ土云々と有る女陰の象なる所にして其玄牝なる所は何處か在む速吸名門なる事炳き者也宋の李石が續博物志に子曰乾動直靜專坤動寂靜翕其根也天根毎日兩度蹴ニ入尾閭臣壑一則海沸出レ潮と有る師說に彼玄牝之門是謂ニ天地根一と有るは天地の成れる根と云義は勿論にて此語を分れば天根地根にて天根は即天牡陽根なり地根は即玄牝陰根にて尾閭巨壑とは即是なり毎日兩度云々は天根玄牝の氣勢其巨壑玄牝に毎日兩度宛蹴入する故に潮の抑揚(サシヒキ)有る事なるか其進退は又空行く月の出入に相應ずる事にて月は玄牝巨壑に注ぎ入る潮水の純重汚濁なるが凝結して出來し物なる故に同質同氣相感じて右の如く應有る事なり
以上此等は師說の赤縣太古傳に出たる要を採て記せり

斯在ば豐前國企救郡なる速鞆の湍門に速戸社有れば其速吸名門にて彼早吸日女神社の立せ給へる豐後國海部郡は其ならぬ如くなれども熟思ふに此二の內何れか尾前にて共に同じ速吸名門の一處には有る可きなり 國人の說とて或人の記せるを見るに豐後國佐賀關の早吸六柱大神宮と云るは早吸神社には非ず海部郡佐伯庄入津浦に在り入津と宮浦とは並たる浦なり偖其早吸神社の坐す下蒲江浦と云より沖方佐賀關まで早吸灘と里人も船人も云傳たり然れば早吸神は入津神社なる事明けし」と云り 但予未彼伊邪那岐大神の大御身滌有し橋小門の定說無し故翁も師も貝原篤信が說に筑前國糟屋郡の海濱に立花と云る有り其彼古事記に筑紫日向之橘小門之阿波岐原と見え神代紀に筑紫日向小戸橘之檍原と有る日向を東面に向ふ地と見て叶へる樣なれども神功皇后御紀の神託に於ニ日向國橘小門之水底一所居(イタリ)而水葉稚之出居神名云々と御名告し給へる事有り諦し、日向國と有れば予は篤信が自國に黨せる私說には顧る心無し 然るは此御名告に筑紫國と有らばこそ有め已に景行天皇御世に定れる國名を取て神託有りける事云も更なり 然れば豐後國海部郡邊より首として其極まる所は豐前國企救郡なる今の速鞆の湍門なる可き事彼日向國より漸々に流し入れ給ひし狀を想像る可きなり 如此く聯くと雖も豐後にては末潮勢激しからぬを速吸名門に至て愈根國の方に渦卷き入るゝ故に其急(ハヤ)き事極まれるなり且豐後國に速見郡と云るが有る速見は速海なる事此に准らへ知べし 此祓の事の日向國に始れると此詞の日向の高千穗宮に成れるとを合せて思ふに云も得難く奇異なる事なむ多かり然るは豐後國海部郡佐賀關に六所社と申す舊社有り此は伊邪那岐大神の大

御身滌に生坐る神を祀へる由なるが佐賀を以て肥前國佐嘉郡の事を比挍るに神名式に與止日女神社有り神名帳頭注に肥前風土記を引て人皇卅代欽明天皇廿五年甲午冬十一月甲子肥前國佐賀郡與止姫神有ニ鎭座ニ一名豐姫と有て神名式豐前國田川郡筑後國三井郡にも豐比咩命神社とて鎭坐す神なるが山城國乙訓郡與杼神社有る其祭神を瀨織津比咩命と云傳るを以て見るに與止姫と申すは其亦名にて豐比咩は與杼を倒反して云ひ佐賀の佐は眞にて禍津日神に由有る名なるは此詞に高山末短山之末與理佐久那多理爾落多支都速川能瀨坐須瀨織津比咩止云神大海原爾持出武奈と有る次序に能契合て思ゆる高千穗宮にして伊邪那岐大神の故事に合せて作れるが故なり但此高山末短山之末云々は必何處とも限る事には非ざれども高千穗宮にて天下の贖物を召上げ給ふ大祓なるが故に自然其地勢にも叶へて宣せりしなり若て此を何處の祓にも用ひて違はぬは何國の祓物も此水門より外に根國に入る道無ければ天地の在む限違べからず○速開都比咩止云神後釋に此神の御名式の本には比字無し彼伊豆能賣も唯賣なれは此も唯咩にても有べけれど秋津比賣と有る所は比賣なり其上此も前後の瀨織津比咩速佐須良比咩皆比咩なれは是も考の本に比咩と爲られたるに依れり私の本共にも姫と有り」と云れたるに從ひ

て比ノ字を補ひたり偖此は神代紀四神出生段第六ノ一書に水門神等號速開都日命と見え古事記に生國竟更生神云々生ニ水戶神名速秋津日子神次妹速秋津比賣神一と有て大綿津見神の生出給ふ次に載られたり然ば鈴屋大人說の如く水滌段より錯亂せる事紛無き者なり神宮の古記に瀧原宮瀧原並宮は速秋津日子神速秋津比賣神を祭る由なるが其文は多く古事記を取れりと見ゆ古事記に此速秋津日子神速秋津比賣神二神因ニ河海一持別而生神云々幷八神と見え又水戶神之孫櫛八玉神など見えたるは此神の子孫なるなり然るに此詞に速開都比咩止云神と有て唯一神なるを後釋にも此は彼御禊段に生坐る伊豆能賣神なり」と云れたるは然る事にて疑無く諾はるゝ定說なるに就て猶思ふに若くは女神一柱なるを由有て二柱には傳たる者なる可し由有て二柱に傳たると云は如何なる云樣なれども先には女神と生坐て御子を爲坐るに至て二柱に別れ給ひ又本の如く女神とは成坐るならむ但伊豆を秋津の約たるなりと云れたるは取べからず秋津はトに謂る如く明處の義なるが伊豆は直に淸淨なる義にて其意は大抵同じきも其二を成す狀違へり且秋津の津は之の轉なるを若秋津の約ならむには辭の重復るに似たり後釋に速秋津の秋は借字にて明津の意にて明とは御禊に依て淸淨に淸まりたる由の御名なり此等の猶委しき事は古事記傳五卷六卷に云れは此には漏せり偖速秋津日子速秋津比賣二柱神は古事記に水戶神と有るを此に鹽乃八百會爾坐と云るは甚く處違ひたれども是に深き由有り其は潮の八百會

は此顯國の海上の堺にて根國の方へ潮の沒往く門口なれば此亦彼方の水戸なり〇今云師説に鹽の八百會は疑無く速吸名門にて赤縣に玄牝之門爲二天地根一と傳へ或は大壑尾閭天池朝夕池百谷王など種々異名を稱して此玄牝の無底の谷なる山に云れたるは後釋の此説に起れり常に云ふ水戸は川より海へ水の出る口鹽乃八百會は海より入て根國の方へ水の出る口なれは此方にて川より出る所と彼方へ出る所との差こそ有れ共に同じく水戸なる古傳の趣の妙なる事如此し能々味ふ可し」と云れたる説の拔べからぬを思ふに神名の開都を古事記神代記に秋津と作る秋は借字にて明津の義なる事後釋の説の如くなるが此に開と作る其正字にて開處の意ならむが然して其開處なる所は决く速吸名門にて根國の方へ水の出る口を云ふながら罪穢の此處より根國に流離ひ清まる由縁に由て明津の意をも含兼たる事云も更なり考に水戸は水之門にて川の海へ入て開く所なる故に開と云ふ御名は有ならむ」と有る説も云樣こそは惡かりけれ僻事ならず　此速吸名門に攝なれる女島有り亦名を天一根と云る根は陰處の名なるに上の細注に引る玄牝之門爲二天地根一と云る赤縣の古説も有て此處即天根地根にて大地の陰處なれば根國底之國に注ぎ入る潮水の水戸なり此を以て開處とは云るならむとぞ思はるゝ然れは水戸神と申すは此速吸の水門を云

るが始にて川より海へ入る水戸は此稱を延て號たる者なり但大海の全體は綿津見神の知看す事なれば此神は唯其水戸と有る所の神なる事勿論なり思誤る事勿れ　此説の成るに就て又思ふに此神の亦名を伊豆能賣神と申す伊豆は清淨なる由なる事云も更なるが其速吸名門の根國の方へ潮の沒往く門口にて潮の瀨速く逆卷く門に渦夥しく水底に卷入れ吸込む事なるが其由を以て渦之賣神と申すにぞ有べく思ゆるなる然るは渦卷く所計り水の清き所は非ればぞ上なる開都は明處なるに思ひ准らびて曉る可き者ぞかし　〇持可可呑武氏は大海原に持出給ひし祓物の潮水に沈むを云り持は其罪穢を祓物と共に瀨織津比咩神の大海原へ持出給ふを此速開都比咩神の受取持つを云ふなり然れば持ノ字大に力有り考に持は輕く添たる言なり」と有るは反復の違ひなり可々は考に水を呑音なり凡て物を呑み物を嚙音を加夫加夫と呑む加利加利と嚙むなど云ふ此類多し萬葉に筑波嶺に加々鳴鷲と詠るも鳴聲の加々加々と聞ゆれば云り」と有るを後釋にも諾はれて可々は朝野群載に客々と書き次なるをも加々と書り式の本に歌と有るは後に寫誤れる者なり殊に入聲ノ字をしも用ひて客々と書るも呑音にて加久加久に近きが故なり」と有るは然る言なり高橋氏文に此浦有二異鳥之音一其鳴賀久我久と有るも加々鳴鷲の例にて其鳥の物を呑入るゝ聲の如く鳴くを以て云なり　又後釋に云

く祓物を潮と共に海底へ卷沒るゝは實に此神の呑給ふなり 然るを漢籍に謂ゆる寓言の如く心得むは倭魂に非ず其は例の生賢しき漢意なり倩然呑給ひて顯國の罪穢の除こり清まる此伊豆能賣神に正しく當れり尙古事記傳六卷此神の下を考て其理を知る可し○今云此說に就て或人間けらく祓詞の文面の如くは祓物を此神の受取給ひて根國へ潮と共に卷沒るゝにて宜しけれども今事實を以て推すに必其事の如くならず譬へば今京にて云ば賀茂川桂川の如きへ祓物を持出るを大川道に持出ると云る其なれども決て其より淀川に出て浪華海に入り速吸名門に至るやと思ふに邇遠には浪華海へ出るも有べけれど多くは川隈に係りて朽るなり然れば漢籍の謂ゆる寓言なりと云むも強事には非じ如何と云るに答けらく人間は形質を見神祇は其靈容を見る事師の赤縣太古傳に云れたる如く人間より無形の罪穢を有形の祓物に託て流し知るに其祓物の質のみは我も入も目に觸る處なるが罪穢は事なり其を物に託て流すと云も我手にて爲る事ながら我目にも其罪穢と云物の加何なる形を爲し如何してか流離ひ行と云事本より知ぬ所なるを神代より古傳の有て祓物を出し解除を爲れば罪穢の除こり清まると云ふ神語の此に有るに非ずや己が知見の及ばざるとて寓言と爲むは其愚昧なる事なり祓物の形質の如きは其處にて人の穿去るも有可く又其川の砂石に埋るゝも有べく井堰などに係りて朽るも有べく又海へ出浪と共に濱邊に寄て碎るも有べく又海底に沈むも有べく又速吸名門に流及びて根國の方に實に至るも有べきが神等の受給ふ所は其形質には非ず其祓物に類へたる罪穢を受取給ふ事なれば其祓物は人より出せる處即神の受取給ふなり神前に奠る物を見よ海山の味物を横山の如く獻上たればとて一品も神の聞食たる跡無しと雖も實に聞食す事有るが故に神より乞給ふ事の往々有るに非ずや此も人間より奉る所は形質の奠物なれども神祇の聞食す所は其靈容と神氣の二のみ也 ○如此久可々呑氐波は八鹽道の鹽の八百會より速開都比咩神の根國底之國に呑込み給ふを云なり氐波の辭は已に後釋を引て云る如く而有者の意なるが氐に竟の義有て遺る所無き由なり 又氐に棄の義なも兼有てり ○氣吹戸坐須後釋に戸は處なり處を斗と云例多し ○今云祓處寢處伏處など云例有るを云ふ 倩氣吹戸とは此氣吹戸主神の諸の罪穢を氣吹き放遺り給ふ處の限を廣く云るにて始祓物を川に流し棄る所よりして終根國に至る迄の間に廣く亘る名なり」と有るが如し 其證を云ば瀬織津比咩神に持出奈武速開都比咩神に持可々呑氐武速佐須良比咩神に持佐須良比失氐牟と有て此三には持字を以て其祓物を持出し受取り流離給ふ事を慥に云取れるを此氣吹戸主神に限て右の三とは異りて持字は無く唯に氣吹放氐武と耳有るは彼三神とは殊にて此神の氣吹の功用の始終に亘るが故なり心を着て考ふ可し 倩氣吹戸は右の如く氣吹處の義なるが何處を氣吹處と云ぞと云に前段なる第一譬に科戸と云る其と一にて天にも地にも上にも下にも物を氣吹き送る風氣の脉を云るなり然れば高山の末短山の末より眞向垂(サクナダリ)に落瀧つ早川より大海原に持出るも水の潤下る性に依ると雖も此神の氣吹處より氣吹送るに因り又大海原の鹽の八百會より根國に運び送るにも此神の氣吹に因る事水をも浪をも風の心に任するを以て知べきなり 然れば後釋に氣吹戸坐須と云るは氣吹戸と云ふ處の一つ有る如聞ゆれども然らず唯上の二の例の任に坐とは云るにて別に然云所の一有るには非ず其は彼速川能瀬鹽乃八百會根國底之國など云とは名の樣異にして氣吹戸と云べき所何處にも無を思ふ可し」と云れたるは甚しき僻事なり氣吹戸と云所の無を神語に載らる可くも非ず正しく有るが故にこそ氣吹戸坐須とは云るなりけれ 倩此は殊に深旨有る事にて上に天津神波云々所聞食武國津神波云々所聞食武と有る其天地神祇の罪穢を秡ふ事の由を聞食すより直に此氣吹戸坐須氣吹戸主神を以て神直日大直日に直し始る事なるが故に其を受たる第一譬には科戸之風乃

云々と云て上なる天津神波天磐門乎押披氏天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏所聞食武と有る感應を表し第二譬に朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃云々といひてかみなる國津神波高山之末短山之末爾上坐氏高山之伊穗理短山之伊穗理乎撥別氏所聞食武と有る感應の狀を徵せる右の天之八重雲また伊穗理とこそ稱は別たれども其押披き撥別る其即氣吹なれば後釋に祓の始より終に至迄に廣く亘れりとは實に然る言にて違ふまじき證は國津神波高山之末短山之末云々と有るを用ひて高山之末短山之末與里佐久那多理爾云々と云る文脈なるを以て思ふ可し（此事已に上なる朝之御霧夕之御霧の下に云れば立返りに見合す可きなり後釋に云く考に物を吞ては必息吹爲る物なる故に如此云り云々と云れたるは叶はぬ事なり此は吞は速開都比咩神の事氣吹は氣吹戸主神の事にて別なるをや但語の聯きの然る樣に聞ゆるは自然依り來る文の匂(アヤ)のみなり云々）倩氣吹とは大空の氣を振搖かす名なるを以て云ふ時は其神は風神なる可きが如くなれども下に註る如く氣吹戸主神は直日神に坐は如何と云に氣吹こそは風神の名なりけれ氣吹戸と云ふ時は其風の氣吹く所を云るなればなり（然るを後釋に此御名氣吹主と云ずして氣吹戸主と申すは上に速川能瀨坐須云々鹽乃八百會に坐云々と云る例の任に此も氣吹戸に坐と云から戸てふ言も添て稱奉れるなる可し」と云れたるは思ひ漏されたるにて戸と云ふに深味有る事なり）此詞の上より云下して高山末短山之末云々に亘る語路を考て初より此氣吹戸主神の預り御在るを曉る可し然るは罪穢を解除ふ事はしも漸くに禍事を直し清むるなれば必如此く有べき事なり（尙鎭魂祭に祀る神等の神祇官坐八神の外に大直日神を加へ給ふ事は魂は氣と共に鎭り定る物なり大直日神の氣吹戸主に坐すに叶へる心ちの爲なり）○氣吹戸主止云神　後釋に此神は倭姬命世記に多賀宮一座豐受荒魂也伊弉那伎神所生神名伊吹戸主亦名曰二神直日大直日神一と見えたり多賀宮は伊勢外宮の別宮高宮なり此を豐受荒魂と云るは心得ねど氣吹戸主を直毘神なりと云るは後世人は更に思ひ依まじき事なれば此は必古き傳說なる可し此所に正しく契合て甚尊し（抑直毘神の御事に古事記傳六卷御禊段に委しく云れは考へて知べし）と見えたるを師の古史徵第二十七段にも此世記を引て高宮を豐受荒魂也と有るを後釋に心得ずと云れたれども此は熟考るに外宮延曆儀式また神祇式にも如此有れど元は決めて皇大神和魂也と有しを書改たる物と所思たり（然るは多賀宮も甚古くは荒祭宮と共に內宮に屬給ひて攝神と申し〻宮なり）其は世記に垂仁天皇御世に內宮鎭座の事を記せる處に天照大神並荒魂宮和魂宮止奉鎭也と見えたるを思ふ可し此和魂宮と云は即多賀宮を申せり（寶基本記に荒祭宮高宮者所謂荒魂宮和魂宮是也とも有り）若て雄略天皇御世に豐受大神を今の外宮の地に遷奉らせる時日大御神の御託宣に依て多賀

宮をは豐受大神に傍奉れしなり其は世記に外宮御鎭座の事を云る所に皇大神第一攝神和魂多賀宮乎波豐受大神仁奉副從者也と見え御鎭座傳記にも同時の事を記して多賀宮則伊吹戸主神天照大神第一攝神也依ニ神誨ニ奉レ傍ニ止由氣宮ニ也と有り 御鎭座本記にも依ニ天照大神御託宣ニ第一攝神多賀宮奉レ傍ニ止由氣宮ニ也と見ゆ大御神の和ニ魂と坐て第一攝神と坐ます神な放奉りて豐受大神に傍奉れる事如何にも大御神の御託宣に依らでは得爲まじき事なれば此の傳說眞實に然る可し 斯在ば書等に多賀宮を豐受大神荒魂と有るは何れも後に書改たる事疑無き者ぞ 二十二社本緣に神直日大直日乃神登申波天照大神の荒魂也と云ヌ荒魂は非なれと天照大神乃と云るは然る事なり と有るにて著明なり偖又後釋に或人問彼伊邪那岐大神の御禊に此神等の生坐るは先禍津日次に直毘神次に伊豆能賣神にて其次第事の趣に能叶へり然れば此も氣吹戸主若直毘神ならは瀨織津比咩神の次に氣吹戸主神次に速開都比咩神なる可きに此二柱神の御事の次第の倒反なるは如何に答先祓にて罪穢の除こり淸まる次第初に瀨織津比咩神早川の瀨より大海原に持出給ひ次に大海原を經て鹽の八百會迄至るは此氣吹戸主神の氣吹放ちて送り却り給ふにて次に速開都比咩神の呑給ふなり 然れば彼御禊に生坐る次第と違ふ事無し 然るを氣吹戸主神の事を瀨織津比咩神の次に云はざるは後に此に云故に略ける者なり若然らずは大海原の間を遙々と經て鹽の八百會迄は何れの神の送り遣給ふとか爲む上文に持出奈武と云て次には如此持出往波と往て云言を加へて云る に心を着べし瀨織津比咩神の事は持出る迄なる故に其には往と云はず往るは持出たる上る事にて大海原を經て往るにて此一言に氣吹戸主神の所爲の此間にも在る事を思はせたる上世の文妙なりとも妙なり 闕等に見過す可きに非す 偖其事を其ソコには云はずして此にしも云る故は伊豆能賣神の呑給ひて然て其鹽の八百會より又根國迄送り遣給ふも同しく此直毘神の御所爲なる故に此に於て彼をも兼たり其は此神は總て此神の御靈に非る事無ればなり ○今云此論允に聞れたる說なり已にも云る如く高山末短山之末より天津神國津神の罪穢を根國底國の方に却ひ失ひ給ふ解除の始より總て直毘神の御靈に非る事無ればなり 然るに若此を瀨織津比咩神の次に云時は伊吹戸主神の御靈の始終に亘る事顯れ難く又鹽の八百會より根國迄の間の事も關れは彼此を以て此には擧たる者なり猶云はゞ罪穢の鹽の八百會に沒失る迄は顯國の事なるを ○今云祓物を大川道に流せるが海に出て速吸名門に至る迄い事な兼て如此く云れたるなり 又其より更に根國の方に就て云時は彼鹽の八百會に沒往くは彼方にては出來るにて水門なれは ○今云彼速吸名門は根國の方に潮水の渦卷き沒るゝ水門なるを如此く云れたり 上に

も云る如く伊豆能賣神（亦名速秋津日命）は水戸神と有るにも叶ひたれば顯國にて早川より水門を經て海に出る處にも此神の御靈有る可く（〇今云常に水戸と云ふは河と海との境たる門の事なれば其所に在して祓物を速開都比咩神の可々呑給ふとなり）又彼鹽の八百會より彼方へ流出る處にて顯國の如く瀬織津比咩神の御靈有る可き事互に相准へて知べし（〇今云此説實に然る言なり總て物は大にも小にも亘る事にて水戸と云ふ如きも元は速吸ノ門の大水門に出れる稱なるを河と海との門なるも水戸と云て其に速開都比咩神の御靈を幸ひ坐と同じく瀬織津比咩神の瀧つ早川に坐て罪穢を大海原に持出給ふ御功坐るも又其鹽の八百會の落口なる瀧つ早川なせる處にも坐て御靈を幸ひ在る事疑ふ可き節有る可からざる者なり）若て其を根國まで送り遣るは又顯國にて大海原を經て鹽の八百會まで送り遣ると同じければ直毘神（亦名伊吹戸主神）を此に擧る事又由縁有り（〇今云涙は風に起り水は風に隨ふ事實に於ても氣吹戸主神の御靈は著明き者なり）斯して根國に至て流離ひ失ふは又顯國にて伊豆能賣神の呑給ふと同じければ速佐須良比咩神の御所爲にも伊豆能賣神の御靈有る可し如此く此神等互ひに御靈幸ひて祓の功を相成し給ふ者なり（考に此神の説無し上に物を祓呑では必息吹する物なる故に云々と有る是此神の釋なり抑此段に祓の主と有る所なるに考の説凡て如此く等閑にて彼寓言と云ふ物の如く見られたる如く聞ゆるは如何にぞや）と云れたる節々實に顯幽を相貫きて祓戸大神四柱の御靈等相共に神事を成行ひ給ふ形象を正目に見奉る心ちぞ爲る（若て此は上なる天津神波云々國津神波云々と始りて科戸之風乃云々朝之御霧夕之御霧にて解釋し此伊吹戸主神云々に至て全く惑應有る狀を表せるなれば能々上に云る所を合せて考べきなり）〇根國底之國（解後釋に）之國の下なる爾ノ字は式ノ本に上の神ノ字の下に在るは錯亂たるなり（〇今云宮主秘事口傳抄を始め其餘の本共には悉く根國底之國爾と有り）るは然る言なり考に引れたる古事記に須佐之男命云々僕者欲レ罷二妣國根之堅洲國一又神代紀（正書）に同神の事を當遠適二之於根國一矣逐逐之又同紀（一書）に汝所行甚無頼云々宜三急適二於底根國一乃共逐降去矣と見えたる妣國は鎮火祭詞に見えたる如く伊邪那岐伊邪那美神妹妹二柱嫁繼給ひて國の八十國島の八十島を生坐る眞弟子に火産靈神を生給ひし時伊邪那美命其御陰處を被燒給ひて石隱れ往坐る下津國にて所謂黄泉國此なり（此は委しく其詞の下に註せれば今は漏しつ）偖此根國底之國と云ふに論有り故翁は此大地の下に在る國なり」と云れたるは然る言なるを服部中庸か三大考及師の靈能眞柱等に此黄泉國を根國底之國と云に就て大地外表の根底に在り」と云れたるは共に古傳に契合ざる僻説なり（今は其を一々に辨ふ可く思へども其にては甚煩しく成て中々に惑はしければ今云はす）偖大地は圓體にして鷄子の如き物なり四方無く上下無く周圍悉く海水の外は國土にして人類住み萬物倚ふ所以に戴く所天なり上なり履む所地なり下なり大地圓球の中は北極の下

南極の下と雖も此天地の位置と上下の所在は異變有る可からざゝなり黄帝素問に請二天師一而問レ之曰地之爲レ下否乎岐伯曰地爲二人之下大虚之中一者也帝曰憑乎岐伯曰大氣擧レ之也と有る地爲二人之下大虚之中一の張介賓注に人在二地之上一天在二人之上一以二人之所見一言則上爲レ天下爲レ地以二天地之全體一言則天包二地之外一地居二天之中一故曰二大虚之中一者也由レ此觀レ之地非二天之下一矣と有るは然すがに古説の存在せるなり如此くして人の戴く所悉く天なり踏所悉く地なり土を穿てば其穿てる處の空處忽天と變り其土を堆たる處忽地と爲るなり斯れば大地の外表に於て根と云ひ底と云ふ所有るべからざる者なるなや然れば地上に在る者の上より根とし底と爲る者は地心なり外に有る事無き現證有るが上に此を下津國とも稱して其與美津枚坂に至給ふに石隱て往行る由鎭火祭詞に見え古事記に千引石引二塞其黄泉比良坂一其石置レ中各對立而度二事戸一云々亦所レ塞二其黄泉坂一之石者號二道反大神一亦謂二塞坐黄泉戸大神一と見え神代紀にも伊弉諾尊已至二泉津平坂一故便以二千人所引磐石一塞二其坂路一云々所塞磐石是謂二泉門塞大神一也亦名道反大神矣と有る黄泉比良坂は石隱て到る道の坂路にて下津國に到る石穴なり其は石を以て塞きて其通路を絶給ふを以て知る可し然るを神代紀に其於二泉津平坂一或所二謂泉津平坂一者不三復別有二處所一但臨レ死氣絶之際是之謂歟と有るは中古の博士等の漢意を以て見られたる書入の文の紛れ入れる也又出雲風土記出雲郡の下に出たる黄泉之坂黄泉之穴など云ふ物の有などを以ても黄泉國は大地の胎中に在て其往來は穴より通ふ處なるを知べきなり然れば氷海夜國の邊を云りと云ふ説などの妄なる事を知る可し若氷海夜國の邊ならむには山を越え海を渡りて到りつ可し然程に磐石を穿ち入るに及ばざるなり磐石を穿ち穴中より到るを思へば大地の胎中なる事疑ひ無し借右の如く大地の胎中に在る國なるが故に黄泉國とも豫母都國とも根國とも底國とも根底國とも根之堅洲國とも云るなり但堅洲と云るは片隅なる可し然れば地心よりは何れにか傍倚れりと所思たり隅を須と云るは天日隅宮を出雲風土記に天日栖宮と作る例なり借此黄泉國は何れの神の如何にして造けむ傳無れは知べからず師の古史徵に神代記一書に天地初判有レ物若二葦牙一生二於空中一因レ此化神號二天常立尊一次可美葦牙彦舅尊又有レ物若二浮膏一生二於虚中一因レ此化神號二國常立尊一と有るを見誤りて葦牙の如き物の成れるとは別に浮膏の若き物生て漂在る物の根底に垂下りて根國底國と成れり其は此に因て成坐る神名を國常立と申て天の底に生坐る天常立尊と相對たるにて知べしと云れたれど然らず其は浮膏の如き物は天地と成べき物なりしが其天地と別るゝ形象を傳たるにて浮膏の如き物は天地の質なりと雖も葦牙の如く清陽なる物の上て天と成れる上は其止まれるを指て國常立尊に係たるにて大地より下に物有て別に成れる由に非ず思ふに別に造作らせ給ふには有へからず其は古事記に天神諸命以詔二伊邪那岐命伊邪那美命二柱神一修二理固成是多陀用幣流之國一而賜二天沼矛一而言依賜也と有るは大地を經營して子孫を蕃息せよとの詔勅なれば此漂在る地心に然る國の有とは元より思なし係給はざる所なり國土を修理固成給ふは人類の爲に功しみ給ふなれば黄泉國の事迄には及ばせ給ふまじき事なりかし鎭火祭詞に神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹妹二柱嫁繼給氐國能八十國島能八十島乎生給氐比麻奈弟子爾火結神乎生給氐美

保止被燒氐石隱坐氐夜七夜晝七日吾乎奈見給曾比吾奈妹乃命止申給支比此七日波爾不足氐隱坐事奇止氐見所行須時火乎生給氐御保止乎所燒坐支如是時爾吾名妹乃命能吾乎見給布奈止申乎吾乎見阿波多志給比津止申給氐吾名妹能命波上津國乎所知食志倍吾波下津國乎知所牟止申氐石隱給氐與美津枚坂爾至坐云々と有る如く始より然る所の有むとは思はさす畢竟は火結神を生給ひ御陰處を被燒坐る汚穢を避け其火徹を避け給はむとして石穴を穿ち入坐るが其七日にも不滿るに其甚しき御有狀を見認られ奉給へるに恥らひて吾汝妹命は上津國を所知食す可し吾は下津國を所知むと申て愈其穴より穿ち入せ給ひて與美津枚坂には到坐る此即黃泉國なるが元來其國在とは所知食ざゃりし事には有れども其石隱の間に始て知給へるが故に如此く白給へるにぞ有ける若大地の外表に附たる地ならむには其國の八十國島の八十島を生給ふ間に何とかは見給はざる事の無らむ（但中庸及師の說の如此く事實に合はざるは此國の八十國島の八十島を生給ふと有るを大八島國の事と小々見たるより其識も遠きに及ばざりつらむ）古事記に故伊邪那美神者因レ生二火神一遂神避坐也と有るは其事にて此上津國より下津國へ顯身ながら神避り出坐る事師說の如し

偖其下に於是欲レ相二見其妹伊邪那美命一追往黃泉國爾自二殿縢戶一出向之時伊邪那岐命語詔之云々伊邪那美命答曰悔哉不二速來一吾者爲黃泉戶喫云々且與二黃泉神一相論と有る黃泉神を師は國之底立神豐雲野神の二柱を申せりと云れたれど無稽の妄談なり其は國之底立神と申すは大地全體の祖神にして天極地軸相正對し天日を中央として其外圍を一年に公運する御名豐雲野神は一日一夜の自轉せる私運を知す神にて然る禍々しき神には非ず思ふに黃泉神とは彼豫母都志許賣また泉津日狹女などを云なる可し其證は同記に故號二其伊邪那美命一謂二黃泉津大神一と有るを以て知べし黃泉國に於て大神と稱すは此神なりと主張(ツケバリ)て申せるに心を着べきなり（但如此く自然に伊邪那美命の黃泉津大神と申すに至る運びの皆偶然なるが若くなれども悉く皇祖大神の幽に然有らしめ給所にして奇異に奇く妙なる事なむ有るを其は鎭火祭詞の下又日本書紀傳古始太元攷等に云てむとす）偖伊邪那岐命其國より返給ひて吾者到二於伊那志許米志許米岐穢國一而有祁理故吾者爲二御身之禊一而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原而禊祓也と有るは神代紀一書に親見二泉國一此既不レ祥故欲レ濯二除其穢惡一乃往二見粟門及速吸名門一然此二門潮既太急故還二向於橘之小門一而拂濯也と有を合せて上に說る如

く黃泉國より受來る穢なるが故に本の黃泉國の方へ復し遣給ふなり（委しくは上なる鹽乃八百會の注に云るを見る可し）此に就て思ふに其國に往來ふ道はしも陸よりも海よりも有る事なり陸よりのは已に記せる泉津平坂また黃泉之穴の類にて道饗祭詞に根國底國與里麁備疎備來物など云るも隈々しき處より出來る由なる其なり海よりなるは彼鹽の八百會なる處なるが陸には久那斗神塞在し海には祓處神祓在す事と聞えたり（此も亦神典の大要を此に取總て云るなり）偖又古事記に須佐之男命云々僕者欲レ罷ニ妣國根之堅洲國一と有るは全く其黃泉國に往坐むと宣へるなり此より天上に參上て其事を大御神に申上させ給ひし間種々の惡き御所爲ども有しかば其國に被逐給へり神代紀（一書）に既而諸神嘖ニ素戔嗚尊一曰汝所行甚無レ賴故不レ可レ住ニ於天上一亦不レ可レ居ニ於葦原中國一宜ニ急適ニ於底根之國一乃共逐降去と有るを以て知べし此妣國を戀しく所思す御心坐るが故に其國に牽るゝ惡行を物爲させ給ふに至り終には御心より外に出坐る事とは成れる伊邪那岐命の滌ぎて返し給へるも須佐之男命の罪有て顯身ながら被逐て出坐るも事は同じきなり然るに其大神天上にて千座置戸の祓を負せられ給ひし功驗に依て終に我御心須賀々々斯と詔給へる如きに至れりしかば御父大神より御事依され奉給ひし此國土に大きなる御德功を建給ひ國土經營の御功業を御子大國主神に事依し給ひ置て根國には入せりしなり神代紀（一書）に然後居ニ熊成峰一而遂入ニ於根國一者矣と有る文の續きに就て思ふに熊成峰は決く紀伊國の熊野なるらむと所思たり（此を出雲國意宇郡なる熊野と見て事も無き樣なれども此一書は木種を播殖給へる事より始て五十猛命以下三神を紀伊國に渡し奉れる文に聯なり出たるを以て紀伊國なりとは云なり猶云ば古事記に大國主神の八十神に窘られ給へる條にも御祖命の御言に汝在ニ此間一者遂爲ニ八十神一所レ滅乃違ニ遣於木國之大屋毘古神之御所一と有るは御兄五十猛神の御所に遣はされたる也然るに其次に大屋毘古神の御言に可レ參ニ向須佐之男命所レ坐之根堅洲國一必其大神議也と有る根堅洲國は必古事記を記さるゝ文の運びに依て訪記されたるにて必此は此事を黃泉國に到坐て後の事と心得違へたる文にて此下に其須世理毘賣命を率て逃歸坐ます所にも道ニ至黃泉比良坂一など記るも全く伊邪那美命の故事より混たる僻傳也然れば此は紀伊國に坐し程の事なる事疑無し後釋にも佐須良比咩神を須世理毘賣命の事として云れたる說有れど信難し已に伊邪那岐大神すら其國の穢に觸ては禍事に遇給へるに非ずや然る醜國に到坐て大國主神の身滌など物爲させ給ふ事は無く却て御威稜を得給へるに伊邪那岐神の事とは相反して疑ふ可き事ならずや此を以て右の文中に根堅州國と云ると黃泉比良坂との二は記者の旦と思違へて此事の顯國に在しとは著きながらも須佐之男命已に逐はれ坐れば其後の事ならむとは思給へたる者なりけり）若て須佐之男大神の其國に流離へ出坐る後に此顯國より彼鹽の八百會に卷入るゝ渦汐の然る可き由有て相凝成れるか一箇の地球と成て彼赤縣に云る中岳崑崙を上首として此大地の東南なる地ニ戸と云邊よりぞ尖出（モヌケイデ）て天霄に分判たるが大地外に聯

れゐ天網に羅りつゝも大地の周匝を行經る月とは成れりける地戸は河圖括地象と云る古書に西北爲ニ天門一東南爲ニ地戸一天門無レ上地戸無下と見え列子に天傾ニ西北一故日月星長就レ焉地缺ニ東南一故百川水潦歸レ焉と有る缺ニ東南一を今本には不レ滿ニ東南一と有るを今は初學記に引たるに依れる由師の赤縣太古傳に云れたるが如し 然れども其始黄泉國の成餘れる處に出たるを以て須佐之男命の其國に分り給ふ御名を月夜見命と申せるは黄泉より分れたると顯國より夜見ゆるとに依れる者なり伊邪那美大神は此大地の胎中に黄泉津大神と坐して地心より其月輪を引て御在る事なるが故に月は地に屬くにぞ有ける然れば泉と月とは天極日少宮に伊邪那岐命の在し天日に天照大御神の在して相引と同じ事なる者なり 如此く須佐之男命は伊邪那美命に屬給ひ御在つゝも御空行く月夜見命と其國に在して天日の光を受け其光を以て大地を照し給ひて天日の御光の及ばざる夜之食國を所知看す御事なるが其相凝成し本因に依て潮水の進退は空行く月の出入に應ずる事也 師の赤縣太古傳に引れたる松下見林が論奥辨證に出せる海潮圖序に夫陽燧取ニ火於日一陰鹽取ニ水於月一從ニ其類一也日之所レ臨則水往從レ之故日臨ニ卯酉一則水漲ニ乎東西一月臨ニ子午一則潮平ニ乎南北一彼竭(ツキテ)此盈往來不レ絕夫朔望前後月行差疾故晦前三日潮勢長朔後三日潮勢極大望亦如レ之春夏晝潮常大秋冬晝潮常大蓋春爲ニ陽中一秋爲ニ陰中一歲之有ニ春秋一猶ニ月之有ニ朔望一也故潮之極漲常在ニ春秋之中一濤之極大常在ニ朔望之後一此又天地之常數也嘗聞ニ海賈一云潮生ニ東南一此乘レ船候レ海而進退者耳古今之說地缺ニ東南一水歸レ之小近レ之矣嘗候ニ於海門一月加レ卯而潮平者日月合朔則日出而平緩三刻有レ奇上弦則午而平望已前爲ニ晝潮一望已後爲夜潮皆臨レ海之候也遠海之處則各有ニ遠近之期一月加レ酉而潮平者日月合朔則日入ニ潮平一上弦則夜半而平望則明日之午而平望已前爲ニ夜潮一望已後爲ニ晝潮一此東海之潮候也又嘗候ニ於廣州一武山月加レ午而潮平者日月合朔則午而潮平上弦則日入而平望則夜半而平上弦已前爲ニ晝潮一上弦已後爲ニ夜潮一月加レ子而潮平者日月合朔則夜半而潮平上弦日出而平望則午而平上弦已前爲ニ夜潮一上弦已後爲ニ晝潮一此南海之潮候也今通ニ二海一之盈縮一以誌ニ其期一西海二海所レ未ニ嘗見一故闕而不記と有るを以て知る可し 如此く地心は月を天網に指て引き月は地面を照して潮水を引く事なる理を考へて倚思ふに地と月とは母子の如き所謂の有るに依れゐ者なり然れば地胎の黄泉國と月夜見とは其如く母子の差別有て本より別なり然れば常に下津國とも根國とも底國とも根底國とも根之堅洲國と云るは地胎の黄泉國にて空行く月夜見を云には非ざるなり偖神典の古傳に就て其根國底國の所在を思ふに紀伊國出雲國などに其入給ひし趾有るを以て考るに北極出地三十度より四十度迄の間の地中に在て其處當に黄泉國の地平にて其より北極に當りて上なり南極に當りて海なり其は速吸名門より潮水の流れ込むに右の如くならざれば悉く其國は潮水に浸る可ければなり若て潮水は其より彼地戸なる所へ出ては返り出ては復り爲る事にこそ有る可きなり抑如是る事迄を穿鑿て說を爲すを人は如何にぞや思ふめれども神典に見えたる限りの神理は何處とも明し云べければなり 若師說の如く根國底國は月夜見國と分去て此地心に其國と指處の無らむには彼黄泉戸に塞れりし千引の石も無用の長物たり如何にとなれば大空に懸れる月の蓋を地中の穴に爲ると

云ふは餘りに淺ましき事なればなり西より來る敵を防ぐに東に向ひて備ふるに似たり然れば師說と雖も悉く依難き者なり 偖又後釋に云く抑世中の禍事は元黃泉國より起り來る事なるを祓禊は其罪穢の凶事を本の黃泉國へ返し遣る所作にて此祓禊爲る事を天津神國津神の聞食し納るれば此段の神等其祓棄たる罪穢の凶事を次第に黃泉國へ送り返し却給ひて世中の罪穢除こり淸まりて凶事無き是ぞ祓の旨趣なりける○氣吹放氐牟 後釋に氣吹は息以て吹なり放は放ち遣るなり偖速開都比咩神には可可呑と云ひ此神には氣吹放と云るも實に此異有り彼呑給ふは顯國の罪穢の除こり亡るなれば呑沒(ノミイレ)失ふなり此氣吹放給ふは既に根國の方に移りたるを受て根國迄遣給ふなれば其物を御息以て吹遣給ふなり此二の意味直毘神と伊豆能賣神とに允(ヨク)當れり古事記傳御禊段を考合せて知べし 偖上に云る如く始め川瀨に流し棄るより終り根國に到りて流離(サスラ)ひ失ふ迄を一に合せて云ふ時は皆是凶(マガ)を吉に直す直毘神の御靈なれば此氣吹放と云ふ事も同じく始終に亘りて祓禊する處より始て根國にて流離ひ失ふ處迄總て氣吹戸にして皆此神の氣吹放給ふにぞ有ける」と有るが如し此に上に說る朝風夕風乃吹掃事乃如久の注を見合せて味ふ可き事有り江家次第に到二祓淸之處一以二人形一令吻給と有る其事の神幽に應(コタ)ふる事の狀をも明せる文なり容易く見過す可からざる者ぞかし ○如此久氣吹放氐波 は氣吹戸主神より罪穢の禍事を氣吹き放遣て速佐須良比咩神に渡る文なり○根國底之國爾坐速佐須良比咩登云神後釋に佐須良比咩と云べきを比一ッ足ざるは凡て古言に如此く同音の重復るをば一ッ省く例なり旅人を多毘登と云ひ留を登麻流とも云が如し此類猶有り然れば考に今一比ノ字有けむが落たるなる可し又良比の約里なれば若は佐須里なりしを良とは改たるか」と云れたれど比の落たるにも非ず里を誤れるにも非ず と見ゆ偖此神の御事は諸書に絕に所見無きを後釋にも其正說を思漏されて「此神は須佐之男大神の御女に須勢理毘賣命と申て黃泉國に坐神御在坐す是なり須と佐勢と須通ふ音にて良比は理と切れば佐須良比と須勢理と御名通へり」と云れたれど強說なり 我師の此を見出られたるは比無き賜物なり 其說古史徵二十七段に云く御鎭座傳記多賀宮一座と有る下に伊弉諾尊到二筑紫日向小戸橘之檍原一而祓除之時洗二左眼一云々復洗二右眼一云々亦洗二鼻一因以生神號二速佐須良比咩神一與二素戔嗚尊一合レ力座給也と有る傳は實の旨に符ひて決めて後人の言出まじき說にて古事記書紀なる傳の謬をさへに正し明らむ可き甚も妙なる傳なりかし○今云古事記書紀の謬とは古事記に於是洗二左御目一時所成神名天照大御神次洗二右御目一時所成神名月讀命次洗二御鼻一時所成神名建速須佐之男命と見え二神代紀神避生坐段第六一書に然後洗二左眼一因以生神號曰二天照大神一復洗二右眼一因以生神號曰二月讀尊一復洗レ鼻因以生神號曰二素戔嗚尊一凡三神矣と有る月讀命と須佐之男命とは同神なるを別神として其須佐之男命の出自を洗鼻と云に係たる謬を指て云るなり 其は大祓詞に落多支都速川能瀨坐須瀨織津比咩止云神大海原爾持出奈武如此

持出往波荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾座須速開都比咩止云神持可々呑氏武如此久可々呑氏波氣吹戸坐須氣吹戸主止云神根國底之國爾氣吹放氏牟如此久氣吹放氏波根國底之國爾坐速佐須良比咩止云神持佐須良比失氏牟と有る瀬織津比咩即禍津日神也速開都比咩即伊豆能賣神なり氣吹戸主即直毘神なり　共に此御禊の時に生坐る神等にて罪汚を祓給ふ功の能此の傳に符へるを速佐須良比咩神耳は古事記書紀共に此の傳に無き神なるは傳漏したる事疑無き者なり○今云此説實に然る言なり其は同じ祓處神等の中に速佐須良比咩神一柱の後れて成給ふ可き理無ければ古事記に於中瀬墮迦豆伎而滌時所成坐神名八十禍津日神次大禍津日神云々次爲直其禍而所成神名神直毘神次大直毘神次伊豆能賣神と有る此次に有る可きを傳へ漏せりし事著し是を以て師の古史成文には伊豆能賣神より續けて次洗給御鼻之時成坐之神名速佐須良比咩神と記して上の大禍津日神より計へて凡四神矣と云終られたるは甚能當れり　若て二典共に天照大御神の生坐して後に御鼻を洗給ふ時に速須佐之男命の生坐ると傳たれど此は實の旨に符ざる誤の傳なりかし然るは鼻は萬の汚惡の先入る所の汚濁の出る所なるに御鼻より受給へる汚濁を未去給はぬ前に大御神の生坐ると爲ては符はずなむ○今云本には大御神の御親撞賢木嚴之御魂と御名告坐るに符はずなむ」と有るを如此く改引るは撞賢木云々の御名告は大御神の荒御魂の御事なるを思誤られたる者なり又古史正文に此を大御神の大御名と爲られたるは大なる僻事にて甚々畏くなむ思ゆる　然れば古事記書紀に御鼻を洗給ふ時に速須佐之男命の生坐ると傳たるは速佐須良比咩神の生坐る傳を誤れるなる事炳く其正しき傳の御鎮座傳記に存れるは甚も歡ばしく此上無き賜物になむ有ける以上採要と有は千古の發明にて再神代に世は立復るとも此説は更るまじく思えたれば從ひつ皇大神宮儀式帳に大土神社一處稱國生神兒大國玉命次水佐々良比古命佐々良比賣命形石坐と有て大國玉命の相殿に此二柱神の並在せるは傳記に速佐須良比賣神與素戔嗚尊合力座給也と有るに叶へり水佐々良比古命の須佐之男命ならむと思ふ由は出雲日御崎社記にも御名を八束髮速佐須良命と申にても炳かりけり然るは速佐須良比咩神は本より罪穢を根國底國に流離へ亡なふ神に在せるが彼天上にて千座置戸の解除を負せられし時に此神須佐之男命に在ゆる罪咎を流離へ給吾御心須賀々々斯と云計りに清く成し奉給ひて顯國の御功をも令建め奉給へるが故に御力を合せ坐とは云るなるを上に引る萬葉歌に在天左佐羅能小野之云々又天爾有哉神樂能小野爾云々と有るを以ても其理を思ふ可き者なり　後に須佐之男命根國底之國に入坐し即月夜見國の分出て大地に因准ひ大空を行巡る事と成れりしかば其大神の御靈も月讀命と分れ幸行るが元來天上にての解除に流離はれたると根國に就

坐る直に月球の流離へ分出たるとに依て月の異名を萬葉に山葉左佐良衣壯子と詠る注に或曰月別名云ニ佐散良衣壯士ニ也と有るも月の別名には非ず實には月神の別名にて有るなり但上に引る左佐羅能小野また神樂良能小野など有るは月の事ならず高天原にて御禊祓ひ爲給へりし處名にて根國に流離はれ給ふ始に事有りし處なり然れども罪咎の歸り赴く處は月國に非ず大地の胎中なる根國底之國なる事此詞の趣に依て明亮なり月國は然る禍々しき域ならず須佐之男命の天上の禊祓に淸まり給へる其徵信に依て黄泉國に幸行る直に別去て月國とは成れりと思えたり抑月國の出來始の事を先師も種々に云れたれど他を顧られず直ちに其事に耳心を留められたる故に徵す可き明文をば得られずて其極りは暗推に落る事なるぞ如此く此より彼に運び彼より此に按る時は事實は其中より生れ出る者ぞかし是我が神典の洪大なる所にして世と共に說な爲すとも世と共に盡ざる所以也〇持佐須良比失氐牟持は解除する罪穢の事を取持にて上の例なり倩佐須良比は一處に至り留るには非ず何處にか又其根國底之國の內にて分散し盡るなり此を以て失氐牟とは云り源氏須磨卷に海に坐神の助けに懸らずば鹽の八百會に佐須良へなまし」と有るは此祓事に本就て詠るなり崇神天皇六年御紀に百姓流離或有ニ背叛者ニと有るも百姓の其產地に安居せずして四方に分散するを云り通證に流離出ニ詩召南ニ註に飄散也と有は然る言なり後釋に佐須良比失ふは行方も知らにする成て亡ひ給ふを云なり但此と彼流離とは自他の違有るを此祝詞は古文なれば此を正しと爲べし」と云れたる行方も知られず亡なひ給ふにては其義を未盡ざるなり又此詞なるも彼流離も自他の違に於て有べからず然るは此詞に佐須良波須など有はこそ有め佐須良比と云に自然と分散し失るゝを云り又神功皇后御紀六十二年條下細書に兄弟人民皆爲流沈と有るも上の流離に異らず顯宗天皇元年御紀に老嫗伶俜羸弱不レ便ニ行步ニ宜張レ繩引絙扶而出入と見えたる伶俜を字書に行不レ正也と有る如く行步する時に左右前後に倒るゝ狀なるを云なり然れば此亦分散の意を離れざるなり物を撫るを佐須流と云も此類語なり續後撰集に何と無く明ぬ暮ぬと佐須良比て然も徒然に往く月日哉」と詠るは不意に光陰の過る事を云るにて此の例なり若菜卷下に物速無き世に流離るやうにて」と有るも取留たる所無き由なり此等を合せて思ふに佐須良とは的當の處有て其を指て行く意なるが佐須良比と云ふ時は其往く處に行到りて其より何處にか分散爲る由の語なりけり金葉集に送りては歸れと思ひし魂しひの行佐須良比て今朝は無き哉と詠るなども思ふ可し此を以て見るに速佐須良比咩神の根國底之國に其罪穢を唯に抑し給ふ耳には有べからず決めて其國に至て後に其罪穢の何處にか分散亡失する道有る事と思えたり如何にも然有ずては顯國より祓却ふ所の某罪某穢と遣れらむには此方に亡ても彼方に存ては眞に失たるに非ざるを彼國にて跡形も無く成竟るに依てこそ眞の淸まりには至る

事なりけれ此處に至て上には未盡と云りし後釋の佐須良比失氐牟は行方も知られず成して亡なひ給ふなり」の說なむ熟符へりける此なむ解除の妙に奇しき所謂なりける　但同書に此佐須良比咩は須勢理毘賣にて云々偖總て世中の凶事は其始黃泉國より起るを其夫大國主神の禍事に依て黃泉國に至坐るは其禍事の始の黃泉國に還れるにて祓の趣も同じ偖其を須勢理毘賣命の佐須良比失ひて功を令建給へる此等の次第彼黃泉段御禊段より大國主神の黃泉國に至り顯國に返り給ひて功を建給へる迄の神代の段々を引合せ見て祓の旨の妙なる事を曉る可し」と有れども此祓の事を須勢理毘賣神に係て種々云れたるは悉く強說なり依る可きに非ず　又後釋に云く考に右の神等の御名の古書に見えざるに就て云れたる說は精しからず　○今云考に此瀨織津比咩氣吹戶主速佐須良比咩などと云ふ神の御名は物に見えざれども處として神の坐ぬ處無く功として神の爲給はぬ意を得て其處其功に依て斯く號け申せるぞ古意を得たる文なる文と云物な意得ぬ人種々惑へる說有るなり」と有を論はれたるなり此は賀茂翁とも思えぬ僻事なりけり　處として神の坐ぬ處無く功として神の成し給はぬ功無きは是各其神在すなれば其神は何れの神と考の及ぶ限りは尋ねずは有べからず既に速開都比咩神は古事記にも書紀にも見えたる神に非ずや此に准へて餘の三柱神も唯後に名を設たる耳には非ず必慥に神代の書に見えたる神等なる可き事を曉る可し　○今云此は漢籍に精義入神と有る如く精義の神に入たる此大人ならぬ人の得も云出ましき事なり戴尊む可し　總て古の文に意を得て書く人の新に神名を造り云る事且て無し若然ら有ば中々に古意を得ざる後世人の例の漢心の賢しら文にとそ有れ總て此段は然

等閑に見べき事には非ず」と有るぞ謂れたる說なりける

如此久失氐波天皇我朝廷爾仕奉留官官人等乎始氐天下四方波自今日始氐罪止云布罪波不在止高天原爾耳振立聞物止馬牽立氐今年六月晦日夕日之降乃大祓爾祓給比淸給事乎諸聞食止宣四國卜部等大川道爾持退出氐祓却止宣

如此久失氐波以下云々を宮主秘事口傳抄の傍書に私不讀私には遺罪波不在止祓給淸奉云々と申すは其頭より云換たるなり偖此より以下は首に集侍云々より照合せて宣命なるを伯家本神宮本など其餘の私本共に如此失氐波遺流罪波不在止祓比淸流牟事乎天津神國津神八百萬乃神達仁平久安久聞食止世申と云換て祝詞と成たり勿論此も已に云る如く神に祓事を令白給ふ祝詞を宣命と成して詔ごち敎授させ給ふなれば前後の宣命を省きて神に申す事は古式の遺れるなり　次なる自今日始氐の下に朝野群載を引て云るを見る可し鈴屋大人の此詞を直に天津祝詞乃太祝詞事と見られたるも麁けれど平田翁の天津祝詞は別に在れば此詞は神に白す祝詞に非ずと云れたるも共に麁し天津祝詞は別に在て唱ふ可きは勿論なれども此詞をも神語と云て共に祓を爲る事の由を神に申述るなり　○天皇我朝廷爾仕奉留官々乃人等乎始氐

天下四方波爾は此詞の首なる宣命に天皇朝廷爾仕奉留云々官官爾仕奉留人等乃云々と有る結なるが中釋祝詞に皇御孫之命乃朝廷乎始氐天下四方國波爾よりも合せて受たる事云も更なり但彼と此とは同じくして大に運びに殊なる事共有り其下に云るを見合す可し（或問如此く祝詞より受たりと云を以て見れば其差異無くして共に祝詞とか宣命とか一聯の文なる可し如何公式令なる詔書式に依るに天皇とは宣命に稱する所にて祝詞に然稱せる事古文には絶て無く春日祭平野祭事の如く今京以來の小耳稀に有るを思ふ可し尚儀制令には天子祭祀所稱と有る天子は天神の御子と訓べきならむか義解に謂告于神祇稱天子云々至風俗云々別不依文字假如皇御孫命及須明樂美御德之類也と有り猶此宣命には右の例共に依て天皇朝廷爾と云ひ祝詞には皇御孫命と有る此等の事を能く思はゞ其差異正しく見ゆらむ物ぞと答たれば點き止ぬ）此は此六月十二月の大祓に祓はせ給へば其事に預り仕奉る官人は更なり天下四方國の人民の罪穢も悉く淨まはり改まるを云るは然る物にて此時には預らざるも右の如く天津宮事を取行ひ祓事を物爲むには上下貴賤の差別無く功驗有る趣を幽に含めたる者なり（心を着て其餘韻を探索む可し）○自今日始氐は大祓を爲させ給ふ六月十二月晦日の今日なり後釋に自今日始氐と云より下朝野群載に載せたるには自今以後遺罪止云罪咎止云咎八不有止祓給比淸給事乎祓戶乃八百萬乃御神達八佐乎志加乃八御耳乎振立氐聞食止申と有り」と云れたるは今本の中臣祓詞とて有るには大旨如此く換たるは已にも云る如く宣命を離れて讀む時は祝詞なり必神に向ひて申さむには如此く云終む可き者なり（伯家本神宮本などを思ふ可し朝廷にて物爲させ給ふと私に祓事を行ふと此計りの差異の決て有べき等なり上件宣命と祝詞とも差別立さる間は此大祓詞を解得に事難き者ぞ）偖祓戶乃八百萬乃御神達と有るも如何なる云樣なるが如くなれども天津神波云々所聞食武國津神波云々所聞食武と有る其總ての結に熟符へり（其は將然を云ると已然を云ふとの別なる者なり）上田百樹說に紫式部日記は陰陽師等世に在る限り召て八百萬神も耳振立ぬは非じ云々平家物語に嘉應元年比叡山の僧共が表白の辭とて記せるにも七社の御神等佐乎鹿の耳振立て聞給へと有るも件文を思ひて作れるなり偖佐乎志加乃八御耳乎振立天の文式には高天原爾耳振立聞物止馬牽立氐と有るを正しと爲て佐乎志加乃云々と云る事を非ぬ僻事にて云ふも足ぬ如く先師等の云れたるは偏なり但八御耳とは神等の耳聰きを稱申せるなる可し」と云るは然る言なり然れは佐乎志加乃のナスは如の義なり（此に就て思ふに彼大山津見神の子足摩乳手摩乳神の亦名を稻田宮主簀狹之八箇耳神と稱給へる簀狹は忌部正通說に俗後習云ニ須々ー狹須音通と有るは然る事にて眞暢（スサ）の義なる可し此に八箇耳と有る若くは此神は鹿神には非ざるか古事記に正鹿山津見神とも有ればなり但古事記に簀狹と爲るは地名にて近き言ながら別なり）○罪止云布罪波不在止後釋に云く不在止祓給比淸給事乎と次の語

共を隔て續く詞なり偖上に皇御孫之命乃朝廷乎始氐云々罪止云布罪波不在止と云ひ又次に云々事之如久遺罪波不在止と云て又此にも如此云るは同じ事の徒に重なりて拙きが如くなれど是古文の常に為て能く語の條理を正して見れば拙からず條理能貫通て聞ゆるなり總て同じ詞の重なるには一字にても拙く成る事も有れど又狀に依ては何つ重復りても宜しきを今人は勉めて同し詞を重ねじ搆ふる故に中々に拙くなる事多し（中昔の文にも殊に伊勢物語などには殊更に同詞を何つも重ねて句カと為る事も多きぞかし）○高天原爾耳振立聞物止此なるは後釋に殿造りを云とて高天原爾千木高知と云と同意にて唯高くと云ふ事なり必しも高天原迄至る由には非す（此言を高天原に坐神等に聞食せと云意なりと云說は甚拙し）牽立氐祓給比と續く辭なり」と云れたるが如し然有ども上より云下して此事に至る文を括りて思ふに高天原爾耳振立聞物止は此解除する事を天津神の天の八重雲を推別け國津神は山の伊穗理を搔別て聞食し納るゝ由をぞ云るなる可き然れば上には所聞食武と將來の事に係て云るは天津宮事の祓式を宣る中間なるが故に然云るを此に至りては其を皆がらに宣畢る所なれは如此くして聞食す物ぞと云るにて次なる諸

聞食止宣へは且ても拘はらぬ文なり（然れど聞食せと神に申すには非ず神の聞食す形狀を云る者なり）然れば馬を牽立る事は祓に馬を出す事の有る其を表物として言を成せる者なり（猶次に云るを見合す可し）○馬牽立氐考に馬は耳疾き獸なる故に天津神國津神の此申す祓詞を速く聞食すに譬へて祓物と為るなり出雲國造神賀詞にも馬を獻る事を白御馬能前足爪後足爪蹈立事波云々振立流事波耳能彌高爾天下乎所知食左牟事志太米と云るを以て知べし」と有るは然る言なり（但頭書に後世本に此を佐乎志加乃八御耳乎振立と云るは僻事なり」と云たれど大祓には馬を牽るゝに依てこそ馬を以て云れ然無き時には鹿を以て譬へむに何か苦しからむ）偖解除に馬を牽く事は神祇令に凡諸國須二大祓一者國造出二馬一匹一云々と有るを已に天武天皇御紀に五年八月詔曰四方為二大解除一用物則國造輸二祓柱馬一匹一云々と有れは其頭の御定かと思ふに然らず古き事也（但御紀の祓柱の中に鹿皮一張と有る此等を思渡すに祓物に用ふる所の馬或は鹿を以其物の用を云るなり國造神賀詞に其物々に依て祝言を為せる例有を思へ）雄略天皇御紀に十三年春三月狹穗彥玄孫齒田根命竊姧二采女山邊小島子一天皇聞以二齒田根命一收二付於物部目大連一而使二責讓一齒田根命以二馬八匹大刀八口一祓二除罪過一既而歌曰云々と有るは古より祓柱に出せりし例を以て馬を令出給ひし者なり（孝德天皇御紀に牝馬孕二於己家一使使二祓除一遂奪二其馬一云々などの事は惡行には違ひ無き物から古祓柱に馬を出せ）

りしを以てなり四時祭式六月晦日大祓十二月准レ此條に馬六匹を祓柱の中に載られ儀式大祓儀には其日午四尅神祇宮内縫殿等官省寮候ニ延政門外ニ百官會ニ集祓處ニ先レ此神祇官陳ニ祓物於朱雀前路南ニと有る細書に分ニ置六處ニ但馬在ニ南方ニ北向と見えたり江次第には馬六匹牽ニ立朱雀門橋上ニ云々御贖物持來祓馬牽立畢と有り倭他祓柱は大川道に持出て流すを馬は唯神等の耳聰く聞食む表物として出す所なれば祓事畢て後に馬寮に収らるゝなる可し○今年六月晦日夕日之降乃大祓爾は十二月には十二月晦日と當月名を稱ふ例なり臨時に行はるゝ時には又各其月其日を入らる可きなり夕日之降乃儀式に其日午四尅と有れは其より祓の設を爲始め祭式に右晦日申時以前親王以下百官會ニ集朱雀門ニと有る此を大らかに云るなり江次第には酉尅諸司會集と有り時世に依て遲速の異り有るなり酉の字を或云未尅の細注有り後釋に夕日之降とは夕方を云ふ降は久陀知と訓む古言なり○今云前漢賈誼傳に庚子日斜服集ニ余舍ニと有る斜服を久陀知那流登伎爾と訓るは夕方の事を古く久陀知と云證なり朝に爲る事には朝日之豐榮登爾と云ふ朝夕の事を如此云は古の雅言なり」と云れたり○祓給比清給事乎は六月十二月晦日の大祓に天下の人々の罪穢を朝廷にて祓はせ給ふを云なり倭後釋に此は上に自今日始氏罪止云布罪者不在止と有る其より語を隔て續けるなりと云れたるは然

る言なる者なり○諸聞食止宣後釋に云く諸とは始に集侍親王云々等諸と有る諸を指なり宣とは中臣自云なる事始と同じ○考に云く此にて祓詞終に此に至て百官稱唯○四國卜部等云々後釋に此一段は祓詞宣訖て別に卜部に仰する詞なり此をも引續けて中臣の宣なり」と有り考に云く卜部は解除の事を取なれば祓詞畢て後其祓柱を川邊に持出て流し抑れと仰給ふなり倭式の今本には四國を四毛國と作て毛ノ字衍れり眞に四方ならむには上に四方之國中とも天下四方國とも天下四方とも有れば其例に記さる可きを然らぬは後人の僻事せるなる可れは宮主秘事口傳抄に四國と有るを據として省きつ後釋に四毛國と有る毛の字は後世人の生挍意に加へたる者なり四方國ならむには唯に四方とも四面とも書こそ古書の例なれ毛字を書る例も無く甚拙き事なり」と有るは然る言なり考に卜部は職員令神祇官ノ下に卜部二十人と見え延喜臨時祭式に取ニ三國卜部優長者ニ伊豆五人壹岐五人對馬十人と有り此神祇官の卜部なり員も令式等し」と有るを後釋にも諾はれて考に云れたる如く三國よりこそ出れ諸國より出たる事無し然れば此は四國にて四箇國の卜部なり四時祭式大祓御贖條に召ニ中臣ニ稱唯率ニ文部四國卜部ニ入○今云儀式なる御贖儀にも此文有て小注に宮主在ニ其中ニと有り臨時祭式に凡宮主取ニ卜部堪レ事者ニ任レ之と有れば此詞の四國卜部の中に宮主をも收て宣らせる所也宮内省式に四國乃卜部等云々台記ノ別記大嘗會中臣壽詞にも四國卜部等云々など有るを以

て知べし然るにては伊豆壹岐對馬に今一國は何れぞと云に京を加へて云なる可し臨時祭式に其卜部取ニ三國一云々若取ニ在レ都之人一者自レ非ニ卜術絶群一不レ得ニ輙充一此にて在京の卜部も有る事を知べし（京ならば國とは云べからざる例なれども三國並在京卜部など云むは煩はしければ三國に合せて四國とは云なる可し）と有るぞ熟思得られたりける○大川道（爾）後釋に云く川道とは祓物を流し棄て海原へ遣るに川は其道なる故に殊に道とは云るなり偖此流し遣る川は其時々の京に依て何れの川にても有へし今京にては鴨川へぞ流しけむ○持退出（氏）は御贖儀及祭式御贖條に中臣捧ニ御麻一進就レ版勅曰參來稱唯就ニ階下一中臣女於ニ殿上一轉取供奉訖授ニ中臣一還ニ本處一即授ニ卜部一一人令レ向ニ祓所一また次中臣率ニ宮主卜部一執ニ荒世一者就ニ階下一置ニ於席上一宮主執ニ荒世一授ニ中臣一々々取授ニ中臣女一即執ニ㬪御體一總五度訖宮主取祝訖授ニ後取卜部一また宮主取レ坩授ニ中臣一々々轉授ニ中臣女一執奉レ御訖退授ニ中臣一轉授ニ宮主一々々取祝訖授ニ後取卜部一また次中臣引ニ和世一進退如ニ荒世儀一云々訖退出解ニ除河上一と有る此を云なり然るは天皇の御贖物の御麻（所謂天津菅曾なり）荒世和世（所謂十座置座の物なり）御坩（天皇の御氣息なり）の四の祓柱を其御贖の儀式畢て祓所へ持出るなり（若くは其祓處は大祓の處なる事云も更なり儀式に訖皆退出解除河上と有るは御贖の事竟て大祓處に至るを云り）○祓却止宣は後釋に神祇令に卜部爲ニ解除一と有る是なり」と有るが如し宣は中臣の宣なり右に引る御贖儀に中臣授ニ卜部一と所々に見えたる其なり（神祇令に中臣讀ニ祓詞一卜部爲ニ解除一と有るを見合せて考ふ可くなむ）斯れば大祓の事竟て後に其祓柱を大川道に掃ひ却となる事云も更なり又後釋に此段は初なる集侍親王云々の段と共に二季の大祓の定まりし時に加られたる事論無し」と見えたり然れども二季の大祓に定られしも甚古き事にし有れば其時世々々の語なりけむを年序を經て終に如此くなり來ぬる者なり然れば稀に中古の詞の交れりとて其を以て強べきに非ず委しくは已に云り

○東文忌寸部（ヤマトノフミノイミキベ）獻ニ横刀一時呪（ノタテマツルタチトキノシュ）西文部（カフチノフミベ）准レ之（ナラフコレニ）

考に學令義解を引て云く東西史部（謂居在ニ皇城左右一故曰ニ東西一也前代以來奕世繼業或爲ニ史官或博士一因以賜レ姓總謂ニ之史一也）と有る此皇城は大和の皇居にて云ふ東西とは東なるは大和國西なるは河内國に居ぬ故東西史を大和河内の文人と唱ふめり」と見えたり○東文忌寸應神天皇御紀に倭漢直祖阿知使主其子都加使主並率ニ己之黨類十七縣一而來歸焉と有る此が子孫

なり（古語拾遺にも至於輕島豐明朝云々漢直祖阿知使主率十七縣民而來と焉と有り阿智使主は三代實錄に後漢孝靈皇帝四代孫阿智使主と見え桓武天皇御紀には阿智王後漢靈帝之曾孫とも見えたり又光仁天皇御紀に阿智使主輕し豐明宮馭宇天皇御宇率十七縣人夫歸化詔賜十前村而居焉凡高市郡內者檜前忌寸及十七縣人夫滿地而居他姓者十而一二焉と有て甚く其末蕃息れりしなり都加使主は其子なり雄略天皇御紀に東漢直掬と有る人也姓氏錄に坂上大宿禰後漢靈帝男延王之後也と見えて此首にも坂上大宿禰と祖都賀直と云事往々見えたり）古語拾遺に至於後磐余稚櫻朝三韓貢獻奕世無絶齋藏之傍更建內藏分收官物仍令阿知使主與百濟博士王仁記其出納始更定藏部と有る此漸く異域者を史部に使はせ給ふ始なり御紀に四年秋八月辛卯朔戊戌始之於諸國置國史記言事達四方志と有るを以て其頃の狀知る可し（此方には言事を記さるゝ事無りしかば彼等が世に用られたる事如此し但此樣よりぞ人漸く古を疑ふに至れりける）天武天皇御紀に倭漢直河內漢直賜姓曰連又曰忌寸と見えたるを桓武天皇御紀には文忌寸元有二家東文稱直西文稱首と見え神祇令に直と首を東西に分てり又姓氏錄に文忌寸坂上大宿禰同祖都賀直之後也と有（然れば天武天皇の御世迄は中西に姓の異有し者なり御紀に倭漢直と記させ給へるは不審し天武天皇御世より忌寸の姓に改れりしを思ふに舊本の任に直姓とは爲されしなり倭考頭書に此を百濟より貢せし阿直岐か末なりと云れたるは阿知使主と言近きを以て思誤られたる者なり）○西文部は應神天皇御紀に遣上毛野君祖荒田別巫別於百濟仍徵王仁也と有て所謂王仁者是書首等之始祖也と見えたる其なり古事記には和邇吉師と有り偖此を古語拾遺に百濟王貢王仁是河內文首始祖と見ゆ其出自は桓武天皇御紀に文忌寸最弟等言漢高帝之後曰鸞鸞之後王狗轉至百濟國久素王時聖朝遣使徵召文人久素王即以狗孫王仁貢焉と有り姓氏錄（左京諸蕃上漢）に文宿禰出漢高皇帝之孫鸞王也また文忌寸文宿禰同祖宇爾古首之後也と有る此なり（但上に出たる左京諸蕃上漢の文忌寸とは別なり彼は東漢直なるなり偖高皇帝と云るは前漢の酋長の始祖なる高祖と云る王を云るなり）○献横刀時咒は考に神祇令に凡六月十二月晦日大祓東西文部（謂東漢文直西漢文首）上祓刀讀祓詞（謂文部漢音所讀者也）訖百官男女聚集祓所中臣宣祓詞卜部爲解除今日の晩に先天皇の大御身に荒世和世の御服を奉り大御身の長を量り御幣を撫坐など中臣又中臣女仕奉りぬ偖文部御庭に參て刀と人形を奉りて漢音の咒を申す事終て百官の大祓は有なり」と云れたるが如くなるが此は何れの御世より斯く初けむ其始詳ならされども漢家に古くより用ひ來る所を傳へて東西文氏此を私に行ひつらむを已に拾遺を引る如く履仲天皇御世より彼二氏內藏の出納を掌り又雄略天皇御世に至りて其事良盛に成て內藏大藏の簿を勘錄す事にて在しかは其勢はた大きく成つらむ故に何時と無く彼が私事の混込て朝廷の公

事の様には成れるなる可し（顯宗天皇三年御紀に三月上巳幸ニ後苑ニ曲水宴と有る此等も彼二氏より傳申て、令行め奉れりしならむ此は彼國の禊なり字書に禊の字は除惡祭名三月上巳臨レ水祓ニ除不祥ニ也と註せる如くなるを此にも擬はせ給へり）又拾遺に天武天皇に八等の姓を定られし事を記されし中に其四曰ニ忌寸ニ云々の細書に蓋與ニ齋部ニ共預ニ齋藏事ニ因以爲レ姓也今東西文氏獻ニ祓大刀ニ蓋亦此之緣と有るを思ふに其より既く有し事決し是を以て考るに齋部氏と共に齋藏の事を預仕奉れりし程彼氏には古昔より幣帛を奉る職有て歷世に仕奉れるを羨みて漢家の故事を以て品能く朝廷に諫申せる成可し然れども天上より傳來る天津宮事を後の天皇の御心として改易さへ給ひ難く又彼が望請ふも默止難く所思せるが故に唯其御贖の儀式の中間に狹み行はれしなり所以に觸穢諒闇の時と雖も大祓に抱はらず行ふ事と見えて大寶二年十二月御紀に廢ニ大祓ニ但東西文部解除如レ常と有るは此月太上天皇崩御し故に停められたゞなるに文部の解除耳は諱ざるを見るに如此く馴來る事ながら受張たる公事に非るが故なり（然れば彼は彼此は此にて大祓の因に依てこそ行はるめれ素より別なるなり考頭書に彼は漢土の流にて神事に有ざれば諒闇の科にも爲されしなりしと云れたるは然る言ながら委しからず）然れども此文中に在る事は漢語を以て云るにこそ有れ其僻事と云には非ず我が古傳に合せ說を見る可し

謹請皇天上帝三極大君日月星辰八方諸神司命司籍左東王父右西王母五方五帝四時四氣

皇天上帝とは我が古典に皇祖天神と記されたるが如く一神を指定て申せるには非ず汎く上天の主宰を申せるなり然れば上皇太一（亦云上上太一亦云東皇太一亦云太一）盤古眞王（所謂元始天尊太元聖母二神也）天皇太帝（亦名無極太上大道君）等を指るなり皇國にも古く此名を用て皇祖天神に當たり其は古語拾遺（神武天皇段）に爰仰從ニ皇天二祖之詔ニまた立ニ靈畤於鳥見山中ニ云々祀ニ皇天ニと見え神武天皇御紀に頼ニ以皇天之威ニと記され桓武天皇御紀に六年十一月甲寅祀ニ天神於交野ニと有る其祭文に告ニ于皇天上帝ニと見え文德天皇實錄の策命にも昊天祭と云事有り此等は古書に天津神と申せるに配たる字共なり（又日本後紀延暦二十四年二月に神託有し石上大神の御言に唱ニ天下諸神ニ勸レ請ニ天帝ニ耳とも有り偖此等は師說有て委しきを約め記せるなり）偖上皇太一とは師の見出られたる老子に有レ物混成先ニ天地ニ生寂兮寥兮獨立而不レ改周行而不レ殆以爲ニ天下母ニまた道之爲レ物惟怳惟惚惚兮怳兮其中有レ象怳兮惚兮其中有レ物窈兮冥兮其中有レ精其精甚眞其中有レ信と有る道と云

ひ物と云ひ象と云ひ精と云ひ眞と云ひ信と云る太一の神にて我が天之御中主神に坐り若て其常居（カムツマリトコロ）は考に引れたる史記（天官書）に中宮天極星其一之明者太一常居と有るにて著し（倚委しくは赤縣太古傳を見て知べし此には唯一端を漏せる也下傚此春秋元命苞に中宮天極星其一明者太一常居也故爲二北辰一亦爲二紫微宮一天神圖法陰陽開閉皆在二此中一宜レ氣立レ精爲二神垣一也とも見えたり）盤古眞王は三五暦紀に盤古氏夫妻陰陽之始也と傳へて元氣の神なり葛洪枕中書に昔二儀未レ分溟涬鴻濛未レ有二成形一混沌玄黃已有二盤古眞人一天地之精自號二元始天王一遊二乎其中一玄々大空無レ響無レ聲元氣浩々二儀始分云々元始天王在二天中心之上一名曰二玉京山一云々復忽生二太元玉女一云々號曰二太元聖母一元始君下遊見レ之乃與通レ氣結レ精招還二上宮一太元聖母生二天皇一後生二地皇一地皇生二人皇一と見え名義は太元眞一經に無宗無上而獨能爲二萬物之始一故名二元始一運道一切爲二極尊一而常處二一清一出二諸天上一故稱二天尊一也と有る其なり而して此は我が高皇產靈神皇產靈神に御在せり（又隋書經籍志に道經者云元始天尊生二於太元之先一稟二自然之氣一冲虛凝遠莫レ知二其極一矣とも見えたり倚其所在の玉京山は紫微宮を云るなり）天皇太帝は春秋命歷序に天地初立溟涬始芽鴻濛滋萌歲起二甲寅一元氣肇啓有二天皇氏一云々號曰二天靈一以二木德一王萬八千歲と有て地皇氏の夫人皇氏の父なり

五行大義に天地初起即生二天皇一以二木德一王治二紫微宮一爲二天皇太帝一本秉二萬神圖一五帝之尊祖也と見え老子中經に無極太上大道君者皇天上帝北辰中央星也と有り此は神典なる伊邪那岐大神に坐り治二紫微宮一とは神代紀に伊弉諾尊功既至矣德亦大矣於是登レ天報命仍留二宅於日之少宮一矣と有る此なり日之少宮即天極紫微宮なる事予詳說有り（倚天皇氏に並びて地皇氏有り其は伊邪那美命に坐り其子人皇氏は須佐之男神なり此等の事師說に委し其迄師の太古傳より抄錄せるなり予說有れと然耳は得說さず）○三極大君は三台星を云なり考に引れたる史記（天官書）に中宮天極星其一明者太一之常居也云々旁三星三公と有る正義に三公三星云々爲二大尉司徒司空之象一主レ燮二理陰陽一主レ佐二機務一云々と有る此なり（此文前漢天文志にも出たるか春秋合誠圖及春秋元命苞にも同文有り其に出たるなり）又太微垣にも三台星有り史記（天官書）前漢書（天文志）に魁下六星兩々相比者名曰二三能（サンダイ）一と有るを晉書（天文志）に三台六星兩々相居起文昌列抵二太微一一曰二天柱一三公之位也在レ人曰二三公一在レ天曰二三台一開レ德宣レ符也西近二文昌一二星曰二上台一爲二司命一主レ壽次二星曰二中台一爲二司中一主二宗室一東二星曰二下台一爲二司祿一主レ兵所二以昭レ德塞一レ違也又曰三台爲二天階一太一躡以上下一曰二泰階一上階上星爲二天子一下星爲二女主一

中階上星爲諸侯三公下星爲卿大夫下階上星爲士下星爲庶人所以和陰陽而理萬物也と有り但此は漢書應劭注に引る黄帝泰階六符經に依れる説なり倍三台は天の三公なれば一なる可きを紫微にも大微にも有るは如何なれど由有る事なり紫微の中垣にて宮寢位なり大微は上垣にて朝廷位なり天市は下垣にて明堂位なり然れば紫微宮寢には天帝此に息て常居給ひ太微朝廷には天帝臨て政を聽給ひ天市明堂には天帝行幸して省察し給ふ事にて各別ならずと雖も本末有るが故なり但此等の事は赤縣人の杜撰に成たるらむも知べからねば大凡に心得べし

○日月星辰の日は師説に毛詩大雅に皇矣上帝臨下有赫監觀四方大戴禮に皇々上天照臨下土庶物群生各得其所說卦傳に帝出乎震齊乎巽相見乎離云々 尙書正義に尸子云 天高明然後能燭臨萬物云々など云る上帝上天帝天皆正に天日を謂へり尙易偉書緯などに孔子曰帝者天稱也など云るをも思合せて辨ふ可し」と有るが如く易說卦に乾爲天と云ひ其象に日有り帝有り大象に天行乾君子以自彊不息と有る天の日より 其神は天照大御神 に在す事云も更なり 又師説に說文に皇煌也帝諦也と注して共に照明なる義なり」と云れたるも然る事にて皇字を須賣と訓る此は大御神の上天を統御す由を以て稱申す語なるを其天津日繼と坐す天皇に稱奉るに義粗合り 月は大地に屬くの謂なり神典に依るに須佐之男命と月讀命と同神たればば其神は人皇氏に御在る事云も更也春秋命歷序に人皇九頭乘雲祇車駕六提羽而出谷口一曰暘谷分九河依山川土地之勢裁度爲九州謂之九囿各居其一因是而區別各三千三百歲と有る此なり斯在は此國に在る事三千三百歲にして月國には到坐るなり師說の誣ざる事をも亦思ふ可き者ぞ 星は火氣なり火氣の凝結せる者と見えたり赤縣の古說に星日之餘也と云るは眞に然る可し倍日輪天の中央に在り大地及五星此に因循て轉巡る其最頂は天極なり此を地極と云ふ最天の中宮なれとも大地より望みて北方に正當れゝばなり太一此に常居す太一を去事凡三十六度以下に周圍の徑七十二度の處を紫微垣と云ひ其垣內に紫微宮有り枕中書に玉京山と稱る此垣內なり翼軫の間に當て十餘星列座せる所を大微垣と云ふ房心の間に當て二十餘星列座せるを天市垣と云ふ垣とは一郭の義にて群星の見れたる一郭の謂なり四維とて二十八宿其外に遶る東は角亢氐房心尾箕の七星なり南は斗牛女虛危室壁の七星なり西は奎婁胃卯畢觜參の七星なり北は井鬼柳星張翼軫の七星なり如此く其稱有りと雖も此方より號たる所にて古傳有て存するに非れば唯に星神と思てぞ有べき 但神代紀に星神香々背男と有るは恒星に非ず緯星の內なる火星の神なり因に云ふ緯星とは水星金星火星木星土星などの如く天日を中心として旋轉る星にて暫く恒星を經とし其に對て云なり星の字說文に萬物之精上爲列星从晶生聲と見え釋名に星散也列位布散也と見えたり倍萬葉十九に天爾波母五百都綱波布萬代爾國所知牟等五百都々奈波布と詠るは此星の羅列れる

を云辰は時なり書洪範に五紀四曰二星辰一と有る傳に二十八宿迭見以叙二節氣一と有る其を云なり●釋名に辰伸也物皆伸舒而出也と有る伸と同じく星宿の旋轉して辰(トキ)有るを云ふ○八方諸神の八方は方位に抱はりて云には非す在りと在ゆる群神を摠稱るにて我が八百萬神とも八十萬神とも云に似たり神ノ字說文に引二出萬物一者也从レ示申色と有る申また神の本字にて及手自持せる象形也と見ゆ此事常に多く云事なれば委しく注さず○司命司籍考に天官書に云々四曰二司命一六曰二司錄一索隱に司錄賞レ功進レ士司命主二災咎一と有り星經に司命司錄司危司非各二星云々右各主天下壽命爵錄安泰危敗是非之事一と有る司命は天下壽命司錄は爵錄安泰司危は危敗司非は是非を判つの天官なり又前に引る晉書天文志なる大微垣三台の上台爲二司命一主レ壽下台爲二司錄一主レ兵所二以照レ德塞レ違也と有る此は上天にて司命司錄を主宰せる處なるか大地に亦其幽宮有り漢武內傳に三天太上大道君於二方丈之州一治二理命之宮一と有て其を十州記には方丈州在二東海中心一云々三天司命所治之處群仙未レ欲二昇天一者皆往二此州一受二太上玄生籙一云々と見ゆ師說に東海中心と云るは決く淡路島に當れり理命司命共に同じ事にて人の性命を主り給ふなりと有り神代紀に伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是以搆二幽宮於淡路之洲一寂然長隱者矣

と有て此幽宮より昇して復命し給ひ日之少宮に留給ふと有るに熟符へり然れば師の字鏡に祇以レ豚祀二司命一也宇牟須比萬豆利と有るは伊邪那岐命の司命と坐す御靈を祀るなりと云れたる說なり但神祇官八神の中なる生魂神足魂神玉留魂神を當られたるは委しからず此は卷一新年第三詞の下に云り祇の字說文に以レ豚祀二司命一漢律曰祠二祇司命一と有る祇の字を宇牟須比萬豆利には當たるにこそ有れ皇國にて豚を以て祀れるならず司命と司籍と別神の如くなれども右の十洲記の文に據る時は別なるに非ず司錄は功を計り德を循るの度を籙して此を司命に委ね司命は其錄を以て命を定むる由なり但此命錄共に人間に在る程は更なり幽に入て後の命錄を摠括り給ふ神なり老子に死而不亡者壽と有る此なり身死しても神亡ひざる者は天地と共に終るを云ふ此に因て幽界に入て後も顯界の功德の多少に依て命數定る事なり必功を立德を施してこそ太上玄生籙の簿には收らる可きなれ○左東王父左西王母考に老君中經に東王父は淸陽之氣也萬神之先治二東方一下在二蓬萊山一云々西王母者太陰之氣也治二崑崙之金城一云々と有り師の三五本國考に云く雲笈三洞部に引たる老子中經東王父の條に名曰二伏羲一と有り師云く十洲記に扶桑地方萬里上有二太帝宮一太眞東王父所治之處也と有り此大眞東王父は太昊伏羲氏なり又扶桑太帝とも木公とも申せり列仙通紀なる木公傳に木公萬神之先也亦云二東王父一冠二三維之冠一服二九

色之服一居二於雲房之間一以二紫雲一爲レ蓋以二青雲一爲レ城仙童侍立玉女散香眞僚僊友巨億萬計各有二所職一皆禀二其命一故男子得レ道者名籍所レ隷焉按二定功業一上二奏元始一禀命於太上也淮南子覽冥訓に伏羲氏女媧氏の天に復命せる事を記して乘二雲車一駕二應龍一道二鬼神一登二九天一朝帝於靈門宓穆休二太祖之下一と有るに熟符へり神代紀に大物主命の上天に復命し給へる故事の彼に傳はれるなり○今云翻譯名義集に琰魔此云二双世一鬼官之摠司也兄及妹皆爲二地獄主一兄治二男事一妹治二女事一と有るも此王父王母の訛傳なり　金母傳に木公生二于碧海一理二於東方一亦號曰二王父一焉金母生二于神州一理二於西方一亦號曰二王母一焉與二木公一共理二二氣一而育二養天地一陶二均萬物一矣仙凡有二九品一其昇レ天之時先拜二木公一後謁二金母一受事既訖方得レ昇二九天一入二三天一拜二太上一觀二奉元始天尊一耳とも有り又葛洪枕中書にも扶桑太帝住在二碧海之中一有二太眞宮一碧玉城萬里衆仙無量諸群仙未二昇天一者在レ此也と見えたり　西王母を諸書に太眞西王母とも見えたるが太眞東王父の伏羲氏なるに准へて思へば是即女媧氏にてここに引ける老子中經に乾神號曰二伏羲一坤神號曰二女媧一と云ふ然れば伏羲氏東王父は神典なる大國主神に坐し女媧氏西王母は其后神須勢理賣毘命にぞ坐ける一と有り此は三五本國考の說を甚く切めたるなり委しくは本書及大扶桑國考等に云れたるを見て曉べし○五方五帝は春秋命歷序に天皇氏云々地皇氏云々皇伯皇仲皇叔皇季皇少兄弟同期俱駕レ龍而上下故曰五龍と有る師說に此を皇

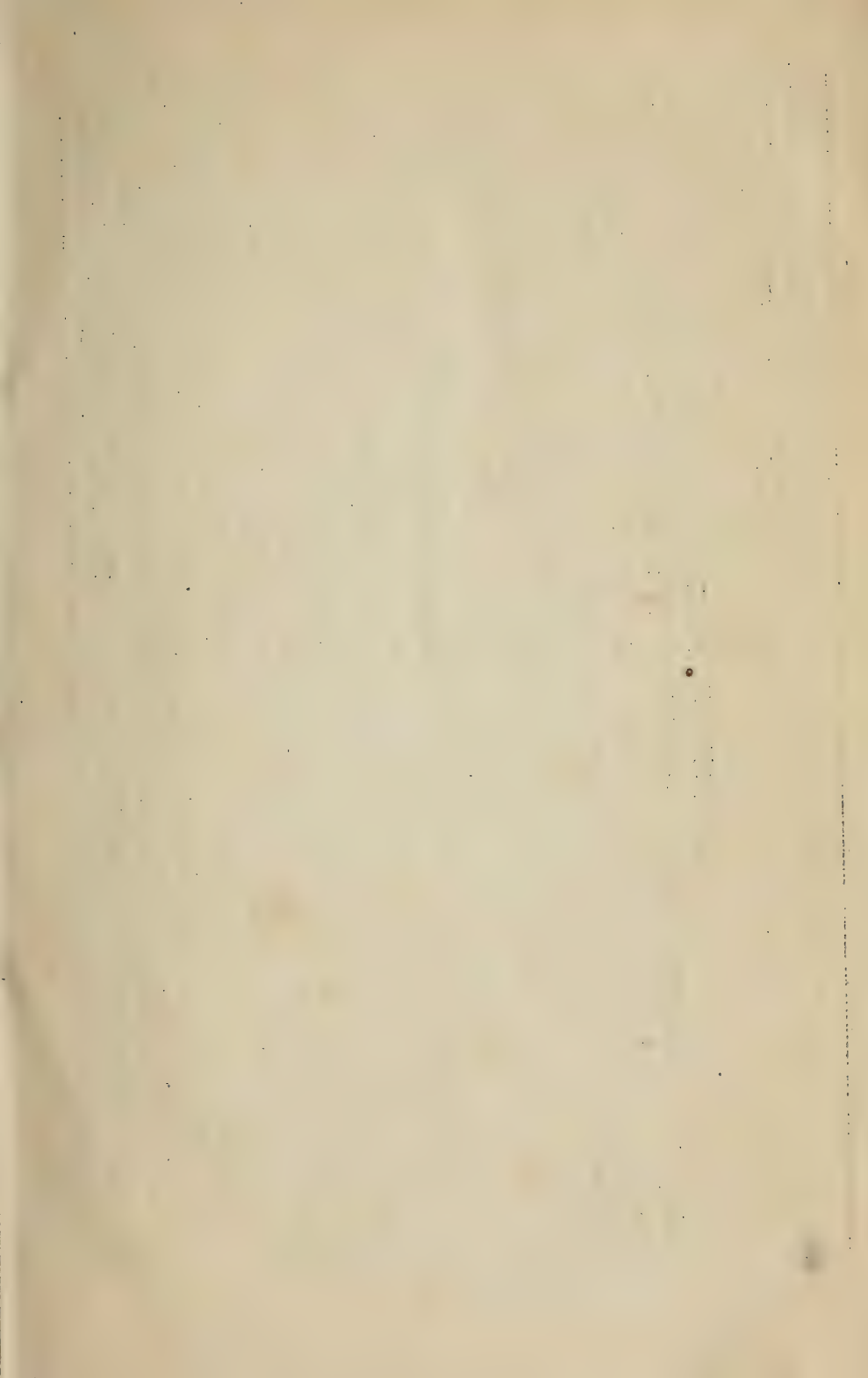
と云るは天地二皇の子なる由と聞えたり水經注に遁甲開山圖曰五龍見レ教天皇被迹榮氏注云五龍治在二五方一爲二五行神一也と見え五行大義五帝論に皇伯皇仲皇叔皇季皇少此五帝並天上神下治二於世一次第相接治二大微宮一其精爲二五帝之座一五星隨レ王受レ氣即明堂所祭者也と有るを思合せて五帝同期に世に出て二皇と共に世間成立の神業を助け其造化の功を成たる趣を曉る可し此木火土金水の五神天には五星及太微の五帝座に止まり地には五方の大五岳に止まる　即我が神典に見えたる風火金水土の五神にて其御名も諱に傳はれるを彼に稱する所は五行大義に河圖云東方青帝靈威仰木帝也南方赤帝赤熛怒火帝也中央黃帝含樞紐土帝也西方白帝白招拒金帝也北方黑帝叶光紀水帝也と有り右五帝の五方に司たる所以又此を五行とも稱する事は五行大義に孔子曰昔丘也聞二諸老聃一曰天有二五行一木火土金水分レ時化育以成二萬物一其神謂二之五帝一行言レ五者明二萬物雖レ多不一レ過レ五故在レ天爲二五星一其神爲二五帝一在レ地爲二五方一其鎭爲二五岳一五行遞相負載休王相生生二成萬物一運用不レ休故曰レ行也と有るを先心得べし爲二五星一は木星火星土星金星水星の五星を云なり爲二五岳一は岳瀆名山記に云々東岳廣桑山在二東海中一青帝所都南岳長離山在二南海中一赤帝所都西岳麗農山在二西海中一白帝所レ都北岳廣野山在二北海中一黑帝所レ都中岳崑崙山在二九海中一爲二天地心一黃

帝所レ都四岳皆在二崑崙之四方巨海之中一此五岳諸山皆神仙所レ居五帝所レ理非二世人之所一レ到也 萬物の數多けれど五に過ざる事は子華子に洛書九宮の事を云る始に天地之大數莫レ過二乎五一莫レ中二乎五一五居二中宮一以制二萬品一沖氣之守也中之所二以起一也中之所二以止一也龜筮之所二以靈一也神響之所二以豐融一也通二乎此一則條達而無レ疑者矣と有るが如し又五居二中宮一數之所二由生一一從橫數之所二由成一とも有り 斯て天に在ては太一の庭たる太微宮を治めて五帝坐を爲し各々別りて五星を爲め又地に在ては五方に分りて五岳に鎭まり互に相拘絞し遞に相負戴して休王相生する間に萬物を生成して運行須臾も休息有る事無し是ぞ五帝の化行の大略なる」と云れたるは說得て奇しとも妙なり此は赤縣太古傳と春秋命歷序考とを合せて約記せり〇四時四氣は春夏秋冬を主る神なり禮月令に孟春仲春季春の月に其帝大皥其神句芒と見え孟夏仲夏季夏の月に其帝炎帝其神祝融と見え中央土其帝黃帝其神后土と見え孟秋仲秋季秋の月に其帝少皥其神蓐收と見え孟冬仲冬季冬の月に其帝顓頊其神玄冥と見えたるこれなり其大皥炎帝黃帝少皥顓頊の五帝は四時の神なり中央土は四時の中に在て行るゝ故に帝は五柱なれども四時に收て計ふるなり偖此五帝は天地人の三皇に繼て皇國より赤縣州に駁戎せる王者等にて太皥は大國主神に在し其餘は其御裔の神等に御在す事師說の如し委しくは三五本國考に見えたり 四氣とは四時相當に行るゝ氣を云ふ春暖夏暑秋涼冬寒なる時令を云なり其神と坐す句芒祝融后土蓐收玄冥とは彼五方五帝の時令を行給ふ亦名と聞えたり但此に帝と云ざるは大皥以下の五帝と混れざる可き用意に態と其神云々とは云るなり

捧以二銀人一請レ除二禍災一捧以二金刀一請レ延二帝祚一呪曰東至二扶桑一西至二虞淵一南至二炎光一北至二弱水一千城百國精治萬歲萬歲

此は神祇令大祓條に東西文部上二祓刀一と有る其なり古語拾遺にも上二祓大刀一と有て人形の事は略けれども此文に依て著く且四時祭式なる大祓料物に金裝橫刀二口金銀塗人像各二枚已上東西文部所レ預と見え御贖料物にも鐵人像二枚金裝橫刀二口と有るも其料なり此にも已上東西文部所レ預と記さる可きを上に讓て省るなり其は儀式御贖儀に宮主史生神部等左右分頭前行云々東西文部次レ之各執二橫方一云々中臣率二文部四國卜部一入宮主在二其中一候二宜陽殿南頭一云々東文部捧二橫刀一入就レ版勅曰參來稱唯就二階下一轉授二中臣女一取奉レ御畢退出次西文部進退如二前儀一と有て祭式此に同じきが人像は橫刀に添て奉るにぞ有ける 但此は卜部に奉れる御贖物

とは様異りて返し給ふ事を記されず主々しき公事にては非ざる故に共に河上には遣はされざるなり　○捧以ニ銀人一請レ除ニ禍災一考に以ノ字を脱されたり諸本有るに依れり今本銀を祿に誤れるを考に改られたるに隨へり但式に金銀塗人像と有れば此二共に擧べきが如くなれども次なる金刀に對はせたるに依て態と其一は省る者なり　請は神祇に請ふなり○捧以ニ金刀一請レ延ニ帝祚一祭式に金銀裝横刀二口と有る此なり但銀力を省きたる事上に云る例を以なり　○呪曰東至ニ扶桑一は十洲記に桑扶地方萬里上有ニ太帝宮一太眞東王文之所治之處也と有る此にて皇國を外域より稱せる號なり此は文部等が祖先は漢種なる故に彼に云ふ所を其任用ひたるなり師も文部等我が扶桑國に生れつゝ東至ニ扶桑一と云るは彼國の任に用られしなりと云れたり扶桑國の事は師の考に詳なり　○西至ニ虞淵一は其地詳ならず○南至ニ炎光一十洲記に炎州在ニ南海中一有ニ火林山一山中有ニ火光獸一云々と有る此なり彼南岳長離山の所在此炎州なれば炎光とも云なる可し赤道直下の熱國を云ふ稱と思えたり○北至ニ弱水一書禹貢に導ニ弱水一と見え後漢東夷傳に夫餘國北有ニ弱水一と云ひ谷川士清が通證に引る玄中記に天下之弱者有ニ崑崙之弱水一鴻毛不レ能レ載也と見ゆ但此は十洲記に昆侖云々在ニ西海之戌地北海之亥地々方一萬里有ニ弱水一と有るに依れるならむ但山海經に流沙之東黑水之西有ニ朝雲之國ニ云々昌意降處ニ若水一と有る若水は別なり史記索隱に若水在レ蜀と云り　但此等は東西南北の遠地を唯大凡に云たるなれば扶桑の如きは皇國に違無れども其餘の所在は甚不分明なる者なり深く泥む可きならず師は甚く信じられたれども彼土の玄學と云るも能く嘘を云て文を飾れゝば全く取難し　○千城百國精治萬歳々々とは四海の內平安なれとなり文義少しも隱れたる所無し偖此文は漢嚼ながら甚古く雅びて聞ゆれども彼に見合す可き文の諸書に見えざるは彼に亡びて二氏に傳はれるなり偖漢の武帝と云る酋長甚く玄學を好めりしかば其頃に成れる文ならむも知べからず然れども我が皇大御國は天照大御神の御子の繼々天津宮事を傳へ物爲させ給ふ上は何の足ぬ事有てか西戎末國の祭事を取用ひさせ給はむ考に我が皇神の道は上下等しく敬ひ用ふる故にこそ天下平安なれ唯上に耳用ひらるゝは此皇神の心に非ざるなり後に此祓を禁止られしこそ甚々愛たけれ」と云はれたるは然る事なれど其實は誰が心にも諸なりと思はぬ所より自然に絕竟たる者なり此に就ても古の直き正しき御風儀に改め行給はま欲きは天津宮事になむ有ける

室松岩雄
保持照次　校
井上頼圀

明治四十二年八月廿五日印刷
明治四十二年八月三十日發行

定價金參圓

編輯者　室松岩雄

發行者　三里半七
東京市麴町區飯田町五丁目八番地

印刷者　高塚慶次
東京市京橋區弓町廿四番地

印刷所　三協印刷株式會社
東京市京橋區弓町廿四番地

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部
電話番町五百五十八番